

南箕輪村誌

下
卷
歷
史
編



南箕輪村役場



大芝スポーツ(都市計画)公園全景(昭和59年末)

神子柴疊田から出土した古銭 1



神子柴疊田から出土した古銭 2



大泉上総とある石碑



近世久保村村居の図



旧入会山北沢山の現在の林相

嘉永年間助郷關係絵図







南箕輪小学校



南箕輪中学校

西部地区館



西部保育所



伊那農協りんご集出荷場



延宝6年御子柴村免状(大和手文書)
(神)



明治初期高札



大芝原地券

刊行にあたって

南箕輪村長 三 沢 準
村誌編集委員長

村制施行百年記念事業の一環として、『南箕輪村誌』の刊行が計画され、すでに昨五十九年末上巻（自然・近路・信仰生活・民俗各編）の発刊をみました。内容体裁ともに種にみるすばらしい出来栄えとの好評で、文字通り後世に残る「村誌」と自負しております。

このたび昨年に引きつづき、下巻（歴史編）発刊の運びとなりました。古代から現代に至るまでの村の歴史を現存する資料をもとに、なるべく平易に詳述したもので、編さん委員の方々の心血を注いだの集大成と言っても過言ではありません。

村を理解するには、その歴史をひもとくことから始まると言われます。真の村の姿を知り、心から村を愛することによって村の進むべき方向がおのずから定まります。この美しい郷土「南箕輪」を永遠ならしめるためにも、村誌上下二巻を座右の書としてご愛読賜わらんことを心からお願ひ致します。

「新しい産業と文化で築く、平和と緑の南箕輪」を日さし、二十一世紀へ向けて村づくりが始まっています。村誌上下二巻の完成をみ、ここに執筆・編集・刊行に関係された皆さん、高度な印刷技術を駆使された株式会社「きょうせい」の皆さん方に深甚なる敬意と感謝を捧げて刊行のことばと致します。

昭和六十年十月三十日

凡 例

一、「南箕輪村誌」は、上下二巻とし、上巻には自然・遺跡・信仰生活・民俗の四編を、下巻は歴史編（原始・古代・中世・近世・現代）の一編をもって編集した。

二、上巻を自然編・遺跡編・信仰生活編・民俗編として、太古から今日にいたる村人の、基礎的な生活の流れをみ、下巻を歴史編として、原始から古代・中世・近世・現代へと一貫して記述した。

三、だれにでも読まれるようにと、義務教育終了程度を目途として、記述はできるだけ平易に努め、次の諸項目に留意した。

- (1) 写真や図表を多くして、親しみやすくした。
- (2) 目次をなるべく詳細にして、索引を兼ねるようにした。
- (3) 和暦対照表をシオリに印刷した。
- (4) 本文は、常用漢字・現代仮名づかい・送り仮名のつけ方を原則とした。固有名詞・専門用語等やむをえないものには振り仮名をつけたり、(一)で説明を加えたりした。
- (5) 引用文は、ほぼ原文を尊重したが、白文を読み下し文に改め、また「(コト)」、「(ヨリ)」、「与(ト)」、「而(ミ)」、「已(ミ)」などは読みやすく改めた。
- (6) 度量衡については、当時実際に使用していた単位を用い、いちいちメートル法に換算することを省略した。なお、換算表を上巻のシオリに印刷した。
- (7) 年号は、和暦を用い、江戸時代までのものには西暦をカッコで付記した。
- (8) 数字は原則として略記法とするが、万・億はつけることにした。たとえば二万三千四百五十円を「二万三 四五〇円」と記述した。
- (9) 度量・比率・温度等の単位は、kg(キログラム)・t(トン)・m(メートル)・ha(ヘクタール)・℃(摂氏温度)などの略記号を用いた。

四、写真・図表については次のようにした。

- (1) 執筆・編集関係者でないものだけに、撮影者名、提供者名などを記した。
- (2) 必要と思われるものには撮影年月日を記した。

五、人名の敬称はすべて省略させていただいた。

六、部落という用語は民家の一群・村の一部として地縁地域の意味だけに使用した。

七、参考文献とか参考図書を巻末に記載することはすべて省略させていただいた。

目次

刊行にあたって

凡例

歴史編

第一章 村の生い立ち

第一節 村のあけぼの

一 南箕輪のあけぼの

二 生活の舞台としての南箕輪

三 先土器（無土器）時代の南箕輪

1 南箕輪における人間生活の始まり

2 先土器・旧石器時代の編年

3 神子道跡の性格

四 縄文文化時代の南箕輪

1 南箕輪における縄文時代道跡の分布

2 縄文時代の生活

五 弥生文化時代の南箕輪

1 弥生文化の波及と遺跡の分布

2 弥生文化時代の生活

第二節 村の古代

一 古墳文化時代

(一) 古墳文化時代とは

二 村内における古墳文化時代の遺跡

三 諏訪の「く」の中の南箕輪

四 農耕生産の発展

五 古墳時代の住生活と家族

六 畿内勢力の浸透

七 大和政権の地方支配

八 律令制時代

九 律令体制の成立

十 国・郡・里（郷）制

1 国の成立と国司

2 郡と郡司

3 里・郷

4 伊豫郡と諏訪郡の郡域

五 班田収授体制

六 班田と農民の負担

1 租（たちから）

2 調（みづぎ）

3 庸（ちからしろ）

4 雑 税

5 其の他の負担

六 農村の生活

七 交通網の発達（東山道）

八 荘園制の成立発展と武士の発生

九 律令制の変容

十 荘園の成立と発展

1 荘園制の概要

2 郷土における荘園

第二章 村の中世

一 在園制下の農村の姿	五
1 荘園内耕地の構成と経営形態	六
2 農民の負担	九
3 農耕技術	一六
二 武士の発生	一七
1 概説	一七
2 郷土における武士の発生	二二
第一節 武家政権の成立と伊那	三三
一 藤原正と我が郷土	三三
二 鎌倉時代の伊那	四〇
1 治水・治水の争乱と伊那	四〇
2 伊那諸氏の白旗	四六
3 伊那諸氏の諸士	四六
4 神氏一統	五〇
三 南北朝の争乱と伊那	五二
1 鎌倉幕府の滅亡	五二
2 北条時行と伊那	五三
3 中先代の乱	五五
4 大徳王寺城の戦い	五五
5 宗良親王と伊那	五五
四 室町時代の伊那	五八
1 信濃の守護と國人衆	五八
2 守護小笠原氏と伊那	六〇
3 大康合戦と伊那の諸氏	六二

3 結城合戦と伊那衆	六二
4 内乱の中の伊那の諸氏	六三
1 守護小笠原氏の分立抗争	六三
2 諏訪上下社の抗争	六二
3 戦乱時代のはじまり	六三
第二節 戦乱の時代	六四
一 武田氏の伊那経略	六四
1 武田氏の侵入	六四
2 武田氏の伊那統治	六五
3 織田氏の侵入	六六
4 南宮輪の城跡と豪族	六六
5 榎木城跡	六七
6 中込城跡	六七
7 食田の城跡	六八
8 有賀の城跡	六八
9 清水城跡	六八
10 日戸氏の館跡	六九
11 古城跡	六九
12 内城跡	六九
13 官島氏館跡	六九
14 大泉氏の館跡	六九
15 座龍城跡	七〇
16 田中城跡	七〇
第三節 中世の社会と生活	七二
一 集落の位置と大きさ	七二
二 農民（荘民）の負担	七三
1 年貢	七三

(一) 公事—年貢以外の雑税	三〇
(二) 夫役	三二
三 物資の流通と銭貨	三三
(一) 流通	三三
(二) 銭貨	三四
(三) 土倉	三四
四 農業技術の発達	三五
(一) 灌漑用水	三五
(二) 産肥の普及	三六
(三) 農具の普及	三六
(四) 稲作の進歩	三六
五 衣食住生活	三七
(一) 衣料	三七
(二) 食事	三七
(三) 住居	三七
(四) 年中行事	三八
六 社会風潮と生活	三八
(一) 武士	三八
(二) 農民	三九
(三) 風俗	三九
第四節 交通	四〇
一 京都への道	四〇
二 鎌倉への道	四一
第五節 中世の文化	四二
一 諏訪信仰	四二
(一) 諏訪信仰圏内の南信輪	四三

(一) 南信輪の諏訪社	四四
(二) 地名の由来	四五
(三) 御射山神社	四六
1 御射山社再興の訴え(碑)	四六
2 『西兵輪村誌』の御射山神社	四七
3 別当寺(普光寺)	四八
4 分祀された御射山社	四八
5 御射山祭の推移	四九
6 御須祭への郡約状	五〇
7 諏訪神事	五一
8 大泉の鹿祭り	五一
二 八幡信仰	五二
三 熊野信仰・津島信仰	五三
(一) 熊野信仰	五三
(二) 津島信仰	五三
四 口碑による中世の古跡	五四
1 天皇(陵墓)	五四
2 郷土が産	五五
3 猪の子芝	五五
4 五輪塔	五五
5 権理塚	五五
6 経塚	五五
第六節 中世から近世へ	五六
一 近世への第一歩—武田支配	五六
二 目まぐるしい支配者の交代	五七
(一) 信長支配(二か月)	五七
(二) 家康支配(普留定例)	五七

第三章 村の近世

第一節 村のなりたち

一 村々(区)の概要

二 村々の由来と推移

三 久保村

四 塩ノ井村

五 大泉村

六 北殿村

七 南殿村

八 田畑村

九 神子柴村

一〇 沢尻村

一一 南原区

一二 大芝区

一三 北原区

一四 中込区

第二節 村の姿

一 領主と村

二 領主の交替

三 田中城から木下陣屋へ(江戸時代前期)

四 松島陣屋と飯島陣屋(江戸時代中期)

一〇 真田支配(一年)

一一 秀吉支配(毛利・京極)

一二 再び家康支配

一三 「村」の時代へ

三 飯島役所と松本役所(江戸時代後期)

四 村の構成

一 村方三役

二 名主

三 組頭・百姓代

四 五人組

五 村定めと御触書

一 御触書

二 五人組御触書

三 村定め

四 近世の特色

五 村の明細

一 南殿村並出版

二 高札場

三 村役人の給料

四 郷藏

五 農閑期の様子

六 酒屋

七 数廻

八 入会山

九 人別帳・宗門帳と戸口

一〇 宗門改帳

一一 江戸時代の南原輪における戸口

一二 検地と年貢

一三 検地

一四 土地調査の歴史

2 天正の横地（太閤横地）	一八
3 江戸時代の横地	二〇
4 江戸時代の横地の方法	二〇
5 横地と農民の対応	二〇
（一） 貢租（農民の負担）	二二
1 農民負担の種類	二二
2 貢租の割り付け	二五
3 貢租の徴収	二九
4 各時代の貢租	三三
5 貢租の安否代	三五
三 村人の生活	三六
（一） 近世の農業経営	三八
1 耕 地	三八
2 農業経営の構造	三九
（二） 近世の農業技術	三九
1 土地と用水	三九
2 作物の種類・品種	四〇
3 畜 飼	四〇
4 田圃と畑作物の種類	四一
5 肥 料	四二
6 管理と病虫害防除	四三
7 作物の収穫と収量	四四
8 畑作物の輪作体系	四五
（三） 近世の商工業と金融	四六
1 商工業活動	四七
2 近世における金融	五〇
四 災害と飢饉	五二

1 災害の頻度	五三
2 災害（凶作と飢饉）の実態	五三
3 凶作・飢饉の対策	五九
第三節 道と往来	五九
一 伊那街道（三州街道）と宿	五九
（一） 街道の設立経緯と道路	五九
1 伊那街道	五九
2 春日街道	六〇
（二） 大泉北版合宿	六〇
1 宿場の成立と形態	六〇
2 宿 役 人	六〇
3 人馬の動き	六〇
4 北蔵村と大泉村伝馬役の紛争	六〇
二 中 馬	六〇
（一） 概 説	六〇
（二） 伊那の中馬	六〇
（三） 中馬紛争	六〇
1 百姓馬の付け通し	六〇
2 宿場の既得権	六〇
3 中馬慣行の公許	六〇
4 中馬制度の定着	六〇
（四） 中馬の特質	六〇
三 権兵衛街道と助郷	六〇
（一） 権兵衛街道の開通	六〇
（二） 助 郷	六〇
1 助郷制度	六〇
2 助郷が課されてくる平瀬	六〇

（一）南冥輪地域各村の助郷……………	三三
1 大泉村の助郷の始まり……………	三三
2 神子柴村・久保村の助郷の始まり……………	三四
3 北殿村の助郷の始まり……………	三四
4 田畑村・南殿村の助郷の始まり……………	三五
（二）助郷の苦しみ……………	三五
1 助郷の農作業への影響……………	三五
2 助郷の村負担の増加……………	三六
3 頻繁な助郷回数……………	三七
4 村々相互間の対立と訴訟……………	三八
5 助役不参加の厳しいとがめ……………	三八
6 助村と休村・休役延長の嘆願……………	三九
7 助郷の免除嘆願……………	三九
（三）天竜川通船・渡し舟……………	四〇
（一）通船の開始まで……………	四〇
1 最初の通船願い書……………	四〇
2 通船差し障り問題の解決……………	四一
3 通船の再開いと請書……………	四二
（二）通船営業の仕様……………	四二
（一）その後の経営……………	四三
（二）渡し舟……………	四三
1 橋について……………	四三
2 渡し舟について……………	四四
（三）第四節 学芸と教育……………	四五
（一）俳文学……………	四五
（二）談林風時代の俳文学……………	四六
（三）美濃源風時代の俳文学……………	四六

第四章 水と村の生活

（一）基風時代の俳文学……………	三七
二 和歌……………	三八
三 近世の教育……………	三八
（一）寺子屋・私塾教育……………	三八
（二）奉公人の教育……………	三九
（三）若者制度……………	三九
（一）第一節 水を求めて……………	四〇
一 水と村……………	四〇
（一）西部地帯（台地）の水……………	四一
（二）大泉村の湧水状況……………	四一
1 井戸……………	四一
2 井……………	四二
3 大泉川の締め切り……………	四二
4 漏水……………	四三
（三）大泉の井堰……………	四三
1 下井……………	四四
2 上井……………	四五
3 新井……………	四六
4 大泉川水系の大水論……………	四六
（四）大泉の横井戸……………	四七
1 村内横井戸の概況……………	四七
2 大泉の横井戸……………	四八
3 大泉の深井戸……………	四八
（五）沢尻と水……………	四九

1	農民の水不足	三三
2	旧用水計画	三四
3	開拓地の求めた水	三五
4	段丘沿いの村々と水	三六
5	段丘ぞいの湧水	三七
6	水を求める紛争	三八
7	久保の飲用水	三九
8	北殿の天竜井	四〇
9	分水にかかわる水論	四一
10	天竜川をはさんで	四二
11	八幡と横井戸	四三
12	遠くから求めた水	四四
13	西天竜道水路(前史)	四五
14	江戸時代の開発計画	四六
15	明治の開発計画	四七
16	西天竜誕生とその後	四八
17	伊那土地改良事業	四九
18	奈良井川引水計画	五〇
19	伊那西部農業水利事業	五一
20	五水	五二
21	簡易水道	五三
22	村営水道	五四
23	村営水道事業の発足	五五
24	水源を求めて	五六
25	その他の水道	五七
26	滝虎簡易水道	五八
27	神子架簡易水道	五九

第五章 入会山野と村の生活

第一節 近世農民の生活と入会地

1	入会地の重要性	六〇
2	入会の成立と入会権の確立	六一
3	南筑輪に關係ある入会山野	六二

第二節 水との闘い

1	江戸時代における農民の水との闘い	六三
2	災害の実態	六四
3	川除け(洪水対策)	六五
4	築堤と水害工	六六
5	洪水時の対応	六七
6	川除け御普請とその負担	六八
7	普請の制度	六九
8	引き返り(水害地の復旧)	七〇
9	洪水によって起こった争論	七一
10	明治以後における水との闘い	七二
11	災害の実態	七三
12	明治以後の水害防止対策	七四
13	明治初期の実態と水防の考え方	七五
14	河川管理区分と水防施設	七六

四 入会山野の利用の定め	四九〇
(一) 山野草の刈り取り	四九一
1 刈敷刈り	四九二
2 刈草刈り	四九三
3 秋の干草刈り	四九四
4 葛葉取り	四九五
5 藁山	四九六
(二) 薪の採取と用材の利用	四九七
(三) 種としての入会地利用の制限	四九八
(四) 入会地利用の模式図	四九九
第二節 入会地の争論	五〇〇
一 入会地争論の概要	五〇一
二 主要な入会地争論	五〇二
(一) 高虫草の公事と裁許	五〇三
(二) 北原林場出入り	五〇四
(三) 三本木原・上ヶ清原・大芝原の争論	五〇五
(四) 大泉所たる一争論	五〇六
第三節 近代における入会地の变化	五〇七
一 地租改正と入会地	五〇八
(一) 筑摩県下における入会山野の地租改正	五〇九
(二) 長野県下における再調査	五一〇
二 明治以後の入会地の利用と保護	五一〇
(一) 入会地の利用	五一〇
(二) 入会地の保護	五一二
第四節 入会山野の整理と疎野の分割	五一三
一 入会疎野の初期の分割	五一三
(一) 北原の分割	五一四
(二) 大芝原の分割	五一五
二 入会山野の整理	五一六
三 入会原野の後期の分割	五一七
(一) 北有原野分割に至る時代の大勢	五一七
(二) 中野原の分割	五一八
(三) 北原・大芝原の分割	五一九
(四) 三本木原・上ヶ清原・牛馬畑の分割	五二〇
(五) 入会分割地の交換	五二一
第五節 森林の育成と部落有原野の村有化	五二二
一 森林の育成(林業の発展)	五二二
(一) 森林の保護育成の重要性の認識	五二三
(二) 植林の奨励	五二四
(三) 森林の保護育成	五二五
(四) 村有林生産物の販売	五二六
二 部落有林野の村有への統一	五二七
第六節 入会山の分割と村有統一化	五二八
一 入会山の分割	五二八
(一) 大正五年の分割協定書と書状の成立	五二九
(二) 大芝原山の分割	五三〇
(三) 北沢山および南沢山の分割	五三一
(四) 蔵鹿山の分割と入会権の整理	五三二
(五) 御射山の分割	五三三
(六) 蔵鹿山の内矢ノ南入りの分割	五三四

第六章 村の発展

二 分割後の運営と村有統一化

(一) 大泉所山・北沢山の村有統一化

(二) 蔵鹿山・御射山・矢ノ南入りの管理運営

第七節 昭和の森林育成とその経営

一 大泉所山の植林

二 北沢山の植林

三 平地林の経営

四 蔵鹿山・御射山等の植林

五 村有林の利用と村財政

(一) 下枝・落葉等の利用

(二) 立木の伐採売却と村財政

六 林道の開設

第八節 昭和における平地林の開墾・開発

一 西天竜完成による開田

二 戦時体制下の開墾

三 戦後の入植開拓と部落有財産の処分

第一節 明治維新と村人の動き

一 平田学と神農復礼

二 水戸浪士北蔵宿通過

(一) 今様奇談

(二) 高説談一発もなし

(三) 北蔵宿通過

(四) 浪士追打ちの通行

四 「天狗勢の本州襲撃」

三 おかげ参り

四 維新と村人の動き

第二節 南箕輪村の誕生

一 誕生とその経過

二 飛 地

第三節 地租改正と村人の生活

一 明治初期の税制

二 地租改正

(一) 地租改正の意義

(二) 田・畑・宅地の地租改正

三 山林原野の地租改正

四 地租改正による「改め出し」と増税

五 地租軽減運動と地価修正

六 地租改正とその後の農民

第四節 村の行政・金融

一 村の行政

(一) 明治前期の村政

1 尾州藩政継承管下へ

2 伊那県管下へ

3 箕輪県管下へ

4 長野県管下へ

(二) 明治後期の村政

1 町村体制の形成

2 郡制（発足・廃止）と村政

(三) 大正期の村政

1 賠償の打撃	三六
2 区割の発足と推移	三九
3 米騒動と関東大震災	四一
4 教育条件の整備	四三
5 その他の村政	四三
四 昭和前期の村政	四三
1 昭和恐慌と村政	四三
2 荘園庁舎の改築	四七
3 村有林事業基案	四八
4 村政運営の発展	四八
5 教育用地の寄附	四九
6 戦時体制下の村政	五二
二 村の財政	五二
(一) 市町村制以前の村の財政	五二
(二) 市町村制実施から大正時代の村財政	五九
(三) 昭和恐慌・戦時体制下の村財政	六一
四 太平洋戦争後の村財政	六三
三 金融の発展	六八
(一) 従来からの方式による金融	六八
1 土地売買による金融	六八
2 無 限	六八
(二) 新しい制度による農村金融	六九
1 開 業 社	六九
2 銀行の創立と農工銀行	七〇
3 郵便局と庶民金融	七三
(三) 産業組合・農業会	七三
四 戦後の農村金融	七五

1 戦後の金融の混乱と公益質屋	七五
2 農業協同組合	七五
3 特殊銀行の設立と制度金融の発展	七六
四 産業組合・農業会	七六
(一) 南支輪村の産業組合	七六
1 産業組合の設立	七六
2 経営困難な草創期	七八
3 産業組合再建の努力	七八
(二) 南支輪村農業会	七八
第五節 生産の発展	七八
一 新時代への産業の模索	七八
(一) 明治初年の産業の概況	七八
(二) 新時代への産業の模索	七八
1 開業社の融資からみた産業開発	七八
2 水 産 業	七八
3 鉱産物採掘	七八
4 農 業 会	七八
5 牧牛の企て	七八
二 農業の歴史と技術の発展	七八
(一) 明治時代の農業の進歩	七八
1 新作物・家畜の導入と改良	七八
2 耕作技術の発展	七八
(二) 大正より昭和前期の農業	七八
1 金屋敷用量の増加と緑肥栽培の奨励	七八
2 病虫害防除技術の進歩	七八
3 農具の進歩	七八
4 農業会の活動と農業の進歩	七八

5 昭和の経済恐慌と農村	五八
6 稲作技術の発展	五九
(四) 戦時体制下の農業	五九
1 戦時統制と食糧増産	五九
2 諸物資の不足と農民の協力	六〇
3 労力の不足と共同作業	六一
三 養蚕業の発展と衰退	六一
(一) 明治時代の養蚕	六一
1 養蚕発展の概要	六一
2 桑の栽培	六二
3 飼育法	六三
(二) 大正時代・養蚕の最盛期	六四
1 概況	六四
2 桑の肥培管理	六五
3 養蚕法の進歩	六六
(三) 昭和前期の養蚕の衰退	六六
1 概況	六六
2 栽桑と飼育技術の発達	六七
(四) 昭和後期(戦後)の養蚕	六八
1 概況	六八
2 栽桑と飼育技術の進歩	六九
(四) 養蚕改良案	七〇
四 西天竜の開田	七〇
(一) 西天竜水路	七〇
1 概況	七〇
2 西天竜用水開発まで	七一
3 西天竜用水路の開通	七二

(一) 南支輪における西天竜の開発	七二
1 開田の経過	七二
2 開田工事の方法と苦労	七三
3 西天竜開発による土地利用状況の変化	七四
4 大泉耕地整理	七五
5 開田当時の農業経済	七六
6 工事費の償還	七六
(二) 西天竜農業倉庫	七七
(三) まとめ	七八
五 畜産および園芸の導入	七八
(一) 畜産の導入	七八
1 明治・大正期	七八
2 昭和の経済恐慌以後	七九
(二) 園芸の導入	七九
1 明治・大正期	七九
2 昭和前期の園芸の発展	八〇
六 商工業の発展	八〇
(一) 商業	八〇
1 明治初期の商業	八〇
2 明治中期の商業	八一
3 明治後期から大正・昭和初期の商業	八二
4 戦時体制下の商業	八三
(二) 工業	八三
1 職人	八三
2 手工業	八四
3 製米業	八五
第六節 戦争と南支輪	八五

一 戦争と南支輪	七五
(一) 西南戦争	七五
(二) 徴兵制度	七五
(三) 日清・日露戦争	七五
1 日清戦争	七五
2 日露戦争	七六
(四) 戦時体制と太平洋戦争	七六
1 太平洋戦争の始まるまで	七六
2 太平洋戦争と敗戦	七八
(五) 慰霊碑・戦没者名	七九
二 満州開拓団と満蒙開拓青少年義勇隊	七九
(一) 満州移民の概要	七九
(二) 満州移民の気運	八〇
(三) 本村からの開拓移民	八〇
1 永曲開拓団	八〇
2 中和鎮信義村開拓団	八二
3 富貴原郷への入植	八二
4 開拓の終末	八六
(四) 満蒙開拓青少年義勇隊	八二
1 概 要	八二
2 本村関係義勇隊開拓団	八四
3 物語者尾崎謙の建立	八四
第七節 交通の発達	八五
一 道路事情の変遷	八五
(一) 伊那街道の発展	八五
(二) その他の道路	八七
1 春日街道	八七

2 権兵衛街道	八七
3 その他	八七
(二) 近代交通路	八八
1 中央自動車道	八八
2 大規模農道の開通	八八
3 その他	八八
二 運輸事情の変遷	八八
(一) 中馬から運送馬車へ	八八
1 伝馬所から陸運会社、内国通運会社へ	八八
2 中牛馬会社	八九
3 両会社の対立と合併	八九
4 運送馬車へ	八九
(二) 人力車・乗合馬車・自転車	八九
1 人力車・乗合馬車・自転車	八九
2 大正時代の交通	八九
(三) 伊那電気鉄道から飯田線へ	八九
1 伊那電車の開通	八九
2 伊那電と運輸	八九
3 飯田線へ	八九
(四) 自動車交通の発達	九〇
1 パス	九〇
2 トラックによる貨物輸送	九〇
3 自動車輸の著しい増加	九〇
三 天竜川通船・渡し舟・橋	九〇
(一) 天竜川通船	九〇
(二) 渡し舟	九〇
(三) 橋	九〇

第八節 生活の近代化

一 消防・駐在所

(一) 消防

1 明治以前の村の消防

2 各村消防組の誕生

3 消防組織の発展

4 大正期における消防組

5 消防団の設置

6 自治体消防団の発足

(二) 南瓦輪村日赤赤十字団

(三) 駐在所

1 駐在所の誕生

2 新警察制度の発足

3 犯罪を防止し平和な村に

二 保健衛生

(一) 村の保健衛生

1 伝染病予防対策と治療

2 清潔法の実施

3 乳幼児検診

4 国民体力検査

5 伝染病隔離病舎

6 村診療所

三 郵便・電信・電話・有線

(一) 郵便

1 明治初期の郵便

2 南瓦輪郵便局の沿革

3 南瓦輪郵便局の現況

(二) 電信・電話

1 電信

2 電話

3 有線電話

四 報 道

(一) 南瓦輪村勢要覽と村報「南みのわ」

1 村勢要覽

2 村報「南みのわ」

(二) 新 聞

1 南瓦輪の新聞

2 一般紙の購読

(三) ラジオ・テレビ

1 ラジオ

2 テレビ

第九節 文化と教育

一 学 芸

(一) 短 歌

1 明治以後和歌・短歌の流れ

2 国学者並びに平民門系の和歌

3 調査系の短歌

4 アララギ・ヒムロ・流域系その他の短歌

(二) 俳諧から俳句へ

(三) 川柳文芸

料 童話・その他

1 童 話

2 数 学

3 漢 詩

二 教育の発展

三	学校教育の発展	八〇
（一）	明治初期の村の教育	八〇
1	郷学校の創立	八〇
2	「学初」時代の教育	八二
（二）	明治中期の村の教育	八四
1	南宮輪学校の誕生	八四
2	「教育令」の実施による村の教育	八五
（三）	明治後期～明治二〇年以後の村の教育	八六
1	「小学校令」の施行	八六
2	「学年制」の開始と教育の実態	八六
3	小学校令による教育課程	八六
4	小学校制度の整備と教育目的の明確化	八六
5	支校・派出所の統合、南宮輪尋常小学校	八七
6	学校火災と建築	八七
7	学校林の設置	八八
8	補習科設置	八八
9	南宮輪尋常高等小学校	八八
10	実業補習学校設置	八九
11	御真影の奉戴・奉安殿	八九
12	義務教育の延長と教科目	九〇
13	学童児童保護会の発足	九二
14	校舎増築	九二
15	特別学級の設置	九二
四	大正から昭和初期の村の教育	九三
1	校庭拡張	九三
2	子守児童	九三
3	南宮輪事件	九三
4	校舎増築・体操場新築	九三
（一）	昭和初期から戦時下の村の教育	九四
1	二・四事件	九四
2	色刷り教科書の使用	九四
3	戦時期の学校	九四
4	南宮輪青年訓練所設置	九五
5	南宮輪青年学校設置	九五
6	疎開児童の受け入れ	九五
7	国民学校生徒の戦争協力	九五
（二）	新学制による村の学校の歩み	九六
1	敗戦による教育の急転回	九六
2	新しい教育への模索	九六
3	新学制の実施・中学校の誕生	九七
4	教育委員会の発足	九七
5	週五日制の実施	九八
6	新しい教育計画	九八
7	校歌の制定	九八
8	新しい教科書の採択	九八
9	委託児童の契約	九八
10	学校給食	九九
11	P.T.A.の活動	九九
（三）	南宮輪中学校の歩み	九九
（四）	村内にある県立と国立学校	九九

第七章 新しい南箕輪

第一節 人口と職業

一 戸口の推移

(一) 人口の推移

- 1 明治初年より大正五年ごろに至る人口増加期…………… 〇七
- 2 大正五年ごろより昭和一九年に至る人口漸減期…………… 〇七
- 3 昭和二〇年より同二五年に至る人口変動期…………… 〇七
- 4 昭和二六年から同三五年までの人口漸減期…………… 〇七
- 5 昭和三六年以降の人口急増期…………… 〇七

(二) 戸数・世帯数の増加…………… 〇九

四 社会教育

(一) 概 説…………… 〇四

(二) 社会教育諸団体…………… 〇五

1 概 説…………… 〇五

2 青少年団体…………… 〇五

3 婦人団体…………… 〇五

4 老人団体…………… 〇五

5 青少年健全育成協議会…………… 〇五

6 社会体育団体…………… 〇五

(三) 社会教育施設…………… 〇四

1 文化的施設…………… 〇四

2 スポーツ施設…………… 〇四

1 伊福技術専門学校…………… 〇三

2 上伊福農業高等学校…………… 〇三

3 信州大学農学部…………… 〇三

四 部落別世帯数・人口の推移…………… 〇五

二 人口動態…………… 〇五

(一) 自然的増減…………… 〇五

1 出生率…………… 〇五

2 死亡率…………… 〇五

3 自然的増減率…………… 〇五

(二) 社会的増減…………… 〇五

1 転 入…………… 〇五

2 転 入…………… 〇五

3 社会的増減…………… 〇五

三 人口構成…………… 〇五

(一) 年齢別人口構成…………… 〇五

(二) 年少・生延年齢・老齢の人口構成…………… 〇五

四 村人の職業…………… 〇五

(一) 産業別人口構成…………… 〇五

(二) 就業上の地位別人口…………… 〇五

(三) 農業従事者について…………… 〇五

第二節 戦後の村政…………… 〇五

一 戦争後遺症の克服と村政…………… 〇五

(一) 飢餓からの脱出のための村政…………… 〇五

(二) 衣・住・職業等の回復のために…………… 〇五

1 衣・住の回復…………… 〇五

2 村営制紙工場の設置計画…………… 〇五

3 授産所の設置…………… 〇五

二 農村および村政の民主化…………… 〇五

(一) 農地改革…………… 〇五

(二) 村政の民主化…………… 〇五

1 南貝輪村協議会	六三
2 地方自治体の成立	六三
3 村議会活動の発展	六四
三 昭和二〇・三〇年代の諸施策	六四
(一) 新しい社会に適応する施策	六六
1 中学校舎の建築	六六
2 公民館の設置	六七
3 有線放送の設置	六七
(二) 福祉向上のための施策	六八
1 国民健康保険事業の村営化	六八
2 養老院の建設	六九
(三) 産業発展のための施策	七〇
1 土地改良事業の推進	七〇
2 工場誘致	七一
四 昭和四〇年代を主とした村政	七二
(一) 中央自動車道と村政	七二
1 ルート発表まで	七二
2 設計協議	七三
3 西部開発事業	七三
(二) 農業振興地域整備計画	七四
1 概 要	七四
2 農用地利用計画	七五
3 農業生産基盤の整備・開発計画	七六
(三) 都市計画	七六
1 用途地域	七六
2 都市計画道路	七七
3 都市計画公園について	七八

(四) 地籍調査	七九
(四) 地籍調査	七九
1 大芝村有料の開発	七九
2 大多開発調査委員会	八〇
3 ゴルフ場開発問題とスゴーツ公園の発足	八〇
4 大芝スゴーツ公園の充実発展	八一
五 行政機構等の発展	八二
(一) 村内行政機構の推移	八二
(二) 町村合併の政	八三
(三) 百周年を迎えた村政	八三
(四) 役場庁舎の新築	八三
(四) 広域行政組合	八四
1 伊那中央し尿処理組合	八四
2 上伊那地域広域行政事務組合	八四
3 大泉所山砂防ダム	八四
4 行政事務の近代化(電算)	八五
第三節 農業経営の変革	八六
一 農地改革	八六
(一) 農地改革の経緯	八六
1 太平洋戦争終結下の農業政策	八六
2 戦後の農地改革	八六
(二) 南貝輪における農地改革	八七
1 農地の買収	八七
2 農地の売却	八七
(三) 南貝輪村の農地改革の結果とその省察	八八
1 農家および農地事情	八八
2 農地等の買収および売却状況	八八

3 農地改革の省察	六六
二 入植による開拓	六八
（一）戦後における入植開拓の概要	六八
（二）南原における入植開拓	七三
1 入植者と開拓に関するまで	七三
2 其の後の開拓の進捗	八四
3 開拓者の苦勞	八五
（三）大芝原における入植開拓	八二
1 大芝原開拓の概要	八二
2 大芝原開拓と青年運動	八四
3 戦後の開拓と農民大会	八五
4 大芝原開拓と水	八六
四 北原における開拓	八八
三 農業経営の近代化	八九
（一）戦後の食糧増産時代	八九
（二）農地改革後の農業	九二
1 保溫所裏苗代の普及	九二
2 品種改良と優良種子の普及	九三
3 農業の進歩	九三
4 施肥法の改善	九三
（三）新農村建設の動き	九三
（四）農業の機械化と労働生産性向上	九三
四 農家の階層分化と兼業農家の増加	九七
（一）農業経営の階層分化	九七
（二）兼業農家の増加	九八
五 農業基本法と農業構造改善	九八
（一）新しい農業への課題と農業基本法	九八

（一）南原輪における第一次構造改善事業	九八
（二）加作総合改善パイロット地区設置事業	九八
四 第二次構造改善事業	九八
1 北部地区構造改善事業	九八
2 南部地区構造改善事業	九八
（三）西部農業振興事業	九八
（四）その他の農業振興事業	九八
六 畜産および園芸の発展	九八
（一）畜産の発展	九八
1 戦後の畜産の発展	九八
2 畜産経営の多様化・專業化	九八
（二）園芸の発展	九八
1 戦後の果樹園芸の発展	九八
2 戦後の野菜園芸の発展	九八
3 遠視的拡大、米の作付制限と園芸農業	九八
4 花卉園芸の発展	九八
七 米の作付制限と総合農政への対応	九八
八 農業協同組合	九八
（一）南原輪農業協同組合	九八
1 農業協同組合の設立と発展	九八
2 農業近代化適応事業	九八
3 業績の推移	九八
（二）伊那農業協同組合	九八
1 上伊那中部八農協の合併	九八
2 伊那農協の発展	九八
第四節 商工業の発展	九八
一 田園工業都市への歩み	九八

第一次産業から第二・第三次産業へ	九〇
製造業の発展	九〇
建設業等の推移	九〇
工業振興策	九二
工場誘致条例の制定	九二
都市計画の策定による工業振興策	九三
企業振興条例制定	九四
村内工業名鑑	九五
村内の大工場	九五
大明化学工業株式会社	九六
興亜電工株式会社中央工場	九六
株式会社フオルテ	九六
信英通信工業株式会社西駒工場	九六
信英電器活株式会社	九六
戦後商業の発展	九七
商業発展の概要	九七
村内商業名鑑	九七
三 商 工 会	九八
第五節 新しい生活	九八
一 公民館活動	九八
公民館の誕生	九八
各区公民館（分館）の建設	九九
南宮輪公民館の建設	九九
公民館活動の場としての各種施設	九九
南宮輪郷土館の建設	九九
各町体育施設	九九
主な公民館活動	九九
二 学級・講座等	一〇〇
生活改善運動	一〇〇
成人式	一〇〇
文化祭	一〇〇
各種スポーツ大会	一〇〇
各区公民館（分館）活動	一〇〇
厚生福祉・衛生	一〇〇
保 育 所	一〇〇
保育所開設の要望	一〇〇
保育所の設置	一〇〇
厚生福祉行政の発展	一〇〇
社会福祉協議会	一〇〇
民生委員協議会	一〇〇
国民年金	一〇〇
厚生福祉施設	一〇〇
老人集会所（赤松荘）	一〇〇
南宮輪老人ホーム	一〇〇
大芝スゴーツ公園	一〇〇
村民体育館	一〇〇
保健衛生の進歩	一〇〇
戦後の保健衛生行政	一〇〇
保健センター	一〇〇
多様化する保健衛生業務	一〇〇
国民健康保険	一〇〇
福祉医療	一〇〇
健康づくり推進協議会	一〇〇
食生活の改善推進協議会	一〇〇

8 南宮輪村健康増進推進員	103
第六節 南宮輪村の課題と展望	104
(一) 南宮輪総合計画書	104
1 昭和五〇年代村の地域的課題と評価	104
2 昭和五〇年代村の分野別課題と評価	105
(二) 昭和六〇年代の村の課題	106

巻末付表

一、歴代役職者一覧表	107
二、南宮輪村誌歴史編年表	108
主なる資料提供者	109
南宮輪村誌刊行委員(昭和六〇年度)	110
下巻執筆者	111
あとがき	112

第一章 村の生い立ち

第一節 村のあけぼの

一 南箕輪のあけぼの

二 生活の舞台としての南箕輪

伊那盆地は、天竜川上流地域にあり、西側の木曾山脈、東側の赤石山脈の間に開けた盆地であって、北は辰野町から南は飯田市南方の天竜峡まで、長さは南北約八〇kmで、伊那谷と俗称されるように細長い盆地である。南箕輪村は、伊那盆地のうち、東西の幅の最も広い（東西約一三km）部分の天竜川右岸地区に位置しており、その氾濫原と、扇状地上に広がる村である。

伊那盆地の地形を特色づけるものは扇状地と河岸段丘、及びそこに堆積するテフラ層であるが、それは、どのようにして形成されたのであろうか。それは、地質年代の氷河期・間氷期の繰り返しかえしとその間に起きた地殻の変動や、気候の変化と密接な関係があることが、地質学等の研究によってしだいに明らかにされてきた。それによると、伊那盆地は地質年代の第四期洪積世（一〇〇万年前）を通じてたえず沈降しており、盆地周辺の山地は上昇を続けたといわれる。山地が上昇するとき、その山地から流れ出す多量の土砂のために山麓に扇状地が形成される。これは洪積世のうちの間氷期といわれる温暖な時期の雨期に多く形成されたものであるが、私たちの村の扇状地もこのようにして形成されたのであろう。

この間に、御岳山は活発な噴火活動を行ない、その噴出物は風に乗

って飛来し、当地方にもしばしば多量に降下堆積し、一部には乗鞍岳や遠く九州の恰良火山等の噴出物も認められ、それらの噴出物によって厚い三層のテフラ層が形成された。

さらに、天竜川の下刻作用と、地殻変動による地盤の湾曲、湾曲面の差別浸食作用、断層活動等によって数段の河岸段丘が形成されている。

本村における扇状地の状態をみると、木曾山脈の北端の経ヶ岳山塊から、大泉川によっておびたしい土砂が流出して形成されたものが大部分であり、北部では一部無用、南部では鳥谷川や小沢川によって流出したものも存在すると考えられる。国道一五三号線の西側に沿い南北に長く大きな段丘崖が連なっており、その段丘崖より西、いわゆる西天竜水田地域より山麓までは明瞭な断崖がなくなり、わずかに東に向かつて傾斜率平均傾斜度一〇〇分の四にしているが、一見一連の平坦面のように見え、段丘崖から経ヶ岳山麓までは約五kmもあり、延々と続く段丘面を形成し、現在この地方最大の農耕地域となっている。この段丘面（扇状地）のうち扇状地付近は昔から著しく水に不足する地域であった。それは、経ヶ岳山塊から流れ出す小河川は、扇状地や扇状地近では地表水として流れているが、扇状地では扇状地一般の傾向と同じように地下に浸透して流れ（伏流）、小河川は多く水無川となってしまう傾向が強いからである。

以上のような地形の状態から、扇状地付近は大昔から特殊な場所を除いて高木は少なく、僅かな雑林と灌木をまじえた草原状を呈する植生であったと考えられる。このことは、江戸時代この扇状地の大部分が秣場として利用されていたことから肯定されるであろう。しかし、野鳥や兎、猪、鹿等の野生動物群にとっては絶好の生息の舞台であったと考えられる。野生動物にとっても水は絶対に欠くことのできない

生息のための条件であるが、行動力の大きい動物群では山麓や扇状付近に水を求めて、この広大な台地上を縦横に駆けめぐったと想像されるのである。南殿部落西南の大泉川べりが猪子芝といわれ、猪の繁殖場であったことからこの名がつけられたといわれており、このような場所は久保、神子柴にもあったことが字名や言い伝えに残っている。これらのことが、この台地上に動物群が豊かであったことを考えさせるのである。

扇状地の扇端付近は、各所に伏流水となっていたものが湧水となっていて、その水量はかなり豊富である。各所に出る湧水は飲用水として重要視されて来たし、現在でも種々の生活用水として利用され、かつては草場の掛け水として、また水車の動力源として利用され、現在は「おさび」の栽培に使われ、付近には高燥な台地が得られ易く原始の時代から重要な生活の場所となってきたのである。

低位の段丘崖から、村の東を流れる天竜川との間は、沖積平地として、古くから重要な水田地帯となっている。その沖積平地は天竜川の氾濫原で、東西から流れ込む支流のため天竜川が大きく蛇行し、場所によって広狭に大きな差があり、本村地域は久保、塩ノ井の東側の地域の外は割合に狭い。ここの農耕地は天竜川やその支流が、その流れによって土砂を運び沃土として堆積したものであるが、昔は現在のように沖積平地が整備されておらずところどころに湿地帯を作り、原始古代社会における格好な稲作の場所を提供してくれたようである。しかし、不安定な地帯まで耕地が拡張されると、河道の安定しない往時にあっては絶えず水害にあうこととなり、人間と水との闘いの場所となったのである。

天竜川や、それに注ぐ支流は昔は魚類に恵まれ、原始の時代から大切な漁労の場であったと考えられ、湿地を流れる小河川も魚の類が繁

殖のために集まり重要な採捕の場となったと思われる。

気候の面から南筑輪の地をみると、温帯気候に属していて人間生活には概して好適な場所である。冬季間の寒さはやや厳し過ぎるが、長い積雪期間もなく、夏季はかなり暑くなるがからっとしていて過ごし易いからである。雨量もほぼ適量にあり、四季の変化は人間の生活を潤いのあるものにし、それぞれの季節に与えてくれる自然の恵み、春の若草や木の芽、秋の栗やどんぐりなどの木の実やきのこなど原始の人たちにも、かなり恵まれた環境と映ったと考えられる。

生活の舞台としての南筑輪の概要は以上のようなものであるが、この生活の舞台に対し、それぞれの時代においてどのように適応し、また、どのように利用してきたであろうか。

それぞれの時代において、この南筑輪の生活舞台としての特徴にどのように適応し、またどのように利用してきたかを知ることには、これからの南筑輪の在り方を探るうえでも役立つものがあると思われるのである。

(一) 先土器（無土器）時代の南筑輪

1 南筑輪における人間生活の始まり

日本列島における人間の生活の始まりは、長い間縄文時代が最初とされ、旧石器時代の人々が生活していたことは一般には認められていなかった。ところが、昭和二四年群馬県岩宿において、テフラ層（火山噴出物堆積層）で一〇〇万年前の洪積世に地層中から旧石器時代特有の掘削（テフラ）が発見され、同二七年には東京都の北部、茂呂山における関東テフラ（ローム）層中から、また、諏訪市茶臼山の信州テフラ層中から、共にナイフ形石器が発見されるなど、旧石器時代に日本列島にも人類が生息していたことがしだいに明らかになり、日本列島の人類の起源は七〇〇〇年前から、一挙に万年を単位で数える洪積世の

土層が新期テフラ層中最上層のソフトテフラ層で、このソフトテフラ（砂質黄褐色土）層は神子柴遺跡では約40cmの厚さがあり、その上から一五・二〇cmの深さの所から石器が検出されたことである。このソフトテフラ層の堆積は洪積世の最末期であるとされていることによつて、およその時期を推定することができる。

次に、神子柴遺跡から出土した石器の組合わせは、次のようであると報告されている。

長大優美な尖頭器・円形石核から剥ぎ取った大形石刃・断面三角形の大形局部磨製石斧・小形丸型石斧・靴べら型石器・断面三角形の鉋・胡瓜型磨石。

この出土遺物の特徴を見ると、同一地層内には土器はもちろん、縄文時代に盛んに作られた土器は一片もなく、明らかに先土器時代の特色を示している。しかし、他の先土器時代の遺跡には出土しない石斧、特に局部磨製石斧という新石器文化に近い石器が出土していることである。さらに、新石器時代に近い時代とすれば、新石器文化の直前の文化と考えられている細石器文化の主要石器である、細石器が出土しそうなものであるが、その細石器が一片も出土しないことである。こうして、石器の組合わせが神子柴型ともいふべき特異な組合わせであることである。

このような石器の組合わせの文化様式について、諸説が出されているが、一致した見方は、新石器時代（縄文時代）と、旧石器時代の間位置する中石器時代に所属することに落ちつくもの（向土伊那部歴史館）とされている。

しかし、昭和四三年一月、第三次発掘調査が行なわれ、この発掘においては広い範囲の調査が行なわれ、縄文時代、歴史時代の遺物・遺構も見えられたが、先土器時代の遺物も多く追加発見され、神子柴

遺跡の石器組合わせの中に新たに小形のナイフ、彫器が加えられ、それによつて生活用具として一つのまとまりのある生活様式の体系を形成するものとされた。そして、この石器の組合わせを持つ文化を、刃器文化（ナイフ型石器文化）の次に継起する尖頭器文化の最盛期の様相を示しており、その所屬時期は尖頭器文化の中に位置付けられるべき性格を持つている（第三次発掘調査報告書）としている。

神子柴遺跡における石器の組合わせ、それに基づく神子柴遺跡の時期の決定は以上のようである。

先土器人の生活 神子柴遺跡の人たちの生活はどうであったであろうか。個々の石器がどのような形で使用されたか、充分判明しない状態であるから、石器の組合わせだけで当時の生活の姿を的確に想像することは困難である。しかし、縄文時代までの人間が狩猟、漁労、植物採取などによつてその食生活を満たしていたことは一般に認められていることであつて、神子柴遺跡を残した先土器文化の人たちも、狩猟や植物採取を中心に生活をしていたものと考えられる。そのうち、狩猟には尖頭器を棒の先に着けた石槍が使われ、時には石斧を使って隙穴を作り動物を捕獲したことも考えられるが、当時はまだ弓矢は使われていない。神子柴遺跡のある小丘陵は、背後に広大な洪積台地を控えており、そこは灌木のある草原状を呈していて、多数の動物群が生息していたものと考えられ、この動物たちが水を求めて大清水の湧水に集まって来たので、ここは絶好の狩猟場になったと思われるのである。捕獲された動物は、石刃あるいはナイフ形石器等で皮を剥ぎ、また切斷し、時には火を用いて焼いて食べたと思われる。また、木の実や野生植物の茎葉や根も大切な食糧となったものと思われる。

住居跡、またはそれに直接関係のあるものは発見されていないが、第一次発掘調査においてソフトテフラ層中に発見された石器群が、長

径6mほどの楕円状に配列分布された状態で検出されたこと、それらの石器群が生活要素の性格が濃厚であることから、これを、野外における仮設住居のようなものであると判断された。

また、第三次発掘調査の際、A地点に砂岩の自然石を利用した台石

が発見され、その周辺同層位に黒曜石剥片が散乱した状態で出土した。周辺の剥片には自然面が多く、台石には一部に打撃磨滅痕が認められていることなどから、台石は石器調整台であると考え、この遺構を野外の石器製作場であると判断され、さらに、周囲に散乱した剥片が比較的少ないことから、一時的な石器製作場であったと思われる、としている。(上巻遺跡編参照)

旧石器時代の人類は住居として、自然の洞窟や岩陰等を利用する場合が多かったといわれており、この丘陵に住居跡が発見されなかったとしても、ここに、野外の仮設住居のようなものと判断される遺構と、野外の石器調整のための工作場が設けられたということは、この付近に住居があり、そこからこの小丘陵に通って石器を作り、狩猟活動等の生活を展開したように想像することが出来る。また、定住性が少なく食料を求めてあちこちと移動して歩く生活をした先土器人が、食糧が豊富であったこの地に一時ここにとどまって狩猟生活をしたと考えることもできよう。

神子柴遺跡西方五〇〇mほどの所、大清水の南側で御園御牧ヶ原に先土器時代の遺跡が発見されている。この遺跡も、新期テフラ層中最上層のソフトテフラ層一五cm内外の深さから遺物が出土し、神子柴遺跡よりやや時期が遅れていると判断されているが、これも石器工作場としての性格を持つ遺跡であると報告されている。この外に御園宮ノ前、西箕輪地区の大宮西、伊那養護学校、小沢地区月見松、大芝南等の遺跡から、先土器時代の遺物が出土しており、(図1-2)この付近一帯が先土器時代の人たちの生活の舞台となったことは、まぎれもない事実のようであ

図1-2 神子柴遺跡付近の先土器時代の遺跡 (X印)



図 1-3 村内における縄文遺跡の分布

る。大きな尖頭器を棒の先に結わえ付け石槍とし、これを持って広い原野の中を縦横に駆けめぐる先土器人の姿を想像することができる。

③ 縄文文化時代の南箕輪

1 南箕輪における縄文時代遺跡の分布

村内には縄文文化時代の遺跡は非常に多く、現在までに発見された同時代の遺跡数は四二か所以上を数える。

その分布は図1-3のようであるが、遺跡の分布地域を大きく二つに分けることができる。その一つは、扇状地の末端で天竜川の河湾、あるいは断層作用によって形成された段丘の縁、及びその付近に位置する遺跡群であり、他は、大きくみれば扇央であるが、そこを流れる天竜川の支流である大泉川、大清水川、鳥（戸）谷川等が作った兩岸の段丘上、またはその付近の台地上に位置する遺跡群である。前者にあっては段丘崖付近の湧水が近くにあるところが選ばれており、後者にあっては大泉川、鳥（戸）谷川等の流水に近い所が選ばれている。したがって、他の扇央の水の得られない広大な平地部分には遺跡がほとんど発見されていない。

遺跡分布を細部についてみると、住居地は日当たりの良い高燥な段丘上、または、台地上の土地が選ばれており、平地に立地する遺跡は少ない。平地に立地する場合も、沖積平地ではなく、洪積台地上の平地であって、現在の村落立地に比べるとかなり西寄りの高い位置が選ばれている。

これらの縄文遺跡は数千年という長い年月の間の縄文人の生活の跡であって、これを早前期・中期・後晩期に分けて見ると、早前期の約三千年の間の遺跡はわずかに南高根・北高根・神子榮・向垣外などの数遺跡に過ぎない。また未発見の遺跡も存在すると考えられるが、その数は少なく、生活密度は極めて小さいものであったと考えられる。

ところが縄文中期になると、遺跡数は急激に増加し、早前期の八倍の四〇か所近くを数える。(前期または後期と重複したものも加える)

縄文遺跡の大半がこの中期の遺構または遺物を出土する遺跡であって、かなり集落の発達もみられるようになり、生活密度も急速に高まったことがわかり、本村内においても縄文時代の最盛期を示している。

後晩期になると激減して再び少なくなり、遺跡数は一〇か所ほどとなってしまう。この遺跡数の減少は本村地域のみでなく、中部山岳地帯に一般的に見られる現象で、これと反比例して南関東や東海地方の海岸地帯では、後期遺跡が急激に増加している。これは同一時期にみられる現象であって関連的に考えねばならないであろう。

「当時の自然現象の変化による住居の移動か動物群あるいは魚群の移動減少に伴う人数の激減か、相当明確な理由が存在したに違いないが、今の処これを説明できるまで研究が進んでいない」(上伊那歴史博物館)としているが、当地の縄文人にとって、これはどう寂しいことはなかったと想像される。

2 縄文時代の生活

縄文時代は、今から七、八〇〇年くらい前から二千数百年前までの、およそ五、六〇〇年間の非常に長い期間の人類の歴史を指している。この時期は、石器を作るほかに、その最初から食物を煮たり貯蔵したりする土器を製作しており、全く土器を作らなかったそれ以前の旧石器(先土器)時代と区別し、新石器時代と呼んでいる。

日本の縄文時代は、この新石器時代に相当するが、土器は外国文化の影響をほとんど受けずに、形態、意匠、製作技術等において、世界でも類まれな発展を遂げてきた。土器の表面を装飾するにはいろいろな文様が用いられているが、縄又は撚り糸の類をあてて、手のひらで

これを回転させるようにして着けた圧痕のあるものが多く、これらの土器を総称して縄文土器と呼んでいる。この縄文土器の作られた長い時代を、早期・前期・中期・後期・晩期の五期に区分している。南関東の地域においても、遺跡分布の項でみたように、その早期から河岸段丘の段丘端を中心にして人間の生活が展開されてきた。では、その生活の姿はどんな状態であっただろうか。

(1) 縄文早期

村内における縄文早期の遺物としては、神子柴遺跡から押型文土器片と茅山式土器片、大芝東・南高根・北高根の遺跡から茅山式土器片、北高根・高根の両遺跡から天神山式土器片が出土した。当時代は単純な模様をつけた尖り底の深鉢形の土器が一律に作られたようであるが、村内では、その完形品はまだ一点も出土していない。前記の土器片がいずれも縄文早期に属する土器片であることから、それらの出土地点を中心として早期縄文人の生活が行なわれていたものと考えられる。

生活内容については、住居跡も発見されておらず、不明な点が多い。上伊那の地域内でも「横山遺跡に検出されたような自然石を数個並べただけの露天の炉だけで、住居らしい構造は今のところ認められておらず、漂泊民らしい粗末な貧しい生活の痕を残しているのみである」(上伊那歴史博物館)とされている。本村内では、神子柴遺跡A地点から数か所の集落遺構が検出された。その1号石組では、径七〇cmほどの楕円状に大小七〇個の礫をほぼ平らに集めたものであり、2号石組は、径一m、深さ一五cmの皿状のくぼみを作り、そこに礫を並べたものである。これらの石組みが、縄文早期の押型文土器、特殊磨石、回石を伴って出土しており、縄文早期における野外の調理用炉としての性格を持つものと判断されている。(神子柴遺跡第三次発掘調査報告書)

これは横山遺跡の石を数個並べただけの野外炉よりは、大きく複雑になっているが、生活状態は同様であったものと考えられる。

石器としては礫器、打製または局部磨製の石斧、スクレーパー（掻器）・石鏃・石皿・磨石等が早期から使われていることが判明しており、これらの石器を使って、狩猟を中心とし、木の実や野生植物の根・茎・葉を採取し、それが必要に応じて調理して食料とする生活をしていったものであろう。すなわち、弓矢を使って射止め、あるいは陥し穴やわななどによって鹿・猪・兎などの野生動物を捕え、獲物はスクレーパーなどで皮を剥ぎ、あるいは切断するなどの料理をし、栗・くるみ等を拾い集め、どんぐりや榎などの木の实や、くずなどの根は石皿・磨石で潰して澱粉をとるなどの工夫をして食べたと思われる。そのほか、食用となる植物の茎葉も大切な食料となったであろう。さらに、これらは必要に応じて深鉢形の土器を用いて野外の炉（集焼場）で煮たり、時には焼いて食べたものと考えられる。

動物の毛皮はなめし、衣料として腰衣などに用いる生活が考えられる。骨や角も釣針、あるいは装飾品に加工されたと思われるが、その遺物は村内ではまだ検出されていない。

(2) 縄文前期

縄文時代も前期に入ると、大泉の北高根と南高根・堀ノ井の向垣外と天伯・南原C・神子集AD地点等にこの時期の土器・石器や遺構が出土し、生活の範囲がしだいに拡大する傾向を示している。

北高根と南高根の間遺跡では、早期後半の南関東系の茅山式土器の後、早期終末から前期にかけての東海系の木島式土器が出土し、神子集遺跡では、前期終末の関東系の影響を受けた下島式土器が出土している。石器の材料としての砂岩・粘板岩・片麻岩・輝緑岩・珪岩等は、上伊那地域内のそれぞれの場所で採集されたものと思われるが、安山



図 1-4 縄文前期住居跡（北高根A遺跡9号住居跡）

岩は諏訪の霧ヶ峰から、黒曜石は和田峠から求めたものと考えられている。特に和田峠の黒曜石は広い範囲に運ばれており、その文化圏は長野県、山梨県を始め、東海地方、西関東の全域を含めた広い地域を形成すると認められており、土器文化の関東系、東海系の当地への流入と共に、当時の縄文人の交流はかなり活発に行なわれていたことがわかる。

北高根遺跡では、前期のうちでも早い時期の住居跡（図1-4）が二戸発見されている。その住居様式を見ると、一戸は五・九五×五・二mの正方形、他の一戸は七・八×六・〇五mの楕円形をした床面で、地表下一五・二三cm程度掘り込んだ比較的浅い竪穴住居である。住居跡内からは炉跡は見えず、火は屋外で焚いたものと思われる。

住居跡内から、早期末より前記初頭の木島式土器と、天神山式土器が出土している。当時は土器は尖り底・丸底からしだいに平底の土器に変わり、器形も深鉢型のみでなく、皿型・甕型の土器が生まれて発展の姿を見せているが、生産用具である石器類は、打製石斧・石鏃・石皿・磨石等に磨製石斧が加えられて出土する程度であり、石器の製作技術に発展がみられるが、基本的な生産・生活様式には大きな変化はなかったように考えられる。

(3) 縄文中期

ア 土 器

中期になると、遺跡の数、出土する遺物の種類と数が急速に増加し



図 1-5 村内出土の代表的な縄文中期の土器

てくる。はつきり中期初頭と認められた土器の出土地点は大芝西、大芝東、南殿の宮ノ上、塩ノ井の天伯、同上人塚の五遺跡があり、次の中期中葉の勝坂式土器の出土地点は大泉の経塚、南殿の宮ノ上、同垣外、塩ノ井の天伯の四遺跡であるが、中期後半の加曾利E式土器を出す地点は、大泉の北高根A、同B、高根、南高根、大芝、沢尻北、南原の三本木、同狐久保、田畑、塩ノ井の向垣外、山之神、天伯の一、二遺跡に達して、急速に生活密度が高くなったことを示し、単に中期土器の出土とのみ記された遺跡を加えると、中期土器の出土地点は四〇か所に及んでいる。

土器は勝坂式に至って器形が大変化するばかりでなく、口縁部に複雑な突起や飾りを着け、文様も縄文のほか、浮文、沈文、渦巻文、幾何学的文様等、複雑多様な文様となり、中には精巧を極めた美術工芸的な土器が作られている。器形も樽型、壺型の貯蔵用、甕型の煮沸用、灯火用の吊手土器、供献用の装飾大形深鉢、外に皿型など多用に分化し、土器文化の上でも上昇期の勢いを示している。(上巻遺跡編口絵参照)

加曾利E式になっても始めのうちはその勢いが感ぜ

られるが、その後半に至ると装飾の表現がおとなしくなり、器形もやや小さくなっているようにみえる。

イ 住 居

縄文中期の住居跡は、大芝東遺跡に一戸、北高根A遺跡に三戸、天伯遺跡に三戸確認されている。いずれも、床面を円形又は楕円形にし、地下に五〇〜六〇cm掘り下げて踏み固めてある、半地下式の竪穴住居である。床面内にはほぼ方形の位置に四〜六個くらいの穴を掘って主柱を立て、それに円錐形の屋根を葺くが、垂木は地面に接するまで伸ばして防寒に便にし、通常南側に一か所小さな出入口を作る形式をとっていたと思われる。

この時期になると、住居内に炉が作られるようになり、炉の様式は、床面のほぼ中央に五〜一〇個の自然石で円形に囲って形を作る、いわゆる石囲い炉であるが、土器の胴部を埋め込んだもの(大芝東遺跡)、単に床面を掘鉢状に掘り込んだだけのもの(天伯遺跡の一戸)も



図 1-6 縄文中期住居跡(北高根6号住居跡)
石囲い炉がよくわかる



図 1-7 大芝公園に復元された縄文時代竪穴住居
(上の住居跡をもとに復元)

あった。これらの炉で火を焚いて暖をとる、また調理が行なわれたものと思われるが、煙が家の中にこもり、また火災の危険も大きかったと考えられる。

中期の住居数は急速に増加し、数戸から一〇戸、あるいは、それ以上の戸数がまとまって集落を形成して、集団生活が営まれていた。その集団の結びつきは、血縁によるものと考えられ、採捕(狩猟漁労等)の活動等には集団による共同作業が行なわれたものと考えられている。

ウ 生産用具と生産活動の進歩

石器の種類もしだいに増加し、石斧も短冊形の外に楕形、分銅形のものも作られ、また、全面磨製の石斧のほかに断面が円形に近い乳棒状の打製石斧など、用途に応じた形態の分化が見られる。(図1-8)



図1-8 石斧の形態の分化(南殿宮ノ上遺跡)

撚器・石皿・磨石・凹石等は前記に引続き作られており、ほかに、石匙・石鏃などが出土している。石鏃は、本村内では今までに四か所



図1-9 村内出土の石鏃

ことは稀で、漁労の姿を明らかにすることができない。

しかし、上伊那地域内でも、宮田村中越、駒ヶ根市赤穂北原、伊那市月見松、同小黒伊勢並等の遺跡では非常に多くの石鏃が出土し、いずれも天竜川やその支流に臨む台地の上で明らかに漁労活動がかなり活発に行なわれたと考えられ、それに適した立地であると認められる。上伊那地域史資料としており、縄文社会の中期における異状な発展の原因の一つとして、この石鏃を利用した漁法の発展をあげている。本村における石鏃の出土状況からは、漁労のそれほどの発展は感ぜられないが、このころから石鏃をつけた網を利用する共同作業による漁労活動が、行なわれ始めたと考えられよう。

なお、石鏃については、遺物が小さいので発見が困難なためか出土個体数が比較的少ないが、発掘調査の行なわれた縄文遺跡からはかなりの石鏃が出土しており、全体としてはかなり豊富に存在しているも

で各一個が発見されているのみ(図1-9)で量が少なく、しかも、その使われた時期が判明しないが、このころから使われ始めたものではなからうか。これは漁労用の網の重りとして使用したものと考えられている。漁労用具としては、ほかに骨角製の釣針や鈎などが他地区では出土しているが、当地方は酸性土が多く、骨角質の保存に適しないためか、遺物として出土する

のと考えられる。

以上の用具（石器、土器）等から考えて、本村地域に生活した縄文人たちは、広大な草原を背後に持って、狩猟を中心とし、木の実や植物の根茎葉を採集する生活が主体で、それに漁労がしだいに増加してきたと考えられよう。

中期における縄文社会発展の原因として、気候の好転による食糧資源の増加が考えられるが、ほかに生産用具や採捕の技術の進歩、あるいは共同作業等の生産組織の進歩が大きいと考えられる。それが生活の余裕を生み、人口の増加をもたらすことになり、手数のかかる複雑で豪華な土器を生み出したと考えられる。

この時代における共同作業は漁労活動だけでなく、狩猟活動等においても行なわれたものと考えられ、また、住居跡が馬蹄形に並びその中央に共通の広場を持つような遺跡も多く、祭祀活動にも共同的色彩が強い。このように縄文時代中期以降共同生活が営まれていたと考えられているが、その集団は血縁を中心としたものであって血縁共同体といわれている。この共同体の中には必然的に指導者あるいは指揮者が生まれ、その權威はしだいに強いものになっていったが、それはあくまでも共同活動をよりよくするためのものであって支配者ではなかった。

生産力が発達したとはいえ、この時代はまだその日暮しの生活であって、採捕した食料のうち魚は薫製にし、木の实類は乾して若干の貯蔵は可能であったにしても、富の蓄積というほどのものではなく、その日その日の生活を支えるためには全員が協力して働かねばならないというのが実態であって、他人の生産物を搾取して生活をする支配階級の生まれる余地はなく、まさにこの時代は階級のない平等な社会であったと考えられている。

縄文人の生活は、生産の対象が自然の動植物であったから、自然の動植物の盛衰消長に大きく左右され、自然の食料となる動植物を求めて移動する生活が一般的であった。しかし、気候の変動が少なくなった沖積世の日本列島は、四季の変化に富んだ温帯の季節風帯に属している。動植物の生育繁殖に適しており、自然の動植物に依存した生活でも、かなり豊かな半定住生活が可能であったと考えられる。しかし、それでも縄文中期の異常な発展の背景には、既にこのころから焼畑農業的な農耕生活が始まるという、生産方法の大きな変革があったのではないかと、という考えが一部の研究者から提唱されていることを付け加えておきたい。

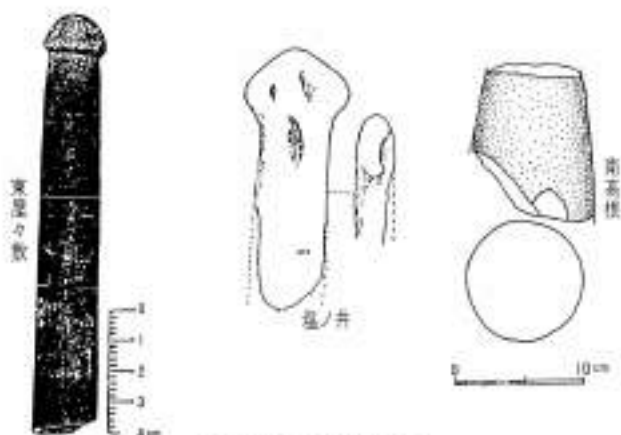


図 1-10 村内出土の石器

エ 信仰生活

縄文中期になると、石棒といわれる特殊な石器と、土偶といわれる縄文時代独特の土製の人形が出土するようになる。

石棒は、中央をやや太く、両端へむけてだんだん細くした棒状の石器で、一端または両端に亀頭状のふくらみをつけた形のものが多い。中期初頭には長さ一m余、太さ二〇cmに及ぶほどの巨大な石棒

が作られているといわれ、本村では塩ノ井の東屋敷敷、大泉の南高根、南殿宮ノ上等の遺跡から出土している。南高根出土のものは破片であるが中央部の太さが径一〇cm以上あり、かなり大形のものと考えられ、宮の上出土のものは細形であると報告されている。石棒は縄文時代後期、晩期になると細形の手に持てる程度の小さなものになることが知られており、宮の上出土のものは後晩期のものかもしれない。

これらの石棒はなんのために作られたのであろうか。「駒ヶ根市東伊那遺跡」では、竪穴住居の床面石囲い炉の北側に石を敷きつめ、その中央に無頭石棒が真直ぐに立ててあり、また、同市中央高見沢遺跡では竪穴住居跡南側敷Mの所に、数本の石棒状の石が放射状に並べられ、顔面把手のついた甕が出土しており、この状態も何らかの信仰を示すもの（「上伊那」）と報告されている。また、諏訪地方における研究では、「縄文中期前半では巨大な石棒が集落のほぼ中央、共同の場とおぼしき所にあり、共同の祭祀の対象として祭られたと類推でき、中期中葉では石棒は形を整えやや小さくなり、中期後半になると形状はさらに小形となり、一軒一軒の家に持ち込まれ、住居内の北側の角に立てられ、まわりに石を敷きつめた石壇形のものを作られている。集落の共同の場から特定の家屋へと推移したのは、祭祀権を持つものが特定の人、家に握られたのであろうか」（『古代諏訪のミシャグジ祭体』）中「ミシャグジ祭体考」とされている。さらに、石棒の信仰的意味について、「石棒と石皿が対になって出土することがしばしばあり、石皿の裏に石棒を掘り込んだものもある。石棒はまさに生殖器官の形であり、地面から直立する石棒、それに降りて来て宿る精霊、それによって大地が力を得て新しい存在が生まれてくると信じたのではない。母なる大地と聖なる婚姻がその石棒の持つ隠された意味ではないか」（『前掲書』）と述べている。



図 1-11 村内出土土偶（土製人形）破片

諏訪地方におけるミシャグジ信仰における御神体として、石棒が祭られている場合が多く、彼等縄文人の生活に必要な植物や動物を産み出す地母神の象徴として、ミシャグジ信仰と関係づけて説かれている。この地方で、縄文時代にミシャグジ信仰がどの程度入っていたかは明らかでないが、その後の古い時代にミシャグジ信仰がこの地方にあったことは明らかで、当地における縄文人にもこのような地母神の信仰が行なわれていたことは充分に考えられる。

土偶についてみると、村内では完形品の出土はないが、破片が各所から出土している。土偶の出土地点は南高根、北高根A、宮ノ上、塩ノ井の山ノ神、天伯、垣外畑、丸山の七か所で、ほとんど中期の土偶である。

本村土偶の出土破片だけでは、その全形を描くことは困難であるが、他の出土例を見ると、目、鼻、口などは単純に表現されているが、胸に盛り上げる豊かな二つの乳房、妊娠をあらわす腹部のふくらみ

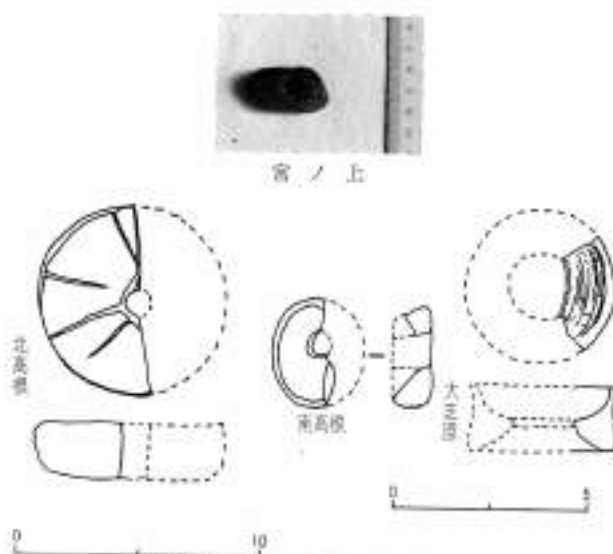


図 1-12 村内出土の装飾品(上、有孔小珠、下3個耳栓)

をみせているものが多く、明らかに女性を表現している。このような土偶が竈穴住居からあまり出土せず、その周りに出土する場合は多い。東北地方晩期土偶の例ではいくつかの開いた作り、その開いたの中に入れ土器のかけらや平石でその上を覆ってあったことから、非常に大切に扱われていることが判明した。そして、その意味するものは縄文人たちの願いや悩みを聞きとどけてくれる魔力を持っていたものとして、彼らの信仰の対象として作られたものであろうと考えられている。これは、特に女性が子供を生むことの神秘さに対する畏敬の念がもとになっているものと考えられ、それが、縄文人の食糧となる動植物の増殖についての折りの対象となったもので、石棒の信仰と相通するものがあるように考えられる。

オ 装身具

装身具を身につけることは、縄文時代のかかなり早い時期から行なわれたようである。村内においても縄文人たちの装身具がいくつか出土している。南原及び南殿の宮ノ上から有孔垂飾が、北高根A、大芝原、ほか一か所(遺所不明)から耳栓(滑車型耳飾り)が出土した。

有孔垂飾は大形のもの小形のものがある。本村出土のものには有孔大珠といわれるものがあり、有孔大珠は滑石や燧石等美麗な石を使つて、長さ一〇cm、幅三〜四cm内外の大きさに、全面を磨いて丸味をつけ、柿の実にような形に作られたものが多い。これの一端に穴をあけ、ひもを通して首に掛けたものと考えられる。いずれも表面採取のもので現物の所在が不明であり、いつのものかはっきりしないが、採集地点の遺跡の様子から考えて縄文中期のものと思われる。小形の有孔小珠といわれるものは、長さ五cm内外のものが多く、いくつもひもに通して組み合わせて首飾りとして使用されたもので、本村では宮ノ上遺跡から一個出土した。

耳栓は、直径三〜四cmの滑車の形をした土製品で、村内出土の一点は円形面に点列で二重の輪が描かれている。耳飾りとして用いたものと考えられており、使われた時期がはっきりしないが、後期晩期に盛んに用いられたものであるから、その時期のものであるかも知れない。

このほか、装身具としては骨角で作った垂飾品や、貝殻等で作った腕輪などもあったことが、他の地域から報告されているが、村内では出土していない。

(4) 縄文後期・晩期

後期・晩期になると遺跡数が著しく減少することは、既にみてきたが、当地方の気象条件が変化し高い生活密度を保つことが困難になっ

たのであろうか。後期前葉の南関東系の掘之内式土器を出土した地点は、神子柴遺跡と宮ノ上遺跡のみで、後期中葉の南関東系加曾利B式土器を出土した地点は南高根、大芝東、北高根Aの三遺跡である。大芝原、北高根Bの両遺跡は後期土器とのみ報告されているが、前記加曾利B式土器の出土地点と近く、しかも同一条件の所であるから同一系統のものと思われ、合わせて五遺跡となる。

後期末葉から晩期前半にかけての出土遺跡はなく、晩期後半に至って水式土器を出土した地点は、南高根・大芝東・神子柴・北高根Aの四遺跡であり、他に晩期土器とのみ報告されている南原A・久保下(其間遺跡のうち)を加えて、晩期の遺物出土地点は六か所となる。

縄文後期の住居跡が諏訪郡においては、湖やそれに流入する河川に臨む台地端に多く発見され、上伊那地域においても、河川に臨む台地突端に多く住居が発見されるようになるのは、河川を遡上する魚群を確保するための占地が大きな理由となっていると考えられる(上伊那誌歴史篇)としているように、縄文人の生活の中で漁労の比重が高くなったことを示している。本村においても天竜川に臨む台地突端付近に後期の住居跡発見の可能性が大きい。現在も住居地となっている部分が多く、今までのところ前記の場所のほか発見されていない。ただ、後期晩期に作られたと考える石剣が北殿、塩ノ井付近で数か所出土が報告されており、これらの地点にも後期、晩期の縄文人が住んでいたことは充分考えられる。それにしても、縄文後期、晩期の衰退は明瞭である。

後期晩期の住居様式について、上伊那地域内においては、長谷村溝口、伊那市新山で検出され、いずれも河川に臨んだ南向きの高台に位置しており、溝口の例では、おびただしい配石が認められていたことから、敷石住居ではなかったかとし、この時代、西関東地方から本県

東信地方にかけて敷石住居が発達している(上伊那誌歴史篇)、といわれているが、本村内ではこの時期の住居跡は一戸も発見されておらず、その姿を明らかにすることができない。

土器は、中期の大形で豪華なものに対して、後晩期になると文様は平面的になり、主要な文様としてすり消し縄文が用いられるようになり、かつ、一般に小形化してくる。器形は深鉢、浅鉢、土瓶型釣手土器、高杯、香炉型土器、壺型土器等、用途により多様に分化し、さらに、飾った精製土器と、文様の少ない鉢型に近い素製の粗製土器の二つの基本型に分けられるようになった。前者は供食用、後者は実用の煮湯用と考えられている。晩期になると、さらに朱や漆を塗った土器も出現し、土器製作の技術には進歩のあとが見られるが、中期の土器のような装飾はなく、力強さも感じられない。

石器は、中期から作られた分銅形石斧、定角式磨製石斧は増加して後期、晩期と使われているが、定角式石斧はしだいに小形化し、晩期になると鰐形(うなぎがた)の石斧が多く作られるようになっていく。また、特殊な石斧としての環状石斧があり、その一種としての環石が塩ノ井部落から出土している。

祭祀信仰の対象としての石棒はしだいに小形化し、簡単に手にさげて歩けるほどのものになり、さらに、それに代わって石剣が作られるようになっていく。本村における石剣の出土数は多く、南殿の宮ノ上、北殿の西垣戸、同秋葉社付近、同ワカツキ、塩ノ井天伯、同東屋敷、塩ノ井(遺跡名不詳)に出土したことが知られているが、現物は所在不明である。石棒が大形で共同の場に祭られたものから、小形化されて特定の住居に移ったとき、それが単なる信仰の対象から共同体の指導者の指揮棒のようなものとして、あるいは共同体の祭祀の主催者の、權威の象徴となったといわれており、このような状況のもとに

石棒に代わって石剣(石刀)が作られたものと考えられる。

しかし、信仰がうすくなったのではなく、土偶は後、晩期にも続いて作られており、ほかに土面が作られ、顔面や蛇頭形をした供献用土器が作られ、呪術や祭りの行為は組織化され、縄文人の精神生活は一層深みと広がりを持っていったようである。

死者の葬送については、住居跡の内外周辺に墓ではないかと考えられる集落遺構や土壌があるが、はっきりした遺構は発見されておらず、後期までの葬送の姿は判明していない。特に土壌は縄文時代中期ころから各遺跡に多く検出されており、墓ではないかと考えられているが、人骨其の他装飾品など墓であることを示す遺物が出土していない。貝塚等が多く発掘されている地域ではしばしば埋葬された人骨が検出されており、それによると、手足を曲げて埋葬する屈葬、体を伸して埋葬する伸葬があり、多少の装身具や土器、石器等を伴い、中には上に石を敷かせたような抱石葬といわれるようなものがあり、死霊がよみがえって災いを及ぼさないようにという呪の気持ちなどが見られるが、全般的に極めて簡素な埋葬が行なわれていたようである。晩期になると、伊那市手良野口の墓地のようにしだいに厚葬の傾向が生み出されている。

手良野口の墓地は、非常に丁寧な葬送の例であるが、村内においてはこのような厚葬の事例は検出されず、より簡素な葬送が一般的ではなかったかと考えられるが詳細は不明である。

Ⅲ 弥生文化時代の南筑前

1 弥生文化の波及と遺跡の分布

東日本が比較的豊かな自然的資源(鮭鱒の遡上と海洋魚群の回遊など)に恵まれ、独自の熟した、呪術的要素(土偶、土版、顔面把手等)の強い亀ヶ岡文化を形成していたころ、西日本は凸脊文土器の貧しさ

に示されるような、恵まれない自然環境と文化発展との間に矛盾が生じ、採集経済に行き詰まりを感じており、その克服のため隣邦が開始されていたのではないかと考えられている。そのような状態のとき、朝鮮半島を経由して稲作を中心とした農耕文化が北九州に伝えられた。それは、西暦前三〇〇年ごろであった。

この稲作を中心とする農耕文化は、西暦前一〇〇年ころまでには北九州と気候のあまり変わらない西日本全体に広がり、その東限は伊勢湾付近にまで達した。その後も稲作文化はしだいに東海、北陸へと延び、西暦前後ころには東北地方南部にまで達している。

このように、縄文時代の数千年という長い歴史に比べると、急速な勢いで稲作は広まっていったが、早くも九州地方では稲作を中心とした農耕文化の発展により、しだいに階級社会が生まれ、「くに」が形成され、四世紀ごろからは政治的権力者による大墳墓が作られるようになった。この西暦前三〇〇年ごろから、古墳が造られ始めた西暦三〇〇年ごろまでの数百年の間を弥生文化時代と呼んでいる。

この弥生文化時代は、第一に、日本における農耕、特に稲作の伝播発展の時期で、初期農耕文化としての性格を持っている。第二に、日本における金属器使用の開始期であって、初期金属文化の様相を示していること。第三に、朝鮮半島ないし中国と交渉を持ち始めた時期であって、大陸文化の影響を直接間接にあらわしていること。が特徴である。さらに、糸を紡ぎ布を織る技術も早くから身につけることとなり、数千年という長期にわたる縄文時代の採集経済の停滞性から脱却することを可能にしたばかりか、歴史の回転を著しく早めることになった。

稲作が始まると、縄文時代のような手のこんだ土器はなくなり、簡素で実用的な土器になった。しかし焼成は良く、これを弥生式土器と

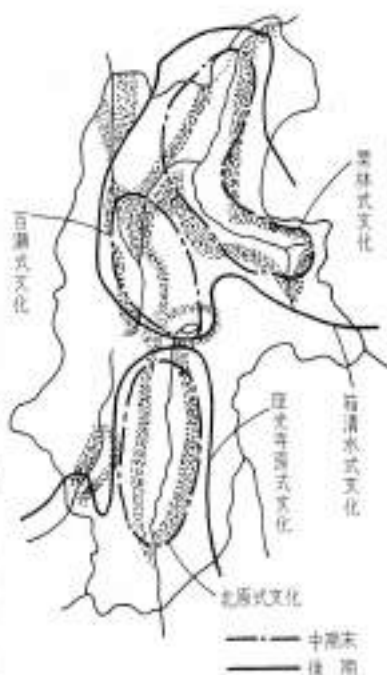


図 1-13 長野県における稲作文化の波及

呼んでいる。この土器は、貯蔵用の甕、煮炊用の甕、食物を盛って神に供える供献用高杯等三種の形態に分けられるようになり、稲作用の耕作用具としては木製の農具が作られた。また、稲穂を摘み採るための石包丁という特殊な石器が用いられた。木製農具を作る工具としては石器の外に金属利器が使われており、その金属器は農具にも使われるよう利用が拡大され、生産力を高める大きな要因になった。

このような弥生式文化が、いつどのような形で郷土に伝わってきたであろうか。

長野県は山岳高冷地帯が多く、熱帯性植物である稲が作物として波及するのは容易ではなく、東海や北陸の海岸地帯よりは遅れているが、意外に早く導入されている。その稲作文化の伝わり方は、地形の特色から川沿いに波及した。前期（BC 3000～BC 1000）末にはすでに東海地方から天竜川沿いに入っていたが、中期（BC 1000～AD 1000）になると果下平坦地帯一帯に広まり、中期末には各平野部に百瀬式文化、北原式文化と独特の文化を形成（図 1-13）し、後期（AD 1000～AD 3000）には天竜川と千曲川流域に、聖光寺原式文化と箱清水式文化

化の二大文化圏が並立する形になったといわれている。

上伊那北部、及び諏訪地方は天竜川流域の聖光寺原式文化圏と、千曲川流域の箱清水式文化圏の接点になっており、両者の文化が入り組んで伝わっている。

このような急速な弥生文化の波及の原因については縄文文化の行き詰まり停滞に対する縄文人たちのあせりが大きな底流になっていたと思われるが、ほかに大きな原因として、彼らが石包丁を使って稲穂を一本ずつ刈り取るという収穫法にあったといわれている。

一見能率の悪そうな石包丁による穂首からの一本摘みの収穫が普遍化したのは、理由があつたことであつた。それは、当時の水田が自然の湿地を利用して、収穫期でも田の中に水があり、鋭利な刃物でなくては根刈りが困難であつたことと、それ以上に、稲の出穂実りの時期がそろわず、一穂ずつ石包丁で実りの早いものから収穫せざるを得なかったのではないかとされている。この収穫法は生産性において低いものではなかったが、結果として、実り期の異なる種子の分離という重大な機能を果たすことになった。このことは、翌年度に備える種籾の選択を有利にし、充実した優良な種籾が選抜されるばかりでなく、突然変異等による寒冷な気候にも適した個体の選出を可能にしたのである。こうした選抜の過程で、おそらく最も早く抽出されたものは、それが突然変異であれ、分離によるものであれ、早く実る性質の種であつたであろう。いち早く出穂して実る早生種は、誰の目にも特別なものとして注意を集中させたからである。これが初穂として特別に取り扱われれば、やがて一つの品種として固定し、より寒冷な地域への稲作波及の大きな力となったものと考えられるのである。（岩波講座「日本歴史」）

さて、本村における弥生文化の波及の状態をみると、現在までに



図 1-14 本村における弥生遺跡の分布

弥生文化時代の遺物を出土した地点は、一八か所検出されている。まだ未発見の遺跡が存在すると考えられるが、縄文時代中期の遺跡数に比べればほぼ半数で、出土遺物量もはるかに少ない。

遺跡の分布の状態を見ると、南殿から北殿、堀ノ井、久保へかけての天竜川に面した、低位段丘の突端部付近に集中しており(図1-14)、一部が大泉部落西方六〇〇〜七〇〇mの大泉川両岸の段丘上に分布している。前者のうち、箕輪遺跡に属する久保下の遺跡は、天竜川及び帯無川によって形成された沖積面に立地しており注目すべき遺跡である。

これらの遺跡の出土遺物について、弥生時代の偏年的位置をみると、大部分の遺跡が弥生時代後期に属するものであって、わずかに箕輪遺跡のみに弥生時代波及期の土器片、及び中期の土器片が出土している。このことから、この地域での本格的な弥生文化は、弥生時代後期になって広まったと考ええてよいであろう。したがって当地においては、弥生時代前期及び中期の大半は、その大部分の人たちは、縄文時代晩期文化の生活を続けたと考えなければならぬ。

日本における弥生時代初期の生活は、沖積平地内の自然の湿地を水田として利用し、その付近の微高地に住居を構えたといわれており、それと同様の立地を示す箕輪遺跡が、この地方で早くから水田として利用されたのだと考えられる。上伊那地域内において、弥生時代波及期の遺物の出土地点は二〇余か所発見されているが、その中で、箕輪遺跡、中川村片瀬の刈谷原遺跡、駒ヶ根市上穂沢川中流の洪積台地上に発達した十二天、如来寺遺跡、外に伊那市御園、同伊勢並、箕輪町沢北溝等の遺跡があげられているが、いずれも付近に豊富な湧水があり、湿地が求められるところに立地しており、そのような立地条件から水稲耕作が行なわれたものと考えたくなるが、波及期の水田平式土

器に伴って水稻栽培に使われた道具が発見されておらず、確信の持てる遺跡や、水稻農耕の波及を確実に物語る遺物がない。したがって、縄文末期から遺跡地が川に近い湿地付近に集まったのは、漁労を中心とする生活になったためと考えられる。しかし、反面で上伊那地域で稲作文化が伝わって来たのは水神平式文化（東海地方に発達した文化）と共にであったと考えられており、稲作が行なわれたと考える方が妥当であるということができよう。

稲が熱帯性植物であって、本来夏季の高温を必要とするものであることは、弥生時代前期の遺跡の分布域が、七月の平均気温二四度Cの等温線と密接な関係があることが示されており（『日本農耕文化の起源』）現在においても夏季の低温がしばしば冷害を発生させていることからそれは十分理解される。弥生時代の技術の未熟な段階において、当地のような標高六〇〇～八〇〇mという高冷地に稲作を導入することは、先に述べた寒冷地向けの稲穂が選出されたにしても、容易なことではなかったと思われる。

箕輪遺跡において波及期に相当する東海系の水神平式土器、及び中期前半同系統の阿島式土器の出土が見られるにしても、稲作がどの程度に行なわれたか、確たる証拠がない限り判断しかねる。自然の湿地を利用しての稲作が行なわれたとしても、かなり不安定なものであったと思われる。

中期後半に至って、松本平地方から百瀬式土器文化が伝えられ、さらに、これに続いて畿内系の櫛目文様の土器を持つ文化が伝えられ、箕輪遺跡の広い範囲にこの遺物が出土している。松本地方においても百瀬式土器の出現のころから稲作農耕が確認されるといわれていることからみて、箕輪遺跡においてもこのころから稲作が本格的に行なわれ始めたのではなからうか。箕輪遺跡から出土した数種の磨製石斧は

木工用の道具と考えられており、多量に出土した木櫓や、木製農具の一部はこの時代のものである可能性があるのである。

弥生時代後期になると、本村内においては南殿、北殿、塩ノ井、久保部落の天竜川を望む低位段丘の突端付近と、大泉西方の大泉川兩岸の段丘上に弥生人の住居が展開され、箕輪遺跡においては北端のやや小高い馬場（気輪町地蔵）地点等の限られた場所のみに居住地が狭められて、他の地点には後期の遺物は出土しなくなっている。このことは、この時期になって弥生人たちの居住の場に大きな立地上の変化が起きたのではないかと考えられている。

このことについて、「弥生時代後期初頭の一時期に天竜川、三峰川等が一時の平静さを破って、大洪水によって沖積面を洗い流すようになったことにあると思われる」（『上伊那歴史資料』）と述べているように、沖積面に居住できない状態が生じたことによると思われる。もちろん、洪水の収まった後、沖積面のうち水田として利用し得る場所が残されたり、新たに生まれたことによると思われる。水田として利用されたであろうが、居住の場所は安全な地点に構えるようになったと考えられる。さらには、付近の小湿地を求めて開田が行なわれたのであろうか。天竜川からかなり離れた大泉西方の大泉川兩岸の小湿地を求めて、北高根A遺跡や大芝原遺跡、また、鳥谷川の小湿地を求めて春日道上に遺跡を残すなど新たな開発が行なわれて、弥生人の生活の舞台が広がったものと考えられる。

しかし、この時代十分な鉄製農具があったわけではなく、石器や木製の農具をもってしては、大きな水路を作った人工灌漑による開田は困難で、自然の湿地を利用する段階にとどまっていたと思われる。

2 弥生文化時代の生活

(1) 農耕生産活動

後期の弥生人たちは、当地でもかなり活発に稲作に取り組んだと思われる。しかし、本村内では箕輪遺跡以外ほとんど、稲作の証拠となるようなものは出土していない。ただ、北蔵の北垣外遺跡から石包丁が一個出土したことが報告されているのみである。箕輪遺跡久保下等から出土した鋤、鍬、田下駄、田耨等は貴重な稲作の資料となるものであるが、その時期は古墳時代のものである可能性が強く、弥生時代の稲作の直接の資料とし難い面もあるが、弥生時代に続く時代のものであれば、それを参考にし、また、付近の他の遺跡、遺物から当時の生活を類推することができよう。

まず、稲作用地の選定についてみよう。弥生時代の初中期のような石器や木製の農具のみでは、大きな人工の灌漑用水路を造って開田することは困難であったから、大きな河川の後背湿地や、小河川流域の小低湿地等の自然の湿地を利用したと思われる。特に大きな河川の後背湿地などでは水が停滞して暖まり、稲作に適する場所が少なくなかったと考えられる。

箕輪遺跡は天竜川と帯無川がつくった後背湿地であり、西方の段丘崖よりの湧水はやや冷水であるが、その量は多く、昭和二十七年からの土地改良事業実施以前は、至る所に沼地や湧水のある湿地帯であって後背湿地の典型的なものであり、北高根遺跡・大芝東遺跡・春日道上遺跡の住人たちの開いた水田は、小河川流域の小湿地の例であろう。

これらの自然の湿地は、箕輪遺跡の遺物出土層が葦などの泥炭層であったように、葦の自生する葦原であって、このような場所の多い所は生産力の豊かな場所であって豊葦原といわれたのである。日本のように島国で季節風帯に属していて夏季雨量の多いところでは、このような湿地が多く、「豊葦原瓊穂の国」といわれた古い言葉の意味はここにあったと思われる。今では葦の生えているような低湿地は生産

力の低い不良な土地と考えるが、この時代にあつては大切な水田用地であつたのである。

次に、当時の稲の作り方を概観しよう。

右に述べたように自然の湿地が水田用地として選ばれたが、湿地であるため畔や水路は土留めをして成形する必要がある。箕輪遺跡や節岡原登呂遺跡のように、さわらなどの割りやすい木を数十cmに切り、それを割って杭に作り、それを打ち込んで柵とし、さらに粗朶などを

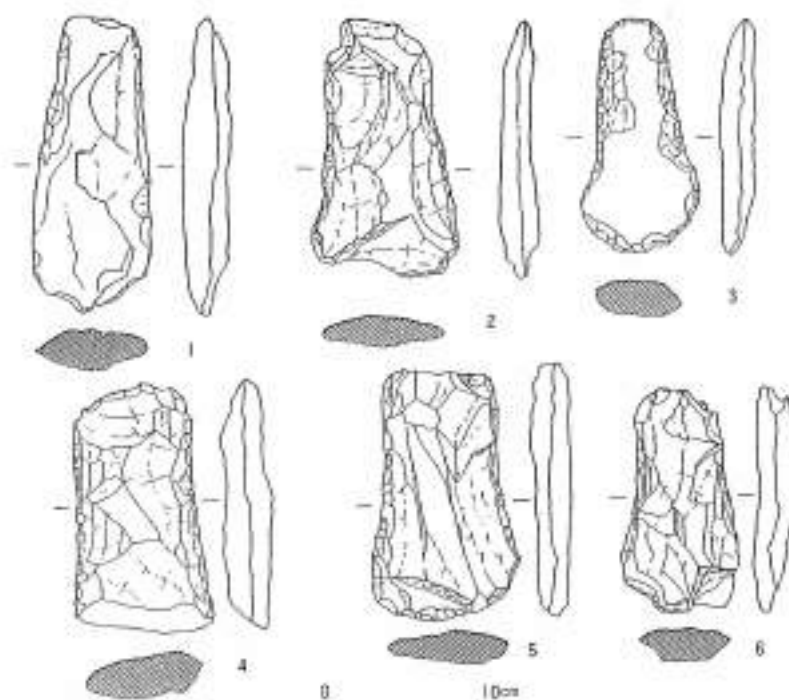


図 1-15 箕輪遺跡出土の石器（箕輪遺跡発掘報告書より）5・6は久保下・橋田出土

編みつけて土留めをする努力がはらわれている。開墾や耕起は箕輪遺跡では石鎌が主として使われたようである。石鎌は箕輪遺跡からは数多く出土しており(図1-15)、一見縄文時代の打製石斧に似ているが、その製作技術の様相から弥生時代のものであると考えられており(「箕輪遺跡調査第1集」)開墾用と考えられる大形で独じんなものと、耕起用のものとがある。いずれも何回も使われたことを物語るように刃先が欠けていたり、磨滅しているものが多い。これと共に、木製の鋤、鎌も使われたかも知れない。

田面を均らし、平らにするには田下駄が用いられたと思われる。それは、昭和の初期ごろまで刈敷を踏み込んだり、植代の仕上げをするときに大足と称して、田下駄を改良した形のを両足にはき、それに綱をつけて両手で交互に持ち上げながら田面を歩いて仕上げをしたことと同じ作業であったと思われる。

仕上げをした水田には、板種を直接にばら播く直播栽培が行なわれたと考えられている。

その後の管理については、湿地であるから水はほとんど自然の湧水で足りたと思われるが、必要に応じ簡単な灌排水施設が作られて灌排水が行なわれ、他の管理としては鳥獣の害を防ぐことが大事な仕事であった。このことはその後の奈良、平安時代の様子などからも推察することができる。除草はばら播きの直播栽培では生育中に水田に入って歩くことは困難であるから、ほとんど行なわれなかったものと考えられる。

実った稲は、先に述べたように石包丁で一本一本穂首から刈り取る方法で収穫し、収穫した稲は臺に入れて貯蔵するか、登呂遺跡の例のように高床式倉庫に束ねた状態で貯蔵された。村内には高床式倉庫の確証された遺跡はないが、北高根遺跡には柱穴群がいくつかあり、そ

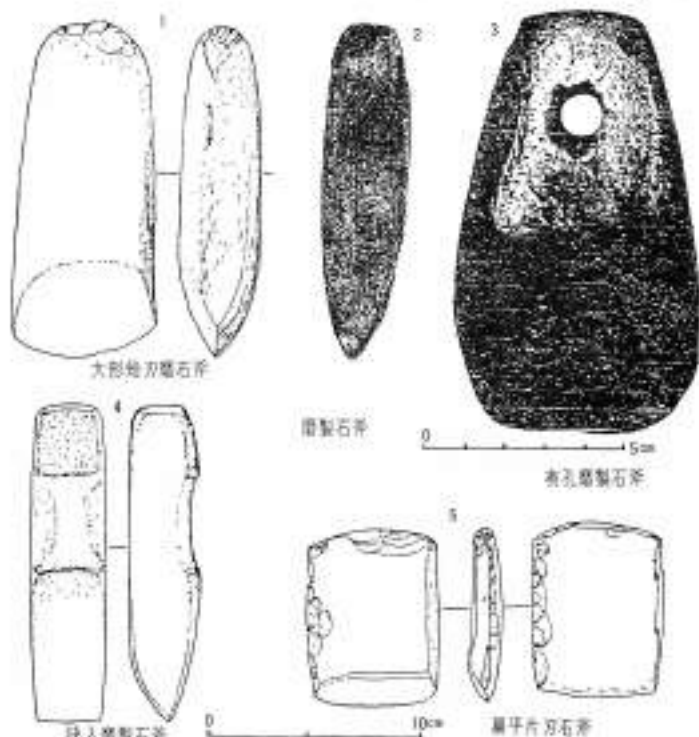


図1-16 弥生時代の磨製石斧

1・4・5 箕輪遺跡 2・3 南殿宮ノ上遺跡

の中には弥生式土器を伴ったものもあり、その柱穴群は高床式倉庫であったかも知れない。

板は立白立杵で搗いて脱粒と簡単な穀とを行ない、飯を使って蒸して食べたといわれている。

石器類には先に述べた石鎌のほかに、この時代磨製石斧、大形、扁平片、扁平片刃石斧等があるが、規格化された傾向が感じられ、非常に立派なもので、石斧製造師によって製作されたものではないかと考えられている。村内では、北殿の北垣外、南殿の宮ノ上遺跡から磨製石斧が、また、宮ノ上からは特殊な有孔磨製石斧が出土している。

〔図1-16〕これらの石斧は木製農具等を製作するための原材料の伐採や切割り、または鑿などの役割を果たしたようである。北高根遺跡の7号住居跡は弥生時代の住居であるが、その住居跡の床面から「やりがんな」と思われる鉄製品が出土した。弥生時代の後期には当地にもこのような鉄製利器が伝わっており、農具の生産に威力を発揮したもののと思われる。

このようにして用具の進歩は水稻の生産力を高め、稲作の重要性は高まったであろうが、なお、それだけで充分な食生活を満たすことはできなかったであろう。縄文時代から引続き狩猟、漁労等の採集活動もかなり活発に行なわれていた。久保の石鏝〔図1-17〕、大芝南、大芝原遺跡等から磨製石鏝が出土していることはこれを示している。

また、村内には積極的な畑作農耕を示す遺物は出土していないが、畑作農耕も行なわれたのではないかと考えられる。

(2) 住生活について

弥生文化時代の住居について、村内で発掘調査された遺跡の限られた範囲で、十分その姿が解明された状態ではないかも知れないが、大泉北高根A遺跡には五戸の住居跡が発見されており、天伯遺跡にも弥



図1-17 磨製石鏝
(久保、石鏝遺跡出土)



図1-18 弥生時代後期の住居跡
北高根A遺跡7号住居跡中央に埋設があり四本の柱穴もはっきりしている

生時代終末から土器時代への移行期と考えられる住居跡が発掘されている。これらの住居跡の状況は表1-1のとおりであり、これによって、当時の住生活の概要を知ることができる。

住居の様式は、通常五・六mの隅丸方形又は長方形で、床面を地表下二〇〜五〇cmくらい掘り込んだ堅穴式住居である。柱は、柱穴の隙間近くまで届く円錐形の草葺屋根であったと考えられる。床面は踏み固められており、北高根7号住居跡では一二・二〇m幅の周溝が床面の外端周囲にあぐらしてあった。また、7号、12号住居跡には内部の間仕切りかと思われる小さな柱穴跡が多く検出されている。

炉跡についてみると、六住居跡のうち二戸には炉がないか、確認されていないが、他の四戸は炉跡があり、うち一戸は床面ほぼ中央に一五cmの深さに掘りくぼめただけの簡単な炉であるが、他の三戸は甕(甕)の

表 1-1 村内における弥生時代(後期)の住居跡

遺跡番号	プラン	簡	要
北高根 A 1 号	5.25m × 4.6m 隅丸方形	主軸 51° 壁高30~35cm 主柱4本 床面に焼土あり 炉は確認されず 遺物 弥生時代後期土器 石器なし	
" 3 号	4.9m × (5.35)m 隅丸方形	主軸 60° 壁高10cm内外 柱跡判明せず 炉は床面中央に円形に15cm程度掘りくぼめたもの 遺物 欠山期(?)の土器 鉄製紡錘車 石器なし	
" 7 号	5.6m × 5.55m 隅丸方形	主軸 48° 壁高25~37cm 主柱4本 外に間仕切りと思われる柱穴多数 幅12~20cmの周溝が全周にあり炉は床面 中央やや北寄りに埋竈が 遺物 土器、鉄製品(やりかんなど) 石器なし	
" 12 号	6.3m × 4.05m 隅丸方形	主軸 35° 壁高20~25cm 柱穴不明 北西隅、南東東縁に張出部 中央に間仕切りと思われる柱穴多し 炉 住居跡中央北縁に近く埋竈が 遺物 台形完形土器 他土器片 石器なし	
" 5 号	4.55m × 3.3m 隅丸方形	主軸 32° 壁高15~30cm 柱穴3個確認 炉 なし 遺物 弥生時代終末(欠山期)土器 石器なし	
天伯遺跡 32トレンチ 2 号	6.9m × 8.39m 隅丸方形	壁高 地表より45~50cm 主柱4本 炉 北壁寄りに埋竈式 遺物 土師器、弥生終末より土師器への移行期か	



図 1-19 埋竈伊土状況(北高根)

たりどれくらいの人数が生活したのだろうか。関野克の私案によると、一人当たりの必要面積を3㎡と考えると、柱、炉のために3㎡くらいが必要であるから、生活可能な人数nは、 $n = \frac{30}{3} = 10$ (式)の式で算出できるとしており、これに従って人数を計算してみると、小さい住居で四人、大きい住居(7号)で九人、天伯遺跡2号住居では一七〜一八人の生活が可能だということになる。

この時代既に平地住居が造られている例があり、また特殊な高床式建物の存在が確認されている。高床式の建物は銅鐸等に描かれており、登呂遺跡ではそれが倉庫であったことが明らかにされた。

(3) 衣生活について

縄文時代は衣料として、狩猟の結果得られた毛皮類が用いられたと考えられているが、弥生時代においても、毛皮類は引き続き大事な衣料

胴部あるいは口縁部を埋めて作った埋竈式の炉で、床面の中央より北壁寄りに作られている。埋竈式の炉は、火種保存の方法として考えたものであろうといわれている。郡内にある縄文時代からの様式である石囲い炉はもう作られていない。

床の上には、藁や乾草などを敷いてごろ寝をしたと考えられている。一住居当

であったと思われる。しかし、この時代になると糸を紡ぎ布を織る技術が大陸から伝えられ、その技術が広まったことが衣生活面における重要な特色となった。このことは、各地から土製、石製の紡錘車が出土し、銅鐙にも糸を紡いでいると思われる線画が描かれていること、さらに底面に織物などの圧痕を印した土器が広く分布していることなどによって証明されている。

土器に残った織物の圧痕からみると、かなり目の粗いものであったが、織物の技術は急速に普及したようである。しかし、村内では弥生時代のものでとされる石製の紡錘車は出土していない。しかし、北高根遺跡の3号住居跡から鉄製の紡錘車が出土している。鉄が当時利器を作る貴重な資源であったことを考えると、鉄製紡錘車の存在は注目される。

織造原料としては苧麻、大麻などが使われたと考えられ、したがって、その栽培も行なわれたと考えたい。

(4) 弥生人の精神活動

稲作を中心とする農耕の開始は、従来の生活様式の大転換であって、当時の人たちの精神状態をも大きく変化させた。食料供給の中心である稲の栽培に努力の大半を傾注せねばならないから、巧緻で時には異様な感さえあった手間のかかる土器は姿を消し、簡素で実用的な土器に変わったのもその精神状態の変化のあらわれであろう。

また、自然に対して働きかける仕方も違ってきている。四季の変化に対する敏感な感受性、太陽と作物の関係についての真摯な認識、実りを祈る気持ちと実りを得たときの喜びなど、縄文文化の採集経済の時代にはなかった精神状態である。

日本の神話の一つに「天の岩戸」の伝説がある。それは、日の神である天照大神が天の岩戸に隠れたので、大勢の神々が困って、知恵を

しぼって天の岩戸から日の神を連れ出すという神話である。

このような神話は、水稻耕作が基本的な生産手段となった時代に生まれたのではない。人によって神話はいろいろに解釈されているが、共通した見解として、農業をやった太陽というものが重要な役割を果たし始めていた時代の神話である（藤岡生大・林基・松本新八郎著『日本史概説』）としている。弥生人たちの精神状態を説明するにふさわしい神話である。

また、諏訪地方におけるミシャグジ信仰は、縄文中期ごろから生まれているようであるが、性格がしだいに変化していることを次のように説明している。

ミシャグジの大きな性格の一つは土地の神であり、大地のにおいを持っている農耕と結びつきがあるといひ、三河の北設楽郡田峰の銅古堂でミシャグジへの神願があり、夜の田楽には「理さらい」「雇入れ」「田打ち」「代播き」「代ならし」「芽ぶら取り」「大足」「檀降き」など、農耕にちなんだ舞があり、最後に「おしづめやなどう」などの舞が行なわれる。おしづめやなどうとは「お鎮め米置」、つまり米の置を押しさへ鎮め留まらせることであり、おそらくミシャグジは土地の霊の生座の神をふるいたたせる性質を初源において持っていたであろうが、それが時代の推移と共に「お鎮め」の儀に転用され、「鎮」が農耕儀礼の主要な地位に進出したと思われる（『古代東洋のミシャグジ祭歌』北村哲雄）としている。時代はやや下るようには感ぜられるが、弥生時代にこのような傾向が生じたことは理解されよう。

以上、みてきたように、氣候特に太陽に対する強い関心と、神に對し風害、水害、あるいは虫害等の悪意を鎮めて、豊かな実りが得られるように祈り、実りが得られたとき神に感謝する気持ち、各種の農耕儀礼として集団の中で盛んに行なわれたものと考えられる。

次に、身を飾ることについては、ほかの地域での遺物などから、弥生人たちもかなり活発にやっていたようで、勾玉、管玉などの玉類や、貝殻で作った腕輪などが使われている。村内においては、玉類は今までのところ出土した報告はなく、どの程度身体装飾が行なわれたか明らかでないが、北高根A遺跡の柱穴群①のすぐ東側から、果内でも珍しいとされる銅剣が出土している。腕輪として用いられたと思うが、当時にとっては極めて貴重な装身具であったと思われる。

(5) 集落の発達と村落共同体

稲作を中心とした農耕生活を営むこととなった弥生人は、当然のこととしてその耕地の付近に定住生活をするようになった。そして、農具の発達、生産技術の進歩にともなって生活が向上安定し、人口と共に戸数も増加したものと考えられる。

こうして、集落の規模はしだいに大きくなった。『上伊那郡誌』によれば、『東伊那郡久保遺跡』において、同一時代の住居跡が三戸以上、下伊那郡光寺原遺跡では二〇戸以上に及んでいるということから、伊那地方で耕地を見下ろす小高い丘陵に一五戸から三〇戸ぐらいが一部落の農村を形成していたと考えてよいであろう」としている。北高根A遺跡においては、中央自動車道関連土地の狭い範囲の発掘調査であるにもかかわらず、同一時期と考えられる住居跡が四〇五戸確認されており、発掘現場の大泉川に沿って東西を拡張して調査すれば、なお住居数が増加することが見込まれ、一〇戸あるいはそれ以上の集落を形成していたと思われる。なお、大泉川の右岸には北高根A遺跡に向かい合って大芝東遺跡、大芝原遺跡があり、ここにも弥生時代後期の遺物が出土していることから、同時代の住居が存在したものと考えられ、これらを合わせて一つの集落を形成したとも考えられる。

北殿、塩ノ井、久保村近の弥生時代の遺跡については、北殿の殿村

遺跡に唐沢原式土器を伴う集落跡があったことが報告されており、上伊那郡誌によれば、先の大泉川両岸の遺跡より、天竜川右岸の多くの湿地を控えて有利な条件を持っていたので、より大きな集落を形成したのではないかと思われる。

このような人口、集落戸数の増加の過程において、好適な自然条件の土地が少ない場所では、適地を求めての分村も行なわれたであろうが、新たな水田の開発造成も進められたのであろう。自然の湿地をそのまま利用するだけでなく、多少なりとも人工の灌漑、排水等の水路を作り、あるいは箕輪遺跡におけるような木柵による水路や畔の造成も必要に応じて行なわれたものと思う。

しかし、これらの作業は集落民全体の共同の仕事になったであろうと思われる。また、穂首から摘み取られた穀を高床式倉庫に貯蔵するとすれば、これは個々の堅穴住居一戸の仕事ではなく、やはり集落全体の計画に基づくものであろう。

水田の造成、水の管理、時によれば洪水や旱害との闘い、あるいは虫害や猪鹿の防除等共同して当たらねばならないことが非常に多かったと思われる。そこに縄文時代のような単純な血族による集団を越えて、その地域に住む人たちが全体の共同体が生まれてくる。地域的共同体であり、村落共同体の成立である。

このような共同体において共同作業をする場合、指導者または指導者が必要である。その指導者には、豊富な経験とすぐれた指導力を持った集落内の長老が選ばれ、酋長的役割を果たしたと思われる。また、共同体の重要な精神活動である農耕儀礼を中心とした祭祀活動も、当然その指導者たる長老の司祭のもとに行なわれたであろう。科学技術の極めて幼稚な原始社会においては、生産の安定向上のため、具体的な耕作活動が大切にされることは当然のことながら、祭祀活動

が極めて重要な位置を占めていたことは諏訪地方における古代の権力機構が祭政体であり、日本の政事とは祭事であるという祭政一致の考え方があったことから推察できよう。

やがて、鉄器類が普及するにつれて水田開発が進み、生産力が増大するに伴い、集落を単位とした生産集団の活動は、他の集団にも利害関係を及ぼすようになり、互いに水と土地を求めて争うようになったと考えられる。さらに共同作業の指導権と祭祀権を握った指導者は、しだいに支配者としての権限を持つようになる。そこに、次の階級社会へと発展する芽生えが生まれていた。

当地のように弥生文化の遅れて入った後進地域では、まだ依然として、狭い村落共同体の姿を持続していたと思われるが、早くも弥生時代中期に、自然の過剰地を越えて開発が進行したといわれる西日本、特に北九州では、弥生時代後期初頭には、既に「くに」を形成する段階にまで発展を遂げていたのである。

これらのことは、弥生時代の墓地の姿からもこれを理解することができるといえる。弥生時代は縄文時代に引き続いて共同墓地の形をとり、主として集落の近くに設けられている。遺骸は北九州地方では甕棺や箱式棺を用いて伸展若しくは屈葬の形で葬られている。しかし、木棺及び甕棺等を用いない、単なる土坑程度の埋葬も多く、それが一般の集落構成員の墓であったと考えられる。

このような埋葬状態の中で、人によっては遺骸に土器をかぶせてあったり、大きな石を胸の上に置いてあるものがある。さらに、ある甕棺の中には銅剣、銅鏡などの貴重品が入っているものがあり、同じ場所には銅剣、銅鏡などの貴重品が入っていないという差別が生まれている。同じような棺を使って、同じような場所に埋葬されているという点では、共同体の一員として平等な面を持つが、一方で副葬品の差という

特権的な面が生まれている。それは、権威を示す銅剣や、祭祀の用具である銅鏡などの副葬である。銅剣、銅鏡と一緒に埋葬された人は、特殊な身分と権威を持った人であることを示している。まだ共同体的要素を強くもっているが、次の階級社会への芽生えをここに見ることができる。

当地においても、畿内に発達した弥生時代の墓制である方形周溝墓が辰野町樋口五反田遺構等数か所で発掘されている。それは一辺一〇m内外の方形の墓域を定め、そこに墓域を作り埋葬し、周囲に溝をめぐらし、内部は大きく盛土をする様式で、墓域内には剣や装飾品などが副葬されていたといわれている。これは一般の集落構成員の土坑墓程度のものとは異なり、ある程度の財力の蓄積と権力の保有を示すものである。しかし、本村内では弥生時代の墓地と確認された所は一つもなく全く不明である。今後の調査に期待するよりないが、今まで少しも発見されないということは、極めて簡単な埋葬しか行なわれなかったのではないかと考えさせられる面もあり、まだ階級分化は進んでいなかったと考えられる。

第二節 村の古代

一 古墳文化時代

(一) 古墳文化時代とは

稲作を中心とする農耕生活が伝わり、それと共に青銅器、鉄器等の製作技術が導入され、文化のあらゆる面がその影響を受けて飛躍的な進歩発展を遂げるにつれ、共同体的生活形態の中に、しだいにそれを突き破る異質の要素が芽生え、かつ生長を続けてきた。

弥生時代の後期、既に墓制において共同体的要素を強く持ちながらも、副葬品などを多く持つ墳墓が造られたことを見ても、それは稲作を中心とした農耕の発展につれて、農民の間に諸条件の差によってしだいに貧富の差が生まれてきたことによる。豊かな農民はその財力を利用して鉄製農具などのすぐれた生産用具や技術を利用してますます富を蓄え、貧しい農民の中には没落して血縁の者や有力農民に寄口として生活をする者も生まれ、それらはしだいに隷属民としての奴婢の地位に落ちてゆくようになる。このようにして集落内部に階級分化が進んでゆくが、共同体の指導者としての首長の地位も、しだいに集落内の経験豊かなものより、財力を蓄えた有力者に掌握され、指導者より権力者・支配者へと変化してきたようである。さきの、弥生時代の特殊な墳墓の被葬者は共同体の権力者へと変化しつつある首長層である。

この首長もさらに有力な首長に隷属し集落全体がその支配を受け、地方ごとに「くに」ができるようになった。

先進地域の北九州においては、早くも弥生時代中期の紀元前後ころに「くに」が成立していた。中国の史書漢書に、「東海中に倭人あ

り、分かれて百余国をなす」とある国とは、この「くに」を表現したものである。そして、その「くに」は、いくつかが連合して、連合国家を形成している。

三世紀初頭のこととして、中国の史書『魏志倭人伝』に「二世紀末倭国乱れ、三世紀に連合して女王卑弥呼を立てた」と記されている。この女王卑弥呼の国が邪馬台国といわれ、この邪馬台国が九州にあったのか、畿内大和地方であったのかはまだ定説がないが、明らかにそれぞれ政治権力を持った支配階級たちがその支配を強固にするため連合して王を立てたものである。畿内においても大和地方を中心に三世紀には強力な連合国家が成立していた。

これらの連合国家の王や有力豪族たちは、自己の功業と権威を示すために大きな墳丘のある墓を造ることを始めたのである。やがて、地方の首長層もこれにならって墳丘を造るようになった。このような墓を古墳というが、これは三世紀後葉から七世紀代まで続いており、この時代を古墳文化時代と呼んでいる。

三・四世紀には、大豪族による大墳墓だけが造られており、これを古墳時代前期とし、五世紀には墳墓の大きさは、墳墓の主である被葬者の持つ力の大小に匹敵するようになり、努めて大きな墳丘を造って偉容を示そうとする傾向が強くなっており、この時期を古墳時代中期としている。六・七世紀になると、墳丘の規模というより副葬品に重点が置かれる傾向を示し、さらに、大豪族の権力が弱まり、地方小豪族（族長層）によって各地に小古墳が爆発的に造られるようになる。

この時期を古墳時代後期としている。しかし、先進地から遠く離れた山地である上伊那における古墳文化は時間的ずれがあり、その末期は八世紀まで続いている。

古墳時代は、また、氏族制度の時代でもある。畿内に大和政権が生

まれ、その支配の権力と範囲が拡大される過程において、大和政権が連合政権の構成員である貴族たちの氏の社会的地位を姓によって秩序づけようとしたのが氏姓制度である。

氏は家系を識別するための名称であり、同一家系であることを信じて結合する集団であるが、氏の由来は居住地に由来するもの(例、蘇我・平群・巨勢等)職能に由来するもの(例、中臣・斎部・土師等)とあり、物部八十氏人と言われることと必ずしも同一血縁ばかりとは限らず、配下に入ってその氏を名乗るような場合もあった。氏は氏上がこれを率い、一族の者を氏人と言ひ、その下に部曲や、さらに奴婢を隷属させ、おのおの氏の職業を持って朝廷に奉仕した。

姓は、貴族の身分表示のため氏につけた称号であって、中央の貴族には臣・連・宿禰・造などが多く、地方の豪族には直・君(公)・首などが多く、帰化人には使主・忌寸・古土などがつけられた。このうち、臣・連・君・直・宿禰・首などは尊称であり、造は天皇に奉仕する意味であり、職能に由来するものに史・日佐・伎などがある。初め集団内の地位や職能を表示したものであったが、しだいに姓の間に尊卑の差別が生じてきている。

この氏姓制度に基づいて中央貴族らは支配体制の強化を図り、自己勢力の増大のためにこれを活用した。

また、四世紀末から五・六世紀にかけては、朝鮮半島及び中国との交流が盛んとなり、帰化人も多く、それらに帰因する技術の進歩発展が著しく、仏教文化や漢字の流入等、日本の文化のあり方を大きく方向づけた時期でもあった。

(四) 村内における古墳文化時代の遺跡

上伊那地域の古墳の分布をみると、六世紀末より七世紀前半と思われる本郡唯一の前方後円墳である松島王墓があり、引き続いて、伊那山

脈西側山麓に、堀地・手良古墳群があり、七世紀から八世紀にかけて伊那北部には、伊勢並・三日町・長岡・平山の古墳群が生み出されている。
〔上伊那誌歴史篇〕

しかるに、本村は天竜川沿岸の村であるにもかかわらず、古墳は極めて少なく、現在確認されているものは久保の丸山古墳のみである。かつては、外に二か所の古墳が存在したことが伝えられ、『上伊那誌歴史篇』にもそれが消滅したことが記されている。その所在地は北殿であったと考えられるが、現在では全く不明である。

丸山古墳については、若干の資料が残っているので、資料に基づいて記すと次のようである。

この古墳は文久二年(一八六二)の開墾と昭和二七年伊那土地改良工事の二回にわたる土地利用のための地形変容によって、原形がすっかり破壊され、現在民家に囲まれた水田になっている。



図 1-20 丸山古墳跡現状(平田の水田が古墳のあった所)

ここは、久保集落東北部の一角の丸山地域で、旧国道一五三号線と、新国道の狭間になっているが、かつては久保下一帯の箕輪遺跡地域の西端で、ゆるやかな、やや小高く突出した台地となり、弥生時代以降における箕輪遺跡の林地をひかえた住居地の背後で墳墓に格好な位置であったろうか。ここに、径約三五m、



図 1-21 丸山古墳出土の直刀と勾玉

高さ七皿余の円墳があり、この塚の開拓にあたり直刀一振りと子持勾玉が出土している。直刀の保存にあたりその木箱に「文久二年三月中倉田繁造所有地宇丸山、周廻り九六十間、高さ式文余の塚掘り崩し開拓するの際、該塚中央にこれ有る物品」と記されてる。

譲のために、譲が築いたものが、明確な伝承もなく、予想される石室や、人骨など手掛りもなく、副葬品としてのこの直刀が、古墳時代の中期ないしは後期のものであると推定されるのみである。

しかし、この古墳の東の水田地帯一帯が広大な面積を持つ箕輪遺跡であって、この遺跡の生

産力を支配する地方族長のうちの一人の墳墓であることはほぼ間違いないものと思われる。

古墳については以上のようなことがいえるが、古墳時代に人が住んでいなかったということではなく、古墳を造るような有力な族長の生長が少なかったということであろう。



図 1-22 村内における古墳・平安時代遺跡の分布

を決定するものは、縄文、弥生時代とも土器がその尺度となったが、古墳時代においても土器が重要な役割を果たしている。古墳時代人の使った土器は土器器といわれるものが主体であり、五世紀後半以後大

ネ古墳・片山古墳・狐塚古墳・糠塚古墳の系譜が考えられ、五世紀前半から六世紀始めのもので、諏訪の「くに」を統率した豪族の古墳であると考えられる。その推論の根拠は、フネ古墳系の古墳が弥生時代の末期の墓制である方形周溝墓と同じ場所に、時期的にも平行して作られている。弥生式墓制の方形に造成する方法を受けつぎながら、内部主体に粘土槨形式を採用し、副葬品に呪術的器物、鉄製品的大量副葬という厚葬化を示して、いわゆる古墳となっている。また、フネ古墳が特異な器物、すなわち、内蔵する素環頭大刀、古式の有柄鉄剣や青銅剣、蛇行剣、鹿角装の剣等呪性を保有した武器、そのほか鏡としては粗末な変形獣文鏡、農耕具としてオノ、ノミ、鎌、ヤリガンナ等が副葬されていた。これらのことは、善光寺平や松本平の族長が墳制、鑑鏡、埴輪など中央の大和政権の葬制を受け継いでいるのに対し、フネ古墳系古墳が極めて反大和的色彩が濃厚であることなどを挙げて、諏訪の「くに」の統率者の墓と考えている。

さらに、フネ古墳の被葬者の性格について次のように考えている。

- ① 墳形が弥生末以来の影響を受けていることから、在地者から成長したものであろう。
- ② 副葬品に呪術的と見られる鏡、玉、剣（蛇行剣を含む）などが多いのは、その人物が司祭権を強力に保有したものと認められる。
- ③ 鉄製農具類の豊富な副葬からみて、農業共同体族長層の統制に力を持っていた。
- ④ 豊富でしかも珍奇な武器類の保有は、相当強力な武力による統制の面を持っていたかも知れない。

以上のような被葬者の性格は、諏訪の「くに」における統治の姿をおぼろげながら想像できるとしている。

次に、諏訪の「くに」の範囲については、次のように説いている。

フネ古墳等の初期古墳群の築造された場所が、守屋山の北側山麓であることが重要な意味を持っている。一般に古墳は、支配力の及ぶ農耕地帯、集落を見下ろせる場所に築造されるのであるが、フネ古墳群はどうであろうか。古墳築造の原動力となった前段階の弥生文化の様子を見ると、守屋山の北山麓は極めて貧相であって、むしろ諏訪盆地の北側、東側の縁に沿って豊かに展開していた。諏訪盆地という範囲において統一を成し遂げて、初期古墳を築いたとすれば、その場所は湖北のいずれかの地点が有力であったと考えるべきである。

このような状況の下で、なおかつ古墳が守屋山麓に築造されたということは、次のように考えることが妥当であろう。

フネ古墳の被葬者が、祭政一致的な力によって統一を成し遂げた諏訪の「くに」の領域は、後の記録であるが『倭名類聚抄』の諏訪郡の範囲であった。したがって、フネ古墳築造の要件として現在の上伊那の北半部に近い位置におくことが必要であった。弥生文化の研究によれば、上伊那の北半部、ことに有賀峠の辰野側にある樋口五反田・樋口内城館の両遺跡は弥生時代後半の大遺跡であるが、この土器形式と住居構造は諏訪の権相が濃く、頻繁な交流がわかる。このような様子から見ても諏訪の「くに」の領域は、諏訪と上伊那の北半部であったと考えられるのが至当である、というのである。

さらに、諏訪の「くに」の支配者は、貧相な諏訪の弥生文化より、上伊那北半の豊かな経済力に依存するところが大きかったと思われる。そうした古代祭政者が経済的基盤内の収奪的行為を容易にさせるため、領域内を巡回し、呪術をもって呪縛した行為が、後に確立して諏訪神社祭政上の重要神事となった「大御立座神事」であり、伊那路は外祭神使巡幸路である。その芽生えはどうみても、フネ古墳の被葬者の活躍した時期が、没後古墳が築かれた時点で、集団指導の維持

発展を図ろうとする首長階級による権力の誇示という考えから、統轄する領域内を呪術を行ないながら、巡検収奪を行なったものであらうと考えている。

南筑輪の地域も古代社会の美和郷の一部と考えられており、その前の時代の諏訪の「くに」の領域に入っていたと考えられる。村内の塩ノ井は大御立座神事における外県巡幸の経路の一つとして、神使による洪えの神事の行なわれた場所であったし、その起源がいつであるか判明しないが、諏訪地区の古い土地神信仰である、ミシャグジ信仰が塩ノ井のミシャグジ社で行なわれて、そこを「ミシャグジサマ」と称している。神子柴には、諏訪信仰と密接なつながりのある御射山社跡が遺跡として残り、いまに至るまで毎年祭事が行なわれている。このように、今でも諏訪の「くに」としての色合いを残しているように思われる。したがって、外県巡幸による呪縛が、時代の下るにつれて政治的支配力としての力が薄くなったにしても、祭政一致の傾向の強かった古代においては、かなりの強制力をもって、人的あるいは物的の貢献を強いられていたものと思われるのである。

また、本村の西部から西筑輪地域へかけての広大な洪積台地は、伝承によると建御名方命の狩りの場であったといわれている。また、矢の南入り、御射山平、蔵鹿山等、山の名も狩猟伝承に深い係わりを持ったものであることを感じさせるものがある。諏訪地域における八ヶ岳の西山麓一帯が諏訪明神の狩猟の場であり、狩猟神事のあることを考えて、諏訪の「くに」に属する伊那の地域でこれに近い場所を考へれば、本村から西筑輪地域へかけての洪積台地が格好の場所であったように思われる。おそらく諏訪に連出し、諏訪の「くに」の支配者となった人による狩猟がこの地区でも行なわれたのではなかろうか。そして、諏訪明神が神話に基づいて建御名方命を祭神としたように、

この地の狩の伝承も建御名方命の狩の伝承となったものと考えられ、この地が諏訪国の一部であったことを考えさせる。

四 農耕生産の発展

筑輪遺跡から木製の農耕具として、鋤・鍬・田下駄・田舟等多くの遺物が出土している。これらの木製農耕具は、当地でも弥生時代から使われた可能性もあるが、古墳時代に盛んに使われたと考えられる。(上巻遺跡調査報告参照)



図 1-24 筑輪遺跡全景（東方より）

出土した鍬は、平鍬の部類に属するもので、先端部を尖らせてあり、上半部にほぼ直角に大きな柄穴をあけて着柄するようにになっている。着柄の角度から打鍬のようであるが、湿地に作られた水田の耕起や砂土等には有効に使い得たであろうと思われる。鍬は柄と身が一本に作られているものと、着柄するものとに二大別されるようであるが、本遺跡出土のものは着柄して使うもので、スコップと同様な使い方をしたものと考えられる。田舟は丸木を舟型に掘り抜いたもので全長一・二m、幅三九cm、深さ一五cmの大きさで、地表下三〇〜四〇cmの深さに伏せた状態で出土したと報告されたおり、どの時代のものか判定し難いが、肥料(刈草)、苗、収穫した稲穂等を運ぶのに用いたのではないかと考えられている。田下駄は数点出土しているが弥生時代の項で述べたのでここでは省略するが稲作の大切な用具である。

次に、直接の農耕具ではないが、出土遺物で注目すべきものは、おびたらしい量の出土を見た木櫛である。木櫛は箕輪遺跡の全域から出土し、その出土状態は当時の用水路の片側又は両側に打ち込まれ、水路壁を強化する役割を果たし、あるいは田の畦畔を形づくるために使われたと思われるが、打ち込まれている状態、つまり杭の粗密や深淺などは、使用目的や土質の硬軟の状態によって違っている。(下巻 遺跡調査報告書参照)

杭の材質はほとんどが「サリラ」であり、それは大きな原木を年輪に沿うようにいくつにも割り、太さ五〜七cmの角材にして先端を金属利器で削り尖らせてある。中には腐食を防ぐために表面を焼いて使用したものもあり僅かではあるが栗材もあると報告されている。

昭和二七年からの土地改良工事の時点で、杭の出土本数は数万本に達し、木櫛列の総延長は四三〇〇m余に及んだと報告されている。まだ土中に埋もれている木櫛も相当数あるものと考えられ、その工事量

の大きさに驚くばかりである。もちろんこのような大規模な工事は一時期に施工されたものではなく、弥生時代から近世に至るまで絶えず打ち込まれ、耕地を拡張しつつその数を増したものと考えられているが、水田の拡大、生産量の増加に対する古代人の異様なほどの努力の姿を見ることができそうな気がする。

しかし、このような工事を可能にしたものは鉄製器具の出現であることを考えておく必要がある。木櫛の杭を削るだけでなく、先に見た木製農具の製作にも鉄製の利器を使ったことが認められており、鉄製用具の出現が農耕にも重要な役割を果たしていることがわかる。では、どの程度の鉄製用具が使われたのであるのか、この点に目を向けて見よう。

初期における鉄器は、中央の貴族や豪族たちに多く占有されていた。特に国内においての鉄の生産は大和政権に独占されており、大和政権の権力に連なる者だけが有利に利用できたのである。大きな土木工事が必要とする古墳の築造も、豊富な鉄器の利用があって初めて可能であったのであり、また、古墳を造る土木技術と鉄製用具が、溜池を造り用水路を開く技術と用具にもなり、自然の湿地を利用するのみの稲作から、溜池を造り用水路を切り開いて、乾田を開拓することを可能にしたのであるといわれている。

箕輪遺跡に住んだ人たちは、おびたらしい木櫛列からみても、かなり多くの鉄製用具を使用したと考えられるが、湿地であるため鉄の腐食が早く、ほとんど鉄製遺物は出土していない。しかし、箕輪遺跡に關係が深い天伯遺跡からは多くの鉄製品が出土している。天伯遺跡第二トレンチ第一住居跡から鋤先が、第六トレンチからは鋤先と思われるものが出土している。鋤先については詳細な報告がなく不明であるが、鋤先は図1-25のごとく左右幅約一五cm、長さ一九・二cm、刃の

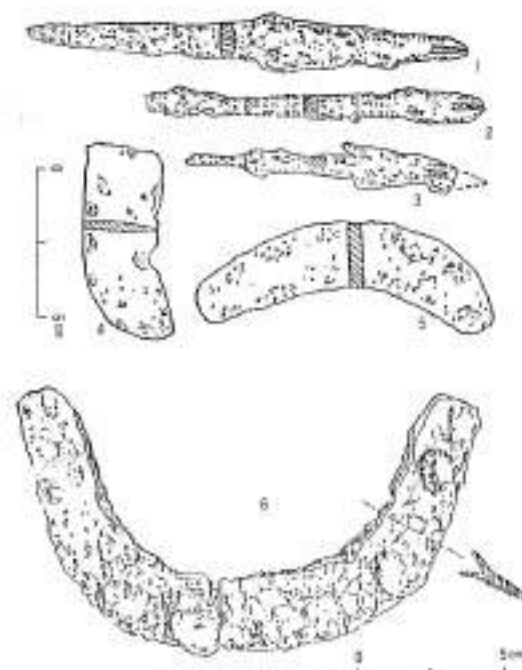


図 1-25 天伯遺跡出土鉄器
1～3 鉄剣 4、5 鉄鎌 6 鋤先

部分の幅は二・三cmで、刃部の内側は一般に屈曲と呼ばれる木質部をはめ込むための袋状部がある。その断面はY字状をなしている。おそらく踏鋸の先であろうと考えられる。

また、第二二トレンチ第三住居跡及び第六トレンチからは鎌と思われる鉄製品が出土している。

鉄製品は須恵器の普及と共に広まったといわれているが、天伯遺跡においては、鉄製品は農具だけでなく、鉄剣、刀子、鉄環（使途不明）等も出土しており、鉄剣は狩猟または戦闘用に使われたと考えられ、刀子は小刀として木製農具等の細工などに使われたと考えられている。このように一般の利器まで鉄が利用され、かつ、砥石が存在したことは、それが繰り返し利用されたことを教えてくれている。

さらに、「ふい」の口が出土し、鉄滓が二か所ほど検出されている。

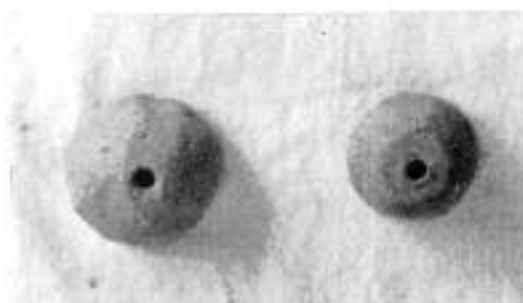


図 1-26 天伯遺跡出土土製紡車

り、(寛輪遺跡からも同様のものが出土したと報告がある) この場所では鉄製品の製作が行なわれたことを物語っている。住居内の炉でない焚火跡が発見されているが、これらの作業が時によっては野天作業ではなかったかと推測させる(天伯遺跡発掘調査報告書)。と報告されており、この時代には鉄製品の製作を自己の集落内で行なうほどに普及発展していたことが示されており、この鉄器の利用が農耕生産における生産力を著しく高めたと考えられる。

次に、畑作農耕について考えてみると、天伯遺跡第三五トレンチ第四住居跡から一個、第二二トレンチ第二住居跡から二個、外に一個、計四個の土製紡車が発見されている。このような紡車の発見は当時盛んに紡績が行なわれていたことを物語るとともに、一遺跡で四個の発見はかなり利用の多かったことを示すものであると報告されている。このことから、その紡績の材料である苧麻、麻などを畑地で栽培

したことが考えられる。弥生時代から諏訪より伊那にかけての天竜川水系の文化圏は、遺物の出土傾向からみて、畑作農耕の傾向が強いといわれているとおり、この段丘上の遺跡では麻類のほか、粟、稗、豆類などの畑作農耕もかなり活発に行なわれたものと考えられる。

図 古墳時代の住生活と家



図 1-27 古墳時代住居跡の一例（天伯遺跡）

天伯遺跡の最も盛んであった時期は土師期であったろうといわれ、この時期の住居跡は十数戸が存在したようで、そのうち確認された住居跡を報告書によって整理してみると次の表1-2のようである。

住居のプランは、小さい住居では一辺四m前後、大きな住居で六・五mくらいのもので、現在の地表からの深さは五〇〜一〇〇cm前後の竪穴式住居である。床面はよく踏み固められており、一つの住居跡では床面全周に周溝がめぐらしてあった。（図1-27）

柱穴の調査から、大部分の住居が四本の掘立柱を立てて、その上に屋根組みをのせる仕組みの住居で、屋根の形式は判明しないが、家形（かたち）などから想像すれば入母屋形式の屋根ではなかったろうか。第一二トレンチの第1住居跡は火災に遭ったらしく、床面に多量の炭化し

た木材、炭化した萱束等が出土し、柱や屋根組みの材として栗や櫟材が使われ、屋根は萱で葺かれていたことが報告されている。なお、第三五トレンチの第4住居跡では南側入口部分に長さ一・四m、幅三・五mが床面のように踏み固められてあり、そこには、しぎきよのさし掛けが作られたらうと報告されている。

当時代の住居には平地住居もあり、屋根は地面まで延ばさず、柱に懸（か）るいは萱などによって壁をつけ、窓を作った住居もあったようであるが、天伯遺跡の場合床面を深く掘り下げる竪穴式であり、柱穴の位置からみても柱間の壁はなかったように思われる。

如（ごと）く住居中央には無く、天伯遺跡の例では全部西壁の中央部付近にかまどが築かれていた。十数個の細長い石を八の字形に二列に並べ、煙道部分は扁平な石をのせて粘土で固め、煙道は屋外まで延ばして排煙する仕組みになっていて、前時代と比べて数段進歩した形を示している。どの住居も西壁の向きを二〇〜三〇度北方向に向けるように竪穴が掘られており、その西壁の中央部にかまどを築いて、南または東南に入口が作られている。此の地域の気象、特に風向きに注意してのことだと思われる。

この時代の生活用具としての土器は、土師器と須恵器である。土師器は、古墳時代から平安時代にかけて作られた赤褐色の素焼き土器の総称で、系統的には前代の弥生式土器とつながりを持ち、その間に明確な一線を引き難いものといわれ、成形には「ろくろ」を使用したものもあり、ごく簡単な窯（かま）で八〇〇度内外の温度で焼成し、装飾手法をほとんど用いず、地方差が少なく、器形の規格化の傾向が認められるので、陶工の専業化が進みつつあったと考えられている。天伯遺跡第三トレンチ第1住居跡には、粘土の塊が発見されており、住居外の焚火跡はこの地点で土器製作が行なわれて焼成された所であるかも知れ

表 1-2 天伯遺跡土師器住居跡一覧表（天伯遺跡緊急発掘調査報告より作成）

住居番号	プラン	深さ 柱 穴 等	炉・かまど	床面出土遺物
第1トレンチ 第1住居跡	東西 5.4m × 南北 5.6m 隅丸方形	深さ平均90cm 柱穴 6	なし 西壁寄りの床面に焼 土あり	土師製高杯など 床面東北隅に鉄製鋤 先
" 第2住居跡	東西 6.2m × 南北 5.8m 隅丸方形	深さ 70cm 柱穴 7（支柱4?）	西壁中央部に石組粘 土式かまど （9個の長方形の石 を2列に並べ前 （入口）に平盤石が 置いてある）	かまど周辺に多数の 土師器
第2の1トレン チ 第1住居跡	東西 4.5m × 南北 4.6m 隅丸方形	深さ 60cm 柱穴 4 工作堀跡か?	西壁中央部に石組の 上を粘土で覆う煙 道式かまど煙道は外 まで出る	かまど付近から土師 器片
第3トレンチ 第1住居跡	東西 6.3m × 南北 6.2m 隅丸方形	最深部82cm 柱穴 4 東南隅にピット 床面全周に風溝あり	西壁中央部に石組 の上を粘土で覆う方 式のかまど	土師大口大甕 粘土塊
第8トレンチ 第1住居跡	東西 7.2m × 南北 6.3m 隅丸方形	深さ60cm 柱穴 4	西壁に近く 石組式かまど	土師器 鉄 鍬 骨 片
第12トレンチ 第1住居跡	東西 6.4m × 南北 6.3m 隅丸方形	深さ平均1.3m 柱穴 4 （火災にあった住 居跡）	西壁中央部 石組粘土式かまど （大小10数個の 自然石により） 煙道は外へ	炭化した材木、萱束 かまど付近より土師 器須恵器多数セット として出土
第22トレンチ 第1住居跡	東西 5.15m × 南北 5.25m 隅丸方形	深さ 60cm 柱穴 4	西壁中央部に石組粘 土式かまど （煙道長90cm煙道に は扁平石、2個上 においてあった）	かまど付近から土師 器ほぼ1セット出土 鉄器（鍬部分）
第35トレンチ 第3住居跡	東西 6.4m × 南北 6.0m 方 形	深さ平均 45cm 柱穴 4 （土師器使用中期以 降）	西壁中央部に大小9 個の石を粘土で固め 煙道を持つかまど	土師飯、甕破片 土製紡績車
" 第4住居跡	東西 3.9m × 南北 4.35m 小形方形	深さ 105cm 柱穴 4他に穴あり 入口部分長1.4m 幅 0.35m （しぶき除けさしか け跡か）	西壁中央部に自然石 14個を粘土で固め煙 道を持つかまど	土師甕破片

ないとされている。

須恵器は、古墳時代の中期末から平安時代の終わりにかけて作られた陶質の土器で、祝部式土器とも言われ、成形は手作りという「ろくろ」使用を併用し、登り窯によって一〇〇〇度以上の高温による還元焙焼成が行なわれたものである。

器は固く鼠色ないし黄青黒色を呈している。これは中国の技術が朝鮮半島を経由して日本に伝わってきたもので、専門的工人集団（蜀民）によって生産されており、当地方には六世紀に入ってから普及し始めたといわれ、天伯遺跡の先に表示した住居跡では、ただ一戸しか須恵器を出土していないが、他地方から移入したものである。

土器類は多くかまど付近から出土しているが、特に第一二トレンチ第1住居跡は急な火災に遭ったためであろう



図 1-28 天伯遺跡出土須恵器

か、当時の生活状態を再現してくれるような状態でかまどの両側にたくさんの土師器、須恵器が出土した。

それは当時の一戸の土器の保有量を示しているように考えられる。その内容を見ると大甕・小甕・大甕・小甕・杯・高杯・鉢・甕等があり総点数四〇点に達し、かなり豊かであることを示している。(上巻 遺跡編天伯遺跡の項参照)

当時の住居の大きさから、一戸に居住し得る人数はせいぜい四〜五人から七〜八人程度であって、直系の家族が生活し得る程度の大きさであると考えられる。それを超える傍系の家族は別の住居を構えたと考えられるが、当時はそれが完全な独立した家族になったのではないようである。それは、次の律令制時代の戸籍が、他の地方のものであるが残されている、その戸籍によると、当時の「里」を構成する単位として戸、あるいは租税の徴税単位としての戸は、「郷戸」と呼ばれ、

郷戸を構成する人数は二〇人、三〇人という人数であり、中には五〇人を超える郷戸も稀ではなかったようで、その郷戸の中に二〜三戸の単独家族に近い小人数の戸（これを房戸という）が含まれていたのである。これは、それまでの家族の実態を表現したものであるといえるところから、古墳時代における当地の家族の実態も、新たに住居を作って分家した形のものも房戸として、元の郷戸主に相当する家長の統制のもとに生活する、というような家族形態をとっていたと考えられる。したがって、個々の住居跡は一房戸の住居跡と考えるべきである。

四 畿内勢力の侵襲

「高天原から三人目の使者として、建御雷神が大国主命の所にきて葦原の中国を譲るように談判をした。大国主命と、その子の事代主命は畏れてその命に服することにした。しかし、事代主命の弟である建御名方命はそれに従わず、建御雷神と力競べすることになった。結果は建御雷神の方が強く、建御名方命は戦いに敗れ追われ追われて諏訪の海まで逃れてきた。そこで殺されようとしたとき、建御名方命は、この諏訪の地より外の処には行かないから命だけは助けて下さいと命乞いをした。それで許されて建御名方命は諏訪に住むことになった」

これは「古事記」に書かれてある国譲り神話の一部であって、そのまま史実ではない。大和勢力と、それに対立した出雲勢力との抗争の結果、大和勢力が勝利を収めたという、大和政権の国内統一過程の神話化されたものであろう。

建御名方命が諏訪明神の祭神になっているのもこのような神話に基づくものであるが、これは畿内の勢力が諏訪の地に進出してきたことを示すもので、これに対する土地神の抵抗があったことが「諏訪明神神託」に次のように記されている。

「抑々藤原明神と申すは尊神重彦の昔、矢の悪賊神居を妨げんとせし時、
 渡矢は鉄輪を持してあらそい、明神は藤の枝を取りて是を伏し給う。終に
 邪輪を降し正法を問す。明神誓を發して藤枝をなげ給ひしかば、則ち根を
 さし枝葉をさかえ花葉あさやかにして戦場のしるし万代に残す。藤原明神
 と号するなり」

このように畿内勢力が諏訪の地に進出してきたことは、『古諏訪の
 祭祀と氏族』(前掲)によると、古墳の調査からもそれを知ることがで
 きるとして、次のように述べている。

六世紀末から七世紀初頭になると、いままでの前期古墳(二期古墳
 と呼ぶ)と全く異質の古墳が出現する。守屋山麓の小丸山古墳、湖北
 園のスクモ塚古墳、上諏訪の踊場古墳、湖盆東縁の釜石古墳等がこれ
 で、これを二期古墳とする。一期古墳が山頂墳、方形小墳丘、粘土椁
 形式で副葬品が呪術的性格のものであるのに対し、二期古墳は山麓の
 小丘上に造られ、円墳高塚式、横穴式石椁形式で副葬品は裝飾馬具や
 実用武器等が主体となっている等、きわだった差を示している。二期
 古墳は新たに大和地方の風習を身につけた畿内人の進出を示すもので
 ある。

畿内勢力の進出を、神話においては出雲系國神である建御名方命
 (御神)と表現しているが、この点については、『ミワ(神)氏は、畿
 内において三輪山の祭りを司っていた氏族である。三輪山の地も天皇
 家の所領となってしまうが、そのころであるうか、神氏(三輪氏)の
 うち一派が信濃の諏訪へ勢力を伸ばしてくる。それが第二期古墳の出
 現であり、神話の渡矢神と明神の争いである』としていっている。

三輪山というのは、奈良盆地東南の磯城郡にあって、日本でも最も
 起源の古いものの一つに数えられる大神神社があり、大國主命が祀ら
 れている。この大神神社は、三輪山を神体山として神祇のないのを特

色とするが、諏訪神社がこの形態をとっており、また、諏訪神社の祝
 職が神氏によって世襲されていることなど、神氏(三輪氏)の諏訪進
 出を裏付けているように考えられる。



図 1-29 三輪神社(奈良県磯城郡)

次に畿内大和政権の勢力の侵襲についてみると、時代は少し下ると
 考えられるが、『日本書紀』、『古事記』に崇神朝のこととして、大和
 朝廷に従わざるものを平定するため、四道將軍を派遣したことが記さ
 れている。また、景行朝には小碓命(倭武尊・紀では日本武尊)を、九州
 の熊襲征伐の後、再び、『東の方十二道の荒ぶる神、または、まつろ
 わぬ人どもを言向け平げよ』として東征に向かわせている。

崇神、景行両天皇は、大和地方における初期古墳の被葬者とされて
 おり、ほぼ実在の可能性のある人物と考えられ、その在位の時期は三
 世紀後半から四世紀初頭と考えられている。そのころは、大和政権の

勢力は畿内をあまり出ていなかったと考えられ、その東征の記事は疑わしく、倭武命は神話上の人物で実在の人物とは考えられていない。

しかし、四世紀中葉から五世紀にかけては、活発に国内の統一化が進められたと考えられる。それは、四世紀末の紀元三九一年に大和朝廷の勢力が朝鮮半島に進攻していることが、高句麗好大王神文から明瞭であり、既に外国まで進攻するほどの強い力を大和政権が蓄えていたことを示しているからである。「昔から祖國みずから甲冑をつらぬき山川を跋渉し寧ろ遠あらず、東に毛人を征すること五十五国、西に衆夷を服すること六十六国……」とあり、これは、倭王武烈（雄略天皇）と考えられているが四七八年に、中国の宋の皇帝に差し出した上表文の一部で誇張があると思われるが、国内統一のための軍事行動が活発に行なわれたことが示されている。このような一連の軍事行動が、四道將軍の派遣、倭武命という英雄の活動に形象化され神話となったものといわれている。

このような国内統一化のための大和朝廷の活動は、当地方の地元勢力から見れば、畿内勢力の侵襲ということになるわけであって、特に、『日本書紀』に日本武尊東征の途中、「蝦夷の因首成其の事に伏しめ、唯信濃國、越後國頗る未だ化に従わず」と語ったように、信濃國特に諏訪の勢力は大和政権に強い抵抗を示していたようであるが、信濃國が東國への入口として重要視されたので、畿内勢力の扶植には特別の意が用いられ、しだいに畿内勢力が扶植され、その支配下に入ったものと思われる。

畿内大和政権勢力の扶植の例として、『国造本記』に「科野國造は『瑞穂朝御神八井耳命、孫建五百建命ヲ國ノ造ニ定メ賜ウ』とあり崇神朝の時代に建五百建命が信濃國の國造に任命されたことが記されている。この記事の時期や系譜など史実であるかどうか疑わしいが、

國造は大和政権によって國、県の制を定め地方統治を図るため任命された地方官である。國造は地方有力豪族を任命する場合が多かったようであるが、荒ぶるクニの勢力を懐柔制御する者として、大和朝廷に深いかかりを持っていた有力者が任命されたのかも知れない。

次に、伊那、諏訪地区における古墳の系列を考えると、下伊那は早くから畿内大和政権の勢力圏に入り、畿内勢力の墳墓形式である前方後円墳が多く造られている。その下伊那から最終形式の前方後円墳が上伊那、諏訪に波及している。上伊那における松島の王墓と、下諏訪の青塚古墳である。その系列は次のようであると考えられている。

下伊那 上伊那 諏訪
高岡一古墳 松島王墓 下諏訪青塚

これは、天竜川に沿ってしだいに畿内勢力が進出する姿であり、金刺氏等國造勢力を通して諏訪へ伸長したことを物語っている。その時期は松島王墓の築造の時期と密接な関係があり、王墓の築造の時期が六世紀末から七世紀前半と考えられているので、それより少し前の時期と考えられよう。

箕輪松島に前方後円墳である王墓が築造されたことは、この地域が大和政権の勢力で皇室の系統を引くものか、國造系の豪族の支配下に入ったことを意味している。

さて、当地が大和政権の支配下に入ったとすれば、諏訪の「くに」の統轄者との関係はどうなったであろうか。

國造系（大和政権）の勢力が諏訪地方進出に際しては、諏訪の「くに」の根拠地である諏訪明神の所在地とは反対側の下諏訪の地であった。それは、前方後円墳である青塚が下諏訪の地に築造されたことからわかるが、さらに、下社の大祝に金刺系の者がなっているように下社を管掌することによって諏訪の勢力を押える方法がとられている。

こうして諏訪の勢力はしだいに弱められるが、国造勢力との間には対立抗争が続いている。しかし、政治の支配権はしだいに国造勢力の手の中に入ったのではなからうか。

(4) 大和政権の地方支配

『日本書紀』の成務天皇五年のところに「是れ、国郡に君長なく、県邑に首領なければなり、今より以後、国郡に長を立て、県邑に首を置き、即ち当国の幹了者を取りて、其国郡の首長に任せよ」とあり、同じく五年の九月になって「諸国に令して、以て国郡に造長を立て、県邑に稲置をおき、並びに櫛牙を賜いて表となす」とある。さらに『古事記』に「大國・小國の国造を定め賜い、亦国々の導及び大県・小県の県主を定め賜う」とある。

これによってみると、成務天皇代に大和政権の支配地域を山河によって国や県を定め、国に造を県に稲置（『古事記』では県主）を任命したことになる。これは大和政権の地方官の配置を示す資料で、その時期はおおよそ四世紀前半と考えられる。

しかし、当地方はこの時代はまだ大和政権の支配下にはなかったと考えられているので当然、国造と稲置も置かれていないと思われる。

当地方に関係ある国造等の最初の資料は『先代旧事記』の「国造本紀」に「科野国造、瑞籙朝の御世、神八井耳命の孫建五百建命を国造に定め賜う」とあり、また、熊本の阿蘇神宮司家の阿蘇系図には次のように、科野国造や諏訪評、誓にかかわるものが残っている。



先の資料の瑞籙朝は崇神天皇であり三世紀中葉、四世紀初頭の在位

と考えられているので、成務朝の国郡、県など地方制度の制定より早い時期になる。支配地域全体に国郡・県制の制定前に重要な地方に部民及び私領を有した土着の豪族を国造に任じて支配組織に組み入れたとの考え方もあるが、それにしても年代が早過ぎ疑わしい点が多い。

阿蘇系図を見ると、金弓君が磯城島金刺大官朝（欽明天皇）に舎人として仕えて金刺を名のることになり、その子である麻背君（玉弓足君）が欽明天皇の代に科野（信濃）の国造になっている。麻背君の兄弟である目古君は武諸田（他田）幸玉大官朝（敏達天皇）に舎人として仕へ他田を名乗ることになり、麻背君の子孫は諏訪評督・郡領等律令体制下の郡司となっていることがわかる。

このように、この系図の記述は具体的であり、麻背君が信濃の国造となったのは欽明朝であるから六世紀中葉であって、大和政権の信濃支配の時期と符合するように思われる。

その後信濃に国造の系譜を引くものとして、金刺舎人、他田舎人の二流があり、奈良朝から平安朝にかけて、信濃国牧主当伊那郡領金刺舎人八郎、諏訪の人右近衛將官金刺舎人貞長、国造少郎部他田舎人大島、伊那郡の人他田舎人千世実等、多くの金刺姓、他田姓の有力者が、伊那、諏訪、小県、埴科、水内等に名を残していることから、阿蘇系図の信びよう性は高く、律令体制の国司郡司制以後、金刺、他田両氏は郡司として代々世襲をして信濃国内の多くの郡で地方官として活動しているところからみて、当地が六世紀中葉から大和政権の国造金刺氏の支配を受けたことはほぼ確実である。

次に県についてみると、先にあげた『日本書紀』の資料には「国郡に造長、県邑に稲置をおく」とあり、『古事記』には「大國、小國に国造、大県・小県に県主を定める」とあって、両資料に食い違いがあり、県についてはどう解釈すべきか、研究者によって多くの説が出さ

れているが、大要三つの説がある。その①は、皇室の直轄地である。②は、国造の支配する下級地方組織である。③河者の折衷説で、県主は皇室直轄地の首長であり、稲置は国造支配の下級地方組織（評）である、という説である。にわかにその可否は判断できないが、長野市界町、松本市界、小県郡等の地名は古代県制の残存地名であるといわれており、外に界の名のつけられた小地域は各地に散在しており、古代県制と関係があるかも知れない。その性格はよくわからないが、大和政権の地方支配のための組織であると考えられよう。

伊那市に伊那部という地名が残っている。これは渡来系の木工技能者であるイナ氏の部の名残りである（『伊那市史』歴史編）といわれる。このような確認できる部民制に関するものは村内では発見されていないが、この部民制は大化前代の大和政権にかかわる重要な経済的支配組織であったと考えられる。

大和政権内部において早くからそれぞれの豪族の間に職能の分化が行われて来た。軍事を担当した大伴氏が、物部氏が物部を率い、祭祀を行なう忌部氏が忌部を、土師氏が土師部を率いるという体制である。五世紀末から六世紀にかけてこの制度は一層拡充され、大和政権に必要な製品を貢納するため、あるいは特殊な技術で奉仕するため、玉造部・鍛冶部・馬飼部・衣縫部・弓削部・陶師部等しだいに部の数は増加した。この中で手工業技術に関しては朝鮮との関いの過程で連れ帰った技術奴隷や、渡来技術者が重要な役割を果たしたことはいうまでもないが、これらの人たちは部として組織され、百八十部と総称されるほどの多くの部が大和朝廷に所属するようになった。この部に所属する一般民衆が部民で、伴造に統御されて朝廷に奉仕した。これらの部民は一定の職業または技能を持った者で製品の貢納や、技能の奉仕をしたが、平常は農民として生活をした従属民である。

一般農民も屯倉（朝廷の直轄領）を通して、農業部民として部民制の中に取り入れるようになった。屯倉を耕作する農民を田部と称するようになり、やがてそれは名代・子代の民といわれたが、皇室の私有民であった。

このような部の編成は皇室のみならず、連合国家の諸豪族はもちろん、地方における国造や県主、稲置等の有力豪族もそれぞれ皇室の体制に準じた支配組織を整えた。それは豪族の名を冠して大伴部、蘇我部、平部部というように呼ばれたが、そのような諸豪族の私有する土地を田荘といい、私有の部民を隷属して部曲と呼んでいる。六世紀後半以後各豪族による土地や部民の争奪ははげしく行なわれており、部民の東国への勢力の扶植は著しかった。こうして国内の大部分も土地や人民が部民制に組み入れられ私有化されたことは、大化の改新の詔に述べられたとおりであって、部の組織は全体の生産体系をとらえる基盤組織になっていた。

南宮輪村内に生活した住民も、このような部民制に組み込まれ、それぞれの私有民として、貢納や労役提供等の奉仕をしていたものと考えられる。

先に述べた王墓や丸山古墳を築造するためにどれだけの労力が必要であったかは簡単にはわからないが、「一面陵を築造するに、各々己が民を率いて事に随いて作れり」（大化元年の詔）というように、私有の民が使われたものと考えられ、筑輪遺跡やその周辺の遺跡に住んだ人たちは、王墓や丸山古墳の被葬者の田荘の民・部曲であったと考えられる。

二 律令制時代

(一) 律令体制の成立

西暦六四五年六月、皇太子であった中大兄皇子は中臣鎌足と謀って、時の最大権力者であった蘇我氏を暗殺打倒し、年号を大化と改め、翌大化二年正月、孝德天皇の名において「改新の詔」を発し、着々と新しい中央集権体制を樹立した。これを大化の改新という。

改新の詔の重要な点を挙げると次のようである。

- 1 これまで豪族たちが持っていた土地と人民をすべて国家に収めよ。そのかわり食料（政府から支給される土地と人民）と、税を支給する。
- 2 都と地方の行政と警備の体制を確立し、中央集権体制の組織を作る。
- 3 班田収授の法をもうけ、このために必要な戸籍計帳を作り、租庸調を定めのとおり納めよ。

これによって、専制政治の体制を作る政治方針は示されたが、画期的な変革であって直ちに全国にわたって実施に移せるものではない。この方針に基づいて、それを実行に移すための細かい規定が必要である。その規定には、現在の刑法に相当する「律」と、行政、民法、商法等刑法以外の全領域にわたる法令である「令」とが作られた。これを合わせて律令と呼んでいる。

律令制定の経過を見ると、六六八年に近江令が制定され、六八一年から飛鳥浄御原令の制定が始められ、六八九年に令二二巻が施行に移された。七〇一年には大宝律令が完成し、翌年施行に移され、ほぼ律令の大綱が整っている。その後、七一八年養老律令の制定、八二〇年には弘仁格式、九〇七・二七二年に延喜格式が作られている。格は、それまでの詔勅官符（律や令の追加修正法）を編集したものであり、式は格の施行細則である。

このように、律令は長年月にわたって整備改訂が行なわれ、しだいに全国に施行されたものであった。この律令政治はしだいに変容を受けつつも一二世紀後半まで続くわけで、この時代を律令制時代と呼んでいる。

(二) 国・郡・里（郷）制

1 国の成立と国司

「崇神紀」によると、同じ方面の国々（都から地方への官道が定められその官道に沿った国々）を合わせて「道」と唱える区分が行なわれた。すなわち、畿内・北陸道・東山道・東海道・山陰道・山陽道・南海道・西海道で、これは、大和朝廷の統一支配が進むと共に定められた行政上の区画である。信濃は和銅ころまで科野と書かれ東山道八か国のうちの一国であった。

右は大化前代の状態であるが、大化の改新により、新たに国・郡・里制が定められて、国司・郡司・里長等がおかれることになった。その実施時期については、六四六年（大化二）の派遣国司（大化前の国司で臨時の役）や国造に対して、「宜しく国の垣境を視て、或は書に記し、或は図を書き持ち来りて示し奉れ、国果の名は来む時に將に定めん」（『日本書紀』）とあり、この報告に基づいて国造・県主制と、国司・郡司制が交差されたものと思われ、新たな国郡里制は浄御原令実施以後と考えられる。

定められた信濃国の範囲は時代によって異なり、当時は、木曾（鳥居峠以西）は美濃国に属し、下伊那南部は三河国、諏訪の富士見以東は甲斐国に属し、現在よりかなり狭かったようである。大宝令では国を大・上・中・下の四等級に分け、信濃国は、伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・木内・高井・小県・佐久の一〇郡を持ち上国に属しており、上国の国衙の役人は、守一人、介一人、掾一人、目一人、史生一

人（以上を国司という）で、外に博士、医師が各一人配属されることになった。

『続日本紀』養老五年（七二一）の条に、「信濃国を割きて始めて諏訪国を置く」とあり、天平三年（七三二）の条に、「諏訪国を廢して信濃国に併す」とある。七二一年に信濃国を分割して諏訪国を設け、一〇年後に再び信濃国に併合しているわけである。その諏訪国の範囲は、諏訪郡の外、伊那、筑摩、安曇までが含まれたものと考えられる。もちろん、諏訪国司も任命されたと思われるが、資料がなく全く不明であり、国府の所在地も下諏訪の下社付近とする説、松本市東郊とする説などがあるが、確かなことはわからない。

なぜ諏訪国が分置され、一〇年後に再び併合するというようなことになったのだろうか。この点については、この数年前に出羽・丹後・美作・能戸・安房等の諸国が分置されており、その一連の動きとも考えられるが、信濃国が地形複雑で南北に長く、国府が北東に偏して（小島郡上田市付近にあった）連絡に円滑を欠くという地理的事情があった。それに加えて、諏訪神系を中心とした勢力が南信濃に広く根を張っており、国司を置くようになってからもその勢力を無視し得ず、諏訪勢力制衡のため一時の便法として諏訪分国の処置をとったのではないかと考えられる。

再び諏訪国を信濃国に併合したのは、このころ全国的に小国の廃止が進められており、天武天皇による国分寺建立事業を遂行するためには小国では負担が多く困難であるから併合されたのではないかという考えがある。また和銅六年（七一三）に吉蘇路が開通した。この吉蘇路の道筋についても諸説があるが、木曾谷を縦貫する道筋が有力視されているので、この吉蘇路を抜けると国府の所在地となった筑摩へ間近である。吉蘇路が開通してそれが盛んに利用されるに及んで畿内

からの交通に便利なように、国府を上田から筑摩に移転し、それに関連して諏訪国が信濃国に合併されたのではないかと考えもある。

この考えは信濃国の国府が、上田附近から松本筑摩の地へ移転した時期が、吉蘇（木曾）路の開通及びその利用の増大と符合すれば卓見と思われるが、木曾路は人煙稀なところとして平安時代初期には再び官道は神坂越の旧道に移っており、疑問点も多いように思われる。

信濃国の国府（国司の役所の所在地）は、最初小島郡上田市に置かれたが、平安時代の初期までには筑摩郡松本付近に移された。信濃国の国守として、資料に出てくる最初の人は、和銅元年（七〇〇）からの小治田朝臣宅持で、朝臣という姓を持ち従五位下の上級貴族である。以後平安時代末までに信濃国の守または権守に任ぜられたものは一四〇名ほどに及んでいる。一般に中央政府より五・六位の位階のものから任命されるのがならわしで、赴任して任地において国政に当たるべきもので、その任期は大宝令では六年であったが、その後改正されて四年になっている。

守は、一国の政務を統轄して行政、司法、警察など万般のことに当たり、介は守を補佐あるいは代行し、掾は一国の非違を正すことを主な職務としており、目・史生もそれぞれ職務を分担していたようである。

ところが、後世になると国守が自から任国に赴任せず、目代等に代行させる（これを通任という）風習が生まれ、さらに一〇世紀ごろから知行国と稱して院、摂関家等中央政府の権力者たちが国守を任命する権限を持つ国（知行国）が生まれ、知行主である権力者たちは自分に近い者や都合の良い人物を知行国の国守に任命し、その利得を懐にし、国司はまた私利追求に明けくれるようになった。こうして、国司制度の本来の姿は平安中期以降に姿を消して崩壊に向かい、地

方豪族の台頭や武士の興隆、さらに、鎌倉幕府の守護地頭の設置により、国司は遂に有名無実となってしまっている。

2 郡と郡司

改新の詔に「凡そ郡は四十里を以て大郡とせよ、三十里より以下四里以上を中部とし、三里を小郡とせよ」とあり、郡の大小を分け、郡には郡家（郡の居所）を置き、郡司として大領、小領各一人、主帳、書生、家主等を郡の大小に応じて人数を定めて配置している。

郡司は国司の下にあって郡内の政務を行なうものであるが、改新の詔に「国造の性謙清く、廉くして時の務に堪うる者をとって大領・少領とし、強く、鋭く、聡敏くして書算に工なるものを主政・主帳とせよ」とあり、大領・少領には旧国造や地方豪族層から選任されたようである。

郡司の史料としては、「続紀」に「信濃国牧主当伊那郡大領從五位下勲六等金刺舎人八麻呂」とあり、金刺八麻呂が伊那郡大領（郡司）であったことがわかる。金刺氏は信濃国造の一族で、早くから諏訪下社の大祝となり祭祀と政權を掌握しており、金刺八麻呂は信濃国造の主当であったが、伊那郡の郡司を兼任することになったと思われる。郡司は終身官であり、かつ世襲であったから、この金刺氏の系統のものが累代伊那の郡司となったものと考えられ、また、諏訪郡大領には金刺男維という人があり、やはり金刺氏の一族が郡司を世襲したものである。伊那郡の郡家（役所）所在地は下伊那郡鹿光寺付近（恒川遺跡）が有力視されており、諏訪郡の郡家は下諏訪付近と考えられているが、いずれも確証はない。郡司には職分田（大領には六町歩）が与えられ、在地の有力者として後々荘園や武士階級の成立に重要な役割を果たすようになった。

3 里・郷

「凡そ五十戸を里とす。里毎に長一人を置く」と改新の詔にある。ここでのいう戸とは郷戸であって、里は自然集落を単位としたものではなく、かなり機械的に決定されたようである。しかし、「若し山谷阻険くして地遠く人稀なるところには便に従いて量り置け」とあって、必ずしも五〇戸ではない場合もあったと考えられる。

七十五年（聖武元年）「里を改めて郷となす」とみえ、里は郷と変わり郷の下に三つくらいの里を置くよう（郷里制）になっている。しかし、天平のころには里は廢止されて、郷はその後長く行政の最小単位になっている。

里長は「戸口を按へ検め農桑を課せ殖え、非違を禁め窮め、賦役を催、驅ふことを掌れ」とあり、里内の戸口の調査、農桑の奨励、犯罪の取締まり、賦役の催促、徴税等の仕事定められ、社会発展への積極的姿勢もあった。

大化の改新直後この地方にどのような里・郷が置かれたかは不明で

高山寺本		流布本	
伊那郡	伊那郡	伊那郡	伊那郡
仲野・度毛野	仲野・度毛野	仲野・度毛野	仲野・度毛野
小村・平元良	小村・平元良	小村・平元良	小村・平元良
麻績・平美	麻績・平美	麻績・平美	麻績・平美
福地・有久知	福地・有久知	福地・有久知	福地・有久知
諏訪郡	諏訪郡	諏訪郡	諏訪郡
土武	土武	土武	土武
佐補	佐補	佐補	佐補
美和	美和	美和	美和
桑原	桑原	桑原	桑原
山鹿・也末加	山鹿・也末加	山鹿・也末加	山鹿・也末加
返良	返良	返良	返良

⑤神戸「大日本史前記」に「今神戸村桑原東南ニアリ、蓋し諏訪神戸也」とあり、現在の中州、永明、宮川等の一帯で、諏訪大神の旧神封の郷であろうとされる。

⑥山鹿「現在の北山、米沢、湖東、豊平、泉野、玉川、原村等、茅野東方の八ヶ岳山麓一帯である。」

⑦三良「テラと読み、現在の伊那市三良を中心とした地域で、南限は三峰川で福智郷に接し、西は美和郷に接するところまで、東は高遠、さらにその奥までが含まれていたかも知れないとされている。」

4 伊那郡と諏訪郡の郡境

『倭名類聚』に記された郷の位置からみると、現在上伊那郡に含まれている佐補、美和、三良の三郷が諏訪郡に属し、伊那郡の北限の郷は小村郷と福智郷になっている。これからみると、諏訪郡と伊那郡の境は天竜川西側では小沢川、東側では三峰川が境になっていると考えられる。

また、諏訪明神の伊那回り巡神事の行なわれた地点は、「諏訪明神絵詞」(「権祝文書」(文明二年)、「守矢文書」等によって知ることができ、その内容は若干違いがあるが、外奥巡経路としては、平出→小河内→久保→井→御園(二か所)→伊那郡→(大島)→真木→(福島)→(手島)(三か所)→前ふち→沢底という順序になっている。(一)内は諏訪明神絵詞にはない)この巡回地点は佐補、美和、三良の三郷のうちに入っている。さきの郷名からみた諏訪郡の範囲と一致しており、小沢川および三峰川以南の地には回っていない。これも諏訪郡が小沢川および三峰川以北であったと考える有力な根拠になる。

ところが、諏訪明神絵詞縁起中に、「將軍坂上田村元延暦二十年辛巳二月勅を奉じ玉わりて追討の為山道へて奥州に下向(中略)信州に至り給いし時、伊那郡と諏訪郡との境に大田切と云う所にて、先

騎の兵客参会す」とあり、守矢文書「神長官諏訪郡境」にも、この縁起中の伝承によって、「諏訪郡の境方々相違について往古の模範御尋ね候条一々書き上げ進上候、伊那郡の境大田切に候、疑い無き証文神祕繪縁起の内より調査繰り出候」として、郡境を大田切としている。このように諏訪明神絵詞縁起をもとにして、伊那郡と諏訪郡の郡境を大田切にしているが、諏訪縁起は、諏訪明神の由緒を誇張するための神話的伝承と考えられ、証拠としては採用し難い面がある。したがって、古代における諏訪郡と伊那郡の境は三峰川、小沢川の線と考えるのが妥当であろう。

その後の郡境については、中央集権の体制が崩れ、封建社会になって豪族が各地に領土を持ち割拠するようになると、律令制社会の行政区画は、実際の政治経済の区域と合わなくなり、伊那郡、諏訪郡の郡境も年を経るにつれて曖昧となり、諏訪下社宝徳三年(一四五二)の文書には「伊那郡三良郷」とあり、このとき三良郷は伊那郡になっており、伊那郡はしだいに伊那盆地全体に広がったと考えられる。

(三) 班田収授体制

「国界の山海林野池田を割き、以て己が財と為し、争い戦う」と已まず、或は数万頃(ばん)の田を兼ね併せ、或は全く容針(さす)少地(せうち)も無し」とある。これは大化元年の詔の一部である。

弥生時代は族長層による土地管掌が強力であったにしても、土地は耕作農民またはその共同体のものであったと考えられる。ところが、大和政権の有力氏族や地方の有力族長層らによって部民が設定され、班田・田荘が増加するにつれて土地の収奪が激しくなり、従来の生産者と耕地の旧慣が破られ、右の詔のように有力者は数万頃(ばん)当時の土地の単位(百畝)の土地を持ち、零細な農民は針をさす程の土地もないという状態になってしまった。

そこで、大化二年の改新の詔では「其の一に曰く、昔在の天皇等の立てたまえる子代の民、処々の屯倉及び別に臣・連・伴造・国造・村首の保てる部曲の民、処々の田荘をやめよ、仍りて食封を大夫より以上に賜ふこと並有らむ」として、朝廷や有力氏族の持つていた私地私民を国に納めさせて公地公民とし、その代償として食封と禄を給することにし、さらに、「其の三に曰く、初めて戸籍計帳、班田収授の法を造れ」として、班田収授を行なうことを命じている。

この班田収授は、有力氏族らの土地収奪に抗して、土地を公地として公民に分割して用役させることであって、これを行なうためには、まず、確實な人口を把握する必要がある、戸籍の作製が必要であった。そのため、六七〇年（天智天皇代）に最初の大規模な戸籍編成事業が行なわれた。この時に作製された戸籍が「庚午年籍」といわれる戸籍で、以後たびたび戸籍の編成が行なわれている。

養老令によると、国郡司によって各戸主の提出した戸籍を基にして六年ごとに戸籍を作り、三通のうち一通は国府にとどめ、二通は中央政府の中務・民部両省に保管することになっている。

この戸籍に基づいて公田を班給するのであるが、養老令（七一八）の田令によると、次のように班給する定めであった。

六歳以上の良民の男子

一人当たり二反歩

六歳以上の良民の女子

一人当たり三分の二

六歳以上の奴

一人当たり良民男子の三分の一

婢

一人当たり良民女子の三分の一

班給された田を口分田といひ、口分田は灌漑用水は公水（自然河川

に公功を加えて給水排水施設を加えたもの）を用い、用水の保全管理は官の管理下に置かれていた。他人への水田の売買、譲渡は禁じられていて、国家による土地公有という形である。

しかし、一度班給されると、受給者の死亡、出家得度、逃亡除帳等の特殊の場合（この場合、班田は班年に収公される）の外は、終身にわたって用益することができた。また、官の許可を得て賃租（小作に出すこと）することもでき、班給を受けた田主に田主権が生まれるなど、一面で私的な性格を持っていた。

宅地・園地については、田令の園地条に「地の多少によって均して給え、もし戸絶えなば公に還せ」とあるが、班給の規程についての明文がない。各戸に宅地や園地が給され一定数の桑、漆を植えること（上戸桑三百株、下戸百株以上）が定められているが、どの程度実行されたか明らかではない。給された宅地や園地は絶戸のほかに収公されることはなく、売買と譲渡が認められており、完全な私有地の性格を持ち、また、課税の対象外の土地であった。

律令制下における水田には、右の口分田の外に各種の水田があった。公田としての性格が強いもので不輸租田（免租田）には、神社寺院に給された神田・寺田、主要道に設置された駅の費用を弁ずる駅田・官田・勅旨田・左右馬寮田・健児田等があり、輸地子田（小作料を取って耕作させる田）に兼田（口分田に班給した余りの田）・出家得度田等があり、私的な性格の強いものとしては、輸租田に位田・功田・賜田・嬰田等があり、不輸租田に職分田があった。

班田収授制で特に注意すべきことは位田・職田・位封・職封である。改新政令の実行に当たり、旧豪族等に土地と隸属民を国に納めさせて公地公民の制としたが、その代償として新政権における高位と高官を与え、それに対する食封と禄が与えられた。この与え方は、位階の上位の者、上給官職についたものへの位田・職田及び位封・職封が非常に大きかった。例えば大宝令では正一位の人の位田は八〇町歩、位封は三〇〇戸（七〇六年に六〇〇戸に改正）であり、ほかに季禄とし

て、綿・絹等の現物支給があり、さらに質人（召使）一〇〇人が与えられており、太政大臣の官職についた者には職田四〇町歩、職封三〇〇〇戸、質人三〇〇人が与えられている。

これらは、私的性質を持ち、特に官職の世襲化傾向によって一層私有地としての性格を強め、墾田と共に荘園成立の大きな基礎になっていたのである。また、これらの有位者や官人等は多くの奴婢を抱えているのが通常であって、それらの私奴婢に対しても良民の三分の一ではあるが口分田が支給されており、その口分田は不輸租の取扱を受け、開墾の負担がなかったため奴婢所有者に対し優遇された形になっており、むしろ賤民制度の再編成が進む傾向さえもついていたといえる。

一般農民にとっては、班田制の実施によって一応の生活の基礎が得られたと考えられるが、良民の口分田に対しては田租がかかり、さらに大きな開墾の負担があつて、班田の耕作のみでは生活を支えることは困難であつたと思われる。公田・公利田・位田・職田等の賃借（小作）をすること、小作料は收穫高の二〇％をし、また、小規模ながら山野を開墾して畑作物を作り、さらに、山林原野河川等について「養老令雜令」に「山川裁決の利、公私これを共にせよ」とあり、何人も自由に用益すること、ができたので、大切な食糧資源の供給地であつたと考えられ、班田農民はそれらを利用することによってのみ生活が可能であつたのではないかと考えられる。

次に、班田収授の基礎の一つとして条里制という土地の区画整理が行なわれた。それは、土地を六町（三六〇歩）約六三四町間隔に縦横に区切り、縦を北から一条・二条と呼び横を東又は西から一里・二里とし、区切られた六町四方の一区画を里または坊と呼んだ。里はさらに各辺を六等分して三六区画に分ち、その一區画を坪とよび、一坪の

面積を一町歩、一町歩を一〇に分割して一〇反とするのである。

この条里制は全国的に広められたが、低平な地域に多く、かつての大和朝廷の屯倉や朝廷領のあつたところや国府の所在地周辺にその遺構が残っている。

上伊那では、宮田北部、表木の河原にその遺構と思われるものがあることが報告されており、手良（郷の坪・中坪等の地名）、富原などに若干形跡が認められる。上伊那誌歴史資料よりである。築輪遺跡付近も条里制が施行されたかも知れないが確証はなく、当村には条里制遺構は見えていない。したがって、班田収授は区画整理の行なわれないうちに実施されたのではないかと考えられる。

四 税制と農民の負担

班田を受けた公民は、租・庸・調・雑徭など各種の負担が義務づけられた。これは国家財政の基本となるものだけに、改新の詔にそれが詳細に示されていた。

1 租（たちから）

租は「たちから」といわれ、時代によって若干表現が異なっているが、その税の高さは次のようであった。

時期	面積	收穫される租額	現在升目
大化の屯倉例	古代 高麗尺六尺平方 方が一歩とし五 歩が一町	一〇〇束 三束	（六升〇九）
大化（六四七）の制	一反 三六〇歩（高麗尺五尺平方一歩）	七二束 二束二把（四升四六六）	
白雉三（六五二）	一反 二五〇歩（同右）	五〇束 一束五把（三升〇四五）	
慶雲三（七〇六）	一反 三六〇歩（和銅大尺六尺平方一歩）	五〇束 一束五把（三升〇四五）	
延喜式（九〇四）	一反 三六〇歩（同右）	五〇束	

中田 四〇束

下田 三〇束 一束五把 (三升〇四五)

下々田 一五束

注1 高麗尺一尺は和銅大尺(今の市尺)の一・二尺に当たり従って高麗尺六尺平方

一歩は今の一、四四坪に当たる。

2 一束当たり重量一斗米は五升と計算しており一升は現在の四合〇六に当たる。

当時の一反(三六〇歩)当たりの収量が、ほぼ現在の升目で一石であったから、そのうちから三升ほどの租は率で三%強であり、しかもこの租率はずっと変更なく、それほど重い税ではなかった。

租稲はそれぞれの国の倉庫に納められ、天平一十七年(七四五)よりは、それを正税、公廩稲、雑稲の三種に分けられた。正税はさらにこれを動用・不動用・春米に分け、動用は出挙用にまわしてその利息を費用に当て、不動用は水くその国に貯えて水旱荒凶に備え、春米は京に輸送した。公廩稲は国郡官衙及び官司の用に当て、雑稲は社寺・池溝・浮田等の諸費用に当てられたようである。信濃国の租稲額は次のようであった。

種類

弘仁式

延喜主税式

同上現在升目

(八二〇年ころ)

(九二七年)

正税

三〇万束

三五万束

(米七、一〇五石)

田租

三〇万束

三五万束

(米七、一〇五石)

雑稲

八万束

二二万五千束

(四五六七・五石)

計

六八万束

九二万五千束

(一八、七七七・五石)

2

調(みつぎ)

大化の改新の詔では田の調と、戸毎の調の制があった。

田調：田一町に胡ならば一丈(広き二尺半)、蔦(葛類、粗製絹)なら二丈(広き二尺半)、布(麻学などの布)なら四丈(広き二尺半)、郷土の出

せる所に従え。

戸調：一戸、質布(細い麻米の布)一丈二尺

調の副物(付加税のようなもの)塩と質(神饌物)郷土の出せる所に従え。

しかし、大宝令、養老令の賦役令では、調は男子の人頭税に改正された。課口は、正丁(二一六〇歳)次丁(六一六五歳)少丁または

中男(二七一〇歳)に分け、正丁一人の負担額は次のとおりで、次丁はその二分の一、中男は四分の一とされた。

正調：絹(八尺五寸)糸(八両)綿(一)布(二丈六尺)

雑物：蠶(三三斤)・魚鱗(五十斤)・沢蟹(二石二斗)・鴨(二石二斗)・煮塩(四斗)等、以上正調雑物のうち郷土の出せる所に従い何れか

一種(郷土で貢進したと思われる品のみ掲げた)

調副物：紫(三両)・茜(三両)・黄連(三斤)・熟麻(十兩十六粒)・黄蘗(七

斤)・木賊(六兩)・胡麻油(七勺)・麻子油(七勺)・荏油(二合)・猪

油(三合)・鰯(二合五勺)・漆(三勺)・山薑(二升)・橘(八升)・紙

(長二尺、巾一尺)・篋(二把)・蓆(七丁一襲)・苫(七丁一襲)・鹿

角(二頭)・鳥羽(二隻)・磁(二頭)・黄(二丁一襲)

(郷土で貢進したと思われる品のみ掲げた) (以上『市村成人全

集』より)

調は、庸と共に中央政府の費用に当てられたもので、毎年八月中旬

から始めて、信濃国は京までの日数が二二日を要する中国(中距離の

国)であるので、十一月末までに京の大蔵省に納入することに定めら

れていた。この輸送は諸国から貢調使によって送られたが、その費用

は民衆の負担であった。

3 庸(ちからしろ)

庸の本来の姿は、一年に一〇日の勞役(歳役という)の負担である

が、この代わりに布などを納めることが多くなった。

大化の改新詔：戸毎に庸布一丈五尺、庸米五斗。

大宝令：正丁庸布二丈六尺、次丁一丈三尺。中男と畿内百姓は免除された。
養老元年（七一七）：正丁庸布一丈四尺、二丁を以て反とし、三丁を以て
婦とした。

調と同様十一月三〇日まで中央政府に納めることになっており、運脚夫は
庸を出す戸に負担させられた。

4 雑徭

雑徭は、改新の詔ではなく淨御原令以後の創始といわれている。養
老の賦役令に「凡そ令条外の雑徭は人毎に均しく使え、惣べて六十日
を過ぎることを得ざれ」とあり、賦課の対象は成年男子と考えられて
いる。

雑徭は国・郡等地方における池堰・倉庫の修築、道路橋梁の修理等
の労役に従うもので、国司・郡司の指揮下に入って労役に服するが、
日数は年六〇日を限度とした。ところが、令条外の雑徭とあるところ
から、令条内の雑徭は別であるとして六〇日を超えて雑徭に算り出さ
れる例があり、中には国司等の私的な労役に服せられることも稀でな
かった。このため、七五七年には雑徭日数を半減した。これは間もな
く旧にもどり、七九五年に再び半減、八三三年には、令条内外を問わ
ず雑徭日数は六〇日以内とし、その後雑徭日数を三〇日、二〇日と漸
減し、不足分は雇役で賄う方針を立てている。それにしても、国司に
よる勝手な雑徭の使役は後を絶たず、公民にとっては大きな負担であ
った。

5 その他の負担

軍団衛士 兵役は大宝令では成年男子四人につき一人、養老令の軍
防令では三人につき一人の割合で三年間徴兵され、隣接数郡の兵を以て
軍団（一〇〇〇人）を編成することになっている。信濃の軍団は筑摩
にあったことになっているが細部は不明である。

兵士は常に兵舎に居る必要はなく、全員を一〇班に分け一〇日ずつ
交替で上番し、武事の練習、倉庫、城郭の守備修理等に当たる。非番
のときは家に帰って家業に従事することが出来る定めであり、また、
雑徭は免除された。

しかし、服役期間のうち、一年は京に上り衛士となって守護の任に
当たり、また、東国の兵士から防人が選ばれ、九州太宰府に派遣さ
れ、西海要地の守備につかねばならなかった。防人は三か年で他と交
代する定めであったが、衛士も防人も交替が円滑には行なわれず、衛
士で京に数年も留まり、防人では九州に住み付かざるを得なかった人
も少なくなかったようである。途中で死に絶える人もあり、苦しく悲
しい勤めであった。左に防人の歌をかがけてそれをしのぶこととしよ
う。

から衣摺にとりつき泣く子らを
おきてぞ来ぬや母なしにして。

国造小原郡佐田舎人大島

『万葉集二十卷』

しかし、兵制もしだいに崩れ、七九二年に健甕郡が設けられ、辺境
要地の防衛は当土の兵士に委ねられ、軍団兵士の徴兵も行なわれな
くなった。

(四) 農村の生活

農民は、口分田による稲作を中心とした生活をしていたものと思わ
れるが、その状態はどうであったろうか。

鉄製農具はしだいに普及はしていたが、まだ鉄鉋や鉄材は朝廷の支
配下にあり、当時は官位を持った人に対する給与の一部として鉄鉋が
支給されているところを見ると、依然として貴重品であったことを示
している。支配階級による直接経営の農地や、徭役労働、官の行なう

土木事業等には充分な鉄製用具が使われたと考えられるが、一般農民は木製農具が普通であった。しかし、当時鉄製の鍬一丁が米三升で交換されており、有力な農民には鉄鍬を手に入れることはそれほど困難ではなかった。一部においては牛馬の利用も行なわれたと考えられている。

稲作技術では、直播方式から苗代に播種して本田へ移植する方式がしだいに増加した。早稲、中稲、晩稲という品種の分化が進み、気候の寒い地方や、用水の不足し勝ちな所などでは苗代―本田移植方式がかなり広まったと考えられる。これに伴って本田施肥としての刈敷の施用も可能となり、定植後の管理としての除草、種抜きなども行なわれるようになったと考えられる。種抜きは畝にも施されていた例がある。稈りの季節になると鳥獣の害を防ぐため見張りをしてはならないが、当時は引板と称する鳴子を鳴らして、鳥や猪を追いつつた。収穫は鉄鍬を使っている。南高根および大芝東遺跡の住居跡から刀子と共に鉄鍬が出土しており、一般に普及していたようである。鍬による収穫は根刈りと穂首刈りがある。どちらにするかによってその後の



図1-31 鉄製 鍬
(大芝東遺跡1号住居跡出土)

作業が異なってくる。根刈りならば藁は表を作ったり敷藁として利用できるが、後に脱穀と脱稈の二度の手間がかかる。穂刈りならば、そのまま木臼に入れて立坪で春くと一回で玄米になる。

当時田租は概で収納し、俵に詰めるのは五斗（現量二斗）詰めであった。出挙などは種用とする点もあり、穂首刈りのままの穀（穂）を用いていたようで、根刈り、穂首刈りの両方が行なわれたようである。

農民は口分田の耕作だけでは生活が困難で、田を借りて耕作する賃租が盛んに行なわれた。口分田は家の近くに班給されるのが原則であったが、実際にはかなり遠く離れた所に班給される場合も稀ではなかった。遠くても一か所にまとまって班給されれば、田舎や假處などに住まって耕作することもできたが、分散して班給された場合は外の農民に賃租（小作）に出すより仕方がなかった。このような形での賃租もあったが、一般には公田・粟田・位田・職田、あるいは郡司職田等多くの賃租に出す水田（地子田）があって、これらの田を農民は賃租したのである。地子（小作料）は普通収穫高の二割で、遠方の田主に對しては調庸と同様に布などで代納していたようである。

畑は、従来から持っていた所は班田制の下で、そのまま班給された形で私有地として利用ができ、さらに、時間をみつけては開墾して畑をふやした。しかし、始めのうち畑作はあまり積極的ではなかった。養老元年（七一七）、百姓が水稻耕作にばかり向かって陸田の利を知らない、成年男子一人当たり畑二反を開墾し、麦と粟を植えさせるよう国司に命じ、また、七二二年には晩稻、蕎麥、大麦、小麦の作付けを命じている。田令においては桑、漆等の植付けを義務づけているが、どの程度行なわれたかわからない。しかし、当地は水田遺跡が少なく、畑作農耕がかなり活発に行なわれたものと思われる。

大宝令に穀倉の定めがあり、粟を主として貯蔵することになってい

る。上々戸では粟二石、以下戸の等級に応じ粟（大耳、小耳、種の代物も認められる）を、附加税のような形で拠出することになっており、かなりの畑作が行なわれたことを考えさせ、織練作物については麻、苧、桑等が作られているが、調庸、交易雑物あるいは地子作物として、信濃国からは絹、麻は少なく、ほとんどが布であることから、桑は少なく、麻、苧等の栽培が多かったと思われる。

農民の負担については先に述べたが、調庸が非常に重税であった。調庸は男子にのみ課されるもので、運搬に便利な布などで納めているが、それを用意するのは主として女の役目であったと思われる。男は農事の合間、池溝や橋の築造と修理、その外雑多な労役に狩り出され（雑徭）てしまうので、土製の紡錘車を吊して糸を紡ぎ、それを織にかけて布に織るのは女の仕事である。正丁一人で調に二丈六尺（幅二尺四寸）、庸に一丈四尺、合わせて四丈の布となり、当時の政府はこれを織るのに三〇日の日数が必要であると計算している。もし、一戸に正丁二人、次丁一人があり調庸を布で納めるとすれば一〇丈の布が必要になりそれを織る延べ日数は七五日となる。このほかに麻を栽培し麻に仕上げる日数まで考えると、その税の重さが理解されよう。さらに、この調庸貢物の京への運搬は、交通不便な当時にとっては極めて難儀な仕事であったと考えられる。和銅五年（七二〇）の詔に、「諸国の役民郷に帰る日、食糧絶え乏しく、多く道路に備えて溝壑に転墮すること其類少なからず、国司等宜して勤めて撫養を加え、最りて死すべし、如し死する者有らば且く埋葬を加え、其の姓名を録して本属に報ぜよ」（『続日本紀』）とある。如何に悲惨な状態であったかがわかる。

このほか、正丁一人六〇日の雑徭の服役、兵役の義務はさらに大きな負担であるが、もう一つ、農民を苦しめたものに出挙がある。出挙

というのは、正税の一部や公廩稲（国庫の費用に当てる田租）などを、春先農民に貸し与え、秋の収穫時に五割の利息をつけて返させる制度で、本来は貧しい農民に、春先農耕に先立ち種籾や不足する食糧を貸せる救済手段であった。ところが、国庫の費用などはその利稲だけで賄い、余りは国司らの収入となり、五割の利息は国家財政にとっても極めて魅力あるものであったため、国司に出挙額を割り当てるなど、農民に出挙稲の借り受けを強制し、大きな農民収奪の方法に変わったのである。

次に、当時の農民の生活を村内の遺跡の面から見よう。村内には、律令制社会に当たる平安時代の遺物の出土地点が十数か所発見されている。まだほかにも遺跡が発見される可能性が多いが、これらの遺物の中心は土器及び陶器である。この時代は、前時代に引続き土師器及び須恵器が使われているが、別に新たな灰釉陶器と称される陶器が出



図1-32 神子集遺跡出土灰釉陶器

土するようになっている。須恵器にも高温で焼かれたものには、窯内で灰がふりかかり、それが融剤として素地中の長石や石英が融けて自然結が生じているものがあるが、灰釉陶器は意識して灰をかけ、あるいは灰と泥をかけて焼成したもので、硬質になり表面が密であり、灰色または灰青色で素朴であるが、土師器や須恵器に比し一段と進歩したものである。勿論専門的な工人によって特定な場所で作られたものを、交易によって移入して使用したものと考えられている。

農民の住居についてみると、南高根、大芝東、天伯、神子祭の各遺跡から、平安時代の住居跡が発見されている。神子祭遺跡の住居跡はかまど跡だけが判明しているのみで全容は不明であるが、南高根、大芝東の住居跡は一辺四〜五mの方形プランで、深さ一〇〜二〇cmの竪穴が作られている。天伯遺跡の土師器と須恵器を伴って出土した住居跡は六・三〜六・四mの方形プランの竪穴であった。柱穴は何れも四



図1-33 平安時代の住居跡（南高根遺跡1号住居跡）

か所で掘立柱四本を立てて屋根を葺いたものと考えられている。屋根の形状は不明であるが、山上億良の貧窮問答に、農民の家を伏座の曲座と表現しており、古墳時代と余り変わってはいなかったものと想像される。

一辺の壁の中央付近に石組粘土式の煙道を持ったかまどが作られている。古墳時代の石組粘土式のかまどとはほぼ同じ様式をとっている。床は土のたたきで、藁などを敷いて寝たものと思われる。ただし、屋根は地面まで延ばさず、藁や木の皮等で壁を作り、採光のための窓もあったことも考えられ、また、地方でも小豪族や有力農民の中には地上式で板床張りの住居も存在したと考えられるが、一般農民は、多少の進歩は認められるが極めて粗末な竪穴住居であった。既に七世紀には、飛鳥寺、四天王寺、法隆寺等の大伽藍が建造され、八世紀中葉には東大寺や各国ごとに国分寺が造られていることを考えると、それ



図1-34 平安時代かまど跡（村外一上伊部遺跡）

より二・三世紀後の農民の一般住居が、まだ極めて粗末な竪穴住居であったことは、支配階級の権力と富の大きさ、農民階級の力の弱さ、貧しさとの間に、計り知れない距離があったことに驚かされるのである。

いかに、当時の支配階級の収奪がはげしく、農民が貧しかったかを知らうと、有名な山上憶良の「貧窮問答歌」がある。その一部を掲げておこう。

天地は広しといえど吾がためは狭くやなりぬる。日月は明かしといえど吾がためは照りやたまわぬ。人みなか吾のみやしかる。わくらばに人とはあるを人なみに吾もなれるを。絲もなき布衣の海松のごと、わわけさがれる襦袢のみ。肩にうかけ伏座の曲座の内に直土に露解き敷きて、父母は枕の方に。妻子どもは足の方に圍みいて寝いさまよい、かまどにはけぶりふき立てず。こしきには蜘蛛の巣かきて、飯炊ぐことも忘れて、ぬえどりののどよびおるにいとくきて、短かきものを繰切ると云えるがごとく、しもと取る里長が声は寝屋処まで来立ち呼ばいぬ、かくばかり術なきものか世の中の道。

〔万葉集〕

律令体制における苛酷な収奪に抗して、その課税をのがれるため農民は浮浪者となり、あるいは逃亡して有力貴族や社寺などの「庄」などに生活のよすがを求めるものが多かった。養元元年（七一五）、政府は早くも、「天下の百姓多く本貫に背き他郷に流石し課税を規（こ）え避す、其の浮浪逗留して三月以上を経た者は即ち土断（どつたん）して、調庸を輸せしむること当国に随え」として、調庸を課する準公民として捕捉しようとするが、やがて、これが荘園不入権獲得への誘因となっていく。また、延喜時代（一〇世紀初）の戸籍では、逃亡者が多いばかりでなく、女や子供ばかりが多い戸籍が目につくといわれており、また、出挙の返済は、その借主が死亡した場合には返済を免れ

る制度になっていたために、出挙の借主名義の者に年寄が多いといわれており、農民の抵抗の姿を窺みとることができた。

荘田農民の間には最初から階層があったわけであるが律令制による収奪は階層分解を一層進め、少数の富裕の農民と多数の零落農民を生じさせ、富裕な農民は墾田法をよりどころとして口分田以外の耕地を占有し、零落した農民の労働力を収奪するという、農村内部の収奪も進んできており、次の時代への動きがしだいに強くなっていたようである。

内 交通制度の発達（東山道）

大化の改新の際に「關塞・斥候・防人・驛馬・伝馬を置き、及び鈴契を造る」とあり、諸道にうまや（驛馬）を設けて驛ごとに驛所を置き、郡家に伝馬を置き、官命によって旅行するものは認許の印として給を渡すことを定めている。この驛馬伝馬の制が実際に使用されたのは大寶令以後のようである。

東山道は「あづまのなかのやまみち」と云われ、近江の国から美濃・飛騨・信濃・上野・下野を経て、陸奥・出羽に至る道で、延喜式によると主要官道を大路、中路、小路に分けていたが、東山道は東海道と共に中路に数えられている。

東山道中、伊那郡から信濃国府に至る間には次のような驛が置かれ、驛馬が準備されていた。

坂本（美濃中津川）—河知（河内郡）—青良（下伊那郡）—賢能（上伊那郡）
 （驛馬三〇疋） （三〇疋） （一〇疋） （一〇疋）
 宮田（伊那郡）—深沢（上伊那郡）—覺志（松本市）—國府
 （伊那郡） （伊那郡） （伊那郡） （伊那郡）
 （二〇疋） （二〇疋） （二〇疋） （二〇疋）

驛は三〇里（約一六〇）ごとに作られ、人馬の継立、宿と食を供給す

る所で、そこには駅戸が付属し、駅戸は駅子を出した。駅子は交通労働者で一駅一二三〇人で、庸を免除された。駅馬は中路では一駅一〇匹で、特殊な駅には三〇匹が置かれた。さらに、駅には駅田が中路で一駅三町歩ほどが給され、それを駅戸が耕作し、その利権で駅の費用を賄う仕組みであった。

伝馬は各郡家（郡庁）におかれ、各郡家五匹であった。官の使いで駅を利用する人を駅使といい、駅使にはその印として駅鈴が渡され、それを示して駅制を利用したが、一般の私人の旅行は駅家や駅馬を利用することはできなかった。しかし、官道の往来は自由であって、調庸物の運脚夫、兵士の中の衛士や防人の往来、商用や訴訟用件等往来はかなり多かったようである。信濃より京までの所要日数は政府の計算では、上りは調庸等の貢物を持っているので二一日、下りは空身であるから一〇日であるとしている。

行路の途中で行き倒れる者も多く、旅人の難儀をやわらげるため、道端に果物のなる木を植え、一里塚や掘井を作ることも行なわれたようである。

さて、本村内もこの官道である東山道が通っていたわけであるが、どこを通っていたか証拠となるものがほとんどなく、正確な道筋はよくわからない。神子榮道郷には平安時代の住居跡一戸が確認され、他に数戸存在した報告がされており、この道跡付近を東山道が通ったのではないかと『発掘報告書』とされているが推測の域を出ていないし、北の深沢駅についても諸説があつてまだ定説がないが、今まで下古田付近が有力視されており、『上伊那誌』もこの説をとっている。近年、榮登巳夫は、大出地区の地名調査の結果と、中道・堂地道跡の発掘調査結果に基づいて、東山道の深沢駅の地としては、現大出地跡段丘上を中心とした一帯が最も条件が整った所である（『伊那路』）。

第二七巻第三号としており、傾聴に値する説と思われる。

律令制下では東山道も東海道も共に京から蝦夷地への通路であつて、陸奥・出羽、初期には武蔵も東山道に属していたことから、東山道の方が主要街道とみられていたようであり、東海道が東山道をしのぐようになったのは征夷の重要性が減じた平安中期以降であるといわれている。

したがって、平安時代初頭、坂上田村麻呂が蝦夷征討のために東北に向かった道は東山道であつたと考えられる。神子榮道郷西方、春日街道沿いに御射山神社跡を示す石碑が建てられており、その碑陰に次のようにある。

御射山社奉表之碑馬に在り。原大阿四己丑の歲坂上田村丸國勅征して本社を建つ。後四百五十二年を經文應五年庚申年再造す。以下略

おそらく、坂上田村麻呂が東征の途次、ここを通ったとき、建御名方の狩の地とされるゆかりの地に、勸願によって御射山神社を創建されたものと思われ、平安時代を通じて、道行く人に御射山社が望まれたと思われる。

このような駅制も平安中期ごろまではよく栄えたが、その後は駅制利用者の増加による駅戸の過重負担となり、国郡司の維持管理の怠慢もあつてしだいに衰微した。

三 莊園制の成立発展と武士の発生

(一) 律令制の衰微

政府は養老七年（七三二）「頃者百姓漸く多くして田地窄狭なり、望み請うらくは天下に納め課せて田疇を開闢かしめん、其の新たに溝池を造り開墾を営む者有らば、多少を限らず給して三世に伝へしめん、若し旧溝池を造らば其の一身に給わん」と（『終日本紀』）という三世一身

の法を公布した。しかし、この開墾奨励政策はあまり効果があがらず、天平一五年(七四三)に墾田永世私財法が公布された。それは、三世一身の法では期限がくると開墾した土地が公地となり田租を徴収されるようになるので、農民が意欲水田が再び荒地になってしまつて、あまり効果が上らないというので、今後は三世一身を論ぜず、永世私財として認めようという開墾奨励策であった。これは、口分田の不足を緩和する目的からはずれたものであり、土地国(公)有の原則を根底から突き崩すものであって、律令体制を大きく変容させる基になった。

班田制は六年ごとに戸籍を作り、死亡した者、六歳以上になつた者などに対して口分田の取授を行なう定めであつた。ところが、班田の不足と事務の繁雑などから、延暦二〇年(八〇二)には、畿内の班田を二年一班に変更し、元慶五年(八八二)にも畿内の班田取授が行なわれていたが、それは規定どおりの班給ではなく、男には一人一反一八〇歩、女には班給なしという状態になつてしまひ、これを最後に班給は全く行なわれなくなつてしまつた。地方については多く国司の処理に任されるようになっていたが、班給はほとんど行なわれなかつたと考えられる。このように班田取授が行なわれなくなつてくると、それまでに班給された公田は世襲的の用益地になつてしまふ。

戸籍の編成も、農民の浮浪逃亡が慢性化し、班田制の緩みと共にしだいにすたれ、延喜の年代(九〇一―一二三)に至つても戸籍は作られたが、記載内容に虚偽が多く、戸籍としての実態が全く失われてしまつたといわれている。

このような状態であるから、上層貴族は政府の給与のみでは不安を感じて他の収益確保に狂奔し、荘園の設置やその獲得の方向へと向かつた。中級の貴族は諸官衙の縮小、給付の不安定に対処するために

「田舎稼ぎ」と称された国衙赴任の道を選び、地方に赴任してからは自己の利益追求に明け暮れし、かつての政府目からが国郡司を通じて農業を指導奨励するという好ましい姿はなくなり、出先機関は徴税吏に化したばかりか、営田の経営、不当な雑徭の駆使など荒稼ぎの場となり、律令体制の本質は完全に空洞化してしまつたのである。

(二) 荘園の成立と発展

大化の改新の際も、寺社の所有していた土地はそのまま寺田・神田として、収公されることなく引続き所有が認められており、屯倉や田荘も収公されず私有のまま残されていて、それがそのまま位田、位封等として給された所が多いといわれている。これらは、土地公有制と矛盾するものを多く持つており、それらが荘園として変容する素地を持つていた。

さらに、荘園の成立発展を促したものは政府の墾田政策であつた。特に墾田永世私財法が、位階等による制限はあつたが、荘園成立への本流を作つた。

1 荘園制の概要

寺社や中央貴族、あるいは地方豪族などによって、八世紀後半から積極的に開墾が進められ、また、皇室自身も勅買田の名において墾田を大量に確保している。これらの墾田を造るに当たっては、そこに事務所や収獲物を貯蔵する建物などを建てた。これらの建物は荘所あるいは莊家などと呼ばれ、荘所、莊家と墾田と結びついたものを荘園と呼ぶようになった。このような墾田を中心とした荘園が自墾地系荘園と呼ばれ、初期荘園の姿であつた。

これらの墾田の開墾や耕作に従事したのは主として、その周辺にいた班田農民であつて、彼等は口分田の耕作だけでは充分でないので、積極的に開墾や開墾地の耕作(賃世)を引き受けた。この賃借した人

を著作人と称し、後の公田の荘園化への道を開く糸口になっている。ほかに寺社や貴族の所有した奴婢や、浮浪逃亡をした口分田百姓（公民）も開墾に従い荘民としてそこに土着したものが多くしだいに荘園の主要な労働力となった。

荘園の開発者である荘園領主は、荘園を管理するために現地に荘官をおいた。荘官には中央貴族や寺社から現地に派遣されたものと、在地の豪族の中から任命されたものがあるが、時代が下るにつれて後者の荘官が多くなっている。

寺田、神田等を基盤とした自墾地系荘園は、田租を免ぜられる不輸租田となったが、一般の墾田は田租を納める義務を負う輸租田となった。そこで、中央の貴族などはいろいろの口実をもうけ、政府内の地位や権力を利用して免租の特権を獲得することに努めた。この不輸租の申請をして政府がこれを認めれば、太政官あるいは民部省から官省符が与えられる。その荘園を官省符荘と呼んだ。これに対して地方豪族などは、国司と結託して国司からの免租の証をとりつけた。これを国免荘と呼んでいる。不輸の特権を持った荘園は徴税のための検田使や徴税使の入荘を拒否できるわけであるが、不輸租を持った後に開墾して田ができれば、不輸租の荘園内でもそれは輸租田となるわけであり、また、荘園整理が強行されるようになると特権を無視して検田使が入荘する傾向が強くなってきた。そこで、荘園領主は、荘園内に検田使などの国使の立ち入ることのないような特権を求めて画策し、中央有力貴族や有力寺社等は、その政治的地位や神仏の権威を利用してしだいに不入の特権を認めさせるに至ったのである。不入権は初め検田使等の不入を意味したが、その意味がしだいに拡大されて政府の警察権まで拒否する権利に発展し、遂に不輸不入権は、国家の徴税権および警察権から独立した存在になることとなり、荘園領主による土地

と荘民の全面的な支配体制を確立してゆくことになった。

一〇世紀初頭、最初の荘園整理が行われたが、このころから中下級貴族は自己の荘園を国司の攻撃から守り、さらには不輸不入の権利を得ることを考え、有力寺社や貴族に荘園を寄進した。自からは荘官として荘園の事実上の支配権を留保しながら、荘園から上がる収益の一部を差し出すことによって有力寺社や貴族を領主と仰ぎ、その保護を受けようとするのである。このような荘園を寄進地系荘園と呼んでいる。院政時代（一〇八六）に入ると、在地領主層の寄進が多くなってくる。この場合中央有力貴族との関係を持たない在地領主層は、受領（国司）層にこれを寄進し、寄進を受けて領家となった受領層はさらに院や有力貴族に寄進してそれを本家と仰ぐことになり、本家―領家―受領―所・下司（荘官）という重層構造が盛んに生まれてきたのである。このようにして、荘園はしだいに全国に広まり、荘園制がしだいに支配的な制度になってきたのである。

こうして、荘園の動きは社会の展開の中心に据えられ一五―一六世紀ごろまで存続するのである。しかし、その中に発生した武士階級の動きによって荘園はしだいに変質し、特に南北朝の対立、全国的内乱の過程において土地の一元支配が進み、守護領国制の成立によって大きな転換を遂げたのである。

2 郷土における荘園

荘園は畿内地方に早く成立し、しだいに全国に広まっているが、平安時代末期になると伊那地方にも多くの荘園が成立している。『信濃勤皇史記』（信濃教育会）によって伊那郡および諏訪郡の荘園を表示すると次のようである。

本村は、次表の荘園のうち藤原家に含まれており、古代末から中世にかけてその領主、荘官の支配下にあったと考えられるが、内容につ

いては次第で述べることにする。

本村近くの莊園や牧等についてみると、前掲の表のうち黒河内藤沢は、上伊那東部の入野谷地方と藤沢洞であって、『吾妻鏡』文治二年の「乃買未済の庄々注文」の中に、庄号はないが調査したところ新たに諏訪上下社領として国衙の進止に従わない所であるとあり、社寺領になっている。しかし、これは諏訪社が下地を管掌したもので、本所は諏訪南宮上下社領と同様八条院領ではなかったか、と考えられている。

名子・赤須・小出二古郷等が春近領となっていたが、春近領といわれるのは南北信にまたがり、多くの郷村に散在するばかりでなく、美濃国や越前の国等にもあり、その性格について諸説があつて一致していない。それは、春近領は皇室御領であるとするもの、国衙領すなわち、公田であるとするもの、春近という人の所領（荘園）であるとするものなどである。近年小林計一郎は、国司検注等の資料に基づいて春近領は国衙領であるとしており、春近領は国衙領であるとする説が

注・春近領は国衙領と考えられるが『信濃縣史』に従ってここに入れておく

郡名	伊那	諏訪
皇室御領	○伊賀良庄 ○藤沢寺領 ○八条院御領 ○伴野庄 ○上西院御領	○諏訪南宮上下社 ○八条院領
社寺領	○黒河内・藤沢 ○諏訪上・下社領 ○江籠連山庄 ○鶴岡八幡領 ○伊賀庄 ○妙香院領・南禅寺領	
諸家領	○郡戸庄 ○近衛家領 ○藤原庄 ○近衛家領 ○名子郷の内春近領 ○赤須郷の内春近領 ○小出二古郷春近領	
左馬寮領(牧)	○笠原御牧 ○宮所 諏訪上社領 ○平井三 同右 ○立野 諏訪下社領	○岡谷 諏訪下社領 ○大藪牧 ○塩原
本家領家未詳	○大河原鹿塩 ○中沢郷 ○大島郷 ○宮田郷 ○飯島郷 ○中越郷 ○御園郷 ○福知郷 ○甲斐沼郷	

有力である。

牧については、文明朝の大宝元年(七〇二)に既牧令が制定され、諸国に牧地を定めて牛馬の放牧をすることを定めており、奈良時代から牧がつくられたことがわかるが、信濃国では「延喜式」(九〇二・二七)に牧があらわれてくる。

延喜式の牧の種類には御牧・諸国牧・近郡牧の三種があり、御牧といふのは、左右馬寮の直轄で甲斐・信濃・武蔵・上野の四か国におかれた。信濃の牧は全部御牧でしかも左馬寮管轄になっており、次の一六牧が設置された。

山鹿牧・塩原牧・岡谷牧・宮所牧・権原牧・大野牧・平井三牧・笠原牧・高井牧・新治牧・大藪牧・猪苗牧・藤原牧・長倉牧・望月牧

延喜式ではこの信濃一六牧で、年々買馬八〇匹を買進することを定めており、そのうち望月牧(南佐久郡南牧村)で二〇匹、他の一五牧で六〇匹となっている。望月牧は信濃の代表的な牧であるばかりでなく、日本でも最大な牧であった。前掲の『吾妻鏡』の文治二年の条に

は信濃國の牧を二八牧あげている。延喜式の牧のうち三牧が消え、新たに一五牧が加わった形になっているが、おそらく平安時代末期の武士の勃興によって馬に対する需要が増したことに由来するものと考えられる。

延喜式および吾妻鏡に記された牧のうち、この付近にある牧は次のようである。

笠原牧（伊那市美濃笠原一六道原付近）

官所牧（辰野町北部官所付近）

山鹿牧（諏訪郡八ヶ岳西麓付近）

萩倉牧（下諏訪萩倉付近）

平井口牧（辰野町平井口付近）

辰野牧（辰野町）

小野牧（辰野町小野から地民市武蔵地付近）

以上二牧吾妻鏡に記載された増加分

以上延喜式に記載の牧

「延喜式」の制では、信濃に二人、甲斐・上野に各一人の牧監、武蔵には別当をおいて管理させ、延暦十六年には信濃の牧監に公麻田六町歩を与えた記録があり、左馬寮水田は国内全部で二四七町歩余のうち信濃國に一八四町歩が設けられていたようである。これらは明らかに国領であることが理解される。ところが、笠原牧は万寿四年（一一二七）に關白藤原頼通が遣した笠原牧使の殺害事件が起き、その時殺害された牧使の護衛役の兵士の処分について記した文の中に「關白笠原牧使殺害事」、「宣旨信濃に給う可き事」などの語句があり、笠原牧が藤原頼通の所管であったことを推量させ、藤原氏が全国いたるところに莊園を所有し、官牧もまた藤原氏の領有となった（『信濃勤皇史』）とされている。

官所・平井口・岡谷の諸牧については、治承四年（一一八〇）武田信

義、一条忠頼が大田切の郷の城に平氏の党管冠者を討伐したとき、諏訪明神の神靈に感じ、官所・平井口の両郷を上社に、岡谷郷を下社に寄進したという話が『吾妻鏡』にあり、このときから、平田・官所の両牧は上社領に、岡谷牧は下社領になったことになる。寄進したということは、武田、一条氏がこの牧についてなんらかの権利を持っていたそれを寄進したことになる。武田、一条氏らが官牧であったこれらの牧の下地管掌の権利を獲得し、それを寄進したのではなからうか。

このようにして、官牧であった牧もしいに莊園化していたことを知ることができる。

④ 莊園制下の農村の姿

1 莊園内耕地の構成と経営形態

莊園制下においては農村はどう変わったのだろうか。この点について当地には全く資料が発見されていない。したがって他の地域の資料によってその概要を知り、それによって当地の姿を類推することにする。

莊園が作り出される過程において、その開墾や耕作に付近の班田農民が寄作人（預作）となったことは既にみたが、寄作人は農業経営の専門家である場合が多く、「田堵」とか「力田の輩」と呼ばれ、この田堵は元来公領に出現したかなりの自己保有地を持った地主であった。莊園領主は莊園の大部分をこれらの田堵に賃租に出す、いわゆる請作体制をとった。この請作人（田堵）はしだいに請作権を強化し、遂には占有権を領主に認めさせるようになり、一一世紀ころから、その請作地に自分の名をつけ、自分がその名主となる、名田（名主）名主体制がつくられるようになった。こうして、莊園内の耕地は、大きく分けて佃（？）と莊官らに対する給田及び名（？）とに分けられるようになり、それぞ

れに異なった農業経営形態が生まれるようになった。

佃 佃は荘園領主の直営地であり、領主に隷属する下人等の労働力や、荘民の夫役によって耕作される場合があったが、多くは種子、農料等を交付して名主に耕作させ、その収穫物の大部分を領主が取るという方式が多く、中には一定面積ずつ名主に分割して耕作させる場合もあった。佃の面積は時代によって異なるようであるが、荘園面積の五〜一〇%程度であったようである。

給田 給田は預所・下司等荘官に対する給田で、預所佃などとも言われ、その年貢・公事が荘官の収入となる土地であるが、在地者であるため直接耕作する者が多かった。土豪が土地を寄進して荘官となつたような場合は、給田以外にも多くの私有地を持っており、特に辺境の地においては荘官が実質上の領主であつて、自己の持っている下人や土居百姓の労力のほか、名主からの夫役によって経営され、残余の土地は独自に小作人に貸与した。荘官らの経営面積は二〜三町歩程度であつたようである。

名田 名田は名主の占有する土地で年貢・公事を納める土地である。名田は畿内及びその周辺では比較的小規模で一名主当たり一〜二町歩程度であり、名田は名主によって自作されたが、辺境の地方では広大な面積の名田が多く、その内部が分割され、それにつれて名主に所属する下人までも分割されている場合が多く、それが名主によって統一されるという形になっていた。さらに、その下に多くの在家と称する直接耕作をする百姓・下作人層を持っていたといわれている。古島敏雄『日本農業史』したがって、名田は名主の自作分と、百姓・下作人等の耕作する小作地とに分かれ、百姓・下作人は名主に對し年貢の他に加地子（小作料）を納めることになったのである。

2 農民の負担

荘園内における荘民の負担は、所当（年貢）と公事である、所当とは名田に課される年貢のことであり、その額は一反当たり平安末期ごろで平均三斗ぐらいで、しだいに重くなり、鎌倉時代では五〜六斗に達した場合もあったようであるが、全体として収穫物の三〇%程度であった。公事は、律令制下における庸調と同様に夫役を含み重課税であり、名主に對する人頭課税であった。畿内等の均等名ではそのまま名主に課税されたが、辺境の不均等名では名田の面積が等しくなるように名を組み合わせて番を作り、その番に課するという方法がとられた。

公事の内容は雑多な現物の納入と多種類の労働提供であり、現物納付品としては、田の副産物である藁や糠、日常の雑菜・漆・桑・麻・柿・農民の織る織物類・炭・薪等の日常生活の必要品の外に、節の行事の必要品、祭事の供物等多様多様であった。労働提供は佃の耕作労働、道路用水施設等の工事人夫、御門の警備、宿直、伝馬、京上夫等のほか、掃除、水くみ等の雑用にも使われた。領主の佃耕作等に使用する夫役は要用に從うとあつて、無制限であつたようである。これは名主に對する課税であるが、実際には名主は百姓や下作人等に割り付けて負担させたのである。

3 農耕技術

当地方の農地の開発は、私領主に任された形であつたと思われる。東大寺のような大領主では大工事を伴った開発も行なわれたが、一般には大工事は行なわれず、貯水池の築造、中小河川からの小取水施設の多設等の小規模工事や、用水の綿密な管理などによって収穫の安定を図るという方向に向かつていたといわれる。また、荘園の増大と共に、律令制下では自由の利用が認められていた林野の領主的支配が進み、荘園内の林野は、荘園の分割相続等の場合には、附屬地として分

制相親が行なわれるように成るなど利用に制約が生まれてきている。百姓・作人等の林野の利用は、農業用肥料、飼料等を採取することが、年貢公事を納めることに関係して認められるという状態になったといわれている（吉島敏雄『前掲書』）。

荘園内における耕作技術の発展は、名主経営においてみられる。鉄製農具は名主層に一般化し、家畜飼養も名主層に次第に増加し、先進地においては犁、馬肥等の畜力農具が名主層に普及したようである。したがって、佃耕作や名主の自作地等には牛馬や畜力農具が使われたと思われるが、当地方や一般百姓・作人等では大きな進歩はみられなかったと考えられている。

肥料は山野から柴草が採取され、それを焼いて青灰にして田に施すことが多く行なわれ、また、馬の「クソ」等が使われているが、それが厩肥であるかどうかはわからない。人糞尿は「肥桶」というような言葉が使われているところから、肥料として使われ始めたと考えられる。

住居については、名主層以上では床板張りの住居で、縁や部屋の仕事切りも生まれ、板戸などもついた家らしい形態になったが、一般下層民の住居は依然として、竪穴住居に近く、一間きりの住居で、まだ床はなく土間にむしろなど敷いてそこに起居するという、極めて粗末な状態であったと考えられている。

四 武士の発生

1 概説

律令体制が本来の建前をくずし、班田収授は一〇世紀初頭で行なわれなくなり、軍団の制度は七九二年に健甕の制に切り替えられたがしだいに有名無実となり、制度の乱れと共に治安も乱れてきた。このためか、国司が租税を取り立てるための威圧手段として、大宰府や関の

ある伊勢、美濃、岐阜の三国司にのみ許していた武器の保有を、一〇世紀には関東、山陰諸国のほか、甲斐・信濃・駿河等の国司にも許される状況になっていった。このような状況のもとでは、これと併行して発展していた荘園制の中で、治外法権的な荘園を守るためには、在地の領主層たちは武装せざるを得ない状況になっていった。

しかし、武装化の理由にはかなり複雑な要素が含まれていたようである。いま、初期の武士の行動をみて武士化のおもな理由をあげると、次のようなものであった。

- (1) 小領主化した名主や開発領主等、在地領主の利益を守ること。
- (2) 収奪だけにとどまる上級領主の支配に反抗すること。
- (3) 民政がすたれ、有名無実になつた國家機構にさからうこと。
- (4) 同輩からの攻撃と侵略を防ぐこと。

かなり粗雑な行動があり、盗賊まがいの行動も生まれているが、古代社会におけるしいたげられた中下級貴族階層の、社会改革への動きとして見ることはできる。

当時武士化した在地領主層は、次のような三つの階層に分けて考えることができる。

- (1) 田堵—名主的地主層
- (2) 開発領主的領主層（荘官的領主層）
- (3) 豪族領主的領主層（国司や郡司等の土着したもの及び其の一族）

田堵—名主層は、土地生産力に基礎を置く土着の勢力として、有力なものは大名田堵・大名主などと呼ばれているが、しだいに領主化する傾向を持ち、その過程において武力を蓄え、武士という特殊な階級に発展していった。

開発領主的領主層は、開発した私領を国司の干渉から守るために、これを権門勢力に寄進することによって、国司に代表される律令国家

の権力の干渉を排除する一応の保証は得たが、他の在地勢力やしつこい国衛の攻勢を防ぎ、配下の名主や百姓を押さえて支配を貫徹するには武士化する必要があったのである。この階層が一一世紀各地に発生した武士勢力（特に東国等の辺境の地に多い）の中核となったのである。彼らは、一族の首長が子弟を血縁的なつながりによって組織して同族的な結合を維持し、その同族的な組織の圧力で支配下の名主百姓を主従関係に組み入れて統制し、また、隷属下にある労働力であった下人や所従をも含めて、一個の戦闘団体を形成したのである。

このような自然発生的な小武士団は不断の闘争の反復のうちに、武士団相互間に主従関係が生まれ、有力な豪族の武士に支配統合されてゆくことになった。中央の権門豪族からのけものにされて地方へ下った国司やその一族、あるいは旧郡司出身の者たちは現地に土着し、そこで着々と勢力を扶植して地方豪族となっていたものが多いが、これらの地方豪族が小武士団をしだいに服属させ統一していったのである。その地方豪族がかつての名門であった場合、それは「貴種」として尊重され、武士団の頭首として発展してゆく傾向を強くもっていた。国司として地方諸国を歴任した清和源氏、桓武平氏一族はその典型であった。

こうして、早くも一〇世紀の三〇年代に平将門、藤原純友の乱（承平・天慶の乱）が起こり、一一世紀中葉には辺境の奥州に前九年の役、続いて後三年の役が起こるほどに武士社会が発展していったのである。

2 郷土における武士の発生

信濃における古い土着の豪族で、後に武士化したものは、諏訪地方を中心に勢力を張った諏訪上社大祝の神氏の一族と、小縣佐久地方に広まった滋野氏である。また国造・郡司系の金利氏の一族も各地に勢力を持って武士化している。

諏訪の神氏は、大祝職のものは武士化しない定めであったが、一族のものがしだいに各地に広がり武士化している。平安時代の末期には一族の親戚が上社領の一部である藤沢郷に居を構え、藤沢神次と名乗り、その子清親（次郎）は保元の乱（一一五六）には源義朝に属して戦い、後醍醐朝の旗主に入っている。また同じころ奥重が中沢の地に移り中沢神太と名乗り中沢氏の祖となっている。

滋野氏は信濃において諏訪の神氏に続く旧族であって、清和天皇の四世の孫、善国王が延喜五年（九〇五）、滋野朝臣の姓を賜ったとあり、その裔（ひろ）は一説に滋野氏は紀の国造であった天智天皇の裔であるといふが、海野（小黒）、赤津（小黒）、望月（佐久）に分かれ、それぞれ武士として活動し、海野幸親、赤津真直（神平）は共に保元の乱に源義朝に属して戦っている。

平安時代末期になると、源氏及び平氏の一族が各地に土着し、武士として活動するようになった。

源為公は、前九年の役、後三年の役（一〇八三・八七）に源頼義、義家に従って功を立て、伊那の地を賜って箕輪町小河内に居を構えた。その時期は一一世紀末であったと考えられる。為公は南信濃源氏の祖となり、片桐、中津、伊那、依田氏等に分派して各地に住み付き、源為公の主流は片桐に移っているが、その裔の片桐小八郎景重は保元平治の乱に義朝に属している。

北信地方には清和源氏の頼親流の依田氏、頼信流の村上、井上氏等が各地に広がり武士となって活動した。

平氏の系統では、仁科氏が安曇穂高地方に勢力を持ち、当地方では高遠に笠原平吾頼直、太田切には菅冠者があり、平家全盛時代にはかなりの勢力を持っていたものと考えられる。笠原平吾頼直は後醍醐朝に属しており、一時、高遠から箕輪地域にかけて支配していたらしい。

第二章 村の中世

第一節 武家政権の成立と伊那

一 露原庄と我が郷土

前章第二節三でみたように、平安時代末期の伊那郡や諏訪郡にも数多くの荘園や官牧が成立しており、我が郷土である南箕輪村から箕輪町にかけては近衛家が領有する「露原庄」が存在した。しかし、露原庄に関する史資料は極めて少なく、その概要さえ詳らかにない。そこで、わずかに残されている露原庄についての文献や資料を紹介しながら、武家政権成立前後の我が郷土を素描してみることとする。

露原庄に関する最も古い史料は、鎌倉幕府の公的な記録とされる『吾妻鏡』の文治二年（一一八六）三月一二日の条に記載されている「未済乃實備進督促目録」である。これは、源頼朝が直接支配していた国々（関東御分国）の中にあつた荘園や牧に対し、本家（荘園領主）に年貢の滞納分の完済を厳命したもので、年貢滞納の荘園や牧の名が羅列してある。その一部を次に掲げる。（原漢文）

三月十二日庚寅：（中略）又關東御知行國內乃實未済庄々注文之を下され今日到来下家司等召し催促加え給わらるべきの由云々。

注進 三國國庄々事下総・信濃・越後等々國々注文

合

下總国。庄名略

信濃国。庄名（前後を略し上伊那関係のみ記す）

題下

露原庄。黒河内藤氏。頼朝の由今頼朝に授けられた所。頼朝の由今頼朝に授けられた所。頼朝の由今頼朝に授けられた所。

左右馬寮領

笠原、官所、平井、岡谷、平野、小野、大塩、塩原、南内、北内、大野、大室

越後国。庄名略

右注進件ノ如シ

この目録には、露原庄をはじめ信濃国内で年貢滞納の荘園六一か所、牧二八か所の都合八九か所をも載せており、治承・寿永の源平争乱を経て武家政権が誕生する古代末から中世へ向かう過渡期における権門勢家の経済基盤崩壊の現実を如実に示すものでもある。

史料の中に「露原庄」とあるのは「露」の誤記であり、また、その肩書の「殿下」の注記は、当時の摂政関白であつた近衛基通に対する尊称をさし、露原庄が近衛家領であつたことを示している。近衛家は、露原北家の直系であり、露原道長や頼通を経て、平安末期には皇室をしのぐほどの所領を領有していた。露原庄は、その近衛家が直接管理した六〇か所ほどの荘園の一つである。近衛家にはその領有する荘園を類別して記した『近衛家所領目録』という資料が残されており、露原庄を次のように記録している。（原漢文）

庄々間事

〇中略

一 庄務本所進退所々

〇中略

露原庄 露小中略

〇中略

〇中略

庄々相承次第

一 堀河中宮領 露原庄は堀河中宮領に属する。堀河中宮領は堀河中宮領に属する。堀河中宮領は堀河中宮領に属する。

堀河中宮領 露原庄は堀河中宮領に属する。堀河中宮領は堀河中宮領に属する。堀河中宮領は堀河中宮領に属する。

後三河院史
小内無量寺
建立十箇月

所領鑑別ハ委ク延久二年十月六日進官日録ニ見ユ

「建長五年十月廿一日之ヲ書法ス」

享徳三年九月十四日 日本ヲ以テ之ヲ写サシメ丁

これによると、藤原庄の鑑別（成立）は延久二年（一〇七〇）以前と推測され、開発領主は未詳ながら、領家は姉小路中納言（藤原朝臣）、本所は藤子内親王（後三条天皇の第四皇子）であったことが明らかとなる。のち、寛治七年（一〇九三）藤子内親王は堀河天皇の中宮となり、その後、藤原庄の本所職は堀河中宮から法性寺殿（藤原忠道）を経て近衛家に相伝したものであり、史料によれば一か所あった堀河中宮領のうち藤原庄を含む五か所が近衛家に伝わったものである。

以上が文献に残された藤原庄であるが、その荘域を考える上で重要な手掛りともいべき資料がいくつか現地、箕輪地域に残されている。中でも箕輪町北小内河内の無量寺にある阿弥陀如来座像に記された二か所の墨書銘は殊に重要なものとされている。

平安時代末の造仏とされるこの仏像の胎内書部には、造仏時のものと考えられる三四名もの結縁者（寄進者）を記した墨書がある。その内訳は、藤原姓二二、源氏姓四、平氏姓二、僧名二、不明一、となっている。また、仏像の膝裏には、享徳四年（一四五五）の紀年とともに「信濃国伊那郡藤原庄小内河内無量寺」との墨書があつて、これは、この仏像が室町時代中期に修理されたものであるとされている。

つまるところ、この仏像の結縁者の中に多数の藤原姓が加わっていることは、藤原庄の殿下領としての存在をより鮮明に位置付けるものであろうし、また、藤原庄の成立と前後して無量寺の南丘陵上の上ノ平域に土着したとされる南信濃源氏の祖、源為公の一族の繁栄とも関わ

るのであろうか、源氏姓が次いで多数を占めている。こうした二つの墨書をめぐる考察によって、藤原庄の下地の管掌（在地領主）は源為公の一族があたり、小内河内こそは藤原庄の本郷（中心地）ではなかったか、とする積極的な見方もされてきている。

藤原庄に関わるその他の資料は、ずっと時代も下り續たる傍証とはいいがたいが、(1)天文二四年（一五五五）、辰野町羽場の手長明神棟札写「信濃国伊那郡宝喜原庄大井戸郷大手大明神」、(2)寛永一七年（一六四〇）、箕輪町長岡神社棟札「……信州伊那郡藤原庄長岡郷……」、(3)明暦二年（一六五六）、殿村八幡宮棟札「……愛信州伊那郡藤原庄箕輪郷社壇在り……」、(4)享和三年（一八〇三）、箕輪町三日町入会文書、「信濃国伊那郡藤原ノ莊箕輪領三日町村」などがあつて、藤原庄の消滅後もこの近在に長い間その名称が言い伝わってきたことを示しており、荘域を判断する材料の一つになろうかと思われる。こうしてみると、藤原庄は現在の箕輪町、南箕輪村、西箕輪、辰野町の羽場、北大出を含むあたりの地域であったかと推測され、武家政権の成立ころは近衛家を本所とおおきながら南信濃源氏の系譜をひく在地領主によつ



図 2-1 小内河内無量寺阿弥陀如来像

て支配され、少なくとも室町時代中ごろまでは実態はともあれ、莊園の名状をとどめていたのではなからうかと推測されている。

二 鎌倉時代の伊那

(一) 治承・寿永の争乱と伊那

「此の一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」(『平家物語』)とさえ評された平氏の全盛時代に、源氏諸族の中にあつて中央政界でその勢力を保持していたのは、平治の乱(一一五九)に中立の立場を貫いた摂津源氏の源頼政一族であつた。源頼政は平氏専横の政界に不満を抱き、しだいに後白河法皇の第二皇子で親王宣下もないまま不遇をかこつていた以仁王と接触を深めていった。頼政等は以仁王に勧められて、東海道、東山道、北陸道の諸国に散在していた源氏諸族に対し平氏追討の舉兵をうながす令旨を得た。この令旨は信濃の源氏へも伝えられた。

信濃国では木曾義仲が国内の源氏諸氏を率いて舉兵した。木曾義仲の舉兵を『吾妻鏡』の治承四年(一一八〇)九月七日の条は次のように伝えている。

(治承四年九月)

七日丙辰、源氏木曾冠者義仲主は番刀先生義賢二男なり。義賢、去る久

寿二年八月、武蔵國の大倉館に於いて鎌倉執事太義平ぬしのために討亡さる。時に義仲三歳の嬰兒たり。乳母の夫、中三棟守義遠これを懐にし、信濃国木曾へ遁れ、これを養育せしむ。成人の今、武略天性、平氏を征し家を興へすべきの由、存念あり。而して、前の武衛石橋に於いてすでに合戦を始められるの由、遠聞に達す。忽ち相加わり素意を顯わさんと欲す。爰に平家の方人笠原平五頼直という者あり。今日軍士を相具し木曾を襲ひ、木曾の方人村山七郎義直、并に栗田寺別当大法師範寛等、此事を聞き當国市原に相逢、勝負を決す。両方合戦半ばにして日すでに暮れる。然る

に義直の諸親類頗る離快す。飛脚を木曾の陣に遣わし事の由を告ぐ。仍て木曾、大軍を率いて来たり襲ひ到るの處、頼直その威勢を怖れ逃亡し、城四郎長茂に加わらんがために越後國に赴くと云々。

(『國史大系』『吾妻鏡』卷一「源漢文」)

史料の後段には、九月七日、義仲軍の村山義直と栗田寺の別当範寛とが平氏方の笠原頼直と「市原」で戦ったことが記されている。義仲の舉兵に関する文献史料はこの他ほとんど見当たらず、そのため、『吾妻鏡』のこの記事中の信濃武士や合戦地の比定をめぐって古くは江戸時代から諸説を生んできた。すなわち、この時期の義仲の主たる活動の本拠が上伊那北部を含む木曾、諏訪地域であり、『吾妻鏡』中の記事も伊那地方であるとする伊那説と、既にこの時期の義仲は小泉郡の依田城に拠っており、村山氏や栗田寺氏の勢力が長野市近辺でもあることから、むしろ『吾妻鏡』中の記事は北信であったとする説とに二分される。伊那説に従えば、笠原頼直は伊那市美穂笠原にあって、平安時代中期に成立した『延喜式』にも記載されている左馬寮支配の官牧「笠原牧」ゆかりの在地領主であるとし、合戦地市原は西筑輪地、あるいは下伊那郡高森町市田などにあたるとしている。この説は古くは、慶長年間(一五九六—一六一五)に成立したとされる『伊那武蔵根元記』や元文五年(一七四〇)に關盛胤が著した『伊那郡通知集』において主張されている。一方の北信説は、村山義直の本拠地が長野市と須坂市との市境になっている千曲川に架かる村山義直の両岸に広がる村山郷であること、栗田寺別当の本拠地が長野市の栗田寺周辺と考えられること等の傍証によって裏付けられており、江戸時代末に著わされた『箕輪記』(中村元恒著)や『板町落葉』(中村元記著)などにより考証されている。

しかし、いずれの説をとるにせよ、舉兵時の義仲軍の中核には諏訪

下社の金朝祝や上社大祝家の有力庶家である千野氏、及び辰野町樋口を本拠とする樋口次郎兼光がおり、殊に樋口兼光は義仲四天王の一人としてその後の合戦に大活躍していることから推測して、上伊那北部にあった在地小領主の多数が、この義仲率兵軍の中において重要な軍勢力をなしていたと考えようである。

市原の戦いの後の義仲軍の動静を伝える『吾妻鏡』『玉葉』『源平盛衰記』等によると、翌、義和元年（一一八二）六月、越後国の城長茂は信濃の平氏党であった笠原頼直らを支援して四万騎もの大軍を引率し北信濃に進攻、義仲軍三〇〇〇騎はこれを「筑摩河内河原」に迎撃、撃破し、引続き城軍を追って北陸道より京都を目ざすことになった。

ところで、鎌倉にあった源頼朝は、治承四年九月八日（義仲の市原の戦いの翌日）、男、北条時政を甲斐に派遣し、甲斐源氏の武田信義、一條忠頼父子に命じて信濃の平氏党を討つべく行軍を要請した。そして同日、武田、一條勢は直ちに信濃に向けて進発した。『吾妻鏡』は頼朝麾下の武田、一條勢の信濃国内における動静を次のように記している。

九月九日、国境を突破し諏訪上社付近まで軍を進めた武田、一條勢は、上社にほど遠くない庵沢の地に野営した。その夜、深更となつて一人の女性が一條忠頼の陣を訪れた。それは上社大祝兼光の妻であった。忠頼は訝しみながら自らの陣営に招き入れ、謁見したところ、「大祝兼光が源氏の戦勝祈願のために参籠して三日目になります。その今夜、兼光が不思議な夢を見ました。夢の中に橘の葉の紋のついた直垂を着し、兼光の馬に乗った一騎の武者が現われ、『我は源氏の味方である』と言ひ置いて西方をさして駆け去りました。兼光が申すには『これこそ諏訪大明神の示現、早速自ら参上すべきである』と言ひま

したが、とりあえず私を代理として言上につかわしました」と申し上げた。忠頼は諏訪大明神の神託であるとして大いに喜び、自から兼光の妻に野太刀一腰と腰巻一領を与えてこれに感謝の意を表わし、十日の早朝より一氣に杖突峠を越えて伊那に進攻し、太田切郷之域に拠つていた平氏党の菅冠者を攻撃する構えをみせたところ、菅冠者は諏訪大祝の神託のことを耳にすると戦わずして船に火を放ち自刃して果てた。太田切郷之域を難なく攻落した武田、一條勢は「根上河原」に陣をはり、あらためて諏訪大明神の神威に驚嘆し、とりあえず諏訪上下社に対し社領を寄進すべく相談した。祐筆に社領の寄進状を書かせたところ、上社領分、平出郷・宮所郷、下社領分、祐市（現在の辰野）とすべきなのに下社領分に岡仁谷郷（現在の岡谷）が何度書き直しても加え損じてしまった。不思議に思つて古老にたずねると岡仁谷という場所があることがわかった。上社二郷、下社二郷、均等に寄進すべきという神意であろうと岡仁谷も寄進し、一同ますます諏訪大明神に対する信仰心が厚くなった。このうち、平氏に心を寄せるその他の氏族もほとんど平定された。

（『国史大系』『吾妻鏡』一、意訳）

諏訪上社大祝家は、太田切郷之域の攻防をめぐる大祝兼光の神託によつて、源頼朝との間に強力な関係をつくったばかりか、神氏一統の結束力を強固なものにし、ひいてはその影響下にあった上伊那の在地領主たちへの支配力を強めるための重要な役割を果たしたものと考えられる。

しかし、武田、一條軍の信濃への進攻は、神氏一統にとって苦渋に満ちた選択をせざるものでもあった。既に頼朝、義仲の間には平氏討伐をめぐる深刻な主導権争いが表面化しつつあり、義仲を盟主とあおいでいた神氏一統は上社大祝家の有力なる庶家千野氏や下社大祝金刺氏等をこぞって義仲軍に派遣させていた。大祝兼光は国境を越えて

天皇三代の後胤である源満仲の弟、満快の曾孫にあたる源為公は、前九年の役・後三年の役の戦功によって従五位下信濃守に任ぜられ、任満ちたのち、そのまま路原庄小河内上ノ平に居館を構え土着したのを始まりとし、その後、多くの庶子家を伊那の各地に分立させて一族こそって繁栄したと記されている。この『尊卑分脈』による伊那源氏諸氏の略系譜は表2-11のようである。

この系譜には、幾つかの疑問点が指摘されている。最も重大な問題点とされているのは、『諏訪氏』及び『知久氏』が清和天皇流であるとして系譜中に記載されていることである。諏訪氏の系譜については『神氏系図』をはじめとして異本など数多くあり、系譜そのものの確定についてはにはわかに論じ難いが、少なくとも『神氏系図』の記載内容は無視できない内容であって、それをさしおいて源氏庶流として位置付けたのは、恐らく鎌倉幕府成立以降の武家社会において「源氏」「正系」の精神的支柱が確立してしまい、『尊卑分脈』が成立した室町時代には特に鎌倉幕府と関係の深かった諏訪氏をその精神的体系の枠内に押し込めざるを得ない環境ができていた結果であろうと考えられる。また、知久氏については、数多くの史料や遺物が諏訪氏の分流（庶系）であることを傍証しており、『尊卑分脈』の知久氏に関する系譜についても誤記かとされている。

しかし、こうした重大な疑問点を含みながらも、殊にその庶家が伊那地方各地に繁衍分拠し戦国時代末まで大きな在地勢力を保持していた系譜を明らかにしている。中でも、上伊那南部から下伊那北部に広大な領域をもち、多くの庶家を輩出させた片桐氏は最も大きな氏族といってもよいであろう。片桐氏は、下伊那郡松川町に居館を構え、三代目の為重は保元の乱の時には源為義方に属して従軍し（敗戦―自害）、為重の五番目の弟の景重は、保元、平治の乱に源義朝方について奮戦

する（『保元物語』、『平治物語』）など、武士団としての活躍も目ざましい。片桐氏は保元、平治の乱へのこうしたかかわりのため、平清盛によって本領を没収されて一時は勢力も衰えたが、治承・寿永の乱後、ほぼ二十数年ぶりに頼朝により旧領を安堵され、のち、岩間、飯島、名子、大島、赤須、前沢等の庶家を分立させ、それぞれ戦国期に至るまで、その勢力を保持した。

また、『信濃勳皇史攷』（市村成八著）によると、為公の二男為扶（伊那氏）の庶家にある泉氏は、大泉氏ではないかとしているが未詳である。

2 神氏一統

諏訪上社大祝家は、諏訪上社に奉仕する最高の神官家である。大祝は「現人神」であり、天皇家と同様に大祝職に就くことを「即位」と呼び称す神職でもあった。古代より諏訪社に対する人民の篤い信仰心と物質や労力提供による強大な経済力とによって、信濃国はもとより周辺諸国に広汎な影響力をもち、殊に鎌倉時代には將軍家や執権職にあった北条氏の厚い保護を得て、その勢力は全国へと飛躍的な伸張を遂げた。

神職としての大祝家が武家諏訪氏へと大転換をとげたのは、鎌倉幕府最大の内乱であった承久の乱（一二二二）を契機としてであった。

大祝家の規定「大祝、郡外不出」のため、大祝敦信（重光の孫）は幕府の動員令に従って嫡子信重や千野六郎らを出陣させ、尾張国大井渡や墨股の合戦で戦功をあげさせた。また自らは軍神の奉仕者として、日夜幕府軍の戦勝を祈願したため、乱後ますます尼符軍政子や執権北条義時らの覚えをめでたくした。承久の乱後、大祝敦信は大祝職を信重に譲ると自ら鎌倉に出て北条惣領家の家人（得宗被官）として泰時・朝時・時頼と得宗（執権）三代に仕えた。彼は出家して蓮仏入道盛重

と名のつて鎌倉諏訪氏の祖となり、武家諏訪氏繁栄の基をきづいた。この鎌倉諏訪氏一族は得宗被官の有力者の一人として幕末まで活躍し、元弘三年（一一三三）の鎌倉幕府滅亡時には、諏訪入道重性をはじめ一族ごとく新田義貞軍の前に壮烈な最期をたげていた。

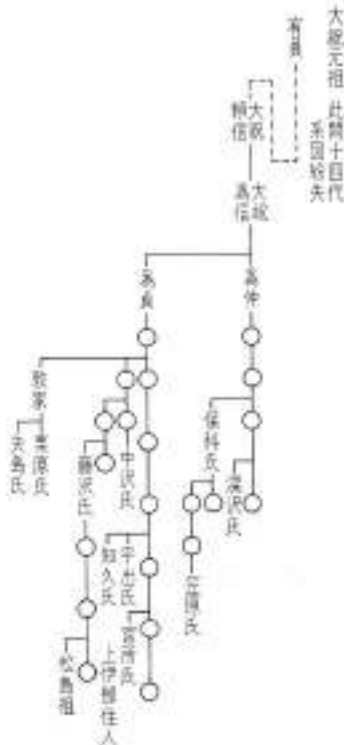
大祝敦信の末弟助忠は、湖南の地を分知されて小坂姓を名のった。助忠の曾孫にあたる小坂円忠は、鎌倉幕府の公事奉行として出仕し、幕府滅亡後はその能吏ぶりを買われて建武中興政府に仕え、次いで室町幕府にも右筆方として登用され、將軍足利尊氏や夢窓国師から厚い信任を得て天竜寺造宮奉行の一人としても活躍している。

この小坂円忠が延文元年（一一五五）『諏訪大明神御詞』を著わしている。この御詞の冒頭、上社大祝家の始祖とされる有員親王が上社祭祀権を継承する際の経緯が次のように記されている。

「祝ハ神明ノ重跡ノ初メ、御衣ヲ八歳ノ童男ニヌギキセ給ウテ、大祝ト称シ、我ニ於テ體ナシ、祝ヲ以テ體トス」ト神勅アリケリ。是則御衣祝有員、神氏ノ始祖ナリ、家督相次ケ、今ニ其職ヲカタシケナクス

諏訪上社大祝の始祖有員は、明神を奉じて諏訪の地に入り、先住の

表2-2 上伊那地方における神氏分派系図（年代不詳系統を示すのみ）



支配者渡矢氏（守矢氏）一族を従えて諏訪の地を統括し、守屋山麓に社壇を設けて諏訪社とした。御詞によれば、有員は八歳の童子であった。明神は、「私には体がない。したがって御衣を着た大祝をもって明神とせよ」と神勅を下したというのである。すなわち、上社大祝（有員）は「生き神（現人神）」として君臨することになった。以来、上社大祝職は世襲され、有員一八世の孫である為仲、為貞以降、大祝家は二分派となり、それぞれ多くの庶家を輩出しながら「軍神」諏訪明神信仰伸張の中で信濃各地に繁栄し、彼等は「神氏一統」として諏訪社を精神的支柱に仰ぎながら大祝家のもとに結束していた。

比較的信頼性の高い『前田本神氏系図』によって上伊那地方で繁衍した神氏一統を拾ってみると表2-3と4のようになる。すなわち、為仲流三氏、為貞流八氏の計一氏を数える。これら神氏一統は表2-3にみるように上伊那北部、中部諸地区にまんべんなく定着しており、諏訪社（大祝家）による上伊那支配のあととは疑う余地のないことを

表2-3 上伊那地方における神氏一氏の本拠地

大祝為貞流	大祝為仲流	氏 族	本 拠 地（現在地）
・矢島氏	・保科氏	・保科氏	箕輪町深沢川付近
・栗原氏	・松島氏	・松島氏	箕輪町松島
・宮内氏	・中沢氏	・中沢氏	駒ヶ根市中沢
・知久代	・平出代	・平出代	箕輪町平出
・渡野町宮所	・知久代	・知久代	箕輪町南小河内の中下伊那郡知久
	・栗原氏	・栗原氏	渡野町宮所
	・高遠町藤沢谷	・高遠町藤沢谷	高遠町藤沢谷のうち同族が箕輪町宮所・大出に連出
	・伊那市美濃笠原	・伊那市美濃笠原	

『吾妻鏡』の中に記載されている藤澤清親に関する最後の記事は、嘉祿三年（一二三二）七月十九日の条のもので、のち五代執権となつた北条時頼の流鏑馬指南役として勤仕した時のものである。かなりの高齢に達していたと考えられる清親は、この後ほどなく没したものとと思われるが、『藤沢村史』では二四〇年ごろ没としている。『吾妻鏡』による初見の文治三年以来、実に五〇年間に及ぶ長期間にわたつての活躍は、武術の技量はもちろん執権得宗家の信頼の厚さを物語るものであろう。

このほか、『吾妻鏡』は、藤澤清親の子の四郎光清や藤沢小四郎忠清、同左近將監時親、同左衛門五郎光朝らの藤沢氏一族が「弓始」や「的始」の射手に選ばれたとの弓箭の道で活躍した記事を数多く載せている。しかし、『吾妻鏡』の後段からは藤沢氏の記事はほとんど見当たらず、藤沢谷に拠った藤沢氏の動静も手掛かりは少なくなる。

そして、そのころから藤沢氏の一族がこの箕輪郷に進出し、勢力を張ったのではないかと推測されている。その手掛かりとなる史料に、元亨三年（一二三三）の年記をもつ「諏訪下社文書」がある。これは、塩尻郷東條の地頭であつた塩尻重光が諏訪下社に納むべき神役用途を留したとの理由で幕府へ訴えた時の執権下知伏で、「近隣の地頭である藤澤左衛門尉信政」に塩尻重光の留置用途を催促させるよう命じた内容となっている。信政は、藤澤清親の玄孫（千野村百五郎）による」とも清親の孫（藤沢村史）による」ともされる人物で、『藤沢村史』では、塩尻郷の近隣地とは上伊那北部を指し、藤沢氏が箕輪郷に進出していたことを裏付けるものとし、さらに、『諏訪大明神御詞』・「大祝家文書」・「承久記」・「吾妻鏡」などの史料から、承久の乱に従軍した神氏一統の動静や乱後の恩賞地について考察し、乱後、神氏一統にあつては「忠節を拙んで恩賞を蒙る者數十人」（大祝家文書）、「神家輩

多ク西国北国に居住シ、後胤頼相統セリ。豈肯彼時恩賞ノ地ナルベシ」（諏訪大明神御詞）と、従軍した多数の者が新補地頭（一一八五年、頼朝が源義経の追捕のため設定した本補地頭に對し、承久の乱後の一二三三年、以後戦功のあった御家人に新補地頭法をもつて荘園に配した地頭をいう）に補任された事実を指摘し、北條泰時の陣宿を勧め、また將軍家や執権北條氏から信頼の厚かつた藤沢氏もまた、当然、論功行賞にもれることなく、箕輪郷の新補地頭に補任されたのではなからうかと推論している。この説は、現在に至るも大方の賛意を得ており、『上伊那誌歴史篇』などでもこの説に拠っている。

ともあれ、地理的には箕輪郷藤沢氏の本拠地とされる福与城と藤沢谷とは背合わせの位置になり、意外なほど隣接したこの二地域の交流はかなり密ではなかったかと思わせる。時代が下って室町時代中ごろになると、藤沢氏一族の箕輪郷支配を裏付ける手掛かりが幾つか残されている。永享二年（一四四〇）、下総国の守護大名であつた結城氏朝は、前年の関東の大乱（永享の乱）で敗死した鎌倉公方足利持氏の遺児を援けて舉兵した。「結城合戦」と呼ぶこの戦いに信濃国から多数の武士が幕府軍として参陣した。この従軍武士が「結城陣番帳」に記載しているが、（四、室町時代の項参照）、藤沢氏は単独で第一一番隊を構成し、他の伊那の諸氏とはきわだった勢力の大きさを誇示しているところから、恐らく藤沢谷の藤沢氏のみならず箕輪郷の藤沢氏の勢力も合算されているように思われる。その他、諏訪上社に伝わる『諏訪御符禮之古書』に次の三点の藤沢氏関係の文書がある。

① 藤沢氏
（一四五七）

花会

一、箕輪、藤沢遠江守、御符禮一貫八百文、（後）
別段拾五貫文、

(一四七)

② 文明四年壬辰 明年花会御頭足

一、藤並、大井、藤沢出羽守有兼、御符錢一貫八百文、使三郎、此年母死去、頭役拾貫

(一四七)

③ 文明九年丁酉 花会明年御頭足

一、御符、箕輪郡御符三貫八百文、使三郎、藤沢遠江守信有、頭役二十貫

一五世紀の後半に「箕輪、藤沢遠江守(道修)」、「大井、藤沢出羽守有兼」、「箕輪郡、藤沢遠江守信有」の三人が勢力を有していたことになる。血縁関係など未詳であるが、少なくとも箕輪町大出を本拠とする一族と、戦国期の藤沢氏の動静を考慮すれば、恐らく堀与城を本拠とする一族とがあったことをうかがわせる。

「神氏系図」は、このほか藤沢氏の庶家として松島氏を載せている。藤沢清親の孫を始祖とする松島氏の出自については、海野氏説や小笠原氏説など諸説があるが、藤沢氏の箕輪進出時期を承久の乱後とすれば、藤沢氏の庶流と考える方が妥当であろう。本拠地は箕輪町松島の中央西方の段丘上にある松島古城であったと伝えられている。

三 南北朝の争乱と伊那

(一) 鎌倉幕府の滅亡

元弘元年(一一三三)四月、後醍醐天皇の側近日野俊基らによる鎌倉幕府討滅の謀議が、文保の和談以降幕府間の紛争に苦慮していた内大臣吉田定房の密告により露見した。この謀議(元弘の変)は、天皇みずから積極的に企てられたものであり、天皇自身にとっても正中の変(一一三三)について二度目の決意でもあった。天皇は、六波羅勢

の攻撃の動きを察知すると京都を離脱し東大寺東南院に避難したのち、間もなく笠置(京都府相楽郡)の要害に籠った。

元弘元年九月、鎌倉幕府は大仏貞直・金沢貞冬を将とする二〇万余騎の大軍を上洛させ笠置の要害に迫った(『北条九代記』)。ところで、鎌倉時代の末ともなると生産力の高い畿内やその周辺部では、その高い生産力に支えられて新興在地領主層が広汎に誕生していた。彼らは幕府や荘園領主のいずれにも支配されず、相互に連携しながら独自の経済力や軍事力を保有して荘園権益を侵略し、その行動力はしだいに幕府や荘園領主にとって大きな脅威を与えるようになって、それがたゞ悪党と呼ばれていた。笠置の天皇のもとには、こうした悪党や南都の僧兵たちが多数参加していた。また、悪党の中心的存在であった楠木正成は河内国の金剛山麓の赤坂城に拠って天皇を支援するための兵を挙げた。彼らは俄くくりの寄せ集めの軍勢ではあったが、地利を得ての遊撃戦法をもって一か月ほど善戦した。しかし、赤坂城が落城したのに続き一〇月初めには笠置の要害も落ち、天皇以下多数が捕われの身となった。京都に移された天皇は、持明院統の光厳天皇へ皇位の委譲を強要されたのち、翌元弘二年(一一三三)二月、その身を隠岐へ配流された。

笠置落城後の畿内各地で後醍醐天皇の第二皇子大塔宮護良親王や赤坂城より行方をくらませていた楠木正成らは反幕府勢力を結集し、元弘二年の暮には河内国の千早城で正成が、また護良親王は吉野で再び討幕の兵をあげた。殊に、千早城に拠った正成は変幻自在の遊撃戦を展開して目ざましい奮戦をした(『太平記』)。それに呼応して名和長年や赤松則村といった畿内周辺部にあった非御家人、そのほか得宗専制に不満を抱く御家人などの華兵や造反が相次ぎ、畿内周辺に戦乱が広がった。元弘三年(一一三三)閏二月、こうした状況の中で天皇は密

かに隠岐を脱出して名和長年の手引きで伯耆国の船上山に迎えられた。

事態の成行きに驚いた幕府は、急遽足利高氏（のち尊氏、改名）と名越高家らを得とする増援軍を上洛させた。足利氏は、源義家の孫である義康を始祖とし、下野国足利庄の地頭職を世襲してきた有力御家人の一人である。この足利氏には「義家の遺言状」のエピソード（今川了俊著『頼朝太平記』）がある。それは、「我（義家）七代の孫に吾生替りて天下をとるべし」というものである。義家七代目の家時は、この遺言に応える器量と時節とにめぐまれていないことを悟ると、「我（家時）命をつづめて三代の中に天下を執らしめ給へ」との八幡菩薩への祈願文を残して自刃し果てた。高氏は家時の孫にあたる。高氏は日ごろ祖父の無念を思い続けていたといい、秘かに時節の到来するのを待ち望んでいたといわれる。幕府を受けて上洛した高氏は、山陰道への出陣の途次、かねてよりの後醍醐天皇との密約に基づいて叛軍を決意し、五月七日、軍を京都に向けて反転させると、翌八日には六波羅探題を攻撃、ついに壊滅させた。

時を同じくして上野国新田庄の地頭であった新田義貞が討幕の兵をあげた。新田氏もまた源義家流の源氏であり、始祖義重は足利氏の始祖義康と兄弟の続柄である。新田義貞の軍兵の契機には諸説があるが、直接的には元弘三年春、鎌倉幕府が戦費徴収の名目で新田庄世良田の地に六万貫もの公事を課し、収納使を新田庄内に立入らせたことに對する強い反発からであったとされる。

上野国新田庄と下野国足利庄は地理的にも極めて隣接している。義貞は足利高氏の子の千寿丸と共に武蔵国へ進取し、各地で幕府軍を撃破し、その勢力は合戦ごとに大きくふくらんでいった。五月一八日、新田軍はついに鎌倉近郷の洲崎で幕府軍を破ると、その一部は稲村ヶ

崎から鎌倉の前浜に乱入した。しかし、得宗被官の諏訪氏や長崎氏などの幕府軍の奮戦めざましく、新田軍はおしもどされた。翌一九日には極楽坂で、二〇日は靈山寺あたりで両軍の激戦が続行され、五月二一日、新田軍の主力は干潟になった稲村ヶ崎から一気に鎌倉に突入した。二二日になると化粧坂や巨福呂坂の幕府の堅陣も破られ、これらの切り通しからも新田軍が鎌倉に乱入、数か所から火の手もあがり猛火に包まれた。北条氏一族の中にあつて目ざましい活躍をみせていた大仏氏や金沢氏なども次々に討死し、戦鬨の趨勢もみえてくると、小町の屋形にいた北条高時は北条氏代々の墓所である東勝寺に移り、そこで一族家人とも二八〇余人と共に自刃した。『太平記』は、その最期を詳しく伝えている。中でも最後まで高時の側にいて鎌倉方を支え奮戦してきた諏訪入道眞性は、気おくれする高時の御前へ率先して進み出で、高時の手本にと自らの腹を切り割いて壮烈な自刃を遂げ、諏訪氏一族もことごとくあとを追ひ、また、北条氏に殉じた信濃武士は数千人にも及んだと記している。

諏訪入道眞性の子息三郎盛高は、ただ主従二騎ばかりになって最期の御供にと北条泰家（高時の弟）のもとに馳せかけつたところ、龜寿丸（高時の幼弟）の養育を懇請されたため、意を決して兵火の鎌倉を脱出し諏訪大祝時経をたよって落ちのがれた。この龜寿丸は、のち北条時行と名のり鎌倉幕府再興のための謀略、伊那で活動することになった人物である。

こうして、建久三年（一一九二）源頼朝が鎌倉に幕府を開いてよりおよそ一四〇年を経て、元弘三年五月、鎌倉幕府はここに滅びた。この間、承久の乱後鎌倉に出て得宗被官として執権北条氏に出仕した諏訪盛重とその一族、あるいは藤沢氏や金沢氏のように御家人として出仕した神氏一統ら伊那にゆかりの武士たちが政治の舞台や戦乱の中

で大きな足跡をしるしていたのである。

(二) 北条時行と伊那

1 中先代の乱

鎌倉幕府滅亡直後、後醍醐天皇は京都にあった持明院統の光厳天皇を擁して復位し、六月には京都に入って新政権を樹立した。天皇は、平安時代中ごろ天皇親政を行なった醍醐・村上両天皇の政治（*天皇の治*）を理想とし、親政を行うとともに「古の弊廢を改めて、今の例は昔の新儀也。朕が新儀は未来の先例たるべし」（『梅松論』）との意気込みをもって建武の中興政治にとりかかった。

新政府の地方支配は、殊に鎌倉幕府の根拠地であった関東の成敗を重視し、鎌倉の地に將軍府を置いてその支配を執行せしめた。鎌倉府將軍にはまだ幼少であった成良親王をあて、補佐役たる鎌倉公方には足利尊氏（高氏は功勞により天皇の尊を賜わり改名）の弟で相模守でもあった足利直義を補任した。しかし、復古的性格をもつ建武政権にあったのは、公家に厚い論功行賞や政治運営に、強く反発をする武士側の不満も絡んで極めて不安定な政情となっていた。鎌倉府の置かれた東国で、早くも建武二年（一三三五）六月には政府転覆の策動が始まっていたことを『太平記』は伝えている。すなわちこの策動の中心人物の一人権大納言西園寺公宗は、北条高時の弟泰家を庇護しており、諏訪大祝家にかくまわれていた北条時行（龜勇丸）共々挙兵するとの情報がかつて天皇の耳にまで達していた。

同年七月、その謀叛の情報は現実のものとなった。諏訪上社大祝時雄とその父三河入道昭雲頼重は、佐久や小県に分拠していた惣野・望月・海野などの神氏党を引率し北条時行を擁して鎌倉に向けて進攻を開始した。七月一日、時行軍はまず信濃国の守護小笠原貞宗と埴科郡青沼において合戦しこれを破った。時行軍兵の報は関東各地で鳴る

潜めていた旧御家人や御内人たちの決起をうながすことになり、そのため時行軍はたちまち膨れ、その勢いをもって武蔵国の女影原・小手指原・府中等において足利直義の防衛陣を次々に撃破して、七月二五日には鎌倉に突入、激戦ののち故地「鎌倉」を奪取した。これより先、戦況の不利を悟った直義は、兄の尊氏と征夷大將軍位をめぐって対立しつつには鎌倉の厳密に幽閉されていた護良親王を斬殺するなどの処置をして、卑劣鎌倉から脱出し、東海道を西に逃走した。

関東における北条時行らの反乱の意外なる展開に驚いた後醍醐天皇は遠巡のあげく、危惧を抱きながらも尊氏の懇請もいれて、彼を將とする鎮定軍を鎌倉に進発させた。関東の大半をほぼ手中にしていた時行は、遠江・駿河・相模の東海道の要所でこれを迎撃する態勢をとったもののいずれも敗北し、結局、八月一日には尊氏・直義連合軍の総攻撃を受けて再び鎌倉を放棄せざるを余儀なくされた。時行を擁立した諏訪頼重・大祝時雄の父子をはじめ主だった神氏党の諸將四〇名余は、鎌倉の大御堂でことごとく自刃し果てた。『太平記』は、その壮絶なる神氏党の最期を、「其死骸ヲ見ルニ、皆面ノ皮ヲ剥ケ、何レヲソレトモ見分ケザレバ、相模次郎時行モ、定メテ此内ニゾ有ラント、聞ク人哀ヲ催シケリ」と記している。また、『梅松論』には、「夫經に七月の末より八月一九日に到る迄廿日余、被相模次郎ふたたび父祖の旧里に立帰るといへども、いく程なくして没落しけるぞあはれなる。……（中略）……是を中先代とも廿日先代とも申す也」とあって、北条時行が鎌倉から脱出し、再び諏訪氏の勢力をたよって信濃に逃れたことをうかがわせている。

この乱を企てた中心人物たちを送り出した当信濃国各地（諏訪や伊那）での乱の前後の緊迫した情勢をうかがわせる手掛かりが幾つかある。一つは、乱後の信濃国内の支配体制強化の意味あいから、尊氏

の鎌倉回復直後の八月末、国司が堀川光隆に交替しており、二つには、九月三日、守護小笠原貞宗が諏訪氏をはじめ時行に従軍した諸氏の討伐のための軍をおこし、「伊那横河城」を攻撃していることである。この横河城は現在の辰野町横河であったろうと推定されている。こうした断片的な事実によって、中先代の乱が信濃国内に大きな動揺をもたらした、それに対する建武政府の支配政策の強化や、恐らく大祝時継に従軍した上伊那北部地方の在地領主の存在を浮き彫りにすることができよう。

2 大徳王寺城の戦い

中先代の乱後、信濃に再び潜伏したとされる北条時行のその後の動向については『太平記』や『佐野本系図』は、「乱後、官方軍（南朝）に降り、北畠親家に従って延元三年（一三三八）の美濃国青野原の合戦に参加した」とも「吉野（南朝）に参じ、義良親王に従い東征する途中で伊勢に拠って伊勢次郎と号した」とも伝えている。いずれにせよ、乱後は南朝に帰属し、信濃国内では南朝の有力な旗頭であった諏訪氏や大河原に拠っていた宗良親王らと行動をとる時期もあったほか、東山道や東海道の各地を転々としていたと推測される。

諏訪上社の神長官である守矢家に伝わる「守矢貞実手記」（『守矢文書』）は、暦応三年（一三四〇）六月二十四日、時行が「伊那大徳王寺城」で挙兵したと次のように伝えている。

幼少（二歳）の上社大祝頼時は、父祖（頼重・時継）二代にわたる北条氏への忠節の志を受け継いで時行と共に大徳王寺城に拠って挙兵した。武家方（北朝）で信濃の守護であった小笠原貞宗の大軍に包圍され、四か月間にわたる籠城の後、大徳王寺城はついに落城。大祝頼時は負傷して諏訪へ敗走。時行は行方知れずとなった。（意訳）

ところで、大徳王寺城の合戦に関するこのほかの史料が全く確認さ

れておらず、守護小笠原家（『小笠原文書』）にも合戦についての手掛かりは何一つ見出されていない。「手記」について精緻な史料考査を試みた小口珍彦（『伊那三三八号』）は、①守矢貞実の生年や没年すら明確でない、②ただ「守屋氏系譜」（『守矢文書』）によって、彼の活動期がほぼ応永年間（一四二四）に集中している、③凡そ一〇項目からなる「手記」の冒頭が暦応三年の大徳王寺城の合戦であり、最終が応永五年（一三九八）のものである、等からみて大徳王寺城の合戦は少なくとも「手記」が記述される六〇年も以前のできごとであって、貞実自身の体験的事実の記録というよりは伝聞的な性格をもつ史料と考えるべきもので、したがって、「手記」を信憑性の高い史料とすることはできないし、大徳王寺城の合戦そのものの事実さえ疑問視される、としている。

こうした史料批判にもかかわらず、しかし依然として鎌倉幕府滅亡以後の諏訪氏や北条時行の動向、加えて大河原を拠点として南朝勢力回復の活動をした宗良親王や、彼を支えた竜東の地侍層の動向等を考慮する時、むしろ情勢的には大徳王寺城の合戦の事実を完全に否定しきることでもない様に思われる。『信濃勤王史攷』（市村威人著）や『上伊那誌』等多くの史誌書では、遺情や遺跡、伝承等を手掛かりに「大徳王寺城」の所在地を追求してきている。それらが示す大徳王寺城の主な比定地が、高遠城であり、恩徳寺（西春近下小出）であり、鳩吹城（伊那市横山）であり、等々となっている。いずれにせよ、北条時行の潜伏に関わる伝承や諏訪氏の支配領域が竜東であったこと、その後の宗良親王の活動地や当時の主要な交通路がいずれも竜東であったこと等から、最近では大徳王寺城を竜東の三峯川水系のいずれかの地に比定するのがより妥当であろうとされている。

なお、『鶴岡社務記録』や『諸家系図纂』によれば、北条時行は文

和二年（一三五三）五月二〇日、鎌倉の電ノ口で謀殺されたことと記されている。暦応三年の大徳王寺城の合戦以後一〇年余、時行がどこでどのような活動をしていたものか一切詳かにならない。

かくて、元弘三年の鎌倉幕府滅亡以降、大徳王寺城の合戦までの約一〇年というものの伊那の地は北条時行の軍事行動を軸とした戦乱に明け暮れたのである。

四 宗良親王と伊那

建武中興政府の倒壊後、延元三年（一三三八）九月、大暴風雨のため遠江国白羽湊に漂着した宗良親王は、井伊城を根據地としてしばらくの期間を東海・北陸各地に転戦していたようである。やがて諏訪大祝頼朝やその影響下にあった南信濃の諸氏をたよって伊那郡大河原に渡ったのは、興国四年（一三四三）の暮か、翌五年の春もまだ浅いころのことであったと考えられ、歌人としても有名であった親王の私歌集『李花集』の春の部には、「興国五年、信濃国大河原と申す山の奥に籠居侍りしに、唯かりそめなる山里の垣はわたり見習はぬ心地し侍るに、やうやうわかぬ春の光待ち出づる鶯の百轉も昔思ひいでられしかば」との詞書がある。このころの親王はまた、父帝（後醍醐）の没後ほどない折でもあり、南朝の諸勢力がしだいに衰退していった時期にもあたっていたため、信州の山奥の生活に浸っていることからの焦燥感も強く、吉野への出立を四六時中、考えていたようである。そのつど寄留先であった大河原の地頭、香坂高宗などが慰留していた様子を、『李花集』雑歌の部の詞書が、「大河原と申し侍りし山の奥をも又立ち出て侍りしに、行末もいがかたと申して、香坂高宗などしきりに留め侍りしを、難すて侍りしに……」と伝えている。結局、親王は文中三年（一三七四）ころまでの約三〇年間に、親王自身にとっては三〇代前半から六〇代前半までの働き盛りの年齢を、伊那の大河原を

拠点に活動したのである。

南北朝の争乱は、また、信濃国内にも官方（南朝）と武家方（北朝）の激しい対立抗争をもたらした。北条時行の潜入や宗良親王が進出した伊那地方は、その対立が殊更、深刻であった。信濃国の武家方の中心は、守護の小笠原氏であった。小笠原氏では、正平二年（一三四七）五月、貞宗が没し、その子の政長が守護職に就いた。伊那郡の伊賀良庄を本貫地とする小笠原氏は、飯伊地方に群拠する地侍層のうち、飯島、片切、名子、松岡、坂西といった竜西に広がる天竜川氾濫原の肥沃地を領有する有力な地侍たちをその支配下に組み入れていた。上伊那地方も府中（松本）の守護所と伊賀良庄を結ぶ交通路のあった竜西一帯は、ほとんどが武家方の勢力下に入っていた。一方、官方の中心勢力は、諏訪大祝家や佐久の神氏党（海野、麻津、望月氏ら）、及び宗良親王勢力が核となっていた。宗良親王を支えた伊那の諸氏は、香坂、中沢、藤沢氏等であり、いずれも竜東の山梨盆地を領有基盤とする地侍であった。物心両面で宗良親王を支援した諏訪大祝家や佐久の神氏党とは、地理的に遠く隔絶しており、親王や支援の諸氏族の軍事行動は困難な状況のもとにあった。親王はこうした状況の中、東奔西走、各地に転戦している。親王の軍事行動の中で最も重要な事件は、正平七年（一三五二）の鎌倉攻めである。正平五年、室町幕府内で戦略をめぐる、將軍尊氏と鎌倉公方直義との間に内紛（いわゆる「観虎の擾乱」）がおこった。南・北両朝の対立構図が、尊氏（北朝）、吉野（南朝）、直義（鎌倉）の三者鼎立となり、一時は尊氏が南朝と講和し、（短期間ではあったが）吉野朝の天皇や貴族は、京に入り政権を獲得する事態さえ生じたのである。親王にとってこの事件は失地回復の絶好の好機であった。親王は、諏訪上下社勢や遊野一族及び仁科勢を率いて鎌倉攻めの軍をおこした。親王軍の志気は高く盛んであり、親王

自身、不退転の決意をもって陣頭指揮をとった。後年、親王も選者の一人として編んだ准后撰歌集『新葉和歌集』の中に、出陣中の親王の歌が載っている。

（おなじ比）武蔵國へうちこえて、こてさし原といふ所におりあて……

君のため 世のためにか おしからん

すててかひある いのちなりせば

親王は、正平一〇年（一二三五）に至るまでのほぼ六年間を、上野国から下野国に戦い、再び信濃国内を転戦したのち越後国まで、休むいとまもなく活動している。

正平一〇年八月、親王は諏訪上社大祝軍に小出、藤沢、香坂、知久などといった官方に属する伊那勢の総力を集めて桔梗ヶ原に出陣し、小笠原長基と大激戦を交えた。親王軍は多数の手負いや死人を出し（『矢島文書』）大敗北を喫した。この敗戦をさかいに宗良親王を擁する官方勢力は急速に凋落していき、一時は奥宮（岡谷市長地）に御座所を設けたほどの親王は、戦力の回復もままならぬまま、大河原の香坂氏に寄留のままに時を過ごすようになった。やがて文中三年（一二三四）冬、六十路も半ばを迎えようとしていた老境に達した親王は、意を決して、わずかに十数騎の従者をともなって大河原を出、伊勢路から南都を経て賀名生の行宮（みんき）に入られた。親王の吉野での滞在は、天授三年（一二七七）までの三年余であり、この間の親王は、行宮で催された歌合に出たり、その判者として活躍している。戦乱に明け暮れた信濃での殺伐とした生活を忘れようとするかのように、老先短かい一瞬時を、歌人としての生活にとつぷりと浸り込んだことであろう。親王はまた、吉野の仮御所で没した兄弟（後村上）の法要を執行了後の天授四年春、いったんは大河原にもどったが、同六年、再び吉野の行宮へ向った。これ以降の親王の動静が「後撰記」に「天授六年、入道親

王大河原に在りて義兵を起さんと欲すといへども、南方に通ずる兵士皆背きて、香坂高宗のみ心を変せず、忠を励まんとす。親王謀計成らず、信州を出て河内国山田庄に居す。九月一三日夜、関白冬実と答あり。弘和元年十二月三日、宗良及び藤原等、新葉集を選す」と記されている。親王は、吉野から河内国山田庄に移り、この地で『新葉和歌集』を選定するなど、歌人として余生を全うしたようであるが、醍醐三寶院文書の「大草の宮の御歌」によると、親王は信濃国大草の里、大河原で没したと認められている。

四 室町時代の伊那

（一）信濃の守護と國人衆

1 守護小笠原氏と伊那

鎌倉幕府滅亡後間もなく建武政府は小笠原貞宗を信濃の守護に補任した。小笠原氏は甲斐源氏（武田氏）の分流で、鎌倉時代には信濃国内の伊賀良庄の地頭職を得ていたものの、それほど深い関わりをもつ存在ではなかったが、貞宗の守護補任より戦国時代末に至るまで、守護の権限をもって在地領主にその支配力を強め、信濃国内で最も大きな勢力を維持することになった。

小笠原貞宗は、建武二年（一二三二）七月の中先代の乱に足利尊氏に従って鎌倉攻めに加わり、その後も尊氏に従って近江国で新田軍と戦うなどの行動がわかっているものの、尊氏敗走後より数年間の動静は不明である。この間、信濃国の守護（もしくは守護代）が村上信貞や吉良時衡となっており、尊氏と共に九州にまで随行し、西国や京畿での合戦に参加していたものと考えられる。小笠原貞宗は、再び康永元年（一二三二）以降、守護に補任され、正平六年（親応二年、一二五一）の尊氏と直義の間の抗争の時には、一時的にその職

を解かれたものの、その子政長、孫の長基へと守護職が世襲されている。

「小笠原文書」所収の貞宗議状によると、小笠原氏の信濃国内の所領は、本貫地伊賀良庄の外に上伊那では且良郷や福地郷が含まれており、なおまた、正平七年正月一九日、尊氏は政長に対し宗良親王軍とのたびたびの合戦や親応の擾乱に際しての功勞として春近領を安堵している。いわば生産力の高い上伊那の中部地区を掌握していたのである。加えて、南北初期以降の信濃の守護所は善光寺近くの芝平にあって、したがって、小笠原氏は本貫地伊賀良庄を離れて芝平の守護所に居留していた。守護所の近在にも所領をもって、北信地方の在地領主層（國人たち）への支配力、影響力も相当なものがあつたと考えられている。本拠地南信濃のみならず、北信地方に至るまで強大な経済力、軍事力を張っていた守護小笠原氏にとって、守護所をより強力に保全することが最大の政治課題であつたと思われ、この時期、子の政長も埴科郡船山郷の船山城に在城している。

2 大塔合戦と伊那の諸氏

小笠原政長に次いで守護職を引き継いだ子の長基は、貞治五年（一三六六）ころ守護職を解かれ、かわつて関東管領（鎌倉府の執事）の要職にあつた上杉朝房が守護となつた。しかし実質的には、国内の軍事指揮権は長基に委任されており、彼はそうした事情を背景に、前守護として國人や地侍を直接的に支配しつづけていたと思われる。その後、至徳元年（一三八四）には足利氏一門で、管領家の一つでもあつた斯波義隆が守護に補任された。しかし、義隆は信濃に下向せず、二宮氏泰を守護代として派遣させた。こうした幕府の守護補任にみられる地元無視の信濃国の統治政策に、小笠原長基はもろろん北信地方の有力な國人であつた村上頼國や高梨朝高などは強い不満をあらわに

し、守護代二宮氏に激しい反発を示した。ついに至徳四年（一三八七）四月、信濃の國人たちは善光寺平に兵を結集し、二宮氏の拠つていた芝平の守護所を包圍し、二宮氏を国外に追いやった。國人たちの動きを知つた幕府は、直ちに六月には、義隆の守護職を解いて管領職にあつた兄の義将を改めて補任するなどの処置をとつた。義将は、強大な権限を有する管領の立場を利用し、強圧的な姿勢で国内の動搖を鎮静化させることに成功した。国内が一応の平静をとりもどすのを待った幕府は、かつて三代にわたり守護職にあつた小笠原氏を守護に復帰させるべく、応永五年（一三九八）、守護領の核となつていた信濃国内の春近領と安曇の住吉庄（二郷村）とを長基の子の長秀に還付し、翌六年に長秀を信濃守護に補任した。

当時、小笠原長秀は、信濃を離れ京都に在つて室町幕府に出仕していた。建武以来の信濃の武士の盟主であるといえ、父長基が守護職を解かれてから、かれこれ三〇年余も経過し、国内地侍層の様相もかなりの変化をみせていた。先立って、守護代二宮氏に対する反抗もあつたばかりで、長秀自身、旧領への入部に対して相当の抵抗が予想されていたのであろう。長秀は、小笠原氏の分流で佐久に勢力を張つていた大井光矩とはかつて、信濃一國の成敗（せいばい）書を作成し、國人たちに先立って長秀入部後の政務の地ならしを企てた。案の定、長秀の成敗書は、守護代二宮氏の統治以来くすぶり続けていた國人たちの不満や反発を再燃するきっかけとなった。まず、以前より小笠原氏との間に所領をめぐる対立から小笠原氏に反感を抱いていた北信の國人島津国貞が、また、伊那の香坂氏や諏訪神氏党のように南北朝の争乱にかかわり小笠原氏と敵対した國人、地侍たちが、長秀の入部阻止の兵をあげた。応永六年一〇月、大井光矩ら小笠原一族は、石渡の合戦（長野市石渡）で國人島津氏の軍を鎮定したものの、この乱の直後、

応永の乱（有力守護大名内義弘が専らで衆兵一敗死）が勃発し、長秀も幕命に従って出兵せざるを得なくなったため、ますます長秀の入部は遅くなり、結局、信濃で実際の国務に就いたのが応永七年（二四〇〇）八月からであった。

信濃の國人たちの守護の入部阻止の動きが明らかとなっていたため、小笠原長秀の善光寺（当時守護所）入りの行列は、殊更、威風堂々たるものに仕立てられた。

行列中央の長秀のいでたちは、入部を奪うほどの威風堂々で飾り立て、これに供奉する惣百人の一族郎党は様々に武装して護り固め、また、この行列を見物する近在の人々が善光寺の南大門を埋め尽くして、そのさらびやかさに目を見張った。

『大塔物語』意訳

長秀のこうした挑戦的な入部式は、却って村上満信をはじめとする國人たちを刺激した。九月二四日、村上北信の國人たちは一揆して更級郡四宮河原に押し出し、守護方軍を迎撃した。激戦ののち守護方軍は敗北して、守護長秀は塩崎城（更級郡）にのがれ、長秀を支援した坂西長国（越前）は大塔（長野市藤ノ井ニツ樹大馬）の古要害に、かろうじてたて籠った。坂西勢は急場の籠城のこととて兵糧を全くもたないまま、一揆勢に囲まれ兵糧を完全に断たれた。坂西長国はこの古要害に二〇日余、よく戦いもちこたえたが、ついに城内は飢餓の極限をこす惨状の中、一〇月一七日、長国以下の将卒一九人となって城外へ打って出、壮絶な討死をとげた。次いで塩崎城にのがれていた長秀も、大井光矩の必死の斡旋によってようやく國人衆との間に和議をとり結ぶと、そのまま京都に逃げ帰る羽目となった。この合戦を「大塔合戦」と呼んでいる。南北朝の争乱を経て、地方でも生産力の上昇を背景に在地領主（國人）たちがしだいに実力をつけており、相互に連携をと

りながら利害を異にする守護とするとく対立する様相が、ごく一般的に風潮ともなっていた。

翌応永八年（二四〇一）早々、小笠原長秀は信濃の守護職を解かれ、再び斯波義隆が還補されることになった。吉田流神道宗家の日記『吉田家日記』の応永八年二月一七日の条には、「信濃国守護職、（去々）年より小笠原氏に譲りしんぬ。しかるに國人等承諾せず、度々合戦を致しんぬ。昨日、右衛門督入道（前管領）に宛行がわると云々と守護の交代劇を断片的に記している。

この大塔合戦は、南北朝の争乱期を通じて地力をつけた國人や地侍の実力を示す結果となり、守護勢力は大きく後退し、やがて展開する戦国動乱の下地ともなっていた。大塔合戦を伝える史料に『大塔物語』があり、その異本として『大塔記』や『大塔軍記』が伝えられている。これらの史料中には、多くの上、下伊那の國人や春近衆、郷戸の人々が守護方に従軍していたことを伝えている。そのうち、上伊那出身と思われる諸氏をあげておく。

表2-5 大塔合戦に守護方として従軍した上伊那の諸氏

氏	氏	氏	氏
氏	氏	氏	氏
藤沢右京亮	箕輪町福与	高遠町藤沢	
笠原中務丞	伊那市美馬笠原		
大島河内守	大島		
山田新左衛門尉	高遠町河南山田		
神村次郎	神村	伊那市東春近衆	
小井	伊那市西春近小井		
中越備中守	宮田村中越		

近			春		
宮田大和守	宮田村宮田		同 田島	田島	田島
上 藤伊豆守	駒ヶ根市上藤		田切五郎七	飯島町田切	飯島町田切
片桐中務丞	中川村片桐		赤須孫三郎	駒ヶ根市赤須	

こうしてみると、伊賀良庄に本拠をもつ守護小笠原氏の上伊那における支配力は絶大であったことがわかる。守護領であった春近領をかかえていた関係で、上伊那のうち、南部の目ぼしい地侍のあらかたが小笠原氏に従軍しているほか、藤沢氏系なく箕輪藤沢氏らの北、東部の国人が名を連ねている。宗良親王なきあと、東部の美濃周辺地区も小笠原氏の下に組み入れられていたことをみてとることができよう。

3 結城合戦と伊那衆

応永三三年（一四二六）鎌倉公方足利持氏が、弟の満隆や関東管領上杉權秀らに背かれると、戦禍は関東一円に広がった。（上杉權秀の乱）長秀から弟政康に家督が譲られた小笠原氏も、幕命を受けて関東に出陣し、権秀軍と各地に戦った。政康のこの時の戦功もあって、幕府は逐次小笠原氏に信濃国内の旧領を還付し、やがて応永三二年（一四二五）二月、政康を信濃の守護に補任した。翌年信濃に入部した政康は、大塔合戦以来の屈辱をはらすべく、また、守護の職務を全うすべく国人たちへの支配力を強化する方針をもって、まず守護所の藤元で強勢を張っていた村上頼清らの国人討伐にあたった。

守護小笠原政康による信濃国の一円支配が着々とおしすすめられていた最中の永享一〇年（一四三八）十一月、鎌倉公方足利持氏が、ま

たまた將軍家に対し公然と反旗をひるがえした（永享の乱）。この戦乱に政康は、信濃各地の国人、地侍を引率して幕府軍の主力の一翼をになって目ざましい活躍をしている。次いで永享一二年（一四四〇）七月、敗死した足利持氏の遺児を擁して、下総国の結城氏朝が挙兵（結城合戦）すると、再び政康は国内の国人たちを指揮して出陣し、幕府の陣中奉行を勤めている。政康は、国人を動員するにあたり、軍役に基づき三千騎の軍勢を三〇組に編成した。この三〇組が「結城陣番帳」の「小笠原文書」に記載されている。

表2-1 「結城陣番帳」にみる上伊那の国人衆

陣番号	上伊那の国人・地侍
一一番	藤沢殿
一二番	香坂殿
一四番	諏訪信濃守殿（奥本宮） 大原殿代 中沢殿代 甲斐沼殿代
一五番	藤合殿 小田切殿（奥本宮） 信守殿
二四番	飯島殿、大島殿、片切殿、藤島殿、小井戸殿、宮田殿、山寺殿、三浦殿

表にみるように、多数の伊那の国人、地侍たちが結城合戦に出陣していることが判明する。これは大塔合戦後四〇年を経た伊那地方の諸氏の消長を知る上でも重要な手掛りとなる。単純計算で一組百騎とみれば、藤沢氏、香坂氏の単独隊は他を抜きんでている。宗良親王を支えた、香坂、諏訪、中沢等々が、小笠原の指揮下で働いているのも南北朝の合一後、半世紀を隔てての時流というものであろうか。また、藤沢氏は、少なくとも箕輪郷進出を果たしていたと考えられる外、諏

訪氏の勢力は、杖突越えに高遠、富原、中沢に依然として太い支配パイプをもっていたと考えられる組合わせである。「二五番」「二四番」は、いわゆる奉近衆であるが、大塔合戦後の在地変動が大きかったものであるうか、地侍に変動がみられる。

とまれ、この陣番帳をみるかぎり、守護小笠原氏は大塔合戦以後の国人との抗争にかなりの成果をあげたと見ることが出来る。それはとりもなおさず、守護大名と呼ぶにふさわしい政治権力を掌握したことを意味するに他ならない。

(四) 内乱の中の伊那の諸氏

1 守護小笠原氏の分立抗争

表2-1

(小笠原氏略系図) (数字は信濃守護職就任順)



信濃武士の盟主的存在であった守護家小笠原氏にあっては、一五世紀中ごろに至り、その跡目一式の相続をめぐる内紛を生じ、府中(松本)・伊那松尾・伊那松尾の三家に分立、相互に主導権をめぐって激しい戦いをくり広げることになった。事の起りは、大塔合戦に敗北し信濃を追われ、京都にあって失意のうちに明け暮れていた信濃前司長秀の諫状(遺言状)をめぐるものである。長秀は、応永十二年(一

四〇五)一月九日、弟の政康にあって一通の諫状を残している。この文書(東京大学所蔵)は、「譲与、舍弟右馬助政康所、所々朝恩并恩賞之地等」の見出しで始まり、その内容は、次の三点に要約されるものである。

- ① 万一、この後、長秀に実子が誕生した場合、この諫状を継業し、改めて後継者問題を考え直すことにする。その折に内乱があつたならならぬこと。
- ② 若し、実子が出生しなかった場合には、永徳三年(一三八三)二月の亡父長基の諫状に従って、政康が跡目一式を相続するものとする。
- ③ 更に、政康以降については、政康に実子がない場合、政康から舎見長持の嫡男彦次郎に跡目一式を譲与すべきこと。

この諫状に忠実に従えば、小笠原略系図で明らかのように、長秀に実子がなく、政康に実子が存在したのだから、政康以降の跡目一式の相続については、政康自身が決定すればよいことであった。そしてその後、政康は自筆の遺文(遺言状)を残しており、その中で、④小笠原氏の本貫地、伊賀良庄を六郎(光康)に譲り与えること。⑤「当家のこと」は五郎(宗康)と六郎の兩人に任せること、を明記している。

ところが、これだけ明確になっていた跡目一式の相続について、府中にあった特長(彦次郎)が相続権を主張し、幕府に出訴したのである。訴状をつがえた結果、幕府は、政康の遺文に基づいて五郎宗康に跡目一式を安堵する旨の裁許状を出した。幕府の判断が下されたものの、小笠原氏内部の対立は収まりようもなく、文安三年(一四四六)、ついに府中の持長軍と伊賀良の宗康・光康軍との間に戦端が開かれた。宗康は府中への出陣に先立ち、万一を考えて、弟の光康に惣領職や所領を譲り与えた。悲運にも宗康はこの戦陣で壮烈な討死をとげたので、幕府は直ちに光康に対し所領諸職を安堵した。

文安三年の合戦以降、府中と伊賀良の両小笠原氏は、たびたび衝突をくり返し、そのため信濃国内の在地支配は混乱を極めることになった。たまたま、こうした状況の中、享徳三年（一四五四）一月には鎌倉府にあっては、公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を謀殺するという事件が起こった。小笠原氏内部の内訌に追われていた光康は、幕命にもかかわらず出兵もできず、何度も出兵催促を受けるなどの失態をさらした。守護小笠原氏の支配力の低下は、国人層の動きをうながすことにもなった。東北信で村上氏と海野氏が抗争を始め、南信では諏訪上社と下社との間に激しい対立が起こっている。

元来、武家社会にあっては分割相続が一般的であったが、鎌倉時代の後半ともなると、貨幣経済の浸透もあって所領を分割細分化することによって鎌倉幕府の基盤ともいえるべき御家人の経済力を破壊するのを防止するために、惣領の単独相続制が急速に広まった。すなわち、大勢の男子の中から特に器量の仁を選んで惣領とし、宗家の全所領、諸職を一括惣領に譲るというもので、その余の子は全て庶子として惣領に臣属化していった。小笠原氏内部の跡目一式の相続権とは、そのような内容をもつもので、応仁の乱に参戦した守護大名家の内部抗争の原因でもあった。（小笠原氏の抗争は、そうしたもののうち最も早い時期に起こったものである）

宝徳元年（一四四九）、京都にあっては管領が細川勝元から畠山持国へと交代した。畠山氏と細川氏を結んでいた府中の持長は、畠山持国の支援を得て、信濃守護職に補された。宝徳三年一〇月、守護持長は、諏訪下社大祝に対し、手良郷・八乙女金原等を安堵している。このことから、管領畠山氏の権勢を背景として府中小笠原氏の勢力が著しく伸張し、上伊那の中部地区まで及んでいたと推測され、また、諏訪下社との密接な関係をうかがうことができる。

しかし、この後、応仁の乱をはさんでの中央の政局の大変動にともない、分立抗争する小笠原氏の消長もゆれ動いた。応仁元年（一四六七）、鈴岡城（飯田市駄科）にあった小笠原政秀に守護職補任の宣下がある。政秀は支配下にあった伊那の諸氏を動員して府中を攻撃する。「溝口家記」によれば、政秀は一時、持長の子の長朝を追って、自ら府中に居館を構えたほどに勢力を回復するが、毛賀沢川一つへだてた松尾城にあった家長、定基父子と伊賀良庄や小笠原家に伝わる所領、諸職文書をめぐっての対立も激化し、やがて文明十一年（一四七九）と翌一二年には戦火を交えるまでになり、ついに明応二年（一四九三）正月、政秀は（松尾）定基や知久氏によって鈴岡城を攻囲され、討死した。鈴岡小笠原氏の滅亡後しばらくして、松尾小笠原氏の勢力も衰退し、守護職は府中小笠原氏の手中のものとなった。

信濃の守護家小笠原氏のこうした惣領家の所領・諸職をめぐる同族内抗争は、「天下の大乱（応仁の乱）」のさきがけをなすものであり、それ故、そこには、管領家の細川・畠山両氏の対立が影を落としていた。そしてまた、具体的な史料に乏しいとはいえ、伊賀良と府中の対立、また鈴岡と松尾の抗争の中において、伊那の在地領主諸氏が重大な影響を受けたことは想像に難くないところでもある。

2 諏訪上下社の抗争

諏訪上社大祝家は、室町時代に入るとき、武家（諏訪氏）ともいうべき惣領家と、神職家ともいうべき大祝家とに分立し、惣領家は上原城（宇野市）に拠って軍事権を、大祝家は前宮（宇野市）にあって祭祀権を執行するところとなった。既に述べてきたように、大祝家の庶流は古代より信濃各地に繁衍し、また、その結束は強固であったため、惣領家の軍事力は強大で、時には甲斐国に侵攻し武田勢を圧倒するほどでさえあった。しかし、所領やその相続をめぐる同族間の対立も少な

くなかった。一方の大祝家は、神職とはいいながら、独自にかなりの實力（武力）を保有しており、（例えば、文明一一年に小笠原政秀が松尾城を攻撃した際には、大祝継満は高遠頼宗と共に政秀支援の軍を率いて出兵している）、惣領家とは共存すべき関係にありながらも、政治的・軍事的に拮抗する緊張した関係をも生むようになっていた。そのはてに、文明一五年（一四八三）正月、大祝継満が惣領家の乗っ取りを謀るという重大事件がおこった。すなわち、惣領家の諏訪政満一族を前官の神殿に招いた継満は、酒食の饗応のはて酔いつぶれた惣領家の一族を、こともあるうに神前で皆殺しにしたのである。この事件は、諏訪氏一族の激憤を買ったばかりか、大祝に仕える神長官守矢氏をはじめとする神官たちの間からさえ非難される結果となった。神長官・守矢満実（「守矢満実書留」）の中に事の始末を記し、「惣領家の政満、一四才の嫡子、政満の弟、ほか身内の者十余人に一日中酒をすすめておいて殺害することは、当社大祝とは申し難し」と強くその非道を咎めている。

この惨劇に怒り狂った惣領家では、矢崎政継をはじめ千野、小坂、福島等の諸親族に、大祝に仕える神長官守矢氏までが結果し、大祝継満がたて籠った千沢城を攻め、二月一九日には落城させた。厳寒の千沢城内は、寒さと飢えのため悲惨な状況であったという。大祝の父頼重は重病の身を討たれ、老母や幼児たちは山中で凍死をとげた。大祝継満自身は、危うく伊那方面に逃れ、その末路は定かにならず、一族はことごとく殺された。

ところでこの諏訪上社の内紛に下社が大きく関与していた。すなわち、下社大祝の金刺氏は、守護の小笠原氏内部に分立抗争が起こると、しだいに府中小笠原氏と密接な関わりをとり結ぶようになり、鈴岡小笠原氏と結んでいた上社と敵対するようになっていた。大祝継満

が惣領家併呑の謀計を金刺氏にはかったため、金刺氏は下社大祝家の勢力の拡大の時節到来と、支援の態勢を整えて、千沢城籠城前に諏訪の各地に兵をおこした。矢崎政継らの上社惣領家では、千沢城の落城後、直ちに下社領内に軍勢を派遣し攻めたてた。ついに、金刺氏は滅亡し、下社の社殿はことごとく灰燼と化した。下社はのち、上社惣領家の手も入って、武居祝家より大祝をたてることになり、諏訪氏（上社惣領家）の支配下に組み込まれていった。

一連の事変が収束すると、惣領家では政満の五歳になる遺児をもつて諏訪氏を再興し、また、古来どおり惣領家から大祝をたてることにした。この争乱に伊那の地侍たちがどのように関わったのかは、史料もなく全く不明である。神子柴の北西、段丘上の古城に残る三基の五輪塔が伝承によると箕輪氏のものといわれる。（上巻、第二章、神話・伝承）箕輪氏は、『高遠記集成』（高遠の古記録）に、本曾義仲の



図 2-2 神子柴五輪の塔

末孫本曾又太郎家祖の嫡男が高遠を領有して高遠太郎家親と名乗ったのを始祖とし、その後、二代 太郎義信、三代 右馬助義房、四代 上野介義雄、五代 左衛門尉義建、六代 兵庫助義俊、七代 義綱、八代 豊後守義里、九代 左衛門尉義久、と九代百九十年にわたり繁栄した高遠氏とされている。六代義俊、七代義綱が古城に住したと伝承されており、本村神子柴の五輪の塔もその関係のものとされる。

『高遠記集成』によれば、五代義建は「文明の頃没す」とあり、小笠原氏や諏訪上下社の内紛時には伊那衆の中心人物の一人として活躍したのではないと思われる。

ともあれ、上社大祝家や下社大祝家の滅亡による上社惣領家の支配権の確立は、諏訪氏の戦国大名化への転機と位置付けられよう。小笠原氏や諏訪上下社における分立抗争は、こうした意味において中世的な領有関係や支配関係に質的な転換をうながす契機となったようである。

3 戦乱時代のはじまり

以上述べてきたように、鎌倉幕府滅亡後の信濃は、引続く建武中興政府の興亡と南北朝の争乱期に、中央の政局を敏感に反映させて、戦乱の渦中にあった。北条時行や宗良親王の活動舞台であった伊那や諏訪は、中央政界の抗争の縮図でもあり、それだけに戦乱による伊那諸地侍たちの浮沈、土民の犠牲は想像以上のものがあったと思われる。加えて、室町時代における国人衆の台頭は、南北朝の争乱以降増え、また鎌倉公方や関東管領の謀叛にかかわる関東の動乱を通じて守護小笠原氏の軍事行動が、この時代の主要な流れの中心にあった。そして、応仁の大乱にさきがけての小笠原氏内部の分立抗争や、鎌倉時代以後、特異な信仰をもって信濃武士の精神的支柱として君臨した諏訪氏の内紛が契機となつて、信濃国内は一気に戦国時代に入る。

神氏の分派である高遠義宗が、伊那の地侍を率いて杖突峠越しに、宗家と仰いできた諏訪へ侵攻するのが、上下社の内紛後ほどない文明十九年（一四八七）七月のことである。

此年（文明）十九年七月二十七日、信州府賀々館あそびし候。同年、福島孫七、真木殿、面木殿、中沢高見、打死あそびされ候。御山御延引の故なく

候。八月七日迄、鞍馬御陣御座され候。有賀へ矢射、その間りうが崎之城取立て候。御知行候。

（『諏訪御札之書』）

継宗方は多数の戦死者を出して退却する。戦死者の中には、福島や牧、表木、中沢の高見などの地名を冠した地侍たちが記されている。高遠義宗を盟主とあおぐ、大塔合戦や結城陣番帳にも記載されなかった新興の地侍たちである。こうした新興の在地領主の登場こそ、南北朝の争乱や応仁の動乱の副産物とするにふさわしいものであり、彼等、新興の地侍たちこそ、新しい戦乱の時代の幕明けに主役として登場してくるのである。

第二節 戦乱の時代

一 武田氏の伊那経略

(一) 武田氏の侵入

応仁の乱（一四六七—七七）により幕府が権威を失墜し、支配力を失うと、地方での騒乱はますます拡大して、いわゆる群雄割拠の時代となっていた。前節で述べたように信濃では守護であった小笠原氏の相次ぐ分裂、抗争や、諏訪上下社の内輪争いが続き、地域勢力の分立状態は複雑化していった。

このころ隣国甲斐では、甲斐源氏の流れをくむ武田氏が信虎の代を迎えていた。信虎は勇猛果敢な武将で、戦略的にも優れた手腕を発揮して、各地に割拠していた諸豪族を征服して甲斐を統一した。そして、東海の小笠原元や関東の北條氏綱と和を結び、南や東を固めた上で西方の信濃へ勢力を伸ばす態勢をつくった。

信濃が武田氏にとって侵略の目標となった理由は、第一に全国的には一統の戦国大名が出現する中で、信濃には強大な統一勢力が存在しなかったことによるのであろう。信濃は山岳や河川が多く地形的にも複雑で、各地区に割拠した小豪族がそれぞれの地域を支配している状態であった。第二の理由は、当時の甲斐の気候は寒冷で、地味は悪く土地は狭小で、経済力は乏しかった。それに比べて信濃は生産力が高く、食糧や軍事兵力等の補給地として、対外進出するために必要な領地と考えたものであろう。

甲斐から信濃へ侵入するには、野辺山高原を通過して佐久郡海野口に出る佐久道と、松本、伊那、佐久、小県などの諸方面につながる交通上、軍事上の要衝である諏訪へ通ずる諏訪道とがあった。

この諏訪を窺う武田勢に対抗する戦いとして「小平物語」に天文七年（一五三〇）六月に甲州諏訪の合戦があったと記録されている。これによると小笠原長時に従った総勢一万三千余の軍勢が諏訪衆を先陣として甲州へ攻め入り基町で戦い敗北して退散したとある。この戦いに出陣した地持の中で、伊那衆としては五〇氏があげられ、本村関係では殿村の倉田将監が書かれている。

殿村の倉田将監は武略にすぐれた剛の者であったが、この戦いで戦死したと『伊那温知集』や『伊那志略』に記されている。

倉田将監は北條三任、藤原頼朝下之士なり、頗る武略有り、人呼んで鬼将殿ト曰フ、天文戊戌戦イテ甲州基町ニ死ス、其子淡路石見ト曰フ、俱ニ武ヲ以テ顯ル、子孫今も長為リ

（『伊那志略』）

信虎は佐久に兵を進める一方で、諏訪氏と和平を結ぶためとして娘の彌々を諏訪頼重のもとに嫁がせている。天文一〇年（一五四一）、父信虎を駿河に追放し、甲斐一國の統治の実権を握った信玄（晴信の法名、ここでは以下信玄と呼ぶこととする）は、二一歳の若さであったが、諏訪への侵略を開始した。

天文一一年（一五四二）六月、諏訪氏の分族である高遠の諏訪頼重と手を結んで、諏訪郡上原城（茅野市）に頼重を攻めて降服させ、甲府に連行して自害させた。

こうして古代より由緒を誇る諏訪惣領家は滅亡し、諏訪郡は宮川を境として東は武田氏、西は高遠の頼重が支配するところとなった。しかし、いったんは武田と手を結んだものの、惣領家の後継をねらう頼重はその年の九月には上原城を襲い、さらに諏訪上下社をも占拠し、諏訪全境を手中にする勢であった。そこで信玄はこの頼重を討って諏訪を制覇し、やがて伊那への侵攻を図ろうとした。

このとき信玄が諏訪上社へ捧げた願文には、今度の戦いで伊那攻略ができたならば、神前に具足一領と馬一匹を奉納し、伊那郡内に百貫文の地を神領として寄進しますといっている。翌九月二五日、信玄は頼重の遺児虎王を擁して頼親の軍を安国寺（茅野市宮川）付近で破り頼親は高遠に逃れた。さらにその翌日には武田の將駒井高白斎は杖突峠を越えて藤澤谷に放火して、藤澤頼親を降服させ、ついで二九日には、板垣信方是有賀峠を越えて上伊那郡（長野町地方）へ侵入した。これによって諏訪一円は武田氏の勢力下に陥り、伊那地方は信玄の侵略の手に脅かされることとなった。

天文一二年（一五四三）四月になると、信玄は板垣信方に諏訪の上原城の善請を命じてその城代とし、自らは佐久地方の攻略に着手して佐久の大井氏を陥れた。善請の成った上原城を拠点に、天文一三年（一五四四）一月、信玄は有賀峠を越えて荒神山に陣取り、その先鋒は羽場から松島あたりまで進んで、藤澤頼親の軍と戦ったのも、上原城へ帰陣した。この間に、先の安国寺の戦いで敗れて一旦は高遠へ籠っていた頼親は、同年一二月信玄の主力が上伊那口へ出陣しているすきについて杖突峠から諏訪に攻め入り、上社神長官守矢氏の館に放火し、千野氏等と戦っている。

翌天文一四年（一五四五）四月、信玄は杖突峠を越えて高遠を攻めて落城させ、そこに陣所を構えてさらに進んで箕輪の福与城へ迫った。福与城に立て籠った藤澤頼親は、藤澤谷で高白斎の軍に敗れて降伏して以来、面従腹背的な立場をとっていたのであるが、このたびの武田の侵攻には決然として対決する道を選んだ。

福与城は一名鎌倉城と呼ばれ、鎌倉時代の築城ではないかと伝えられているが、前方は天竜川の流れに臨み、急峻な段丘を利用し、後方は山が迫って要害堅固な規模の大きな城であった。

頼親は箕輪およびその周辺の侍衆およそ一五〇〇人を結集して福与城に籠り、援けを求められた頼親の義兄の小笠原長時は筑摩から出陣して、辰野の宮所の竜ヶ崎城に陣取り、福与城に呼応して武田の軍に相対した。

激しい城攻めにもかかわらず五月になっても容易に陥落しそうなもので、信玄は攻撃目標を頼親の頼みとする対岸の竜ヶ崎城に向け、激戦の末六月一日にこれを陥れた。下伊那からの援軍の小笠原信貞等も、頼親や長時に加勢のため五月半ばに出陣したようであるが、双方の連絡が十分でなく竜ヶ崎は落城し、長時の軍は筑摩へ引き揚げてしまい、福与城は孤立無援の状態となったため、頼親もついに六月一〇日和睦に応じ、弟権次郎を人質として開城し、城は武田軍によって焼かれてしまった。

「二本家記」「小平物語」等によると、福与城の攻防は五〇日余の長期に及び、箕輪勢は武田の大軍を相手によく防戦し、武田軍はたいへんな苦戦をいられたという。この福与城における上伊那の侍衆の奮戦ぶりについては「妙法寺記」「勝山記」等の甲州方の諸記録にもよく記されている。

福与城に立て籠った侍衆として「小平物語」は次のように記している。

城に籠る武士には箕輪頼親の士衆松島・大出・長岡・小河内・福島・木下是は太身の士也。此外野口・手長八ツ手・平出・高木・辰野・宮本・神戸・赤羽・樋口・有賀・徳戸・柴の者共都合百餘騎共千五百餘城なり箕輪殿の中にも藤澤殿部・大泉上総とて強弓の射手あり城の大手に此者共の箭先に中り寄手大勢手負い死人あるなり

城方の士衆として「伊那温知集」では「福島の城には頼親を大将にして松島・大出・長岡・小河内・福島の衆、木下・殿村・大泉・其外近

郷の土百餘騎兵共千五百人楯籠」と記している。いずれにしても現在の南箕輪を含めて箕輪長野一帯の住人を巻きこんだ大きな戦いであったにちがいない。

なお、この戦で強うをもって知られる大泉上院が頼親に従ってめざましい活躍をしたと伝えられているが、同様なことが『伊那温知集』にも記されている。

高遠から箕輪を侵攻した信玄は筑摩の小笠原長時を迫って塩尻峠を越え、長時の林の館に放火し、さらに桔梗ヶ原に小笠原勢を破って諏訪へ帰陣した。

藤沢頼親のその後の動向については、諸史料の記すところでは、信玄に従ったり、また背いて長時とともに行動したりしていて不可解なことが多い。『箕輪記』『伊那志略』等によれば、武田氏に追われた頼親はしばらく諸国を浪々としており、天正一〇年（一五八二）織田信長が本能寺に滅びるや急ぎ旧地に帰り、北條氏直と手を結んだがやがては保科氏に滅ぼされたという。また『長野県町村誌南信濃』の南箕輪村の陵墓の項に「三好長慶塚」の記事がある。

文久三壬戌年まで、塚上に一大老を存したるに、朽枯を以て伐採す。此塚たるや、天文六年箕輪頼親、武田信玄と戦い、城陥り遂に松尾の城主小笠原氏部少輔信貞と俱に、四国に流れ、三好氏に頼り幾許年たり。天文十一年此地また頼むものなきにいたる。是において頼親、子大膳義成と復通れて箕輪に還る。後三好氏の亡ぶるに及び頼親其恩誼に報せんと、遺物を茲に埋め塚を以て招魂するものと云う。

三好長慶塚があった所は南殿の西で、今は西天竜水路による水田になってしまったが、塚は三間余で周囲に樹木が生い繁っていて、里人はこの塚の上で午睡しようとしても誰も寝ることができなかったという。西天竜のできる前まではこの辺を長慶塚という字名で呼んでいた。

た。

さて、天文一四年六月、箕輪福与城の攻略をもって高遠や箕輪地方を一応手中にした信玄であったが、完全な支配を浸透させるまでには至らなかったであろうか。諏訪郡安国寺に対する次のような文書が残っている。安国寺は杖突峠への登り口にある寺である。

伊那郡に城を取り立て、存するのまま手に属さば即ち福地の郷を寄進せしむべく候。恐々敬白。

天文十五年丙午三月廿七日 晴信（花押）

信州安国寺

（山梨県長瀬寺田蔵文書）

これは伊那郡に城を取り立て存するままに手に属したならば福地の郷を寄進しようという、安国寺を誘っているのである。この文書でみる限りでは、まだ伊那地方を完全な支配下においていたとはいえないようである。

天文一五年（一五四〇）九月には諏訪上社へ伊那郡の地を寄進している。

信州伊那のひろかいと百貫文の地、諏訪大明神に社領としてこれを遺献し奉るものなり。仍って件之知し。

天文十五年丙午九月吉日

晴信（花押）

神長殿

（守矢真幸文書）

これは天文一一年、諏訪上社に伊那の攻略が成功したら、伊那郡に百貫文の地を神領として寄進するという願書を捧げているが、その約束を履行したものと考えられる。

その後、信玄は天文一六年（一五四七）三月には高遠城の鎮立を行

い、翌一七七年七月には小笠原長時の軍五千余騎を塩尻峠に急襲して打ち破り、翌一七八年(二五四九)七月には箕輪の堀を城の鎮立を行なった。続いて一九九年(二五五〇)七月には長時を林の館に攻めて大打撃を与えている。その後下伊那の攻略を果たした信玄は、天文二一年(二五五二)高遠の諏訪頼重を甲府において自刃させた。これにより高遠氏は、信貞以来七代頼重を最後として滅亡し、高遠地方は武田氏が完全に支配することとなった。

天文一一年以来、一〇年にもわたって諏訪から伊那へ攻略の手を伸ばした信玄は、その間に信濃全境にかけてほぼ略略を完成させている。こうして信玄は信濃全境を平定したのであるが、北信濃の残党が越後の上杉氏を頼って信濃出兵を促したために、武田氏对上杉氏の対立となり、天文二二年(二五五三)八月から永禄七年(二五六四)八月までの一一年間、計五回にわたる川中島の合戦に発展していくのである。

(二) 武田氏の伊那統治

武田氏の伊那侵略は、前述したように、天文一一年(二五四二)に諏訪上社へ願文を捧げたところから始まっているが、天文二一年(二五五二)、高遠頼重の自刃のころには、すでに上伊那地方は武田氏の支配下にあったものと思われる。その後、武田氏の伊那統治は天正一〇年(二五八二)高遠城の落城に至るまでの三十数年間に及んでいる。

この間の武田氏の統治はなかなか厳しいものがあつたようで、「小平物語」に次のような記事がある。

此の深遠城を始め天文十七戊申中伊那郡も大方武田晴信公御支配に成り保科殿下條平谷衆此の外小身衆上伊那衆悉く降参仕り各々御礼申し上げる地其の外小笠原殿の爲を存する衆成は強く武田に橋をつきたる人々を大勢御成敗あり小笠原信貞も上方へ参々也。

これによると天文一七七年には松本の深遠の城を始めとして伊那郡も大方は武田氏の支配下になり、保科や下條平谷衆、それに上伊那の地侍たちも悉く降参してしまつた。小笠原の爲を考えた、武田氏に強く屈した人々が、大勢成敗されたというのである。

また、厳しい統治を示すものとして、信玄が上杉氏と北信で戦っている最中に、伊那では一部の武士が武田氏に背いて木曾に攻め入り、信玄の娘が嫁いでいる木曾義昌と戦つたため、これを知つた信玄から厳しい成敗を受けたという説がある。「長野県町村誌南信編」の伊那郡村の古跡の項に次のようにある。

三味場(上略) 須島に往古より三味場と称する舊所あり。適鬼火を見る。古人云い伝う。成敗場とも云う。弘治二丙辰年武田晴信、伊那郡へ討入りの時、侍大將馬場氏部少輔を初めとして、七頭其の勢一万二千余騎にて甲山の城へ入り、降参すべき旨檄文を出す。降参一名も無し晴信大に怒り、諸方にて八人の首を召捕り、須島にて磔に上げる(伊那武田源根元記に見えたり)。然る処、里民其初に其の八人の首を以て、同郡人ノ谷の郷黒河内村に埋葬せしと云う。其田境を移して今に「八人塚」と云うなり。嘉永年間、高遠の個人中村元恒なる者、題して其の碑を築かれ今、該村に存す。

この説は『甲陽軍鑑』に基づく説であり、『伊那武田源根元記』ではさらに具体的に八人の侍たちの名をあげている。しかし、この八人の成敗について『上伊那誌』等によると、他の信用できる史書ではいっさい触れておらず信憑性に欠けると言っている。この件の真偽のほどはともかくとして、信玄の伊那支配の政策は厳しかったようで、その例は「小野文書」の定(信玄の朱印あり)にもみられる。

この定は永禄三年(二五六〇)、当時、小野七騎と称せられた小野郷の地侍に申し伝えたもので、「重科の罪人や国法を犯した者を三日を経るまで隠しておけば、届け出た者も同罪として処分する。また甲州

のために悪いことを聞いて高島城まで申し出たならば褒美を与えよう」というものである。小野が上伊那の北の口に位置する要衝の地であつたからとはいへ、なかなか厳しい運しである。

信玄が甲州法度を定めたのは、天文一六年（一五四七）のこと、その後改訂や追加がなされて、天文二三年（一五五四）には五七か條になつてゐる。正式には「甲州法度之次第」と呼ばれてゐるものである。信玄はこの法度により領国統治をしてゐるのであるから、伊那地方も当然この細かく定められた法度により、行政、治安維持がなされてゐたものと推察される。林貞夫著『甲州法制史』によれば、この法度の内容は犯罪人の遺棄処分禁止規定から隠田に関する規定まで二一項目にわたつて規定されてゐる。

この規定は実に詳細にわたつたものであつたが、永禄元年（一五五八）にはさらに九九か條を加えて、これを下巻としてゐる。下巻九九か條については、法秩序でなく、戦場における倫理規定、家臣の行儀作法の規定、貴人、父母兄弟、朋友、男女などの倫理規定等、むしろ社会秩序をねらいとしたものであるといわれている。

信玄はこのような法度を明確に定め、これによって家臣団を統率し、領国の民政を実施したが、さらに将率を統率する必要から、信玄への忠誠を誓わせた起請文を数多く提出させてゐる。

永禄一〇年（一五六七）八月、甲斐、信濃、上野の諸將から徴し、小黒郡生島足島神社に捧げさせて異心なきことを誓わせた起請文が、今でも同社に現存してゐる。これらの諸將の中には上伊那に關係した者として、片桐源七郎昌為・上穂善次為充・飯島大和守為方・同兵衛尉為政・同出雲守重綱・同志摩守安助・片桐二兵衛尉為房・赤須二郎三郎頼泰・前沢甚十郎繁直等の名がある。この起請文の文面はどれもほぼ同じで、大部分のものは次のような六か條から成つてゐる。

- 一、以前に捧げた数通の誓詞に決して背かないこと
- 一、信玄様に対し奉り、逆心謀叛等を企てないこと
- 一、長尾景虎（上杉氏）を始めとし、敵方からどのように誘われても同意しないこと

一、甲、信、西上野（武田の領国）の諸卒に逆心を企てる者があつても決して動ぜず忠節に固まること

一、妻裏なく二途に涉らず戦功に拘らぬこと

一、家中の者、悪事あるいは隠病の意見を言つても一切詞心しないこと

これらを掲げ天地神明に誓はせてゐるのである。この年の八月のうちに、合わせて二三七名という多数の将士から起請文を提出させてゐることは、信玄が領国内の諸將の統率のために、いかに入念な対策を講じていたかを示すよい例といえよう。

武田氏が領国の統治をすすめるうえで、特に目立つことは神社仏閣に対する政策である。戦国の武將が新しい作戦を開始するにあたり、神仏にその戦勝を祈願し、やがて功成つて目的を達したとき、武具や所領を寄進することは一般的に行われていたことである。しかし、武田氏、とくに信玄は単なる政策のためだけでなく、信仰そのものに極めて真摯であつたといわれている。

次に武田氏が伊那地方の経略に当たつてとつた寺社政策について『上伊那誌』の記述をみると、次表のようである。

三〇余年間の伊那地方統治の間に、現存する史料に基づくものだけでもこのように数多くの諸策がみられるのである。信玄ともなればさらにその数は多く、南箕輪では、殿村八幡宮の社伝に、『天文二三年（一五五四）、信玄は伊那郡を経略した戦功に謝し、七貫二百文の土地を奉納した。』とある。

年 号	寺 社 対 策	文 書
天文11	1542 諏訪上社戦勝祈願(高遠頼継ヲ討ツ)(信玄)	守矢文書
天文15	1546 ひろかいと100貫文ヲ上社ニ寄進(信玄)	"
天文23	1554 箕輪御射山大明神ニ7貫文寄進(信玄)	小池文書
永禄3	1560 上社権祝ニ伊那郡ノ田領安堵(信玄)	矢島文書
永禄4	1561 山崎清水寺ニ伊那郡面木郷寄進(信玄)	温泉寺文書
永禄7	1564 小野大明神宮ニ銅鑪ヲ造ル(勝頼)	小野神社文書
永禄8	1565 下社の祭札再興(信玄)	諏訪下社
永禄10	1567 小泉郡生島足島神社ニ起請文ヲ捧ゲサス(信玄)	生島足島
永禄11	1568 高野山ニ高遠領内仕民ノ宿坊ヲ定ム(勝頼)	榎地院
天正3	1575 高遠建福寺ノ講堂物ノ修役ヲ免ズ(〃)	建福寺
"	" 宮本諏訪神社再建(〃)	諏訪神社棟札
天正4	1576 笠原郷ニ上社御願ヲ勤仕サス(〃)	諏訪忠弘文書
天正6	1578 建福寺ニ鉢持古町ノ入足ヲ使役ス	建福寺文書
"	" 笠原古禅寺門前居住人ノ諸請役ヲ免ズ(〃)	"
"	" 建福寺客殿造立ノ間、門前百姓ノ夫役ヲ免ズ(〃)	"
天正8	1580 竜勝寺ノ寺規ヲ定ム(勝頼)	竜勝寺
"	" 光前寺ニ旧規ノ如ク修役ヲ免ズ(勝頼)	光前寺
天正9	1581 香坂右近助ニ大坊ヲ宛行イ円福寺修造	円福寺
"	"1 建福寺ノ条規ヲ定ム	建福寺

二 織田氏の侵入

元龜三年(一五七二)秋、武田信玄は武田氏の運命を賭けた戦いとなる覚悟のもとに、大軍を率いて伊那から遠江、三河に攻め入った。二俣に戦い、さらに三方ヶ原で徳川家康の軍を破った信玄は、翌元龜四年(一五七三)二月、三河の野田城を攻略したが、その陣中で病が悪化して、やむなく長篠に引き返し、鳳来寺を経て本国甲斐に帰る途中、四月一二日下伊那の駒場で病死した。五三歳であった。

信玄の死後はその子、勝頼が武田氏の統帥となったのであるが、武田氏の勢力拡張を恐れた越後の上杉謙信や三河の徳川家康は、織田信長と手を結んで信濃、甲斐を攻めるようすをみせたので、勝頼は南北に強敵を迎えるという苦境に立たされることとなった。

天正三年(一五七五)五月、この苦境を脱しようとして、勝頼は甲斐・信濃の大軍を集めて遠江の長篠城に家康を攻めた。信長は美濃から救援の軍を率いて参戦し、ここに激戦が展開された。信長は何千挺にも及ぶ鉄砲を揃え、しかも鉄砲を持った兵の動きをもっとも有効に生かす戦術をとったために、さすがの武田軍も大敗してしまった。この長篠の合戦は、天文一二年(一五四三)にポルトガル人によって種子島に伝来された鉄砲が、新兵器としての威力を発揮した最初の戦いとも言える。

信玄の死を継いだ勝頼は、将としての力量は遠く信玄には及ばなかったと言われているが、この長篠の戦いで精銳の將士を数多く失い、その上に縁者にもそむかれて軍内の統制は乱れていった。

天正六年(一五七八)三月に越後の上杉謙信が病死して、北越における上杉氏の勢力が衰えると、勝頼をおびやかす者は信長、家康と駿河の北條氏政となった。天正九年(一五八二)の春、勝頼は甲州新府

〔著〕に新しい城を構えて態勢を整え、これらの連合軍に対抗しようとした。しかし、翌天正一〇年（二五八二）正月、妹婿の木曾義昌が信長に通じ勝頼に反旗を翻した。そのため義昌を討とうとして、勝頼は諏訪の上原城に出陣したが、信長は義昌の救援を機に武田勢攻略の軍を起こした。

天正一〇年二月三日、信長は甲斐、信濃侵入の進路を定め、駿河口より徳川家康、関東口より北條氏政、飛騨口より金森五郎八、そして主力である織田信忠の軍は木曾口と美濃の岩村口からの二手に分かれて進軍を始めた。織田家の補軍であった太田牛一が信長に従った体験をもとに記録した「信長公記」によれば、二月三日の項に「三位中将信忠、森勝蔵、団平八、先陣の爲、尾州、濃州の御人数、木曾口、岩村口両手に至りて出勢也」とある。

織田軍の伊那侵入に対して、勝頼の弟仁科盛信の守る高遠城が激しい抵抗をしただけで、他は織田軍の勢に恐れをなしてほとんど戦いもしない戦いをせずに道をあけてしまった。飯田城も大島城も、飯島の本郷城も伊那の春日城も箕輪城も戦わなかった。

飯島から高遠へ迫る織田軍の様子は「信長公記」に次のように記されている。

三月朔日、三位中将信忠、飯島より御人数を出され、天竜川を越され、其沼原に御人数立てさせられ、松尾の城主小笠原掃部大輔家内者として、河尻与兵衛、毛利河内守、団平八、森勝蔵、足輕に御先へ遣はされ、中将信忠は御はろの衆十人ばかり名列れ、仁科五郎掃部頼朝高遠の城、川よりこなた高山へ懸上させられ、御敵城の板壁、様子御見下置なされ、其日はかいぬま原に御陣取る。

破竹の勢いで伊那谷を北上した織田軍は、天正一〇年三月一日、飯島を出発して天竜川を東へ渡って、富果の貝沼原に陣を構え、河南瀬

戸の白山へ登り、三峯川を隔てて対岸の高遠城の様子を偵分した。またその夜のうちに一部の者は川下の浅瀬を渡り大手の口へと取り詰めていった。

翌三月二日、夜明けとともに織田の大軍は総攻撃をかけ、信忠は搦手の口から、森勝蔵、団平八、毛利河内、河尻与兵衛、松尾掃部大輔は大手口から攻め入って、両軍入り乱れて戦った。龍城の盛信以下一族郎党は力尽きて悲惨な最後をとげ、ついに高遠城は落城してしまった。ときに盛信は二六歳であったと言われている。

高遠城を攻略した信忠の軍は、藤沢の谷を諏訪へ越え、翌三日には諏訪上社から上原城を占領して諏訪を手中にし、さらに甲斐に侵入して七日には甲府に陣取り、一日には勝頼父子を天目山の麓の田野において自害せしめ、ついに武田氏はここに滅びるに至った。

高遠城の戦いについて「高遠記集成」に記されているような次の説がある。森勝蔵（長可）は信忠の命を受けて上伊那の西山沿いの村々を焼き、福島の城を経て有賀峠から諏訪へ入ったが、高遠の城がまだ堅固で、味方が奇手を待っていると伝え聞いて、杖突峠から尾根伝いに荻口へ兵を進めた。そこでまず弘妙寺へ兵糧の炊き出しを催促したが断られたので、勝蔵は怒って寺に火をかけて焼き払ってしまった。次に山室の遠照寺へ炊き出しを命じたが、住僧は荻口の煙をみて恐れをなし炊き出しに応じた。そこで兵糧をとったのち月夜を越えて信忠軍に呼応して城攻めに加わったというのである。

しかしこの説については疑問視されている。

「信長公記」によれば、信長は三月十五日、飯田において勝頼父子の首をさらした後、一七日には飯田から大島を経て飯島に泊り、一八日には高遠に着陣し、一九日には諏訪上社の法華寺に至り、一四日間潜陣している。そこで東国の諸将を謁し、甲斐から帰陣した信忠と対

面し、武田氏の旧領を諸將に分配した。伊那郡はその時毛利河内守秀頼に分配された。

信長は武田氏の旧領を処分し、侵略後の諸政策を整え、やがて四月二日、諏訪を襲って甲斐より駿河を経て安土城に凱旋した。しかし、中国地方平定のため毛利氏と戦っている羽柴秀吉を救援するため出陣の途中六月二日京都の本能寺で明智光秀に討たれ四九歳の生涯を閉じた。信忠も自害して果てた。三月二日の高遠落城よりわずか三か月後のことであった。

信長の急死によって、武田の旧領に配置されていた織田の諸將はあわだしく引きあげ、信濃は領主不在の状態となった。そのため武田や織田に追われていた信濃の旧族は、それぞれに旧領をとりもどし始めたが、南信では東海地方から徳川氏、東信では関東から北條氏、北信では越後から上杉氏の勢力が手を伸ばしてきた。伊那地方では藤沢頼親が箕輪に、保科正直が高遠に復帰し、下伊那でも小笠原・知久・下條氏等がそれぞれ旧領に帰ったが、南から勢力を伸ばしてきた徳川家康の勢力下に属するようになった。

天正一〇年（一五八二）という年は、全国的にもそうであったように、信濃にとってもたいへんあわだしい年であった。武田の支配が衰えると西から織田が侵入し、織田が引きあげるとその空白をねらって旧領主が復帰し、さらに周囲から北條、徳川、上杉が侵入してくるといったように、信濃の情勢はめまぐるしく複雑に展開していった。

三 南箕輪の城跡と家康

上伊那には、その地名をつけて何々城とか、又は単に城とか本城、城山などと呼ばれる城跡が多い（『上伊那誌・歴史篇』）。しかし、これらは近世大名の居城であった高遠城を除いては、いずれも規模が小さ

く、中世において地方豪族の居館や砦（とりで）であったり、狼煙台（ろうえんたい）であったものと思われる。

中世の戦乱の時代では、このような城は武力や支配力の中心ではあっても、その地域の社会的、経済的な中心とはなり得なかった。したがって近世の封建社会になると、そこはいつの間にか山林原野にもどったり、田畑となって耕されたりして城跡はその原形を失ってしまった。そのうえ近年になって宅地造成や道路工事のために、さらに古城の遺構は壊されてその面影さえなくなってしまう。

こうした城の跡は南箕輪にもたくさんあるが、今日ではそれを知る文献が乏しく、出土資料もほとんどないので、その研究には困難な点が多い。ここでは南箕輪の城跡について、その所在、地形とともに江戸時代に残された諸文献や、明治初年にまとめられた『長野縣町村誌』、その土地の伝承、地名等を参考に述べてみたい。

1 榎木城跡（図2-13）

久保地籍天竜川河岸段丘と南沢にはさまれた中段台地上にあって、南は竜の沢の断崖、東は河岸段丘の急斜面、西と北は南沢によって浸食された深い谷となっていて、眺望もよく自然の地形を巧みに利用した城である。城は東西約三八m南北約五八mの長方形で、本丸跡は畑になっており、南に一条の空堀がある。しかしこの堀も久保から登ってきた道路の拡幅工事のため大部分が埋められてしまっている。久保から登る道のあたりを、「きたはし」と呼んでいるが、これは堀を意味し、おそらく大手はこの東面であったであろう。

『南信伊那史料』等によると「天文年間（一五三二―一五五五）の初期に榎木四郎という郷士が沢尻の宮島式部の跡を襲とし、ここに住んでいた。堀と城に属していたが、後に武田信玄進攻のとき、没落して家名を失った」という。現在この地を榎木といひ、まわりに榎木城廻り

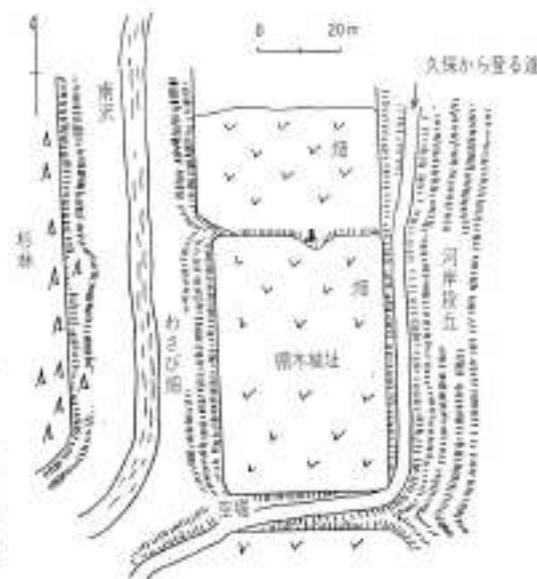


図 2-3 明治初期の南木城跡（『長野県町村誌』）（上）
と現在の南木城跡見取図（下）

丸の西方に約一〇〇m間隔に二条あったと言われている空堀は滝の沢側にわずかにその跡をとどめているにすぎない。

中込城の成立や城主については、全く不明とされているが、福与城に附属していたとする説が一般的である。

3 倉田の城跡（図2-5）

北殿のほぼ中央の東の段丘のつぎる所にある。東西約四〇m、南北約五五mの平地で、今は水田となっている。東は高さ二〇m余の急な崖で、杉の木立の下を飯田線が走り、南と北に深い空堀があり、西にも空堀の一部が残っている。南の堀の一角に北に向けて掘

ら、城東ひら等の地名が残されている。

2 中込城跡（図2-4）

滝の沢と桶ヶ洞の沢にはさまれた中段台地の先端にある。北、東、南の三方を険しい崖に囲まれ、西方に二本の空堀をもち、東西約七六m、南北約六三mあまりの南麓輪では最大の城跡である『町村誌』によると、「城壕、土壁、門戸等の残迹現存し……」とあり、最近まで空堀や土壁が残っていたのであるが、昭和四五年以来の中込団地の造成により、様相は一変し城跡には住宅が建ちならんでいる。東南の隅に当たる所に一辺五〇mほどの方形の本丸跡と思われる所があり、今は遊園地となっていて、城の守護神であったのだろうか稲荷神社が祭ってある。また、本

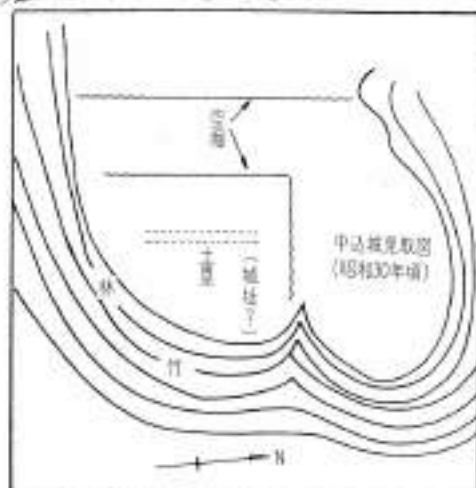


図 2-4 明治初期中込城跡（『長野県町村誌』より）
（上）と昭和30年ごろ中込城見取図（下）

らしくほみがあることから、昔は西の空堀は北から南まで続いていたものと思われる。この古城跡を土地の人は本城と呼んでいるが、ここに接して、北城、西城、ヲ小屋、西小屋、堀ノ内等の地名が残っている。

『伊那温知集』等によると「鎌倉から来た倉田筑後守は、はじめ横

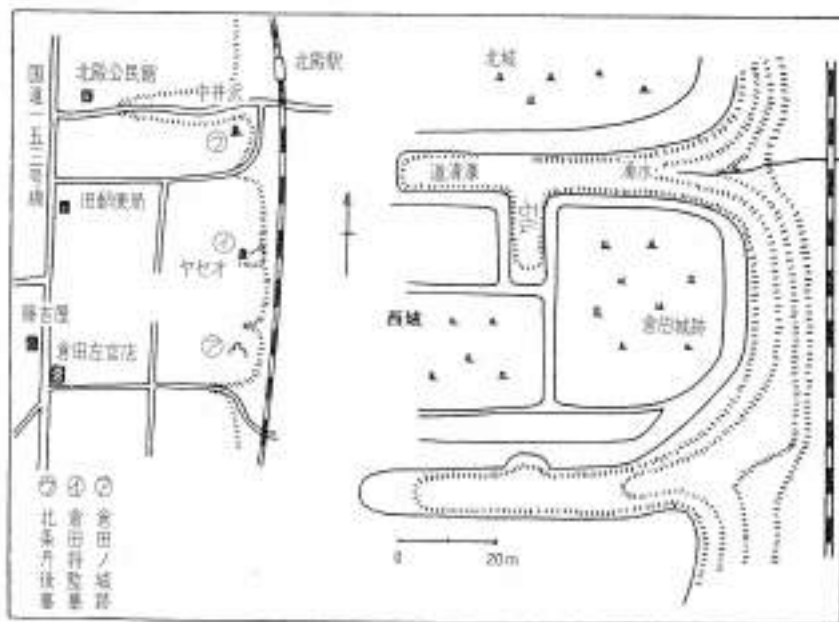


図 2-5 明治初期倉田の城跡（『長野県町村誌』より）（上）と倉田城跡付近の見取図（下）

れている北條丹後については詳しいことはわからないが、『伊那志略』の箕輪の墳墓の項に「北條丹後の墓、北殿ニ在リ。碑面ニ題シテ曰ク。本考超寛信士、辰四月廿日。温知集以爲天正中之人……」と記されている。今この墓はヤセオからさらに北殿駅に近い中井沢を見おろす段丘の上の北條氏の墓の中に建てられている。

山の鳩吹城に居住したが、木曾義康と与地で戦って敗れ、この土地へ来て館を構えた。その子孫得監安光は剛勇の士で、仁科の日岐得監、筑摩の神田得監とともに三得監と呼ばれ、小笠原長時の旗下藤沢頼親に属して活躍し、天文七年（一五三八）七月十九日、甲州並崎の合戦で武田方と戦い討死した。その子淡路守、石見守を経て子孫がこの地に住みついた」という。倉田氏の子孫たちは将監の事蹟をしのんで、いつのころか本城の北のヤセオにある墓地に将監の墓を建てた。碑面には「倉田将監友綱」と書かれている。

なお、この地に倉田氏の前に住んでいたと『温知集』に記さ



図 2-6 明治初期の有賀の城跡（『長野県町村誌』より）

4 有賀の城跡（図2-6）

南殿の、天竜川と大泉川によって作られた河岸段丘上にあり、今も南と北に空堀があり自然石の石垣が残っている。東は天竜川の河岸段丘で急峻な崖になっており、その崖下は、今は鰐池（うしほ）になっているが昔は深い沼田であった。

『町村誌』によると「東西二十間、南北三十五間余、今に城壕（しろぼり）垣（かき）の形を遺す。中古土を鑿（う）て古瓦、折刀を得

……」とある。大手は西にあったと思われるが、このあたりの道路に鍵の手が多いのはその名残りであろうか。西にめぐらされた石垣の上の堀は、明治初年に火災に罹った時、消火に不便であったことから取り払われて、中東家の所に一部を残すばかりである。ここには古くから有賀氏が居住し、はじめ小笠原氏に属していたが武田との戦いの後、民間に落って今日に至っているという。

5 清水城跡

国道一五三号線から大泉川右岸を西へ約四〇〇mほどさかのぼったところに、権現という地名の場所がある。城跡らしい証拠となるものは何も残っていないので、城跡がどこであるかを確定することは困難であるが、ここには大泉川が形成した数mの河岸段丘があり、この段丘と南側のかれた小沢にはさまれて平地がある。中世の小豪族

が居館を構えたのはこのあたりであろうか。また、この段丘の下では豊富な湧水を利用してわさびが栽培されており「清水」という地名にふさわしい場所である。『町村誌』によると「古清水某之に居住し、木曾氏に属す。天文年中武田氏と戦い、後民籍に帰し、本村南殿へ移転し戸を並べて遠商（とんしょう）連絡たり」という。

6 日戸氏城跡（図2-7）

いつのころから日戸氏が田畑に居住するようになったかは、資料不足で不明な点が多い。『南信伊那史料』によると、天文年中、地侍としてこの地に居を構え、箕輪福与城主の藤沢氏の旗下となっており、武田氏の伊那侵入のとき、倉田氏、清水氏、高木氏等とともに藤沢氏に従って戦ったが敗れて、農民にもどりこの地に住んだという。

館跡は、半沢の分流が田畑の東村地籍に流れているが、その分流が国道を横切るあたりの南側一帯と考えられている。館跡の証拠となるようなものは今は何も残っていないが、古老の話によると、館の一角に昔は尼寺があったといい、その名残りと考えられる「阿彌陀仏」と刻んだ石塔が残っていて、今でも日戸姓を名のる人によって祭られている。

7 古城跡（図2-8）

神子柴橋地の北西の段丘上を高圧線が横切っている。その段丘上の山林中にある高圧線の鉄塔のあたりを古城と呼んでいる。ここには現在三角点があり、標高七一・一mと記されている。この段丘は、半島形に東に突き出ているので、南北の展望も開け、東は高遠方面までも見通せる場所である。

文明年間（一四六九～一七八七）、箕輪義俊（小太郎）、同義頼（利部）とい



図 2-7 明治初期の日戸氏館跡（『長野県町村誌』より）



図 2-9 明治初期内城跡（『長野県町村誌』より）
（上）と現在の内城跡見取図（下）



図 2-8 古 城 跡（『長野県町村誌』より）

う木曾義仲の末孫がここに居住していたと伝えられている。城の遺構らしいものは何もないが、この山の下に、城の遺構、殿垣外、小太郎という地名が残っていることから、城があるいは内城と関係のある見張場所や狼煙台があったと考えられる。

なお、この古城のすぐ西の山林の中に、五輪塔といわれる石塔が三基建っており、言い伝えによると古城に居住していた美輪義建（佐衛門、義俊、義頼の墓であるという）。

8 内 城 跡（図2-9）

田畑から南へ流れていく半沢（今中井沢）が、東に曲がって大清水川附近に出る所にある河岸段丘の独立した台地上にある。

飯田線田畑駅の南約七〇〇mの断崖の上にあつて天竜川の沖積平地より約二〇mぐらい高い所である。西には三〇mほどの

幅の半沢の谷、南と東は河岸段丘の急峻な崖に囲まれ、天竜川の上流・下流はもとより、遠く対岸まで見通すことができ、砦を構えるのにふさわしい場所である。

今では北に掘り崩した道があり、東西約六〇m、南北、一〇〇mのはば楕円形をしていて、南端に一mぐらいの高さの土塁があり、その南に二本の空堀がある。

嘉永年間に中村元恒が地方に伝わっている話を書き記した「ひとつはなし」によると、ここには

昔、近藤氏が居住し、その後児島氏が続いたといわれるが確かなことはわからない。

また、西の山際には伊那一二騎の一人といわれる高木氏の館跡がある。高木氏をはじめは小笠原氏に従い、次に箕輪の藤沢氏に属し、天正一〇年には高遠の保科氏に属したというが、これまた詳しいことは不明である。

内城の北に機田という所があるが、文化一一年と安政三年に瓶の中に入った古銭を掘り出した。百三十貫文もあったという。これらの古銭の種類については『伊那志略』に詳しく記されているが、中世に使用された宋・元・明等、中国からの輸入銭で、永樂通宝、開元通宝等、十数種類にも及んでいる。これから察するに相当な蓄えのある勢力者がいたものであろう。現在、瓶の一つは上伊那郷土館にあり、古銭八〇枚ほどが勢喜屋に所蔵されている。

9 宮島氏館跡（図2-10）

沢尻の西北の古屋敷という所に宮島氏の館跡があったといわれ、古絵図には「長者の井」「拝殿」「神殿」「射場」等もあって、この地に宮島氏が住んでいたのは確かと思われるが、館跡がここであると定めることはできない。

『町村誌』によると、文禄初年（一五九二）までは宮島氏がこの地に館を構えて、里長と神職を兼ねていた。それよりずっと昔、文応年間（一二六〇ころ）、御射山社が再建されたとき、宮島氏はその式を執り行なった。羽広の山王権現の棟札に「文明五年六月一日、祭主宮島津盛權行」とあり、これらによって推測してみると、宮島氏は遠い昔から御射山社の神職などをしていた実力者であったと考えられる。

ところが文禄元年（一五九二）に宮島式部一族が近郷の土人に襲われて全滅に近い被害を受け、数人と他国へ逃れた式部は、やがて姉の



図2-10 明治初期宮島氏館跡（『長野県町村誌』より）

夫である久保の榎木城主榎木四郎のもとに害食していた。それから約六〇年を経た承応三年（一六五四）、再び沢尻にもどり村を興した。これには『伊那史料叢書』にみられるように明暦二年（一六五六）という説もある。以来、沢尻は明治初年まで久保の枝村であった。

10 大泉氏の館跡

大泉の南端、大泉川の河岸の宇田代という所に、大泉上総の館跡があった。現在館跡は明らかでないが、地名の田代は田城を意味しているのかも知れない。

『伊那漫知集』によると、大泉上総は福与城の藤沢氏に属し、強弓の射手で、倉田将監、木下総藏、藤沢織部とともに藤沢四天王の一人であった。天文一三年（一五四四）甲州の武田信玄が福与城を攻めた。信玄は諏訪まで出馬し、武田典厩が大将となって、辰野衆を案内として、有賀峠を越えて福与城に迫った。藤沢頼親を大将に、近郷の士百餘騎、雑兵ともに千五百人がたてこもり防戦した。大泉上総は強弓の射手で、さんざんに射たが、衆寡敵せずいに落城してしまった。その後、大泉上総は藤沢氏が滅びるとともに民間の人となったという。

第2節 戦乱の時代

11 座龍城跡(図2-11)
南箕輪村の飛地の最南端で、樺兵衛峠の登り口の三軒屋の南上にあ
り、北沢山の尾根一三〇mの所にある。『町村誌』によれば「東西
百十八間、南北二百三十間、面積二千七百坪余」とある。土地の人は
ザンゴ城と呼んでいるが、山頂はせまきこれほどの広さはない。そ
の下にクリ平と呼ぶ平地があるが、町村誌の記述はここを指している
のであろうか。

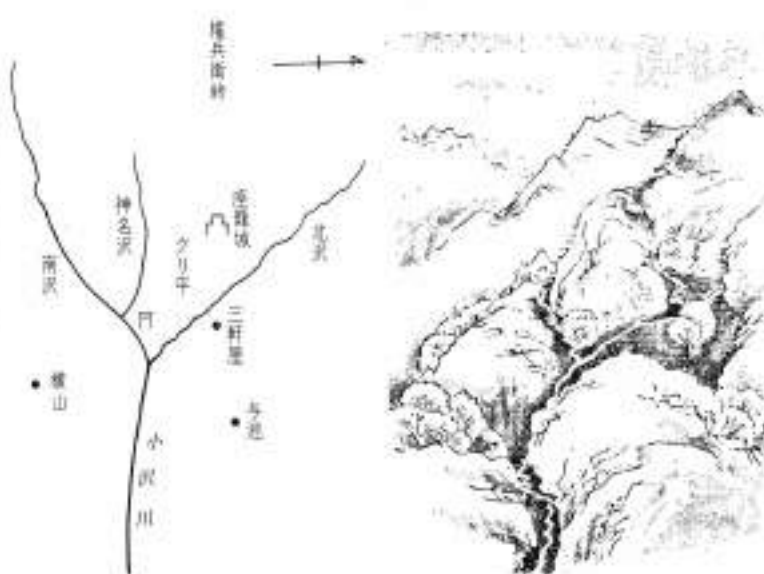


図2-11 明治初期座龍城跡(『長野県町村誌』より)と座龍城の位置(左)

箕輪氏の築いた城で、天文年間(1552-1568)に武田軍と戦い一族
全滅したということである。箕輪氏が武田方とここで戦ったとするこ
とには疑問が残るが、天文年中の木曾義康や、天正一八年(一五九〇)
の木曾義昌の侵入のとき、木曾の軍勢と戦った場所と考えれば、与地
が原にも近くうなずけるところである。



図2-12 田中城跡(『長野県町村誌』より)

12 田中城跡

田中城跡は、久保、塩ノ井の東方、天竜川西岸の水田地帯にあり、行政区域の上では箕輪町三日町地籍に位置している。太平洋戦争後の土地改良事業により、区画整理がなされ、とり残された南北約一五m東西約二五mの土地には雑草が生い繁り、小丘の上に石の祠がある。

古記録によると、もとは方三〇〇mの城域をもち、あたりには、外堀、木戸口、城安寺、古町、町田等の地名が残っていた。上伊那では例の少ない平城であって、築城当時は周囲を深い沼地に囲まれ、東を天竜川が流れて堅固な城であっただろうことが推察される。

天文一四年（一五四五）、甲州の武田信玄に攻められた堀与城は必死の防戦にもかかわらずついに武田の軍門に降り、藤沢頼親は武田に属することになった。その後、武田を離れた頼親は、武田に追われた小笠原長時と諸国を放浪した後、京に上り時の権力者三好長慶のもとに身を寄せたが、三好氏が家臣である松永久秀に誅せられると再び箕輪にもどり、天竜川の氾濫原に新しい築城法からなる平城を築いた。これが田中城である。

天正一〇年（一五八二）、武田氏が滅亡し、続いて本能寺の変で織田信長が死ぬと、頼親は箕輪の旧領を復したが、徳川と通じた高遠城の保科正直等に攻められ、三日三夜の激戦の後、ついに城に火をかけ自決したという。こうして二四〇余年の歴史を持つ箕輪の雄、藤沢氏も田中城落城とともに、その幕を閉じたのである。

慶長六年（一六〇二）、飯田城主小笠原秀政は田中城を修理して陣屋としたが、慶長一七年（一六二二）、天竜川の大洪水のため、陣屋は水下に移された。また、それまで田中城の附近にあった三日町も、天竜川東岸の現在地に移ったという。

第三節 中世の社会と生活

一 集落の位置と大きさ

中世における本村の集落の位置と大きさを推察することは容易ではない。本村には大きな寺院も神社もなく、中世の遺構、遺物もないからその手がかりがない。わずかに発掘された遺跡からは、次のように片々とした資料をあげられるだけである。

北高根A遺跡——(1)中世住居跡二軒……

図2-13

- (2)柱穴群（中世か不詳）
- (3)灯明基 三
- (4)礎の破片
- (5)古銭（開元通宝）
- (6)大甕破片、常滑瓦、鎌倉時代
- (7)陶器片（天目茶碗等）古瀬戸、南北朝時代

高根遺跡

（村跡上巻）

このうちで(1)と(2)が集落と関係深いのが、詳しくは上巻に記述したとおりで、図2-13の2号住居跡も4号住居跡も中世の遺構と思われる。堅穴は浅く柱穴は堅穴の外にあり平地住居と思われる。堅穴内は踏み固められており、土の床面で生活したと思われる。堅穴内にはなんの施設もなく、出土遺物は4号から棒状の鉄製品だけであった。

1 城館跡からみた集落の位置

中世末になって、本村関係の城館跡をみると、段丘崖上にいくつか並んでいる。中世の、豪族たちは、その本拠を段丘崖上に構え、その近くに小名主や在家（一般在郷の家）が集落をなしていたと考えられる。その位置をみると図2-14のように、現在の各区に分布している。

このほかに田畑には清水城（権現）があり、権兵衛帥の麓には座籠城、沢尻には宮島氏宅があった。座籠城を別として、これらの城館跡はいずれも段丘上にあり、それを中心として集落が展開していたものとみることができる。（図2-14）

2 太閤検地からみた集落の大きさ

なお、中世の終わりにあって、太閤検地が行なわれたのであるが、その石高の大きさによって、集落の大きさを推定し、それを円で表すと次の図2-15のようになる。

- | | |
|------------|-------------|
| 1 久保区—榎木城 | 5 田畑区—日戸氏の館 |
| 2 堀ノ井区—中込城 | 6 神子樂区—古城 |
| 3 北殿区—倉田城 | 7 " — 内城 |
| 4 南殿区—有賀城 | 8 大泉区—大泉城 |



図2-13 中世の住居跡（北高根A遺跡）

いことをかこってきたが、中世の資料の乏しいことは、中世の価値の乏しいことではない。

中世という時代は、古い王朝（貴族支配）の秩序や生活の型がくずれてしまい、さらばといって新しい秩序（武士支配）の型は未だ形になっていない初期（鎌倉時代）から、それがしだいに、確固とした中世独特の力強い文化の様式をつくりあげた時代であるといわれている。

さらに注目すべきことは、中世という時代に形成された文化の様式は、伝統となつて今日も生きつづけていることである。衣食住のことから年中行事、信仰的生活にいたることまで、中世は今日の伝統となつて生きつづけている。

こうした中で、ここでは乏しい資料にもかかわらず一般史の流れ

すでにみてきた城館とこの集落の大きさによって、大泉川と帯無川の大扇状地（西部地帯）には、集落はなかった。わずかに大泉川沿いの大泉村、鳥谷川沿いの沢尻があるだけである。この広漠たる台地上では水が求められないので、未開の林野であつたと思われる。集落はすべて天竜川、大泉川、鳥谷川の段丘沿いに発達し、また経ヶ岳山麓沿いに展開するだけであつた。

この図にみるような集落の状況は、古代から中世にかけて長い間に、このように展開したとみることができる。

以上、たがひ本村関係の資料の乏し

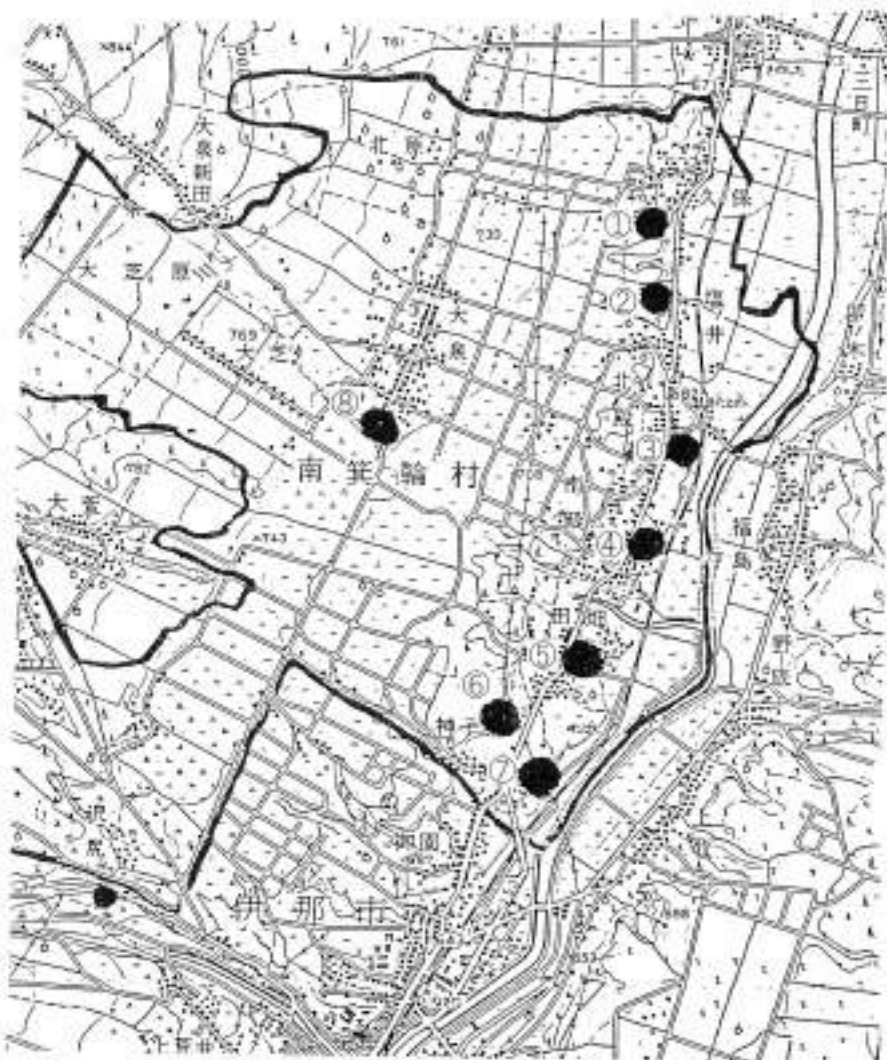


図2-14 南箕輪の城館跡の図

のなかに本村地域の農民の生活をかいまみようとするのである。

二 農民（荘民）の負担

当地域の農民の負担は知るよしもないが、次のべる他地域と大同

小異であったと思われる。荘園領主の取り分は、年貢、公事、夫役に一括されるがこれは、それぞれ前代の租、調、庸に比せられる。

(一) 年貢

水田については、米が徴収されたが、畑については主として麦、蕎麦、大豆、桑等が徴収された。その比率は、従来、三斗代だったものがしだいに六斗代に至るものが多くなっていった。

当時の水田の実収高を直接知ることにはできないが、当時最も良質の地を占めていたと考えられる畑をもつて上田の実収高と考えれば、反当一石五斗一石七斗となるといわれている。三斗六斗という反当年貢は三分の一内外ということになる。本年貢はこのように比較的少なかったが、このほかに種々の付加米が一斗一斗二斗加徴された。（平安末期）

鎌倉期になると年貢の一般的考察は困難になるが、それは、個々の事情が著しく異なっているからであつた。課税率はいくつかの段階にわかれるようになって、二斗一石と、その幅が広がっている。総じていえば収獲高の三分の一前後であった本年貢が、だんだん二分の一くらいにまで増加してきたといわ

九割を徴収されたことになる。秀吉の太閤検地が三分の二の税率で、なお負担軽減であり得たのは、この中世現実耕作者の重負担の中であつたからであるといわれている。

以上のように二重三重の夫役と年貢においつめられた下層の農民のくらしは、何世紀も前の時代とさほど変わらないままであった。年貢を納められずに、土地を捨てて逃げる者も多く、都市に流れこんで非人、乞食となるものも多かった。一方ではこの時代は農業生産が増加したといわれているが、飢饉がおればその被害は下層農民に一番強く及んだ。幕府の所在地鎌倉でさえ、やせ細って歩行もできない人や飢えに苦しむ人が群がっていた。その悲惨な状態は『飢鬼草紙』にみるように、人買い商人さえ横行したといわれている。

三 物質の流通と銭貨

(一) 流通

物資がどのように動いたか、それを知る資料もないが、物資の交換とか売買が行なわれた場所を「市」といった。近辺の市に關する地名を拾ってみると、伊那市には古町・市坂があり、箕輪町には三日町がある。大泉にも市場という小字がある。

物質の流通によってしだいに物に代わって銭貨(ぜに)が使われるようになった。村内の種子菜からは大量の古銭が出土している。当時は戦国動乱の世の中であつたので土中に埋めてその安全を期したものであるうか。これは所蔵したのであるが、実際には使用した例としては、諏訪上社に納めた記録が『諏訪御符札の古書』にのっている。この書は文安三年(一四四六)から四四年間の記録であるが、すでに康正三年(一四五七)に「箕輪藤沢遠江守御符の札一貫八百匁、頭役二十貫文」とある。この年の花会に二一貫八〇〇匁の祭費を課せられた

のである。また「諏訪祭再興次第」の永祿八年(一五六五)には、武田信玄が次のような下知状をだしたことが記されている。

塩野井の奉承事において七貫五百文を免す。此の内老貫五百文は塩之井にあり六貫三百文は高遠料所に候……

これは塩ノ井のこの年の湛神事の祭費として六貫三〇〇文を高遠料から還付させたから、塩ノ井の一貫二〇〇文と合わせて七貫五〇〇文でこの祭事を旧規のように執行せよという下知状で銭貨で示されている。

(二) 銭貨

種子菜耕地に内城があり、古城跡でその昔近藤氏が住していた。付近の土中から古城具が出てくることがあった。耕地の北の方の櫓田という地から、たくさん古銭が、江戸時代に二度も出てきた。

北の方二町余櫓田と呼ぶ地あり。文政年間此の地にて古銭一貫を得たり。安政三丙辰年三月十日亦一貫を得。其の員數百三拾貫文余。尽く皆往昔の銭なり。

(長野県町村誌)

文政年間(一八一八—一八三〇)に一貫出たとあるが『伊那志略』には文化十一年(一八一四)となっていて、詳しく古銭を列挙している。安政三年(一八五〇)のとき出てきた古銭はその一部がいまも種子菜区の勢喜屋に大切に保存されている。(上伊那教育会に順一個と古銭二度も出たこと、しかも一三〇貫という大量に出たことは一驚に価する。古銭の永樂通宝は一個が一匁で、一〇〇〇個が一貫であるから一三〇貫の古銭は重さ一三〇貫、一三万個である。勢喜屋所蔵のこの古銭はほとんど中国銭で、朝鮮銭が一個だけあり、日本銭は一個もない。それを分類すると次のようになる。大泉の北高根A遺跡からも、唐銭の開元通宝が一個出土している。

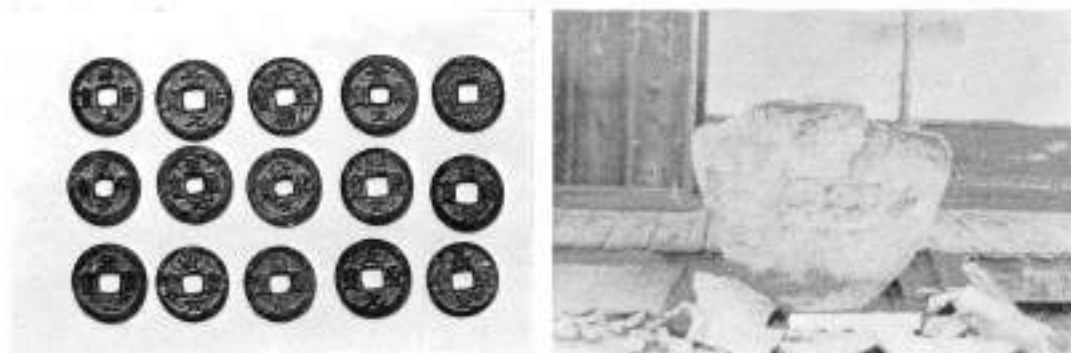


図2-16 古銭とのかめ

表2-8 神子倫徳田出土古銭

出土 種類	古 銭 名	文化11 (1814)	文政3 (1820)		古 銭 名	文化11	文政3
唐 銭	開元通宝	○	1	宋 銭	聖宋元宝		3
"	唐国重宝		1	"	宋元通宝		1
"	乾元重宝		1	"	宋元通宝		1
宋 銭	太平通宝	○	1	南宋銭	紹興通宝	○	3
"	至道元宝		1	"	嘉祐通宝		1
"	咸平元宝	○	3	"	嘉祐通宝		1
"	景德元宝	○	2	"	嘉祐通宝	○	1
"	祥符元宝	○	2	"	嘉祐通宝		1
"	天禧元宝		2	金 銭	正隆元宝		2
"	天聖元宝	○	2	" 銭	大定元宝		1
"	明道元宝		1	" 銭	大定元宝	○	1
"	景祐元宝		1	" 銭	大定元宝	○	1
"	景祐元宝	○	2	" 銭	大定元宝	○	1
"	景祐元宝	○	3	朝 鮮	高麗通宝		1
"	元祐通宝		6	不 明	高麗通宝		3
"	紹興通宝	○	2	"	高麗通宝		2
"	元祐通宝		1	"	高麗通宝		4
"	大政和	○	1	"	高麗通宝		1
"	宣和	○	3	"	高麗通宝		2
"	宣和	○	3			○	
"	宣和	○	5				
"	元 宝		1				

文化11年は『伊那志略』文政3年は徳春屋所蔵

唐銭	3
宋銭	50
南宋銭	8
金銭	3
明銭	3
朝鮮銭	1
不明	12

両度に出土した古銭の詳細を煩をいわず記せば前表2-8のようである。

次に古銭について若干の説明を記す。

唐の高祖は武徳四年(六二二)に「開元通宝」を鑄造したが、これは唐一代の間引続き鑄造され、以後中国だけでなく東アジア諸国の銭の標準になった。一〇個で一両であったが古くから銭は一〇〇〇個ずつ繩（じゆん）におしてこれを「貫（くわん）（二びん）」といった。また銭一個の重さが重量単位の「一匁（もん）」となり、一〇〇〇倍を重量の一貫というようになったのも、この開元通宝からであるといわれている。

「洪武通宝」は中国明朝の初期(一三六八—一三九八)鑄造され、我が国へも室町末期に相当量移入され通貨として使われた。のち大隅国加治木でこの模鑄も行なわれたという。

「永楽通宝」(永楽銭) 中国明朝の永楽六年(一四〇八)から二二年間鑄造された銅銭で、鑄造当初から日本にも大量に移入され、縁起のよい「永楽」という銭文やその造りの精巧な美しさが当時の人の嗜好にあり、江戸初期まで長く標準的通貨の一つとして流通した。しかし、室町末期からさかんに模鑄され、しだいに粗悪になり、慶長一三年(一六〇八)ついに流通が禁止された。

以上、若干説明をくわえたが、これほどたくさんな古銭が、しかも

多量にわたって発掘されたことは、当時の貨銭の流通の複雑さと多様さとをものごとく示している。なお模鑄が盛んに行なわれたというので、まさに中国銭といったが模鑄銭もあるかもしれない。

四 土 倉

穀物や銭を貸して利息をとる法は、奈良時代に「出挙（しゅきょ）」と称し、政府でもまた寺院、貴族の間でも行なわれ、荘園が発達してからは領主の勤農の仕事となり、富豪も農民に出挙を行なった。平安末期になると銭を貸して高利をとる専門の業者がでてきた。高利貸のことを「借上（かかし）」と呼んだ。高利貸の方法も巧妙になり、建長七年(一二五五)には「典物（てんぶつ）」をとって金銭の融通をなすことは、近年にはじまる」と御教書にあるという。業者は質をとったその典物を、火災や盗難予防のため、土造りの堅牢な土倉に納めて保管した。この業者を土倉（どくら）と呼んだ。高利貸はしだいに土倉とよばれるようになり、鎌倉中期から質屋の語もみえるが、質屋が土倉にかわる言葉となるのは近世になってからとされている。

領主による出挙にかわって、専門業者である土倉が、農民に対して種子、農料の貸与を行なうようになったのである。土倉を営むものは、名主など資力のあるものが多かったが、なかでも酒屋や味噌屋でこの土倉を兼ねるものが多かった。ついに酒屋は土倉と並んで高利貸の代表とされた。寺院や僧侶も土倉を営むものがあつた。

しかし応仁の乱(一四六七—一四七七)の後から、しだいに俗人がその力を示しはじめた。酒屋、土倉は正長元年(一四二八)以来しばしば起こった土一揆（どいつがい）に対して、町の管領や有力者に巨額の金を贈って鎮圧を依頼したが、その効果はなかった。酒屋、土倉は浪人をやとい入れて土一揆に対抗しはじめた。

酒屋、土倉はその富をもって、豪奢な生活を洛中洛外で送った。そ

の屋敷は大名の邸宅にも匹敵した。このような酒屋、土倉も安土、桃山時代以後は「問屋」に経済界の実権をゆずったが、なお問屋屋に発展して問屋を支配するものもあった。

四 農業技術の発達

(一) 灌漑用水

わずか三、四反の零細耕作によって、全収穫物の八、九割におよぶ貢租的な負担を負っている土地は、地域によって差はあるが、少なくともその半分は水田であった。畑地もあったが、水田を主体として耕作を従とする農業が領主の利益の対象であった。奈良朝以来畑作農業は繰り返して奨励され、陸田の利をすすめられてきたが、水田の優越を否定することはできなかった。このことは灌漑の問題を民政の最重要問題たらしめることとなった。

耕地の開発は、まず用水の確保にあった。初期の荘園においてはまず灌漑の築造が盛んであり、空海、行基等の名僧がこれらの治水灌漑事業と共に語られている。その後も治水灌漑の手はゆるめられなかったが、事業遂行には相当の財力と労働力を必要としたので、中世になるとそれは荘園領主の手に移行した。

灌漑は農民にとって不可欠の要件であったが、年貢を確保しようとした領主の最大の関心事でもあった。領主は用水の統制については特に留意して、有能な代官をつかわしてその管理分配に当たらせ、井司、井奉行、分水奉行等と称せられた。この井司等は用水支給の代償として荘園から井料をとりたて、それを給分とした。

しかし、この重要な井司職も、いつしか一種の得分と化し、ついに譲与、売買の対象となつてしまった。また一方では用水の請け負い制も発生して、実際の用水支配権はその請け負い者である有力名主（國人

の手に移ることになった。こうして領主等は用水支配権を失うことによって、荘園に対する支配権をも失う結果となつていった。

用水支配権をもった國人たちは、その灌漑施設の整備をはかった。番水法の採用とか、分水施設の設置などによって、用水利用率があがった。この用水管理権を國人がにぎると下人層の中には新開地を保有して作人となるものもでてきた。下人はいままで領主層や名主に所有され、譲渡・相続・売買の対象とされていたが、作人となれたことは大きな社会的変化であった。

しかし、これらの技術は専ら先進地である京都周辺のことである。いまだすべてにおくられていた信濃をはじめ東国では広大な未開地が多く、財力も技術もともなわないので進歩は遅々たるものであった。ここでは耕地の拡張は荒田の修復とか小規模の山田の開発にむけられているにすぎなかった。こうして灌漑をともなった耕地の拡張は、ある限界に達していた。ただ、本村大泉の下井のように「堀掘り割り候儀は何程以前ノ義ニ候や存ジ奉ラズ候」という古い堰も、その原形はこの時代からあったのであろう。

(二) 施設の普及

灌漑をともなった耕地拡張も、耕作農民への賦課率の増加も、侵略による領域の拡張も、一応の限界に達していた。そこで生活水準を維持しながら、生産量を多くする方法は、集約農業つまり限られた水田に対する生産技術の改良のほかにない。そのかぎになるのが、施肥の重要性和田麦による二毛作の奨励とである（しかし、その施肥の記録はほとんどない）。水田二毛作は鎌倉時代には明らかに行なわれていた。

文永のころ（一二六四以後）には田に米と麦の二毛作を行なうのは、諸國百姓のなすところとされていた。そして地方の領主はさっそくにその麦にも租を課した。幕府はその麦の租を禁じたこともあったが、そ

の後莊園の年貢には夏麦、秋麦の名がみえるので、戦国期になるとこの水田二毛作は西日本をはじめ各地で行なわれたらしい。また畑の年貢として同じ畑から麦と大豆とか、麦と蕎麦などがみえるから畑の二毛作も行なわれていたといわれている。

施肥に関する史料は少ないと前述したが、これは施肥が日常化していたからとも考えられる。鎌倉時代の『沙石集』には、「田舎ノ習ナレバ、田ニ人レントテ、小法師養ヲ馬ニ付ケルヲ見テ……」とあるという。この尿の使用のほかに、牛馬の飼育が広く行なわれた当時において、厩肥の使用も当然あったと思われる。また水田に厩肥（山野の草木をむしやきにしたもの）を用いたり、草木を刈敷として用いたりするようになった。

この厩肥や刈敷から、耕地に付属の採草地ができた、山手という使用料を支払わせて入山を許可したりするようになった。これと反対に入山を禁止した立野、立山がこの時代の各所につくられている。入山制限のはじまりがみえはじめている。

施肥の一般化は畑作にも及んだ。山畑の粟、稗、蕎麦などは、古くからすでに農民の生活を支えてきた。この時代になると、年貢のなかに麦、豆、粟、蕎麦、胡麻など多くの畑作物が現れるようになったのは、畑作の増進を示しているといわれている。

(三) 農具の普及

中世になって、特に農具のいちじるしい改良、発明はみられなかった。前代以来鋤、鋤、鋤、鎌などは用いられ、中世になってはただ鶴嘴、熊手などが新しく用いられただけであった。しかし、中世には先進地や上層にだけあった農具が普及した。特に在地の領主や名主地主層だけが持っていた農具が一般農民にまで普及した。この様子を『今昔物語』(平安末期の説話集)には、「下衆百姓までが馬歯・犁・鎌・鋤

・斧」を持つようになったと記している。特に牛馬耕(犁)が農民の間に浸透するようになって、中世の農業はその生産力を決定的に上昇させた。

これらの農具の製造は鍛冶、木工等の手工業者によってなされた。

彼らは莊園で名田、給田を与えられて専ら領主の農具生産に従事していた。ところが農具の普及による私有化は農民の経営の自立化をおしすすめて、手工業者をも自立化させた。鎌倉時代にはいると急に各地に製鉄所(鍛冶)が数えまじ、ときに群れをなして出現するようになった。

種子柴の「梨子が産」からは金屑がたくさん出て、鋼鉄の小片細屑が出たというのも、その一つかといわれ、大泉には「金鋤」とか「金鋤道」という地名が残る。大泉の「鍛冶屋敷」北隣の「鍛冶田」の地名も、それと関係があったかと思われる。

このような農具の普及と土木技術の進歩によって、耕地面積は急増した。日本の耕地面積は平安中期の一世紀から室町中期の一五世紀までの約五〇〇年間に、ほとんど増加しないで、ほぼ九〇万町歩であったのに、室町中期からその末期までの一五〇年間に二倍近くに増大したといわれている。

その増加した時代は戦国時代であるが、当時残されていた未開地は、大川川の氾濫原だけでその開発には高度な土木技術が必要であった。武田信玄の「信玄堤」のように著名な土木工事が残っているが、これは河川敷を広くとって雁行形に造られた不連続の堤で、洪水の被害を最小限にいとめるみごとなもの、現代になお生きている。こうしてこのころから氾濫原の開発がはじまったらしい。

(四) 稲作の進歩

稲の品種は次のようであった。

平安時代末期 法師子、ちもと子、柚の子

鎌倉時代

こいすみ早稲、しょうかひけ

室町時代

ふくしろ稲、めぐろ稲

平安時代から先述地ではすでに種子の浸種を行なって播種するところが行われていた。中世になって農具の普及から耕耘には犁や鋤が用いられてきた。田植もすで行なわれて直接ではなくなっていた。特に地頭の手作田は荘民が賦役によってかりだされにぎやかに行なわれた。田植え期には交換労働である「ゆい」も行なわれていた。中世のいちじるしい進歩として刈り稲を乾燥するのに稲架が用いられるようになった。大和地方から諸国に広がっていった。脱穀は臼に打ちつけるという方法が一般化していた。永祿年間（一五五八～七〇）には我が国最初の農書『清良記』が現れて、生産技術の進展に役立った。

五 衣食住生活

(一) 衣 料

室町時代になって、日本人の衣料が大変革をした。古代からの衣料の中心は「麻」であったが、一五世紀の後半になって「木綿」が登場したのである。木綿の大量が朝鮮との貿易によって輸入され、一六世紀には明からも綿布（唐木綿）の輸入が加わった。

上層階級から木綿の着用がはじまり、同時に綿の栽培もはじまって、「三河木綿」などの名が通用するようになった。綿織物の肌ざわり、保温性、耐久力、通気性、染色性などは、いずれも日本の風土に最適の衣料である。このためたちまち庶民も麻布から綿布に移る傾向にあった。当地方は寒冷のため綿の栽培には適しなかった。

寝具はこのころから綿入れの敷布団や夜着が着用されたとしているが、一般農民への普及はまだであった。農村では藁や藁が寝具と坐具を兼ねているのが、次の時代までの一般であった。

(二) 食 事

日本人の主食は古代以来、米とされているが、米は税の対象であり、物価の基準であったので、生産者である農民の主食ではなかった。農民の主食は雑穀食であった。しかし、中世になって、前記のように農業生産の向上がはかられ、米の収穫が増加したので、米常食の習慣がかなり下層民まで及ぶようになった。時代の下層民の気風によって、上層と下層の食生活の差がちがったのである。

米は黒米または赤米とよばれた玄米と精白米（半粳米）とになった。古代以来の調理方法は、蒸す方法が中心でこれは強飯と呼ばれていた。この時代になっても伝統を守る公家たちは相変わらずこの強飯が普通であったが、庶民や武士の間では、いまの飯と同じ飯（粥）が普及し、それがやがて日本人の一般の食習慣となっていった。そして強飯は行事など晴の食膳の赤飯として残った。

食事の回数、古代から朝夕の二度食が普通であったが、この時代から三度食がひろまってきた。農民は体力の消耗がはげしいのでもともと三度食であったが、武士も戦陣にあつては三度食であった。寺院でも非時という日中の軽食があった。そのようなことから三度食が一般化し、昼食をたべるようになった。

この時代はまた南蛮の影響もあって、トウキビ、カボチャなどが食されるようになり、油料理も加わった。そうしたなかでてんぷらという日本独特の油料理も生まれた。また大根のたくあん漬けもはじまり、梅干しもつくられるようになった。

特にこの時代にいちじるしいのは、鉄生産の進歩と窯業生産の発展である。大型の甕や甕などもできるようになり、須恵器（素焼）をすてていっせいに農民生活に対応した雑器専用の生産に移っていった。尾張の「瀬戸」は中世において唯一のかつ最大の磁器生産地となっ

た。

本村の遺跡からも、次のような中世の出土品がある。さきに記したように、北高根A遺跡からは甕の破片が出土し、高根遺跡からは、大甕の破片（常滑瓦、鎌倉時代）や陶器片（天目茶碗等）が出土しそれは南北朝時代の古瀬戸産とされている。須恵器の素焼に対して、釉（うぐい）を用いた瀬戸物は光沢もよくなめらかで使いよかつたので、急速に普及していった。

四 住居

中世の住居は鎌倉時代には堅穴式と平地式との中間方式で南北朝時代以降は平地住居となる。そのため住居跡の発見は前時代よりも困難で、確かなことはわかっていない。

この時代に書院造が成立したことは一般に知られている。書院とは元来寺院の僧侶の私室のことで、居間と書斎と接客場を兼ねるものであった。これにならって武家の住宅建築でも一家の主人の書斎兼接客場が書院となったのは、中世の後期であった。ところが一六世紀後半の安土桃山時代になると、武家だけでなく庶民の住宅にも、この書院造りが流行しはじめ、ついに日本の住宅の基本となった。襖障子に絵面を描き、欄間に透し彫りの彫刻をしたのもこのころからであった。

しかし、書院造りは豪農の住宅で、一般農民はまだ草葺きの粗末な家で居間といっても、土間に板敷や藁などを敷いただけで、板の床もないほどの粗末なものであった。古代の住居には炉はあったが、流れの水を使用して炊事をする共同の炊事場であったのが、井戸を使うようになり各戸に「かまど」ができるようになった。本村の北高根A遺跡の住居跡については第三節の一でのべたとおりである。

農家にとっては広い土間は重要な生産の場で飼育など畜産の仕事場であった。また庭も庭園をつくる余裕もなく、庭では農作業が専ら行なわれた。

室内の照明は炉のあかりから、灯油をともした灯台やろうそくを使用するようになった。本村でも北高根A遺跡から灯明皿が三個出土している。小田原提灯が旅の必需品となったのも室町時代で、これによって夜の外出が安全に簡便にできるようになった。暖房用には火鉢や炬燵が使われるようになり、いずれも木炭を熱源とした。

中世の住居は粗末な土間（居間）と粗末な客間（さしき）であったが、しだいに居間と客間に分かれ、それによって日本式の「お座しき」が普及していったとされているが、本村にはまだそれらしい遺跡は見えていない。

四 年中行事

以上のように、衣食住ともに中世において、現代の日本の衣食住生活の基本が成立したといわれている。

農家暦をもとにした年中行事も定着した。いままでも公家や武家の間で行なわれていた行事と民間で古くから行なわれていた農事暦による行事とが結びついて、年中行事がきまってきた。五節句（正月、三月、五月、七月、九月）が庶民の行事となり、神に供えものをしたり、休養をとる日となってきた。こうして行事の日には、特別の衣服（晴れ着）や特別な食事（舞踊志）が用意され、村人をあげて行なう農家の伝統行事が根づいていった。

六 社会風潮と生活

（一）武士

中世とくに鎌倉時代の武士は、地方に土着し、土地を支配に所有して、農業生産にあたるのを原則としたので、質実剛健を旨とする兵農一致の生活を営んでいた。謡曲『鈴の木』の主人公佐野源左衛門常世

が、貧しい土着生活を営みながら、いざ鎌倉という一大事に、ただちに馬にまたがって馳せ参じたという、それが武家の手本とされていた。

これは理想化された話であるかもしれないが、北条氏の滅亡のとき諏訪氏の多くがこれに殉じたということは既にのべたとおり現実であった。

このとき諏訪三郎盛高が、幼少の龜寿（北条時行）を背負って兵火をのがれ諏訪に帰り、これを養育した。伊那市富原の「北条屋敷」や高遠町御堂垣外の「権殿屋敷」はその転々とした養育の跡かといわれている。この北条時行が中先代の乱の主人公であり、大徳王寺城の戦いの主人公でもある。

当時諏訪郡内にあった当村地域の農民に、こうした事件はどのような伝えられたか。農民はどんな感慨をもってこの事件をうけとめたであろうか。

このように御恩をうけた主人に報いて、奉公の誠を尽くすのを第一とした武士は、常に武芸（特に騎射）をみがいていた。その騎射が遊戯化されたり神事化されていた。笠懸、流鏑馬、大迫物などもそうしたもので、当地の御封山神事などでも行なわれていたかといわれている。「春秋ノ二祭此ノ樹下ニ神輿ノ休ム所トスト、其ノ他流鏑馬所神戸御舞瀬アリ。」（『長野県町村誌』）とある。

(二) 農 民

室町時代（南北朝時代を含む）は一四一―一五世紀であるが、この時代の社会風潮は、「下剋上」（下が上に剋つ）といわれている。より下位の武士たちによる上位権力者への反逆という、道徳的には非難めいたことばであったが、支配者内部のあつれきだけでなく、農民一揆や農民内部の解放などが、すべての階層のなかで顕著になるようになって、

一般に社会風潮を表わすことばとなった。

先進地での農民は、はやくも独立自営の傾向を強め、荘園の枠を離れた村ごとの団結を高めていた。この組織を「惣」と呼んだ。村惣を中心として連帯的、共同体的統合の強化によって武家や領家の代官支配を拒否した。惣中が一致団結して守護や国人のきびしい徴税を認めず、かえって地頭や守護の年貢請け負いにならって、農民自らが請け所となった。これを「地下請け」と呼んだ。この地下請によるたかいは一四世紀後半（南北朝時代）からしだいにひろがっていった。そして惣の強大な力は、荘園制に根本的な危機を与えたばかりでなく、いよいよ強大になっていき、土一揆や一向一揆ともなり、幕府権力と正面衝突も辞さないまでになっていった。

すでに正長元年（一四二八）には京都近郊の農民が、都に乱入して高利貸業者をおそい、勝手に借用証文を焼きすてた「土一揆」もはじまっていた。この徳政一揆とも呼ばれる一揆は、奈良、伊勢から「日本国」のこりなく御徳政」といわれたように、全国にひろがっていった。

しかし、東国にあった当地の農民は、この時代の風潮をどのようにうけたのであろうか。資料がないのははっきりしたことはわからないが、全然無縁であったともいえない。こうした惣の動きとは別に武士化していく農民もあった。

守護の権力が増大してくると、荘園の領家は守護の権力に依存しなければその荘園を保持することもできなくなった。そしてもともと守護地頭と称せられてそれぞれの権限をもち封々であった地頭も、守護の保護がなければ土地を保持できなくなり、武士化してきた名主は守護の被官（家来）となり、荘官さえも守護の被官となり、守護の命令によって軍役に従うに至った。こうして守護の領国化がすすみ、守護

は自ら大名と称するまでに強大になった。

応仁の乱によって、この守護の武力による荘園分割併呑の勢は頂点に達した。彼らはその作人、下作人たちを同時に兵力として、その下に有する武士と化していった。そして戦国時代ともなると所々にしばしば争乱がおこったので、農民（作人、下作人）たちは、守護や地頭の課税に応じて出陣し、しだいに武士化していった。足軽というのは駆使、雑役を行ない戦陣では歩卒となるものであった。福与城や田中城の戦いに、何々衆とある衆の中には、こうした武士化した農民もあつたことであろう。

以上のべたように中世の農民は、江戸時代の農民とちがって、あるいは惣をくみ、あるいは武士（足軽）となつて、自由奔放なふるまいもできた。そのめざましい活躍ぶりは海外で活躍した倭寇を連想させるものがある。この時代の一つの特色と思われる。

(四) 風 俗

この時代から、家父長権が確立したとされ、婿入婚（母系制）から嫁入婚（父系制）に移行したとされている。

鎌倉仏教の誕生により、仏の教いが庶民の手の届くところになった。

庶民はこぞって新しい教いに群がった。当村地域に鎌倉仏教の禅宗（宗洞宗）の多いのも、こうした農民の地盤があつたからのことであると推察できる。とくに古代仏教の聖域はいずれも厳しい女人禁制であつたが、鎌倉仏教の開祖たちは女人往生とか女人成仏をといっている。

ここにも時代の風潮があつた。

第四節 交 通

一 京都への道

東山道は前代に造られた官道であり、山陽道の大路につく中路で重要な道路であつたことはすでにのべた。この東山道は伊那谷の天竜川西岸を通つていた。美濃の国から神坂峠をこえて信濃の国に入り、伊那谷を北上して宮田駅から深沢駅をおつて筑摩の寛志から東北蝦夷地への通路であつた。

東山道が本村地域のどこを通過していたかは、はっきりしていない。通過地点ばかりでなく南の宮田駅も北の深沢駅もその駅の所在地がいまだはっきりしていない。それにしても、大清水川や鳥谷川をどこで渡ったか、まして大泉川をどこで渡ったのであろうか。上段説は吹上辺であるとし、中段説は春日街道沿いとし、下段説は天竜川右岸の段丘下であるとしている。このうちのどこかを通つたのであるが、重要な官道が伊那谷を通つたことはたしかであるから、たとえ官道は地域住民の生活道路ではなかったとしても、中央先進地の文化を伝える道であつた。しかし、この官道は、九世紀末から早くも衰へはじめたといわれているから、中世になってはいよいよ衰退し、果たしてどれほど官道の面目を保っていたか疑問である。中世は戦乱の時代であつたので時に交通杜絶もあり官道は腐れたであろうが、人馬の往来はしげくなり、伊那谷南北の往来は盛んになつたと思われる。

室町時代は庶民層の台頭が著しい時代であるといわれるその一つに、新しく庶民の旗がはたつたことである。社寺参詣など信仰の旅はこれまでほとんど貴族や武家のものであつたが、庶民の社会的、経済的成長にともない、庶民にも旅をする機会がおとずれた。

伊勢神宮は国民の總氏神であるから一生に一度は参詣しなければと、伊勢参宮が盛んになった。その旅費調達的手段として伊勢講を結んだ。こうした参宮の風は天正年間（一五七三—九二）にはほとんど全国で行なわれるようになった。大泉には江戸時代からの伊勢講があり伊勢講田という田をもっていた。今でも「伊勢講利害書上帳」が毎年作られている講もある。これらも旅費調達の遺風であろうか。

このほかに熊野詣、善光寺詣なども行なわれるようになり西国巡礼、板東巡礼、秩父札所巡りなども行なわれるようになった。これらの参詣巡礼は、観光的要素はきわめてうすく、純粹に信仰的性格が強かった。村のあちこちにその巡拝の塔が立っているが、これも中世からの遺風であろう。

特に慶長一四年（一六〇九）に大泉村の二二人が大挙して尾張の津島神社に参詣して（第五節③）いるのは庶民が旅を盛んにしたしるしの一つといえる。（四—五人が普通で、二〇人以上の団体のなかった時代のことである）

二 鎌倉への道

鎌倉に幕府ができたため鎌倉を中心とする路線が発達し、鎌倉街道と呼ばれた。地方各地の御家人たちが「いざ鎌倉」という時に鎌倉を目ざして駆けつける道であり、また鎌倉の文化が伝播する道であった。

鎌倉時代は信濃の武将が中央の鎌倉で大いに幅をきかせた時代であった。頼朝のころには弓馬の達人として上洛の随員に選ばれたり、笠懸、流鏑馬、大迫物などの請の射手として選ばれたのは、福与城主とゆかりの深い藤沢氏であった。承久の乱（一二三二）の後諏訪上社の諏訪氏は、その軍功によって北条氏に重用された。また乱後北条時政

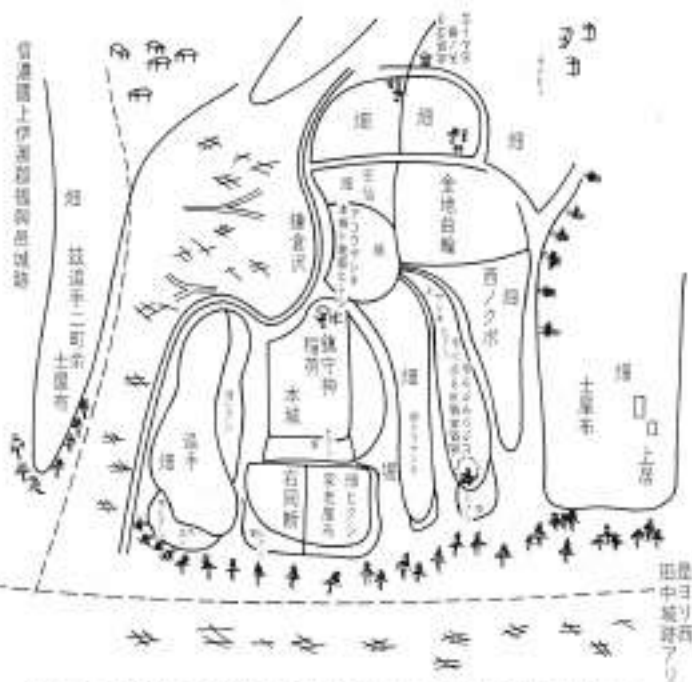


図2-17 鎌倉城といわれた横手城跡の図『実輪記』鎌倉氏が記されている

の孫重時は「信濃守護」となり、その子孫は守護職を継承して、信州とは縁が深かった。

以上のような関係からみて信州と鎌倉との往来は相当しげく、中央の文化が信州の各地に流れこんだ。とくに上田市の坂田地区は「信州の鎌倉」いわれ国宝や重要文化財が残り当時の学問の府であった。当地区も諏訪郡に属し諏訪氏の配下にあったのであるから、当地区から鎌倉への道にもぎわったことが想像される。

しかし、その鎌倉への道は伝承にも残っていない。ただ、近くの山

寺白山社の「やき餅屋」という伝統祭事の中に「鎌倉街道銭持てござれ」という詞が残り、『伊那古道記』や『ひとつはなし』にもそのことが記されている。

箕輪から鎌倉へ出るには当然諏訪を通る。諏訪から甲州へ、御坂峠をこえて箱根竹の下で東海道に合し、足柄山を越えて、鎌倉へ入る。この経路が鎌倉街道である。当地区から諏訪への道は、高遠経由のほかに次の四筋がある。

- 1 長岡新田→門平→後山→真志野（真志野峠）
- 2 平出→上野→豊田有賀（有賀峠）
- 3 平出→牟平→小坂（小坂峠）
- 4 平出→駒沢→岡谷

このうちで箕輪地方から諏訪へ出るには1、の真志野峠越えが多く利用されたと思われる。

ちなみに、箕輪の福与城は別名「鎌倉城」ともいわれ、その下には「鎌倉沢」という川もある。（図2-17）

第五節 中世の文化

一 諏訪信仰

(一) 諏訪信仰圏内の南箕輪

諏訪神社は上社と下社とからなっている。諏訪社という一地方神が、信濃国一の宮として全般的に信仰されるようになり、さらに中央神として全国的に広く信仰されるようになった。

無格社以上の諏訪神社の総数は、長野県内に一〇〇〇余社、全国では五〇〇〇余社に及んでいる。『諏訪信仰史』によると、その分布は図2-18のように新潟県を筆頭に北は北海道から南は九州の鹿児島に及んでいる。上伊那郡でも『上伊那郡』によれば表2-19のように、上伊那の神社の祭神は、どの歴史書においても第一位を占めていて、約半数（四六〇）を占めている。

諏訪明神の由来は、国譲りの神話の『古事記』（奈良時代）からはじまって、『聖武秘抄』（平安末期）や『諏訪明神繪詞』（室町時代）『吾妻鏡』（鎌倉時代）等々によって知ることができるとされている。

現代でも諏訪神社に関する文獻は実に多い。ここではそれらの中から『諏訪史』第二巻を中心にして記すこととする。

諏訪社は狩猟神であり農耕神であるとされているが、時代によっていろいろな神として信仰された。国家神成の神（古事記）、風雨神（持統天皇紀）、牧畜神（平安時代官歌）、軍神（戦国時代）、猪鹿災除神（元禄時代）美姫守護神（化政時代）などと推移し、太平洋戦争中は軍神、戦後はもとの農耕開拓神となりさらに交通安全神ともなっている。

さて、当地域にも後述するように諏訪社が多い。ことに当村は区名の由来がほとんど諏訪明神によっているほど関係が深い。その理由の

一つとして、本村をふくんだ当地域は諏訪郡に属していたことがあげられる。昔の伊那郡と諏訪郡の境は、小沢川であったとされ、また大田切川であったとさえいわれている。

諏訪郡の境方々相違に付いて往古の標榜羽尋ね候条一々書き付け進上候。伊那郡の境は大田切に候。疑いなき証文神祕絵録起の内より兩邊送り出で候。

「神長從國訪郎境竟書」



図2-18 府県別諏訪神社分布数
(無格社以上：5031社 諏訪大社の教示による)
〔諏訪信仰史〕

表 2-9 上伊那神社祭神 (上伊那郡)

	諏訪明神	八幡神	伊勢神宮	熊野社
神社仏閣記	30	31	9	5
伊那志略	55	50	15	12
長野県町村誌	73	41	19	8
南信伊那史料	76	51	19	6
上伊那郡史	73	55	27	11
一覽表	87	63	33	11
	46%	34%	14%	6%

ここでは大田切川境界説を主張している。大田切川ならなおさら小沢川説であっても、本村地域はすつばりと諏訪郡内であった。

諏訪郡内にあったということは、諏訪の政治的文化的信仰的國內であつたということである。諏訪氏（建御名方命を祖神）系統の人がその關係者に、この地域の開拓者が支配され、この地域の生活文化の主流が諏訪系であつたことである。

こうした地域である私たちの村に、守護神としてまた開拓神とし

て、建御名方命をまつる諏訪社がいくつか建立されたのは当然であった。そして諏訪明神の信仰のうちのいくつかが、そのまま、あるいは少し形をかえて、例えば御射山信仰とか、遷神事とか、さらに鹿祭りなどとなって、伝承されてきた。

(二) 南箕輪の諏訪社

信濃の国一の宮と呼ばれた諏訪神社と祭神を同じくする神社は、本村には次の表2-10のように七社もある。この表のうち後の三社、すなわち沢尻(西戸)、大芝、北原の神社は戦後昭和二〇年代のもので、開拓地の人々が心のよりどころとして開拓神としての諏訪明神をお迎えしたものである。戦中には満洲開拓団の人々も、多く諏訪明神を迎えたというが、本村の開拓団にもこうして、開拓神として諏訪明神を迎えられた。

はじめの大泉、田畑、北殿、神子柴の四社は、いつごろ創建されたものか、「その草創を知らず」(田村誌)と記されているように、はっきりしたことはわからない。それほど古くからあったものである。おそらく村の草創とともにできたものであろうから、江戸時代以前中世にさかのぼるものと思われる。

その草創のころの住民は、生活のすべての面の安泰をこの諏訪神社に期待し祈願をしてこの神社を建てた。「諏訪大明神絵詞」は中世にできた記録であるが、これによると、諏訪大明神は農耕を主体として、狩猟も漁労も地の鎮めなどもし、一年に七五度もの祭事があつて、天地の神にいのちを記している。

こうした神の力をあがめ、また守護されることを念願して、当地域には諏訪社がこのように多く建てられたのである。

表2-10 南箕輪における諏訪神社

地区	神社名	祭神
大泉	大和泉神社	建御名方命(もと諏訪大明神社)ほか
田畑	田畑神社	建御名方命(もと諏訪社)ほか
北殿	里宮神社(藤)	建御名方命、八坂刀売命、豊受大神
神子柴	御射山神社	建御名方命、八坂刀売命
沢尻	諏訪社	建御名方命
大芝	大芝神社	建御名方命(ほか四神)
北原	諏訪神社	八坂刀売命

この村についての中世の記録はまことに乏しい。しかも、その乏しい記録の大部分は、諏訪神社(上社)関係のもので、表2-11のように各村に及んでいない。

表2-11 本村と諏訪神社の関係

久保	「くは三頁百列」	文明二年(四三)	伊那郡満日記(矢島文書)
殿村	「殿村之分正物 七斗かす藤七升」	大永四年(五三)	御造宮日記写
塩ノ井	「於塩野井春冬高」	永禄八年(五五)	諏訪上下社再興次第
大泉	「大泉之郷 合三百九十文」	天正六年(五八)	上諏訪大宮前宮造宮帳
沢尻	「沢尻郷合六十四文」	天正六年(五八)	同 右
田畑	「諏訪郡塩島村の校郷 神子柴」	御頭祭参加	十年に一度 伝承

この詳しいことは後述するが、この表でみると、南箕輪村の古村のほとんど全部が、諏訪の上社関係の造宮とか神事に関係している。北から久保、塩ノ井、殿村、田畑、神子柴の各村々、さらに上段の沢尻、大泉までの村々である。

久保、塩ノ井には上社の大きな祭事である廻漕が行なわれていたし、沢尻、殿村、大泉では上社関係の造宮にかかわる応分の負担をしてい

る。さらに田畑、神子柴では、諏訪中州の福島村の枝郷として上社の御頭祭に参加している。

これらの記録は事実として、私たちの村全域が、中世において、諏訪神社と深い関係を持ち、諏訪の文化圏に属していたことをものごとがたっている。

③ 地名の由来

南箕輪村から西箕輪地区にかけての広大な扇状地一帯は、昔はどのような状態であったか。明治初年の「村誌」によれば、往古は建御名方命の御狩りをされた地帯であり、この地域の人々が御射山の社をまつり、地名や山名にそのゆかりの名を存していることになっている。

建御名方富命御狩の古跡

本國ノ地勢タル深山幽谷ニ猛獸ノ出ル有ツテ大害ヲナス。本村ノ民其ノ害ニ堪エズ之ヲ建御名方富命ニ哀訴ス。命ヲ奉リ本村及ビ西箕輪村ノ山原野ヲ狩リ、尽ク猛獸ヲ驅リ、民初メテ其害ヲ免ル。各万才ヲ詔イ御射山社ヲ祀ルト。

命御名方富命御狩イシ地今猶現然トシテ其名存スル左ノ如シ

供奉 今久保ト改ム命ヲ供奉シ奉ル地 供奉ヲ呼ビテ久保トナスナリ

殿 今殿村ト稱ス命行宮ヲ占給イ群臣殿前シ奉ル地ナリ

今南北ト二耕地トナル

田 今田畑ト改ム 命及ビ群臣へ納ヲ献セシ地ナリ

御頭場 今神子柴ト改ム 則命行宮ヲナセシ地ナリ

沢 今沢尻ト云ク 命建御名方富命ヲ祀ル地ニ屬スル地ニハ用テ尻ナル

ヲ以テ今ノ村トナルト云ク

矢ノ入山、御射山、麓山、御射山平ナド、

命御狩ヲナシ給イシ地ナリ

(明治九年村誌)

なお、大萱（大萱屋）、上戸（神戸）、御園（御園場、遊宴地）も、命の御狩の行事に関係した地名としている。

また、南殿の西南に猪ノ子芝という地名の所があるが、これにも、建御名方命がこの地に生息していた猪鹿の害を除いてくれたことになっている。

猪ノ子芝本村南殿耕地ノ西南五町許ニシテ大泉耕地ノ東南方交界ノ処ニアリ今畑トナリタリ往昔猪鹿群集常ニ此ノ地ヲ占メテ兎ヲ乳養シ甚ダ民害ヲナセリ建御名方命之ヲ驅リ獲キタリト云ウ

(目 村誌)

なおまた、この地には大蛇もでたらしく、中世末の天正年度（一五七三—九二）にしばしば出てきて人を悩ましたので保科正直の家臣井沢某がこれを退治した、その大蛇をうずめたところが「蛇塚」だとしている。これは大泉の東南にある蛇塚で、蛇抜堀も大萱にある。

蛇塚 本村大泉耕地ノ方丈町許ニアリ天正年度保科正直時ノ領主タリ家臣井沢某ニ命ジテ此地ニ出ズル大蛇ヲ屠リテ瘞メシ処ナリト云フ此蛇今ノ大萱耕地ニ在リ此ノ地ニ出テ人ヲ悩マス因ツテ此舉アリト大蛇ノ例ニ出シ地ヲ今ニ蛇抜堀ト云ウ（新著聞集二見三）

(同書)

以上、本村の各地と建御名方命の関係がどこまで真実性があるかは、はっきりしないにしても、本村の大部分の区名、久保、殿村、田畑、神子柴、沢尻が、一つ一つ命の狩猟（猛獸狩）と関係づけられ、また麓山、御射山、矢の入山などの山名もその他の猪の子芝等の地名も命と関係づけられて命名されたというのである。

このことからこの村一帯が、その昔は猪や鹿をはじめとして、けだもの類が多く、その狩猟場でもあったが、その害にもなやまされた地域であったことがうかがえる。

御射山神社

1 御射山神社再興の訴え(碑)

先にのべたように、広い西部の一角は、健甕名方命の御狩の古跡であり、多くの地名がそれに由来している。それと直接間接に関係のある「御射山社」と刻まれた石祠(石碑)が、広野のまん中に、立っている。そこは広域選果場のすぐ南隣りで、二本の落葉松の大樹が立っている。

この西部地区一帯は現在では、西天竜の水田地帯となり、その西には広大な西部開発による畑作地帯が開け、その北西部の森林地帯は運動公園としての大芝高原となっている。しかし、その昔は全面が広漠たる森林または原野であったにちがいない。当地の御射山祭という大規模な神事を行なう場所として、諏訪郡原村の神野に比すことができる狩猟の広野であった。

「御射山社」(碑)はそういう所に建てられているが、人々の目につくほどの大きさをもっていない。しかし、一度その碑陰をよむと、御射山社を再建できないことを嘆き、後世にそれを期待する訴えの大きいのに驚かざるを得ない。

まず、「御射山社ノ華表ノ礎石ニ在リ」の冒頭のことばは、かつての大御射山社の鳥居の礎石がここに事実としてあることを、厳としていっている。

御射山社、華表ノ礎石ニ在リ(原大同四年己丑ノ歳坂上田村丸ノ願勅征而本社ヲ建ツ後四百五十一年ヲ経テ文応元年庚申再建ス又三百二十六年ヲ過キ天正十三年乙酉十一月地大三震動シテ遂ニ破壊スル也)

その御射山社は、大同四年(八〇九)の平安時代に、坂上田村麻呂が創建した。それから四五〇余年を経た文応元年(一二六〇)の鎌倉時代に再建され三〇〇余年間続いた。ところが、桃山時代の天正一三年

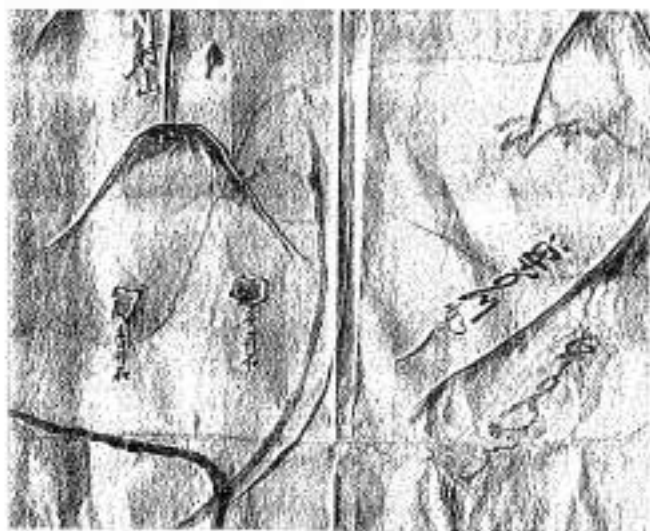


図2-20 御射山の社碑と御射山絵図
社碑の前にも、絵図のように鳥居跡があった



図2-19 御射山神社(碑)

(一五八五)に大地震のため、ついに破壊されてしまった。この碑文の前半は、創建から破壊までの経過をのべた後、それから嘆きがはじまる。

爾來物換星移(に)今茲(こ)丁亥(ていがい)己酉(こし)二百三十四年二度リテ 造宮亦復成ラズ矣家々空シク嘆ズル已 日慎(に)既(こ)已(こ)遷(うつ)没(め)ス 既(に)シヤ後年(ごねん)基礎(きそ)亦(また)知(し)ル可(べ)ケン矣國ツテ為(な)リ共ノ旧ヲ記シテ碑ヲ立テ云ウ

干時(かんとき) 文政十年歲在丁亥秋七月 神子榮(かみ)中

地震で破壊されてから二三〇余年も経過しているが、造宮のことはできない。「亦復成ラズ」といつているから、この間に何度か再建をはかったことがうかがえるが、ついに造宮はできなかった。家々では空しく嘆くばかりである。こんなことをしていたので、御射山社の古い伝説行事はすでに、すでにあとかたもなくなってしまった。まして、後年になれば、そのもとの由来さえも、知ることができなくなる。『旧慣(きうくわん)既(こ)已(こ)遷(うつ)没(め)ス』というところにその嘆きの深さが表れている。そこでこの御射山社の碑をたてて、すでになくなろうとしているこの地の由来を記したというのである。

時は、江戸末期今からおよそ一五〇年も前の文政一〇年(一八二七)のことである。建てたのは神子榮村中の人々である。

この碑の嘆きと訴えは、明治九年の「村誌」にも継承されて、さらに細く詳しく、後世の村民に訴えている。次にその「村誌」の記述に説明を加えて記す。

御射山社の社は、宇前原にあり、東西二〇〇間、南北一八〇間、面積が一町二反歩の原野で、神子榮村地の正面にある。祭神は健甕名方命、八坂刀売命の二神である。大同四年(八〇九)に坂上田村麻呂が勅を奉じて創建したものである。(神陰にも勅という字が見える)後、たびたび奉幣(神に幣帛をささげる)があり、穂屋の大祭(御射山祭)を執行

し、その神官は宮島氏であった。

お祭りは、七月二十七日、御射山平に御飯屋(穂屋)をこしらえ、そこに神輿(かみこ)を移し、神子榮村からその神輿(御神体または御霊代が乗る)をだして、お祭りを行なった。(この七月二十七日は諏訪の御射山祭りと同じ日である)この神輿をだしたことによって、神子榮といわれるようになった。

「村誌」はさらに、この御射山社の規模について、この神社の別当寺は善光寺といつて、一時は一二坊もある大規模のものであった。

一二坊は別書には、藤勝坊、安泰坊、治郎坊、北坊、宗家坊、南坊、平栗坊、東秀坊、実教坊、修観坊、能延坊等であった。この別当寺の大きさをみても、御射山社は大きく、本郡の大社であった。

ところが、たまたま兵火にかかって、社頭がわずかに存するだけとなり、西筑輪の羽成耕地内に移り、ここでまた兵火にかかるという災禍が続いた。ようやく神社は造営されたが、往日の盛んなようにはならなかった。そこへ、天正一三年(一五八五)の大地震にあり、こんどは全社殿が破壊されてしまい、それを造営することはできなかった。

遂(つい)ニ各所(おのづか)ニ祀(まつ)ル。惜(かな)シイ哉(や)。田(い)婆(は)此(こ)ニ遷(うつ)没(め)ス

これによって、御射山社は一社として祭ることができなくなり、各所に分祀されるようになってしまった。まことに惜しいことで、旧御射山社の姿は全くなくなってしまった、惜しいかなと嘆き訴えている。

2 『西筑輪村誌』の御射山神社跡

『長野県町村誌』には『西筑輪村誌』の古跡の項に「御射山神社跡」として、前記の御射山社についておおよそ次のように記されている。

西宮輪村の西方字御射山平に、御射山大社の跡がある。東西三町二〇間、南北五〇間、いま民有林になっている。この地続きに宇神護平という地があり、ここが別当寺の跡だという。また鎮守という地名の所もある。

「古伝記」によると神主は唐沢備前と宮島津守であった。唐沢備前は与地に佐し後に三日町に移った。宮島津守は沢尻に住居したが後に退転してしまつた。別当寺神護山護宝寺があつたが、天文一三年（一五四四）武田信玄の兵火にかかつて焼失してしまつた。伊那郡の大社であつたが、そのとき「宝鏡」はどうなつたか不詳である。

そもそもこの大社の由来を尋ねてみると、伊那郡大山田神社（南宮輪村誌）もこれをいうが不詳」と申し奉つていたが、後に藤原庄宮輪郷の羽広の里に鎮座し「御射山大明神」と崇め奉つた。御本地は虚空蔵菩薩であつた。宝鏡は唐沢備前が代々守つてきたが、その裏に神龜元年子年（七二四）とあつた。元慶三年（八七九）再建され、飯田城主からお神楽や騎馬が献ぜられた。

それから四〇〇余年を経て元暦三年（一一八四）には古田家から「御射山大明神」の遷座があつた。さらに一四〇年を経て、応安元年（一三六八）福与城主井上氏、藤沢氏等が代々大祭を行ない、お神楽が献ぜられ、神楽、騎馬等も献ぜられた。

享禄元年（一五二八）宮輪左衛門は、上郷へ御射山の宮を移し、これから祭礼は事たえてしまつた。

『西宮輪村誌』はこのように、年代をはっきり示しているが、「古伝記」であつてその確かなことは不明である。ただ、明治初年の当時、はつきりした跡も記述している。

羽広村今集宮と称し奉るは、命御狩の時、柴を以て飯屋を造らせ給ひし旧跡にして、本宮は御射山平なり。今は諸木生ひ繁りて名のみとなりぬ。されども往昔祭礼のとき、出役飯屋の土手形等、道の左右に残りて今なお歴然たり。

また、神子柴にも鳥居の跡があつたし、本社の鳥居は蔵鹿山の入口、富士塚の南に礎石が残っていると記している。しかし、昭和の現在ではどの礎石も見出せない。

3 別当寺（普光寺）

さて、この御射山社の別当寺普光寺は、はじめにこの西部地区一帯のどこにあつたのであろうか。今となつてはどこにあつたのか、見当もつかないが、さきの本村の「村誌」には次の記録が残っている。

梨子が産、本村極南神子柴地西の方二町許宇前宮原の内にあり。此の地をうがてば多く銅鉄の如き小片細屑を出す。里人之を稱して金な屑と云う。往昔此に御射山社の別当普光寺及び十二の坊あり。寺坊共に兵火にかかれり。

この金な屑は普光寺の鐘がとけて地中に埋まつたものか、天文年間（一五三一—一五五五）まで鋳造の文字を用いていたといわれる伊那郡に属し、銅鉄の精錬所であつた所か、という二説がある。もし、ここに普光寺があつたとしたら、ここで兵火にかかつた普光寺は、西山沿いの「普光寺跡」へ移り、そこでまた兵火にかかつたことになる。

普光寺跡は現在も神仙寺の北方にあつてはつきりしているが、梨子が産は「神子柴の西方二町ばかり」にあると記されているだけで、西天竜水田地帯となつた現在ではその場所さえはつきりしていない。

4 分配された御射山社

『西宮輪村誌』では享禄元年（一五二八）『村誌』では天正一三年（一五八五）、とくいちがうてはいるが、いずれにしても世は戦国動乱の一六世紀のことである。再建ができないまま御射山大社は分配するよりほかなかった。

分配されたのは、里宮社、前宮社、鳥居原社等である。所々に方三間の鳥居の残礎がのこっている。また地名として、御射山平、鳥居

原、前宮原等の原野が残っている。また、宇三本木原には老松が三本かたまって高く雲表にそびえ、この大樹の下が、神輿の休んだ所であるとされている。その他流馬所、神戸（上宮）、御舞瀬（坂下）があり、八乙女（神社に奉仕し、神楽などを奏する少女）のように巫子をだした所もあり、さらにまた、普光寺の旧跡を神宮寺平といい、その他にも地字には、茶屋屋敷、神屋道、神盛道、神盛坂等がある。

分祀された御射山社のうち、田畑村の「前宮社」はその後「諏訪社」と呼ばれたが、その社頭の御手洗には今も「前宮社」と昔の名残りをとどめている。また『上伊那郡史』には、神饌を供した莊園五反歩のことも記されている。

諏訪社 祭神 健甕名方命

元前宮と称し……徳屋の神事を此の神宮に執行し神饌を供す。当時莊園五反歩あり。大祭を執行す。

この大祭は分祀されるようになった享禄年間（一五二八～三二）以後もこの前宮社では例祭を継続して行なってきた。天文（天正）のころ（一五三二～九一）の兵乱にかかって、神饌であるこの莊園も没収され、祭礼は廃絶したといっている。

『上伊那郡史』でも『西筑輪村誌』でも享禄年間に分祀されたとあるので、『村誌』のように大地震の天文一三年（一五四四）以前から分祀されるようになったのかもしれない。

ところで、この莊園五反歩はどうなったか、ついでにそれを記しておく。田畑神社の記録には、神社収益として毎年田から年貢が入っている。明治一九年の例では

- 一、字地付き 租四俵二斗五升 代金七円五錢三厘
- 一、字精進屋 租七俵二斗五升 代金一二圓五錢九厘
- 一、字とい田 租三俵 代金五円〇三錢五厘五毛



図2-21 田畑神社の御手洗前宮神宮と彫ってある

と、なっている。この年貢は合計一五俵で当時の年貢、收穫高からみて、水田五反歩からのものとみることができる。すると、この莊園五反歩はまだ残っていたことになる。

なお、この収入の使途も、例えば明治二一年度の記録ではほとんどが祭典用として使われている。北殿の里宮社でどんな祭礼が行なわれたか、また鳥居原社があったのか、詳しいことはわかっていない。ただ、戦国動乱の世にあった

て、御射山大社の大祭らしい祭典は、この分祀以後廃絶してしまったということは確かであったと思われる。

5 御射山祭の推移

「御射山祭」は惜しくも、廃絶してしまった。では、この地に盛んだったという御射山祭は、どんなお祭であったであろうか。諏訪御射山の大札祭に準じて行なわれたであろうと思われる。江戸時代末期の嘉永年間（一八四八～五四）、三日町にその例が残っているが、それはもともと西山にあったものが、三日町に移ったのであると、『露原拾葉』（嘉永年間編）の「ひとつはなし」に記されている。

例式というからには、御射山祭にはきまりがあり、慣習によって一定のしだいで行なわれたことがうかがえる。諏訪の御射山の大札祭のことは『諏訪史』によって知ることができるが、『ひとつはなし』の記述は次のようである。

諏訪御射山に明神の遺札にして年々大札行なはる。我伊那郡にても三日町に何式あり。私に考ふるに三日町の何式ははじめ西山にありと、今その地を御射山亭といふ御子柴は御輿を出しし地にて御輿場なるべし。御子柴の西に古鳥居の立ちし跡あり。礎石あり。今その地を鳥居原といふ。往古中桑上戸の辺は神領にして祠官唐沢氏これを掌る。……

……土俗の伝に往昔中桑村に唐沢御前といふ城主ありといふ。祠官の祖も御前といふは同なり、祠官にして神領までを掌れり。

当時は、神宮で領主をかねていたものは、諏訪の神官（祝部）が諏訪を領し、小野の祠官小野氏が小野を領していたようにめづらしいことではなかった。

ここでもわかるように、江戸時代以前は御射山を中心とした神事が、この辺一帯の人々の心のよりどころであったと思われる、大祭が行なわれたであろう。

中世まで盛んに行なわれたこの地帯の御射山の神事も、近世になつてしだいにすたれて、三日町に移ってしまつたあと、何が残ったか。

神子柴の御射山祭りにその片鱗が残っている。祭日は上社のそれと同じ七月二十六日（明治以後八月二十六日）を選んで、氏子は徳屋（十きでかこう外郎）をこしらえ、伊達神主がお祭を執行している。この詳細は民俗篇（上巻）にゆずるが、これは確かに往年の御射山神事を伝承するものである。

6 御頭祭への招待状

諏訪神社で、酉の祭りといま呼ばれているのは、御頭祭とも廻世神事、大御立座神事ともいわれている祭りのことである。

一月一日に、前宮の御室のなかに、大祝と神長守矢氏だけが入って、ミシヤタジ神をおろして、人にきかせず占い、そこで祭りの当番がきまる。これを御頭がきまるという。その御頭ははじめ諏訪を一

五に分けてあったが、後に一〇に分けられた。諏訪の福島村もその一〇郷の一つであり、一〇年に一回御頭が回わってきた。

その昔、田畑村、神子柴村は御園村、山寺村とともにその福島村の枝郷であったので、その御頭に参加してきた。

次はその祭礼の招待状である。



図2-22 御頭御社宮司社（諏訪福島村）と招待状

（内々）御祭ノ御役人ノ御役
諏訪上宮御祭礼当年御頭番ニ相当リ之ニ依リ先例ニ任セ御玉会進上致シ候
来ル三月十八日御祭礼ノ節御社参費意ヲ得可ク候 恐御謹言

二月五日

諏方 福島村役人

重左衛門

弥次兵衛

善左衛門

伊那郡 田畑村

御役人衆中様

（田畑中殿文書）

この招待状は、諏訪の福島村（現、諏訪市中州福島）から田畑村の役人衆へ出したものである。諏訪上社の御頭番は、福島村に一〇年ごとに回わってくるが、その年のお祭りには、伊那の枝郷四か村（田畑村、神子柴村、御園村、山寺村）を招待するのが古くからの慣例になっている。その先例にならってこの年の三月一八日の酉の祭りに招待されたのである。この書状には年号が記されていないのはつきりしたこととはわからないが、相当古いもののように見える。

「古い枝郷」（今井広亀『中洲村史』）によると、信濃の国の各地にあった親郷、枝郷の関係はほとんどなくなってしまうが、福島村と伊那の四か村だけは、ずっと古い時代の親郷枝郷の姿が現存している。福島村が御頭郷に当たった年には、今でも伊那の四か村を招待し、上社の酉の祭の祭事に実際に参加している」（『中洲村史』）このことは、福島鎮守社の由緒によっても明らかである。

御頭年番ノ節ハ諏訪上社上宮ノ内本社へ奉仕シ神符納メノ旧式アリ 又上伊那郡旧御園村山寺村御子柴村田畑村ノ四か村ハ木村御頭年番毎ニ本社へ三葉提校附キ幕半張ヲ献納スルノ慣例ナリ

（『福島鎮守社由緒』）



図2-23 御社吉司社の幕

これは明治三十一年の知事宛の願い書の中の一節である。福島鎮守社は御社吉司社で、社殿は嘉永二年（一八四九）の再建であって、立川和四郎作の実に見事な建築である。その由緒には、この社は、長さ、二丈七尺五寸、幅四尺二寸五分の幕をもっているが、それは親郷と枝郷で半々ずつだしあって作る慣例であった。図2-23に見るようようにできた幕が残っている。

年一回行なう諏訪社總氏子の御頭祭（酉のまつり）の頭役にあたると、御頭郷（吉司郷）の名主、百姓が二〇〇人から三〇〇人も一団となって出かけ、祭事の諸事万端を引き受ける慣例で、それに参加するのである。

田畑区にも神子柴区にも、先の招待状以外に資料が見当たらないの

で、諏訪福島の資料によって、最近の様子を見ると次のようである。

昭和二十一年

一月一七日、本年官幣大社諏訪神社ニ於テ元旦ノ御占イニ依リ、湖南村中洲村御村御頭役ヲ定メテラレタルヲ以テ、親郷トシテ往古ノ祭事ニ依リ、枝郷上伊那郡南箕輪村田畑区・神子地区・伊那町ノ内御園区・山寺区四カ区ニ其ノ旨通知書ヲ差シ出ス。通信費貳拾銭。

四月二日

本村本年御頭役命ゼラレタルニ就キ、当区ニ於テ枝郷招待ニ関シ協議ノ結果、往古ヨリノ慣習ニ倣イ招待致ス事ニ決定。本日枝郷四区長宛招待状発送ス。尚御札頒布ノ都合戸数訪問ス。

なおまた、昭和三十一年の宮方係の日誌にはその時の様子が詳しく記されている。

二月五日福島区の区会で招待することがきまったので各区へ招待状をだす。

三月二日御社宮神おろしをし、界注連等諸準備をおえる。

三月二六日 総代と宮方係とが伊那の枝郷四区招待に向向いた。御園区一六五戸、山寺区七八六戸、田畑区一六六戸、神子地区一三〇戸という。日誌には記されていないが、かなり御馳走にあずかったと伝えている。

このように招待状だけでなく、総代がわざわざ出向いてきて招待を正式にする慣例であった。

四月十四日 四区は区長外一名計八名が来て、まず上社に参拝。次に福島村の御頭御社宮司社に詣で、例年通り総代宅で饗応になった。こちら「福島村」は区総代、副、神社総代、宮方役員全員が出て接待につとめた。玉串料八千円、御札料三千五百円が奉納された。お土産には砂糖一貫目を貰った。そして饗応費は八千四百九十五円を要した。

四月十五日 西の祭 客（伊那四区のもの）も本宮の祭りの行列のあとに供奉して前宮十間廊の祭事に参列して帰られた。各戸に配って貰うため福島鎮守の御神符一、二四七枚を託した。神符は総代たちが作って紙、墨代二、三五〇

円を要した。

（中洲村史）

この日誌は諏訪側の立場で書かれているが、伊那側の立場で記しているのが「山寺区誌」で、昭和四三年の様子を書いている。この時は宿泊していない。

四月一四日の午後〇時三十五分上諏訪着の列車でいき、午後三時すぎたころ準備ができ、神官に案内されて社殿に進み、いわゆる昇殿参拝をした。戦前は勅使が坐わったという位置に座を得、玉串奉呈、正式の参拝をすませた神前にお供えした御神酒と区民各戸へ配るお札を頂いて退下した。つづいて社務所の奥まった座敷でお茶とお菓子が出て、宮司から丁寧なあいさつがあり、四月一四日と四月一五日のお祭りについて説明してくれた。

昔は、三月の酉の祭、御頭祭として行なわれた。これは上社の祭の中でも大きな祭で、東へ一キロ離れたところに、前宮（おきさき祭る）があり、そこで武器など大きな持物をたずさえて行列で練って行き、前宮で「十間廊」の祭事をして上社に引き返した。その時十間廊には七五頭（現在は一五頭）の鹿の頭など供えた。このための鹿を伊那の御射山あたりで猟をして馬につんで持ち運んだ。伊那の四か村は枝郷といわれる氏子として奉仕したのであらうか。（山寺区誌）

この福島を親郷として、その枝郷である伊那の四区の御頭祭参加の由来は、いまだ明らかでない。枝郷の関係は筑摩や佐久にもあったと伝えられるが、今日まで続いているのは、この関係だけで、諏訪神社を中心とした珍しい関係であるという。

次表は福島区から最近で来た資料により、戦後の御頭祭参加の状況をまとめた表である。（表2-12）

表2-12 御頭祭参加状況（四か村）
御頭祭四区参加状況

昭和52	昭和43	昭和31	昭和21	年度	項目
1月30日 (3人)	3月19日 3月24日 (2人)	2月5日 3月26日 (2人)	4月2日		招待状 出向招待
(日曜日) 4月15日 本宮一前宮	4月14日 公民館泊 4月15日 本宮一前宮 " (1320枚)	4月14日 緑代宅泊 4月15日 本宮一前宮 全戸数 (1147札)	4月14日 区長宅泊 4月15日 9時上社参拝 600札		祭日 祭事 (御神符)
欠	欠 (区長南免)	加藤与一郎 三沢清	松沢昌	田畑区	参 列 者
伊東嘉造 織井甲子男	飯塚三雄 丸山二郎	高木正信	高木二郎	神子栄区	
畑正二	野沢誠雄 御子榮信夫	唐沢四一	御子榮次男	御園区	
根津莊八 宮下長雄	森田喜市 林友七	福沢孝一郎	柴菊治郎 原由治	山寺区	

(1) 久保塚ノ井と瀬神事

諏訪上社の古い神事の一つに瀬神事がある。西の祭りといま呼ばれている祭りを、御頭祭とも瀬神事ともいっていることは先に記した。その瀬の神事は、神使が地方を巡行して、諏訪神社の神威を拡張強化するための神事に焦点をあてた呼び名であった。

この神事は古く大化の改新（六四五）以前から室町末期（一五七三）

ごろまで、すなわち七世紀から一六世紀までの長い間行なわれていたが、戦国争乱の世になって中絶の状態になっていた。

一月一日、前宮でミシヤグジ神を降して御頭郷がきまると、その村に御頭郷差定書が渡され、神使六人がきまると、六名の神使は、内県介と内県宮付き、外県介と外県宮付き、及び大県介と大県宮付きの三組で三方面にでるのである。このうち伊那へ回ってくるのは外県介と外県宮付きの神使一行である。

この「伊那廻り」の経路は時によって多少のちがいはあったが、（表2-13と図2-24）のようであった。このうち、くぼ（権祝文書）しほのい（守矢文書、塩野井（再興次方）とあるが、当時久保・塩ノ井は一村であったので、同じ地域と見なすことが出来る。

さて、「瀬」とはどのような意味であろうか。

『諏訪史』等によると、神を「たたる」（讃美する）意味と、神意を知りその「たたり」（祟り）をしめる意味とをもっている。瀬の神は、土着の原始神で、精霊崇拜の土俗信仰と土地の神みしやぐじ信仰とが結びついたものである。さらにいえば、それは人間生活と直接のつながりを持ち、祀る人々の守護神として、日夜その生活を保証する恵みの神であるとともに、同時に人間の不正やごまんと怒るたりの根源とも信ぜられた神である。

『諏訪史』第二巻によると、この神事は「御頭祭」（西ノ目祭）と一連の祭りであり、上古から複雑な関係—すなわち諏訪神社の大祀と神使

このように、春と冬（秋）の神事は行なわれた。塩の井の神社は「御尺地社」であるが、ここでも室町時代までは神事が行なわれていたとみることができる。そして、農作を祈った代わりに、農産物を一定の割合で、上社に奉納させられたのである。神使は宝鈴をならしてその約束をさせ、約束を守らないとミシヤグジ神の祟りがあると信じさせられていた。秋になって収穫直前にまた回ってきて、約束の実行をうながしたのである。

このように、神使巡行の地からみて、この辺一帯は諏訪の祭政圏内に入っていたことがわかる。

(2) 湛の祭典

神使出立の儀式は、上社で最大、かつ神秘に満ちたものであった。

たのである。即ち農事に関する信仰をもって基調とするのである。

《諏訪史》



図2-26 塩ノ井古宮跡（昭和初年）
湛神事のおこなわれたと思われる古宮

前宮の底で神事（神饗）が行なわれる。信濃や甲斐の各地から買納された鹿七五頭と、猪や魚貝類が山積みされている。これらは大祝神使以下参拜の氏子にも分けられ、いわゆる神人相嘗が行なわれる。さきにものべたように、神使は大祝から「玉かずら」を頭にかけてられ、神長からは「御杖柱」「御簀柱」がさづけられて、そこで神格が与えられるのである。

神使一行は、馬に乗って御杖に御宝（鉄鑓六箇一組）をつけ、神域を逆巡して、夕暮れの前宮をあとに、定められた果へ出立するのである。此に至り一切の行事を終了するので、之より列次を正して太官に詣で、その後それぞれの果に向って湛神事に従うこととなる。

此間を通じ御杖と御宝とは勿論行を二にする。かくて一行の往く先々の途すがら、之が音色の清々しさは、御杖の神々しさと相まって、いかにも大神の御使らしい気分をそそったことである。之に出会った地方民は神と称して礼拝するといひ、その身に帯ぶる神性の発揚された模様をありありと看取せしむる。

《諏訪史》（二巻）

地方民は神だといひて礼拝したという。その御杖と御宝は図2-27のようであった。

神使の頭には大祝（諏訪明神）から捧げられた玉簪（藤白簪）をつけてきているので、大祝の端（依代）をつけた人となり、現人神大祝その人となり、神使（おこうさま）となって回ってゆくのである。そうした神使になるためには二月丑の日からきびしい精進をはじめて三月午の日からの巡回にそなえたのであった。

その一行の様子には次のようにも記されている。

……さなきの鈴（鉄鈴）の清々しい音色、御杖の神々しさ、それにもまして馬上の神使の神人らしい金銀の衣装の荘厳さ、その一行に対して住民たちは深く礼拝した。

(3) 瀬神事の衰退と再興

この神使は、文正元年（一四六六）には神長官（守矢氏）四歳の子が、水干の紅葉色を交え金銀の付け物をし、日月の光をかたどった磨いた草木の花の服装で、外果の伊那まで回わってきた。

しかしその後になって、各果から二人ずつ計六人の幼童が選ばれて神使の役をつとめるようになり、さらに後世になると御頭郷から一〇歳以下の男子が出るというように、だんだん簡略化されてきた。

そして久しい慣行として続けられてきた神事も、戦国時代末の永禄年間（一五五八―一五七〇）には神田の故障などで廃止する所が多くなってきた。

定法通りに神長官が回わって来なくなったり、飲食費をむさぼったりしたこともあって、弊害が多くなりしぜんと廃絶されてきていたのである。

塩野井において春冬瀬神事免七貫五百文此の内番貳百は塩ノ井にあり……来る丙寅よりは旧規に任かせ瀬附あるべきの旨下知を加え給ふ、然れば即ち神主薩助四郎殿重に執り行ふべし。

（『諏訪上下宮祭記再興次第』）

この再興の命令は、永禄八年（一五六五）に、武田信玄から、だされた。春と冬の瀬神事を来年から、昔どおりに必ず復活させよ、その神主には薩助四郎が当たり厳重にとり行なえというのである。これをうけて、次のようにとり行なった。

伊那瀬御神役の次第 永禄十年

一、塩野井の分 春冬に七貫五百文



年来無沙汰の瀬。去る年御改めあり前々の知くたるべきの由仰せ出され候。神主薩助四郎

永禄一〇年（一五五七）は、信玄の命令より一年おくりしているが、ともかく瀬神事は再興された。

瀬とは先にも述べたように天空より天降る神が、目的を定めた木に選りいる神をたたえ、たたりから守ることであるから、春はこれから始まる農耕の豊穰を願って、神に「降り申し」ていただく神事であり、冬の十一月二十八日には、一年間の収穫に感謝して、神を「上げ申し」神事であった。塩ノ井の神事も「旧規にまかせ」とあるように、このときばかりでなく古い時代から、ずうっと続いていた瀬神事が、この時に七貫五〇〇文で復活したのである。

このようにして、信玄の強力な命令によって再興をうながされた塩

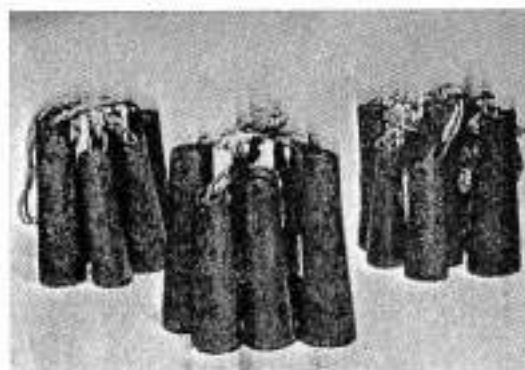


図2-27 神使運行の御杖と宝鈴（『図説諏訪の歴史』）

ノ井の湛え神事も、江戸時代になってどうなったか、記録は残っていない。一般的には、次に記すようにすたれてしまったらしい。

その後、江戸時代に入ってからのは、遷葬神事に神使が従う土古よりの定めもその通りに行かず、殊更に勤人より米銭をとって、過半は進帳に及んだ。

〔様式家文書〕

神使が定めどおり来なくなったばかりでなく、米銭によって略式にすまようになり、それもしだいにすたれて過半数はなくなってしまう。明治以後は、その名目もなくなってしまって、全くあとかたもなく、廃絶してしまった。

明治維新後は旧儀のまにまに、……巡遊はおろかわずに残った名目をも省略してしまった。

〔同前書〕

8 大泉の鹿祭り

(1) 鹿祭りの由来

木下の夏祭りには大泉から鹿がでて、それを鹿祭りといい、「鹿頭祭」とか「鹿頭行列」などと呼ばれている。古い記録には「鹿頭」と記されている。

この祭りの起源は今から四三〇余年も前の永禄元年（一五五八）で、ひでりに苦しんでいたこの地帯の人々が雨乞をして、それがなかったお礼の行事とされている。

永禄年中大旱魃。近郷雨乞いの大願成就御礼として、目出度き村名をして鹿頭といふ事を出す。……尤も鹿頭七十五づつ也。近年四五十づつ出る。

〔伊那神社伝記〕

この祭りを始めたときの箕輪郷の領主は箕輪城主箕輪左衛門亮頼政（系図等では不詳）で、この城主と郷民とがいっしょになって雨乞い

感謝のお祭りをしたとされている。

御鹿奉納神事は永禄元年箕輪城主箕輪左衛門亮頼政が当神社に、早天親きの折雨乞いの折願をし、その効願あり御鹿七十五頭を奉納したことにはじまる。……のちには御鹿をかたどった冠物をつくり、数十人の幼児に冠らせ、村役人一同は麻神を着用し、帯刀して、陣笠をかぶる正装で誘導警固した。

〔箕輪南宮神社〕

そのころの箕輪郷の鎮守は御作田大明神（はじめは一の宮にあつて文安二年（一四四五）に木下へ遷宮し、享保六年（一七二一）南宮大明神と改称した）であつた。その箕輪郷の中からお目出たい名前の村々から鹿頭をだし、川西から大泉（大泉新田）、大萱、富田が選ばれ、川東から福島、福島が選ばれて奉納するようになった。古い記録には羽成が入っているし三日町寺郷もはいつているが、現在はほとんど関係しなくなっている。

川東福島、福島に三日町寺郷は警固を出す。同川西大泉、富田に羽成より警固を出す。年々隔年に勤め来る。

〔伊那神社伝記〕

例祭は古来旧暦の六月二十七日であり、御作田神事（御神事ともいう）を行ったが、現在は七月第三日曜日である。

このように大、福、富と目出度い字のつく村が選ばれた雨乞い祭りであつて、箕輪郷の領主郷民ともども箕輪全城のお祭りであつた。

はじめは実際に、「鹿頭七十五」を奉納した祭りであつたが、「四十頭」となりしだいに減っていった。後には「鹿頭」というようになつた。そのころは、手振り身振りもともなつて踊りが入っていたと思われるが、後には踊りはほとんどなく「鹿頭行列」ともいわれるように単なる行列になつていく。

信州伊奈郡大泉村茶出帳（元禄十二年）

一、御年貢納メ候儀、御料私領共、品々雑穀申シ納メ候……

一、御作田神事領石宛、福与村当村へ隔年ニ臨坂淡路守様御代ニモ下サレ候、御料所ノ内へ下サレズ候、板倉頼母様御代ニモ下サレ来リ申シ候、尤モ隔年ニ歸リ出シ申シ候。

（中宮文書）

ここで記されているように、江戸時代中期の元禄十二年（一六九六）になっても、領主からこの神事料として「板一石」ずついただいていた。官民一体のお祭りであった。

(2) 祭りの道路・服装

この祭りはどのように行なわれてきたのであろうか。まず第一に巡路についてであるが、大泉神社（以前は諏訪明神社）の社頭に、一行が勢ぞろいし、村役人の家々へよりながら大泉公園に達し、それから長い道中を木下へ行き、ここで鹿を奉納し、帰りに北殿へ回って大泉北殿宿の問屋（大泉側）へ寄って、帰宅することになっていた。

その問屋へ寄ることを省いたためにおこった事件から天和元年（一六八二）の「鹿踊り定め」ができた。この定めで先規の通りとあることは、帰路を北殿にとり問屋へよることや服装のことと誓固に出るものことなどで、以前からこのように行われていたことがわかる。

鹿踊り定め

一、先規ヨリ川東ト各年鹿踊り祭礼誓固ノ事、問屋年寄ハ上下其外ハ羽織袴ニテ誓固致シ明神ニテ相イ揃イ年寄ノ家々へ寄リ木下村明神へ参詣致シ帰リニ問屋へ相寄り神事相済シ候趣一兩年親リニ相成リ候間此ノ度相改メ支度等マデ先規ノ通り相守リ申スベク候且ツひくわんノ者誓固ニ出候事相成リ申サズ候定メ立テ置キ候右ノ通り急度相勤メサスベク一統連印致シ置キ候已上

天和元年
西六月

問屋 吉兵衛

年寄 茂左衛門
同断 平左衛門
組頭 与次兵衛
(二一名印略)

（中宮文書）

次にこの規定から一〇〇年ほど後になって、服装のことで村内に問題が起こった。いつしか時代がたつて、村役人は袴に帯刀といういでたちでなくなった時もあったのか、一般村民はこの村役人の帯刀は先例を破ったものであり、それを改めなければ鹿踊りの誓固を勤めないと申し入れた。飯島の役所ではそれを宮元である木下村へ尋ねた。木下村の申し上げたことは、大泉村の村役人は大小を帯びて来るが、四人のときも二人、三人のときもありまた一人のときもあると「御尋ネニ付キ申シ上ゲ奉リ候」で返答している。

そこで木下村、三日町村、飯島郷宿の年寄が仲介に入って、村役人四人のうち二人だけが帯刀することで次のように和談が成立した。

取り纏 済口証文ノ事

一、大泉村年寄四人願イ上ゲ候ハ其輪領鹿踊り誓固ノ義ハ先年ヨリ村役人共帯刀ニテ誓固仕リ……

村役人大小ヲ帯シ候義ハ卯年新規ニ相始マリ先例ヲ破リ候趣當ニ右林ノ大小ヲ帯シ候テハ鹿踊り誓固ノ小前一同相勤メ申ス間敷キ段之ヲ申シ立テ候……

……双方へ異見差シ懸内済仕リ候趣左ニ申シ上ゲ奉リ候
村役人四人問屋共ニ右ノ内式人宛大小ヲ帯シ内老人ハ当役其外鹿踊り誓固先例通り出デ少シモ差シ支エ無ク衷意相勤メ申スベキ段双方得心相定メ候趣相連御座ナク候……

寛政九丁巳年七月

（木下神社文書）

大泉村役人と小前絶代とが夫々四人ずつ、それに、職人として五名

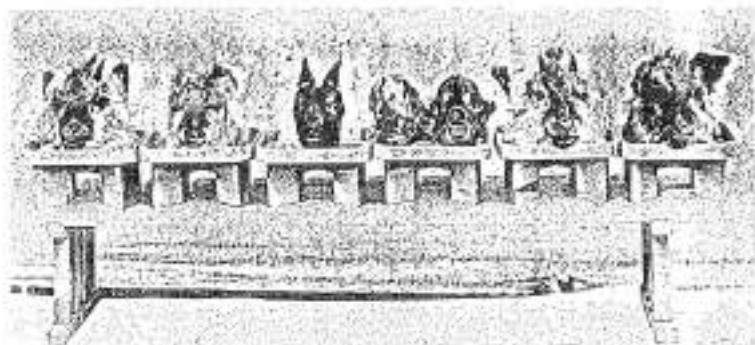


図2-28 御頭祭の十間廊の供へ物

古代の信仰において鹿が大切であったことは、「御射山祭り」の裏書に鹿が欠かせないことからも察せられる。鹿は神への供え物のいけにえであるが、神そのものが雌鹿であった（御社官司）ということもあって、祭りになくてはならない大切なものであった。

この大切な必要欠くことのできない鹿を、しかも七五頭の鹿頭（行列）を奉納するというのは、諏訪上社の御頭祭に図2-28のように十間廊に七五頭のいけにえを奉納する神事とびたりと符号する。鹿踊りの原型はここにあったということができるのではない。

が連印している。

(3) 鹿踊りの原型

箕輪郷の総社である箕輪南宮神社は、祭神建御名方刀美神、八坂刀売神で、諏訪神社である。そこへ奉納する鹿祭りは諏訪明神への神事であるから、諏訪上社下社の神事と符合するものがある。これは鹿祭りの原型が諏訪上社の祭礼にあったことを推察させる。

ア 鹿頭奉納七五

イ 御作田神事（祭日六月二十七日）

南宮神社は往古一の宮にあって御作田大明神ともいわれていた。祭日は古来旧暦の六月二十七日であった。これは諏訪上社の一年四度の御狩神事の第二番目の夏祭り「御作田狩り押し立て神事」の祭日と同じ日である。この祭りは五月会と同じ次第でなかなかの祭事であった。

鹿祭りはこの御作田の神事の日に、御作田神事の一環として行なわれた。御作田祭に捧げ奉る山の幸を獲んとして御狩が行なわれたようであるが、この鹿頭祭の鹿頭はその山の幸の代わりともみられる。

御作田祭りは下社の行事で、六月晦日に御作田社で田植えが行なわれ、続いて七月一日に遷座祭が行なわれる。これは正月一日に秋宮から奉宮に遷座していた神が、その奉宮から秋宮に遷座する祭りである。遷座祭のとき、お舟（舟舟）が有名で「お舟祭り」とも呼ばれている。箕輪南宮神社にもこれを小型にしたような遷座が行なわれている。

ウ 逆巡三回

鹿踊りと称されてきたこの神事も、最近鹿頭祭とか鹿頭行列と称されるようになっていく。はじめは踊りの要素が多くあっただろうに、いつしか単なる行列になってしまった。ただその行列が社頭で、左回りに三回回るのが神事である。これは大泉神社でも大泉公園でも、木下南宮神社前でも同じである。

これは諏訪上社の御頭祭における神秘的な行事である逆巡三回と符合する。例えば延宝七年（一六七九）の「諏訪上社社札記」には「神使供奉の面々逆巡三回」とありこれから満神事に出発するように記されている。

エ 御射山神事との関係

……再考するに木下の神事に大泉村福寿村より隔年に獅子を出し、隣村より最多の獅子を出しぬ。獅子も古へは野猿頭なりしよし。これも御射山神事の

遺れる例なるべし……

〔葛原拾葉〕

葛原拾葉にはこのように、諏訪明神様の大札祭御射山神事との関係をつけている。ここでは鹿でなく獅子と記され、警固でなく「勢子」となり、狩猟のとき鳥獣をかりたてる人をたくさん隣村からだすことになっていく。祭りの何よりの供へ物は鹿であり、鹿でなければならなかったことはすでにのべたとおりである。

二 八幡信仰

諏訪信仰のほかに、八幡信仰も表2-19のように郡内で三四%と多かった。八幡宮は源氏の軍神であったので、鎌倉時代以降尊崇されてきた。殿村八幡宮は古社で格式の高い神社であった。

「頗る古社ト雖モ其ノ草創ヲ詳ニセズ」と、明治八年の「村誌」は、いっている。本村の神社はいずれも、その草創を詳かにしないのであるが、この神社には社伝がある。

社伝の詳しいことは『上巻宗教編』にゆずるが、この八幡宮も源氏の守護神であるので、鎌倉時代以後ずっと尊崇されてきた。伊那源氏から、信濃守護小笠原氏（甲斐源氏）へと、神田を寄進されたり、神城を広めたり、祭祀を盛んにされたりしてきた。

南北朝時代におよび、信濃守護小笠原貞宗は、特に神城を認め祭祀を盛んにした。

箕輪六郷の主となった藤沢行親の子孫は累代崇敬が厚く、頼親の時

には武器を奉納したり社殿の修理も行なった。

天文二三年（一五五四）武田信玄（甲斐源氏）は伊那郡を攻略し、その戦功に感謝して、殿村八幡宮に七貫二〇〇文の土地（約二町四反）を奉納した。

天正十一年（一五八三）八月木曾義昌（源氏）は伊那郡に侵入し一時箕輪の地を領有したが、その畠山村七郎右衛門をして五貫文（約一町七反）を、寄進し後に更に一貫文を寄進させている。

次に小笠原秀政の修造があった。

小笠原秀政年譜

慶長十九年十二月二十四日

是ノ年公伊那郡箕輪ノ庄殿村八幡宮ノ社頭修造ノ発起有リ乃チ修造ノ奉行ヲ二木藤兵衛政実、二木市右衛門宗久、社奉行遠藤本斎可等ニ是ヲ命ジ給フ

（信濃史料）

このように、殿村八幡宮はその草創はわからないが、代々の源氏系の領主から、たいへんな保護をうけ尊崇されてきたのである。

なお、小笠原秀政の命令によって修造されたこの社は、その後宝殿が火災にかかって焼失してしまったので棟札がなくなってしまった。

そこで明治二三年に小笠原家から棟札の写しを求めてそれが残されている。

明暦二年（一六五〇）の棟札の写しによると、さきの小笠原氏に続いて、脇坂中務少輔が時の領主になり八幡宮の拝殿を修復している。その時官民一体になって再興に従事した様子が記されているのである。

社地の面積は二万七千七百坪もあったが、明治四年に県庁で朱引内を東西三三間余南北二五間余の面積一〇四八坪と縮小してしまった。

明治八年に願いでてようやく、東西一一〇間南北六一間余面積六七七坪となったが、その他の一万四二三坪は官有地となった。

これだけの社地をもち歴代の領主に尊崇されたこの八幡宮には、箕輪郷を代表した朱印状がある。

慶長六年（一六〇一）は関が原の戦いの終わった翌年であるが、この

年飯田城主小笠原氏の臣朝日受永は、伊那郡の各地に寺社領を寄進した。この受永状は後に幕府に申請して「朱印状」に書き替えて渡された。最初は慶安二年（一六四九）將軍家光の時に書き替えられ、爾後代替りごとに書き替えになったが、万延元年（一八六〇）を最後に九通になっている。徳川家光の朱印状は次のごとくである。

信濃国伊那郡殿村八幡宮領同所の内四石、同郡三日町村の内六石、松島村の内五斗、木下村の内三石、大和泉村の内五斗、合せて拾四石の事先規に任せ之を寄附し訖んぬ、全く収納す可し並びに社中竹木諸役等免除す有り来りの如く永く相違有るべからざる者也

慶安二年八月十七日

（八幡社蔵）

朱印状は慶安四年（一六六八）に新政府へ差し出したので、どこにも写しだけしかない。だが、殿村八幡宮には珍しく本書が九通全部残っている。



図2-29 殿村八幡宮14石の朱印状

慶安 二年八月十七日	三代 家光
貞享 二年六月一日	五代 綱吉
享保 三年七月一日	八代 吉宗
延享 四年八月一日	九代 家重
宝暦 二年八月一日	一〇代 家治
天明 八年九月一日	一代 家齊
天保 一〇年九月一日	二代 家慶
安政 二年九月一日	三代 家定

万延 元年九月一日 一四代 家茂

朱印状というのは將軍の朱印をおした文書で、これによって所有権を認められた土地は、検地のときに納入がない。これらの土地の収権は神主の収入となるか、または神社の維持や祭祀の料とされた。

この朱印状によっても、殿村八幡宮が中世末から近世にかけて相当の社格をもっていたことがわかる。

神子柴の神社も「八幡社白山社合殿」であり、同じく八幡信仰の地である。

三 熊野信仰・津島信仰

（一）熊野信仰

明治九年の村誌には熊野社が二社記されている。

（1）熊野社 久保、村社、諸田二神大己貴神を祀る

祭日九月二三日 社地三五間×二〇間

（2）高根社 大泉、村社、伊勢丹命 連玉建命 事解男命

祭日十一月一日 社地九間×九間二尺

いずれも草創不明となっているが、おそらく中世（鎌倉時代以降）のものであると思われる。熊野信仰の修験者等によって建てられ、村の鎮守となったものと思われる。

明治二六年、久保の熊野権現社は北方へ約一〇〇mの所にある神明宮に、合祀された。字「くまんどろ」の名がその跡に残っている。また大泉の高根社は、明治四〇年に諏訪大明神に合祀され、大和泉神社となった。跡には「熊野三社遺跡」の碑が建てられている。熊野三社は、新宮（連玉男命）、本宮（伊勢丹命）、那智宮（事解男命）のこととされている。こうした熊野三社は軽井沢ほか各地にある。

（二）津島信仰

大泉区について珍しい記録が残っている。これはおそらく南箕輪の庶民史の中で一番古いものではないかと思われる。

とりのとし、慶長十四年十二月七日

一、しなの国上伊那郡のわの大いずみ村衆廿二人御参宮に候。

おりべ殿、孫三郎殿、善七郎殿、しゆかく殿、平右衛門殿、宗七郎殿、九郎右衛門殿、せいえもん殿、孫右衛門殿、助七郎殿、小吉殿、与左衛門殿、おかな殿、久蔵殿、孫三郎殿、藤左衛門殿、五郎右衛門殿、甚三郎殿、平左衛門殿、七郎右衛門殿、宗右衛門殿、小三郎殿

〔津島神社文書〕

この津島神社文書とは、愛知県津島神社所蔵の文書でその表紙には次のように記されている。

つちのへ 慶長拾参年
大古御檀越様
さる 正月 六日

慶長一三年（一六〇八）といえ、春日街道が竣工したと称せられている年である。その翌年正月に大泉の衆が大挙して二二人も尾張の津島神社へ参詣しているのは、たゞごとではない。何かがあったにちがいないが、今のところ定かではない。（疫病か）

関ヶ原戦後のどさくさの中で、江戸時代の初期といっても、まだ当時は中世の名残りの多い時代である。中世の農民は、このように大挙して大旅行をなす自由さと信仰心をもっていたのであろうか。

津島神社は調べてみると愛知県津島町にある大社で、「延喜式」の式内社ではないが、平安末の一二世紀後半から有力な神社であった。織田、豊臣の保護をうけ、江戸時代には朱印地（二九三石）を与えられていた大社であった。もとは牛頭（ごず）天王社とよばれ、主

神は建速須佐之男命で、明らかに祇園系統の神であり、その盛大な津島祭は祇園祭の地方版とまでいわれていた。社殿は豪荘な初期桃山建築として名高く、疫病送りの形の祭が徹夜で行なわれている。

この祇園信仰にも諸説あるが、本来は疫病神であり、かねてから信



図2-30 津島神社と文書

仰者に疫をまぬがれさせる力をもっていた。京都の一番賑やかな祭りで疫病等の流行病を防ぐばかりでなく、農業（稲）の病虫害も防いでくれるというので農村にも信仰が広まった。お祭りは六月十五日で、丁度入梅による諸病流行のきざしに見えるころに行なわれたのもこれによるのであろうか。

南箕輪村の中で大泉にも久保にも祝殿の中に「注連牛王」が見られる。この二人の大筆参拝のことは、大泉の祝殿と関係があったのであろうか。また久保の祝殿が天文三年（一五三四）にできた記録が残っている。それによると、やはり疫病除けになっている。

祝殿 坪数八十五坪

天小児ノ命

主馬牛王神社

天文三甲午十月十四日建

諸国病まいたにはやる時、鬼阿除地へ祭る。

神主 宮島式部正

〔河内屋文書〕

四 口碑による中世の古跡

明治九年の「村誌」には、その当時の口碑による古跡が記されている。近世以前と思われるものを次に記す。

1 天皇（陵墓）——久保

本村久保新地の北々西にあり、東西一五間、南北一八間、字して天皇という。地蔵で封の形（盛り土か）をしている。周囲は古は皆林だったというが、後に畑となし、天保年間（一八三〇—一八四四）に田となした。そのときに素焼の陶器が若干でた。皆手作りであり古の形を見るに足りた。陵墓の献饌の臺であったらうか。天皇というが何天皇で

あるか知る者がない。（村誌）

この天皇の北端（木下分）に「真言宗本寺和州多峰護国院天王寺」があったと、天和二年（一六八二）の明細帳に見える。この天王寺は建武年間（一三三四—一三三六）の創建で、江戸時代に河南村の竜勝寺から僧が来て住職となり、その時から曹洞宗に改宗されたが、やがて廃寺となった。（境内の墓地には四基の住職の墓が残されている）この寺跡の南側に現養泰寺境内が隣接し、北側の中曾根に通ずる道路は「鳳麓路」（鳳麓は天子の乗る車）と呼ばれている。

また、この天皇の北西（箕輪町）には「后ガ丘」「后ガ洞」と称せられる地がある。箕輪坂はこの天皇の中央の小さな谷間を西にのぼっていくが、この両側の台地を結んだあたりに「欄干橋」があったと伝えられている。この地から南西の北沢にぬけるところに沢地があり「尾戸」と呼ばれている。

これらの字名から朝廷の直轄荘園であったらしくも推測されるが、確かな記録も遺物も見当たらない。昭和初期の「南箕輪新地図」には「天皇」と記されているが、箕輪町の地名には「天王」と記されている。

とにかくこの地は、明治初年には「天皇」の名からくる印象どおり、陵墓（皇室関係のみささぎ）と関係があったように記されている。

2 郷土が窪（堀ノ井）

中込城の南側、堀が深い沢をのぼりつめると中込台地と、南側の天伯台地が緩傾斜で結ばれる窪地がある。ここを「郷土が窪」と呼んでいる。ここは中込城の大手とは地続きで、現在は山林となっている。

郷土とは武士でありながら農村に居住して農業をいとなんだ地帯のことである。伝承も史資料等何一つ現存しないが、中込城に関わる

持屋敷でもあったのであろうか。西天の開田、中込の宅地造成などで地形が一変してしまっている。

3 猪の子芝（南殿）

大泉川の越場橋を渡って西南の高台から春日街道一帯を「猪の子芝」と呼んでいる。往昔ここに猪などが群棲していたといわれ、その地を猪の子芝とよんでいたというのである。

いまは西天の水田地帯となっていて、そのおもかげもないが、明治初年には畑となっていた。

猪の子芝、本村南殿跡地の西南五町ばかりの……今畑となりたり。往昔猪鹿群衆、常に此地を占めて、兎を乳養し甚だ民害をなせり。地僻名方命之を驛り置きたりという。此の事命御狩の衆に許なり

〔長野県町村誌〕

4 五輪塔（神子楽）

神子楽北西の段丘上にある「古城」の近くには五輪塔と称せられる素朴な三基の碑石がたっている。里人の言い伝えによると、文明年間（一四六九〜八六）に古城に居住していた箕輪氏の墓であるという。

本村神子楽跡地の方、古城百歩外の地にあり。五輪の碑石三塔を建つ。里老伝えて箕輪義建（左衛門）義俊（小太郎）義満（刑部）の墳墓とす。

〔長野県町村誌〕

里老の伝えであるから確かなことはわからないが、箕輪氏は『伊那温知集』によれば木下の箕輪城に住っていて、福与城主藤沢頼親の養子左衛門尉義雄から箕輪を氏号としたとなっている。その箕輪氏の系譜は次のように記されている。（印が五輪塔意）

清和天皇……源義仲……木曾又太郎……木曾太郎義親……高遠義信……

義房……義雄……義建……義俊……義満……義興……義久……義成……

また『信濃勤王史攷』には宗良親王の寓所だという説もあると記さ

れている。

いずれもはっきりしたことはわからない。

5 権理塚（大泉）

西天竜記念碑の南一帯を権理塚と呼ぶ。今は見渡す限りの水田になっているが、明治初年にはここに五輪塔が三基あったとして、次のように記されている。

権理塚、本村久保跡地の方字北原にあり、石碑五輪塔にて三基あり、菰苔石を蒸し、或は磨滅して文字詳かならず。実に古代の墓標と云う可し。

〔長野県町村誌〕

この五輪塔は昭和のはじめ西天竜開田のさい、塚はくずされ塔も四散したが、一基は大泉勝光寺に、一部は永井家のやしき西北隅へ移された。

この五輪塔もその由来はわからない。一説には箕輪城が武田に攻められて落城したさいの落人たちを葬ったところであるといわれてもいる。



図2-31 興光寺の五輪塔
権理塚から移したものの



図2-32 経塚のある地図

○のところが経塚で西大寺園田前に塚があった

久保の西、西天竜の利尻千秋の石碑の西側地帯を「経塚」という。この地名のところに、かつて経塚があった。経塚と書いたり京塚と書いたりしているが、北殿には「石行」がある。「伊那市史」には伊那市内だけでも八か所も経塚という地名が残る、本村に近い月見松遺跡にも経塚があったとされている。かつては経塚はかなり多く造られ、残存地名はほんの一部にすぎないといわれている。経塚はいつごろ造られたか、その時期は不明であるが、大体中世から近世へかけての時代かとみられている。経塚

また、宝永三年（一七〇六）ころの一説には加集主之助の家臣の墓だということになっている。

権理塚園の儀先の御地頭板橋路守様御家中加集木工之助どの伊予より御召し連れ成され候 若堂六十年以前右春日道上の土手を用い逆修の爲に築きたく申し候 此のものを後に権理と申し候 以上 宝永三年戊八月十六日 権理若堂名五兵衛後に庄左衛門と申し候

（中宿文書）

これによると逆修（生前に自分の仏事をなすこととして五輪塔をたてたのが、宝永三年より六〇年以前とすれば正保三年（一六四六）ということになる。

6 経塚

は主として「法華経」等の経典類を経筒に入れたり、お経の文字を石に書いたりして、それを土中に埋めその上に小さな塚をきずいたものである。

経塚が営まれたのは末法思想の影響によるもので、釈迦がなくなつて、正法から像法を経て、（各一〇〇〇年として）永承七年（一〇五二）には末法の時代となる。この末法の時代は仏法が衰えて社会に混乱がおこるといふ考えが、平安中期から鎌倉時代に流行した。そして釈迦滅後五六億七〇〇〇万年経つと弥勒菩薩がこの世に現れて、釈迦に代わつて衆生を救ってくれるから、それまでの間経典類を埋納して守つていこうとするのが、経塚であるとされている。

経塚造営の風が伊那地域に浸透してきたのはいつごろからかはつきりしないが、おそらく平安末期から鎌倉時代になってからであろうといわれている。初めのうちは末法思想によるこの経塚造営も、ただいに極楽往生とか現世の利益を願う実利的なものに変わっていった。また追善供養のために造営されるようになり、近世まで盛んに造られた。

- 7 「梨子か窪」御射山社別当寺の跡か（第五節一の四三参照）
- 8 「長慶塚」三好長慶を招魂（第二節一の（一）参照）

第六節 中世から近世へ

一 近世への第一歩——武田支配

中世から近世への移行は、応仁の乱（一四六七—七七）から全国にひろまった争乱によって、方向づけられたといわれている。下廻上の時代がはじまったのである。当地方では、それより早く信濃守護であった小笠原氏の分家がはじまり、文明十一年（一四七九）には伊那小笠原氏も松尾と給向に分裂して争い、諏訪上下社も分裂して争うといった状態になった。

一方では天文十二年（一五四三）にはポルトガル船が種子島に漂着し鉄砲を伝え、それから数年後にはザビエルが鹿児島に上陸しキリスト教を伝えている。こうしてヨーロッパ人が日本に來航することになったのである。

天文十四年（一五四五）には武田信玄（晴信）が、伊那に攻めこんできて高遠城も福身城もおとして武田氏の支配がはじまった。続いて天文二十二年（一五五三）には下伊那も武田支配となり、各村に郷代官がおかれて、村落の支配形態が近世へ近づいた。以後天正一〇年（一五八二）まで、約三〇年間、伊那郡は武田氏の支配下にあった。武田氏は高遠、大島、飯田の三城で伊那郡の各地に割拠している諸豪族を統率した。高遠城には秋山信友を伊那の郡代として住まわせ、飯田には藤部美作守をおいた。

信玄は、そむく者は滅し、従う者には知行を与えて、旧族を利用した。下伊那まで伊那郡全城を領有したとき、殿村の八幡宮に七貫文（社伝）、箕輪の御射山大社に七貫二〇〇文を寄進した。

今度下伊那へ備の御、神前に願書を納め奉り候い畢んぬ。成就の間御神領と

して七貫二百文の所連祿し奉り候。おのおの社人等武運長久の祈念精誠を致すべきものなり。仍って性の知し。

天文廿三年九月晦日

（箕輪町小笠原文書）

こうして信玄によって伊那地方は争乱もせず、近世への第一歩をみだしたのである。

この間に当村地域にあった小豪族（有力名士）たちは、それぞれの城（館）に住んでいたが、大多数が民間に下って、農民となった。『長野県町村誌』によれば次のように、武田氏に滅ぼされて、民間にくんだり、子孫が今に継承すると記されている。ただ、榎木城主だけが信玄に反抗したのであろうか、没落して家名を失うとある。

榎木城址（久保）……武田信玄打ち入りノトキ没落シテ家名ヲ失ク
倉田城址（北郷）……箕輪氏ニ属ス……民間ニ降リ子孫今ニ継承ス

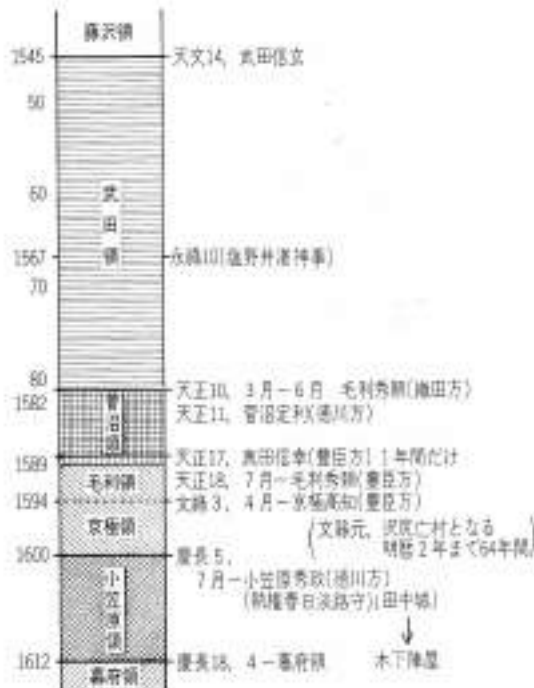


図2-33 中世から近世への所領の推移

有翼の城址（南殿）……筑輪氏二属ス……民間二降リ子孫今ニ継承ス
 日戸氏館址（田畑）……累世筑輪氏二属シ天文年間滅亡シテ後民籍ニ帰ス
 高木氏の宅址（神子集）……筑輪氏二属シ保科氏二属ス……民籍ニ帰シ子孫
 ……今ニ此地ニ住ス

大泉氏の館址（大泉）……筑輪氏二属シ主家亡ビテ民籍ニ降ル

（長野村果可能也）

二 目まぐるしい支配者の交替

（一）信長支配（二か月）

天正一〇年（一五八二）、織田氏は信忠を先鋒として岩村口から伊那に進み、森長可らは本曾から清内路を通って進んできた。下伊那では戦争らしいものもなく、信忠は二月一七日に飯田へ入り、三月二日には高遠城へ迫った。伊那郡で城を死守して戦ったのは仁科盛信だけであつたが、三方からの攻撃に盛信らはほとんど戦死して、城は三月二日に陥落した。

信長は安土を出発し、三月一四日には浪合で武田父子の首実検をし、一九日には上諏訪に入った。そこで甲信両国（長野県、山梨県）の知行割をし、伊那郡は毛利秀頼の領地とし、「一か条の国掟を公布した。

国掟 甲、信濃州

- 一、開墾所、開闢口取るべからざるの事
- 一、百姓前、本年貢の外、非分の儀申し懸くべからざるの事
- 一、忠節の人立て置き外、度々しき侍を生害させ、或いは退失すべきの事
- 一、公事等の儀、能々念を入れ穿鑿せしめ、落着すべきの事
- 一、國の諸侍に擧授すが、油断なきの操進すべきの事
- 一、第一怨を構うるに付いて、諸人不足たるの条、内儀相續に於ては、皆々に支配せしめ人数を抱うべきの事

一、本國より奉公を望むの者これあらば、相改めまえ懸え候ものの方へ相届け、その上に於て扶持すべきの事

一、城々の普請丈夫にすべきの事

一、鉄砲、玉薬、兵器蓄うべきの事

一、進退の郡内諸口取り、道を作るべきの事

一、堤目入組み、少々領中を論ずるの間、悪の儀これあるべからざるの事
 右定の外、悉く扱ひに於ては、罷り上り、直に訴訟申し上ぐべく候

（平沢清人「近世村落への移行と兵農分離」）

いかにも電光石火の早わざで信長らしく、またまさに近代の夜明けをつげるひびきのあるものであつた。戦乱が続いていたので城普請を丈夫にし、鉄砲や兵糧を蓄えることは当然としても、本年貢のほかはとてはならない等にそれを見ることができた。

しかし、甲斐（山梨県）を回って東海道を安土へ帰った信長は本能寺の変で、六月二日に横死してしまい、織田氏の諸將と同様、飯田城主毛利秀頼も京都へ引き揚げてしまった。

（二）家康支配（菅沼定利）

信長の急死により一時空白となった甲信両国へは、東から北条氏、北から上杉氏、南から徳川氏が兵を進めてきた。さきに武田氏や織田氏によって所領を失った伊那郡の領主たちは、それらの諸將によって、故地を回復しようとした。箕輪の藤沢頼親もその一人であり、下条氏のさそいによって高遠城を占領した。

ところが、保科正直が諏訪から家康の応援をえて攻めこんできた。そしてこの保科氏によって、田中城の藤沢氏は亡ぼされたことは前述のとおりである。対立関係にあった徳川氏と北条氏の和議が成立して、川中島を除く全信州は家康の領有となった。（七月十五日）

家康は天正一一年（一五八三）後半に、菅沼定利を伊那の郡代とし

て治めさせた。しかし、まだ旧領主たちがいて統治は困難であったが、しだいに南信濃一円をその勢力圏におさめていった。

(四) 真田支配(二年)

天正一三年(一五八五)八月、家康は上州の沼田城を北条氏に与えるよう、真田昌幸に命じたが、昌幸はききいれなかった。家康は真田氏を討つために伊那の諸族に出陣を促したりしているが、進展しなかった。

一方で、家康が秀吉への臣属にふみきつたのは、天正一四年(一五八六)正月で、家康が大坂城に行つて成立した。この秀吉の仲介によつて家康と昌幸の和解が成立し、昌幸の長子信幸(信之)が家康に出仕することになった。その後天正一七年(一五八九)秀吉と北条氏直の政治折衝で沼田領の半分を北条氏に割譲し、かわりに家康支配の箕輪の地が真田に与えられた。

箕輪領が真田領であったのは、たった一年であつたがはじめて「箕輪領」ということが使用された(『箕輪記』)。記録に残っていないが、木下の養泰寺の宝物に「銅造風炉」があるが、これは真田信綱の龍品であつたのを、永禄年中(一五五八―七〇)小県郡横尾村信綱寺へ納めた品であつたが、後故あつて養泰寺へ伝来したという(寺伝)。これもこの真田領時代と関係があつたのではなからうか。

(五) 秀吉支配(毛利・東郷)

箕輪領が真田支配になつて一年たった天正一八年(一五九〇)に小田原城が陥落し、七月一三日秀吉は家康の領地三河、遠江、駿河、甲斐、信濃を取り上げ、そのかわり関東八か国と取り替え、別に近江と伊勢一十石を加増した。真田氏も菅沼氏も移封され、飯田城主は毛利秀頼が再び、伊那郡全城一〇万石の領主となつた。

毛利秀頼の治績については、後述するが、文禄元年(一五九二)に

は秀吉が朝鮮に出兵し「文禄の役」がはじまつた。この役は大事件だったので、寺社では祈願を行ない、信州からも次のように多数出陣した。

高麗へ御人数遣りサレ候御祈願ノ次第

一、玉香衆 三百人 日根ノ高吉(真島)

千人 毛利 秀頼(飯田)

八百人 石河 康長(松本)

(『寛政清人家文書』)

伊那郡から一〇〇〇人も出征し、軍馬もでているのに驚かざるを得ない。朝鮮遠征軍は最初は連戦連勝であつたが、海軍が破れ食糧もなくなつて、翌文禄二年(一五九三)四月、講和交渉がはじまり停戦した。毛利秀頼もこの戦争に参加し、病をえて帰国し九月一七日亡くなった。秀頼のあとには女孀の高知がひきついた。

毛利、京極時代一〇年間は伊那谷の近世への夜明け時代で、秀吉の全国模範が郡のすみずみまで行なわれた。真高制から石高制となり、兵農分離が実施された。

(六) 再び家康支配

慶長五年(一六〇〇)関が原の合戦で西軍が敗れ、東軍の家康が勝つた。高知はその戦功により二万三〇〇〇石加増されて二万三〇〇〇石で丹後の宮津へ移封された。そのあとは家康の蔵入地(幕府領)に組み入れられ小笠原長巨と朝日受永が郡代となつた。朝日受永は榑木役で木材奉行として来ただけで領地はなかった。一説によると受永は五百数十石を伊那で与えられたのを、各寺社に寄進し「寿永状」を与えたといわれている。(後にこの寿永状が將軍の朱印状により認知された)

三 「村」の時代へ

天下統一の信長の前に立ち上がったものは次の二つであった。すなわち第一に戦国諸大名であり、第二に宗教教団（一向宗）勢力と農民勢力であった。信長は果敢にそれらと戦ったが、志半ばにして倒れた。信長の軌道をうけついで豊臣秀吉は、まず第一の戦国諸大名をほぼ平定すると同時に第二の一揆勢力の解体に手をつけた。一揆勢力といっても教団勢力は既に信長において決定的な打撃を与えてあったので、残るは農民である。それを有名な「太閤検地」（一五八二〜九八）で実行した。秀吉は下廻上で成り上がったのであるが、これ以上、下廻上を越えないことを願った。下廻上の終結を、この検地によってなそうとし、それはみごとに達成された。すなわち、

（一）田畑や屋敷を一筆毎に丈量し、上、中、下、下々の品等を付け、その生産高を玄米の石高をもってあらわす。（石高制）

（二）その土地を耕作している者を名請人として、検地帳に登録して貢租を納入させ、これを百姓とする。

（三）領主の年貢取権と、百姓の所持権とを確立し、中間搾取的存在であった名主を廃する（一地一作人の原則）

（四）耕地の丈量には六尺三寸の縄を一間とし、一間平方を一步、三〇歩を一畝、三〇〇歩を一反とし、米は京石をもってする。

（以前の村は各荘園で不同であった。秀吉は京都周辺の京石を全国的に使用させた。六四八二七立方分が一升であった）

以上が太閤検地の要点であるが、当地区では次のように行なわれたと、平沢清人著『近世村落への移行と農民分離』に記されている。

○検地奉行 浅井九兵衛・安井小右衛門

検地奉行 箕輪一・神戸藤一・野々村古左衛門

○伊那郡の秀吉の検地は、はじめて本格的な地押しの検地で、全郡的には、明治の地租改正まで行なわれなかった。

○地押であった者も百姓としてとりあつかわれる。

○一年近くかかって、各村から本帳を出させ、各村の郷代官に下百姓を一軒支配させ、検地にかかっている。

特に箕輪衆には秀頼から次の書状が出されている。

箕輪衆へ

尚々、連々たいくつゆき候へば、そそになるものに存じ候て、其の段分別候て、能く能く申し付けらる可く候。以上検地の操練如何候哉、いかにも念を相入れ、其の上にて進断なく分を誤し急がされ可く候之事專用に候其の元の牒具に申し越さる可く候、其の為此の如くに候。恐々

九月一七日

秀頼（關白）

（平沢清人家文書）

これは二人の箕輪領地奉行にあてたものであるが、念を入れて急いで検地をするように命じている。天正一九年（一五九五）の秋から冬にかけて、多くの検地奉行を任命して一気に伊那郡の検地を行なっている。かつてやらなかったような面期的な仕事は、百姓にすきを与えず、強引ともいわれるすばやきで行なう必要もあった。各村のかつての地侍たちが連携を充分とれないうちにやる配慮もあった。かつての作人や名請人たちには一人前の百姓にとり立てられる有利さはあったが、地侍たちの階層は侍身分をとられたうえに、年貢は地押しで検地されるので隠し田が許されない不利もあった。

この太閤検地によって在地の小領主など中間の課役者を排除して、土地所有者と大名領主を一元的にした。また、小作料を否定して生産者である百姓の土地所持権を保証し、小農経営を安定させた。年貢を徴収するには貢高制でなく石高制をとった。そしてそれは村高によっ

で納入させたので、行政単位としての「村」がここに成立した。

大名の軍役等もこの石高を基準として割り当てた。こうして石高制は農民支配と大名支配の二つの面を、統一的に把握する基準となり、幕藩体制の柱となった。一方で荘園制は完全に消滅した。

天正一八年（一五五八）から刀狩りを行ない、百姓化した旧名主からは武器をとりあげ、家臣（武士）となった名主は給地から引離して、城下に集結させた。これによって戦国時代をとおして徐々に進行していた兵農分離が完結した。

前代にはしばしば一揆を起こして支配者と戦うほどの抵抗を示し得た農民も、この検地と刀狩りによる兵農分離によって、再び土地にしばりつけられていくことになった。

それはそれとして、近世は「村」の時代であるといわれているのは、この村高によって年貢が課せられ、村がはじめて行政単位になったからである。

第三章 村の近世

第一節 村のなりたち

一 村々(区)の概要

私たちは古くからムラに住んで来た。ムラは村とかくが、もとは群のいみであつたという。人は今も昔も一人では生きられない。群がって住んできたのである。すなわち同じ水系や地形を利用して、居住をともにしてきたのが村(村郷)である。こうして古くから生活共同体としての村が、庄や郷の表にでない基盤として続いてきた。

ところが、中世末から江戸時代にかけてこの村が一躍歴史の表にでてきた。それは各々のムラが検地をうけて、独立した行政単位としての「村」となったのである。歴史上村々(村郷)が一つの行政単位となったのはこの江戸時代だけであり、久保村、殿村、田畑村、神子柴村、沢尻村、大泉村が誕生したのである。

慶長六年(一六〇二)に実施された検地(「千村屋文書」)によると、詳細はわからないが、村高だけははっきりと次のように記されている。

一、高三七五石五斗二升六合	中	久保村
一、高七〇四石九斗八升五合一勾	中	殿村 <small>北</small>
一、高二八四石四斗九升四合一勾	下	田畑村
一、高二七〇石二斗五升二合	上	神子柴村
一、高四〇石七斗六升五合	下	沢尻村
一、高一九九石四斗七合三勺	下	大泉村

ここで高はその村の田や畑からの収獲高を示し、上中下はその村の

田や畑の等級を示している。この時沢尻村は既に亡村になっていたはずであるが、まだ久保村にくままれていなかったのか、ここに沢尻村分の高が示されている。当時実領領全体で二六か村一万三二六石余であり、高遠領は二万五二一〇石余、伊奈郡(上下)全体は一〇万石余で二五六か村であつた。

このようにして検地により村の高がきめられて、独立の行政単位となった村々は、それぞれ名主、組頭、百姓代(少しおくれた)の村役人によって、村の治安や年貢などのこと一切がとりしきられた。つまり領主は直接村を治めるのではなく、これらの村役人をおして治めた。

とにかく村高によって、村々の大きさが示された。当時の全国平均の村高は四〇〇石一五〇石とされているから、殿村を除いていずれも平均に満たない小規模の村であつた。しかし、中世以来の成り立ちを重んじて、それぞれが独立した村となつたのである。普通村の広さは耕地反別(反)の広さで示されるが、この検地の時の面積ははっきりしない。(全国平均は五〇haとされている)

次に人口であるが、村の全国平均は四〇〇人であつたといわれている。次表のように当地の村々は人口においても平均に達していない。この人口は江戸時代二七〇年間を通じて、ほとんど変化(増加)していない。各村の順位は多少変化しているが(ただしこの表の人口は江戸初期・江戸後期としていたが、必ずしも同一年のものではない)この順位の変化はどうしておこつたのか、いろいろのことが考えられるが、はっきりしたことはわからない。

表3-1 江戸時代の村の人口

江戸初期			江戸後期		
1. 北原村	二四九人	1. 大森村	四〇二人		
2. 田沼村	三〇二人	2. 田沼村	三七一人		
3. 南殿村	二八八人	3. 北原村	二七五人		
4. 大森村	二五九人	4. 神子安村	二二二人		
5. 久保村(北原・塩ノ井)二五四人		5. 久保村	一九一人		
6. 神子安村	二五二人	6. 南殿村	一四一人		
		7. 塩ノ井村	二二七人		

領主の交替は非常にはげしく、私領(大名領)になったり、天領(幕府領)になったりした。比較的長かった徳政時代(五六年間)には井堰の造成など治績もあがったが、僅か一、二年で領主の交替するところからは、とりたててあげるような治績はあがらなかった。そのうえ、元禄二年(一六九九)からは同じ箕輪領に属していた村内が、二分されることになってしまった。久保(塩ノ井直胤を含む)と北殿(二部)と南殿(大分郡)が私領の太田領に、他の村々は幕府領となって飯島代官所の支配するところとなった。これは断続的に幕末まで続き、おびただしく領主が交替したのである。その概略は第二節の表3-2のようである。

このはげしい領主の交替と二分統治は、その後の村の発展に、少なくとも村民の生活感情や文化面に有形無形の大きな影響を与えたものと思われる。

二 村々の由来と推移

1. 久保村

古来「供奉」中古「鹽村」と改められ、宝永年間(一七〇四〜一七二二)に「久保村」と改められ、明治八年に「久保村」となり、大正三年より「久保区」となつて今日に及んでいる。

区名の由来は明らかではないが、明治九年の「村誌」には次のように記されている。

命を供奉し奉る地供奉を呼びて久保となすなり

供奉とは「行列に加わってお供する、お仕えする」という意味である。一方で、この地は草地が多いので「鹽」といわれたともいわれている。後それが音だけとって「久保」と好字を用いるようになったのであろう。

久保村からは、多くの村が分村していった。

高町(吹上村)・沢尻・塩ノ井がそれである。

まず高町であるが『伊那史略』等には久保村から分郷したことは記されていないので後の研究にまたなければならないが、次のように久保村から分郷したことが宝永三年(一七〇六)の文書に明記されている。

吹上村口書

一、吹上村の儀小笠原氏部太輔孫代久保村馬場太左衛門と申す者、開墾の地面高町に之有り候故右太左衛門方より久保村安右衛門四郎右衛門と申す者にくれ渡し夫より段々新田仕立て百姓も多く墾り候に付き分郷に罷り成りたき旨相談を以て願ひ奉り即ち分郷に罷り成り候。其の節の帳面は喪失仕り候故承応式已御換地御改め請け申し候其れ以前は久保村枝郷にて御座候。以上

吹上村 伊兵衛

戊 八月十七日

同 宇兵衛

吹上村と呼び、久保村からだした左の文書によると久保村の分郷になったのは、徳川時代であったとしている。

右吹上村の儀久保村の者開墾仕り久保村の被郷にて御座候。前々開墾の分久保村地面にて御座候所に、脇坂中務様御知行の御分郷に願ひ奉り、夫

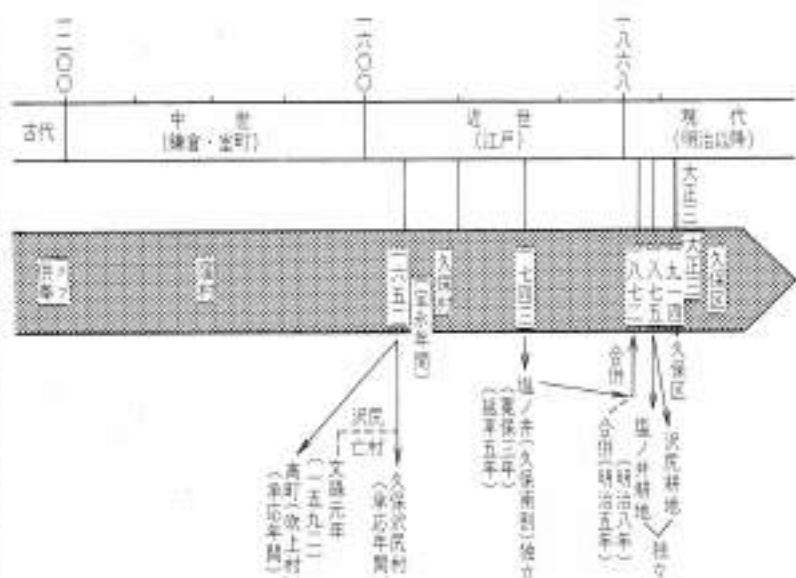


図3-1 久保村のうつりかわり（分郷）

（大衆館文書）

より吹上村へ御水懸下され候以上

戊辰八月十七日

新庄太右衛門殿

木暮朝右衛門殿

久保村 与五右衛門

同 文右衛門

（大衆館文書）

況況と塩ノ井については、その村のところでのべる。ただ、その分郷までふくめた久保村は、北殿、南殿の一部を加えて、南宮輪の他の部落と異なった統治をうけてきた。その概要は図3-1のとおりである。元禄一二年（一六九〇）から明治まで一五〇余年間のことであった。

四 塩ノ井村

塩ノ井区名の由来について、史料も伝承も見当たらない。ことに塩が何を意味したか見当もつかない。井については、江戸後期の古地図に「塩ノ井の井」があり、実際に湧水も多いのでうなずくことができる。

前記の久保の項でのべたように、塩ノ井は久保に久しく含まれていたが、比較的古いころから塩ノ井の存在があった。

塩ノ井ニ於テ奉冬満神事七貫五百文ヲ免ズ此ノ内奉賞式百文ハ塩ノ井ニアリ六貫三百文ハ高瀬科所ニ候……………然レバ即チ神主補助四郎殿重ニ執行ス可シ。

コレ時永禄八乙丑年十二月十日

（武田信玄文書）

（上下社所蔵文書）

塩ノ井が久保から独立したのは寛保三年（一七四三）説と延享五年（一七四八）説とがあるが五年しかちがっていない。

恐れながら書付を以て願ひ上げ奉り候

一、久保村の内堀野井の儀前方太田大助様御知行所の御分郷に願ひ申

し上げ候……

宝暦十一年己二月

(塩ノ井大東文書)

太田大助の知行は享保一一年(一七二六)から寛延二年(一七四九)であるから、その晩年に分郷になったのである。

明治五年に再び久保に合併し、明治八年には塩ノ井耕地となって、久保から独立した。しかし、久保との縁は深かったため、「久保北割」に対して、塩ノ井を「久保南割」とした慣用が後々まで使われている。大正三年から「塩ノ井区」となって現在に及んでいる。

(四) 大泉村

古くは「尾泉」とかき「大泉」と改めた。大泉と書いても、昔どおり「オイズミ」と呼んできた。名前の由来は定かではない。一説には大泉所山・大泉川・大泉村の大泉は、大泉氏という郷士の開拓による地を意味するという。

元禄六壬寅年此の地の郷士左内藤子常之進より大泉常之丞と代々此の地を治め、殊に大泉常之丞は郷内人民に命じ専ら開墾せしむ。大泉所山、大泉川の称此の郷士より出でたり。

(明治三五年内務省神社局旧神社録)

また一説には大泉川の水がこの辺から伏流するので、尾の泉であるといひ、伏流して下流へいって水が出るので、「尾水無川」(無無川)の下流で水のないのに対して、「尾出水川」(大泉川)と呼ばれ下流へいって湧水の豊富な川を意味したのであるという説もある。

永禄年中(一五五八〜一五七〇)大早魁のときから鹿踊りが始まったが、おめでたい名のついた村として「大泉」があげられているので、この時はもう尾泉でなく大泉であったことが確かである。

永禄年中大早魁。近郷開墾い大願成就して御礼として目出度き村名とし

て鹿踊と云う事を出す。

戦国時代の末ごろ、大泉上総がいたところである。

天文年中大泉上総居館の跡あり。

(伊那郡神社仏閣記)

(伊那郡志)

大泉上総の古記録はないが、大泉幸屋の祝詞に写真のような「大泉上総」と書いた石碑がある。(図3-2)



図3-2 大泉上総関係の碑

慶長一三年(一六〇八)には春日街道ができ、大泉は宿場となった。この時は東西に縦長の村から、南北に横長の街道ぞいの村となり、八間の町割りもできた。その町割りのあとは一部に現在も残っている。約五〇年ほどして、慶安二年(一六四九)には北殿へ移って、「大泉北殿」となった。このとき大泉から岡屋一人と伝馬六人が北殿へ下って、大泉が西側に構え、北殿が東側に構える合宿となった。(第三節二参照)

その前年、慶安元年(一六四八)には、大泉新田が新しく、開発されて分村した。大泉新田は諸役御免の恩をうけた加集主之助を加集権現としてあがめている。

北殿村

北殿の名は、もともと殿村と呼ばれてきたこの地域が、南北に分か

れてから北にあたる殿村なので「北殿村」と名づけられた。いつ分かれたかについては、大かたは慶安二年（一六四九）としているが、寛文二年（一六七二）説もある。

殿村古工殿跡、中古殿村ト改メ、慶安二年南北両村トナル、慶安二年大泉宿ヲ北殿ヘ移シ北殿大泉合宿トナル

〔長野県町村誌〕

寛文十二年迄殿村一郷立テマカリ有リ然レテ南殿寄合イ相願万事ニツキ違ツテ分郷ニ仕リタキ願イニ村キ北殿南殿ト分カル

〔千村屋文書〕

殿村はその昔殿衛と称した。建御名方命が行宮（飯の宮）をこの地になされ、多くの家来たちがその殿衛（殿を囲んで守る）をした地である。この殿衛が後になって殿村といわれるようになったというのである。その建御名方命に關係する御射山大社の「里宮」がある。

とにかく、承平二年（九三二）創建と伝えられる殿村八幡宮はなかなか由緒が古い。創建から後も信濃守護職の小笠原氏にずうっと尊崇され、天文二三年（一五五〇）には武田信玄が七貫二〇〇文の地を奉納し、江戸時代には四石という御朱印もあった。この古い由緒をもつ殿村八幡宮とともにあったのが殿村の村人たちだった。

慶安二年には伊那街道大泉宿が下つてきて、北殿大泉合宿となり、以来明治初年まで宿場であった。また、元禄二年からは古科と上知に分割統治された。

（四）南殿村

分村したのは、慶安二年（一六四九）であった。それから、五〇年ほどたった元禄二年（一六九〇）には、村内がさらに二分された。当時高三〇〇石弱のところ、五七石余が飯島の代官所（幕府領古科）に、二四二石余が松島の太田領（私領上知）になったのである。この

ように領主がらうということは、いろいろ影響があったが、明治八年に南宮輪村が誕生したとき「南殿村」として一つのまとまりとなり、大正三年に「南殿区」となって現在に至っている。

（五）田畑村

田畑の由来もはっきりしない。古くは田島とかき、後に田畑とかくようになった。古い伝えによると、建御名方命が狩をなさったとき、命とその群臣に食料をさしあげたことから、田畑と呼ぶようになったという。

田畑村は分郷もなく、統治も一つであったが、北割と南割に分かれていて、それぞれが神社をもっていた。南割には「前宮神社」があって建御名方命を祀り、神田五反歩をもっている、徳屋の神事するときの盃所であった。北割には「神明宮」があって天照大神を祀っていた。しかし、昭和二三年になって両神社を合祀して「田畑神社」とした。田畑村は、明治八年に田畑村となり、大正三年以降「田畑区」となっている。

田畑区の由来を語る一つとして、清水の城が字清水（権夷）にあったと伝えられ、別に日戸氏が居住していた天文年間（一五三二―一五五〇）武田氏に敗れたことも伝えられているが、中世以前のことははっきりわからない。

（六）神子栄村

神子栄村には神子栄遺跡があり、ここは、旧石器時代（紀元前一万年）に既に狩猟文化をもって居住した先人の跡である。しかし、その後の経過は定かではない。御射山社の碑陰には、この社は大同四年（八〇九）坂上田村麻呂が創建した社としている。古くは御園と一村であったことが記されるが年代はわからない。

古工御園場御園ト一村タリ、分村年所不詳、中古御園場ト云リ。後御子

集落改メ、延宝六年神子柴ト改ム。

〔長野県町村誌〕

この辺一帯の地と建御名方命のゆかりから、命の行宮（かりのみや）でお腰をかけられたので「御腰場」の名がおこり、御奥をだした地なので「御奥場」と改められたとしている。のち御子柴と改められ、延宝六年（一六七八）に「神子柴」と改められ、今日までこれが用いられている。「神」とわざわざ変えたのはどうした意味であろう。

慶長六年（一六〇二）の検地帳によると、本村でただ一つの「上免」の村であるから、古い由緒をもつと同時に早くから裕福な村であったと思われる。明治八年に南箕輪村となったのに、明治一六年には独立して単独の「神子柴村」になろうとしたほどの実力ももっていた。

しかし、その分村はききとどけられず、神子柴耕地から、大正三年に「神子柴区」となつて今日に至っている。

Ⅳ 沢尻村

沢尻は数奇な運命をたどった村である。古代は「沢渡」といい、後になって「沢尻」と改められた。区名の由来は「長野県町村誌」によると建御名方命が猛獣を追いつめたさわみの地の意味（ぬみは尻）で沢尻と称したとある。

文徳元年（一二六〇）に御射山社の再建營の式を執行したのが、神職宮島氏であった。羽廣の山王権現には、「文明五年（一四七三）六月一日祭主宮島津盛蓮行」という棟札が残っており、沢尻に宮島氏館跡がある。これらによって宮島氏は沢尻に居を構えていて、御射山社の神職と里長を兼ねていたと推察されている。

文禄元年（一五九二）宮島式部一族は近郷土人のために襲われて、僅かに数人と逃げだしたため亡村となつてしまった。土人たちが罪に座してから久保の榎木城主榎木四郎（節の夫）方に寄食し、承応年間

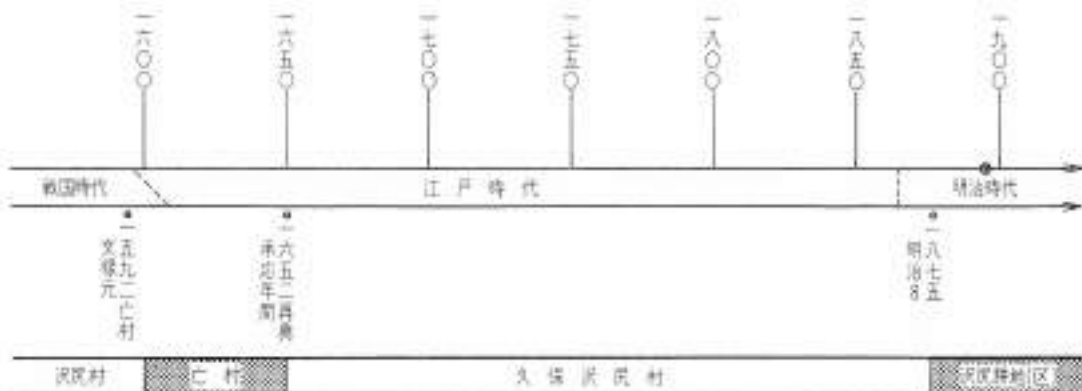


図3-3 沢尻の推移

（一六五二一五五）になって再び一族とともに沢尻へ帰ったが、久保から独立せずに久保に属していたので、「久保沢尻村」と合村のような形で通称してきた。

とにかく、沢尻は古くから相当の力をもった村であったことは確かである。明治八年に沢尻耕地となり、大正三年に沢尻区となり、西天竜ができた信大農学部や上農高校も近くにできたので、めざましく発展しつつある。

中ノ原区の合併

昭和二二年の春から中ノ原区があった。昭和二四年の「村勢要覧」にも部落名に中ノ原の記載がある。

昭和二九年（一九五四）一月三日、小奥を捨てて沢尻区へ編入することになった。

区であった当時に「諏訪神社」をお迎えして産土神としたが、いまは当時の人

々の祝賀となっている。

(九) 南原区

南原の地域一帯は、中野原と称する入会原野であった。昭和二二年に、新しく誕生した区である。南箕輪の南方にあるので、南原区と称することが区議会できまり、そのように称してきた。

南原のたくましい開拓精神とその村づくりの原動力は、二つの「拓魂」の碑が伝えている。

○南原の「拓魂」の碑

入植年月	昭和二十一年十一月
入植戸数	四十六戸
開拓総面積	八十余町歩
電気導入	昭和二十四年二月
水道完備	昭和三十一年二月

○西原の「拓魂」の碑

入植年	昭和二十一年
入植戸数	二十四戸
電灯完備	昭和二十七年九月
水道施設	昭和三十一年三月
水道完備	昭和四十七年四月

南原区となっても、開拓の過程によって、農協は南箕輪（南原開拓農協組合）と西箕輪（西原開拓組合）に分かれ学校も同じく委託ではあるが、伊那小中学校と西箕輪小中学校に分かれている。

(十) 大芝区

昭和二二年、大芝原村有林の開拓によって、新しく誕生した区である。区名の由来も大芝原から、大芝区とした。

昭和二二年、敗戦後のどん底生活の中から、数名の二、三男を中心とした青年たちの強い希望により、この地の開拓が計画され、果敢事の開拓遠征の指定を受け、翌二一年から入植者が入るようになり、二九戸による四八haの大芝区が誕生した。

開拓の事情は「拓魂」の碑に伝えられているが、いまその一部を略記すると、次のようである。

碑記 拓魂

碑誌 大芝開拓碑 由来（略）

主なる事業

線面積	五八町三反
耕地面積	四八町六反
入植年度	昭和二一年
入植戸数	二九戸
植井戸数	昭和二二年
電灯工事	昭和二四年
神社建立	昭和二七年
成功検査	昭和三〇年
公民館	建設昭和三三年
四ノ沢	水道昭和三三年
村営水道	昭和四一年

(十一) 北原区

昭和二一年、北原地籍に、各地からの入植者一〇戸により、北原開拓団を設立し、一町九反を開拓して、北原区が誕生した。北原地籍のこの地であったから、字名どおり「北原区」と称した。一時は一七、八戸にふえたが、現在は一四戸で、日本一小さい区と自認している。

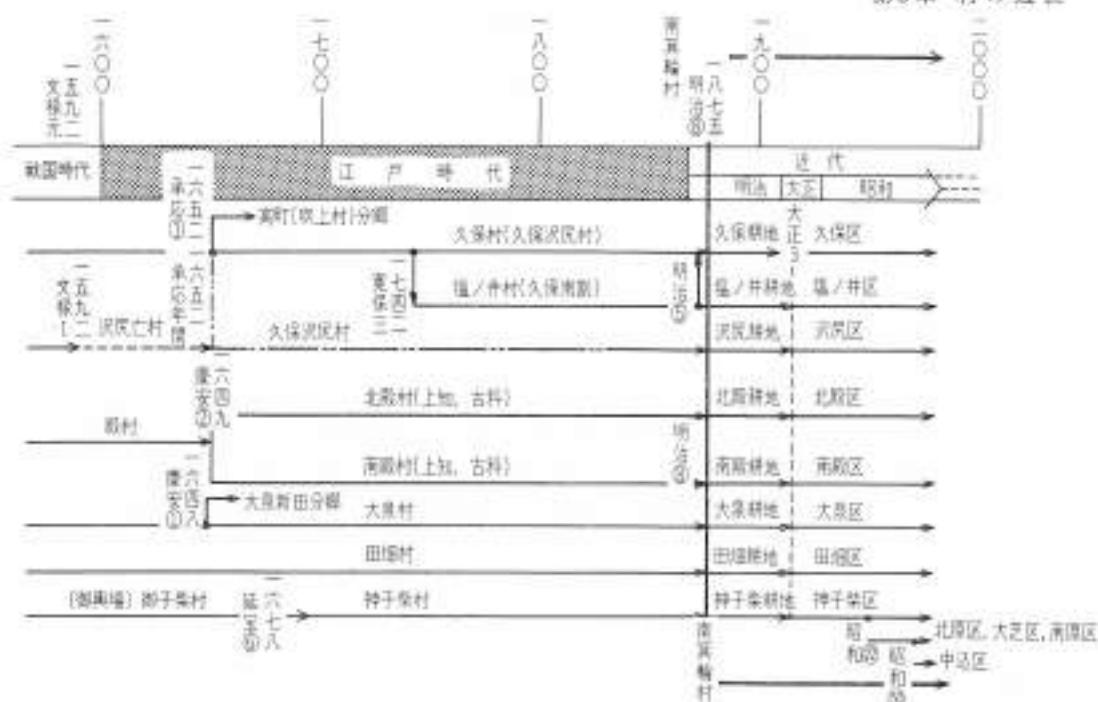


図3-4 南箕輪の各区の推移

昭和三年には懸案であった水道もひかれ、昭和四〇年には区の「諏訪神社」も建立されて、今日に及んでいる。

③ 中込区

昭和五〇年八月三日、中込団地一〇五戸をもって、中込区が誕生した。昭和四五年から県企業局の団地造成がはじまり、入居戸数一〇二戸が結局一〇五戸となって、南箕輪村第一二番目の新しい区となったのである。中込区のように、団地だけで区を形成したのは、県下で最初であるといわれた。

中込の名称は、中込城のあった地にちなんでつけられた。中込城は、天文一四年(一五四五)に武田信玄が福島城を攻めたとき、福島城の出城の一つとして、塩ノ井中込城があったとされている。

現在でも字「中込」があつて、おずかに中込城を偲ばせているが、新しく誕生した「中込区」は区として発展しつつある。

まとめ

以上南箕輪村の村々の由来と推移を一つ一つに記してきたが、これを図表にすると図3-4のようになる。

第2節 村の姿

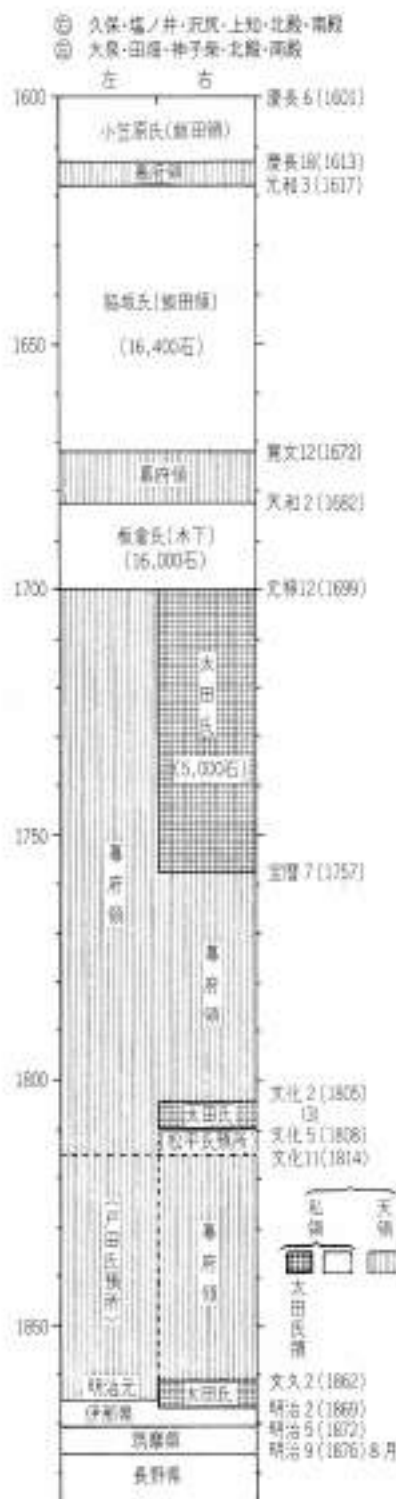


図3-5 南荒輪の所領の変遷

第二節 村の姿

一 領主と村

〔一〕 領主の交替

江戸時代を通じて、当村地域の特徴は、天領と私領の交代がめまぐるしく、また、同じ箕輪領としてきた地域が天領と私領に二分されて統治されたということである。その概要を図示すれば図3-5のようである。

ここではそれを三期に分けて次のように記述することとする。

○田中城から木下陣屋へ (前期)

○松島陣屋と飯島陣屋 (中期)

○飯島役所と松本役所 (後期)

1 田中城から木下陣屋へ (江戸時代前期)

近世になって前期の約一〇〇年間は、私たちの村々の領主は、図3-5のように、私領(大名の領地)と天領(幕府の領地)とが交互に交

替した。まず飯田城主の小笠原氏が、箕輪領(二六か村)一万石を、田中城に代官二木氏をおいて治めた。その時の執権が春日淡路守で、春日街道を造った人であった。それから大洪水のために田中城をひきあげて木下陣屋に移ったのが、慶長一八年(一六一三)のこと、この時から天領になった。

四年後の元和三年(一六一七)から再び飯田城主の堀坂安元の私領となり、この堀坂時代は五六年間続いた。箕輪領はこのころ三三か村に増えた。この時代は新田村が多くつくられ、大泉村から大泉新田が誕生した。その時の郡代加集木工之助もこの木下陣屋にいたわけである。

それから再び幕府領になり、一〇年の後また私領の飯倉領となった。このように江戸時代初期の約一〇〇年間に私領と天領と私領と天領と交互に五度も交替があった。

- | | |
|-------------------|------------|
| (1) 小笠原領(私領) 一二年間 | 田中城陣屋 |
| (2) 幕府領(天領) 四年間 | 木下陣屋(代官飯島) |
| (3) 堀坂領(私領) 五六年間 | 木下陣屋 |

(4) 幕府領 (大領) 一〇年間 木下陣屋 (代官飯島)

(5) 板倉領 (私領) 一七年間 木下陣屋

2 松島陣屋と飯島陣屋 (江戸時代中期)

箕輪領内に属していた当地域にとって、元禄十二年(一六九九)は国替えの大変な年であった。板倉氏が籍中(岡山県)の廣瀬へ国替えとなったのである。国替えは村にとって大変なことであった。もんや「日限記」には次のように記されている。

国替え、元禄十二年己卯二月九日ニ江戸ヨリ申シ来リ候替り四月廿八日東六左衛門へ御口成ラレ候テ、四月廿九日御請取り成ラレ候

(もんや文書)

ここでは日記帳であるので簡略に記されているが、井沢文書は木下へ代官の手代が来たときの様子を次のように述べている。

二月九日に御地頭の板倉頼母様は備中(岡山県)の廣瀬へ御取替えの通知が来た。三月一九日に貢租帳である小物成帳を御勘定所へ差しあげ、御請取りの代官の手代四人が四月二十九日に木下へ着いた。

まず、箕輪領村の絵図面を差し出し、続いて五月一日に「百姓請取渡し」をし、陣屋の絵図面を渡した。百姓方へ差し出させた裏面は、元禄二年から一〇年までの、御取付分米帳・覚書帳・宗旨帳・五人組帳・人別帳・鉄砲帳・差出帳・そのほか御法度書数通であった。

百姓方からも村々の困窮の訳や願書を数通差しあげた。このとき箕輪二九か村から出されたお願い書は次のようであった。

恐レナガラ書付ケテ以テ御訴仕リ候御事

信州伊那郡箕輪領ノ義雄今迄、板倉頼母様御知行所ニテ御産養所ニ此ノ度御所替エニ付テ願イ奉リ候。箕輪領ノ義、恵地其ノ上近年不作仕リ候。殊ニ去年中雨度ノ渾水ニテ天竜川筋ノ村々田地大小川欠ケ仕リ候。山方村々ノ義ハ皆諸患シク発向、田畑共ニ荒シ迷惑仕リ候。尤モ頼母様ニモ御

慈悲下サレ、年々御物成等モ末へ送り候儀、極メラレ下サレ候共、当年御所替エニツキ、去年ノ御年貢急ニ御差立テ極メラレ下サレ候共、御慈悲下サレ、御物成等モ末へ送り候儀、極メラレ下サレ候故、数年ノ難儀一度ニ指シ語り、百姓イヨイヨ困窮仕リ、田畑仕付ケ申スベキ使モ御座ナク候故、恐レナガラ作食ノ拝借仰ギ奉リ候。聞コシメシ分ケナサレ、御慈悲ニ作食仰セ付ケナサセラレ下サレ候ワバ、有難ク存ジ奉リ候。以上
元禄十二年四月
箕輪廿九カ村(略)

御代官様

(大出井沢文書)

ここでは国替えにより、いままでも急がなかった年貢を一時にとりたてられて、作食がなく田畑の仕付けができないから作食を貸してほしいと訴願している。世は元禄風の時代というから、農民も浮かれ気分はあったかもしれないが、ここでは作食がないという。また次のような夫食(農民の食糧)が不足するといっているので、お願いをいくどもしているから、かてになるものは木草柴何でもたくわえおくようにしている。と一札をだしている。

指シ上ゲ申ス一札ノ事

近年打続ク不作仕リ候ニ付キ百姓夫食不足仕リ候。御公儀様へ願出デ、是モ数多ノ事ニ御座候エバ難儀ニ御座候間、木草柴其ノ外何ニテモ、かて杯ニ成ルベキモノタクワエ置キ候エザル様ニ仕ルベキ旨、仰セ渡サレ其ノ意ヲ得奉リ候。右ノ趣小百姓、水呑迄銘々ニ申シ渡シ、名主方へ印形取り置キ申スベク候。若シ不念ノ仕方之アル者ハ、其ノ名主、組頭何様ノ越度ニモ仰セ付ケラルベク候。以上

元禄十二年五月

御代官様

信州伊那郡箕輪領村々(名主月略)

当時男の三割は江戸稼ぎをして村にいなかったという箕輪領内のことであるから、お年貢も納まらない者が相当にあった。この年の六月

にそうした賃租米進者を引きつれて江戸へいき入牢させるという通知が、領内の名主あてにだされている。北殿村でも意納のため名主が入牢させられたらしく、次の文書が残っている。

去る辰、元禄一三年（一七〇〇）御年貢金の催何れも被済致すの処、北殿村の義白姓（？）明かす候由にて段々延引に及び滞り申し候。不届の難に付き名主義白御門今日牢舎申し付け候。何れも其の意を得難く御用滞らず候様致すべく、村々心得させ申し送り候。此旨村中惣百姓へ申し聞かざるべく候。此状村下へ名主印形致し廻廻し留村より返し申さるべし。以上

（御代官江六郎右衛門の手代）

（元禄十四巳年）五月廿五日

飯山半平

（二十四か村略）

右村々各名主中

（上伊那郡史）

この意納書をださないよう名主にあてた回状は二十四か村にだされている。その文のなかに北殿村名主の入牢が引用されているのである。この二十四か村の中には、大泉村・神子柴村・田畑村・南殿村の名がみえる。名主が年貢の取込みをなさず意納の罪にとわれた記録はあまりないが、元禄以前にも久保村の茂大夫が納入を怠り、領主松坂氏のと き、財産没収追放の処分をうけたという口碑が残っている。（上伊那郡史）

またもんや文書の中には南殿村の七兵衛が元禄六年（一六九三）癸酉の八月一日に小野祭にいき、これから欠落ちしたという記録がある。

このように元禄という時は、いわゆる元禄文化で世の中はでになつたが、国替えその地で当地区はなかなか苦しいときでもあった。

以上述べてきたように国替えは、百姓にとって大変なことである

が、元禄一二年の国替えにはもう一つ大きな変革があった。この年まで同じ箕輪領内で同じように治められてきた村々が、大きく五〇〇石ずつに二分されて統治されるようになり、南殿村や北殿村では同じ村の中で二分されてしまったのである。

図3-5のように、久保村（堀ノ井・沢尻を含む）の全部と、北殿村の一部（上知）と南殿村の大部分（上知）とが、松島村などとともに、太田資良の支配をうけるようになった。これを上知（新料）といい、太田氏は松島の陣屋で執務した。他の古料は飯島陣屋が支配した。同じ箕輪領が二分されただけでなく、北殿村はたった二軒が上知となり、南殿村は五分の四が上知となって太田氏に治められるようになった。どうしてこんなことになったか、次のように樽木代に關係して、北殿・南殿があとから太田領に追加されたのであった。

元禄十二卯年松島・南小河内・下平良・久保村太田隠岐守様へ五千石渡ル。右四か村往古ヨリ樽木代コレアリ候ニ付、新兵衛様御支配ノ内御訴訟申シテ御免ニテ其ノ代り北殿村南殿村式カ村ノ内ヨリ樽木高松隠岐守様へ渡シ候。

（千村屋文書）

その時の分け方は次のとおりであった。

北殿村一〇四五・二三石	上知 六一・七五〇石	太田領へ6%
古料 九八三・二七二石	幕府領 94%	
南殿村二九七・四一一石	上知 二三九・八七〇石	太田領へ81%
古料 五七・五四一石	幕府領 9%	

同一村内が異なった統治をうけることは、その後の村内にいろいろな屈折を与えるようになった。

太田領になって五八年、宝暦七年（一七五七）には、太田氏が江戸蔵米奉行となったため幕府領となった。この間飯島役所の支配をうけ

ること前後約五〇年ずつの一〇〇年間であった。太田領（私領）になってみると、天領との差がでてきて、もう一度箕輪領が一手に天領になるように嘆願して、宝暦七年（一七五七）にそれがかなえられる形になった。また、慶応四年の嘆願書には、松島村外七か村の中に、北殿村、南殿村の惣代として年寄勝之助、百姓代清七と、久保村堀ノ井村の惣代孫右衛門も連署している。

知行所村々課役等御免願 慶応四年四月

信州伊那郡松島村外七か村惣百姓共、惣代ヲ以テ奇政殿ノ段御總督様
（御願イ申上）テ奉リ……右八か村ノ儀ハ往古ヨリ箕輪郷一手ニ御代官
所御支配アリ奉リ、元禄十二卯年太田家知行所ニ相成リ累年困窮仕リ
難波ニ詣リ御手候段、旧幕府へ歎願仕リ宝暦七丑年復古仕リ箕輪郷一手
ノ御料地ニ臨成……

（元禄町松島文書）

この願書にはこのあと平年はよいが連作の年など、太田領は年貢上納の取立てがきびしく、その他、天領と異なり困難な点が多く述べられている。

結局、太田領は元禄一二年（一六九六）から宝暦七年（一七五七）の五八年間と、文化二年（一八〇五）から同五年（一八〇八）までの四年間、および文久二年（一八六二）から明治二年に伊那県になるまでの七か年間の三回であった。このようにとびとびに三回にわたって七〇年ほど私領の太田領であったが、そのほかの一〇〇余年間は、天領であった。天領と私領の交錯した支配から、幕末の慶応年間には天領にしてほしいというような願書もでていて、複雑な支配をうけてきた地域の村民の苦渋がしのばれる。

3 飯島役所と松本役所（江戸時代後期）

元禄一二年（一六九六）に幕府領になった箕輪五〇〇〇石には、大

泉村・田畑村・神子柴村と古領の北殿村（大部分）と南殿村（一部）とがあった。御料所とか天領とかいう幕府領には二とありあって、郡代や代官をおいて直接支配する所と、旗本や大名に委任して支配させる「預り所」という所とであった。

表3-2のように元禄一二年（一六九六）から幕府領になった村々は、木下陣屋の支配をうけていたが、元文元年（一七三六）に大風で大破して木下陣屋（慶長一七年から一二五年間）が廃止されたので飯島役所の支配をうけるようになった。

飯島役所の支配をうけて一〇〇余年たった文化十一年（一八一四）から、松本城主戸田氏の預り所になった。伊那郡内一万石とともに松本の預り所になって五〇余年、明治元年（一八六八）から伊那県の治下になった。

このように、南箕輪の村々は、天領と私領となり、また木下陣屋と松島陣屋、さらに松本城主というように、領主のめまぐるしい交替の中で、いくどか領内がまた村内が一つになるようにと願いながら、明治維新を迎えたのである。

（一）村の構成

1 村方三役

江戸時代の農村の統治のしかたは自治制で、領主は村役人をおして治めた。村役人は名主（庄屋）・組頭・百姓代であり、これを村方三役と呼んだ。村役人は村の全般にわたる仕事をしたが、一番大きな仕事は、村民から年貢を取り立ててそれを領主に、期日までにまわがいなく納めることであった。すでに述べたようにこの時代の年貢は村へ割り当てられるので、それを田畑の持高に応じ、村民ひとりひとりに割り当て徴収した。この年貢の割当てと、その徴収が村役人の大きな仕事であった。

第2節 村の姿

表3-2 江戸時代の領主交替表(文書により多少くいちがいあり)

領主	郡代・代官	西暦 年号 干支	
保科正直(1月~3月) 毛利秀頼(3月~4月) 菅田定利(9月~) 奥田信幸	徳川方 (高遠城主) 織田方 (飯田城主) 徳川方(頼昌千庵)(飯田城主) 7万石 豊臣方	1582 天正10 壬午 1589 天正17 己丑	
宮極高矩	豊臣方 (飯田城主) 12万石	1594 文祿3 甲午	武蔵亡村となる(文祿元)
小田原秀政(飯田城主) (松本藩へ)	二本六右工門(春日炭路)	1601 慶長6 辛丑	[田中城] (其輪領27ヶ村)
——幕府領 (13~16)	宮崎太郎右工門	1613 慶長18 癸丑	[木下陣屋] (其輪領25ヶ村)
脇坂安元(飯田城主) (1617)(元和3)	加藤木工之助・山岡八郎右工門 (1617)(元和3) 佐惣治右工門・伊藤八郎左 (1621)(元和7) 天羽末右工門 (1635)(寛永12) 加藤木工之助・山岡八郎右工門 (1648)(慶安元)	1617 元和3 丁巳	北殿・南殿となる(1649)(慶安2) 武蔵久保の根村となる(1654~56)(享保3) (脇坂はりま竜野へ)(1671)(寛文11)
脇坂安古(安政) (1654)(享保3)			
——幕府領 (72~81)	天羽七右工門 (1672)(寛文12) 設楽源右工門 (1673)(寛文13) 飯沼太郎具工 (1677)(延宝5)	1672 寛文12 壬子	獅子桑を獅子桑と改む(1678)(延宝6)
板倉重矩(1682)(元和2)	足立兵右工門・江連四郎兵衛 (1682)(元和2)	1682 天和2 壬戌	
板倉重清(1684)(貞享元)	名倉八郎右工門 (1684)(貞享元)		
板倉重良(重相) (1688)(元禄元)	本田銀左工門・小林介太夫(88) 名倉八郎右工門(88) (元禄2)		(板倉領中庭瀬へ)(1698)(元禄11)
大保(塩ノ井・沢尻) 北殿(一部) 南殿(大部)		分 治	大泉 田恒 神子桑 北殿(大部) 南殿(一部)
領主	郡代・代官	西暦 年号 干支	領主 郡代・代官
太田資良(1699)(元禄12) (松島陣屋)	鈴木勘兵衛・中島六右工門 (1702)(元禄15)	1699 元禄12 己卯	幕府領 池田則直(1699)(元禄12) 辻六郎(左工門) (1700)(元禄13)
	米沢七兵衛 (1711)(正徳元)		南条金左工門 (83) (元禄16) 高谷太兵衛 (95) (宝永2)
	米沢七兵衛・鈴木勘兵衛 (1723)(享保8)		(辻六郎左工門) (11) (正徳元) 平岡三郎工門 頼所小三郎・堀田太兵衛 (16) (享保元) 芝田金左工門・八木源太左工門 (18) (享保3) 志賀藤四郎・伊藤重右工門 (19) (享保4) 頼所藤十郎 (20) (享保5) 大草太郎左工門(22) (享保7)
太田資賢(太助) (1726)(享保11)	米沢七兵衛 (1727)(享保12) 矢島辰右工門・長田藤助 (権太夫) (1728)(享保13)		大草基之助 (1729)(享保14)

第3章 村の近世

	1730 享保15 庚戌	松平九郎左門・吉室新五郎門 (30) [享保15]
	1733 享保18 癸丑	室七郎右門 (33) [N 18] (堀内役所)
	(木下陣屋大蔵)(36)	
	1740 元文5 庚申	大草太郎左門(40) (元文5) (板島陣屋となる)
	1742 寛保2 壬戌	山本平八郎 (42) (寛保2)
	1744 延享元 甲子	(塩ノ井分村 43又は48) 大草太郎左門(44) (延享元)
	1748 寛延元 戊辰	村岡彦四郎 (48) (寛延元)
1750 寛延3 庚午	1750 寛延3 庚午	嶋三郎左門 (50) (N 3)
太田黄台(1750)(寛延3)	1753 宝暦3 癸酉	布施弥一郎 (53) (宝暦3)
幕府領となり右側へ移行(1757)(宝暦7)	1757 宝暦7 丁丑	布施弥一郎 (57) (宝暦7)
		横山伝右門 (61) [N 11]
		池田善八郎 (62) [N 12]
		今井平三郎 (63) [N 13]
		島 隼人 (66) (天明3)
		大草彦四郎 (72) (安永元)
		武島立輔 (75) (N 4)
		平岡彦兵衛 (78) (N 7)
		鈴木新吉 (87) (天明7)
		水谷越右門 (90) (寛政2)
		川崎平右門 (93) (N 5)
		藁 笠之助 (94) (N 6)
		野田松三郎 (95) [N 7]
私領となりまた分治		小野田三郎左門(105)(文化2)
太田黄家	郡第五大夫 (105) (文化2)	1805 文化2 乙丑
[松本藩領所]		1808 文化5 戊辰
	松平九郎 (108) (文化5)	
幕府領	(板倉代官所)	1814 文化11 甲戌
	山田茂右門 (14) (文化11)	松本城主預所 (戸田光年) 山田茂右門 (14) (文化11)
	伊奈友之助 (21) (文政4)	永野伊左門 (20) (文政3)
	羽倉外記 (24) [N 7]	神方権助 (23) [N 6]
		桑田七郎兵衛 (25) [N 8]
		近藤源次郎 (26) [N 9]
		古橋金左門 (27) [N 10]
		長谷川是幸之助(29) [N 11]
	岸本武太夫 (31) (天保2)	平山左左門 (32) (天保3)
		青沼五右門 (33) [N 4]
	岸本十輔 (34) [N 5]	野崎寛兵衛 (35) [N 6]

第2節 村の姿

岸本直之丞 (39) (天保10)	1837 天保8 丁酉	戸田光清 (37)	
小笠原新助 (40) (・11)			
池田直之丞 (41) (・12)	1842 天保13 壬寅	戸田光清 (42)	横岸次右衛門 (41) (天保12)
寺西直治郎 (48) (嘉永元)			其木喜一郎 (44) (弘化元)
大草太左衛門 (53) (・6)			細末基右衛門 (48) (嘉永元)
山内(田)基五左衛門 (59) (安政5)			岡 無理弥 (51) (・5)
今川善作 (61) (文久元)			渡辺幸右衛門 (53) (・6)
大田寅忠(喜)(62)(文久2)	1862 文久2 壬戌		公保小兵工 (58) (安政5)
大田寅智 (63)(文久3)			新井徳藏 (61) (文久元)
			野末三十郎 (62) (・2)
			長谷川是幸之助(63) (・3)
			井上六郎 (64) (元治元)
			横岸庄右衛門 (65) (慶応元)
伊 部 景(70)(明治3)	1868 明治元 戊辰	伊部景(68)(明治元)	北小路俊昌 (69) (明治2)
北小路俊昌 (70) (明治3)	1870 明治3 庚午		永山盛輝 (71) (・4)
(永山盛輝) (71) (・4)			筑摩景(72)(明治5)
筑 摩 景(72)(明治5)			
	1875 明治8 乙亥 2月18日 南箕輪村誕生		
長 野 景(76)(明治9)	1876 明治9 丙子	長野景(76)(明治9)	高木雄矩・横崎寛直 (76) (・9)
高木雄矩・横崎寛直 (76) (・9)			

次に大切な仕事は戸籍事務であった。「宗門人別改帳」を作りその村に今どんな人が住んでいるか、はつきりさせておくことと、キリスト教信者のいないことを明らかにしておくことであった。それとともに村外への転出者には「宗門送り状」という転出証明書を持たせ、転入者は新しく宗門帳に書き加えることなどがあった。

そのほか村内の取締りや、用水、共有林の管理、紛争の仲裁など村役人の仕事は実に多端であった。しかし、江戸時代を通じて約二七〇余年の間、この村方三役ではほぼ平和に治められてきたのは、何としても巧みな統治方法であったといわれている。

2 名 主

名主は家柄の良い者の中から選ばれ、村の代表者であった。名主の仕事は多く、責任も重かった。代官からの法令や回状、年貢割付け等の公式書類はすべて名主にきた。また提出書類、例えば人別帳・宗門帳とか五人組帳等は、名主の責任において作成しなければならなかった。年貢を農民に小割りすることも、年貢の納入も名主の責任で行なわれた。農業をなまける者や酒に酔って乱暴するものなどには説教をし始末書をとることもした。その他名主の仕事は実に種々雑多で、末端の統治者であり、また一村民として村民の代表でもあった。

3 組頭・百姓代

組頭は名主の補助者で、名主が村長なら組頭は助役であった。もともと五人組の頭から出たといわれているが、後にはそんな関係はなくなった。やはり上級農民から選ばれ、二三人の回り持ちが普通であった。

百姓代は、名主や組頭の行為に不正のないよう監視するものであ

り、名主や組頭を除いた全農民を代表するものであった。しかし、村方三役として三人が協同して当たるのが普通であった。

4 五人組

五人組は秀吉が天下を治めていたとき、警察目的をもって組織したのが初めであるといわれている。組合わせ方は家並みのもとより五戸ずつ組合わせるのが普通であったが、百姓の大小を考え平均するようにならざるを得なかった。その組の主だったものを五人組頭とした。

五人組頭の責務は、組中に不心得者があれば申し出ること、キリシタンをかくさないこと、欠落者が出ないようにすること、組中に病人などがあつて耕作ができないときは助けあい、年貢が不納にならないようにすること等であった。これらに反する者が出たときは連帯責任制であつたので組中のものがその責任をとらなければならなかった。

これは村の自治組織の末端でもあつたが、領主の支配権確立の上から強制された面が強かった。それにもかかわらず長年生活をともにして行くことによって、いわゆる農村の隣保扶助の良風美俗も培かれていった。

このように五人組制度は末端の統治組織であり、末端の自治組織であるという二面をもっていた。

(三) 村定めと御触書

士・農・工・商という職業の区別がはっきりし、それが身分の区別にもなっていたのが江戸時代である。しかし人口の割合からいうと、農民が全体の八割を占めていて残りの二割が、武士や商人・工人であつた。そしてその大多数の農民が生産する米が経済の中心である時代であつた。政治の中心は、農村農民から安定した貢租をいかにしてとるかであつた。そのため領主たちは農村農民をその生活の末端まで厳しく規制した。幕府領主側からの規制が「御触書」であり、農民自身

の側からの規則が「村定め」であつた。

1 御触書(定・法度・通・覚ともいう)

慶安二年(一六四九)に幕府から出された「諸国郷村へ仰せ出サレ」が一般に「慶安の御触書」といわれる。これは土地や農村の諸制度を背景として農民である百姓の心得を指示したもので、江戸時代農村統治の重要な御触書である。全文は三二か条からなっているが、四つに要約してその主なるものを記すと、次のようになる。

(1) 領主・代官・村役人への服従。(四か条)

一、公儀諸法度を恐れ、地頭代官の事をおろそかに存ぜず、扱又名主組頭をば真の親と思ふべきこと

一、名主組頭を仕る者、地頭代官を大切に存じ、年貢を皆済し、公儀諸法度に背かず、小百姓身もちを癒く仕るように申し渡すべし。……

(2) 農民は耕作に精励すべきこと。(二〇か条)

一、朝起きをいたし朝草を刈り、昼は田畑耕作にかかり、晩には縄をなひ、俵をあみ、何にてもそれぞれの仕事油断なく仕るべき事

一、耕作に精を入れ、田畑の雑草、同じく捨てえよう念を入れ、草はえさるよう仕るべし。草をよくとり、節々作の間へ鋤入れを仕り候えは、作もよくでき取実も多くとれるに付き、田畑の境に大豆小豆など種え少々たりとも仕るべきこと

(3) 農民は生活をきりつめ質素の生活すること。(二〇か条)

一、百姓は衣類の義、衣木綿よりほかは、着替物裏にも仕るまじきこと

一、たばこ吞むまじく候。是は食にもならず、結局以来煩に成るもの候。其上隙もかけ代物もあり、火の用心もあしく候。万事に損なるものに候。

一、男は作をかせぎ女房は宇はたをかせぎ、夕なべを仕り、夫婦ともにかせぎ申すべく候。然ればみめかたちよき女房なりとも、夫のことをおろそかに存じ、大茶をのみ、物まいり遊山すきな女房を離別すべし。

第2節 村の姿

表3-3 池田・村定等の二重の村内の資料なら

<p>村定め等</p>	<p>一五八八 天正十六年七月八日 豊後吉乃狩被書 一六四二 寛永二十年三月 田畑水代充實禁止令 一六四二 同右 土民仕置寛 一六四八 元和四年八月十六日 鍋坂安元領内法度 一六四九 慶安二年 諸國鄉村江被仰出</p>	<p>一六九九 元禄十二年 太田寅良知行所法度 一七二三 正徳三年 御轉書 分地制附令</p>	<p>一七五一 宝暦元年 中 渡書 一七五九 宝暦九年 申 渡書(主請書) 一七六三 宝暦十三年 申 渡書 一七八八 天明八年 申 渡書 一七八九 寛政元年 申 渡書 一七九〇 同 中 渡書 一七九三 寛政五年 申 渡書 〔御預所村々へ被仰渡書〕 〔御教諭書〕 一八〇七 文化四年 申 渡書(書出請) 一八二一 天保二年 渡書(書式)</p>
<p>村定め等</p>	<p>一六八〇 延享八年 久保村五人組被 一六九九 元禄十二年 元禄之役一定 一七一四 正徳四年 久保村百姓定書被二ツキ 相談被稱</p>	<p>一七一五 正徳五年 久保沢民村立書 一七二九 享保十四年 田畑村五人組被 一七三二 享保十六年 村中定書被 一七三五 享保二十年 村中定書被 一七五〇 寛延三年 南原村五人組利形被 一七五二 宝暦二年 南原村五人組利形被 南原村能百姓 萬分計禁止請証文</p>	<p>一七五八 村中申定一札之事 一七八二 天明三年 英輪領郡中村々相定之事 一八〇六 文化三年 北原村五人組連判被 一八二一 天保三年 神子栗村五人組被</p>

し。……またみめかたから悪く候とも、夫の世帯を大切にいたす女房をばいかにも懇ろに仕るべきこと。

一、酒茶を買いのみ申す間敷く候、妻子同然の事

一、百姓は分別もなく、すえの考えもなきものに候ゆえ、秋になり候へば米穀をむざと妻子にも喰わせ候。いつも正月二月三月時分の心をもち、食物を大切に仕るべく候に付き、雑穀專一に候間、麦稗兩菜大根そのほか何にても雑穀を作り米を多く喰いつぶし候わぬように仕るべく候。

(4) 年貢を免除すべきものとして (四) 条を

一、年貢を比し候義、反則にかけては壹反に付き何ほど、高にかけては壹石につき何ほど、割付け差紙地頭代官よりも出し候。左條得共耕作に精を入れよく作り、……

一、少しは商^{しやう}こころもこれありて、身上もちあげ候ように仕るべく候。その子細^{しよさい}は年貢のために雑穀を売^うり候事も又買^{かひ}い候事も、商^{しやう}こころなく候えば人にぬかるものに候。

このような御触書は、將軍の決裁を経て老中から勘定奉行にわたる。勘定奉行から代官所へ、代官所から村へと触れ回されてきた。こ

一八二五	御抄書 天保六年	③
一八四〇	中源書 天保十一年	④
一八四一	天保十二年	⑤
一八四三	御抄書 天保十四年	⑥
中源書	教諭所申渡書	⑦
一八六八	明治元年 御表目御撰印繪 明治五年 五伍の法則	⑧

一八三二	天保四年 美輪領郡中定書之事	①
一八四二	天保十二年 御故正二付郡中取究 村方決疑違勘帳	②
一八六一	万延元年 神子榮村五人組帳	③
一八八三	明治十六年 村内聚布万取極	④
一九七六	大正六年 村諸富隣壁二間スル規約	⑤
一九二九	昭和四年 村生活改善実行申合せ事項	⑥

れをうけた村役人はもちろん総百姓が請印をおして、その実行を誓った。

江戸時代を通じてこの御触書を基本とした触書は何度もあった。元禄時代を頂点にして奢侈華美の風は、おさえてもおさえてもゆるんだ。享保の改革があり、寛政の改革があつて、一応は成果をおさめるがまたゆるむので「御達」・「触書」はしきりにでた。そして天保の改革も行なわれたが、奢侈対策としての倹約政策は、農村の荒廃、商人勢力の台頭の現象をくいよめることはできなかった。

それはともかくとして、触書・村定めに関係したものの数はかなりの数に及んでいる。いまその一部を記してみると、表3-3-3のようになる。五人組帳は触書き・申渡書をうけて作成されたもので、村定めのな形をとっているのに次に記してみる。

2 五人組帳前書

五人組については、既述のとおりである。「五人組帳」は前書に当時の村人の生活規制を詳細に記し、後書には五人ずつ連署して堅く守ることを誓っている。当時の村の生活のなかでは重要で毎月または年に数回、村内の総百姓に読んで



図3-4 五人組帳の連印

きかせ、違背のないようにした。

五人組は初期には治安警察のような面が強かったが、後期には領主側からは

年貢を確かに納めること、農民側からは互いに互助とか共済の面が含まれるようになった。当時の日常生活がわかるのであるがここでは省略する。

この「五人組帳前書」に続いて名主組頭から五人組全員すなわち村中の人が署名して手形(印)をおして差し上げたのである。これを讀むと村から差し上げているのか、上からの命令か、誰が主体かわからないようになってくる。つまりお触書の趣旨をそのままにうけとって領主ともどもに共存しなければならぬ面と被支配者である村人の立場とがからんでいるので、こうした表現にならざるを得なかったと思われる。

3 村定め

「村定め」は、村極などといわれている。もともと室町時代の中ごろから荘園村落内に形成された「惣」とか「惣中」という村民の自治的結合があり村定めをもったとされている。しかしそういう記録は見当たらない。ただ「惣百姓中」というような記録が、江戸時代にも残っていて、用水権や入会地など村民の共通利害に関するところで、惣的な村民の結合をみることができるといえる。

村定めの条項は比較的簡潔であるが、現実的な村人の生活向上のために結束を強化することに重点がおかれている。

村中定書の事

- 一、毎年御免定御達シ成サレ候ワバ惣百姓ニ拝見致サセ申スベク候
- 一、御公用ニ付キ入用ノ金ノ儀ハ二引ナシニ仕リ申スベク候
- 一、御伝馬人足ノ儀ハ人馬共ニ番帳ヲ持テ高下ナク順ニ相廻シ当タリ申スベク候
- 一、夫族制ノ節面立テ候百姓等合イ出候帳明細相改メ得心ノ上割合イ申スベク。惣シテ名主元ニテ墨筆紙其外諸々入費ガマシキ事一切仕ル間敷

候。夫越前リ余リ之無キ様仕ルベク候。

一、御公用ニテ御役所へ参リ候節無益ノ人馬連レ申スマジク候。

一、御用事ニ付キ御役人様へ御酒代上ケ候儀。遠方ニテハ格別村方ニテ差

シ上ケ候儀ハ面立テ候百姓相談イタシ差シ上ケ申スベク候。

一、百姓公事出入リニ付キ如テク願イ御座候ワバ、名主年寄相談ノ上ニテ

添エ状出シ申スベク候。尤モ名主年寄ノ内ニテ取持テ申スマジク候。

一、何事ニ限ラズ名主年寄□□ガマシキ事致シ申スマジク候。

一、川除御普請等ノ儀。惣百姓相談ノ上御願イ申スベク候。

一、公儀様ヨリ御引方下サレ候節ハ百姓其ノ誤知ラセ申スベク候。

一、名主元寄リ合イ申シ候節酒肴食事取寄セ制ヘ入レ申スマジク候。

一、御公用又ハ内所ニテ相談仕リ候事名主元ヨリ触レ候ワバ制限タガエズ

立命イ申スベク候。

一、惣ジテ何事ニヨラズ百姓ノ為ニ成ルヨウニ仕ルベク候。私欲ガマシキ

事仕ルマジク候。

右相定メノ通り名主年寄ノ内ハ申スニ及バズ惣百姓相定メノ通り相違申ス

マジク候。仍テ件ノ如シ。

享保二十年己卯五月

組頭	勘太夫
年寄	基右衛門
	庄左衛門
	徳兵衛
	吉弥
	八郎左衛門

(同屋文書)

この村定めは、組頭年寄が署名している。文面からみると、村役人が村をおさめていく時の約束が多く、村役人の独断を制限している。いつの時代も公平で民主的な方法でないと村はおさまらない。こうし

た村定めは、例えば「久保村百姓定書帳ニ付キ相談極帳」(久保大東文書)正徳四年にも見られる。久保では村の庄屋役人が「定庄屋」で固定してしまつと、とかく私欲我主になり、それだけ百姓が困窮迷惑するから、人数をきめて年番に勤めるようにしたいと申し定めたものである。これは正徳四年二月二日に久保村の文七以下三七名、沢尻の太郎兵衛以下四人が署名押印している。この相談極帳に続いて次の定書がある。

久保沢尻村定書

……路……

一、万事ニツキ庄屋ト百姓間ニ損得ノ儀之ナキヨウニ仕ルベク候。品ヲ替

エ私欲ガマシキ儀一切仕ルマジキ事

一、何事ニテモ惣百姓相談ノ上吟味ツトゲ、万端正路ニ相違メ申スベク候

依傍品買ノ沙汰モ稟仕ルマジキコト

一、諸役等ノ儀高大小ニ依テ割合イ申スベク候。高下之ナキヨウニ相勘メ

サセ申スベキ事

(久保大東文書)

正徳五年(一七一五)のこの定め書きは「一か条からなっているが、そのうち引用のように三か条も不公平でないように惣百姓相談の上でと定められている。その上末尾も、「其のため庄屋惣百姓相談の上相極めおき申す所実正也」と結んで、久保村沢尻村四三名が署名、塩ノ井村の二名が立ち会っている。江戸時代の中期にはすでに村内のことがこれだけ民主的にとりかはるようになっていた。

こうした村極めは村だけでは実行できない場合も多い。今日の生活改善のように広範囲の改善でなければ意味をなさない。しかし今でも広域のとりきめはなかなか実現しない。おそらく当時もそうであったろうと思われるが、因作等でのっぴきならない事情があったのか、広

域のとりきめがよく行われている。その一つを次に記す。

箕輪領郡中村々相定メノ事

- 一、当卯因作ニ付キ相互ニ堅ク請約相守ルベキ事
 一、大工作料ノ儀 上職人金壹分ニ付キ拾五人
 一、木挽
 金壹分ニ付キ拾六人
 一、日雇ノ儀 男三十二文 女二十四文
 一、奉公人 上男 十月迄取切り金四三分ツツ
 上女 取切金壹分ツツ
 一、鍛冶屋、紺屋、縫屋之儀 当卯ヨリ式割引キ
 右カ条ノ趣村々相談ヲ以テ連印致シ候上ハ堅ク相守リ申スベク候。若シ何
 レノ村々ニテモカ条ノ趣相背キ候村方之アリ候ワバ、隣村ヨリ外村々へ申
 シ違シ、過料ノ義ハ五貫文取ルベク相定メニ御座候 以上
 天明三年十一月

（千桐屋文書）

これには神子柴村・田畑村・南殿村・北殿村・塩ノ井村・久保村・大泉村のほか箕輪領の各村が連署連印している。

天明三年（一七八三）といえは浅間山の大爆發があり八月降雪があつたあの天明の大飢饉がはじまつた年である。これを破つた場合、過料五貫文をとるところに、その切実さと、とかくこうした申合せのくずれやすさを見ることが出来る。

この後五〇年たつた天保四年（一八三三）にも郡中取決めが行なわれている。この年も天保の大飢饉がすではじまつていた。それを五〇年をへだてた表にしてみると次のようになる。

この表でみると、年代がくだるほど男女の賃銀差がひどくなつてきたほか、ほとんど変化がない。ただ後になるほど職人の給料のほか、年中行事等の申し定めまで細かに規定されている。天保四年（一八三

表3-4 郡中村々定の推移（五十年間）

項目	年代	天明三年（一七八三）	天保四年（一八三三）
一、年代		一、当卯因作ニツキ 十五人	一、当巳因作ニツキ 十五人
二、大工作料金壹分ニツキ		十六人	十六人
三、木挽		〃	〃
四、左官		〃	〃
五、屋敷屋		〃	〃
六、黒屋		〃	〃
七、鍛冶屋、紺屋、縫屋、車屋、 桶屋其他職人		式割引	式割引
八、奉公人		（上男 壹兩三分ツツ 上女 壹兩三分ツツ） （男 三二文（裁） 女 二四文（裁））	（上男 貳兩貳分 上女 壹兩貳分） （男 六四文（裁） 女 三二文（裁））
九、日雇			見舞半減・酒食ナシ 郡中相談
一〇、祝儀			
一一、産祝			
一二、不幸			
一三、過料		五貫文	

三〇の申定めにはこの表のほかに、次のような「村々申定」がついている。

村々申定メ

- 一、御公儀御法度ノ趣御々仰セ渡サレ候通り急度相守リ申スベキコト
 一、年礼ノ義村内限リ他村へハ親類ノ外往来一切致スマジキコト
 附、婦人年賀共二他村ハ箕輪村内タリトモ一切相止メ申スベキコト
 一、神事祭礼ノ儀家内祝ノミニテ致シ他村へハ假令親類タリトモ往来相止メ申スベキコト
 一、客呼ビノ義想シテ相止メ五節句配リ物年頭歳暮御守見舞諸祝儀等
 迄相互ニ相止メ申スベキコト
 一、婚礼ノ儀嫁入り届入りタリトモ往来ハ当人仲人斗リ外親類ハ相止メ致
 意限リ吸物□□着□□種客來親類限リ他一切相止メ申スベキコト

附、当人ノ衣服ハ格別其ノ外綿服着用致スベキコト

一、七夜祝ノ義ハ来ル午ノ秋毛取り入レ候マデ相延シ申スベキコト

一、不幸ノ節酒相止メ食事ハ提ナキ親類ハ格別、他門へ一切出シ申スマジ

ク村方見舞ハ出格ノ節斗リ立会イ他村へハ親類ノ外見舞申スマジキコト

附、葬式ノ義ハ成ル丈手懸ニイタシ親類ノ義ハ施主一人ニ限り申スベ

キコト

一、法事ノ義揚升ニ致シ布施□□米ハ銘々仕来リ通りニ致シ客来他門ハ一

切呼ビ申スマジキコト

一、伊勢ノ義ハ格別其ノ外神社仏閣定式初穂ノ義年柄相直リ候マデ前ヨリ

半減ニ相断リ申スベキコト

一、正月三日ノ外雑帳相用イ申スベキコト

右ハ当年格別ノ凶作ニテ銘々衣食並支工俵年柄ニ付キ、村内一統申シ合ワ

セ前条ノ通り相定メ候上ハ、其秋毛取り入レ年柄立直リ候迄ハ急度相守リ申

スベキ候。勿論格別厳シキ儀約ニ付キ万一心得違イニテ一カ条タリト相

破リ候事之アル節ハ、右ニ準ジ一統ノ破レニモ相成リ候間、郡中定書并ビ

ニ村定メ等相寄エテシモ違乱致スマジ候。其ノ為銘々調印致シ置キ候

以上

天保四巳年十月

(氏名印)ハ省略

(大衆館文書)

このように、年始の礼やお祭りには他村へ一切行かないとか、客呼
び等の祝儀は止めるとか、婚礼は当人仲人ばかりが往来するとか、こ
の上もなく厳しいとりきめをして、大凶作という難局をのりこえよう
としたのであろう。

4 近世の特色

以上で近世の厳しいお触書きや五人組帳前書、村定め等をみてきた
が、中世と比較して大きなちがいは寄合いに對する義務である。

中世以後の村の「惣掟」等には次の三本柱があったとされている。

一、林野刈取りの規制

二、水利規制

三、集会への出席の義務

ところが近世のお触書きにも五人組帳前書にも村定めにも、集会出席
の義務がうたわれていない。むしろ集会して相談することを制限する
趣がある。上意下達のこととはあっても、相談して決定していくことは
徒党をくむことに結びついていたので領主からは警戒されていた。近
世を通じて村々に高札場はあったが、西洋諸国の村々のように広場が
ないのが特色である。こうした中で、久保村の村定めは村三役と一般
村民とのとりきめで珍しく民主的であるといつてよい。

(四) 村の明細

江戸時代の村々の状態は「村明細帳」によって知ることができる。
村高、貢租、用水、山林入会、家数、人口、牛馬数などを調査して、
役人に差し出したものである。

この明細帳は、

①幕府の巡見使が調査された場合

②領主等の回村の場合

③領主の代替りの時

などに、提出したもので、提出者側の作れも多いとされているが、
それでも当時の村の詳細を総合的に見ることができ、南箕輪に残さ
れた明細帳は次のように、数少ないが、これを年代順に並べてみると
次のようである。

① 天和二年(一六八二) 南殿村「差出」

② 元禄二年(一六九九) 南殿村「差出帳」

③ 享保五年(一七二〇) 大泉村「明細帳」、南殿村「明細帳」

④ 宝暦四年(一七五四) 神子榮村「高反別併村明細帳」



図3-7 元禄12年南殿村差出帳

元禄一二年は領主交替の大変な年であったが、「南殿村差出帳」がたった一つ残っている。なかなか詳細にかかれていたので、これを次に現代風に書き記してみる。

1 南殿村差出帳

信州伊奈郡筑前南殿村差出帳 元禄一二年卯七月

一、高二九七石四一 此反別二五町五七畝一五歩

内田方八町五七畝一三歩、畑方一七町二歩

一、芝野

一、蔵取山

一、御水帳

大泉所山 蔵取山 南の入山（山手米なし）
大芝へ牛馬を放飼（野手米なし）

六田

吉水徳慶安二五年

二田 脇坂検地

新水帳寛文六年

二田 脇坂検地

⑤ 宝暦一〇年（一七六〇）大泉村「高反別差出帳」

⑥ 天明 四年（一七八四）田畑村「明細書上帳」

⑦ 寛政 六年（一七九四）神子集村「指出明細帳」

⑧ 天保 九年（一八三八）北殿村「差出明細書上帳」

⑨ 天保 九年（一八三八）堀ノ井村「差出明細帳」

⑩ 天保 九年（一八三八）久保村「明細書上帳」

新水帳貞享四卯年 一冊 板倉検地

林草場帳元禄一一年一冊 板倉 改

一、百姓林 二三か所 百姓二五人にて持来り申し候

此反別 五町六反一六歩 一反につき米二合上納

一、桑畑並に畑の畔に植え置き候

一、蚕 少しずつ飼ひ申し候商売になるほどござなく候

一、薪取場 大泉所山 ぞうろく山 南の入山 北沢山（以上筑前領）

南沢山（筑前領）

一、林場 大泉所山 ぞうろく山 南の入山 北沢山 南沢山

山王原 富士塚原 上ノ瀬原 くるみ沢原、ほか

一、百姓草場 二七か所 百姓二〇人にて持ち来り候

此反別老町八反七畝九歩

一、用水 当村地内より出水用い申し候

一、堰 五か所 大泉川より四か所、反別三町七反五畝余

北殿村前七町余上よりくろ川、反別三町九反七畝余（昨年まで

は天竜川から引水したが）

一、川除 天竜川・大泉川通 人足扶持米一日一人五合

一、橋 土橋二か所 村中普請

一、他村への出作 高八二石三斗余 六か村へ出作

松島村へ一人、堀島村へ一人、田畑村へ一人、北殿村へ一人

久保村へ三人、大泉村へ五人

一、百姓二〇軒 高持百姓六軒 地下百姓一四軒

一、門屋 三軒

一、水谷 八人

一、人数 二七三人 男一三四人 女一三九人

此の外一八人他所候きに参る

一、馬四二匹、牛二匹

- 一、馬医二人、馬喰一人、
- 一、医者一人
- 一、大工・木挽・桶屋・杓取・左官……何れもなし 紺屋一人
- 一、御朱印地 高田石 当社八幡宮 神主三日町島山権守
- 一、御除地 一、地藏庵地 二畝歩
- 一、十王堂地 二〇歩
- 一、キリシタン類族 なし
- 一、鉄砲三挺 眞師三人
- 一、夏秋はもちをつかい、春は鉄砲で鹿馬をうち払う
- 一、郷屋敷 二畝二五歩 御蔵長四間横二間
- 一、酒屋 志軒 一九年以前から 造米萬一二石五斗
- 一、御年貢米 粳は五斗入、米は四斗入
- 一、畑作 大友・小麦・粟・稗・大豆・小豆・ソバ・大根・油荳・カブ
- 一、田畑小作料
- 一、上田 一反歩につき 御年貢のほか二斗から二斗三升
- 一、中田、下田、新下田 一斗五升から一斗七升八升まで
- 一、上畑 一反歩に付き入上ゲ米一斗二升より壹斗五升まで
- 一、中畑・下畑 一斗より一斗二升まで
- 一、原畑 御年貢米ばかりでも作り手なし
- 一、年季賃物 田畑は一〇年季まで
- 一、上田一反歩につき 代金壹圓一分一四三分
- 一、中田・下田、新田 代金壹圓一分二分
- 一、上畑 代金二圓一分
- 一、中畑・下畑 代金二圓一分
- 一、田方種入れのこと（五月中より五〇日前に苗代作り）
- 一、上田・中田 一反につき粳一斗一升
- 一、下田 一斗三升

- 一、新田 一斗四升
- 一、畑方種入れの事 秋彼岸より土用迄に蒔ける
- 一、一反歩につき 麦二斗五升一三斗二升
- 一、田作り 仕付けの時節五月中（夏至）前後に蒔ける
- 一、近所市場 萬達町御城下へ三里
- 一、女稼ぎ 麻布作り 商売にはしない
- 一、男稼ぎ 耕作の間に一〇月から翌三月まで江戸稼ぎ、飯田松本への付け越し商も少しする
- 一、名主、頼頭給与
- 一、名主給 納米百石につき六斗ずつ領主から年々、俵役は萬百石につき八石ずつ抜く、人役は持高に、
- 一、頼頭給はなく俵役・人役共に萬二〇石ずつ
- 一、定使 一人あり給分は年に米八斗二升五合ずつ抜く村中です
- 元禄十二年卯七月

御代官様

- 与治右衛門
- 十左衛門
- 治郎兵衛
- 五左衛門
- 伊左衛門
- 庄三郎

（大衆館文書）

以上略記したのであるが、元禄時代の南殿村の様子が全体的によくわかる。この南殿村の明細帳のようにくわしいのは珍しいが、各村の明細帳から当時の村の様子を拾って記せば次のようになる。

2 高札場

江戸時代には各村に高札場があつて、大事な御条目や村高・村入用等が掲示された。高札というのは幕府や藩からの掟・条目・禁制など

を板にかき、人目につきやすい場所へ掲げ法令の周知を期したものである。櫓のなかにたて雨覆いの屋根をつけてあった。高札場の故意の破損は処罰され、敷地は無年貢地であった。(明治六年二月 廃止)

記録に残った高札場の高札場は次表のようであり、やはり無年貢地であることが記されている。

表3-5 明細帳に記載された村内高札場

村名	年	高札場
南殿村	享保五 (一七二〇)	一ヶ所 (キリシタン札、火付法度一)
大泉村	享保五 (一七二〇)	一ヶ所・二枚 (キリシタン札一、御法度書一)
田畑村	天明四 (一七八四)	アリ
神子柴村	寛政六 (一七九四)	一ヶ所・三枚 (不詳)
北殿村	天保九 (一八三八)	一ヶ所・三枚 (キリシタン札一、御法度書一、通判書一、通判書一)
塩ノ井	〃	〃
久保村	〃	二ヶ所・三枚 (キリシタン札一、火事の事一、御法度書一)

3 村役人の給料

村役人の給料は、時代がちがうので比較にはならないが表示すれば次のようになる。はじめは米で、しだいに銭で、支払うようになったようである。大泉村のように、幕府領になって支払われなくなったので、村入用からまかなう所もあった。

表3-6 明細帳に記載された村役人の給料

村名	年	名	主	組	頭	定	使
南殿村	元禄二 (一六九二)	納米百石ニツキ	ナ	シ	年米八斗二升五合		
大泉村	享保五 (一七二〇)	同右 (私領)	ナ	シ	年二貫九〇〇文		
田畑村	天明四 (一七八四)	〃					
神子柴村	寛政六 (一七九四)	天銭高ヨリ八引ク	夫銭高ヨリ三引ク	年五貫八〇〇文			

4 郷 蔵

郷蔵は江戸時代に年貢米を保管したり、備荒貯蔵のために、村にできた共同の穀倉である。今でもその形が残っている塩ノ井のようなどころもあり、わずかに地字に「郷倉敷」として残っているところ(大泉)もあるが、明細帳には次の表のように記されている。

表3-7 明細帳に記載された郷蔵

村名	年	広さ (間敷)	大きさ (倉)	備考
南殿村	元禄二 (一六九二)	二畝二五歩	4間 × 2間	自管請
大泉村	享保五 (一七二〇)	三畝歩	3間 × 2間	番人村役 宝暦十年なくなる
田畑村	天明四 (一七八四)	ナシ		
神子柴村	寛政六 (一七九四)	二畝		郷蔵新あり 天明八年より俵一〇石七八八北殿村へ預けおく
北殿村	天保九 (一八三八)			
塩ノ井	〃	アリ	3間 × 2間	
久保村	〃	〃		

郷蔵は古代の屯倉から始まり荘園の荘倉、中世の各村の倉庫などは、みなこの郷蔵の前身だとされている。郷蔵は最初年貢米徴収ならびにその保管のため建てられたものであった。当時の年貢米保管は厳重に行なわれたため、村方では郷蔵番をおき、火災盗難などの警戒にあたらせた。もし年貢米が役人の改め以前に損害をうけた場合には、村方でその損失を負担しなければならなかった。

江戸中期以降、特に天明・天保の飢饉後は、郷蔵はさらに備荒貯蔵

北殿村	天保九 (一八三八)	金二分	金二朱	金一分
塩ノ井村	〃			
久保村	〃			

のための倉庫となった。天領では寛政年間（一七八九—一八〇〇）以降「村々貯穀」と称して備荒の貯穀場として郷蔵の建設をさかんに奨励した。南箕輪の郷蔵には米麦よりも雑穀、特に神が多く貯蔵された。代官が厳重にこれを管理し、飢饉の際には庶民に貸与して、年賦で回収した。しかし平年には利用させず、年々新穀に詰替えさせて、腐損を防いだ。

この表で北殿村には郷蔵の記載がないが、神子柴村で天明八年から北殿村へ預けておいたと記されているので立派なものがあつたと思われる。古地図には北殿村の郷蔵跡が記されている。（国道西でくくや西）なお、田畑にも明治七年の調査によると、天保一四年に民費で建てた郷蔵があり、二周半に二周の広さであつたとしている。このように江

表3-9 郷蔵井播穀地明細表（第十七大区八小區）

公 租 種 類	所在地名	地 坪	建坪井播 蔵之見込	公積穀井播類共
私租六石六斗七升貳合	久保耕地	五十五坪	六 坪	拾三石三斗四升四合
私租六石六斗七升貳合	久保耕地	五十五坪	六 坪	拾三石三斗四升四合
私租貳石四斗九升八合	塩野井	三十六坪	六 坪	拾四石七斗四升六合
私租貳石四斗九升八合	塩野井	三十六坪	六 坪	拾四石七斗四升六合
公租拾六石三斗四升貳合貳勺	大泉耕地	九十八坪	六 坪	八拾七石四斗五升六合四勺四厘
私租十八石	大泉耕地	九十八坪	六 坪	八拾七石四斗五升六合四勺四厘
私租三十七石一斗九升壹合	大泉耕地	九十八坪	六 坪	八拾七石四斗五升六合四勺四厘
私租十五石九斗貳升三合	大泉耕地	九十八坪	六 坪	八拾七石四斗五升六合四勺四厘
公租貳十石七斗九勺八才	北殿耕地	四十四坪	六 坪	九拾七石九斗二升八合九勺五才
私租七十七石九斗二升九勺九才	北殿耕地	四十四坪	六 坪	九拾七石九斗二升八合九勺五才
公租六石四斗五升二合六勺五才	南殿耕地	無	無	拾八石五斗七升三合三勺
私租十二石七斗二升六勺五才	南殿耕地	無	無	拾八石五斗七升三合三勺
公租五石七斗三升九合三勺八才	田畑耕地	三十坪	六 坪	百九石九斗八升九合三勺八才
私租八十八石七斗五升五合	田畑耕地	三十坪	六 坪	百九石九斗八升九合三勺八才
私租五十七石七斗五升五合四勺	神子柴	三十坪	六 坪	六十七石七斗六升一合四勺

戸時代後期にはどの村にも郷蔵ができたのか、明治初年には表3-9のように報告されている。

5 農閑期の稼ぎ

旧暦で一〇月から翌年の三月まで、今でいえば一二月から四月までは農閑期であった。この期間にどんな仕事をしていたか、明細帳に記されているのが次表のようである。

表3-10 農民の農閑稼ぎ（明細帳より）

村	年	男の 稼 ぎ	女の 稼 ぎ
南殿村	元禄二年 (六九九)	江戸へ・松本飯田へ	麻布おり
大泉村	享保五年 (七二〇)	江戸へ	麻布おりなど常稼なし
田畑村	天明四年 (七八四)	くつ、わらじ、むしろ、薪取り	家内用麻布
神子柴村	寛政六年 (七九四)	くつ、わらじ、むしろ、薪取り	麻布
北殿村	天保九年 (一八三八)	薪取り (尾州・三州・飯田・松本)	年間食料(粟・稗・麦)着 物類、草取り稼ぎなし
塩ノ井村	" "	薪取り、くつ、わらじ	麻布着用品
久保村	" "	くつ、わらじ、むしろ、薪取り	麻布着用品

これによれば、男は農仕事のくつ、わらじ、むしろなどをつくったり薪取りをした。そして中馬稼ぎもした。飯田や松本まで、こちらの荷物一年費用に売れる米一をつけて売って売りさばき、帰りに塩やお茶をこんできた。それは駄賃稼ぎであり、北殿村のように「小遣い銭」になる程度であった。本当に生活に困るものは江戸等へ出稼ぎにいった。その数もたいへんなものであった。南殿村で家数二五軒（人数二七三人）から一八人もが江戸稼ぎにでており、大泉村では当時五五軒（人数二五九人）から四五人もの出稼ぎがあつた。

酒屋も村内には次表のようにあった。日本の酒は主として米を原料としてつくられ、その起源は稲作とともににはじまった。早くから商品として売られたが、江戸時代以降各地に酒造業がおこった。村にまで居酒屋ができて、農民に買酒の風がおこった。江戸幕府も米の不足や米価騰貴を生ずるので、酒造制限をし新規営業禁止令を出した。しかし、この効果はなく酒造はふえるばかりであった。

表3-10 明細帳に記載された酒屋

南殿村	元禄二年 (六九二)	酒や一軒	一九九以前より二石五斗
大泉村	享保五年 (七二〇)	酒やなし	
田畑村	天明四年 (七八四)	酒株 五石	
神子柴村	寛政六年 (七九四)	酒株 三〇石	持主孫十郎
北殿村	天保九年 (八三八)	酒造 あり	
塩ノ井村	"	"	
久保村	"	"	

7 鉄砲

戦国時代末から、刀狩りと募して、農村から一切の武器の没収が行なわれた。天正一六年(一五八八)豊臣秀吉が行なった刀狩りが有名である。国内統一にあたってのもっとも大きな障害となったのは、農民が武器をもったたちあがる土一揆。一向一揆であり、これを指導する半農半武士的な土豪・地侍たちであった。したがって、かれらから武器をとりあげ、農業に専念させることが必要であったから鉄砲は所持できないはずである。

明細帳でみるかぎり、村にはせいぜい鉄砲が三挺ぐらいしかない。しかもそれは預り鉄砲で、威銃でしかなかった。大泉村では、「月切鉄砲・用心鉄砲、積古鉄砲・浪人鉄砲御座なく候」として「定威鉄砲

二挺 預り主文六・小兵衛」とその所在をはっきりさせている。これが農村の通例であった。

表3-11 明細帳に記載された鉄砲

南殿村	元禄二年 (六九二)	鉄砲三挺	
大泉村	享保五年 (七二〇)	定威鉄砲二挺 三刃二分	預り主 文六 小兵衛
田畑村	天明四年 (七八四)		
神子柴村	寛政六年 (七九四)	鉄砲三挺	
北殿村	天保九年 (八三八)	預り鉄砲ナシ	
塩ノ井村	"	"	
久保村	"	"	

8 入会山

かくて、農民は農業に専念を強要されたし、専念せざるを得なかった。明細帳の多くの頁は入会山と入会林野の記述にうずまわっている。

表3-12 明細帳に記載された入会地

	入会山(刈敷)	入会原(林野)
南殿村	元禄二年 (六九二)	大泉所山、藏山、南の
大泉村	享保五年 (七二〇)	大泉所山、藏山、南の
田畑村	天明四年 (七八四)	大泉所山、藏山、南の
神子柴村	寛政六年 (七九四)	大泉所山、藏山、南の
北殿村	天保九年 (八三八)	大泉所山、藏山、南の
塩ノ井	"	大泉所山、藏山、南の
久保村	"	大泉所山、藏山、南の

入会山がどれほど農民にとって大切な山であったか、またそこから流れる川がいかほど大切であったかは、その記述量からだけでも推察できる。詳しくは第五章入会山野と村の生活を参照されたい。

五 人別帳・宗門帳と戸口

1 人別改帳

江戸時代、人口のことを人別といい、人別改めとは人口調査ということである。この人別改めは、戦国時代織田・豊臣の時代既に領主が農民把握のために行ったようであるが、本村にはそのような資料は残っていない。

江戸時代は、人別改めは幕府や領主の必要に応じて行なわれており、その資料が若干残っているので二、三の資料を掲げよう。



図3-8 南殿村人数改帳馬改帳 写
(寛文12年) (大森館文書)

(表紙) 寛文十二年

南殿村男女人数改帳

臨板様より御領に成り始め

天羽七右衛門様御改めに付き書上げ候ひかえ

(表紙)

長兵衛分

一、父 七左衛門
母

女房

下人 五人

下女 六人

ノ拾五人内男 七人
女 八人

馬 四疋

同入 門屋

一、長三郎

女房

男 一人 うち
ノ三人内男 二人
女 一人

馬 一疋

同入 門屋

一、勘三郎

女房

女子一人 みの

惣人数貳拾一人

家数三間 貳軒 本屋
門屋

馬五疋

一、父

母

女房

女子一人 かね

権七郎分

ノ五人内男 貳人
女 三人

牛一疋

一、清七郎

女房

男子一人 長衛

ノ三人内男 貳人
女 一人

馬一疋

一、清七郎

女房

男子一人 辰三郎

女子一人

馬一疋

同入 門屋

一、勘太郎

女房

女子一人

ノ三人内男 貳人
女 一人

惣人数拾五人

家数四軒内 貳軒本屋
貳軒合地

馬一疋

馬一疋 牛一疋

馬一疋 牛一疋

馬一疋 牛一疋

馬一疋 牛一疋

馬一疋 牛一疋

内三拾六人男

家数合拾六軒

内六軒 本屋

内三軒 合地

二軒 腰屋

牛馬合拾五匹

内 拾貳匹馬

三足 牛

右の通り南殿村惣百姓家数人数牛

馬数悉人切りに相改め少しも相違

無く書き上げ申し候以上

寛文拾貳年子八月十八日

名主 長兵衛

組頭 二郎兵衛

(大衆館文書)

次に、元禄一三年の神子柴村の人別改帳をみよう。

(表紙)

元禄十三年

信州伊奈郡兵輪領神子柴村人別改帳

辰六月 日

(本文)

一高三拾壹石九斗三升六合

此反別天町壹反九畝歩

澤宗 五人組 伊兵衛 四拾九畝

御支配所の内羽広村介左衛門と申す者

の娘にて御座候

一男子 手前に罷り在り候

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

一男子 同前

女房 四拾六畝

伝之丞 貳拾壹畝

六之助 拾七畝

弥良 拾 畝

沙三郎 四拾壹畝

茂兵衛 六拾壹畝

ミヤ 五拾三畝

久四郎 五拾四畝

女房 五拾畝

ふじ 拾六畝

久作 五拾壹畝

女房 四拾七畝

かつ 四拾七畝

女房 四拾七畝

女房 四拾七畝

女房 四拾七畝

これは、臨坂領より幕府領に変わったとき、(二六七二)代官天羽七右衛門に提出した南殿村人別改帳の一部であって、本村では最古の人別帳である。内容を見ると、長兵衛家では本屋の家族と門屋二世帯分を含めて二一名が一戸を構成しており、権七郎家は本屋の家族と合地二世帯、門屋一世帯を含めて一五人が一戸を構成して、いずれも複雑な構成の大家族形態になっている。

人数は各世帯ごとに計を記し、その男女の内訳が書かれており、さらに各世帯の牛馬の保有数が記入してある。一戸の総人数および牛馬数はその戸の末尾にまとめて記入し、南殿村の総人数、牛馬数が最後に記入してあり、寛文一二年(一六七二)の総人数は七二人であったことがわかる。家数については戸の記載の後にあげ、その内訳、たとえば権七郎家では本屋本屋、本軒合地、本軒門屋というように戸内における地位関係を示している。

このように、この人別帳は人口や戸数、牛馬数を調査することが主目的であるが、この時代の複雑な家族構成とその中における各人の地位や主従関係等、社会の仕組みを示すような興味ある点が表示されている。(三、村人の生活1、近世の農業経営参照)

藪御座無く候
茶藪御座無く候

(中略一戸分)

(注) 以上が一戸分である)

一高拾貳石四斗七合

神宗 伊兵衛組 弥兵衛 五拾四歳

此反別九反九畝廿九歩

内藤丹後守様御知行所川手村市左衛門と申す
者の娘にて御座候

女 房 四拾八歳

一女子 手前に罷り在り候

まつ 八歳

一男子 同前

長末 六歳

一地下に罷り在り候

吉左衛門三拾貳歳

人数合五人内男三人
女二人

馬老正御座候 牛御座無く候

藪御座無く候

茶藪同前

外に
一男子 是は五年以前江戸へ参り竹山二丁目
に奉公罷り在り候 人数 男 志人

吉兵衛 二拾四歳

(中略一九戸分)

高都合 四百五拾九石六斗壹升六合

此反別 三拾七町八反九畝貳拾歩

人数合 百五拾三人 内男 九拾人 内女 六拾三人 内沙門一人
内水呑八人

林都合 八町六反八畝□□ 内五町八畝八歩 田畑・神子樂所

草場都合 老町八反四畝八歩 内六反貳畝八歩 田畑・神子樂所

馬 三拾貳疋 牛 三疋

外に

人数合拾壹人 是は当村より他村へ出候分

右は此度人別御改め仰せ付けられ候に付き、村中委細吟味を遂げ候而仕上

げ少しも相違御座無く候。仍って件^{こと}の如し

元禄十三年辰ノ六月 日

信州伊那郡兵輪領神子樂村

名主 儀左衛門

組頭 八右衛門

御代官様

(大和手文書)

この人別改帳は元禄一二年(一六九〇)領主坂倉領母が領地替えとなり、本村関係は幕府領と太田領に分割して統治されるようになったが、その幕府領となった村々が改めて編集して代官所に提出したもので、田畑村にも同様なものが残っている。



図3-9 田畑村人別帳(元禄13年)
(門屋文書)

この形式は家ごとに持高と反別を記載し、戸主と家族の名前・年齢を列記してある。家族については戸主との関係及び其の所在を明記し、特に女房・下男・下女等は出身地とその父親を明らかにし、戸主の上には宗旨が書いてあるなど宗門改帳の匂いもあるが檀那寺の記載と寺請けの文もなく、宗門帳というには条件が整っていない。各戸の末尾に人数を記した後、牛馬の所有数及び林・草場の面積を記入してある。林・草場は元禄一一年に新たに検地を受けているので、その確

認の意味で記載が要求されたものと思われる。

さらに「外」として、年季奉公・出稼ぎ等外出しているものの名前および現住所を記入してある。

このことから、表紙に人別改帳とあるように人別に住民を把握し、さらに石高・反別・牛馬数・林草畑面積等代官としての統治に必要な基礎資料を集めるために、人別改帳が行われたものと考えられる。

以上みてきたように、人別改帳は支配者が替わった時などその要求に基づいて作成され、農民の把握、政治経済の基礎資料等統治に必要な調査であったといえる。しかし、しだいに宗門改帳に石高・牛馬数等を併記することによって人別改帳と宗門帳と合体したような形になっている。

人別改帳は毎年行なわれたわけではなく、毎年の村の人員の増減を把握するため「人別増減書上帳」というものが毎年のように報告されている時代があり、人員の増減およびその理由、家数、牛馬数等を記入した書上帳が多く残されている。

2 宗門改帳

(1) 宗門改帳

「日本国は神国たる処、きりしたん国より邪法を授け候儀太以て然るべからず候こと」。これは天正一五年（二五八七）六月秀吉が九州征服の際博多藩在中に発したバレン追放令の第一條である。これによって我が国におけるキリスト教の禁止が始まった。しかし、キリスト教の禁止はそれほど厳しいものではなかった。

江戸幕府はしだいにキリスト教の取締りを厳しくし、特に寛永一四年（一六三七）の島原の乱以後禁教政策は強化され、寛永一六年にはオランダ以外の外国人の入国禁止、同一七年には宗門改帳（キリシタン奉行）を置いて人別に宗旨を調査し、キリスト教信徒の検索頒発

にあたった。さらに、寛文四年（一六六四）には藩藩にも宗門改帳役人を置いて、家中、領内くまなく信徒を検索することを命じている。この宗門改帳政策に基づいて、寛永一七年（一六四〇）に寺請制度が実施され、宗門人別改帳の作成が始まっている。

寺請制度は国民全部を家単位にいずれかの寺に属させる檀那制度に編成し、国民一人一人をキリシタン信徒ではなく、仏寺の檀徒であることを檀那寺に証明させる制度である。



図3-10 きりしたん家制高札（玉造村文書）

宗門人別改帳はこの寺請制度に基づいて、一村ごとに一冊とし、それに全戸を家ごと人別に記名してその上に檀那寺名を書き入れ、檀那寺が檀徒であることを証明する印判を押す形式で調製されたものである。

また、檀那寺は寺請制度によって必要に応じ寺請状を発行する。寺請状は寺請証文・宗門証文・寺手形などとも言われ、もとはキリシタン信者が仏教に改宗帰依したことを証明するため、檀那寺がその檀家であることを認め、そのことを奉行所に差し出すようにした書状であったが、後には

一般化し、婚姻・旅行・奉公人雇入れ等の場合の身分証明書のような形になっている。

(2) 各時代の宗門改帳

ア 脇坂時代の宗門改帳

(宗門)
北殿村

御改帳

(宗門)
一、今度は天連・いるまん・きりしたんの宗門御改めに付いて男女共に吟味仕り候え共、此の村に一人も御座無く候。其の上うさんなる物男女童に預る迄かえ置き申さず候。其の爲五人組に宗門改め仕り村中御平がた指し上げ申し候。

一、御宗 寺は境安寺

一、同

一、同

一、同

一、同

一、同

一、同

一、御宗 寺は境安寺

一、同

一、同

一、同

一、同

一、同

一、同

一、同

組頭 九郎右衛門

男子 と 移

男子 いん郎子

男子 新三郎

右之新三郎

女子 まん

女子 五介

女子 は は

女子 ゆ は

男子 おと

門 藤左衛門

女子 女房

男子 くら

男子 たん

男子 〃

一、同

(以下四軒略)

女子 ふく

右御改め宗門老人も御座無く候。其の上わざと仕りたる物郷中にかかえ置き申す間敷く候。後日に御改めの宗門又はわざと致したるものかかえ置き申し候と訴人御座候わば、右五人組の者共急度由事に仰せ付けらるべく候。

慶安六年丑ノ七月晦日

組頭 九郎右衛門

五介

七右衛門

伝左衛門

源右衛門

仁右衛門

北殿村 肝煎 少右衛門

組頭 九郎右衛門

仁左衛門

三郎兵衛

喜右衛門

(以下五人組二組の記載略)

鳥飼六太夫殿

御出重左衛門殿

(千根屋文書)

これは脇坂飯田城主支配時代の北殿村の宗門帳で、本村で発見された最古の宗門帳である。戸数は一七戸あり、それが六戸・八戸・三戸の三組の五人組に編成されており、その最初の五人組の分を掲げたものである。

記載形式を見ると、五人組ごとに宗門改めをして手形を差し上げる旨を前書きし、各戸ごとに戸主とその家族を列記し、名前の上に宗門

と檀那寺を記入してある。名前の下に年齢の記入がなく一家同一印刷を押捺してある。さらに、五人組の終わりに奥書きをして各戸主が連署してある。

イ 板倉時代の宗門帳

(表紙)
天和二戌年

信州伊那郡南殿村宗門御改帳

抄上

(表紙)
宗門

五郎作	四拾五歳
女房	三拾八歳
五郎作子	長左衛門
長吉	廿歳
同人娘	よし
つる	八歳
下人	太
太	武拾四歳
下女	百介
せ	拾六歳
五郎作親	久三郎
久三郎	六拾八歳
女房	六拾貳歳
市兵衛	三拾八歳
女房	三拾貳歳

右拾三人 内男七人
女六人

代々檀那にて袖僧且那に紛れ御座無く候

信州箕輪領木下村 城安寺

宗門

五郎作地下 羽左衛門 六拾三歳
羽左衛門子 ところ 拾四歳

右五人 内男三人
女二人

代々檀那にて袖僧且那に紛れ御座無く候

信州箕輪領木下村 義泰寺

外式人西御改め後減

一、羽左衛門子善四郎他所へ奉公に参り候

一、同人女房当二月相果て申し候

(中略一五軒分)

人数 百八拾九人 内男 九拾六人
女 三拾三人

外九人は西御改め以後減り申し候

右の者代々袖僧且那に御座候。御法度の耶蘇宗門は御座無く候。若し耶蘇宗門と申す者御座候わば袖僧共罷り出申しわけ仕る可く候。後日の為仍て件之知し

信州箕輪領木下村檀那

本寺高遠領中沢村常秀院末寺 城安寺

同村 同宗

本寺上田領横尾村信綱寺末寺 義泰寺

天和二戌二月十五日

宗門御改め御奉行衆中

右の通り人別相違無く宗門の儀代々の且那寺判形取り差し上げ申し候。御法度の耶蘇宗門村中一円御座無く候。若し不審成る者御座候わば隠し無く申し上げ候様に色々御穿鑿御座候得共不審なる者は御座無く候。脇より訴人仕り候わば其の者の儀は申し上ぐるに及ばず、名主五人組まで如何様の曲事にも仰せつけらるべく候。後日の為仍て件之知し

天和二戌二月十五日

南殿村 名主 金左衛門

組頭 五郎作

長百姓 兵右衛門

宗門御改め

御奉行衆申様

権七郎
次郎兵衛
作左衛門

(大衆壇文書)

天和二年(一六八二)のこの南殿村の宗門帳は板倉氏支配の時代のものであるが、村の控であるため印判の捺印がなく、どのように押捺されていたか不明であるが、宗門帳の形式は知ることが出来る。

宗門帳の記載形式は老軒ごとに戸主および家族の名、年齢を列記し、名前の上には戸主との関係を記入してある。各戸の末尾には家族人数を書き、檀那寺が自寺の旦那であることを証明する文と、寺の所在地と寺名を記してある。さらに、その後には前年の宗門改めのときからの人数の増減およびその理由をつけ足してある。

全戸記載の後には檀那寺の請状を書き、各檀那寺がその所在地と寺名、本寺の所在地と寺名を連署しており、最後に村役人による奥書と村役人の連署がある。

ウ 幕府領時代の宗門帳

(表紙)

元禄十五年

幾利支丹穿鑿宗門御改帳

(本文)

指し上げ申す一札の事

切支丹宗門の儀累年御禁御せ付けられ候得共、弥々以て此の度右の宗門御穿鑿に付き、村中大小百姓召仕いの男女同輩並びに出稼ぎ仕人山伏行人なども、檀博士太夫端たき其の外縁き身乞食□□等に至る迄、当村住居の者老人も残らず明細に吟味仕り候處、右宗門は申し上ぐるに及ばず、前

々邪宗門にてころび候者並びに類族の者御座無く候。依って銘々旦那役判仕り差し上げ申し候。自今弥々油断無く五人組切りに相改め右の宗門御座候わば御注進申し上ぐ可く候。若し怪敷き宗門これ有るを隠し置き後日に露顯仕り候わば、当人は勿論庄屋五人組村中の者まで如何様の御仕置きに申せ付けらる可く候。依って件の如し

信濃国伊奈郡田畑村

元禄十四年己三月

信州伊奈郡木下村御宗門頭院旦那

一 彦右衛門儀当村にて御白世繼り在り候

彦右衛門 年七十四

同寺旦那

一女即儀高道領山寺伝左衛門娘

女房 年六十四

同寺旦那

一 子勘五郎儀親に懸かり籠り在り候

勘五郎 年四十一

同寺旦那

一 親かね儀同断

かね 年二十八

(中略)

人数合 三百五拾貳人内男 百七十九人
女 百七十三人

外

三 拾八人 内男 十六人他所へ出でし者
女 二十二人他所へ出でし者

三百五拾貳人とは代々当寺旦那に給れ御座無く候。若し御法度の宗門の由訴人御座候わば指摘何方迄も罷り出急度申し被さ仕る可く候。其の爲旦那名所の圖書に銘々の印判仕り差し上げ申し候以上

信濃国伊奈郡木下村 御宗門頭院

右の通り村中百姓残らず相改め判形仕り差し上げ申し候。寺社の儀御座無く候

一、何れの末寺共宗門知れ申さざる出家御改めなされ候。村中に左様なる



図3-11 右、元禄15年 總利支丹宗門別御改帳
左、宝暦6年 宗門人別御改帳（門証文書）

御奉行様

元禄十五年 三月巳 信濃国伊奈郡田畑村

この宗門帳は特にキリスト教穿鑿を厳しく行なうよう指示があつて作成されたもので、幕府領になつての本格的なものである。まず最初に「指し上げ申す一札の事」と書いた前書があり、人別の記載は各戸ごとに記されているが各人名の肩書きに檀那寺名が書いてあり下に年齢、上に出自所在が書いてある。

末尾には板倉時代の宗門帳と同様に、寺請証文と檀那寺名を書き、その後には村役人の奥書と村役人の連署がある。

出家御座無く候事
一、総じて奇妙成る儀を
申し法をすすめ、怪敷
き道具等持ち来る者こ
れ有り候わば早速御注
進仕る可く候
一、百姓の案内にも自然
怪敷き道具等所持の儀
見及び候わば是亦申し
上ぐ可く候
常々名主五人組仲間と
して申し合わせ御断こ
れ無き様仕るべく候。
後日の為仍て件の如
し

名主 助九郎
組頭 彦市
勘太夫

（門証文書）

さらに、北殿村の享保一〇年（一七二五）の宗門帳の一部を掲げると次のようである。

（表紙）
享保拾年

信州伊奈郡北殿村宗門人別御改帳

己二月

（本文）

信州伊奈郡北殿村宗門人別御改帳

信州伊奈郡木下村

一 神寶洞宗御領院旦那

一同寺旦那

是は当村御支配利兵衛前々より夫源兵衛と同宗同寺に御座候

一同寺旦那

一同寺旦那

一同寺旦那

当村十歳弟者年季に抱え寺請証文主人方へ取り置き申し候

男五人 内男三人 女二人

外女子孫つ御支配当村金兵衛方へ縁付け遣し申し候

（中略）

家数 五拾六軒 内本百姓 三拾軒 内本谷 貳拾六軒

人数合三百貳拾六人 内男 百四拾四人 内女 百八拾六人

（中略）

右書面の通り御領其旦那に給れ御座無く候（以下略）

享保十巳年二月

信州伊奈郡高遠領菅沼大徳山常秀院末寺
同国 同郡木下村梅曹洞宗

御頭院 正 堀田

大草太郎左衛門殿

(養老寺、法界寺の同様な記載略)

右の書面の通り当村宗門吟味仕り、大小百姓門屋借屋其の他当村に属する者、當年の子供男女共に寄人も残らず宗門相改め候所、きりしたん其の外御法度の宗門御座無く候。若し御宗門の宗門に置き後日あらわれ申し候わば、名主祖頭五人組にも御料仰せ付けらる可く候御事

一、此れ以前きりしたん宗門に候者又は類族これ有り候哉と御尋ね成され候。先般よりきりしたんころびの者御座無く候。若し隠し置き臨より露顯仕り候わば何分の曲事にも仰せ付けらるべく候御事

一、何方の末寺共相知れず、又は宗門も體に知れ申さざる様成る出家これ有り候や、申し上ぐべき旨御改め成され候。村中に右の通り出家御座無く候。

一、名主祖頭は申し上ぐるに及ばず、五人組中間相互に常々心懸け、村中の者の内若し家内に人々見及び聞き及び申さず候不思議なる道具などこれ有り候わば、早速御注進仕る可き旨仰せ渡され候御事

右の通り宗門人別御改帳差し上げ申し候通り少しも相違御座無く候。若し少し成り共違背候わば如何様の曲事にも仰せ付けらる可く候。後日の為仍って件の如し

享保十年乙巳二月

信州伊那郡北殿村

名主 庄右衛門

組頭 三郎右衛門

長百姓 伝左衛門

同断 新五兵衛

〃 藤右衛門

(以下五〇名署名略)

大草太郎左衛門様

(子嗣屋文書)

この宗門帳は各戸ごとに戸主及び家族名と年齢を列記し、各人の上に宗旨と檀那寺を記してある。また戸主の肩にその家の石高を書き、家族には戸主との続柄、関係などを記入し、女房及び下男下女等には出自を明記している。一戸の末尾には家族員数の計を書き、その後には牛馬数を書いてある宗門帳もあり、表紙に人別の文字があるように人別改めを兼ねたものになり、幕末までほとんどこの形式になっている。

エ 宗門帳の作成

宗門帳の作成は名主ら村役人によって行なわれるが、慎重でなければならなかった。前に掲げた宗門帳奥書の一節にある「村中の大小の百姓、召仕の男女、門屋借屋並びに出稼ぎ、社人、山伏、行人など、僧、博士、太夫、鐘たたき、其の他稼ぎ身、乞食、□□等に至るまで村居住のもの一人も残らず明細に吟味……」というように、余すところなく吟味記載をしなければならない。そのため、縁組関係による移動、嫁入りや下男下女等の年季奉公関係の出入り、あるいは出生死亡等年中村居住の者を正確に把握して、その宗旨を吟味しておかねばならなかった。また、そのなかに不審な者があれば早速御役所に報告するように義務づけられており、邪宗門の者を隠し置くことは重大な罪科に問われることになる。大変気苦労な仕事である。宗門帳に記載された者は檀那寺によってその檀那であることを証明する印形が押捺され、後に寺請の文が記され、さらに、村役人による奥書と連署があつて宗門帳が完成する。

これらの仕事は正確に行なわれるために、縁組や出稼ぎ、年季奉公など他村との人の出入りの場合には、次のような「宗門送り状」が名主相互の間で取りかわされている。

宗門送り一札の事

当村匠師元享頼みち当長拾忠歳、其の村治郎兵衛女房に縁付け遣わし申し

候。

此の若生所^{じやうしよ}成る者にて宗旨の儀は代々神宗^{しんしゆ}祭林寺旦那に給れ御座無く候。則ち寺送り相添え送り遣わし申し候。然る上は此の方御改帳相除き申し候間、其の御村御改帳に御書き載せ成さる可く候。以来此の者に付き如何様の義これ有り候共此の方構い御座無く候。後日の為送り一件件の如し

千村平右衛門御預所小野村

天保三年十一月

名主 源三衛門 御

岸本武太夫御預所

南殿村名主 金左衛門殿

前書の通り御寺旦那に給れ御座無く候。若し御法度の宗門等と申す候。これ有り候わば御寺何方迄も罷り出申し被さ致すべく候。後日の為仍つて件の如し

小野 祭林寺

(大正館文書)

宗門改帳は毎年三月ころ作成して提出されているが、その提出先は元禄のころまではどの村も宗門御改帳奉行になっており、そのころは奉行所において綿密に吟味が行なわれたと思われるが、それ以後は代官所または預所役所等になっている。

3 江戸時代の南箕輪における戸口

(1) 人口の推移

南箕輪地域における全体の人口の推移を知ることとは困難である。それは、江戸時代南箕輪地域は六・七か村になっており、同じ年度の資料がなかなかそろはないからである。そこで、各村の比較的近い年度の人口別帳あるいは宗門帳をもとに人口を推計するとおよそ次のようであったと思われる。

一六五〇—一七〇〇年(前期) 一七〇〇—一七五〇年
一七五〇—一八〇〇年(中期) 一七五〇—一八〇〇年
一八〇〇—一八五〇年(後期) 一八五〇—一九〇〇年

一八五〇年ころ(後期) 一八七五—一九二五
各村同一年度の資料としては、文政三年(一八二〇)の「家数人別馬数書上帳」(田丸屋文書)が残されており、これは助郷関係の村柄調査のために差し出したものであるが、これによって家数、人口、馬数を示すと次のようである。

表3-13 文政三年(一八二〇) 南箕輪地域の家数・人口・馬数

村名	家数	人口		馬数	備考
		男	女		
久保村	五三軒	一三一人	一四四人	二七五人	一久保村は久保北割で沢尻を含む
堀ノ井	三一	六〇	七一	一三一	二四
北殿村	(内七三)	一三六	一三四	二七〇	二〇
南殿村	三九	九五	八六	一八一	一七
田畑村	七九	一三〇	一三〇	二六〇	二一
神子集村	(内四七)	八五	九〇	一七五	一八
大泉村	(内一八)	一七〇	一八五	三五五	五二
合計	(内四〇三)	八〇七	八四〇	一、六四七	一八八

(田丸屋文書より作成)

なお、資料が充分でなく不完全なものであるが、各村の人口、戸数、一戸当たりの人数の推移を示すと図3-12および図3-13のようである。

村によって推移の仕方は多少異なっているが、一七〇〇年(元禄三年)ころまでは一般にかなりの人口増加がみられ、その後は人口の減少が目立っている。しかし、人口の減少は一八〇〇年(寛政二年)ころを底として、幕末になると再び人口の増加に転じている。

第2節 村の姿

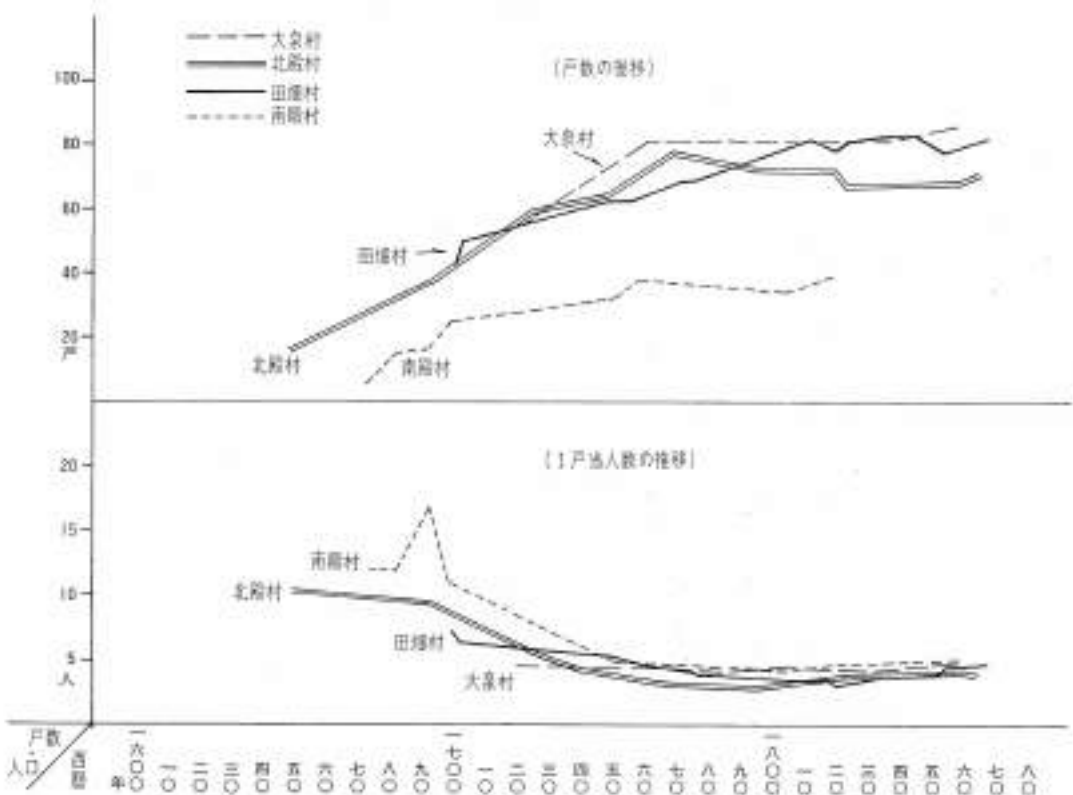
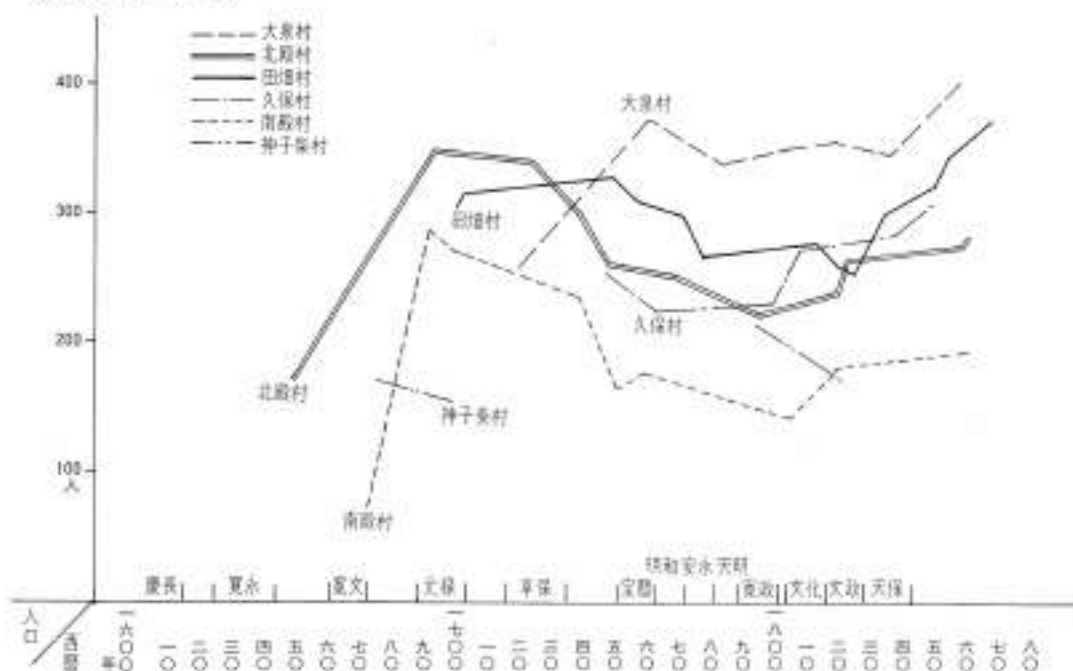


図3-12 江戸時代各村の人口の推移 (上)

図3-13 江戸時代の各村戸数と1戸当たり人数の推移 (下)

江戸時代は日本全体として人口がほとんど停滞していたといわれているが、本村地域内は各村々（大泉村を除く）は江戸中期にかなりの人口減少がみられたのであって、これは異常なことと考えられる。この点については後に若干の分析をしてみることとする。

(2) 戸数および家族人数の推移

北殿村・大泉村・南殿村・田畑村について江戸時代における戸数および一戸当たりの人数をグラフで示したものが図3-13である。

戸数について見れば、多少の浮沈はあるが江戸時代全体を通じて増加しているといえることができ、特に人口のような減少の時期はみられない。全般的に一七六〇年ころまで戸数が急速に増加し、以後は一進一退の状態を示しているところが多く、この戸数の増加の時期は一戸当たりの人数の減少の時期と一致している。そこで、一戸当たりの人数の推移を見よう。

江戸時代の元禄（一六八八～一七〇四）のころまでは、どの村も大家族制が一般的で、直系の家族のみでなく傍系の家族及び下人等を含め一〇～二〇人という家族は普通であった。特に南殿村の大家族は典型的で宗門帳に記載された各年度の最大家族人数をあげると、元和二年（一六二六）で二九人、貞享四年（一六八七）では三四人、元禄五年（一六九二）では四六人という大家族であった。そして、元禄五年の一戸当たりの平均人数は一六・九人であった。このような大家族も享保のころ（一七一六～一七三五）には北殿村、田畑村等ではしだいに解体分離して直系家族のみの小家族制に移行し、それが戸数の増加になってあらわれている。したがって、一戸当たりの人数は四～五人と少なくなつた。ただし、南殿村では後々まで宗門帳の記載でみるかぎり大家族制の風習が残り、宝暦のころ（一七五二～一七六四）まで一戸当たり一〇人以上という大家族的傾向が続いていた。

天明のころ（一七八一～一八〇一）から文化、文政のころ（一八〇四～一八二〇）は北殿村および田畑村では一戸当たりの人数が三・三～五人という極端に少ない人数になっている。これは異常なことで、宗門帳に幼児の数が非常に少ないこと、後に掲げる年齢別人口構成図からみても極端なつば型で、村の衰退の様相を示しているように思われる。

(3) 人口推移に対する考察

ア 年齢別人口構成

江戸時代の年齢別人口構成を宗門帳の年齢記載によって北殿村および田畑村について図示すると図3-14のようである。

いずれも人数が二五〇～三三〇人程度の小人数であるから左右の出入りのばれは小さい人口ピラミッドであるが、およそその人口構成の傾向を知ることができる。これによって見ると、元禄のころは人口構成が富士山型に近く（北殿はツリガネ型に近い）人口の増加傾向を示しているが、時代が進み享保、宝暦の時代になるとツリガネ型からさらにツボ型に移行して、人口の停滞から減少型に移行している。このことは南殿村・久保村においても全く同様であり、大泉村、神子柴村は資料が不足しているがほぼ同様の傾向が認められる。

この宝暦から文政の時代へかけて幼年人口が極めて少なくなっているが、特に寛政（一七八九～一八〇一）の時期は五歳未満の人口が極端に少なくなっている。「寛政二年（一八〇〇）久保村では五歳未満は女子一人のみであった」このことは、江戸時代に農民が生活苦のため生まれてきた子供を間引きをしたといわれているが、本村内においても直接の資料はないが、そのような事実が存在したと考えさせるような人口構成である。

幕末になり嘉永（一八四八～一八五三）、安政（一八五四～一八六〇）のころから、人口ピラミッドはツリガネ型、さらに富士山型にもどり明治にか

第2節 村の姿

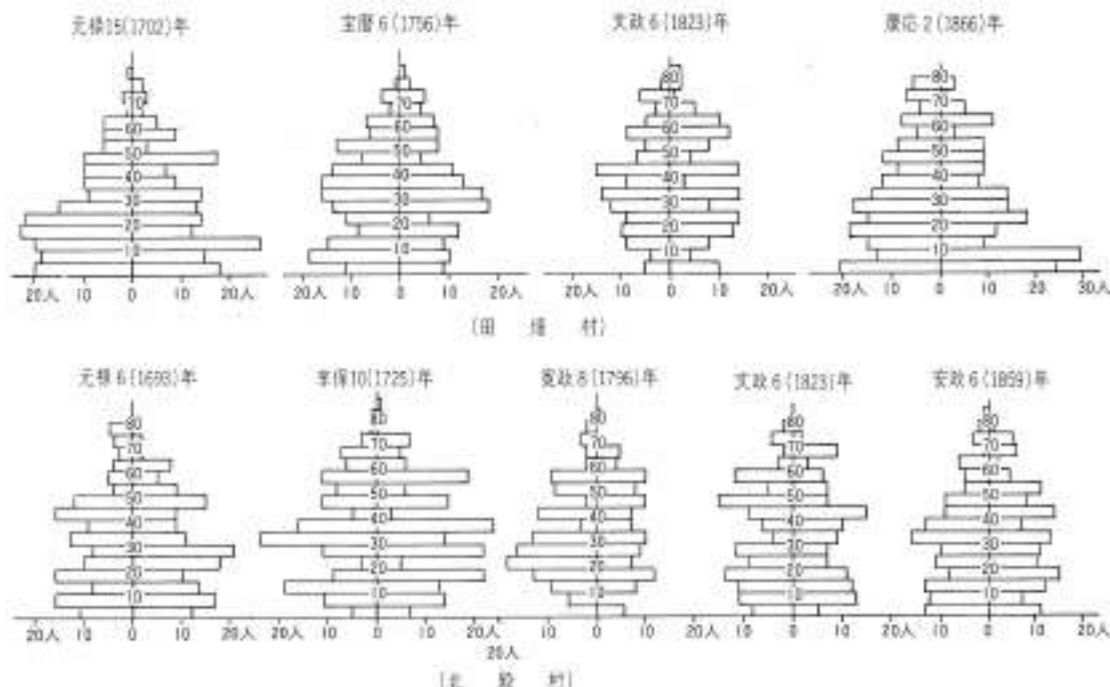


図3-14 江戸時代における北殿村、南殿村の年齢別人口構成（各年度宗門帳より作成）

貞享、元禄の時代は下人数が非常に多く、元禄五年の南殿村の下人数は九八人で、これは南殿村の総人口二八八人の三分の一強になっている。しかし、このうち譜代の下人がかなり存在（判明した部分のみ表中に記入した）し、これは永くその村の住人となるのであって、必ずしも生産年齢の者だけではなく老人や幼児も含まれているので、一般の住人と同様に考えてよい。したがって、人口の増減に直接影響を与えるのは年季奉公人として抱えられているものであり、しかもその中で他村からの年季奉公人である。だが、これは村から他村へ年季奉公に出て行くものがあることを考えると、それほど大きな影響を与えているとは考えられず、多少、生産年齢人口を増加させている程度と考

表3-14 江戸時代各村奉公人数

北 殿 村	
慶安 2 (1649)	13人
元禄 6 (1693)	65
享保 10 (1725)	34 (内譜代25)
元文 4 (1739)	51 (内譜代21)
明和 6 (1769)	17
寛政 8 (1766)	9
南 殿 村	
寛政 12 (1672)	16人
天和 2 (1682)	53
貞享 4 (1687)	62
元禄 5 (1692)	98
宝暦 9 (1759)	14 (全員譜代)
文化 3 (1806)	2
田 畑 村	
元禄 13 (1700)	82人 (内譜代24)
" 15 (1702)	91 (内譜代35)
寛延 2 (1749)	65
宝暦 6 (1756)	25 (内譜代20)
文政 7 (1824)	3

けて人口が急速に増加する方向を示している。
イ 抱え込み奉公人数
宗門帳に記載された家族人数、村人口には、その家で抱えている年季奉公人及び譜代の下男下女等がそれに加えられている。（幕末になると「外に」として年季奉公の下男下女は家族人数に算入していない）これらの人たちが村の人口の推移に影響を及ぼすので、どの程度奉公人や譜代の下人が抱えられていたかを示すと表3-14のようである。

ウ 奉公、江戸稼ぎ等の他出者

江戸時代において、奉公（下男・下女）や江戸稼ぎ、稼稼ぎ等で村外に出ていた者も村によってはかなりある。

北蔵村では享保（一七一六～一七三六）から明和（一七六四～一七七二）のころまでは常時三〇人余が江戸稼ぎ、他村奉公等に出ており、田畑村でもそのころ一〇人前後が他出している。

これらの人数は宗門帳の人数からは「外に」としてはざされてはいるが、寛政のころ（一七八九～一八〇一）からは宗門改帳の名前の肩書又は末尾に奉公又は出稼ぎに出ていることを記してあり、他出者も家族及び村人口に加えられている。

このことから、江戸稼ぎや他村奉公等の人数は明和以前では村の人口を多少減少させているが、寛政のころからは人口の減少の原因とは無関係である。

以上のことを総合して、南箕輪の人口の推移は、元禄を中心とした時期に下人数が増加したことが、生産年齢を中心とした階層の多少の人口増をもたらした、元禄から明和にかけての時期に他出者の増加による人口減が若干考えられるが、これらの要因による変化だけでは充分に説明できない大きな変動、特に江戸中期の人口の減少があったと考えられるのである。

この原因について適確な判断は資料が少なく困難であるが、江戸時代中期は災害の多い時代であり、本村のように川沿いの村は毎年のように起こる洪水の被害に困窮の度を強めたであろうことが一つの原因と考えられ、さらに貢租や木曾助郷等の重い負担と諸種の封建的諸制約が農民の生活力の発展を阻害するばかりか、それをしていかに窮乏に陥ったのではないかと考えられる。全国的な凶作となった享保の大飢饉や天保の大飢饉の発生は、そのような社会的条件の結果であっ

て、そのような社会的条件が農村人口を減少に追い込んだものと考えられる。

二 検地と年貢

（一）検地

1 土地調査の歴史

古代社会以来農業生産が経済の基盤であったから、その土台になる土地は極めて重要であって、古くからその調査が行なわれている。

古代律令制社会においては、公地公民制の基盤として土地調査が行なわれて田籍、田図が作られ、また戸籍計帳が作られ租、庸、調が課されていたのである。

荘園制社会においては、検田使による土地の検注が行なわれて検注帳が作られ、これが租税徴収の基礎となった。

室町時代になると、土地量の表示が買文で表わされることが一般化した。詳細な検地の時代であって、それぞれの領内において領主の基準による土地調査が行なわれていた。

近世になってからは、農民の直接支配の制度、年貢徴収の基礎を確立するため検地と称する土地調査が行なわれている。検地は、土地を一筆ごとに地字・地目・面積・品等・石盛（玄米としての予定収量）、その土地の名請人等を定めて、これを帳簿に記載した。この帳簿を検地帳（水帳ともいう）という。

検地帳は二部作成され、一部は領主側で持ち、一部は村役人に渡され、以後の貢租や諸負担の基礎となり、村方における基本的帳簿として大切に保管された。

この検地によって、土地に対する中世以来の公家・武士・社寺等による複雑な権利関係は解消され、近世的領主による農民と土地の直接

支配の体制が確立され、年貢徴収の基礎が作られた。さらに、この検地は村切りに行なわれ村の区域、境界がはっきりすることになり、村高が示されそれに対する年貢も村の責任において納入することになり、近世における「村」が確立することになったのである。

2 天正の検地（太閤検地）

近世的検地の最初のもものは、天正の末から行なわれた太閤検地といわれる検地である。秀吉は天正一八年（一五九〇）全国平定と共に、全国に検地を命じた。

伊那にあっては、飯田領主毛利秀頼によって天正一八年から文禄三年（一五九四）にかけて行なわれたようで、六八三寸を一間とし、一間四方を一步、三〇歩を一畝、一〇畝を一反として土地の面積を測量表示した。しかし、一筆ごとの検地は多くの労力と費用を要する大事業であって容易に進まなかったようで、毛利秀頼から箕輪衆へあてた次のような検地の進捗を促す書状が残っている。

（前略）

検地の様体如何様哉、いかにも念を入れ其の上にて速断無く遅分急がる可くの事専用候。其三元の林具申し誦さるべく候。其の為此の如くに候。

謹言

（文禄一八年）
九月十七日

神戶藤一どのへ

野々村吉左衛門どのへ

秀頼親王

（信濃史料）

一筆ごとに土地を測量記載したこの時期（太閤検地）の検地帳は本村では見つからない。ただ、伊那郡全体の村々について、その村の石高と品等を記載したもの、普通「青表紙」といわれている高目録の写しが残されているだけである。いま、それによって箕輪領のうち南箕輪地域の村々の品等と石高を示すと次のようになっている。

箕輪領村々（南箕輪地域のみ）品等及び石高

品等	石 高	村 名
中	三百七拾五石五斗式升六合	久保村
中	七百四石九斗八升五合零勺	殿村
下	六百八拾四石四斗九升四合零勺	田畑村
上	六百七拾石五斗五升六合	御子柴村
下	四百七拾石七斗六升九合	沢尻村
下	四百九拾石四斗七升三合	大泉村

（以下略）

これによって見ると、南箕輪地域内六か村の石高の合計は一八七五石余であり、村の品等は神子柴村のみが上免の村であって、久保村・殿村（北殿と南殿）は中免、田畑村・大泉村・沢尻村が下免になっている。この品等の差は基本的には土地生産力の差によったものと思われるが、その後の年貢割り付け状などをみると、この品等の差が江戸時代中期ごろまで影響を与えている。

この品等の差がどうして生まれたか確かなる判断は困難であるが、比較的安定した中段地区に多くの水田を持っていた神子柴が上免に、久保村は水害は少ないが水田の大部分が深田といわれる強湿田が多く、殿村と共に中免となり、田畑村は中段の安定した水田が少なく、水田の大部分を占める川原はたえず水害を受ける下田が大部分であったと考えられ、畑作村としての大泉村、沢尻村と共に下免になったものと考えられる。

3 江戸時代の検地

(1) 慶長の検地

江戸時代に入って最初の検地は慶長の検地であるといわれている。慶長は慶長六年（一六〇二）三月、関東諸国に続いて他の諸国に対し

て検地を命じている。信州ではこの年に石高改めがあり、また、御国
 総図が作られたと「伊那郡村記」に記されている。また、

「信濃国伊那郡御検地帳写」

「信州伊那郡御検地帳慶長六年四月二日青表紙絵図御改成巧」

と記された文書が残されており、以下伊那郡各村々の石高と品等が記
 されている。これによると、慶長六年検地が行なわれ御国絵図が作
 られたように考えられるが、この写しは、宝暦年間（一七五一―一七三）
 に写されたものであり、具体的に記されている各村の石高と品等は、
 太閤検地による石高品等と全く同一であり、さらに、一筆ごとに面積・
 品等・名請人等を記した検地帳が一冊も当村からは発見されていない
 ことなどを考えると、実際に一筆ごとの検地が行なわれたかどうか極
 めて疑がわしい。太閤検地による石高を基にして御国絵図が作成され
 たと考えるのが良いように思われる。

しかし、慶長一三年（一六〇六）には、一筆ごとの検地が一部に行
 なわれたことは確かであって、次のような検地帳が残っている。

殿村検地帳

△田方の帳

丁田

上巻反歩

壹石五斗

三日町
甚悉

同所

上巻反式畝廿四歩

太郎右衛門

そが田

中巻反六畝廿四歩

勘兵衛分
与左衛門

（中三六八筆略）

一上田合五町四反四畝廿六歩

分米 八拾壹石

一中田合拾町四反壹畝拾九歩

分米 百四拾五石八斗貳升八合六勺

一下田合拾町壹反拾七歩

分米 百三拾壹石三斗七升三合六勺

田方合 貳拾五町九反七畝貳歩

右之米 三百五拾八石九斗三升貳合

（計慶長一三年）
慶申ノ極月廿日 殿村

△畑方の帳 殿村

さわの志り

下三畝九歩

三斗三升

同所

下二畝廿四歩

貳斗八升

同所

下廿四歩

八升

（中二九八筆略）

慶申ノ極月廿日

あさ畑合六反三畝廿六歩

分米 九石五斗八升

上畑合五町七反四歩

分米 七拾四石貳斗四合

中畑合四町三反貳畝貳拾八歩

分米 五拾壹石九斗五升貳合

下畑合四町五反貳畝貳歩

分米 四拾五石貳斗六合六勺

都合 拾五町壹反九畝廿歩

米 百八拾壹石五斗貳升七合

△原畑の分

むかい原

三斗二升

原三畝六歩

彦右衛門

さと宮の上

八斗

原八畝歩

七郎左衛門分
五右衛門

（中二二筆略）

原畑合 拾町貳反貳畝拾四歩

米合百貳石貳斗四升六合也

（計慶長一三年）
慶申ノ極月廿日

岩三郎左衛門
宮田又左衛門

（信濃史料）二二卷 千利屋文書

このように、検地帳は田方の帳、畑方の帳、原畑の分の三部になつており、田の品等は上中下の三等級に、畑は、あき畑、上畑・中畑・下畑・原畑の五等級に分けられ、一筆ごとに所在地の字名・品名・面積を記載し、その下に石高、名請人氏名が記入されている。名請人氏名欄には与左衛門というような「分付け記載」がかなりあり、また、他村の名請人には住所が右肩に記してある。

これは、南箕輪地域内における本格的な検地帳の最も古いものであるが、この検地帳の総石高は六四二石七斗五合であつて、慶長六年の検地帳（実際は太閤検地）の石高より六二石余減少していることはいかなる理由によるのであろうか。慶長一三年の検地帳はこの殿村の検地帳が残っているだけで、外の村のものは発見されておらず検地が行なわれたかどうかともわからない。

(2) 正保・慶安・承応の検地

脇坂氏支配の時代、箕輪領は寛永一二年（一六三五）〜寛文一〇年（一六七〇）のころ、村ごとに基本的な検地が行なわれている。南箕輪地域内の各村々は正保三年（一六四六）に久保、慶安二年（一六四九）に北殿村・南殿村・田畑村・神子柴村の四か村、承応二年（一六五三）に大泉村が一斉の検地を受けている。この検地が本村全域に資料が残っている本格的な検地の最初のものであり、これによって近世の村の基礎が確立されたといふように思われる。

慶安二年の検地帳の写である「伊那田畑村田帳」（同屋文書・北垣外文書）の一部を掲げてその記載形式を見よう。

清水田 志反五畝
一上田 志反五畝
足が久保 志反五畝拾五歩
一上田 志反五畝拾五歩
ひとつ田 廿八歩

松四郎
森右衛門
嘉兵衛
彦兵衛

ひとつ田 志反五畝拾五歩
一上田 志反五畝拾五歩
一上田 志反五畝拾五歩
このように、地字・品等・面積及び名請人が記載されており、名請人欄には「彦兵衛」というような分付け形式の記載がかなり見られる。ここには石盛分米の記載はないが同帳の末尾に次のようにある。

上田ノ 五町五反式畝五分 志石五斗代
分米 八拾貳石八斗貳升五合
中田ノ 貳町九反八畝歩 志石四斗代
分米 四拾壹石七斗貳升
下田ノ 貳町九反貳畝拾八歩 志石三斗代
分米 三拾八石三斗八合
右合 拾壹町四反貳畝貳三歩
分米合百六拾貳石五斗八升三合
慶安二年十月十三日

弾保 助進郎
小川右衛門
木下七兵衛
唐沢川三郎

上田の石盛（反当公定取模意）志石五斗、中田志石四斗、下田志石三斗として、それぞれの分米（面積に石盛を乗じた予定取模意）が記してある。神子柴村の検地帳には石盛は記してないが分米は品等ごとに記している。

上田 石盛志石三斗代 中畑 石盛志石貳斗代
下畑 志石代 麻畑 志石五斗代

原畑石盛 宅石代 屋敷 〃 卷石三斗代

慶安二年には幕府により検地条目が制定されており、私領にあってもおよそその検地条目に従って検地が行われたものと考えられ、太閤検地と異なり六尺一分を一間として、一間四方を一步、三〇歩を一畝とする面積算出が行なわれている。

(3) 寛文以後の検地

寛文(一六六〇～一七二二)以後は新田の検地が主なもので、各村とも数回行なわれている。その検地年度、検地内容、検地役人等を列挙すると次のようである。

年号 (西暦)	検地内容	検地役人
寛文六(一六六六)新田検地	久保・北殿・南殿 島飼理右衛門 藤沢右衛門 田畑・神子柴 唐沢門三郎 小池三太夫	
寛文二一(一六七二)同右	北殿・神子柴 竹内喜左衛門 津戸善右衛門 井沢新右衛門	
延宝六(一六七八)同右	久保村の内沢尻 飯塚与右衛門 柴田右衛門 植村与左衛門	
貞享四(一六八七)同右	久保・北殿・南殿 小林介太夫 本田銀左衛門 田畑・神子柴 海野太左衛門	
元禄一(一六九八)林草場 一三(一六九八)改め	久保・北殿・南殿 小林介太夫 本田銀左衛門 田畑・神子柴 海野太右衛門	
享保二一(一七二〇)新田検地	北殿・田畑 落合利右衛門 岡島政右衛門 大泉 平野半平 逸見小野右衛門	
延享三(一七四〇)同右	北殿・南殿・田畑 岡島政右衛門 神子柴・大泉 神田茂兵衛	
延享四(一七四七)同右	北殿・田畑 押田茂平衛 坂入茂右衛門	
宝暦九(一七五九)同右	大泉 坂田半右衛門 金子四郎八	

明和 三(一七六六)同右

北殿・田畑・大泉 及川東蔵 古森甚七

神子柴

安永 九(一七八〇)新田 見取場 検地北殿・田畑・大泉 小笠原源四郎 笹川建四郎

神子柴

寛政 五(一七九三)新田検地 塩ノ井・田畑

天保 五(一八三四)見取場検地 塩ノ井

天保 一四(一八四三)新田検地 田畑・神子柴

大泉 長谷川是非之助
辻 小早太

これらの検地の内容についてみると、寛文以後主として切添え・新開・見取場等の高入れのための検地であるが、元禄一・二・三には百姓持ちの林・草場の一斉改めが行われている。また、右には記していないが宝暦八年には入会山野に対する改めが行なわれ山野の年貢を納めるようになった。また、



図3-15 寛文六年新田検地帳 (門田文書)

時代別に見ると、寛文・貞享のころ(一六六〇～一六八七)は切添え・新開等の新田開墾が盛んに行なわれており、大規模な新田検地が行われている。寛文六年の各村の検地、延宝六年の沢尻の検地、貞享四年の各村の検地がそれであって、特に貞享四年の検地では南箕輪地域内で七三石ほどが検地

面落し申さず」(新農園本録)というように村人の案内によって行なわれた。

古くからの田や畑は勿論、新田検地に当たっては切添え、新開の田畑、時には起き返り地の検地、隠し田の摘発も行ない、これらの土地の一筆ごとの面積を測量し、また、土質・用水の状態・作物の生育状況・過去数年間の平均収量・農民よりの書き上げ等を参考にして、田畑の品等石盛を決定したのである。この面積・品等・名請人を一筆ごとに記載するのである。これが検地帳といわれるもので、この検地帳の作成によって検地は終了する。「検地は百姓進退極まる處に候間、精々入念誦入れ竿入れ強弱これ無き様、正路に経緯十文字の曲尺違わざる様これを改め、依估最負無く致す可き事」(検地秘録)というように、入念正路に行なわれるよう定められているが、実際にはかなり問題が多かったようである。

(2) 面積の測量と記録

検地帳に記載される面積は、実測面積そのままではない。次に掲げるのは延享三年(一七四六)の神子柴村の検地帳の一部である。

信濃国伊那郡神子柴村新田検地帳

一、原畑	壹畝三歩	長拾壹間	八右衛門
一、原畑	高六升六合	横三間	
一、原畑	壹畝三歩	長拾壹間	忠藏
一、原畑	高六升六合	横三間	
一、原畑	拾貳歩	長五間三尺	与市
一、原畑	高貳升四合	横貳間	
一、原畑	貳畝貳拾七歩	長拾壹間	利右衛門

高壹斗七升四合 横八間
(中略)

右は信濃国伊那郡神子柴村新田検地仰せ付けられ、依って六尺巻分間竿を以て壹反三百歩の積り相極める者也

延享三丙寅年七月

(大和手文書)

これを見ると、六尺一分の間竿を以て面積を算定しており、その記入は反畝歩の外、長さ及び横幅の間尺をすべて長方形の土地として記入してある。田や畑はいろいろの形のものがあつたであろうが、すべて長方形の土地に置き直して計測し、面積に差が出ないように見込み見捨てを見計らいながら竿を打つ見込み打ちという方法をとっている。

(図3-17)

次に計測に当たっては張った縄のたるみによって、実寸以上の値が

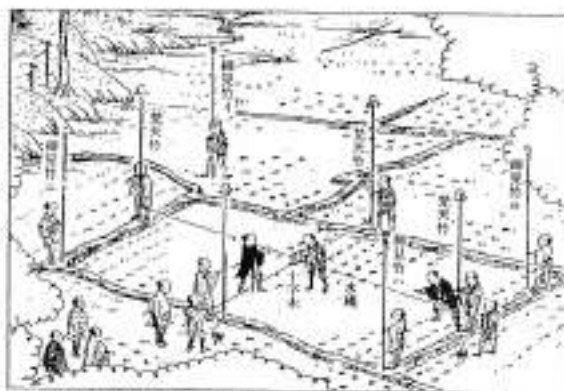


図3-17 測量(見込み打ち)の図

見込み打ち(長方形に測るの図) [池田嘉治郎著]

左側奥の辺がやや短かい台形の田の測量をしている図で、細見竹イ・ロの位置がイは外にロは内側に入ると全体の細見竹の位置が長方形になるよう、しかも面積に差の出ないよう見込み見捨てをしている(見込み打ちという)。細見竹の中間四辺に梵天竹を立てそれに水縄を張り十字で水縄の直交を正して、たての長さを計測して面積を算出する。

であることを防ぐため、総間数から何割かを差し引いている。その割合は検地奉行の裁量に任されていたようであるが、通例は次のようであった。

計測値	引き量	計測値	引き量
五間まで	〇	二一・三〇間	五尺
六・一〇間	五寸	三二・四〇間	九尺
一一・二〇間	二尺	四一・五〇間	一丈二尺

また、調心（余歩）と称して、実間数のうちからいくらか控除する。その割合も検地奉行の裁量に任されていたが、長九、横八といつて長い方の間は一割引、横間は二割引くのが通例であった。その外に畔際引き・藤引き・四壁引き（屋敷の四圍に余地を与える控地）等の面積控除が行なわれている。

以上のような控除をした後、その数値を記録するに当たって、一圓未満の部分については原数のままでなく、次に掲げた検地帳のように六寸の倍数になるように端数の切り捨て、切り上げを行なっている。

安永九年
信州伊豆郡北殿村新田検地帳

北山道 四畝拾八歩 長拾壹間四尺二寸 藤五郎

一見付畑 六畝拾八歩 長拾壹間五尺四寸 磯右衛門

一見付畑 三畝貳拾七歩 長拾六間壹尺八寸 弥惣次
横九間 横三間三尺六寸

（以下略）

（千編屋文書）

(3) 土地の品等と石盛

土地の品等については、「真土・野土・谷土・地高・地低・朝か少・深地・草の生い方心を付け申し付けられ候」（検地秘録）とあり、また、「大通り見分の節其の村の盛衰、地味並びに水の懸け引き、水所旱所、或いは居村より田畑への遠近、野山芝草の多少、惣じてこやしを取る所の様子、其の外未々欠け荒れる可き場所、或いは切添え成るべき所が諸事心をつくべし。秋検地、土を見ることおろかなる故土を握りて考うべし。立毛も年により下田も出来良く、上田も悪しき事あり、春検地は土を能々吟味して期り株の様子を考うべし」（初農園本録）等と、品等決定に際して考慮すべき点が細かく示されている。また、「検地前は絵図並びに田畑の位付け百姓よりこれを取り境目等見分を遂げ、向き寄りを考え竿を打ち、百姓位付けの帳に引き合わせ、若し相違あらばこれを改め直し、勿論百姓神文いたさせし」というように、百姓に神に誓わせて申告する位付けを参考にするようにも述べている。

このようにして田畑の位付けを決定するが、この田畑の等級は上中下の三段階、あるいは下々を加えて四段階とするのが一般的であった。

当村内の検地帳にみる田畑の等級は、初期のころは前記のように田は上中下の三段階、畑は麻畑・屋敷・上・中・下・原畑の五段階に分類している。中後期になるとこれに田畑共下々及び見付田畑の二種を加えるようになっていく。

石盛りについては、村の状況により多少の差があることは認められているが、江戸幕府の石盛の基準と、当地域の石盛とを表示すると次のようである。

本村地域内各村々の石盛について見ると、上田は幕府の基準と同じ

品等	幕府の基準	当地の石盛
上田	一五	一五
中田	一三	一四
下田	一一	一二
麻敷	一一	一一
屋敷	一一	一一
上畑	九	一二
中畑	七	一一
下畑	七	一一
見付畑	七	一一

であるが、他は田、畑共に幕府の基準より高い石盛になっている。段階差は二つ下がりというものが標準であるが、当地の段階差はだいたい一つである。(大果、塩ノ井のみ)

畑の石盛が二で下畑畑は二つ下がりの九である。畑の当地の石盛は幕府の基準より二・三高くなっており、見付畑さえ高い所は幕府の下畑の石盛になっており、畑作比率の高かった当地の石盛は割高になっており、農民の負担は困難であつたのではなからうか。

5 検地と農民の対応

検地が厳しく行なわれるか、緩みがあるかは農民にとって重大な関心事であつた。実際検地に当たっては前記のように検地奉行の裁量に任される部分が相当あり、奉行のさじ加減によって農民の死活が左右される面があつたようである。そこで、農民は検地役人に品物を贈り、あるいは厚く接待をすることによって検地役人の機嫌をとり、農民側には有利になるように余歩を多くし、品等を下げ、時には隠し田の摘発を免れようと心を砕いたのである。また、検地役人も私利私欲によって検地にさじ加減を加えたことがあつたのであろう。検地条目に検地役人の心得が多く盛り込まれていることは、この辺の事情を考えさせる。幕府は検地役人の選定に当たって、「惣奉行は正路成る地方心得の

有る人吉、純奉行は地方功者として魂気強く算勘ある人吉」(勅農園本巻)とし、案内の者については、「案内の者の儀庄屋組頭はもちろん、百姓の内地所の様子能く存じ正路なる者を選び」と(御検地村触「果史資料」として、検地役人案内人とも農村内部の事情をよく知っている者、あるいは土地の事情に詳しい者、正直で正義感の強い人を選ぶように指示し、検地が正しく行なわれるように努めている。しかし、実際には検地が幕府の希望通りには行なわれていない。

検地に対する農民の対応の一部を示し、幕府領における当時の検地の実態を伺い知る資料の二例を見よう。

安永九年(一七八〇)は、当地方の切り添え、新開の外に見付畑を大規模に高入れをする検地が行なわれたことは既にみたが、この検地のため細かい注意事項を簡条書きにした「御検地村触」が、安永七年に検地奉行から出され、飯島御役所を通じて各村に通告され、各村はそれぞれ請印帳を出している。それによると、各村々に対し新たに検地を受くべき切り添え、新開等を書き上げて差し出すよう命ぜられ、各村はその書上帳を差し出していることが理解される。ところが、その差し出した書上帳の中には、村中の切り添え新開等がすべて報告されたものではなく、かなりの部分が隠し田として残されていたことが次の資料からわかる。

村中申し定めめの事

此度御検地役人小笠原助四郎様御越し遊ばされ、御改め成され候に付き、原畑、切添え、新開差し出し候名前請が地主に相成り候ても、新高の分、村中大小百姓会、亦持ちへ割合い申すべく候。末々に罷り成り検地請けの名御座候にも其の者へ新高掛け申す間敷く候、右紙面の通り少しも相違申す間敷く候。後日の為相定めの一札のつて件の如し

安永八年亥六月

幸八郎

其兵衛印

清五郎印

(以下六八名署名捺印略)

伊那郡田畑村名主 伝四郎印

組頭 庄内印

伊左衛門印

百姓代 勘太夫印

〃 勘右衛門印

(田畑中屋文書)

これは新田検地を受けるに際して、前以て村中の申し定めをしてい
るのであって、内容は差し出した切り添え、新開の検地を受け、その
名請人が誰であつても、その名請人だけで新高の貢租を負担するの
でなく、余歩を持つ百姓全員に割り当てて負担をする。それは末々まで
間違ひなく実行していくという申し定めである。これによって切り添
え、新開全部が検地を受けたのではなく、多くの余歩があることを示
している。また、次の資料を見よう。

申し定め一札の事

去る亥年御検地請けの儀、村中相談の上平均に致し候申し定めにて、御
地請け奉り候処、今般御検地帳相渡り、即ち当年より御年貢夫銭仰せ付け
られ候につき又々村中相談の上申し定め候趣、小前持分限り歩にて差反
歩に四畝の余歩を加え引き、且つ新検受け候畑の親歩は差反歩に五畝歩の
余歩加え引き候て、其の余の余歩へ新検御検地帳平均に割合い申す
可き旨一同得心の上、新高取り付け相定め申す所相違ひなく候。然る上
はこの儀につき已来毛頭違ひが聞え候申す間敷く候。因つて後証の為速
印致し置候所件如し。

安永九年十月

孫五郎左衛門印
伊左衛門印

これは、その余歩の大きさがかなり具体化している資料であつて、
各々の小前百姓持分面積一反当たり四畝歩の余歩を引き去り残りの余
歩へ、新検地を受けた切り
添え新開等の土地について
はその親歩一反につき五畝
歩の余歩を差し引いた余歩
へ、新検を受けた年貢を平
均に割り当てて負担しよう
という申し定めである。こ
れから考えると、検地帳上
の田や畑と実際耕作してい
る面積とはかなりの差があ
り、実際の面積は検地帳の
面積の四〇～五〇%以上の
余歩(隠し田)があつた
ことになる。

宇右衛門印

(外九十七名署名捺印略)

(中野文書)



図3-18 検地につき「申定一札之事」(中野文書)

が、村内の農民自身はお互いに誰がどの程度隠し田を持っているかを
知っているのであつて、そのどの部分を差し出し検地を受けるかを、
事前の年貢負担の申し定めによつて了承したものと考えられる。特定
の土地だけ検地を受けて、その貢租を名請人だけで負担するのは村

これらの帳簿はもちろん
表向きには公表できない裏
文書であると考えられる

内が治まらないのが当然であつて、隠し田を保有しようとする必然の処置としての、村中申し定めであつたと考えられる。

年貢の免状は、新田換地を受けた部分の貢租は後々まで、従来からの部分と分けて記載してくるので、村ではこの新換地部分の貢租を、余歩持ち全体で公平に負担するよう内密の割り付けをしている資料がある。

田方内改め余步御檢地増米割賦帳

子十月より上納

我の能清水一下ノ下田 武反六畝廿歩 勘太夫

同所	一下ノ下田	武反四畝武歩	同人
----	-------	--------	----

中略

神川原 一下ノ下田 廿七歩 一人

七厘五絖拾九步 小等原氏割賦米 式斗三升式合四勺

中略

笹ノ前清水一下ノ下田 惣段五畝拾五歩 伝四郎

小笠原氏割賦米 四升六合五勺

申賂

三町五反八畝四歩

此の坪 壹万七百四拾四坪

田方増米 壹石壹斗貳合 此の余歩へ割合

余歩十坪に付き 米壹合貳才六也

この村では全体の田方の余歩が三町五反八畝四歩あり、安永九年の検地によって田方の年貢増米が一石一斗二合となり、この増米を三町五反八畝四歩に割り当てをし、余歩一〇歩に付き米一合二才六の割合で年貢の負担をしているのである。これは、一反につき三升七合八才の負担で通常の年貢の一五・二〇分の一の負担で済んだわけである。

以上のようなことは、他の村でも多かれ少なかれ存在したものと想像され、検地に対応する農民の姿の一端を知ることができるようになる。

(二) 貢 租 (農民の負担)

1 農民負担の種類

農民が江戸時代にどんな負担をしてきたか、まず、領主から渡される年貢の格目録(寛)を掲げよう。

■

一萬六千四百八十八石五斗四合

此の取り米 百八拾壹石九斗貳合

内六升六合 見取り米

此の水 百三拾三貫百七拾五文七分

但し 金港四に付き毫石三斗六升五合八勺八圭

外

一、米 壹斗三升六合八勺

代水 百文港分 但し右同値段

貳百九拾八文

一木 八拾三文 子より寅迄三か年賦 魚卵連上

一永百貳拾五文
御藏前入用

一米九升六合 六尺給米

此の永七會四文惣分 且し 金壹兩に付き

100

一、三斗八升九合

與伍馬在戶

銭の永三百文

一米五石四斗五升七合

此の永四貫六百七拾五文五分 但し 金壹兩に付き 老石壹斤六斗七合割可四寸

一、四合

此の水三文四分

但し 右同義説

一木 八文九分

小物成、口永

一木 百拾六文六分

包歩銀

納合水 百三拾八貫九百五拾五文八分

外

一金 貳兩三分水六拾八文九分

御普請、國役、金、包歩銀、共

右は去る丑御年買其の外納め方書面の通り上納皆済仕り候所仍って件の如し

延享三寅年三月

信州伊豆郡田畑村

名主 功九郎

祖 頭 森 市

百姓代 庄左衛門

大草太郎左衛門様

(同原文書)

(裏書略)

この資料は延享二年(一七四五)の皆済目録であるが傍点で示した一〇種類の農民負担の項目があがっている。

(1) 本年貢

これは、田や畑に対する正租であって、右の皆済目録では取り米として「百八拾五石九斗式合」としてある。本産物成、取箇、成箇等ともいわれ封建社会における領主の収入の大部分を占めており、農民負担の中心部分となっている。これは、検地請けをした田や畑の石高(分番)に對し租率を乗じて算定し、検地帳の名請人の名義で領主に納入されるものである。

(2) 雑税

雑税には、小物成、高掛り物及び口永、口永等がある。

ア 小物成

山手・野手 これは百姓持林、同草場、入会山野等に譲せられた年貢である。元禄十一年(一六九八)の林、草場の検地以来山手、野手として納入するようになり、さらに、入会山野に對しても莫輸領では宝曆七年(一七五七)から山年貢、野年貢の納入を仰せ付けられ、一町歩に一合の割合で年貢高が定められ、入会村々で分担して納入するようになった。

鳥飼代 これは脇坂淡路守の領地であった元和三年(一六一七)、木下村に鷹匠衆が置かれたときに各村ともちの木を差し出すように命じられ、その後、もちの木を切り尽くし無くなってからは代金を納めるようになり、幕府領になってもそれが受け継がれて幕末までずっと続いている。

麻綿売り出し これは、天和二年(一六八二)板倉氏の私領となつたとき米四斗に麻一匁、同じく四斗に綿一〇〇匁の割合で、本年貢の一部を麻、綿で納入したのが始まりであるが、後に幕府領となつてから本年貢外の小物成として貨幣で納入するようになり、前記資料の小物成永二九八文は鳥飼代とこの麻綿売り出しを合わせたものである。そしてこの麻綿売り出しは天保の中ごろまで続いているのである。

樽木代 これは、慶長年間小笠原秀政が莫輸領を領地としたとき莫輸領二八か村に樽木納入を命じたのが当地での始まりで、初めは樽木を納入していたが原木が無くなったので、寛永一八年(一六四二)領主堀坂氏に願ひ出して樽木代米を上納してきた。正保一慶安二年(一六四九)の總検地の結果二三か村は打ち出しとなって、村高が増加したので樽木代米は免除になったが、松島村外四か村は村高が減少したので樽木代米は免除にならなかったという。本村内では、久保村がそれに入り、元禄の中ごろまで樽木代米を納めている。

イ 口米・口永

口米は米納の本年貢、雑税に付加して納めるようになった米であり、口米は金納の小物成米、魚氣運上等に付加して貨幣で納めたものである。その起源は明らかでないがかなり古くから徴収されており、初めは貢租徴収に当たる代官の事務費として代官に下付されたが、享保以降は本年貢と同様に公納させるようになったといわれる。口米、口永の高については、豊臣秀吉は一石に米一升と定め、元和二年（一六一六）には米一俵（三斗五升入り）につき米一升、口米は一〇〇文につき三文とその課税率が定められたが、当地域の年貢目録に記された享保時代以降の口米の量は年貢米一石につき米三升の割合になっている。

ウ 高掛り三役

幕府領にのみ課せられた特殊の税であって御伝馬宿入用・蔵前入用・六尺給米の三種で、もともと夫役であるが遠距離であるため米や貨幣で納入することになり、村石高に対して賦課されるもので高掛り物と総称される。私領においてはこれに類似の税として夫米、夫水等があり、幕府領、太田知行所と再三支配替えのあった南殿村と北殿村の告知・久保村・塩井村では私領のときも御伝馬宿入用分、蔵前入用分、六尺給米分として徴収されている例がある。

御伝馬宿入用 五街道の問屋、本陣の給米及び宿方入用に当てるために、村高一〇〇石につき六升の割合で徴収された。寛永四年（一六二七）ころから徴収されたようであるが、本村内関係では「都築藤十郎様御代官所の節初めて仰せ付けられ候て差し出し来たり候」（中宿文書）とあって、享保六年（一七二二）ころの年貢割り付け状から記載され始めている。

蔵前入用 浅草の幕府の米蔵の費用に当てられたもので、元禄期から村高一〇〇石につき、上方では銀一五匁、関東では銀二五〇文ずつ

徴収されたが、本村関係村々は全部正徳のころから木曾三宮の助郷村であって、村石高から助郷高を差し引いた残高に対して課されている。

六尺給米 幕府雑役夫の給米に当てられたもので、村高一〇〇石に対し二斗ずつ徴収されたが、蔵前入用と同様助郷高を差し引いた残高に課税されている。

エ 運上・冥加

運上 商業・工業・漁業・鉱業等の営業者に課する営業税的なもので、魚氣運上・水車運上・小売運上等がこれである。当地では魚氣運上が古く元文（一七三六）四一のころから皆済目録に見えるようになり、その他の運上は江戸時代末期に急速にその種類が増加してきている。

冥加 商業・工業などのうち特に独占的な免許を与えたり、または、特殊の保護ないし利益を与えられた営業者が支払う免許手数料的なもの、あるいは冥加にあずかった謝礼的、献金的性質のものであるが、時代が進むにつれて次第に租税的性格を持つようになっていく。

オ その他の雑税

国役金 川除け、河川改修等の普請の費用の負担であって、享保五年（一七二〇）に国役金賦課の規則が定められ、普請費用が一定額以上になると一〇分の一を幕府が負担し、残りを関係の村々の石高に応じて賦課した。金額がかなりかさむので数年間の年賦で徴収されている。宝暦四年には大井川筋の御普請について国役金負担の次のような資料がある。

大井川筋御普請国役負担額

去る丑年より去る戌の年迄大井川通り御普請に付き、右入用銀河・遠江・三河・信濃・甲斐形内領・伊勢・伊豆・相模國御領私領寺社領へ国役銀り

横割合高石に付き金壹分、銀拾五三分ずつ相納む可き旨此の度御書付け
出候間其の意を得奉る可く候

(中略)

右高役金御納合納め高銘々村名の上に相記し候間写し取り、五月朔日より
三日迄の内御役所へ相納む可く候此の御状村々下に御印せしめ御付けを
以て相納し、留り村より相返す可く候

亥四月六日

飯島御役所

御書付

高石に付き金壹分銀拾五三分

但し、金壹兩に付き兩かえ五十九匁五分

一金壹兩三分錢九百八十七文 但し包歩銀共 神子榮村

一金貳兩三分錢五十八文 田畑村

一金貳兩三分錢五十八文 南殿村

一金貳兩三分錢五十八文 北殿村

一金貳兩三分錢五十八文 大泉村

(以下略)

(中略文書)

包歩銀 幕府領の村々で年貢が代金納の場合、密目録の末尾の方
に包歩銀というものが記載されている。これは代官所より幕府へ送る
金を包む費用として徴収されたようで、金一〇〇兩につき銀五匁の割
で納入している。

(3) 夫役

夫役は労役を課されることであって、その主なるものは助郷役・伝
馬役・川除け普請等における百姓役等であった。

ア 助郷役

伊那の村々は権兵衛街道の開さくによって、正徳二年(一七二二)
から木曾街道(中山道)の大助郷村になった。箕輪領の村々は木曾の

飯島・上松・須原三宿の大助郷村として助郷高が定められ、それに基
づいて大通行の際には割り当てられた助郷人足を出さねばならなかつ
た。人足に対して一定の賃金は支給されたが農民の負担は大きく、夫
役の最大のものがこの助郷役であった。(第三節の三、権兵衛街道と助郷
参照)

イ 伝馬役

本村内は伊那街道(三州街道)が通っていた。脇往還としてしだい
に交通量が増加し、文禄二年(一五九三)宿駅が定められた。本村内
では春日街道が開通した慶長十三年(一六〇八)ごろ大泉宿が設けら
れ、その後、慶安二年(一六四九)に大泉北殿合宿となり、岡村で間
屋二軒、伝馬一二匹の伝馬役を勤めることになり、それが明治まで続
いている。宿駅の主要な任務は人馬の継ぎ立てと公用文書の伝達であ
って、常時人馬を用意しておかなくてはならない。そのため宿駅には
一定面積の地子免等の特権が与えられ、人足には御定め賃金が支給
されるがその賃金は安かった。時には常備の人馬では不足し近隣の村
々から助役を頼むこともあった。賃金の増額改訂は宿駅の要求によつ
てしばしば行なわれているが、宿駅住民や近隣農民の負担は小さくな
かった。

ウ 川除け普請等の村役負担

川除け、用水路等少しばかりの普請は自普請ということで、村人た
ちの力だけで行なった。自普請で手に負えない所は幕府や領主が費用
を出して行なったが、このような場合に古くから村で負担する人足
(村役人足あるいは百姓役といふ)を差し出すよう義務づけられていた。
正徳年中村役人足の量は高一〇〇石につき一〇〇人と定められていた
が、享保一十七年(一七三三)に規則が改められ、高一〇〇石につき村役
人足は五〇人扶持方人足五〇人と二段階にした。(在々御普請定法書)

扶持方人足には一人一日七合五勺の扶持米が支給され、正徳時代よりは改善されたが、当時の貧人足が一人一日米一升七合であったことを考えると扶持方人足でも村負担はかなり大きかったといえよう。さらに、川欠け普請等には杭・粗朶・藤蓐等の現物資材の村負担が多く、これらは入会山で採取されるにしても結局は農民の大きな労務負担となった。

(4) 村入用夫銭



図3-19 久保村入用夫銭並びに木曾役夫銭帳
(左側はその末尾の部分) (久保大東文書)

各村には、村を運営するための独自の費用が必要である。例えば、村の祭礼の費用、村自普請の費用、猪鹿害共同防除費、村方事務費、村役人の手当等、年によっては入会地の出入りや他村との境出入り等の訴訟費用など、年間かなり多くの費用が必要である。これらの費用は村夫銭として村内住民から石高あるいは米高等に応じて徴収されている。

2 貢租の割り付け

(1) 村高と課税高

検地によって定められた村高は、その村の生産規模を示すものであると同時に、課税の基礎を示すものである。これは、新田を開拓して検地を受けると村高に加えられるので、しだいに増加し途中で減少することはないが、年々の貢租を賦課する場合にはこの村高からいろいろの引き高が差し引かれる。引き高は、洪水等によって川欠けや石砂入りになって耕作できない分の石高が主で、これを差し引いた残りが実際に耕作されている石高で、これを毛付き高(または有高)という。課税の場合はさらにこれから御蔵敷分、伝馬屋敷分、時には不作引き等が差し引かれ、残高に課税される。

(2) 租 率

石高に対する年貢米の比率、すなわち租率を「免」という。免は此の取り五ツ三分とか、二ツ五分というように記載されている。免一ツとは石高一石に対し年貢が一斗であることで、免五ツ三分とは石高一石の土地で五斗三升の本年貢を納めることを意味している。総石高に対する年貢高の比率を「高免」といい、毛付き高に対する年貢高の比率を「毛付き免」と呼んでいるが、年貢割り付けの場合は村の総石高や総毛付き高に租率を乗じて年貢高を算出する場合は少なく、田の上・中・下、畑の上・中・下・原畑・屋敷・麻畑といった耕地の品等別に租率を定めて年貢(取米)高を算定している。左に元禄九年(一六九六)久保村の免状の一部を掲げてみよう。

信州伊那郡久保村尻村年貢相定め事

一 高八百式石八斗六升式合

内 高貳百八拾壹石壹斗壹升六合

内 高五百式拾壹石七斗四升六合

内

上畑 貳斗六升

高辻

田方

畑方

蔵屋敷引き

原畑	式石式斗七合	永砂入り引き
上田	六斗五升五合	当不作引き
中田	老石三斗六升七合	同断
下田	老石五斗三升四合	同断
小田	式石式斗八升七合 三石五斗五升六合	前々永引き 当引き
上田	百拾五石五斗八升五合	但し五ツ八分
中田	此の取米六拾七石式升五合	但し五ツ五分
下田	此の取米六拾七石式升四合	但し五ツ一分
上田	此の取米五拾五石五斗四合	但し二ツ八分
中田	此の取米五拾五石五斗四合	但し二ツ四分
下田	此の取米九石五斗式升四合	但し二ツ取り
原畑	此の取米式拾八石五斗四升七合	但し七ツ取り
原畑	式拾七石五斗九升九合	但し三ツ二分
下田	此の取米八石八斗三升式合	但し四ツ六分
原畑	此の取米六斗八升五合	但し七分

(中略)

納合 米貳百五拾老石八合

銭四百五拾三文

右当納め方に候間惣百姓立ち合い割り付けせしめ、極月十五日限り急度皆
済可き者也

元禄九年丙子年十一月廿八日

頼母等

庄屋百姓衆中

(久保大東文書)

田や畑で同じ品等でも古くからの田畑に比し新田は租率が低くなつており、古くからの土地でも川欠け、石砂入り等からの起き返り土地は取下げ免として租率を下げていた。元禄一二年(一六九)から、幕府領では古くからの土地については田の上中下をまとめて一律の租率とし、畑も上中下をまとめて一種の租率を定めるという簡便法をとっている。

(3) 検見免と定免

租率の決定に検見免と定免の二つがある。検見免とは年々の作柄を検見して決定される免であつて、年ごとに租率を定めるので年免とも言われる。定免は過去何年かの取獲高と免を基にして、三年、五年、あるいは一〇年間という年季を定めて租率を一定にして課税する方法である。

検見免は作柄に応じて年貢高を定めることができるから合理的で、殊に小百姓にとっては望ましい方法であつたといえる。しかし、領主側にとっては毎年多大の手数と費用を必要とし、時には不正が入り込む余地があり問題点があつた。農民は凶作の場合を考え検見免を望み定免を拒む考えが多いといわれるが、検見免にも、農民側からみて都合な面も多かったようである。次の資料はそれを示している。



図3-20 検見坪刈 その年の収穫量を算定するために、一坪の稲を試し刈りする（徳川幕府幕治要略）

恐れ乍ら書付けを以て御願ひ申し上げ候

私共村方の備太田慶治郎様御上知に相成り去る丑年より御料所に仰せ付けられ、丑寅酉年御検見取りに御せ付けられ御検見請け奉り候処、酉年共殊の外増し米仰せ付けられ、其の上酉年共取り揚げて遅く相成り候に付き、早露下り候土地故等腐り一向遣い葉に相成り申さず、冬春の稼ぎに然し支えに限り成り候は百姓悉く難儀仕り候、御検見取りに御座候ては麦蒔き等も自然と遅く相成り候故、来年度作出来方宜しからず亦百姓不勝手し難り成り候、これに依り当春穀島御役所へ御定免願ひ上げ候処、（中略）何卒御慈悲を以て飯島御役所へ書き上げ候米辻を以て、当現年より御定免仰せ付け下し置かれ候様、大小百姓一同願ひ上げ奉り候。

（中略）

宝曆九年閏年七月

信州伊那郡南殿村 名主 七左衛門

同 組頭 惣 助

同 百姓代 恒右衛門

同 郡北殿村 名主 長次郎

同 組頭 庄兵衛

御代官様

（大森館文書）

これは、検見免により年貢が高くなったことと、検見のため稲の刈り入れが遅くなり葉が使い物にならなくなり冬春の稼ぎが思うようにできないこと、麦の播き付けが遅れて翌春の麦作の収量が減ることなどの理由をあげて、定免にして欲しいと願ひ書を出しているのである。定免は五か年あるいは一〇か年という年季を定めて、その間租率を一定にしておくので領主側にとっては検見の手数と費用が省け、かつ収入の予定が立つから便利であるから、幕府は定免を奨励する方針を示し、幕府領の村々は享保年中（一七一六～一七三六）からほとんど定免になった。農民側にとっては少しの不作では減免してもらえない不利は



図3-21 定免請証文（証文）

(15か年間の定免が決定している)

(玉環村文書)

あるが、反面で努力をして収量を高めればその分だけ多く手元に残ることになり、生産意欲を高めることになったと考えられ前頁の資料のように定免を希望する村々も多かった。

定免決定に当たっては過去数年間の年貢高を基にして、村で上納すべき年貢高を示して定免願が出される。奉行所においてそれを吟味し、その意に叶えば許可になる。許可がおりるとその村から「定免請証文」が御役所へ差し出される。これで定免が決定するわけであるが、この定免請証文の初めのものには、定免年季中の風、水、旱損等の不作の場合について次のような内容が記されている。

○田では三分^五割以下の損亡では減免はないと承知する。三分以上の損亡が確かなときは破免御検見入りを御願いする。

○畑については、一割一割へ響くほどの大損亡で春作秋作共に著無の場合に格別、通例の損亡では減免されないことを承知する。

○洪水等で損地ができて、小前の持高の一割以上が損地にしなければ減免はないことを承知する。

このように、定免の年季内の減免は厳しい条件がつけられているわ

けであるが、大凶作の時には当然小前百姓たちの強い要求をまとめ、村役人から御役所に破免願が提出される。次に、その破免願の例をみよう。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ候

私共村方の儀、当年陽気不順につき、殊に雨天霽らにて出穂も後れ、その上先達て御届け申し上げ候通り実法方通敷御座候に付き、村方一同破免御検見入り願ひ奉り度き旨申し出候得共、情々差し留め置候儀。追々不陽気にて所々皆無場所多く迎も御定免御上納出来兼ね候段。一同嘆き申し出候に付き、相談の上内見分仕り候。冷水掛りの場所は無多分これ有り候間、よんどころなく御定免年季中には御座候得共破免御検見入りの儀願ひ上げ奉り候。再店厚き御利解にて願ひ書附下げに相成り候間、御村仕り年寄共打ち寄り相談仕り成るべく丈相堪えさせたく小前一同へ御利解の趣申し聞かせ一同御伏仕り候得共、別けてこの四三日不時冷気等にて稲景にも寄り候得共出穂のまま一向寒入り申さず、黒穂に相成り候分多く其の余今以て出穂に相成らざる分もこれ有り、不熟青立ち等皆無多く何様に御定免の通り御上納差し支え候間、止むことを得ず又々御検見入りの儀願ひ上げ奉り候。何卒御慈悲を以て破免御検見入り御聞き済まし成し下し置かれ候様幾重にも願ひ上げ奉り候。以上

天保四己年八月

伊那郡南殿村

百姓代 善 八 郎

飯島御役所

組頭 平右衛門 徳

名主 紋三郎 徳

(大森館文書)

これは、天保四年（一八三三）南殿村から代官所に出された破免願であるが、破免願を提出しても簡単に破免御検見入りにはならない。この例も一度破免願を出したが願ひ書が差し戻されており、再度の願ひ書であることがわかる。それでも破免にはならなかったようである。も

し、被免検見入りになっても検見の結果が損毛三割以下ということになれば定免通りの年貢上納となるばかりでなく、「御吟味の上何分の感度にも仰せ付けらる可く候」ということになるのであって、被免ということは大変困難なことであったようである。

定免は年季が明けると検見免になるが、領主側から次の定免が焚められるか、村の希望で再び定免願を出して定免の許可をとるわけであるが、定免の切り替えのたびに年貢の増し米をしなければ許可にならないのが普通であった。すると、定免を繰り返すごとに年貢米が多くなって百姓が困窮するというところで次のような願い書が出されている例がある。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ候御事

当寅年年初りに定免年季明け申し候につき、先達御願ひ度し極められ畏み奉り候。北殿村の儀定免年季替わり候度に増し米仰せ付けられ候得共、御請け廻り在り候処、殊の外米高増し困窮仕り候間、御慈悲に増し米の儀御捨免極められ只今迄の米辻を以て、定免仰せ付け成され下し置かれ候様願ひ上げ奉り候。尤も増し米仕り候ては困窮の百姓に御座候得ば相續け仕り難く存じ奉り候間、御慈悲に幾重にも只今の通りの米辻にて定免仰せ付け下し置かれ候わば有難き仕合わせに存じ奉る可く候。以上。

宝曆八寅年正月 信州伊那郡北殿村

名主 弥兵衛

組頭 三右衛門

惣百姓代 治郎右衛門

五人組頭 又左衛門

(以下一七名略)

(北殿区有文書)

飯島
御役所

3 貢租の徴収

(1) 免状の交付と個人への割り付け

役所ではその年の一〇月か十一月ころ、各村の名主を呼び集めて一

村一通の徴税令書ともいうべきものを渡す。それは、「免相定め之事」、あるいは「御成儀割り付けの事」、「年貢納むべき割り付けの事」などと記されたいわゆる「免状」と言われるものである。名主は帰村して免状を惣百姓に示し、他の村役人と相談して「村中の大小百姓入り作の者まで残らず立ち合ひ高下無く割合し」というように一人一人の納め高を決め、割り帳をつくりそれによって徴収する。

この割り付けの適正を期するためである。次のような掛け札を名主門前に掲げるようにした資料が残っている。

当御成儀成り簡懸け札

一田方 取米七拾貳石六斗六升六合

一畑方 取米八拾六石七斗三升三合

一石代恒段 本論小物成 金老四二付キ老石六斗貳升五合六勺六才

見取り

高掛物 金老四二付キ老石

五斗五升六合六勺

六才

口米 金老四二付キ老石

三斗七升三合四勺

六才

右は当御成儀成り簡並びに
石代恒段書面の通り相極
め桑名主門前に掛け置
き、大小百姓見届け相違
なく割り致すべき者也。

宝曆九卯年十月

市南弥一郎御役所

右村名主組頭惣百姓

(門屋文書)

図3-22 南殿村成り簡掛け札

(2) 現物納と代金納

江戸時代初期においては本年貢、小物成とも現物で納入している。時代が進むにつれて現物納から石代金納へと変わっていくが、その過程で本質は現物納で個々の農民は現物を出す、それを現地において商人払い等の形で金に替える方法、三分の一は現物で納め三分の二は代金で納入するという過渡的形態を経て、幕府領では元禄二年（一六九二）代官池田新兵衛の時から全額代金納になった。（実際には初期に一部現物納が残っている）太田知行所では、半分程度の現物納がおそくまで続いている。

現物納の場合は納所が遠隔地である場合、その付け送りに労力と費用を多く必要とし農民の苦勞の種であった。代金納は、年貢として納入すべき石高と、その石代値段によって示され、農民は貨幣で納入するわけで、必ずしも米の販売代金のみでなく雑穀販売や出稼等の収入金で支払うことも可能で便利であるが、石代値段がいくらに決められるかということ、農産物の換金問題が多かった。高遠藩は他領の穀物の移入を禁止しており、諏訪・松本藩もそのような政策をとったことがあったので、「惣じて穀物等は飯田へ附け送り払い申し候。道法拾壹里程御座候」（享保五年南蔵村明細帳）というように、主として飯田で売りさばいたようである。この場合、商業活動に不利で貧しい農民は不利な販売を強いられただけではないだろうか。

(3) 納入方法

納入時期については、幕府領では免状に「櫻月十日（又は十五日）已前に急度皆済可き者也」と記載されている場合が多いが、実際の納入期限はこれと違っていて代金納の場合、初納・二納・三納というように三・四回に分けて納入し、その最終時期は翌年の三・四月になっている。元禄のころでは翌年七月麦の収穫を持って最後の納入をしたとい



図3-23 慶安4年 年貢算用目録（玉川村文書）

江戸時代ごく初期のもので年貢皆済状と同様のもの

う例もある。太田知行所では一般に早く九・一二月の間に数回に分けて納入している。

このようにして年貢の納入が終了すると、御役所から「年貢皆済目録」が作られ、代官等の署名捺印が行なわれて村役人に渡される。村役人は年貢の領収書として大切に保管した。太田知行所においてもだいたい同様な

方式がとられているが、納入の具体的な姿がわかるので寛保二年（一七四二）の一例を掲げる。

戊御年貢米納方勘定目録

納高七拾貳石五斗九升五合

口米 貳石貳斗七升八合

本口合七拾四石七斗六升九合

此の納め方

初納段 壹石貳斗六升

一、米 八拾四俵貳斗七升八合

此の金廿六圓三分

永百三拾七文四分八厘

此の金貳圓

九月分 壹石貳斗九升

一、米 拾貳俵三斗六升

此の金四圓

十月分 壹石貳斗七升五合

一、米 六俵貳斗五升

此の金貳圓

十一月分 壹石貳斗六升

一、米 六俵貳斗貳升

納合百八拾六俵三斗六升九合

第2節 村の姿

十二月分 同所

一、米 三俵六斗

此の金五兩

一米 七拾三俵貳斗壹合 米納

4 各時代の貢租

(1) 小笠原時代の貢租

小笠原秀政が飯田城主となり、慶長六年(一六〇二)代官二本六右衛門を箕輪田中の城に置いて箕輪領を治めさせた。慶長一七年(一六一二)、代官所を田中城から木下陣屋に移したが、翌一八年小笠原秀政が松本に移るまで約一二年ほど箕輪領は小笠原氏の支配下にあった。このころの貢租については直接の資料はないが、慶長六年(一六〇二)丑年春改めと記された伊奈郡榎地帳の写が残っている。

これには、村石高と村品等が記されており、これに基づいて貢租が徴収されたものと思われるが、詳細は不明である。

(2) 脇坂時代の貢租

元和二年(一六二六)、箕輪領は飯田藩主脇坂安元、元和六年からはその子脇坂中務少輔安政の領知するところとなり、寛文一二年(一六七二)、幕府領となるまで約五六年間、その支配が続いた。

この時代の貢租関係の資料も極めて少ないが、寛文一二年に幕府領となったとき代官天羽七右衛門に差し出した「高辻指し出し並びに御物成」の控が殿村・田畑村の両村分が残っている。この中に「年々定納の覺」として脇坂時代の終わり五か年間の年貢納入状況が記されている。この時の殿村の石高は一二五〇石で川欠け等の引き高を差し引いた残りの有高は一二二一石八斗八升四勺で、年貢高は定免で銀一五五二俵二斗四升九合になっている。しかし、実際の納入高は表3-16のようである。

表3-16 脇坂時代終わり五か年殿村年貢納入状況

年度	年貢納め高	計 算 租 率		
		玄米換算石数 (五合指しとして計算)		
		高	免	毛付免
末 (一六六三)	初一五四八俵四斗八升 五合八勺(銀五斗八 分五厘(とりもち代) 外に小物成 銀六匁六 分五厘(とりもち代) 八合	三八七石二四二九	三ツ〇九七	三ツ一六
申 (一六六〇)	初一五二五俵三斗九升 八合 外に三〇俵日損免引き 方	三八一石四四九五三ツ〇五一五	三ツ〇九七	三ツ一二
酉 (一六六五)	初一五三三俵四斗七升 七合八勺 外一八俵貳斗六升九合 零勺当引き方 小物成 銀六匁六分五	三八三石四八五九	三ツ〇六七	三ツ一三八
戌 (一六六六)	初一二二六俵六升九合 七勺 外二二八五俵一斗七升 七合八勺 積見引き方 小物成 銀六匁六分五	三一六石七八四六	二ツ五三四	二ツ五九三
亥 (一六七二)	初一五二三俵貳斗四升 九合 小物成 銀六匁六分五	三八〇石六二四五三ツ〇四四九	三ツ〇九七	三ツ一一五

右表にみるように、この時代の年貢高は初め俵数で記されているので、これを五合指しとして玄米石数に換算し、さらに高免、毛付き免を計算したものが下欄の数字である。

まず、貢租の種類についてみるとこの資料では、本年貢として税、小物成として鳥類代を銀で納めるようになっていたのみであるが、寛

文一三年（一六七三）、幕府代官所へ箕輪領村々連名で出した浮役御赦免を要求した訴状には次のような記載がある。

先の御地頭臨坂中務様御代に榎木、島もち浮役として仰せつけられ候え共、当所は榎木、島もち御座無く候に付き、代米にて指し上げ申し……

同浮役として下納、下麻代米下され御取り成され候。

これによると、浮役として島もちの外に前代に引き続いて榎木を代米で納めており、また、下納、下麻は代米を差し引いてもらったが、浮役として納入していたことがわかる。

租率についてみると、成年の積見引き方の多かった年を除いて田畑を合わせた高免で三ツ三ツ九厘七毛で、毛付き免は三ツ一分一三ツ

表3-17 臨坂時代、幕府領時代、板倉時代の租率

	年	高 免	毛付き免
臨坂時代 (殿村)	1667	3,097	3,160
	1668	3,0515	3,120
	1669	3,067	3,138
	1670▲	2,534	2,593
	1671	3,0449	3,115
幕府領時代 (北殿村)	1673	3,300	3,390
	1675	3,470	3,750
板倉時代 (北殿村)	1682▲	2,658	3,130
	1686	3,5037	3,879
	1193	3,117	3,320

（田と畑を合わせた平均租率である）

一分六厘となつてい

る。これを次の幕府領

及び板倉領時代と比較

するため同一要領で高

免毛付き免を計算して

一覧表にしたものが表

3-17である。

臨坂時代の一六七〇

年、板倉時代の一六八

二年は凶作等の特殊の

年であつたらしく特に

租率が低くなつてい

るが、この同年を例外として他と比較すると、臨

坂時代は次に続く幕府及び板倉時代より若干租率は低かつたと考えら

れる。

なお、「殿村田畑高辻指し出し並びに御物成」の哀納めの所には次のように記載されている。

初千五百貳拾参俵貳斗四升九合

但し五斗入り

内貳百貳俵四斗五升三合七勺

大豆貳拾八俵貳斗五升三合六勺にて納入四斗

入り

但し初斗升到大豆壹升すつ

初三拾貳五斗三升三勺

要三拾六俵六斗四合にて納め 五斗入り

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初七俵貳斗五升

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾七俵貳斗五升

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾俵

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

初拾五俵壹斗四升三合

但し初斗升に粟壹升式合すつ

第2節 村の姿

数半分米穀半分納め来たり申し候」とあり、外にも同様の意味を記した資料が多く、この時代には雑穀がかなり年貢として納入されている。

元禄二年（一六九九）、箕輪領の米の安値段の訳を述べた「指し上げ申す口上書之事」（『奥史資料四巻』）の中に「中務少輔様当地一所の知行所の御は、米老駄につき米五升五合宛駄下され候」とあり、宝暦五年（一七五五）の箕輪領安値段についての返答書の中に「百四拾年以前元和元年脇坂淡路守様、同中務少輔様御父子箕輪領迄御領地遊ば

表3-18 田及び畑の租率（延宝一元禄12）

村名	支配	田畑の別・位付 (品等)	田			畑			
			上田	中田	下田	上畑	中畑	下畑	原畑
田 畑 村	幕府領	延宝1年	4.8	4.3	3.8	2.4	1.9	1.4	0.9
		" 2	4.8	4.3	3.8	2.4	1.9	1.4	0.9
		" 3	4.9	4.4	3.9	2.6	2.1	1.6	1.1
		" 4	5.2	4.7	4.2	2.7	2.2	1.7	1.2
		" 5	5.4	4.9	4.4	2.8	2.3	1.8	1.3
		" 6	5.3	4.8	4.3	2.7	2.2	1.7	1.2
		" 7	5.1	4.6	4.1	2.4	1.9	1.5	1.0
		" 8	4.8	4.1	3.6	1.8	1.3	1.0	0.6
	板倉領	貞享1	5.4	5.0	4.5	2.1	1.6	1.2	0.7
		元禄1	5.1	4.7	4.2	2.3	1.8	1.5	1.1
		" 5	5.4	5.0	4.5	2.5	2.0	1.7	1.4
		" 7	4.9	4.5	4.0	2.1	1.7	1.5	1.1
神子 栄村	幕府領	延宝1年	6.4	5.9	5.4	3.6	2.9	2.1	1.1
		" 4	6.6	6.1	5.6	3.9	3.2	2.4	1.4
		" 8	6.1	5.6	5.1	3.2	2.5	1.8	?
	板倉領	貞享1	6.9	6.5	6.0				
		元禄5	6.9	6.6	6.2	3.3	2.6	1.1	0.6
北 殿村	幕府領	延宝3年	5.6	5.1	4.6	3.2	2.4	1.6	0.9
	板倉領	天和2	5.1	4.6	4.1	2.9	2.1	1.4	1.1
		貞享3	5.7	5.2	4.7	3.0	2.2	1.4	1.1
		元禄8	5.3	4.6	4.2	3.0	2.2	1.6	1.1
久 保 村	幕府領	延宝3年	6.3	5.8	5.3	3.3	2.8	2.3	1.1
		" 6	6.8	5.8	4.8	2.9	2.5	2.1	1.4
		" 7	6.5	6.0	5.5	3.3	2.4	1.5	
		" 8	6.1	5.6	5.1	2.8	2.3	1.9	0.8
	板倉領	元禄7	6.0	5.7	5.3	3.0	2.55	2.1	1.1
		" 9	5.8	5.5	5.1	2.8	2.4	2.0	1.0
		" 12	6.2	5.9	5.5	?	2.4	2.12	1.412

- ① 各村、年貢割付状及び門屋文書より作成。
 ② 新田、取り下げ田畑の分は除き本田畑のみとした。
 ③ 慶長検地に於ける村の品等

神子栄村 上
 久保村・殿村 中
 田畑村 下

され候儀、御家中も三分の一木下村に御住み成され候て、御成り米の儀御家中へは村々にて相渡し、其の余は飯田へ御回米遊ばされ候。五里津出し、夫より飯田へ届き候迄の間米老駄に付き七升余の駄賃相掛り申し候」とあって、箕輪領の村々は木下在任の家中に納入する貢租の外は、飯田城下まで回米として付け送りをした。付け送りのうち、五里の津出しは百姓負担、それより飯田までは米老駄につき五升五合の駄賃が支払われたが、飯田までの付け送りの駄賃は実際には一駄七升余かかり、農民の負担は大きかったようである。

このためであろうか、「其の後、中務少輔様、天羽七右衛門様、設楽源右衛門様、同大郎兵衛様御代官所の節も、雑穀米穀共に商人入札にて御払い遊ばされ候得共、当領の儀は式段に相分り申し候……」とあり、既に臨坂中務少輔時代から飯田まで付け送りをすることを止め、商人入札による売さばきを始めたようである。

(3) 板倉時代の貢租

箕輪領は臨坂氏領知の後一〇年間ほど幕府領となり、天和二年（一六八二）に再び私領として板倉氏の領知するところとなった。板倉氏も木下に陣屋をおいて箕輪領を支配した。この時代の貢租の種類は免状には本年貢と小物成として鳥もち代だけであるが、皆済目録には本年貢の一部を綿・麻の現物で納入しており臨坂時代と同様である。

租率について、臨坂時代幕府領時代との平均値の比較は既に示したので、田及び畑の個別の租率をみると表3-18のようである。

租率は村によってかなりの差異がある。これは、前々からの村の品等の差によるものと思われる。上田の租率をみると四ツ八分一六ツ九分であり、上畑のそれは一ツ八分一三ツ九分と同じ品等でも村と年度によって田も畑も二ツ程度の差がある。大まかに言えば上田では収穫高の五ノ七割が、下田でも四ノ六割が年貢として徴収されることになり租率は非常に高い。畑では上畑で二ノ三割、下畑で一ノ二割程度で租率は低いようにみえるが、当時の畑作の生産力を考えれば重い負担であった。

貢租内容については「板倉頼母様御知行所の節迄里方村は納米高半分雑穀相納め、山方の分は残らず雑穀相納の申し候」（元文五年石代安恒につき願書、門屋文書）とあり、元禄一二年幕府領となった時に代官所に出した「大泉村差出帳」に、これまでの貢租の納入に關して次のように記されている。

一御年貢納め様の儀御料私料共品々雑穀納め申し候。但し、粟・蕎麦・神庄屋納めに仕り、中節御米値段に金納差し上げ申し候。

一御年貢に納め候雑穀米直しの儀

(一) 粟・蕎麦・神庄屋は米四合六勺替えに先規より納め申し候。

(二) 蕎麦・神庄屋は右同條

(三) 神庄屋は米貳斗七升五合替え先規より納め申し候。

(四) 納め升の儀貳斗升にて納め来たり申し候。

(五) 換は粟・蕎麦・神庄屋五斗入りに御座候。

(六) 大豆・小豆四斗入りにて御座候。

（中略文書）

さらに、前記の延享二年の願い書の中に「雑穀米穀共に商人入札にて御払い遊ばされ候得共、当領の儀は式段に相分り申し候。其の後板倉越中守、同頼母様御知行所の節も先格の通り御引き付けを以て納め来り申し候」とある。

以上の資料から板倉時代も臨坂時代と同様に米及び雑穀によって年貢を納入しており、領主側がそれを商人入札にて売り払い金に替えたと思われる。特に雑穀については個々の農民は庄屋（名主）の所へ納入し、そこで「百姓払い」ということで農民や商人が買い入れ、その代金を領主に納入し、その納入代金は米納入石数に米の中筋値段（平均値段であろう）を乗じた額になるようにするという方式をとったと考えられる。したがって、基本的には現物納であるが、実質的には石代金納に近い状態になっていたと考ええてよいと思う。

また、元禄三年（一六九〇）の北殿村の年貢皆済目録は次のようになっている。

覚

一米 三百五拾三石貳斗八升貳合

一錢 三百五拾三文

此の訳

一米式石壺斗九升九合

一米五斗九升九合

一米式石壺斗八升式合

一米四拾三石九斗九升式合

一米七石九斗六升壺合

一米拾八石八斗

一米拾石八斗壺升

一米九石五斗式升

一米七石五斗七升三合三勺

一米式斗四升

一米式斗八升五合

一米六拾六石七斗式升

此の金 三拾四兩三分

一米百八拾石壺斗六升式合壺勺金納

此の金 九拾五兩三分水八拾五文

合 米 三百五拾三石壺斗八升式合

錢 三百五拾文

右は午年の勘定残らず諸け取り相済み申し候。若し相違の儀候おぼ重ねて勘

定仕直し申す可く候以上。

末八月五日

本田銀左衛門

此の麻拾壺買式百八拾式文

同村新兵衛渡し

南蔵金左衛門渡し

木下酒屋平七渡し

木下村宇右衛門渡し

同庄兵衛渡し

御飯米

道・橋九拾六人分人足扶持

川除け三拾八人分石取り扶持

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

金納

（子嗣屋文書）

この北蔵村の年貢納目録を見ると、年貢米三五三石一斗余のうち、自村あるいは近村の酒屋、商人（有力農民）等五人の者に八三石四斗

五斗三合の年貢米を渡している。これは農民が直接その商人等の所に付け運んだと思われるが米値段の記入のないところから領主と商人等の売買関係によるものである。したがって、これは現物納である。

しかし、六六石七斗式升の年貢は金一〇兩に四八俵替えて、一八〇石一斗六升余が同四七俵替えて金で納めたことになっている。両者合せて二四六石八斗八升二合一勺の年貢米の代わりに金一三〇兩二分と永八五文を納めたわけで、総額のほぼ七〇%が代金納であったことになる。このように、板倉時代は代金納がかなり進んできたということができる。

(4) 幕府領の貢租

ア 寛文一二年と天和元年

寛文一二年（一六七二）から天和元年（一六八二）まで約一〇年間、美輪の地は幕府領となり飯島陣屋の代官天羽七右衛門、設楽源右衛門、同太郎兵衛によって治められたが、この時代については延宝年代（一六七三—一八二）の免状、勘定目録がかなり残っており、貢租の内容を知ることができるが、勘定時代の税制がおおむね踏襲されている。

租率については既に表3-17及び18に掲げたが、幕府時代に比し金殿的に上昇し、特に延宝四一六年の租率が高くなっており貢租の増徴が明瞭である。

貢租の納め方については「天羽七右衛門様、設楽源右衛門様、同太郎兵衛様の節も難敷、米穀共に商人入札にて御払い遊ばされ候」（前掲延享二年願い書）とあって、米及び雑穀を現物で納入し、代官所が商人入札という形で換金をしている。また、「天羽七右衛門様、設楽源右衛門様御代官所の節は百姓持高半分商人落札に金壹両に付き御米壺升高の積りにて明九月切りに御延借に成され下され候」（元禄二二年大泉村明細帳、中置文書）とあって、貢租額の半分は百姓が拝借するという形

各年度「免状」より作成（千両・匁・文書より）

小 物 成			高 掛 三 役			附 加 税		運 上 其 加				納 高 計 (附加税を除く)		検定
林草御 年 貢	麻綿 売 出	島も ち 代	蔵前入用	六尺 給米	伝馬宿 入 用	口米	口水	漁船 運上	水車 運上	酒油絞	賃買加	米	金	免
		石 文 343										石 321.479	文 343	
		文 343										338.380	文 343	
		343										261.658	343	
		353				石 10.243						341.441	353	
		353										325.743	353	
石 0.1765	文 376	文 84										252.5635	1分と *210	文
0.1765	376	84		石 0.201	石 0.590							228.1815	* 460	
0.1765	376	84		0.204	0.591							281.0495	460	定
0.1765	376	84	文 255.2	0.204	0.591	石 5.460		文 75				281.8145	790.2	"
0.1765	376	84	225.2	0.204	0.591	6.475	文 13.8	75				216.7995	790.2	"
0.1765	376	84	276.8	0.221	0.596	7.417	13.8	83				248.0425	819.8	"
0.1765	376	84	276.8	0.221	0.596	7.312	7.5	83				244.7185	819.8	"
0.1765 0.457	376	84	227	0.222	0.596	6.355	16.4	85.6				212.7025	822.6	検
0.1765 0.4464	376	84	227	0.222	0.596	6.576	16.4	85.6				220.0629	822.6	定
0.6535	376	84	277	0.222	0.596			85.6				218.0855	822.6	"
0.667	376	84	366.6	0.293	0.617			85.6				194.804	912.2	"
0.683	376	84	366.6	0.293	0.617			85.6				199.842	912.2	"
0.683	376	84	366.6	0.293	0.617			85.6				220.445	912.2	検
0.683	376	84	366.6	0.293	0.447	6.746	16.4	85.6				214.832	912.2	定
0.683	376	84	365.3	0.212	0.917			85.6				157.438	910.9	"
0.683	376	84	270.7	0.217	0.456			85.6				175.820	816.3	"
0.627	376	84	272.9	0.218	0.460			85.6				185.939	818.5	"
0.629	376	84	1188.5	0.951	0.407			85.6				155.168	1 734.1	"
0.683	376	84	1220.3	0.976	0.418			85.6				163.561	1 765.9	検
0.683	376	84	1139.8	0.912	0.331			85.6		文 酒 144	240	144.955	1 853.4	"
0.683		84	366.6	0.293	0.617			58.6		酒 144		192.751	680.2	"
0.683		84	366.6	0.293	0.617			85.6			360	202.064	572.2	
0.683		84	273.1	0.218	0.460			85.6			360	176.500	478.7	定
0.683		84	257.6	0.206	0.434			85.6	文 57.6		360	170.384	520.8	"
0.683		84	141.8	1.134	0.458			85.6	57.6	文 油 21	360	188.652	1 681.2	"
0.683		84	1149.5	0.976	0.394			85.6	57.6	油 21	360	115.860	1 503.7	"
0.683		84	1149.8	0.920	1.371			85.6	57.6	油 21	360	132.813	1 434	

第2節 村の姿

表3-19 北殿村の貢租の変遷 (1673~1868)

年号(西暦)	村石高	毛付高(有)	本 免 (租 率)										本 途 (本年貢)	本途 有高 ×100
			上田	中田	下田	上畑	中畑	下畑	原畑	麻畑	屋敷			
延宝1(1673)	石 974,0603	石 947,0403	5.7	5.2	4.7	3.4	2.6	1.8	1.1	3.4	3.1	石 321,479	33.9	
" 3(1675)	"	900,519	5.6	5.1	4.6	3.2	2.4	1.6	0.9	3.2	3.1	338,380	37.5	
天和2(1682)	974,522	834,055	5.1	4.6	4.1	2.9	2.1	1.4	0.8		3.1	261,658	31.3	
貞享3(1686)	"	880,208	5.7	5.2	4.7	3.0	2.2	1.4	1.1		3.1	341,441	38.7	
元禄8(1693)	1045,022	960,0025	5.3	4.6	4.2	3.0	2.2	1.6	1.1		3.1	325,743	33.2	
享保3(1718)	古料のみとなる 983,272	873,562	4.5			2.34			1.0			252,209	28.87	
" 8(1723)	"	洪水霜害 675,859	4.5			2.5			0.92			227,214	33.6	
" 13(1728)	984,615	864,566	5.1			2.5			1.2			280,078	32.39	
元文3(1738)	"	洪水 678,264	5.1			2.5			1.25			181,843	26.81	
寛保2(1742)	"	752,524	5.1			2.5			1.25			215,828	28.68	
延享4(1747)	993,240	841,415	5.11			2.5			1.25			247,049	29.36	
寛延3(1750)												243,725		
明和6(1769)	993,330	722,325	5.48			2.5			1.25			211,249	29.24	
安永3(1774)	"	770,041	5.66			2.5			1.25			218,622	28.39	
" 8(1779)	"	771,391	4.525			2.5			1.25			216,634	28.06	
天明3(1783)	1029,149	760,796										193,427	25.4	
" 6(1786)	"	760,796	5.62			2.5			1.96			198,249	26.06	
寛政5(1793)	"	847,838	5.789			2.5						218,852	25.8	
享和3(1803)	"	829,663										213,239	25.7	
文化6(1809)	"	732,872										155,845	21.26	
" 12(1815)	"	758,935	4.157			2.5			1.25			174,464	22.98	
文政3(1820)	"	754,4319	4.157			2.5			1.25			184,632	24.47	
" 11(1828)	"	667,682	4.157			2.5			1.25			153,181	22.96	
天保5(1834)	"	685,2722	4.157			2.5			1.25			151,484	23.56	
" 8(1837)	"	639,2432	4.157			2.5			1.25			142,969	22.36	
" 14(1843)	"	834,7073	4.157			2.5			1.25			190,458	22.8	
嘉永7(1854)	"	860,9473	4.157			1.883			1.25			200,471	23.28	
安政4(1857)	1029,969	762,138	4.157			2.5			1.25			175,129	22.79	
万延元(1860)	"	718,648	4.157			2.5			1.30			169,961	23.54	
文久3(1863)	"	765,735	4.157			2.5			1.25			186,377	24.3	
慶応2(1866)	"	凶作 590,506	3.22			2.5			1.25			113,807	19.27	
明治元(1868)	"	613,9617	4.759			2.5			1.25			130,839	21.3	

(取下田畑新田の免はこれより低い…省略)

(取下田畑新田の免はこれより低い…省略)

で百姓が自由に処分し、その代金を商人入札金額に一両につき一升高の割合で、翌年九月までに納入するという処置がとられており、これに関連した延宝九年（一六八二）の「拝借仕り候御米の事」（千利屋文書）という資料も残っている。

イ 元禄一二年以降

元禄一二年（一六九〇）箕輪領の村々は幕府領と太田知行所に分かれて支配を受けたが、一方の幕府領（松本藩預かりも含む）の貢租の姿は次のようである。

ウ 貢租の種類と増加

延宝元年（一六七三）から明治に至るまで北殿村の免状及び皆済目録が多く保存されている。この免状のうち適当な年度を選び一覽表にしたものが表3-19であって、幕府領下の貢租の実態がよくわかる。

表3-19でわかるように幕府領下の税制の著しい変化は雑税の種類の増加である。雑税については先に幕府領になった際の寛文一三年（一六七三）の正月に、代官所に対して箕輪領の村々一八か村が連印して脇坂時代に納めていた樽木代、島もち代、下綿下麻等の浮き役を廃止するよう敷免訴訟を起こしているが、樽木代を除いてこの時代も引き続き小物成として徴収されたばかりか、新たに雑税が次々と徴収されるようになった。まず、小物成として林草場年貢が元禄一一年から、入会地の山手、野手が宝暦八年（一七五八）から徴収され始め、麻綿は板倉時代まで本年貢の一部の米の代わりとして出したものが、幕府領になってからは本年貢外の小物成として貨幣で納めるようになった。また、蔵米入用・六尺給米、伝馬宿入用の高掛り三役が元禄一五保の時期から、運上としては元文のころから漁氣運上が始まった。江戸時代後期になると各種の運上や冥加が徴収されるようになり、さらに皆済目録をみるとこれらの雑税の外に因役金が課される年

がかなりあり、包歩銀は享保の時代から毎年徴収されている。

ウ 租 率

本年貢の租率はこれまで上田・中田・下田・上畑・中畑・下畑・原畑という土地の品等に従って租率が定められたが、この幕府領の時代からの免状を見ると、新田とか起き返り地の取下げ免は別として、従来からの土地を本免とし、田は上中下の区別なしの一種の免、畑も上中下区別なしの免と原畑の免との二種にまとめられている。

租率の高さは表3-19の田についてみると寛政のころまで次第に上昇し、文化のころからは四ツ一分五七と下がり幕末まで一定であり、畑は特殊の年を除いて二ツ五分で変化がない。さらに、各年度の毛付き高（有高）を求め毛付き高に対する本年貢の割合（毛付き免）を求めてグラフにしたものが図3-24である。表3-19及び図3-24によってみると、毛付き免は延宝から享保の中ごろまでは相当に高く三ツ以上で最高三ツ八分七厘九毛（神子柴村では四ツ三四）となっている。それ以後は漸減傾向で幕末では二ツ三分（神子柴村では二ツ七分ほど）程度まで下ってきており、本途石高も三〇〇石余から一五〇一六〇石程度までと半減している。これは北殿村が川欠け等による引き高が多く、起き返り地の取下げ免が多くなっていること、新田の高入れによる低い免の土地の増加がその原因であろうと考えられる。毛付き免が漸減してきたのは決して幕府が税の軽減を意図して生まれたものではないであろう。それは、毛付き高から本途高を差し引いた農民の手元に残る石高をみればそのことは理解できよう。農民の手元に残る石高は常に五〇〇一六〇〇石程度で、むしろ多少減少気味であるからである。この保有高は村が存続するための最低限の額であったと考えられる。神子柴村の場合をみると、毛付き免は享保のころまで比較的高く三ツ八分くらいで最高四ツ三分四厘に達しているが、その後はしだいに

低下し宝暦以後は三ツ以下になっており、毛付き高から本途高を差し引いた残りの農民の手元に残る量は幕末になるまではかなり増加の傾向を示している。

このように、租率の状況は村によってかなりの差異が認められる

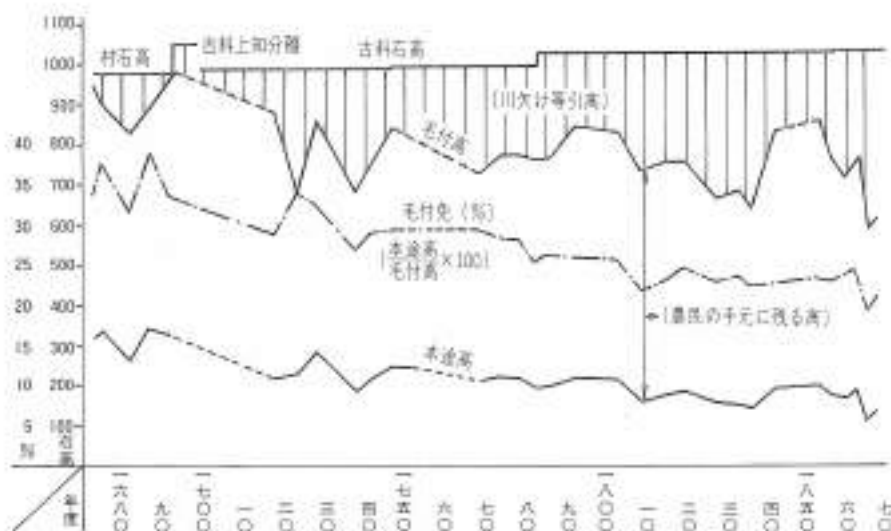


図24 北農村の貢租の変遷 (1673~1868)

各年度免状より作成

が、元禄一二年幕府領になってからしばらくの間の貢租の増徴は山方の村々に厳しかったようで、次のような資料が残っている。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ奉り候事

信州伊那郡筑前村々御年貢米の儀、近年御取置段々御免に罷り成り村々百姓困窮仕り候。これに依り御支配の御代官様へ年々御訴訟仕り候得共相叶わず、年増しの様御取置増し迷惑仕り候。然る様今度当国をも御参見遊はされ候に付き恐れ乍ら右の段御訴訟申し上げ願ひ上げ奉り度く、則ち元禄十三辰年より正迄拾か年御免定の面米御増減相改め書付け指し上げ申し候。

高谷太兵衛代官所信州伊那郡筑前村の内

大泉村 同新田
大賀村 上戸村
中条村 与地村
羽広村

辰年分右七か村納米の寄せ
一、米百拾六石四斗三升式合
巳年
一、米百拾四石四斗八升
午年
一、米百四拾貳石五斗四升八合
未年
一、米百五拾三石三斗三升七合
申年
一、米百八拾貳石壹斗六升式合
酉年
一、米百八拾三石四升七合
戌年
一、米貳百貳拾三石三斗三升三合
亥年
一、米貳百九石七升三合
子年
一、米貳百四拾三石八斗四升八合
辰より減り申す分
米拾貳石壹斗五升式合
巳より増し申す分
米貳拾八石貳斗六升八合
午より増し申す分
米拾石七斗八升九合
未より増し申す分
米貳拾八石八斗貳升五合
申より増し申す分
米八斗八升五合
酉より増し申す分
米四拾石貳斗八升六合
戌より減り申す分
米拾四石貳斗六升
亥より増し申す分
米三拾四石七斗七升五合

其年

一米貳百貳拾九石九斗五升三合

子より減り申す分
米拾三石五斗八升五合

右七か村拾か年分御年貢米辰年より去る丑年迄の内相増し申すに付き段々御納仕り候。右増減の分相改め此の如く書き上げ候通り相違御座候。

一御小物成の内綿麻売出し、御島代此の三品は先御代と御私領の御納納め申し候。御料所に成り御六尺給米・御蔵前入用・御儀米代・宿場入用・御金改め貸・此の五品の権者何方にても御料所の村々より相納め申し上。近年の御高免額以て難儀に陥り成り弥々困窮仕り候に付き、恐れ乍ら御訴申し上げ候御事

右の段々恐れ乍ら聞こし召し分けなされ、百姓御救いの御慈悲と思し召し成され願いの通り仰せ付け下し置かれ候わば有難き仕合わせに存じ奉り候以上。

宝永七寅年六月

大奥村 小兵庫

同新田 浦兵衛

御遠見様

(外五か村略)

(中宮文書)

これは、大奥村等山方七か村が元禄一三年(一七〇〇)より一〇か年分の七か村年貢高の合計額を書き上げ、年々増大する状態を示し、代官所へ年々訴えているが叶わないので遠見使に減免を訴えたものである。辰年に一二六石四斗ほどであったものが子年の最高値のときは二四三石八斗とほぼ倍増しているのであって、急速な租率の上昇による貢租の増徴があったことがわかる。

(ウ) 代金納と石代

代金納化と石代値段 「池田新兵衛様御代官所の節石代直段を以て概金納に仰せ付けられ、三分一は高直段、三分二は安直段を以て仰せ付けられ候……」。(同前文書)「池田新兵衛様御代官所に罷り成り金納に仰せ付けられ、三分の一、三分の二の御直段に御立て成され、三分

の一は浅草御直段、三分の二は地相場に準て四升安に上納仕り候御事」(『県史資料第四巻』)。この資料にみるように幕府領は元禄一二年(一六九九)代官池田新兵衛のときから石代値段を定の代金を納めさせるという方法になった。しかし、石代値段は納入石数の三分の一は浅草米市場の張り紙値段(高直段)、三分の二は地相場より一両につき一斗四升安の値段(安直段)で納入した。しかし、享保一二年(一七二六)からは三分の一、三分の二の区別はなくなつて石代値段は一つになり、飯田・松本・諏訪三か所の上中下三段の平均値段より六升九合安の値段で納めるようになっていた。

石代値段がいくらになるかは、租率の決定と共に納入金額を左右する重大な問題点であるから、これに対する農民の関心は高かった。田畑村及び神子柴村の年貢寄附目録に記された江戸中期の石代値段は表3-20のようである。石代値段は年度によってかなりの差があり、かりに年貢石高が同じであっても石代値段によって納入しなければならぬ石代金は大きな差が生ずることになる。農民の立場からは石代が安い(二両当たり)の石数が多いことと、納入金額が少なくて済むわけである。

表3-20 年貢納入の場合の石代値段

年	座	金一両に付き、石数		一石当たり永文数
		享保七年	享保七年	
九	九	九	九	一、九八〇
一	一	一	一	二、〇三〇
三	三	三	三	二、二四二
五	五	五	五	二、二六五
七	七	七	七	四八五、四三
九	九	九	九	五〇五、〇五
一	一	一	一	四九二、六一
三	三	三	三	四四六、〇二
五	五	五	五	四四一、五〇

〃	一五	〃	三、五一、二	二八四、八〇
〃	一六	〃	二、五二六、八	三九五、七五
〃	一七	〃	二、〇九五、七	四七七、一六
〃	一九	〃	二、〇三三、一	四九一、八五
〃	二一	〃	二、三三三、一二	四二八、九六
元文	三	〃	一、四〇五、六六	七一、四一
〃	五	〃	一、二四五、七九	八〇二、七八
寛保	二	〃	一、七六二、三三	五六七、四三
〃	三	〃	一、八四二、三三	五四二、七九
延享	三	〃	一、三〇〇、一一	七六九、一六
寛延	三	〃	一、六〇五、六六	六二二、七九
宝暦	五	〃	一、三八一、一二	七二〇、〇五
〃	一三	〃	一、六四〇、一六	六〇九、九七
明和	五	〃	一、五三二、一〇	六五七、四六
安永	七	〃	一、六七六、六	五九七、四八
〃	九	〃	一、七八九、七二	五五八、七五
天明	四	〃	一、〇七四、一六	九三〇、九六
寛政	五	〃	一、四四五、四五	六九一、八三
〃	一一	〃	一、一七三、八九	八五一、八七

注 1 享保七、九両年度は石代値段が二通りあった。
2 一石当たりの米文数は一兩米一〇〇〇文として計算したものである。

石代値段の基準 石代値段はどのように決められたのであろうか。その基準になるのはその年の米価であるが、どの場所の米価を基準にするかということ、いつの時の米価をとるかという二つの問題があ

る。

代官池田新兵衛の時は、三分の一は浅草米市場の張り紙値段が石代値段となり、三分の二は地相場が基準に採用された。享保一年に三分の一、三分の二打ち込みで石代値段が定められるようになってからは、飯田、諏訪、松本の三か所の上中下米三段の平均値段が基準になった。ところが、元文四年（一七三九）一二月代官室七郎左衛門のとき、石代値段を松本・諏訪・飯田三か所の上米だけの平均値段を基準にするという方針を打ち出してきた。農民側はこれに反対して翌元文五年正月次のような願い書を出して稟状を述べ、方針を撤回するよう訴えている。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ候御事

此の度年貢米石代御値段の儀、松本・諏訪・飯田三か所上米計りの御平均値段を以て金納仕り候様仰せ付けられ難儀至極に存じ奉り候。当国の儀は全国と違ひ寒国故不熟下米騰ちに御座候故、右三か所上中下三段平均値段を以て簡々より金納仕り候。然る所此の度新たに上米計りの御平均値段にては、百姓相續き仕り申さず候御事。

（中略）

御慈悲に前々の通り恐れ乍ら上中下米三段の平均を以て上納仕り、百姓相續き仕り候様仰せ付け下され置候儀は有難く存じ奉り候。以上。

元文五庚申正月

室七郎左衛門種福氏御役所

（同屋文書）

上米ばかりの平均値段を石代値段とする方針はかなり強いものであったが、右の願書のほかに、塩尻代官所支配下の筑摩郡・伊那郡・小県郡の村々連判の願い書も出されており、農民側の強い要求にあってこの方針は撤回されたのであろう。その後長く上中下の平均値段が採用されている。

また、石代値段決定のための米価の時期の問題は、代官池田新兵衛の

時の三分の二の分は例年春になって時味の上値段を決定したが、その後は早くから立冬（十一月八日ころ）の値段を基準に採用したので、そのことが米価を高くし、したがって税額を高くする大きな原因になっていた。これについて寛政一二年（一八〇〇）箕輪領五か村總代から飯島御役所に出された願い書には、次のように農民側の要求が記されている。

立冬相場の際は、新穀米はまだ川付き新田の早稲米が少し出る程度で新穀の出回りは少なく、酒造人が新酒造り込みで新米の買い取りが多く、旧穀貯蔵の売り払いもほとんど無くなる時期であるから、立冬のころは格別に高値になることが多い。したがって、この時期の米価で石代値段を決められては百姓が難渋するので、御慈悲を以て立冬より四〇日ほど遅らせ、それより一〇日の平均相場で石代値段を決定して欲しい（北殿区有文書、というのである）。この願いはその後天保七年（一八三六・嘉永七年（一八五四）にも立冬値段で決定することが問題になっていたところを見ると聞き入れられず、たえず問題になっていたことを示している。

石代御救い安願い 凶作のときには農民は租率の変更を求めて被免検見入りを願ひ出るほか、石代を安くしてもらうための願ひ書をしばしば役所に出している。天明三年（一七八三）、同七年の二度の凶作のときも石代御救い安の願ひ書を出している。天保七年（一八三六）は広範囲の大凶作の年であって既に被免検見入りが認められているが、凶作のため石代値段が著しく高くなっている年賃金ができないばかりか農民が「潰れ退転」になりかねないから、過去二〇か年の平均値段より四斗安の石代値段にして欲しいと嘆願しているのである。

(5) 太田知行所の負担

南殿村の大部分と北殿村の一部及び塩ノ井村・久保村は元禄一二年

（一六九九）八月より旗本太田氏の知行所になり、その後幕府領・太田知行所と何回も支配替えを経て明治に至っているが、太田氏支配の時期は次のようである。

- 元禄一二年～宝暦六年まで 約五八年間
- 文化二年～文化五年まで 約四年間
- 文久二年～明治二年まで 約八年間

ア 貢租の種類

太田氏支配下の元禄～宝暦期には、本年貢のほかは小物成として林草場年貢、麻縄売り出し、鳥もち代が徴収され、口米、口水があり、口水は一石につき三升の割合で徴収されているが、幕府領よりは雑税の種類は少なかった。ところが、文化年代以降は右の外幕府領の高掛り三役に相当する夫米、夫水が徴収されるようになり、特に幕末の文久二年以降は各種の運上が増加し、課税、軍役等も加わり太田知行所寄政の大きな原因となった。

イ 租率

太田氏支配の初期のうちは、田畑共上中下の品等別に租率が定められ年貢が徴収されているが、前代の板倉時代の租率とはほぼ同じ高さである。なお、南殿村の上知の石高・毛付き高・本年貢高・毛付き免を見ると表3-21のようである。

資料が充分揃わないので幕府領との比較は無理な点があるが、上知の場合享保の時代幕府領よりやや高い傾向があったがしだいに下がり幕府領と同じ程度もしくはそれ以下に下がっている。

幕末において太田知行所の寄政が問題になるが、それは租率の面ではなく、他の面においてである。

ウ 年貢納入方法

表3-22は寛保から宝暦にかけての太田氏支配下における、塩ノ井

第2節 村の姿

表3-21 太田知行所の租率（毛付免）

南殿村上知（太田知行所）

	支配	石高	毛付高	本年貢高	毛付免
享保2 (1717)	太田	石 247,708	石 224,459	石 77,910	石 3,478
" 7 (1722)		"	234,382	84,245	3,594
" 12 (1727)		"	235,298	84,605	3,600
元文2 (1737)		"	217,415	59,616	2,746
延享4 (1747)		"	216,504	53,243	2,463
宝暦2 (1752)	太田	"	223,235	56,543	2,533
文化3 (1806)		"	224,454	48,671	2,168
" 4 (1807)		"	193,098	21,948	1,137
" 5 (1808)		"	193,098	35,903	1,859
" 10 (1813)		"	225,728	54,862	2,430
" 11 (1814)	幕府	"	225,685	54,862	2,430
文久1 (1861)	太田	"	221,614	52,109	2.35
" 2 (1862)		"	223,075	52,732	2.36
" 3 (1863)		"	223,075	52,732	2.36
慶応3 (1867)		"	205,225	44,965	2.19
明治2 (1869)		"	194,569	31,207	1.604

（南殿村各年度免状より作成 南殿酒屋文書・大宗館文書）

表3-22 太田知行所領ノ井村の貢租の納入（各年度規定日録より作成 堀ノ井大東文書）

		納入高計	現物納	初 納	二 納	三 納	四 納	五 納
寛保3 (1743)	納 高	31石7斗06	38俵 2斗31	(31俵2斗) 10両2分	9月 (6俵6升) 2両	10月 (3俵1升) 1両		
	内 訳 代 口米	本途 30,792 0,924		1両に 1石2斗	1両に 1石23	1両に 1石225		
延享2 (1745)	納 高	32石310	44俵	9月 (6俵3斗5升) 3両2分	10月 (10俵5斗) 3両3分	11月 (9俵6升) 2両2分	12月 (7俵30) 3両	12月 (2俵33) 1両水86文54
	内 訳 代 口米	本途 31,369 0,941		1両に 1石1斗	1両に 1石08	1両に 1石06 1.04	1両に 1石04	1両に 1石04
寛延2 (1749)	納 高	32石680	42俵	9月 (12俵207) 4両1分	10月 (14俵196) 5両	11月 (4俵11) 1両2分	12月 (8俵168) 2両3分永204 文39	
	内 訳 代 口米	本途 31,728 0,952		1両に 1石179	1両に 1石158	1両に 1石14	1両に 1石14	
宝暦5 (1755)	納 高	33石187	40俵	9月 (7俵393) 3両1分	10月 (7俵116) 3両	11月 (24俵24) 10両1分	12月 (3俵0338) 1両1分永62 文23	
	内 訳 代 口米	本途 32,221 0,9655		1両に 9斗84	1両に 9斗72	1両に 9斗6	1両に 9斗4	

村の年貢の納入状況を示したものである。この時期は年貢高のほぼ半分は現物で納入しており、残り半分は石代金納の形で二月までに三、四回に分納しているが、皆済の終期は十二月で幕府領より厳しい条件になっている。文化期以後は全額石代金納になっている。

石代金納の場合、石代値段がいくらであったかを同じ年度の幕府領の石代値段と比較してみると次のようになっている。

年度	太田知行所石代値段 段金一両につき	幕府領石代値段 金一両につき	差額
寛保三年	一石二斗二升五合	一石八斗四升二合三勺三	〇石六斗一升七合三勺三
延享二年	一、〇六〇	一、三六五八八	〇、三〇五八八
天明三年	一、〇七五	一、三〇〇一一	〇、二二五一
宝暦五年	〇、九六五	一、三八一二二	〇、四一六二二

太田知行所の石代値段は幕府領に比べて著しく高い。同一の年度で金一両当たり二斗二升から六斗一升余の差がある。寛保三年の例でかりに一五石の石代金を納入する場合、幕府領では八兩と永一四〇文でよいが、太田知行所では一二兩と永二四〇文を納入しなければならぬ。租率では大きな差がなかったにしても石代値段の差によって大きな負担を強いられていたことを示している。

エ 雑税の増加と苛政

太田知行所の農民は文化年代の支配のときから、本年貢のほか雑税の増加で苦しめられた。「文化三寅年太田家知行に相成り、旧例古格等と申し諸役勝手のみ申し付けられ候故村々愁患少なからず」、「文久二戌年亦候太田家知行に相成り軍役、課役等嚴重に申し付けられ、弥々以て必至困窮の場合に陥り此値打ち過ぎ候ては絶家追転に及ぶべきもの出来仕る可きは眼前の儀……」（慶応四年追願書『黒史資料第四巻』）とあるように、特に幕末において太田氏の苛政はひどかった。そ

こで慶応四年（一八六八）二月、この当時南殿村古科（幕府領）は尾州藩主の預かり所になっていたが、その上松御陣屋御役所に対し南殿村の小前総代二人が太田知行所について、「取締り筋も等閑に成り行きこれに加え軍役、兵役、夫役右三役多分の金高取り立て、猶、横物成と唱え種々次第に弥増し村方疲弊の折柄御旗本一列御軍用金とて半高御召し上げに相成り候由、然れ共右五千石本途御収納金相納め候外に、半高御召し上げの分過納に取り立て旧幕府へ償わせ候仕儀、更に仁情施れ、御仕法請じ、御納み金等と唱え多分の金子取り立てられ候事共難決仕り候……」（井田園文書）と窮状を訴え、せひ天領にして欲しいと嘆願している。また、同年三月尾州取締り塩尻役所に対し南殿村、松島村の年寄二人から、太田知行所の苛政と農民の難決を訴えて天領にもどすことを願ひ、さらに四月には知行所村々の課役諸運上が過重であると、次のような訴えが松島村外七か村から同役所に出されている。

恐れ乍ら始末書を以て申し上げ奉り候

一月々前納小普請御役金・御無尽金・御夫・兵賦・御軍役金・献金等多分御取り立ての事

右軍役の儀は去る卯の冬より来る丑の秋迄拾年間に八千両年々四季に御取り立て仰せ置かれ候を去る冬寄奉り分上納仕り候外に六百五拾兩御下げ金尾へ井りに相成り候一諸職人・諸商人・見世店・紺屋・豆腐屋等に至る迄、其の金種々御運上御取り立ての事

右職人諸所にて過重行き兼ね女房子供引き連れ遠く旅費仕り候もの親類・組合に取替わらせ運上取り立ての事

一酒造稼ぎの者大小に拘らず寄株に付き寄向す御運上の事

一河所にて暮し兼ね候故、江戸線仕り候者迄御運上の事

右に付き七拾兩余に相成り候親父一人留守仕り、家風敷もこれ無く御役所仕事等仕り其の目暮しものまで御運上取り立て候族もこれ有り候

一御上納仕り候地の端に敷え置き候桑にて並列し致し候御光り揚げ金高にて御運上の事

一、二月より月割りに先納取り立て、希留人願買入れの元金に貸し付け高利を賣り候事

五年の儀は時なる清水官儀は因作にて一同難波の年柄致入証村々元松本御領所
の分設代御領い下げに相成り、御上納夏御領月延べに相成り、御又難波の者へ夫々
御救い米等御手当し置かれ候程の御相知行所の儀は右の地末に御座候間此の段申
し上げ候

右に準じ候儀々これ有り候。御代官御支配の内は一切右様の儀御座なく候え
共、太田家知行所に相成り候て此の如くの仕合。誠に難波仕り候。此の段
何卒御賢察成し下し置かれ度く願ひ上げ奉り候。以上。

慶応四年四月

松島村外七か村惣代
与兵衛

5 箕輪領の安石代

箕輪領は膳坂時代から石代金納の場合、石代値段を他の地域より安くするといふ慣例が長い間続いている。この点は箕輪領の農民にとつてはありがたいことと感じていたと思われるが、この安石代は箕輪領のみでなく信濃の国のうちでも、水内郡一五か村、筑摩郡川手一二か村、同麻績町村等でも同様に安石代が採用されていたのであってそれなりの理由があつたことであつて、特別の恩恵を受けていたのではない。

(1) 安石代の理由

箕輪領が何故安石代になったか、その理由を資料によつてみると次のようである。

「箕輪領御米値段の儀、諏訪・高遠・飯島より米下値に御座候所、第一粟米
（中略）：先の御地頭膳坂中務少輔様当地一所の御知行所の節は、米惣賦
につき米五升五合宛賦買下され候。其の後御料に關り成り商人入札仕り候時

分、金壹兩に付き八十九升程宛違ひ御せ付けられ候。先年より御代々飯島と
箕輪領値段違ひ申し候」(元禄十二指上申口上書之事『県史資料第四巻』)

「御値段の儀は伊那郡式段に御立て遊ばされ候。箕輪領の儀は下伊那より壹
兩に付き四升安に御立て遊ばされ候。其は箕輪領の儀は山方にて土地悪敷く
基米に御座候故、一郡の内道法三拾里余の内陸路付け送り入用に付き、往古
より一直段と申す儀は御座無候。」(延享二年願書『県史資料第四巻』)

「二体米疋宜しからず御違ひ方にも相成らず、飯田城下にて御払いに相成る
村々諸仕り候え共、法も御違ひ方に相成らざる儀を存しながら飯田城下迄附
け送り候儀にて御払い成され候も御値段安く、御領主様御□にも相成らざる
に付き石代金納願ひ奉り候所、三分の一は飯田御城御渡し米に相成り、三分
の二は石代金納御せ付けられ、然る所箕輪領村々は岡岳其の外高山谷合いに
て雪下村々日請け悪敷く候時不順、八月上旬には霜降り寒法宜しからず納
米の内青米、田廬り、赤米、碎米多分これ有り、撰り立て漸々三分の一米納
分、三分の二石代金納せ付けられ候所、三分の一撰り立ての残米至つて悪米
故、売り払い候ても金壹兩に付き飯田町値段よりは米貳斗五升も下値に付
き、御領主様御勘弁を以て金壹兩に付き壹斗四升安に直段御せ付けられ。」
(天明八安石代書付箋、大森閣文書)

以上の資料にみるように安石代の理由は二つある。その第一は、箕
輪領は米質が悪く売り払いに際して他の村々の米より下値にしか売れ
ないということ。第二は、箕輪領は飯田城下まで米を付け運びに多
くの費用がかかるということである。初め年貢米の付け運びには一駄
につき五升五合の駄賃をもらつた。代金納になつても箕輪領の村々は
近くに大きな米市場がないから、飯田・松本等に付け運んで売り払わ
なくてはならず、その付け運びの費用が多くかかるということであ
る。

このような事情が考慮されて膳坂時代に飯田の米値段より金壹兩に
つき一斗四升安の値段で石代値段が決められたというのである。

元和、寛永の幕府時代米の値段が金一兩につき二石、二石五斗程度であったと考えられるから、一兩につき一斗四升安ということは六、七%の低値（減税）ということであつたわけである。

(2) 安石代の推移

寛文一二年より元禄一一年まで 幕府時代金一兩につき一斗四升安の石代値段となつたが、寛文一二年幕府領となつたとき「伊那郡の米性御吟味遊ばされ、其の上津出し道法・遠近の訳を以て、下伊那、飯島より箕輪領の儀は安値段を以て金納仰せ付けられ候」（門屋文書）とあり、また、「商人入札にて御払い遊ばされ候得共当領の儀は式段に相分かり申し候。その後板倉越中守、同領母様御知行所の節も先格の通り御引き付けを以て納め来たり申し候」（前掲資料）とあり、板倉時代まで一兩につき一斗四升安の石代値段で石代金納をして来た。

元禄一二年 南箕輪地内は幕府領と太田知行所に分割支配を受け、幕府領は代官池田新兵衛によって全額石代金納が言い渡され、さらに、箕輪領安石代の訳を尋ねて来た。箕輪領村々二三か村からは安石代の訳の口上書が出されているが、これを吟味した結果であるかどうか不明であるが、三分の一現物納の代わりに浅草米市場の値段で冬のうちに納入、残り三分の二は地相場より一斗四升安の値段で翌年七月までに石代を金納することになった。この方式に対する農民側の抵抗の資料は見当たらないが、三分の一の年貢が浅草米市場の値段という高値で金納することは、かなりの増税になつたと思われる。

宝永二年（一七〇五） 高谷太兵衛代官のとき石代値段について吟味があり、箕輪領百姓総代何人かが江戸表まで出向いて委細を申し上げたが、幕府から年貢米三分の二の一斗四升安を七升安にする方針が打ち出された。農民にとっては大変な増税になるので早速訴訟を起し、幸いにして幕府に聞き入れられて従来どおり一斗四升安のままに

据え置かれた。

享保一一年（一七二六） 代官大草太郎左衛門のとき再び安石代について吟味があり、三分の一は高値、三分の二は一斗四升安という区分を廃止し打ち込みとし、全年貢米の値段を諏訪・松本・飯田三か所の上中下米の平均値段より六升九合安にするという方式に改められた。この方式は従来の方式と比べ總体としてあまり増税にならないということであるらしく農民側の抵抗は見られない。

元文四年（一七三九） 代官家七郎左衛門のとき、上中下米平均値段でなく飯田・諏訪・松本三か所の上米だけの平均値段から六升九合安を石代値段にするという方針を打ち出してきた。この理由は「年貢の儀は本来上米ばかり納入するのが普通で、御料所のうちでも石代値段を上米ばかりの値段で納めている所が多い。信州限り上中下米平均値段で金納させたのは格別の慈悲であつた」というのであつた。これに対し安石代になつている筑摩郡、伊那郡、小県郡の村々は連名で、あるいは単独で訴状を提出している。その訴状の一部を掲げよう。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ奉り候御事

此の度信州御年貢石代直段の儀、只今迄納め来たり候信州御城下の直段上中下米三段の御平均にて納め来たり候様、以後上米計りの御直段にて金納仕り候様に仰せ付けられ、（中略）箕輪領の儀は六升九合安に仰せ付けられ只今迄上納仕り来たり申し候。然るに此の度仰せ出され候上米計り平均直段にて上納仕り候ては、下米勝ちの村々必至と潰れ申し候。其の上吉村々福島、上松、須原三宿へ助郷相勤め候得ば、往來四宿里余の高山を越え難儀仕り罷り在り候。御慈悲に只今迄の通り上中下米三段の平均の御直段に仰せ付け下さるべく候。左も御座無く候ては、下米勝ちなる場所安直段に充り立て上米直段にて、上納候ては百姓大食御座無く候得ば、（中略）右三か所三段の平均御直段にて御取り立て下され候様幾重にも御訴訟願ひ上げ奉り候以上。

この訴訟の直接の結果は不明であるが、その後上中下三段の平均という表現が消えているところから、農民の要求はしりぞけられたのだろうか。

延享二年（一七四五）代官大草大郎左衛門のとき箕輪領の安石代を一挙に潰し、定法値段で石代上納となるよう増し金をつけて厳しく納入を迫ってきた。農民は驚いて早速安石代を潰されては百姓が立ち続かないことを二一か村連名で訴え出た。この訴訟の結果幕府は定法値段で石代徴収をする方針を引込み、従来の六升九合安を継続した。

明和四年（一七六七）幕府は安石代を漸次解消する方針を立て、安石代の村々の総代を呼び寄せて秋から翌年の春にかけて数度の吟味を行ない、安値の分を半分せり上げることを打ち出してきた。安石代村々はもちろん従来どおり六升九合安を続けるより必死に再考の願いをした。その際幕府は「平均石代の分はこれ迄通り石代上納仰せ付けられ、安石代上納村の分は御同様に仕り候共、又は外同様平均石代上納仕り候共両様の内御請け仕る可く……」と、安石代の村々に対して現物で納入するか、平均石代で代金納にするかどちらか良い方を選べというやり方で迫ってきた。同米にもどることは農民としては遠距離の付け出しを強いられることになり、多くの労力と費用を要するのまで到底受け入れられない。幕府は後にもこのような現物納を持ち出すことによって農民側の抵抗を抑えることをしているが、農民は止むなくせり上げを認めざるを得なくなり、明和五年（一七六八）四月、安石代一割のせり上げを認める請け書を出している。

明和五年（一七六八）安石代の一割せり上げの請書を出した時、農

民側は以後のせり上げを絶対しないように要望しておいたわけであるが、幕府は安石代のせり上げを既定方針のごとく以後次のようにせり上げている。

明和四年六斗式合式勾……安永二年まで年々せり上げ

安永三年より五斗年間……四斗式合六斗安

安永八年より一斗年間……三斗八合六斗安

寛政元年より一斗年間……三斗七合式勾三斗安

寛政二年より一斗年間……三斗六合六斗安

文化六年より一斗年間……三斗五合八斗五斗安

文政二年より一斗年間……三斗五合八斗六斗安

文政二年より一斗年間……三斗四合四斗七斗安

天保一〇年より一斗年間……三斗三合七斗八斗安

嘉永二年より一斗年間……三斗三合九斗安

安政六年より五斗年間……三斗二合七斗四斗安

元治元年より二斗年間……三斗二合三斗九斗安

この間、文久年中と元治元年（一八六四）にもとの安石代である六升九合安に立ちもどるよう、農民は懇訴嘆願をしているが六升九合にもどることなく明治に至っている。

(3) 安石代の廃止

明治三年新政府の伊那県役所より箕輪領石代安値段のことについてお尋ねがあり、箕輪領村々は連名で幕府時代からの安石代の仕来たりについて、詳細の経過と理由を書いて差し出している。それにもかかわらず伊那県役所からは安石代廃止の沙汰があり村役人たちはその旨を村民に伝達した。各村とも百姓一同の歡喜が大きく、同一〇月箕輪領村々二二か村の名主等二九名連印して安石代を廃止しないよう伊那県役所に願ひ書が出されている。しかし、その願ひは聞き入れられず遂に次のような安石代廃止の請け書を出さざるを得なかった。

差し上げ奉る御請け書のこと

先月廿七日貴輪領三拾貳カ村役人召出しの上、石代・斗安從前仕来たり御取
り直しの上、今般改正に付き、御座止仰せ渡され并承仕り、婦村の上小前末
々迄御沙汰の趣申し聞かせ、一同承知畏み奉り候。これに依り三拾貳カ村役
人一同連印の御請け書指し上げ奉り候以上。

明治三庚午年閏十月

右村名主連印

伊那郡御役所

(塩ノ井大東文書)

こうして、明治三年箕輪領の安石代は遂に廃止になったが、この問
題は江戸時代のはとんど全期間を通じて支配者と農民との争点になっ
ており、農民は村の存続死活の問題としてその維持に努め、支配者側
は執ようにまた巧妙にこれを縮小あるいは廃止に持ち込んで税収の増
加を図ろうとしたといえる。

三 村人の生活

(一) 近世の農業経営

1 耕地

(1) 耕地の拡大

農業にとって耕地は最大かつ基礎的な経営要素であって、中世の名
主層や武士は、所領、命というように土地に対し異常なほどの執心を示
したが、近世の農民も生活安定と向上のために耕地の拡大に努力を傾
注した。また、農業が主要な生産業であり、米を中心とした経済を営
んだ近世社会においては、領主も経済的基盤強化のため、積極的に新
田開発に努力した。その成果は戦国時代の動乱が治まった江戸時代の
平和な社会の初期に石高の急増になってあらわれている。

新しく拓く田や畑(一般に新田といわれた)の開拓方法は、従来の屋

敷や田畑の地続きの所を開拓する(切り継ぐ)方法と、新たに離れた所
の原野や林地等を切り開き、あるいは用水堀を造って田や畑を開発し
てゆく方法がとられた。前者は農民自身の自発的意欲に基づくものが
多く個人的に、あるいは共同で開拓したようである。後者の開発は多
くは領主や代官、有力町人等の計画(見立て)によって行なわれた。
このような新田開発は江戸時代初期に多く、大泉村から分村した大泉
新田村は時の代官加集空之助の見立てによって進められた代官見立新
田の代表的なものである。

新しく開拓された田畑は数年間鎌下年季と称して無年貢にする奨励
策がとられるのが一般的で、やがて熟田畑になると新田検地が行なわ
れて村の石高に加えられ、はっきりと検地帳の上に土地の耕作権者が
確定する。熟田畑になったといっても今までの田畑と同様な収獲をあ
げるのは困難で、土地の位付けは下田・下畑になり、村の石高を記載
してある「高帳」などにも新下田、新原畑、卯原畑等の名称をつけ旧
高の土地と区別して記載し、石盛、免(租率)ともかなり低くおさえて
ある。しかし、これらの新田が新しい村をつくり、増加する人口を養
う大きな基礎になったことはいうまでもない。

慶長六年(一六〇二)検地(実際は大開検地と同じ)による南箕輪地域
内各村の石高合計は一八三四石六斗余であるが、その数十年前後正保・慶
安・承応の一斉検地を受けた後の総石高は三四二六石五斗余りとなっ
ており、この間に約一・八倍と急速な増加を示している。この急速
な石高の増加がどのような形で行なわれたか資料がなく明らかにする
ことは困難であるが、江戸幕府の権力の確立によって山間辺地の隅々
までその権力が浸透し、農民や土地が完全に把握されたこと、さら
に、戦国時代から平和な時代への転換によって農民たちは安心して新
田の開発を進めることができたこと、また、領主ら武士階級も武力に

よって地位の向上を図る時代の終ったことを察して、自己の経済的地盤を強化するため新田の開発等に努力を傾注したものと考えられ、これらのことが急速な石高の増加になったものと考えられる。

その後の石高の増加の状況は図3-25のようである。寛文六年（一六六六）の新田検地高入れ、延宝六年（一六七八）の沢尻地区の新田高入れ、貞享四年（一六八七）の新田検地高入れと石高の増加がかなり急であり、この江戸時代前期は新田開発がまだかなりの速度で進められたことがわかる。元禄以後になると開発適地の減少も手伝ってか新田の開発は僅かになり、安永九年に二六〇石余が石高に加えられているが、これは従来見付け場（見取場）となっていたものが検地によって石高に加えられたもので幕府の財政改善のための剰余の策であって、急速に開発が進んだものではない。

(2) 開田の内容

新田開発について、寛文と貞享の二度の検地における水田と畑との比率を面積比で計算してみると、水田が約一三％、畑が約八七％となり、石高で見ると水田の方が石盛が高いので水田が一八％畑が八二％となるが、圧倒的に畑の比率が高い。農民にしても領主にしても水田の開発が望ましいものであったに違いなく、あらゆる努力が重ねられたであろうが当時の土木技術の段階では、新たな用水路を造っての水田の開発は困難な事業であって、水田の開発は容易には進まなかったためである。天竜川沿いの氾濫原を広く開拓して安定した耕地とし、また、洪積台地上の広い原野や林地を開拓して肥沃な水田とすることは到底不可能なことであって、ずっと後の時代を待たなければならなかったのである。

畑の開発は村落西方の洪積台地上の原野（現在の西天竜水田地帯）が中心であって酸性の度合いが強く、当時の人たちが俗に「黒ぼい」と

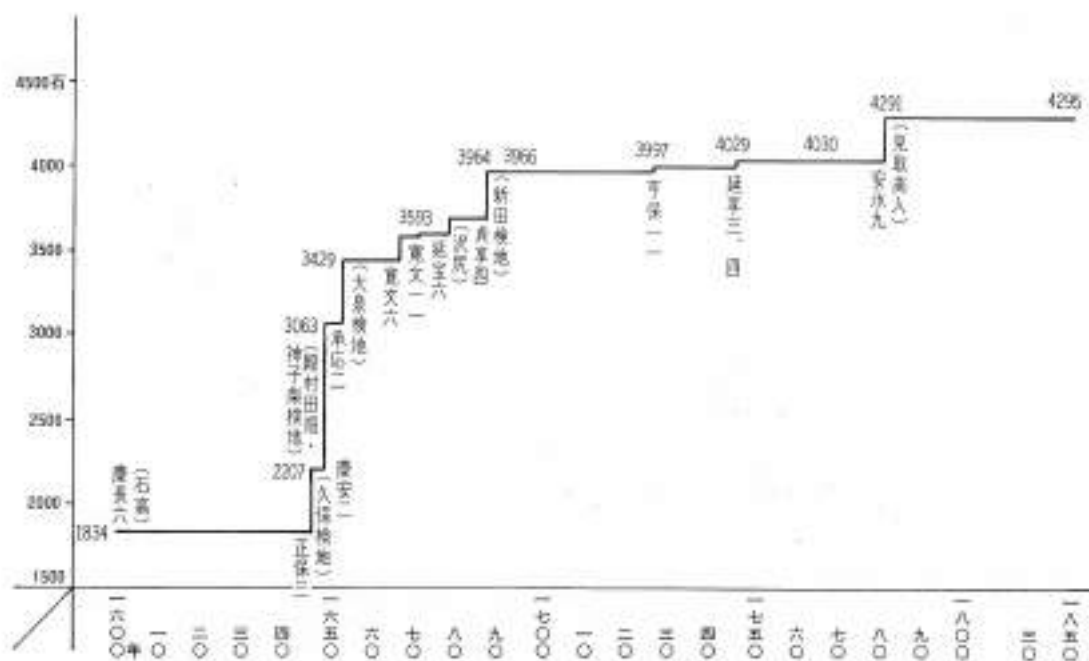


図3-25 南其輪地域内石高の増加状況

呼んだ生産力の低い土地であった。新墾畑を熟畑にするためには年々多量の厩肥を施用し相当の長い年月を必要としたと思われる。この洪積台地上の畑は原畑と称せずと後々まで一段低い石盛に位置づけられている。

2 農業経営の構造

(1) 経営規模

近世における当地の農業経営の規模はどうであったか、これを正確に知ることは困難であるが、村内に残された資料を手掛りにこれを探ってみよう。

慶安二年（一六四九）の「田帳」及び「畑帳」と書かれた検地帳写が各村に残っている。これは、田畑一筆ごとの品等、面積、名請人、耕作者名等が記入されており、江戸時代初期の農業の状態を知ることができる大切な資料である。田畑村の場合総面積は水田一町四反三畝、畑三〇町二反四畝で名請人（所有者）数は二五名、耕作者数は四八名になっている。これを個人別に集計して名請け（所有）面積及び耕作面積の階層別分布表を作成すると次の表3-23のようである。



図3-26 田畑村「田帳」と「畑帳」
慶安2年の検地帳写（門屋文書）

これによると高請け地を持った百姓

表3-23 土地所有面積耕作面積階層別
分布表（慶安2年田畑村）

階層	所有面積	耕作面積
1反未満	7	11
1～3反	3	6
3～5反未満	2	8
5～10反	3	9
10～15反	1	8
15～20反	3	3
20～30反	1	3
30～40反	1	
40～50反	3	
50～60反		
60～70反		
70反以上	1	
計	25	48

（総面積41町6反6畝19歩）

（本百姓）は二五戸、無高の百姓（永呑ともいう）は二二戸であり、この表には隣村等への出作りの耕地が入っていないので少しの誤差はあるが、単純に平均した耕作面積は一戸当たり八反六畝程度の規模になる。さらに、その内容を見るためさきの田帳および畑帳に記載された土地の個人別集計表を作ってみると（表3-24）、二町歩以上の高請け地を持つ者が六人あり、最大の者は七町一反六畝余を持っている。これらの百姓はその高請け地も多くを他の百姓に耕作させており、地主としての性格を強くもっているが、自分でもかなりの部分を経営（地主手作り経営）をしている。このような地主手作り経営と思われる家が六戸あり、その平均経営規模は一町九反三畝で、最大二町七反五畝であった。

普通の本百姓の経営はどうなっているか、高請け地を持っている農民二五戸のうち多くの土地を貸し付けている地主的性格の強い先の六戸を除き、残り一九戸を普通の本百姓として考えてみると経営面積が一町歩以上のものが四戸あり、一戸は一町八反六畝（大部分は借入れ地）を耕作しておるが、反面で一反歩未満のものが二戸ありその平均

第2節 村の姿

表3-24 慶安2年高請地・自作地・小作地・経営面積家別一覽表（田畑村田帳細帳より作成）

農 家 号	自 作 地		貸 付 地		高 請 土 地 面 積 計	借（小作）地		経営面積	備 考
	田	畑	田	畑		田	畑		
①	町 反 前 歩 5 7.18	町 反 前 歩 1 7 9.03	町 反 前 歩 1 3 0.17	町 反 前 歩 3 4 9.06	町 反 前 歩 7 1 6.08			町 反 前 歩 2 3 6.21	平均 1 9 3.21
②	11 6.23	1 5 8.28	9 7.06	1 1 6.16	4 8 9.13			2 7 5.21	
③	6 3.07	8 5.26	7 4.19	2 4 2.04	4 6 5.26			1 4 9.03	
④	1.29	1 7 4.00	8.09	2 6 2.25	4 4 7.03			1 7 5.29	
⑤	5 0.04	1 5 5.05	4 6.12	5 9.15	3 1 1.06			2 0 5.09	
⑥	4 0.25	7 8.22	6 1.19	1 0 0.02	2 8 1.08			1 1 9.17	
小 計	3 3 0.16	8 3 1.24	4 1 8.22	11 3 0.02	271 1.04			11 6 2.01	
7	3 7.01	6 3.01	2 2.02	3 2.20	1 5 4.24			1 0 0.02	平均 6 6.16 ①の合地 ②の合地
8	6 3.22		6.23		7 0.15			6 6.25	
9	6 6.28	7 7.16		1 0.04	1 5 4.18	0.12	3.03	1 4 4.25	
10	2.15	6 9.23	1.29	1 1 8.24	1 8 3.01			7 8.18	
11	4 7.18	7 2.13			1 2 0.01			1 2 0.01	
12		6 0.21			6 0.21		1 6.14	7 7.05	
13		7 5.29			7 5.29			7 5.29	
14	3 3.23				3 3.23			3 3.23	
15	3 2.10				3 2.10	6.23	8.18	4 7.21	
16		2 3.04			2 3.04	2.01		2 5.05	
17		1 7.15			1 7.15	2 8.17		4 6.02	
18		1 7.20			1 7.20	1 3.24		3 1.14	
19		8.24			8.24	5.20		1 4.14	
20	7.24				7.24			7.24	
21	6.06				6.06			6.06	
22		3.10			3.10		1 0.04	1 3.14	
23	2.13				2.13	1 4.01		1 6.14	
24	1.12	0.04			1.16	6 8.20	1 1 6.14	1 8 6.20	
25	0.07				0.07	0.08	8 6.13	8 6.28	
小 計								11 8 9.21	
26						2 9.14	8 7.03	1 1 6.17	平均 4 5.15 ①の合地 ②の合地 ③の門屋 ④の門屋 ⑤の門屋
27						4 9.26	7 1.02	1 2 0.28	
28						4 3.13	7 2.26	1 1 6.09	
29						2.11	6 3.11	6 5.22	
30							1.26	1.26	
31							2 0.06	2 0.06	
32						2 0.02	2 2.15	4 2.17	
33							3 3.06	3 3.06	
34							4.05	4.05	
35							3.18	3.18	
36						1.02	3.11	4.13	
37						0.02	1 5.14	1 5.16	
38						0.18		0.18	
39						1 9.00	5 1.09	7 0.09	
40						3 1.06	2 3.15	5 4.20	
41							0.02	0.02	
42						5 0.02	1 7 7.22	2 2 7.24	
43						4 2.06		4 2.06	
44							3 6.09	3 6.09	
45						4.19		4.19	
46						2 2.02	3 2.20	5 4.22	
47							6.09	6.09	
48							3.20	3.20	
小 計								10 4 6.15	

注：他村への出作 他村よりの入作関係を除く

規模は六反六畝余で、地主手作り経営の三分の一以下の小規模経営である。

当時の本百姓の生活の最低限度は四〇五石の石高が必要であったといわれるが、それに達していない農家が約半数の八戸あり、これらの農家では他に余業を持たなければ生活を維持することはできなかったであろう。

水呑百姓二三戸の経営は、一町以上の経営をしているものが四戸みられるが平均規模は四反五畝余と普通本百姓の経営よりさらに小さく極めて零細なものになっている。しかも、この小作人が支払わねばならない小作料は元禄一二年（一六九〇）の南蔵村明細帳に記載されたものを掲げると次のようである。

一上田一反に付き	入れ上げ米	貳斗貳升三升
一中田一反に付き	"	壹斗五升壹斗七、八升
一下田一反に付き	"	右同断
一新下田一反に付き	"	右同断
一塲新下田一反に付き	"	右同断
一上畑一反に付き	"	壹斗貳升壹斗三升
一中畑一反に付き	"	壹斗壹斗貳升
一下畑一反に付き	"	右同断
一麻畑一反に付き	"	八升壹斗迄
一原畑一反に付き	"	三升程

但し年貢米ばかりのところもある。

（大森館文書）

この小作料の高さは石盛の一〇〜一五%であって、それほど高率ではないが貢租の外にこれを支払わねばならない小作農民にとっては大変な負担であり、四反五畝という経営面積と考えると大部分

の水呑百姓は、他に何らかの生活の手だてを考えない限り生活を維持することはできなかったのではなかろうか。



図3-27 右 寛保3 (1743) 年田畑村持高帳
左 宝暦10 (1760) 年田畑村地押野帳(門屋文書)

次に江戸時代中期の農業経営はどうなったのだろうか。元文三年（一七三〇）、寛保三年（一七四三）、安永六年（一七七七）の田畑村高帳、宝暦一〇年（一七六〇）「地押え野帳」から個人別に耕地を集計し、階層別に分布表を作成したものが表3-25である。

この表によって見ると、農家戸数の増加も関係して一石以上三石未満（一反〜三反）と三石以上五石未満（三反〜五反）の小石高の農家が急増しており、一〇石〜二〇石の中堅農家戸数は年度により若干の変動があるがほとんど増加はしていない。反面で、二〇石以上の有力農家への土地の集中が見られる。

第2節 村の姿

石高から総耕作面積を概算し戸数で除して平均経営規模を計算してみると、元文三年、寛保三年の八反三畝から宝暦一〇年の七反一畝安永六年の五反九・五畝、とかなり縮小している。

江戸時代後期については田畑村の所有石高の分布表を作成すると表3-26のようであり、石高は三反より一町未満層に集中する傾向を示し、一反一三反未満の貧農層がやや減少しているが、平均経営規模は七反八畝より七反九畝と中期末より少し拡大しているが大差なく、七・八反程度の小農経営が一般化する姿を見ることが出来る。

表3-25 江戸時代中期石高(面積)別農家戸数(田畑村)

石高	元文3 (1738) 田畑村 高概より	寛保3 (1744) 同 左	安永6 (1777) 同 左	宝暦10(1760) 田畑村総地押え概より	
				反 別	戸 数
1 石 未 満	4	8	15	1 反未満	12
1~3 石未満	28	20	31	1~3 反未満	21
3~5 "	13	15	20	3~5 "	15
5~10 "	22	20	16	5~10 "	24
10~15 "	3	5	9	10~15 "	10
15~20 "	2	4	1	15~20 "	9
20~30 "	3	4	5	20~30 "	5
30~40 "	1	1	1	30~40 "	4
40~50 "	1	0	2	40~50 "	1
50 石 以 上	0	0	0	50反以上	0
戸 数 計	77	77	100	戸 数 計	101
総 石 高	590石 549升6合	590石 549升6合	648石 648升9合	総 面 積	71町6反9畝
平 均 規 模	8反3畝	8反3畝	5反9.5畝	平均面積	7反1畝

注 1 上表の石高及び反別が所有石高又は反別であるか経営石高又は反別であるか資料の上からは直ちに明確ではないが元禄15年末門限の本百姓数が397戸、戸数50戸宝暦6年の本百姓数61戸であるところから上表の戸数は経営戸数と考えて大きな誤りはないと考えたい。

2 平均規模は当時の田畑村の平均石高1.09石で除して面積を計算した。

表3-26 江戸時代石高別農家戸数

石高	文政6年 (1823)	文政7年 (1824)	慶応2年 (1866)
1 石 未 満	8	7 (内1無高)	16 (内1無高)
1~3 石未満	11	13	10
3~5 "	18	18	16
5~10 "	23	23	23
10~15 "	10	11	7
15~20 "	7	5	3
20~30 "	2	2	5
30~40 "	0	0	0
40~50 "	1	1	0
50 石 以 上	1	1	1
戸 数 計	81	81	81
総 石 高	石 699,662	699,662	700,580
平 均 規 模	7反9畝	7反9畝	7反8畝

(門屋文書より作製)

次に、経営規模に関連して水田と畑との割合についてみると、里方の村とされる天竜川沿いの村々にも水田の割合は意外に少ない。正保一慶安承応の一斉検地の高譲け地において、北殿村が水田の割合が最も高く面積で四九%、石高で五六%、南殿村では面積で三六・六%、石高で四二%、神子柴村で面積で四一・七%、石高で四八・六%であり、田畑村では「当村の儀里筋に御座候得共田方少々にて畑方勝ちの村方故」（宝暦四年村指出明相懸）というように面積で二七・四%、石高で三二%と少ない。

この傾向はどの村も時代が進むにつれて一層強くなっている。

山方の村である大泉村についてみると、天和二年（一六八二）の「免相定め事」（中宿文書）の中に下田の分米三石三斗余と記載されており、元禄一二年（一六九〇）の「大泉村分米帳」には次のように記載されている。

一萬五百九十九石九斗九升六合

此反別 五拾五町六反拾毫歩

内 高三石三斗毫升九合

田方

高五百九十九石九斗七升七合

畑方

此の訳

下田 武反五畝拾六歩

分米 三石三斗毫升九合

十三畝

(以下略)

(中略)

このように、下田二反五畝一六歩、分米三石三斗一升九合とあり、極めて少面積だが水田がある。しかし、天和二年の免状の中での下田の取り米(貢租)の租率は一ツ四分で上畑よりも低いものになっている。さらに承応二年の「水帳」および享和二年(一八〇二)の「高反別取り米仕訳書上帳」(何れも中宮文書)には同じ面積の土地が下田畑成りとして、畑として扱われている。これらから、一度は田として造成されたが灌漑用水不足のためか、水田としての扱いをすることができず、畑と同じ貢租率としたり、畑として扱ったことと思われる。天保五年(一八三四)の新田検地に際して二反一畝余りが始めて完全な田として記載されるようになっており、それまでの長い期間他村への出作りによる水田耕作が少面積あったと思われるが、大泉村自体は完全な畑作村であったといえよう。

(2) 農業労働力の面から見た経営の変化

江戸時代前期の農業経営における経営主体と労働力の姿はどうなっていたであろうか。慶安二年(一六四九)の北殿村宗門改帳をみると、全戸数は一六戸で一戸当たり平均人数は一〇・五人であるが、その中に数戸の有力農民と思われる大家族の家がある。その三戸の例を左に

掲げて考えて見よう。

一神宗

仁右衛門

門ノ 善右衛門

女 房

下人 善三郎

男子 犬若

男 房

門ノ 三十郎

男子 犬若

男 房

門ノ 小平次

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

門ノ 小次郎

女子 勘四郎

男 房

この三戸の家族構成をみると三戸とも戸主夫婦と子供のほかに、兄弟あるいは子供夫婦、門ノと書かれた門屋と考えられる家族および下

①県史資料第四巻

人等を含む極めて複雑な構成の大家族になっている。しかし、ここに抱えられている門屋と戸主との関係はどうであろうか。一戸で二、四組の門ノと記載されている家族を含めているが、その中の下人の記載様式からみて、九組の「門ノ」のうち三郎兵衛家の門ノは自分の下人を抱えていることがわかる。このことから判断して門ノは戸主との間に強い従属関係を持ち、宗門様では一戸前ではないが、戸主の屋敷の一部に別の家を持ち門ノとして独立の生計を営んでいたものと考えることができる。

血縁関係にある家族についても戸主およびその後継者（長男）の家族と、他の兄弟夫婦の家族とを分けて記載し、中には下人をも分けて記載している例がある。それぞれある程度の独立性を認めることができる。

次に、田畑村の慶安二年（一六四九）の田帳、畑帳には次のような記載がかなり多い。

羽邊垣外 上田四畝拾三歩 伝四部分 孫藏
田ノ久保 下田壹反二畝歩 勘左衛門分 勘助

このような記載形式は古い時代のものである。田畑村だけでなく他の村々も同様である。右の記載で伝四郎、勘左衛門は土地の名請人（所有者）であり、孫藏、勘助等は土地を耕作している作人と考えられている。この作人がどのような形で作人となったか、単純な賃借関係にある小作人なのか、分付百姓として従属関係にあるのか判断の資料に乏しいが、この時代では分付百姓であろう。伝四郎分の總所有面積は七町一反五畝余りでこの時代この村の最大の土地所有者であり、二町余の自作地のほかは一〇人ほどの作人に耕作させている。この作人のうちの数名は伝四郎分の土地だけを耕作している。このような関係は

他の六人の大土地所有者にもあり、いずれも専属的な作人二人乃至数人を持っている。田畑村は後で述べる南蔵村に比べ早くから土地所有の分散が見られ、二五名の百姓によって所有されているが、上位六人の所有地を合計すると全耕地の約六八％となり、有力農民に土地が集中している。このことを田帳、畑帳の記載様式と併せて考えると、有力農民は分付主であって、無高の百姓となっている者の中にはそれに従属した分付百姓がかなり存在していると考えられている。

さらに、農村における従属関係と農業経営の主体としての作人、および労働力の関係を探るために次の南蔵村が代官に出した「男女数・馬数改帳」（寛文一二年）を見よう。

男女人数・家数・馬数改帳（抜粋一部再掲）

▲長兵衛分		
一 父 七左衛門	女子 哲人	男 哲人 長勝
一 母	ノ三人内 男哲人 女哲人	ノ三人内 男哲人 女哲人
一 女房	惣人数 或哲人	馬 一疋
一 下人 五人	家数三間内 二軒本屋 一清左衛門	女房
一 下女 六人	▲權七郎分	男子 哲人 伝三郎
ノ拾五人内 男七人 女八人	一 父	女子 哲人 みや
馬 四疋	一 母	ノ四人内 男哲人 女哲人
一 長三郎 同人門屋	一 女房	馬 壹疋
一 男子 哲人 うち	一 女子 哲人 かつめ	一 勘太郎 同人門屋
ノ三人内 男二人 女一人	ノ五人内 男三人 女二人	女子 哲人 たま
馬 壹疋	牛 一疋	ノ三人内 男哲人 女哲人
馬 壹疋 同人門屋	一 清七郎	惣人数 拾五人
一 勘三郎	女房	

家数四間の内		第左五平	家数三間
一 軒本屋	女房	ノ五人内(男式人)	一 軒本屋
二 軒合地	ノ五人内(女三人)	一 軒合地	二 軒合地
三 軒門屋	一 権兵衛	一 権兵衛	三 軒門屋
牛馬二疋	一 権兵衛	一 権兵衛	馬二疋
▲次郎兵衛分	一 父	一 父	馬二疋
	一 女房	一 女房	
	一 下女 恋人	一 下女 恋人	
	ノ五人内(男式人)	ノ五人内(男式人)	
	馬二疋	一 清蔵	
	一 茂兵衛	女房	
	母	ノ式人内(男式人)	
	女房	ノ式人内(女三人)	
		惣人数 拾式人	
		馬二疋	
		(大宗師文書)	

この改帳には六戸が記されており、そのうち三戸を抜き書きにしたものであるが、いずれも直系の夫婦と子供のほか傍系の夫婦とその子、あるいは隷属者の夫婦とその子、下人をも含んだ複雑な構成になっている。しかし、これらの構成員がすべて同一の建物の中に生活していたかという点、そうではなく、それぞれいくつかの生活単位に分かれて別々に家を構えて生活していた。この点について長兵衛家についてみると、家族構成の後に家数が三間(軒)うち一軒本屋、二軒門屋と記されており、長兵衛夫婦とその父母及び長兵衛の下男五人下女六人の計一五人が本屋で生活し、長三郎とその家族の三人、勘三郎とその家族の三人とはそれぞれ別の門屋と称される一軒の家に生活していたのである。権七郎家についても同様で本屋には権七郎の直系の家族五人が生活し、おちの清七郎とその家族、いとこの清左衛門とその家族とはそれぞれ合地と呼んで別の家に住み、勘太郎とその家族は門屋に生活していたと考えられる。

これらの合地、門屋の人たちの中には本屋とは別個に馬を持っていたように記載されているところからみても、単に生活を別にしているだけでなく農民として独立した経営の単位となっていたと考えられる。この改帳には土地関係の記載が全く無いが、江戸時代中期の南殿村宗門改帳を見ると、村全体の石高二二六石七斗余を僅か五人の有力農民だけで持っている。本百姓数は二七戸となっているがその大部分がこれら有力農民の地下高の内と記載されている。これら有力農民は寛文の時代の長兵衛、権七郎、次郎兵衛等の後裔であることはほぼ間違いない。したがって、長兵衛、権七郎、次郎兵衛らは寛文のころ相当大きな石高を持っており、そのうちかなりの部分を自分で経営(分付主手作り経営)する一方、残余の土地を前記の自己名儀の「分」として記載されている合地、門屋等の農民、あるいは隠居(年老いた父が二、三男の一人と同居することが多い)に分与して耕作させていたのである。長兵衛、権七郎、次郎兵衛等は「分付主」であり、主家である。合地、門屋等の農民は程度の差はあっても何らかの意味で主家に對して従属あるいは隷属の関係にあり、「分付百姓」といわれ、年貢夫役等は主家である分付主を通して負担するという関係にあったと思われる。

分付主はかなり広い自作地を家族労働のほか、自家の下男下女を使って耕作するが、自己の従属下の門屋、合地等の労働も提供させて経営をしたと考えられる。従属農民に分与して耕作させている自己名儀の土地の年貢負担の責任者として、彼らを支配していたものである。合地、門屋等の分付百姓は分与された土地を耕作して自己の生活を保ち、その恩義に報いる代償として、あるいは労働地代の形として主家に対して労働も提供する義務を負っていたものと考えられる。

延宝三年(一六七五)の神子柴村の宗門改帳をみると南殿村の改帳の

表3-27 江戸時代の家世階級の変化（各村落門人別世帯より作成）

村名	年度	南 殿 村												田 端 村						備考		
		康安 (1649)	寛文12 (1672)	天和2 (1682)	貞享4 (1687)	元禄5 (1692)	宝暦9 (1759)	文化3 (1805)	元禄3 (1700)	宝暦6 (1756)	文政7 (1824)	慶応2 (1866)										
戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数	戸数 1戸当り人数						
2 人 以 下	1			1	1	1	1	1	2	2	3	8	31	12								
3 ~ 4 人	2	1	1	1	1	2	9	7	12	14	1	35	3	21								
5 ~ 6 人	3		1	3	2	1	9	11	9	29	2	15		30	1							
7 ~ 8 人	4				1	1	3	5	8	6	6	3	1	16	3							
9 ~ 10 人	1			2	1	1	3	1	3	2	2	2		8								
11 ~ 12 人	2	1	1	3	2	1	2	1	3	3	1				1							
13 ~ 14 人	1	1	1	2	1	1	1	1	4	3												
15 ~ 16 人	2		1	2	3	1	1	1		1	1											
17 ~ 18 人						1			1													
19 ~ 20 人					1	3			1	2												
21 ~ 23 人			1		1	1	1	1														
24 ~ 26 人				1	1	1	1	1		1												
27 ~ 29 人				1	1	1	1	1		1												
30 ~ 32 人					1	1	1	1		1												
33 ~ 35 人																						
36 人 以 上	1	1				2	1															
計	17	3	6	3	16	7	16	9	17	9	30	3	27	1	43	17	61	9	82	3	82	4
総 人 数	168		72		189		221		288		175		146		302		310		288		371	
内 下 人 数	14		16		90		62		101		19		2		82		25		3		7	
1戸当平均人数	9.9		12		11.8		13.8		16.9		5.83		5.26		7.02		5.08		3.15		4.5	

郎兵衛家は長百姓の家格で一〇年前の段階では分付百姓三軒を抱えていたが、いずれも分離独立させて、天和二年には単純な家族構成になっている。しかし、分付百姓の独立による労働力の不足は下人下女を抱えることによって補う形をとっている。

貞享四年になると弟の結婚により再び複雑な家族構成となり始め、元禄五年には二つの家族の複合の形となっている。総領で家長である治郎兵衛の家族と弟の善兵衛の家族とははっきり分けて書いてあり、しかも、下人も弟分として三人が分けて記入されている。このことは、弟家族は兄の家族とは生活面では勿論、農業経営の上でもはっきり独立したものになっていることを示している。弟分として下人を抱えるということは、名義は総領家のものであるにせよかなり多くの耕作地を持ち、家族労働力だけでは不足するためにそれを補う必要からであろうから、総領の経営に対して分付百姓のような労働力提供はできないであろう。したがって、総領家の農業経営も、地下百姓（総領の弟や譜代下人等で分家独立した百姓）、小作人等からの労働力提供が多少あるにしても、主体は自家労働と多くの下人労働による経営という形がこの時代の有力農民の一般的傾向となったようで、前表にみるとおり、貞享から元禄へかけての下人数の増加が、また、元禄五年に一戸で一九人の下人を抱えている家があるなど、このことを明らかに示しているといえよう。また他面で下人を持たない家族労働のみの小経営がかなり成立している。

このようにして下人労働は農業経営労働の重要な担い手となっているが、これはどのような形で供給されるのであろうか。この点について少し触れておくことにする。宗門帳には抱えている下人について次のような様式で記載してあるものがある。

下男 譜代

理兵衛 三拾五歳

下女 譜代
下男 当村竹藏伯父 八五郎 四拾五歳
下男 当村八郎兵衛子にて二年奉に相抱え置き候 長八 二拾四歳
下女 中条村助藏娘一年切り抱え申し候 せん 二拾二歳
また、下人として家族を奉公に出す例の記載としては次のような記載例がある。

男子 御園村次左衛門の所へ一年切りに差し置き申し候 半兵衛 三拾歳
男子 田畑村徳兵衛の所へ二年切りに差し置き申し候 善兵衛 廿八歳
右の資料は元禄一三年（一七〇〇）の神子柴村宗門帳から書き抜いたものであるが、下人の中には譜代の下人と年季奉公の形の下人とがある。譜代の下人とは中世からの継続的な農民で代々主家に仕えて来た者や、水代人身売買契約によるもの、年季奉公人から転化したもの、いろいろな事情で主家に拾われ養育されて下人となった者など、さま



図3-25 人身売買譜代

さまざまな経過をたどって下人となっていたようである。したがって、譜代下人の中にはまだ労働のできないような幼年のものや、老齢の者も含まれている。これら譜代の下人は一生主家に隷属して農業労働はいうまでもなく、家事雑用にも従事して主家のために働いているが、年齢が来れば結婚も認められ、また、その働きに応じて門屋として独立した生活の場を与えられ、小面積ながら耕地も分与されて農業経営者としての地位も認められた。さらに進んで地下百姓として独立するという経過をとって、しだいに身分的解放が行なわれている。しかし、血縁関係の者が分家した地下百姓に比べると主家に対する従属度はかなり遅くまで色濃く残っていたようである。

江戸時代中期の年奉奉公人である下人は、借金の形に奉公する者が多く、かなり従属度が強く、現物又は貨幣を給与される純粋な雇傭関係によるものは少なかったが、時代が進むと共に雇傭関係による下人が増加したようである。

宝暦の時代になると家族構成は単純化し、下人教も急速に減少して一戸当たりの家族人数は五・六人という少数になってくる。これに反して戸数は急速に増加してくる。この時代なお門屋、借屋等を持ち、数人の下人を抱えている大百姓も少数減っているが、多くは夫婦を中心とした家族だけが、せいぜい一・二人の下人を抱えた程度の労働力で経営するという、家族労働中心の小農経営形態が一般化して、いわゆる小農的生産の確立といわれる状態となる。したがって、大きな石高を持つ有力農民は次第に地主化の方向をたどったと考えられる。

江戸時代後期になるとこの傾向はさらに進み、文化三年(一八〇六)の南殿村の下人数は全体で一人、文政八年(一八二五)田畑村全体で下人三人というようになり、もはや農業労働力としてとるに足らない人数に減っている。当時の犁耕さえない、鋤や鋤、鎌等の農具だけの農

表3-28 田畑村江戸時代後期所有石高段階分布表

年度	文化7年 (1810)	慶応2年 (1866)
段階		
1石未満	8	15
1~3石	12	10
3~5 "	18	16
5~10 "	23	23
10~15 "	10	7
15~20 "	6	3
20~30 "	2	5
30~40 "	1	
40~50 "	1	
50石以上	1 (72石)	1 (81石)
計	82	82

(無高各年度2戸) (門田文書)

業技術の段階では、一町歩の耕地の経営には四人程度の労働力が必要であった(古島敏雄『近世日本農業の構造』とされるので、大土地所有者は大部分の土地を貸与し一層地主的傾向を強めたものと考えられる。田畑村の例でみると文化七年(一八一〇)に七二石、慶応二年(一八六六)には八一石の土地を持ち金融業を兼ね最大の実力者に発展した有力農民がいるが、その面積は平均石高一・一石として六町五反一七町四反歩となり、慶応二年のこの家族構成は下男一人下女一人を含めた八人である。しかし、農作業に従事した人は四人程度と考えられるから、自から経営した土地は一町歩程度であったと考えられ、他の大部分の土地は小作地として、自からは村最大の地主となったのである。他の農民については表3-28のように一五石以上の農民が一〇人ほどおり、この中には小地主化したものが何人かいると考えられるが、五・一五石層の農民と合わせて農民の半数を占め村の中堅となっている。しかし、五石未満という農民も非常に多くこれも半数に達しており、無高の農民も二名ほどいる。これら小高の農民や無高の農民は小作地を求め、高い年貢と小作料を支払いながらも小作農として生活の足掛かりを作り、過剰な労働力は有力農家の賃労働や、出稼ぎその



図3-29 年季 (1年) 幸公人請計状 (玉置軒文書)



図3-30 年季幸公人の給金仕払い覚 (南版酒閣文書) (主曆9年)

他の余業で生活を支えたものと考えられる。慶応二年の宗門帳に記載されたものだけでも田畑村一村で江戸稼ぎ一二名、他の村への幸公等七八、計一九人が余業として出稼ぎに出ている。

農業労働力としての下人は極めて少なくなり、それらは幸公人という形で、その請け状をみるとほとんどすべて一年季の幸公人で労働契約の形をとっており、その賃金は一年間男子で宝暦のころ一両二分、二両、文化文政のころ三両四両(平均三・三四)、女子は宝暦のころ二分

一両、文化文政のころ二両二分(平均二・〇八両)程度である。しかし、貧しい農民が年貢に差し詰まって幸公に出すというようなことが多く、その賃金の大部分を前借りする例が多い。

なお、女子の稼ぎの儀は「耕作の手入れ時節田畑の草取り出候」(天保九北殿村明細帳というように、有力農家では農繁期の不足労働力や草取り労働等にはかなり日雇い労働力が使われたと考えられる。

(3) 農業経営と牛馬の飼育

農業労働力に関連して牛馬がどの程度飼われていたかについて見ておこう。

当時牛馬は、肥料として大切な刈草、野草等の運搬、水田のふませ(代掻き)、収穫物の運搬等の農業労働のほか、秣を踏ませて厩肥をつくるなど農業経営にとって重要な働きをしていた。この外に当地方は中馬村として農閑期の駄賃稼ぎに馬はなくてはならないものであった。したがって、人別改めと共に馬数改めもしばしば行なわれ、宗門帳に牛馬の数が記載されている場合が多い。これらの資料に基づいて牛馬の数を示すと表3-29のようになる。

村全体の牛馬の数は表のように経済の発展した貞享、元禄のころ頭数が最も多くなり、一戸当たりの飼育頭数が多い傾向があった。宝暦のころになると牛馬の総頭数が減少し一戸当たりの飼育頭数も少なくなっている。そして、農家戸数の中で牛馬を飼育する農家戸数の割合も減少している。この原因は地主手作りの大きな経営が減少する反面で、小農生産の成立増加という全般的経営状態の変化に対応するものではなからうか。

牛馬飼育戸数のうち半数以上の戸数が一頭飼育であるが、石高の多い有力農民は二頭、三頭と飼育している。貧しい農民も牛馬を飼育することの効用は充分知っていたであろうが、牛馬を飼う

表3-29 江戸時代牛馬の飼育頭数

村	年度	南 殿 村		田 沼 村		神子柴村	
		寛文二二(一六七三)	貞享四(一六八七)	元禄一二(一六九九)	宝暦六(一七五五)	元禄一三(一七〇〇)	安永六(一七七七)
農 家 戸 数	馬頭数別戸数	17	17	31	43	63	22
	1 頭	4			6	12	6
	2 頭	2			4	9	2
	3 頭				1	8	1
牛馬飼育戸数	牛頭数別戸数	3			7		2
	1 頭				1		
牛馬飼育戸数		9		11	38	20	16
牛馬飼育頭数		15	44	44	17	63	30
牛馬飼育頭数							35
牛馬飼育頭数							24

寛文12年南殿村農家戸数は実質的経営戸数とした。()
内の戸数は改帳の戸数である。

には秣のほかには神や穀類くすなどの飼料が必要である。貧農にはそれすらも馬を飼うほどに得られなかったであろうか。この点について、宝暦九年(一七五九)の田沼村の人別改帳から石高と牛馬飼育の関係を見ると、二〇石以上の石高を持つ一〇戸は全戸二頭を飼育し、石高六石以上のものは特殊の例を除いて全戸一頭を飼育している。牛馬を持つ最低石高は五・九石(二戸)である。これで見ると牛馬を飼っている最低規模はおよそ六石、反別にして五・六反歩というところであったようである。神子柴村の安永六年(一七七七)の例では、村内で最大の五九石余の石高を持った農家が二戸で四頭の馬を持ち、それに続いて石高の多い農家が三頭、二頭と馬を持っていた。一頭の馬を持つ農家の最低石高は三石六斗であるがこれは例外で、ほかはだいたい五石以上である。

こうしてみると、石高の少ない貧しい農家では馬を購入する資金も

なかったであろうし、牛馬を飼う力もなかったのだと考えざるを得ない。

(二) 近世の農業技術

1 土地と用水

(1) 水田用地と用水

天竜川と蓍無川の形成した自然堤防の裏側の後背湿地である久保下等の箕輪遺跡の所は、既に弥生時代から水田が作られたことが判明しているが、初期は大泉川、清水川両岸の湿地、北沢、南沢、板が洞、滝が沢、半沢等の小沢の湧水による湿地が水田となつたと考えられる。やがて大泉川や清水川等の小河川から井堰を造って用水を引きとり水田の拡大が行なわれた。この小河川からの用水の引き取りがいつごろ行なわれたか判明しないが、かなり古い時代と考えられる。大泉川から引水し始めてからかなり後のことと思われるが、元禄一二年(一六九七)の南殿村明細帳に「堰四か所大泉川より水取り用い申し候。此の人足年々廿人程、芝三拾駄ずつ入り申し候」とあり、大泉川から四本の堰を作って毎年修復しつつ用水を引き取り、南殿村の水田面積のほぼ半分に当たる三町七反五畝余に灌漑されていた。田沼村もこの大泉川から三本の井堰を造って(ただし享保の時代に上の堰は潰した)用水を取っている。このような井堰の造成によって良質の乾田が逐次開拓されてきたのであるが、まだまだ、「悪地深沼、洗田場所御座候」(北殿村明細帳)「田方儀は深沼足入りに御座候」(久保村明細帳)というように、場所によっては深い沼田や、湧水のある低湿地等が多かった。かつては良好な水田と考えられていた場所も、江戸時代には深い沼田は耕作労働が困難で、湧水のある低湿地は生産力が低く二毛作も出来ない場所であると考えようになり、水田の価値に対する意識の変化が明瞭になってきている。

天竜川から用水をとっての氾濫原の水田化がいつごろ行なわれたか、現在明らかにすることはできないが、慶長六年（一六〇二）の検地から、慶安二年（一六四九）検地に至る石高の急速に増加したところに逐次進められたと考えることはできないだろうか。この点については究明を要するが、かなり古い時代（少なくとも元禄以前）から、北殿・南殿・田畑・神子畑の各村々は天竜川から用水を堰き上げて、氾濫原のかなりの部分が水田化されている。

江戸時代でも天竜川からの用水の堰き上げは百姓自善請で行なうことは困難であつたらしく、幕府から費用を出してもらって行なう御普請が多い。それでも初期の段階では「杭、そだ、じゃかど、芝にて堰き上げ候」というような程度のもので、それが次第に江戸時代中期から沈棒・続き棒・荒牛・聖牛等が用いられるようになり、また「天竜川、黒川井は大泉川を伏せ越し引き来たり申し候」というように、伏せ越し樋を造って大泉川の下をくぐらせて用水を引くかなり高度な土木技術を用いて水田を造成している。

また、小沢の用水をより広い耕地に有効に活用し、冷水を暖めて使うため溜池も造られた記録があり、しだいに水田の乾田化が進められている。しかし、天竜川の氾濫原の水田は、当時の土木技術の段階では洪水を十分に制御することは極めて困難なことで、繰り返される洪水のため井堰や用水が破壊されるのみでなく、田地も川欠けになり、あるいは石砂入りになるなど、極めて不安定な耕地が多かった。（第四章第二節水との闘い参照）

(2) 畑地

伊那街道に沿った部落周辺の畑はこれを畑畑または里畑といって二毛作の可能な土地であったが、上の洪積台地上の畑、いわゆる原畑はかなり生産力の低い土地であった。江戸時代の農民は原畑を次のよう

に評価している。

「麦は色畑計り時き原畑には麦作時き申さず候。原畑に麦時き付け仕り候ても軽土奉国故奉結れ生い立ち申さず候。原畑の義は秋毛計りに御座候。」

「原畑の義は黒ぼい畑地に御座候間栗・稗・黒大豆・油住其の外蕎麦・大根何れも一毛作・小麦の儀一切時き付け申さず候。」

「畑方原中風通し、土日悪敷く御座候故日播・水播・風損共痛み強く。」

このように畑の中の大部分を占める原畑を「黒ぼい」、「軽土」と称し、また、早害・風害・寒害等を受けやすい土地と理解し、それに適した作物の選択が行なわれている。検地帳や土地関係文書によく出てくる「卯の原畑」というのは、貞享四年（一六八七）卯の年に新田検地請けをした畑であるが、大部分がこの洪積台地上の新開畑であつて原畑の中でもさらに一段生産力の低い畑として格付けされたまま、江戸時代後期まで区別されている。

また、酸性土壌であるという認識は生まれていないようで、石灰が既に江戸時代後期には水田に施用されているが、畑に石灰を施用したという記録は残っていない。しかし灰類はかなり活用されている。また、堆肥の施用はこのような土地では極めて有効であることが経験から判明したのであろうか、その努力は真剣に行なわれているように考えられる。

2 作物の種類・品種

(1) 水田の二毛作

水田に稲が作られるのは当然のことであるが、当地では二毛作が行なわれたのだろうか。

各村に残された明細書上帳に次のような記事がある。

「田方秋毛一毛作、田麦は一切作り申さず候。」（天保一四年）

「田方の内両毛作御座候。」（宝暦四年）

この明細帳の記載を見る限り二毛作は少しもないようにみえる。しかし、江戸時代初期の「万壽物旬并びに取り納め付け覚え」という資料に次のようにある。

「麦田、苗はんげを五十日はけてよく御座候」

「麦田、拾六だん四束、かぶり七俵半」(天和二年)

「麦田、二所 合九俵半斗 揚麦」(天和二年)

「十八だん四束五月二日から申し候」

鮎子 五俵半 麦田」

(貞享三年) (阿屋文書)

これによると天和(一六八一—一八四〇)貞享(一六八四—一八八)のころには小面積であるが水田裏作として麦が作られたことが確認できる。元禄以降このような記録が見えなくなっているところから、明細帳のような水田裏作が無くなったのであろうか。二毛作が普及するためには水田の乾田化と、地力維持特に魚粕・油粕等の連効性肥料が必要であるといわれているが、この地方ではこの条件が整わず、さらに寒国であるから表作の稲への影響が大きいために行なわれなくなったのではなかろうか。

(2) 畑作物の種類

畑作物としてはかなり多くの種類が栽培されている。村内に残されている古文書に出てくる作物名を挙げると次のとおりである。

△普通作物

麦類—小麦・大麦・燕麦・蕎麦・はとむぎ

その他の穀類—粟・稗・蕎麦・きび

豆類—大豆・小豆・ささげ(大豆豆)・なたまめ・小角豆

△持用作物

酒造・胡麻・麻・煙草・苧(からむし)・桑・こんにやく

△野菜

果菜類—なす・漬瓜・なんばん
根菜類—大根・人参・牛蒡・蕪・里芋・つくねいも・唐芋
葉菜類—漬菜・ねぶか・わけぎ・苺菜

△果樹類

桃・栗・柿・りんご・胡桃

水田からの収入である米は、そのほとんどを年貢として現物で出すか、代金納のために販売しなければならぬので、畑作物から上がる小麦・大麦・粟等は農民の主要食糧として大切なものであった。稗は主として牛馬の飼料と考えられるが、郷蔵の貯蔵に稗が多いことをみると飢饉等の時は人間の大切な食糧となったようである。大豆は味噌や醤油の原料として、また豆腐、きなこ等大切な蛋白質源となり、麻や苧は農民の自給衣料の原料として栽培されている。

野菜は資料に残っている種類よりは、実際に栽培されたものよりも多いと思われる。野菜のうち当時大根となすは特に多く栽培されている。大根は十数人という大家族の例ではあるが年々六〇駄ほどの収穫を上げている資料があり、なすは一戸で五〇本、一〇〇本と苗を植えている。この時代味噌やしょう油・酢などの作り方や、各種の漬物の方法を書きとめたものなど、自給自足の農民経済を想像させるものが多いが、大根・なすなどの漬物は自給自足の経済にとって極めて大切なものであったのではなかろうか。

このようにして畑は農民自身の食生活・衣生活のほとんどを支える大切な場所であった。商品作物としては煙草が一部に作られ、桑は畦畔等に植えられていたがどの程度に養蚕が行なわれたか定かではない。

(3) 作物の品種

ア 稲の品種

表3-30 郷土における近世中期の稲の品種

天和年間 (一七八一—一八三)	貞享年間 (一六八四—一八七)	元禄年間 (一六八八—一七〇三)	宝永年間 (一七〇四—一八〇)	正徳年間 (一七一—一八五)	享保(四年迄) (一七一六—一八九)
○西郷 西国 出羽 〇地玉 京上良 〇小野 二穂 〇餅 大野 餅	早穂 〇白葉 〇四穂 小野 〇地玉 餅 白玉	早仙 〇白葉 青早穂 〇地玉 小野 与穂 〇四穂 〇餅 笑輪 〇餅 大左士 〇餅 見出 〇餅	〇笑輪 与穂 〇大左士 黒子 豊後 小野 福島餅 〇地玉 江戸餅 見出 越後餅	〇笑輪 八八日 見付 小野 上良 〇坂東 大左士 〇餅 〇見出 江戸餅 地玉 上良餅	〇笑輪 大左士 〇地玉 寛輪早生 〇坂東 〇見出 塩尻餅 早見出 江戸餅

天和年間(一六八一—一八三)から享保四年(一七一六)の間、一農家の「年々取り稼ぎ覚え」、「作毛取り付け覚え」等の記録が残っており、それに出てくる稲の品種を挙げると表3-30のようである。この記録は田畑村の一有力農家の四〇年に及ぶ農業に関する貴重な



図3-31 右 萬商物包餅びに取り納め付け覚え
左 年々取り稼ぎ覚え付け有書(門屋文書)

記録で、一農家の作付けした稲の品種数としてはかなり多いが、実際に多く栽培している種類は三〜四種で、特に〇印をつけた種類を多く作付けている。また、元禄一二年(一六九二)の南殿村明細帳に「稲毛の儀、よほ・おの・志しは・み出し・こぼれもち・右の分植え付け申し候」という記載がある。

ここにあげた品種の中で出羽・小野・笑輪・坂東・塩尻・江戸・西国等地名と関係すると思われるものがいくつもある。おそらく、それぞれの地域で育成されたものが伝わってきたものである。また、元禄年中以降になると見付・見付・早見出等のように選り穂という突然変異の結果生ずる優良な性質を、個体選抜によって生かしていく育成方法を暗示する品種名が出てきている。当時の品種の育成方法はほとんどこの方式によったものと考えられるが、農民の品種に対する関心の高まりを示している。これが以後の生産力の上昇に貢献しているものと考えられる。

熟期の早晚については「奉国故九月中、(霜降)前に霜降り候間、早稲・中稲ばかり」、「(天保三十七殿村明細帳)「早生福力勝ちに作り申し候」(定勝田田畑村明細帳)というように、多くは早生、中生品種を中

(門屋文書より)

表3-31 郷土における近世中期の畑作物の品種（向屋文書より）

作物	時代	天和年中 (一六八〇—一六八三)	貞享年中 (一六八四—一六八七)	元禄年中 (一六八八—一七〇三)	宝永年中 (一七〇四—一七〇九)	正徳年中 (一七一一—一七一五)	享保一—四年 (一七一六—一七一九)
小麦	小	蜂頭・赤坊子 甲州小麦 松川	蜂頭 甲州小麦 松川	蜂頭・上牧 甲州小麦 松川・白練	練精 甲州小麦 松川	蜂頭・ひろこ 甲州小麦・白坊子 松川・すめき	白坊子・ひろこ 蜂頭・松川 甲州小麦
大麦	大	早麦 かぶり	鍋大麦 六角 あゆこ	えり大麦 六角 あゆこ	穂長 六角 上州	中仙麦 六角	中仙麦・六角 □エ門仙 長大角・長七麦
粟	粟	えのこ	三郎栗・鍋足 細路・日指 赤栗・熊河	三郎栗・鍋足 細路・日指 赤栗・熊河	十当・赤日指 日指・鍋足 羽広・むく栗	見付栗・日指 鍋足・羽広	細穂・金沢 日指・羽広 鍋足・餅栗
稗	稗				畦稗 畦稗	畦稗・打稗 きり稗・座頭不知	畦稗・きり稗 打稗
大豆	大豆	黒大豆 大豆	黒大豆 大豆	白大豆 黒大豆 絵かき さけこ	白大豆・黒豆 赤大豆・鞍掛 青豆・青ばた 絵かき	白豆・黒豆 赤豆・青豆 粕豆・黒豆	黒豆・絵かき豆 白豆・青豆 赤豆・鞍掛 粕豆

心に作られていたようで、中には「八八日」という品種のように旧暦七月末日に収穫する（資料では多くは焼米にしている）極早生品種もあらわれている。

イ 畑作物の品種

主要な畑作物の品種については毎年の「作毛取り付け覚え」（前掲）によって、一覧表にして示すと表3-31のようである。

畑の作物の品種の分化についてみると、小麦、大麦については既に天和、貞享のころからかなりの分化がみられ、粟や大豆についてみると元禄のころから分化が見られる。稗は品種の分化が最も遅れ正徳の

ころから分化し始めている。全般的にみて元禄年代以降稲作と同様畑作物についても品種への関心が高まっていると考えることができ、農民の関心が耕地の拡大への意欲もさることながら、反当たり収量の増加という方向へ指向しているように考えられる。

3 育苗

(1) 稲の育苗（苗代）

元禄の時代の史料に「種子浸し覚え、萬壽き物匂」という記録（図3-31と32）がある。この記録を中心に江戸時代の育苗の技術をみていこう。



図3-32 右 麻綿元、左 種子浸し覚え（門屋文書）

種子の浸種 「初浸しの事久敷く浸すが能く御座候」、「初浸すことは十七、八、廿日も浸してよく御座候」として、かなり長い日数浸種することを勧めている。しかし、江戸時代後期になると浸種に対する反省が一般に行なわれるようになっており、伊那地方においても五、六日の浸種でよいということに変わっている。次に、「白湯は七日八日十日にてよく御座候、久しく浸すは遅い申し候」とあり、既にこの時代に催芽が行なわれていた。しかし、白湯がどの程度の温度なのか、七、一〇日これに浸すことによってどの程度の芽出しになったのか不明である。初期には比較的長く芽（根）出しを行なったようであるが、それも、播き付けの際に芽を傷めて結果が良くない。芽出しの程度を少なくするか催芽しないで播く方が種量も少なく済むという反省が多くなった（古島敏雄『日本農業技術史』）といわれているが、久しく浸すは遅い申し候としているのは同じ反省に基づくものであろうか。

播種期

「苗仕り候積りは五月の中を五十日かけて親蒔きよく御座候」とあり、旧暦の五月の中（五月後半の節季で夏至に当たる）より五日前、つまり夏至（太陽暦の六月二日ごろ）より五日前の五月一日ころまでに播くのが良いとしている。また、八十八夜前日（五月一日ごろ）までが良いと書いてあり、苗代期間はだいたい五〇日としている。「麦田苗ははんげを五十日かけてよく御座候、是もまた五十四、五日かけてもよく御座候」とあり、半夏生の五〇（五十五日）前の五月一日前後を麦田苗代の播種期としている。

播種量 播種量について各村明細帳に記されたものをあげると、次のようである。

	元禄二年南 殿村明細帳	宝暦四年田 津村明細帳	寛政六年神子 柴村明細帳	天保三年北 殿村明細帳
上田一反につき	粟一斗二升			
中田一反につき	粟一斗二升	粟一斗五升		粟一斗五升
下田一反につき	粟一斗三升	粟一斗		粟一斗
新下田一反につき	粟一斗四升			

これを見ると本田一反歩当たり種粟一斗二升が必要であると記して多量の種粟を播くことにしているが、明細帳が領主への報告書であるという性格から多めに記されていると考えられる。前掲の「種子浸し覚え」では「大方の積り一畝に付き粟一升配りにて苗能く御座候」、「大方老俵取りに初老升積りにてないまい能く御座候えは沢山御座候」とあって、元禄のころで本田一反につき粟一斗、苗間が良ければ八升（反取積四石として）ぐらいでよいとしている。江戸時代も後期になるにしたがい播種量も少なくなり、天保（一八三〇～四四）ごろには反当り六升ほどになっているようである。

苗代面積 苗代の形式は水苗代の平苗代であった。次第に踏切りを

作って短冊形に播かれるようになったようであるが、「毫坪に五合配り又は六合積りにて作蒔き候ば能く御座候」としている。これから本田一反歩当たり播種量を一斗として苗代面積を計算すると反当たり一七〇坪ということになる。蒔播きによる健苗育成ということでは農民意識には当然あったものと考えられる。また、事実、時代が後になるにつれて四合播き、三合播きというように坪当たり播種量が減少してきている。

苗代管理 播種に当たった後の水の管理について「蒔き候前々日しめ、翌一日干し、其の夕方水かけ翌朝蒔き候得ば、水すみ干しつけ候間ゆり立ち申さず候」(『県史資料第四巻』)とあり、播種後の管理については、「苗仕り候時き候わば先ずとり、そのめ仕りてよく御座候。油断仕り候へば根枯れ、とりくいたなりなり申し候」として、かかしを立てて雀の害を防ぐことを述べ、水の管理については「根蒔三日と云うに身ほし仕り能く御座候」として、発根を促して水苗代におけるころび苗の防止法を説いている。また「苗仕り候に水出はな、ごみほし候処悪敷く違ひ」として、冷水掛り、有機物等による水苗代腐敗病に対する注意と思われる記事もある。

(2) 畑作物の育苗

畑作物ではなく、煙草の育苗が行なわれているので、その育苗法を見ることにする。

なすの育苗 「蒔種子秋蒔の本より取り物に包み土へ掘りいけ候て、下に砂を敷き蒔いて古」(『年々畑畑に蒔く悪し、葉落ち申し候』)。「蒔盆にまびり蒔くは不生に御座候、すなにもみほし蒔きて能し、またすなの上蒔きこ座候、又は作りこひの上蒔く候」、「蒔は徒くりこひの上蒔き白水かけて仕り候よく御座候」、「蒔早く出来し申し候には先ず、古敷き手桶などに立春に罷り成り候わば土置き、火の近

所に置く、外ふせの人のふせる時には植え候えば早くなり申し候」(以上「畑方覚え」(門屋文書)とある)。

下に砂を敷いて排水を良くする工夫や、厩肥の上にまいて、その醗酵とその肥料分を利用するなど、長年の経験から好結果を得られた方法が述べられている。

煙草(長命草) 「たばこ苗場を年々替えて彼岸蒔き能く御座候、日陰は悪く、日向能く御座候」、「長命草種子蒔き候は先ず下地成る程こやし置き、其れをこなし、成程つちにたきふみつけ返して其の上蒔きはき、其の上をふたをぬき置く。めみえするときふたを取る、ふた仕り候は悪敷く候」、「同植え申す句、はげん前後時分植え候わば切虫御座候」とある。(以上「畑方覚え」(門屋文書))

4 田植えと畑作物の播種

(1) 田 植 え

田植えの時期は「田植日定め申し候積りは中(夏至)より六日七日八日かけて早蒔植えを定めてよし、又おく植えを中より三日四日前に定め仕りてよし」、「田植えの旬中前二・三日間よきと申し穂揃い仕り候と申し候」として、早生種を太陽暦の六月一四・五日から、晩生種でも六月二〇日ころまでに植えることが良いとして、かなり植付け期に心配りをしている。

田植えの子定日が定まるとそれに合わせて田の方の準備をする。田打ち(耕起、荒代播き)については特に記録が残っていないが、田打ちには万能鉞、あるいは鋤が使われ、荒代播きには万能鉞による人力のほか馬鉞が広く使われたようである。

これから刈敷刈りになるのであるが、石高二五石、水田一町五反ほどを経営する農家において次のような予定を立てている。

「刈敷山登りし積り、田植に定め日指しより十九日から二十日前に山



図3-33 南畝地主手作り経営の田植労働力「覚」より（南畝酒屋文書）
5月10日には12人5月13日には10人雇っている

「登り能く候」、「山、里共十一日程にて刈敷おえ申し候、それより三日程ふませ仕り候えは能く御座候。惣合十五日程にて植えしるに罷り成り候間、早乙女植え日を定めてよく御座候、早瀬おく共楽に仕舞い申し候。」この刈敷刈りは最も稲作の中で多くの労力を必要とし、さらにこれを田にひろげ、馬や人の足で踏み込むふませを行ない、その後を田下駄（大足）をはいて全面を歩いて刈敷をきれいに踏み込み地均らしをして植代ができあがるわけで、計画的に作業が進められている。

田植えの方法は水を小水にして大勢の早乙女が入り、一列に並んで後へさがりながら植える。縦横の間隔は見当で植える不正条植えであったようである。田植えの能率は、「早乙女」
「そうとめ積り一人は柳四俵取り積りにて植え申し候」とあり、一人一日四畝と考えられていた。水田を広く持つ有力農民はいずれも大勢の早乙女を使って田植えが満期に終わるように心掛けていた。

（南畝酒屋文書）
唐子田植え覚え

五月十一日 輪田 大五

一 早乙女十人 混田 羽場垣外

五月十六日中の間日

つふた 甚兵衛

曲長 沖新田

一 早乙女十一人積り 一ツ長

五月廿日前日苗取り置き

中過ぎ 四日

一 四人早乙女を遣わし残りで植え

（五月廿四日男四人来る）

五月廿一日能休仕り候

「作毛取り納め覚え」より

(2) 畑作物の播種

播種期 「萬荷句並びに取り納め付け覚え」（図3-31）を中心に、

江戸時代の畑作物の播種期、定植期を拾い出して表示したものが表3

表3-32 江戸時代畑作物の播種期

作物	播種期	定植期
麦	○十月上旬後七～八日	一〇月二〇日前後
粟	○五月中旬一〇日～一四、五日前よし ○粟句山本にても中前四、五日もしゅんと仕り候 ○夏蒔きは十月上旬九日～一日又は七・八日前に蒔くよし	六月七～一二日 六月一七～一八日 ?
大豆	○五月中旬二六日 ○五月中より前廿二、三かけてよし、又は廿日苗上吉	○五月二七日 ○五月一八～二二日
蕎麦	○後岸五〇日前	○八月一日
麻	○五月中旬二六日	○五月二七日
煙草	○後岸にならば蒔くよし ○はげん前後時分植える（定植）	○三月一七～二〇日 ○七月二日ころ
茄子	○後岸ころに蒔く ○五月中前植え申し候（定植）	○三月一四～二二日 ○六月二二日ころ
漬瓜	○八十八夜前後にまく	○五月一～二日ころ

（門屋文書）

一32である。播種期を定めるには旧暦では月日で決めても年により大きい変動があるので、春分・芒種・夏至等の二十四節や、彼岸・八十八夜等の雑節を基準にして定めており、播種期を非常に大切に考えている。その資料を次に掲げよう。

夏毛蒔き付け覚え	新果 中前十六日半切畝	粟 中前四日 西垣外東うね四
三郎 式斗九升	一石石式斗積り	十 市平畑
中前十五日に 南畑に蒔く	蕎麦 彼岸前五十一日 式斗式升 南切	
吉	蕎麦 彼岸前五十一日 式斗式升 南切	
一石石三斗	蕎麦 彼岸前五十一日 式斗式升 南切	
粟 中前四日 踵免東	蕎麦 彼岸前五十一日 式斗式升 南切	
一石石 五斗	蕎麦 彼岸前五十一日 式斗式升 南切	

(元禄元年「取り納め付け覚え」より)

(門屋文書)

これは元禄元年(一六八八)の「夏毛蒔き付け覚え」の一部であるが、蒔いた時には作物の種類、蒔いた日、畑名、時には播種量を記入しておき、収穫したときに収量とその良し悪しを書き込んでいた。この例では粟の所に「か所吉、蕎麦の所に悪し、早く悪敷く候」と播種期に対する反省を書き込んである。このような例は麦などにも多くあり、播種期は当時の農業技術の中で品種の選択とともに最も関心の高い事柄であったようである。

播種量 主な畑作物の播種量を明細帳から拾いあげると次のようになっている。

播種量はその時期や畑の場所、地味等によって異なるので簡単にその多少をいうことはできないが、粟について「一畝に一台よく」とい

種類	反当播種量	種類	反当播種量
大麦	式斗五升一三斗	粟	一升五合
小麦	式斗五升一斗五升	稗	式斗五升
大豆	四升一五升	油荳	一升五合一斗五升

う資料もあり、明細帳上帳という性格から多めに記入されているように、実際はこれより少なかったと思われる。「粟にても稗にても日照り候ときは少々成程薄く蒔き候て克く、必ず厚く蒔くべからず、一尺に一本又は五寸に一本にても能く御座候。あつく御座候得ば稗本も地に出ず候」として厚播きをいましめていた。

播種の方法 播種の方法についても多くの資料はないが、「粟にても大根種にても大目 तरीには、蒔く五日六日前より油に浸し、又干して蒔くは能くはえ申し候」、「大根種子夜露に四、五夜もつゆ引きてよし、能くはえ申すと有り、虫食わずと云う」、「日照りの年に当たり作物、粟、大根等はえ申す間敷くと思ひ候わば成る程下を踏みつけ、その上に蒔き土を薄く懸くる能く御座候、厚く懸くは悪敷く候。又蒔き申す上を返し踏みつけはえかえ申し候」等、原畑の乾燥地農法とも言ふべき方法が記されている。(前掲「萬壽物知井」に取納め付け覚え)

5 肥料

(1) 水田の肥料

「田の義の義第一刈敷、馬糞こい、灰、下糞等入れ申し候」(元禄一二南院村明細帳)「田方肥しは入会山にて草刈り、肥に仕り候」(宝暦四田畑村明細帳)とあるように、水田の肥料としては刈敷が中心で、厩肥、灰、人糞尿等が補助として用いられた。

刈敷 田植え二〇日前ごろから入会刈敷山の山の口があき始めるのをまわって一斉に刈り始める。水田一反歩に入れる刈敷の量は一〇、三〇畝であるといわれるから、一町歩の水田には一〇〇一三〇〇畝が

必要になり、これは大変な日数と労力を必要とする仕事であった。次に一農家の刈藪刈りの例を掲げてみよう。

刈藪刈り

五月八日に

四月廿七日上る植付け十八日前に上

大清水

式拾三畝

る

山草

式拾だん

市沢 五日 六拾畝 馬四匹

大泉所 五月十日

式拾だん

火打なぎ 三日 三拾六畝 馬三匹

大泉所 中九日前に明け 拾式だん

立山にて八日刈り 合九拾六畝

大泉所 五月十一日に 拾式だん

野山 三拾式畝

大泉所 五月十六日に 八だん

〔種子蒔き覚え〕より 門屋文書

これは宝永元年（一七〇四）の記録でこの家としては刈り取り量の多い年であるが、四月二七日から市沢・火打なぎと称される入会刈藪山に登って刈り始め、市沢の五日間は馬四匹を使って六〇畝を刈り運んでいるから一日三回運びであり、火打なぎの三日間は一日四回運びの計算になる。一三日の日数を使って全部で二〇三畝の刈藪を刈り運んでおり、この農家の水田面積は一町四〇五反であるから一反歩当たり一四〇五畝ということになる。

草場のある農家は刈藪の代わりに草場草を刈って水田に入れた。草場は普通冬季間湧水等を引き掛け流して草の生育を旺盛にするので、良質大量の草ができ一反歩の草場で五反歩の水田に施す草がとれたといわれている。

厩肥 田植終了後間もなく牛馬の飼料及び糞草とする林野での草刈りが始まる。飼料の残滓と糞草は牛馬に踏み固められて厩肥になる。また、土用過ぎに刈られる夏草も厩肥の大切な給餌となった。夏草をたくさん刈って馬廄に入れて踏ませ、より多くの厩肥を作ることが当時の農民の大事な働き場であったのである。そのほか糞や糞、糞

糞等の糞も大切な厩肥源となった。こうして大量の厩肥が作られるが、当村のように畑作の多い場所では厩肥の大部分は畑作の欠くことのできない肥料として使われ、水田にまわる部分は少なかったようである。

石灰 石灰については天保八年（一八三七）七久保村の「石灰田糞に付き取極め議定証文」(『農業史料第四巻』)という資料の中に「近年村方一統田糞に石灰多く遣い候に付き」とあり、また、安政四年（一八五七）に箕輪領の総代として大泉村、福島村等四か村の村役人が小野石灰焼き進止めの解除を願って松本御役所あてに出した文書の中に、「石灰の儀は当村専ら田方の糞いに用い候」、「石灰を田肥に用い可き儀は兼ねて仰せ出されもこれ有る事に付き、先年試みとして用い候村々御座候所夫より温蚊、滑虫の憂いこれ無く、却って地味和らぎ実法、方宜しく取り実も増し、米産とても朝が已前に相替らず追々広く田肥に用い來たり候」とあり、さらに、「田方の糞い多分相減り、悉く不足仕り候ても石灰に代り候田肥外にこれ無く候得ば、自然と糞いに不行き届き当已田方一郡一同若し不熟の場にも至り申す可きやと恐怖痛心仕り」とあり、江戸時代後期には石灰の使用はかなり普及し始めており、刈藪を中心とした水田肥料に石灰を併用することの効果を知っていたように思われる。

(2) 畑作の肥料

「畑こやし厩肥、下糞入れ申し候」(『南殿明細帳』)というように、厩肥、下肥（人糞尿）が用いられている。「畑こやし原草山草仕り候」(『享保五大泉村明細帳』)とあるが、これは原草、山草を生のまま肥料としたのではなく、作り肥にするか牛馬に踏ませて厩肥として用いたものである。このようにして畑作の肥料は厩肥が主体であった。

下肥は厩肥と並んで畑作の重要な肥料であって、広い便所を主屋の

近くに造り、また、別に肥溜を作って蓄え熟成させておき、播き肥追肥等に使われた。灰も大切な肥料として毎日のいろいろの焚落としての灰を蓄えておき施用するのみでなく、入会山等で焼いてくる青灰等も多く使われている。広い畑地に施すには自分の家の焚落としての灰や下肥だけでは不足するので灰や下肥の売買が行なわれており、大きな百姓はそれらを買って蓄えておいて使っている。次の資料はそれを示すものである。

屋敷請け取り覚え
丑卯月廿五日
一畝 寄俵 河家より取る
寅正月二日に
一畝 武桶 伝助より取る
一畝 寄俵 河家より取る
右武百文丑卯月四日後

八月廿三日
一畝 寄俵五把 五兵衛家
同日
なる木 廿本 代百文 同人
八月廿三日
一畝 二桶 取る
以下略

(門屋文書)

肥料はどのようなにしてどれほど施されただろうか。適当な資料がないが、左に麦作の例をあげよう。

○貞享二年麦作施肥例

大麦 上ごい 麻畑
ひきこみ 四げんだ
九月十日に蒔く 篠田栗中
小 上ごい ひきこみ
九月十日に蒔く 田の尻
小 上ごい 甲州小麦

○正徳二年麦作施肥例

大麦 八月廿三日付け
馬屋こい三五畝 北殿畑
五斗 九月十八日
大麦 八月廿四日付け
馬屋こい一八畝 神子柴畑
式斗五斗 九月十九日
大麦 八月廿四日付け
馬屋こい九畝 麻畑
大麦七斗 九月十九日

(門屋文書)

この貞享二年(一六八五)の例は施肥の方法として「ひきこみ」と「上ごい」の二種があがっている。ひきこみとは畦を作ったその中に厩肥を引き込む施肥であろう。上ごいは種を播く前か、種を蒔いた上に覆土しその上にまいたものかこれだけではよくわからないが、肥料は下肥もしくは灰、あるいはその両方ではなからうか。正徳二年(一七二二)の例では馬屋こい(厩肥)が播種の二〇日以上前に畑に運び出されており、施用量を計算すると、反当一四一八畝となり、一畝三〇貫(一二・五畝)とすれば四二〇貫(一五・五畝)と五四〇貫(二〇・五畝)となり、かなり多い施用量となっている。

なお、福沢家農事帳(前掲)には次のような記録がある。

「大根 志反五畝 種八合にてよし、灰四拾畝 馬屋こい三拾畝」
「そば 種九升 肥天びん八ツぬか八ツ」
「灰寄俵に寄升五合人れ灰不足のときは二升にてもよし」

商品作物あるいは二毛作の一般化している地方では、江戸時代後期には干鰯、油粕等が肥料として用いられたといわれているが、この地域ではどうであったか。中馬の付けもどりの荷物の中には少数の粕類、干魚が入っており、前掲福沢家農事帳に大根の肥料として油粕の文字があるが、一部の煙草以外特別の商品作物が作られたとは思われず、魚粕、油粕等の購入肥料は当地ではまだ使われなかったのではなからうか。

6 管理と病虫害防除

(1) 水田の管理

田方用水の儀折々干し乾し、土中へ陽気行き候えは格別実入り宜しき地に候。三土地にも寄り申すべく候得ば一概には心得難き事に付き、是迄馴れ致し申さる儀に候わば、村々の内先ず少々づつ左の地に随いためし見候

操致す可く候。則ち奥州にて操米式袋見せ申し候。

一用水の儀、植え付け済み二番草取り候後三日、三番草取り候後又々四三日水を引き去り干し付け候事。

一七月中右の通り兩度乾かし付け、尤も其の間も随分浅く入れ置き申す可き事。(以下略)

〔県史資料四巻〕

これは天明八年(一七八八)幕府から出されたものを、飯島御役所で写して村々へ出した農事触れ書であつて、どの程度一般に普及したか不明であるが、中干しを実施することを奨め、平常時の灌水はできるだけ浅水にするように説いている。

除草については、前記引用文に二番草、三番草とあるように二、三回の除草が行なわれており、穂稈取りについては「随分早く苗代斗り四回、五回も自身氣をつけ候得ば外は取らず候共年々減じて無き様に相成候」とあり、苗代のうちに稗抜きを徹底することが良いとしている。

(2) 畑作の管理

畑作の管理については当村からはまだ資料が発見されていない。それで福沢家農事帳(前掲)に出てくるものを掲げ参考としたい。

粟は、井かいもの時土用中式番打ちして置き、土用明けて井かいてよし、尤も井かい候ときかたく候えはむだ穂になると申すこと也、金入り手にて井かいながらおこし候様申しつく可き事。

「夕顔は、掛け肥はさわり多し、つる余糧のび候時節真を止め枝ばかり助け置きてよし、むだ花咲かせぬよう日々取り尽し候えは本花勢いよし、数少く付き候えは大きく成り候え共数少なきも損なり、相応につけ候様に致すべし。」

「木瓜、是も枝三段程見え候節早く真を止め枝ばかりに付け候てよし、むだ花さかせぬがよい。」

「春より氣を付け、小便時々かけ生い立ち次第何か度も井かい上げ候えば土中に成り候分白し、折々井かい候てよし。」

(3) 病虫害防除

畑作の病害については稲熱病等の害があったものと考えられるが、資料がなくこれを明らかにすることができない。害虫については災害として蝗害がしばしば古記録に残っており、先にあげた資料の中にも石灰を施用することによって「温蚊、滑虫の憂い無きに付き」とあり、虫害については感心が高い。次に害虫駆除についての農事触れ書をあげておこう。

稲作虫付きの節防ぎ方儀、土地に寄る品々の取り計いこれ有り夜分畔にて火を焚き又は毒花を流し、或は空鉄炮を打ち候様なる取り計いもこれ有り候得共、虫付き候田方へは鯨の油を壺に二、三滴もそそぎ候えは虫立ち候由、鯨の油これなき土地は陸に風上より石灰をふりかけ根虫に候は用水口より石灰を流し候得ば虫去り候由に候。尤も石灰にて翌年土地より候様も存じ候わば、冬より竹葉を入れ置き春に至り切り替へし候得ば地のよりこれ無き處に候間、此の旨兼ねて申し教え置き候様此の度厚き思召を以て上より御沙汰に付き申し渡し候。

右は村役人共心をを用い右手当の品才覚致し方等兼ねて工夫致し置き候様致す可き事。

〔天明八年〕
申七月

飯島御役所

〔県史資料四巻〕

畑作物の害虫防除については、「煙草植え申し候旬、はげん前後時分植え候わば切り虫脚座無く候」というように、植付けまたは播種期によって虫害を防ぐことを考え、また、なすに「若し虫付き葉をいため候わば、たばこの骨ひしぎ、水を入れ一晝夜浸し置き水を掛けてよし」として、ニコチンを害虫駆除に使っている。

猪、鹿等の害は江戸時代の農業にとって大きな問題であつて、猪を

第2節 村の姿

表3-33 年次別稲の反当収量(貞享1-享保2)

年度	貞享1	2	3	4	元禄1	2	3	4	6	8	10	12	13	16	宝永2	3	正徳1	2	享保1	2	平均
水田名																					
道 尽 東	2.28	2.20	1.91	1.83	1.90	1.70	2.08	1.38	1.97	1.53											1.88
道 尽 西	1.90	2.11	1.91	1.56	2.19	1.40	2.20	1.66	0.50	1.56	1.79										1.71
精 木 田			2.50	2.19	2.18	2.26	2.78	2.75	2.61	2.60	3.02	川欠									2.54
淡	1.52	1.62	1.62	1.33	1.50	1.27	2.03	1.63	1.16	1.89	2.08	1.60	1.96	2.19	1.84	2.15	2.25	1.11	1.80	2.07	1.60
羽場貝戸	2.00	1.64	1.91	2.09	2.61	2.29	2.34	2.77	2.63	2.25	2.27	2.43	1.93	2.49	2.04	2.75	2.47	2.18	3.38	2.98	2.36
藁 田	1.60	1.39	1.31	1.28	1.56	1.61	1.92	1.74	1.40	1.54	1.81	2.02	1.60	1.91	2.04	2.06	2.02	2.02			1.71
平均 (下3枚の平均)	1.71	1.55	1.62	1.77	1.89	1.72	2.09	2.05	1.73	1.89	2.05	2.09	1.83	2.20	1.97	2.32	2.25	2.10			1.93
反収の増加	1.80										2.10										

備考 1 出来るだけ長年月作られた水田について記録のはっきりしている年度のみ計算した。

畑作物の収量は前年秋に播種した麦が夏毛として収穫される。麻は

大根菜	大根	蕎麦	大豆	飼豆	昨豆	稗(恵し)	粟	黒麻	麻	大麥	小麦	△元禄九年(一六九九)
	五六駄	三俵三斗	二石八斗	三三駄	一石四斗	三俵	八石六斗三升	一〇把	四ノ一〇(勿米二俵半)	一八俵三斗	一石	
大根菜	大根	蕎麦	大豆	飼豆	昨豆	稗	粟	黒麻	麻	大麥	小麦	△正徳二年(一七一七)
	九駄	一七二連	四五だん	八俵	一斗七升	五俵三斗五升	一〇俵五升	四斗六升	八升三合	一三俵三斗一升	五石三斗二升	

(同屋文書)

年間分掲げると次のようである。

(2) 畑作の収穫

田畑村の地主手作り経営(石高二五〇三〇石)の畑作物の収穫量を二

割合を五合揃りとして反当たり収量を計算したものが表3-33である。この表でみると貞享・享保初期の段階の平均反収は一・九三石である。水田の枚数が少なく上中下田の品等別の比較をすることは無理であるが、収量の多い水田は反収二石五斗余、少ない水田は一石五斗余である。また、年度別にみてゆくと、前半の平均反収一石八斗、後半のそれは二石一斗となり、技術の進歩による反収の増加が読みとれる。

九月中旬ころ刈り取られ、一〇月に入ると秋毛として種・粟・蕎麦等が収穫期に入る。これらは稲の刈り取りの合間をぬって行なわれるが、また、大豆その他の豆類も収穫をせねばならず、種類の多い作物を適期をのがさずに収穫することは容易ではない。大根、蕪等の収穫は一月下旬にもなる。それにもかからず助郷村として木曾街道にしばしば人足に狩り出される。一回の助郷で往復の時間を加えると四五日もかかる。そのために収穫の適期をのがし猪や鹿や鳥のためにせつかくの作物が駄目になってしまふという農民の訴えがよく出てい

表3-34 畑作物における輪作の状況（元禄一〇〜宝永三年の一〇年間）

畑名	年度									
	北端	ちい畑	鶴免西東	市平西東	四郎太	田ノ尻南北	南畑	平畑	原畑	田ノ久保
畑作物の輪作体系	元禄一〇年	粟	粟	粟	粟	粟	大豆	大豆	大豆	大豆
	元禄一一年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	元禄一二年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	元禄一三年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	元禄一四年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	元禄一五年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	元禄一六年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	宝永一一年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	宝永一二年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆
	宝永一三年	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆	大豆

（作の取毛寛より作成）（同屋文書）

る。

さて、これらの作物の反当収量はどうかであったか。適当な資料が得られないが麦については前年度の播種量とそれの収獲量が記入された資料があり、それによって収獲量の播種量に対する倍率を見ると、小麦で五・五〜一・一倍、大麦で四・四〜五・八倍と非常に少なく、当地方の平均反当播種量を用いて反当収量を計算すると、小麦で七斗〜一石三斗、大麦で一石一斗〜一石五斗くらいになっている。

記録の比較がよく残っている畑のみ記載した

江戸時代の畑作の輪作状況はどうなっているだろうか。「作の取り毛覚え」(前掲)により元禄・宝永年間一〇か年間の畑の作付け作物の状況を表示したものが表3-34である。これによって江戸時代中期の輪作の状況や考え方を知ることができる。

これを見ると畑作はほとんど二毛作を行ない、原畑は一毛作である。畑作は大麦・小麦・大豆・粟・飼料を主体として輪作体系を組んでいる。大小麦、粟等いね科作物が多いので地力維持が困難であるが、大豆の外に馬の飼料と思われる飼料を多くして豆科作物を間に配しており地力維持に心を配っていることがわかる。さらに、大麦と小麦を交互に作付けるなどの配慮も見える。

原畑は大根、菜などの野菜のほか種・そば、飼料などが主体で、ここでも不十分なが地力維持の考え方は読みとることができる。

三 近世の商工業と金融

1 商工業活動

江戸時代は米を経済活動の中心とした時代であり、農民は塩などの特殊なものを除き自給自足を立前としていた。しかし、年貢米を主とした米の商品化は、領主の年貢米の所払いなどの方法を通じて、当地でも活発に行なわれるようになり、さらに、買組の代金納化によって農産物の商品化は一層進み、一般農民もしだいに流通経済の中に引き込まれるようになった。このような状況のもとで、当地においても有力農民の中には積極的に商工業活動を行なっていた。

(1) 上層有力農民による商工業活動

ア 穀類を中心とした商業活動

延宝年代(一六七三―一七八一)は箕輪領は幕府領であり、飯島代官所の支配下にあったが、この時代年貢米の半分は百姓払いにし、残り半分は商人落札による所払い(座地で売却する)の方法を取っている。その

所払いの方法は延宝六年(一六七八)―八年の次の二つの資料によって大要を知ることができる。

伊那郡米ノ御納米所払い入札ノ事、

一米、四千七百拾七石零斗七升 箕輪領

此ノ金三千百八拾七石零分永貳拾七文

但シ金壹兩二付キ壹石四斗八升

一米、三千貳百六拾貳石五斗六升貳合 赤須廻シ

此ノ金貳千貳百三拾四石貳分永百三拾貳文

但シ金壹兩二付キ壹石四斗六升

一米三千四拾七石零斗六合 飯田廻シ

此ノ金貳千五百拾五石三分永貳百三拾貳文

但シ金壹兩二付キ壹石四斗四升



図3-35 伊那郡米(年貢米)所払い入札之事

一米千貳百四拾七石貳斗七升九合

下条領

此ノ金八百九拾兩貳分永百六拾四文

但シ金壹兩ニ付キ壹石四斗

右ノ通り船着落札ニ御座候エバ御せ付ケラル可ク候。前方仰せ聞カサレ候御
定ノ書判形仕リ上ゲ申ス通り少シモ違背仕ル間敷ク候。落札以後買金千五百
兩急度上シ上ゲ申ス可ク若シ相違ハ不埒ニ御座候ワバ御公儀へ仰せ上ゲラレ
如何様ニモ曲事ニ御せ付ケラル可ク候。落札申シ候時逃ゲ申シ候ワバ入札ニ
指シ添エ上ゲ置キ申シ候數金百兩石上ゲラル可ク候。其ノ時馬儀申ス間敷
ク候以上。

延宝八年

信州寛輪領松島 札主 赤吉

申二月十五日

請人 勘太夫

設楽太郎兵衛様

(玉理軒文書)

これは、延宝七末年(一六七九)の年貢米のうちの箕輪領、赤須回
し、飯田回し、下条領分合わせて一万二七三石余の米を數金一〇〇
兩を差し出して入札をしていることを示している。札主は松島村の弥
古で請人が田畑村の勘太夫になっている。入札であるから外にも多く
の札主があったと思われる、これはそのまま落札したかどうかは不明で
あるが、その末年の年貢米について南殿村の清水金左衛門が同様な入
札をしている。

請ケ取り申ス御米ノ事

一米貳千七拾四石九斗九升貳合

箕輪領

一米千六百三拾壹石貳斗八升壹合

赤須回し

一米千六百三拾三石五斗八合

飯田回し

一米六百貳拾三石六斗三升九合

下条領

右ハ信州伊那郡設楽太郎兵衛様御代官所古ル米ノ御年貢米ノ内、拙者共御請
負イ仕リ、当地弘イ立テ申シ候処度々遅々無ク御米御渡シ成サレ、右御米都

合残ラズ儘カニ請ケ取り申シ候。代金ノ儀ハ御米請ケ取り申シ候節都度差シ
上ゲ残ラズ相済ミ申シ候。若シ相違ノ儀御座候ワバ重テ勘定シ直シ仕ル可
ク候。コレニ依リ連判一札仍ツテ件ノ如シ

延宝八申ノ十二月五日

江戸御町

野口半左衛門邸

設楽太郎兵衛様御代官所

柴田宇右衛門邸

西沢武兵衛邸

筒井半右衛門邸

植村与左衛門邸

新井八兵衛邸

(南殿酒屋文書)

これによると、末年の年貢米の所払いには、先に記した弥古・勘太
夫組の外、清水金左衛門・野口半左衛門組も入札に参加しており、清
水金左衛門組が五八五三石四斗貳升を落札していることが明らかであ
る。この落札した米をどのように処理したか明らかではないが、金左
衛門と組んでいるのは江戸の商人野口半左衛門であって、江戸への回
米売却が相当最行なわれたものと推察できる。

この延宝七・八年は米価の急騰した時期であって、米穀商人たちは
このような形で巨額の利益を得たものと考えられる。

元禄一二年(一六九〇)の南殿村明細帳に次のような記載がある。

百姓御年貢米ノ儀 先ノ御料所天羽七右衛門様、設楽源右衛門様、設楽太
郎兵衛様御代官所ノ應ハ持高半分ヲ御拝書申シ候。来ル九月切リニ御世シ下
サレ候。但シ商人落札ニ金壹兩ニ付キ壹石高ノ御勘定ニテ金子上納仕リ候。
残ル半分ハ商人入札仰せ付ケラレ候。

(大衆館文書)

同様の内容が元禄一二年の大衆村明細帳にもあり、年貢の半分は商

人入札による所払い、残り半分は百姓拝借による代金納という形をとっている。百姓拝借についてその具体的な姿は次の資料によって知ることができる。

拝借仕り候御米ノ事

一米百六拾六石五斗三升六合 信州伊那郡長輪領北殿村

此ノ金百九拾五兩五拾文 但シ金壹兩ニ付キ八斗式升壹合替エ

右ハ当村去ル申ノ御物成三分ノ二商人落札金壹兩ニ付キ一升高ノ値設ニテ当九月迄御延売ニ仰セ付ケラレ下サル可ク候。左モ御座無ク候テハ去ル年度申ノ永雨ニテ大分作毛進イ申シ候故、百姓一円夫食持テ申サズ銀ニ及ビ申シ候故、去ル冬御新設申シ上ケ候ニ付キ、拙者共願イノ通り商人落札ニ寄升高金壹兩ニ付キ八斗式升壹合ノ御値設ニテ去ル申ノ御物成三分ノ二当九月迄御延売リ仰セ付ケ成サレ、殊ニ百姓御救イノ為御米ノ内半分旧冬御渡シ下サレ、相残ル分ハ此ノ度御渡シニナサレ、右御米高残ラズ御座ヨリ御渡シ拙者共銘々ニ割リ付ケ御米金カニ諸ケ取リ重々有難ク存ジ奉リ候。然ル上ハ、当九月中右ノ代金ニテ急度上納仕ル可ク候。就ニ此ノ連判ノ内死失ノ者御座候共残ル者共相并ジ御金少シモ滞リ無ク進シ上ケ申ス可ク候。若シ九月中延引致シ御金滞リ申シ候ワバ如何様ノ曲事ニモ仰セ付ケラル可ク、後日ノ為一札差シ上ケ候所依ツテ件ノ如シ

延宝九年酉ノ三月

北殿村 名主 弥次兵衛

組頭 平九郎

金右衛門

設楽太郎兵衛

(外一五名署名捺印略)

(千桐屋文書)

この年は長雨による不作のため百姓夫食不足ということで、年貢の半分より多い三分の二の拝借延売を認めてもらっている。

この年は既に米値がしだいに下値に向かった時期であって、この地の米穀商人の入札の資料は姿を消してしまいが、百姓払いの形はその

後も続いたようで、因作でない普通の年は百姓払いの年は代金納入のため大部分が売買されたものと考えられる。

天和二年(一六八二)から元禄十一年(一六九八)までは、また私領となるが、この時代の米はどのようにさばかれたか、普濟目録によって米の行方を見ることが出来る。

覚

一米百六拾石五斗四升七合 外銀 三百六拾三文

米九石六斗

齊藤孫三郎渡シ

米六石四斗

木下 八郎兵衛渡シ

米五石六斗

木曾 平七渡シ



図3-36 元禄初期神子栄村普濟目録「覚」の前半(大和天文書)

米拾貳石

米九斗六升三合

米四斗三升九合九勺

米壹石七斗九升八合五勺

米五升貳合五勺

米壹斗五升

米九拾壹石八斗

米九石貳斗四升

米四石四斗

米壹石六斗四升三合五勺

米合百六拾石五斗四升七合

右ハ賣ノ納米方ノ勝手形ヲ以テ引合イ勘定致シ相違ナク今皆済ノ者也

（寛政七年）
亥九月廿七日

南殿 金左衛門渡シ

村庄屋給

總代米 此ノ總九十匁九分

麻代米 此ノ麻八ノ百七十五匁

村廻シ飯米

人足不持米 人足六十人

此ノ金四拾九匁貳分

此ノ金五匁貳分

此ノ金貳匁貳分

此ノ金壹匁貳分

四〇俵カエ

四二俵カエ

四四俵カエ

御子榮村義左衛門

（大和手文書）

元禄初期のこのような形の管済目録は北殿村にも残されており、このような年貢米の行方を示す形が一般的なようである。この御子榮村の管済目録によると、総年貢高一六〇石五斗四升七合のうち一〇六石三斗六升が百姓払いの形で、その代金を上納するようになっており、農民はこの百姓払いの米の大部分を上納金を作るため販売したと考えられるが、同時に畑作の雑穀もかなり販売したと思われる。その販売は、当地に適当な市場がなく、当時、高遠、諏訪・松本は穀類の津留めが行なわれていたときが多いので、飯田城下まで付け送りをしして販売したようである。

百姓払い以外の年貢米は、大部分をその村や近郷の有力農民（米穀商を営む場合が多い）や酒屋等に五石、一〇石とまとめて渡している。

北殿村の例では一人に四〇石余も渡している例がある。これは代官役所による販売であって、一部本曾への販売も行なっている。当地では南殿村の金左衛門、北殿村の新兵衛・庄兵衛らがこの米を買い入れていたが、これらの人は当地における米穀商人として活動していたものであろう。

元禄一二年から箕輪領は幕府領と太田領に分割されるが、幕府領はほとんど全額代金納となり買納金は農民自身の手によって全部調達さねばならなかった。この点については後で述べるがこの状態は幕末まで続いている。

江戸時代後期になると村内および近郷において穀類の売買がかなり広く行なわれるようになっていく。その一、二の資料を掲げると次のようである。



図3-37 米（2俵）売買取引の「覚」（録屋文書）

覚

飯田石四斗（注 金四匁）

一米三拾六俵 但し四斗入り

第2節 村の要

右分引キ合イ申シ内金儲カニ受ケ取り申シ候焼実正也。荷物ノ儀ハ来ル申
二月中御渡シ申ス可ク候。代金ノ儀ハ平銀申ノ十月中残金勘定下サルベク
候。念ノ為依ツテ件ノ如シ。

文政六末年十二月

久保村亮主 与市

田畑村

紋藏殿

(藤原文書)

覺エ

一轉七拾俵 但シ目方七ノ目ヨリ五月引キ合イ

代金五兩也 兩二拾四俵替エ

右ノ通り先渡シ代金カニ受ケ取り申シ候。右轉ノ儀ハ私方ニ預カリ置キ申
シ候。来ル申ノ四月中旬迄御入用次第相違無ク御渡シ申ス可ク、後日
ノ為書差シ出シ申シ候以上。

弘化四末年十一月七日

久保村 八右衛門

田畑村

庄左衛門殿

(門屋文書)

このような売買の資料には、大豆、油、油などの売買例もあり、有
力農民による商業活動が相当活発であったことを知ることができる。

なお、特筆すべきことは文政年間（一八一八—一八三〇）本村内は幕府領
または松本藩領所として統治されていたが、その有力農民が米穀商と
して、高遠藩お蔵米の流通御用の一部を勤めていたことである。その
資料を次に掲げよう。

覺え

一奉三拾六石

上伊那米

此の代金貳拾八兩貳分銀五匁七分八厘七毛

兩に米壹石貳斗七升



図3-38 高遠藩役人から来たお蔵米代金の領収書である「覚」（この翌年は文政3年である）（南原直屋文書）

一奉三拾石

内郷米

此の代金貳拾八兩貳分銀五匁七分八厘七毛

兩に米壹石貳斗七升

二口ノ金五拾三兩三分二厘銀三匁七分七厘

厘

但し両替一貫百四文

内

金拾貳兩

辰十一月中受け取り

金貳拾貳兩貳分銀五匁拾四文

同十二月中受け取り

金貳拾貳兩貳分銀六匁拾三文

右同断

右の通り蔵米代請け取り貸済申す所仍つて件ノ如し

辰十二月

馬場新五兵衛

仁科右衛門

池上利八郎

松井周藏

清水金左衛門殿

(南原直屋文書)

これは、高遠藩のお蔵米のうち上伊那米（上伊那北部の高遠領）と内郷米を合せて六六石を清水金左衛門が買い取ったことを示すもので、その米代の領収書である。買いとられた米がどこに売られ、かかれたかはこの資料では不明であるが、販路の一部は次の資料で知ることができる。

十一月十一日

一米百五拾石

本曾阿留州達三人渡し

此の儀四百五拾四俵零斗八升

此の村割

百俵

五拾俵

五拾俵

五拾俵

五拾俵

五拾俵

五拾俵

五拾俵

笠原村

野廣村

埴村

古町村

御園村

荒井村

小沢村

山寺村

十一月十一日

一米百石

原平助殿

此の儀三百三俵零斗

此の村割

六拾俵

五拾俵

百貳拾俵

七拾三俵零斗

三拾三俵

貳拾俵

櫻井村

貝沼村

北福地村

南福地村

南福地村

北福地村

(南殿酒屋文書)

これは、文政三年(一八二〇)の「御蔵米送り帳」と書かれた帳面の内容の一部で文政四年ごろのものと思われる、この十一月一日には二口で二五〇石の米を扱っており、一五〇石は本曾阿留州達三人渡しとあり、一〇〇石は原平助渡しとある。原平助は別の資料から本曾福品宿の者であることが判明しており、大量に本曾へ売りさばかれていた。しかし別の箇所に米五〇石が坂下陽七渡し(陽七は坂下の米穀商家酒造業者である)とあり、全部が本曾宿に運ばれたものではない。

これらの米は高遠藩のお蔵米であるが、藩の米蔵から出したものではなく、おそらく藩役人によって各村々に付け出すべき俵数を割り当て、名主の責任において割り当てられた俵数を米穀商人の指定する場所まで運搬し売り渡す(付け私)ようにしたものと思われる。このとき量目不足(このころ本曾宿付け出しの米は一俵三斗三升であった)や悪米等無きようにし、もしそのような儀があれば例儀として運搬して来た者を留めおいて高遠藩役所へ連絡するようにという「覚え書」(國



図3-39 高遠藩役人から米穀商に出されたお蔵米付け払い「覚え書」一部(南殿酒屋文書)

3-39)が出されている。

このように、清水金左衛門は高遠藩お蔵米の御用掛りを勤めているが、このような米穀商人は高遠藩領内にも当然何人かおったわけであるが、いずれにしても相当の資金を蓄えた有力商人でなくては不可能なことであり、当時の有力農民の資金力と商業活動力がかかなり大きなものであったことをこれで知ることができる。

イ その他の商・工業活動
穀類以外の品物を扱う商業活動を示すものに次の資料がある。

「覚え書」

二百十四日
一箇五駄 馬方 柏原 金七郎
菰兵衛

石高武石七斗零升五合

馬方 大島 平兵衛

善右衛門

石高七斗九升六合

内五斗六合六分出し□□□正味七斗四升

三十三日
一箇五駄 馬方 市兵衛

石高八斗五升

(中略)

金拾六兩四分四厘三十文

拾六兩 但し勘數六十四

三月十二日

一塩六畝 馬方 柏原金七郎

四月十一日

代金四兩四分四厘廿四本道し

一塩六畝 馬方吉田村

五月十日

代金壹兩三分丁五十文

一塩六畝 馬方 大島平兵衛

代金壹兩四分四厘六文

これは、享保(一七一六―一七三六)の時代の記録で、田畑村松沢勘太夫と飯田和久町五郎□との間に行なわれた商取引を示しており、勘太夫は杜司を雇い溜(備前)の醸造をしていたと考えられる別の資料があることから、自家で製造した醬油を販売し、その見返りに塩を購入していることが判る。

また、特殊の資料として、江戸時代中後期のものと考えられる御用達商人の資料がある。

証

先般願いの通り

御用入り御用達仰せ付けられ候事

大炊御門殿御家

辰八月

清水十左衛門へ

(中略)

右差し引き残って両替式百七拾式文

金式固三分九拾式文かし

(中略)

松沢勘太夫殿

知久町五郎□

(玉垣軒文書)

橋本抵津守正路能郎
橋原加賀守雅広能郎

(井田園文書)

御用達商人となったのは南殿村の清水十左衛門で、その扱った品物は何であるか不明であるが、印鑑、絵符、堤灯等が下げ渡されている。

証

先般願ひ通り

小倉入介月達

御用達

大炊御門殿御家

橋本抵津守正路能郎

橋原加賀守雅広能郎

清水十左衛門

図3-40 大炊御門殿御家御用達商人の証(井田園文書)

享保年代(一七一六―一七三六)田畑村の勘太夫・源五郎からは、川除け普請や橋梁の材木の調達を請け負い、また、自村や近隣の川除け普請の工事を請け負っている。そればかりでなく、次の資料は遠く千曲川の川除け普請の一部を請け負っていることを示している。

恐れ乍ら書付けを以て御願ひ申し上げ候

一信州高井郡・水内郡神坂田村・坂井村・天神道村・小沼村・戸隠村川除け普請来る丑年御せ付けられ候由御積り石坪御用に立ち申す様御請け負い仕り度く願ひ奉り候事

一当夏中右御場所御普請の節私儀も御請け負ひ申し上げ仕立て申す所御度の出水にて乱出出し押し潰され損亡

致し難儀仕り候。夫れに就き当九月右場所へ繰り成り常水の節来と内見仕り候。恐れ乍ら私存じつき候は候。翌年中に御日論み遊はされ候。此の役出水仕り候其前れ損じ申す間敷き様に存じ奉り候。此の儀御願ひ申し上ぐ可く存じ奉り此の度御り下り候得共、御見分様御用達御出立罷り成り、これに依り恐れ多き義に存じ奉り候得共御願ひ申し上げ候以上。

享保十七年十月十九日

信州伊豆郡松平九郎左衛門御代官所

井沢弥兵衛様

田畑村 源五郎

御役所



図3-41 普請請負願の一例（玉環軒文書）

この資料によると、享保一七子年の普請を請け負って仕様書通りの工事をしたが、その後再度の出水で杭の出しが押し流されてしまった。今後は私見では碇型牛枠で川除けをすることが必要であると思うと建議しており、前段では翌一八年丑年の普請も請け負いたき旨を願っている。翌牛枠設置による川除け工事については翌一八年一月にも普請奉行あて再度の建議をしている。（図3-41）

また、神子柴村の孫市も普通用材調達に請け負いをしてしている資料がある。当時の一部上層農家の資力と商業活動力や企業的精神には目を

見はるものがある。

酒造は、幕府によって認可された酒造株というものがあり、その株の保有者が酒造を行なったがそれも大部分が有力農民であった。

南筑輪地域では南殿村の酒造の資料が古い方で、元禄一二年の南殿村明細帳に、

酒屋一軒御座候 十九年以前天和元年酉の御改め

酒造石高拾貳石五斗

とあり、天和元年（一六八一）には酒造が行なわれていたことを示しており、その石数は一二石五斗であった。北殿村でもかなり古くから酒造が行なわれていたが、不如意のため元禄一五年（一七〇二）にその酒株を沢村の利右衛門に年季で貸し渡し、享保一一年（一七二六）にはその酒造株を南殿村七左衛門に二五両で譲り渡している。

神子柴村の宝暦四年（一七五四）の明細帳には三〇石の酒造株が記されているが、寛政六年（一七九四）の明細帳では休業になっており、この段階では酒造は行なわれていない。田畑村は天明四年（一七八四）の明細帳では酒株は僅かに五石であるが、その後天保四年（一八三三）幕府より酒株貸し渡しの触れがあり、その貸し渡しを次のように願ひ出て許可されている。

然し上げ申す一札の事

一今般酒造株御貸し渡しの儀御触れこれ有るに付き、其四郎名前にて願ひ書差し上げ奉り御取次下され候処、願書の通り仰せ付けられ有難き仕合おせ、右につき株金上納仕り候上は御年貢金同様酒造具加永式貳拾五文宛年々御取り立て下さるべく候。永く上納仕るべく候。万一本入滞り候わば、諸人より御取り必ず時刻聊かも遅滞なく上納仕り候。念の為仍って忝の如し。

天保六年末十一月

酒造人 大 治郎

第2節 村の姿

村役人衆中

請人 源三郎

(鐵屋文書)

この時代灯油は重要な生活物資であった。天明のころから当地ではその油絞りを始めている。

寛

油絞立巻口 但し六斗ノ

一絞草高五石 但し在こま・木実・茶種

此の算加永式拾五文

伊那郡田畑村役人組頭紋蔵

名主 伝四郎

油絞立巻口 但し五斗ノ

一絞草高四石 但し在こま・茶種

此の算加永式拾五文

同郡赤須村役人 安右衛門

与頭 和 助

名主 彦四郎

(中略)

右は此の度新規油屋御吟味に付き少々宛農間の間に様ざ仕り候者、右書面の通り算加永式拾五文候間、当米より来る算加永式拾五文年定免御世出され下し置かれ候わば、有難き仕合わせに存じ奉り候。

天明七年三月

平岡彦四郎様御役所

(鐵屋文書)

これは飯島役所管内の油絞りの者が連名で届け出たものであり、いずれも農間様で小規模であるが当地でも油絞りが行なわれたことを示している。

水車は当時は穀類の精白に大切なものであったが、一般農民はいわゆる「ばったり」によっていたようで、本格的な水車はやはり上層農家

によって利用されており、他人の穀類の精白や製粉も賃稼ぎとして行なわれたものと思われる。水車に関する資料は少ないが、文化三年(一八〇六)に田畑村の紋蔵が大出村の地に差渡し二間、杵八本の水車を購入しており、天保九年(一八三八)の塩ノ井村の明組様に差渡し六尺の二両の水車があったことが記されている。そのほか、南殿村の松岡等にも書かれており、かなり多く水車があったものと思われる。

(2) 一般農民の商工業活動

村の住民のほとんどが農民であって、本来農業に従事することを本業としているわけであるが、年貢の百姓払いや、元禄・享保以後の貢租の代金納が一般化することによって必然的に農産物を換金せざるを得なくなり、しだいに流通経済に引き込まれ、塩などの必需品のみならず他の生活用品の購入も増加の傾向をたどった。

農産物の販売については明細帳に次のようにある。

一總じて穀物は飯田へ付け送り払い申し候。道程十三里程御座候(享保五年南殿村明細帳)

一近郷市場、内藤伊賀守様御城下高遠町市日四・九・十四・十九・二十四・二十九日にて御座候。(同右)

一總じて雑穀等は同國堀若狭守御知行所飯田へ拾貳里の所付け送り払い申し候。(享保五年大泉村明細帳)

これらの記載から、穀類はどの村もほとんど飯田へ付け送りをして売り払っており、近郷市場でも一部農産物が売買されたかも知れないが、それはごく少なかったと考えられる。

飯田・松本・甲府等での売買の商品は中馬で付け送り、またその帰り荷として運搬されたであろうと思われる。中馬は元禄以前から始まっており、三州街道は中馬の最も発達した街道であって、中馬による商品流通は非常に多く、また、中馬自体が農民の農間副業として大切

な稼ぎ場であった。(中馬については第三節交通、中馬の項参照)

水呑百姓や小高の百姓には大工・紺屋・鍛冶・石工・桶屋・馬喰等を営むものがあり、浪人などによる医師や手習師匠なども若干存在した。元禄二年(一六九〇)の南殿村の明細帳には馬医二・馬喰一・紺屋一のほかに浪人による医師一名があり、宝暦一〇年(一七六〇)の大泉村明細帳には紺屋一・鍛冶一・大工一・桶屋一が記載されている。

江戸時代後期になるとしだいにこのような人が増加する傾向を示し、幕末の慶応二年(一八六六)久保村の余業稼ぎ方取調帳には余業として次のように書いてある。

酒造	一	木匠農閑稼ぎ	一	鍛冶農閑稼ぎ	一
石工農閑稼ぎ	一	口手物振売り	一	馬喰作間商い	一
江戸稼ぎ	二	九六穀農閑稼ぎ	一	筆墨売農閑稼ぎ	一
紙職商売農閑稼ぎ	一	大工農閑稼ぎ	一	桶工農閑稼ぎ	一
中間宿	一	藍屋振拾式	一	水車持(七日)	一

(永小路文書)

これによると、一村で一六人のものが余業として商工業関係に従事その数が増加していることがわかる。

なお、出稼ぎや奉公については各村の宗門改帳に記載されている場合が多いので、それを拾い集めてみると表3-35のようなになる。

初期のうちは自村または近郷の有力農家や高連の商家への年季奉公が圧倒的に多かったが、時代が進むにつれて江戸稼ぎや旅稼ぎが多くなっている。文政六年の北殿村では江戸稼ぎと旅稼ぎの数が合わせて二二名に達しており、旅稼ぎには売薬と石工等があり、安政四年大泉村では上州へ六人が石工として稼ぎに出ている。

売薬については、農閑余業として各村ともそれに従事したものが多

表3-35 年季奉公及び出稼ぎ人数

村	年度	自村・他村年季奉公	江戸出稼人	江戸以外旅稼人
北殿村	享保10 (1725)	20	2	4
	元文4 (1739)	20	6	1
	明和6 (1769)	14	13	
	寛政8 (1796)	7	6	2 薬工 売石 売薬 他
田畑村	文政6 (1823)	0	7	3 7
	元禄15 (1702)	4	6	2
神楽子村	文政6 (1823)	5	4	8
	元禄13 (1700)	5	2	1
大泉村	宝暦13 (1763)	45		
	安政4 (1857)	3	8	上州 石工 6

かったとみえて、上伊那地域の売薬人仲間において「神農講規定の事」(玉置軒文書)と称する規定書が作られている。その前書に「売薬稼ぎ方の儀追々繁昌いたし、人数多く相成り遠国まで旅稼ぎに出候に付き、売薬稼ぎ方の者申し談じの上相定め候」として、売薬は仁恵の道であるから売薬稼ぎは軽い仕事として軽視されるべきでなく、薬種選定、製薬を人念にすること、公儀御制禁の薬種を売らないこと、売薬人同志互いに得意先を荒さぬこと、博奕・賭などをせず定宿にて我儘な行為をしないこと、毎年正月一二日の寄合には必ず出席することなどを定めている。当時の売薬人の姿をうかがい知ることができ

2 近世における金融

江戸時代この地方の農民金融の中心になったのは土地であって、その方法は土地の売買、土地の年季売買(賃入)であった。その外に直接金子の借用、無尽による金子の調達等が行なわれた。以下これについてみておこう。

(1) 土地売買による金融

江戸幕府は買組負担の担い手である本百姓が衰退することを恐れて、早くから土地の永代売買を禁じているが、現実には切羽詰まった農民はかなりの多く土地の永代売買をしている。その一例を示すと次のようである。

永代売買し申す田畑草場の事

一 中田式反七畝分の一、こんけんの麦畑中下共に式反六畝拾四歩地先共残らず、滝沢橋下草場一まき、田畑反別合せて五反三畝拾四歩場所五か所、右の代金として金子拾両三分位かに請け取り永代売買し申す処実正也。右の田畑草場につき一門中又は子孫に至る迄少しも異いこれ無く候。外より田畑草場に付き何方よりかまい御座候わば諸人廻り出急度明け



図3-42 土地永代売買し証文（久保大東文書）

申す可く候。右の田畑人役の儀は此方にて相勤むべく申し候。儀役の儀は其の方にて御勤め有る可く候。其の内御代官様替へ何様の新法度田地返し御座候共少しも相違申す間敷く候。後日の為手形仍て件の如し。

延宝四年

辰ノ十二月

持主 久保村 馬場七右衛門

請人 同所名主 七郎左衛門

証人 同所名主 与五左衛門

証人 同所名主 木下村 木下六太夫

久保村

伝左衛門殿

（久保大東文書）

土地の永代売買はこのような形で江戸時代全期間を通じて行なわれており、中後期になると山林や草場を除いて田畑の永代売買はやや減少し、次の年季売買が中心となるが、農村における金融の一面をなっている。

土地の売買の植設は時代によって異なることはいうまでもないが、売買される土地の田畑の別、上中下の品等売買の条件等により異なり非常に大きな差がある。資料として掲げた例は売買される土地に課せられる人役（その土地の石高に応じて課される人足役など）を売主が引き受けるようになっていた特殊な条件での土地売買である。

(2) 土地の年季売買による金融

江戸時代中期以降は土地年季売買が急速に増加し、多くの資料が残っている。その一例を掲げると次のようである。

年季に相渡し申す田の事

主手内

一 上中下合式反三畝廿五歩

此の下作額拾八俵三斗三升

東は福島村境

北は大泉川

西は黒川井境

南は貴殿境

此の代金拾五兩貳分也

表3-36 年季買入れ代金標準(各村明細帳より)

土地条件	村・年度		元禄二年(一六九二)		寛延四年(一七五二)		宝暦二年(一七六二)		寛政六年(一七九四)	
	南	明	南	明	北	明	久	明	神	明
上田一反につき	代金	一両一分一厘二分	代金	一両一分一厘二分	代金	一両一分一厘二分	代金	三分一厘一分	代金	二両一三厘
中田	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分
下田	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分
上畑	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分
中畑	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分
下畑	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分
原畑	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分	一両一分一厘二分

右は此度御上納並びに附け金に差し詰り、書面の田地当御幕より来る已の幕まで武か年季に相定め代金拾五兩式分受け人立ち合ひ箇かに受け取り申す如実正明白也。然る上は貴殿へ御高入れ成さるべく候。年季中我等直小作仕り、右下作米の内にて御上納諸役相勤め、租残り平均いたし老か年に平均金壹兩三分銀六匁六分式厘年々十二月十日限り吃度納定仕る可く候。尤も下作米年々相済み已の春元金調達致し候わば、右地所証文共御返し下さるべく候。年季来たり元金調達出来兼ね候わば右地所貴殿方へ御高入れ成され御自由になるべく候。

右地所に付き銀額は申すに及ばず、脇より邊防妨申す者一切御座無く候。斯の如く定め申す上は、何様の儀出来候ても貴殿へ少しも御損御苦勞相掛け申す間敷く候。後日の為年季相渡し証文入れ難き申す所仍て件の如し。

天和十四年十二月二十八日

田畑村本人 庄 助

村

引受人 六 助

源右衛門殿

長十郎

(鎌屋文書)

この例では年季に売り渡した土地を、譲り主が直小作として自分で耕作し、その土地に対する貢租と諸負担は譲り主が下作米の内から出

し、残った下作米代金一兩三分余りを毎年支払う契約になっているが、譲り渡した土地は買主の方で耕作し、年貢・諸負担もいっさい買主に移り、借りた金に対する利息を支払わない契約になっているものもあり、土地の年季売買の内容はいろいろの形のものがある。

年季が明けるとき借用した金が返済できなければ、その土地は受けもどしが出来なくなつて永代譲り渡しとなり、土地に対する権利は永久に失われるが、この場合買入れの代価にもよるが、借りた金の外に追加の代金が支払われている場合がある。

各村の明細帳に記載されている年季買入れの代金高を表示すると表3-36のようである。

なお、江戸時代中後期の南箕輪地域内各村の土地売買証文一六六通の永年・年季売買の別、年季買入れ年数の実態を調べたものが表3-37である。田畑の永代売買は三〇%、年季売買が七〇%で、山林、草場は逆に永代売買が六四%と多くなつており、年季売買では五年以内が多くなっている。

(3) 金子借用証文

江戸時代全期を通じて金子借用証文は数多く残されているが、後期

表3-37 江戸中後期土地の売買の実態

内容 年号	田 畑			山 林・草 場		
	永 代 売 買	年 季 売 買		永 代 売 買	年 季 売 買	
		1~5年	6~10年		1~5年	6~10年
享保元年	1	4	3	1	2	
文・寛保元年	1		1			
延享元年	1	3	1			2
寛政元年	2			1		
天明元年	4	19		2	1	
安永元年	3	8	2	4	4	1
天明元年	6	7	5	3	2	1
寛政元年	3	3	1	1	2	
享和元年	1		2	2		1
文政元年				4		1
天保元年	8	3	2	9	1	
弘化元年	6	6	2	11	3	1
嘉永元年	4	6	2	3	2	
安永元年	1	2	1	1	1	1
延享元年		2		1		
万延元年		4		1		
計		67	23	45	18	7
	42	99		45	25	
%	30%	70%		64%	36%	

には特にその数が多くなり文化、文政（一八〇四―一三〇）ころから土地の年季売買を超えて、農村における金融の中心の座を占めているように感じられる。金子借用証文もその質物として田や畑・山林等を抵当に入れていたわけであるから、土地を基にした金融ということもでき

る。
土地の年季売買はその期間が一年以上一〇年以内で、多くは二、三年と比較的長期の貸借であり、その土地の権利はその期間債権者に移るが、金子借用証文で借りる場合は比較的短期の借借で短いものは六か月未満、長くても一、二年のものが多くその間質物である土地の権利は移動しないことに差がある。しかし、土地年季売買同様金子借用

証文も借金が返済できない場合には、土地が質流れとなって権利が債権者に移譲してしまうことは同様であって、借用期間が短いだけに質流れになる危険も大きく、農村の有力者による土地兼併が進むことになったといえる。金子借用証文にあらわれる借主は事業資金を借用する特殊な有力農民もあるが、大部分は零細農民であり、借用の口実はよほど重要な要、内借金、上納金に詰まりというような追い詰められた切実な状態を示しているものが多く、貸主はその村または近郷の有力農民、あるいは質屋（当時の金融業者）であった。

この時代の金子の貸借契約の期間、利息の率などはどの程度であったか、実際の借用証書一四五通について調査し、表示したものが表3-38である。

借用期間は一年以上と一年未満のものがほぼ同数で、四分の一強が六か月未満の短期借り入れで、短かいものでは一か月というものもある。利息は全般的に高く一年以上のもので年利率一割、一割五分、六か月から一年のもので一割五分、二割五分、六か月未満のものでは三、五割で、中には一〇割という高率の証文もかなりあった。

(4) 無 尽（頼母子）

無尽は庶民の考え出した相互金融組織であって、江戸時代の早くから行なわれていた。本村内での早い時期の資料としては次のようなものがある。

無尽金受け取り申す請状の事

合銭式買九百六拾八文にせり取り申す宛実正也。

来る戌秋より幾何人に付き三百文ずつ此の無尽終るまで急度かけ済し申す可く候。則ち書き入れには角蔵名田宮の下の畑儀兵衛名田相がいと相残らず

表3-38 江戸時代後期金子借用証文の実態

借用期間	1年以上				6か月～1年未満				6か月未満			
	一割	一、二	一、三	一、四	一割	一、二	一、三	一、四	三割以下	三、一	五、一	七、一
年号	一、一割	一、二	一、三	一、四	一、二五	一、二六	一、二七	一、二八	一、二九	一、三〇	一、三一	一、三二
明安天寛政享和				3								2
文政	1		1	4						2		1
文政	2	1	7	7		3				2	1	1
天保	3	7	6	8	1	2			1	5	1	2
弘化	6	5	3	1		1				4	1	3
安政		4										1
計	12	17	17	30	1	6	1	17	14	1	15	8

入れ置き申し候。若し末々右かけ金迄年成り共遅れ申し候わば、此の書き入れ相違無く相渡し申す可く候。若し其の内御代官様替へ御知行渡し如何様の儀御座候共右の通り少しも滞り申す間敷く候。後日の為無尽金請取り手形仍って件の如し。

天和元年酉十二月九日

取人 儀兵衛
同 角蔵
請人 助九郎

無人中ヶ間衆

名主 彦市郎

(玉理軒文書)

無尽は頼み親または発起人が何人かの無尽(講)仲間を集め、一定期間ごとに金合いを開き、そのつど仲間によって定められた金額を出し合い、その金をせり又はくじによって取人を定め、その取人が金を受け取るわけで、無尽(講)仲間全員が取人になるまでこれを続け、仲間は寄合いの都度金を出すことによって取金の返済をするという相互金融組織であって、江戸時代を通じて各種の無尽が行われた。

大泉村中宿家には、大黒無尽、頼母子講無尽の資料がある。また、伊勢講、秋葉講などの講がその代参金や年貢金等を提出するため無尽形式を採っている例が多い。さらに、凶作のために無尽が休年になったり、無尽金が滞ったりしていざこざが起きた資料も散見され、無尽は各面で行なわれ庶民金融として極めて大切な役割を果たしていたようである。

(6) 特殊な金融

今まで述べてきたものは個人の行なう借り入れであったが、村が支配役所や郡中備金あるいは有力個人から借用するというような特殊な事例もある。

差し上げ申す一札の事

仲仙道祖院外式か寄助御貸付金の内

一金七拾両也 但し利足年迄割

但し 当七月より十二月迄御貸居十二月十三日元利共皆納利足の儀は七月三日上納仕る可く候。

右当御役所御貸付け金押借の儀願い上げ候處、書面の通り御貸し渡し成され奉り調取り候。然る上は御定法の通り十二月十三日元利共急度上納仕るべく

例。これに依り引当て質証文左に差し上げ申し候。上納の儀は概え本早損の凶年に御座候其急度上納仕る可く候。万一滞り候わば加判人は勿論惣百姓にて右引当て質代引き請け。如何様にも金子調達致し頼りも違滞無く上納仕る可く候。これに依り村役人其の外一同連印証文差し上げ申す迄仍つて件の如し。

嘉永二酉年七月

伊那郡北殿村

拜借人 小前 總代 市部兵衛

拜借人 百姓代 幸 内

組頭 太左衛門

名主 赤右衛門

三郎兵衛

松本
御役所

(北殿区有文書)

この借用証文には引き続いて「差し上げ申す引当て質証文の事」として、上中下合わせて七町二五歩の田が質地として書き上げられている。

また、この年の一二月には「郡中借金拝借証文の事」という証文があり、新用水掘さくの費用に当てるため、四九両余を郡中臨時備金の中から借用している。これにも相当額の土地が質入れされているが、このような村による金子借用もかなり頻繁に行なわれたらしく、文久二年(一八六二)に支配役所に出した「拝借並びに他借書き上げ」という北殿村の文書には次のように書き上げられている。

兎 信州伊那郡北殿村

一金四百両 八歩利息年賦返納

是は新井甚堀り割りの地代金と諸費用及び木曾助入足手当として支配役所より拝借(略記、以下同じ)

一金貳百両 八歩利年賦返納

去る安政四年大洪水による損地川除け及び田普請その外夫食代として支配役所より拝借

一金百両 同新

去る安政六年助郷備置其の外川除け自普請金として支配役所より拝借

小以 金七百両

一金五拾兩 福与村九右衛門外武人

天保十三年助郷人足賃金として右人より借用、年寄割式分五厘の利息

一金五拾兩 福与村九右衛門外武人

嘉永七年助郷人足賃金として右人より借用、年寄割式分の利息

一金百兩 南殿村金八

安政七年山寺村一件雑用として右人より借用、年寄割式分の利息

一金七拾兩 南殿村金八

安政五年川除け普請金に差し詰り右人より借用、年利寄割式分の利息

小以 金貳百七拾兩

惣ノ 金九百七拾兩

右は支配役所並びに他村より借入れ候金子書面の通りに御座候。此の段申し上げ奉り候以上。

文久二戌年八月

松本丹波守御預所信州伊那郡北殿村

名主 重郎左衛門

組頭 新五兵衛

百姓代 久兵衛

問屋 赤玉右衛門

年寄 又左衛門

同 庄右衛門

後藤忠一 郎様

森 惣 蔵様

(千利屋文書)

これは、北殿村の例であるが、まず嘉永末における村の財政状況が如何に窮乏した状態であったかに驚く、川除け普請や助郷人足に出るたにその普請金や賄費を他から借りねばならなかった状態であるが、



図3-43 金子借用証文(康屋文書) (村役人が代表して借りている)

これは北殿村だけであつただろうか。他の村のこの種の資料は多くはないが多かれ少なかれこんな傾向があつたのではなからうか。

支配役所や村内外の有力農民からの金子の借用はかなり存在したものと考えられる。

また、凶作・飢饉等の際は幕府が飢民たちに急場をしのぐための生活資金を貸与しているが、村役人たちはこの金を村全体で拝借し、一般の農民たちにその困窮の程度に応じて分配貸与させるということをしており、「国恩金拝借小前帳」が残っている。総額で二四一分の金額であるが極く雑儀の小前百姓一二名の者に、当座をしのぐ費用として貸し与えている。

飢饉と飢饉

1 災害の頻度

ここでは江戸時代の水害を除く災害、特に飢饉についてみていくことにする。

災害の種類は極めて多く長雨による冷害や病害、降霜降雪等があり、時には害虫の大発生がある。それのみでなく地震で家屋が倒壊したり道路が決壊し、また、江戸時代は頻繁な火山の噴火があつた。こ

れらの自然的災害に対する防衛の力が弱かったため、いつも大きな被害をうけていたようである。

このほか、コレラ、天然痘、麻疹等の伝染病の蔓延や狂犬病等があり、当時の農民の生活はたえず脅かされていたのである。

いま、書き残された記録により当地方における災害(水害を除く)の主なもの拾い上げて年表的に示すと表3-39のようになる。

江戸時代における災害の頻度は極めて高く、表3-39に記載したもののだけでも四年に一度の割合で、これに水害を加えるとほぼ二年に一回の割合になる。この災害の内容についてみると、例えば天明三年(二七八三)八月二十四日(太陽暦で九月下旬、一〇月上旬)の降雪、元文元年(二七三六)六月四日(太陽暦七月上旬)の降雪など非常な冷気を考えさせ、また、寛永三年(一六二六)の大旱ばつの際には草木が枯れ、川が涸れて魚が死んだと伝えられており、一か月以上ほとんど降雨の無い早ばつがしばしばあったことが記録されており、江戸時代は異常気象の多い時代であつたと考えられる。これらの異常気象や火山活動が江戸時代の災害の頻度を高くしているものと思われる。

しかし、これらの異常気象や火山活動等が直ちに災害に、さらに凶作や飢饉の原因となつたのは、封建制度のもとにおける諸制約、高率な貢租負担による農民の貧困、農業技術の未発達による面が大きかったと思われる。幼穉な技術のため不順な気候に対する適応がうまくできず、作物の病気や害虫を予防し駆除する技術も未熟で、その蔓延をただ傍観せざるを得ない技術の低さにあつた。また、川除け普請の百姓役や助郷役のような夫役労働が多く、かつ農作業はほとんど手作業で多くの労力を要し、異常気象に対する対応策もままならなかった面も多かったと考えられる。これらが、江戸時代における災害の頻度や飢饉を多くしていると考えられる。

表3-39 近世当地方(上伊那)災害(水害を除く)の発生

和 暦	西 暦	災 害 の 種 類 ・ 内 容	出 典
天文9	子	1540 大風雨(8/2)	妙法寺記
" 14	巳	1545 大凶作飢饉「巳午の飢饉」という	赤・上田記
" 5	午	6	
寛永3	寅	1626 夏大旱ばつ草木枯れ河魚が干死する	"
" 4	卯	1627 伊那地方大地震 10/4 所々家倒壊	上伊那誌
" 17	辰	1640	
" 5	巳	1	近代郷土誌年表
" 18	巳	41	
" 19	午	1642 大凶作「壬午の飢饉」餓死者多し	"
慶安2	丑	1649 大地震6/20 浅間山噴火	赤・上田記
寛政10	戌	1670 米価暴騰大風で土砂降る	"
延宝3	卯	1675 凶作飢饉	"
" 8	申	1680 永雨大風雨	玉璽軒文書
貞享2	丑	1685 6月旱害	門屋文書
" 3	寅	1686 凶作	"
元禄7	戌	1694 暴風	"
" 12	卯	1699 6~7月旱害	"
" 14	巳	1701 秋凶作飢民多く餓死者が出る	"
" 16	未	1703 11月大地震大泉村地下水筋変り飲水に困る	中宿文書
宝永4	亥	1707 大地震10/4 富士大噴火11/23 伊那も降灰	"
正徳1	卯	1711 8月大暴雨五穀凶作 米価高一割に米一俵	門屋文書後屋文書
享保2	酉	1717 8月浅間山大噴火秋大凶作	"
		春長雨麦作皆無その後旱ばつ	"
" 5	子	1720 5月浅間山噴火 6~7月旱害	玉璽軒文書
" 8	卯	1723 浅間山噴火(1/1)霜降損毛多し	北殿区有文書
" 13	申	1728 浅間山噴火(10月)凶作	玉璽軒
" 16	亥	1728 早損風損多く大凶作	門屋
" 17	子	1732 害虫大発生大凶作	北殿区有
" 18	丑	1733 大凶作飢多民餓死多し	門屋文書
" 19	寅	1734 秋凶作	"
元文1	辰	1734 暴風(11/19) 木下陣屋倒壊	上伊那誌
" 2	巳	1739 麦作凶作	門屋文書
寛保1	酉	1741 8月大霜霜に害虫発生	"
延享4	卯	1747 気候寒冷霜立枯凶作	中宿文書
寛延1	辰	1748 6~8月旱ばつ作方損毛凶作	北殿区有文書
宝暦3	酉	1753 4月麻疹大流行	"
明和7	寅	1770 6月大旱ばつ 野菜枯れる	"
" 8	卯	1771 干損	玉璽軒文書
安永4	未	1775 春麻疹流行 5月狂大現わる	"
天明2	寅	1782 7月浅間山噴火度々大風雨秋作大凶作五穀不稔	北殿区有文書
" 3	卯	1783 4~7月浅間山大噴火伊那に降灰降雪(8/24)	丸山家文書
" 4	辰	1784 大凶作	
		餓死者続出	"
" 5	巳	1785 4~5月疫病流行	"
" 6	午	1786 米穀類弘産・穀類津留	"
		冷気にて五穀不熟大凶作米価暴騰酒造半減	北殿区有文書

寛政3	寅	1791	7月大旱ばつ 所々で雨乞い		"
" 6	寅	1794	稲に害虫発生凶作		"
" 8	辰	1796	1月天然痘流行人心不安米価騰貴		"
" 12	申	1800	作方不熟	大宗館文書	
享和3	亥	1803	1月麻疹流行浅間山噴火 (5/26・9/23)		"
文化4	卯	1807	凶作	北城区有文書	
" 10	酉	1813	旱ばつ 大霧9/6 引続き永雨凶作	大宗館文書	
文政1	寅	1818	旱害	北城区有文書	
" 3	辰	1820	日照り続き畑作不具	大宗館文書	
" 8	酉	1825	夏以来雨多く稲発生秋作不作	"	
天保4	巳	1833	7月天候不順 8月大風雨秋大凶作	"	
" 5	午	1834	気候不順秋凶作 11月天然痘流行	} (天保の 飢饉)	"
" 6	未	1835	大風 (6/30) 大風雨 (8/5-13) 凶作		"
" 7	申	1836	8月大風秋作稀な大凶作		"
" 8	酉	1837	6-7月旱ばつ雨乞いに山に登る		"
" 9	戌	1838	天災につき検分に手心を願う	東朝軒文書	
" 14	卯	1843	作方不熟天然痘流行死者多数	大宗館文書	"
弘化3	午	1864	1月天然痘流行 晩霜 (4/16, 6/4) 大風 (5/1)		"
嘉永1	申	1848	2月天然痘流行死者多数		"
" 3	戌	1850	9月天然痘流行 秋作不作		"
" 4	亥	1851	春天然痘流行 秋コレラ流行		"
安政3	辰	1856	天然痘流行	中官文書	"
慶応2	寅	1866	8月大風雨凶作 天然痘流行	"	"

注 赤・上田記・赤須・上徳田記録

2 災害(凶作と飢饉)の実態

江戸時代の農民は絶えず災害を受け、飢えに直面していたわけであるが、凶作が二、三年続くと大飢饉となり、多数の餓死者が出た。江戸時代の三大飢饉といわれる享保の飢饉、天明の飢饉、天保の飢饉は当地方においても大凶作で深刻な飢饉であった。資料によって郷土の凶作や飢饉の実態を見ることにする。

(1) 享保の飢饉

享保の飢饉は享保一七年(一七三三)西日本を中心とした虫害による飢饉である。前年の冬以来天候不順で五月六月に至るまで昼夜の別なく霖雨が降り続き、非常に寒冷な状態が続いた。そこへ西日本を中心に「大さき黄金虫の如く、形質を帯びたるに似た」いなごが群生し、一夜のうちに稲数万石を食いつくして広がり、秋口から深刻な飢饉に陥り西国より大阪辺まで餓死するもの数を知れずという状態になった。また米価は石当たり銀五〇一六〇匁から倍余の一二〇一三〇匁に高騰し、翌一八年正月には江戸の窮民二一三〇〇〇人が米屋打ち赦しを始めるほどにその波紋が広がり、飢民は幕府領、藩領合わせて二六四万人、餓死者一万三〇〇〇〇人、死馬一万四〇〇〇匹と伝えられた大飢饉である。

当地方での実態については比較的資料が残っている田畑村についてこれを見よう。

享保一五年は一般に豊作であったが、田畑村では日照りによって畑作が不作であった。翌一六年の麦作も不作となり、同年四月村人はたまり兼ねて次のような願い書を江戸奉行所へ出している。

田畑村は前々から御訴え申し上げて来た通り畑方が多く、その畑の内半分は原畑で一毛作しかできず百姓渡世の困難な村であるところに、昨夏の大日照りで畑作の大豆・粟・稗が焼枯れになり百姓夫食が無く難儀になり訴え申

し上げましたが、定免であることで年貢率を下げてもらうことができませんでした。それで農具や道具を質物において御年貢を上納しました。そして、野山にある葛の根を細り原にある菊菜をつんで飢命をつなぎ麦作が熟るのを待ち兼ねていました。ところがその麦作が冬の大雪降りて野山に降土の畑の麦は雪腐れになり、少しも稼がないので飢死をする百姓が大勢ございます。御慈悲をもって百姓が取返し出来ませう御救い下さい。

注 菊菜とまつむし草

(阿屋文書)

このように前年の畑の秋作、本年の麦作の不作に遭い飢に苦しみがらも稲作に期待をつないで生活をしていた。ところが、五月一日日から六日間大雨が降り続き天竜川が大洪水になった。そのため沖川原を中心として石高で八九石、面積で六町八反ほどが川欠けや石砂入りになるといふ大被害を受けた。これは田畑村にとっては一大事で村役人はさっそく御普請奉行あて流失普請箇所を報告すると共に夫食の押借を願ひ出た。

……沖川原村地蔵らず御田地流失仕り候處に、当麦作の儀も出穂の最中大雨にて皆損に罷り成り、当今より夫食御座無く候。俱に及び候仕合に御座候。

夫食押借仰せ付けられ下し候に願ひ奉り候。
右御注進の爲申し上ぐべく書付けを以て訳申し上げ候以上。

享保十六年

亥五月

信州伊那郡田畑村

名主 五左衛門
組頭 勘太夫

御普請奉行

一柳仁右衛門様

大野平藏様

年寄 庄左衛門
番 儀兵衛
百姓代 弥惣右衛門

(玉理軒文書)
洪水が去った後は、今度は異常な早ばつと台風に見舞われた。同年の年貢割付け状の中の水旱風損引きが二九六石八斗余と村石高の四六%になっているところをみればかなりひどい被害があったことがわかる。

翌一七年四月、奉行所より国納の訳を尋ねてきておりそれに対する田畑村の返答書がある。その中の第二項に次のように書いてある。

当年別けて国納の儀は、去る亥年終に覚え申さず候大出水仕り、田畑悉く川欠け当流に罷り成り、剩る年度の早損風損仕り百姓飢に及び申し候。これに依り御普請村々願ひ奉り去る九月御地併り候故に只今迄身命送り罷り在り候。最早耕作に指し掛り候得共夫食一切御座無く候。当分葛根を掘り食物に仕り罷り在り候得ば新作仕付け申す力も御座無く候事。

(玉理軒文書)

このような状態のときに享保一七年の本格的な飢饉の年になったのである。この地域でどの程度の飢饉があったのか不明であるが、実は被害は少なく他の原因による凶作の方が主であったと考えられる。この年も麦作は霖雨と冷気のため不作であり、秋作もかんばしくなかったが、それにも増して飢饉の惨状を招いた原因は、西日本を中心とした食糧不足が、全国的に穀物価格を暴騰させ、これが貧民を飢饉に追い込んだのである。

このような飢饉のときは、不潔なもので時には腐敗したものまで口に入れることが多いことから疫病が流行することが多く、また、葛根や蕨根のみでなく山野の草や木の実を手あたり次第に食べることがあり、時には有毒植物にあてられた人も多かったようである。享保一八年幕府は「時疫流行候節此の葉を用いてその煩いをはるべし」という解毒法を示した文書(上巻六〇七頁参照)を領内各村に出している。い

かに農民が悲惨であったかがわかる。

(2) 天明の飢饉

天明の飢饉は天明元年（一七八一）から天明八年（一七八八）に及ぶ全国的な大飢饉であり、特に天明二・三年の奥羽地方の凶作はひどく百年にも無い凶作といわれ、食物は尽き草根はもとより牛馬や犬猫、さらには死人の肉まで食い、路傍に餓死者が続出するという目を覆う惨状を呈したと記録されているが、郷土ではどうであったろうか。

天明二年七月に浅間山の大噴火があり、その後たびたび大風雨で秋五穀が凶作となったのがこの地方の飢饉の始まりである。天明三年に入ると初春より天候が不順で田植え後ますます曇雨天が続き冷気がはなはだしく、六月より七月まで浅間山の大噴火が続き伊那地方にも降灰があった。「諸用書留帳」（千桐屋文書）という古文書にこの浅間山の噴火を次のように記録している。

六月より七月迄浅間山大噴けにて上州の方へ砂石吹き出し、軽井沢より坂本の宿は家も数々焼け候由、作毛は砂石に埋まりて一切御座無く候由。軽井沢より坂本迄其の近辺は砂にて埋まり候所五尺程ずつ有る由、浅間山焼け候節は此の谷（伊那谷）一面に煙吹き込み朝月夜のごとくなり、焼け盛り候節は鴨青天地にひびき申し候。

また、当地一〇か村が飯島役所へ提出した夫食拝借願の中に「六月末より浅間山厳しく鳴り渡り、其の上焼け出し候故煙吹き来たり生い立ち候盛りの諸作にかかり申し候故、就中畑作諸作甚だ凶作に罷り在り候内、彼岸より大霜折々降り申し候に付き至って諸作其成り不熟仕り立枯れ同様に罷り成り」と記している。これらの記録によってこの年の浅間山噴火がいかに大規模なものであったかを知ることができるが、なおこの年の八月二四日（旧暦）には雪が降るといふ異常気象で田畑共凶作になり、特に田は四分通りの作物であった。



図3-44 北沢村飢人夫食願前書帳（千桐屋文書）

このため穀類の価格はしだいに高騰し、「米は苞苴に付き七斗より五斗五升まで、大麦苞苴につき苞苴斗より苞苴斗まで、粟は苞苴に苞苴より九斗まで、稗は苞苴に付き五俵半より五俵まで、大豆は苞苴に付き苞苴斗より苞苴斗まで、小豆は苞苴に付き八斗まで、干菜は苞苴につき三連ずつ、古干菜は苞苴に五連、高遠領並びに川東郷にては、蕨の根、葛根、どんぐり、とらなど朝夕の食物にいたし暮し申し候。穀類上州・甲州・当国にて諏訪・佐久・木曾路へ引き候故一日の内に穀相場くるい申し候」（前掲千桐屋文書）と記している。

前記の夫食拝借願は貧しい農民たちの窮状を見かね、かつ彼らの強い要求に基づいて神子梨・田畑・北殿・塩ノ井・久保村等一〇か村が、天明四年正月に飯島役所に提出したものであるが、その内容を見ると天明三年の不順な天候及び浅間山噴火による大凶作の事態を述べた後「当（註天明四年）夏麦作が実のり候まで御慈悲を以て何卒当正月より五月六月迄の間、宗門人別一人に付き一日稗苞斗五合程宛夫食拝借せ付け下し置かれ候節に幾重にも願ひ上げ候。さも御座無く候ては当年一作開くべき手段も御座無く難儀仕り候間、一同御救い願ひ上げ奉り候」と敬願をしている。これに関連して、北沢村の「飢人夫食願前書帳」には次のように書かれている。

〔通称〕
天明四年辰閏正月

親人夫食額小前番上帳

伊部郡真輪 古科北殿村

総人数百拾九人 内六五人助け合いを以て取り続き申し候分これを除く

一 飢人数百五拾四人 内男五拾五人 女九拾九人

内貳拾五人拾五歳以上六拾歳以下の男入る

一家内貳人 (内男一人 女一人)

高九石四斗三升五合

勘之丞

一家内女一人

高貳石貳斗三升

古 紀郎

一家内女一人

高三石九斗九升四合

ひ さ郎

一家内貳人 (内男一人 女一人)

高三石貳斗

藤 古郎

一家内男一人

高六石九斗

忠 五郎

一家内三人 (男一人 女二人)

高三石九斗三升

仁右衛門

一家内男一人

高拾石九斗五升

久右衛門

(中間三五戸分省略)

一家内四人 (男二人 女二人)

高拾石五斗七升

田 藏郎

一家内女一人

高壹石九斗五升

平 助郎

一家内貳人 (男一人 女一人)

高七石八斗二升八合

利 介郎

右別紙を以て願い上げ奉り候通り當時に及び候間願いの通り夫食押借仰せ
付けられ候様仕度これに依り小前帳を以て願い上げ奉り候以上

天明四年正月

平岡彦兵衛様

飯島御役所

名主 弥次兵衛

組頭 久左衛門

百姓代 三郎次

(千村屋文書)

これによると当時の北殿村の古科の総人数は二一九人で、このうち六五人はお互いの助け合いによって何とか生活が続けられているのでこれを除き、残りの一五四人は夫食を押借しなくては取り続きができない者として、四五戸の家人人数と石高及び戸主名を記載している。

この中には石高が五石未満の貧農層が圧倒的に多いが、中には石高一〇石以上の農家が九戸含まれている。これは当時の経営としては中堅農家と考えられるものであって、この階層までが夫食を押借しなければ生きていけないということは、この時の凶作がいかにひどいものであったかが理解されよう。

穀物価格の高騰は蓄えのない時買ひ(升買ひともいわれた)の貧民たちにとっては大きな打撃であった。天明四年の「栗輪郡中申し定め書」の中で定められた当時の日雇上男の一日の日当は錢六四文となっており、当時の米価が金一両(錢六二〇文ほど)につき米七斗なら、一日の日当で買える量は七合、一両につき米五斗になれば五合しか買えないことになる。このため天明四年二月と四月の二回、飯島代官所は穀物価格抑制の処置をとるよう触書を出している。四月の触書は次のようである。

諸国共近年米穀高値にこれ有り候上、別けて去年以来値段引き上げ輕き者共難儀に及び候趣相聞き候につき米商売の者は勿論、其の節度世政さざるものにて不相当の石數買ひなど候難儀致す間敷く候。其外町々在々の者共銘々當年新穀出来迄取り續くべき手當での外余けいの米穀買ひ置かず、其の土地は申すに及ばず他國への売出し候様いたし、並びに諸國の廻米道売り道買ひ等決して致す間敷く候。若し他國の難儀をも顧みず余けいの米穀買ひ置き候ものこれ有るにおいては時味の上御仕置申し付くべく、且つ又願ひの儀等其の節へ申し立てず此の度申し渡しに乘じ大勢違を集め在所の人家を打

も横し其の外理不盡なる儀等いたすにおいては、是又吟味の上御仕置き申し付くべく候間、所役人五人組の者共申し合ひ心を付け右林の者これ有るに於ては早速其の節へ申し出すべく、若し等閑なる儀これ有るは一同此事たるべき事。

右の通り諸国御料所は其の所の奉行、御代官、御預り所、私便は領主地頭より町々在々浦々迄渡らざる様急度申し渡すべく候。

右の趣相触れらるべく候以上。

天明四年四月

(大和手文書)

天明五年に至って穀類はますます払底し、その価格は高騰し、当地でも穀類の津留めが行なわれた。(上巻六〇〇頁参照)

伊那地方でも所々で飢米が行なわれたが、それで生活ができるわけではなく、食を得るため旅に出るものが続出したと記録されている。

(3) 天保の飢饉

天保の飢饉は、天保七年(一八三六)の全国的飢饉をいうが、これより先天保四年の大凶作、天保五・六年の凶作と三年続きの凶作の上に引き続き起こった大凶作によって大飢饉となったものである。

天保四年の凶作はこの地方では大凶作で「凶年違作日記」には次のように記録されている。

五月十六・七日より天気悪く大雨にはこれ無く候え共、日々雨降り六月土用に至れども陽気甚だ冷しく、日々雨止まずして土用中にも冷物を著し新作を致す陽気なり。土用の内に天気快晴は六月三日と同十五日の二日なり、それ故に大小の麦甚だ後れ、土用明け候ても稲穂少しも出ず漸々二十日の頃に穂追々出申し候。二十日を打ち過ぎて彼岸に至れども其のりは少しもこれ無く、尤も彼岸前に五・六日天気宜敷きゆえ田方大に直り候様に存じ候処に彼岸中至って冷しく、耕入れ物を著しても朝夕は涼しき様子なり。それ故に田畑其のりは一向これ無く田畑は残らず青立ちと相成り申し候。

……九月に至り畑方諸作取り上げ候処、平均にては四分位より五分位これ有りといえども、凶作の取実故にあげては五分位にもまじり兼ね候。九月七日八日大霧にて稲の見え難のはか悪しく相成り申し候は迄は田方は六分位の取実はあるべき様に存じ居り候処、以ての外悪しく相成り申し候。か様なる年は霜の降らざる前とは格別に違ふものと相見え申し候。其の上又々十七日の夜霜にて又見難く相成り候。(中略) 十月の初より霜取り揚げに相掛り、最初は平均半毛はこれ有るべきと存じ候所、中には極く宜しきものは五・六分位のものも適々ありといへども、悪しきは五分位又は三四分位の取実なり、其の上すりは武合すりより三合すり位と相成り誠に地主小作共に難儀至極の次第也。

此の節穀相場米両に五斗、大麦両に壹石、粟両に八斗、大豆壹石七斗、小麦六斗、蕎麦壹石七斗なり。此の節皆人山野に出て野老・葛根・わらび・ほど・牛蒡葉を集める人、野老は毛を去り蕎麦殻のあくにてゆでそれをよく鍋き二・三日も水にひたしてあくを去り、干し揚げておりとなし飯に炊すなり……。

(『県史資料第四巻』)

この大凶作のため、松本御預りとなっている伊那郡の三二か村は一〇月に松本御役所へ歎訴状を出している。その歎訴状の大意は次のようである。

近年田畑不熟で連々難儀のところ、当年の麦作は春雪の消えが遅く暖房に成り、その上黍稷が強く過半が立ち枯れて収獲に至って少なく、その上夏中雨天冷気降もにて八月一日には大風雨が吹き荒れ、毎朝霜降の寒露があり、九月六日七日には大霧にて大凶作になってしまった。驚いて候見をお願いしたところ御慈悲をもつて赦免を御許し下さり有難い次第であります。

然るところ粟稷など畑方の儀はかなりの実入りと思われていたのがこれも意外の凶作となり、小前の百姓共はこれも候見受けを申し出てきました。けれども、候見のために秋麦の作付けが遅れ来年の麦作が不作になっては一大事

と税見願いを抑えておりました。ところが突然取り揃けてみると天明度の凶作より取実が少くない状態であり、畑作物は元来百姓の主食であるのでこのような凶作では草木の実等まで夫食の足しにしても取り過ぎが覚えない状態でありますから、畑方の方も先年の凶作の時のように御破免御税見取りにしていたにしたい。御石代のことではありますが、米の相場が百年にない高値段でこれでは折角御破免で免上げしていただいても、買納金額は減らないばかりか却って高くなってしまふので、文政六年より一〇か年の平均値段で納めるようにし、さらに、半額の納期は来年七月の麦の収穫後まで延期して欲しい。

向屋文書

天保五年も秋作が凶作になり、十一月には天然痘が流行した。六年には、六月三〇日の大風、八月五―十三日の大風雨で大木が倒れるほどの強風が吹き農作物にも大きな被害があった。三年連続の凶作のため世上がしだいに騒がしくなってきた。このような状況の中で天保七年の大凶作に見舞われたのである。

天保七年の凶作の実態は再び前掲の「凶年連作日記」によれば次のようである。

五月山の口より仕付けの頃に相成り日々雨天のみにて快晴の日は少なく冷気勝ち故、大小麦に申もふ着き誠に実のりこれなく、取り揃へ候所閑代末間の連作にて小麦は種に致し候様も漸々取れ候程の仕末なり、大麦は五六分位はこれ有り候得とも実入り甚だ悪しき故は三分位なり、引き続き連作の後、麦などの貯えとてもこれ無く麦の出来を相持ち居り候処、格別の連作故世上一統のなげき大方ならず穀物など万事高値に相成り六月下旬米価に七斗、大麦に二斗三、小麦は四斗六、稗に五俵位に相成り候。六、七、八月共に雨降り続き快晴の日としては杳か月の内に漸々三四日もこれ有るばかりなり。

(中略)：畑方は取り上げ候漸々は種に致す程もなく漸く一反歩の畑にて米

斗位取れ申し候。粟は六分位の取実なり。油圧も同断なり。大豆、稗は四分一五分の取実なり。其の上粟・茄子・さきげ・さえん物一統大値なり。粟・柿・桃などに至る迄実入りこれ無き次第故穀相場高の外引き上げ米価に四斗三升、粟に八斗、稗四俵、大麦式俵位なり。(中略)：誠に夏麦作りより秋田畑は申すに及ばず野菜其の外木の実に至る迄も少しの実のりこれなく、数百年來申し伝えにもこれ無き程の大凶作故上下共あき果て候ばかりなり。とても露命を繋ぐべきと思う者は御座無き次第なり。去る巳年(四年)さえ大凶作と存じ候処、夫れに引きかえ当年は巳年の半減の取実もなく、其の上巳年には古穀も銘々少々宛は所持致し候得共、夫より引き続き候故言穀所持の者は少しも御座無く誠に何を以て来る西の作種まで命をつなぐべきやとあきれはて、山野に葛根、ところ(野老)類を取り集める心もなく皆人薄水を踏むが如く只然として居たりけり。心得方これ有り候者は山野へ出て色々の品を集めるといへども、去る巳年葛根、野老も掘り尽し候故一向これ無く恐ろしき大飢饉故皆人餓死筆につくしがたし。

向屋史料第四巻

天保八年になると米価はますます騰貴し正月には金一兩に米三斗二升、二月には二斗八升、四月には二斗四升になっており、所々で米の廉売又は旅米が行なわれたようである。この年の天候は一転して干ばつに見舞われ各所で雨乞いが行なわれている。村内でも雨乞いのため西駒ヶ岳登山が行われた記録「駒ヶ嶽詣で」が残っている。

天保八年は早ばつに見舞われたが、作物は一般に良好で新米が出回るようになると米価は下降し九月二日には一兩に米五斗、五日には六斗となり天保の飢饉もしだにおさまりをみせている。

この飢饉において当地にどの程度の餓死者が出たかは資料がなく明らかに出来ないが、このころは村々に備荒貯蓄が行なわれるようになっており、それがかなり有効に働いたものと思われる。

3 凶作・飢饉の対策

江戸時代にとられた凶作や飢饉に対する対策は、平時の対策と応急対策とに分けて考えることができる。

(1) 平時における対策

ア 貯 穀

平時における凶作・飢饉の対策には貯穀や救荒作物の栽培があげられる。貯穀には郷蔵・三倉への貯穀、城米田穀等がある。城米と田米は幕府・諸藩が城内に貯蔵したもので、これには軍事上の目的や米価騰貴に備えて米価調節のために、あるいは旗本以下の武士や農民の救済にも用いられた。幕府自身の貯穀は江戸時代初期から行なわれ江戸・京都・大阪・堺・駿府等の要地に貯蔵し、天保一四年(一八四三)の凶作は五五万石にも達しており、諸藩に命じた田米は譜代大名に軍事上の目的に行なわれたものが多く、一般大名へは天和三年(一六八三)に凶作の備えとして始めて貯穀を命じ、ついで旗本にも貯蔵させた。宝暦三年(一七五三)には高一万石につき一〇〇〇俵ずつ、寛政元年(一七八九)には一万石につき五〇石ずつ五か年間田穀することを命じており、天保一四年の諸藩の田米は八八万石に達した。

郷蔵の設置は古くは中国の例にならって既に平安時代から始まっているが、江戸時代になって全国の郷村に広く設置されるようになった。初期のうちは年貢米の積み入れ保管の役割が多く、その後備荒貯蔵を目的とする郷蔵が増加し、特に天明飢饉以後それが顕著になった。

幕府は天明四年の凶作の経験から五年正月に凶作対策として貯穀と救荒作物の栽培についてかなり詳細な申渡書を出している。その貯穀の項は次のようである。

去々卯年諸国共不作、別けて北国節は凶作にて百姓共飢饉に及び、各吟味伺いの上天食代等拝借せ付けられも、懸しき程にこれ有り候。然るは一休農

家の者共身分の厚薄に寄リ縁穀の品は違ひ候共、一秋不作等にて飢饉候は申租の義はこれ有る間敷く、平常の心掛けにて一年類や半年類の飢を渡さ候租の手当て圓わざる事は有るまじきやにつき、自今百姓共一統申し合わせ五穀の外にも土地に応じ候物を作り候義は勿論、木の實、草の根何にても穀に相成り候品は、糺え不用に相成り候迄もこれを採り置き候様急度申し渡さるべく候。

(大和手文書)

このようにして、天明の飢饉を契機として急速に貯穀制度が強化され、郷蔵も普及したと考えられる。

ここで南筑輪地域内各村々の様子はどうかを見よう。郷蔵についてはいつから設けられたかわからないが、南殿村においては元禄一二年(一六九〇)の村明細帳に三間×二間の自普請の郷蔵があったことが記録されており、享保五年(一七二〇)の大泉村明細帳、天保九年(一八三八)の堀ノ井村明細帳にはそれぞれ三間×二間の郷蔵がある。さらに田畑村は宝永二年(一七〇五)以後、北殿村は享保三年、神子柴村は宝暦四年(一七五四)の年貢割付け状に郷蔵数分が石高から差し引かれておりそれぞれ、その時代に郷蔵が存在していたことがわかるが、その造られた時期は判明しない。また、建てられた時からずっと後の時代まで存続したとも言えないようである。何故なら宝暦一〇年の大泉村明細帳には「郷蔵なし」と記録されており、かつて存在した郷蔵がこの時期には無くなっていることが記録の上から判明されるからである。

天明の飢饉以後幕府は備荒貯穀を目的として郷蔵の設置を奨励しているが、享和二年(一八〇二)箕輪領の一五か村は貯穀蔵取り立て延期願を出している。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ候

第2節 村の姿

私共村々貯穀年々石数増し候につき、最寄りの組合相定めの御材木下され其の外は村入用の積りを以て郷藏相建て詰め込み候わば取締り方に相成る可く、近村評議の上組合立て場所等取極め申す可き旨仰せ付けられ具み奉り候。然る所数村の組合相建て候ては山寄りの村々に御座候故、里数二三里も隔り候所は詰め替え持ち運び等入用多分相懸り申すべく、格別費等多く御座候につき、願わくば寄、或か村にて最寄宜敷き場所に相建て申し候わば詰め替え路入用多分相懸り申す間敷くと存じ候。並びに左様に仕り候得ば又々村数少なく御座候につき土蔵入用等多分相懸り候御儀、且つ又土蔵見廻り番等失費相懸り申すべく、以て失費多く村々難儀にも相成り候御儀に存じ奉り候。当時右数相寄み候儀もこれ無く銘々村役人士蔵に詰め置き候ても並支えにも相成らざる儀に御座候間、何卒此の度は御蔵御免仰せ付けられ下しおかれ候様願ひ上げ奉り候。追々石数相増し候わば其の節御願ひ申し上げ御蔵相立て候様仕り度く存じ奉り候。これに依り一同連印を以て御免の儀願ひ上げ候以上。

享和二年三月

神子柴村三役人御 田畑村三役人御
南殿村三役人御 北殿村三役人御
堀ノ井村三役人御 久保村三役人御
大泉村三役人御 (外八か村略)
(大泉館文書)

この願書によると、数か村が組合を作つて郷藏を建設することを辞退しており、この時点での建設は進まなかつたようである。やがて貯穀の増加につれて村ごとに郷藏が建てられるようになり、明治九年の「郷藏並び積穀地坪明細表」(後掲文書)によると、この段階では南殿部落を除いて他の部落には全部建坪六坪の郷藏が一つずつ建てられていた。

名主などの蔵や郷藏等に備えられた備荒用の穀類は、天明のころはほとんど稗であった。天保四・七年および文政九年の凶作のときには

この貯穀稗が貸し出され、さらにそれを年賦で償還したり、古穀や新穀の詰替え等の貯穀の動きを示す「貯穀通い」と称する資料がいくつに残されている。

嘉永(一八四八・五四)ころになると田穀としての稗を糶に積み替えたといふ松本御役所に願ひ書を出している村があるなど、全般的に悪い稗がしだいに増加したようである。稗を糶に積み替えたという理由は、稗の場合は貯穀石数が多くなり、田畑村の場合五斗儀にして一六儀余に達しており手数がかり、かつ鼠食い等多く年々升減りになることが多いが、糶だと五九儀で積み替え置くことができて手数が少なくて済むこと、連作で夫食に押借する場合は、稗二升に糶一升を振り向けるようにすれば便利であるとしている。

さて、貯穀の量は江戸時代後末期になると増加しているが、どのくらいを貯穀の目標と考えていたのだろうか。次の資料によってそれを知ることができる。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ候
一人別ノ式百九拾八人
内七拾八人 旅住居・年奉奉公人
拾老人 遺跡

引いて 式百九人

内五拾老人 但し老人老目米式合宛積り

此の石数拾八石三斗六升

百五拾八人但し老人子供老人一日米惣合宛積り

此の石数廿四石四斗四升

幾数ノ米四六石八斗

右は近年連作相続き候所四三年作稍宜敷く米価も居合候に付き、村々貯穀困り増し致し、寛政度仰せ渡され候通りの人別に定じ半年程の夫食不足これ無き縁貯え候積り出精致すべく候。後年凶作の節其蔵を過れ候為の御金議に

て仰せ渡され候段、加至極有難き御趣意に存じ候。然る上は銘々差しせまり
 困り盡き申すべく所此の儀小前一同開作夫食にも差支へ無り有。〔中
 略〕積み立て候義は難波至極に仕り候得ば有難き御趣意の義は相弁え罷り
 仕り候間、何卒格別の御慈悲を以て当期秋作毛取り揚げ次第右の石数相聞い
 申し度く存じ奉り候間、此の段難重にも御許容願ひ上げ候。これに依り男女
 老人子供迄一々取調べ書上げ奉り候所相違御座無く候以上。

天保十四年三月

伊那郡田畑村 伝右衛門

源右衛門

庄左衛門

松本御役所

〔中略文書〕

願い書は昨夏年の大洪水によって多くの川欠けができ、現在の開作
 夫食にも差し支える状態であるから貯穀の増し困りは秋作収穫後まで
 延期して欲しいというのであるが、その貯穀目標は前段の数字のよう
 に労働年齢の者が一日米二合、老人子供に一日米一合の割合で半年
 間、夫食として給与し得る量を目標としていることがわかる。

その後元治二年（慶応元年一八六五）に、近年世風著に流れ諸色高
 値になりいったん凶作飢饉になれば難波必至の状態であるが、その際
 どうやって取り続けるようにするか、との上からの意見聴取が行なわ
 れているが、これに対し箕輪領の村々二六か村は、次のように増し困
 穀を行なうことを答えている。

恐れ乍ら書付けを以て申し上げ奉り候

一 和治三候 吉科南殿村

一 百六拾七候 北殿村

一 百六拾七候 田畑村

一 百六拾七候 神子集村

一 百六拾七候 大泉村

一 〔簡略〕…是迄の御開帳積み立て候分足し加え候得ば、凡そ昨年位は取り

続き申す可しと一同安心仕り候に付き当丑年より卯年迄三か年中に割合い出
 精出穀仕り度く存じ奉り候。〔後略〕

〔県史資料第四巻〕

注 南箕輪地域の村のみ掲げ他の二拾五か村は略した。久保村は全戸太田領のため入
 っていない

前の資料が天保の段階の幕府の指示した貯穀量の目標であったが、
 後の資料は元治（一八六四一六五）のころの農民の自主的貯穀目標のよ
 うであり、ここでは人別に定じ一年分の夫食を貯穀の目標としている
 ことが理解できる。

イ 救荒作物の栽培

救荒作物の指示やその栽培奨励も平時対策の一つで、幕府や諸藩は
 大飢饉の経験から山野の有用植物や有毒植物名などを印刷配布してい
 るが、ほかに各種の救荒作物の栽培を奨励した。特に享保の飢饉の際
 中国地方に普及した甘藷は、將軍古宗の命を受けた青木昆陽の努力に
 よることは有名な話であるが、甘藷はその後関東地方にも栽培されて
 救荒作物として大きな役割を果たした。

また、天明五年（一七八五）五月の「申し渡し書」には救荒作物の栽
 培について詳しい指示がある。（上巻六〇一頁参照）

また「飢饉用心の事」（東照軒文書）と記された資料には、

「…何にても相考え其の所に相応の物を置くべきこと肝要なり、さらば、凶
 年の兆見え候わば常の食物半分か三分の一に摘み菜等を加えて食物を喰ひ延
 ばすべし、又凶年は麻青多く作るべし、此の物は其の味米にまぜ表にまぜ、
 其の穀に似て飢えを助くることはかりなし、又外の菜は久しく多く食すれば
 其の人痛み顔立ちも変ずれども、此の麻青は何程久しく多食しても其の人痛
 まず、顔立ちも変ることなし。…〔中略〕…凶作を知るならば過度か過ぎ、
 その明春も早春より幾度か薄くべし。その外円豆の類何にてもす早く実熟す

る物を相考え作るべし。(後略)

(2) 応急対策

応急対策としては、村役人はまず救免検見取りを願い出て年貢の減免を依頼する。さらに、夫食、救い金の押借を願い出て飢饉の救済に当たる。農民は山野に自生する葛・蕨・野老等の根を掘り、栗、どんぐり、樹の実等を拾い集めて夫食の足しにし、また、草木の芽や葉菜など食べられそうなものは何でも取って食べることが一般に行なわれた。これは大凶作でなくちよとした凶作でもたえず行なわれたことで多くの資料が残っている。

「飢えに及び野山にこれある葛根・蕨根・きく菜等まで取り飼命をつなぎ」

(享保五年 玉理軒文書)

「只今に至り百姓給物一切これなく、初春より木の根を掘り諸草の青味を待ち兼ね当日送り申し候」

(寛延三年 北殿区有文書)

「女の婆は原に出て菊菜(マツムシソウ)を摘み絶やすまで摘み、男は山野のところ(野老)をほり毎日河水にさらして塩のたゆむ時無し、其のさらしたる水の苗代に流れ入りて苗生ひ立たず」

(文政九年 『県史資料集』)

また、笹の実採取の珍しい記録も残っている。その記録は一農家で六月下旬から七月中旬にかけて延べ一七人が山に登り、生の実で四石七斗、それを干し搗いて一石九斗余の笹の実を採取(阿屋文書)している。この笹の実を採取したのは元禄一四年で秋作が凶作で飢民が多く餓死者が出た(上巻・赤須田記録抄)と記録されており、笹の園花結実は六〇年に一回起こる現象といわれるが、それがたまたまこの凶作年と一致したことによって採取が行なわれたものであらうと思われる。

飢饉に直面して幕府や諸藩の行なった対策としては、貢租の減免のほか、米・副食物の配給、施粥、金品の給与、難民の収容、救済などが行なわれ、これは民間の有志、富農等が行なった例もかなり多い。当地ではこの資料がなく不明であるが、施米はかなり行なわれたようである。

なお、凶作・飢饉の後、荒廃した農業生産力の回復のため、開発の奨励、移住の制限、婦農強制、大都市からの人返し等が政策としてとられているが、全般として江戸時代の凶作、飢饉の対策は当面を取り繕う程度に過ぎず、より基本的な農業技術の開発、農民の経済的底力を養うことは行なわれていない。封建制度の諸制約がこれを妨げていたと考えられよう。

第三節 道と往来

一 伊那街道（三州街道）と宿

（一）街道の設立経過と道筋

1 伊那街道

慶長五年（一六〇〇）に江戸幕府は、江戸を中心とする主な五街道を定め、その補助線を脇往還道とした。伊那街道は、五街道の一つ中山道の脇往還である。中山道の塩尻宿から分かれ、善知鳥峠を越えて伊那谷に入り天竜川西側を北から南に上伊那を通り、下伊那の最南端、信濃十六宿の根羽宿より三州に入る街道で、名古屋に通ずる。

この街道は、おそらく古くから開かれていたであろうが、戦国時代に伊那から三州・遠州方面に侵略の歩を進めた武田氏が、軍用道路として利用するために改修整備したものであらうと言われている。

文禄二年（一五九三）飯田城主京極高知によって、飯田から飯島までの街道や宿駅を天竜川西方の下段から上の段に引き移し、新道に宿駅を新設して、一応の完成をみたと言われている。

慶長六年（一六〇一）、飯田城主小笠原秀政は、飯田から松本への道路の新設に着手して同一三年（一六〇八）に竣工したのが春日街道であり、伊那街道より西の方を通った。この街道ができたときに松島宿と伊那宿との間に大泉宿が設けられた。

伊那街道の成立過程は、複雑で一度に街道や宿駅が制定されたものではない。

慶安二年（一六四九）鷹板領のうちに、伊那街道全体にわたり路線の変更や宿駅の整備を行ない、北殿村通りに往還をかえ、春日街道大泉宿を伊那街道北殿村に移し、大泉北殿合宿とした。

伊那谷を南北に走る伊那街道から分かれている道は、松島宿追分より岡谷街道、伊那宿から東へ金沢街道、秋葉街道、西へ権兵衛街道、飯田宿から西へ大平街道、南へ三州街道等が延びている。

伊那街道の各宿場には、一般に本陣や脇本陣はなく、問屋が必要に応じて本陣を兼ねていた。

伊那街道筋には、飯田藩があるだけで、この領主も参勤交代には、伊那宿から高遠を通って行くため、大名や公用の大がかりな通行はめつたになかった。そのかわり物資を運んだり、旅をする庶民の通行に利用されていた。

特に伊那を始めとする内陸地方の人々が塩や海産物などを東海地方に求めるための道であり、農民による農閑期の馬追いや早くから行なわれた道である。この馬追いを中馬と呼び、伊那街道は我が国でも最も中馬の発達したところであった。

明治五年には、宿駅制度が廃止された。同九年には、二等県道に改められ、ついで、同一九年には、二等県道三州街道と改められた。

道筋 本村関係の伊那街道を辿ると次のようである。

国道一五三号線箕輪町木下の南端から西へ五〇mほど入った所に「清水の里」と呼ばれているところがあり、そこには清水が出てくる。その傍に句碑や庚申塚がある。ここから箕輪坂を登ると仏像の刻まれた道標「右木曾道、左飯田道」がある。この道標から段丘中腹を通って久保の集落に入る。この部分の約二〇〇mは、伊那街道の旧道がそのまま残っている。この道をたどって久保の集落に入るところに栗鞍坂があったと言われているが、今はその跡が判然としない。そこからやや南に進み「大東」の東の段丘の中腹を通り、「坂上」の下から下り現在の旧道へ出る。

久保から塩の井にかけての伊那街道の道筋は廃道となったり、県道

〔旧国道〕と重なっていたりする部分が多いため昔の面影は少なく、石仏類も街道筋と離れた西念寺跡等に集められてしまったので、塩ノ井の中央部への坂の上り口に寒念仏供養塔を兼ねた古い道標(図3-45)が残るくらいではっきりしない。塩の井の南はずれから国道を横切った街道は、北殿駅へ下る道に入り翁塚と呼ばれる芭蕉句碑と筆塚が並ぶところに出る。岡石碑とも、もう少し北にあったものが道路工事の時に現在の位置に移されたものである。句碑の南の林の中にある明和坂を登り段丘上へ出て「辰巳屋」のところを縫の手に曲がる。そこから南が北殿大泉宿でここに高札があった。

このような曲がり角は、宿場や城下町に見られ、外からの侵入者を



図3-45 莒輪坂の道標 右木曾 左殿田道

を左に折れて坂を登って田畑の北割部落に入る。芭蕉の句碑のあるところから西に折れて庚申塚の前を通り、国道はたの馬頭観世音碑のところへ出る。そこから西に進むと道祖神のあるところに道標がある。この道標は、現在土中に埋もれて「右せ、左」としか文字が見えないが、これは、「右せんこうじ道、左やま道」ではないかと推定される。古老の話によるとこの道標は、北の方にある地藏堂の近くにあ



図3-47 明和坂



図3-46 寒念仏供養塔を兼ねた道標

ったといわれている。なお、北殿から田畑にぬける道が、天和四年の絵図によると「大寛古道」として記されている。これは「往還古道」と考えられる。この道は北殿の道標「右八幡道、左いせ道」から西に入り南箕輪小学校と村公民館の間の道を南に向かい八幡社の前を通り更に南に向かい大泉川を渡って国道西の段丘上に出て、田畑の地蔵堂に至る道であり、道標「右せ、左」と合流する。

この道標から南へ少し行くと小中井沢につき当たる。この小中井沢に沿って東南に向かい神子柴部落へ出る。神子柴の火の見やぐらのところに道祖神がある。この地点で、左に折れて南に向かい、国道を横切って、そのまな南の狭い坂道を下って大清水川に至る。現在、この川には、橋はなく行き止まりになっているが、この川を渡って御園部落へ出て伊那郡宿へ至った。

2 春日街道

文禄二年（一五九三）、飯田城主となった京極高知は、伊那谷を縦貫



図3-48 天保2年の道標（右八幡道 左いせ道）

する古道の整備にかかった。その後を受けて、慶長六年（一六〇二）飯田城主になった小笠原秀政は、伊那街道を整備されるに伴って、伊那街道よりさらに西方山麓に直線的な道路を計画した。この道の工事奉行が小笠原秀政の家老春日淡路守であったところから春日街道と呼ばれるようになった。

春日街道は、慶長六年（一六〇二）に着工し、同一三年（一六〇八）ごろ竣工したといわれている。

春日街道名は、各種の文書や絵図に出ている。天和四年（一六八四）、神子柴村田畑村山論出入裁許絵図裏書（田畑四屋文書）の中に「田畑村数年持林同氏神山ともに北は半沢、西へ畦道春日道迄境にて他村の馬草取神子柴分へ入らず……」とあり、田畑村などの西端を春日道で決めているから当時は、一般に春日道と呼ばれていたことがわかる。

この街道は飯島―駒ヶ根―宮田―西春近―小黒原（伊那市）―沢尻―伊那市宮火葬場―伊那農協選果場と来て大泉川を渡り、大和泉神社前から村中を通って大泉公園に至る。ここに一里塚跡がある。大泉を過ぎ西天竜の東から木下地籍に入り松島の上段を通過して大出に通じていた。沢尻から大泉北端までの本村内の道筋ははっきり残っている。

春日街道ができたとき、新しく大泉に宿場が設けられた。大泉宿の



図3-49 田畑の道標



図3-51 春日街道大泉宿（町割の跡あり）

あとをみると、南端に諏訪神社があり、北端には、一里塚跡や勝光寺（今は無任寺）がある。その間約七〇〇mの間に道をはさんで八間単位に地割りをした家が並んでいた。春日街道の道幅は、一間であるが、大泉に入ると二間幅となり、中心の約一八〇mは、市場と呼ばれ三間幅になっていて、計画的に設定された宿場であった。春日街道は長期間を費して完成したが、在来の村落に関係なく直線道路のため、森林の中を通り昼でも暗いほどで、盗賊などの出る心配もあり盗人道ともいわれた。水便もよくなく、慶安二年（一六四九）には、春日街道を公道としては廃し、大泉宿を北殿に移すことになった。



図3-50 旧一里塚跡

『伊那温知集』には、「慶長年中、小笠原兵部大夫秀政武丁ばかりも西へ曳上げ大出より伊那郡迄の道作り替え、此時奉行春日談路守也、之れ依り春日海道と言ふと見えたり、既に木下も此節右の海道へ町を曳き上ぐ可き積り用水井戸掘り候場所、今以て之れ有り水一切出ず申し候、之れに依り今の海道へ又返り候に付き、松島より大泉へ上道伝馬役勤め候故、殿村へ曳き下げたりと云う」とある。

春日街道については確かな史料がないため、その成立については、軍用面からか、経済面からかの諸説があり今もって解明されないままになっている。

古書には次の二説がある。

春日街道

此春日街道と云うは、文禄二年の頃、京極修理太夫飯田在城の時、街道改めあり惣て西の山方へ村を上げ大道を附け替える也。（『伊那温知集』）

春日道

文禄二年始め此れを開く、有司春日談路之を監す、因って名を為す也。慶安二年談路を東へ移し、春日道を廃す。（『伊那志略』）

(二) 大泉北殿合宿

1 宿場の成立と形態

伊那街道沿いの北殿が宿場になったのは慶安二年（一六四九）のことである。それまでは春日街道沿いの大泉が宿場であった。

一般に宿場は街道筋で人馬の継立てをするところであったが、また、大名・旗本や諸役人の宿泊する場所であり、一般旅人の泊る旅籠屋のあるところでもあった。そのため警戒は厳しく宿の入口、出口はわざと道を曲げる手に曲げていわゆる杵形にした。また一本道にして裏道を作らないことも用心のためであった。

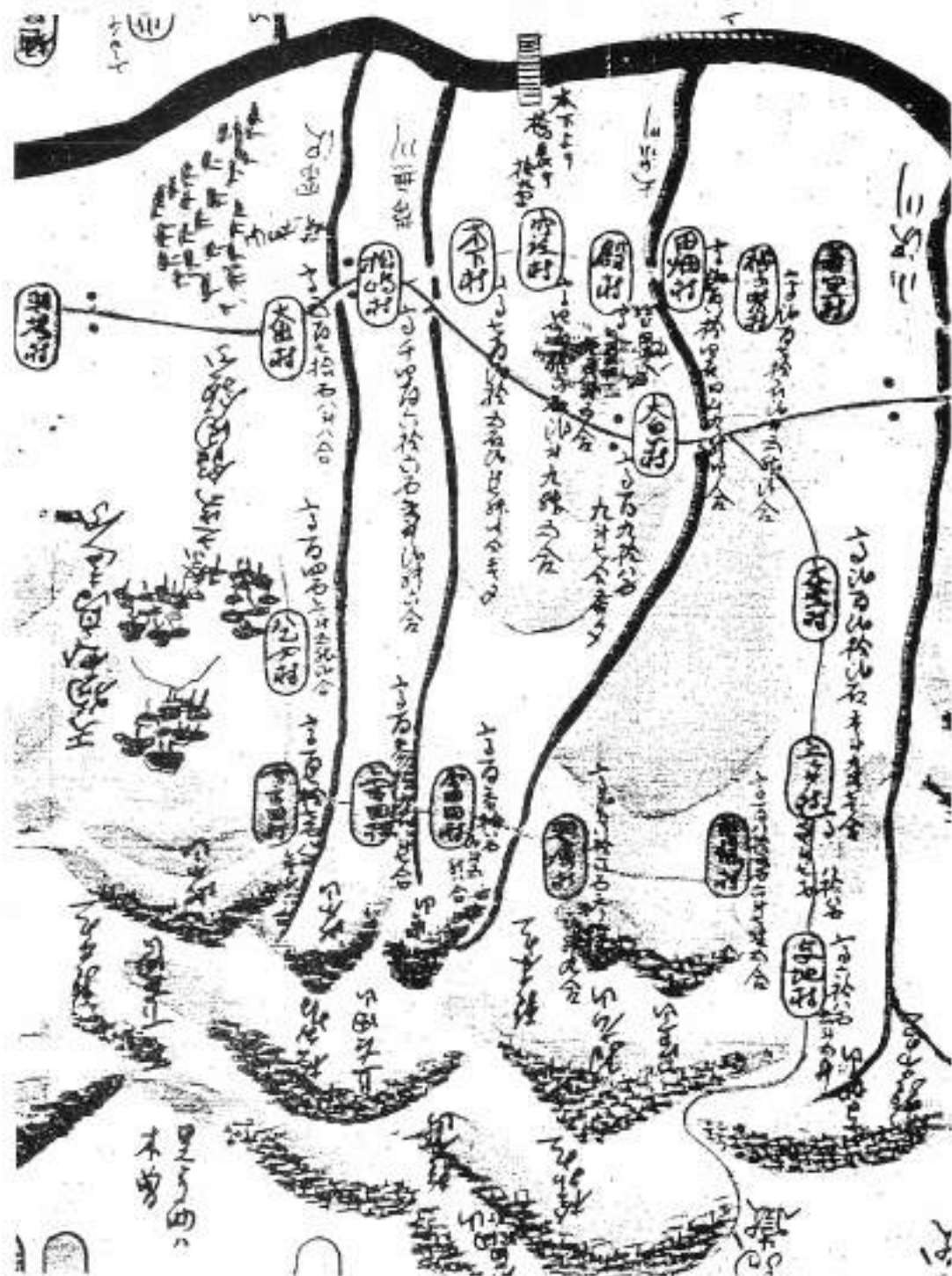


図3-52 春日街道を示す地図：は一里塚を示す
〔正保年間（1644～47）の信州伊豆郡の地図より〕（下伊豆教育会参考館蔵）

荷つけ馬のために、宿の中に水路を通すこともした。宿の中ほどには宿の中核機関である問屋があり、近くに高札場があった。問屋の両側に伝馬屋敷の町割があった。

伝馬屋敷は一定の計画によったもので間口・奥行ともほぼ一定の寸法に割られていた。

大泉が宿場になったのは、慶長六年（一六〇一）から伊那街道の西に春日街道が新設され、慶長一三年（一六〇八）ごろ竣工し、その時、大泉が松島宿と伊那宿の間の伝馬宿として設定したものと思われる。以来慶安二年（一六四九）まで、伝馬一二匹をもって伝馬役を勤めてきた。春日街道の項で述べたように、正徳五年（一七一五）の「北殿・大泉向村伝馬役出入裁許取替証文」によると、慶安二年（一六四九）飯田城主藤坂氏の支配の時、宿場を大泉村から北殿村へ移し、北殿村も宿場を併せつけられたので、大泉北殿合宿となった。

伝馬役は、今までの大泉村の一四区を両村で分け、大泉村が六匹、北殿村が六匹とした。大泉村から移って来た問屋一人伝馬役六人の合計七人には、伝馬屋敷として、北殿村より上畑八反五畝六歩が与えられた。同時に、北殿村にも問屋一人、伝馬役六人が定められた。

大泉村から移って来た者には、街道の西側にそれぞれ馬半匹分については間口六間半、馬一匹分についてはおおむね一二間の屋敷を割り当てられ、北殿村は街道の東側に居屋敷をもって宿駅を整えた。

移る前の大泉宿については資料がないので全くわからない。大泉北殿合宿になった経緯は次の「家帳出入裁許」に際して取り替わされた証文によってほぼ大要が察せられる。

「信州伊奈郡北殿村と大泉村伝馬役の者家帳出入御裁許取替証文の事」

一、北殿村より御許訟申上げ候は、伊奈街道古来は大泉村通りにて御座候処、道順悪く候に付き六拾六年以前慶安二（一六五〇）年隔年中務少補様御領知の

節、北殿村へ往還御附け替へ北殿村も宿場に併せ付けられ、伝馬拾二匹の内六匹大泉村、六匹は北殿村にて相勤め申す可き旨仰せ渡され、其の節より問屋、伝馬役を上畑二町五畝七歩の御年貢・諸役御免御伝馬役相勤め来り、其れ以後十六年以前飯田新兵衛様御代官所に罷り成り、右の御年貢免下がりに併せ付けられ候。大泉村より問屋・伝馬役の者七人北殿村へ引越すに付き高内の上畑八反五畝六歩御取上げ、右七人の者居屋敷に下され候（以下略）

伝馬町割の詳細は次の資料によって知ることができる。
（正徳五年六月 大泉中宿文書）

殿村伝馬町割の帳

屋敷割の覚

一、表六間三十間

六畝歩

勘兵衛

一、表十式間三十間

壹反貳畝歩

喜右衛門

一、表十式間三十間

壹反貳畝歩

九郎右衛門

一、表十式間三十間

壹反貳畝歩

忠右衛門

一、表十式間三十間

間屋

吉兵衛

一、表十四間の内せまきひろさならして

表十四間の内せまきひろさならして

彦右衛門

一、八間二尺廿寸間

六畝歩

彦左衛門

一、表十式間三十間

壹反貳畝歩

茂左衛門

一、表六間三十間

六畝歩

半三郎

一、表六間三十間

六畝歩

九郎兵衛

一、表九間うら地これ無き故ひろく渡す

廿間

伝三郎

一、表十式間のうちひろさせまきならして

九間廿四間

茂吉

一、表六間三十間六畝歩

七畝六歩

茂吉

一、表六間三十間六畝歩

七畝六歩

茂吉

一、表六間三十間六畝歩

七畝六歩

茂吉

一、表六間三十間六畝歩

七畝六歩

茂吉

一、表六間三十間六畝歩

七畝六歩

茂吉

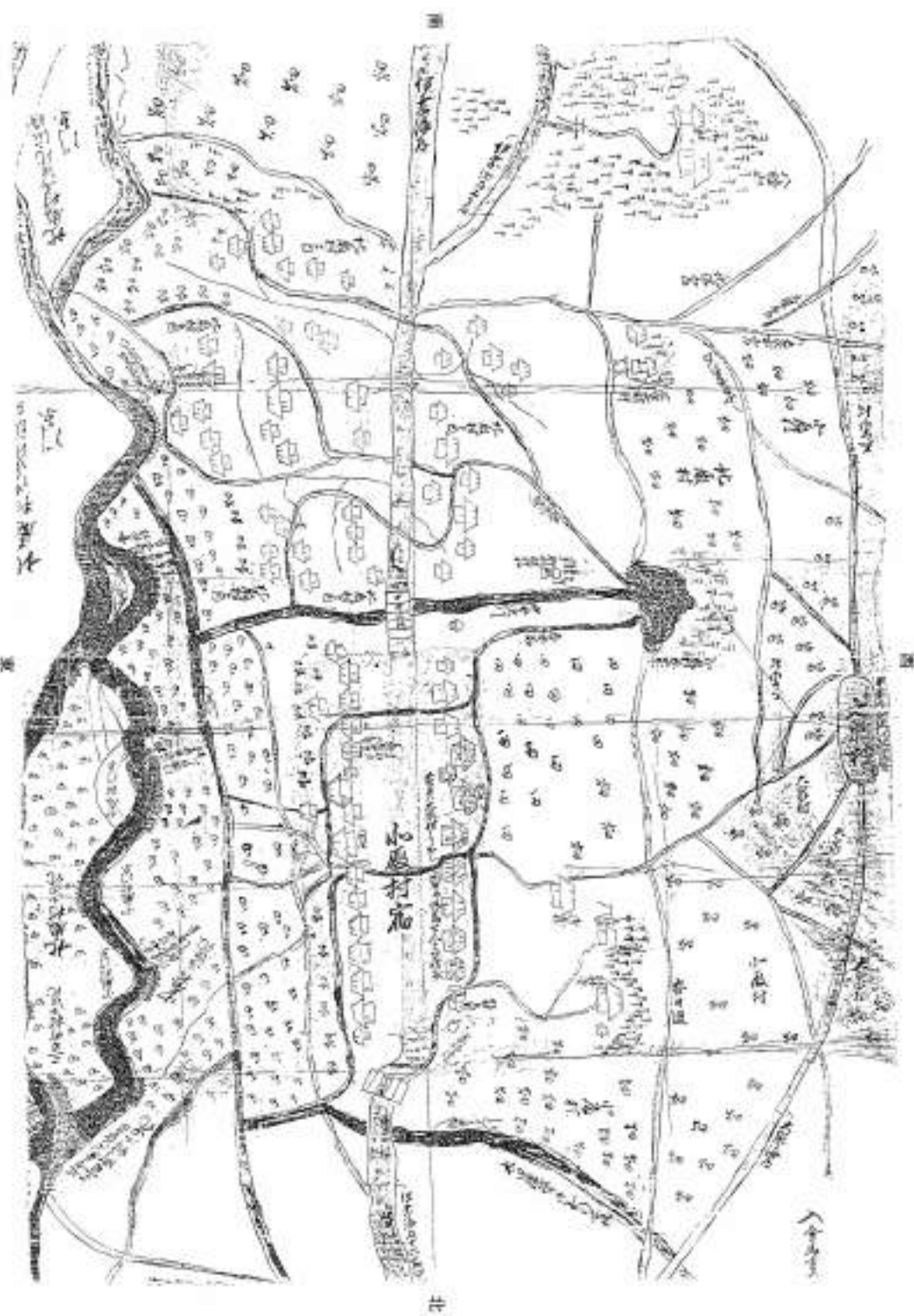


図3-53 大島北麓合図（正徳一筆写本用）
（四角が大島首 東側が北麓側）

- | | |
|---------------------------------|-------------|
| 一、表六間三十間六畝步 | 仁右衛門 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 五介 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 源右衛門 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 九藏 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 藤左衛門 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 源村の
藤右衛門 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 七右衛門 |
| 一、表六間三十間六畝步 | 喜介 |
| 一、表十式間三十間菰反式畝步 | 間屋
庄右衛門 |
| 一、表十式間十五間六畝步 | 市左衛門 |
| 一、表十三間の内ひろささまならして
十三間十三間平六畝步 | 勘右衛門 |
| 一、表居屋敷□地ノ分 | |
| 廿間廿五間 菰反六畝廿步 | 伝左衛門 |
| 一、是は右の屋敷に只今そへ分 | 同人 |
| 五間十六間 式畝廿步 | |
| 二口ノ菰反九畝十步 | 伝左衛門屋敷 |
| 町屋敷の分 | |
| 合式町六畝十六步 | |
| 一、宅間廿三間 式拾三歩 | |
| 茂古伝三郎屋敷の新みぞに引 | |
| 一、宅間十三間 十三歩 | |
| 市左衛門屋敷の新みぞに引 | |
| 一、宅間三十間 菰畝歩 | |
| 源右衛門屋敷より忠右衛門敷屋の中迄の新溝に引 | |
| 一、宅間十四間 拾四坪 | |
| 九郎右衛門と七介屋敷に詰めし新みぞに引 | |
| 合式畝廿步 只今引 | |

此外のみぎは先みぎと立用也

- 一、五間 沓反丸餘廿呎歩
百十八間町通の道に引
一、沓間 廿五歩
廿五間 町より北の作場道に引
合二反拾七歩道の分
式町貳反五畝廿三歩
惣合

武反三敵七步

新道新みぞに只今引き申す可き分

慶安二年

十月二日

馬場五右衛門

焚井 八左衛門

作生 次右衛門

加集 奎之介

(子嗣圖文書)

大泉村より北殿村へ移る間屋と伝馬役七人の人選はくじ引きによつて決めたようである。くじ引きをしなければならなかった事情についてはつまびらかでないが、百姓が移村して伝馬役を勤めることは容易なことではなかったものと思われる。

2 宿役人

宿場には、その機織を運営し維持するために宿役人が置かれた。問屋には庄屋名主以上の家柄のものを指名するのが普通であつた。問屋のほかに年寄りという役人もあつた。これらの役人はおおかた世襲であつた。

宿は幕府の道中奉行の指揮を受ける一面、村としては領主の支配を受けなければならなかった。

年寄は岡屋の補助者であつた。岡屋は一宿一人であるが北殿大泉台

宿だからここには二人の間屋がいた。

間屋の事務を行なうところを間屋場と言い、間屋・年寄の宿役人は日々ここに結めて、公儀の御用状・御先触の継ぎ送り、公用人馬の手配、商荷物の継ぎ立て等の宿駅事務の処理をする。そして人馬日帳に記載し、伝馬備人馬を出動させた。この事務処理の手伝いとして「間屋帳付」を雇っておき、また人馬の指引をするため「馬指し」も雇っておくのが一般であった。

宿駅には間屋の外に大名・旗本・幕府役人の宿泊所として本陣が置かれるのが普通であったが北殿大泉宿には間屋が本陣を兼ねた。

(北殿間屋資料について下に掲げる間取り以外門外不出につき北殿宿についての詳細は判明しない)

3 人馬の継ぎ立て

宿場の最も重要な仕事は、人馬による継ぎ立てである。そのため各宿は、規定された人足や馬を常備して、継ぎ送りに支障のないよう準備



図3-54 文久2年後藤忠一郎(木曾助御村御後分役)宿泊のときの本陣の表札

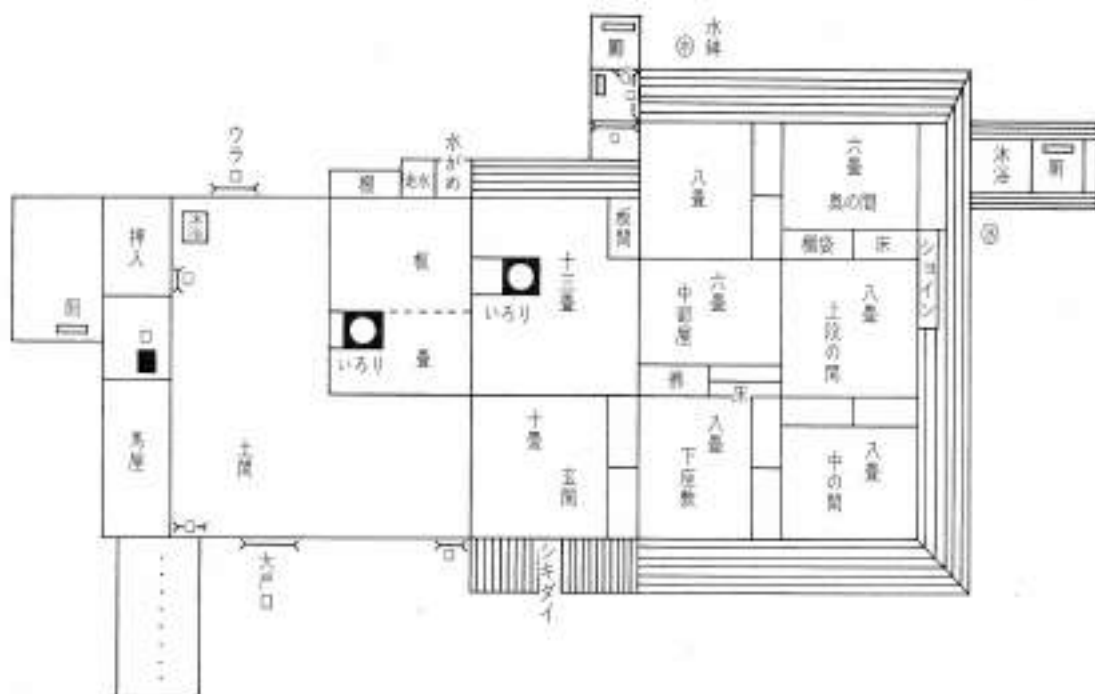


図3-55 寛永年代間屋間取り(北殿間屋文書)

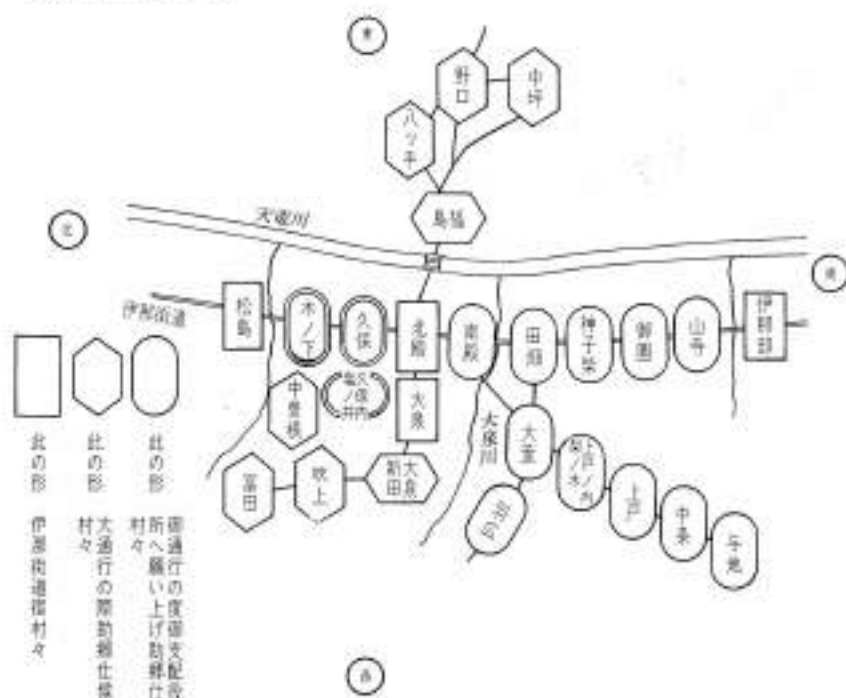


图3-56 大臺北府城地圖繪圖(千桐堂文書)

備していた。大泉北蔵合宿では松島宿から人や荷物を継ぎ立て、伊那宿へ送り、伊那宿からのもは松島宿まで送っていたが、大通行の時はここに常備された人馬だけでは不足する場合があり、その時は役所に願ひ出て、村高に応じて人馬を差し出すよう助郷村が決められていた。宝暦四年（一七五四）の「北蔵宿助郷人馬割賦帳」によると、

堀大和守の通行の際には、大泉村・羽広村・上戸村・中条村・与地村・大萱村・神子柴村・田畑村の九か村が幫り當てられていた。さらに不足する場合は、吹上村・富田村・中曾根新田村・福島村・野口村・中坪村・八ツ手村の八か村が増助郷村として助け合いをすることに決められていた。

大泉北蔵酒の通行量については、明治二年「宿由緒其の外取調書上帳」の中の北蔵宿人馬継立表には元治元年（一八六四）から五か年間の勤め数が記録されている。その一か年で人足一九二八人、馬三一七匹が勤めに出ている。

寶曆四年北條伯耆守人馬割賦

竟

- | | | |
|--------|------|------|
| 一、本馬七匹 | 人足八人 | 大泉村 |
| 一、本馬六匹 | 人足六人 | 羽広村 |
| 一、本馬四匹 | 人足五人 | 上戸村 |
| 一、本馬三匹 | 人足四人 | 中桑村 |
| 一、本馬三匹 | 人足三人 | 与地村 |
| 一、本馬五匹 | 人足五人 | 大萱村 |
| 一、本馬四匹 | 人足六人 | 神子樂村 |
| 一、本馬六匹 | 人足七人 | 田畑村 |
| 一、本馬三匹 | 人足三人 | 南殿村 |

右は堀大和守櫻明後廿日御通り遊ばされ候に

依り柱々へ人民御助前々の通り頼み入り存じ候

尤も一か村より才料一人ずつ御差遣之廿日明六つ時

相違無く問屋前へ参着候様に御申し付け爲され下さるべく候、其の爲以上

五月十八日

會田三郎兵衛

大泉村開原 原古兵衛

右村名主兼中
御年寄兼中

(中宿文書)

北殿宿人馬継立表(明治二年北殿宿由緒其の外取調書上帳)

一、人足	千九百貳拾八人	元治元子年
馬	三百拾七疋	立辻
一、人足	八百二拾三人	慶応元丑年
馬	百六拾八疋	立辻
一、人足	千四百百疋人	慶応二寅年
馬	百六拾七疋	立辻
一、人足	七百八	慶応三卯年
馬	百六拾二疋	立辻
一、人足	四千八百八拾五人	明治元辰年
馬	二百拾三疋	立辻
合人足	九千七百三拾七人	五か年分
馬	千貳拾七疋	立辻不用流其

(千間屋文書)

宿での継立人馬の賃金は、定額で宿問屋に支払われていた。

正徳年間の北殿宿よりの公定駄賃をみると、松島宿へは、人足一人につき、二四文、馬一匹につき四八文であり、伊那宿へは人足一人につき四〇文、馬一匹につき七九文であった。

御定賃金は、正徳元年(一七一二)に定められたものが基準になって基準賃金とされ、それを元賃金と呼んでいた。

上記の駄賃表の中の人足は、一人持ちの荷量五貫長持三〇貫一棹には六人掛りの定め。本馬は、荷付馬で一駄四〇貫。軽尻は、空尻・乗尻などともいい、荷付けの場合は、本馬の半分の二〇貫。また、荷な

表3-40 北殿宿よりの公定駄賃表
(明治二年北殿千間屋文書)

		元賃金 (正徳年間)	当時賃金 (明治2年)
松島宿 (道のり一里)	人足1人	24文	184文
	本馬1疋	48文	372文
	軽尻1疋	32文	248文
伊那宿 (道のり一里半)	人足1人	40文	312文
	本馬1疋	79文	617文
	軽尻1疋	53文	414文

に合わず非常に安く、ときどき値上げされても、支払われる人馬の賃金は不足したので、その差額は、宿問や助郷の負担になっていた。

4 北殿村と大泉村伝馬役の紛争

大泉村から北殿村へ宿が移されて以来合宿として問屋伝馬役を半々に勤めて来た。ところが大泉から引越して来た者たちは、北殿村に居住しながら北殿村の家帳につけず、大泉村の人別帳に載せ大泉村の支配下にあつて、北殿村名主の支配を受けず、さながら大泉村の飛び地のようなかっこうで、一種の治外法権的な存在であった。合宿となつて以来、この状況のもとで両者は問屋伝馬役を勤め続けて来たが、正徳三年に大泉村は代官が平田三郎右衛門になって北殿村は都築小三郎で別の支配者になった。北殿村では翌正徳四年四月名主・総百姓代より代官宛に書付をもつて、大泉村の者を北殿村の支配下にするよう訴訟を起こした。

しといつて人を一人乗せ、時には一人と五貫くらの荷をつける。

この御定賃金増額の経過は、明らかでないが、北殿宿の場合は、正徳年間の元賃金と比較し明治に入つて七倍強になっている。しかし、御定賃金の規定は、その時の相場

「恐れながら書付をもって御訴訟申し上げ候事

……右七人の者ども大泉村支配にまかりなり、北殿村御田地の内に居住仕りながら家帳等その外北殿村の支配請け申さず候。当村の御田御村に御座候え

ば村役勤め申す百姓多く御座候。何とも迷惑に存じ奉り候。

……大泉村より出で申し候伝馬問屋七人の者ども向後北殿村の家帳に御付け廻はされ百姓共々支配にまかりなり候ように仰せ付けなされ、下し置かれ候おば有難く存じ候。以上」

正徳四年四月

信州伊奈郡北殿村

名主 政右衛門

惣百姓代 勘左衛門

(中宿文書)

この訴えについて代官所吟味の際、大泉村伝馬六人と問屋が連名で口上書をもって次の趣旨の答弁をしている。

北殿村へ出宿した者は居屋敷の御年貢は北殿村へ差し出し、居屋敷に掛る諸役夫銭は年々北殿村の庄屋へ渡して来た。

北殿村へ家作したのは上様よりの仰せ付けでやむを得ないことであって、北殿村家帳に記載すれば、大泉村に持っていき百姓勤めをして来た分の高役が勤められなくなる。北殿村へ引越す際、御地頭様より大泉村人別帳に書き入れて大泉村支配と決めてくれ、それ以来御領御私領とたびたび支配者が替わっても両村互いに何の申し分もなく、御伝馬役往來役を怠り無く六〇余年勤めて来た。大泉村問屋伝馬役のものどもは大泉村古来の百姓であるから、北殿村御百姓になつては大泉村の高役を勤め難いから前々どおりにおいてほしいというのである。

この両者の言い分に対しさらに五月と八月吟味がなされたときの両者の口上書によると、大泉村より引越して来た伝馬役は六四分のうち

二四分は二人で勤め、四四分は百姓八人で勤め計一一人で伝馬問屋役を勤めて来た。その後、勝手悪い者は家屋敷を売って大泉へ帰った。

けれども数度その数は増減したが、六四分の勤めは怠りなく果たして来た。大泉村出宿の者は今まで通りしてくれというのに対し、北殿村では、ぜひとも家帳人別は北殿村へ記載して北殿村の支配をうけるように、また、大泉村から来て北殿村については大泉村の役を勤めるこ

とができないと申す者は、北殿村地主へ渡すよう仰せつけてくれればこちらで伝馬役を勤めるからそのようにしてくれといはったのである。このほか年貢、諸夫銭、御法度船等のこと等の互いの訴えがあつたのに対して、正徳五年六月裁断を下され両者の取替証文によつて事件が落着いた。その要点は次のとおりである。

(1) 大泉村出宿の家数拾軒の内大泉より引越したままの五人は大泉村人別家帳に記載し家役は大泉村へ、他の五人は大泉より引越した跡式が設けられ代ったから、これは当年より北殿村人別家帳に記入して家役人役北殿村へ勤めること。

(2) 先の五人の者も跡式を、その子、兄弟、伯父、甥に譲渡すれば問々のとおり大泉村人別家帳に記すが、その外の親類縁者に譲渡した場合は跡目の者は早速北殿村人別家帳に記すこと。

(3) 今まで出宿の者は居屋敷高へ掛かった諸役等は北殿村へ勤め、家役人役は大泉村へ勤めて来たが、用水、道、橋、舟陸、普請入用の人足等は居住の所へ勤めるのが筋であるから、人足出銭共北殿村名主の触れ次第勤めること。

(4) 氏神・水神祭・雨乞祭・風祭その外家別にかかる出銭は大泉村家帳に記載した五人は北殿村よりは割り懸けないこと。

(5) 麻畑を上畑なみに換って来たが以後、麻畑と上畑は別々の石盛りで御年貢諸役を勤めること。

(6) 問屋当番は出宿の者五人が北殿村家帳に記載することになったから以後

は北殿村が迄か月のうち二〇日、出宿の者が一〇日宛勤めること。

(7) 借家を貸せたり、二、三日も逗留する旅人のあるときは、北殿家横に記した出宿の五人は北殿村の名主問屋に断ること。大泉村分の五人は大泉村名主方へ断り北殿村へも断ること。

(8) 北殿村分田畑屋敷を持っていたものを賃物にするか、譲り渡すときは北殿村名主祖頭の印形手形をもってきめること。

二 中 馬

(一) 概 説

中馬は江戸時代に農家がその地の生産の野菜や穀物を換金のため城下町や宿場へ馬につけて売りに行き、その戻りに塩や魚など日常生活の必需品を買い求めたり、農閑期に駄賃稼ぎの副業をしたことに始まったといわれている。

最初は脇街道である伊那街道や青梅街道を中心に発達し庶民の生活必需品や商業的農産物等を山間地と都会との間に交流させる運輸機関であった。

中馬ということばは賃馬が転じたのだとか、中通い馬を略したものだとか、中買馬の略だとか手間馬がなまったものなどと諸説がある。伊那谷で中馬と呼ぶようになったのは元禄以後のようである。

中馬の馬方を「馬追い」と言い、一人が三匹か四、五匹の馬を一綱として宿場の問屋を通さず通し馬で往来した。彼等は菅笠に紺の股引・手甲・脚半・腹掛けを着けた軽快な服装の上に合袴を着たいでたちで鈴をつけた馬を追った。

江戸時代の交通運輸は官設の宿場に常備されている宿馬による宿継ぎによって行なわれるのが原則であった。商品荷物は必ず宿場の問屋を通過しなければならなかった。問屋は荷物に一定の口銭（馬銭とも

いう）を課してそれがだいいな収入源となっていた。

中馬は農民の間から自然に発達した在郷馬による副業としての農閑稼ぎが多かったから宿馬に比べて賃金は安く、中馬が発達して專業化する、生産地と遠隔地市場間との直結に重要な意味があった。付け通しで夜おそくまで歩き、荷物は早く先方に着き損傷も少ない。そのため商人も荷物を宿継ぎにしないで、中馬に運搬を依頼するようになると、宿馬はだんだんさびれ、問屋の収入が減じて問屋業が成り立ち難くなる。そこで官許の問屋・宿場側は免許を盾にとり従来の權威によって勢力を振い、宿々では中馬荷物を押さえ、口銭を払わねば通さない、中馬荷物も商人荷物同様に、宿継ぎにすべきだとの権利主張をするようになった。江戸時代も寛文年間（一六六一―一七三〇）以後になると商人と結びついた中馬と、宿場の問屋との間にしばしば紛争を繰り返した。明和元年（一七六四）の裁許によって中馬側の勝訴となり、中馬側は公けに認められた。この裁許によって村数と馬数、道筋が決定された。松本を中心に北は善光寺まで、南は名古屋岡崎、豊橋まで、東は甲府および高崎辺に至る街道が定められた。この裁許において認められた村数、馬数、通路の規模からみて、この地方の生活に中馬がいかに大きな影響を及ぼしていたかが推測される。

その後もなお紛争を繰り返したり、新たに進出してきた三州馬との争いなどがありながらも盛行を続け、明治になって交通変革と共にしだいに衰微し、明治一〇、二〇年代には中馬側会社が設立され、道路の改修や運送馬車の発達などによって衰微した。

(二) 伊那の中馬

中山道等の五街道は公用人馬の通行が頻繁になると貨物が宿駅に停泊することがしばしばあり、庶民の生活に支障を生ずることが多かった。したがって元来は百姓が農閑期に副業として駄賃稼ぎをしていた

第3節 道と往来

表3-41 中馬の馬宿記（伊勢街道高遠原宿）弘化3年（1846）10～11月

日	村	宿泊人名	馬数	泊数	泊賃	備考
10月2日		大泉 宇兵衛	3	2	文 778	米 (1.5升) 不明 (0.5升)
"		大泉 勇太郎	3	2	748	米 (1.5)
"		木ノ下平太郎	3	2	762	米 (1.5) ローソク (1丁) (豆 (6) 稗 (6))
5		木ノ下丞吉	3	2	748	米 (1.5)
"		木ノ下平太郎	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 文五右衛門	3	1	324	—
"		田畑 太郎左衛門	3	1	324	—
"		大泉 勇太郎	3	2	748	米 (1.5)
7		大泉 宇兵衛	3	2	748	米 (1.5)
10		大泉 文五右衛門	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 善之丞	4	1	1,024	米 (1.5)
11		大泉 勇太郎	3	2	748	豆 (4) 稗 (4) 米 (4)
"		大泉 宇兵衛	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 小四郎	4	2	948	稗 (8)
17		大泉 文五右衛門	5	2	1,138	稗 (8)
"		大泉 宇兵衛	3	2	748	(但2人米はぬけ)
"		大泉 勇太郎	3	2	748	米 (1.5)
28		大泉 善之丞	4	1	1,024	米 (1.5)
11.6		大泉 文五右衛門	3	2	848	豆 (4) 稗 (4) 米 (4)
"		大泉 庄八	2	2	677	米 (1.5)
"		大泉 峰次郎	2	2	677	米 (2)
7		木ノ下丞吉	3	2	748	米 (2)
10		大泉 文五右衛門	3	2	1,031	米 (1.5)
"		大泉 庄八	2	2	613	米 (2.5) 柿皮 (2貫700匁)
11		大泉 勇太郎	3	2	748	米 (1.0)
"		大泉 文左衛門	2	2	613	米 (1.5)
17		木ノ下丞吉	3	2	748	米 (1.0)
20		大泉 宇兵衛	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 勇太郎	3	2	748	米 (1.5)
22		大泉 文五右衛門	3	2	748	米 (1.5)
25		大泉 宇兵衛	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 勇太郎	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 文五右衛門	3	2	748	米 (1.5)
"		大泉 善之丞	4	2	894	米 (2.0)
"		大泉 庄八	3	2	456	米 (2.0)
28		大泉 善之丞	4	1	1,024	米 (40) 豆 稗 (4.0)
30		大泉 恒吉	3	2	748	米 (1.5) 以下4筆共恒吉名儀
"		"	3	2	748	米 (1.5)
"		"	3	2	748	米 (1.5)
"		"	2	2	613	米 (1.5)

1. 備考欄は、米・豆・稗その他の項上で、宿泊賃に加算してある。計算の方法は「宿松定」による。

2. 30日に恒吉の勘定が4筆あるがおそらくは恒吉がこの月のうちに泊った分を、この日に支払いしたものであろう。

(『上伊勢郡歴史』より)

中馬が、商品の運搬をするようになり、公用人馬の混雑しない脇往還が多く利用されるようになった。なかでも伊那街道は中馬が最も盛んに往来する往還であった。

同一路線上を荷物を運搬する中馬と宿場問屋との間に対立紛争の起こるのには自然の成り行きであったであろう。その紛争をなるべく避けるために中馬宿は宿駅よりも、宿駅を外れた方が、好都合であったであろう。松島宿の南の木下、赤須上穂宿の南の小町屋、片桐宿の北の高遠原等に中馬宿が発達した。

伊那街道の中馬は鶴巻で飯田のごときは「日々入馬千匹、出馬千匹」といわれるほどであった。その中には本村の馬もまじっていた。村を出て飯田へ往復するには途中で泊らなければならなかったであろう。飯島町七久保あたりに宿泊したようである。表3-41の弘化三年一八四六の中馬の馬宿記（飯島町七久保板屋文書『上伊那郡歴史資料』）によると一〇月一二月二か月間に木下、田畑の馬追いも泊っているが大泉の馬追いが一〇名、馬は二匹泊っている。このときの宿泊料は次のとおりであった。

一 宿払い定め（弘化三年）	
一 五百三拾貳文	貳匹迄
一 貳百六拾六文	貳匹
一 三百廿四文	三匹迄
一 六百四拾八文	三匹迄
一 七百六拾四文	四匹迄
一 三百八拾文	四匹迄
一 六拾四文	一匹一升代
一 七拾貳文	一匹一升代

（『上伊那郡誌』）

三 中馬紛争

1 百姓馬の付け通し

中馬は荷物を宿問屋とかかわりなく付け通すので中馬の発達は宿問屋の業務の減少を来した結果となるため、両者の利害は相反し、しばしば紛争を起こした。

寛文一三年（一六七三）飯田・大島・塩尻の問屋が中馬から役銭をとった。これを不当として宮木・大出・小野の中馬村が問屋側を相手として出訴に及んだ。その裁決は中馬の通し馬自由を公認し、中馬側の勝訴となった。その裁許状を次に掲げる。

寛文十三年六月 宮木村・飯田宿等中馬出入裁許状

寛

信州宮木村・大出村・小野村の百姓と飯田・大島・塩尻問屋共訴訟の事。売買の荷物自分の馬にて通し候は、右の問屋共、荷物をおさへ、或いは本駄賃の半分又は荷物上まへに取るの由不屈きに候。

向後堅くこれを停止候。然れば商人の荷物出所よりの通し馬は其の通り為す可し。次馬の荷物は海運並みの駄賃にて宿継ぎにこれを通すべし。自今以後此旨相守るべし。仍て後継証文此の如く双方へ下し置く者也

寛文拾三年癸丑六月廿五日

宮木村・飯田宿等	（田畑問屋）
甲斐 喜右印判	徳 五兵衛印判
杉 内茂印判	松 猪 右
宮 若狭印判	島 出雲印判
本 長門印判	

（田畑問屋 文書）

伊那街道の中馬紛争は江戸時代の当初からあったと見え、脇坂氏の飯田在城時代に七色荷（立系・紙荷・櫛荷・めんたい・ふと物・麻草・たば粉）に限って商人荷と同様に宿継ぎと定められていたが中馬がこれ

らの品物を付け通すことがあったので、宿問屋中から訴訟を起こした。

これに対して伊那郡の中馬と松本商人が伊那街道拾六宿の問屋を相手として訴えを起こし翌年裁断が下った。それによると問屋側の言い分には偽りがあるとして問屋の惣代に牢書を申しつけ、向後諸色荷物一切付け通すべき旨の裁断により中馬側の勝利となった。その裁許状は次のようである。

元禄七年八月伊那郡七三か村中馬出入裁決状

信州伊那郡七三か村中馬並びに同国筑摩郡松本町商人と同国伊奈海道拾

六宿問屋次馬評議の事

中馬の者申す様、伊奈海道諸色商荷物は、古来より尾州・三州・松本へ通し馬にて道路仕り来り候。先年中藤少輔信州領知の節、家来方より七色の荷物宿次ぎに致すべき旨、市田村問屋方へ書付差し出すに付き、荷物上まゝ探め取り候故、武拾貳年以前右の段訴え候。奉行より証文これを出し、前々の如く道路致し候。然るに去る春問屋共、七色の荷物宿次ぎに申し付け候由申し立て、荷物九駄押し止め候由これを訴う。

松本町商人申し候は、此の方地頭方へ拾六宿問屋訴え候は、去る春商人荷物宿次に仕る可き旨申し付け候故伊那海道諸色・私領七色の荷物、中馬に付けさせず候。松本町の者、今もって中馬に荷物売り出し候間、向後無用の由通判の訴状差し出し候。其の上、松本は中馬所と申し立て売り遣わし候。荷物押さえ候由これを申す。

拾六宿問屋答え候は、中馬の者申す通り先年証文出で候節は、出所よりの作物ばかり中馬付け通し候。近年松本商人と一味致し、出所よりの作物とこれを申し、松本売買の荷物付け通し候に付き、去春これを訴え候。次ぎ荷物証文の通り宿次ぎに致し候故、尾州・三州より七色の荷物の内付け通し候に付き、九百駄程これを押え、もつとも松本売買の荷物付け通し候も、是れ又九駄押し止めしの由これを申す。

右訴論不分明に付き、換使として、岩手藩左衛門手代杉山儀兵衛・郡吏長左衛門手代岡太郎兵衛を差し遣し穿鑿せしめし。先年証文の面、商人荷物出所よりの通し馬は、その通りたるべしとこれ有り。然るを宿問屋出所とこれあるは、七色の荷物作り出す在所よりの通し馬の文書たる由これを申すに付き、作り出す在所の者召し寄せ証文を渡けし。松本に於て、中馬に売り出し候儀これ無きの由口書これを出す。其の上、松本町にて売り出す荷物宿次たる由宿問屋、是れ又これを申すと雖ども、右荷物拾六宿の者買出し、尾州・三州へ付け通し候。武拾四年以前よりの直帳並びに七色の荷物所々より松本へ付け来り候送り状数通松本町の者所持致す上は、宿問屋訴えの縁かたがた非分也。

然る上は、去る春荷物宿次に申し付け候由、虚言を構え不届きたるに付き、伊奈海道宿問屋平會せしめ畢んぬ。向後諸色商荷物中馬付け通し一切これを妨ぐべからず。後証の爲、裁断の趣、これを書き記し三方へ下し置く者也。

元禄七年甲戌八月十四日

(本所 貞吉) 井三郎 伊賀
(松本 貞吉) 松本 貞吉 川口 貞吉
(尾州 貞吉) 尾州 貞吉 本 貞吉
(三州 貞吉) 三州 貞吉 松本 貞吉
(戸部 貞吉) 戸部 貞吉 松本 貞吉

(問屋文書)

宝永三年(二七〇六)にこんどは伊那中馬が、伊那街道は我々の申し受けた道筋であるのに、筑摩郡村々の中馬新馬が中継ぎ(飯田での荷替ぎ)・在継ぎの訳をも存せず松本商人の買荷物と称して偽せ仕切りをもつて忍びの体で通行するのは許されないと、筑摩郡中馬と松本商人を相手取って訴訟を起こした。しかしこれは通らず、通し馬、継ぎ馬ともいづれの道筋も勝手次第と裁定された。その裁許状を左に掲げる。

伊那郡・筑摩郡村々中馬出入裁許状

信州伊那郡と筑摩郡村々中馬新馬の儀訴え出で候。

先年の裁許書これ有りとも、道新並びに荷物の品はこれを相定むるに及ばず、村々より付け出し候荷物因々往來致す段、いずれの道新も向後通し馬・次馬双方勝手たるべき次第、これにより先の証文は悉くこれを取り上げ候。

右裁許の趣相守るべき者也。

宝永三丙戌十月廿五日

石阿波(波か)

以下一〇名連印略

(玉理軒文書)

宝永七年(一七二〇)には甲州宿では伊那・諏訪・筑摩の中馬には商売は一切まかりならず、中馬宿も貸せないということになった。そこで中馬業者はそれぞれ領主の訴え状を得て甲州の奉行所へ、古来のとおり仰せ付けられたい旨、願書を出した。結局は甲州における中馬宿は自由になった。

2 宿場の既得権

享保年間から宝暦年間までは宿場が中馬に対して既得権を守るための給争の期間とされている。

享保一、一二年(一七二六、七)片桐・大島・原町宿と中馬の争いがあった。裁決は三宿の宿継ぎを認め、残り荷は中馬の付け通し自由とされた。

享保一五年(一七三〇)中馬側が宿継ぎをすべき荷を密におろさず小町屋まで付け通して荷替えをしたため、上徳・赤須の両屋が訴出して結局は前年享保一二年と同様の裁許となった。

元文四年(一七三九)には高遠中馬が金沢宿に荷物の口銭を取られたのに始まり、続いて台ヶ原、葉崎でも取られた。そこで高遠側が異議

を申し立てたところ宿側は荷物全部を差し押さえたので、訴訟を起こした。ところがこの解決は簡単に行なわれず、給争は拡大して、高遠側の村々に諏訪領の村々が加わって江戸表道中奉行に訴出した。訴状には当時の信州中馬の実状をよく述べているのでその概要を次に掲げる。

一 信州には船の通路が無く、あらゆる荷物は中馬によって運搬し、国中の産物は他所へ付け出し、戻り荷として江戸から塩・魚類などを付け入れて需要を充している。もし中馬が停止されるようなことになれば、塩は高値となり、百姓は困窮する。

一 信州は米穀の充てきに不自由な國で、もし中馬付け出し停止となれば米価は下り、その上運荷も他國へ出し得なくなれば延いては御地頭様の御勝手向きも差しかえを来すこと限能である。

一 信州から出る中馬の数は一日に五六百駄宛も往來しているが、これを駅継ぎにすれば日数がかかり、酒荷は途中で相損じ、米穀もふけ損じ、材日も不足となり、荷買の差し支えになる。

一 古来より諏訪高遠から江戸まで往來の中馬駄賃は壹駄につき、三貫百文余り、これを駅継ぎにすれば五貫七百文もかかる。

一 甲府までとして中馬は九百十六文、駅継ぎなら壹貫八百二十文となる。こんな高い宿継ぎとなれば馬追ひ稼ぎは駄目になり國中諸物の出入が断絶することになる。

一 信州中馬は古来いずれの道新も付け通しの自由を許されているのに、甲州四か宿に限り御定法を申し立てる。

一 信州中馬については寛文一三年・元禄七年・宝永三年と、毎度の御裁許で、無口銭で荷物勝手次第付け通し申すべしという御書を頂戴している。

一 宝永七年信州から甲州へ穀類・酒並びに諸色付け入れ停止の令があったが、それでは江戸・駿河辺との往來差し支えになると信州御料・私領共に願ひ出し、前々通り往來することになった。

一 信州の中馬が甲州四か宿を往来する荷物の駄数は、去る一二月から当年二月までにおよそ四万駄、これに口銭を出すことになれば四か宿でおよそ二二〇貫余となり、もし、それがほかの宿々に及べば中馬のいとなみができなくなる。

一 信州は田畑が少なく、中馬渡世をするため馬数も相応に多く、宿駅へ大馬を勤めて、細く道方の村々からもまかり出、山谷の折道故、本宿一駄を馬二匹又は三匹で付け送るので随分の人馬を要する。もし中馬を停止されれば馬持のものが半以下に減少し、大馬勤めにも支えになる。

同上伊那記

この紛争に対し結局、寛保元年（一七四一）にいたって、荷物は中馬付け通しの無口銭荷物、中馬付け通し口銭駄課荷物と、宿継荷物の品目を別口に分けること、治道二九か村のみの通行を認めるということとで円満に解決を見た。

宝暦九年（一七五九）宿場でない木下村にはたぐさんの荷宿があつて中馬継ぎを行なっていたのに対し、これは宿継ぎに等しいものだとして宿問屋（松島）が口銭を求めたことに端を発して平出・宮木・松島の間屋が木下村の中馬を相手に訴訟を起こした。その裁決に当たっては、自村付け出しの荷物は売却自由を認めるが、為替・敷金による専門中馬業は禁止、中馬荷物の途中での荷替えは禁ずるということとで決着した。

3 中馬宿行の公許

宝暦九年の裁定があつて間もなく、中馬が問屋のある宿駅で荷替えをしたのを、これは宿継ぎに等しいとして宿問屋が口銭を要求したという事で久保村・大出村・南小野村・北小野村の百姓代四名が中馬村八か村（八二あるいは八三とする説もある）の総代として、松島・北殿・宮木三宿を相手取って出訴に及んだ。

同一〇年、中馬方の願書と宿方返答書は長文であるが、明和元年裁許があつたときの「伊那筑摩村々中馬荷物馬数等申渡請証文」の前半にその要点が述べられているから左に掲げる。

明和元年十二月二日

差し上げ申す一札の事

信州伊那・筑摩郡の内八拾番か村惣代久保村・大出村・南小野村訴え上げ候は、伊那郡の中馬は、参入三、四正にて、松本より尾州・三州まで凡そ五拾余里余諸荷物通し馬にいたし、又は中馬仲間にて場所を構わず荷替えいたし、勝手をして附け送り来り候は、右道筋のうち松島・北殿・宮木三か村より附替荷物に相障り候宝永三戊年出入の節、通し馬・継馬勝手たるべき次第の旨御裁許これ有り、中馬継ぎを以て御年貢相納め百姓相続いたし、中山道助役も勤め来り候間、中馬荷物附け送り並びに附け替えに相障らざるよういたした旨、之を申し上げ候。

一、同国伊那郡松島村・北殿村・宮木村等え上げ候は、宝永三戊年中馬方出入これあり、その節の御裁許を相守りまかりあり候は、近年継ぎ荷物を宿問屋に成り候は、宿問屋にては、御朱印御証文其の外御用通行ばかり継ぎ立て、勝手に成り候は、中馬にて継ぎ合ひ、別して木下村にて我儘いたし候は、去る御年卒出村・松島村より右木下村を相手取り出訴に及び、御吟味の上、中馬の儀其の村の産物附け通し売渡し、右売渡し候所に外の品を買ひ求め附け候とも、いずれも参着の所まで通し馬にいたし、区々の継ぎ合ひ致す間敷く、若しよんどころ無き儀にて継ぎ合ひ候は、馬路場にて継ぎ、宿継ぎにいたし来たり候。而い荷物の分は中馬に附け候儀は相止め申すべく候。右の通り候上は、向後宿問の儀も、中馬の継ぎ合ひ並びに売渡物の継ぎに致さざるよう御裁許これ有り、其の所の産物を目数十二、三日余も通し馬に仕り候事にて他所の荷物を引請け、或いは勝手をもって継ぎ合ひ候儀にはこれ無き旨これを申し上げ候。……

頓発する争論の根本的解決には現状把握が先決と考えた幕府は宝暦一二年（一七六二）一月御普請役米倉幸内および付添い合わせて八人を伊那へ遣わして検分させた。検分の結果現に起こっている争論の解決策として、中馬扱いの自分付け出荷物と間屋扱いの雑荷物を品目別に分離することにより、木下問題も同時に解決できると判断して暫定的に次のように定めた。

○宿雑貨物・水油・瀬戸物・絹荷・笠荷・仏壇・干粕・粟糠・上野紙・ござ・深草・櫛の木・漆・酢・燗酒

○宿雑ざしない荷物・竹輪（竹たが）・紙類・唐具（漆器曲物）・ろうそく・檀荷・麻・たば粉・藍玉・鉄物類

幕府は検分の結果を吟味した上で翌々年明和元年（一七六四）一二月根本的な裁定を下した。

検分使はあらかじめ文書を以て各宿に、宿や街道の状況、歴史、中馬との関係、中馬の歴史などを質問し、返答書求めて判断の資料としている。

北殿大泉台宿の間屋吉右衛門は質問に対し、北殿村に住居していること、中馬方と知り合いがあることであるからこの出入りについては御答えは御免願いたいこと、どんな裁決が下されても後日少しも御願いの義がないと返答している。

明和の裁許 明和元年（一七六四）一二月、米倉幸内・高橋八十八両人の検分に基づいて中馬慣行が決定的なものとして裁許された。この裁許は後年起こった紛争に際していつも基準とされた。この裁許書の内容は大別して次の三つになる。すなわち①中馬通行の路、②各街道の中馬荷物と間屋口銭、③中馬村と中馬敷である。

中馬通行の路 裁許書から伊那関係の分を抜粋すると

「松本町・飯田町に荷問屋これ有り、右問を伊那街道と唱え、飯田より末に



図3-57 北殿宿はたご（高屋）間取り図

尾州名古屋町・三州岡崎・古田両宿への道筋。或は松本町より中山道を名古屋・平府又は在々より食賀野宿其の外北国社連へ信州の産物を付け送り、戻り馬場もこれ有る段相違無し」とある。

中馬場ぎの通行路は一応この裁許できまっていたが、元來通行路は自由であるのがたてまえであった。

なお伊那関係の道筋を抜粋すると次のようである。

一伊那道筋

松本町より飯田町まで

村井・塩尻宿・北小野村・宮木村・松島村・北庭村・伊那宿村・宮田村

・上郷村・飯島村・片桐村・大島村・市田村・飯田町

飯田より分れ尾州名古屋町への道筋

駒場村・浪合村・平谷村・板羽村・武蔵村・明川村・足助村・枝下村・

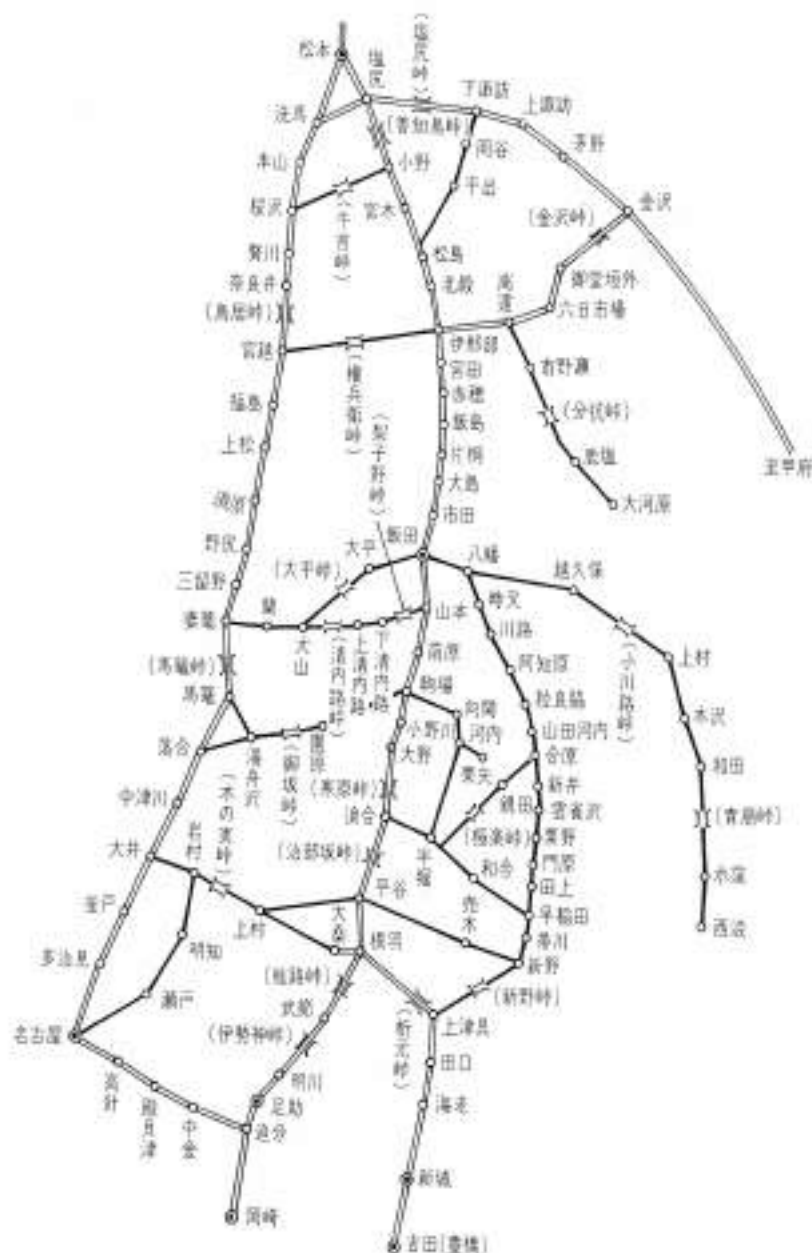


図3-58 明治初年の伊那郡中馬道路線図(『中馬の習俗』による)

伊保村・平針村

足助より分れ三州岡崎宿への道筋

西野村・中垣外村

根羽村より分れ三州吉田宿への道筋

三州

上津具村・田口村・東田内村・海老村・新坂町・野田村・麻生田村

以上が大体上伊那の中馬の通った道筋である。この道筋で宿とあるのは中山道・甲州街道の道筋だけで、その他は町・村となっていて宿と区別して馬継場といっている。それは元禄一三年五日に宿場免許地(伝馬町年貢免地)御取り上げになっているから馬継場と宿場は同じである。

中馬荷物と口銭

「松本・名古屋・岡崎・吉田右四か所荷問屋送状これ有る荷物は、何品によらずすべて中馬にて往還付け送るべし」とあり、この道筋の中馬荷物には特別の制限はしていない。

明和元年の裁許書より口銭をひろってみると次のようである。

伊那 街道

村井・高尾両宿のみ米穀のほか一駄につき四文

松本町より名古屋町

米穀のほか、一駄につき四文。松本町中馬所出荷物米穀類のほか一駄につき十二文

松本町より甲府迄

串柿・麻布・油往・油指一駄につき四文、昆布・ところてん草・あらめ・わかめ・そうか一駄につき六文。

在々より倉賀野宿迄

追分・吉掛・軽井沢三宿。堀一駄につき三文、茶・酒一駄につき六文。

和田外七宿・堀一駄につき二文。茶四文。坂本・松井

田・安井・板鼻・高崎の五宿口銭なし

松本町より上田迄

米穀類・酒・薪のほか一駄につき三文。

北国往還と善光寺町迄

米穀類のほか、一駄につき四文

北国往還と善光寺町迄

米穀類・炭・薪・酒のほか一駄につき三文

中馬による駄賃は宿公定の駄賃よりはるかに低額であった。

駄分けについては次のように中馬と宿継ぎとの駄分けを規定し、この分は中馬の駄賃をもって馬継場で継ぎ立て、その余は中馬継ぎ送るべしといっている。

「松本より飯田までの諸荷物一か年およそ三三六〇駄余の内六〇〇駄は中馬の駄賃をもって馬継場にてこれを継ぎ、その余は中馬継ぎ送るべし」

「飯田より松本までの諸荷物並びに飯田より下諏訪宿への諸荷物ともに一か年およそ一万四七〇駄の内松本へ送り換分六〇〇駄は中馬の駄賃で馬継場で継ぎ、その余は中馬継ぎ送るべし」

下諏訪宿へは平出村・岡谷村右二か村にて八〇〇駄は中馬の駄賃をもってこれを継ぎ、その余は中馬継ぎ送るべし」

このように明和の裁許では宿継ぎ商品は駄数が定められているだけで商品の種類の制約がなかったため、飯田の荷問屋は彼らにとって有利な中馬によって送り出し、宿継ぎ荷としては送り出さなかったため後年これがまた紛議をかもすことになった。

中馬村と馬数

中馬継ぎをする村や馬数は農閑稼ぎの場合と専業化した場合とあり、はじめははっきり区別がなかったが、明和になると中馬は運上金を出すようになったので固定化した。裁許には「衆議の上、六百七拾八か村を中馬村に定め、但し馬数格別相増し申すまじく候、もっとも馬の代わりに牛を遣い候とも書面の員数等准ずべし」とされた。

村数と馬数は次に掲げるとおりである。明和の裁許書に示された中馬村数と馬数は別にみると、村数では安曇郡が一番多いのに馬数は伊那郡が第一位で安曇郡の倍以上になっている。また、諏訪郡に比べても伊那郡が多い。

本村および近隣の村々の馬数を掲記すると表3.42のとおりである。

中馬稼ぎの村数および中馬数

諏訪郡	一二三か村	小泉郡	三五〇
筑摩郡	一五九〇	更後郡	五〇〇
伊那郡	一六三〇	埴科郡	六〇〇
安曇郡	一七九〇	高井郡	八〇〇
計	六七八か村	馬数	一八六一四匹

表3-42 本村および近隣の村々の中馬数

村	馬数
村	72
島下	55
日野	32
三保	54
久保	50
久保	31
久保	26
久保	51
久保	45
久保	10
久保	10
久保	13
久保	70
久保	52
久保	58
久保	57
久保	52
久保	26

この表で見ると各村とも馬数がはなはだ多いのは中馬稼ぎの馬数が限定されるとすれば各村ともその既得権を得ておくために多い数を申し立てたものと思われる。このうち大泉の馬数の少ないのに奇異の思いを抱かせるがこれについては誤りであるとして訂正方を申し立て、中馬組合の惣代四名が連署をもって証拠だてている。

一札の事

明和元年十二月伊那郡中馬出入御裁許仰せつけられ、右御裁許に大泉村十四と御書き下されこれ有り候えども、中馬御使へも五拾二匹と書き上げられ候由、承知致し向後五拾二匹に相違御座無く候。

もともと右出入用も拾捌分の出銭成され候儀に御座候間、此の度書き付け進じ申し候。

右の馬数の儀に付き組合村は申すに及ばず、何方にていか様の儀申し候とも我等ども証拠に相立ち永々違乱申させまじく候。後日の為、件の如し。

明和三年十二月

中馬惣代 久保村 第五右衛門

大泉村

御名主中

御年寄中

(中書文書)

明和年間の紛争 明和の裁許によって、中馬は信州一円を通ずるものとして公認された。明和の裁許はその当時の慣行をもとにして、勢力の強くなった中馬の当時の稼ぎ方を公認したので商人といっしょになつて宿場を圧迫していたそのまゝが裁許になつてあらわれたものである。

ことに伊那街道においては、中馬付け通しの自由、品目も自由が公認され、わずかに駄分け荷といわれ一定の駄、(六〇〇駄)だけ宿継ぎが認められ、その駄賃も中馬駄賃で継ぎ送りにすることに定められ、それが宿場の収入になるだけで通過中馬からは口銭が取れないことになった。

宿場側は何とかして定駄賃による宿継ぎ荷物を得ようとし、それはまた中馬稼ぎに影響するので明和裁許以後もしばしば紛争を起こすのであった。

南信の特産八品目は従前から宿継ぎであつたが明和の裁定では中馬自由となつた。その権利復活を策して明和六年飯島・片桐・大島・市田の四宿が特例としての許可を申請し、これが認められた。八品とは糸・繭・焼酎・油蔎・串柿・竹輪・古瀬たば粉・麻である。

これに対して飯田・松本の商人・荷問屋・中馬の猛烈な反対運動が起こつたが結局、明和九年(一七七二)にいたり、八品のうち、飯田か

ら付け出した竹輪・串柿・土味茶、および高遠より付け出したものは付け通し交易さしつかえないとされ、他は宿継ぎと確定した。

安永年間の紛争 八品の宿継ぎは中馬側の攻勢によって生産者と商人の要望でだんだん崩れていく。元来自家生産物は手馬によって宿継ぎに運ばれ宿継ぎに移るのであるが、在郷では直接中馬荷にかけける方が日数や駄賃のうえから得策である。

飯田宿間屋から飯田発の送り状荷が増加し、飯田近在の荷もまた増加すると中馬荷が多量のため宿継ぎで中身の検閲もしきれなくなってきた。

そこで安永八年大嶋間屋が中心になって飯田商人に次の申し入れをした。八品のうち特に三品（竹輪・串柿・土味茶）の飯田発の荷は中馬村八か村（市田・大嶋・片桐・飯島・上穂・宮田・伊那郡・殿村）に限り中馬荷とし、他は宿継ぎにすること。

しかしこの結果中馬荷の口銭、差し押えが頓発したので八品の間屋継ぎ廃止運動が燃え、安永九年（一七八〇）八二か村が訴訟を起こすこととなった。紛争の結果は糸・調等中馬にて付け送りとも大嶋ほか一三か村差し障りなしとし、明和裁許の趣旨を守れということになり中馬側の全面勝訴となった。

享和三年（一八〇三）中馬密売買禁止 中馬の発展がめざましくなり、本来の駄賃稼ぎが変じて商人化し、仲買利益が一般化してきた。塩や糖などの必需品が直接農民に渡り、品不足を理由に法外の値となり、商人の営業も停滞する状況が出て来た。享和三年高遠藩では中馬密売禁止触れを名主の責任によって取締るよう申し渡した。

4 中馬制度の定着

文化一〇（一八二二）（一八二二—一八二五）の紛争 絹巻等の品々の中馬の荷替えに対して宿側が口銭を取ったことから郡内の中馬村が伊那郡・

宮田・上穂・赤須の間屋を相手に高遠役所へ訴え出したことからさらに江戸表への出訴に及んだ。このとき郡中馬一同「中馬仲間相定」を作り荷物継ぎ送りを間屋以外の家で継ぐこととした。

文化一三（一八二七）文政四年（一八二二）の紛争 三州馬が地元の荷送りに従事したことは早くからであらうがそれが伊那街道に遡出して来て信州中馬と競争を起すようになったのは明和のころからである。そのころ飯田の商人は信州中馬の独占的な送り荷に対し、三州馬支持の意向を持つようになり、飯田商人および三州馬と信州中馬の間に紛争を起すようになった。文政四年に、明和裁許の趣旨によって三州馬の荷物付け送りを認めることで結着した。

文政一〇（一八二七）三年（一八二七—一八三〇） 宿側が中馬荷を押え口銭をとったことを不当として、中馬側が伊那郡・宮田・上穂・赤須宿間屋を相手どって高遠役所へ訴え、さらに江戸出訴にまで及んだ。その結果は中山道・甲州道中の荷物は下諏訪宿で宿継ぎと中馬渡しに駄分けし、伊那への荷物は三〇〇駄のうち七〇駄は宿継ぎとし、その他は中馬によること、金沢から伊那筋への荷物二〇〇駄の中四六駄宿継ぎ、他は中馬自由荷とすること。ただし、この駄数はこの数字どおりに固定することではなく、右の割合で扱い高の増減に応じて宿継高を変更せよと裁決されたことで決着した。

前述してきたように中馬と宿間屋の紛争はしばしば繰り返されたが流通経済に中馬の果たした役割は極めて大きかった。幕末にいたるほど中馬は運輸交易の実質的主役を果たし繁栄したが、明治の中ごろには道路の改修整備と交通機関の変遷によって第六章第七節交通の項に述べるように自然に衰退したのである。

中馬の発展過程における宿間屋および商人との紛争と解決の状況をまとめてみると次のようである。

第一期 寛文以前 発生期

伝馬と自分馬（後の中馬）が並行していた。

第二期 寛文・宝永

百姓馬が付け通しの自由を得るための闘いの時期

○寛文一三年 宮本・大出・小野村の通し馬と、飯田・大島・塩尻の

問屋と争い、百姓馬自分荷物付け通しの自由が認められた。

○元禄六・七年 伊那一六か村と七三か村および松本商人が争った結

果、諸色荷物中馬付け通しの自由が認められ、寛文の裁許のとき

認められた七色の書き付けも取り上げられ、宿問屋三名一二〇日

入牢。

○宝永三年 伊那郡中馬と、松本商人および筑摩郡中馬が争い、街道

はどこへも往来、通し馬・継ぎ馬自由となった。

○宝永七年 伊那・諏訪・筑摩中馬と甲州宿が争い、甲州における中

馬継ぎが自由となった。

第三期 享保・宝暦九年

宿場が既得権を守るための闘いの時期

○享保一・二二年 片桐・大島・原町宿と中馬が争い、宿継ぎ馬を

認め、残り荷は中馬の通し馬自由となる。

○享保一五年 上徳・赤須の間屋と小町谷の中馬が争い前同様の裁許

となる。

○元文四・五年 甲州道の宿方と高遠・諏訪・筑摩・安曇の中馬が争

い、解決を見ず江戸公事となる。

○元文六年 甲州道中宿方と中馬が争った結果、賦課荷物・宿継ぎ荷

物を分け、品目を定めて運送方法を決定した。

○寛保元年 甲州道中宿方と中馬が争った結果、沿道二九か村だけの

通行が認められた。

○宝暦九年 伊那街道平出・宮本・松島宿と木下村中馬が争い、為

替・敷金による専門付け送り、途中荷替えが禁止され、自村付け

出し荷物の売りさばきの自由は認められた。

第四期 宝暦一〇年・安永九年

中馬慣行公許の時期

○宝暦一〇年・明和元年 松島・宮本・北殿の間屋と上下伊那八四か

村の中馬が争った結果、中馬慣行の公認が確定し、中馬の通行を

許される街道と、その各街道における中馬荷物・宿問屋・口銭・

中馬村および中馬敷が定められた。これを明和の裁許といい以後

これが基本法となった。

○明和六・九年 赤須・飯島・片桐・大島宿と飯田・松本中馬および

商人と争った結果、飯田より付け出した竹輪・申柿・土味茶等八

品は宿継ぎ、高遠より付け出したものは中馬付け通し交易さしつ

かえなしとされた。

○安永四・九年 飯島・片桐・大島の間屋と飯田・松本の商人・伊那

中馬が争った結果、糸、まゆ等、大島ほか一三か村中馬が付け通

しについては明和の裁許の趣を守れとされた。

第五期 文化・明治

中馬の固定化に対する三州馬などの攻勢の時期

○文化一〇・一二年 伊那郡・宮田・上徳・赤須の間屋と郡内中馬村

々が争った結果、郡中馬一同が「中馬仲間相定め」をきめ、荷物

継ぎ送りを問屋以外の家で継ぐことをきめた。

○文化一三年・文政四年 信州中馬と三州中馬と争った結果、明和裁

許の趣を守れとされ、三州中馬が認められた。

○文政一〇年・一二年 伊那郡・宮田・上徳宿と上伊那中馬と争った

結果、東海道路への全宿継ぎ送りは認めないが、飯田・高遠への

売荷物は伊那街道に継ぎ入れられることになった。

四 中馬の特質

馬 数 江戸初期には一人で追う馬は三疋が普通であったが中期になると四、五匹の者も出て数は定まっていなかった。

付け通し運送 江戸時代街道には宿場があり、各宿場には伝馬が常備されていて、そこを通る荷物は伝馬による宿継ぎであったが中馬の運送は宿継ぎをしない付け通し運送であることが最大の特徴であった。付け通しは宿問屋に關係しない運送であるため宿場口銭を取られないこと、宿ごとで付替えをしないから荷いたみが少ないこと、日数が早いことという利点を持っていた。

長距離の付け通しの場合には中馬同士で荷替えをする場合もあった。荷替えの場合には自然と荷替えにつづがよい場所がきまり、宿問屋が発生することもあった。

送り状付き運送 中馬追いは荷主、送り荷問屋から受託物、荷の送り先、駄賃、荷主、中馬名など記入した送り状をもって送り先へ持って通った。

駄賃の決め方 中馬の駄賃は宿継ぎ駄賃のように厳正に定められていないで送り主と中馬の相対で決められた。宿継ぎ駄賃より低いのが普通であった。また、中間仲間の競争でさらに駄賃は引き下げられることがあるので商人は宿継ぎよりもむしろ中馬を喜んだ。

敷き金 中馬は荷を引き受ける際に一定の敷金を荷問屋に渡し相手に荷を渡すときにこの敷金を駄賃とともに受け取る仕組みになっていた。

迅速な運輸 中馬は三、四頭の馬を追って何十里もを目的地向かって人馬の能力の許す限りの短日時に到着するよう急いだ。

三 権兵衛街道と助郷

(一) 権兵衛街道の開通

伊那と木曾の間には険阻な木曾山脈が横たわっていてその交通をさげきっていたが、山道は伊那の平沢や与地から山脈の鞍部鍋掛峠（現権兵衛峠、一五二二m）を越えて木曾の羽沢に下り、そのまま奈良井川沿いに下れば奈良井宿に出るが、この道と羽沢から西に急坂を登り、姥神峠（二七七m）を経て神谷に出て、官ノ越で中山道に出るものがあった。この山道は全線が狭隘で険しく、牛馬の通行は困難なものであった。

米に乏しい木曾谷の住民は伊那や高遠の米に依存しなければならぬが、その移入にあたっては、小百姓が背負い荷で渡世橋に運ぶか、牛頭峠や塩尻を迂回するかであったが、迂回すれば日数もかかり賃も上ることになりいずれにしても不便であった。したがって、峠道の開きくは木曾側年来の宿願であった。

権兵衛峠がどのように開かれたか、その事情について次の資料によってみよう。

伊那郡より木曾路へ道明け発願の事

一元禄八年福島藩木曾御願屋と申す者発願にて、宮城宿より伊那の道開き致し度き旨道中御奉行神尾宿前守様へ願ひ出、仰せ聞かされ候は其の道筋は何方の分にて候哉の旨御尋ねに付き、願屋相答え候は西は木曾分、峠より東は伊那分に御願候旨申し上げ候得ば、伊那郡へ掛合ひ候哉と仰され候。其の儀未だ掛合ひに及ばずと申し上げ奉り候。夫れにては道切開きの段相成らず候間、伊那郡へ駕と掛合ひに及び願書印形□取り来たり申す可く仰せ付けられ、之に依り願屋罷り帰り申し候。

一木曾福島宿の願屋、木下の治郎四郎方へ参り内談の上貢輸領会合致し候

誤、是は元禄九年なり。願屋申し出候は宮越より伊那郡へ道切り開き候
わば米穀不自由の木曾谷故、当郡より買求め附け送り候わば双方勝手宜敷
きと存じ候間、村々内蔵を遊げ得心の所、大出村名主藤七郎申し聞かせ候
は、右道切り開きは双方の勝手は宜敷く相成り候得共、自然木曾より伝馬
懸れ当て相願い候も斗り難く、此の儀思慮致す可き事と申し候得ば、村
々相答え候は中々治里余も隔り候得ば仰せ付けられ候も相動む可きこと相
成らず、又々仰せ付けられ候事も斗り難くなどと幾許区々の所、藤七郎再
三申し候は、拾里隔り候共難え仰せ付けられ候事は遠方なり難く候得ば右
の書付けを取り候上は得心致し申し候につき此の儀相聞き藤七郎門送未致
し証文これを取る。則ち元禄の規定書也

中略

一夫れそり木曾惣代出府の上道中御奉行所へ罷出候間、冥輪領得心の印形書
付け持参致し願ひ上げ候通り早速御取上げ切開き仰せ付けられ候

一元禄十二年道切り開き相済み、羽洲権兵衛と申す者大力にて常々牛を追
候間道狭き所にて向こうより人馬来り候得共牛馬を附けたる處にて牛を
高き所へ持ち上げて通したる大力也。此の道道切り開きしもの也。其の願は
板倉頼母様領分也

以下略

(久保中屋敷文書)

この資料は文久二年(一八六二)に書いたものであるが、これによる
と、元禄八年(一六九三)木曾福島宿の願屋と申す者が、宮ノ越宿から
伊那へ道を切り開きたいと道中奉行に願ひ出た。道中奉行神尾備前守
は、伊那側と掛け合ひをしてその賛同を得なければ許可がでないか
ら、伊那側の賛同の印形を取ってこいと言った。

そこで、願屋は木下の治郎四郎の所へ来て相談の上、箕輪領各村々
の者と元禄九年に会合を持つことになった。この会合の席上、願屋は
宮越より伊那へ道を切り開けば、米穀の不足する木曾側は伊那の米を

買求めて付け送りができ、伊那側も米を有利に売ることができ双方
便利である、と説明した。これによって伊那側もほぼ得心しかけたこ
ろ、大出村の名主藤七郎が、道が切り開かれれば双方便利ではある
が、自然と木曾街道の伝馬に狩り出される(助郷)心配があるから深
く考える必要があることを説いた。

この考えに対し伊那側の名主たちの意見はいろいろであったが、藤
七郎の再三の発言により、木曾側一宿から、箕輪領二七か村に対し
助郷に關する一札(後述)を差し出すことによって伊那側も切り開き
に賛成をした。



図3-59 権兵衛街道略図



図3-60 木曾11宿より箕輪領への一札

側一宿から一札をとった箕輪領の村々は木下・松島・大出・南小河内・長岡・三日町・福与・福島・下手良・神子柴・田畑・南殿・北殿・久保・大萱・上戸・中桑・与地・大泉・羽広・吹上・富田・中曾根・上古田・八乙女・下古田・中原の箕輪領二七か村で、将来伊那に助郷が課された場合も二七か村には人足だけで、決して助馬を課さないという内容のものであった。

木曾一宿の箕輪領村々へ入れた一札は、次のようである。

一札之事

一此の度木曾の谷拾宅が宿御願い申し上げ候宮之越より其元氣輪領へ道作り馬足自由に通じ候様致し候得ば木曾中勝手へ成り候に付き去年中より江戸表へ御願い申し上げ候得共、其元氣御同心これ無く候に付き再願仕

この工事には、木曾・伊那両方から人夫を出し、権兵衛自からも奉仕して仕事が進められ、延長二四にわたる道が改修されたのである。以後、編掛峠は権兵衛の名に因んで権兵衛峠と呼ぶようになり、この新道を権兵衛街道と呼んだ。この街道は大部分が現在国道三六一号線となっている。この権兵衛街道切り開きに対し伊那側の承認を与えるに当たって、木曾

り候、歩行道を馬自由候わば木曾へ助馬などと願ひ申す可きとの御事御答御尤もに存じ候、相對を以て道造り申し候わば御公儀様へ助馬仰せ付けられ候拾宅宿にて立馬出し、各々村へ一切申す間敷く経文出し候わば御得心もこれ有り、右の通り道中御奉行神尾前守様へ御願ひ申し上げ候、永々助馬呼び申す間敷き段石証文如何様候に紛れをへ候其後に至り相違申す間敷く候。

後の為一札通判件知し

木曾拾宅ケ宿 三拾三名通判

元禄九丙子年二月

箕輪領村々(二七か村)

(中宿文書)

こうして、この一札が後に箕輪領村々が助郷となつてからは重要な意味を持つてくるのである。

高遠藩の村々は権兵衛街道切り開きには同じ疑念がありながらこの場合には加わらず、一札をとってなかった。

(二) 助郷

1 助郷制度

(1) 助郷村

江戸時代には全国の主要街道に宿駅が置かれ、そこには一定の人馬が備えられてあつて諸大名や公卿などの通行に便を与えていた。

中山道の各宿には二五人、二五疋の馬が常備されていた。しかし寛永一二年(一六三三)に、大名・公卿・御幣使などの公用の大通行がしだいに頻繁になつて、宿駅に常備した伝馬だけでは、その需めに応じられなくなつてきたので、その不足を補充するために東海道・中山道等の全国の本街道における宿駅近傍の郷村を指定して人馬継ぎ立ての役務を課することにした。その郷村を助郷あるいは助郷村、課役を助郷

・助郷役と呼んだのである。

寛永一七年（一六四〇）、幕府は各宿駅に命じて常置の人馬を増強する一方、その近傍の村々を助郷村に指定して伝馬不足の場合に備えた。しかしその勤め村は同一国内または同一封領内に限られていたため、貨物が渋滞してその目的を果たすことができなかった。

元禄二年（一六八八）になってこれを改めることとし、同七年（一六九四）ようやく一応助郷制度が確立し実施に移されたのである。それによると、まず各宿駅ごとにその近傍二里以内の村々を選んで助郷村とし、その宿駅に所屬させた。そして村高によって助郷勤高をも決め、その高百石に対して人二人、馬二疋を課するのを基準とした。これを定助郷と呼んだ。

しかし実際にはこの課率は一応の基準に過ぎず、そのつど必要に応じて賦課されており、勤め高も村々の実情を勘案して定められて村高がそのまま勤め高とされているのが普通であったが、村高よりかなり下まわっている場合もあったし数倍になることもあった。

(2) 休村と代助村

助郷を勤めている村々の中で生活の困窮がはなはしく勤めが難儀と認められて、助郷を免除された例があるが、全面的に助郷を免除されるというのは異例で、多くは勤め高の一部を、しかも一定の期間に限って休むことを許されるに過ぎなかった。これを休村といい、休む期間中その村に代わってその勤め高の一部を補うことを代助郷といい、その村を代助村（助村）と呼んでいる。

(3) 元村と助加村——差村——

助郷が頻繁に課せられるようになると、農家では生計がたたなくなり、村々は自分たちの村の苦しいことを訴えてその負担を軽くしようとするのであるが、容易に軽くしてもらえないことでないで納余の



図3-61 中山道本館三宿助郷「本館宿問屋よりの脱札」（中宿文書）

策として近隣の手明村（助郷の賦課を免れている村をこう呼んだ）を指摘してこれを助郷に加えてもらい応援を求めるよう道中奉行に申請したのである。幕府では一応その村を檢分して妥当とみれば、藩役所を通じて新しく指定した。このことを差し村といった。差し村された村を「助加村」と呼び、助郷村の方を「元村」といった。

(4) 当分助郷

助郷の課役は文政二（八一八）三〇のころから幕末の文久・慶応にわたって一層激しくなってきた。それが、それと比例して助郷免除軽減の嘆願の運動もますます盛んになっていった。特に大通行のある時には臨時的に人馬を徴用しなければ間に合わなくなり、定助郷も加助郷もなく臨時に村々に賦課してきた。これを当分助郷と呼んだ。

幕末になって不時の大通行が起こるようになると当分助郷の勤員が急にきて農民の負担は限度をこえた。しかも大通行が終わると当分助郷制は解除になるはずであるが、そのまま延長されることが多かった。

図3-62は、通行量が多

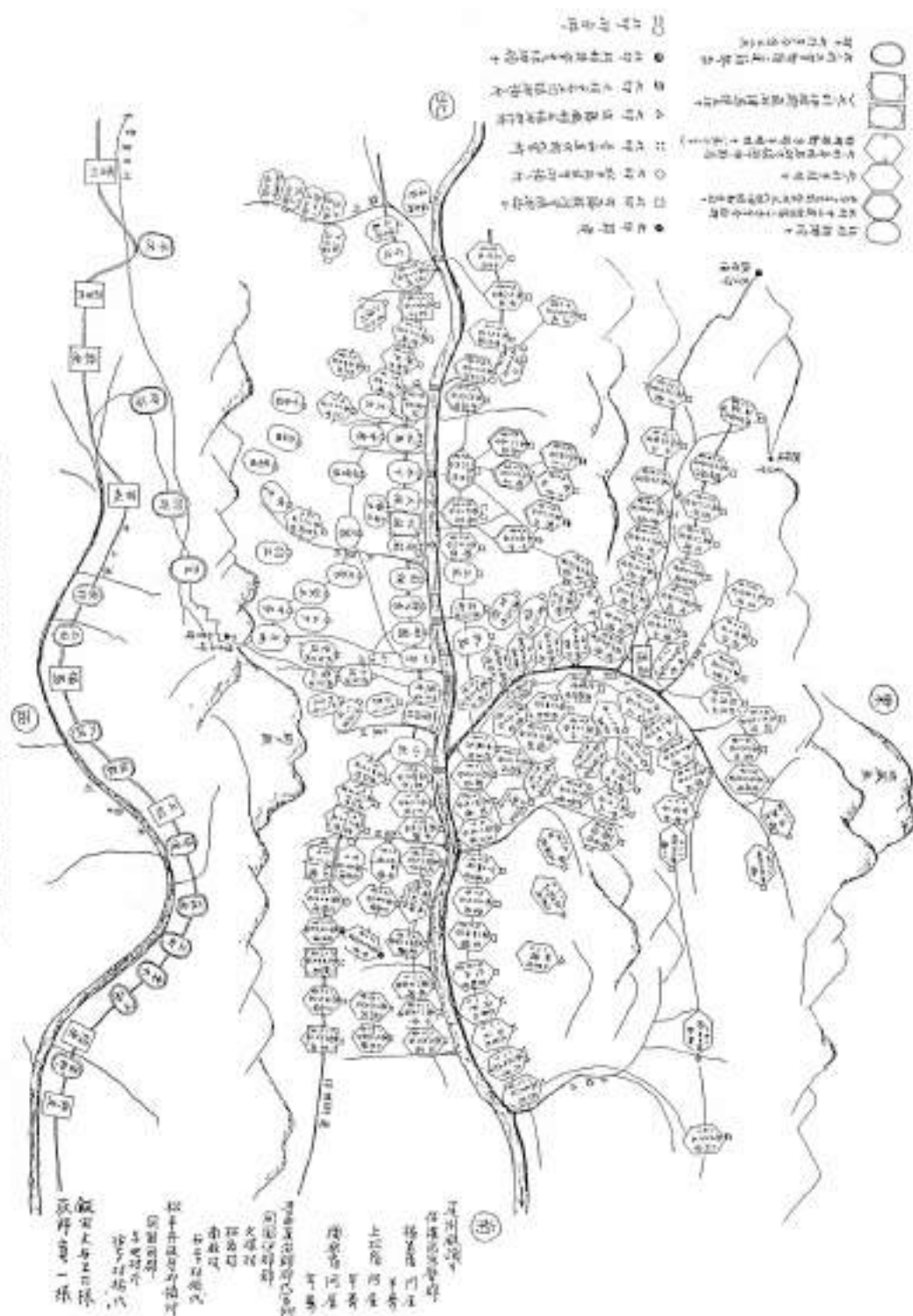


図1-12 大正時代関東地方図（昭和3—5年ころ）（門田文書より）

くなり、助郷役が頼繋に貸り出された幕末（嘉永三十五年ころ）のものであるが、当時の上伊那地方における中山道に対する助郷関係村々がわかる。

2 助郷が課されてくる手順

・御通行の当事者から道中奉行へ通行計画を添えて許可を申し出て承認を受ける。

・道中奉行から日程・必要人馬数を書いた触書が宿駅へ通達される。本曾の場合は一か宿が回覧した。

・福島宿では三宿で協議して人馬数を助郷村に割り当て飛脚をもって村々へ通達した。これを飛札といった。

・各村では割り当てられた人馬を確保し、何人かの引率責任（世話係）者をきめた。この引率責任者を「証人」または「宰領」と呼んだが、この人は割り当て人数外であった。

・証人は村役人かその代人が当たり、道中の諸経費、到着後の問屋や元村との折衝、賃金の支払いの統轄、割り当て人員の不足の場合における宿駅での雇いあげ、引率していった人馬の宿泊食事一切の世話などおこなった。

・人馬の配置は問屋の指示によりその宿での勤め、先の宿への出迎え、次の宿までの送り、荷物や客人への割り振りをきめた。

・勤務当日の指定された時刻（ほとんど朝のようであった）までに遅れないように到着しなければならなかった。で村を前日の未明に出発し、権兵衛峠の山道を登って夕方うちに本曾で仮宿したようである。

・大通行には江戸道中奉行から直接当分助郷が村々に通達されてきた。幕末には頼繋に大動員がかかり村中総出でも人数に不足することになり、証人は金銭を持参して宿で人足を雇いあげなければなら

なくなり、その賃金折衝でも苦労した。一方、名主はその持参金の金策に苦労させられた。

・天候などの都合で通行が延びると、ただ滞在していることになり無駄な費用がかかったし、賭博や女郎買いに風紀を乱す者もあった。うで、多額の借金を負う者もあった。

④ 南箕輪地域各村の助郷

1 大泉村の助郷の始まり

上伊那の村々で小野・雨沢・上島・辰野の四か村が、最も早く元禄七年（一六九四）に塩尻宿の助郷村に指定を受けた。箕輪領・高遠領の一部が指定を受けたのは、二〇年後の正徳二年（一七二二）からであって中山道本曾一宿のうち福島・上松・須原の中三宿の大助郷に指定された。

この正徳二年の大助郷指定に際しても、権兵衛峠開きくの時本曾一宿の箕輪領村々へ入れた証文は効力を失わず、箕輪領の平地・上戸・大萱・羽広・中条・富田・吹上・大泉・中曾根・上古田・下古田・八乙女・大出・中原・松島の一五か村（この時大助郷に設定された村）には、「先年本曾路の馬道明け候節助郷懸け申すまじく相對の証文これ有るに付き」とはつきり理由を明記して人足だけを賦課している。本曾側の申し入れ（峠の開きくについて）を拒否した高遠領内の山寺・横川・今村の三か村及び前記の契約に加わっていない箕輪領の沢・栗木新田の二か村合わせて五か村は一般の助郷なみに人馬とも課せられている。

線道の切り広めを承諾した箕輪領の二七か村の本曾助郷勤めは、いつも人足だけであった。ただ一回、理由は不明であるが正徳四年七月、木下村が人馬共に課せられたことが例外である。また大泉新田は幕末時代代官加集奎之助より諸役御免という証文をえており人馬とも

に一度も課せられていない。

2 神子柴村・久保村の助郷の始まり

正徳四年（一七一四）七月の中山道福島等三宿助郷使『県史資料四巻』に、次のようにある。

書面貳拾六か村の内寺社領の高その外崩々より子細これあり諸役免許の所も之有り候においてはその子細その村々領主並より道中奉行迄書付けをもつて申し聞かざるべく候。吟味の上その高程差し除く可し。

（右は張紙）

福島町

上松町

須原町

一、高 壹万三千五百九拾七石

高 貳百六拾石

高 貳百九拾石

（中略）

高 六百貳拾三石

高 四百五拾九石

高 九百三石

右伊那郡七か村先年本曾路へ馬道明け使節助馬懸け申すまじき旨相対の証文これ有るに付き、右の村々へ此の度願ひ使節助馬懸のわけは本曾路拾壹か村より立馬仕るべき旨申すに付き然るにおいては外の助郷村ならびに割合の通り人足ばかりこれを出す可く候。

高 貳百四拾壹石 山寺村

高 三百拾七石 横川村

（中略）

高 千六百九拾貳石 木下村

（中略）

高 千拾七石

小出村

右の通り福島町上松町須原町へ公家衆様御門跡様その外御用に付き往來の衆中これ有る節ばかり助郷申し付け候間、その節は右の宿々馬屋年寄相触れ次第人馬とどこおりになく村々よりこれを差し出すべく候。

一、右の外御用にこれ無き常々の往來は紙の大通りたりとも右村々助入馬宿より相触れ申すまじく候、助郷にてもその心算致すべく候。

此の帳は右三か宿の内に差し置き助郷の村々にて写し置き、自今以後右の帳を相守るべく若し宿よりその人馬触れ仕り候か、または助郷より助入馬懸むべき節不参仕るにおいては曲事たるべき者なり。

正徳四年七月

（萩原重秀）

萩 源左衛門

（大久保忠喜）

大 大隅守

松 石見守

福島町

上松町

須原町

間 屋

年 寄

右助郷村

名主・百姓

右の三宿助郷使でわかるように、松島・神子柴・久保村等の一七か村は極兵衛峠道を切り広めた薩助馬は呼ばないという約束ができていたという事で、この時から神子柴・久保村は人足だけの助郷村に指定されたことがわかる。

その他伊那郡の九か村は人馬共に出す助郷村となっている。木下村が人馬の助郷村になっている理由はわからない。

3 北殿村の助郷の始まり

北殿村・狐島村が助郷を仰せ渡された経道を、次の享保二年（一七一七）十一月の助郷指定書でみよう。

信州伊奈郡松嶋村訴えの越き正徳武殿より中山道木曾須原上松嶋嶋三が宿へ助人足役相勤め候松嶋村の儀は四拾年余も給側にて段々困窮せしめその上岡岡郡北殿村松嶋村は無役村にて道法も近く候松嶋村助人足役勤高の内右二か村引替えなき旨を申し……北殿村等々候は天龍川通りに付き村高不応の川除場所ならびに田地中拾五丁余新川になり流失せしめ建儀を致すの由これを申し、右武か村申し立ての旨越白余助郷にも類多く立ち難き事に候。道法遠近の儀は四年以前立合い給圖をもつて須原上松嶋嶋三が宿の内へ双方近道迄候味せしむのところ、北殿村より九里拾三町余、松嶋村より八里三拾四町余、松嶋村より九里武拾九町余これあり、北殿村は拾五町余松嶋村は三拾町余右両村共に松嶋村より近村にまざれなく候得とも、猶又御代官平岡三郎右衛門都返藤十郎へ申し渡し再吟味を述べたところ右の通り郷々相違これなき旨御代官より書付け差し出し候に付き、右高の内百七石はこれを除き残り高九百三拾八石、ならびに松嶋村百六拾石松嶋村残り高八百六拾三石右三か村合せて千九百六拾石をもつて向後須原上松嶋嶋三が宿へ助人足これを出す可く……(略)

享保元年十一月

(北殿区有文書)

松嶋村が北殿村・松嶋村を差し村して勤高の一部を勤めてもらうことになるが、北殿村とて天竜川筋で川普請をしなければならぬ場所が多く、また田地のうち一五町が流失してしまい難儀をしている旨を答えて一〇七石は免除してもらって、勤高九三八石で助郷を仰せ渡されていくことがわかる。

4 田畑村・南殿村の助郷の始まり

享保二年(一七一七)の中山道福嶋等三宿助郷改帳(千桐屋蔵)による

- 一、高 六百石 田畑村
一、高 九百三拾八石 北殿村

一、高 百七拾九石 南殿村
が新しく人足だけを勤める助郷村に指定されている。

四 助郷の苦しみ

助郷制度は徳川幕府の恩制度といわれている。

陸路交通のほとんどすべてが人馬の力役に託されていた時代であり、封建制度が至上の絶対として社会を支えていた当時としてはやむをえないとはいいながら、貧困な生活に苦しんでいた農民たちにとって、助郷という課役はまことに耐え難い重圧であった。

1 助郷の農作業への影響

助郷はほとんど農繁期に集中していたので、そういう時に一家の大切な働き手である強壮な人や馬が徴用されるので農民にとってはまことに迷惑なことであった。

「当郡四月は畑作時付けの時節、七月は馬屋こえ草刈り取り候、早稲作り取上げの時節、同度共に百姓大切な時節耕作付けの世極も遠い迷惑に存じ奉り候」

「時付け時の助郷役相勤め候得ば手後れに相成り、手入れ等も不行届き、自然と実込悪敷く、荒畑同様に相成り申し候」(文政三年助郷建備一村領り書上げ)

「百姓農業最中有無に拘わらず罷出候儀、其の上四年の事件続き、[●]以て必至と困窮仕り難儀の次第に存じ奉り候」(安政六年一八か村よりの数願書)

以上は、農民から出された助郷役軽減を訴える嘆願書等に記された、助郷の農業に与える問題を訴えているものの一部をあげたものであるが、このような訴えは非常に多く残っている。収穫の時期に助郷に狩り出されたために、収穫の適期を失したばかりでなく、鳥や猪、猿等に荒されて収穫が皆無に等しくなって潰れ百姓が多いという

月 日	御通行御用	萬百石 に付 き人	此人足 人	勤日 數	証 人	貸一日 文錢一人	合人 計足 人	貫 文
三・二六	尾州様御登り	一一・五	内一五六 屋四〇	五	六	三〇〇	一一二	六三・三〇〇 備錢一八〇文 六八・一〇〇 （備三八人 一日三五〇文）
四・四	二条御番衆 松平健藏守 戸田和泉守 西組中	二・六 一・七 一・六	八二	九	一四	三〇〇	九六	（一日三五〇文） 一八・九〇〇 一四・七〇〇
四・七	日光御幣使	一・六	一一	四	二	三〇〇	四九	一五・九〇〇
四・八	御高家 戸田中務大輔	一・七	一二	四	二	三〇〇	一四	七三・五〇〇 （備三〇人 一日三五〇文）
四・一九	二条御番 戸田土佐守 田沼玄蕃守 西組中	二・七 一・六五	八二	九	一四	〃	九六	（一日三五〇文） 一五・七四八 六八・一〇〇 （備二六人 一日三五〇文）
七・二七	大坂御番 酒井飛騨守 加納大和守 西組中	二・六 一・七	八二	九	一四	〃	九六	七三・五〇〇 （備二八人 一日三五〇文）
八・二三	大坂御番 五嶋伊賀守 酒井保馬守 西組中	二・八 一・九	九八	九	一四	〃	一一〇	七三・五〇〇 （備二八人 一日三五〇文）

これは、天竜川東の村々に助郷費用を分担してもらおうとしたものであつて、高遠領では既にそれが実施されていたのであつて、太田領や幕府領ではその結果は判明しないが、その後、国難の村々では大助郷のつどその費用を借金をして賄っている例がある。

3 頻繁な助舞回数

「文政三年中山道福嶋宿外二か宿助郷人足賃銀五か年調へ書上帳」とりみると久保村へ課せられた文政二年の助郷は次のようである。

文政三年の久保村の人口についてみると、男一三一人・女一四四人

久保中興數文書

となつていて、男子のうち年齢が一五歳から六〇歳までの者が何人いたか判然としないが、人足合計一二二人とか九六人という人数は、いかに過重な負担であつたかが想像できる。割り当てられた人足を充足するために高い賃金を支払つて三〇人から四〇人も現地で雇ひあげており、時には代官所に願ひ出て近郷から人足を雇ひ入れている時もある。

村によつては経済的に難儀のことで時に入足の数が割り当てを下まゐることもあつて、宿方から道中奉行に訴えられていることもあつた。

〔久保大東文書〕

北殿助郷勤めの状況を安政四年（一八五七）安政五年の二年間で調べてみると、いかに勤員が頻繁に農繁期に集中しているかがわかる。

安政四年

通 行 者

人数

月・日	通 行 者	人数
四・七	日光朝賀使	一四
五・一二	大坂町奉行内三好美喜元外登り	八
五・二六	大坂町奉行戸田和泉守登り	二二
五・二六	長崎奉行水野筑前外勘定廻廻登り	二八
五・二七	日付若瀬伊賀守・日付外登り	一七
七・一三	大坂加番石川播磨守登り 先立 荷物	七
七・二二	大坂加番石川播磨守登り	一四
八・四	長崎日付岡部駿河守外下り	一四

安政五年

通 行 者

人数

月・日	通 行 者	人数
三・一一	儒者林大学頭其地下り	一九
四・六	九州郡代堀三郎兵衛奥方登り	八
四・七	日光朝賀使下り	一四
四・二二	老中堀田備中守奥方その他下り	二九
四・二二	勘定奉行川路左衛門尉下り	七
五・一五	堺奉行一色山城守登り	二一
五・二四	代官加藤段十郎登り	七
六・二七	長崎奉行松平九之丞外通行	一三
七・四	禁裏御附大久保伊勢守登り通行	二六
七・一六	高家六角越前守 上京	一四
七・二六	大坂加番岡部河内守登り	一四
八・一五	伏見奉行内藤豊後守登り	一七
八・二四	大坂加番米沢相模守通行	二二
八・二八	大坂日付河田栄次郎外登り	二二
九・八	大坂町奉行戸田和泉守外下り	二二

九・九	戸田和泉守家来荷物離立	一八
九・一〇	老中岡部下津守その他登り	一九
九・二二	普請奉行戸田能登守奥方下り	一九
一〇・四	備官様御遊 登り	八

（北殿区有文書）

4 村々相互間の対立と訴訟

差し付されて差し返し訴訟もしているが、これは助郷負担の軽減・助郷運動でもあり、差し付という他の村々の犠牲によらなければ自分たちの目的を達成することができないことは助郷の悲劇であったと思われる。

正徳四年（二七一四）の「山方九か村助郷訴訟」や享保五年（一七二〇）の「山方八か村助郷訴訟」の文書（中宿蔵）をみると、われわれ山方の村々が里方の村々にくらべて、はるかに立地条件が劣っていて助郷賦課の不公平を不満にしている様子がよくわかり、また、助郷が農村相互の間に暗い影を投じていたことがわかる。

5 助役不参加の厳しいとがめ

寛政八年（一七九六）一〇月、不参答め請書の一部をみると、

一 弥次兵衛弥八惣兵衛八左衛門甚太郎介五郎左衛門儀播磨外式宿定助郷村々人馬限りあるの由をもつて度々不参致し、別して北殿村の儀、当奉紀州様御通行の宿定助郷儀に御記御座無く候故別段御船書をもつて当分助郷御せ付けられ候故右船書に相寄き助郷船にこれ無き由又は船往還難き場につき人馬差し出し難き由を申し寄不参致し候段不増に付き名主は過料銭三貫文仰せ付けられ候組頭惣百姓共々一同急度お叱り置かれ右不参人馬賃銭をもつて宿方へ償う可き旨仰せ渡され外村々名主共は過料銭三貫文宛仰せ付けられ組頭ならびに惣百姓共は一同急度お叱り置かれ候。

一 弥次兵衛門次兵衛政右衛門義北殿外拾六か村同様村々人馬限り有るの由申し度々不参致し候段不増に付き名主は過料銭三貫文宛仰せ付けられ組頭百姓

其々一同急度お叱り置かれ候。

〔北條区有文書〕

右のように不参したために名主は過料銭を仰せつけられ人馬雇いあげの賃銭を宿方へ償い、そのうえ組頭百姓はお叱りを受けていることがわかる。大変厳しいものであったことがうかがわれる。

6 助村と休村・休役延長の嘆願

元文二年（一七三二）一〇月の高遠領一九か村中山道助郷人馬對書上帳によってこの例をみると、

一、高武百九拾四石壹斗八升七合 上牧村

〔中略〕

右は享保五十年箕輪領久保村より福嶋宿上松宿須原宿右三宿へ助指し村仕り公儀へ御願い御吟味の上、久保村高九百三石の内式百貳拾貳石御免、上牧村高貳百九拾四石壹斗八升七合の内式百貳拾貳石助村勤高仰せ付けられ助人足相勤め候。

〔県史資料編〕

上牧村高二九四石一斗八升七合のうちから二二二石を助村勤高として仰せ付けられ、その分久保村は免除されている。このようにそれぞれが公儀へ何かと申し出しているが、苛酷な負担を軽減しようとしている。

文政四年（一八二二）には北條村・南殿村・田畑村・久保村・神子柴村など箕輪領二一か村が休村となり、代わって手良・福島・長岡・南小河内・北小河内・八乙女・沢・土地・赤須など二二か村が、二〇か年の期間代助村となっている。このことについては「助郷二拾一か村御免状写」（久保大東文書）に残っている。二〇か年の休役明けは、天保一年（一八四〇）であるが、同年八月「助郷休役延長について一札の事」（久保大東文書）二年「大泉より二〇か年休役明につき助郷嘆願」

願」（中宿文書）などでわかるように各村が出願し、さらに二〇か年休村が延長されている。

7 助郷の免除嘆願

助郷の負担は元村はもちろん、助加村も困窮の限界に迫いつめられ、また休村も代助村も疲弊の極に達したようである。助郷の免除嘆願は道中奉行に盛んに出されるようになった。

田畑村の享保七年（一七二二）木曾助郷救免願をみると、

恐れ乍ら書付を以て御訴願申し上げ候御事

一、信州伊奈郡田畑村の儀五年以前戊午同郡木下村より木曾助郷指し村に致され、木下村高の内六百石仰せ付けられ須原上松宿福嶋三か宿へ助人足是非無く相勤め申し候。此の人足高三百五拾人、年により四百五人、此の賃銭七拾貫又は八拾貫上下七日より十四、五日迄相勤め難儀仕り候。殊に当村の儀は田地流れ場所はなほだしく高辻六百七拾三石貳斗四升の内、田方百石余は天竜川長新流れ場所にて御座候。

同九拾石余は大泉川長新流れ場所にて御座候、永流れ上中下田四拾五石壹斗四升六合余今川筋にて御座候、永流れ見取田七反歩余今川筋にて御座候、永流れ見取畑壹反壹畝拾歩余、今川筋にて御座候、永流れ見取畑壹反壹畝拾歩余今川筋にて御座候。

右の通り四川の流れ場所川除け御普請年々仰せ付けられ御入用金下し置かれ候えども其の上百姓役百石一百人の外三千人、年により五千余人余も相勤め申し候、これにより百姓困窮仕り候。九年以前伊奈郡村々へ助郷仰せ付けられ候節も右流れ場所困窮の村方故御救免遊ばされ下し置かれ候。八年以前同郡十五か村遠近の御訴願申し上げ候節も当村南殿村北殿村は御救免遊ばされ下され候に、差し村に罷り成り助郷相勤め申し候ては四川の川除大分の場所村切りにては致し兼ね難儀に及び申し候。

恐れ乍ら右の趣聞こし召し分けられ御慈悲をもつて助郷御救免下し置かれ候わば有難く存じ奉る可く候、以上

信州伊奈郡大倉太郎左衛門支配所

田畑村 名主 五左衛門

組頭 勘太夫

享保七年

同 彦 市

寅十一月

年寄 庄左衛門

(玉璣軒文書)

田畑村は五年前に木下村より差し村されて木曾助郷を勤め三宿へ人足高三五〇人、年によつては四〇五人を出して上下七日から一四、五日勤め難儀をしている。

田畑村は田地の流れ場所が多く、天竜川大泉川長筋に

永流れ上中下田 四拾五石壹斗四升六合余

永流れ見取田 七反歩余

永流れ見取畑 壹反壹畝拾歩余

永流れ見取畑 壹反壹畝拾歩余

が今川筋になっている。

両川の流れ場所の川除け御普請を年々仰せ付けられて、御入用金はいただいているが、百姓役一〇〇石一〇〇〇人のほかに三〇〇〇人、年によつては五〇〇〇人余も勤めてまいり百姓は困り果てています。九年前に伊奈郡へ助郷を仰せ付けられた時も流れ場所が多く困窮の村とすることで御救免くださっている。八年前伊奈郡一五か村連近の訴訟を申し上げた節も田畑・南殿・北殿村は御救免くださっているところ、差し村になり助郷を勤めるようになっては両川の川除け大分の場所も田畑村だけではできなく難儀になってしまします。御慈悲をもつて助郷を御救免くだされば有り難く思う次第であります。

右のような内容の救免願いであるけれども、正徳二年(一七二二)より明治五年までの一七八年の長きにわたって農民を苦しめた助郷を免

除軽減してもらう嘆願の関係文書は南箕輪村にもたくさん残っている。

四 天竜川通船・渡し舟

(一) 通船の開始まで

1 最初の通船願い書

天竜の大河が伊那谷の中央を流れているので、古くから天竜川の水運に着目するのは当然のことで、小規模な部分的な小舟による利用は既に行なわれていた。

特に各藩の御用木や樽木が筏や操木のまま川下りをして販賣されたことは、大久保に材木改番所が設けられていたことで明らかである。

幕府は国内の大河川に通船を実現してきたが、天竜川通船の企てについては、この道の権威者である角倉了以に命じて慶長一三年(一六〇八)に諏訪湖から遠州まで調査させたが、急流や氾濫原などの難所が多く、富士川開きのようにには実現できなかった。しかしそれ以後平地を流れている部分のみ航路が断続して開かれてきた。

時又や佐久間などに開かれた天竜川通船は、正徳・享保年間(一七一三―一七三六)一―二そう前後で動き、船一そうに米二俵を積み船頭四人が乗っていた。運賃・積荷差益の利益は船頭と船主で四分六分ずつわけても船主の利益は多く、当時一そうの建造費は一年の利益で元がとれたという。

武州豊島郡内藤新宿の商人二人が天竜川水城の物産を船積みで江戸へ送る通船計画を安永九年(一七八〇)に申請をしたが、諏訪・松本・伊那の中馬業者たちが反対し、下伊那の新井河岸(現豊田市松尾)から遠州掛塚までで示談成立となつて、通船事業は部分的にとどまっている。こうした状況が続くなかで神子柴村年寄孫市は宮田村五郎右衛門と

図り御奉行所へ文政六年（一八二三）一〇月に上流からの通船計画を願ひ出ている。この天竜川通船御許容願書は大変長いものである。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ奉り候。

松平丹波守御預所信州伊那郡神子樂村年寄孫市、内藤大和守領分岡州同郡宮田村年寄五郎右衛門申し上げ奉り候。

一、信濃國伊那郡の儀は山谷に廻り候土地柄にこれ有り候処、同國諏訪郡湖水の尾尻を水上にて遠州掛坂並川丈五拾里余一円に相連り候流水、天竜川と相連り候。然るところ往古より右川筋水上通船の助成これなく、すべての國産日運達の通路相連り候故、尾州・三州への運送荷物は往古より中馬と申し悉人にて三、四疋の馬遣退仕り、荷物同附け運送交易致し来り候処、孰れも行程四拾里余にて往返十二日宛の日数相續れ候故、途中止宿諸難費の失墜のみ相續り候故、自國産物売り捌き候ても僅かの余情に付き立ち行き難く西中人民粟食を忘れ相續り候えども、一体の愚案因故冬は十月上旬より雪積り、春は三月上旬に相成り申さず候えは耕転の農事も相成らざる處、近年別けて米穀格外の積段諸國と相連り下流に付き金銭の融通相成らず、國中一統國窮に相連り申し候。然るところ右天竜川の儀一休山川にて早瀬には候えども、平水の節は順道にて至極通船相成るべき水筋にこれ有り候につき、先年より逆瀬には通船御願い仕り候族も間々これ有り候えども、其の身の不肖をもつて願意空しく相成り候儀もこれ有る處、當時私共右川筋筋と相考え巨細穿鑿に及び候處、堅く通船相成るべき水勢に御座候えば、御許容をもつて通船の助成これ有り候えば國産の融通自然と便宜しく國益に相成るべき儀と恐れ乍ら存じ奉り候。これにより通船國益の始末左に申し上げ奉り候。

（田丸屋文書）

このように、天竜川両岸の産物の荷運送や交易の不便な現状を述べ、天竜川が通船可能なことと、通船ができれば大きな國益になるとし、続けて大要次のような國益となる点を列挙している。

(1) 領主等の収納米の運送に人馬の失費、諸難費多くかかり、領主も不利で農民も困窮の基であるが、通船があれば少ない運賃で早く運

ぶことができ、商品の流通が良くなるので売捌きにも便利である。

(2) 御預所の年貢はほとんど代金納であるが、国内荷物の流通の無い状態であるから、地域での米価の変動によって金納相場に大きな変動があり不便であるが、通船ができれば、国内での流通が良くなり、金納相場も平均化され、御公儀にも、百姓にも良い。

(3) 当地方は棄國で冬季の仕事は少ないが、通船ができれば農閑余業の各種産物の売捌きが便利となり、自然と冬季の農民の仕事がふえ、また、河原積みの仕事もあり農民に活気が出て来、年貢金の納入も良くなる。

(4) 信濃國は山国で塩の入手がむずかしく、運賃のため格別の高値となるが、戻り船で塩を運びさらに川筋村の産物を運べば、塩はもちろん諸品の融通も良くなる。

(5) 時又より下流は鵜飼船と角倉船があるので、それより上流に舟運をつくり天竜川筋一円の通船仰せ付けられれば、川筋の村々が交易に便利になり稼ぎ方も増し、領主にとっては払い米の利が増え、諸穀の値段にも影響し、全般的に諸産物の流通が良くなる。

このように、通船による國益を列挙した後、願書はさらに、次のように結んでいる。

一右川筋の内其の場所より岩間等にて難場も所々にこれ有り候へども、右とても御許容これ有り候えは仕法をもつて自費請仕り、荷積み通船の差し支えに相成らざる様仕る儀に御座候。尚また積荷物の儀は是迄中馬積ぎ仕り候者共の、同附け仕り候荷物差し障りに相成らざる様に仕り、尚、その時々により候ては中馬同附けにて引合わす候荷物これ有り候節、これまた船下げ仕り度候。尤も右中馬荷物の儀に付き候ては先年度々御許容もこれ

有り荷品相分け候儀に御座候へば、是又右様方仕り候者に故障には相成らざるに因縁をもつて第一の儀に御座候て、今般別紙天竜川村々盛松園面差し上げ奉り、何卒格別の御慈悲をもつて右川付き村々御礼し下し置かれ、私共へ通船の儀御許容成し下し置かれ候様願ひ上げ奉り候。

又右川筋の儀に付き此の上御奉公筋に相成る儀に御座候へば、仰せ付けられ候わば相勤め度く存じ奉り候。其の余御尋ねの儀は恐れ乍ら巨細口上並びに書付けを以て其の時々申し上ぐ可く候。以上

松平丹波守御預所

文政六末年十月

信州伊那郡神子榮村

年寄 願人 孫市

内藤大和守領分

同州同郡宮田村

年寄 願人 五郎右衛門

御奉行所様

(田丸屋文書)

孫市(秋葉藩に同行していた孫市と五郎右衛門は出願の準備は協力して行なっているが、その後不仲となり提出は孫市一人だけで行っている)は船一〇〇〇艘を建造し実現のあかつきには一そうに付き永五〇文の冥加金(献金)を出すことを申し出ている。

諏訪湖より掛塚まで凡そ五里余の船下りで遠州の挾石が難所であり、ここを中継点とした計画ができあがっている。そして、川通りの難所は自昔請で直し、予想される中馬側の反対には国益第一というこゝとで奉行所に、一二月には支配する松本御役所へ、「御慈悲を以て川筋の村々召し出され御礼のうえ願ひの通り仰せ付けられ下し置かれ候わば広大な御慈悲……」と、許可を願ひ出ている。

2 通船差し障り問題の解決

通船を許可するに当たっては、天竜川川付きの村々がこれに同意す

るかどうかが重要な問題で、孫市は役所で川付き村々を召し出して御礼の上、許可するよう願っている。

ところが、松本預り所では孫市が計画している天竜川通船に対する差し障りの有無を、孫市と村々との掛け合いにまかせたようである。

文政七年(一八二四)二月に奉行所へ提出した一札「通船差し障り有無御吟味御願ひ書」は次のようである。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ奉り候

松平丹波守御預り所信州伊那郡神子榮村年寄孫市申上げ奉り候。私儀同国天竜川筋に新規通船造り度く他国運送相始め国益に仕りたき旨去る十二月中に当御奉行所様へ願ひ上げ奉り候。又、御速にも幕国の上川岸の村々へ故障の節有無共に相話し候り出其の段申上げ奉る可き旨御判解仰せ聞かされ候に付き、掛け合いに取懸り候処先角抄取り兼ね御論其の村々役場へ懸け合い候へば、役人仲間又は小能百姓へも申し渡して追って挨拶致す可き様とこれを申し等閑にいたし打ち捨て置き候につき、猶又度々催促に及び漸く挨拶承り候次第にて日数相懸りかれこれ掛け合い相済み候村々僅かにてござ候。斯の次第にて掛け合い手聞取り候に付き、同御預り所内は御支配御役所へ願ひ上げ御威光を以て掛け合い仕り候。川岸村々の外にもかれこれ差し障り申し出で難儀仕り候。所詮右の振舞い合ひにては百次拾か村も御座候へば、年月を重ね申さず候ては懸け合い相違ひ間敷さかに存じ奉り候。

然る上は水引き候うちには一旦納得仕り候村々も何等異変等致す間敷さものに御座候。其の段斗り難く、左候ては是迄懸け合い手戻りにもまかりなり畢竟掛け合い相果て間敷き哉と歎かお敷く存じ奉り候。とても身力をもつて掛け合い相済み故障の有無申上げ奉り候儀出来難く存じ奉り候間、此段難重にも聞こし召しなされ御慈悲を以て川岸の村々此の上召し出され御吟味下し置かれ候様仕りたく願ひ上げ奉り候。

尤も掛け合い相済み故障節の有無相分かり村々は別紙に書き上げ奉り候以上

松平丹波守御預所

文政七年

信州伊那郡神子柴村年寄

願人

孫市

二月十九日

御奉行所様

恐れながら別紙書付けをもって故障の有無申し上げ奉り候

松平丹波守御預所信州伊那郡

北小河内村 長岡村

三日町村 沢村

大田村 古瀬

木下村 松島村

右七か村の儀は掛け合ひに及び候處天竜川通船の儀に付き候ては故障これ無き段挨拶に及び候

割倉外記様御代官所同國同郡

上知松島村 久保村

塩野井村 南殿村

諏訪伊勢守御預所分同國同郡

荒倉村 駒沢村

船沢村

右七か村の儀は故障これ無き段掛け合ひ相済み候

内藤大和守御預所分同國同郡

辰野村 平出村

赤羽根村 宮所村

野底村 上牧村

高島村 新田村

田原村 大久保村

伊那村 菅沼村

御園村 山寺村

小田村 表木村

樋口村

宮木村

古町村

殿島村

栗林村

古瀬村

伊奈村

下牧村

中越村 岩場村 新町村

右天竜川付き式拾七か村の儀は去る末の冬中右領主役所へ通船の件に付き候ては少しも故障これ無き段御書差し上げ候段右村役人共より私方へ挨拶これ有り候

松平丹波守御預所同國同郡

福島村 北殿村

田畑村 神子柴村

南下平村 北下平村

右六か村の儀は掛け合ひ候處通船出来候ては中馬塚さ築し障り、且は往々米納等に仰せ付けられ候ては難儀致すべく、又は米穀高値に相成り候ては小龍の者難儀致すべきなどこれを申し納得仕り申さず候

同御預所同國同郡

下古田村 上古田村

八乙女村 吹上村

羽広村 上戸村

中条村 与地村

大萱村 中萱根新田

中原新田 富田村

赤須町 上赤須

小町屋 市場割

右拾八か村は川岸の村々にては御座なく候えども故障申し出で候に付き掛け合ひ仕り候處、龍書福島村外五か村同様これを申し得心仕らず候

前書の通り去る暮中島村御願い仕り懸け合ひ仕り候村々の分故障の有無書き上げ奉り候通り相違御座無く候以上

松平丹波守御預所信州伊那郡

神子柴村年寄願人 孫市

文政七年二月十九日

御奉行所様

〔注〕福島村は羽倉外記御代官所

(田丸屋文書)

北小河内村等七か村・松島村等四か村・諏訪郡荒倉村等三か村・辰野村等七か村は故郷なく掛け合いも済んでいるが、福島村・北殿村・田畑村・神子柴村・南下平村・北下平村の天竜川に沿った六か村は通船ができて、通船で米が運ばれてしまえば中馬様さが出来なくなつて、貢租も現物納になるおそれがあり、そのうえ米の移出で米の値が高くなつては小前の者どもが難渋するからと、納得していない。特に主唱者加藤藤市市に住む神子柴村が反対している。川沿いの村々でない西山方の上古田村等拾貳か村亦須町等四か村も福島村外五か村同様に賛成していないことがわかる。

文政七年五月には川沿いでない箕輪郷一八か村の村々が激しく反対運動を起こし、上穂・赤須・下平の諸村を加えて出府し反対陳情を行なっている。

一方、孫市の運動も激しさを増し村々に納得して貰うため奔走して回ったが、村々への掛け合いのむずかしさを嘆き、村役場へ行けば小前百姓へ挨拶せよというし、いったん納得した村々もまた戻ってしまい、伊那郡一二〇か村を掛け合うことは至難であるから、川沿いの村々を召し出して吟味して貰いたいと郡内の掛け合いの結果を書き上げている。

幕府でも内陸の通船事業の開発のため、文政七年九月に反対の村々の代表を江戸に呼び出し、通船事業が国益の大義であることを説き、双方が妥協するよう申し渡し、難点は孫市と折衝させて妥協が年末には成立した。妥協の各項を要約してみると、

・諏訪郡から掛塚までに川除け普請の場所が数か所あるが決して差し障りないようにする。

・川をはさんで通用橋があるが決して差し障りないようにする。
・川通りには運上を納めて魚漁稼ぎの者があるが決して差し障りないようにする。

・途中田用水取水堰があるが通行できぬ場合は荷物を陸揚げして積み直す。
・航路が狭く掘り削り浚う必要があつても堰場近くでは決して行なわない。

・引舟の蘭田畑、雑場を踏み荒さない。

・川筋の瀬がかわつたため掘り直す必要が生じては行なわず、万

一、必要の場合は村方と相談の上行ない費用は願ひ人方にて負担する。

・中馬村々の儀は往古からの仕来りであるから尾州・参州ならびに飯田・松本・諏訪・高遠など域下町への諸産物米穀中馬荷物は往き返り共に船積みしない。

〔県史資料〕四巻

となつてゐる。

こうして伊那の村々との紛争は終結したが、次に起こつた反対は諏訪湖周辺の二四か村が通船によつて湖水の排水が悪く浸水の恐れがあるといひ出し、さらに続いて中山道木曾一か宿からは通船により伊那米が東海道筋や関東方面に輸送されてしまうことを恐れて反対運動が起こつた。せっかく好転をみようとした孫市の計画もまたまた壁につきあたり幕府も形勢を考慮して一時は願ひ書を下げ戻した。

3 通船の再願いと請書

初志の貫徹を期す孫市の信念は変わらず、文政一〇年(一八二七)五月に木下村年寄弥四郎と組んで再度申請している。

天竜川通船許可願書

恐れ乍ら書付を以て願ひ上げ奉り候

松平丹波守御預所

信州伊那郡神子柴村年寄 孫市

右員御預所

同州同郡木下村年寄

弥四郎

去る末年以来私共儀天竜川通船願いの儀に付き禁障りの有無御礼しこれ有り候処、本曾節御々村々より申し立て候は累年米穀払底の場所柄天竜川通船出来候わば、亦々以て米穀払底に相成る可き故懸念の趣き申し立て、右に付き通々御利御仰せ付けられ候に付き一旦相伏は仕り候えども遺念の程も斗り難く、願いの趣き御沙汰に及ばされざる買去る成年御世渡され恐れ入り畏み奉り候。これに依り留村の上百姓共へも右の趣き申し聞かせ候処、通船の儀は郡中の賑いに相成り辺土取り開きの一助に相成る可く候。手切りに罷り成り候段一統相敷き其の上是れまでの申し立て方不行届も御座候に付き、尚又この度願い上げ奉り候儀は通船に積み入れ候品は牛馬駄送相成り兼ね候材木類、その外国産の品々積み下し、登り船には塩・鉄・綿布・魚類積み登り候を第一の積ぎ方に仕り、諸家儀方の御廻米は格別その外売米の分は積み入れ申さず候段約定仕り、是れまで掛塚溪へ差し出し候儀は相成り兼ね候品々を運送仕る可く候。

恐れ乍ら信州路方一作毛取入れ方もよろしからず米穀高値の年柄も御座候わば、其の節は遠州辺において米穀買入れ信州路へ積み登らせ候儀は、伊那郡諏訪郡は申すに及ばず木曾路御々村々までの潤い助けに相成る可く候間、其の節は売米にても運送仕る可く候。

若し又信州最作打ち續き米穀直段下落にて村方迷惑の節は積み出し候は勿論の儀に御座候。右の趣き当時木曾宿へ掛け合い中に御座候えども先達と違ひ格別難儀の態も相聞かず候間、御許容成し下し置かれたる願い上げ奉り候。右其加永として三拾貫文、横板三千枚宛年々上納仕る可く候。信濃の国の儀は四方海なきの辺土に御座候故、慶長年中右の趣き御儀將も御座候。角會丁以へ通船御せ付けられ、給因里程通船の船名今もって角會船と相聞え川上通船の儀はまだ取り聞かず候内、御同人は死去致し候由旧来申し伝え候のみにて、只今通船船と申す小舟をもつて通船仕り候えども掛塚溪まで運送はでき兼ね候間、此の度川筋相応の新船打ち立て水行難儀は浅瀬を渡り大石

を取り片付け破船難儀かりこれ無き様、今より入用をもつて普請いたし通船仕り候心得に御座候。左候えは必竟御利御の小舟を大形に打ち替え候のみにて新規に相企て候節にも御座なく候段御深慮下し置かれたる願い上げ奉り候。川岸西岸の船宿等は新規相対をもつて取り極め、掛塚溪開闢の儀は是れまでの仕来りに随ひ仲調一統の潤い助けにも相成り候様御合意、御領主様方並びに御用の荷物は何品に限らず運送仕る可く候。尤も右品々別段引請人相立て取り扱ひ仕り、其の外川丈より渡まで一統の賑いにも相成り候様取り計らい仕る可く候間、何卒願いの通り仰せ付けられ下し置かれ候様難儀にも願い上げ奉り候以上。

松平丹波守御預所

信州伊那郡神子榮村年寄

願人

孫市

文政十年亥年五月

右同 御預所

同州同郡木下村

年寄

願人

弥四郎

御奉行所様

(田丸屋文書)

・通船に積み入れる品は中馬では駄送できない材木類・その外国産の品々を積み下し、登り船には塩・綿布・魚類を積み登りする。

・信州路の取り入れが懇く米穀が高値の年には遠州辺で米穀を買入れ信州路へ積み登る、そうすれば伊那郡諏訪郡は勿論木曾路の宿々村々までも潤い助けになる。また最作が打ち續き米穀直段が下落した時には積み出す。

・其加永三拾貫文 横板三千枚を上納する。

・御領主様方並びに御用の荷物は何品に限らず運送する。

・孫市は反対の村々の申し立てを斟酌してこのように申請している。

こうして中馬稼ぎの村々や木曾一一か宿の反対の解消ができ、議定書の取替せをし文政一二年（一八二九）一二月漸く認可を得た。

先の申請から、通船の許可が下りるまで六年の歳月がかかっているが、孫市はさっそく奉行所に対し請証文ともいふべき一札を出している。

差上げ申す一札のこと

一私儀信州諏訪湖水路ち口天竜川平出村より遠州にては天竜川と唱え同国掛坂渡まで川丈凡そ五拾里余これ有り候処、右の内掛坂渡より川上信州伊那郡狭石まで凡そ拾三里程の場所は今より通船これ有り、其の後同所より上み手時又村まで拾四里程の場所通船と唱え是れ又通船用いこれ有り候処、時又村より上み手平出村まで凡そ川丈拾六里程の場所未だ通船これ無く運送差支候に付き、自分入用をもつて長さ七間半底四尺二寸の船凡そ百艘打ち立て、村々相對の賃賃をもつて通船運送仕りたく候処、伊那郡の内平並びに中馬と唱え候様方方に差し支え候旨敷か村より申し立て候に付き、是れまで牛並びに中馬附け送り候儀物船へ積み取り申さず、是れまでの通りにて右の外貨目重き品、駄賃格別高値の品、間長の品等船積み致し候儀にてすべて中馬荷物相減じ候儀これなき旨御判解これ有り残らず承伏仕り候。然る処尾州御領分木曾拾宅が宿並びに附屬式拾宅が村より通船出来致し候ては、右宿々へ入る米相場引揚り飢饉に及ぶ可き旨申し聞き候間、木曾宿々惣代の者御呼び出し御判解これ有り候上、猶又私共より得と掛け合ひ申すべき旨仰せ渡され候間、追々に掛け合ひの上當時差使四斗入式千俵は水々敷き候に致し置き、其の後宅が年四斗入六千俵二斗六斗入式千俵都合八千俵宛時の相場をもつて差し遣し候段、対談相整い議定証文取り替し相済み申し候こと

一、通船運送の儀は米・大豆・酒、三品は積み入れ申す間敷く候。其の外貨目重き物、間長のもの、駄賃高値の品々、他国引合いに相成らず是れまで埋もれこれ有る因産の品々おびただしくこれ有り、自然と國中資糧致し甚

しく困窮に及び候處通船これ有り候えば右品々他国引合いに相成り、且又信濃國中打続く不熟の節は他国より米穀引入れ候間飢饉の懸い御座なく候。國中は勿論近頃まで潤い候儀に御座候旨申し上げ候こと

一、荷物積場の儀は信州伊那郡沢村・同郡時又村・遠州磐田郡半場村右三か所試しのため船積所願い奉り候。不都合の儀もこれ有り候節は追つて外の場所取極め願い奉るべく候こと

一、御運上並びに御買加の儀は宅が年水百貫文、横板三千枚年々上納仕るべき旨申し上げ候。船打ち立て其の外品々千枚相懸り急速には出来仕らず候間、来る寅より水百貫文、但し長さ六尺三寸幅一尺厚さ四分の横板三千枚宛年々水々上納仕るべきこと

右の通り願い奉り候處追々御吟味の上願いの通り仰せ付けられ有り難く承知畏み奉り候。然る上は御運上水は松平丹波守様御預り所御役所へ水々相納め、御買加横板は遠江御村木蔵へ年々水々相違なく相納め申すべく、且故障村々へ対談議定の趣き達意致すまじく候。仍つて御請証文差し上げ申す是くだんのごとし。

松平丹波守御預所

信州伊那郡神子柴村

年寄

孫市

文政十二年

十二月廿八日

御奉行所

前書仰せ渡されの儀私儀も罷り出で承知畏み奉り候之に依り奥書印形差し上げ奉り候以上

右差添寄

編 屋 甚 八

（田丸屋文書）

その要点は左のとおりである。

・掛塚より川上の狹石まで、狹石より上み手時又村までは既に通船があるから、時又から上流の平出村までで、長さ七間半・底四尺二寸の船を凡そ百艘造って通船運送する。

・これまで牛や中馬で付け送りしていた炭物や米・大豆・酒の三品は積み入れれない。賈目の重い物・間長のもの・駄賃の高値の品々を船積みする。

・貨物の積荷は沢村・時又村・半場村の三か所とする。

・御運上並びに御冥加金は一か年永百貫文・梗板三千枚を年々上納する。

(二) 通船営業の仕様

営業は翌一三年の春からで、天保六年(一八三五)までは主に孫市の自己資本で運営されたものと思われる。

具体的営業の姿はよくわからないが、「天竜川通船積り書」には次のように書いてある。

信州伊那郡平出村より津州掛塚迄天竜川第一回通船仕様

一、船 百艘

但し老か月老度下り後敷三拾俵目方積み老依に付き銀三匁

此の銀九匁

此の訳

銀七拾五匁 船頭給金

銀 貳匁 御運上

銀 八匁 間屋口銭船持

銀 五匁 川上出水の御普請手当金

一、年内 千船の積り

銀七拾五匁 船頭給銀

尤も下り船の賃金に御座候

一、同所

銀四拾五匁 但し老依に付き銀五匁内銀五匁四匁引

是は上り船の運賃

式口合銀百貳拾貫目

此の金貳千両 船頭給金の積り

御運上老か年合銀貳貫目

此の金三拾三兩一分五匁 御上納金

老か年下り船口銭銀八貫目

同上 上り船口銭銀五貫目

合銀 拾三貫目 間屋船持ち受け取り

為金貳百拾六兩貳分貳厘と貳匁五分

間川文銀銀五貫目

為金八拾三兩貳分五匁

(田丸屋文書)

この資料は年度が不明で、積り書であるが、百艘の船を毎月一回平出から掛塚まで運航する計画になっており、一艘(長さ七間半底幅四尺二寸)の積荷は米三〇俵分の目方のもので、その運賃が銀九〇匁(約一・五兩)となっている。

船一艘の運賃銀九〇匁の内訳は、船頭給金七五匁、運上二匁で、間屋口銭と船持の取り分が八匁、出水の際の普請手当金が五匁となっている。船主の取分は意外と少ない。さらに資料は年間運航数千艘として見積りをし、その中で間屋船持受取分を銀一三貫目(金にして二一・六兩)ともくろんでいる。

さらに、文政一三年(一八三〇)の「天竜川通船運賃・諸掛り留書」には、次のようにある。

天竜通船積りより江戸迄貨物老依に付き銀廿匁貳分五厘積り

時侯より江戸迄老依に付き十七匁貳分五厘積り

船老依 十五匁積

此の賃銀三百三匁七分五厘 但し老依は廿匁貳分五厘

年内舟敷貳千四百匁 但し舟百艘にて老か月四度上下のわり

運賃ノ銀七百貳拾九貫
金として惣万貳千五百五十兩

内訳

金千八百兩 沢村より時又迄

運賃間屋口銭共 但し宅敷に付き四匁式分寄屋

金千六百八十兩 時又より半場迄

右同所 但し宅敷に付き四匁寄屋

同千五百廿兩 半場より欠塚迄

右同所 但し宅敷に付き貳匁五分三厘

同四千六百廿兩 欠塚より江戸迄

右同所 但し宅敷に付き七匁八分、六匁は運賃(宅敷八分)

同三百五十兩 公銭上納

同千八百八十兩 其加

同五百兩 年々川渡い平当

同五百兩 右金主返済積り

右の通り相調べ書上げ奉り候

文政十三寅三月

右の仕方懐勘定

金貳万貳千五百五十兩の内

内三百兩 沢村間屋口銭 宅敷五分ずつ

三百兩 時又村 右同所

三百兩 狭石村 右同所

六百兩 江戸会所 宅敷ずつ

三百兩 欠塚 右同所

小ノ 千八百兩也

積金分ノ貳千五百廿兩

又狭石より欠塚迄金千貳百兩

但し三万六千駄の運賃 但宅敷に付き貳匁此は下り荷物の分なり

又欠塚より江戸迄金三千六百兩 右同所

此ノ 四千八百兩

引換ノ 三千廿兩有 此の分沢村より狭石迄の運賃

此の支分け

舟寄屋に付金貳兩寄分よ 宅か月兩度上下

年内百艘にて貳千四百度上下 此の分運賃三千廿兩と成る

下り二日、上り六日、上・下八日懸り

本日につき宅敷分九匁四分四厘に当たる 但し四人乗宅人にわたり貳匁四

分寄屋ずつ

以下略

『県史資料』四巻

この資料も「右の通り相調べ書上げ奉り候」とあり、さらに「懐勘定」とあって、胸算用のようなものであるが、一〇〇艘の舟を用意し、月に二度ずつ上下し、年間二四〇〇艘運航する考えで、一艘に一五駄の荷物を積んで運び、その運賃は一駄につき沢村から江戸まで銀二〇匁二分五厘、時又から江戸まで一七匁二分五厘の積もりとなっている。

年間二四〇〇艘の沢村から江戸までの運賃が一万二一五〇兩となっているが、この区間を沢村―狭石、狭石―掛塚、掛塚―江戸の三区間に分けて運賃が算出されており、当地の沢村―狭石までの年間の運賃は三〇二〇兩となっている。

おそらく狭石、掛塚の二か所で積替えをして江戸まで運んだものと考えられ、そのうち、孫市の通船は主として沢村―狭石間を担当したものと考えられる。

この沢村―狭石間を下り二日、上り六日、上下八日懸りで運航し、一艘には船頭が四人乗っていたものと思われる。

次に、通船でどのようなものを運ぼうとしたのか、文政七年のまだ

許可請願の段階の資料であるが、掲げておくことにする。

恐れ乍ら書付を以て申し上げ奉候

一、信州諏訪郡湖水より遠州掛塚迄天竜川筋船積み下げ仕度き荷品

一、御出入御屋敷様方御払い米穀類並びに江戸御屋敷御勝手向御入用の品外

一、油 一炭薪 一白木類 一〇〇類 一酒 一焼酎

一、栗 一大豆 一小豆 一小麦 一稗 一胡麻

一、乾菜類 一味噌 一味噌油 一醬油 一酢 一菜

一、胡椒 一古 一ころも 一梅干 一鶏卵 一干瓢

一、水鮮 一水豆腐 一〇〇粉 一粟粉 一辛子粉 一糖漬

一、真綿 一麻布 一麻子 一晒木綿 一紙類 一玉燵草

一、菱餅 一漬大根 一漬蕪 一漬松茸 一漆 一がらく

一、洗蓑 一和菜類 一管笠 一傘 一蓑 一青莉

一、草鞋 一砥石 一硯石 一硯

一、遠州掛塚より信州へ積み登らせ候荷品

一、塩 一千鰯 一魚油 一茶 一生魚 一塩島

一、遠州鹽 一遠州藍 一紙筆類 一蠟燭 一燭臺類 一鉄鍋もの

一、小間物類 一瀬戸物類 一琉球

右の外にても附け送り兼ね候買目の荷物は中馬にて値段引合はざる品、中馬に差し障らざる様船積み仕度候以上

松本丹波守御預所

文政七年五月 信州伊那郡神子柴村 年寄 孫市

御奉行所様 木下村 〃 弥四郎

(田丸屋文書)

天保五年になると、阿州塩を大量に取扱いはじめたことが次の資料からわかる。

取替おし申す議定一札の事

一天竜川通船御免有らせられ候、以前より貴殿とは別想に付き兼ねて因産并

田塩積み乗せ申す可く御契約致し置き候所、猶又今般御相談の上取極め候

は、右塩の儀損者一手に相限り外々より志儀たりとも一切引掛け積み入れ

致す間箱塩段因御御役所御掛板相場に諸掛りは差し加え御裏印附きにて

元銀設を以て積み送り申す可く候。然る上は塩式斗五升九合入り志儀に付

き海上為替方口銭として銀三分宛と相定め申し候。万一難破船などこれ有

るとも拙者方にて取附い貴殿へ少しも御損相掛け申す間難候。尤も天竜

川上下荷物の儀村上久仁助引請けのことにこれ有り候えは、塩送状の儀右

久仁助損者兩名にて差し送り申す可く候。右対談議定候上は、後來に至り

候共不美意の取斗い等決して致す間敷候。これに依り後証の爲一札取替

わし申す趣旨の如し。

天保五年五月 阿州名東郡下助往村山往屋 源治郎

村上久仁助代兼中西屋 貞兵衛

神子柴村 孫市殿

(田丸屋文書)

当時塩は遠州および駿州方面より入り、中馬が運んでいたのであるが、孫市は中馬の運ぶ塩とは別の阿州(阿波国)の塩を一手に引き請け、他の塩を一快たりとも積み乗せないこととして議定証文を取り替わしており、別の資料によると千俵、万俵単位の大量の塩を扱っている。

次は、高遠産石灰の通船運送のための約定である。

約定一札

此の度高遠産物の石灰我等引き請け過々荷出しを致し下伊那在々飯田御城下迄も差し出し候につき運賃等御相談取りきめ申す趣旨の通り

一、御会始より井財天舟場まで小出し我等差し出し申す可く候こと、

一、井財天の駅渡しまで運賃志儀につき志儀懸りのこと、

一、沢渡間屋口銭並びに小揚げ小出し共志儀につき銀五分懸りのこと、但

し問屋にて払い置き送り先より仕切金請取り戻しの節勘定相立て申す可きこと、

・ 沢渡より別府、阿嶋、嶋田下、川地四か処へ運賃定駄につき銀三匁懸かりのこと、

貝の口 末坂二か所へ右同断銀式外五分懸かりのこと。

右先々舟場より問屋へ小揚げ貸我等にて差し出し申す可きこと

三峰川舟道通り舟方にて修造致し荷上げ差し構えこれなく候こと

但し早々差し遣はう出来のこと

一、天竜川大船寄艀此の度借用申し候につき定式の通り附札の爲壹か年金三
 参〇差し出し申す可く候こと、

右の通り御約談申し候上は双方少しも違ふ中すまじく尤も御金所荷物の儀は
適々仰せ立てられ候次第もこれあり候につき別段御下知これ有る可く候条よ
つてくだんのごとし。

天保六年四月廿二日

和泉原 早 八種

加藤 隆子 殿

〔田丸屋文書〕

この資料によって、高連入りの石灰を天保年間運賃を取りきめて通船を利用して飯田城下へ送っていたことがわかる。

三 今後の経営

天竜川の通船の許可を受けるための孫市の努力は並大抵のものではなく、許可を受けた後も舟の建造はもちろん、通船に支障のないようにするための川底の浚せつや、障害物の除去等に莫大な費用を投じ、通船を開始したことはその資力と気概には驚くべきものがあるが、その天竜川流域の発展に寄与した功績は実に偉大である。

しかし、その孫市の功績にもかかわらず、天保七年（一八三六）からは通船株や問屋株を譲らねばならなかった。それは次の資料でわか

取替わし議定の事（抜替）

……粗き儀に前件を通船願人の儀にて、船は拙者名前に候得共、貴殿より取り御引受けの儀に付き諸式御取極め共方事永年御任せ申し候儀故、仮令只今の御支法にて御勝手宜しからず、御国益等も薄く御為方に相成らざる御は如何様共其の時に任せ便利仕法相立て御改革御願い成され候共拙者へ御示談及び申さず、然るところ拙者御願ひ中謄入用始め川筋普請、其の余取り行き向き自力行届き兼ね候に付き、江戸本町河村屋兵衛敷方にて取替へ呉れられ候。惣金高四千両に成り申し候、右の引き当として通船株並びに川筋間屋株共預け置き候。然る処今度御代人定兵衛殿が弥右兵衛殿と御料談成され来る申年より来る巳年迄拾か年済に御双方納得の上議定取替わし相済み仍つて、拙者より兼ねて引き当として預け置き候天竜川通船株並びに川筋所々間屋株共御引受け御所持なされ候上は、通船株並びに川筋間屋株共永年御歸半次第御支配これ有る可く候。

中略

通船株並びに川魚所々間星株共永久譲り渡し申し候儀に付き、来る申年より壹か年金五拾兩宛来る巳年まで拾か年の間指し入れられ候旨、右拾か年相済ら候得ば翌午年より五拾兩相増し郡台金百兩宛、通船御行ないの中水々指し入れられ候旨、並びに下り船客艀につき艀客及短明客札として下され候事

中略

右の通り双方得心の上無談相整い全く相違これ無きに付き、御掛り御役前様御奥書印形面戴仕り相極め候上は後年に至り、朝達^{あした}これ有間^{あひだ}猶^{なほ}、仍つて後託として議定取替わし一札件の如し

天保六年七月廿一日

信州伊那郡神子集村

天竜川造船廠人 孫市

大阪信濃屋三四郎殿

御代人 定兵衛殿

前書の通り承知せしめ候 以上

松平丹波守御預所 郡奉行 柴田七郎兵衛

(田丸屋文書)

孫市は、通船の許可を得るための運動と川筋普請のため多額の費用を使い、その後の運営にも費用がかさみ、江戸本町の河村屋兵衛から資金の融通を受けていたが、その借入高が四〇〇〇両にも達した。そこで、孫市はその借金の引き当てとして通船株と川筋間屋株を河村屋兵衛に一〇年季で預け、松本役所に対し通船の経営が立行き難い点から、この始末の道付けを願ひ出たのである。

松本役所においては通船の重要性を思い、大阪の信濃屋三四郎に、孫市に代わって通船を運営するよう沙汰をした。そこで信濃屋三四郎の代人定兵衛が、通船および間屋株の権利を預かっている弥兵衛と相談し、信濃屋が孫市の借金を立て替えて払うことにし、通船株と川筋間屋株は信濃屋三四郎に譲り渡されることになったのである。

しかし、孫市は譲り渡しの条件として、初めの一〇年間は年五〇兩、以後は年一〇〇兩ずつを受け取ることにし、さらに創始者としての功に対する礼として下り舟一艘につき銀五匁を受けとることになったのである。

このようにして、通船運営の権利は孫市の手から離れたが、全く孫市が通船と無関係となったのではなく、船元としてその後の通船の文書には常に孫市(本人およびその後継者で襲名した孫市)の名が出ており、重要な働きをしている。

この後、どうして通船が休船になったか事情はわからないが、嘉永六年(一八五三)ごろには休船になっており、新たに伝之丞、市作の二人が運営することになった。

差し出し申す一札の事

天竜川通船の儀に付き貴殿年表丹誠成され候て御公儀様御許可に相成り候処

唯今にては休船に相成り候故私共へ舟相立て候よう御頼みにつき、如何とも通船通るの取り計い仕るべく候。

然る上は御公儀様御免の御印迄御下され、御約束仕り精々相励み申し候。船相立て候以後私共不実の儀仕り候得ば何様ともなさる可く候。後日のため差出し申す一札仍って件の如し

嘉永六癸丑年二月

中沢大久保村 伝之丞

同所伊那村 市 作

船元

孫市殿

孫市は嘉永七年(一八五四)七月、七八歳で病没しているが先願者としての功績は大きく、名は長く後世に伝えらるべきであろう。

孫市の死後もその後継者が船元として活動している。

高遠領の江戸回米を送るため通船元方の孫市と高遠領通船世話方との間に次の一札が取り替わされている。

取り替わす規定一札の事

此の度御殿様より天竜川筋江戸御屋敷御扶持方御廻米遊ばされ候思召しにて通船御願ひ立てに相成り候ところ右川筋通船の儀は先年孫市殿外番人より願ひ立てなられ御免に相成り當時思召左衛門殿参配中に御座候ところ右一〇〇については莫大の物入りこれある段仰せ聞かされ候ては此の度御願ひ立てについても故障これなきよう致したく御打ち合わせ申し御立入り人をもって御談判に及び候ところ双方申し分なく赤紙内船相整い候趣意左に

一、天竜川船積荷物上下一艀につきこれまで川筋諸人用の趣意として遠近にかかわらず右一艀につき其の度々銀五匁出銀致すべく、尤も以来とも通船相立て候限りは右同様になすべく候こと、但し舟寄船積荷物甘駄積みの図り老成式分五厘宛前書の通り取りきめ連印規定一札取り替わし候上は後年共毛頭違証御座なく候後証のためよって件の如し

安政五戊午年九月

通船世話方

伊那村

一 遠藤

同原相島村

伝兵衛

立入人木下村

野 平

同新長岡村

織右衛門

通船元方

神子榮村

孫市郎

当引請人 忠左衛門殿

(田丸屋文書)

右の規定一札から、通船元方の孫市と示談し話し合いがまとまって、船を二〇駄積みで一駄二分五厘で送られたことがうかがえ、高瀬藩江戸回米も孫市の舟が運んだことがわかる。

綱 橋と渡し舟

天竜の大河川が上伊那郡の中央部を流れているので、竜東と竜西の交流、物資の流通は洪水期はもちろん、平時においても容易なことではなかった。

天竜も場所によって川幅の広い狭いがあり、瀬の深浅もあり、流れの緩急もあったので、今日では想像もできない難儀なことであった。

しかし、川の氾濫で流れが気ままに変ったので、所によっては川幅が広く浅瀬になり、かちわたりしたり、流れの急な狭い所には丸太をかけて渡ったと考えられる。

1 橋について

天竜川に橋がかけられた時代や場所は『上伊那郡史』によると、中世のころは橋はほとんどなく高瀬領をつなぐ「イナベ前の橋」といわれた土橋が伊那郡にあったようである。その後の駿島より下には永久的なものではなかったようで兩岸の交通はほとんど渡舟を用いていた。

正保年中(一六四四―四八)に描かれた版板領給図にある橋は、宮木

から平出への橋・木下から三日町への橋・西伊那郡から東伊那郡への橋である。

南箕輪村内の橋については、田畑の勘太夫が願人となり、弥惣右衛門が証人となって、享保一六年(一七三二)十一月御普請奉行に流失した橋の橋掛けを願い上げ奉った口上書(玉理軒文書)がある。

・田畑村分天竜川落ち合いに歩行橋従前に御入用下し置かれ掛け候義は云々

・当五月大満水にて橋道長行祈共に残らず流失仕り……

・右奉行橋御座なく候ては、当村の義は申し上げるに及ばず近村其の外山方村迄御用足り申さず……

・御慈悲を以て行祈の義は前々通り御買上げに遊ばされ下し置かれ、橋掛けの人足は百姓役に仰せ付けなされ下し置かれるように願ひ奉り候……

このように、享保の年代には田畑の落ち合いに歩行橋がかかっていたことがわかるが、たびたび大洪水で流失していたと思われる。

この橋の重要さは右の口上書を見ると、

・御支配所村々川向うに御座候へば御公用にて御通り遊ばされ候節……

・御別状申し次ぎの節歩行橋直路は道法七、八町御座候、三日町大橋に廻り候へば三里拾貳町、伊那郡大橋へ廻り行きても三里拾貳町御座候故急の御用制付けは間違つかまつる可……

・川原御田地へ用水揚げ候節又川縁御普請つかまつり候節は川向こうより石取り候へば……

・高瀬城下町にて諸色売買つかまつり候歩行橋走路は拾八町御座候に就きたば新敷の品々持ち運び……

・下の大橋廻り候へば行路四里半御座候に付き足弱の百姓は其の日往還まかりなら難儀つかまつり候……

(玉理軒文書)

このように、住民にとっては種々の面でこの歩行橋も必要かくべか

らざるものであったことがわかる。

その他の場所にも簡単な橋はあったようだが資料がなく詳細はわからない。

2 渡し舟について

「麻坂絵図」にある渡舟の場所は上伊那では葛島（中川村葛島渡場）だけであるが、常置的なものと臨時的なものと差別はあったが、天竜川には所々に渡舟はあったと想像される。

南箕輪村においては絵図でもわかるように北殿地籍から福島地籍へ常置的な渡舟があった。

江戸時代前半の渡河に関する記録を見ると、寛延三年（一七五〇）の旅人紀行文に「坂下にて船渡しあり。向こうへ越して高遠へ行く也」と書かれている。

東春近の殿島にも渡場の地名が残っているが、ここにも渡舟場があったことが記録に残っている。

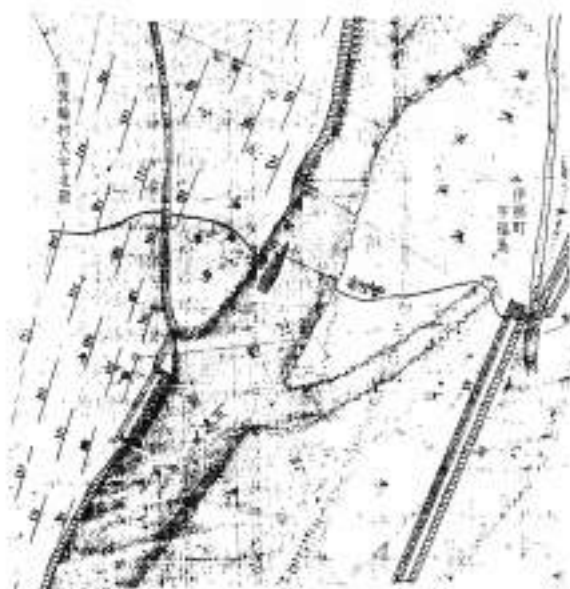


図3-63 北殿にあった渡し舟

第四節 学芸と教育

一 俳文学

俳諧は元来長短の句を続けるのが原則であったが時代が下るにつれて連句の第一句目である発句だけを鑑賞することが盛んになり、江戸中期以後ではむしろ発句のほうに比重が傾いたといつてよい。一句に曲節があり、一句としての独立性が確かな半面余情のあることが望まれた。また当座の季語を詠むことが原則となり表現としては切字（や、哉など）によって句に緊張、余情、主題の強調等をつけることが重んじられた。

明治時代になって正岡子規が連句非文藝論を唱えて以来連句は微々たるものとなり、ほとんど発句だけが作られ鑑賞されるようになり、現代ではこれを俳句と呼ぶようになった。しかし俳諧は日本独自の形式をもった文芸であることはいまでもない。

(一) 談林風時代の俳文学

本村に俳諧を嗜む者が出たのは江戸も中期、正徳・享保（二七一—三八六）の時代である。このころの当地の人たちは談林派や美濃派の俳諧者に指導を受けている。そのころ俳諧を興行した仲間田畑の松吟の名が見える。松吟は当時木下に住した野口在色門中としばしば俳諧興行に同席している。

享保一〇年（一七二五）、八幡宮奉納歌仙に、

（前略）

蒼鷹かぶる木曾の夕暮

つれ出した時の思案に余る雪

願病神の覚やらぬ中

吟味

松吟

在桂

（後略）

松吟は田畑の人で野口在色の門下である。

野口在色（一六四三—一七一九）は寛永二〇年、遠州（静岡県磐田郡長野村、現磐田市）に生まれ、名は利直、また甚八郎と称した。寛文元年（一六六一）家業のことで江戸に出て俳諧作者と交わり、西山宗因（一六〇五—一八二）に師事した。宗因は貞門の俳諧にあきたらず俳諧本来の自由かつ達で斬新な境地を求める同志とともに「談林俳諧」の一派を開き新風を巻き起こした人である。その旗あげは延宝三年（一六七五）「談林十百韻」を発刊したときであるといわれる。その仲間の中に野口在色はいた。その最初のところを次に掲げる。

されば爰に談林の本あり梅の花

梅嶺

世俗風をさますうぐいす

雪嶺

朝霞たばこの煙よこおれて

在色

（中略）

香露散石上られて御覽せよ

執筆

なみ／＼旅人三伏の夏

在色

（以下略）

梅嶺は西山宗因である。「談林十百韻」の刊行以来談林風の俳諧は世間を風靡していくのである。

談林風開拓の一員である在色は三七歳のとき木下陣屋に勤めていた妻の父良老の懇請によって木下に住むこととなり、そこで俳諧の宗匠として多くの門弟を指導した。著書に『悲母追悼』『やぶれ床』『晩眠記』『俳諧解脫抄』等がある。六四歳のとき長松堂筑形と改めた。正徳四年（一七一四）に遠州郡崎において没したが墓は草崎良照庵と木下義泰寺の両所にある。

当地方の俳諧は在色の影響によってまず談林風によって開かれたの

である、松吟の一座した一部を左に掲げる。これは享保一七年（一七三二）歳旦の俳諧である。

（前略）

日隠す雲霞官のはれ所

今幽

松茸籠に工夫着る宵

松吟

秋風をとめて地名の部屋住居

一友

（後略）

松吟のほか在色門には北殿の緑色があつた。

羽広山参納俳句に

電灯や柄の花の火ともし時

緑色

在色五十回忌追善供養の際この緑色の子巴緑が捧げた「志」に次のように述べている。

予が亡父緑色は在色翁の門弟たりしも不幸にして先立ち師も今年五十回忌と聞く、亡父に代りて一句を捧ぐ

先に消えし露の流れや手向水

北屋 巴緑

とある。緑色はじめ在色に従った者が他にもあつたに違いないが松吟・緑色以外今のところ遺稿ながら資料が見出せない。

当地方の俳諧宗匠として在色および次に述べる三狂庵の影響は中村伯先が田畑に居住して蕉風を伝えるまで続いた。

（二）美濃派風時代の俳文学

芭蕉俳

花の陰うたひに似たる旅籠就

尾州隠士也七十三歳これを書く

神陰 元禄七年戊戌十月十二日

当国三狂庵門人 冥輪連中

この句碑が北殿明和坂の下にある。以前は塩ノ井「おきな」の前の



図3-64 故 墓 塚

高台に「おきな松」があり、その下にあったものを塩ノ井線の開通に際し現位地に移されたものである。

冥輪連中とは誰たちであろうか。

三狂庵桐羽の編んだ『歳旦帖』には冥輪連中として、巴旭・路平・和有・普乙・文羽・凡巨・杉壺・杜竹・木太・泉壺・茶友・丈高・柳茂・寿刺の名を連ねているという。『上伊那縣歴史資料』しかしこの書物は現在見つけることができない。したがって旅寝塚建碑に携った人が右の連中全員であるかどうかははっきりしない。

また、冥輪町小松松嶺の「俳界見聞」（小松草一蔵）中「塩ノ井芭蕉塚ニツキテ」の考証によると、明和前後より天明に及ぶ桐羽門人中の冥輪連を句集中からあげると左の連中であると。

大泉・和律・柳茂・百何・路平・普乙・殿村・巴緑・蘇巴・巴旭・松園・田畑・杜竹・神子・柴・杉壺・木下・鶴川。そしてこの文書の終りの書入れに「花隠塚ハ南殿酒屋ノ祖清水和人ナド中心ナリシト」とある。

さてまた、清水和人の建碑に関する記録も未だ見当たらない。した

がってこの塚建碑の箕輪連は今のところ確認するものがないが右にあげた人々が主として携っていたであろうと推察される。

旅寝塚は横井也有七三歳のときの書である。横井也有は元禄一五年（一七〇二）に生まれているから也有七三歳の年は安永三年（一七七四）に当たる。神降の元禄七年一〇月一二日は芭蕉が没した日である。安永三年の命日に当たる日に三狂庵桐羽の門弟の箕輪連中が芭蕉の追善供養のためにこの句碑を建てたのであろう。

この碑からも当地の俳人は桐羽の指導を受けたことがわかる。

桐羽。名は任武、儀兵衛と称した。飯田藩の士分で、各務支考派の有力者尾張藩士横井也有に従って俳諧を嗜み宗匠として当地に多くの門人を持っていた。

横井也有（一七〇二～一七八三）は尾張藩士一〇〇石の出身で、御用人・大番頭・寺社奉行など歴任し、宝暦四年（一七五四）五三歳のとき退任し（二説四九歳）、前津の里に隠れ住んだ美濃派の俳人である。著『鵲衣』は名著として評価されている。

美濃派といわれるのは蕉門十哲の一人各務支考（一六六五～一七三二）が主張した一派で、芭蕉の流れを汲むとはいっても蕉門のうちでは異色のものである。この派の作風は、滑稽諧謔趣味と平俗な表現を旨とした。

本村にはもとより野口在色による談林風の下地のあるところへそれと一脈通ずる美濃派の宗匠によって芭蕉を重んずるとはいえ平俗な作風を指導されたのである。

小松松頼の見出した「題名不詳の古書」より本村関係の俳人と句を挙げる。三狂庵門下の句風の察しがつく。

木庵や若木に何の実を授けず
やぐらにも炭にもならん桐火哉

大泉 桐茂

和律

九。鉦。かける朝日や霜柱
御手洗や木の葉の露や神の留守
鐘に鐘を真ふ日向や小六月
尻に根が出てにげかねる炬燵故
杖いらぬ腰も梓や竹の雪
十五から六十迄や大根曳き
里に笠掛けて山の時雨故
釣鐘は乳までぬれたる時雨故
ちなみに松韻は木下の人。明治二三年生れ。
中年新傾向俳句仲間にはいった。嬌風社幹事をなした人である。
後年はまた定型句を作る。

百阿 路平 昔乙 寿菊 北殿 巴旭 田畑 杜竹 神子榮 杉登

これらは桐羽の門人とみることができ、その他柳茂や杜竹らと俳諧興行に同席した人や、諸文書（田畑玉理軒、同もんや、かまや等所蔵）から拾い出してみると同時代の人左の名が見える。

丈羽・昔也・如雪・和有・如水・宇柏・其第

「旅寝塚」の三狂庵門中の箕輪連中にはこれらの人々も加わったろうか。



図3-65 桐茂神世句碑

このうち梅茂の墓石には辞世の句が刻まれている。
辞世 萩の根や寄るとちる身の置所

また、同氏が宇柏追悼句に次のようにある。

「松沢宇柏主人は若かりしより我としたしみ深く衆を一つにし、一飯を分け合いて賤びたり……」

今日は来て一葉の運を手向哉 凡勝庵 梅茂

(四) 蕉風時代の俳文学

兎も角もならでや雪の枯尾花 芭蕉翁

この句碑が田畑にあつて碑陰には次のようにある。

文化己卯月 発起 里朝・知度・花六・三崎社中

この四人と社中の人々はいずれも中村伯先門である。

伯先は伊那市山寺に僧侶を開業しており傍ら儒学や俳諧や詩、園藝等も教え、その塾を坎水園と称した。伯先は駒ヶ根市にも住したことがあり、そこを駒根と称していた。駒ヶ根から山寺に移る中間、三二歳から三六歳まで田畑に住んで、この地に多くの門人を育てた。尾



図3-66 尾花塚

花塚建碑社中はその門人達である。

伯先の俳諧は野口在色や三狂庵とは異なった蕉風を正統に継ぐものであった。したがってこの指導を受けた田畑の連中は伯先の導きによって蕉風を学んだのである。

伯先は芭蕉をしのんで門人等に芭蕉の句碑を建てることを勧め、その数一〇基に及んだといわれる。また、春夏秋冬に因んだ句碑を建てることを勧め、木曾敷原連には、雲雀塚、(春)木下連には蟹清水塚、(夏)地元山寺には秋風塚(秋)、田畑には尾花塚(冬)を建てることになったのである。この尾花塚建立のあと興行した俳諧を次に。

兎も角もならでや雪の枯尾花 はせを翁

廣起

頼めつらしきふるさとの冬 里朝
相親の軒端にうつる家か里て 菊叟
その日く酒つくりなり 三昧

(後略)

(香組草)

さて伯先の主張した蕉風(正風)とはいかなるものであったか。

貞門の古風を打破して、談林の新風は俳諧の世界に活を入れ、天下の眼目を驚ましたことは事実であるが、大局から見れば貞門も談林も俳諧を文学として正しく認識し得なかったことは同様である。しかも談林の末流に至つての放縦さは、世の嫌悪を招き、革新を望む機運がもたらされたのである。この機運に乗じて貞門・談林の系統の人々にも革新を目ざす人々が現れた。その中でも真の革新をなし遂げた人は松尾芭蕉(一六四四〜九四)である。芭蕉は俳諧を真の文学に高めるために幽玄閑寂をもつてその基調となし、いわゆる蕉風なる新俳風を打ち建てたのである。談林風に嫌悪を感じていた多数の俳人がその風を

暮ったのである。

芭蕉も始めは談林風の俳諧を作り西山宗因らとも同座したこともあったが、やがて貞享年間（一六八四—一六八八）新風への転換期作品を発表するようになった。談林風と一線を画する作品と見なされるのが「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」の一句といわれる。

連句を付けていく場合、貞門や談林風では前の句に、ことばのつけ、または意味の付けであったものを芭蕉は「ひびき」「にほひ」のつけでなくてはならぬとしたり、句全体の印象は「さび」や「しおり」「細み」「位」がなくてはならぬ等とし、さらには「不易流行」の論をもってして俳諧を純文芸の位置にまで高めた。しかも芭蕉は「高く悟って俗にかへる」と言い、通俗平凡な生活の中に風雅の世界を発見しようとした。卑俗な笑いを特質とした俳諧を、長い伝統によって鍛えあげられた和歌や連歌に劣らない美にまで高めたのである。

この高まいたな気概にあった蕉風も時代を経るにしたがってしだいに墮落していったが天明期（一七八一—一八〇七）には各地に革新運動が始まった。その中の一人に当地に影響を及ぼした加舎白雄（一七九一—一八〇七）がある。白雄は信州上田の人。少壮のころは鳥酔門の鳥明に学んだが後には鳥酔の直弟子となった。白雄の理想とする俳諧はすべて技巧を併して飾りなき自然を貴ぶということであった。彼は師鳥酔の平明な長所をとらえて、それをもとにして芭蕉の真髄を探ろうとした。彼は多くを蕉の間に日を送ったが安永九年（一七八〇）江戸馬喰町に春秋庵を開き、門人に多くの有材の士を得て、大島蓼太と並んで江戸における蕉風中興の大家と仰がれた。白雄の風調は、行脚の度に磨きがかけられ最後に江戸に春秋庵を開いたころは、平俗の調を全く離れて洗練された作品を示している。

中村伯先は始め美濃風の作をなしていたが白雄に導かれてその風に

入った。白雄が初めて伊那に來たのは天明四年（一七八四）のことで當時伯先は上臈（駒ヶ根市）の駒嶺樓にいてこれを迎えた。そのとき二人で巻いた歌仙（三六句）は次の二句で始まる。

夕立や櫻の空見野になやむ 伯先

大夢しげみ水つたふ音 白雄

翌々天明六年には上臈石川の地に「葛の葉の表見せけり今朝の霜」の句の翁坂を白雄の筆跡で建て、その記念に「葛の葉表」の一集が刊板された。この集には本村の知更・里朝・三曉・史琴等が参加している。

白雄が伊那に來、伯先がその導きを得るようになったことは当地の俳壇史上重要な事であった。

本村の蕉風は次の系譜と見られる。

芭蕉・白雄・伯先・鶴翁・布精

里朝
知更
花六
三曉

里朝 松沢紋藏（一七五八—一八〇七）

抱養舎と称し伯先門下の逸材である。

幻や真菰が中に人の骨

犬の子の声もしぐるる門の口

梅が香に顔そそき夜明哉

知更 松沢弥兵衛（一八一八—一八一九）

この人は玉椿堂と称して板木彫りを業とし、傍ら俳諧をたしなみ、俳書の刊行も多い。初め、知更後

知更・知更と称したこともある。

空安し昼と見る間に暮の月

片星や花を見よりのあみだ笠

片星や花を見よりのあみだ笠

梅園集 うめの花ひもとくけさハ葉もあみ声にこころはほとなくぬれ 伯先



図3-57 梅園集

花六 加藤伝左衛門（一八八一）

野の清水竹ひ草葉に包む哉
鶯の高音小聲にこぼれけり

あら塚や只秋の風松の音

三曉 松沢左忠治（一七九七） 初め巴雪と称した。

懶釣てこころちいさき願ひ故

身をかれし梅にわふる老女哉

蚊ひとつに男心のせぬ夜哉

寛政九年（一七九七）伯先の坎水園へ春秋庵三世の倉田葛三が来訪した。そのおりの俳諧集『ながめ草』の俳諧の一部に次の吟がある。

（前略）

いたづらに鞠の相手を小半時

今の人にはうき人もなく

神楽かく心や空をかけるらん

袖の華にかゝるみるぶき

（後略）

また、享和二年（一八〇二）、相模大磯の春鴻が伯先を訪れたとき俳友相集い歌仙一卷をまき、さらにそこに居合わせた人や木曾から遅れて来た人々の句を集めたものに『あられ柿』がある。そのときの俳諧に次の吟がある。

白雲に渡てもせず草枕

篇三

納豆たぐくあるじありけり 伯先

湧泉をまねくたより哉 里朝

竹四五本に風吹いてゐる 知聖

（後略）

このように、『尾花塚』発起の五人は伯先の指導を受けつつ、中央や地方の俳友とも交わり、俳諧を興行したり発句を作っていたが、『尾花塚』の碑陰に「社中」とあるところから察すると、この外幾人かの同好者があったことが知られる。

支琴（松沢勘太夫）田畑の人、松吟の子正期、後に勘太夫と改めた。天明五年（一七八五）駒ヶ根市上穂に芭蕉の句碑が建立されたときの建碑記念集『蕉の葉表』に次の句が載っている。

晴窓し露の葛葉に蛇の衣

これから察するに支琴もまた伯先門下であったであろう。父松吟は在色門であった。

里遊 殿村 この人の経歴はしかとわからないが上にあげた連中と同好者や俳諧を興行しているから同門と見てよいであろう。

葉の花の種となる日や閑古鳥

片楳は梅の花なり若葉哉

鶴翁 高木正照（一七七一—一八六二）通称佐太郎、別号を駒歌仙と称し神子柴の人。長じて伯先門に入り、またその女婿となり俳諧の宗匠として活躍した。弓道にも堪能であったといわれる。

著書に『ふん紀行』がある。文政五年（一八二二）七月

そのまゝに音をもて留まのきりぎりす

の一句を矢立のはじめとして友人二人と連れ立って金沢峠を越えて行き富士山頂をきわめるまでの紀行文である。

富士の山頂をきわめて帰宅した。そのとき同好者が集まって来て鶴

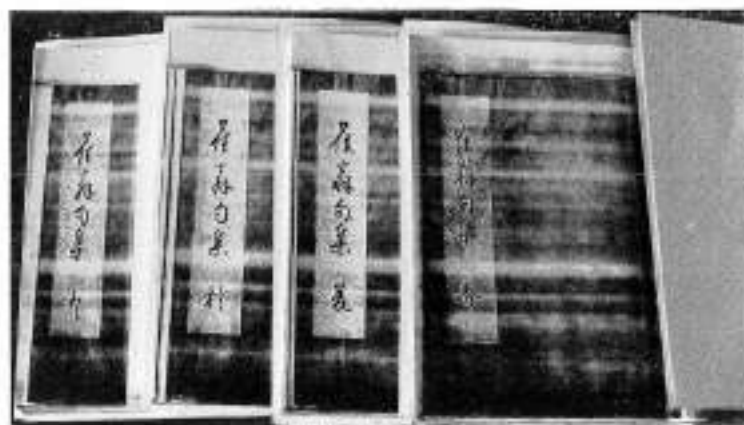


図3-65 鶴翁句集

状況をよく伝えている。

なお「春」「夏」「秋」「冬」と四季の句をそれぞれ四冊にまとめた自選句集がある。その数凡そ二一七〇句。

一 亀伯（一八六九）鶴翁の長子、通称正房、俳諧を伯先に学び東朝軒亀伯と号し、また数学に長じた。天保八年『駒ヶ嶺語』弘化二年『吾妻の紀行』の二著がある。

『駒ヶ嶺語』の序詞を中村仲恒（元恒）が書いている。これは天保

翁の旅中の作「めぐりめぐりて」の発句を枕に歌仙一巻をまき、さらにその席に出た者や友人の寄せた俳句を載せてある。この『ふ尽紀行』は小冊子ではあるが鶴翁とその周辺の俳友を知るうえで貴重なものである。

この『ふ尽紀行』は高遠の儒官中村元恒の序文をもって天保七年に刊行された。

文政三年に開板された『明月集』中にこの鶴翁の筆になる「伯先先生略伝」が載っている。伯先の略歴と臨終の

八年の早ばつに際し、隣村田畑村の人々が雨乞いに登るというのに友の鶯飛とともに同行したおりの記である。途中の吟のはか帰ったとき集まって来た同好者と興行した俳諧を載せてある。如電がまず発句している。

見ぬ秋のうらやましきや駒ヶ嶺
鹿鳴声（かめう）を遠近（とんじん）にきく
月夜から始まる屋根の葺簀（ふし）に
子供は知恵のつき安き也
酒飲は寒しと火鉢（かまど）かきならし
負けた将棋（しょうぎ）に時雨降る宵
明日は初午御参（はつごみ）の入代り

如電
亀伯
蘭堂
菊翠
雀翁
鶯飛
玉紅

（後略）

亀伯の『吾妻の紀行』は年長者の鶴翁と、叔父明長とともに江戸見物に行ったときの紀行文である。途中三保の松原、久能、江ノ島、鎌倉等を見て行くみちみちの三人の吟詠を記し、帰路にはさらに成田、日光を見物している。帰宅すると同好者が集まって来て俳諧を興行した。このときも如電がまず発句している。

待かねし耳に涼しきはなし哉
山時鳥（やまときどり）声よくもなく
苦船（くせん）を行の方に漕よせて
手繰（てぐり）に運ぶ新漬（あらた）けの梅
まだ春れぬうちから月のさし掛り
つら／＼上る草の葉のつゆ
きり／＼す音をいる露の（かた）へ
背中（せなか）なて／＼も止まぬ夜啼（よなご）
明日は酒の嫌（きら）ひが名にとをり

如電
蘭堂
蕉翠
東谷
鶴翁
静雨
応翁
亀伯
羽長

（後略）

鶴翁父子および蘭堂等を中心に神子柴、田畑には俳諧を嗜む者が多くなった。

はぐれなと呼ぶにぞあらん雁の声 如竜

蘭堂（丸山彦右衛門）東松軒蘭堂と称し宗匠としてこの地の指導者であったが伝未詳、寺子屋師匠として、東松近の子弟にも教えたといわれる。

秋立に書かずに出すや初かつを 蘭堂

紙の手や会釈して出す煙草盆 同人

朝かほにうれしき朝の舞り哉 蕉翠

かしわ手に鶴寄る春日哉 羽長

朝顔や道々に喰ふ朝の飯 東谷

文政年間はこの地方に俳諧の最も盛んに行なわれた時代である。文政二年（一八一九）刊行の『諸絶草』に奥兆神童を記する俳諧が興行されて神子柴連のものがある。奥兆（一八一四）は建部氏。江戸の人、寛政から文化年間にかけての俳人である。

帰るさに松風聞きぬ華の山 奥兆

暮れしくとばす鳴 鶴翁

蘭堂に紙の袂衣脱かへて 虎堂

澤布を固し儀もとむる 瑞士

稲人の為ひく来よ月の顔 花曉

つる手すさみの菊の百品 乙也

（後略）

さらに当時の神子柴連の句を次に記す。

老の身のもの思ひ也秋の風 虎堂

朝々は萩の花波む野川哉 瑞士

草刈や暴風の朝のみだれ髪 花曉

山路越す人の多さと梅の花 乙也

老の身のもの思ひ也秋の風 一風
葉の花に家とびとびの風哉 鶴翁
桐一葉落葉きならふ後の先 たつ女

次に当時の田畑連の句を記す。

水の音推葉に枯葉鳴て

ゆゆしくも城連初むる初霞

峰の雪高き恵を思ひけり

岸の梅人なき沖へ蕪りけり

あさ顔や種約東花のうち

秋風の吹立つ頃や猿の声

持そへてすへさせにけり雛の扇

寂心地のよき雨の夜や虫の声

短か夜や油残りしかけ行灯

秋風や仲とまつたる草の憂

桐おちる頃より寒し松の風

かれすき覚来なくも霞みけり

花の木をなでて戻るや残月

結とれば笑顔愛らしはだか顔

老の身も雛を見に行く雛の家

鳴鳩つひに定らずみそさざひ

朝風や軒のかけ葉の動く音

誰かざる昔語りを嫁姑

折かけの高き小枝や野路の舞

胸下駄の跡から消る春の雪

今朝降りし雪の中より残月

からからと風の動かずかけ葉哉

うれしさや今年は孫の雛祭

初嫁のもてなすけふや草の餅

一風 鶴翁 たつ女

琪輝（里朝男）

自松（三時男）

可候（三時男）

花米

玉喜

如雪

寿菜

玉泉

敷水

寿松

いち女

素寿

外人

里松

寿一

藤在

花菜

濱子

はま女

みの女

松州

南遊

松風

老菜

古くとも下には霞かぬ母の顔

名翁

草餅や名を聞いて行く旅の人

名人

武者腰やさしもゆゆしき身のかまへ 一笑

馬のはむ草より出でて虫の声

玉泉

菊にみみる大塚園や梅の花

金令

得る庭また新しき心ぞや

久彦

目ざましき花ばかりや梅の花

栄松

集りて片手あぶりの火鉢哉

莊電

風呂吹を初嫁迄も大わざり

南雄

以上は田畑の「鎌や」「もんや」「玉理軒」神子柴の「東松軒」等の

文書から拾いだしたもので、いずれも神子柴の鶴翁と蘭堂遊によるも

のから一句宛挙げたものである。作品のよしあしはともあれ風流に心

を寄せる人々の多かったことがうかがわれる。

それよりやや遅れたころの南殿、北殿、大泉等の作者を次にあげる。

其翁（二八〇〇一七四）通称有賀小文治、文通舎其翁と称した。南殿

の人寺子屋師匠として近隣子弟に教えた。そのころ越後生まれの漂泊

の俳人井上井月と興行した俳諧に次のものがある。

米食ふて登る湯道の暑さ哉

其翁

流にこころのゆるむ汗の香

井月

札つけし当才駒の居眠って

翁

（以下略）

（辞世の句）

一日の空うつりゆく落葉哉

其翁

其翁（一八八七）通称有賀左衛門、政六庵其翁と号す。其翁

の弟である。

映出る梅に気遣ふ夜の雨

其翁

幼子の指さす方に雁渡る

まつ詞

梅が香の二階に籠る月夜哉

素性

まつ詞も南殿の人

素性は箕輪町上古田の人であるが晩年は南殿に住んだ。

花にくれて月の世界を見にゆかん 雅康

これは大泉の清水重盛の四女の逝去を悼んだ句である。墓碑に刻ま

れている。

（以下略）

湖月は北殿の人、有賀嘉吉（二七七八一八六六）で、新四国霊場の

開創者である。

一一和歌

本村には古い時代の和歌は今のところ見当たらない。江戸時代も後

期になって漸く作者のわかる作品が見える。

堀ノ井に「堀ノ井八景」を詠んだ和歌がある。嘉永三年（一八五〇）

神無月とある。

長坂秋月 秋の夜の長坂に来て詠むればもなかの月のさへて光れる

大池水端 はじまりとたく水端の渾水や大鼓巴にさんば並べり

家原夕景 言の葉に尽ぬ眺めの面白さあの子の原の夕映

庚申塚一松 名にしおふ一木の松を木伝ふてましろ鳴くなり冬の月影

古城堂 古城に繁りし虫や化しつらん夜な夜な出づる螢合戦

駒原松 花見てていさむ心の駒原や手綱ゆるめて遊ぶ春の日

森郭公 曇き日もしげりし森の木下開原しげに鳴くほととぎす哉

葉餅清水 帯ほどの細き流れも常盤に葉餅の清水むすぶ涼しさ

みすゞかる信濃なまりを和らかにハツのけしきを大和言の葉

利支

利支

利支

利支

利支

これらは塩ノ井の幕末から明治にかけての和歌連である。このほかにも数名の和歌仲間がいた。その仲間が競詠し、先達から添削され、判定された歌集が残っている。「ふゆあそび」「松の下蔭」「梅のをり枝」「あゆめ草」「麗志三川」「春の名こり」「おきなあそび」「笑ひ草」「華の下影」「五色によせて」(以上、大東風亭量が判者になっている。このうち「ふゆあそび」以外は全部東風亭量が判者になっている。その評に「この歌俳諧なし」とか「俳諧うすし」としたものが目につく。ここにいう俳諧とは、「思ひもよらぬ風情をいひ出す」とか「軽妙酒脱」という俳諧的境趣を言ったものと思われる。この和歌連はおおむね古歌の心や歌枕、故事に題材をとったもの等の題詠が多く、自然を詠うにしても掛けことばやことばのしやれをもてあそんで知的遊戯に止まったり、軽妙酒脱な狂歌に類したものも多い。仲間が集まって知的興趣の世界に清遊したことがしのばれる。

東風亭量は備前岡山藩の人、通称は河原文蔵、雅号は精一、量は字である。塩ノ井連中はこの人を師として作歌している。この人の短冊が南殿などの数軒に一〇数枚残っているとところからみると村内に相当の影響を及ぼしたと思われる。

松沢ぬしの六十路の翼にと題して、

百とせに足らぬむそちぞをさなかる千とせをまつの友にしあれば

と詠んでいる。歌風推して知るべし。

東風亭量がこの土地にどうして住んでいたか詳かでない。その後は西風亭利支がついで指導者となっている。

西風亭利支(一七九三―一八七四)本名征矢古兵衛。塩ノ井。

古兵衛は資性穩健にして学を好み和歌を岡山藩士河原文蔵に学び、村内を中心に多くの門人を育成した。歌碑が三基ある。



図3-69 西風亭利支歌碑

碑文 松 すゞみして聞くひと曲のこの音は年ふる松の風やしらぶる
 碑陰 文政二戊 七十二 征矢古兵衛

松 すゞみして聞くひと曲のこの音は年ふる松の風やしらぶる

(塩ノ井神社西の庚申塚)

菊 世を隔つ塩にはなにか志ら菊の花を訪ひくる人をまたなん

(生家「したみせ」の庭)

志ら雪は消へてもあとに先の身の花咲く春にあふよしもかな

(貞所)

辞世 産湯あみせしむかしわすれずけふもまた浮世の恥を洗はれぬべし

(右の歌碑の碑陰)

利支の門弟らの作品を左に、

辞世 願風にさそはれ出る法の舟もと来し國へ真帆かけてゆく

亦兵衛(利支の父)

納涼 名にし負ふ朝水橋に来てみればくまねど涼し夏の川風

虎竹

月 秋の夜の草に宿かる月影のうつれば露も玉と光れる

遊保

春雨 春の夜の露豆腐のやはらかにまさりおとらで消えるあは雪



図3-70 幕末の歌人たち

雲村 朝霞 真白 盛成 利支

雄子 藪陰にかくるる知恵はある雄子の声立ててこそ人に知らるれ

梅花 夕されば曇旗雲の影さして軒端の梅の色ぞ増れる

沢青

卯の花 物も過ぎ候も散りて行く春のはなむけせむと咲ける卯の花

原仁

元旦 年の戸をあけて日出度き茶わん酒飲んで気ままに寝たり起きたり

家一

鳴く虫の家さへ今は寂しきに衣うつなりまとかよの風

真白

詠めあかと思はず小夜もふけ輝飾雲間をもれて通ふ月かも

真草

明ぬれば玉とあざむく梅の花愛められてこそなお匂ふらめ

中彦

足曳のその山からと我が恋は君のくるみを持つぞ楽しき

丸和

仰向きて月見るやふに蛙らは田毎にいつる春の夕暮

原盛

岩山に青つつつじの花盛りねはうすくとも色は紅め

伊波

谷風に結ぶ氷の堅ければ春の心は解けやらぬかも

杉平

長谷なる月日は回りきしきしと氷る寒さや車井の水

岩

鶴亀の歳久しき目出たさをすえ萬砂にうたふ御祝儀

花慶

ほそほそと妹が門辺のいと物出入る人をなふるやふなり

中仁

みたらしの池の水もはりとちて心のうちぞちりひねれる

大東

以上、あげた作歌者はおおむね塩ノ井の幕末から明治初年にかけての人たちである。大部分が本名と家がわからない。わかっている人についてみる。赤兵衛は利支の父である。

遊保は穂高孫三郎の父で千首に余る作品を清書して残している。

初春

花鳥のいろ音もけふは賑はしく
おもしろさうに笑ふ春やま 遊保



図3-71 源保康碑

真白（一七九九—一八七七）は本名征矢虎教、赤右衛門と称し真白はその号である。父の彦右衛門を襲名。書に秀で村人の信望厚く数十年に亘って近隣の子弟に書道を教え、また和歌を好んだ。温順純朴な人柄を慕われ明治四年中村元起の碑文をもって子弟等によって筆塚が建立された。伊那街道沿いにあったが道路改修に当たり塩ノ井神社の南園邊の高地に移された。前記の和歌はその碑文中にある。

家一は利支の息、本名邪一。

三 近世の教育

（一）寺子屋・私塾教育

古代から中世まで教育は特権階級に行なわれていたに過ぎなかった。庶民の教育といえば、世襲の職業について父祖のなしているところを見よう見まねで覚えさせたり、徒弟に日常生活の中で自然に覚えさせる技術の職能教育があったに過ぎない。

近世になって兵乱がおさまると、幕府は文治政策をとり、昌平坂学問所をおこなすなどして学問を奨励した。諸藩はそれぞれ藩校を作って家臣の教育に意を注ぐようになった。

信濃国一一藩もそれぞれ藩校を開いて藩士やその子弟の人材育成や教化、さらには武芸や諸技能を教育した。後になると庶民の子弟も希望者はこれにはいることができるようになったが、庶民の大部分は寺子屋か家塾で限られた内容の教えるを受けるに過ぎなかった。

寺子屋の起源と発達 寺子屋はその名の示すとおり、寺院に子弟を

集めて教育をする所であった。室町時代に始まったという説もあるが盛んになったのは江戸時代の中期以後といわれる。

享保年代（一七一六—一七三六）になると庶民の間に好学力・求知心が高まり、文化・文政（一八〇四—一八三〇）時代からより盛んになり、天保年間（一八三〇—一八四四）になると寺子屋教育は大いに普及した。最初寺院で僧侶が子弟に世俗的な教育を施していたが後には武士や、神官・医者その他富裕な農民で当時の文化人が自宅を開放して子弟を教育することが行なわれた。寺以外は家塾というべきものが昔からの慣例で民間では寺でも私塾でも子弟の教育にたずさわる所を寺子屋と呼び生徒を寺子、先生をお師匠様と呼んだ。

寺子屋・家塾の特色 寺子屋はその地方の教育の中心であったから、父兄生徒の尊信あつく、師弟の情誼もまたこまやかなるものがあった。年長優秀な生徒は師に代わって教授管理を助けることもあったから長幼互助の風おこり、あたかも一家のごとき親しみがあつた。時として怠惰の生徒には罰を加えることもあったが、厳格な師ほど父母の信頼が厚く、生徒もこれをうらむことなく、むしろ親愛の度を加えるむきもあつた。寺子屋を退いた後もよくその師を慕うことが多かった。今日筆塚・源保康など諸所に建っているがそれらの大半は寺子屋時代から明治初年にかけて師恩に感じた弟子等の謝恩の表われである。

就学状況 入学することを寺入りといって親が机や文庫をたずさえて師匠の家に赴いて頼むのであるが、その際、菓子・菓子折・経節・赤飯などを束修としておさめ、菓子や餅などを同輩に披露として持参した。

就学は七、八歳から一三、四歳ぐらいまでで、男女共学であったが、厳にその席は分けていた。在学年数は最も多いのは三、四年であ

った。もともとも一年といっても年間を通じて通学する者と農閑期だけのものもあった。入学も退学も本人や家庭の都合で自由であった。

教材と教科 教科の主なものには庶民の日常生活に必要な、読み書きそろばんと言われ、読み方、習字、算術が主であった。

私塾であるから定まった教科書があるわけではなく、師匠の能力や好み、また生徒の要望も入れてさまざまなであった。

読み方では実語教・童子教・庭訓往来・百姓往来等で、進むと、四書・五経の素読が行なわれた。

習字は、いろは歌・片仮名・国忌し・商売往来・消息往来などが用いられた。

算術は主としてそろばんであった。

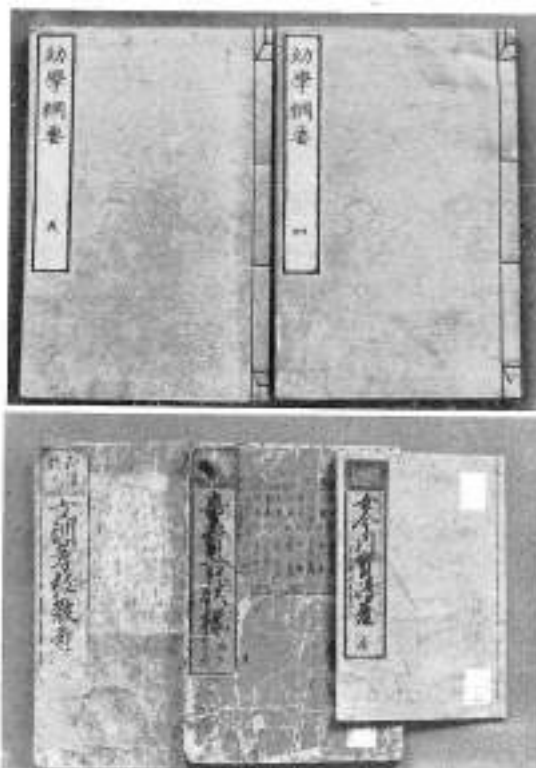


図3-84 寺子屋教育の教科書類

教授法 師匠の自宅の一室を教場とし、弟子はすずり、双紙、手本などを家から持参した。

師匠は上座に座してその前に児童を呼びよせ、僅かの教材を反復練習させる全くの個別式であった。読み方では、初め前日の分を読ませ、ついで五字から一〇字ぐらいを教え練習させた。ときには兄弟弟子が代わって弟弟子を教える場合もあった。習字は初め、五字から二四字ぐらいの手本を書いてあてて習わせた。師匠は児童の手をとって書き方を教え、声を立てて読ませながら書かせたのである。手本を数日練習した後には手本を見ないで清書させ、よいものには新しい手本を与え、進歩のないものにはもう一度その手本を習わせた。

授業時間は毎日午前七時から午後三時四時ころまでであった。その間数回の休み時間があった。

休業日 正月二〇日間ぐらい、盆四日、鎮守の例祭、五節句等。

束修および謝礼 入学に際して師匠に納めるものを束修といった。

謝礼は年始・盆・五節句に多少の金品を送り、その他月並銭（これもまた束修といった）として若干とたたみ代、炭代などであったが、菅原道真をまつる天神講銭もあった。

江戸末期には寺子屋数は日本全国に一万五五六〇あったがそのうち長野県下には一三五〇あって全国第一であった。またそのうち上伊那には四三三あって全県の約三分の一であった。『大日本教育史資料八』然しこれらの数字は必ずしも正確のものでなく調査浅れがあつて実数はこれを上回るものと思われる。事実『上伊那誌人物篇』によると、幕末から明治初年にかけての寺子屋師匠は五一〇とあり南箕輪村には一名の名が掲げられている。ところが、このたびの調査によると別表のとおり三〇名の師匠があったことがわかった。以上の外にも手習いを教えた人があったと思われる。維新以後長野県や本村が教育に力を注

いまだ地盤は既に江戸時代に培われていた。

本村の寺子屋師匠は浪人・修験者・農民の中の知識人で、他村から招いた者もあり、他村へ出稼古に出かける者もあった。

他村より招いた師匠で記録の著しい者が四名ある。

宇沼与五右衛門と、両角平学と小沢龜春、矢部鑑堂である。

宇沼与五右衛門は高道の浪人で、田畑村と南殿村の人々が元禄二年（一六八九）に招請して田畑村で寺子屋を開いた。

両角平学は諏訪の浪人で田畑村の人々が元文四年に招請して子弟に教えた。

小沢龜春は小野村の名主役をつとめ、退役後文化一四年（一八一七）南殿村の招きに応じて参り、南殿村で子弟に教えた。

寺子屋の内容 明治一六年の寺子屋調査報告のうち矢部鑑堂に関するものを左に掲げる。

長野県上伊那郡田松本藩領内寺子屋取調表

- 一 名 称 コレ無シ
- 二 所在地 南殿村ノ内北殿
- 三 塾主氏名 矢部鑑堂
- 四 兼テ教ヘシ学科 習字及ヒ讀書
- 五 教頭ノ数 一人
- 六 生徒概数 男六拾人 女拾五人
- 七 授業ノ順序 最初はラ習讀セシメ 次イデ算学 手習短歌ホ子式目 近道子宝 名頭 村名及ヒ諸往來書類ヨリ四書五経ヲ授ケ 且ツ女子ニハ女令川 女大学等ヲ教フ
- 八 習字本及読書用書 習字ノ部 名頭 村名 国尽シ諸往來類 御成敗式目 千字文

讀書ノ部 古状^{（古）} 實訓教 庭訓往來 四書五経 古文典

九 學習年限 室 唐詩選等 女令川 女大学 大約六、七年

十 束修謝儀 束修金壹朱ヨリ金貳朱 年末謝儀金壹分ヨリ金貳分

十一 塾主ノ行事 著名ナル事蹟ナシ

十二 塾主ノ身分 田島邊澤浪人ニシテ当地ニ寓シ習字師ヲ專業トシ傍ラ讀書ヲ授ケ

十三 沿革略及ビ 文久元年開業明治五年學制頒布ニ至リ廃止 更ニ公立學

肄事 校ヲ設ケ矢部氏教頭ニ任用セラル

十四 調査セシ事實計數ニ關スル年代 明治三年

明治十六年六月三十日調 調査者氏名 有賀逸平

〔長野県教育史〕第八卷

鑑堂の塾に学んだ者で明治初年村の中堅人材として活躍した者が多い。子弟らがその徳をしのんで筆塚を建立した。



図3-72 矢部鑑堂筆塚



図3-74 寺子屋跡匠柳亭良亮(木下岡策)
筆塚(八保公民館入口)



図3-73 寺子屋跡匠伊東太次兵衛利國筆塚
(北殿庚申塚)

寺子屋跡匠一覽表(空欄は調査時未詳)

師匠名	地区	年代	弟子数	備考
宇治与五右衛門	田畑	元禄	高遠笠原の浪人	
西角平学	田畑	元文	諏訪の浪人	
小沢龜春	南殿	文化・文政	四〇人位	辰野町小野村の人
矢部雄登	北殿	文久・明治	男一六〇 女一五〇	手習の外縁由・詩歌・俳諧 高遠の浪人、北殿の筆塚
山崎清兵衛	北殿	寛保・延享		手良沢岡へ出稼古に赴く
伊東太次兵衛	北殿	享保・安政		箕輪町木下の人。筆塚あり
穂高尚啓	北殿	享保・安政		読書の外和歌も教える。
加藤幸右衛門	北殿	享保・安政	男二八 女一八	高遠に経歴あり
高木紋三	神子柴	弘化		相亭良亮と号す。筆塚あり
木下周策	久保	嘉永	七	墓あり
赤羽誠作	久保	安永・明治		
松沢勘太夫	田畑			
松沢甚助	田畑			
加藤岩太郎	田畑			
清水三治	南殿	明治	一七 二二	遺書と号す。筆塚あり
有賀光敏	南殿	明治		
高木作太郎	神子柴	明治		習字・謡曲、頌徳碑あり
清水重堅	大泉	文化・明治		真白と号す。習字・和歌頌 徳碑あり
征矢虎敏	大泉	享和・明治		
耳塚新左衛門	田畑	寛政・明治		
日戸伝四郎	田畑	明治		
高木秀範	神子柴	明治		金剛院主・修験者
征矢或十郎	神子柴	文政・明治		頌徳碑あり。甚
征矢彦右衛門	神子柴	安政・明治		筆塚あり。書・和歌
小島蘭堂	神子柴	明治		俳諧宗匠。東春近へ出稼古
高木平造	神子柴	明治		読書・和歌。歌碑あり
征矢古兵衛	神子柴	明治		金剛院主。西筑輪へ出稼古
高木秀軒	神子柴	明治		萬壽銘あり。習字・和歌。
有賀小文治	南殿	明治		

安積重藏	大泉	享保一八一	習曲
清水甲太郎	南殿	文政三	習字
高木作太郎		明治	習字・俳句
穂高菊啓		明治	
数十人			
「伊那名家系譜」に事蹟あり			



図3-75 征矢真白碑

以上あげた人々は『長野県教育史』第一巻、『上伊那誌人物篇』、筆塚、頌徳碑、墓碑銘および聞き伝え等によった。生家、生没月日や教授内容詳かでないものが多い。後日の調査に期待したい。

二 奉公人の教育

一〇歳前後になると、庶民の子弟は「奉公」に出ることもあった。跡取りは家のため、次男以下は身のため、貧家の子弟は親のため他家へ奉公に出てそこで若干の職能教育や礼儀作法を教えられた。

商家への丁稚奉公、職人の家への弟子奉公、女子の女中奉公等で、多くは年季を切ったから年季奉公といわれた。そこでは職業上、あるいは社会生活上の知識・技能・作法等における「一人前」への教育的

配慮があったから寺子屋につく教育が行なわれたといえる。

それは使用人制度であると同時に各職業仲間の成員養成の手立てとして成立してきたものであり、したがって身のために志願する次男以下が中心となった。

丁稚奉公の主たる職務は、店頭の雑務、近所への使い走り、奥向きの雑用等であったが、夜間など業務の余暇には、読み書きそろばん学習の機会が与えられた。商人としての能力が身につくと、手代となり、さらに番頭（支配人）等に昇進し、永年奉公を勤めあげ能力次第によっては親戚を分与されて、別家として一人前の商人の地位を獲得することもある。

元禄一五年の「田畑村宗門帳」によると田畑村総人数三五二人の中他所へ出ている者三八人、そのうち江戸と高遠へ奉公に出た者九人である。（田畑もんや文書）

享保一〇年の北殿村総人口三二五人中、他所へ出ている者三〇人のうち江戸奉公人九人、他村奉公及び村内奉公人五人、その他奥州越後へ稼ぎに出た者八人である。（千利屋文書）

弟子奉公は大工・石工・左官等で、親方や棟梁のもとへ弟子入りするのでこれらも丁稚奉公に準じたものである。

弟子入りすると、日常的な家事労働に従いつつ親方の技術指導や一般教養を受け、所定の年季（だいたい一〇年）を勤めあげて一人前の職人となる。親方から営業の鑑札をもらい、仲間の承認を受けて独立するわけである。なおいっそうの技術的、人間的修養のために旅に出ることも行なわれた。しかし、親方株には定数があり、親方になる門は狭く、多くの職人は「手間取り」として親方と弟子の中間層としての職人層を形成した。

女中奉公の場合は、立居振舞、諸礼法など家庭生活の万般、時に裁

縫から読書、手習い、和歌その他高い教養までも学び得る恵まれた教育を受ける例もあったが、農村における女中は大部分貧困のための年季奉公で、家庭の雑事を手伝うことが主で教養はほとんど顧みられなかった。

また、女子は農閑期になると村内の和裁のできる師匠の家に通って着物の裁ち方、縫い方を習った。ときには泊り込みで他村の師匠のところへ習いに出かける者もあった。

以上の丁稚奉公、徒弟奉公、女中奉公や和裁の家塾による教育は学制後も続き昭和初年まで行なわれた。

(四) 若者制度

寺子屋へはいらない者も寺子屋を退いた者も一人前の村人になるための教育機関としてはたらくをもった者に若者制度があった。これは江戸時代に大いに普及発達し、ほぼ全国的にわたって存在したといわれる。

本村における状況については上巻民俗編第四節年齢集団二若者、三娘組の項参照。

若者男子の集団は、若者組、若衆組、若者連中、若連（殿村八幡宮の石の幟^{のぼり}には「殿若連」とある。若者女子の集団は娘組、女組、娘仲間などの名称をもっていた。

若者集団はいわば労働集団として村自治の一翼を担うものであった。この集団への加入は「一人前」になったこと、村の祭事への参加権、結婚権の承認^{しんにん}等を意味し、村の若者にとっての成人式と考えられる一方で、この組織を通じてそれらの権利執行のための教育訓練を受けたのである。

第四章 水と村の生活

第一節 水を求めて

一 水と村

水は生命の源泉である。水がなければ人は住めない、人の住めない所にムラは成り立たない。水の湧きでるところ、水を近くに求められるところにムラはおこり、そして水をより多く求められれば、村はひろがり発展していく。

南箕輪のムラムラが遠い昔から営々と続いてきて、今日があるということは、そこに水が湧きでており、水をひいてくることができたというのである。南箕輪は水に關して二つに分けられる。その一つは、天竜川の段丘ぞいの久保・塩ノ井・北殿・南殿・田畑・神子集である。ここは天然の湧水に恵まれていた地域である。この村々でさえ、ときにひでりにかわき、天竜川の洪水に悩まされ、飲用水や田用水を求めるため、村をあげて努力してきた。しかし、何といっても、この地域は扇状地の突端に位置していたので用水は豊かであった。

ところが、もう一つの西部地帯は、扇状地の中間に位置するため、広大な地域ではあったが、水に恵まれずムラになることができなかった。大泉・沢尻がかりうじてムラとなってきた。今でこそ南原区・大芝区・北原区・中込区など立派なムラができていくが、戦前まで長い長い間、人の住める所ではなかった。北原、大芝原、中野原と称して原っぱであったのである。

こんな西部地帯に古くからあった大泉や沢尻では、田用水どころか

飲用水に事かき、その水を求める苦心惨状のあとは、今から想像することもできないほどのものであった。大泉の古文書には用水と記さず「養水」と記しているものが多いのも生命を養う水の実感からであろう。

遠く古く人が住みついたムラから江戸時代の村へと時がたつに従って、より多くの水が求められた。大泉川をはじめ村々のどの沢からも水をひいて、利用しうる水は利用してきた。中でも五か井堰と天竜井、さらに昭和になってからの西天竜井は、この地域の人々の水を求める念願のこもったものであった。

ここではそれぞれの時代に、きびしい自然と社会の条件の中にあつて、それら難事業ととつくだ汗の歩みの跡を次の順序でたどってみる。

第一に西部地帯（台地）の水

第二に段丘ぞいの村々の水

第三に遠くから求めた水（西天竜・奈良井川ほか）

第四に水道の水

二 西部地帯（台地）の水

（一）大泉村の湧水状況

1 井戸

西部地帯の大泉は水の乏しい所であった。「大泉村湧水二付キ御代々差シ上ゲ候願イ書目録」（宝永七年申宿文書）によると、江戸時代初

期からの様子をかなり詳細に知ることができる。

島根後援守備御代用水不足ニ付テ願イ奉リ候得バ当村ニ三カ所井戸仰せ付ケ
ラレ深サ十三、四尋モ掘リ申シ候得共水出デ申サズ候

飯田城主藤坂氏がこの地を治めたのは、今から約四〇〇年も前の元和三年（一六一七）から寛文十一年（一六七二）の江戸初期約五〇年間である。このころ用水が不足したので、お願いして三カ所の井戸を掘った。十三四尋（二二四）も深くはったが、水は出てこなかった。

2 井 堀

同中務少輔藤坂代六拾年余以前当村北ノハズレ筋ニ新堀御普請遊バサレ下サ
レ候共水届キ申サズ候

井戸を掘っても出ないまま、湯水にいいよ上苦しんでいた。当時大泉新田が分村し（慶安元年）、大泉宿が北殿へ下った（慶安二年）直後の、承応三年（一六五四）から飯田城主はこの中務少輔になり、新しく村の北のはずれに井堀をつくってくれたが、やはり水は届かなかった。

藤坂氏は兵庫県の竜野へ移って、大泉は幕府領となった。代官の設楽源右衛門も、井堀ばたの立木が水を吸ってしまふからと、井の近辺の立木を伐り除いたが、やはり水は届かなかった。大泉新田が井堀に新田を造ったので、それは取り潰されたのもこの時であった。

再び私領の板倉領となり、元禄七年（一六九四）に新しい井堀を造ることを考えたが、御見分の結果場所がないので、やむなく今までの井堀を掘り替えてくださったが、どうしても水は届かなかった。

板倉頼母様ノ代十七年以前戊ノ年溝筋掘リ替ニ御普請遊バサレ下サレ候共
本屆キ申サズ候

このようにして世は江戸時代初期から中期となり、私領のときも幕府領のときも、領主も村人も一体となって、求めに求めた水だったが、湯水は依然として続いた。

元禄一二年（一六九四）大泉村からだされた次ぎの文書、「恐レナガラ書キ付ケテ以テ御訴訟申シ上ゲ候事」（中宿文書）によって、当時の大泉の湯水状態を記すところから見て、

大泉は先年より湯水で、五月中ごろから八月まで飲み水がほとんどない。農作物の作付けをするにも、二畝も隔てた南殿や北殿へいって、人馬で汲み上げ、飲み水にし、またこやしごしらえをしている。それで他村で一人作の場所が、大泉では二人でなければ作れない。一月中ごろから二月中ごろまでの冬期間は、四畝もある井堀が凍上って、水は一切なくなってしまう。そこでまた北殿や南殿までいって汲み上げてきて人馬に給するので、冬かせぎをしたくてもできない。このようにして夏も冬もかせぎができないので、百姓は別して養えていく。

また、大泉には田が一枚もない畑ばかりの村である。もともと水候には「下田二反五畝拾六歩」あるようになっていたが、作付け時から水がないので、植付けができず畑にしてある。しかし、年貢は田年貢を納めてきている。いつの日か田にもどしたいが、湯水の村にその見込みはない。水気がないという土地では、田を田にできないばかりでなく、畑作にも差し支えがある。大泉の畑作は他村よりも、風の害やひでりの害をうけやすい。とくに近年は猪鹿がでて来て大分作物を荒し回り迷惑している。

その上、一度火災が起ると、消火が不充分のため、つい大火になってしまう。七年前の酉年（元禄六年）の六月と翌戌年の七月、二度も大火があつて村の大方が焼けてしまった。しかしその年の年貢や諸役は、火災にあわないうで負担したので、村中火災にあつたものも幸いに免がれた者も、ともに弱りきっている。

右のとおりで、百姓は困窮してしまつたので、少々よい耕地は他村

へ売り渡したので、残った耕地は収穫の少ないやせ地ばかりになってしまった。ただ今までに九軒の百姓が成りたなくなき、江戸等へ奉公にでた者が男女で六一人もある。村に残った者ばかりで諸役を勤めている。今度お国替えて年々のお米を残らず取り立てられたので、今たべるものもない困窮状態である。

これが元禄一二年（一六九六）江戸中期の大泉の状態であった。

……其ノ上此ノ度御国替ニ付キ年々ノ御米ヲ残ラズ御取立テ遊バサレ候故別シテ困窮仕リ当件食御難無ク何共迷惑仕リ候恐レナガラ此ノ旨聞コシ召シ上ケサセテ御教イ遊バサレ候様ニ願イ奉リ候以上

元禄十二年卯五月

信州伊奈郡大泉村

名主 惣四郎

間屋 古兵衛

組頭 忠三郎

惣百姓

（中宿文書）

御代官様

板倉私領から幕府領になった当時、大泉はよくよく水に苦しんだのか、翌年元禄一三年（一七〇〇）にも、替わった代官辻六郎左衛門に、同一趣旨の願いをしている。この年は北殿や南殿から人馬で汲み上げていた水が、水量不足のためことわられてしまったので、四回も遠い所にある井口（大泉川上流）から汲み運ばなければならなくなっている。

ここで名主以下の村役人の訴えている、大泉村の困窮の原因は、やはり渇水で、夏も冬も飲み水ばかりにかまけていて、承知しながら耕作は粗末になるので不作が続き、冬稼ぎもできないからだとしている。

……大泉村之儀余村に属し困窮仕り候子細は第一畑方斗りの悪地殊に渇水故

にて御座候六七月そうやく最中の^{（中宿文書）}雨と冬稼ぎをも仕り候節は村中のもの香水斗りに仕り存じながら耕作も^{（中宿文書）}他末に極きも罷らず成り候故年々不作仕り百姓衰え申し候

（中宿文書）

井戸を掘ったが水は出ない。新堀を掘ろうとしたが場所がない。やむなく既製の井戸の大修理を領内の人足で井口から「四拾町三拾間余」も行なったが、夏冬は水が届かない。万やむを得ないので井口から埋土堀にしてくださいと願ひでた。あまりにも長い井筋であり途中には山腹を横切る難所もあるので、掘水がことのほか多く、効果があがらなかった。

3 大泉川の締め切り

そのころ飯島の旅宿に幕府の御巡見様（民情表察のお使い）がみえた。そこへさしあげた願ひ書によると、当時の代官が大泉川を締め切るという試みをしたことが記されている。窮余の一策ではあったろうが、ちょっと考えられないような方策である。それによるとまず大泉村の窮状をのべ、代々のお役人様にお願ひしてきた経過を記し、ついで去年辻六郎左衛門様に訴えた。何としても水が届くようにと、手代の飯山平の指図で、大泉川三か所を掘り切ってみたら、地底「九尺一七尺」の所を水が通っていた。そこで幅「五十間」も横に掘り割って締め切ったら水が上がってくるだろうと見分された。

恐れながら書付けを以て願ひ奉り候御事

……去年辻六郎左衛門様に右の訳御訴申し上げ候処に何とも水相届き候様に仰せ立てられ下さるべき旨御意遣はされ候。則ち御手代飯山平左衛門御意にて大泉川三か所掘り切り見申し候えは地底九尺或いは七尺虎を水通り申し候。水漏り候に紛れ之無く候間、川筋にて幅五十間余横に掘り割り、切り候

わば水より申すべくと見分たされ候。此の段描者共も能く御座候らわんと存じ奉り候えども、因縁仕り候村に御座候えは、自力に叶い難く迷惑仕り候。何とぞ御慈悲を以て仰せさせられ下し置かれ候わば有難く存じ奉るべく候。以上

信州伊那郡大泉村惣代

元禄十四年巳

四月廿二日

御遠見 御奉行衆中様

名主 小 兵衛

間屋 吉右衛門

与頭 平右衛門

(中略文書)

このお願いの結果は、正徳六年（一七一六）に御遠見様に出した願い書によると、江戸表からきて委細を見分して、勘定所から金を下さることになり聞き届けられた。

元禄一四年（一七〇二）にいよいよ大泉川原を締め切った。ところが、大泉川は平常水のない静かな川原であるが、一度大雨が降ればごうごうと音をたてて石砂の流れる荒れ川である。この締め切った掘割りもたちまち押し埋まって、念願の水は少しも上がって来なかった。こうした結果は大泉村の住人の誰しも予想のできることであったが、万に一つの期待をこめたこの試みも大失敗に終わってしまった。

恐れながら書付けを以て願ひ上げ奉り候御事

一池田新兵衛様御支配の節念比に御見分遊ばされ願ひ書御取り遊ばされ御公儀様へ仰せ上げられ下され候御事

一辻六郎左衛門様御支配に右新兵衛様より御願ひ次ぎに遊ばされ下され又々願ひ書差し上げ候所に十五年以前巳年御遠見の節井堰の儀御江戸表より御聞き及び遊ばされ候由にて前の者共召し出され御案内申し上げ委細御見分に入れ奉り候所如何様に見え候哉書請の趣意に書き上げ候様に仰せ付けさ

せられ候故大泉川を一切に遊ばされ下され候様に書き付け差し上げ申し候え共御奉行以後勘定所より見[]御入用御井領仕り則ち辻六郎左衛門様御平代衆御奉行にて切りに仕り候え共、川筋さかし山沢にて御座候間、早速押し埋め水より申さず候御事……

正徳六年申三月

(中略文書)

この新しい試み、それも江戸表からの御入用と御奉行の指図での大事業も、空しく終わってしまった。

4 漏 水

大泉が南北に長い春日街道沿いの村であったことは、水不足を一層助長した。いつごろから大泉がこの自然の地形に反した横長になったか、はっきりした記録はない。しかし少なくとも、江戸のごく初期に春日街道が通るようになり、大泉宿の町割がなされたときは、確かに街道沿いの南北の村とならざるを得なかった。自然に流下する水を、南北に軒をつらねた家々に公平に流すには、多くの分流を要する。するとそれだけどんどん漏水も多くなり、ただでさえ水不足の村が、一層水不足に悩まされるのである。

大泉の水不足はこの漏水にある。途中で漏水する大泉川と同じく、どんなに力を入れても、大泉の井堰は漏水してしまう。扇状地の中腹にあるこの宿命ともいべき漏水の現象に、古くから悩まされてきた大泉の人々は、それを神様にまで結びつけている。大和泉神社の神様が、殿村の八幡様の呼びかけにもかかわらず、水掛けにいかなかったのである。（民話集）

途中の漏水はひどいもので苦勞のたねではあるが、大泉の人々はこの井筋、「四拾町参拾間」の上井に水を求め、ひたすらにこの井筋に頼って来なければならなかった。

(二) 大泉の井堰

1 下井

(1) 下井の成立

大泉に、草分け時代から水がなかったわけではない。水のない所にムラができるはずがない。古伝によると大泉もその昔は、大泉川ぞいの東西の村であったという。当時はその大泉川ぞいに湧水もあり大泉川の水もその辺(尾根という名)までは流れて来ていたものと思われる。これらの水が不足してきて、もっと上流の大泉川から引水したのが、この下井であった。

下井は、大泉の古い井堰で、現在の吹上地籍で取水し、大泉新田の下段を流れて、大泉に通水している井堰である。江戸時代初期以前のムラが、多くそうであったように、鋤一本で開き耕す程度の生活を、この下井によって、ずっと長く続けてきた。

江戸幕府が成立して平和が訪れた後に、多くの村々で井堰が設けられたが、この下井はそれより以前からひかれていた。まだ大泉新田も吹上新田も村づくりがなされていなかった。上流に村がなかったのも、特別の紛争もなかったのか、古い記録にも下井の成立にふれているものはない。

大泉村歴史書

……南宮輪村第五番地園ノ土地ハ慶長年中大泉村ヲ以テ宿願ニ仰セ付ケラレ候先ヨリ大泉川ヲ引キ来リ用水トシ村落ヲナセシモ其ノ際ニ修繕ヲ加ヘ用水路保護ノタメ其ノ井筋ニ添テ開拓仰セ付ケラレタル土地ナルガ故ニ用水地ダロヨリ本村地ニ至ルマデ別紙図面ノ如ク方今ニ至ルモ変更ナサズ用水路ヘ添ウモノニ有リ候御事……

明治二十二年二月

(大泉井大東文書)

これが下井の成立を記した唯一の記録である。ここに慶長年中(一五九六—一六一五)大泉宿ができた以前から下井があり、それにそって村が発展したことが記されている。なお、「下井」と呼ばれるようになったのは、元禄初年(一六八八ごろ)に新しく上流から取水する井堰ができて「上井」と呼ばれるようになってからであることも記されている。

このように下井は大泉の往古からの大切な井堰であり水田も少しあり「古田」と称されていた。しかし、取水にも不足する状態では、やむなく畑にせざるをえない。最も古い承応二年(一六五三)の検地の時は、すでに畑になっていた。

承応二巳年 脇坂中務少輔頼朝後地

一、下田畑成 武反五畝拾歩 畝石三斗代

分米三石三斗一升九合

(中宮文書)

古地図によるとその古田は、現在白木屋東南の大わかされの下で、古い字で飛石あたりの地である。

この後上井ができて、ようやくこの畑になっていた古田が、本来の田に復したのか、元禄二年(一六九〇)の「大泉村分米帳」には「下田武反五畝一六歩」が記されている。

大泉村分米帳

恒州伊奈郡氣輪領大泉村

一高五百九拾九石貳斗九升六合 此反別五十五町壹反拾壹歩

内高三石三斗壹升九合 田方

高五百九拾五石九斗七升七合 畑方

此畝 一、下田 武反五畝拾六歩 分米三石三斗壹升九合 十三畧

(中宮文書)

その後大泉では総高はふえてきているが、田はこれよりも増えな



図4-1 下井と上井の合流左側から下井が上井に落ちる

かった。元禄から一〇〇余年の後天保五年（一八三四）の「大泉村明細帳」では「二反志敷九歩」とむしろ減少し、収量も「八斗代」となっているかに低く見積もられている。

天保五年 松平丹波守様御檢

地

一、下田式反志敷九歩

八斗代 分米石七斗四合

（中宿文書）

大泉村は「菅畑」の村で、畑作として稗・粟・大豆を主作とする村であった。

(2) 下井の水論

この下井は上流に村がなかったため、江戸時代初期は平穏であった。ところが寛延四年（一七五二）になって吹上村と争論が起った。

恐れながら書き付けを以て願ひ上げ候御事

一、此の度拙者共呑水用水下井管請致し候趣吹上村六つか敷、申し掛け内書仕らず候御事

（中宿文書）

このむずかしいことというのは、その年の八月大洪水で日ごろ水のない大泉川が満水になり、下井の揚げ口が大破した。そこで杵をたてて修繕し、平常も折々井口が切り崩されて水が漏れないことがあるので、毎日水番人をだして守っていた。その井の揚げ口を誰かが外して

しまう。番人をおくとその時は外さないが、番人がいないと外してしまう。井口まで大泉から半里余も遠いので人足も続かない。吹上村へ人を遣して談判してみるが、犯人は吹上村とは限らないなどと申しもちがいがあかない。

井口へ杵を入れてむやみに外されないようにしたいのだが、井口付近に御田地のある吹上村は、いっこうに立ち会わない。いくども人を遣わしても、吹上村境より杵はもろろん杭一本も入れさせない、などわがままをいう。大泉村始まって以来のこの古い井筋を、吹上村が支配がましいことをいうのは何か下心があつてのことのようである。

そもそもこの下井は飲用水路であつて、吹上村地内に少々かかつて、管請をするときは前々から大泉村が存分に扱ってきたもので、いまだかつて吹上村が差し障りなど申したことはなかった。今度のこととは井桁が大破したので杵を入れ、井口に水門を造るだけのことである。ここで大泉村の水不足の災情を、水を遠くから汲み運ぶことや雪をとかしまで水を給していることをつぶさにのべ、他のこととちがつて飲用水のことなので片時もすてておけない。人馬が飢えるばかりでなく火の用心もごく悪くなる。

右の段々聞し召させられ御懇意に吹上村召出ださせられ故陳申さざる様に仰せ付けさせられ下し置かれ候様に幾重にも願ひ上げ奉り候以上

寛延四年末十月

嶋三郎左衛門様御役所

（中宿文書）

このようにお願いしたが、大泉の苦勞を知らないかのようにことはかばかしく進まなかった。そうこうしているうちに冬が来て井桁を壊さないまま水が細くなってきたところへ、十一月九日昼より大雪が降って井が埋まり水が通らなくなってしまった。やむなく雪や氷をと

かして人馬の命をつないでいる。

相手の吹上村は、六〇年来、大泉には漏水などないと返答書に書いてあるようであるが、もしこの事実を御公儀様が御存じないならば、この窮状を本当に分かってもらえない。毎日大勢の人足をだしていませうが村まで水は届いていません。どうか当村の漏水の様子を御見分くださるようお願い上げます。これは先の願い書に続いて、寛延四年（一七五二）にお願ひしたもので、村役人ばかりでなく二一人の村の者の連署で必死にお願ひしている。

この結果は、明らかでないが、その後もこの争いは続いたらしく、文政九年（一八二六）には次のような証文をとりかわしている。

取替ワセシ証文之事

一、吹上村田畑成五反四畝十五歩之分下井用水ヲ以テ田方ニ致シ申スベキ事
右ニ付イテハ下井筋減水致スベキニ付大泉村ニテ吹上村地分へ箱樋取リ
立テ洩レ水之無キ様致スベキ尤モ大境ヨリ八拾間上ニテ無達ミ箱樋ノ義ハ
揚ゲ口ヨリ拾八間半引キ下ゲ六拾間半ノ間都合次第ニ立テ申スベキ事
但シ箱樋開イノタメ水際等仕立テ候共吹上村並シ障リ相成ラズ致スベキ
事……略……

文政九戌年八月

（中宿文書）

このときは吹上村で田潰しにあつていた田が相当あり、田戻りを願っていた、それを一部認めるようにして、ようやくこの井の修繕が箱樋でできるようになった。そして大泉村の箱樋口から吹上村の田三枚へは分水してやることになった。もっともその三枚の田の落水は箱樋へ入れると、落水まで規定されている。吹上村から同年に大泉村へだした「差し上げ申す済口証文の事」によるとこの箱樋の昔請手伝いと

して、吹上村が包金を差し出している。

但シ大泉村箱樋口ヨリ吹上村往古ヨリ持田三枚へ分水遺スベキ候 尤モ落水ハ箱樋へ入レ申スベキ事

（前同）

この揚げ口はその後も争いの種となり、いざこざの末天保六年（一八三五）に示談が成立して証文が取替わされているが、何分にも水が乏しく水の貴重な村がらだけに、一本の木を伐るにも馬道を造るにも細かな規定がされている。

差し上げ申す済口証文ノ事

一、去ル年九月大泉ヨリ吹上ニ相係リ候一件内済相整イ済口証文差し上げ奉リ候迄今般大泉村用水路廻リ立テノ儀ニ付キ双方心得方行キ違イ右両村ヨリ訴訟御時味中ニ御座候処神子榮村佐太郎今宿与三兵衛立チ入り双方へ掛ケ合イ熱談相難イ候趣意左ノ通り

一、大泉村用水揚ゲ口ノ義ニ付キ昨午年規定致シ候処右井筋掘リ立テノ場所作左衛門彦左衛門持分ノ芝地揚ゲ口下掘下北根際ヨリ東へ最モ通り能ク胡桃木南ノ際へ掘リ立テ申スベキ、尤モ前後井筋見通シ格別曲リ候ワバ両村役人見計イテ以テ伐リ保リ候ニ共相談ノ上然ルベキ取リ計イ申スベキ、夫ヨリ下掘ハ伐水致シ井筋相立テ申スベキ候尤モ吹上村古田井筋并ニ彦左衛門氏道へ決シテ相障ラズル様致スベキ……

但シ井巾三尺相立テ大泉村吹上村両村役人井ニ地主立チ合イノ上井筋へ相掛リ候本品ハ伐水致シ其外ハ一切伐リ採リ申ス間敷キ事……
天保六未年四月

（中宿文書）

この後も下井の揚げ口は時々いたんだので、上井の揚げ口に神堀の水門を造り、そこから下井分を分水しようとしたが、吹上村富田村中曾根村の上井筋から反対があつて実行できなかった。

下井ノ儀本川通り梓屋ニ致シ儀儀相止メ、石芝ヲ以テ堰上ケ水引キ取り申スベキ事

明治一六年

(塩ノ井大東文書)

乏しい水の分配であるため揚げ口はいつも争いのもとではあったが、土俵で又は石芝をもってとめている旧来の方法をぬけだすことはできなかった。

なお、総じて水が乏しいので、ごく少量の水も粗末にはできない。直接この井でなく上井からの流れ尻もこの井に落す落さないで争いがおこった。明治一〇年にだされた「お願い」はその問題である。吹上耕地の西三戸の飲用水にと特別のはからいで、分水してやり、その流末は上井には入らないので、この下井へ合水するように規定してあった。ところが吹上村では、その水で田をこしらえたいと上申した。大泉村ではもちろん故障の上申をしたが、その詮議中に吹上ではその合水井堰を進め潰してしまった。

争いはそれから半年後の一二月になって、長野県聯合機軸直直までいってようやく落着いた。結局、少々の畑田成りをみとめ、従来通りに下井へ落すよう、井筋を掘りあげさせたのである。この井は昭和の現代でもそうになっている。

(3) 下井の維持管理

嘉永三年(一八五〇)の「下井さらい人足勤め方取願」(大泉区有文書)によると、江戸後期の下井さらいは、次表のようであった。

四月一七日	出人足	彦右衛門外一三人
四月一九日	〃	孫八外一四人 人馬六 丸太松木二五〇本(一本五文)
四月二〇日	〃	瀬之丞外一六人 馬二匹 丸太松木一八〇本
四月二一日	〃	佐左衛門外六人

五月一七日出人足 彦右衛門外四三人 梓入

五月一九日 〃 一人

四月から五月にかけて、七〇人もの人足をだして、水を通していった。また嘉永六年(一八五三)には六月二日から四日の三日間に計六一人の人足が出て梓を入れたり井ざらいをしている。

下井管調の節人足名前書き上げ帳

六月二日	世話方新右衛門、早右衛門	人足一八人 梓七組入れ井ざらい
六月三日	同 五郎左衛門	人足二三人 大井口より増樋、井ざらい
六月四日	同 忠七	〃 二〇人 合衆梓八組入れ

(大泉区有文書)

ほとんど毎年のようにある井の修理は、自善請であったのでその負担も相当重く、村役人足も多くかった。それもそのはずで、下井は「土どめ」でよく、大泉川の水を一箇ももらさないように締め切って堰揚げするので、洪水の時はむろんちよつとの雨にも揚げ口は破壊されてしまったのである。

このように重要であった下井も、西天竜ができてからだんだん期待する井ではなくなってきた。とくにこの井には上井からの分水である大泉新田分の二寸口の水も合流し、大泉新田の村中を貫通しているの、大泉新田の水路のようにみえる。事実この水路に沿った大泉新田の人々は重宝に日々使用している。しかし、この水路の維持管理は今でも大泉が責任をもっている。水路をU字溝につけかえるのも、堰樋を造るのも、井渡りも大泉でして、現在に至っている。

(4) 下井の発展

田用水としてはあまり期待されなくなったこの下井も新しく脚光をあびることになった。昭和四七年になってこの下井の水を、大泉川左岸から右岸へひく計画ができた。これは下井にとって画期的なできごと

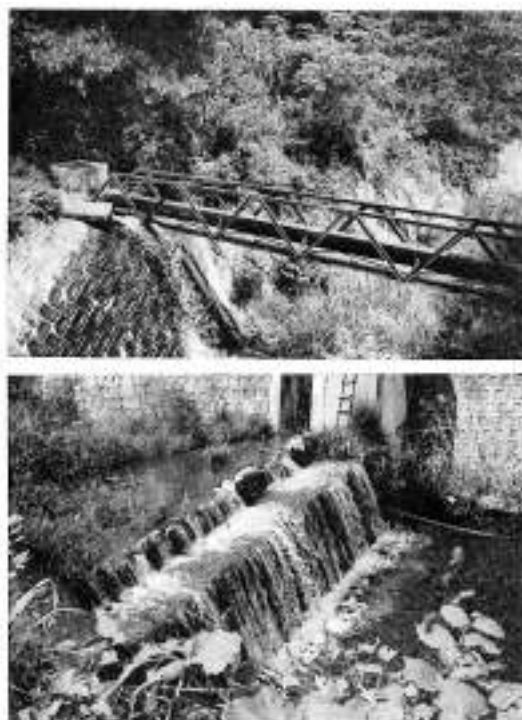


図4-2 取入口(中井)(下)と大泉川打ち越し(下井)(上)

とであった。大芝高原が開発されて大芝湖、スケート場をはじめ多くの水を必要とする。その水はこの下井の水以外にはない。水利権は大泉にあるが、途中は大泉新田の地籍を通らなければならない。他町村との交渉は困難をきわめたが、日夜をわかつた協議の結果、次のように示談が成立した。

大泉川下井取水工事に伴う貸借借契約書

大泉新田地主組合と南箕輪村開発公社が、大泉区が所有する権利の水を……大泉新田地主が所有の土地に取水施設を建設するに当り次の通り貸借借契約を締結する。

第一条 大泉新田は平坦地で幅一・五m傾斜地で幅二mを貸借する

第四条 開発公社は補償工事として、四〇mmのパイプ三〇〇mを取水工事と同時に施行し雑用水道として無償供与する。但し大泉新田が此の水を

利用する場合は、大泉区と結合の上使用料を支払うものとする

第五条 開発公社は、施設の保全に万全を期し、万一決壊等を生じた場合は速やかに復旧するものとする。

昭和四七年二月一日

大泉新田地主組合代表 唐沢多助
南箕輪開発公社理事長 木ノ島新一郎

南箕輪村大泉区長 池上申子男

(大泉区有文書)

これによって取水工事が村の開発公社の手によって行なわれた。この契約書ができる前に、当然のことながら大泉新田ではその中井の水利権が侵されることを心配し、大泉では下井の取水施設をいたずらしないことを求めて両区の区長間で「協定書」がかわされている。昔ながらの大泉川からの取水に係る念入りな処置である。

現在大芝高原は、本来ならば水気のさらにないところであるが、大芝湖ができスケート場ができて、昔日の面影もないが、それはこの下井の水のおかげである。こうして下井の水は大泉川の右岸で新しく息吹きをはじめたのである。

2 上井

(1) 上井の成立

下井の水だけでは江戸初期から水は不足していた。湯水の大泉では何としても新しく水を求めなければならない。この多年の念願のこもった水路が「上井」である。

上井は大泉川の水を、下井よりずっと上流の大泉所山で堰上げて山の中腹を横切って、吹上に達し、吹上の村中を貫通し、さらに大泉新田の村中を貫通して、大泉に達する井堰である。途中の吹上に「鷹町分橋」(大分橋)があり、ここで富田・中曾根に分水し、吹上の中央の

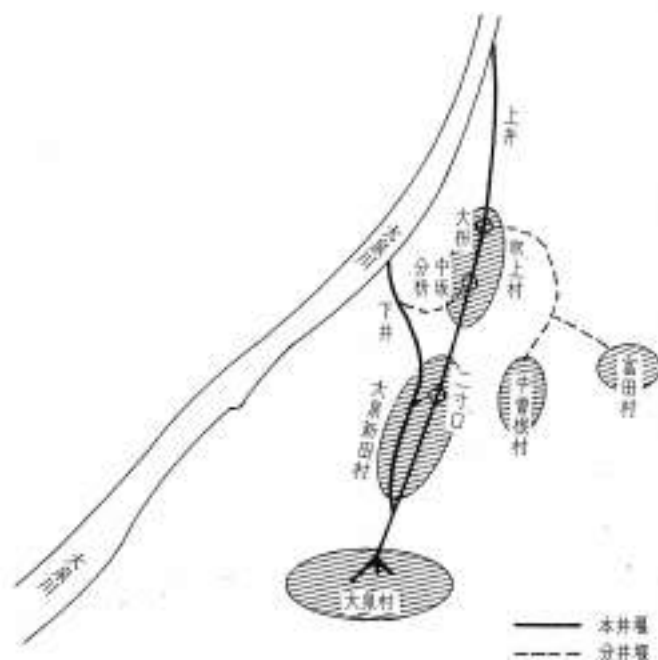


図4-3 上井と下井の模式図

「中坂分舂」で吹上に分水し、さらに「二寸口」で大泉新田に分水した後、大泉新田の村下で下井と合流して、大泉に達している。五か耕地に關係するので「五か井」とも呼ばれている。

この上井がいつできたか、古い記録でははっきりしない。明治二二年の「大泉村履歴書」には、承応年中（一六五二―五五）と記されている。すると江戸時代のごく初期である。

承応年中本下村野口某へ大泉所山樹木ヲ私イ下ダ過分伐本ヲナシタル故ニ出
水溝ノギ能々湯水ヲ生ジ大泉村ノ人民生活立タザルヨリ領主監獄處へ歎願ニ
依テ其地御見分ノ上、山ノ奥ヨリ用水路御見立テ箕輪將ニ拾六カ村ヨリ人夫

御引キ上げ三日間ニ落成シ用水ヲ与エタルナリ。

〔中〕〔初〕〔文〕〔書〕

ここで大桑所山の樹木を伐りすぎたため湯水を生じた、そこで領主の臨坂殿から、箕輪領全体二六か村の人夫をだしていただき、この領工事を三日間で仕上げたとある。

もう一つの資料によると、それより三〇余年後の元禄元年（二六八八）にできたと記されている。それを寛延四年（二七五二）に代官へだした次の願書がのべている。

恐レナガラ書付ケラ以テ願イ上ケ候御事

一、当村春用水ノ儀先規ヨリ下井□□当村笠屋キ業キ申シ候故元禄元版年御地頭板倉相殿正謙へ願ヒ奉リ当村ヨリ四拾町余山内ニテ大泉山ノ□ヲ井節御見立テ遊バサレ御領分中ノ人足井ビニ御入用下シ置カレ永ニ御普請等仰キ付ケラレ井筋ヲ立テ水引キ取リ當時新田境ニテ上井下井別水一井ニ仕リ引キ取リ来リ漸々給水続キ申シ候其ノ後段々大破ノ節ハ上井御普請所ハ御入用下シ置カレ仕来リ申シ候御事……(略)

宣統四年末十月

（大泉区有文書）

これはかなり正確な資料と思われる。そして上井、下井が大衆新聞で合流しているなど、現状にもよくあっている。

ところが、寛延四年（一七五二）よりも三〇年近くも前の、享保十一年（一七二四）の「寛」によると、この堰はどれほど以前に造られたかわからない、往古より引き取っていると記されている。

100

一、当村谷水ノ儀、当村地元大泉山ノ水往古ヨリ引き取り申シ候。右邊筋ノ儀、吹上村大泉新田ノ村ノ中ヲ通り、当村ヘ引き取り申シ候……略……

一、堀掘り制り候儀ハ何程以前ノ、二御座候儀存シ奉ラズ候
右ノ通り相違御座無ク候 以上

享保九年辰五月

信州伊那郡大泉村

名主 宇右衛門

組頭 助右衛門

年寄 庄右衛門

飯島御知行所

(大泉区有文書)

大泉新田が大泉から分村していったのが、承応年間からちよつと前
の慶安元年(一六四八)であったが、その分村の時はすでに井堰があ
りそれに沿って新田が分村した経過もある。

以上上井がいつできたか諸説があるが、引用した諸記録はその成立
の事実よりも、成立と同時に御普請であったことを述べるに急であつ
たため、このようになったものと思われる。ともかく、上井ができた
のは承応年間よりも古い、少なくとも上井の原形はいつともしれない
往古からあり、それを時の領主が大修理をしてくれたものではなかつた
かと思われる。

ここで注意したいのは、上井が別名五か井とも呼ばれていて、富
田・中曾根・吹上・大泉新田と大泉の五か村の井堰であるようにみえ
る。しかし、そもそものはじめは決して五か村のものでなく、大泉村
だけの井堰であったことである。次の享保七年(一七二二)の文書に
よると、

恐レナガラ口上書ヲ以テ申シ上ゲ候御事

一、大泉村用水井堰御普請所ノ義先規ヨリ御引、付ケニテ当村へ仰せ付ケラ
レ普請仕来リ一切地ノ村相違エ申シ候儀御座無ク候

(大泉区有文書)

「御引付ケ」で大泉へ仰せ付けられたというのは、大泉村が手引
き(紹介)して井をつくるよう仰せ付けられたということであらう。

このように大泉村一村のもので他村が入るようなものではなかった。
そのことは例えば当時、井の途中に三か所の橋があったが、これは皆
大泉でかけ維持しているのとべていることでもわかる。また現代にな
っても五か井組のことで共同責任をもつべき井のことであるのに、ど
こかに大泉井を手伝うのだといった底流が存続していることでも明ら
かである。

ではどうしてこの井が五か井といわれるようになって仲間ができ分
水されるようになったか。さきに引用した「口上書」によると、次の
ように時の領主板倉のたつての命令であった。

尤モ板倉頼母様御知行所ノ第七分三分ノ併ニ仰せ付ケラレ富田村・中曾根
新田へ三分進シ七分大泉へ引き取り申シ候

(同書)

大泉では湯水で他村へ分けるどころではなかったたので強くこわつ
たが、自力だけでできない大工事でもあるので、やむなく承知し御普
請を願った。それが現在もある大井(鷹町分井)で七分三分に分けた。
ここで注意したいのは、その七分は大泉だけのもので、大泉新田と吹
上はただ「汲用」だけであった。

吹上村大泉新田へ湯水へ罷り出デ汲ミ用イ分ケ湯仕ラザル様ニ仰せ付ケラレ
用イ来リ申シ候

(同書)

吹上と大泉新田は、井堰の端へ来て汲み用いることだけだと命令さ
れたのである。

そのため、井堰が大破したような場合でも、人足を少々出してもら
ったが、諸道具等は決して、他村からは出してもらわなかった。あく
まで大泉が主体で、この井を守り続けてきた。

……人足ノ儀ハ懸損シ申シ候節ハ右村ニ少々宛相頼メ来リ申シ候、諸道具ノ

儀ハ前方ヨリ出サセ申サズ……………

享保七年卯正月

（大泉区有文書）

この口上書の享保七年（一七二二）といえは江戸の中期でこの井ができてから一〇〇年以上経過した今からおよそ二六〇年前のことである。その当時の三か村の様子は次のようであった。

香水用水家数人数覚

一家数	八拾軒	人数	二百八拾六人	大泉村
一家数	九軒	人数	四拾人	大泉新田
一家数	九軒	人数	三拾零人	吹上村

（大泉区有文書）

これはさきの「口上書」より一〇年後の享保一六年（一七三二）に飯島のお役所へさしたもので正確な数字である。当時は中曽根も新田といわれていたので、そんなに多い家数ではなかったと思われる。このたった九軒の村と八〇軒の村とは相当のひらきがある。汲み用いるだけというきまりもうなずくことができる。

もう一つ、分け水はしないという「証文」も吹上からだされている。

証文ノ事

一、此ノ度北原論所立子会イ一枚絵図仕立テ候ニ付キ我等共香水箱前々ヨリ有リ来リノ通り絵図表ニ載セ申シ候此ノ如ク絵図表ニ水筋引キ申シ候ニ共香水其ノ外田作り等無益ノ水一切わけ取り申ヌ間敷ク候後日ノタメ違判証文依テ件ノ如シ

宝永二年酉十月十六日

大泉村衆中参

他九人連署

組頭 治助秘

（大泉区有文書）

このように一枚の絵図にこの井筋をのせてあるが、決して分け水を

して田作り等はしない、香水ばかりであると念書を入れているのである。

(2) 上井の取水と分水

上井ははじめ大泉井として成立し、しだいに五か村の五か井として形成されていった。

まず大泉川から取水する頭首口であるが、ここには他の井でみるような頭首口らしいものはない。「石芝どめ」という本川を石で堰ぎとめた取水方法である。

次に「大枅（鷹町分枅）」で、富田と中曽根へ分水し、下って、吹上の村中の「中板分枅」で吹上へ分水し、さらに下って大泉新田の「二寸口」で大泉新田へ分水している。

その概要は図4-4のようである。すでにのべたように下井は古来大泉の井で、ここは土止めで一滴残らず取水できるが、中井はやはり「石芝どめ」であった。



図4-4 上井の配水模式図

第1節 水を求めて

この分水も長い間の江戸時代を経て、明治六年に大きな変化をもち、飲用水の権利から田用水の権利になっていった。その詳細は次のようである。

表4-1 大泉川取水の権利の推移

村名	江戸時代(元禄)		明治六年(規定)		
	井	分	上	中	下
大泉村	大井	上井	大井	中井	下井
大泉新田	七分	全部大泉	七分	四尺 二寸口	五分 一〇分
吹上村	〇汲用	〇汲用	〇汲用のみ	五分	
富田村	三分 五分		三分		
中曾根村	五分				

ここで、下井と中井はこのままで変化はないが、大井と中板分井はそれぞれ次のように変化して現在に至っている。

表4-2 大井と中板分井の尺度

中板分井の推移

大泉村	元禄時代		大泉村	明治六年	
	大泉新田	(吹上村)		大泉新田	(吹上村)
大泉村	1尺6寸5厘 (70%)	1尺6寸5厘 (68.7%)	大泉村	4尺 (80%)	4尺3寸2分5厘 (87%)
大泉新田	7寸5厘 (30%)	7寸2分9厘 (31.3%)	大泉新田	1尺 (20%)	6寸7分5厘 (13%)

この配分は他町村に見ない細かなものである。さらにこの権利にもなう、諸経費や労務の分担は次表のようである。これはとにかく細く百分率でなく千分率でもなく万分率とでもいうべきものである。いかに僅かな水を問題にしたか、水の乏しい村々の息吹きを感じるものである。

表4-3 五井組の配分率と人足率

村名	配分率			人足率
	正規比率	概算比率	実用比率	
大泉区	七〇	五五・五九	三六・一一三	二三人
大泉新田区	二〇・七四	一四・三一八	一四・二%	三人
吹上区	二七・六七	一九・三六九	一九・〇%	五人
富田区	三〇・三二	一六・〇〇〇	一五・七%	四人
中曾根区	一六・〇〇〇	一五・七%	一五・七%	三人
合計	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二三人

明治八年大泉の新井ができたとき富田・中曾根へ一方だけ広げたので一〇〇分率でなく一〇二分率という奇妙な比率が生じ、それが現在まで続いて使用されている。

なお、この水の配分率は当然のことながら大泉川上流全城の水利権の配分率にもなっている。

ア 鷹町分井(大井)

上述のように上井は、大泉村だけの井筋であった。途中で七分三分に板倉領主の仰せつけで富田と中曾根に分水した。このことはそれなりにはっきりしていることは先述のとおりである。しかもそのとき御入用となった。



図4-5 大 井

(右側が富田・中曾根へ、左側が大泉・吹上・大泉新田へ)

当村春水堰ノ義御普請下シ
置カレ候儀三拾貳年以前四
年、板倉頼母様ノ御知行所ノ
節ヨリ只今迄年々御入用下
サレ来リ候。

享保九段年

(中曾根文書)

この覚によるとその三二
年以前四年は、元禄六年(一
六九三)になる。この年に板
倉領主の仰せで富田と中曾
根に三分分水させた。江戸

初期から中期になろうとする時で、この井も初めて御入用になった。
そして実際にこの大井は七対三の割合で造られていた。枳幅の「一
尺六寸四分五厘」が大泉村で、七寸五厘が富田中曾根分としてできて
いた。それは江戸時代を通じてそうであったが、明治八年に大泉の新
井ができたとき、示談が成立し次のように切り広められた。

示談証

南気輪ノ内大泉新田ニテ大泉所山一ノ沢ヨリ四ノ沢迄沢ノ出水新井ヲ以テ引
き取りノ義西気輪村ノ内吹上、大泉新田、中曾根三村地、中曾根村ノ内富田
村地ト示談ノ上出願官許ヲ蒙リ井筋落成ニ付キ昨八年規定ノ通り水量應町橋
口切り広メ致シ尺度左ノ通り

枳幅 七尺六寸四分五厘

但シ下流最シ方先規ノ通り

大泉新田
吹上
大泉新田

枳幅 七十五厘

(富田新田)

(中曾根新田)

合 外式分四厘六毛、今般切り、広メ候分
七寸二分九厘六毛

前書ノ通り枳口取り極メ候上ハ從來確守致スベク後証ノタメ取替ワセシ示談
証件ノ如シ

明治九年十月十六日

(穀場文書)

ここで歴史的な枳幅を切広めることが行なわれた。その理由は「新井」
の項にゆずるが、このとりきめがいかにものしものであるであつた
か、署名者が二三名に及んでいるのもわかる。各耕地の代表のほか
三か村の戸長副戸長が連署している。

イ 中曾根分枳

大井は古くからあり、その割合ははっきりしている。ところが吹上
と大泉新田への分水はごく新しく明治になってからであるのに、とか
くこたごたの種となった。

先述のように吹上と大泉新田は井端にでて汲み用いるだけだった
が、上流に位置しているばかりでなく、村内を貫流する上井の水をみ
ているので、事あるごとにその権利を取得することに努めてきた。大
泉で二反五畝内外の田しかないその昔に、すでに吹上にはあちこちの
漏水で水田が、六反歩余もあった。そして大泉では田を畑にしてし
まったのに、吹上では少しずつ田が増えていた。

高反別寄せ覚え候 吹上村

承応二巳年 中田 武反七畝貳拾歩

下田 三反三畝拾七歩

(吹上区有文書)



図4-6 近代化された中板分橋向。左側が吹上分、右側が大泉分である

吹上では、承応二年（一六五三）に六反一畝七歩の水田が、寛文六年（一六六六）に「下田式畝拾壹歩」が、延宝六年（一六七八）に「下田三畝拾五歩」が増加している。年により総計がちがっていることもあるのでこの水田は不安定であったと思われるが水田面積はこの後も少しずつ増加している。

上井からの取水が、正式に認められたのは、明治六年のことである。時は明治の新しい時代を迎え、何もかも御一新という時勢にあおられて、長い間の慣行を破って大泉としてやむなく、中板分橋を作らざるを得なかった。この中板分橋をめぐる水論は後述の「中板分橋の水論」に記すのでここでは橋の大きさについてだけ記す。

明治六年にできた中板分橋は、大泉分四尺、吹上分一尺であった。その後この水を田用水にする権利を得ることによって、吹上側が六寸七分五厘、大泉側が四尺二分五厘となって、今日に及んでいる。現在は図4-6のようにコンクリート造りになっているが、寸法は明治一五年のままである。

ウ ニ 寸 口

大泉新田も上井の井端へでて来て汲み用いだけの権利であったことは先述のとおりである。ところが明治六年になって、大泉新田は新たに大泉川から「中井」をひく権利を取得した。

取為替規則ノ事

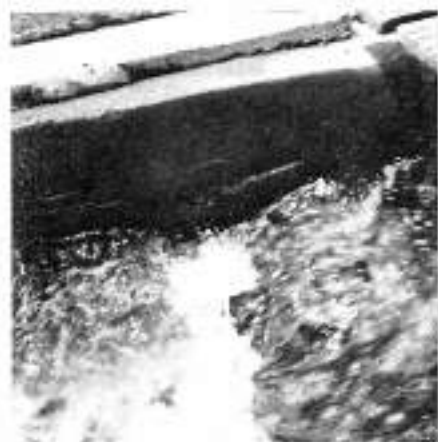


図4-7 二寸口取入口（大泉新田）大泉新田バス停前、右上のきれまが二寸口

一、大泉新田ニテ吹上村地内宇上河原有賀半右衛門持地先ニ新堀、引き分け分水ノ儀ハ大泉新田へ五分吹上村へ五分ト相定メ尤モ吹上村古田湯水ノ節ハ右新堀ヨリ互ニ融通致ス可キ事

但シ井底壹尺五寸深サ壹尺二寸井地所六尺幅ニテ吹上村地方相当ノ代金ヲ以テ示談致ス可キ事

一、大泉新田此ノ節新堀分水儀ニ付イテハ是迄在リ来リノ田所上井ヨリ用水引キ来リ候エ共以來半減引キ取リ申ス可シ。但シ残り五分通り田所ニハ上井ヨリ、式寸幅掛口致ス可キ事

明治六年四月

（大泉区有文書）

ここで新堀を認めることは容易なことではなかったが、これは認めざるを得なかった。この新堀は図4-4のごとく上井と下井の中間にあるので「中井」と呼ばれた。中井が新しく認められたので、大泉新田では上井から取水していた田を半減した。それは「二寸口」という分水で、井というのではなく、上井の南側壁を二寸幅だけ切りとって取水するものであった。

ところで中井について、当時の大泉の代表は次のようにいって、伝説のあるこの大泉川水系の大変革を訴えている。

世は遷り変りて明治の御代となり、鹿藩置島飯島村に伊那県を置く、之を罷して

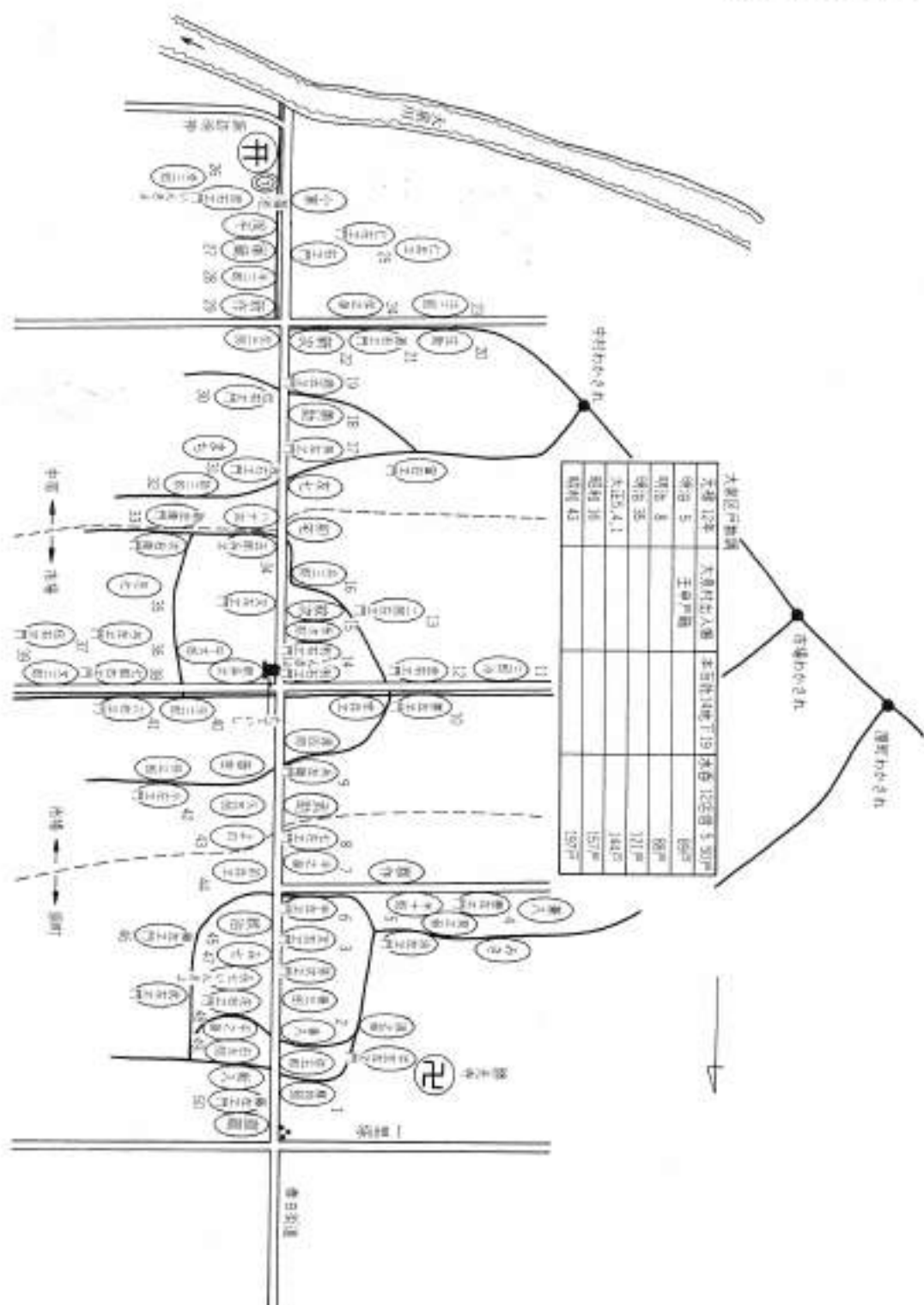


図4-8 大泉村内の配水図（明治8年）（原正秋資料）

松本に筑摩県を置き、その泉の配下となる。筑摩県の泉吏本山盛徳という人あり、専ら奸智にたけ万事が思ひの儀に所断す。世の中は未だ大名政治の習慣離れず官民の差甚だ敷く泉の属官にても人民は昔の儀なるを命ぜりとし、此の本山属が伊豆郡へ来り入会又は水利の事に付いて理非に係らず施ふる者贈賄するもの意見通りに専断し、ために地々村々に新井掘掘り取り又は分析新堀の物できたり。

大泉の大芝原の日陰沢井筋も此の時に約束出来明治八年に掘り取りたり。井組五か村の上井に付きての約束書も此の時に出来たり。形は別紙の如くである。本山属も愚事露顯して牢獄の人となりたり。又関係したる人民も惣代等は多少の罰を蒙りたり。

(大泉中西文書)

明治の新政という時勢と本山盛徳の専断と、それにもまして乏しい水をめぐる住民の悲願が、このような形となって、新たに中井を認め二十口の分水で落着した。

後にこの中井が上井と交差する所、宇麻林で大きな水論が起こり、大審院の決裁を仰ぐまでに至ったが、それは余りにも大きいので、項を改めて後に記す。

エ 大泉村内の配水と井戸

上井と下井を合水して、よりやく田用水としてよりも生活用水として大泉の村内に分配することができた。その分配の様子が図4-8である。「わかされ」とよぶ分水橋が村の西方に三つあった。西高東低の斜面を横切るように南北に横長の村なので、そのわかされの位置ははるかに西方に設けなくてはならない。まず「原町わかされ」で原町へ、次に「市場わかされ」で市場へ、さらに「中村わかされ」で中宿へ、それぞれの戸数に応じて分配した。それから各々の家へ届くようにいくつかに分けられた。図は明治八年八戸への分配を示している。

が、番号のついた家は元禄一二年の五〇戸であるから、江戸時代を通じての飲用水系図である。

(3) 上井の維持管理

先にのべた上井の成立はなかなかの難事業であった。それにもまして、上井の維持管理は大変であった。雨が二、三日も続けば急斜面の井は跡形もなくおし流されてしまう。元禄以前にも大洪水と山崩れで大破し、箕輪領内の寄せ人足で井筋を掘ったこともあった。元文五年(二七四〇)にさしだした、「御普請書き上げ帳」には元禄元年(二六八八)からの御普請が書き上げられている。御普請というのは自分たち村人だけでなく、役所の助成によって工事することである。これを表の形にして略記してみると次表のようである。

元文五年「御普請出来形帳」

一、元禄七年戊戌(三〇四)坂倉頼母守	大破	領内寄人足	扶持米五合宛
一、元禄一四年己酉(三二七)辻六郎左衛門	大泉川ノ切	百石百人	同
一、享保二年丙申(三六五)平岡三郎左衛門	大洪水大破	百石百人	同
一、享保三年戊申(三六六)八木源太左衛門	大洪水大破	同	同
一、享保四年庚申(三六七)伊藤七郎右衛門	仕壊帳アリ	同	同
一、享保五年辛酉(三六八)伊藤七郎右衛門	同	同	同
一、享保一十七年(三九〇)大草太郎左衛門	同	同	同
一、元文三年丙申(三九七)室七郎左衛門	手洗沢押出	村役人足	額粉買上一人七合五勺

(中絶文書)

このうちで元禄時代のもものは帳面が大火でなくなつたとし、それ以後のものは仕様帳が残っていると記されているが、現在は見当たらない。ただ六番目の享保五年(一七二〇)については、次の「大泉村明細帳」によってその規模を知ることができる。

元文五年「大泉村明細帳」

一、御川除場 四か所 棚場八拾間、石堀場三百間余、蛇籠出し四百間余、

出し六拾余

是は当村存水御運轉く候て大泉所の水を四拾丁余山のそばを引き取り上程に仕り候所山沢録に沢々を掘り切り取り上げ申し候故百姓百廿請に羅り成り申さず候所前々より只今迄御入用下し置かれ御普請遊ばされ下され候事

(大泉中西文書)

この年の大泉村高が六二四石余であるので、村の夫役で「百石百人」であるから六二四人が出、それ以上の人足には扶持米一日五合がでた大工事であった。藤籠等の材料費は役所から負担してもらって、災害のたびに村の負担は重いものであった。

なおこの負担をどのように分担したか、はつきりしたことはわからないが、最初は大泉村だけで修理することが多かった。当時、八〇戸前後の戸数で、この負担は相当大きなものであった。

江戸後期の天保一二年(一八四一)になっても、五か村で分担したかどうかは、はつきりしない。

大泉村御普請所自普請所仕来り書キ上マテ帳

一、存水用水井堰

五か村組合

宇大井口 合衆井 内法高六尺 下横六尺 壺方所
 同所 続井 内法高六尺 横六尺 壺方所
 宇山ノ神沢 甲蓋樋 長貳間壺尺横六間 壺方所
 宇手洗沢 寛 長拾間内法高三尺深尺五寸 壺方所
 宇同断 寛根堅ノ続井 内法高六尺横六尺 二方所

天保十二年

(大泉中西文書)

上井が山のけわしい所を横切ってくる途中に、この山ノ神沢や手洗沢があり、湯洞という崩れやすい所もあって、災害はほとんど毎年お

こる。しかし小さい災害のときは自普請で修復してきた。

一、右同断用水路

宇山ノ神沢下 谷崩レニテ井瀬年々取り替イ場所 壺方所
 宇手洗沢 雲雨ノ節年々取り替イ場所 壺方所
 是ハ前々ヨリ百姓入用ヲ以テ普請仕来リ申シ候

(前文書)

明治になると、修復費用や人足を五か村で分担したことがはつきりしている。おそらく明治六年の規則ができてからではなかったかと思われる。(水の分配と経費の分担) 上井の修理費は年々相当の額になった。明治初年、五か年間を表にしてみると次表のとおりである。

表4-4 上井修理箇所と修理費

年号	修理箇所	手洗沢用水路 十二間	大井口ヨリ手 洗沢マデ	山ノ神沢甲蓋
明治二巳年		十三円	十五円五十銭	五円三十銭
三午年		休年	九円	休年
四未年		十五円二十銭	十三円	四円五十銭
五申年		休年	四十五円	休年
六酉年		十二円	三十八円	三円八十銭

五か村で分担する割合は果たして何を根拠にして、それほど精細な比率にしたかはつきりしない。ただ、この費用のあとには必ず当時の村高が記されているので、村高を基礎にして、大井の分水量で富田中曾根分を割り出し、下井や中井その他の水使用量や、当時の人口戸数を勘案して、他の三か村の比率をだしたものと思われる。

上井は五か村であるので、五か村で維持管理にとめなければならぬ。しかし、また成立の事情からいって大泉井の感もある。そうした慣習が昭和の今になっても残り、大泉主導が当然であるとしても、大泉井に協力しているのだという風潮がないわけではない。

そこで、明治初年にできた「五か耕地約定証」はそれをはっきりさせて、あくまで五か井組の共同責任であることを認めあったものであった。

五か耕地修繕約定証

宇大泉所流水上井ハ從前ヨリノ切リ揚ゲ井ハ井組五か耕地用水ニ相用イ候處
年々數度欠落ノ箇所モ之有リ其ノ時々龜瀨ノ修繕ヲ加エ候處今般更ニ箇所ヲ
用イ井筋ノ修繕ヲ致スベキ事ニ双方協議行々屆キ候間永遠左ノ方法ヲ以テ修
繕致スベキ事

第壹条 箱瀬欠落ノ箇所ハ勿論龜瀨ヲシテ年々當請ヲ加ヘ揚ゲロマデ落底致

スベキ事

第貳条 五か耕地古田ノ義ハ明治八年約定書ノ通り相守リ申スベキ事

第參条 若シ天災等ニテ路線等欠ケ候處難場之有ル時ハ相當ノ木財ヲ用イ修

繕致スベキ事

第四條 諸入費等ハ是迄ノ通り井組立チ會イノ上割賦致スベキ事

右ノ通り約定書上ハ水ク違背有ル間數ク依テ違背候件ノ如シ

(大泉区有文書)

これは五か井が五か耕地の五か井組のものになったことを、明記したものである。毎年のように災害はおこる。あちこちの難場の修復には多くの木材も必要である。そこで次のように「恋久保」と称する共有林も保有した。

香用水井組五耕地約定書

今般五耕地持林西氣輪村地内字恋久保千百九拾番此の反別式反五畝四分の場
所別紙給図面の通り相違之無く候間向後不都合之無キ為協議取り極め左
に記す

第一条 一、供有持林御預令井びに御証書は大泉耕地總代田中喜七原信

一清水三三殿へ預け置き候事

第二条 一、供有持林小作預けの義は吹上耕地有賀忠左衛門有賀文三有

賀伝四郎有賀与右衛門右田名へ一か年金拾銭と相定め預け置き候事
但し小作年貢の義は来る明治十二年より二十一年迄十か年の間毎歳上
井入費割合の節出金致すべく且つ木立盛木に相成り候様精々致すべき
事

第三条 一、林見廻りの儀は毎年上井井渡いの節五耕地立合ひの上候
在致すべき事

第四条 一、木立盛木に相成り候上は上井當請費に相用い候事

但し盛木に相成り売却致し候節は是迄の通り當請割合に応じ割賦致す
べく候事

右か条の通り遵守致すべく候後証のため違背致し置き候也

明治十一年十二月十二日

(大泉区有文書)

このように、五か耕地で林を取得し、樹木を育成して、その修繕費
用にあて、たび重なる災害に対処したものである。

なお、当時は吹上が最も上流である関係から、難場災害の見廻りも
していたらしく、次のような通報によって井を救い、足銭をもらって
いる。

五か耕地義水路の内字恋久保西大流相成り候間直に御検査の上取り繕い致し
度候間右耕地へ御報知の上取繕い之有り度候也

(明治) 十年十月十六日 吹上耕地總代

大泉耕地 御惣代御中

足銭三銭御払い下さるべく候

(大泉区有文書)

このような通報慣例はその煩にたえないのか、吹上区拒むところ
となつたので、大泉土木部長の仕事になつてゐる。この仕事は大泉の
たびに大泉所山までは参じていき井堰の監視の苦勞は並大抵のもの
ではない。それと一度崩れた水路には一滴の水も流れないので、敏速



図4-3 災害にそなえる応急水路
(大泉酒造屯所裏においてある)

な応急処置が必要である。そのために大泉の屯所裏には鉄製の応急水路が置いてあり災害に対処している。

(4) 上井の水論

ア 田潰し田戻り水論(吹上村と)

上井は橋を設けて、千分率以上の詳しきで水の分量をきめた。その割合はしかるべき根拠があつてお互いに納得してできたものである。その根拠はどのような要素でどのような慣行に即したものが、明らかにしたい点であるが、詳しいことはわからない。どの橋のきめにも、以後決して新田はつくらない、番人のいらない井口にしようと約束している。

しかし、現実には新田が時として造られ、番人をつけなければならぬ水争いがある。水を間近かに眺めながら権利の少ない上流の村と、権利は多くあるが水が届かない下流の村との水の争いは、宿命のともいふべくあつたとたない。

実際に上井ができた江戸初期には、大泉川の水を不法に用いて田を作った場合、吹上村でもすなおに田潰しが行なわれた。荒地を田にす

る非常な労力も、水の権利がないと抗議されると、もつともなこととして田潰しが行なわれた。宝永二年(一七〇五)の「証文ノ事」でも吹上村の北原絵図の中へ上井筋を画いたが、これは放水だけで田など一切作らないから了承してほしいと、吹上村名主以下一〇名が連署しているのは先述のとおりである。

そんなとき、吹上村の文内ほかが大泉川原筋へ新田を作った。これはけしからんと吹上村の名主以下村役人がその非を認め、本人たちも一度は抵抗したものの、これに従って田潰しを行なった。

証文ノ事

此ノ度我等共儀大泉川原筋畑井地先等ヲ新田ニ起シ立テ候ニ付キ各御村方ヨリ相潰シ候様御申渡サレ候所相潰シ申ス間敷ク候旨相答エ候ニ付キ御公辺ニモ成テルべき段御尤モ至極ニ御座候。先年宝永年中北原論ノ御当村ヨリ大泉村へ証文入レ置キ候様御申渡サレ候所相潰シ申ス間敷ク候旨相答エ候ニ付キ御公邊ニモ成テルべき段御尤モ至極ニ御座候。茲ニ因ツテ羽田村善右衛門殿半平殿御頼ミ各衆中へ御無心申御公邊御止メ下サレ則チ右ノ新田相潰シ申シ候。然ル上ハ上井筋ハ勿論大泉川原筋ニテモ新田起シ立テ申ス間敷ク候後日ノタメ仍ツテ件ノ知シ

宝暦十三年末二月

吹上村 地主 文内等

同前 新堀等

合地 表四郎等

大泉村 衆中

富田村 衆中

大泉新田衆中

中曾根新田衆中

(中曾根文書)

これには吹上村名主以下の添え書があり、宝永年中(一七〇四〜一七〇五)の証文もあることだし、殊更、飲田用水が湯水であるから、羽田村両人にお願ひして、表沙汰にせず内々で潰させた。以後決してこんなこ

とはいさせないと、三人が連署して四か村に誓っている。そして扱
い人の署名が次のようになっていた。

右ノ通り相違御座無ク候後日ノタメ仍テ件ノ如シ

羽広村

扱人 善右衛門印

阿所 半兵衛印

右四か村衆中

(中宿文書)

ここで注意したいのは、上井筋ばかりでなく、大泉川原筋も決して
田を作らない、作ってはならないということである。宝暦一三年(一
七六三)のころはまだ上記のようであった。

江戸後期になるとその様相が変わってきた。文化一〇四年(一八
三三)に松本役所へ出した「差シ上ダ申ス清口証文ノ事」には、大泉村の
名主対吹上村名主の田清しの一件が起っている。そのころ吹上村で
はしきりに畑田成り(畑を田にする)をしたり、切添田(田の続きを切り
広めた田)をこしらえていた。そのため用水が大泉へ届かなくなっ
ているから、これを潰してほしいと訴え出た。相手方吹上村の役人を呼
びだし吟味をした結果、下手良村四郎兵衛と松島村平左衛門が仲に入
って和議ができた。それは円満に話がついたとはいえないものの、吹上村
で新しく造った一町六反歩余(一六〇〇)を残り手取り潰すという当
然といふものの厳しいものだった。

差し上げ申す清口証文の事

和議内清口候様意に申し上げ奉り候

一、吹上村古田子高入れ新田共、反別寄町六反歩余の印切り添え残らず此の
度相潰し申し候事

(訴訟方役人連署)
(相手方〃〃〃)

文化十四年六月

(取調人 連署)

松本御役所

この結果は次の一札によって実行されたことがわかる。

一札の事

此の度吹上村切り添え田相潰し候様和議内清口証文に上は切り添え田しちへは
延引無く七月中に致し申し候也念のため依って件の如し

西六月

取調人 下手良村 四郎兵衛印

大泉村 名主五郎左衛門殿

松しま村 平右衛門印

百姓代半右衛門殿

(中宿文書)

上井は大泉村の田用水ではなくて飲用水であるのに、吹上村は飲用
水にはことかかないので田用水を求めていた。上流の吹上村は折あら
ば畑を田にしたい、それが見つかると田潰しをされる。大泉ではやむ
なく畑田成りをするのに、吹上では畑田成りを望むという、明暗を分
けた争いがくりかえされた。次の文政九戊午(一八二六)にとりかわ
された証文はそれを語っている。

吹上村でお願いしたのは、先年、大泉村の飲用水が不足したため、
吹上村田高のうち五反四畝一五歩の田を畑にするよう仰せ付けられ
た。ところが大泉村の飲用水も不足しなくなり、畑が田に戻ることを
許すようになったので、吹上村の畑も田に戻してほしいというのであ
った。これも勘定には解決しないで、お役人の見分をうけ裁可しても
らうてようやくことがきまった。

吹上村で田を畑にしてあった五反余の田は上井からでなく下井から
引水する。その代わり吹上村地内へ箱樋をこしらえ漏水のないように
する。大境から八〇間上で堰きこんだ下井の揚げ口から、一八間半は
箱樋を造らず、残りの六〇間半は箱樋を造る。そうして吹上村で畑を
田に立ち戻したうちは、大泉で新田を開墾しても何の申し分もない。

また田尻りにかすけて一分一釐も余分の田をこしらえてはならない。などなどがきまつた。

取替ワセシ証文ノ事

……御役人衆申候御越シ……熟談仕り候趣左ノ通り

一、吹上村田畑成リ五反四畝十五歩ノ分下井用水ヲ以テ田方ニ取替申スベキ事

右ニ付イテハ下井新減水致スベキニ付大泉村ニテ吹上村地分へ箱堀取リ立テ流レ水之無キ様致スベシ、尤モ大境ヨリ八拾間上ニテ運込ミ箱堀ノ義ハ堀ゲヨリ拾八間半引キ下ゲ六拾間半ノ間都合次第ニ立テ申スベキ事

但シ箱堀開イノタメ水際等仕立テ候共吹上村並ニ隣リ相成ラザル様致スベキ事

一、吹上村ノ條田畑成リノ分田ニ立戻シ候上ハ大泉村ニテ田畑成リ并ビニ新田開墾等イタシ御年貢相納メ候共申分ノ義キ事

但シ田尻リニ事寄セ分寄銀タリトモ余分ノ田方拾エ申ス間敷キ事

一、大泉村ノ鍋湯水ノ年貢ニ候共堀口ノ義土儀又ハ石芝等ヲ以テ堀ギ堀ゲ申スベキ事、万一出水ノ節古田損地ニモ相成ルベキ様ニ候ワバ吹上村ニテ取替イ申スベキ候吹上村古田ハ申スニ及バズ此ノ度取替エ候田方堀ゲ口ヘ決シテ並シ隣リ申ス間敷キ事

但シ徒ガ間敷義相候ミ申スベキ事

一、吹上村井堀堀ゲ口ノ義ノ切リ申ス間敷ク候用水湯水ノ節ハ取替イ通スベキ事

一、吹上村田尻り出来ノ場所ノ義ハ羽広下道上下外ニ宇中河原林ノ分一堀石二堀所ニテ五反四畝十五歩并エ申スベキ候、普請イタシ候節ハ大泉村ヨリ立テ合イ申スベキ規定ニ候事

但シ大泉村箱堀口ヨリ吹上村往古ヨリ持田三枚ハ分水道スベキ候尤モ落水ハ箱堀へ入レ申スベキ事

右ノ通り熟談相整イ候上ハ水久堅ク相守リ申スベキ儀之ニ依テ取替ワセシ一件ノ如シ

文政九戌八月

(大泉村三役連署)

(吹上村三役連署)

松本御役所

(中領文書)

ここで「下井」とあるのは大泉の下井でなく、引揚げた上井に対して大泉川原沿いの残水の井ということと思われる。その上井が湯水の時はこれを取替うという条件がついているが、これを四耕地へ次のような一札を入れて上井には迷惑をかけないと保証している。

一札ノ事

一、当村湯水ノ節田畑成リ相成リ籍リ在リ候越後年田尻リ相願イ候ニ付キ富田村大泉新田中曾根新田湯水ノ節後継之有ルニヨリ掛合イ成サレ候越田尻り出来候シ候上ハ先親ノ通り上井へ差障リ申ス間敷ク念ノタメ一札並シ出シ候、依ッテ件ノ如シ

文政九戌年

吹上村 文左衛門郎

庄右衛門郎

藤右衛門郎

大泉新田 御名主殿

(中領文書)

上井はあくまで優先権があつて、湯水になればこれら新しい井口はとざされることになつていたのである。

さて、この田尻りもでき大泉の下井の堀げ口もでき、吹上村三枚の田の水も保証されたので一件落着かと思われたが、新田造り・田潰しのことは依然として起こつた。

「御許容規定相破リ新田掘エ候ニ付キ清シ方出入」という訴状が天保五年(一八三四)四月吹上村を相手として大泉村から出されている。

これは全くはげしい口調で、吹上村の新田造りを怒り、言語道断だとか理不尽だとか不当不法とかなじっている。大泉側からいえば、ならぬ勘忍をして、あえて五反余の木田の田戻りを認めてやったのに、何たることだという訴状であった。

この訴状に対して、同年九月にだされた「差上げ申ス済口証文ノ事」によると次のような結果となった。

大泉村は流末で用水に難渋しているの、流上の吹上村と畑田成りの出入が数度もあった後、ようやく文政九年（一八二六）の規定が取りかわされた。この規定で双方納得したわけであるが、それから後も規定を破る出入りが幾回もおきている。やむなく訴訟をおこしたところ、畑田村の六兵衛と神子柴村の佐太郎が立ち合い、この争いがまとまった。

吹上村の主張は、田戻り五反四畝一五歩は羽店道の上下の三反五畝二歩一三枚の田だけで、まだ一反九畝一三歩残っているというにある。ところが吹上ではもう大泉では用水不足はないと心得たのか、この奉新規の田を六枚と文政八年（一八二五）の起き返り（荒れた地の復旧）と称して二枚合計八枚の田をこしらえてしまった。だが御役人に調べてもらったが七枚は芝地を新しく田にしたものであった。たとえ残り一反九畝の分であっても、両村が立ち合いの上、田ごしらえする約束であったが、ことわりもなかった。こんなしまつでは御吟味をうけても申し分けがたたない。今度御見分をうけてみると、三反五畝二歩の田は、一反七畝も切り添えや切り開きをして広くなっている。その年貢も納めていなかったの、吹上村は不行届きの吟味をうけた。

そこでこれらの田は全部潰してしまうはずだったが、大泉村が寛容の心で勘弁し、七枚はそのままにしておいてよいと話がきまった。この寛大な処置をとったうちは、流末が減水にならないように、大泉村

下井揚げ口は羽店下道の下方から堰き上げてよい。その井筋は瀬水の多い所なので箱樋の普請をするが、その手伝いとして吹上村から包み金を差し出す。

吹上村の田七枚は相当の年貢をこの年から差し上げ、何れ換地の時は正規の御高に入れる。そして先の規定を守って、一分一釐も新開や切添えをしないばかりでなく、今後は古田が流れた場合でも大泉立ち合いで復旧し、立ち入り人が入って絵図をこしらえておく。このように天保五年九月に話がまとまった。

この包み金は金五両であった。箱樋がいたんだら人足三、四人もだすと、次のような規定ができた。

別紙規定ノ事

- 一、包み金ノ儀ハ金五兩ト相定メ内三兩ハ当金差シ出シ残金貳兩ノ儀ハ普請皆出来ノ上差シ出シ申スベキ事
- 一、満水ノ節井筋井ビニ箱樋等損ジ候ワバ吹上村ヨリ見舞イトシテ人足三、四人助入差シ詰メ罷リ出デ候々取リ繕イ申スベキ其ノ余ノ儀ハ都テ文政五年規程定メ通り双方堅ク相守リ申スベキ事
- 一、吹上村地所ニ付キ大泉村ニテ井ブチ取リ廻メノタメ水除ケ等入レ申ス共吹上村ニテ故障之儀尤モ吹上村古田差シ障リニ相成ラザル様取リ扱イ申スベキ事

天保五年九月

（中略文書）

これには両村名主以下役人と両名の立入り人が連署している。その上、今後は一切切り添えをしないという吹上村の一札がだされ念おしをして田起こしを禁じている。

取替ワセシ一札ノ事

今般田方切り添エノ場所御見出ニ付キ当村ニ少々切り添エ之有リ候處御村方勘弁ノ上御校地諸ケ奉リ候之ニ依ッテ先年規定ノ通り以來ハ切り添エ等ノ儀



図4-11 羽成道村直の現況図4-10の田舎しが行なわれた所

一切仕入間敷ク候念ノタメ依ツテ件ノ如シ

大泉村御名主家中

吹上村 名主 作左衛門

組頭 定 吉

百姓代 喜 十

(中略文書)

これで吹上村との田舎し一件は終ったように見えたがさらに翌年この実施に当たって行違いが生じ、再々度争いが起こった。天保六未年(一八三五)四月大泉村から松本の役所へだされた「差シ上ケ申ス済口証文ノ事」によると次のようであった。今度は神子柴村の佐太郎と松本町郷宿の与三兵衛が立入り人となった。

それは、大泉村で用水路の揚げ口掘り立ての場所が吹上村の作左衛門彦左衛門の所有の芝地であった。そこからだと井底が格別曲がった所は柳の木を相談の上伐つてもよろしいが、他は伐つてはならない。後、井端が崩れたら大泉村で管請をし、馬道の所は埋積にするなど細かなとりきめがされた。

但シ井幅三尺相立テ大泉村吹上村役人井ビニ地主立チ合イノ上井筋へ相掛リ候木品ハ伐木候シ其ノ外ハ一切伐リ採リ申ス間敷キ事

(中略文書)

井端の木一本伐るにも大変なさわざであった。

このように、畑田成りも江戸初期中期には個人の不法法として謝罪していたのに、江戸後期には大泉村対吹上村というように村対村の争いとなっていた。

村対村の争いも上記のように、たいがい仲裁人が入って内々でことが済むのが普通であった。

イ 手洗沢(吹上村)の田舎し

嘉永五年(一八五三)に吹上村と大泉村はか四か村の、手洗沢溜池の争いがおこった。これは松本の御役所まで実際に届けられた大事件であった。ここでも田舎しが行なわれ溜池もつぶされた。この争いの中で、手洗沢というあるかないかのような沢の水が、いざ大泉川本川の揚げ口が故障したときの人馬の命をつなぐ大事な「恩水」であるということがいわれている。この二段構えの引水計画の用意周到さには全く敬意を表せざるを得ない。と同時に水の重要さ、とくにそれを恵んでくれる上井の貴重さをうかがうことができる。

恐レナガラ書キ付ケヲ以テ願イ上ダ奉リ候

……大泉所山ノ内字手洗沢ト申ス溜池ヨリ流出シ候清水私共四カ村内御領所吹上村共都合五カ村存水用水仕リ候。右水ヲ以テ此ノ度吹上村ニテ新規溜池ヲ廻リ畑田成リ取り給エ候様見受ケ候間右不当ノ始末一昨廿七日迄遺シ方掛ケ合イニ及ビ候エ共其場遺イノ不当不実ナル様抄ノミ申シ聞カセ。沙汰明キ申サズ昨子年中モ盗水仕リ候テ田地取リ掛エ重々捨テ置キ難ク相成リ況ヤ雲雨雷雨ノ節ハ右五カ村組合存水用水大場ゲ口荒川放押シ切り成ハ崩レ引キ井端欠ケ落チ一箇モ通り申サズ共ノ時節ニハ手洗沢ノ水ニテ流末私共四カ村兼々人馬露命相懸ギ候様ノ恩水我儀頼ニ引キ取ラレ殊ニ相手村ノ者共ハ流上ニ御座候エバ平日水等ニハ差シ文エ之無ク罷リ在リ候間流末ノ村々不自由難難ノ事共余処ニ見テ無作法ニ法外ナル溜池田地指エラレ候テハ歴然私共迷惑難波差シ掛リ候ニ付キ無無ク御裁許仕リ候間何卒御慈悲ヲ以テ右相手吹



図4-12 手洗沢と上井水路

上村名主伴左衛門召し出サレ恐レ
ナガラ御吟味ノ上新規灌漑畑成
リ昨子年取リ御エ共ノ外切リ御エ
ノ田地共残ラズ誤シ方仰セ付ケラ
レ下シ置カレ度タ右願イ村水統サ
セ幾重ニモ願イ上ケ奉リ候 以上
嘉永五丑年四月

(四カ村総代)

松本御役所

(中宿文書)

この訴えの結果、双方が呼び
だされて次の「証文」をとりか
わすことになった。せつかく造
った溜池も田もいっさい取り潰しという結果になった。

差上げ申ス後口証文ノ事

一、吹上村ニテ五カ村用水ノ内宇手洗沢筋へ新規灌漑畑成リ井ビニ昨年取
リ捨エ候分共ニ誤シ方申スベキ事

この手洗沢は漏水もあるので以前から問題の所で、これより二〇年
ほど以前の天保六年（一八三五）にも次の一札が入っているが、それ
は個人の一枚であった。

差出シ申ス一札ノ事

一、手洗沢漏水ノ節ハ稲一株モ損エ付ケ仕ル間難キ事
一、筑へ差シ降り徒ガ間難候一切仕ル間難キ事

右カ条ノ通り心得違イ之無キ様相心得申シ候 万一相背キ候ワバ四カ村ニテ
如何様御執リ斗イ遊バサレ候共其頭申シ分御座無ク後日ノタメ差シ出シ申ス
御件ノ如シ

天保六年末七月

吹上村 地主 藤左衛門

大泉村 大泉新田

右村御衆中

富田村 中曾根新田

(中宿文書)

このように天保六年（一八三五）にはすでに手洗沢へは稲一株も植
えないことが約束されている。また筑にいたずらして水を落とすよう
なこともしないとしている。地主が約束しただけでなく村役人も今後
一切させないと、奥印している。

前書ノ通り相違之無ク候以来右村ノ儀一切致サセ申ス間敷ク候念ノタメ奥印
依ッテ件ノ如シ

名主 左衛門
与頭 藤 七

百姓代 文作御門

こんな堅い約束があったにもかかわらず、手洗沢の浅れ水で田はい
まだに作られている。

ウ 堰止めの水論（大泉新田）

大泉川の少ない水を、上流から上井、中井、下井と堰上げて用水と
したので、その堰上げ方法が争いのたねとなった。大泉新田からださ
れた「養水供用妨礙排斥の訴え」がその一つである。訴えの趣旨は大
泉川流水の需用と供給を妨害する上井の工事を排除してほしいと、
大泉新田が他の四カ村大泉吹上富田中曾根を相手どったものである。

そもそも大泉新田の生命線ともいえるべき中井は、明治六年の規定で
公認されたものである。ところがこのごろ大泉新田を除いた他の四カ
村（耕進）で、ひそかに上井揚げ口の伏せ樋工事をおこなっている。こ

れを問責すると表ではあやまりながら、夜に乘じて工事をすすめていく。やむなく上伊那郡役所へ訴えてたところ、懇々と各村の戸長に説得させたが、あえてこれをきき入れなかった。そのうちに工事が竣工して、大泉川全流を締め切って上井へ堰揚げしてしまった。

明治十五年二月一三日、しめきってしまったので、嚴重に談判したが、彼らは応じない。一定の分注法がないのを幸いとして、いくら抗弁しても頑固にそれをゆるぎない。自然の理に反し慣行に反するので、やむなく当地の治安庁へ出訴したが、これにも応じないので、よんどころなく松本裁判所へ出訴した。

養水供用妨碍事件ノ訴エ

連ヤカニ被告入召喚セラレ後ニ他人ノ需用ヲ妨碍セザル様御申シ渡シアラシコトヲ願ヒ奉リ候尚訴訟入費モ被告ヨリ償却仕リ候様併セテ願ヒ奉リ候也。

右

明治十六年一月廿六日

松本始審裁判所長

判事 坐光寺 親殿

伊藤久蔵

(殺場文書)

この大泉新田からの訴願はなかなか片がつかず、東京上等裁判所までいくようになった。その間の処置としてそこは百姓どうしのこと、控訴中の水かけは応急策として次のようにとりきめが成立した。

控訴の審理中に、田植の時節になってしまった。上伊那郡役所の指揮に従って、慣行のいかんを論ぜず分注せよとの、松本裁判所から命令があったので、五カ耕地で協議して、左のようになされた。

御請書

一、御執務ノ田方ハ裁判確定後ノ従前ノ慣行如何ニ關ラズ五カ耕地協力注

通致ス可キ事 但シ裁判決定ニ付テハ此約定ヲ廢スハ勿論ノ事

一、五カ耕地トモ惣代式名ズツ出張協議ノ上昼夜見廻リ水番ヲ指揮シ専ラ流通ニ注意シ公益上損害之無キ様取り計ウ事 但シ明治五壬申已前ニ係ル古田ハ殊更ニ注意シ流水不足之無キ様取り計ウベキ事

二、田方注水水番ハ各耕地トモ三名以上之ヲ置キ過不足之無キ様注意余水ノ分ハ流通致ス可キ事 但シ前条ノ場合ニ於テ不注意ト見做ス時ハ隣耕地ヨリ疑念之無キ為メ組合水番等ノ儀ハ見廻リ人ノ協議ニ任スベシ右ノ通り熟議相成リ候ニ付キテハ親睦協力流通仕ル可ク候之ニ依ッテ五カ耕地惣代連署請書差シ上ゲ候様件ノ如シ

明治十六年六月廿九日

上伊那郡長 伊谷信殿

(五カ耕地二名ズツ連署)
(三カ村戸長 連署)

(殺場文書)

田植えずみの田には、慣行いかに係らず水を流通して、公益上損害のないようにしようというものである。それにしても各耕地から三名ずつというもののしい警戒ぶりには驚くほかない。

一方、大泉新田の控訴に対して、四耕地惣代の大泉原八十古の答弁は、「養水供用妨碍事件ノ控訴答弁」によると、次の要点に示される。それは従来の「石芝」で堰揚げた所はどこかということである。上井へ石芝で堰揚げしても漏水があるから、大泉新田の中井を妨害することにはならない。上井は古くからの御普請所でありその揚げ口は石芝止めという慣例である。その余水で下井用水をとってきたが、中井はその中間にできた新しい井である。

養水供用妨碍事件ノ答弁書

右ノ通り答弁仕リ候衆至当ノ御裁許下サレ宜シク訴訟入費モ悉皆被告へ相償イ候様請求シ奉リ候也

明治十六年

惣代 原 八十古

東京上等裁判所 判事

右代官人 林 和

この事件の結論はどうなったか、はっきりした記録は見当たらない。しかしこの裁判のために要した費用や、さきに施した上井揚げ口の修繕費を、大泉新田が支払う請求書のあることから、恐らく四か村の勝訴となったと見て差支えない。

当時東京まで控訴することは大変な出費を要した。被告側の四村地では、控訴出廷総代をきめ、入費出廷方法をきめて、本格的にこれととりくまねばならなかった。出廷総代は四村地で一名投票を以てきめた総代できめる。出廷総代は一日一円で日当給料とする。この給料内に筆墨紙書料及び郵便料をふくむ。事件勝敗に係らず判決まで代官人へ通着料として金五円、事件勝利になれば祝儀として金一〇円を支払う。このほか種々きめたのち次のように結んでいる。

約定書

一、此度ノ事件タルヤ万一敗訴ヲ取ル事モアラバ直チニ惣代ヲ委任シ養水ニ係リル大事件クレバ双方何方迄モ精神ヲ尽シ徹頭徹尾押シ貫キ申ス可キ事

一、此事件各耕地協議ノ上示談行キ届キ候上ハ直チニ居村惣代ハモトヨリ出廷惣代ト雖モ異議申ス間敷ク迅速ニ得村致スベキ事

前書ノ通り約定候上ハ期モ違乱之無ク此ノ約定遵守致スベク後日ノタノ違著致ス処件ノ如シ

(四カ耕地惣代十八名連署)

明治十六年九月廿二日

出廷惣代タルニ付キ

調印致シ候也 原八十吉郎

(大泉区有文書)

このように、単に井筋の揚げ口の揚水方法について、これだけの費

用と労力を費して、東京まで出る裁判が行なわれたのである。

ところがこの裁判は五か井の裁判であるので、原告大泉新田も費用の負担が必要になる。今係争中なので大泉新田とは敵味方となっていないが、いずれは大泉新田からも支払ってもらおうというので次のように分担して立て替えてある。

一、金百円 割合

大泉新田分立替

耕地名

此内訳 三九・二〇五

(四円三五二)

大泉新田出金高

一八・七九五

(二・〇八七)

吹上耕地

一六・〇〇〇

(二・七七六)

富田

一六・〇〇〇

(二・七七六)

中曽根

この立て替えは次のように、取立ての委任状がでている。

委任状

一、拍者共上伊那郡南箕輪村大泉耕地原係左衛門・同郡西箕輪村中曾根耕地唐沢五郎七郎以テ部代理人ト定メ拙者共ノ名義ニテ左ノ権限ヲ代理致サセ候事

一、同郡西箕輪村ノ内大泉新田(係ル養水路修繕費滞リ催促ノ事件右委任状件ノ如シ)

(四カ耕地計五名連署)

明治十七年七月廿日

(大泉区有文書)

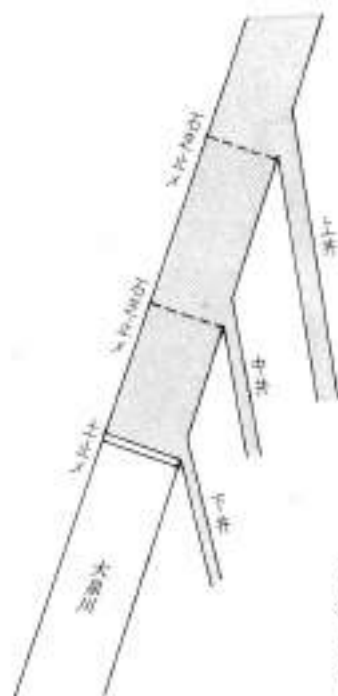


図4-13 大泉川の井堰の配置

この委任状と同一形式で代表ばかりでなく、因か耕地面積とされる大勢の印をおしたものが、「養水路修繕入費請求の事件」と催促が請求になった記録もある。

以上は三つの井筒が、少ない水を掘り出るのでその掘上げ方が問題になった紛争である。ここで固く守られている三つの掘の掘り方を図示すると図4-13のようになる。

エ 中板分枋の紛争（吹上村と）

大枋においては、既に元禄時代から分量が三分ときまっていたので、ほとんど紛争はなかった。中板分枋は飲用水の権利が田用水の権利かという深刻な問題をほらみ、時がたつにつれて新たな既成事実も生じてきて何かと問題の多い分枋であった。

さきの明治六年の規定では中板分枋をつくり、大泉村が四尺、吹上村が一尺ときまり、それに甲斐までつけて厳重にしてあった。これは吹上村の両三戸の飲用水であるから、優先的にとるように考えたのが、何の抵抗もなくきまった。これでいっさい問題はなくなったかにみえたが、明治一〇年には、早くも紛争がおきた。

この年、吹上から出された「上申書」には、吹上で中板の分水で畑を田にしようと上申した。これは大泉としては許せなかった。

上申書

……私共心得ニハ別紙示談書ノ通り相定メ候上ハ、巻尺口ノ分ハ当村限リニテ相用イ候テ然ルベシト恐レナガウ存シ奉リ候。

このように一尺口は吹上で自由に使用してよろしい水と考えているのに、大泉では一尺口は飲用水だけで、流末は大泉の下井へ落とすようになっていると考えていた。この吹上の上申書は、長野県から次のように却下された。

書置ノ相田成リ水行ノ義ニ付キ……詮議シ難ク書類却下候事

明治十年四月五日

長野県（朱書）

（大泉区有文書）

明治六年の規定では、吹上の両三戸の飲用水で、今般実意をもって分枋を作ったとしているが、別項に中井のとりきめがあり、そこに田用水勝手の規定があった。

両村分水口上ノ方吹上村田用水ノ儀ハ是迄ノ通り左右ニ引取ルベク、尤モ切リ等ハ相成ラズ、樹下ノ義ハ田用水勝手タル……

この項は中板分枋の分水についてではなく、大泉川から取水している中井やその他の田用水のことであると大泉では主張し、吹上ではいよりの井筒でも共通だと主張している。

この一件はなかなかあかちがいがあらず、東京上等裁判所へ控訴した。「水利契約履行の控訴」がそれである。この件で大泉から上京した原八十吉は、証書類五二冊と総代届と委任状をもっていったが、きめ手にはならず却下されてしまった。

明治一三年になって、長野県庁に呼び出された両村の代表によって、示談書が一応まとまった。それは、中板分枋を大泉四尺はそのままとし、吹上分一尺を八寸に減縮する。その代わり吹上で中板分水を田用水に使うことができるようにする。吹上で一坪の地を提供し、水番小屋を建てて、両村から水番をだす。水番をする地までの遠近から今回限り五〇円を吹上から大泉に出すこととする。

この示談がまとまり、次の「条約書」原案ができて、調印寸前までいった。

条約書

上伊那郡南箕輪村大泉村と同郡西箕輪村吹上村と二保ルル中板分水ノ儀明治六年ニ於テ分量尺度相立テ候エ共當時成立書面ノ不完全ニヨリ往々紛議生ジ候ニ付今般更ニ双方熟議ヲ過ケ其ノ方法ヲ定ムル左ノ條款ノ

如シ

一、字中坂分折定度吹上分毫尺ノ地今般二寸減縮シハ寸トシ大泉分ハ従前ノ通り四尺タルベキ事 但シ折口減縮スルハ南方ヨリ相縮メ申ス可キ事

一、前条分水ノ儀ハ其ノ定度限リ大泉ニテモ吹上ニテモ吞養水又ハ田養水タリトモ自由ニ使用ス其ノ他使用方ハ明治六年取リ為替ノ通りタルベキ事

一、以下四條略……

右ノ通り協議示談行キ届キ確定条約候條水ク違変アルベカラズ、因ッテ違變致シ置キ候所件ノ如シ

明治十三年十一月十五日

上伊都郡南箕輪村大泉耕地総代

源 信一

清水 宇宅

清水 三三

戸長 清水平一郎

有賀 文三

有賀伝四郎

戸長 廣沢彦三郎

大泉区有文書

書面定約書ノ録聞キ候事 長野県

この示談書は、実施されなかった。その経緯は、時の戸長清水平一郎が松本裁判所長へ提出した、明治一四年六月二日付けの「手続き書」に長々と詳細に記されている。それによると、双方の総代と戸長が長野県庁に呼び出され、清水戸長が双方の意見をくみとって、ようやくまとめた示談書原案を示すと、双方ともその晩は賛成していたので翌朝調印することになっていた。朝になると大泉の総代が一人堀村してしまつた。話はまとまっていたので調印して堀村へ差し出したから「書面定約ノ録聞キ置キ候事」と朱書してくれた。その晩、大泉から電報で定約を見あわせよといつてきた。

事の次第は、先に堀村した総代によって、示談書の内容を示したところ、耕地内がどうこうとしておさまらない。むしろ大泉が十分の内容ではないかと考えられていたのにこれは意外であつたと清水戸長は述べている。

大泉ではどうしてもこの示談書を取り消してほしいと願ひ出し、明治御一新という時代をわきまえない、昔の慣習や権利ばかりを主張すると、いろいろに論じたが、断固として応じない。

書面最前指令取消シノ義願イノ通り聴キ届ケ候事

をいただいて、ようやく県庁での先の朱書は取り消された。

こんな大さわぎをしてまで、中坂分折の水を田に使うことに、大泉の村民は村をあげて抵抗した。汲み用だけの水を田用水にすることが、どれほど大きなことであつたかが伺える。と同時に時の戸長にさえわからないほど、大泉がこの上井を生命の綱とし、上井に執念をもっていたことを知ることができる。

明治一五年になつて、「水論和解定約証」がついにできあがつた。これは現在も通用しているもので、仲裁人は戸長でなく民間人であつた。

水論和解定約証——中坂分折図面附——

上伊都郡南箕輪村大泉耕地と同郡西箕輪村吹上耕地トノ間ニ起ル字中坂分折分水給言ノ儀。水度尺量ノ確定シ永遠ニ用水ノ欠クルヲ補フ親睦協議面従シ以テ用水ノ残水ヲシテ田ラシテ水田ニ換ニ相互其ノ美果ヲ給ハントス。大泉吹上ノ西耕地ニシテ此ノ条約ノ清整シタル後必ズヤ異議スル所ナク、本文數款ノ通り相互ニ其ノ盟約スルコト左ノ通り

第一条 一、字中坂分折ノ儀ハ従前五尺ノ内四尺大泉、一尺吹上タリシヲ、今般改メテ別紙図面ノ通り、大泉四尺三寸二分五厘、吹上六寸七分五厘ト相定ムルコト

第二條 一、大泉耕地用水ハ第一條法ノ分水ハ従前ノ通り何方ヘ流水シ畑田成リ及ビ溜池等ハ勝手タル可キ事

第三條 一、吹上耕地用水ハ第一條法ノ分水ヲ以テ字目向字二ノ宮及ビ何方ヘ流水シ畑田成リ開拓等ハ勝手タル可キ事

第四條 一、大泉用水路ノ際ハ十間以内ヘ畑田成リ相成ラズ左井路南方是迄畑田成リハ据エ置キノコト 但シ有賀義次畑田成リ一枚ハ七間ヲ離ルベシ
第五條 一、吹上ニテ新規通水井筋ハ大泉用水ヲ掛越ニテ打越シノ位置スルトコロハ現時定ムル所ノ井口ヨリ三間四尺下ヲ以テ打越シ其ノ一箇所ノ他必ズ掛越打越シ等致ス間敷キコト

第六條 一、今般確定スルトコロノ分排水ニテ字目向通り田所用水残水アルトキハ大泉下井ヘ落シ入レ申ス可キ事

第七條 一、水害小屋敷地ノ儀ハ吹上耕地ニテ二坪無代値ニテ造シ出水道水害小屋敷地トシテ定メ置クコト 但シ小屋掛ノ儀ハ両耕地ニテ致スベキコト

第八條 一、水番人ハ両耕地ヨリ一名宛星夜トモ出勤スベシ右ノ勤休ハ協議ノ上ニ當ニ致スコシ 但シ番期ハ小満ヨリ二百十日迄日數百日間ノ事

第九條 一、大泉用水路新規水車相成ラズ 但シ従前ノモノト雖モ旱魃ノ時ハ水害水車相止メ申ス可キ事

第十條 一、水掛設置申裁人立チ会イ据エ置メ申ス可キ事 但シ従来ノ修繕双方立会イノ故、別紙図面ノ通り執リ行イ其ノ費用ハ分量ニ応ジ割賦セシムベシ

右ノ通り申裁人立入り双方熟議行キ届キ該事業ニ付テハ将来異議之有ル間數ク依ツテ各自違議取為替セシ約定書件ノ如シ

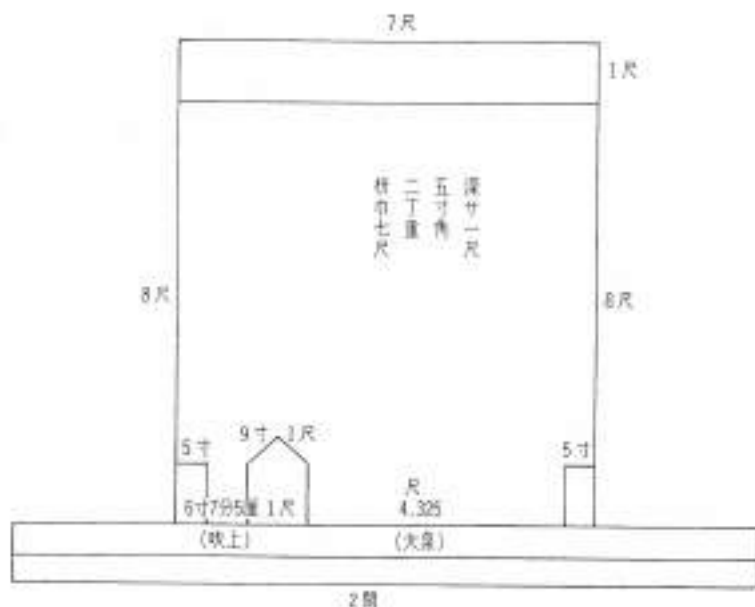
明治十五年六月廿日

西宮輪村 吹上耕地總代 有賀忠左衛門

(ほか一〇名連署)

南宮輪村 大泉耕地總代 原 孫左衛門

(ほか三名連署)



井口ヨリ出積マデノ距離3間4尺ノコト

図4-14 中板分掛の平面図 (明治15年)
(6寸7分5厘吹上分, 4尺3寸2分5厘大泉分)

追加

一、前条示談趣意金トシ今般限り金五百五十円吹上耕地ヨリ大泉耕地ヘ差シ出スコト

右 大泉耕地總代 原 八十吉
吹上耕地總代 有賀文一

同 大泉井掛總代 酒井七左衛門

(ほか一五名連署)

西宮輪村中曾根耕地 仲裁人 廣沢五郎七
伊那村ノ内小沢耕地 仲裁人 山岸七郎

この定約証によって、大泉分四尺三寸二分五厘、吹上分六寸七分五厘と掛口がきまり、両方で二坪の水番小屋をたてて一〇〇日間の番水をし、趣意金として五五〇円を吹上が出すこと等がきまった。今まで飲用水だけだった大泉井から分水して、田用水を得たことは吹上にとつては大変革であり大前進であった。

先にものべたように明治一五年に定約ができてから、大きな紛争もなく現在に至っている。ただ現在では水番小屋もないし水番が岡林地から出ることもないが、この掛口によってかなり規定外の水を吹上側へ流そうとするいたずらのある分析である。

オ 水車の紛争

水が少ないので水車を営むことも簡単には許可されなかった。水路からの漏水や飛散による減水が問題であった。明治六年の規定では次のようになっている。

一、水車ノ儀ハ是迄在リ来リノ外新規一切相成ラズ候事 但シ減水ニ相成リ候節ハ双方談事ノ上水車相止メ申ス可キ事

新規の水車は一切認めない、古い水車でも減水になれば止める。これは当然として認められていたのか、紛争の記録はないが、水車移転には紛争がおきた。

移転の紛争

約束証

一、抽着官業係リ在リ候水車ノ儀ニ付廿四年度ニ於テ水車設置ノ箇所貴林地へ無断変更候処今般貴林地ヨリ水車ノ箇所変更候ハ明治六年ノ取為替ニ違反シ特ニ土功条規ニモ由ラザル者ニツキ今般故障致サレ候処モナル儀ニ付キ従前在リ来リノ箇所へ移転仕ル可ク候依ツテ後日ノタメ約束証発行シ候処相違之無ク候也

但シ水車運転ノ儀ハ明治六年ノ取為替通り相止メ申ス可ク候事

明治廿五年八月廿三日

上伊那郡西筑輪村百五番地唐沢長太郎

南筑輪村大泉新地惣代

原新三殿

清水正聖殿

外惣代 御中

(大泉区有文書)

この件は、このようにおとなしく、従前の所へ水車を戻すことで落着いた。

水車取り払いの一件 明治一七年三月三日、唐沢政市が清水市三に、金一九四四圓で、水車と権利を売却した。ところが唐沢政市も水車を回していたので、明治三十九年四月九日に、次のように「特約証」がとりかわされ、取り払いとなった。

特約証

一、今般示談ノ上私所有水車是迄有リ来リノ水車ト同一ノ権利アル事ニ御認定相成リ候ニ付キ(但シ売買及ビ移転ハ相成ラザル事)本村九十六番地唐沢政市所有ノ水車ハ私方ニテ譲判ノ上取り払い致サセ申ス可キ候、若シ一該人ニテ此ノ取り払い致サズ候時ハ私方水車取り払い申ス可キ事ニ特約致シ置キ申シ候 仍ツテ証書件ノ如シ

明治三十九年四月九日

(大泉区有文書)

この証書には本人のほか保証人が四人連署し、大泉総代あてに特約している。

新設水車問題 明治二五年に大泉新田には水車が従前のもの一か所のほかに、三か所新設されていた。

新旧水車取調

一、従前水車 原寛一郎(ほか一〇名略)

一、新設水車 原 善次、清水佐十、唐沢政一

明治廿五年八月廿二日

(大泉区有文書)

新設水車は大問題であった。原告は大泉九一名代表田中喜代・清水正堅、原信一、原八十吉で、被告は原吉次の訴訟がはじまった。その概要は次のようであった。

明治二〇年に水車屋を新設して上井の水を引用して水利の妨害をしているから、この水車を取り払ってほしいと訴訟に及んだ。被告は、この井は国のもので何人も随意に使ってよろしいし、水を使用してもすぐに本流へ合水するから少しも水利の妨害はしていないと抗弁している。しかし、この井堰は五か村に限って使用できるものであるし、たとえ天下のものであっても他人に害のある場合は自由に使うてはならない。たとえ水車のための分水路は小距離であっても減水は確かである。

また被告は以上の有賀彦太郎から水車権利を買ったというが、それは機械を買っただけで、彦太郎は現に水車営業をしている。そのうえ五基の田を買ったおきながら九基の営業をしていて、多量の水を引用しているから水利妨害の事実も著明である。

裁判ではこの器械だけ買ったということは認められず「水車営業権」を換え「もあつて」一応権利は認められたが、吹上で買った権利を大泉新田で使用するの違法であるとして、被告は論議で上井の水を使用する権利はないと認めざるを得ないと、判決は下った。

使用期間の制限 水が少ないので、すでにある水車の使用も期間を限って許された。

差シ上ゲ申ス証書

拙者鎌倉新田上井用水へばつたりヲ取り給エ用水ヲ使用致シ候所今般御談事ニ相成リ候ニ付テ御無心申シ上テ候テ毎年八十八夜ヨリ二百十日迄はつたりヲ差シ止メ置キ申ス可ク候後日連綿之無キタメ一札差シ上ゲ候是依ッテ件ノ如シ

明治廿五年五月十六日

上伊那郡西宮輪村大泉惣代 原信一殿

外惣代 御中

追ッテ修繕致シ候節ハ貴新田へ御届ケ御見分相受ケ申ス可ク候事

(中宮文書)

このような届は吹上からも大泉新田からも出ている。

営業用には決していたさないで、自家用だけとつけ加えてあるものもある。このようにして水車による減水を防いだのである。

水車の急停止 また、急に水車を停止させることもあった。次の回章はその例である。

回章

回章ヲ以テ申シ上ゲ候 陳レバ本年ハ非常ノ旱魃ニテ日増シニ減水相成リ候ニ付テ増水相成リ候迄一時水車相止メ井水ノ涸渇ナラザル様致シ度キニ付テ右様御内水車使用人へ御諭示和成り度ク此ノ段御照会ニ及ビ候也

追ッテ御了承ノ上ハ認印成サレ度ク候也

明治二十六年七月十二日

大泉新田区部長 原新太郎殿

吹上区部長 有賀彦太郎殿

大泉惣代月書 原信一

足鉄二銭五厘ズツ御渡シ下サレ度ク候也

(中宮文書)

この通知を出したのに、これに応じない者が出来て来てそれが訴訟になった。「水車用水引用差シ止メ事件ノ訴状」の原告が大泉の原信三外九一名、被告が西宮輪村六九番地の原新太郎であった。

判決は大泉の請求どおりに水車を停止することになったが、被告はこれを不服として控訴した。不服の控訴状は長野地方裁判所長あてにだされた。

表4-5 水車営業表

(明治26年)	
木下	四
久保北	九
久保南	四
北殿	三
大泉	一
大泉新田	一
吹上	一
南殿	五
田畑	二
神子榮	六

(役場文書)

ったことをものがたっている。水車による減水も事実相当であったかと思われる。

製糸器械としての水車 水車ははじめ搗米の動力源が主であったが、時代がたつて、明治三〇年代には製糸業の動力源ともなった。

証

上伊那郡西筑輪村一〇五番地製糸所製糸器械運転ノタメ本年六月中貴籍地上井用水路へ無断ニ水車ヲ新設シ使用候処貴籍地ヨリ該水車差止め御談ニ及バレ何共申訳之無ク候 然ル上ハ右水車番通ヤカニ取り払イ申ス可ク候後日ノ為ニ証書差入レ申シ候趣件ノ如シ

明治三拾二年七月十三日

西筑輪村大泉 惣代御中

西筑輪村百八番地 唐沢長太郎

(大泉区有文書)

このように水車を取り払うと約束しているが、これがまた簡単には取まらなかった。

明治三六年になって、この水車取り払い事件の裁判が起こつていく。原告は大泉区民一〇一名、被告は長太郎である。その伊那区裁判所の判決は次のようである。

被告ハ西筑輪村一〇五番地ニ建設シアル水車ヲ取り払ウ可シ。若シ被告ニ於テ取り払イヲ為サザル時ハ原告ハ被告ノ費用ヲ以テ取り払ウ可シ。訴訟ノ費用ハ被告ノ負担トス

明治三十六年十月三十一日

伊那区裁判所ニ於テ 判事阿川深蔵

(中宿文書)

判決により明治三十七年八月二日、伊那区裁判所の執達吏によって、午後三時から完全に取り払われた。

動力がなくては製糸器械が回らない、そこで別の水車の権利を求めて、西筑輪村長の証明のある水車が登場してきた。それは新しい水車であつてはならないので、水車の来歴がしるされている。

明治一〇年三月

皇親取調長野県権令第百四号

明治一七年一月二日

唐沢秀太郎へ売渡ス(二三元一九銭七厘五毛)

明治二六年三月

唐沢文太郎へ売渡ス

明治三六年九月四日

唐沢貞雄買ひ請け

(水車売渡証明三六・五・二九 四十五円也)

(中宿文書)

ところがこの水車がまた紛争の種となった。第一に場所が製糸所と一四一五間も離れている。第二にその水車の運転方法が異なる。第三に唐沢文太郎がその背搦したという水車は跡形もなくなっている。場所が違うということは、慣例で新設と見なされ認められないし、跡形もない水車を買ったといつてもそれも新設で認めるわけにはいかない。したがって権利のない水車を建設しても権利を認める

第1節 水を求めて

わけにいかない。

上井用水に対するこのきびしいおきてと慣例、それにもかかわらず水車が欲しい。このような曲折を経て、どのように水車を利用していったか、いかなかったか、はつきりしない。残された文書には、大正元年になってようやく契約が成立して正式に水車が使えるようになった。

大正元年一〇月二七日 唐沢員雄と水利権契約成立

大正四年二月七日 南信組合に継承す。

大正六年一二月二二日 唐沢員雄に復権。(南信組合解散)

ようやくまとまったこの水車権は次のように、内容証明の郵便で大泉に通知され、権利の存続がはかられている。

通知書

大正元年十月二七日附唐沢員雄清水町兵衛殿外拾名ノ契約ニ係ル製糸用水使用ノ件、其ノ後大正三年中ニ唐沢員雄大泉区惣代ト協議ノ上該契約ヲ南信生糸販賣組合ヘ継承使用スル事ニ致シ置キ候エ共使用場所及ビ契約者名変更等ハ絶対ニ許サザルコト、及ビ唐沢員雄ニ於テ復旧使用スル場合ニハ南信組合ハ優先権アル唐沢員雄及ビ大泉区ニ対シ何等協議申シ出デ出来ザルハ勿論現契約場所即チ西宮輪村一五七三番地ヲ変更他他譲渡ニ於テ該水利権ヲ以テ南信組合ノ使用スルコトヲ許サズ依テ大泉区ニ於テ唐沢員雄ノ契約ト何等關係ナキ特別性質ノ契約ヲ南信組合ト締結セル場合ハ此ノ限りニ非ズ唐沢員雄トノ契約ハ何等異動ナキモノト御承知成シ下シ置カレ度ク右御通知申シ上ダ候也

大正五年四月三日

中宮輪村 唐沢員雄

南宮輪村大泉区惣代区長 田中静雄殿

これはこの日付で木下郵便局から書留内容証明郵便として出された。

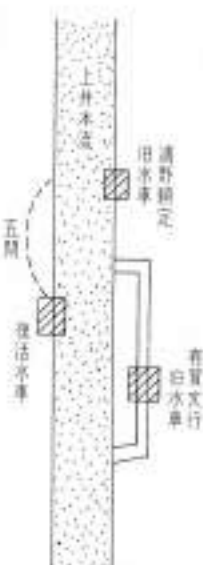
続いて、大正六年一二月二六日、同じく内容証明の書留で、同年一二月二二日で南信組合が解散したので、水利権は唐沢員雄に復権した

という「通知書」が届けられている。

このような水車の水利権は昭和になっても大事にされ次のような届が出ていた。

水車移転合同御届

今般浦野頼定及ビ有賀文行ノ藩ヲ利用致シ協同精米所ヲ左図ノ通り水車移転合同ス可ク、右此ノ段御届ケ申シ上ダマス。



昭和二十四年二月二十八日

西宮輪村吹上 浦野頼定 外四十九名

南宮輪村大泉区長殿

(中宮文書)

五〇名にも及ぶ共同精米所用の水車ではあるが、念には念を入れて、もしこの精米所が解散した場合には、権利を復活してほしいとの願いも同時にだされている。

これより少し前の大正一五年にも、大泉井と水車との関係で、次のような「覚」がとりかわされている。

覚

私宅精米業動力ニ関シ大正十三年以降ニ於テ官種ノ機二付キ大泉井ニ係ル御損害ハ御相知掛ケ申ス間敷キ事

大正十五年十二月二十二日

有賀三喜三 御

大泉井保護

昭和の現代になっても、水路を改良するとき、この水車との関係が

3 新井

(1) 新井の認可

下井の水が不足して上井をつくり、ようやくに渴をいやしてきた大泉が、明治の新時代を迎えた。両井をもつても水不足は依然として続いているのに、大泉新田と吹上は「中井」の許可を本山県属からとってしまった。旧来の慣行水利権は認められず、明治六年の規定書でそれを認めざるを得なかった。本山県属のなす無謀なことに嘆いてみても、世は新しく変わりつつあった。この危機に立った大泉の村人たちは、これに対して立ち上がった。明治七年一月、大泉単独で「新井」の計画をたてた。お願い書「書付ケテ以テ願イ奉リ候」はその間の事情を詳しくのべている。

大泉は原野の中央にあつて水便が悪く、上井を大泉所から引いているが、飲用水だけしかない。下井もあるがこれも湯水の時には揚げ口に水が届かない。村で相談して村内へ縦井戸一か所を掘って飲用水にあて、上井下井の合水で村の西方で畑を田に開いてきた。わずかの水田であるが、水番を昼夜つけて一日に一度は水を注いで、丹誠こめ

て耕作している。ところが一昨年四年（明治六年）に吹上と大泉新田へ分水の御処分をされて畑田成りが多分にできたので、流末の大泉では植え付けができないで難儀している。

そこで種々勘案して大泉所の日陰山と唱える、一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢、四ノ沢に少々ずつ水が湧き出ているが、途中で浸み失せているので、山の中腹へ井筋を廻りこの水を引き取り田地の助け水にしたい。そのようにすれば他へ差し障りもなく水を得られる。そうすれば水の不自由もなくなり、荒地を五町歩（五ha）ほど畑田成りをすることができる。

……何卒格別ノ御慈悲ヲ以テ右三沢ノ水大泉（下シ置カレ候様備ニ村方一同願イ上げ奉リ候 謹言 明治七年十一月

（役場文書）

これは文字どおりの村方一同の懇願であった。翌明治八年一月一七日にも再び懇願している。

筑摩県の権令からは井組村々の示談をとった上で願書を差し出すようにいわれた。そこで五か井組の集会で談判したところ全会一致で示談が成立した。調印の段になって、吹上だけが調印しない。そもそも吹上は飲用水だけだったのに、明治六年の規定で新しく中井を認め中坂分科もこしらえたので、多くの畑田成りができた。別に故障は申さないが調印をしてくれない。どうか吹上村を召し出して調印を仰せ付けていただきたい。

……右吹上村新召し出し示談書へ調印致シ候様御付ケラレ前条願イ奉リ候通り御許可成シ下サレ度ク別紙示談書相添エ伏シテ願イ奉リ候
明治八年二月二十五日

右村総代 原八十吉

同 原孫左衛門

願戸長 清水宇宅

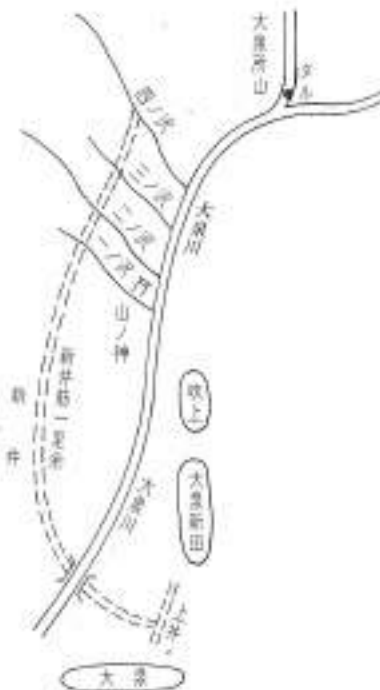


図4-15 新井の井筋略図

筑摩県権令 永山盛輝殿

このような経過を経て、吹上は召し出されて説得され示談が成立したので、正式に願書を提出した。

……吹上村御召出し御利解成シ下シ置カレ之ニ依テ別書ノ通り双方示談行キ届キ惣運印仕リ候間先般差シ上ダ奉リ候願ノ通り仰セ付ケラレ下シ置カレ候様伏シテ懇願シ奉リ候

明治八年四月十七日

右村地惣代 酒井七左衛門

原 左衛門

原 八十吉

副戸長 原 新吾

筑摩県権令 永山盛輝殿

(役場文書)

権令からは、見分の上何分の指令を下すという朱書が同日付で記された。それもそのはず、その「示談約定書」は、五か村の耕地惣代田持惣代の計三七名が連署している大がかりなものであったからである。それにしても四月一五日に成立した示談書をもって、同一七日には県へ届け、次のような県の印をもらっている。そのスピードぶりに、大泉の熱意が現れている。

書面新井領リ願イノ義実地見分ノ上何分ノ指令ニ及ブ可キ事

明治八年四月十七日

さて、その示談書の内容であるが、富田・中曾根は新井には賛成、ただしその水量を大坂頭で測ってその三分だけは太田で増やしてほしい。(この結果、太田で同耕地取得分が三分だったのを三分二厘に増やした)。吹上と大泉新田は中井と中坂分析や二寸口で分水してもらったから、新しい条件はださない。というのであった。これは大泉側でもこの中井については異議を申し立てたが「御利解成重申間カサレ余儀無ク

……」とあるように、きびしく迫られてやむなく認めざるを得なかった。それとひきかえにこの新井についてようやく吹上の印も得られてはったとしていた。

ところが、思いがけない故障が大泉川下流の田畑耕地からでできた。明治八年六月二八日にだされた「流上畑田成り難波願」がそれである。田畑耕地の田方養水は源を大泉所山に発する大泉川で、中途は伏流しているが下流で現れて、六か所から水を引き取って一町歩余を養っている。ところが明治五、六年に流上で新しく中井をこしらえ畑田成りの許可を下されてしまった。苦情を申し上げたがほんのわずかな反別であるし、新しい開化の時代には有を以て無に通じなければならぬから、これを採用する方針だと厳命されたので黙っていた。それならば久保耕地の柳か洞の湧水を引き取らせてと申し出たが、他日見分の上と申され難波して今日まで何の音沙汰もない。

本年になって大泉で新井をこしらえる由をきいて、水の少ない川筋で無限に畑田成りができては流末は難波の極みで忍びがたい。元来、飲用水ならば人馬が飲料の外は元の大泉川へ注ぐので被害は少ないが、吹上のように北側へ畑田成りをされてはそれともならず、流末がこれかわくのは必至である。

……元来呑用水ノ儀ハ人馬飲料ノ外元川筋へ相注ぎ候処此ノ上吹上耕地願ノ通り畑田成り御取付ケ相成り候テハ潤旱必然ニ付キ損ニ立チ至ル可ク至申以時熱心刻苦仕リ候段恐レナガラ御利解成シ下シ置カレ古田水統相成り候様願ニ願イ上ダ奉リ候以上

明治八年六月廿八日

右村地惣代 戸田八

(以下九人)

筑摩県権令 永山盛輝殿

(役場文書)

この難決断には戸長高木省三、倉田三郎、清水平一郎も奥印している。さらに同一趣旨の願書が七月五日にもだされた。

この願書には地図がついていて、大泉川右岸から田畑耕地へ六か所からの引水路が記され、吹上大泉新田両耕地が左岸へ畑田成りをして、いることが強調されている。

この田畑耕地からの意外の故障に対して大泉耕地からは、何のいわれもないことだと「御願い書」がだされた。

御願い書

……何ノ謂モ之無ク新井掘リ割リ大泉所流水利ヲ取リ候儀迷惑ノ趣横道ニ拒
障申出テ候ニ共元來大泉所流水利ノ儀ハ旧大泉村外四カ村用水ニテ確固タル証
書モ之有リ殊ニ用水路ノ儀モ大泉川通リヨリ遠ニ北方ニ之有リ田畑耕地トハ
方位等隔絶致シ特モ田畑耕地トハ關係ノ儀之無ク候ニ共謂無キ故障申シ耕
地……示談書調印差シ拒ミ候間何卒御慈悲ヲ以テ田畑耕地ニ於テ拒障等申
シ限ラズ示談書調印速ヤカニ相成リ候様仰セ付ケラレ度ク此ノ段偏ニ願い奉
リ候以上

明治八年六月

(役場文書)

これにも戸長の奥印がある。田畑耕地では水がかけるといい、大泉耕地では関係がないという争いであった。

この結果、示談が九月になってようやくまとまった。それには大泉所出水の用水について、富田中留根に三分分水したこと、吹上と大泉新田が汲み用だけだったのを明治六年に新規に中井を認めて畑田成りが上流で多分にできてしまった経過をまづくわしく述べ、そこで大泉耕地の飲用水や古田用水に支障を来たしたので、日陰山の水をひくこの「新井」を願ひでた。田畑耕地の故障で裁判になるところだったが、村吏が仲裁に入って、次のような示談が成立した。

示談口証

一、大泉耕地ニテ字大泉所山日陰字一ノ沢ヨリ四ノ沢迄合ワセ四沢湧水新ニ別井相立テ引キ取り古田ノ養水ニ致シ余水モ之有リ候ワバ自然湧流之景況モ之有リ候間字高根南大泉新田通リヨリ南ノ方へ畑田成リ開拓等取リ掛エ申ス可ク右ニ付テハ田畑耕地養水並支エ相成ル可キニ付キ水利土功手伝イトシテ人足三百人、大泉耕地ヨリ差出シ申ス可ク然ル上ハ田畑耕地ニテ故障節決シテ申ス間敷ク候事

明治八年九月廿七日

(役場文書)

このように新井の余水を田にすると、できるだけ南側へこしらえること、人足三〇〇人を田畑耕地の用水手伝いに大泉からだすこととで妥結した。

ここで注意したいのは、田畑耕地からだされた故障は大泉の新井に對するものでなく、大泉新田と吹上の中井に對する故障であった。これは水を左岸へ放つてしまうということではなかなか承知しなかった。明治八年一月七日には、「流上畑田成リ故障再御願い」がだされている。再御願いの理由は、潜流の水脈が真直ぐにつながっていると信じ將來を心配してのことではあるが、実際に当時水不足に悩んでいたものであった。

しかし、この再御願いの結論は案外簡単で、地形からみて水脈が異なるとして書類却下になってしまった。

畫面大泉川流上吹上大泉新田畑田成リノ儀故障申シ立テニヨリ實地ノ景況見分ニ及ビ候所其地へ湧出シ候水脈ハ右大泉川トハ地景異リ申シ立テノ趣信用相成リ難キニ付キ書面下ダ候シ候事

明治九年四月廿八日

筑摩県志 高木恒矩

(役場文書)

いろいろと曲折はあったが、新井の許可はこの却下より前に交付された。これは大きな事件であった。大泉だけの民費で、急傾斜の山の斜面を掘り割って、延々三〇〇〇余間もの井筋を引こうとする意気も盛んだが、それにもましてこの許可は大きな喜びであった。

書面大泉所山の内字日影山ヨリ入会株場宇大芝原ヲ經大泉林地マデ長サ三千六十六間新井筋並民費ヲ以テ築造ノ儀圖キ届ケ候條落成ノ上ハ尚諸般詳細取リ調べ伺イ出ズ可ク候事

明治八年十二月三日

筑摩県参事 高木惟矩

(役場文書)

(2) 新井の成立

明治八年の二月三日付で認可のおりたこの新井は、翌年の一月には完成して、次のような「御届書」がでている。

御届書

………実地御見分成立シ下シ置カレ同年十二月中御許可相成リ候ニ付キ早速取
リ掛り掘り割り成功致シ候圖諸般取リ調べ書相添テ御届ケ申シ上ゲ奉リ候以
上

明治九年一月

右村總代

酒井七左衛門

原 孫左衛門

原 八十吉

筑摩県参事 高木惟矩

(役場文書)

認可がおりて直ちに着工し、あっという間にできあがった。しかしそれは簡単な工事ではなかった。さきの御届書には「大泉林地新井掘り割り落成書キ上ゲ記」がついていてその規模の大きさをうかがう

ことができる。

一、実地反別二百式拾四丁毫反毫貳廿四歩

入会地四ノ沢ヨリ被堀掘り割り長サ六百九十六間

入会地大芝原掘り割り長サ二千二百拾間

民有地掘り割り掛堀堀共長サ百五十六間

一、新井長路三千六拾貳間 但シ掘り割り掛堀堀共

此ノ経費金四百四拾三圓九拾八錢七厘五毛

此ノ潰地壹町貳畝貳歩 但シ井幅三尺兩縁壹尺五寸ズ平均六尺

(役場文書)

この延長三〇六二間もの長さ、当時四四二圓余の経費を投じて、掘り割り、掛堀をし、埋め植をした。その人足が合計四〇四九人、大工六二人五分という大がかりなものであった。その内訳は次表のとおりである。

表4-1 新井掘造の人夫と資金

潰地	長さ	掘割人夫	資金
一、大泉所	六九六間(掘割)	二七八四人(二間二)	二七八・四円(一〇錢)
一、大芝原	二二一〇間(掘割)	一一〇五人(二間二)	一一〇・五円(〃)
一、民有地林	五六間(掘割三五間)	五六人	
	土地一畝二六歩	地価壹反二付	
	松木一〇・五挺	一円五〇錢	
一、民有地畑	二〇間 畑二〇歩(二反一八〇錢)	大工一〇〇人 松木一〇挺	
一、民有芝地	六〇間 理種三〇挺 地価三〇錢(二反二付)	大工三〇〇人 松木一〇挺	
一、大泉川流敷	長四間掛渡し 松木二挺	大工四人 人夫八人	
一、民有芝地	一六間 松木八挺	大工八人 人夫一六人	

この表でもわかるように、井筋には入会地があり、また民有地が合

計五畝余あり、大泉川は掛樋で越した。その畑や芝地や林を一つ一つ交渉してようやく井筋が通った。涌水をふせぐために松樋木が六〇挺、栗柱木九本、鋸も一〇挺あった。これだけの大工事を一切民費で短日月に成しとげた。

「右ノ通り悉皆民費ヲ以テ落成仕り候間詳細取り調べ申シ上ダ率リ候以上」この届書の結びの文字の中にも、大泉の人々がこの井にかけた熱気が感じられる。

この新井によって、大泉ではかつてないたくさんの田ができたが、その畑田成りの認可は同年三月におりた。

右ハ客歲新井堀掘り制ノ節議約示談証ノ通り今般畑田成り開拓仕り度ク右ニ付テ故違等ハ嗣モ之無ク候間御認可成シ下シ置カレ候様願イ上ダ率リ候以上

明治九年三月

右耕田地代 酒井七左衛門

原 孫左衛門

原 八十吉

筑摩県参事 高木惟矩殿

書面畑田成りノ備聞キ置キ候事

明治九年三月廿四日

筑摩県参事高木惟矩殿

(役場文書)

このとき出された畑田成りの「見込み書」には二七筆合計三九町歩の田ができることになっている。また井筋にかかる費用も莫大であったとみえ、「新井仮割書抜記」によると、一戸で金三円から金五円の計一三・一四余がかかっていたようになっていた。長い大泉の歴史の中で、こんなに多くの田が計画されたことはなかった。

(3) 新井の維持管理

新井は大泉所山の急斜面を掘り割って通水するのでその保全と、大芝原のうち西箕輪地帯を通るので、その井敷の確保をしなければならなかった。

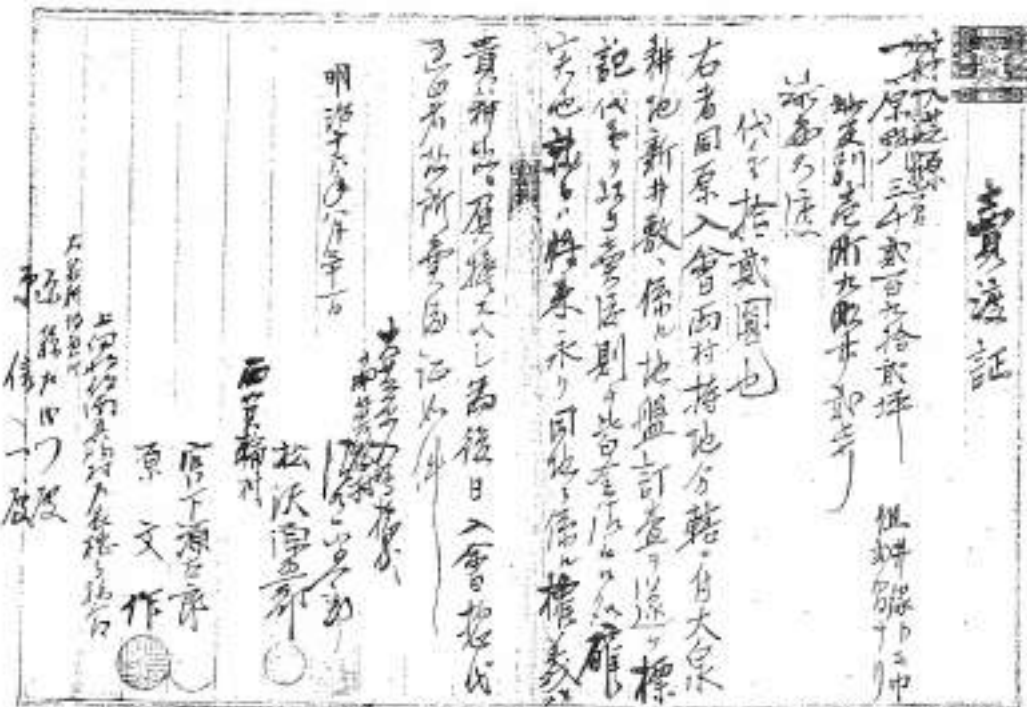


図4-15 新井二開帳の売渡証

先にのべたように新井はまず井筋ができてしまった。それは源の大泉所山も途中の大芝原とともに、大泉を含む入会地であったので問題にはなかった。ところが明治一六年五月、大芝原分割に際して、この新井の井数の問題が表面化してきた。一六名の調査委員に付託して、南箕輪村分割地籍分として大泉に三三九二坪を特売することがきまっていた。そのうちおけば、南箕輪村取得地内が一四六八坪で、西箕輪分が一八二四坪であった。その売渡し価格は一二円であった。

売渡し証

字大芝原 延長千六百四拾六間

一、原野三千式百九拾貳坪也 但シ井縁トモ幅二間ナリ

此反別 志町九畝廿貳歩

此売価 代金拾貳円也

明治十六年八月三十一日

(大泉区有文書)

大芝原入会總代として両村の代表印があり南箕輪村戸長の印もあって、ここでこの延々一六四六間(二九六三m)の平地の井数は確定した。ここを俗称「二間幅」と呼んでいる。

次に問題になるのが源の大泉所山の井数である。ここは急斜面であるので二間幅では保全できない。ここも大泉所山の分割に際して問題が焦点化してきた。大泉からだされた「意見書」は次のようであった。

意見書

ソモソモ大泉所山四ノ沢ヨリ湧出スル水ハ地元大泉区ノ所有ニシテ四ノ沢ヨリ引用シ大芝原ノ中央ニ井筋ヲ作り大泉区ニ引キ来リ全区ノ飲田用水トナシタルモノニ候就テハ今般南北沢分割其ノ他ノ例ニヨリ井筋ノ上三十間井下ハ大泉川流域迄特売相成リ度ク且ツ又年来地元特権ニ対シ一ノ沢全面ヲ無償ニ

テ割譲相成リ度ク此ノ段意見書提出候也

大正五年七月三日

(役場文書)

時の村長高木正直也、委員にあてたこの意見書は、新井の左右三〇間幅をと願ったが、結果は二〇間幅となった。大泉所山分割の「覚書」によると次のようである。

第八条 大泉井縁及び上井縁ノ河心ヨリ各決拾間以内ヲ各坪参厘ノ割合ヲ以テ関係部落ニ特売スルモノトス 但シ上井縁ニ付テハ現在堰口ヨリ上ノ方長サ式拾間幅式拾間ノ地ヲ包含スルモノトス

大正五年七月五日

(役場文書)

大泉所山八六四町歩の分割ができたが、しかしそれによって、大泉所山の水利権は従来どおりであった。

第十三条 大泉井縁及び上井縁ノ水利権ニ付イテハ分割後ニ於テ之ガ侵害行為ヲナサザルモノトス

(前書)

この分割のときいろんな特売地が各村にあったが、大泉でもこの大泉井縁と記されている新井の保全地として、一八町七反九畝五歩が得られ、新井は水源から大泉まで全部大泉所有となり安定したのである。時に大正五年七月五日で、新井開発より四〇年後であった。

新井のもう一つの難関は大泉川を打ち越すことであった。大芝原を通過して南高根で大泉川に橋の橋をかけて、大泉川左岸の大泉田地をうるおし、「大分され」で上井と合流した。この維持管理のため、隔年井形の大手入れを行なった。また通水確保のため落葉松材のくり抜き桶を用いたり、その足場を繕うなど、格別工夫苦心がなされた。

(4) 新井の発展

敗戦後、大芝地籍に開拓組合ができて、飲用水としてこの新井の水を切望された。そのため一ノ沢から補助事業による水道用水の引水工事が行なわれた。そして大芝部落に分水し、宮林署や養老院（老人ホーム）にも分水して、飲用水として大きな役割を果たした。

昭和三二年になってさらに水を求めて四ノ沢導水計画が進められ、昭和二八年の災害復旧工事に合わせて、全線がヒューム管によって引水されるようになった。

こうして大芝水道は昭和二八年二月一日、時の村長より要請があり契約が締結された。大泉では大泉井対策委員会の原案を区総会で、満場一致可決して、大芝開拓組合に貸与することができ、大芝住民の飲用水は確保された。その後一日一戸二石の水では不足するので、昭和三三年に要請に応じて一日三石の約束もできた。とにかく村営水道になる（昭和五一年）までの大芝や老人ホームはこの水で生活することができた。

昭和四九年二月一日、途中の新井保全地内に、村営水道の沈澱池九五四と、ろ過池用地四〇三が設けられ、この新井の水は専ら飲用水となり大芝高原諸施設をはじめ南箕輪村民の水道水の一部となっている。

4 大泉川水系の大水論

(1) 水源確保水論（たる一件）

たる一件の起り 大泉所全山の水利権は五か村（大泉村・富田村・中曾根村・吹上村・大泉新田村）のものであった。ところが大泉所山は入会山で一三か村（前記五か村と久保村・塩ノ井村・北殿村・南殿村・田畑村・神子柴村・大萱村・羽廣村）の新山秣場でもあった。この一三か村のうち五か村は大泉所の水源を確保する山とみ、他

の八か村はこの山を木材提供地とみていた。この五か村対八か村の争いが「たる」（図4-15）の一件である。

天保一四年（一八四三）卯一〇月の大泉村名主三郎兵衛をはじめとして五か村が原告として、「恐レ乍ラ書付ケテ以テ願イ上ケ奉リ候」の訴えは、長い長い文面であるが、要約すると次のようなことであった。

まず五か村はともに松平丹波守（松本城主）の預り所であったのに、相手のうち南殿・久保・塩ノ井は幕府領で飯島の代官所の池田岩之丞の支配を受け、他は松本城主の預り所になっていて、統治も複雑な構成であった。

天保一四年（一八四三）の七月八日に五か村と八か村の役人が話しあひのとき、大泉所山南沢たるから奥へ新道を切り開くことが提案された。五か村側では即座にことわって、反対意見をのべた。

この場所は従前から歩行道で、牛馬青木止めになっている規定書もある。それを破ることはできない。そもそもこの大泉所山は奥の深い山ではない「至ッテ水源短カク谷間ノ浅イ」所である。そこに松・楓・樺・桐等青木が生い繁っている所があり、そこから沢の水が出ていく。その出水をもって五か村の者が露命をつなぎ、僅かばかりの水田を養っている。

こんな場所に新規に道を造って、馬が自由に出入りできるようになり、入会一三か村の多くの馬が入り、諸木を伐り始めると、三か年もたないうちに、青木の一本もない禿山になり、その結果、水源が絶えて用水が減るのは眼前の事実である。平年ではええ、ちょっと照り続くと、流末の村々は水が届かないので、銘々の飲用水もなくなり、人命にも及ぶほどの難儀になる。

以上の旨を伝えて、新道はどうか差し止めてほしいと、誠意をもつ

で断った。

ところが、五か村の難をよそにみて、何の挨拶もなく八月四日に、相手村々殺人共がござって、およそ二〇〇人余もの人夫をつれ、めいめい手道具をもって、山へ登っていく。これをみて五か村の者どもがとりあえず馳せつけて、大勢の方には引き取ってもらい、役人にその是非をかけた。しかし、それを聞き入れず、岩壁を切り崩し新道を造りかけた。後日の証拠にと、鉄棒一本を差押えてきた。いくらかあつても、どうしても新道を造ると申し張っているの、やむなく訴訟にふみきった。

私ども手近かな村だから、相手村よりも一層この山の本で稼ぎをしたいとは思ふのだが、それをがまんしてきつと取崩まり山法をたてて牛馬止めにしてきた所である。相手村々の役人を呼び出して御吟味していただき、新道を造らないようにしていただきたい。(中宿文書)

この八月六日の訴えが聞き届けられて、八月一三日に同方呼び出して熟談し、相対で内済するようにと仰せ付けられた。せいぜい掛け合ったがとうとう相談はまとまらなかった。

松本預管内の内済 天保一四年(一八四三)一〇月の訴状に対して、松本の長谷川是非之助奉行が吟味してくれて、五か村と同じ御預所の村々(北殿・田畑・神子集・大宣・羽鷹)との示談は成立した。木下村の百姓代弥平が立ち入り人となって、次のような仮規定がとり替わされた。

差シ上ゲ申ス内済仮規定ノ事

- 一、南沢多留道新規^{新規}イタシ馬足通路致ス可キ事
- 一、青木ノ類ハ申スニ及バズ薪等一切伐り取り申ス間敷キ事
- 一、右新規取道イ方ノ義則敷草共取り取ル可キ日数限り之有ルニ付キ山々へ前々日同度訴客村々ヨリ人足二人宛差シ出シ機太夫ニ取り替イ馬足

自由致シ、日限相済ミ候ワバ、右機ハ取り外シ申ス可キ事已来新道ノ儀ハ相成リ申ス間敷キ事

(中宿文書)

右のように青木は伐らない、臨時に機を造って牛馬は自由に通れるが、それは刈敷や夏草を運ぶだけである。山の口があく前々日に二人ずつの人足がでて機を造り、期限がすぎるとそれを取外してしまう。この規定の一条でも反するときは、入山差止めはもちろんどんな罰も申し分なくつける、これは仮規定だが、お指図次第通印して済口本紙をさしあげる。

こうして同じ支配下であった村々(五か村)とは比較的簡単に解決したが、支配のちがう村々(三か村)とはなかなか話がつかない。それどころかこの三か村(久保・塩ノ井・南殿)は逆に訴訟をおこした。

幕府預管内の訴訟 三か村の総代南殿村の次郎兵衛から大泉村等五か村を相手とて天保一五辰年(一八四四)三月、「恐れ乍ラ書キ付ケヲ以テ御訴訟申シ上ゲ候」がだされた。この書付けも長々としたものである、次にその概要を記す。

大泉所山は入会一三か村で山手米を上納している所で私どもがはつきりとした権限をもつ山である。ここで刈敷林を刈り取って田地を養い、松林など冬木は自分の用材に、夏木や薪は勝手次第に伐り取って山稼ぎをしてきた。「たる」は難場年々管請して入山してきたが、昨年は別して道が荒れて山稼ぎに差支えてきた。そこで昨年八月四日に人足を差出して道管請をしたところ、相手五か村から大勢が押し付けてきて道管請が出来ないので、やむなくその場を引き下がった。

いろいろ掛け合ったところ天保七年(一八三六)の申合せに「たる歩行ニテ通路致ス可ク」とあるから、馬は通ってはいけないうし、道管請もいけないという。その年は夫食にも事欠くような凶年で、大泉村

の提案でたるの場所から石を切り出した所であり、怪我ばかりして馬は通れないので、入会村々はそんな申し合わせもした。(入会一三か村のうち南殿村だけはこれに調印をしていない。)

その時限りの約束と想っていたら、今回それを持出して、用水が減るなどというが、相手の村方では近年おびただしい新田を開墾して、用水は不足していない。

……是非無ク今般調印申シ上ゲ奉リ候。何卒御意を以テ相手ノ者共召シ出ダテレ不法御吟味ノ上巳来道普請馬道路山嶺ノ義ニ付々相手ノモノ共致障妨ヲ致サズ田地養イ方出来百姓相成相成候様御申付ケラレ申シ費カレ度ノ願イ上ゲ奉リ候。以上

天保十五年三月

訴訟人 池田岩之丞御代官所

信州伊豆郡 久保村・塩ノ井村・南殿村
右三ヶ村惣代 南殿村 年寄 治郎兵衛

御奉行様

(中略文書)

この訴状の裏書きには、五月六日に両者を石川土佐守の役宅へ寄せ、対決させることが記されている。この件は江戸御勘定所への出訴なので、ここで対決させられて、内済が整ってしまうと、先に同支配下の五か村と内済仮規定ができていたので、一つの山に入会方法が二様になってよろしくない。それで、松本御役所へ出した済口規定は願下げにしておかなければならなかった。

江戸表での対決 さて、江戸表での対決といえは大変である。大泉村では名主ほか五人が病氣なので年寄の新五衛門が、中曾根村では三人病氣なので名主七郎右衛門がその代表となった。体力もいるし、費用もかさむのでこのようにしたのである。この二人がさしだした「恐レ乍ラ返答書申シ上ゲ奉リ候」は天保一五年(一八四四)四月の

日付でやはり長い文面である。内容は先に記した昨年一〇月、松本の役所へ出した訴状とほぼ同じである。

ただ、南殿からの訴状に対応して、山手米は大泉村ほか五か村も同じく納めていること、この山奥から見事な青石が出るので石工職から山手米の補助にもと、少々出銭させて村々へ割り戻しているが、南殿村だけはこれを受け取っていないこと、天保七年(一八三六)の規定書にも南殿村だけはお役所へ印形を持参したのに、日延ばしてほしいという理由で調印していないことなどが細々と加えられている。

五月六日よい石川土佐守の寄り合いで対決がはじまった。御奉行所では跡部能登守、石川土佐守、大目附が列席した。両者の言い分を聞いたうえ、一度席を外させられ再び呼びこまれた。御留役の吉原繁太郎がいて、両者とも証拠をだせといわれた。

持ち合わせた文化三年(一八〇六)の絵図面をだしたが、これでは証拠にならない。正徳・寛文・元禄の大泉所規定があると書いてあるから、それを飛脚をとばして取寄せよといわれた。すでに一か月余が過ぎて六月一七日になっていた。そこで大泉村の新五衛門と吹上村の作左衛門は願い書を出して、その証拠書類は預調で取り寄せるといってもらいが明かないから、帰村して取調べ持参し差し出したいとお願いした。

帰村が許されてその証拠書類を探したが、いくら探しても出てこない。そのうえ吹上村の作左衛門は病氣になってしまったので、大泉村名主三郎左衛門が代わって出府することになった。「恐レ乍ラ書キ付ケテ以テ申シ上ゲ奉リ候」を七月一〇日に差し出した。

……精々取調べ候へ共村方五郎左衛門先年名主ノ御居宅出火ノ節焼失仕り候義之有ル可キ見当リ申サズ……

そこで対決は八月一九日まで日延になったので、七月一四日に帰村

した。

内済のすすめ 江戸表での対決の間に、内済することがすすめられた。大泉村からは、触れだした日から一〇日間刈敷も薪もと、夏草は土用から二五日後の二〇日間とし、合計三〇日間で薪は鎌だけでとり、馬は一か村から五疋ずつで、たるは棧をかける案ではどうかと提案した。しかし南殿村はあくまで馬の通れる道をと主張して示談はまとまらない。三〇日間を四〇日間にしたらどうかとゆずってもまとまらない。

年は移って弘化二巳年（一八四五）二月六日、役人が替わったので、同趣旨の願いを再び出したがそれには、少しくたるの畏懼を次のように述べている。

……双方共申すイノ道半馬止メ多國ノ場所堅ハ固ノ如ク急ニシテ數十丈高ク一面ノ大岩ニ之有リ夫レ故數百年來種ノ如クニテ保チ來リ候……

もしここが土砂や小石の類であつたら雨風で欠け崩れて忽ちなだらかなつてしまふ。他の山でも急に高く棚のようになってゐる所は「たる」と申し唱えてゐる、とても南殿村のいうように少々隙でかきならしたぐらいでは削れない、実地に御見分いただきたい、ともいつてゐる。

このように対談を重ねている間に、江戸表に滞在する留守家庭にも異変がおこり、また母が病氣重態になったり、本人が煩ったり、益々くるので姉らおねばと、その都度お願いや届をだして姉村したり人が替つたりして、長引けば長引くほど大変なことになった。これは大泉側でも南殿側でも同じであつた。両者とも何とか示談をしようとはかるが、どうも話はまとまらない。

新役人の久須美能登守はなかなかきっぱりしてゐて、大泉側へは「もはや争いを起して二か年にもなる。いつまでも勝手を申してゐる

と裁許を申し付けるぞ」とおどしたりすかしたり、「裁許になつてしまふと双方為にならないぞ。さあどうだ」と迫られる。

南殿側へは、「道を取締うのになぜ山元大泉へ沙汰しなければならぬか、そんな不法があるかというが、その方こそ不法ではないか。大泉村が地元ではない入会村総地元だというからそれは検討するが、大泉村は四か村へ無沙汰というのはよろしくない。いったい入会村一か村が不承知でもできないはずである。こんな不埒なことをしておいて、あれこれいうことはけしからん。」と叱つたり、「裁許になればお前たちには一寸の指もささせないぞ、早く示談せよ」と迫つた。日延べを願つても「いや日延も許さぬ」とすさまじい勢いで迫る。

それでもようやく御日延べを願ひ、双方で示談をしようとした。話は相変わらず平行線で、たるは今迄半馬入の場所ということではいかがい、いや南沢たるはこれまでも半馬止めで、他は半馬通用としてはいかがといつて互いにゆずらない。やむなく破談の届けを出した。

示談書発行 三月二七日、牧野大和守が奉行所の当番で双方が呼びだされた。すぐさま訴訟方（南殿）が尋問された。

「是迄の通りで示談いたせ、いままでの道で通用せよ。彼は申すと裁許申し付けるぞ、さあどうだ」と迫られた。相手方が欠き崩したなどとし聞きをしたが、「いやいや其の方の申し分は立たない。此の者奉行所へ対し不埒至極、それよせろ」ときつと仰せ付けた。向う側にいた者が来て、繼元を繼り隣の方へ進行していった。大泉側へは何の味も無かつた。

ここでまた示談をすすめられて、二九日まで日延を願つて対談したが、またもや話はまとまらない。三月晦日付けでまた破談届をだした。

いよいよせっぱつまって、示談書を各々差し出さなければならぬことになった。示談書をだすと、そのけい紙に眼を通し残らず朱で加筆し、「この通りにだせ。」と命じられた。かれこれ申しでももはやこれまでも、次のような示談書をさしだした。

示談書

……右出入御時味中ノ所拾三ヶ村入会大泉所一山ノ中何レノ場所ニテモ牛馬寄士入ラズトノ議定之儀キ上ハ今般ノ論所相平方ニテ牛馬差シ留メ候段ハ心得違イ尤モ相平方々ヘ一応ノ懸ケ合イモ致サズ訴訟方並ニ引合村振リニ取替イ方致シ候段ハ是亦訴訟方引合イノ當共心得違イノ段夫々相井シ、猶亦たるノ場所其ノ外共先年ヨリ有来リノ道筋ヲ以テ牛馬通用致シ候義ハ相平方差障リ申サザル等。且ツ婦村ノ上一同立チ会イ有来リノ道筋道幅広狭間敷取り調ベ有来リノ道筋出入リ中全ク破損致シ候場所ノ見極メ候ワズバ元形見合イ取り調ベ致シ追テ新道切リ間々候カ。又ハ有来リノ道筋破損等出来候節ハ文化度清口証文ノ趣ニ基ツキ大泉村へ相届ケ入会一同調議ノ上取り調ベイ致ス可ク其調相平方調無キ故申ス間敷々其ノ外文段度議定相守リ候等ニテ双方申シ分無ク調議内済仕リ候ニ……

午四月十八日

訴訟人	与次右衛門
相手	三郎左衛門
引合人	弥次兵衛
	勘左衛門

この内済は、年月久しく江戸表で三か年もかかったが、強硬な斡旋でようやくできあがった。要するに大泉所山の道は牛馬止めという議定はないからいづれも牛馬自由でよろしいと訴訟側（南殿）の主張を入れ、しかし、いままでの道は、特にたるの所はそのままだ使用するというので実質的には牛馬が通れないと相手側（大泉）の主張を入れてある。いわゆる喧嘩両成敗である。なお、道普請をするときは入会村

で、納得のゆくまで話しあってから実施せよと、将来の禍根を断つてゐる。

終わってみれば、何のことはない、從來どおりということである。しかし、ここに入会山がお互いの生活をかけたのつびきならぬ問題ををはらむこと、また水運確保の重大性を改めて推察することができ

たる一件の終結。ここでもでなく婦村して、内済示談にもとづいて論所たる道破損の場所へ立ち会って、道の取替いの段になってまたまた行違いができた。四か年も争っていたので全く様子が変わっている。これは相手の者どもがひそかに打ちこわした所もあるといい、い今こんな岩石を切り崩すことなどできるはずもないもつての外のことだと反論する。これでは示談のように、道筋道幅の広狭間敷等の取調

すったもんだは続いて、結局、両支配者のお役人に立ち会って見分してもらった。南殿側ではこの大岩石は鉄でこのような道具でなければ、鉋や鎌では切り崩せない所だから打ちこわしなどしてはいないと説明し、大泉側では南沢へ勝手に馬をひき入れて立木を伐採しては、水保が悪くなって水源が絶え飲用水にも差支え、大雨などのときは砂が押出してきて御田地も亡くなってしまうと説明する。現地での見分でもまたまたもとの論となり争いがおさまらない。

現地から村へ帰ってきて、両支配人の力でようやく次のように具体的な示談がまとまった。

……訴答非ビニ扱イ人一同立会イ論所たる道幅ノ義、有尺ノ場所長サ六尺ノ間、今般式尺參寸ニ取替イ行キ届キ……

この示談は、弘化四年（一八四七）四月二二日、御奉行所へ出した「清口証文」である。



図4-17 たる一件絵図

図4-17のように、長さ六尺の間の道幅を、一尺から二尺三寸に広げる。これがこの長い天保一四年（一八四三）から弘化四年（一八四七）まで五か年におたる紛争の、具体的解決の結果であった。大山鳴動して嵐一匹の感もあるが、天保から弘化にかけての飢饉に苦しんだ農民生活と、水不足に悩まされた農民生活の、にじみ出た紛争であった。それにしてもこの争いの費用は莫大なものであったろうが、記録が残っていないのは残念である。

(2) 打越し水論（塚林）

ア 塚林の打越し水論

大泉新田では分村以来一二五年を経た明治六年になってようやく、「中井」の水をもって田用水にする権利を獲得した。明治御一新という革新的な時代を背景にして、本山某という筑摩県属史の入会権や水利権に対する慣習を無視した専断によってできた。（中置文書）

この中井は大泉川の水を上井（五か井）より下で取水して、上井を

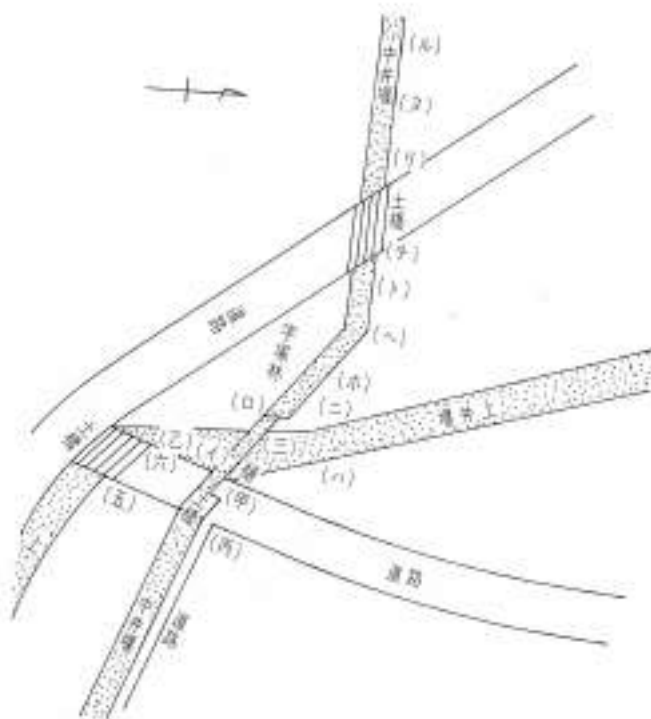


図4-18 塚林現場見取図（明治44年10月23日）

塚林で鍾をもつて打ち越し、大泉新田の北側で畑田成りをした。大泉新田はこれによって多年の宿願がかない村づくりに力を得た。それから二〇年間は何事もなくすぎた。

被害届 明治三〇年代になって、この中井の打越しの所で、上井の水が盗水されるようになった。初めは少しいたが半分以上だったが、しだいに大がかりになってきた。当時大泉区にはもめごとがあつて区内が不一致で、水争いなどもおそろかになっていたので、盗水がつのっていった。

大泉新田の村中を貫通する上井は、大泉の飲田用水であつて、大泉新田はそれを活用して飲用水に使えただけである。中井の水は豊富で

明治三六年ごろからときどき盗水され、三九年二月一日には盗水の工をした。前図4-18の甲点で上井の井端と道路で二間ほどの所を破壊して、ここに土橋を架け、中井の樋を短くして土橋の下へ入れて通水し、自然に上井の水が漏れて流れ入るように工作したのである。これを発見して、さっそく大泉新田惣代の説諭願いを警察へ願い出た。署長が来て説諭し、修繕することになり、五月修繕した。数日を経ずしてまたまた破壊した。このようにして数回同じことをくり返し、遂に大泉新田の惣代は立会いを拒絶した。

やむなく、明治四〇年八月、大泉惣代は協議して、杭に針金を入れ十数本打ち込み、これを針金で締め固めておいた。しかし、この杭もはずされてしまった。翌年の四月二八日には吹上から大石八箇を買

可能な唯一の場所である。ここには大泉の水番小屋があつて慎重に見張られている。



図4-19 塚林における中井と上井

はないのに、目いっぱい水田ができていたので不足勝ちである。目の前を流れている上井の水に手をかけたくなるのは、百姓として自然の情でもある。

この上井と中井の交錯しているところは図4-18のように大泉新田の西方字塚林である。上井が西から東へ流れている上を、中井が西南から東北に斜めに樋で越している。ここを「塚林の打ち越し」と呼んでいる。この打ち越しの所が引水（盗水）

入れて修繕した。だがこの大石もいずれへか運び去られてしまった。この後も修繕し破壊をくり返してやむところがなかった。

六月二日 人足大勢を出して修繕す。

同日 破壊さる。

警察署へはその都度届けを致し置けり。（大泉中西文書「水論日記」）

こうして水番を出しきれないので、やむなく白田学一を備いられ、外に多数の人足を出して番をさせた。そのころ警察へ出した被害状況でもその一端がわかる。

用水盗水被害届

七月二四日 夜 破壊

同 二八日 修繕

同 三一日 夜 破壊

八月 二日 修繕

同 三日 夜 破壊

同 四日 修繕

同 六日 修繕

（大泉中西文書）

ここで見るようにほとんど毎晩水が盗まれる。これだけでも大変なのにこれから以後いよいよ激しくなっていく。

……八月八日ノ夜出羽沢宗四郎兵衛サレタリ 八月十一日ノ夜ハ産土社庭ヲ掘り割り盗水致シ、尔後毎夜盗水致シ候。塚林ノ側所ハ七月三十一日ノ夜迄ニ二回切り崩シ候ニヨリ水番ハ是二人夜四人ト致シ候。尚又十四日ヨリハ是四人夜八人ニテ致シ候リ候処大泉新田ノ者大勢来リ顔冠リ又ハ着物ヲ冠リ来リ。人足ヲ殴打シ追払イ……不在ニ乗ジ前記四か所ヲ破壊シ盗水致サレ候。依テ右被害届届ケニ及ビ候也

明治四十年八月

南沢輪村大泉惣代兼井掛惣代（六名）

伊那警察署長 警部渡辺金三郎殿

刑事事件 このように両者の間の争いはしだいにはげしくなり、負傷者も出、ついに殴打事件がおこったので、「告訴状」を出した。

告訴状

長野県上伊那郡南箕輪村一六七番地
告訴人 清水敬太郎
同県 同郡 西宮輪村大泉新田
被告 堀内勝太郎
堀内勝太郎
白鳥今太郎
唐沢 梅次

殴打創傷事件ノ告訴

被告 堀内勝太郎等ハ告訴人 堀内勝太郎ノ田圃及ビ飲用水ヲ盗水スルノ目的ヲ以テ来集シ告訴人 堀内勝太郎ヨリ水壩トシテ出張シ居ル三〇名ト争イ闘ニ果ジテ告訴人ノ背部ヲ殴打シ創傷セシメタルモノニ有リ候

(大泉中西文書)

刑事事件の告訴にもかかわらず、翌明治四一年になっても、盗水被害はいっこうにおさまらなかつた。

明治四一年四月二十八日 大石五郎ヲ入レテ修繕ス。

五月二十五日 右破壊ナル。大石四郎ハ何レヘカ隠蔽サル

五月三〇日 応急修繕ス

五月三十一日 早朝破壊ナル

六月 二日 午前中大修繕ス、午後復壊ナル

六月 四日 破壊ナル 警備ヨリ佐野御長来ル

六月 八日 修繕・破壊ヲタリ返ス、告訴ト決定、

六月二〇日 大石四郎ヲ山中ニ発見シ届出ル。

ついに六月八日盗水の告訴にふみきつた。

この告訴の「事実」はそれまでの被害の状況を余すことなく詳細にのべている。例えば六月八日のことを記せば次のようであった。

同八日午後六時頃大泉新田ノ敷名が同所ニ於テ堰路ヲ破壊セントシタルニヨリ見張番等発見シテ大声デ叱責シタルノ其ノ儘逃ダ去リ約一時間ヲ経テコロ告訴人 堀内勝太郎等ハ五十名ノ二ニ堀内勝太郎等ハ又又点ニ襲来シ見張番ガ万ガ一之ヲ制止スルニ於テハ殴打セシガ如キ姿勢ヲ示シ、被告 堀内勝太郎・仲一・増太郎外敷名ハ之ガ被傷ニ着手シタルニヨリ見張番四名ハ危険ヲ恐レ其ノ為スガ儘ニ傍觀シ居タルニ暫時ニシテ破壊シ立チ去リタリ。而シテ當時襲来シタルハ敷十名ノ多キニ達シ一々之ヲ認識スル事能ハザリシモ、現ニ手ヲ下シタル者ノ内被告仲一……

と、確認した者の名をあげ、証言並びに参考となるべき事実や現場の図説を提出して、やはり伊那警察署長に、明治四一年六月一〇日付で告訴している。

告訴状が出された後も、堰林では争いがやまず、ついに七月一六日に水番小屋の焼失という事件が起こった。その日は大泉新田の蜜玉様の祭り、終日酒をのみ大騒ぎしたあと、大泉の水番小屋へいって番人を叩き倒せ、追い払えと押しかけてきた。二人の水番はすぐに逃げだして難をさけたが、押し寄せてきた連中は石を投げ、遂に番小屋に放火してひきあげた。そんなことで現場は大きく壊されていくので、「証拠保全の申請」をしておかねばならなくなり、明治四一年七月八日にその申請を伊那区裁判所に出した。

同年八月二日には、臨検調査が行なわれ、詳細な「臨検調査」ができ、八月六日にはその証明書もできた。この臨検調査は余りにも長文であるので、一々の検証は省略して、次にその結論だけを記す。

以上ノ状況ヲ検証スルニ

一、土橋は其の構造新しく同三年以前ニ架設シタル形跡アリ橋下ノ開削年度ハ分ラズ

二、土橋ノ欄ハ道路ニ比シテ狭シ従前ヨリ此ノ如ク狭キモノトハ認メズ

三、土橋ノ西側小石ノアル箇所ハ土砂ヲ以テ堰止メタル形跡アリテ其ノ年代ハ古カラザルモ何時頃ナルカ分ラズ 又土橋ノ道路幾分欠損ノ状アルモ其ノ原因ハ判明ナラズ

四、樋ノ古シ

茲ニ於テ判事ハ別紙調査ノ通り鑑定人ノ取調ベヲナシテ此ノ鑑定ハ同日午前十時ニ始メ同正午〇時ニ終ル

右調査ハ字據ニ於テ作リ關係人ニ説明聞カセタルニ之ヲ承認セリ

明治四十一年八月二日

伊那区裁判所 裁判所書記 高橋良好

判事 加賀美明

明治四十一年二月四日、馬光寺で大泉總集會を開き、再三再四示談交渉があつたが、到底まとまる見込みはないので、かねてから用意してきたように、民事訴訟を提起することをはかった。満場一致で民事訴訟にふみきることになった。出廷総代の選挙をした。原幸監(五五票)・清水正堅(五三票)・出羽沢岩次郎(四七票)・唐沢正一郎(三六票)次点という結果になった。

あけて、明治四十二年一月六日、三人の大泉總代は警察署へいき、いままでの交渉経過からみて、示談は成立する見込みがないので、交渉一切のことをお断りした。署長は示談しなければ、弁護士に大金を取られるだけだと、強く示談をすすめるので帰宅協議の上、と帰宅した。この結果、大泉では總會を二度もしたが、結局、示談はできないと、一月一六日に署長に陳情した。

二月二七日、また署長から示談のため出頭せよと通知があり、行ってみると署長が交替して野島署長になっていた。示談不調は不幸だからと示談案を示せといわれたが、相談の結果は示談を断るということになった。署長は不日実地臨検して何とか示談の道を講ずるから待

てといわれた。

伊那区裁判所へ 待て待てといわれても、もはや待てないと、三月一日、伊那区裁判所へ、「水利妨害排除ノ訴エ」を提出することになった。

水利妨害排除ノ訴エ

請求ノ目的

上伊那郡南箕輪村大泉山ヨリ西箕輪村大泉新田ヲ経テ原告等居村ヘ流下シ来レル上井堰ニ対スル水利妨害ノ排除ヲ求ムルニアリ

一定ノ申告

被告等ハ原告ニ対シ上井堰ノ中井堰ト宇塚林ニ於テ交叉セル箇所ノ左側ニ幅一間三分、長さ四尺九寸、高さ川底ヨリ二尺四寸ノ堰堤ノ築造工事ヲナシ且ツ同一箇所ノ中井堰ノ水樋ヲ該堰堤ト同一高サト為スベシ 訴訟費用ハ被告等ノ連帯負担トストノ御判決相成リ度ク候(中略)

明治四十二年三月十一日

原告訴訟代理人 原田好郎

伊那区裁判所

判事 加賀美明 殿

(大泉中西文書)

いうまでもなく、原告は大泉の原幸監以下九五名、被告は大泉新田の清水賢一郎以下三七名である。

上訴防にいる原田弁護士に依頼することがきまった。昨年大泉の總代二名が上訴防へ連絡打合せにいったのは、すでに一二回に及び日帰りもあつたが宿泊が多い。また伊那町箕輪屋へ原田が出張してきて連絡したことが五回もあった。このように着々と打合わせ準備を重ねてきて、いよいよ第一回の口頭弁論の日がきた。明治四十二年三月二二日のことである。

午前九時に開廷し、被告は堰は個人の所有でなく団体の所有だから行政訴訟に属し、司法裁判でないから原告の請求の棄却を求めた。しかし判事は原告の申請を許可し、証拠調べは四月二〇日と定めた。これから長い長い裁判が始まった。

四月二〇日には第二回の口頭弁論があり、証人の証言調書が作成され、最後にそれを読み聞かせて、証人の承認を求めた。証人有賀伝四郎ほか三名、傍聴人として唐沢七郎以下一九人が大泉側、被告側からは原寛一郎以下十数名がいた。

このような口頭弁論が五月一七日に第三回、以降二月一二日第七回まで続いた。そのつど惣代は上諏訪へ行って弁護士と打ち合わせ、証拠調べのため東京西走して、その間の費用も労役も大変であった。

年が明けて明治四三年となり、二月六日には郡役所で小池県議、福沢伊那町長ほか西筑輪村長、南筑輪村長、と宮沢郡長等が示談をすすめ、無条件で委任せよと迫られたが双方がこれをうけ入れなかった。

二月二七日に第八回口頭弁論があり、以後一〇月二四日で第二回となった。この間にも示談のあつせんがあつたり、上諏訪へ打ち合わせにいったり、新しい証拠調べなどが例によって例のごとく続けられた。

三月一〇日には、吹上の祭からの帰り道で、大泉の役人が、大泉新田を通ったとき、乱殴打されるような、住民間のあつれきもおこつた。

年がまた明けて明治四四年になった。仲裁のあつせんが人をかえ所をかえて行なわれるが行き届かない。口頭弁論もそれをにらみながらぼつぼつ行なわれて、第一六回を終わった。

さらにまた年が明けて明治四五年となった。その間被告側が欠席のため日延べになつたりして裁判もだれてきた。四月二二日に松本市が

大火で、大泉新田側の弁護士が出席できないという理由で日延べを出したが、すでに半年も延期してきたということで、被告欠席のまま開廷され原告大泉側が勝訴となった。しかし、これは廃棄になつてしまった。五月一日にも口頭弁論があり、判事から示談をすすめられたが、両者の主張はかみあわずとことんまで争う結果となった。

七月一七日、口頭弁論が結審した。この日は従来の関係証拠を双方が弁論したので長時間の弁論となった。結審となり、いよいよその判決言渡しが七月二五日と定まった。長年の訴訟事件がこの日に決まると、その結果を双方が待った。

明治四十五年七月二十五日 言渡シ主文

……被告ラハ森林ニ於テ交叉セル箇所ヨリ上井堰ノ水ヲ中井堰ヘ引入ルベキ權利ナキコトを確證シ、右交叉点ニ於ケル中井堰ヲ上井堰ノ流水ニ混入セザル構造ノ橋ヲ以テ上井堰ノ下流ニ向フテ左側ノ堤ノ上面ヲ通過セシメ混入セザル旧状ニ回復工事をナサスベシ。
訴訟費用ハ被告ラノ連帯負担トス
理由……略……

伊那区裁判所 判事 武藤勘太

大泉はついに勝った。

しかし、大泉新田はこの言渡しを不服として控訴した。

長野地方裁判所へ

控訴状

控訴人 大泉新田 清水賢一郎（ほか三九人）

被控訴人 大泉 原 幸監（ほか九五）

水利妨害排除請求事件ノ控訴

主文（略）

一定ノ申立

一、原告決ラ廃棄シ更ニ被控訴人ノ訴及請求ハ之ヲ棄却ス訴訟費用ハ一審二

審判被控訴人ノ負担トストノ御判決ヲ願イ度ク候

大正元年八月一日

右控訴代理人 矢島録四郎

唐沢 長十

長野地方裁判所長 判事三田幸司殿

この第二審ともなれば長野まで出張しなければならぬし、弁護士ももう一人必要になり、宮坂弁護士を頼むことに決定した。二月一日に行なわれるはずであった弁論は延期になった。

一月二日には長野地方裁判所の太田判事・鈴木判事の現地検証があった。これは大がかりなもので、弁護士が二人、証人が三人ずつの計六人、原告大泉新田の総代二人のほか三〇人余、大泉総代四人のほか三〇人余が同行した。上井の頭首工から、大井、中坂分橋を臨検して論所堀林で昼食、午後一時から証人の証問が始まり、六人の証問が終わったときは、午後五時であった。

また年があけて、大正三年となった。この間長野へいき、また上井訪へいって連絡をとり、打ち合わせは欠かさなかった。仲裁の労を村長等がしきりにとったが、もはやそれに応ずる気はなかった。

四月一日にもわざわざ長野へ出張してみると、またもや相手の弁護士が欠席のため、欠席裁判を仰ぐようお願いしたが、五月一六日に延期になってしまった。その日もさらに延期になって五月二三日となった。

大正三年五月二三日、とうとう長野裁判所の判決が下った。この結果は区裁判所の判決以上の大勝利となった。

判決正文

本件控訴ハ之ヲ棄却ス。

控訴ニ關スル費用ハ控訴人ノ負担トス。

長野地方裁判所民事部 判事 大庭良兵（ほか二人）

こうして明治三十九年以來の紛争が一応の結着をみた。約一〇年に及ぶその間の苦勞は、双方とも想像以上のものがあつた。しかし、これでおさまらず、大泉新田はさらに大審院へ上告するというのである。

大正三年五月二三日、長野地方裁判所で判決の言渡しがあり、大泉新田は直ちに大審院へ上告した。

大審院へ 大審院出延総代に、前回と同じく清水正繁、原幸隆、原信一、唐沢正一郎の四人が選ばれた。費用は一人一回につき金八円で汽車賃とも一切の費用とし、一泊増すごとに一円五〇銭増すことがきまつた。

大審院に上告されてから、すでに二か年がすぎ、大正五年六月一五日に、判決の言渡しが下った。

判決正文

……上告人、被上告人等 略……

本文

本件上告ハ之ヲ棄却ス。

上告費用ハ上告人ノ負担トス。

大正五年六月一五日 判決言渡

大正五年七月一日 原本領収

大審院第二民事部裁判長 判事 馬場 嘉治

田上 省三

八江 良之

鈴木英太郎

前田直之助

ここで、大泉の勝訴となつてこの小さな堀林の交叉点での大水論は終結を上げた。明治三十九年から始まつたこの長い長い紛争は、他地域からみたらほんのささいな少量の水の争いであるが、当事者にとって

みれば死活の重大事件であった。

この確定判決の執行は、翌大正六年五月一三日、大泉新田の費用によつてとり行なわれた。同日付で内容証明の郵便で、大泉総代にその通知が届いた。それは次のように、伊那区裁判所の執達吏によつて、塚林は旧状に復された。

代替執行為許可決定

……当区裁判所ハ其ノ申請ヲ理由アリト認メ、決定スルコト左ノ如シ。

主文……上井塚ト中井塚ト宇塚林ニ於テ交又セル箇所ニ於ケル中井塚ヲ、上井塚ノ流水ヲ漏入セザル構造ノ樋ヲ以テ、上井塚ノ下流ニ向テ左側ノ堤ノ上面ヲ通過セシメ、上井塚ノ水ヲ中井塚ニ漏入セザル旧状ニ回復スル工事を債務者ノ費用ヲ以テ当区裁判所執達吏ニ於テ之ヲ為スベシ

大正六年五月十四日

伊那区裁判所 判事 大橋三郎

裁判費用 この裁判に要した費用は両者とも莫大なるものであった。

訴訟は費用がかさむばかりだから、弁護士に金をとられるだけだからと、幾度か手をかえ人をかえて示談がすすめられ試みられたが、不調に終わり、ついに大審院までいってしまった。その間に費した金は両者ともはかりしれないが、公定の費用だけでも、次のように金三六五円二五銭五厘となり、これを大泉新田が支払った。

訴訟費用確定決定（略記）

第一審（伊那区裁判所）	一一四九二銭五厘
第二審（長野地方裁判所）	九八四三九銭五厘
第三審（大審院）	一一〇四七八銭
ほか確定費用決定関係	四三三円一〇銭五厘
総計	三六五円二五銭五厘

これを支払った大泉新田はさぞかし大変な負担であったことと思わ

れる。この決定の計算書によると、最初の証人等の日当と旅費は一日七〇銭であったが、第二審以降は金一円となっている。五厘がまだ有効単位であった当時で、米一俵は六円であったから大きな金であった。しかし、これは公定の話で、実際の費用はさらに莫大なるものであった。勝訴になったとはいえ大泉では弁護士に第二審だけでも次のように約束されている。

大正元年一〇月二五日、原田弁護士との約束

- 一、金一二〇円 原田弁護士長野裁判手数料
- 一、金二〇〇円 成功謝礼
- 一、金五〇円 官坂弁護士長野裁判手数料
- 一、金一〇〇円 成功謝礼
- 計金四七〇円 ほか実費は別に支払うこと

明治三十九年から大正六年まで前後一二年に及ぶ長い間かかって、結局、塚林の上井は上井、中井は中井と、もとの姿にもどっただけのことであるが、こんなに莫大な費用を投じて、水利権は守り通さなければならなかった。

その後、塚林では大きな紛争はなくなった。いつしか水番小屋もなくなった。

いま塚林の水は何事もなかったかのごとく流れている。

図 大泉の横井戸

1 村内横井戸の概況

南箕輪地区には横井戸が多い。横井戸は明治初年から三〇年代にかけて、明治新時代の連取の風潮からか、西部地帯にも段丘ぞいの地帯にもできた。より多くの水を求めて、湿気の多い所があれば、そこへ横井戸を掘ろうと試みた。しかし、何分にも地下へ横穴を掘るのであるから、まず第一に多額の費用を要した。そのために全財産をなげう

第1節 水を求めて

表4-7 南興輪の横井戸（小学校資料 発掘資料）

項目	部	派	尻	大	泉	大	泉	大	泉	大	泉	北	殿	北	殿	北	殿
名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称	名 称
水 源 地	池上甚五衛門所 有の南興輪 （大泉南部）	大新横井戸 井中敷か所 （大泉南部）	（朝の横井戸） 原新井所有 東垣外二五三四	西村横井戸	（ムクリ横井戸） ムクリ山林 （田中氏所有）	清水重機	清水重機 外一〇人	田中静雄ほか 四人	北殿用水の横井戸 出頭	向垣外 工事担当者 有賀次郎 有賀三郎 （二反三畝）	北殿 イセニアワラ山林 倉田徳三郎	龜樹水					
発 起 人	加藤源四郎 唐沢紋治郎	原 新五	（穂高係三郎） 復活 （穂高係三郎）	清水重機	清水重機 外一〇人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人	田中静雄ほか 四人
発願許可	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二
竣 工	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二
開田着手	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二
掘削延長	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二
灌漑反別	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二
総 計 費	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二
そ の 他	明治一四・三	明治一四・三	明治一六・一〇・八 （水神祭）	明治二六・七 明治二八・二 明治三二・一	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二	明治三三・三・一二

項目	北殿	殿村	殿村	南殿	南殿	田畑	田畑	田畑	神子柴	神子柴
名称	八幡宮社中	宮ノ上山林	宮ノ上山林	八幡入 小角堂	桜ヶ丘横井戸 上ノ横井戸	下ノ横井戸	古原	ウラダテ 横井戸	ウラダテ 横井戸	烏居原 横井戸
水源地	宇タテ山林	宮ノ上山林	宮ノ上山林	八幡入 小角堂	宇堤山	宇堤山	藤沢銀次郎 ほか九名	ウラダテ 横井戸内各所	ウラダテ 横井戸内各所	烏居原 横井戸内各所
発起人	清水齊 (清水善蔵)	神主 島山歌 倉田三郎 有賀又七郎 清水有賀 は十文 はか郎	倉田三郎	有賀 光彦 清水甲太郎 はか八人	有賀 光彦 有賀 光彦 日戸伝幹	松沢源一郎 加藤与平 小林彦弥	藤沢銀次郎 ほか九名	高木正直 ほか六七人	神子柴耕地	神子柴耕地
発願許可	明一一・四	明四・三 (明三二・三)	明三一・三	明二七・三	明三〇・一〇 明一〇・一二	明一五・二	明三一・一	明三二・一	明治三三・一	明治三三・一
竣工	三〇〇間 幅三〇間 水路敷五〇間・ 幅三尺	六〇〇間 幅四尺 (内横穴 三〇〇間)	九〇〇間 幅二尺 一五〇間 幅一尺 水源地 三州街道	一八〇間 幅八寸 水源地 神明	三〇〇間 幅一〇間 高五尺五寸 幅三尺	一〇〇間 幅二尺 三〇〇間 幅二尺	三〇〇間 幅二尺	三〇〇間 幅二尺	三〇〇間 幅二尺	三〇〇間 幅二尺
掘延長	二町三畝	四町歩 志反二畝	二町歩余	二町三反	一町一反	数町歩	七・八反歩	七・八反歩	七・八反歩	七・八反歩
灌漑反別	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝	二町三畝
総計費	(水権は 清水一徳)	南殿と証文あり 願上知も古料も共	南殿と示談	関係地主 一四名	二町歩余	二町三反	一町一反	三〇〇〇円	二〇〇〇円	六〇〇〇円
その他										

つてしまった場合もでた。

そして、第二に成功させるには相当の技術を要した。なかには、計画試掘だけで、成功しなかったものもあった。一度は不成功に終わったが、途中から人が替わって成功したものもあり、昭和の現代に脚光をあびている畑地灌漑の走りをお知らせする田畑の古原横井戸のようなもの

のもあった。

その工法は、まず湿気の多い所へ堅穴を掘って地下水のあることをたしかめ、そこを目あてに横穴を掘っていった。途中で中の土を運び出すための堅穴も長さによっていくつが必要であった。ようやくたどりついても途中の漏水になやまされた。殊に工法の未熟のため勾配を

あやまることもあって、せつかくの水を流出させることができないこともあった。

当時横井戸の地方ニ於テ其ノ類甚ダ多ク徒ラテ不完全勝ナリ 概ネ基点ヨリ終点ニ至ル水渠其ヨリ得ズ井中水量豊カナルモ少シク減ジタルトキハ流出スルコト多シ 又井穴非常ニ大ニシテ工費夥シ

（小学校資料）

これは大泉の「大新横井」の概況の一節である。明治初年のころの工法がうかがわれる。その後の経験と工法の工夫で多少は改善されたのであろうが、その困難度は、土の中のことであるので、相変わらずであった。それにもかかわらず南箕輪には表4-7のように数多くあった。

このなかのいくつかは今日でも、自然の清水がこんこんと湧出している。当時の堅穴の近所には、運びだした土が小高く盛りあがって残っていたが、それも戦後開発がすすむにつれて少なくなってしまった。この表は「南箕輪の横井戸」であるが、こんなにあったかと思われるほど多い。この表の記述でその概況を知ることができるが、これより詳しい資料が残っていないものが多い。

2 大泉の横井戸

(1) 大新横井戸

明治三年に竣工した横井戸の草分けである。「大泉村字田代大新横井概況」（小学校資料）によると、当時は地方に横井戸が甚だ少なかつたというので、伊那地方でも草分けの横井戸かと思われる。

水源は井中数カ所から湧出し、延長は一〇〇余間、穴の高さ八尺余、幅三尺、暗渠五尺で、灌漑面積は当時八反歩（大正二年には三反歩）であった。明治三年九月起工明治四年二月に竣工、工事は単独で原新吾があたった。この横井戸の特色は溜池を築いて不用水を貯え

ておき、灌漑の用にしたことである。

老反式畝廿三歩ノ溜池ヲ築キ不用水ヲ貯エ灌漑ノ用ニ供ス。然ルニ該地の勢上置土ナルヲ以テ水溜リ宜シカラズ再三修理シテ完全ニ至ラシメ為メニ非常ナル経費ト日子トヲ要セリ。（同上）

と、この溜池設置に要した非常な経費と再三にわたる漏水の修理をのべている。さらに水害でその水田の大部分を失ったことものべている。

田地ハ大泉河ノ沿岸ニアリ元來堤防ハ官営ナルニモ候ラズ自費ヲ投ジテ築設セリ然ルニ明治拾壹年ヨリ數度大洪水ノ為メ堤ニ堤防破損シ田地ノ大部分ヲ流出ス（同上）

その後、明治四〇年以後引続いて、横井中の不完全箇所を修繕し、横穴を三〇余間延長掘りをし、水量を増やして荒地を開拓中であることも報じられている。

この功績が認められて、明治五年には県庁から賞状をいただいた。それは長さ六尺幅六寸の大きさであった。

伊那郡大泉村名主 原新吾

其方儀御恩ヲ井工御請書多分ノ入費相掛ケ自費請ヲ以テ 再々切リイタスノミナラズ 七十間余横井戸ヲ穿テ新堀溜池自費ニテ出来、荒畑ノ分田成リニ起キ返シ又ハ余水ヲ以テ最寄畑ノ分田成リニ致ス可キ見込ミ等奇特ノ至リニ付御賞トシテ一匹之ヲ下サレ候事

壬申二月

筑摩県庁印

ここで自費で大泉川の堤防を修築し、溜池も自費で造り畑田成りをしたことが認められた。

この場合は特に賞状をいただいたのであるが、どの横井戸についてもそれなりの苦心はあった。

(2) 西村横井戸

これは大規模な横井戸であるが、詳しい資料に乏しい。前記の大正二年の小学校の調査資料によると、およそ次のようである。



図4-20 水神様(左)と水の出口(西村横井戸)

明治二十六年に発起して願書をだし、明治二十八年二月によりやく試掘の許可を得た。ただちに着工して四年間の歳月を費した。後、明治三十二年一月に竣工した。延長がおおよそ三五〇余間、穴内の石積み一四〇間、高さ平均三尺であった。これは中央道の工事のとき途中を掘ってみたのであるが、地下一〇mほどのローム層の中に、大人の腰をかかめて通れるほどの美しい横穴がきざまれている、こんな



んと澄んだ真清水が音をたてて通っていた。ローム層からはずれた出口の方は石積みされていた。この水を使った開田計画

は着工とほとんど同時の、明治二十八年三月から着手された。大泉川沿岸の荒地を開墾するため、石堤を築いた。延長一五〇余間、高さ一二尺、であった。そしてこの川原のほかに段丘上まで長い距離を横などを使って引水し開田もした。灌漑反別は一町八反歩であった。この時築いた堤防のうち七〇間ほどが、明治三十八年の水害で破壊された。

この横井戸の工事総経費は四一五〇円余で、土地買入れ金が三六〇円かかった。このほかに通水敷の示談や買入れ金もかかり、手続きや運動費も併せて二〇〇余円かかった。それで総計四七二〇余円という、当時としては莫大な費用であった。

この横井戸は中央道の建設のとき他の横井戸とちがって機能保償を求めたので、現在も湧水がこんこんと流れだしている。

(3) 東垣外横井戸(司の横井戸)

この横井戸は二転三転の経過をたどったので資料がよく残っている。掘削の願いは早くも明治一六年にだされている。

横井戸掘削許可願

上伊那郡南佐輪村大泉耕地

願人 原 新作

唐沢伝之丞

原 政一

右原新作所有宇東垣外式千五百三拾四番ノ畑地常ニ灌氣之有ル場所ニ之有リ候間横井戸掘削イタシ候バ必ズ湧水之有ルモノト信認仕リ候果シテ然レバ若干ノ畑田成リ出来候益ヲ興シ候間横井戸試掘仕リ度ク勿論上下水脈等へ関係之無ク候間故障ノ薪等決シテ之無ク候間御見分ノ上御許可成シ下サレ度ク給図相添ニ此ノ段願イ上げ候以上

明治十六年十月八日

右

原 新作

唐沢伝之丞

原 政一

長野県令 大野誠一

耕田種花 酒井七右衛門

清水半寸厚。

南宮輪村戸長 穂高祥三郎

重ノ井大東文書

この試掘場には図4—22のように詳しい図面が添付されていた。これによると深さ四丈一尺七寸も竪井戸を試掘し、約五〇間ごとに上竈を二か所あげ、掘り込み口でも一丈七寸の深さにし、それから約五〇



图4-21 重烟外横井戸图（明治16年）

間を凝り懸って、溜池へ水を導くようになってゐる。圃田面積は三町歩が予定されていた。

この許可はもちろんおとりて工事にかかったが、意外に困難で経費がかさんだので施工ができなくなり、三人の約定は破約になり、工事は途中で放棄され、そのまま捨て置かれて、むなしく一〇余年がすぎた。

明治二十九年になって、原けさよは父新作の遺囑を思い、当時戸長であるこの横井戸に力添えしてくれた穂高にこの事業を継承してもらう約定証をかわした。それは湧水の三分の一を地代として原氏へ、三分の二を穂高氏にという条件であった。

約定証

明治十六年中宇東坂外畑地へ……………三名ニテ掘削致シ候処意外ノ費用相續
ミテ本國行出來兼右三名ノ約定ハ破約ニ相成リ其ノ工事放棄致シ其儲蓄テ置
キ候ニ付キ父新作寅ニ遺徳少ナカラズ依ツテ今般貴殿ト示談ノ上掘削方一任
シ成功ノ上ハ湯水ノ三分一小生方ヘ地代トシテ受取り残り三分ノ貳ハ貴殿ヘ
御自由ニ成サル可ク換立モ以後ノ費用ハ貴殿方ニテ悉皆御償イ成サル可キ事
且ツ該横井戸并ビニ井筋ニ係ル地所該地等ハ何種ニ相成リ候キ水邊聊苦情申
ス間數々候之ニ依ツテ前記御指令書相繼エ保証人連署約定書依ツテ件ノ如シ
明治二十九年二月四日
南宮輪村本人 原けさよ領

南箕輪村本人 原野さよ子

保證人 原 新佐治

龜ノ井大東文書

このようにして、この横井戸は明治二十九年には菊高氏に譲渡され

この約定が成立した一か月後には、工事が再開された。

横井戸工事請負証

一、上伊都郡南箕輪村大泉新地字東垣外横原けきと所有地へ横井戸開削仕様
左ニ

一、横井戸長サ延百間開削ノ事

第一工事 長サ延五拾間掘り割り八寸深サ六寸石ニテ両側へ石ヲ伏セ石

ノ平蓋ヲ掛ケ苦土ニテ埋メ其上へ作土ヲ平ニスルコト

第二工事 長サ延廿間横井戸ヲ開削スルコト

第三工事 田横井戸ノ内ヲ浚ウ事

第四工事 流上ヨリ流末旧堤迄漸ナク流水致サスベク候事

……若シ該工事ニ付キ不都合ノカ所之有リ候ワバ御指揮ニ随イテ取り繕イ工事
成功致ス可ク之ニ依リ請負ノ証件ノ如シ

明治二十九年三月十六日

南箕輪村 唐沢九十蔵

安積馬治郎

唐沢駒次郎

惣高孫三郎殿

(堀ノ井大東文書)

この請負証によると、三人で横井戸は大方できあがっていて、掘り
込み口まで水はきていたが、その後の漏水がひどかったのか、第一期
工事としてその掘り割りの漏水を防ぐため、両側へ石をふせ石のふた
をして苦土で埋めてその上を作土で平らにすることを請け負わせた。
そして更に水を増やすため二〇間の横井戸を掘り、横井戸の内を浚
い、流上から流末までの流水の通りをよくするようにしている。この
工事費が金五〇円であった。

この工事の掘削費は、さきの請負証に工事期ごとに詳しく規定され
ているが、四月には早くも三八円支払っている。この額は最終の第四
期工事が含まれているのでほとんど完成とみてよい。

水の少なかつた大泉では、この成否が未だ定まらない横井戸の水を

使って水田にする契約が成立していた。

契約ノ証

本村原新作殿所有地へ今回貴殿ニ於テ横井戸開削候ニ付キ該横井戸ノ出水ヲ
以テ畑田成り取り給エ候ニ付キ約定スル左ニ

一、畑田成 反別者反歩ト定メ 水税金六拾円也

此内訳

一、金三拾円也 本年成功ノ上獲ス可キ事

一、金拾円也 本年十二月三十日払ウ可キ事

一、金拾円也 明治三十一年十二月三十日払ウ可キ事

一、金拾円也 明治三十一年十二月三十日払ウ可キ事

右ノ通り約定候上ハ相互ニ違背致ス間敷ク候後日ノ為契約致シ候証件ノ如
シ

明治廿九年三月十日

同村 惣高孫三郎殿

(堀ノ井大東文書)

もし成功したらということ、これだけの契約がすでに成立して、
この横井戸の前途は明るかった。

さて、この横井戸はまたもとのさやに納まるようになった。それは
出羽沢岩次郎を介して、原新作方へ返却されたものである。その代金
は不明であるが証書に残っている。

売買シ証書

去ル明治廿九年申貴殿義父新作殿ヨリ依頼ヲ請ケ同人所有地字東垣外へ横井
戸掘削致シ候也今般出羽沢岩次郎殿売渡シ代金正ニ請ケ取り申シ候 然ル上
ハ拙者方ニ於テ決シテ苦情之無ク候間貴殿ノ御自由ニ御進退成スル可ク候後
日ノ為横井戸売渡シ証書件ノ如シ

明治三十一年八月三十日

南箕輪村

売主 惣高孫三郎

請人 有賀 岩藏

第1節 水を求めて

同村

原 朝次郎殿

請人 原 古文

(横ノ井大東文書)

この水田の計画とは別に、一生をかけて水を求めてきた原家は、ともかくもこの成功を喜んで、水神祭をするからと工事の引継者種高に招待状をだしている。なお四月二十五日水神祭には今後毎年招待する契約をしている。その水を求めて得たとときの喜びのほどが察せらるる契約書である。

契約書

一、去ル明治式拾九年拙者義父原新作ヨリ貴殿方へ横井戸掘削方ヲ依頼致シ
宇東垣外へ掘削成テ候場、水之有ルニ附テ今般出羽沢岩次郎殿ヲ以テ
示頼相整イ番官員イ請ケ候ニ付キ紀念トシテ年々四月二十五日ヲ期シ水
神祭典執行政ス可ク候当日ハ貴殿方ニ必ズ御報知仕ル可ク候後日ノ為契
約書差シ出シ置キ候場仍ツテ件ノ如シ

明治参拾九年九月廿四日

上伊那郡南箕輪村 原 浅次郎殿
立入人 出羽沢岩次郎殿

總高孫三郎殿
有賀 岩藏殿
原 古文殿

(坂ノ井大東文書)

これによって、この横井戸は明治三一年九月現在で成功を納めて湧水があり、もとの原浅次郎のもとへ戻ったことがわかる。ただし、これは一応の成功でその後開田した記録はない。今でも西天園田地帯にその湧水がふきだすことがあって、ここに横井戸のあったことを知らせているにすぎない。

(4) ムクリ横井戸

これは大泉北部にある横井戸でなかなか大規模のものである。南箕

輪村一八〇〇番字ムクリの山林、田中氏所有地から掘削、延長突に二六八間であった。

起業者は、清水藤四郎・清水嘉伝治・唐沢兼藏・唐沢市太郎・田中朝雄・唐沢要太郎・出羽沢為十郎・唐沢為藏・出羽沢今朝市・清水卯兵衛の一〇名であった。

当時の惣代清水卯兵衛の大正二年の報告によると、明治三五年から開田に着手し、明治四一年までに、水田一町九反余歩が水田となっている。

3 大泉の深井戸

飲用水として前述の上井・下井を用いた長い年月がすぎた。江戸時代末期になると、井戸がほられるようになった。しかし、この井戸水も潤れることが多く、村内を井堰の水が通ると井戸水も多くなったが、その水が通らない時はすぐ潤れてしまった。

井戸の水が潤れると、水の潤れない井戸へ各戸でもらい水にいくので、その井戸も二三日で潤れる。今度は横井戸まで水汲みにいかねばならない。こうして六間八間もある深井戸から水を汲みあげることに、一kmも離れた横井戸から水を運ぶ仕事は、大泉の嫁や婦人たちの仕事で重労働であった。

はじめ三か所にしかなかった大泉の井戸の経営は全く共同体的のものであった。安政四年(一八五七)の「井戸人足日記帳」によれば、市場の井戸仲間と思われる二五名が三日ずつ人足にて七五日分の仕事をしている。

井戸人足日記帳(安政四才巳二月吉日)

磯兵衛 五日、十七日半、十八日半、十九日

新兵衛 五日、十七日半、十九日馬人出

張八 九日、十一日、廿日

.....(以下二名略)

(まゐるや文書)

このとき井戸繩をしめていた。これは総計老賃一六〇匁の費用をかけて「与左衛門宅ニテ」藤七以下六人で、井戸繩をよっている。この時に新しく井戸を掘ったのであろうか。

万延元年(一八六〇)の「井戸入用書留帳」によると、世話人を四人こしらえ、その費用を分担している。費用は均等でなく三二九文が五人、二四六文が一〇人、一六一文が九人となっている。その内容は「寛」のようであった。

寛

一、金 貳分五厘	井戸げた代
一、銭 四百匁	釣べ代
一、銀 四匁貳分五厘	鉄たが代
一、銭 貳拾四文	同断(はそん)
一、銀 五匁	いかり代
一、銭 貳百文	井戸がへ代
一、銭百七拾貳文	酒壺升
一、銭貳拾貳文	縄紙代

(まゐるや文書)

安政四年(一八五七)に七五日も要した井戸が、たった三年後にまたこれだけの労費を要したことは、井戸の維持管理のむずかしさを語っている。

図4-22は明治四二年の大泉の井戸の図である。これだけ多くの井戸をほって水を求めたのであるが、夏期は水の溜れる井戸が多かった。

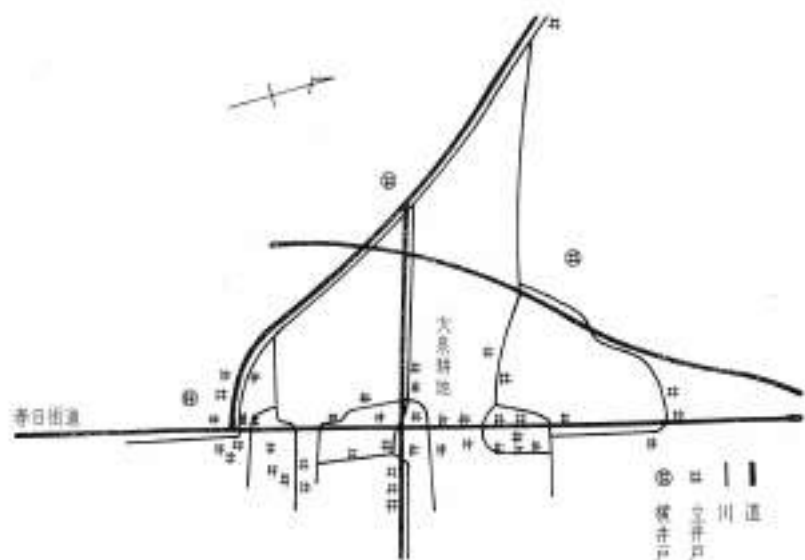


図4-22 大泉の井戸(明治42年5月15日調)(大泉中西文書)

四 沢尻の水

1 沢尻の水不足

沢尻は鳥谷川ぞいの村で、古くからあった村であるが、途中で亡村の憂き目をみた数奇の運命をたどった村であった。鳥谷川はもともと水量が少ない上に、大泉川と同じ伏流する川なので、沢尻は水の乏しい、水に苦労した村であった。古く宮島氏の築えた村であるのに、文

第1節 水を求めて

徳元(一五九二)から約六〇年余も亡村という運命になったのも、水が乏しく人の住みにくい所という理由が有力であったかと思われる。

沢尻の村人は明治初年に横井戸を掘って水不足を解消しようとした。むろん鳥谷川の水はあてにならない。井戸水で生活しているが、年によると八丁余りの坂道を小沢川まで行って汲み揚げなければならぬ。この横井戸は今ある出口から月見松へ向かって掘りこんだという。西天の開田工事以前は点々と五か所に堅穴があった。この横井戸は「モッコ」でかついで運びだしたので横穴は相当大きく掘ってあった。当時は水が相当量出て水田を造る用意をするほどであったが、その後水脈が変わり季節水のみとなってしまった。そこで次の計画ができた。

明治一四年に出された「横井戸開削御願い」には、用水に用いるべき川はなく、新井戸水で生活していること、その井戸水がかれると八丁余り隔った小沢川の水を汲み上げてようやく生活していること、非常火災の時は消防の術がないことを訴えている。

この訴えにもあるように、従来の沢尻の飲用水は井戸に頼らざるを得なかった。井戸は貴重であり、簡単にには造れなかった。「長者の井」が古絵図に記されて、宮島氏宅跡とともに、井戸の重要性を思わせる。

また古い字名の中に「水汲み坂」があるのも、小沢川からの水汲みをたがひなければ飲用水に事欠いたことを示している。

さてこの横井戸であるが、多くの村が主として田用水に掘ったのに沢尻では飲用水をまず目的とした。

横井戸開削御願

上伊那郡南箕輪村 沢尻



図4-23 沢尻の横井戸水路と鉄管(鉄管で水道用水とした)

右沢尻ノ儀ハ従来用水ニ用ウ可キ河流之無ク悉皆井戸水ヲ以テ炊爨ニ供用仕リ候過早年ニ至リテハ八丁余リ相隔リ候小沢川ノ水ヲ汲ミ揚ケ漸ク生活艱リ在リ不如非常火災等ノ節ハ消防ノ術之無ク困苦難リ在リ候然ルニ耕地内池上甚五右衛門所有地宇南原林ニ水路発見候間横井戸開削ノ義願イ上テ奉リ候

右事項ニ付テ所有主及ビ隣地ハ勿論耕地内一同放障之無ク後開削許容下シ置カレ度ク之ニ依リ別紙図面井戸ニ汲レ地一筆限リ縦相添エ此ノ段懇願シ奉リ候以上

明治十四年二月十五日

右沢尻耕地 願人 加藤善四郎

地主 池上甚五右衛門

隣地惣代 唐沢金太郎

耕地惣代 有賀福太郎

長野県令 横崎寛直殿

(役場文書)

また大正になって、新しい横井戸を掘った。これは鳥谷川でいに掘ったので水がでた。一度に多量の水は出なかったが、一年中水がたえないので沢尻の人の生命の水であった。松の木で木管を造り水道を早くからひいた。昭和初期になってそれを鉄管の施設に替えた。この鉄管水道で沢尻のほとんど全戸が水道を使えるようになった。当時としては立派な計画であった。

この水道もその後の地下水の変化によって水が涸れたので、下流の伊那市と交渉して、昭和三六年から沢尻全戸が伊那市の補償水道（簡易水道）へ加入し、飲用水の不自由さから解放された。昭和四九年四月からは伊那市営浄水道下に入り、ますますよい水を飲めるようになった。

2 田用水計画

飲用水に苦勞している沢尻にも田用水の計画があった。「中興用水断絶ニ付キ用水引採リ御願イ」がそれである。このお願いには沢尻の昔からときおこし、その用水不足の事情を訴えている。

中興用水断絶ニ付キ用水引採リ御願イ

………漸ク共有井戸ヲ以テ活命致シ水利事情ヲ求ムト雖モ水行絶エテ往古沢尻ノ地利移リ易シ衣類洗濯等ニハ七、八町南へ越エ小沢川迄運搬シ非常火災等ノ節ハ密偵偵シ消防ノ策ヲ尽スノ術ナク誰カ愛憐ヲ想ワシ是ヲ看是ヲ聞ク毎ニ拱手嘆息累心ヲ焦シ胸ヲ痛ムト雖モ力及バズ………

（大和手文書）

この窮状を訴えたのも、今や明治の御維新にあたって従来の古い慣行はともあれ、有をもつて無に通ずるようになり、小沢川からの引水根を認めてほしいと、南箕輪全耕地の代表が連名で、次のようにお願いしている。

今や御維新ノ明治ニ際リ遠カラ聞キ近カラ親ルニ有ラテ無ニ通ズ新堰成ハ畑ハ田ト変ルノ光景被ノ小民ニ於テモ用水ノ儀ハ心機ヲ勞スルノ際今般村落合併相成リ情実見ルニ忍ビザル次第ニ存シ奉リ候何卒格別ノ御憐察ヲ以テ字北沢南沢合流小沢川ヨリ何分ノ水利相立テ以テ非常火災ヲ防禦シ被ノ一小部ト雖モ一般ノ御保護ニ洩レザル様偏ニ懇願シ奉リ候且ツ用水路ノ儀ハ伊那村ノ内平沢用水尻ヨリ引キ採リ候様仕ラ度ク依ツテ絵図面相添エ差シ上げ奉リ候

明治八年七月八日

謹言 第十七大区九小区南箕輪村

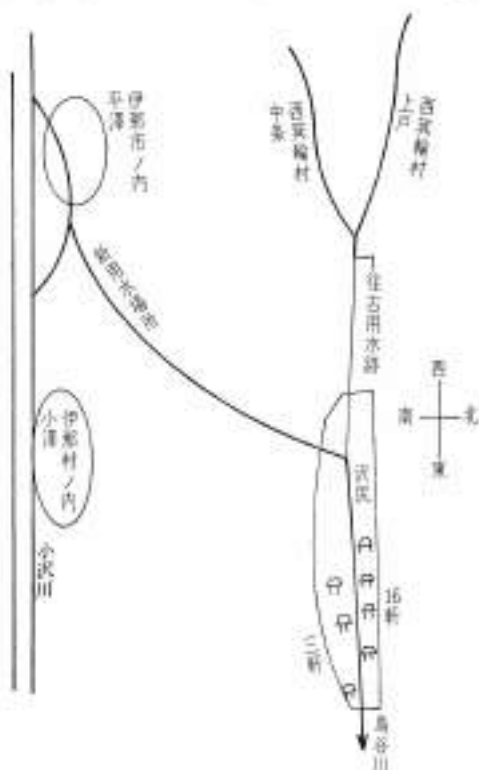


図4-24 沢尻の用水計画

筑摩県権令 永山盛輝殿

（大和手文書）

このように南箕輪の戸長以下五名の副戸長が、この小耕地を見るに「見かねてお願いした。その計画は平沢用水の尻を、沢尻に引こうというお願いであった。このころあちこちの新井堰が慣行水利権という古い慣習を破って許されていた。沢尻でも本山さまという筑摩県の属吏にお願いしたと古老は伝えている。」

副戸長	有賀	光彦
同	原	新五郎
同	倉田	三郎
同	有賀	誠二郎
同	清水平一	郎
戸長	高木	省三郎

第1節 水を求めて

その結果は、はっきり文書にはないが、どうも許されなかったのがある。そしてついに畑を田に変えようとする願いは実らなかった。ただ、その時の引水計画の図面だけが図4-24のように残っているだけである。

国 開拓地の求めた水

北原区・大芝区・南原区の開拓地は、もともと水のないところへの入植であったので水を求めるには筆舌につくしがたい苦闘をした。それは開拓地の存亡をかけたものであったので開拓と切り離せない。開拓地の求めた水については、「第七章第二節二、入植による開拓」に詳述し、ここでは省略した。

三 段丘沿いの村々と水

(一) 段丘ぞいの湧水

南箕輪の村々には、自然の湧水にめぐまれた段丘が、南北に連っている。ここは、朝日をうけ見はらしもよく天竜川の水害も直接うけることのない、住むに快適な地である。この段丘に滾々と湧き出す水を求めてきた村々が、久保村、塩ノ井村、北殿村、南殿村、田畑村、神子柴村である。

これらの村々は、飲用水にこと欠くことはほとんどなかったが、より近く水を求めたいとか、田用水を少しでも多く求めようとする努力は重ねられていた。

段丘ぞいの村々の飲用水と田用水は次表のようにいく筋があった。

この表4-8でもわかるように、村々の飲用水はその村うちからの出水であり、その出水で不足することはほとんどなかった。ただその出水を田用水にも使うので、流末では水が汚濁するという紛争が久保

と田畑の北割に起こっているだけである。

田用水については、この表でははっきりしないが、次のような紛争が起こったが、多くは裁判にまで至らないで仲介人で解決している。

(1) 天竜川からの引水は、上流の村からでなければいけないので、上流の村との紛争。

(2) 天竜川・大泉川での対岸の村との紛争。

表4-8 段丘ぞいの村々の用水

区	飲用水	田用水	出典(年号)
久保	村上林ノ根ノ出水	・北沢・南沢・滝ガ沢 ・上井・下井	久保村明細帳 (天保9年)
塩ノ井	村内ノ出水(上・下)	・柳ヶ沢 ・北沢・南沢・滝ガ沢	大南文書 (天保9年)
北殿	駒形明神ノ出水	・久保村ノ沢々ノ水 ・中井沢・北ノ沢 ・天流川井・笠田井 ・横井戸(八幡宮)	北殿区有文書 (天保9年)
南殿	村内ノ出水	・大泉川井(4か所) ・天竜川・くろ川 ・横井戸(八幡森)	南殿村笠田帳 (元禄12年)
田畑	初沢潤出水	・初沢井 ・黒川・天竜川(沖河原) ・大泉川井 ・北清水沢	御普請明細帳 (元文3年)
神子柴	大清水川出水	・幸沢井(小中沢・大中沢) ・天竜井(向河原井・龍川原井) ・大清水川井 ・横井戸・横井戸	御普請明細帳 (元文3年)



図4-25 久保の用水（下井）水神像の下から湧水

(3) 同一水源の分水の紛争（平沢井）

こうした水の紛争は、村々がより多くの水を求めるために起こる。ここではそのうちの二、三について記す。

(一) 水を求める紛争

1 久保の飲用水

用水に恵まれていた久保でも飲用水に不足をきたして、豊富な水源の滝が沢から水をひくことになった。

一、村方銘々春用水不足ニテ難儀

ニ付キ滝ノ沢水上ヨリ井水ノ義一統相頼ノ上渡シ方滞間ニ付キ銀七分ツツニ相頼リ申シ候

右相頼ノ義ハ相談ノ通り山ノ神村林春ハ早々荒弘イ掘リ貸ニ弘イ渡シ候儀一統承知ニ御座候猶又米々如何様六ヶ岡敷義出来候共用水ノ儀ニ御座候ヘバ急度難用出金仕ル可ク候

右一統ノ承知ノ連印仕リ候所相頼御座無ク候以上

文化十三年子細月日

庄三郎 印

(以下三九名印)

名主弥五衛門

(久保大東文書)

このように村中で相談して引水をきめ、その費用は村の林を売ってまかなったのである。

これに対して北殿から故障がでてきた。北殿では滝が沢の出水は黒

川井となえて往古から田用水としていた。このたび久保が心得がいにも新規に溝を掘っている。数度掛け合いに及んだが、ちががかない。久保村の役人どもを呼びだしてこの溝を潰してほしい、これが北殿村の主張である。

これに対して久保村では、先年から飲用水が不足がちであったが、近年格別湯水で困っている。滝が沢からの流水を引き取った。この出水は北殿村ばかりの用水ではなく久保村の古田にも引用している。また滝が沢の水全部を引き取るのではないから、北殿村の古田に差障りになることはない、これが久保村の主張である。

そこで飯島宿の所兵衛と松島村の七郎右衛門が立ち入り、内済証文が取りかわされた。秋の彼岸から八十八夜まで、引水をみとめられた。文化一四年（一八一七）のことである。

取為替申ス内済証文ノ事

……此ノ度久保ニテ掘リ立テ候新規溝ノ儀ハ秋彼岸ヨリ春八十八夜迄水引キ入レ夫ヨリ惣方先規ニ従フテ引キ来リ候往還下古田用水入り用ノ時節ハ一切引入レ申ス間敷若シ米々心海連イノ考之有リ夏分水引取リ候ワバ右新溝双方立合イ早々残ラズ潰シ申ス可ク候事……

訴訟方

松平丹波守様御預所

北殿村

名主 佐

藤

文化十四丑年二月

上 知

北殿村

名主 市郎兵衛

組頭 清右衛門

相平方

飯島御支配所

久保村

名主 弥五右衛門

組頭 清右衛門

百姓代

九左衛門

与 一

所兵 飯島町御宿

所兵 衛

松島村年寄

七郎右衛門

(千桐屋文書)

嘉永二年(一八四九)になって、天竜井が三日町地域から引水されたとき、冬期間だけという規定はなくなった。しかし、天竜井が川欠けのときは、いつでも切り落すという条件がついている。それは次の一札に記されている。

差し出し申ス一札ノ事

……右竜ガ沢出水ノ義ニ付テ去ル文化度新規諸君ハ後是人組規定書ニ相成リ候段相互ニ照テ相守リ候リ在リ候処當春三日町地域内ヨリ天竜川井筋ニ御引キ込ミ(中略)テ往古ヨリノ用水ニ候エ共當時新井筋出来候ニ付キ分水ノ義ハ御意支エニモ無キ難御示談下サレ候ニ付テ種揚ゲ申ス可ク候モ天竜川湯水ノ節又ハ井口欠ケ地等ニ相成リ御村方用水御意支エニ相成ラザル様仕ル可ク候後日ノ為村役人地主連印致シ一札差し出し置キ候處仍テ件ノ如シ

(堀ノ井大東文書)

2 北殿の天竜井

元文二年(一七三七)の「村差出帳」によると、北殿の飲用水に就いて、田用水が次のように記されている。

用水差田、三日町分より井揚げ申し候、溝二十町余、田五町余作り、堀入用

費は三日町村と田高割り。

用水天竜井、三日町分より揚げ来り先年御私領の節井口度々替り諸道具井揚げ免下され候

(千桐屋文書)

天竜川からの引水は、二筋とも上流の三日町地籍からとなつてゐる。この井が三〇年後の宝暦六年(一七五六)には、笠田用水で一〇〇石余、三日町地籍ノ木前からの井で一〇〇石余と、石高をまわしてゐる。

黒川は冷水であつたが天竜井は温水がかかるのでしだいに田もふえ

ていった。しかし揚げ口が村内でなく三日町であつたので何かと紛争が多かつた。文久元年(一八六二)には、井袋へ石を積みこまれる事件が起つた。植え付け最中に井を切り落されることもあつた。三日町の銀之丞と弥登右衛門のしわざであつた。交渉しても説得しても聞き入れないので、やむなく松本の役所へ、次のように訴へ出た。

恐レテ書付ケテ以テ願イ上テ奉リ候

略

……左候エバ御田地賦付ケ候儀ニテ凡ソ式拾五町歩余モ千方ニ及ビ片時モ拙儀々難ク右様御普問迄モ氏筋ニ及ビ候様ノ者ニテ後難ノ儀ハ親前必至ト難治仕リ候間何卒御慈悲ヲ以テ右銀之丞弥登右衛門召シ出ダサレ御吟味成シ下シ置カレ已メ来不込乱防致サズ候様御付ケラレ下シ置カレ度ク偏ニ願イ上テ奉リ候以上

当御預所

文久元年六月

伊那郡北殿村

名主 弥五左衛門

組頭 弥惣治

百姓代 市郎兵衛

松本御役所

(千桐屋文書)

天竜川の上水口(湯水口)は洪水のたびに破壊された。そして流れの変わり方によっては、個人の田地を借りなければ、井をあげることができなかった。次の契約書はそれを物語っている。

契約書

筑輪村三日町地籍宇曾根田より南筑輪村殿村地籍へ通スル田用水ノ義今同出水ノ為欠壊シ上水復旧スル能ハザルニ付テ左ノ条件ヲ以テ貴殿所有地筑輪村八百八拾七番地ヲ借用致シ候ニ就イテハ聊モ違約致ス間敷後日ノタメ契約書差し出し置キ候也

一、井欄六尺土手幅東九尺長サ計七間トス

一、東堤即チ天竜川側面欠壊セザル為年々防壁スルコト

一、上水口ハ用水ノ外浸入セサル為最モ堅固ナル水門ヲ築クコト

一、借用地及ビ其ノ他ノ土地ヲ開ハズ井水ノ為欠壊シタルトキハ直ニ復旧スルコト

一、借地料ハ壹畝ニ付キ初五斗ノ割合ヲ以テ毎年拾壹月參拾日限り相違無ク相渡シ申ス可キコト

一、用水路不用ニ属スル際ハ在来ノ田地ニ復旧スルコト

明治四拾參年七月五日

田用水関係地主惣代

南宮輪村 倉田三郎 印

同 有賀重徳 印

同 伊藤鶴吉 印

同 伊藤三十郎 印

北殿新地月番惣代

北条盛一 印

箕輪村三日町

春日重高殿

前記 評致 式紙式拾壹坪

此借地料 概若石壹斗七升也

北条盛一 印

(千桐屋文書)

以上は北殿と上流の三日町との紛争であるが、南殿とその上流の北殿との間にも、田畑とその上流の南殿の間にも、さらに神子柴とその上流の田畑との間にも、同様の紛争があり、同様の契約がとりかわされている。

3 分水にかかわる水論

(1) 大泉川をはさんでの水論

大泉川からの揚水は、天竜川からくればまことに簡単で、人足二〇人、芝三〇駄ほどでできた。しかし川をはさんで、南殿村と田畑

村が相対しているもので、そこに紛争が起こった。

享保九年(一七二四)にはとりわけ出水が少なく、田畑の井(掘現と田の徳)で水争いがおきた。田畑では慶安御換地の古田が荒れてしまふと江戸表へ出訴した。しかし、南殿では小村であるので、大きな訴訟ができないと嘆息したので、仲裁が成立して、次の「証文」ができた。これが定着したのか、以後文書に残るような争いはない。

証文ノ事

一、田畑村ヨリ南殿村御田地大泉川用水ノ儀今度出入ニ隔リ成リ候処ニ大草太郎左衛門様御役所太田御殿守様御役人同御役所ヨリ我等共ニ仰セ付ケ為サレ右場所立会イ給儀致シ候処ニ田畑村堀リ候井堰式筋ノ内上ノ堰ヲ浪シ其次ノ井堰名前のくろニテ大泉川ノ水式分田畑村へ引き取り其ノ下リノ堰ノ儀ハ名前みやのこし大泉流ニテ五分五厘南殿村へ引き取り四分五厘田畑村へ引き取り候儀ニ取り暖イ申シ候……以下略……

享保九年申辰

大泉村 宇右衛門 印

北殿村 庄右衛門 印

松島村 金右衛門 印

木下村 万右衛門 印

同所 甚八郎 印

同所 半左衛門 印

久保村 七郎左衛門 印

南殿村 名主 年中 惣百姓中

(大泉館文書)

これによると田畑村で掘った二筋の井堰のうち、上の堰は取つづす。その次の井堰はたのくろで大泉川の水を二分だけ田畑へひきとつてよい。それより下流の堰は、みやのこしで大泉川の流水を五分五厘南殿村で、四分五厘を田畑村で引取つてよろしい、こんな仲裁で両方が納得した。これには仲裁人として大泉村宇右衛門ほか北殿村松島村

第1節 水を求めて

木下村（三人）久保村の計七人が加っている。天領側からも私領側からも立入った、大がかりなものであった。
この井堰がどこであるか、はっきりしたことはわからないが、現在

の取入口は図4-26のように、南殿が中央・南田、柳田の三か所、田畑が権現と田畑大泉川の二か所である。
(2) 半沢井の水論

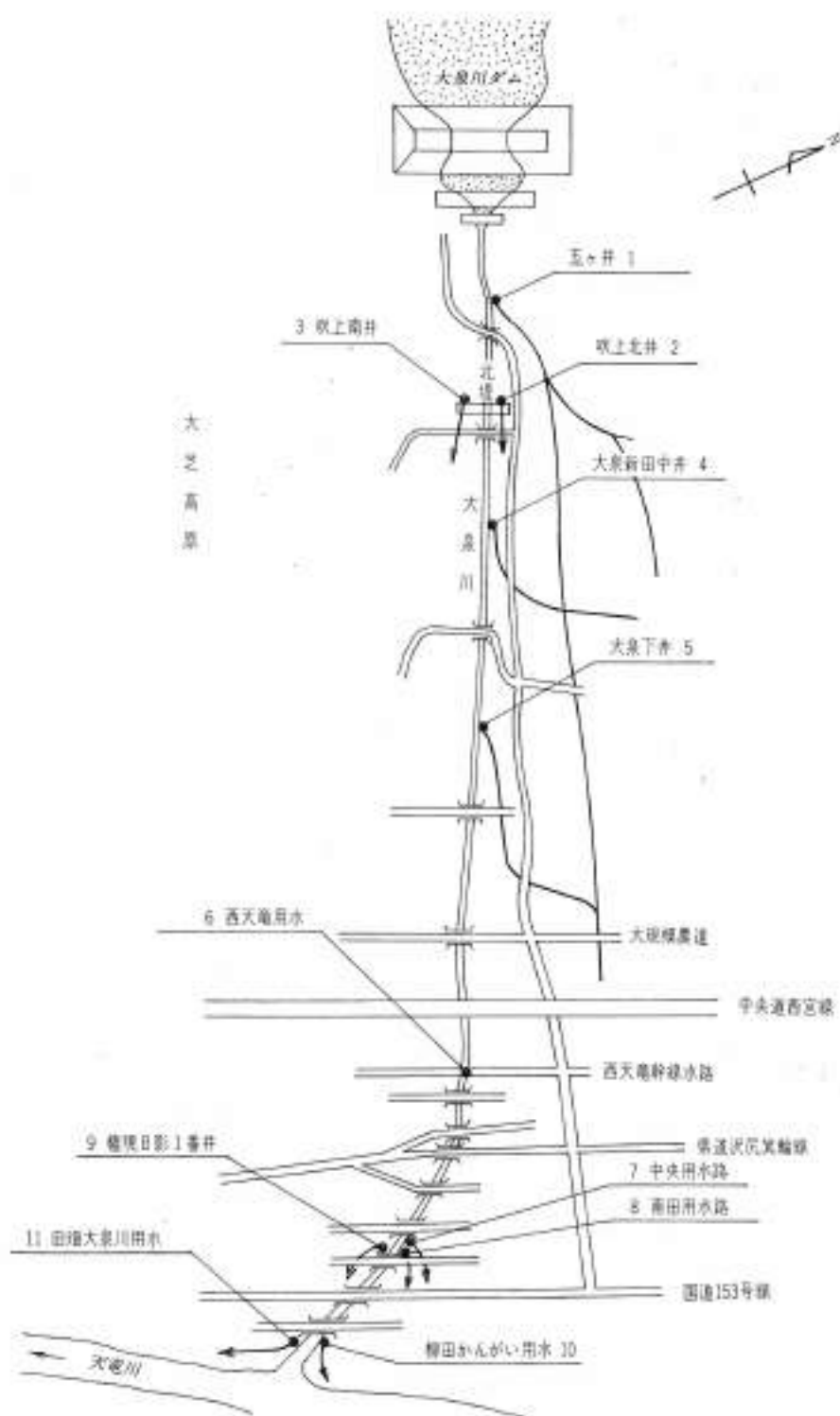


図4-26 大泉川の慣行水利権による取水関係略図

半沢（小中井沢）は田畑村の飲用水であり、神子柴村の田用水であった。

元文三年（一七三八）の「御普請明細帳」（同屋文書）には、次のように記されていて、田畑村の飲用水であることがわかる。

香水用水 長さ一町余 掘幅平均四尺

是は当村分初沢洞より出水にて百姓自普請に仕来り申し候

半沢溝 源を初沢前宮原に発し、田畑村地内の方神子柴村地内の方半沢と字する地の溪水を導き三派となし、二は神子柴村地内田畠の用に備う。（俗に上井下井と呼ぶ）一を田畑村地に導きて飲盆に供し且つ田の養水とす。……

このように半沢の水は三分の二は神子柴の田用水、三分の一は田畑の飲用水ばかりでなく田養水ともなっている。

これには、半沢の水をめぐって、田畑と神子柴の間に何回にもわたる紛争があった。天保八年（一八三七）ころから半沢の水を使って田畑では畑田成をしきりにした。田畑は、畑田成をくりかえして、天保一五年（一八四四）四月にようやく内済規定ができた。それは天保八年以後の田は残らず取潰すというものであった。

しかし、なかなか田潰しは進まず、同年六月再び内済規定ができた。四月の規定とちがうところは、田畑村で立入人に一札を入れたことで、それは今後この規定を破って再論に及んだときは、その費用一切をその者に出銭させるという点にあった。

しかし、田潰しどころが畑田成が盛んにおこなわれていくので、ついに神子柴村では訴訟にふみきった。嘉永元年（一八四八）六月のことであった。そのころになると、神子柴村が田潰しを求めるばかりでなく、同じ田畑村の北側からもあまり畑田成をするので飲用水が不足するから残らず田を潰すようにとの申し立てがあった。

そこで立入人が入って、今後は決して畑田成をしないことと、これまでの畑田成のうち七分は潰し、三分は残すことと、実質的なとりきめができた。

ここで残った三分通りの田も、「中田」といって古田が残らず植付けが済んでから、その年柄によって中後（六月一五日以後）に植付けることとなった。

ここで半沢の井のもつれにもつれた紛争はぶつとりとされたのか、記録に残った紛争はない。

4 天竜川をはさんで

天保一二年（一八四一）の「神子柴村御普請書仕来り書上帳」によると、神子柴村の天竜井は対岸の野底村地内に向い川原から揚水している。天竜川はあばれる幅が大きいので、両村の境界は川向うであった。

天竜川通り字向い川原 用水式が所

川長拾壹町余、内法高さ三尺、横六尺、当村段り

内藤河守様御領分野底村地内に向い川原

此の水掛高 四拾五石八斗二合

（大和手文書）

このほかに古川原の井もあったがこれはこちら側であるし規模も小さかった。井の長さが一町横六尺という規模の大きいこの向い川原井は、明治初年の村誌には対岸の井でなくなったのか、潰の井となり田畑地の東方から揚水している。

弘化二年（一八四五）の口上書によると、対岸の高遠領から揚水したのは「用水始まり儀節より引続いて」と記されている。高遠領の野底との紛争は多少あったがすぐ解決しているが、田畑村と天竜川をはさんでの紛争が築をめぐって起った。



図4-27 大泉川伏せ越し図（正徳6年）と現在の水障

弘化二年の夏、田畑村で急変をこしらえたので、水流が変わって本流が神子柴の向い川原井へ堰きこんできた。早速その取り払いを申しこんだが、相談の上といつてちがいがあかない。井が危うくなったので、水除けの牛柵をこしらえて、応急の策をとっておいた。一〇月になつてから築をとりはずすから牛柵をとれといひ、牛柵は先規のものであるというお互いの争論がこり、延々と続いた。

この件は北殿村から立入って仲裁したようになってるが、はっきりした内済書はない。示談が進まないうちに天竜川があられて、築も牛柵も流れてしまったのかもしれない。

この争いは上流との争いでなく、対岸の相互で川の瀬を追ったり追われたりする争いであり、それが天竜川右岸に並んでいる村と村の珍しい争いであつた。

5 伏樋と横井戸

(1) 伏樋で求めた水

宝暦四年（一七五四）の「田畑村高反別明細帳」には、田畑村の天竜井、黒川両井が大泉川を伏せ越し伏樋を用いて田用水を求めていたことが、次のように記されている。

一、用水 天竜川黒川両井 大泉川を伏せ越し斜入用御普請所にて引き来り申し候……………

宝暦四年三月

（門屋文書）

伏せ越しは既に黒川井では元文四年（一七三九）の記録にもみえているから、一五年も前から伏せ越している。この伏せ越しは難事業であるので、むろん御普請であつた。宝暦四年（一七五四）の春、河原井と黒川井の両井の伏樋のときは、御手当金二両と木下村の御林から六間半七間の材木四〇本をもらつて普請をしてゐる。

明和三年（一七六六）には大水害があつて、伏せ越し樋が流失したので修復した。それは「大泉川伏せ越し樋仕振帳」にくわしく記されている。田畑村でも村役人足三・九人、雑木を四一本などを補つて、完成させている。伏樋のことについては、「第二節水との闘い」に詳しいのでここでは省略する。

伏樋がいかに多くの労力と費用を要するもので、それによって求められる水の貴重さは、次の横井戸の水と同様である。

(2) 横井戸に求めた水

段丘ぞいの村々には用水に恵まれていたが、それは段丘の下段地域で、段丘の中段から上段には用水がなかった。そこで少しでも湿地があれば、そこに横井戸を掘つて水を求めた。昭和初年に調



図4-20 御井神（横井記念）碑

べた小学校資料によると、沢尻一、大泉五のほか、段丘ぞいでも北殿五、南殿二、田畑三、神子榮二と予想以上に多い。

その大要は、第四章の第一節二に記されているのでここでは、南殿の横井戸について記すこととする。

明治二六年になって八幡森へ横井戸を掘ることになった。そこは御料林だったので御料局へ願ひ出て、特別の許可を得ることができた。横井記念碑は次のように語っている。

横井記念碑

農ノ本ハ水ニ在リ、水無ケレバ農業施ス所無シ。良農ノ用意ハ真ニ以有ル哉。我南殿ハ居民少ナク十有金戸、天竜大泉川ノ二川東南ヲ面シ、其ノ沿岸ハ鏡田有リト雖モ、崖上ニ邑ノ在所ニシテ、水利治カラズ、地儀ノ一泉煎厨ノ用ニ過ギズ。有志者以ニ之ヲ憂エ明治二六年八幡入ノ地ヲ相シ、横井戸ヲ以テ灌漑ニ使セント欲ス。而ルニ横井ノ起地ハ御料林ニ属スルヲ以テ御料局静岡支庁ニ陳情ス。当路ハ特ニ保安林第十一歩ヲ解除シテ而シテ其ノ請ヲ容ル。是ニ於テ哉、資ヲ授ジ工ヲ起シ三百余間ヲ掘削シ乃チ湧泉源々焉。尔后開田五町歩余、此ニ移居スル者十有金戸ニ至ル。嗚呼、水ノ利人ニ於テ

ル如ク是レ大ナリ。業ヲ起ス者等ノ功偉ナラザラン哉。今茲開墾者、冒瀆リ石ニ勒シ、以テ後人ニ貽スト願云々

大正四年五月

明治二六年一月着工、二七年に開田工事を始め、三〇年には一部水稲の作付けがはじまった。三二年には四ha余の開田が終了し、三三年には工事すべてが完了した。三〇〇余間掘った横井戸から汲々と出る水によって水田ができたので、一〇余戸しかなかった地域へ新しく一〇余戸が移り住むようになった。

水代金は「横井戸工事費」は一〇a当たり四八円で、人夫賃が一人一日二五銭の当時としてはかなりの出費であったが、水田のできた喜びは大きく、その後北の方へ支線が掘られ、開田面積は五ha余となった。

こうした横井戸の成功を記念して、大正四年に記念碑が建てられた。(図4-20)

四 遠くから求めた水

(一) 西天竜導水路（前史）

経ヶ岳山麓から天竜川の河岸段丘の間にひろがる広大な扇状台地（西部地帯という）は、前述の通り水が乏しかった。この台地を流れている大泉川は「尾泉川」で下流には水があっても途中には水がない。また荒無川は「尾水無川」で天井川で下流にも水がない。いずれも台地では伏流してしまっているのだ、とても田用水とはならない。

この広大な地に水をひいて開田することは、この地に住む人々の昔から、強い願いであった。一方で天竜川の水はあり余ってとうとうと南に流れている。この水を川上から引くことは、大事業であり夢物語のようでもあるが、この引水計画に目をつけた先人が江戸時代からあ

った。それは『西天電治革命』にも記述されているが、こんど発見された村内の資料にも新たなものがあり、ここでは西天電のできるまでの前史を中心として、その熱心に水を求めたあとを記すこととする。

昭和の初期に多年の念願がかない、西天電は伊那地方最大の穀倉地帯となり、春日街道沿いに「鍾水豊物」の巨大な石神が立っている。その神には慶びと共に「藩政以来先覚の士が諏訪湖より疎水して水田を開拓せんと欲したること一再に止まらざりしも、終始容易ならざるを以て実現を見ずして空しく数十年を経たり」と記している。

ここでは、空しく数十年を経たとあるが、先人たちが水を求めてあらゆる努力をしていたことを資料の上から知ることができる。以下、その努力の姿を時代をわけて記述しよう。

1 江戸時代の開発計画

台地上が山林や原野、または神や粟を作る畑だけとあって、諏訪湖の水を引いて水田を作りたいという願いを持った人が藩政時代にも多かった。経ヶ岳山麓から流れ出る僅かな水をもって水田を作ることには限度にきており、水量と田の面積の関係で水論が絶えず、水を欲しいという農民の念願は止まなかったからである。

(1) 小野村直八の計画

文化三年（一八〇六）、小野村の直八が一人で御公儀へ御普請の願い書を差し出したところ、金子はどのくらいかかるか尋ねられ、大井筋だけで六〇〇〇両以上かかるかと申し上げた。田はどのくらいできるかと問われ、御親領分は四〇〇〇石以上で高遠領は二〇〇〇石以上と答えている。しかし、この御親領中ということと、松本御預りになったことにより取り止めになった。（大泉大東文書）

文化九年（一八二二）にも小野村の直八が奔走して佐久郡野沢村の甚右衛門から二万両借りて諏訪との境から天竜川の水を揚げようと計

画している。この計画は、天竜川から揚げた水を宮木村の上台へ引き、新町村から北大出の村中を通し、下古田村から富田村の上をとおして、吹上の下から羽広村の下、与地の下までと考えている。大井の幅は底が一〇間という大きなものである。しかし、この計画も、松本御役所へ願ひ書は差し出したものの、普請方手代の池田村幸右衛門という縁べてを承知している人の死去に会い、小野村直八もまた中風にあって沙汰やみとなっている。

大泉川源郷井普請書留帳

文化九年二月小野村直八飯田御りに立ち寄り候て申され候は、当所始め西山方は田方これ無く百姓難儀の土地柄に候故、先達て江戸にて佐久郡野沢村甚右衛門と申す仁の代田村の甚右衛門と申す人に懸け合い候て、野沢村甚右衛門を会主に頼み、上伊那野沢村諏訪城より天竜河を引き揚げ、宮木村より宮木村上台へ引き、新町村へ引き込み夫より北大出村中を引き下古田村より深沢に付き、富田村上へ引き吹上下へ引き羽広村下へ移り与地下迄引き候て、井幅底拾間に待井は大泉川へ落下の図りにて、松本御役所へも懸け合い中の願ひ書差し出し候處、野沢村へも再三参り候て、懸け合い候處に、折節甚右衛門親類中にて此方両の出入り出来候て夫れ故金主致し難しと申し、併し乍ら残念の由申すに付き見合わせ居り候處、普請方手代池田村幸右衛門と申す者此方へ参り、場所下見致し万事呑み込み居り候處、幸右衛門死去致し小野村直八中風に相成り、其の事調わず相止み候。

此の事直八懸け合いに参り候は文化三年に自分家人にて御公儀御普請の願ひ書を差し出した候所、金子何程馬入り候哉御尋ねに付き、大井筋廻り通り候處は六千両にては出来申さずと申し上げ候處、此御親領中にて少しも出来難き思召しの趣仰せられ、然れ共水田方何程馬入り出来申す可きと御尋ねに付き四千石斗りも出来仕る可候。外高遠御領分へは式千石も出来申す可しと申し候へば、御親領の分は其方より金子出候ては出来申さずとの仰せ故、其の義も冠々に相成り候内、松本御預りに相成り候故右の始末に候、……

これを見ると、非常な大工事として計画している。佐久から金主を求めたり、井堰一〇間で、与地下まで引くという遠大なものである。北大出村から下古田や富田の方までは標高がちがうので引水できないのに、当時は測量技術も低く、その上すこしでも水田が欲しいという願いがこのような計画を立てさせたものであろう。

表4-3 西天竜の年表

昭和時代			大正	明治時代		江戸時代		
一九六二	一九五〇	一九二六	一九二二 一九一九	一九〇六	一八六八 一八七六	一八五六	一八三二	一八〇三
昭和三五	昭和二五	昭和元年 昭和二〇三	大正八年	明治三九	明治元年 明治九年	安政三年	天保三年	文化三年
西天竜発電開始			西天竜地帯整理組合設立	西天竜期成同盟会結成	南天竜村の村民等の計画	伊東伝兵衛着手	北大出村有志の計画「天竜西井堰」	小野村直八の計画

(2) 北大出村有志の計画

天保三年（一八三二）北大出村の有志が天竜川の分水により西天竜地域の開田を企てた。天保三年といえ、あの因作飢饉の前年であり、これから天保の大因作が続いた。また、天保三年には同じ高遠藩の春富地区へ伊東伝兵衛によって三峯川から引水する伝兵衛井が計画された年である。水がないため村は難澁していた西部地域の北大出村が「天竜西井堰」をもくろんだこともうなずける。

(3) 伊東伝兵衛の計画

安政三年（一八五〇）には、天竜川からの新井堰の動きは活発になった。このときは北大出村ほかの難澁を救うには、天竜川からの揚水を、従来、横川から引水している井筋へ流し、その替え水に更に上流の横川川筋から新井堰を造るということにあった。

替え水する了解もなかなかむずかかったが、天竜川から揚水することは、諏訪側の獲得が困難を極めた。伊東伝兵衛や村人たちがこれに当たったが交渉ははかどらなかった。

明けて安政四年（一八五七）にも諏訪と高遠藩の折衝は続いたが、どこから揚水するか、川付き村々との利害が一致せず、話は行き届か



図4-25 伊東伝兵衛の計画した井堰

なかった。安政五年（一八五八）になって高遠藩領主直書による交渉が始まり、ようやく「大沢口」（高遠・諏訪の境界の近く）から取り入れる交渉がまとまった。

段々の儀につき川附き村とくと相調え候ところ、右村難波に相成り候間、宇大沢口より新井引き揚げ候趣き、もつとも堰き揚げ候儀は相成らざる。

と返答がきたのである。ここで、大沢口よりもっと上流からという希望は川付き村の反対でできなくなった。そのうえ、多年の要望にこたえて高島領の大沢口から引き揚げてもよいが、そこを堰き止めて揚水してはならないというのである。

西天竜の揚水口は昔も今も変わらず、最もむずかしい問題である。少しでも多くの水が欲しい伊那側では、できるだけ上流からできるだけ多くの水を求めたいのに、諏訪側はできるだけ下流からしかも堰き止めない方式でということになる。諏訪側に権利があるので、その条件は揚水方法にしても金銭のうえでも相当にきびしい。長年、諏訪湖の治水に手をやいてきた諏訪側では、少しでも水位を上げると湖水周辺から中筋にかけて水浸しになり、少し水位を下げると川沿いの村々の動力源である水車（製糸用等）が回らなくなる。そればかりか各地の養魚場も水位による被害を受ける。

ともかく、諏訪との交渉がまとまったのですぐ協定を結んで着手しようとしたが、横川川との替え水の折衝も手間どって、翌安政六年五月によりやく次の規定書に調印することができた。その前書きにはこの井筋の発願から成立までの由来が記されている。その中で諏訪からの沙汰と引水の実際は次のようであった。

規定書

（前文略）右川筋の儀は諏訪部一円の川吐き民にて川縁・湖縁の村々は勿論中筋敷か村の水吐けへ差し障り候間、二ノ葉の上大沢渡より掘り渡し然るべ

きの儀御沙汰村方対該相懸い御境目御分杭際まで掘り渡し候ところ、二ノ葉下よりの湖水にて水行き届き候間、葉下より溝え敷し堰掘り通し水引き渡し申したく其の段懸い上げ奉り、御領主御役場へも御頼みこれよりお聞濟ましに相成り、村方対該相懸い後承のため取り極め候規定左の通り

実際にどのように水を引いたかはっきりしないが、とにかく天竜川を堰きとめないうで大沢渡から掘り出し、二ノ葉下からの湖水をひいてきたようである。なお、この時の規定書は一〇項目からなっているが、その中には次のように天竜川の水位に関係したものが目立っている。

一、堰掘り口にて川幅これまでのとおり十九間半、そのほか懸井の川幅有形のとおりに少しも狭からざるようにいたし、堰替請ならびに渡の節も土砂川中へ一切捨て申すまじきこと

二、葉かご手より川中堰幅二間長さ五十八間半、右の内へ水門こしらえおき、出水の節は水払いいたし申すべし。もつとも梓立ち入れ置く甚高き葉かご手より余程低く組み立て水吐けへ差し障らざるよう取りはからい、湖水にてかご手押し抜き候ほどの節は、御案内次第人足差し出し掘取り払い、引水の上元形に取立申すべし。急水の節は水門ならびに溝とも村役人ならびに堰替のうちに御所りのうえ御取り払い下され候こと。

一、堀水にて面堰へ水掘り申さず候とも堰所替え、また葉かご手へ水口明け候儀、決していたすまじく候。

（堀ノ井大東文書）

このように水吐けに力点を置いた構造になっている。ここで両堰とあることから考えられることは、本来の井筋は「堰幅五間土手幅五間都合六間」であるが、天竜川の川幅は一九間半で少しも狭くしてはならないというから、秋堰など設け頭首工を設けることはできないので、天竜川と平行して掘り通してあった。このほか堰に対して前記の

天竜川中の堰幅二間、長さ五八間半は、溜池のように川中へ溝えおきその漏水を期待した内堰であった。漏水になっても場所は変えられないうし、内堰へも水口をあげられない。これでは伝兵衛井の前途は決して明るくない。

しかし、どうにか領主を異にする地域からの引水に成功した。規定書の末尾は次のようになっていた。

前略…もし野手米滞り候か、そのほか規定に相背き候なる儀これあり候わば、その節お断りに及ばず井筋相減し下され候ても少しも申し分御座なく候、これにより後託のため願ひ人惣代水引き村役人はじめ井筋取り扱い方一同連印一札差し出し申すところよって件の如し。

安政六末年五月

内藤源河守領分

諏訪因幡守御領分

六か村惣代（一九名略）

信州諏訪郡 駒沢村

前書きの通り相違これなく候

浅井亦七郎

竹田七郎右衛門

（堀ノ井大東文書）

領主間の交渉によって成立したので、高遠藩の役人の奥書がこのようになっている。この件につき伊東伝兵衛は初めから関係していたので、伝兵衛井と通称されているのであるが、北大出村の惣代大治（代造）をはじめ、願ひ人たちが民間人の熱意と献身には、西部一帯の人々水を求める切実さを思わせるものがある。

この井によって開田された面積は次のようであった。

安政六年（一八五九） 北大出村・羽場村 三町一反余

万延元年（一八六〇） 〃（新町村も） 九町四反七畝余

文久元年（一八六一） 〃（宮木村も） 七町五反七畝

注（これは「天竜川西岸村々開田坪年々格帳」中村頁一「伝兵衛井」による。）

伝兵衛井はその後どうなったか、詳しいことはわからないが、明治初年に南箕輪村の高木三と清水平一郎が参事院議員安場保和あてに出した上申書の本文にはその結末を次のように述べている。

信濃国天竜川沿岸の地なる伊那郡のうち、田内藩領地本郡と諏訪郡の郡界より一個の新堰を疎通し、両郡界及び宮所・宮木を経て新町・北大出・羽場の三か村に新田を拓き公孫を因るの目的を以てし、之を伝兵衛井と云う。けだし該の工事たる其の創業は過ぐる安政年度にありて管治を異にする地盤の交渉なるを以て、井堰の勾配度量の平準を得ざる故に完全に土功を奏すること能わず。止むを得ず管轄限りに其の工事を譲與し、隣接諏訪郡界を以て井堰の揚げ口となし、頗々たる一小無路を掘削したるも、如何んせん水量の分度少なきこと、勾配の適度を得ざるより終に不用とはなりぬ。

（堀ノ井大東文書）

これによると、漏水による引水は水量が少なかったのか、高遠領内から揚水を図ったようであるが、そうすると勾配がないので結局、魔節してしまっただけ。しかし、その時の替え水とした横川からの引水は三か村（新町・北大出・羽場）をうるおっていて、前記のように開田が行なわれた。そして今もってこれを「伝兵衛井」と呼んでいるのである。

2 明治の開発計画

御一新となり、かねて念願であった西部地区への水を求める動きは活発になり、いくつかの計画が立てられた。

(1) 興業会と結んだ開発計画

明治九年の井堰開発計画は注目に値するものの一つである。これは興業会という農業土木企業体によって井筋を造り、水税を出して決済を計ろうとするなど進んだ考え方がとられている。

西天竜開拓二村々取為替書

諏訪郡川岸村新倉耕地ヨリ天竜川分水畑田成り開墾ノ義ハ、年来ノ志願ニ候所、大業ニテ自力ニ及ビ難ク延滞難リ在リ候所、今般興業御社中ニ於テ井堰管線諸入費ヲ受ケテ御引受ケノ御談判下サレ候ニ付キ、村々耕地決断ノ上右管線方御依頼申シ候処相違御座無ク候。然ル上ハ水路落成道水ノ節ハ、鉅々開拓水口コレ有ル文成功致シ残水コレ無キ様仕ル可ク、右水税トシテ若反歩ニ付キ金十円ト定メ三カ年ニ相納メ申ス可ク候。尤モ水税金皆済田田ノ反歩抵当ニ致シ証書相渡シ置キ申ス可ク、其ノ外別紙定約ノ通り委任仕リ釋カ違失御座無ク候。依ツテ村々耕地地代連印証書出シ申シ候。以上

明治九年十一月

定約ノ事

一、堰幅 平均三間 離場二間

是ハ諏訪郡新倉耕地ヨリ天竜川分水、南箕輪村神子榮耕地迄、

一、堰幅 平均二間

是ハ伊那郡富村今村耕地ヨリ横川川場ゲ込ミ南箕輪村耕地ニ至ル。

一、堰筋 耕地代、水税、橋梁並ビニ示談入費、其ノ外諸津費共残ラズ興業會ニテ引受ケ支払イ候事

一、水税ノ儀 開墾土地迄反ニ付キ金十円ト相定メ候事

但シ初年開拓ノ地ハ三カ年ニ割リ合イ年々十二月出金ノ事

二年日開拓ノ地ハ二カ年ニ割リ合イ年々六月出金ノ事

三年日開拓ノ地ハ壹カ年ニ出金致ス可キ事

一、水税金皆済田田ノ反歩抵当ニ致シ、証書相渡シ置キ申ス可キ事

一、各村分水ノ儀ハ水上ヨリ流末迄樹水ニ致シ、専ラ流末へ潤沢致シ候様取り計イ申ス可キ事

一、水税取り立テ候年限中ハ、堰破損修復等金費ニテ御支払イ成サル可ク候事

右ノ通り定約候上ハ、釋カ違失コレ無キ事

明治九年十一月

南第十七区六小区

南第十七区六小区

願ひ書

この取為替書は、興業會と地主であらう三五名の者とのものである。目録見書の見当たらない現在どの程度のものであつたか不明であるが、相当具體的な計画が立てられたものであらう。

(2) 三か村一部落の西天竜計画

前者と相前後して、南第一七六五小区の伊那郡富村北大出と、同第六小区中箕輪村の沢・大出・松島・木下、及び第八小区南箕輪村の久保・大泉・北殿・南殿・田畑・神子榮の三か村一部落の者が團結して、明治九年一二月に「願ひ書」が出されている。これは幕府領とか高遠藩という境界を越えて相当大規模であつたようである。

新しい堰は、やはり諏訪郡川岸村の新倉地籍から天竜川の水を揚水して、神子榮までの通水を計画した。その目録見によると約三〇〇町歩の開田ができる。これを実現するには多額の資金がいるが幸いにも今回、諏訪郡志賀村の矢崎儀左衛門が引き受けてくれることになったので、どうかこの計画の新堰の修営を御採用願ひたいと、時の県令あてに願ひ出たのである。

願ひ書

一、(署名)：神子榮目録ニコレ有ル可ク年来志願苦悶在リ候工費費額ノ金銀

沢 小原義十郎(外七名連署)

大出 井沢喜一郎(外八名連署)

松島 三沢三治

木下 北條孫七郎(外七名連署)

南第十七区六小区

大泉 源 信一(外三名連署)

神子榮 高木 誠三

富田 向山 五郎(外一名連署)

北大出 林 貞三

羽場 春富 惣衛

ナク慨然 歳月ヲ過シ候也、他年今般東防郡志賀村矢崎左衛門外八人同盟
仕り、概普請仕様帳ノ金高引請人ニ相成リ別紙取為替書ノ通り定防仕り、尤
モ治堰村々ニテハ素ヨリ故障之儀ク候間、前願自費目論見ノ新堰修築御採用
致シ下シ置カレ度ク、因面相添エ連署ヲ以テ懇願仕リ候以上

明治九年十二月

(堀ノ井大東、大和手文書)

ここでは、資金がないため慨然歳月を過したというこの大事業を自費でというところに、当時の人々の念願がどれほどのものであったかがわかる。これに署名した人数は一九名であるが南箕輪で一三名を占めている。そして、これに奥印した村の代表者たちは、困った人々たちを救うだけでなく、国益の一端を開くから御採用いただきたいといっている。

前願井堰ノ儀協議ヲ鳩シ国益ノ一端ヲ開キ且ツ國家役座ノ基本トモ仕リ度ク
候間御採用成シ下シ置カレ度ク此ノ段奥印ヲ以テ願イテ奉リ候以上

明治十年一月十四日

南第十七大区八小区南箕輪村

副戸長 原 信吾

清水平一郎

有賀 光彦

有賀 誠二

倉田 三郎

戸長 高本 省三

長野県権令 栢崎寛直殿

(大和手文書)

この願い書に対して県権令は、朱書を以て治堰村々と下流の村々の示談がゆきとどいた上で再提出せよと、書類は一応却下された。

これは、今も昔もかわらぬ御役所のことばであるが、民間で実際に

は示談を遂げることは容易なことではない。その示談には、まず諏訪関係で揚げ口の了解をとりつけることがあり、次に長い堰筋の途中の村々との示談が必要である。

この難問題のほかに資金の調達という大きな仕事がある。資金にはその出資者を見出すことと、それを民間でどのように負担し返済するかの問題がある。どちらも大規模になればなるだけ困難度がましてくる。

しかし、明治の先人たちはこの難問題の前でひるむことなく、果敢にまた細部にそれととりくんでいた。ここではその跡を南箕輪の先人たちの動きを中心にして記すことにする。

ア 井筋の計画と開田計画

明治九年の新井筋(西天竜)の計画は、図4-30のように二筋あった。

定約書ノ事

- 一、堰幅底四間、但シ懸垂ハ底二間半、是ハ諏方郡新箕輪村ヨリ天竜分水、南箕輪村神子榮井地迄通水ノ事
- 一、堰幅底四間、是ハ伊那郡村今村井地ヨリ大横川堰キ上ゲ、南箕輪村大泉井地南ニテ下井ト合水ノ事



図4-30 明治九年の西天竜計画井筋①②③④

一、堀堀二間、是ハ三里村辰野耕地養水堰切り広メ掘リ続テ伊那富村宮
木・新町兩耕地へ通水大横川古田用水ノ替エ水ニ致シ終事

以下略

(堀ノ井大東文書)

第一は、今の西天竜のように諏訪郡新食耕地より揚水して、神子柴
耕地までの井筋を計画した。第二は大横川の水を今村耕地で揚水し大
泉耕地の下井へ落とすが、この水は大横川下流の宮木・新町の古田に
影響するので、それを天竜川から揚水し、辰野耕地の用水を切り広め
て灌漑して補う。つまり大横川の水と天竜川の水とを替え水にするこ
うのである。

このようにして、天竜川の水で西部地帯を上下両井によって潤おそ
うというのである。なおこの外に富田耕地の水は、やはり大横川水源
から求められるようになっていたので、やはり替え水と考えられてい
たようである。

富田耕地ノ儀ハ大横川水源ヲ引キ圖メ字白拍子岸ノ四ミヨリ霧沢山ヲ廻シ蓋
無川ニ落シ候場所升水ヲ箱様……別井ヲ引キ候儀……

とある。これは富田耕地の費用によってやることになっているが、や
はりこの「定約書」に二名が加わっている。

この二筋の井筋によって西部地帯に水を求めようとする考えは、実
は伝兵衛井のころ沢村・大出村の人も持っていて、諏訪領から水を揚
げる了解は引き受けるから仲間にしてくれと申し出ていたのである。
この時、箕輪領を仲間に入れるのは良くないから話合いはするなとい
うことで、高遠領だけの伝兵衛井となったのである。

いまや御一新を迎えてそんな領地の境もなくなったので、伝兵衛井
よりはるかに大きい計画となったのであろう。しかし、上下両井に
より横川川との替え水という構想は伝兵衛井と同じであった。

上下両井というのは甲乙堰となっている。

甲堰：諏訪郡川岸村より天竜川揚げ込み、南箕輪村に至る。此の里程六里式

拾町

乙堰：伊那富村大横川通り今村地方より揚げ込み、深沢にて甲堰へ合併、此
の里程式里三拾老町

この計画は綿密で、全線にわたって詳細に立てられている。しか
し、この上下井構想は沿堰村との交渉の中で、成立しなくなった。

さて、当初の計画では三〇〇町歩という計画であったが、それがだ
んだん広くなったのか、明治一七年には南箕輪だけで三〇〇町歩余に
なり全体では六〇〇町歩余になっている。本村の計画は次表のようであ
った。

天竜川新堰畑成り反別見込み

一、畑反別	一〇四町一四畝二〇歩	久保西割耕地分
一、	六五町〇〇畝	大泉耕地分
一、	六八町八五畝	北畹
一、	一七町四五畝二八歩	南畹
一、	四五町五〇畝余	田畑
一、	二〇町〇〇畝余	神子柴
一、	八町七四畝〇八歩	沢尻
合計	三二九町六反九畝二六歩	

天竜川新堰畑成り反別取り調べの埒前記の通り御座候間此の段上申仕り候
也

明治十七年十二月十二日

(堀ノ井大東文書)

イ 資金の調達と返済の方法

この大事業を自費でということは大変なことである。自費といつて
も三か村一部落の歩調をまず揃えなければならない。そこで相互に

資金の抵当を出そうと申し合わせた上で、次の一札を事業請負者と取り替わしている。これには五〇余名の各耕地代表が連署している。

取替第一札ノ事

「前略」：新堀日輪見畑田成り開墾ノ儀ハ年々ノ志願ニ候也、大業ニテ日力ニ及ビ難ク罷リ在リ候也、今般貴殿方ニ於テ、井堰官諸君入費残ラズ御引キ請ケノ御談判下サレ候ニ付キ、村々耕地決議ノ上右官諸君御依頼申ス処相違御座無ク、然ル上ハ經路落成通水ノ節ハ銘々開拓水口コレ有ル丈成功致シ残水コレ無キ様致ス可ク、右水税トシテ若反ニ付キ金十貳円ト定メ三カ年ニ相納メ申ス可ク候、尤モ水税金皆済開田ノ反致歩抵当ニ致シ証書相渡シ置キ申ス可ク、其ノ外別紙定約書ノ通り委任致シ聊カ違失コレ無キ段、依ッテ村々耕地惣代連印証書シ上ゲ申シ候、以上

明治九年十二月

(塩ノ井大東文書)

ここでは、村々耕地の各人が開田予定地の全部を抵当にして通水を待ち、通水成功後は一反歩につき一二四の水税を三年間で皆済すると決議し、その証書を渡して工事を依頼している。

なお、このころの連名の中に南箕輪の各耕地代表一七名がもちろん加わっているが、この契約をする前に「定約書」がお互いの間で取りかわされている。それには詳細な井筋の計画が示され、各耕地の総代が相談することも多かったため、旅費一日二五銭、弁当代一〇銭を請け負い方で支払うことになっている。

各耕地で規定を定めただけでなく、特に南箕輪と中箕輪との間で約束した規定もある。それには通水ができたとき、両箕輪の分水を公平にしようとして、反別割りのとりきめを折口割りにし、井筋の維持管理の方法を定めたのち、次のように結んでいる。

両箕輪定約の事

……前略……

一、方今物産増殖ノ御主意ヲ奉戴シ一同憤発所ノ如キ大業ヲ興シ候上ハ情実薄キヲ斷トシ戮力協心成功ヲ要スベキコト

(塩ノ井大東文書)

明治九年のこの定約書には南箕輪側が二二名、中箕輪側が四一名連署して、団結と決意を述べている。

各耕地内の結束については、久保耕地の「確約書」が残っている。それによると、今度興業社が新倉地籍から種子柴まで通水を計画した。「新堀通水の成否に拘らず」と、まだ成功するか否かは不明であるが、それだけに約束を固くしておかなければならなかったのである。

確約書記

久保耕地

……前略……

一、通水ノ節ハ後我共情ヲ捨テ便利ニ就キ公平ニ執リ斗イ、勝手日儀ノ儀コレ無キ様致ス可キ事

一、新堀落成致シ候迄諸談事何事ニ寄ラズ自己勝手ヲ主張シ不出勤等致シテコレ無キ様致ス可キ事

……後略……

明治九年十二月一日

(塩ノ井大東文書)

久保耕地といってもむろん塩ノ井も入っていて、二七名が名を連ねているが、捺印のない人も七人あって当時の複雑な事情をしのばせている。このように定めた上は固く守って、みだりに社外の人言に迷わされたり、途中で脱社することのないようにと念をおしている。

このようにして各耕地の結束もできたのであるが、井堰開発の契約は次のように成立した。

一札ノ事

井新開掘上願ニ付キ沿堤村々示談行キ届キ差シ障リコレ無キ上ハ井新開掘費引キ諸ヶ落底水勢ニ随イ水口取極メ約定書ノ儀迄合中協議ノ上取替ワシ約定申ス可ク候、万一行キ届キ候共其ノ節云云コレ無ク候、以上

明治十年二月日

渡辺嘉七郎

矢崎儀左衛門

南第十七大区八小区南宮輪村

久保耕地 倉田信一殿

大泉耕地 清水宇宅殿

北殿耕地 有賀又七郎殿

有賀又七郎殿

(塩ノ井大東文書)

明治一〇年四月にだされた新堀仕様帳によると、開墾予定反別が一三〇町歩で水税金として一反歩一〇円を予定していたようである。総計一万一〇〇〇円余の工費と人足六万四〇〇〇人という大工事である。

天竜川新堀仕様帳

記

川岸村ヨリ南宮輪村大泉川迄

一、人足 五万四〇六四人 但シ堀堀三間離場二間凡ソ里程三六一六間

此ノ賃金六三〇八円 井新開掘ニ付キ四人掛リ但シ一人十二銭五厘

一、人足 一万〇五七八人 但シ離場築キ立テ石垣人足ノ分

此ノ賃金 一三二二円二五銭 但シ一人十二銭五厘

(中略)

總計金 九五九六四六五銭

外ニ金 一九三七四七八銭 是ハ大橋川今村耕地ヨリ大出迄新堀仕様諸費

合計金 一万一五三四四四三銭

開墾見込反別 一三〇町歩 此ノ水税金一万五六〇〇円但シ一反ニ付キ金

十二円

明治十年四月

中宮輪村 大田耕地主代 丸山藤三郎

南宮輪村 久保 田中一角

大泉 大泉 清水宇宅

北殿 北殿 有賀又七郎

南殿 南殿 有賀光彦

有賀又七郎

三里村事務所御中

(塩ノ井大東文書)

先に述べた興業舎の開拓計画の「西天竜開拓ニ付キ取為替書」と、この計画の「取為替一札の事」の内容が極めて酷似している。異なる点は前者にあつては文中「興業舎」とあるのに後者では「貴殿」となっており、水税が前者では一反歩一〇円であるのに対し、後者では一〇二円となり、期日が一か月遅れて一二月になっている。

なお、この計画では資金を諏訪郡志賀村の矢崎儀左衛門ほか八人が同盟して供給してくれることになっているが、この同盟が興業舎なのであろうか。取為替書や後者の願い書等に署名した人たちの名前や人数に差があり、計画の井新の道筋は同じようであるが、大きさに差があるなど、同一の計画なのか別の計画なのか判断に苦しむ面がある。しかし、僅か一か月違いで同一地区にほぼ同一内容の計画がしかも願い人が重複して存在すると考えることは不自然であり、二つの計画が存在したと考えるより、期日の進むにつれて計画や賛同者の変化があつたと考えた方がよいように思われる。

ともあれ、明治一二年には果の力添えを受けられるようになり、株

方式による地元の決意をこめた契約書ができて相互の結束をかため、たとえ数十年かかってこの計画が成功するに至るまで、決して中途でやめまいようにと契約をかわしている。それには三〇〇町歩の圃田を予定し一株三〇町歩の一〇株とし、次のように株主となつてその経費一株一〇〇〇円を負担しあつた。

- | | |
|----------|----------|
| 一株 穂高孫三郎 | 一株 木下森四郎 |
| 一株 清水平一郎 | 一株 三沢理三治 |
| 一株 清水宇宅 | 四株 大槻清吉 |
| 一株 高木誠三 | |

明治一七七年ころになると初めの計画より広域になって、六〇〇町歩の圃田見込みとなり、費用も三万六〇〇〇余円となつてゐる。一日の賃金が二〇銭、米一升が四銭という当時、この大金を返済することは容易ではない。そこでこの返済についていろいろと試算された文書が残っているが、いずれも一〇か年賦返済になつてゐる。その内訳は「天竜川新堰諸費予算」と「開田年々収穫米代価取調書」に記されているが、圃田一反歩から水代金一〇円ずつ支払わなければならない勘定であり、きびしいものであつた。

ウ 沿堰村との示談

まず、新井堰を開くには井堰の揚げ口の村との示談が成立しなければことは進まない。明治一〇年一月には次のように新倉村（揚げ口の村）との間に示談が成立した。

示談条件書

- 一、沿堰・潰地ノ儀田畑耕地上中下共地引帳代価拾四ノ場所ニ付キ金拾貳圓ニテ買イ
- ニテ買イ諸ケ申シ度キ事
- 一、芝地・山林・草野等ノ儀地引帳代価拾四ノ場所ニ付キ金拾貳圓ニテ買イ諸ケ申シ度キ事（但シ共有地ハ金拾四）

- 一、宅地ノ儀ハ実地見キ別段ノ御相談申シ度キ事
- 一、堰・沿道橋梁ノ儀ハ今般限リ差シ支エナキヨウ私共ニテ橋梁相架シ梓桑ノ普請元資金トシテ一橋ニ付キ平均シテ金貳圓ズツ御譲申シ以來地元ニテ普請並ビニ修復コレアリ度キ事
- 一、山道並ビニ耕地道地テ御指揮ヲ受ケ差シ支エコレ無キヨウ出来致スベキ事

- 一、井堰堀底三間ト致シタキ事
- 一、般路掘リ立テ中御立チ合イコレアル諸入費等御損毛コレナキヨウ仕立イ中ス事

右ノ通り方条書ヲ以テ御示談相願イ成功通水ノ上ハ御国益ハ勿論并ビニ窮民授産ノ基本ト相成ルベク候間只管願イ上グ候、以上

明治十年十一月

南宮輪村總代四名 外一名連印（氏名略）

諏訪郡川岸村寛食耕地

戸長總代御中

（墓ノ井大東文書）

この示談書はかなりきびしい内容であるが、とにかく成功した。次に途中の村々との示談であるが、明治一〇年一二月現在の情況は次のようであつた。

○北大出耕地 願い村でもあるので故障は更にはない。

○羽場耕地 新堰により畑が田になるので故障はない。但し、願い村には

○新町耕地 ならない。

○宮木耕地 故障はいささかあるが、流上の村々が示談行き届けば、故障

○宮所耕地 はしない。

○今村耕地 潰地の分一名が連署筋を申し立てているが何とか總代が説得

できそうである。

×辰野耕地 二十度も交渉したがこの耕地だけは示談がまとまらない。

辰野耕地の理由は、山際の狭い耕地を更に狭くするだけで開田する予定もないというにある、そこで条件として霧沢山の入会権をくれたら応じるといふ。しかし、それは到底受け入れられる条件ではない。願い村からも二十数回交渉に及んだが、辰野耕地内も喧々こうで、総代ではおさめられない状態であった。その中で注目すべき意見は、安政年間にできた旧井堰が取り入れ口で差し支えて通水してないが、これを利用したらというのであった。しかし、これもまとまらなかった。いくら回益授産といっても人々は暗然とするだけで、願い村からは県庁へ説諭を願ひ、辰野耕地からは嘆願書がだされ、それぞれの申し分を主張して、解決のきざしは見つけられなかった。

一方で、大横川からの上の井堰については、羽場耕地も北大出耕地も故障はなかった。

井堰目録見

- 一、伊那富村今村耕地字蓮台場より大横川揚げ井大出耕地迄通水、井幅丈間
 - 一、右大横川揚り古田用水為替渡訪都新倉耕地字雲河より天竜川揚げ井大横川迄通水、堰幅丈間
- 前条開墾の儀は物産御利益の儀深く志願に付き各耕地へ御依頼申し共に御尽力成し下され迅速の御示談願ひ奉り候 以上

(堀ノ井大東文書)

これに対して、羽場・北大出耕地からの返答は、「前書き目録見井筋に付き故障之なく候」と、一度は賛成してもらえた。しかし、このことは辰野耕地との示談交渉の中で成立しなくなり、実現しないことになってしまった。

差し出シ申ス一札ノ事

前略

一、横川川ヨリ為替水ノ義ヲ囑エ不都合ノ取り斗イハ致スマジク、必ズ天竜

水ヲ以テ質權ニ致シ決シテ該水源ニ差シ障リ等仕ルマジキ事

右条々相触レ候ワバ此ノ証ヲ以テ再ビ揚ケ親ノ功ハ成サザルモノトシ決シテ依頼致ス間敷ク依ッテ確証件ノ如シ

明治十二年八月

南箕輪村起業人 穂高孫三郎

萬木誠三

上辰野耕地惣代御中

(堀ノ井大東文書)

つまり、横川川下流の上辰野耕地がこの替え水に反対したので、決して替え水をしないうことになったのである。このことは長野県令にも次のように届けられ、この写しは上・下辰野へも起業人総代から知らせて確証とした。

記

兼テ大横川通り旧今村地方ヨリ新堀開墾ノ儀出願致シ置キ候処、今回本県御出張小原忠道殿ヨリ該新堀ハ詮議ノ次第之有リ見合ワセ候様御達シニ付キ、即チ見合ワセ申シ候。此ノ旨申シ置キ候也。

明治十二年八月廿八日

起業人惣代四名道署(氏名略)

長野県令頼崎寛直殿

(前同文書)

願ひ人の示談交渉がゆき詰まり、明治一二年には時の郡長伊谷脩が再三示談をすすめた。翌年も強力な説諭が行なわれ、二月七日には下辰野と、四月七日には上辰野と示談がようやくまとまった。

天竜川新堀開墾示談ノ証

第一条 新堀開墾地ノ儀ハ現在ノ地種ニ就キ……其ノ坪数ニ応ジ收穫ノ金額ヲ該々起業方ヨリ相渡シ申ス可ク候事

第二条 道路橋梁等ノ儀ハ起業方ニテ永世之ヲ修繕シ決レ地へハ毛頭失費相掛ケ申スマジク候事

第三條 新規開墾新墾タレバ下辰野ハ故更元費モ相済ミ況シヤ耕耘ニ多少不便ヲ生ゼン事ヲ酌量シ御覽着手年部ヨリ十カ年間歳々十二月廿五日限リ自今春段ノ入費金トモ併セテ前額ノ金額相済スベシ

第四條 新規ノタノ灌水ヲ生ジ既ニ同耕地田圃水ヘ投入シ冷度ノ患イラナスベキ……應設計ヲ以テ相試シ……收穫米ヲ十分シ其ノ五分ノ割ヲ以テ損害要償トシテ起築方ヨリ相済スベシ

第五條 新規灌水ノ上項宅地等ヘ灌水アル時節ハ実地ニ臨ミ全ク難決ニ至ル時ハ本人ヘ迷惑ニ相成ラザルヨリ起築方ニテ取り斗ワベシ

第六條 新規開墾シ新墾下ノ田圃宅地其ノ他ノ要地ヘ土砂押シ込ミ損害ニ罹ルモノハ其ノ時々起築方ニテ相償イ地主ヘ迷惑相掛ケ申スマジク候事

第七條 新規井底ハ二間タルベシ

右条約相違イ候上ハ該条目論見ニ対シ決シテ云々苦情アルマジク候、依ッテ約定ノ証件ノ如シ

明治十三年二月七日

三里村下辰野惣代 五名(氏名略)

南箕輪村惣代 高木恒三

〃 〃 穂高孫三郎

〃 〃 清水宇宅

中箕輪村 〃 四名(氏名略)

このようにして沿堰村々との示談がゆきとどいた。その条件は下辰野と上辰野両耕地の迷惑を全部取り除いたものであった。これらの難交渉に南箕輪村と中箕輪村の代表だけが熱心に当たっていることは注目してよいだろう。

これでよし、と安心したのも束の間、思わぬことから伊那富村の宮本耕地と新町・北大出・羽場三耕地との間に伝兵衛井に關し水利權の争いがあり、それがもとで示談がこじれてしまった。明治一四年八月の「願い書」は次のように語っている。

願書

新規起築人共願い上ケ候、宮本・新町・羽場・北大出等夫々示談欲シタク示談書別紙ノ通り草稿ヲ配シ……惣圖ランヤ宮本耕地ト新町外二耕地トニ紛争相生ジ……到底事ココニ止マザレバ止ムヲ得ズ願イ出ア候、旧来ノ葛藤ハ付キ合ワサズシテ示談速ヤカニ行キ届キ申スベク候ヨリ四耕地ノ私事ヲ過渡セザルヨウ早々御呼ビ立テ御申シ聞カセ下シ置カレタク願イ上ケ候。

明治十四年八月二日

上伊那郡南箕輪村惣代 穂高孫三郎

高木恒三

上伊那郡部長 伊谷精蔵

(堀ノ井大東文書)

この宮本耕地の主張は、天竜川の水を伝兵衛井で通水して大横川の水と替えるという約束だったのに、天竜からの揚水はできずに止まってしまった。それなのに、大横川上流から三耕地への伝兵衛井だけは通水している。この不合理を解決せよという主張であってなかなか強硬である。時の郡長への願い書はしきりにその非をならし、「一己の私利をむさぼるもの」だとか、「頑夢」だとかいうがなかなかまとまらない。

この宮本との示談が頓挫しているときに、新町がまたまた難題を言い出した。新町・北大出・羽場三耕地は、示談の草稿ができていたのに新町だけは印を押さない。郡長や起築人が幾度も交渉したが、耕地へ帰って相談すると日延べを願ったりしてなかなか承知しない。結局、伝兵衛井を切り広め延長することは、上流の宮所・宮本が承諾しないうちは、口では賛成しても書面にはできないと言いつ張るのである。

郡役所へ起築人総代と三耕地総代が呼び出され、話し合いの結果、上流の宮本・宮所との示談ができるまで、三耕地の示談は延期すること

とになった。それが、明治一五年四月一日のことであった。

示談が長びき、何十回となく各耕地へ赴く労力も大変だが、費用もかさんできて初めの予定をはるかに超えたものとなってしまった。

新示談中費用出用法

天竜川新示談中ノ諸費用ハ未ダ実費ヲ精算セザルモ、頗ル相違ミタレドモ示談半バニテ其ノ手続キヲ成サザレドモ追々結果ニ至ルニ付キ既住将来ノ費用ニ充ツルタメ一様百円ノ見積リヲ以テ漸次徴収スルモノトス。但シ出金ヲ成ナザルモノハ退社ト認メ本約定ノ通り取扱ワセノトス。以下略。

明治十五年三月廿五日

上伊那郡南箕輪村四名連署（氏名略）

中箕輪村三名連署（氏名略）

（堀ノ井大東文書）

このとききめられた出果等の日当は一円五〇銭であり、旅費は一里程一五銭ときめられた。

一番むずかしいと思った諏訪郡と三里村（上下辰野）の旧伝兵衛井関係の示談約定は整ったのに、三里村関係の三耕地の横川井合併で頓挫している。本村の高木城三と清水平一郎はその窮状打開を訴えて「新堀開墾地上申」で参事院議官安場保和に上申している。これは非常な明文で、この新堀の来歴を述べたあと、この堀幅は二間半としているが将来は四間半とする目的を持っている。そうすると信濃国で第一の公益工事だと明言し、開堀も山林原野を加えると一〇〇〇町歩を下らないといっている。

エ あと一步の西天竜

西天竜への意欲は、民間が発起してこの大事業に取り組んでこまできたが、あと一步というところで足踏みしている。

前述したように「種水豊物」の碑には、次のように述べている。

是を以て藩政時代以来先覚の士が諏訪湖より疎水して水田を開拓せんと欲

したること一再に止まらざりしも経始容易ならざるを以て実現を見ずして空しく数十年を経たり

実現を見ずして数十年を経たことは確かであったし、その原因が経始（経営）着手すること（が容易でないこと）にあることも確かだが、「空しく」数十年を経たとは思えない。実現を見ないという意味で空しくと記したと思うが、明治の初めからずうっと、村の先人たちは一耕地への示談に数十回も足を運ぶなど真剣な努力をしている。手をこまねいてただ空しく時を過ごしたのでは決してなかった。

その間、次のような試みもあった。それは東京の島羽家幸と明治一二年一月に、そのころ発明された「水揚げ機械」を設置する仮約定証がとりかわされている。この機械によると辰野耕地で揚水できるの、諏訪との面倒がなくなると、一時は大部乗り気であったが、果の指導もあって中止になった。

明治二二年には、愛媛県の津田、神奈川県の中野という二人と申し合わせ書を取りかわし、揚井工事を請負わせようとしている。このころになると計画は小沢川まで伸びて、開田面積も一二〇〇町歩になり開田一反歩の負担も一五円になっているが、これも実現しなかった。

(3) 天竜川用水路開墾期成同盟会

明治二二年に郡役所から有志でなく、村の事業とするよう村会へ決議を要請している。このころは起業人に伊那郡も加わり、さらに伊那町も加わって来ている。

議会招集請求書

今般天竜井開墾事業ノタメ本村外式カ村組合会組織ノ儀自分等外各部落落衆代ノ資格ニテ願イ出テ候ニ付キテハ、右書議ノタメ議合招集相成り度ヲ町村制第四二条ニ依リ此ノ説請求候也

明治三十一年六月

南箕輪村会議員 赤羽嘉一

南箕輪村長 松沢源一郎殿

(堀ノ井大東文書)

赤羽只雄

倉田孝一郎

征矢貞治

これは、いままでも数十年前も熱望してきた新堰ができず残念であるが、農工銀行が設立されてようやく事業に着手できそうになった。ついではその銀行の年賦償還金を借り受けるため、組合会の組織をつくらねばならないという主旨である。一切の費用は有志で持つが、組合会(伊那郡村・中箕輪村・南箕輪村)でなければならなかったものであって、これにも大勢の村人が署名している。

しかし、明治二七、八年の日清戦争、同三七、八年の日露戦争のためか、この事業は進展しなかった。

明治三九年になると、有志による「天竜用水路開鑿期成同盟会」が結成され、西天竜開鑿を郡事業とすることを請願した。

この「天竜用水路開鑿期成同盟会」の結成で、実現の機運が熟し、明治四三年には郡長は基本調査を県知事に請願し、県の工事測量で実施計画もできた。

この期成同盟会の会則によっても、委員は南箕輪と中箕輪が八名ずつであり、やはり運動の中心勢力であった。

第四条 本会ニ委員二十六名ヲオキ左項ニヨリ選出スル

伊那郡村 四人 中箕輪村 八人 南箕輪村 八人

西箕輪村 二人 伊那町 四人

委員ノうち一名ヲ委員長トシ委員ノ互選ニヨリ中箕輪村委員ノうちヨリ選出スル。委員ノうち一名副委員長トシ委員ノ互選ニヨリ南箕輪村委員ノうちヨリ選出スル。
(天竜用水路開鑿期成同盟会会則)

明治四五年七月二〇日づけで南箕輪からは次の委員が選出された。
赤羽猪兵・穂高源二・原信一・清水平一郎・伊藤三十郎・加藤金弥・有賀忠愛・池上象次郎
なお、委員だけでなく、関係部落から六〇名の協議委員が選出された。

久保八名・堀ノ井六名・大泉一〇名・北殿九名・南殿七名・田畑一〇名・神子八名・沢田二名

このように期成同盟会ができ、郡長が委員長となって先進地榑木黒船生村の視察もして、あと一歩という所まで迫った。しかし、実際に土地所有者別の調査書を出す段になって、米価の下落等にみまわれ、提出しない町村もあって、足並みがぐずれ、またまた頓挫してしまっ

3 西天竜誕生とその後

大正七年富山県に起こった米騒動は、燎原の火のように全国にひろがった。また、第一次大戦の教訓が食糧の自給にあることから、農商務省は土地利用調査に乗り出し、その一つとして現西天竜地区の調査も数日にわたって綿密に調査された。(その結果は大正八年二月刊「長野県上伊那郡西天竜土地利用計画書」に詳しい) この二つに刺激され、大正七年九月四日、ここ数年來鬱々たる状態にあった期成同盟会の現状を遺憾として、「西天竜用水路開鑿期成同盟会」を復興させた。

この同盟会は上伊那郡長を会長とし、耕地整理組合発足までをめぐりに具体的活動に入り、大正八年十一月、遂に「西天竜耕地整理組合」が設立され、西天竜用水の開鑿に向けて努力することになった。

以後、比較的順調に完成に向かって進むことになるが、その用水路の開鑿及び開田については「第六章第五節西天竜の開田」の項にゆずり、ここでは西天竜が江戸時代から明治・大正・昭和を経て、よ

うやく誕生した、その迂余曲折の余話を二、三拾って記すこととする。

ただ、ここに当時の苦しい状態を、この事業にたずさわった委員の一人の述懐は、いかにもこの大事業の難局をのりこえた感じがでているので付記しておく。

工事が始まって以来、急な設計変更の無理があつて資金に不足を生じ、再三銀行へ資金の増額を交渉した。銀行は西天竜組合はラッキョウのようだ。

『むいてもむいても実が出てこない。』等と嫌味をいわれた。

組合の役員は、万一事業に失敗すれば、全財産を失うことになるので、実に悲壮な決心で一致団結し、資金の調達、事業の遂行に努めた。

『西天竜沿革史』

(1) 水騒動

天竜川からの引水で問題になるのは諏訪湖の水位に関係したことである。これは、伝兵衛井のころから一貫して苦心して来たことで、いま、昭和になってからの主なもの拾ってみると次のようになる。

○昭和四年二月一二日諏訪湖関係者取り入れ口撤廃期成同盟会を諏訪市都座に開催、本県当局設計案を説明し了解に努むこのため工事一週間中止命令を受く。

○昭和六年二月三日給本県知事取り入れ口実地視察

諏訪湖沿岸地区民との間に取水量二〇〇割の争議おこる。ダム問題悪化し、知事の仲裁でようやく事なきを得た。

従前の計画では、取水口のダムは水中固定堰堤であつたが、この設計では所要の水量を取り入れるのに困難であるし、水害の時に速やかに撤去できないので予定を変更して、「ローリングダム」にした。それにつき昭和八年の農商務省の計画で次のように述べている。

取入口取水方法

本計画ニ於テハ用水ヲ天竜川ヨリ取り入レルモノニシテ、取入口ハ天竜川ノ右岸諏訪郡川岸村新倉地蔵ノ観音橋ノ下流一五〇間ノ箇所ヲ適当ナリト定メタリ。然ルニ天竜川ヨリ自然流入ニ委ストキハ予定ノ水量ヲ引用スルコト困難ナルヲ以テ、取入口ニ接シ流身ニ直角ニ天竜川ヲ横断シテ長サ一〇九呎ノ「ロータリーダム」ヲ設ケ最大洪水位ヲ河底ヨリ五尺（洪水時ノ水深ハ二尺五寸ナリ）ト算スル、洪水ノ時ハ「シリンドラー」ヲ「ラック」ニ添ウテ拖キ揚グルノ装置ヲナシ、又取入口ニハ取水内ヲ設置ス。用水取り入れノタメ水位上昇ニヨリ上流ニ及ボス影響ハ約六十間ニシテ右岸ニ被害ノ虞ナシ。又五尺以上ニ増水スルトキハ「シリンドラー」ヲ拖キ揚グルヲ以テ通水ヲ自由ナラシムルノミナラズ「ダム」ノ下流ニ於テ百八十分ノ一ノ急勾配ヲ保ツヲ以テ上流ニ悪影響ナキコト明ラカナリ。

（農商務省農務局）

このダムは動くダムなのでさすがの諏訪側の心配は昔無かと思えた。しかし、諏訪側の心配はなくならない。諏訪湖から取入口までは一里（約四里）もあるもので六〇間しか水位の変化は及ばないし、水位が諏訪湖とダムでは二〇尺（約六・七四）も違うから大丈夫だと説明しても諏訪側は納得しない。多年の実験からみて、たとえ天竜川中へ杭一本打つても上流に影響があるのは明瞭だとゆずらない。

昭和四年二月一三日、前日から争いの中で、とりあえず一週間工事を中止して話しあった結果、ようやく話がまとまって「協定書」ができた。諏訪側（上諏訪町・豊田村・四賀村・湖南村・中州村）の希望を全面的に入れて工事を再開することができた。それには、釜口水量標が一尺五寸に達したら、直ちにダムのシリンドラーを巻き揚げることも入れた一三項目が盛り込まれていた。

この協定書で一切が済んだと思っていたが、降雨洪水のたびに浸水する諏訪湖周辺は、ダムのためにそうなる不安をつのらせた。昭和

六年の七月上旬から降り続いた雨で諏訪湖はしだいに増水し、温泉にも浸水するに至ったため、関係者三〇名がその二三日にのりこんでダムを巻き揚げを迫り、応じないときはダムを破壊するとすんだ。一方、西天地区ではダムを巻き揚げると水量が減少して稲が枯死する。二〇〇個取り入れの認可があるからその範囲の取入れは当然だとダムを揚げようという。

双方の対立はこの日からますます高じていった。双方二〇〇余人が押し掛けてダムを揚げろ、おろせと実力行使に及ぶ勢いである。警官も三〇名から五〇名、三〇〇名と増員されて厳重に警戒していた。南信八警察、北信二署が動員されたという。

こうした対立抗争の中で、田畑、神子柴両区の組合員一〇〇名は、湯水を一時しのぐ方法として、地区内では均等に配分する外はないと全地区の調査をして協議した。これも万一を考えて厳重警戒のもとで行なわれたが、自衛した行動だったので平穏のうちにすんだ。

ダムをはさんでの対立抗争は七月三十一日午後七時半になって、給水県知事の仲裁でようやく解決した。八月一日正午を期してローリングダムを下ろし、取入口へ二〇〇個の通水をしたのである。

西天竜は取り入れの頭首工から、地区外三里にわたる土地買収と補償の件数は約二〇〇余件に達した。

諏訪湖漁業組合（上流各町村）・湖上流の排水工事・川岸設置の土地寄附・天竜川平出までの間の漁業有権者の永久補償・竹木工作物湧排水とか、水源湖湯水車撤廃の補償、さらに用水路・管理道路・天竜川横断水路橋等々の補償工事とした。補償の条件の中には天災地震でも被害ある件は補償する、契約保証金一万円を供託しておく等もあった。本村関係では大泉川の川水を引水する契約がされている。

この二〇〇余件にも及ぶおびただしい数の諸問題には上流の諏訪側

ばかりでなく、下流東天竜井をはじめとする伊那側との争いもあった。そして、その要求は非常なものであったがその要求に甘んじて妥協し、補償協定を結んで西天竜という大事業を成功させたのである。

(2) 決壊と漏水

上流諏訪側や下流天竜川東側との一切の難問は解決したが、問題は西天竜そのものにもあった。当初コンクリートは永久のものと思っていたのに案外凍結に弱かったし、設計上の無理や工法の未熟からくる導水路の決壊等が続出した。「西天竜組合年表」によって、その主なものを拾ってみると次のようである。

- 昭和 四・六・二五 夏明地籍幹線水路一四間決壊 水田四〇〇町歩干上る
- " 五・六・二二 駒沢地籍二五間決壊
- " 一〇・八・七 夏明地籍一二間決壊
- " 一三・七・五 長トロ地籍一七間決壊
- " 二二・三・四 長トロ地籍三四間決壊 四月三〇日復旧す

この中で昭和一三年は豪雨により決壊壊及び水路の沈下等は十数箇所に及んだ。これらの箇所は何れも開渠水路だったので隧道に変更して復旧した。当時のコンクリート工事は草創時代であったため、施工上にも不適正なところもあったし、冬の寒気と凍結のため至るところに亀裂が生じていた。そのため漏水が多く二〇〇個（一個は毎秒一立方尺）の取水も実際には一六〇個（四・四六）程度で水不足となり、せつかくの圃田も作付け不能が三〇町歩をこえる状態であった。

昭和一五年には水害凍害復旧工事で、山の尾・長野・宮所・新町等を隧道に変更して復旧したが、なお危険箇所が多かったため、陳情の結果県営事業として改修することになった。

その工事の測量設計は昭和一七年にできたが戦争のため延び延びになり、同二〇年から三三年までかかって完了した。その概要は次のよ



図4-31 梯式分水槽

うである。

一号隧道(夏明) 二六七五m 昭和二〇、二九年
 天竜川橋新設サイフォン 二一七m 昭和三〇年
 二号隧道(上辰野) 一〇二〇m 昭和三一、三三年
 これに要した費用は次のようであった。

国庫補助金	一億〇七八九万円	総工費	二億四四二九万円
県費支出金	五三九四万円		
地元負担金	八二四四万円		

この工事が完了し、昭和三三年一二月の通水式以後は漏水もなくなり、決壊の心配もなくなった。

(3) 梯式分水槽

西天竜は当初から水の公平な分配を意図してきた。慣行水利権のうちに古田優先ということもなく、多くの民間人の協力による発掘であったので、このことは早くからうたわれていた。

当初分水口を一〇五個設置したが、この水利の調整は非常に困難であった。そこで分水口を三分の一に減じ、全線に五七個の分水槽を設け、此の分水槽に幹線水路から分水して、配水と面積とを正確に合うようにした。なお水利夫以外の人は灌水をしない申し合わせをし、万一、各人が勝手に我田引水をするときは灌水停止のことまで決

めて今日に至っている。

この図4-31の梯式分水槽は、分水口より流出する用水をサイフォンで受け、灌漑面積に応じて比例配水をする装置である。

(4) 土地改良区への組織変更

昭和二五年一二月二日の総会において、耕地整理組合は発展的に解散をし「西天竜土地改良区」となった。

組合員の構成が地主本位の組合から、耕作人の組合に変わった。耕作農民が一人立ちとなって、民間から理事長が選任された。ここで創立当時の農民のあの不屈の魂を心として再出発することになったのである。この組織の変更は二六年一月に申請されているが、組合の規模も我が国最大のものであり、その時の地域別の面積・組合員数は次のとおりであり、南箕輪村の面積が一番広がっている。

区別	町村別	面積	組合員数
第一区	辰野町	八七町九反〇畝一〇歩	四〇七人
第二区	中箕輪町	四〇三町二三〇	一一九六
第三区	南箕輪村	四四二町三九二	八五〇
第四区	伊那町	一四三町一七二四	四三九
第五区	西箕輪村	一〇〇町八七一五	三七二
計		一七七町五八一六	三二六四

(5) 幹線水路の改修と発電

大正八年、耕地整理組合設立のころ、やがて熟田化した時には、発電事業を起して組合経営に役立たせたいということが考えられていた。

昭和二二年、杉原組合長の発電事業の計画があり、調査をしたが実現しなかった。昭和二四年には発電委員会を設置した。しかし、これも資金面で中止となった。

昭和二七年、本村出身の有賀光則が発電・売電・資金面の一切を引き受けてくれたが、一か月後に他界され、この計画は実現に至らなかった。

このように、発電事業は、組合の設立以来何回も計画されてきたが実現を見ずにきた。昭和三四年ころになると、幹線の倒伏危険箇所が約四〇%、破損箇所は全線にわたり、漏水は三〇%にも及んでおり、幹線水路の徹底的改修が急務になった。そこで、同年四月有賀理事長は出立して相沢電気部長に、是非とも非灌漑期の水利利用による発電所設置と、幹線改修の同時施行を陳情した。その結果同年七月、次のような県営発電計画が樹立されたのである。

西天竜発電所

使用水量	最大六・八六m ³ (西天竜五・五六、小沢川一・三〇)m ³
発電電力	最大三六〇〇kw 常時〇 冬期三三三三kw
	年間二二六万kwH

この結果、幹線の補修、嵩上げが行なわれ、発電が認可された。農業用水利用の非灌漑期発電事業は全国で初めてのことで、三六年一月一日より発電が開始された。

なお、幹線の修理費は次のように行われた。

県

二七三〇万円(三六・九五%)

西天

土地改良組合 四六六〇万円(六三・〇五%)

(二) 伊那土地改良事業

伊那土地改良事業は近くの天竜川の水を、従来よりはるか北方のしかも天竜川左岸から求めた水であるので、「遠くから求めた水」としてここに記す。

その詳細は記念碑「利天地」の碑文にくわしく刻まれている。次に

一市一町一か村の二〇耕地の協力による大事業であったが、時代の進運によるものか、比較的にスムーズに計画どおり完成を見るにいたった。

この図4-32の記念碑は卯ノ木に建っている。写真のように「利天地」と刻まれ、碑陰にはこの伊那土地改良事業の目的沿革成果が刻まれている。それによると次のとおりである。

土地改良事業こそは実質的な土地の拡大と、地力の改善とによって、近代農業の基礎を築き、経営の合理化を計り、以て農業生産力の発展を招来するところにより、土地改良は実質的な土地の拡大と地力の改善であるとし、この「利天地」を目的としてまず事業が始まった。

それは、昭和二六年二月のことで、南箕輪村の久保、坂ノ井、北殿、南殿、田畑、神子柴をふくめて一市一町一か村の二〇耕地の人々が、八か年計画で着手した。関係地区の中心にあたる北殿地籍に事務所を設けて発足し、結局、昭和三一年四月に至って完成した。この総面積二〇〇〇haに及ぶ大事業を抄記すると次のとおりである。

○総事業費 五・五四億円(国県助成金三・〇四億円、自己資金二・五億

円)



図4-32 伊那土地改良区(利天地)の碑

第1節 水を求めて

項目	名称	取入施設	かんがい面積(ha)	取水量 m ³ /sec	用水路 構造	水路延長m	用水 不足量 m ³ /sec
合計	北殿井	木沈及牛井	五五、五	〇、三六四	土型	一、四〇〇	〇、一五八
	南殿井	牛井	一四、一	〇、〇九	石積	七五〇	〇、〇五五
	田畑井	木沈	二二、五	〇、一三五	土型	七八〇	〇、〇六八
	神子井	〃	一一、一	〇、〇九	土型	一、〇五〇	〇、〇二二
			一〇三、二	〇、六七九		四、一六〇	〇、三〇三

表4-10 井井堰の概要

この伊那土地改良区は、三区からなっているが、南箕輪の關係は第一工区である。第一工区はこの改良区創立の発祥区で、三日町の天竜川に頭首工（揚水口）を設置し、以下天竜川の左岸は三日町から伊那市中央区まで、右岸は木下より当村を経て山寺に至る。

この地区は細長い旧水田地帯で、標高六四〇mから六七四mで、北から南へ一五〇分の一から三〇〇分の一の勾配をもつ沖積地帯である。従来はこの間に天竜川やその支流からの揚水口が一七か所もあった。南箕輪関係だけでも次の四井堰があって、年々揚水に多くの費用と労役を要した。

とくに諏訪湖に釜口水門ができてから、従前の自然流出よりも下流

〇総面積	二〇〇町歩
〇区画整理	八〇〇町歩
〇用水路延長	一三七km
〇排水路	四〇km
〇暗渠総数	八四六カ所
〇橋梁総数	一二八カ所
〇農道延長	一三〇km

表4-11 四排水路の流域

水路名	流域面積 (ha)	過湿田	浸水田	湛水田
中島排水	144.2	30.8	9.1	44.4
北殿黒川	439.6	70.6	18.2	102.9
南殿黒川	55.6	7.1	6.0	11.1
田畑排水	133.1	23.7	8.1	38.3
合計	772.4	132.2 17%	41.4 5.4%	196.7 25.5%

に及ぼす水の被害が多くなり、水不足に悩まされたり、時ならぬ洪水にみまわれたりした。揚水堰の被害も多くなり、一〇三haに及ぶ水田に水の必要なきに水の確保できる導水路が要望されていた。

一方でこの地域は湿田が多く、特に西天竜に通水してからその湧水によって湿田化がすすんだ。伊那や箕輪等には部分的な耕地整理組合ができて、乾田化の工事に着手していたが、小地域では排水の見込みがたたないで、中途で中止のやむなきにいたっていた。

その当時の主たる排水路は八筋あった、南箕輪関係には表4-11のとおり四筋あった。中島排水、北殿黒川、南殿黒川、田畑排水の四排水路である。過湿田・浸水田・湛水田が流域水田の四八%にもなっていた。この四排水は昔から水の絶対量が少ないときは利用したが、できるならば利用したくなかった。これを悲水と称して遠ざけていた。

昭和三十一年に完成した「伊那土地改良区」の事業は、この二つの願

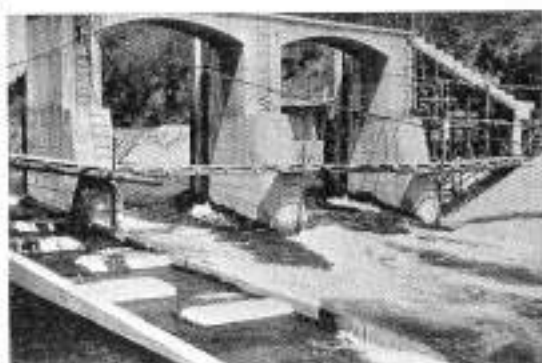


図4-33 伊那土地改良区頭首工（箕輪町三日町地帯）



図4-34 第一号排水路

排水路	項目	延長	面積	排水量
第一号排水路	延長	四、一八五・五m	二〇五・七ha	九・二三m ³ /sec
第二号排水路	延長	二、六五六・〇m	一五〇・二ha	五・九八m ³ /sec

い、すなわち用水時に必要量の用水を確保すること、及び不要な悪水を完全に排水して乾田化することをかなえる使命をもっていた。

そこで、その取入口を統合整理して、頭首工を天竜川本流三日町地籍に新設し、左岸に取水水門を設け流量四・二九m³/secをとり左岸に二・二二m³/sec、右岸に二・〇七m³/sec分水した。右岸へは分水後天竜川横断サイフォン一八八mにより天竜川をくぐって導水し延長二八七九・五mの用水路を新設し、二二一ha余にかんがいする。左岸はトンネル一三七〇mを含め延長六一四七m余を新設して、二三二・三haにかんがいする。

排水は右岸を地形の関係から二幹線に分け、北部（北農以北）の第一号排水と南部（南農以南）の第二号排水とした。

この事業の成果は実に見事であった。（表4-12）

このように灌田が乾田化され、作業がらくになったばかりでなく五〇％をこえる増収となった。また農道に車が入るようになり、本当に夢のようだと村民に喜ばれた。

表4-12 水稲および農作物の作付面積と収量
(南農輪分)

	改良前(昭25)		改良後(昭31)	
	面積	収量	面積	収量
水稲	町112.2	石2.25	町112.2	石3.50
大豆	5.0	2.40	20.0	3.5
粟・麦	10.0	600貫	50.0	800貫
青刈飼料	0	0	6.0	800貫

(『土地改良沿革史』による)

さらにこの排水は後に「西部開発」に利用され、一躍脚光をあびることとなった。

三 奈良井川引水計画

この奈良井川引水計画は本村にとっては、一場の夢と化して実現はしなかった。しかし、明治初年に本村の先人をはじめ多くの人々が、この西部地域に、極兵衛峠（二五二二m）をこえて、奈良井川（白川）の水を導水しようという計画をたて、かなりのところまで実行した。その志の高邁さと熱意はここに記されるべきものである。

明治の新しい世を迎えて、広大なしかし水のない西部地帯をもつ南農輪の人々は、近隣の村の人々とともにここに水を求める動きが熱してきた。明治五年に大萱の新堰として北沢山赤岩から引水する許可がおりた。それは筑摩県の出役本山盛徳が慣行水利権にかかわらず、大萱住民の要望にこたえたものだった。大萱住民は延長二里もあるこの井堰を、四月初工し六月には竣工させた。このころ与地も小沢川の水を引用することができるようになった。いずれも江戸時代には考えられない画期的なことであった。

これに刺激されて、西部地帯の村々はふるいたったが小沢川の水はすでに限界をこえていた。そこで考えたのは、権兵衛峠をこえた山の向うの木曾谷の水であった。明治五年にはその願いをだしてあったので、次のような呼びだし状がきた。五人中三人が本村関係者であった。

羽広村 孫八
南殿 平一
久保 寛一
宣田村 五郎助
神子榮村 恒三
右ノ者兼テ願イ出デ候木曾山水引キ取リ且ツ山路開キノ義ニ付キ御用之有
ル間明十五日大萱村ヘ罷リ出ズ可キ者也
壬申 四月十四日
筑摩県 出役 本山誌
〈大和手文書〉

この本山は新堰のことで大萱へきたので、そこへ呼びだされたのである。「岐阜山開基日誌」(二冊高木恒三)によると、これより前に、出願人恒三らは木曾の白川まで実地に見分をしてゐた。この時に木曾山から水をひくことを申し出ていた。

明治一三年になると、いよいよ詳しい計画ができたので、長野県令あてに上伊那郡長の奥印をもらって、正式に願ひだした。それが「新築開墾願ひ」で、当時の人々の志を知ることができる。

新築開墾願ひ

長野県信濃郡上伊那郡南中西筑輪三カ村ニ開業ヲ成サント欲シ微々タル細民ヲ導メテ上願シ以テ裁可ヲ得ントスル所アリ……………

(大和手文書)

とあるように、南筑輪村のほか二カ村の細民をまとめて開業をしようとしてゐるのである。

そもそもこの地は、広大な地で水田に適しているが、水利の便がないため多年座視してきた。そこで相談して、木曾の奈良井川の上流に白川黒川の両川があるが、これを水源として長大な井堰を引き、両面のように三カ村にわたらせたい。もしそれができたら其の公益は、上

伊那郡第一のもので比べるものもないほどである。上は聖化の恩に浴し、下は福祉の一端となる。

しかしその水は東筑摩郡の養水であるから、これを分水してもらわなければならない。それには鳥居線から南流する味噌川の水を木曾村等に示してと、その交換条件で、この新しい井堰の権利を与えてほしいと申し出ている。いかに実地踏査の上とはいへ、北流する奈良井川支流白川の水をもちうために、南流する木曾川の支流味噌川の水と替え水というような案まで示している。そしてその案の実地検証を願つて、次のように結んでいる。

………
溪水ヲ加エシメ新築開墾願ハサント欲シ之ニ依リ実地踏査成シ下サレ度ク然ル上ハ堰路ニ係ル部落示談書及ビ潰レ地取リ調ベ陸面相勘エ更ニ上願仕ル可ク候間先ズ以テ実地踏査開ノ義速ヤカニ御尤慮アラシメ事ヲ請願仕リ候也

明治十三年十月

南安曇郡豊科村 島田 家幸

同 高家村 山田 賢吉

上伊那郡中筑輪村 大塚 清吉

倉田 清八

北条平一郎

北条孫四郎

同郡 南筑輪村 丸山 寛一

清水平一郎

同郡 西筑輪村 高木 恒三

唐澤彦三郎

笠原 一栄

上伊那郡中筑輪村 戸長 日野香々彦

長野県令 橋崎寛直殿

簡書ノ通り相違之無ク奥印仕リ候也

明治十三年十月十四日

上伊那郡長 伊谷 儀

(大和手文書)

この願い書に名を連ねている豊科村の島羽は請負者である。その島羽が高木儀三を代理人として、木曾側の日義村・新開村と折衝させている「委任状」もある。その委任状によると、南箕輪村の丸山寛一等と木曾側とが、奈良井川支流からの引水約定がととのったが、それを高木に取り戻させようとしていて、複雑である。

それはそれとして、明治十三年一月三日には、この木曾からの引水事業について規約を作っている。規約の緒言には、およそ生を人間として上げた以上、数千年の天恩に報いるためにも、業を起し耕をあまねくして、聖化の一端に報いなければならない。こういう志気から、農業は万民の基礎であるが、その要は水利である。上伊那の地は眼前に水を見ているが、土地が高く揚水ができない。たまたまその方法ができて、水利権という因襲があつてことは運ばない。今や開明日に進むときを迎えた。

今こそ起業のときである、不毛の原野や荒蕪の地を開拓しようとして、ここに木曾の正沢川(奈良井川支流)から引水の示談約定書を設けて、業を起めようとする、まことに意気盛んな緒言である。

その「拡張社規約」は上述の緒言に続いて第一〇条までの規約をきめていく。この規約にはお互いの誠実と団結をちかうほかに、事業をかなり具体的に示している。例えば新堰の開削や出願等の入費は、四百株(一株百円)から集金するとか、投票で起業人から社長副社長を

選出するとか、用水の分配は村々の耕地に応じてきめ五名の委員をおいて公平を期するなどがある。また竣工の上は開田一畝につき米一升ずつ永世、起業人に支払うこともきまつている。このほかに、当時の請願の複雑さを示すように次のように、社則の附録として旅費規定もある。

社則附録

- 第一条 居残り日当日二付キ金三拾銭トス
- 第二条 郡役所行ニテ飯食一泊スルモ一日二付キ金三拾銭トス
- 第三条 西沢原郡往復滞在トモ一日二付キ金五拾銭トス
- 第四条 出願旅費往復日当金壹円、滞在ハ一日二付キ八拾銭トス
- 第五条 東京出府旅費滞在共一日金壹円往復ハ一日十圓諸ノ計算トス

(大和手文書)

このように組織をととのえて、拡張社はその施業計画をたてた。その中でさきに記した三か村にわたる願い人たちがそのまゝ起業人となつていく。

まず経費は総計金二万九千六百三十三円余で、その内訳は次のように、ほとんどが堰路にかかっている。

新渠其他経費概算書

一、金二万九千六百三十三円一六銭九厘五毛	
内訳金 一万六千三百九十二円	堰路掘り割り経費
金 五三〇〇円	開所トンネル経費
金 六四七一円一六九五	右木品職工経費
金 一〇〇〇円	臨時経費

(大和手文書)

この時の人足は井筒が一人一日三〇銭、掘り抜きは職工賃で一人一日五〇銭であった。

は、第六章村の行政にゆずる。

用水源を天竜川沿いの排水路に求め、これを本村の田畑区地先で三・一八六m/sを確保し、二か所に揚水機場を設置し、台地上に二段送水をし、上・下段幹線水路、調整池等の水利施設により、耕地三二八七haについて、畑地灌漑二六七〇ha、水田の用水補給六一七ha（天泉上田等）を行なうものである。

この計画は西部地帯の人々が往古から夢にまでみたであろう天竜川沿線の豊富な水、時に悪水とまで呼ばれた水を、直接引き揚げるという計画で、さすがに近代的計画といえる。これは遠くの水とはいえないが、標高差がほぼ二四〇〜一〇〇mもある低地の水を引揚げるという大事業は、昔なら使えない水を使うことになる。

特にこの用水源の水は排水で、天竜川沿岸におけば昔の人のいったように「悪水」であるが、西部へもっていけば用水となり「養水」といわれてよい。

国営施設以下の末端は、畑地かんがい施設・区画及び農道整備を県営で実施し、地域特性を生かした酪農、果樹、養蚕、果樹を中心にした集約的営農集団を組織し、大型機械化体系を確立し、土地生産性と労働生産性を向上させる計画となっている。

ただ当該地域は年間一五〇〇mm降水量があるので、水田ならともかく、畑地灌漑では何を作ったらよいが、目玉作物は手探りの段階である。対策組合等の反対の強いのもそこに原因がある。

しかし、水田経営はすでに限界に達しているが、畑地経営は無限の可能性を蔵しているともいわれている。将来畑地農業経営が一段と飛躍するとき、この揚水計画はかつてこの地に導入された西天竜のように感謝されるであろう。

そんな日に備えてか、用水の管理は高度利用を考慮して、遠隔制御

装置となっている。

五 水 道

(一) 簡易水道

さきにも述べたように、飲用水を自然湧水に求めた段丘ぞいの村々と、深井戸や横井戸の井戸水に求めた西部地帯とは、それぞれの環境に応じて長い年月を経た。昭和になって各部落に簡易水道が引かれるようになった。この簡易水道によって水を求められるようになったことは、大きな生活改善であった。雨の日も風の日も水を運んだり汲みあげたりする重労働から解放されたし、流行病の蔓延からも救われるという、画期的な生活のうらおいと進歩をもたらした。

昭和三十九年になって、この簡易水道はさらに一層の充実をするため、村営水道へと発展するのであるが、そのころ調べた簡易水道は次表4-13のようにたくさんあった。

(二) 村営水道

1 村営水道事業の発足

昭和三十九年になって、村内二〇余の簡易水道も小規模の経営では各方面にゆきづまりをきたしてきた。時代とともにより清潔な水、より豊富な水を求める要望にこたえるため、全村的な村営水道が計画された。

村営水道事業を営もうとする理由

本村は上伊那の中央部に位置し……

当該地域はほとんどの地区に古くより地下水が湧き、安易に飲料水を得ることができたため、小規模な組合水道と一部村営の簡易水道とがあるが、共に施設の老朽と最近の地下水の減少により水源枯渇のため地域内の住民の飲料さえない地域が多い状況であります。

表4-13 上水道（篠井水道）調査数（昭和39年調）

	水道名	代表者名	給水区域	給水人口		着工年月日	竣工年月日
				計画	現在		
1	久保水道	倉田 良祐	久保全域	350人	290人	昭 5.11.30	昭 5.12.30
2	塩ノ井水道(村営)	征矢守三郎	塩ノ井上ノ段	350	250	昭 30.10.1	昭 30.10.30
3	" 3組水道	征矢 嘉夫	" 3組	90	80	昭 31.3.10	昭 31.4.12
4	" 1, 2組	征矢 英一	" 1, 2組	90	65	昭 32.4.10	昭 32.4.30
5	北殿駅前水道	倉田 可二	北殿9, 10, 11組	70	60	昭 3.10.30	昭 10.11.10
6	" 仲町 "	征矢 嘉義	" 仲町区域	90	87	昭 30.3.10	昭 30.4.10
7	" 原 "	伊藤 良平	" 原区域	70	51	昭 30.11.30	昭 30.11.30
8	" 4組 "	有賀 一衛	" 4組	350人	128	昭 31.4.2	昭 31.5.10
9	" 南部 "	唐沢 伸治	" 南部区域	209	209	昭 31.3.	昭 31.
10	" 1組 "	山崎 清治	" 1組	75	70	昭 32.9.10	昭 32.10.30
11	" 出頭 "	倉田 襄	" 3組	50	31	昭 32.11.22	昭 32.12.12
12	大泉水道(滝洗)	清水 頼治	大泉全域	1500 1120	1200	昭 25.	昭 25.
13	南殿水道(村営)	清水 國彦	南殿全域	(一組 633人 学生 1306人)	1120	昭 30.7.4	昭 30.12.30
14	" 7組水道	福沢 松治	" 7組	60	50	昭 30.2.10	昭 30.3.30
15	田畑水道	松沢修一郎	田畑全域	1200	856	昭 26.3.15	昭 26.4.10
16	神子柴水道	(忠一) 有賀 敬三	神子柴全域	450	350	大13.10. 昭 4.11.20	大14.8.26 昭 4.12.10
17	大芝水道	宮下 泰之	大芝全域	200	100	昭 31.12.1	昭 33.3.30
18	南原水道	西村 満次	南原全域	250	180	昭 31.11.30	昭 33.1.20
19	北部保育所	清水 宗雄	北部保育所	50	50	昭 31.9.30	昭 31.10.20
20	北原以和清水	清水 國人	北原全域			昭 33.	昭 33.9.

右の状況から間々より全村的な上水道計画がさげばれていましたが、諸般の事情により実現が遅れていたものであります。上水道の完備により伝染病の発生を阻止し清浄にして豊富低廉な飲料水の供給を図り、又衛生的見地より、又文化生活の向上と生活環境の改善を計るため、完全な上水道設備を痛感して、ここに村議会の相一致した議決のもとに、早急に上水道事業の経営をしようとするものであります。

昭和三十九年十一月十八日

南箕輪村長 清水國人

この計画は次のようであった。

一、給水区域 久保・塩ノ井・北殿・南殿・田畑・大芝・北原・神

子柴(一部)

二、給水人口 現在 五、九四六人

将来 六、四〇〇人(計画給水人口)

三、給水量 一人一日平均 一〇〇ℓ(計六四〇ℓ)

一人一日最大 一五〇ℓ(計九六〇ℓ)

四、事業費 総額 六、一〇〇万円(四〇年度・四一年度)

内起債 五、〇〇〇万円

一般会計 一、一〇〇万円

五、施行期間 昭和四〇年四月一日(昭和四二年三月三十一日)

六、水源 第一深井戸 南高根(用地購入)

第二深井戸 荻川原()

(役場文書)

南箕輪村議会は昭和三十九年十一月一日にこれを議決し、県知事は同年十一月三日申請のこの事業を、十二月八日に認可した。

これによってできた村営水道の配水系統と主要施設は図4-

く渇渴の心配もあるので、表流水に水源を求めることにした。

従来も大泉所一の沢の水を引水していたが、さらに三の沢四の沢の水を引水する計画をたて、四三〇〇mの導水管（ヒニーム管）の改修を実施した。

こうして、昭和四五年年度の給水戸数は一〇二四戸と順調にのび、三〇余万円の純益をあげることができ、財政的にも順調であった。しかし、当時の問題は四の沢取水の導水管の老朽化と深井戸の地下水が冬期間に激減することであった。

(2) 第三水源

水の需要は年とともに増加し、この村営水道事業はその需要にこたえるため、変更または変更を重ねてきた。昭和三九年の暮に認可があったから一〇年たった昭和四九年には早くも、「経営変更認可申請書」がだされている。その変更理由には次のようにのべられている。

本村は上伊那の中央部に位置し、

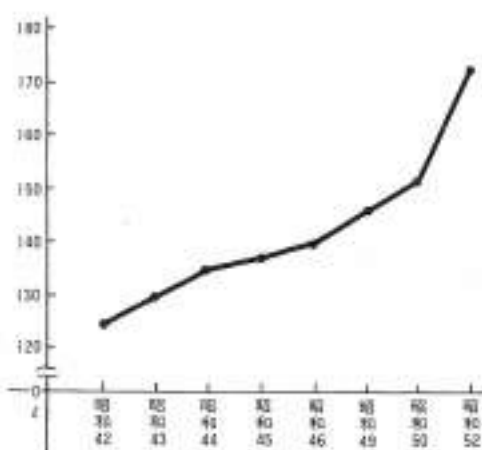


図4-37 1日1人当り水道使用量の推移

昭和四〇年に上水道の認可を受け現在まで給水して来ましたが、文化生活の向上と生活環境の改善により水不足となり、時間断水も余儀なく、村民に清浄にして豊富低廉な飲料水を円滑に供給するため、新たに水源を田畑地区の大泉川右岸に求め、早急に水不足を解消することにしました。

昭和四九年六月二二日付のこの申請は六月二八日に知事の認可をうけることができた。ここで変更されたのは水源を新たに設けることによる上水道の充実であった。

「第三水源南箕輪村宇権現五九〇三 深井戸 八〇m」

この新水源は田畑の構現に、昭和四九年一月上旬に完成し、ここで一日当たり一五〇〇〜二〇〇〇m³の豊富な水が得られた。このころから、全村水道事業を意図していた。神子柴・大泉・沢沢等は給水区域に入っていないが、話し合いによっては、直ちに全村水道事業の経営が行なえるように計画された。

それはともかくとして、当村における水の需要は、図4-37のように年々増加するばかりであった。この需要にこたえるには、さらに新しい水源を求めなければならなかった。

(3) 第四・第五水源

昭和五三年七月二七日付けで、第二次拡張工事の申請がだされ、同年九月八日付で知事の認可がえられた。

第四水源 深井戸 伊那市西箕輪大泉新田二、一二五

昭和五三年になって、村の上水道の水源は深井戸四本と湧水一か所、一日給水量二五〇〇tを供給していたが、なお、夏期・冬期に久保上段や中込区に水不足があった。そこで第五水源を求めることになった。

第五水源 深井戸 南箕輪村二八の一 久保

この深井戸は一〇〇mで、昭和五三年八月起工式を行い、昭和五四

表4-14 水道施設の位置・規模及び構造

施設名	工 種 名	名 称	形 状 寸 法	規 模 能 力	数 量		単 位	位 置
					既設	新設		
水源	第1水源	深井戸	φ 350 深サ 85m	$m^3/日$ Q=430	1		井	南冥輪村字南高根
	揚送水ポンプ	水中モートルポンプ	φ 80 5段 15kw	$m^3/日$ Q=430	1		式	"
	ポンプ槽	RC造り	内法 2.0×2.0×2.0	m^3 CP=8.0	1		槽	"
	第2水源	深井戸	φ 300 深サ 102m	$m^3/日$ Q=287	1		井	南冥輪村字萩川原
	揚送水ポンプ	水中モートルポンプ	φ 80 2段 7.5kw	$m^3/日$ Q=287	1		式	"
	ポンプ槽	RC造り	内法 2.0×2.0×2.0	m^3 CP=8.0	1		槽	"
	第3水源	深井戸	φ 350 深サ 80m	$m^3/日$ Q=1,106	1		井	南冥輪村字榎現
	揚水ポンプ	水中モートルポンプ	φ 100 3段 18.5kw	$m^3/日$ Q=1,106	1		式	"
	ポンプ槽	RC造り	内法 4.4×3.2×2.5	m^3 CP=35.2	1		槽	"
	第4水源	深井戸	φ 250 深サ 100m	$m^3/日$ Q=150		1	井	伊那市西冥輪大泉新田
	揚水ポンプ	水中モートルポンプ	φ 40 2段 3.7kw	$m^3/日$ Q=150		1	式	"
	ポンプ槽	RC造り	内法 4.4×3.2×2.5	m^3 CP=35.2		1	槽	南冥輪村字大芝
第5水源	深井戸	φ 350 深サ 100m	$m^3/日$ Q=1,860	1		井	南冥輪村281-1	
揚水ポンプ	水中モートルポンプ	φ 100 5段 30kw	$m^3/日$ Q=1,860	1		式	"	

年一月一九日に落成式が挙行された。これによって一日に二九〇〇トの良質な水を確保することができるようになった。さらに大芝高原に第二配水池が完成し、大芝区や村の上段地区の一時的断水がなくなることになった。こうして、この第二次拡張工事によって、次のように水道が整備された。

給水人口

六四〇〇人(七三〇〇人)

一日最大給水量 二六二五 m^3 (三二八〇 m^3)

以上、水源を次々に求めて、人口増と水需要増とに対応してきたが、その大要は上表のようである。

また、村営水道の給水人口や一日平均量の増加傾向はその後も続いている。

(4) 監視制御設備

全村的村営水道といっても多岐にわたる、その機能を全かしむるは容易なことではない。水の管理はしかし生活に密着しているの、一刻の猶予もゆるされない。

既設の五水源、四配水池より、水源及び配水池の計測・運転状況等を、テレメーター設備により中央へ伝送し、中央管理室で集中監視制御する。

この固期的な計画、役場庁舎内で居ながらにして集中監視制御ができる計画は、県下でも最も近代的な設備であった。その設備工事のブロック図と工事内容は図4-38のようであった。

この大事業は次の工期と事業費でできた。

1 工期

昭和五十六年一〇月一日着工

昭和五十七年二月二〇日竣工

第1節 水を求めて

- 1 滝洗簡易水道 大泉区(ほか三区)
- 2 神子架簡易水道 神子架区(除12組、13組、14組)
- 3 南原飲料水供給施設 南原区

南筑輪村の水道は村営水道が広く利用されているとはいえ、いまだ他の水道区が多く残っている。

(三) その他の水道

この設備によって異常や事故を早期に発見し、復旧をすばやくすることができ、断水時間や断水地域を最小限にすることができるようになった。

2 財源内訳

総事業費	七三三九万九〇〇〇円
企業債	四四〇〇万〇〇〇〇円
一般財源	二九三九万九〇〇〇円

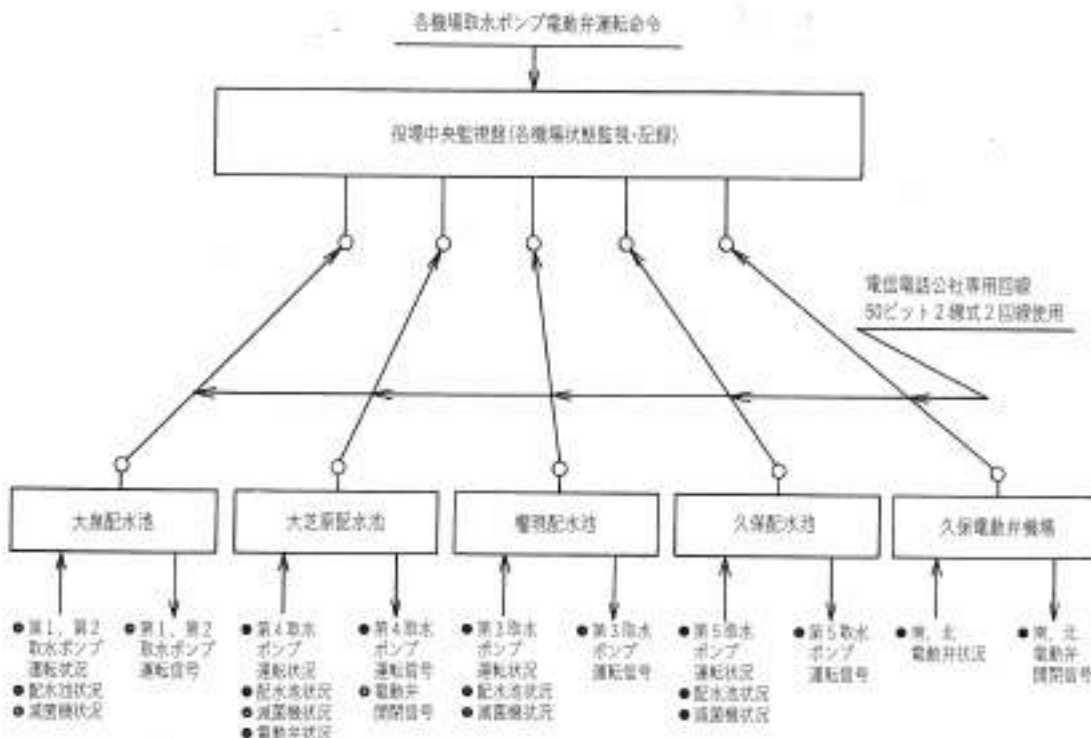
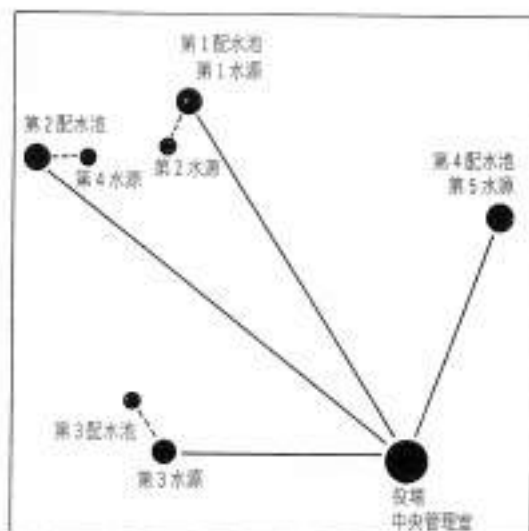


図4-38 村上水道監視制御設備ブロック図

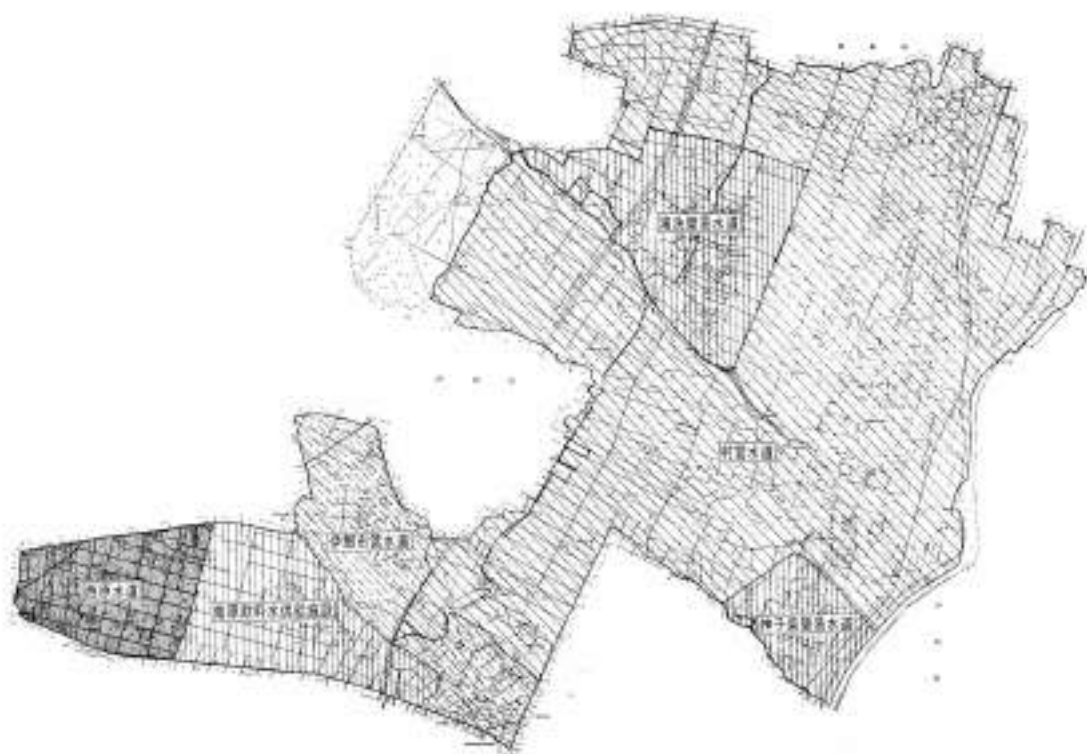


図4-39 南箕輪村各種水道の給水区域

4 西原水道 西原(中野原)
5 伊那市営水道 沢尻区・信大
6 その他 村内には小規模の水道が多い
南箕輪村の各種水道の給水区域を图示すれば、次の図4-39の
ように、六種に区別される。

1 滝洗簡易水道(四か水道)

大泉に昭和初年に西天竜水路が開通してからは、井戸の水も前
ほどかれることは少なくなった。つまり西天竜からの水がしみこ
んでいったのである。たまたま用水上井の上流の大泉新田で伝染
病が大発生したのを機として急速に水道の話がまとまった。

昭和二六年八月二〇日の大泉区臨時総会で次の案件がきまっ
た。

一、滝洗湖水を水源とする西箕輪側の配管せる一貫上水道施設に關す
る件

区長清水忠弘

この件は可決になり、その財源として、新井保全地立木の代金
の残り(すでに公民館建設費に充当していた)と、北原の神社林の
一部立木を売却した代金があてられた。この水道がいわゆる四か
水道で、すでに西箕輪村の三区(吹上・大泉新田・中曾根)が計画
していたのに加入したわけである。この水道で後々までやっかい
な問題の残るのは水利権は五か部落(富田を含む)であるのに四か
部落の水使用である点である。(当時中曾根は西箕輪村管内)

滝洗上水道設計工事金 一、八五二万円

内訳 西箕輪三部落分 一、二〇〇万円

大泉分 六五二万円

設計・工事施工者 日本管業株式会社

水道需要者 総数 四五七戸

内訳 大泉区一八六戸、大泉新田区一〇四戸

吹上区 八五戸 中曾根区 八二戸

大泉配水池（第三タンク）

南沢輪村字北高根

六八・七二坪

こうして昭和二六年着工して同年竣工した。その間大泉区民は、区内掘鑿埋設・水源池・配水池・嫌夫・その他の賦役に参加した。各戸二〇工の賦役であった。あまりの負担に参加をこばむものも少々はあったが、大多数はあこがれの水道が使えるということで欣然として参加し、また各戸一万円の負担にも応じた。

このようにして夢にまでみた水道のある文化生活が、はじまったのであるが、冬季間は特に時々水不足になやみ、次のように増し工事による水源が求められた。

昭和二七年五月一七日、冬季間の水量が不足したので新しく水源地の増し工事をした。

新水源池二か所 西尾根 万作洞

昭和三〇年には、なお冬季の湧水によって、水源を研究の結果、大泉新田区の横井湧水を二月一日から三月末日まで借り入れることになり、約三〇万円をかけて増し工事をした。

このように奥へ奥へと水源を求めて増強していったがいつも水量が水の需要に追いつけず、ついに昭和四九年に大泉川本沢の水を取水することになり、水量は一応の解決を見た。

しかし水質については満足できず、降雨がはなはだしいと、たちまち濁水となるので、諸施設の増強を試みているが、依然簡易水道の悩みをもちつづけている。

2 神子柴簡易水道

神子柴は水に恵まれていたので、早くも安政六年に埋樋を使った水

道を引く計画をたてて願ひ出ていることはすでにのべた。

村では一番早く大正一三年に簡易水道の計画がたてられている。

飲料水改良工事費補助願

上伊那郡南沢輪村神子柴区ハ從來飲料トシテ区内貫流ノ河川並ビニ掘鑿井水ヲ使用致シ来リ候処近年人口急々増密シ地籍イヨイヨ狭隘テ来セルニ従イ飲用水路ニ不潔有害物ノ混入ヲ免レズ衛生上危害ノオソルベキモノアリ洵ニ憂慮堪ナリアリ候。就イテハ今回厚福之助外三七名共同ヲ以テ飲料水改良工事ノ計画ヲ立テ左ノ事項ニヨリ簡易ノ水道敷設仕リ度ク候間御調査ノ上特別ノ御注意ヲ以テ県費補助御認可成シ下テ度ク此ノ段願イ上げ候。

大正十三年七月十八日

南沢輪村神子柴区

共同者総代 有賀忠一

長野県知事 梅谷光貞殿

（役場文書）

やはり人口の増加により飲用水路が不潔になり有害物がしみたり混入したりするので、衛生上の憂慮からこの計画をたてたことが記されている。この申請は翌年の大正一四年一月二二日には許可になった。

長野県指令 収第九五四二号

上伊那郡南沢輪村神子柴 飲用水改良共同者厚福之助外三七名

総代 有賀忠一

大正十三年七月十八日付ケ飲用水改良費補助申請ノ件聞キ届ク、但し補助額ハ工事出来形検査ノ上之ヲ定ム

大正十四年一月二十一日

長野県知事 梅谷光貞

竣工は大正一四年八月二六日で、総工費は一万二五九六円であり、補助額は二四七三円であった。

○水源池 字大清水 七、八二九の湧水 鉄管にて配水池へ
○戸数・人口 区域内戸数七〇戸 人口四二〇人

配水戸数 三八戸 人口二三八人

○給水方法 水量を計らずに次の三方法とする。

(1) 専用給水 屋内に給水栓設置一戸で使用

(二戸一カ月一円五〇銭)

(2) 連合給水 隣接する二戸で連合使用(二戸八十銭)

(3) 公設共同 組合で設置し数戸共同使用(二戸八十銭)

(殺場文書)

今では考えられないような共同使用などもあって、時代を思わせるが、水道の便利さ清潔さは十分であった。

3 南原水道

第七章第二節に詳しいのでここでは省略する。

4 西原・中の原(伊那市)水道

この水道も前と同じ。

5 沢尻の水道(伊那市菅水道)

沢尻も既述のとおり、古くから水不足に悩まされてきたムラであった。飲用水を井戸や横井戸によって求めてきたが、昭和になって鉄管の水道施設をほどこした。この鉄管による水道は当時としては立派なものであった。

この水道は地下水の変化によって水が枯れがちであった。昭和三四年に伊那市が青木水源を掘ったので、水の枯渇を心配して伊那市と交渉し、小沢区とともにその補償として簡易水道がひけるようになった。六一戸三一六人がこのためにうるおった。

さらにこの簡易水道は、昭和四九年四月には伊那市営の上水道に統合されて、水の心配はなくなった。昭和五七年現在で二〇七戸、五二七人がこの恩恵に浴している。

四 上伊那広域水道計画(図4-40)

上伊那地域の水道施設は小規模のものが多く、水源は湧水や地下水にもとめているものがほとんどであり、近年水量の減少、水質の悪化の傾向がみられている。今後の水源は表流水に求めざるを得ない状態になっている。

昭和五五年四月一日、長野県も含め上伊那広域水道用水企業団が設立され、箕輪町の沢川に箕輪ダムをつくり八三〇万tの水を貯水し、五市町村へ四万六五〇〇m³の水道用水を昭和六二年四月から供給する計画がたてられている。水道はこうして村営から広域水道の時代を迎えようとしている。

その「全体事業計画」と「村内送水管埋設ルート略図」は図4-40のようである。

昭和五五年度から始められたこの広域水道事業は、順調にすすんで、昭和五九年度には送水管布設工事を、本村の北原地籍から大芝地籍の間の、広域農道で行った。工事期間は八月下旬から十二月末まで、内径〇・八mの送水管を約二二〇〇mの区間に、深さ一・二mの地下に布設した。まだダムは完成しないが、こうした工事は着々とすすんでいる。



北総四年保治年巳五月十七日より大洪水にて御田地等川跡を調査失仕り別録番頭職候に付き同年六月十一日に之を盡き難き所へ差上げ申候
持主 名主 庄右衛門
(北総区有文書保存会)

図4-41 享保10年北総村川欠けの図

百五拾三石七斗七升六合

本畑

百拾九石七斗七升七合

原・新原畑

石八斗六升

散り下げ畑方

小以四百五拾石七斗八升七合

合(注総石高の七〇%換)

残百九拾石六斗五升五合

以下略

(阿鼻文書)

これは享保一六亥年(二七三)に代官所から、名主および総百姓あてによこした年貢割付状の一部で、年貢割り付けの基礎になる村石高と、川欠け等により減少した、村石高から差し引くべき石高を記した年貢割付状の初めの方の部分である。これによると、総石高六四五石四斗三升余のうち、今までに川欠けになり復旧の見込みのない永川欠け石砂入りになっている石高が五一石七斗七升、三年前の申年の洪水で川欠けになった石高が一四石九斗一升ある。そし

て、本年の洪水で川欠け引きになった石高が七五石四斗九合、石入り引きが三石四斗九升六合、砂入り引きが一〇石一斗九合、本年の洪水だけで合わせて八九石一升四合の石高の土地が荒れ地になったことを示している。今までのものを合計すると一五五石六斗九合となる。これは総石高のおよそ四分の一であり、面積は、中田の石盛反当一石四斗で計算すると一町一反余となり、当時の田畑村の水田面積一四町五反余の四分の三強が、洪水のため流されたり、荒れ地になってしまったことを示している。これが村から代官所への報告であるならば誇張があると思えるが、代官所が現状を核分した上での年貢割り付けの数字であるから、田畑村のこの年の洪水による被害は、ここにある数字以上のものではあったと思われる。

さらに、洪水の害ではないが運が悪くこの年は旱害、風損がおびただしく、この年の不作引きが二九六石二斗余になっており、年貢を課せられる石高が僅かに全石高の二九・四%の一九二石六斗余しか残らないという状態であって、翌年は享保の飢饉といわれる大飢饉になっていることから、このような洪水と旱害風損に襲われた田畑村の惨状は目に余るものがあったと想像される。

この例は特に被害の多い場合であるが、災害はこの年に限ったわけではなく、この資料の中にも前々からの川欠けが五〇余石も残っているように、江戸時代を通じて頻りに被害が起きているのである。

次に、北殿村の例を見よう。図4-41は享保一〇年（一七二五）五月の洪水による川欠けの図である。この図は洪水のために川除け普請が流失したので、跡普請の願い出のために飯島御役所に差し出した絵図の下書きであるが、当時の洪水による天竜川の氾濫や被害の状態を知らしめてくれる。元禄十一年（一六九八）の洪水のとき、天竜川の本流が北殿村の水田地帯の中央に切り込んできたが、この年の洪水のとき

は、本流が網目状に広がって被害面積が著しく大きくなっている。既に北の方の一部は田地が中州になり川原となっているが、この享保一〇年の洪水で中央部から南殿境にかけて十数町歩が川欠けあるいは石砂入りになっている。

さらに、次のような資料がある。

北殿村の儀、外村とは格別難儀の村方にて天竜川大普請場所、殊に四拾数年以前重年（氏、元禄二丁）御田地の中へ新川切り込み今以て御田地の中を流れ通り候へば、御普請大役も多く年々の儀に御普請成し下され候得共、川長永く御田地欠け崩れ田方貳百石余水川欠けに罷り成り、潰れ百姓多く御田地に難れ百姓困窮仕り、遂成る者は過半他国他所へ嫁ぎに出、相成り候者は老人子供足よわ斗にて御役儀も相勤まり申さず、一村で所になるべき様に御座候。

（北殿区有文書）

これは寛保二年（一七四二）、北殿村より御役所に対して御普請の百姓負担の軽減を訴えた願い書の一部であるが、これによると、北殿村はほかの村に比べ難儀の村であるが、殊に元禄十一年（一六九八）の洪水のとき多くの水田が流されたばかりか、天竜川の新川が村の水田地帯の中を通るようになって、それ以来年々のように御普請があり、その御普請役で苦勞している。それにもかかわらず少しの洪水でも水田が川欠けになり、二〇〇石余（一七町余）が荒地になってしまっている。土地を失った百姓が多く、働ける者は大部分が出稼ぎに出てしまっている。御役儀も勤められない状態で村が亡びてしまっている、と惨状を訴えている。

以上の資料でもわかるように、天竜川沿岸の村々はもちろん、天竜川に注ぐ小河川の両側の農民も年々のように水害を被っていたのである。江戸時代を通じて上伊那地方、特に南箕輪地域にどのくらい水害

表4-15 近世（江戸時代）郷土における水害の発生

年 和 曆	号 西曆	水 害 の 内 容	資 料
慶長17 (子)	1612	天竜川大洪水 (田中城流失)	上伊那誌
" 19 (寅)	1614	8月洪水	赤須上穂田記録
元和 6 (申)	1620	洪水	"
寛永 1 (子)	1624	4月天竜川大洪水	上伊那誌
慶安 1 (子)	1648	5月洪水	赤須上穂田記録
" 3 (寅)	1650	夏洪水	"
万治 3 (子)	1660	上伊那地方大洪水	上伊那誌
寛文 1 (丑)	1661	6月洪水	赤須上穂田記録
" 2 (寅)	1662	"	"
" 10 (戌)	1670	夏洪水	"
延宝 2 (寅)	1674	洪水にて秋作凶作	"
" 4 (辰)	1676	洪水	"
貞享 4 (卯)	1687	7月洪水	門屋日記記
元禄 4 (未)	1691	6月洪水, 8月洪水	"
" 7 (戌)	1694	洪水 7/2暴風	"
" 8 (亥)	1695	洪水	"
" 10 (丑)	1697	9月洪水	"
" 11 (寅)	1698	5/18, 19洪水尺余満水, 北殿精進の中へ川筋入る	北殿区有, 中東文書
" 12 (卯)	1699	天竜川洪水	門屋日記記
" 13 (辰)	1700	9月洪水	"
" 14 (巳)	1701	8月洪水	赤須上穂田記録
宝永 1 (申)	1704	洪水	"
" 2 (酉)	1705	6, 7月洪水	"
" 4 (亥)	1707	6月洪水	" 中宿文書
" 5 (子)	1708	9月洪水	"
正徳 5 (未)	1715	6/17-24未曾有の大雨「正徳の満水」という田畑村井堰水門 大破南殿村本頼40間押切り	門屋日記記 中東文書
享保 5 (子)	1720	天竜川洪水 8月満水	王理軒文書
" 6 (丑)	1721	洪水 田畑村井堰臥樋流出	門屋日記記
" 8 (卯)	1723	8月洪水	北殿区有文書
" 13 (申)	1728	8, 9月洪水 川欠け多し	門屋文書
" 16 (亥)	1731	4, 8, 9月洪水 8月天竜川大泉川氾濫 川欠け多し「亥の 川欠け」という	北殿区有, 中東文書
" 17 (子)	1732	洪水	門屋文書
" 19 (寅)	1734	8月洪水	赤須上穂田記録
元文 2 (巳)	1737	洪水 田畑野底川洪水 分杭流失	門屋文書
" 3 (午)	1738	8月洪水 伏越樋流失	"
寛保 2 (戌)	1742	洪水	上伊那誌
寛延 1 (辰)	1748	洪水 北殿村天竜川本瀬切込み	北殿区有文書
宝暦 3 (酉)	1753	洪水	"
" 7 (丑)	1757	洪水 北殿村のみで田方200石流失	"
" 11 (巳)	1761	洪水	"
明和 2 (酉)	1765	5月大洪水 8月再満水	" 中宿文書
" 5 (子)	1768	洪水 天竜川満水 川瀬変り防留等流失	"
安永 4 (未)	1775	8月洪水	赤須上穂田記録

第2節 水との闘い

安永 8 (亥)	1779	洪水 田方損失多し	北殿区有文書
天明 2 (寅)	1782	洪水 "	"
" 3 (卯)	1783	8/4 洪水	久保大東文書
" 7 (未)	1787	洪水	赤須上穂田記録
寛政 1 (酉)	1789	6/17—18 天竜川満水 8月再洪水	"
" 8 (戌)	1796	6月雨天勝 洪水	北殿区有文書
享和 3 (戌)	1803	6月満水 川欠け多し	"
文化 1 (子)	1804	洪水	"
" 3 (寅)	1806	洪水	"
" 4 (卯)	1807	洪水 凶作	"
" 7 (午)	1810	7月天竜川 三峯川洪水	赤須上穂田記録
文政 9 (戌)	1826	洪水	北殿区有文書
" 11 (子)	1828	"	"
" 12 (丑)	1829	"	"
天保 5 (午)	1834	8月洪水	赤須上穂田記録
" 7 (申)	1836	4月, 7/2洪水 8/13洪水	大宗館文庫
弘化 3 (午)	1846	5月洪水	赤須上穂田記録
" 4 (未)	1847	3/7—8 洪水	"
嘉永 1 (申)	1848	6月天竜川大洪水	北殿区有文書
" 3 (戌)	1850	6月 7/21洪水 田畑村普請所大敗	鎌屋文書
安政 4 (巳)	1857	5月17—18 7/26大洪水 天竜川, 大泉川満水	中東, 高塚文書
万延 1 (申)	1860	5/10—11天竜川洪水	北殿区有文書
文久 2 (戌)	1862	7月洪水	"
慶応 1 (丑)	1865	5/16—17天竜川, 大泉川満水	中東 "

備考 1 出来得る限り村内の資料から求めたが上伊勢誌、赤須上穂田記録抄等からも採録した

2 表中月日は旧暦で5/3は5月3日を示す

が起きたか、村内の資料を中心に年表的に作成したのが表4—15である。これで江戸時代の水害の概要を知ることができるであろう。

表4—15によってわかるとおり、江戸時代は洪水(當時は洪水ともいった)の回数が非常に多い。一六〇〇年以降二百数十年の間にこの表に記入したもののみで六六回を数え、三・五、四年に一回の割合で発生しており、驚くほど頻繁に水害を受けていることになる。

これは、現在のように上流や諏訪湖に下流の水位を調節するような施設がなく、河川両側の水防施設も極めて貧弱であって、少しの増水でも本流の場所が移動して大切な耕地が押し流されるといふような状態にあったからだと考えられる。このため、天竜川や大泉川等の河川沿岸の住民は必死になってこの洪水と闘かねばならなかったのである。

(四) 川 除 け (洪水対策)

江戸時代の人たち、特に農民は頻繁に起こった洪水とどのようにに闘ってきたのであろうか。残されている資料を頼りにその姿を探って見ることにする。

1 築堤と水制工

江戸時代に、洪水による川欠けを防ぐために、どの程度の堤防その他の水防施設が造られていたか、資料に乏しく正確に知することは困難である。

しかし、当時の堤防などが部分的、一時的なものであったかどうかということは次のような事情から理解することができる。

当時の天竜川は現在のように川筋が固定しておらず、洪水のたびに本流が西に東に移動するという状態であった。享保一六年

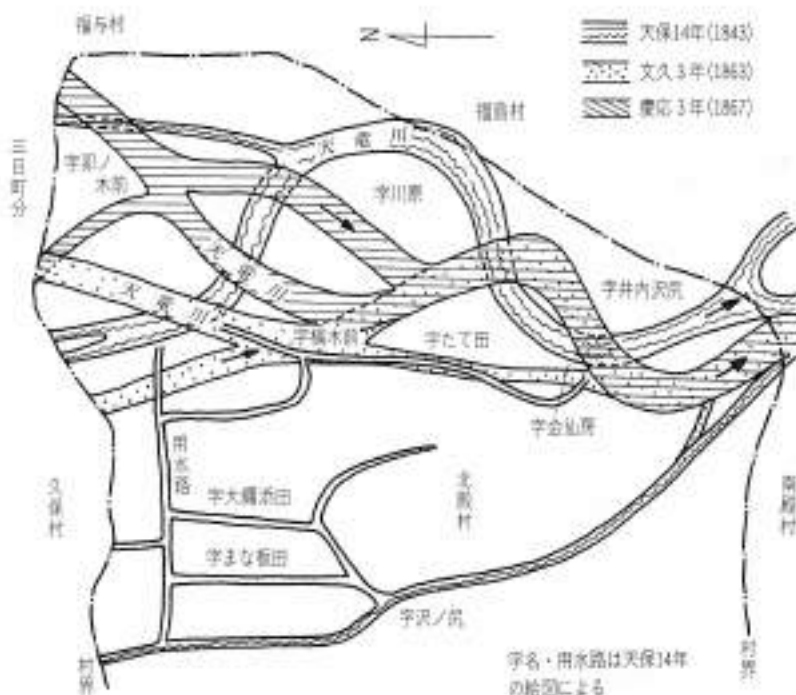


図4-42 江戸時代後期天竜川河通の変遷（北殿村地先）（北殿村有文書より合成）

(一七三二)、元文二年(一七三七)に田畑村、神子柴村の田地が大きく川成りになった例が記録に残っているが、このようなことは他の地域でも多くみられることであり、江戸時代後期の北殿村地先における天竜川の河道変化の実態を図示すると図4-42のようである。この図は天保一四年(一八四三)、文久三年(一八六三)、慶応三年(一八六七)の北殿村地先の同じ地域の河川図によって作成したものであるが、図で

見るように、現在の天竜川兩岸の美田地帯である沖積平地は、まさに氾濫原そのまゝの状態であって、天竜川の川筋は気ままに移り変わっている。これは南箕輪地域でも河道変化の多いところであったが、他の場所でも河道の変化はかなり見られるのである。

このような状態からみて、当時の堤防は川筋を固定するような力を持ったものでは無く、川の流れに合わせて河川の屈曲部や、水田を守るための重要な場所に部分的に造られるという段階であった。しかも、大きな洪水の場合は流失し、本流の川筋が変わるたびに造り替えるというような程度のものであったと考えられる。河川の両側に連続的な堤防が造られるようになったのは明治以降であり、半永久的な石堤になったのは昭和になってからである。

江戸時代の当地における堤防の構造はどうであっただろうか。堤防(川除堤)では築堤の斜面、特に川表側の工法と、散流に洗われる部分の根固めの方法、及び散流を和らげる水割工が問題になる。強い水流に洗われることの無い所では川除堤として土を主体とした堤防が造られることがあり、その根固めには乱杭、樁、粗梁小口等が用いられ、築堤の斜面には芝、菅羽口等の工法が用いられている。しかし、天竜川のような強い水勢の所では土堤は不向きであり、かつ、石が豊富であったと考えられるから石を主体とした川除堤が造られたものと考えられる。

この点について資料をみると、宝暦八年(一七五〇)の文書に「六拾年(元禄二年)一六九九年」成し下され候砂利堤、今において「砂利堤」という記録があり、元禄時代に砂利堤が造られていることがわかる。また、元文四年(一七三九)の川除御寄附書所積り帳(同屋文書)の中に、砂利土、長さ六拾間とあり、これは砂利堤であると考えられ、その後しばしば川除け関係の文書の中に砂利堤という文字が

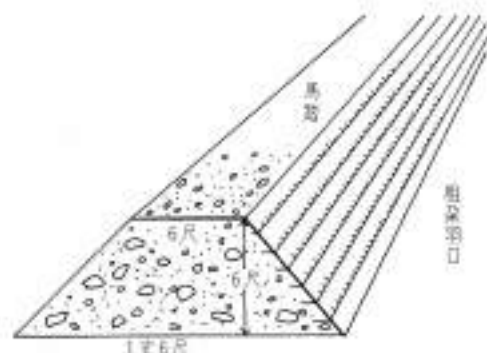


図4-43 粗土で多く造られた砂利堤（普通の大きさ）

これによると、高さ六尺、底面の幅一丈六尺で上面に六尺幅の馬路を持ち築堤であり、両側面の法は高さ一尺ごとに粗梁

村役 倉梁 百拾壹束 四尺
打ち遣い五尺縄式重ノ
長は切れ所長さ三十一間高
さ六尺の所内法懸然束拾二
通り此の長さ
延三百七拾貳間 但し拾間
三把ずつ
(堀ノ井大東文書)

一堤切れ所築き立て 長さ三拾間 平均高さ六尺 馬路み六尺 敷一丈六尺
此の砂利 六拾貳坪
人足 百八拾六人 但し砂利取り一坪三人
右入用
天竜川通り字横下

出しており、他に堤防の種類を示す言葉が出てこないことから、当地における川除堤は砂利堤であったと考えられる。本格的な石堤については、明和から天保の時代に、松村理兵衛ら三代約一〇〇年の歳月をかけて、田島村（現下伊那郡上片桐）に立派な石堤が造られているが、当村内にはそのような石堤の存在は確認されていない。

さらに、砂利堤の構造については宝暦時代（一七五〇～一七六四）の文書の中に「田畑村地先開い堤馬路み」という表現があり、時代はずつと後になるが安政六年（一八五九）の南蔵村「定式仕越御普請帳」の中に次のように記されている。

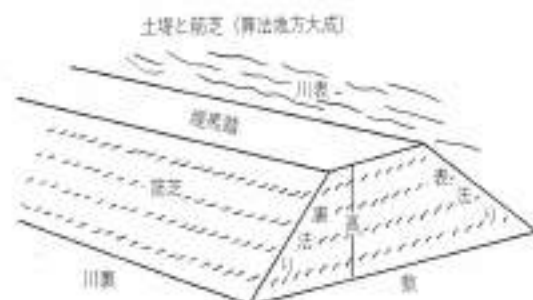
を並べて砂利の崩れ落ちるのを防ぐようにする、粗梁羽口にしていく。（図4-43）砂利堤の大きさは場所によって異なり、高さ四尺、馬路四尺程度の小さなものもあり、明治になってからの記録であるが、高さ二間、馬路二間という大きな砂利堤が造られた（種子集）例もある。

川除け堤の根固めには大石・蛇籠（当地ではほとんど藤籠である）、杵類等が用いられている。蛇籠による根固めのための使用は根籠、敷籠などと呼ばれているが当地での利用は少なく、杵類が主要な根固めの工法として多く使われている。このうち沈み杵は通常縦、横、高さとも五・六尺の方形の杵で、丘で組み立てて必要な場所に引き入れ、石を入れて沈めるという方法で設置されている。（図4-45）続き杵はこれを連続させたもので、これも多く使われているが享保一四年（一七二九）に一〇〇間の長さの続き杵を設置した記録もある。さらに、江戸時代後期から明治にかけて根固め水制目的を兼ねた護岸工法として合掌杵が多く使われるようになっていく。

川除け堤の出しとしては、石出し、籠出し、杵出し等（図4-44）が用いられて、川除け堤の保護を行なっている。

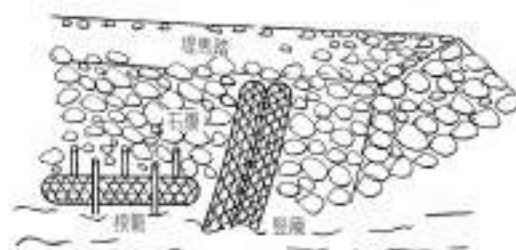
水制工の工法としては、乱杭・壘半類・合掌杵等（図4-45）が用いられている。水制工として大切な壘半類は武田信玄の発明といわれており、甲州では早くから用いられているが、享保（一七一六～一七三六）のころから各地に広まったといわれている。（古島敏雄『近世日本農業の構造』）甲州に近い郷土では比較的早い時期から使われたものと考えられる。その使用始めの時期は判然としないが、宝永（一七〇四～一七一一）のころからの川除け文書に牛・笏牛・壘半・大壘半等の文字が多く出て来ており、盛んに利用されていることがわかる。

川除堤



土堤の両で川に面した側を川表、反対側を川裏、頂面を堤馬路、基盤を敷、斜面を法(のり)と呼ぶ。藁芝は法面を強化するため法面1代に1通りずつ藁を入れたものである。水勢のおだやかな河川の川除堤に用いた。

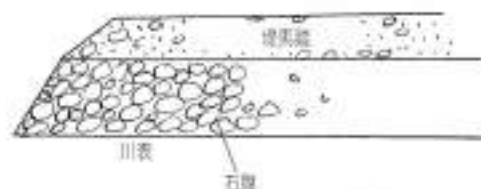
石堤と蛇籠・根籠 (算込地方大成)



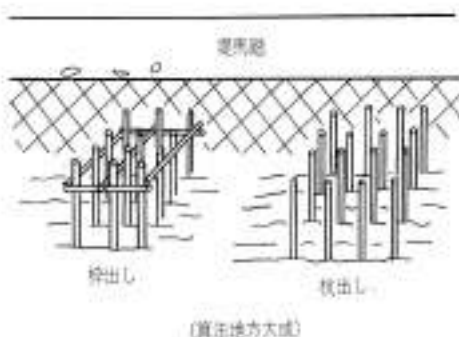
石堤の両で堤根が洗われそうな所には根籠を入れ水勢の強い川表には蛇籠が置かれた。蛇籠は材料によって竹籠・藁籠・藤籠等があった。当地方はほとんど藤籠であった。

砂利堤は砂利を堤状に積み上げたもので、特に川表法面に石を並べて面壁を貯ぐようにした石積付けもあった。当地方の川除堤はほとんど砂利堤であった。

砂利堤 (石積付け)

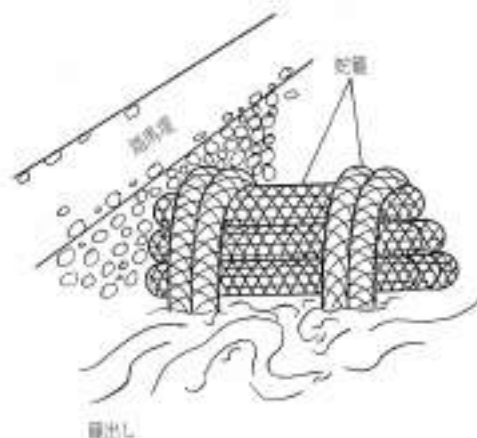


出し類



(算込地方大成)

比較的水勢の強い淀川等に用いる水制工で、堤根から杭を数列河心に向けて打ち込んでゆく。その杭に横木を通して枠にすれば枠出しとなる。



籠出し

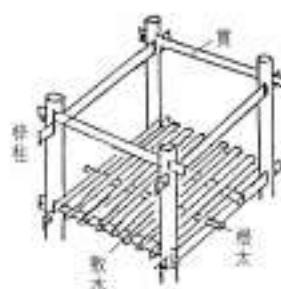
石川、柳川など水勢の強いところの水制工法として用いた。地形及び水勢により蛇籠の量や出しの形状も異なる。(算込地方大成)

図4-44 江戸時代水防施設の川除堤と出し類 (中里文書より)

第2節 水との関わり

杵類

流杵（算法地方大成より）



流杵 六尺立方くらいの杵で右図のように石を詰めて沈め河床を固めるために使う。水の深い所では丘で組み立て水中に出し一定の場所に繋ぎ石を入れて沈める。

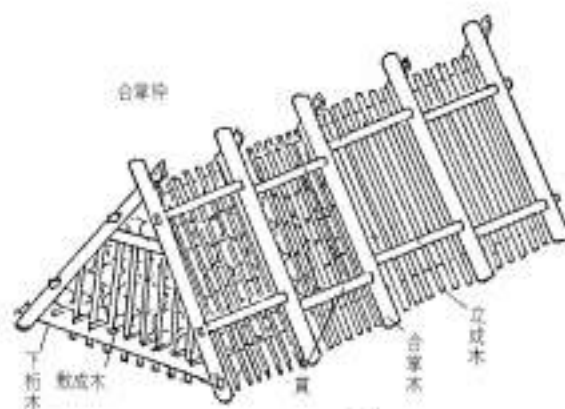
越杵（算法地方大成より）



越杵は流杵を連続させたもので当地でも20間〜30間と続けたものがあつてはなかつた。

合掌杵は圍岸、水利、堀ノ切りなどに使われ、当地方でも江戸時代後期からかなり用いられ、北郷邸ノ木前には多量に埋没していたと報告されている。

合掌杵



牛類

壺牛（算法地方大成）



壺牛には大横木長さ5間、中(同4間)があり、荒川で堤や出しなどに本流がつきあたり戻り難いようなとき牛類を横面に据えたり、あるいは川のノ切り等に用いられる。其牛・壺牛等は用水の堰き込みなど、壺牛より水勢の強いところに使われた。

筒牛（算法地方大成）



蓋牛（算法地方大成）

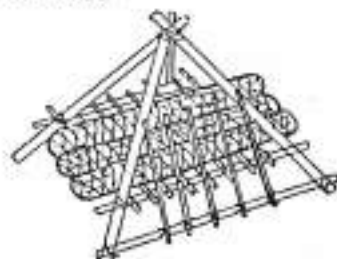


図4-45 水防施設としての杵類と牛類（中屋文書より）

2 洪水時の対応

川筋の村々大水出候節は昼夜を限らず近村の者まで出合い、堤切れ申さざるよう仕るべく候。若し危く相見え候場所最寄りの村々より縄・俵・株木・簀持・草束等こい申すべく候。勿論堤にこれ有る竹木・芝草・藁・萱等刈り取り申す間敷く候事。

（大和手文書）

これは、「五人組手形の手」の一条であつて、洪水時の農民の心得と応急対策が説かれている。幕府から説かれるまでもなく大切な土地を守るため、農民は洪水の際は昼夜をわかつた監視をしており、危険が迫れば村中総出で、時には隣村の人まで応援を頼み、空俵や簀、縄等の材料を持ってかけ集まり、村役人の指導のもとに堤が切れないように必死に水と闘つたものと思われる。また、平常時の注意として堤防がゆるまぬように、そこに生えている藁や萱等の草は刈り取らないようにしていた。

これでも洪水の力を防ぐことができずに堤防が切れて田地が流されることが多い。こんな場合には村から御役所に対して早速、報告書が出された。

書付けを以て御役所へ申し上げ候

宝前ノ木下

一 宝前拾五組 宝曆十二年午御普請

一 寶内宝前三五組の内

一 宝前拾四組 明和三年戌年成し下され候御普請

一 宝前六組 宝曆十二年

一 中聖牛六組

一 宝前十五間の内

一 梓 五間 明和三年戌年

一 同 十組

一 同 十組

一 同 十組 宝曆十二年

一 橋下 同新

右は先月十五日より度々雨降り続き、別けて当五日の夜より大雨、天流川、水仕り川、瀬川等より間々成し下され候川除け御普請流仕り候分此の如くに御座候間御注進申し上げ候。これに依り、捨て置候ては本瀬付け寄り田方欠け崩れ百姓困窮仕り候。御普請を以て右瀬所御普請仰せ付けられ下され置候様願ひ上げ奉り候以上。

明和五戊子五月

名主 三郎右衛門

組頭 武口衛門

百姓代 長次郎

飯島御役所

（北陸区有文書）

このように、洪水の被害は村役人によって御役所の方へ速やかに報告される。特にかつて幕府入用を以て普請をした所（これを御普請所という）が被害を受けた場合は、速やかに御入用を以て再度の御普請が行なわれるよう要望している。

当時農民は役所あての文書の中で、水田のことを御田地と呼んでいる場合が多い。水田は自分の土地であるよりは領主の土地であるという觀念が強い。これは水田からの収穫はほとんどすべて年貢として出さなければならぬ実態を考えれば当然のことであるかも知れないが、同時に幕府や領主のものであるから水田に対する川除け、修復は御入用でお願いしたいという意味が含まれているのである。

農民にとっては先に述べたような点があるにしても、水田は畑作分の貢租を負担してくれる土地であり、生産力が高く努力のこいがある水田が奪ばれたものであろう。このことは水田地帯の農民の方が、畑作地帯の農民より一般に豊かな生活を成し得た事実から理解できる。したがって、農民は御田地と考えながらも積極的に自普請によって用



図4-45 普請奉行所あての普請願（玉璽軒文書）

水堰を造ったり川除け普請を行なっている。ただ、残念ながら収穫物の五割七割を年貢に吸い上げられ、諸役務の厳しい農民の生活にはほとんど余裕がなく、大きな工事をやり遂げる力は無かったのである。そこで、「百姓自力に及び難く」とか、「百姓自普請に成り難く」ということで、幕府の費用（御入用）による普請を強く要求することになるのである。

しかし、農民の要請に幕府や藩主がすぐに応じてくれない場合も多い。頻繁におこる洪水、たび重なる普請に応じきれないということであろう。「当春御普請奉行様御見分の上にも捨て置き難き場所に見え候へ共少し分の願ひ方にては相保ち申す間敷く」として、再三にわたって願ひ書を提出しなければならなかったり、また、御普請をお願いしたところ役所から、「元禄以前の仕来り証書これ無く候ては御普請仰せ付けられず候」というように、前々からそこが御普請所であつてどのような形（幕府

の負担割合等）で普請が行われたか証書を出せ、それがなければ御入用での普請はできない、というような返答も帰ってきたのである。

水田に水をかけない状態で放置しておくことはできないので、農民たちは応急工事や間に合う場合はとりあえずの水路を造ったり、新たな川欠けが生じないよう「百姓附防普請にて欠け

口留め置き候」というような応急処置をして、御普請を命ぜられるのを待たねばならなかった。

3 川除け御普請とその負担

川除けが御普請になった場合、どのように普請が行われたのだろうか。一つの資料を見よう。次の例は「差し延べ難き急の緒い普請」の場合で、村役人が役所に出した見積書であるが、私たちに多くの事を知らせてくれる。

元文四年末用水堰込急普請積帳

有高五百貳拾五石五斗貳升 伊那郡田畑村

外百貳拾五石三斗八升四合 諸水引き

一黒川井伏せ越し樋 長さ六間 内法 横二尺五寸 高さ一尺

是は大泉川を伏せ越し太田大助知行所前庭村黒川用水を堰き込み用水引き取り、八年以前子の年松平九郎右衛門御預かりの御御普請これ有り候所。去る五月数度の渾水の節天竜川押し寄せ伏せ越し樋迄欠け込み残らず流失仕り候に、当仕付け用水外に引き取り節御座無く候に付き、前後押し理め掘り割り元の如く伏せ越し樋積り、但し、此の場所前々より横長拾四間の内大泉川床六間は板橋に仕立て候に付き有り来りの通り仕立て候積り。

松本 六本 長さ一丈三尺 長さ三寸 代水貳百八拾八文 但し一本水四拾八文

同本 五本 長さ三尺五寸 横土台 代水六拾文 但し一本水拾貳文

同本 二本 長さ五尺 前後横土台 代水百拾四文 但し一本水五拾七文

同板 三拾六枚 長さ三尺 幅一尺 敷板 代水九百文 但し一枚水貳拾五文

同板 六枚 長さ一丈 幅一尺 両側板 代水四百六拾八文 但し一枚水七拾八文

同板 三拾六枚 長さ二尺九寸 幅一尺厚二寸 甲蓋板代水一貫四拾四文 但し一枚水貳拾九文

同木 拾六本 長壹尺三寸 内矩柱 代水八拾六文 但し一本水五文

同木 四本 長二尺五寸 前後柱 代水四拾四文 但し一本拾壹文

四寸釘百六拾本 此釘目 皆打釘 代水四百八拾文 但し一本鉄拾五文

大工 三拾六人分 賃水 壹百九拾壹文三分 但し寄人永三拾七文七分

是は右切り組み五坪八合は甲義、板坪二坪は西側、板坪合七坪九合、寄坪につき四人ずつ

一梓種 延長八間 内法 高さ四尺 間場下四間ずつ二箇所

右同断脚入用

棟木 貳拾本 長五尺 梓柱 代水三百六拾文 但し一本拾八文

是は間に貳本ずつ八間と四本は二か所の送り本

同木 四拾貳本 長八尺 貫木 代水五百九拾貳文 但し一本拾四文壹分

是は間に五本ずつ八間貳本は送り二か所

同木 百九拾貳本 長五尺 阿蘭立成木 代水五百五拾六文八分 但し一本貳文九分

是は間に拾貳本ずつ拾六間分

同木 九拾八本 長七尺 横義成木 代水三百八拾貳文貳分 但し一本三文九分

是は間に貳拾貳本ずつ八間

そだ 貳拾四本 四尺打も通い 代水百五拾八文四分 但し一東六文六分

是は棟上阿蘭立成木に三束ずつ

大工八人 賃水三百壹文六分 但し寄人三拾七文七分

一掘り割り三拾三間 平均 深さ七尺上口一丈八尺

外拾三間深さ上口敷共に右同断 掘り堀め百姓役につきこれを引く

此の砂利 七拾坪五合 人足三百五拾貳人五分但し一坪五人

是は右同断大泉川切り込み石砂利両方へ一面に押し出し、田畑共に河原河
様に掘り成り候に付き種伏せ外百姓役前後押し堀め長さの内三拾三間の所は
野敷く押し堀め百姓自力に叫い難く候に付き、右場所計人足御扶持、下され
掘り割りの積り。尤もこの掘り割りの積り砂利種上阿蘭裏へ持ち運びの積
り。

一天竜川下 長さ五間 内法 高さ三尺 伏せ越し堀

右入用(省略)

一掘り割り 長さ百三拾間 平均 深さ五尺上口壹丈六尺

此の砂利 百九拾八坪六合 人足七百九拾四人四分 但し砂利取り寄坪四

人は右同断新用水路掘り割り去る五月満水の節迄は、天竜川幅移り田畑村

の能通り候につき用水樋口へ直ちに用水堰き上げ候所、同月八日より降り

続き候大水にて川面福島村字柳瀬と申す所より川向き田所に切り込み、そ

の後常水共福島村入川へ流れ古川高く成り用水一切上がり申さず候につ

き、福島村入り川除け用水樋口迄凡そ長さ三百間余の所掘り割り新堀用

水付け候積り、尤も右長さの内百三拾間の場所は大石にこれ有り百姓自力

に叫い難きに付き掘り割り人足御扶持下され、その余は百姓役にて掘り

割り仕り候積り。

右の寄せ

人足千五百四拾六人九分 御扶持米 此の米八石六斗壹合七勺

小以 米八石六斗壹合七勺 但し一人七合五勺宛

永拾五圓三百六拾五文壹分

(阿蘭文書)

これは、天竜井と黒川井の大泉川床下の伏せ越しの工法が記された

珍しいものであり、そのほかに、当時の川除け普請における幕府と農

民負担の状態、仕事の量、材料の値段等を知らせてくれる。この普請

で幕府の負担は一五四六八八分の人足の扶持米八石六斗一合七勺と、

材料費大工賃の永一五貫三六五文であるが、農民の負担はどの程度であったか計算してみると次のようになる。

御普請の場合における百姓役（農民の負担）は、享保一六年に改められ高一〇〇石につき五〇人となっており、この普請の場合田畑村の有高が五二五石五升二合であるから、二六三人分の百姓役が義務役である。ところが、この普請の見積り帳での百姓役はどうなっているだろうか。村役人による百姓役の見積りは行なわれてはいないが、伏せ樋の所の一三間の掘り割りと天竜川からの堰き込みの用水路三〇〇間のうち一七〇間を百姓役で行なう積りとしてゐる。この百姓役で引き受ける部分は他の部分より単位長さ当たりの作業量が少ない所が選ばれているが、もし一間当たりの作業量が半分としてもおよそ六〇〇人の労力が必要であり、仮に三分の一としても四〇〇人の労力が必要になる。このようにみると、この普請での百姓役は規定の百姓役の一・五、二倍の負担になっているのであって、実際にはこのような負担増が多かったと考えられる。さらに注意すべきことは総人足数である。御扶持米人足として見積られている人足数が一五四六人あり、百姓役が仮に五〇〇人と見積れば合わせて二〇四六六人の人足が必要となる。当時の田畑村の男の人足は一五〇〇人程度で、人足として働き得る人数は多く見積っても一〇〇〇人程度であったと考えられるから、一人当たり二〇〜二一日ほど人足に出なければならなかったと考えられる。しかも、この人足は「惣人足は申すに及ばず村役人足共に自今未明に御普請所に廻り出で、役人差図の通り極く遅く迄相詰め、働かざる人出さざる様に致すべき事」（『在々御普請定法』門屋文書）というように長時間の重労働である。普請は通常農閑期に行なわれるが、この普請では水害による急の普請であって、農閑期でもやらなければならぬ普請であった。このような農閑期の普請もかなりあり農作業への影響は大き

く、水との闘いは農民にとって大きな負担であった。

御普請における労力負担は以上のようなものであるが、この外に小木材や藤籠等の普請材料の負担も多い。このような労力や普請材料の地元負担をどうやって賄ったであろうか、その点について資料を見よう。用水路についてはその用水を用いる村々によって水組組合が作られていて共同して負担した所もあったようであるが、この付近の天竜川筋には水組組合が作られたという資料はない。しかし、次のような貞享三年（一六八六）の資料がある。

恐れ乍ら書付けを以て御訴訟申し上げ候御事

当所天竜川除けの儀先年麻坂中務少輔御代には筑輪村々山方里籍共に道具人足一同に仰せ付けられ、其の上普請所の儀は筑輪中川長く上下二手に遊ばされ、御奉行付け為され奉中に川堀成され下され候。夫に就き濁水の節も田地多く流れ申す候え共、御領所に罷り成り川除け村切りに仰せ付けられ候故、大部分の場所はその村斗りにて堰き兼お申し候て田地大分川欠けに罷り成り候。尤も御領所内も川除け場大分の所へは他村より道具人足共に仰せ付けられ下され候。然れ共中務御代のごとくに年々奉中の御普請ご座無く候故、田地荒れ申し候事（中略）

貞享三年寅ノ三月十八日

御奉行様

（玉理軒文書）

北殿村
南殿村
田畑村

これによると、筑輪領が脇坂氏の私領であった時代は領内天竜川筋を上下二つに分けて管理し、川除け普請の場合は筑輪領内の山方、里筋の村々共に道具（材料）、人足を一同に負担させていたことがわかり、元禄一二年（一六九六）に幕府領と太田領に分割支配を受けるよ

うになってからは、大普請の場合は特別、普通の場合は普請場所該当の村限りで負担するようになったことがわかり、川筋の村々の負担は非常に大きくなった。

板倉時代も脇坂時代と同様に箕輪領一体となって川除け普請の負担をしていたことは、次の資料でわかる。

御領主親會頼得様

天竜川川除け御普請仰せ付けられ候儀御割り付け覚え

一 籠 三拾五本 小河内 一 籠 四拾貳本 久保

一 籠 九拾四本 杭 百貳拾八本

一 籠 貳拾八本 福与 一 籠 九拾本 松島

一 籠 八拾四本 杭 貳百七拾本

一 籠 貳拾七本 下寺 籠 貳百八拾本

杭 八拾三本 杭 六百六拾五本

右割り付けの通り村々より受け取り致すべく候

三月一日

鈴木官兵衛

殿村庄屋中

(大森館文書)

幕府領になってからも、先の資料にあったように大工事の場合には、他村にも分担させたことは次の資料によってわかる。それは、「山方へ人足御割り成され候節に人足扶持米相渡し候帳面並びに御役人様より御印形居り候帳面」とあり、次のように記されている。

箕輪領村々北殿村へ繰り出人足書付け覚え

一人足拾人 材料共 下古田村 此の扶持米五升 但し一人五合宛

一人足拾貳人 材料共 上古田村 此の扶持米六升 同断

(中略九か村迄)

一人足拾四人 材料共 大宮村 此の扶持米七升 同断

一人足貳拾人 材料共 大森村 此の扶持米壹斗 同断

人足合 百三拾九人 此の扶持米 六斗九升五合 但し一日五合宛

右の通り村々人足扶持米の儀其の村に入れ置き候間、扶持米請け取り候わば重ねて此の村々相渡しなるべく候。其の為書き付けして遣し申し候。以上

(重政四年) 戊辰四月

高谷太兵衛手代 大森小平次郎

山本 久内郎

北殿村名主

(北殿区有文書)

このように北殿村の災害に対し、山方の一三か村から人足及び材料を出させている。しかし、このような例は幕府領になってからは少なく、村切りの負担が多く、川沿いの村々の負担は大きくなった。

普請は普通、普請奉行やその配下の武士の監督によって行なわれるが江戸時代中期ごろからは一部に村請負とか、有力農民や町人による請負という形の普請制度が生まれている。次の資料は村請負の例である。

御普請村方請負証文の事

米貳石四斗六升貳合五勺

合 米六貫三百八拾六文七分

内米三拾九文 藤代 此の藤拾三房 但し志房につき三文ずつ

永七拾貳文九分松龜衆の代 此の龜衆九衆

米三百九拾文 大工賃 此の大工敷拾三人 但し志人につき八文惣分ずつ

米五貫八百八拾四文八分 人足賃 此の人足四百九拾四人分

米貳石四斗六升貳合五勺 村役人足御扶持米 此の人足四百九拾貳人

五分 但し志人につき拾貳文ずつ

但し志人につき拾貳文ずつ

但し志人につき拾貳文ずつ

總拾三房 村役

右は当村天竜川通り川除け並びに用水路御普請御積り通りを以て村請け仰せ

付けられ下され惣百姓とも得心の上御請負い仕り候。これに依り御請負り御仕
様候事し取り相違なく仕立て申すべく候。

一御普請は四月十五日より取り懸り五月十五日迄の内に仕立て、用水路並び
に川除け共に差支えこれ無き様に……(略)

一人足の儀は先格の通り村高百石百姓役無賃にて相勤め申すべき旨の
所、当年の儀百姓悉く困窮仕り当時扶養差し請り難儀致し申すに付き、其
の段御願ひ申し上げ候所御吟味の上村役人足寄人に米五合廻御扶持米下し
置かれ、其の余の足は寄人に賃永拾貳文ずつ下され……(略)

(中略)

享保十七年子四月

信州伊那郡田畑村

名主 五左衛門 勘

組頭 勘太 夫殿

年寄 庄左衛門 勘

百姓代 介九郎 勘

川除け御普請

御奉行様

(玉理軒文書)

この村請負普請の内容を見ると、御入用(幕府出資)の額が米二石
四斗六升余と永六貫三八六文余だけで小額の普請である。しかし、人
足は村役四九二人五分、賃人足四九四人合せて九八六人五分と多
く、しかも四月一日より五月一日の間という農繁期にもかかわら
ず、これを村請負という形で普請をしようというのである。

なぜこのように村請負にしたのか、それについて考えると、村請負
の方が村役の材料、人足の負担に多少の融通があったのではないかと
いうこと、もう一点は前年の享保一六年(一七三二)に大水害と大旱
損風損を被っており、当面の衣食に事欠き、願ひ出て村役人足にも一
日五合の扶持米を支給されることになったことから、多分に窮民救済

の意味があったためではなからうか。普請は一般に農民の大きな負担
であるが、村役人足まで扶持米が給されれば飢饉のような時には救済
土木事業となったことがわかる。

次に、有力農民の普請請負の例を見よう。

覚

一黒川井伏せ越し形か所 但し長さ拾貳間 高五尺

右は代金五両にて我等請過(負)い、来る三月中に御割り築き立て共に

御仕立て御渡し申すべく、尤も木品の義は其元にて御出し成され、則ち
受け取り組み入れ渡し申すべく、若し目論見と相違仕り候わば御返図請け
直し致し申すべく候。以上

安永八亥二月

田畑村 請過 甚五郎 勘

久左衛門 勘

久米 勘

村 勘太 夫殿

源右衛門 勘

(鎌倉文書)

これは請負人から村役人に当てた請状である。この外にも享保時代
の他村の荒地地起き廻り普請の請負関係資料や宝暦四年(一七五四)
の入札による請負状もあり、かなり古い時代から普請の請負が一部に
行われたようである。

次に、川除けあるいは用水普請等に使われる資材等の負担について
見ると、御普請に必要な諸材料のうち、大きな木材や籠等は御入用
でまかなわれた。木材の細いもの・藤・粗朶等は一買一回り上げも行
なわれたが百姓役としての負担が多く、それがしだいに増加した。「御
普請御入用木方・藤籠・其の他百姓役に仕り候品等委細御吟味廻遊はさ

れ、應龍の儀は只今までは御買ひ揚げに成り候得共、此の上藤龍半分、末口三寸九分以下の木品百姓役に勤め候様に仰せ付けられ候得共、違つて御訴訟申し上げ候訳、今般仕来たり候通り藤龍、木品御買ひ上げ願ひ奉り候様に則ち書付け差し上げ申し候」(北殿区有文書)というように、寛保二年(一七四二)、百姓役の軽減を訴えざるを得なくなっている。ここに寛政八年(一七九六)の南殿村天竜川用水堀き上げ普請における、村役負担の状況を掲げると次のようである。

天竜川用水堀き上げ普請における材料人足とその負担			
松木	五拾壹本	但し 長さ貳間 末口五寸	代木壹貫百貳拾文
御入用			
松木	三百貳本	但し 長さ八寸 末口四寸	代木貳貫七百拾八文
御入用			
松木	千三百五拾九本但し	長さ六尺 末口二寸	百姓役
松木	四百本	但し 長さ七尺 末口二寸	
藤	百捌		
大工	五拾人	賃木壹貫貳百五拾文	御入用
人足	百五拾壹人分		百姓役
御入用			
四拾八人三分		御扶持米人足	

さらに、文政年間(一八一八—一三〇)から幕府は御普請入用金を二割引にして下げ渡すという方針を打ち出している。そのため、普請のたびごと村入用がかさみ困窮がひどく、天保一五年(一八四四)には近村の村々九か村が相談して、御入用二割引を止めて元にもどして欲しいと願ひ書を出している。(北殿区有文書)しかし、御役所では御普請入用金二割引ということは普請の村全部のことであるから、お前たちの村だけ願ひを聞き入れるわけにはいかないと却下されてしまった。このようにして御普請における農民の負担はしだいに増加している。

4 普請の頻度

このような御普請がどのくらい行われたのだろうか。北殿村区有文書によって同村の元文から江戸時代末までの普請の記録をまとめて掲げると表4-16のようである。

また、「田畑村川除用水堀御普請の記録」「天竜川大泉川従前川除御普請仕来帳」(門屋文書)によって元禄・元文年間(一六八八—一七四二)約五〇年間の普請の記録は次のようである。

元禄元年(一〇年)	板倉頼得様代 一回御普請	
元禄一一年(一〇年)	御普請係し	
享保元年	乾金 九圓壹分銀拾三匁(入用)一回	天竜川・大泉川
享保二年	乾金 拾三圓銀四匁八分	天竜川・大泉川
享保三年	乾金 九圓水貳拾壹文	
享保四年	乾金 貳拾八圓水貳百三十三分	
享保五年	乾金 貳拾八圓銀九百三十三分	
享保六年	新金 貳拾壹圓貳分貳式文五分	天竜川
享保七年	新金 貳拾壹圓水貳百貳拾壹文五分	
享保九年	新金 貳圓壹分水百貳拾三文	
享保一四年	新金 五圓三分水百拾文米五石壹斗	
享保一六年	新金 三圓水八拾七文三分	
享保一七年	新金 拾壹圓水百拾五文八分米貳石四斗六升三合三勺	
元文二年	新金 拾七圓水五拾文米壹石八斗八升	
元文三年	新金 七圓三分水五拾六文八分	

二つの資料から江戸時代は非常に普請の回数が多いことがわかる。年によって普請の大小は異なるけれども、災害の多いときには毎年普請が行われている。

北殿村普請の記録によると、文化期以降(一八〇五—)定式という文

表4-16 北殿村御普請一覽表(元文・江戸時代末)

元文 三(二七三八) 川除け	天明 四(二七八四) 天竜川川除け	寛政 五(二七九三) 天竜川川除け
" 五(二七四〇) 瀬田往還	" 五(二七八五) "	" 八(二七九六) 天竜川用水
明和 三(二七六六) 川除け	" 六(二七八六) "	" 九(二七九七) 黒川通
安永 三(二七七四) "	" 九(二七八九) "	" 一〇(二七九八) 川除け
" 七(二七七八) 天竜川川除け	寛政 二(二七九〇) "	" 一二(二八〇〇) 天竜川
" 九(二七八〇) "	" 四(二七九二) "	享和 元(二八〇二) 黒川通
文化 二(二八〇五) 天竜川	文政 三(二八二〇) 用水路及定式	天保 一(二八四〇) 天竜川通
" 四(二八〇七) 天竜川及用水路	" 四(二八二二) 天竜川通	" 二(二八四二) "
" 五(二八〇八) 天竜川及定式	" 五(二八二二) "	" 一四(二八四三) "
" 六(二八〇九) "	" 六(二八二三) "	嘉永 四(二八五二) "
" 八(二八一) "	" 七(二八二四) "	安政 二(二八五五) "
" 九(二八一) 天竜川	" 一〇(二八二七) "	" 三(二八五六) "
" 一〇(二八二三) "	" 一一(二八二八) "	" 六(二八五九) "
" 一一(二八二四) "	" 一二(二八二九) "	文久 元(二八六一) "
" 一二(二八二五) "	天保 二(二八三二) "	計 三(二八六三) 定式
" 一三(二八二六) "	" 三(二八三三) "	五二回
" 一四(二八二七) "	" 七(二八三六) "	
文政 二(二八一九) 定式	" 八(二八三七) "	

字が所々に記入されている。江戸時代の川除け普請には聖牛・杵類・合掌等が多く使われているが、その材料は松あるいは榎木で、それを結束するものは藤縄である。したがって、二・三年たてば腐朽するものが多く、そのまま放置すれば大きな災害を受ける危険がある。定式普請というのはそのような腐朽箇所を取替へ修繕を災害のない年にも行なうようになったものと思われる。脇坂、板倉の私領の時はこれが行なわれていたが、幕府領になってから途絶え、それが再び復活したようである。これは水害防止のため大切なことであるが、川除け普請を毎年に行なわざるを得ないことは、当時の土木技術の段階から考えれば止むを得なかったであろうが、大変なことであったと考えられ

何分に仰せ付けらるべく候御事。

(大和手文書)

これは、五人組手形的一条であって、洪水等で荒地になったが復旧可能な所は御役所に届けて毎年春までに復旧し、どのくらい年貢が納められるか検査を受けます。若しこのような場所があるにも拘わらず放置しておいたら、何を仰せ付けられても不服を申しませんという、農民から幕府へ出した誓約である。もちろん、これは幕府の方針による誓約であるが、こんな誓約のあるなしに拘わらず復旧の出来る所は早急に復旧したいというのは農民自身の願いであり、可能な所は農民自身の手で復旧されている。次に田畑村、北殿村の年貢割付け状から

る。ここには百姓役や御扶持人足等が記入されていないが、当然ばく大な人足が投入されたと考えられる。このように、江戸時代の当地の農民にとっては水との闘いは、毎年のように血と汗を流し、骨身を削るような厳しい闘いであったといわねばならない。

④ 起き返り(水害地の復旧)

水荒れ場所起き返り申すべき分は御断り申し上げ、毎年春中に起こし立て、御改めを受け申すべく候。且つ又野地空地又は古川跡其の外新田畑に成るべき場所御座候とば、御注進申し上げ間敷致し候様仕るべく候。右の類これ有る所若しお路かに致し置き候とば

起き返りの例を見よう。

（千根屋文書）
当廿御年貢割り付けの事

一 高六百四拾八石式斗式合

田畑村

内 式石七斗六升六合 当廿切り添え高入れ

三斗四升七合 細方前々郷藏敷引き

内 四拾八石式斗七升式合 同川欠け引き

外 四拾九石八斗七升五合 田方当廿起き返り

六石三斗三升式合

同石砂入り引き

外 式石六升九合

田方当廿起き返り

残高五百九拾三石式斗五升式合

此の訳

百貳拾石七斗九升式合

本免田方

内 六拾石九斗三升四合

当廿起き返り

（以下略）

（門屋文書）

（千根屋文書）
当年御年貢割り付けの事

一 高九百八拾四石六斗五升五合

北殿村

此の訳 五百八石三斗七升六合

田方

百六拾石九斗四升五合七勺

前々川欠け川成り等引き

九拾五石五斗三升四合三勺

去已川欠け石入り引き

小以式百六拾石八升

残高 式百四拾六石式斗九升六合

取り米八拾五石七升四合

内訳

百五拾五石五斗五升四勺

四ツ一分五厘七毛取り

此の取り米六拾四石六斗四升五合

即起き返り

三拾七石八斗六升八合三勺

此の取り米九石八斗四升六合

二ツ六分

五拾石九斗五升七合三勺

同起き返り

此の取り米拾石五斗八升三合

二ツ取り

（以下略）

（千根屋文書）

この二例は農民の努力による「起き返り」の例と思われる、かなり大規模に川欠け地、石砂入り地の復旧が行なわれているが、一般には起き返りは容易には進まない。それは、洪水で流れ込んだ土砂を取り除くという作業が並大抵の努力ではできなかったということ、普請の人足や諸役（伝馬役・助郷役等）に狩り出され、日常の農作業や生活に追われて復旧の仕事にはなかなか手がまわらなかったと思われる。さらに、苦勞して土砂を取り除いて稲を作っても、すぐに高率の年貢を取られるとすれば農民の意欲も減退せざるを得ない。次の資料はこのことを示しているようである。

覚え

一 高拾六石七斗六升 此の反別町老反六畝

此の訳

高三石五斗式升七合 此の反別式反四畝廿歩

当年年起き候分 当秋より御年貢上納仕るべく候。

高三石式斗五升 此の反別式反式畝

当一か年御下御免下され候わば式年目より御年貢上納仕り候。

砂深さ平均三寸より六寸迄

高二石七斗九升 此の反別式反歩

当三子丑寅三か年御下御免下され候わば四年目より御年貢上納仕り候。

砂深さ平均五寸より一尺迄

高三石六斗 此の反別式反五畝

当三子辰丑五か年御下御免下され候わば六年目より御年貢上納仕り候。

砂深さ平均一尺より二尺迄

右は、当村御田地去る亥五月大満水故砂入り荒地に罷り成り、百姓自力に及び難く御座候につき御入用を以て御取り下され候様に願ひ上げ奉り候処、御下御免下され候間、百姓自力を以て取り除き申す可き旨仰せ渡され候に付き、此の度日并持高深淺等、人別に地面相改め、書面の通り願ひ奉り候。御慈悲を以て願ひの通り御免下され候わば、精出し取り除き前々の通り田地に仕立て御年貢上納仕る可く候。以上

享保十七年子正月

信州伊豆郡北殿村

名主 新五兵衛

組頭 治郎右衛門

百姓代 又左衛門

飯島御役所

(以下略)

(北殿区有文書)

このように、農民はひどい石砂入りに対しては幕府に費用（扶持米）を出してもらって砂の取り除きをしたいと願ひ出る。この北殿村の場合は扶持米の代りに御下年季（開拓をした場合一定期間、年貢を免除すること）をやるから百姓自力で復旧せよと言ひ渡され、それに基づいて村役人連名でこれだけの御下年季を御許し下さるなら精を出して復旧をしますということになった。この結果要求どおりの御下年季が認められたかどうか資料が無く不明だが、このような形にしなければ起き返りは容易に達まなかったと考えられる。御下年季を認められた場合の起き返り地はその間だけ無税地になるが、一般の起き返り地は新たに土地の位付けと貢租率を決めてもらって年貢を納めることになる。その貢租率は先に見た北殿村の起き返り田が高い方で二ツ六分、低い方で二ツ（二割）であるように、かなり低く抑えざるを得なかった。また、実際に満水によって石砂入りになった水田は形の上で復旧しても熟田なみの収量を上げるようになるには数年、あるいはそれ以上の

年月を要したようである。

また、起き返しに当たって、自力による起き返しの都合がつかず、他の有力農民に請負ってもらっている例がある。

相定め申す連判證文の事

我等共持分堀上中下反歩御水被通り手前にて起き返し申す事成る間敷きに付き、貴殿へ頼み井水を掘り田方起き返し申すべく契約仕り申す所実正也。右割合の備田方出来次第起き返年と貳年は其元へ手間代御取り罷り成り、三年目の春立ち合ひ出来申し候田方七分通り地主へ取り三分入用代に貴殿へ渡し申すべく候。中略。右田地流れ跡につき外より精細御座無く候。若し六か敷き儀申す者候わば連判中間にて急度堀明け御苦分かけ申す間敷く候。(以下略)

享保十五庚戌三月十日

北殿村流れ跡持主諸人

庄右衛門

兵五兵衛

(九人略)

田畑村

名主 次郎右衛門

勘太夫殿

(玉理軒文書)

この例は、北殿村の流れ跡持主一名が自力では起き返しが出来なからとして、田畑村勘太夫に起き返しを頼み、その代償として起き返り一、二年目の収量は全量差し出し、三年目の春に立ち合って起き返った田方の七分を元の地主が取り、三分を勘太夫に譲すことを定めている。当時の水害地の復旧が貧しい農民にとっていかに困難であったかを知ることができる。

例 洪水によって起こった争論

江戸時代の天竜川は洪水のたびに本瀬の位置が広い氾濫原の中を右に左に移動することが多かった。そのため川筋を村境にするというこ

とでなく、別に杭（分杭と呼んだ）を打って境を定めていた所が多い。したがって川筋が変わると川向うに自村の土地が残ったり、川のこちらに河岸の村の土地が残ったりするばかりでなく、川筋が自村の田地に寄れば洪水のときの川欠けや石砂入りが多くなる心配があり、向うに離れば水のひけた後用水の堰き込みに長い用水路を造る大工事が必要になる。さらに、困ることは隣村や河岸の村との間に村境の争いが起こることであった。

元文三年（一七三三）天竜川の洪水によって神子柴村と上牧村の間の大境の分杭が二本とも流失した。上牧村は早速芟牛を入れて川除け工事を行なったが、その川除け工事の場所が神子柴地区内であるとして、残らずそれを取り除くよう神子柴村から上牧村へ申し入れをした。ところが上牧村は川除けをした場所は自分の地内であるばかりでなく村境は川除け場所より遙かに西であるとして、境争論となり互いに役所へ訴状を提出した。役所においては、それぞれ返答書と相給図を差し出させ、相互の主張を聞いて審理を始めた。しかし、その審理中、大出村・狐島村・八ッ手村・福与村等の村役人が争論に立ち入り、その扱いによって元文四年三月熱談内済という形でこの争論は解決し、その説文が取り替わされている。それは次のようである。

一上牧村より入り入れ養牛川除け流れに順むす真一文字に渡し候につき、水懐込み候て畢竟自分の為になり候へ、且つは神子柴村の邪魔にも成り候間、此の度牛先引き下げ候得ば四五間引き込み候得共水掛けの順も能く候に付き、其の積りに致し、右牛先より西へ式拾五間の所両村地境に極め、北方の御分木建て所に相定め候南方の御分木これ又右境通り南へ百八十間寄せ候て建て所に相定め候事。

（中二条略）

一両村立ち会い建て来たり候地境御分木式此の度相極め候場所の儀、以来

洪水にて流失の節は又争論これ有る事に候得ば、此の度は右御分木へ方向間数記し置き候。神子柴村地内城北の堀東口に印の木を建て、此の木より磁石を懸え候得ば此の度定め候南方の御分木へ實の九分に当たり百三拾五間四尺これ有り候。又上牧村地内一坂洞南富士山西北の山岸に印木を建て、是より右御分木へ成の巻分に相当て三百四拾八間半これ有り候。則ち右南方の御分木より此の度定め候北方の御分木へ北の七分に當て百八拾二間これ有り候。以後御分木流失の節は右間数方向を以て相違無く双方立ち合い相立て申すべきこと。（図4-46）

（堀ノ井大東文書）

こうして、両村納得の上で新規の境界分杭を建てる場所二か所を決定し、その分杭を建てる場所が以後の洪水で押し流されて不明になっても、正確に確定できるよう、両岸の段丘上に基準点を設けて印木を立て、そこから分杭までの方向と間数を記録しておくという賢明な方法を採用した。神子柴側の基準点としては「内城」の北堀東口が選ばれ、そこに印木が立てられた。

田畑村と野底村との間にも境界争いが起こり、それは神子柴・上牧・福島の三か村も関連し長い争いになった。その争いは享保一六年（一七三二）の洪水の節分杭の一部が流失したときに始まるが、このときは野底川が押し出し、野底川口付近の野底・上牧両村の分杭と、大境（幕所領と高遠領の境）の二本の分杭のうち一本の分杭が折損したのみで大きな争いにならなかったが、元文二年（一七三七）二月の洪水の節残りの一本の分杭が流失してしまった。そのため関係村々立ち合いで新しい分杭の建て直しが考えられたが、それぞれの意思と意見の対立があつて進まず、分杭のことはそのままにして自村の田地を保護する川除けのみが進められた。しかし、当時の状況では川除け工事としての牛や杵を入れる場所が問題であつて、一方の川除けの場所を

前に出して強く造れば、増水の時対岸の村の方へ水を追いやることになり、「田畑村より、野底地内へ踏み込み川除け乱杭これを打ち、上牧村田地の隙にも相成り候につき乱杭取り払う」ようにとか、「野底上牧両村より川除け仕出し候故田畑村田地に所及び候仕出し候川除け取り払うよう」に、というような争いになり代官所に持ち込まれている。この争いの過程で、田畑村で造った御入用普請による古牛一組と、寛保三年（一七四三）の新牛一組が同年一〇月二五日の晩、福島村の人たちによって切り崩されるという事件が起き、田畑村から早速飯島役所に御注進に及んだ。この争いの結果は明らかでないが決定的な結論がでなかったようで、後に再び大きな争いになった。

宝暦七年（一七五七）五月天竜川が満水になり分杭等悉く押し流され、高遠領側では大勢の寄せ人足で大川除け工事が行なわれたが、川筋は享保一六年（一七三二）の洪水のとき東の方へ寄ったままであった。

そのため野底村では川の西に野底村の荒地が残っていると主張し、その土地を田畑村で追々作付けをしており、田畑村の川除け乱杭が野底村の地内に踏み込んでいた。これは、上牧村の田地にも支障があるとして、ついに宝暦八年（一七五八）三月幕府奉行所へ訴え出るという大きな争いになった。その結果この事件は島居伊賀守の担当によって評定されることになり、五月には田畑村から相手村の言い分についての詳しい反論の返答書が出されており、翌年三月には奥山佐内・矢嶋藤八の二人が検使役として現地の検分に来た。こうして約三年半余の評定の後、宝暦十一年（一七六〇）二月「野底村上牧村と田畑神子柴両村川除け論裁許の事」として裁断が下された。その裁許状によると、過去の検地帳から土地を割り出して野底村の主張はほとんど退けられ、大境については裁許状絵図面によって示され（図4-47）その裏書の末尾の方に次のように記されている。

「田畑村弁財天社木松の木より已五分へ九拾三間毫尺に当たる上牧神子柴両村有りたる境より、其の六分野底田畑両村境野底村地内馬路み中央へ引き付け定め杭これを打ち、夫より卯の七分五厘馬路野底村有りたる境へ見渡しこれ又定め杭これを打つ。東南は野底上牧両村、西北は田畑神子柴両村境に定め……（以下略）」

（同屋文書）

これに基づいて宝暦十二年（一七六二）に田畑村野底村双方が「取り替わし申す一札の事」という証文を取り交わしている。度重なる境界争いのため、以後いつでも正確に境が求められるように、神子柴、上牧の境界争いと同時に同様に境界付近がよく見通せる場所に基準点を設けることになり、それを弁天ヶ崎にある弁財天社の社木に定めたのであって、その社木からの方向と間敷を記録しておいたのである。現在弁財天社は田畑神社に合祀されており、基準となった社木は既に無いが、昭和戦後に村境を定めるとき古文書に基づいて社木を基準にして境界点を割り出したという、境杭の方向を示す矢印を刻んだ石がそこに埋まっているという。

このようにして境争論には大きな裁断が下されたのであるが、明和二年（一七六五）の洪水で川除けが流失したので、裁許の絵図面に合う川除けをしたいと田畑村から野底村に了解を求めた。ところが、その返事がなく野底村の方で勝手に絵図面に書いた川除けを行ない、再び争論になった。田畑村では飯島役所に報告すると共に「第一裁許に背き其の上田畑村御田地に所に相成り甚だ以て迷惑仕り候間、恐れながら野底村百姓中召し出され右の川除け残らず早速取り払い、相合う川除け急ぎ相仕立て候様御仁恵を以て仰せ付け下し置かれ候様願ひ上げ奉り候」という願書が高遠領御役人中あてに出されている。その結果である宝暦十一年の裁許が尊重され「去る寅年（宝暦十一年）

御普請仰せ付けられ候川除け場所へ新規に川除け仕立て候儀は、御代官所へ相願うべき旨仰せ渡され逐一承知費み奉り候」として、明和五年（一七六八）に關係村々連署の一札が評定所あてに出されている。

さらに、大事には至らなかったが幕末にも争論が起きており境争論は容易にあつたを絶たなかった。

洪水によって起きる境界争論は北殿村においても、対岸の福与村・福島村との間に何回もおきていた。残された古いものからみると、天竜川の川瀬の位置が変わり古川跡をめぐって、北殿村と鶴木村との間に宝暦年間（一七五二—一六四）に境争論となり、北殿村から松島御役所に対し訴状が出された。松島役所においては飯島役所の役人立ち合いのもとで、双方を呼び出して吟味をしたが双方の主張の対立が解けなかったらしく、江戸奉行所へ差し出す積りであると言ひ渡された。これを知って松島村・久保村・木下村・南殿村の村役人及び飯島郡宿の与左右衛門等五人が立ち入り、その五人の取り扱いによって境界が決定、和談が成立して宝暦六年（一七五六）「出入り内清取替わし証文の事」が取り交わされている。

安永六年（一七七七）には、再び北殿村と福与村との間に境争論が起きている。福与村から飯島役所に出された訴状の一部を左に掲げよう。

私共村方御高内宇下川原と唱え候場所、宝暦丑・寅（七・八）兩年の出水にて川欠けに難り成り追々川除け御普請御願ひ申し上げ、四、五年以來川向き直り安永三年御吟味の上起き返り仰せ付けられ御上納仕り来たり候所、当五月十五日補付け仕まい候後、同十九日当支配北殿村の者共大勢繰り出寄り寄御普請川除け並びに水除けとして植え置き候柳の木残らず切り流し、其の上稲草悉く踏み荒し候につき、私共隣り出、相とがめ候得共多勢に無勢故一向聞き入れ申さず、よんどころなく差し控え難り在り候。これに依り北殿村

名主又左衛門方へ右の趣相断り候所、以ての外なる挨拶に付き、止むを得ず此の度御願ひ申し上げ候。

（千相屋文書）

このよう訴えているが、これに対し北殿村から出された返答書の一部を掲げると次のようである。

右村御高内宇下川原と唱え候場所の由、四年已前より起き返りに付き上納候後申し上げ候得共、此の儀去る申年（宝永五年）迄田形もこれ無き場所起き返り仕り候など大なる偽りに御座候。右場所の儀は当村分にて宇下川木下と唱え御水帳並びに御検地調書持主相定まりこれ有る場所に御座候。去る申年御沢川通りへ乱杭砂利土手柳木植え立て候につき、去る二月福与村名主方へ此の方より申し遣わし候は、当村分御田地流れ跡川原へ水除け致し候段不埒成る致し方に候間、桃木抜き取り候様間三度使を以て申し遣わし候所、右村名主の返事仕り候は私ばかりにて挨拶も成り難く、追って此の方より返事仕るべき様相答え申し候。其の後八月に至り右村名主方より右場所の儀御村境目に懸り候場所につき、双方相談の上境相立て出入りが間敷く相成らざる様致したく候間、何分にも暫く相持ちくれ候様間度挨拶これ有り候間、当五月迄見合おせ罷り有り候得共桃木抜き取り申さず候に付き捨て置き難く、五月十九日右場所田形改め植え付け候積りにて村方の者参り申し候所、鶴ノ木の者共七、八人罷り出被是申し候得共、当村分に懸れ御座無き候場所に御座候間、昨等捨て田植え付け、其の上邪魔に相成り候儀、御木切り払い申し候。

（千相屋文書）

このように両村の主張は真つ向から対立しているが、この争論も奉行所において吟味中、隣村役人等が立ち入り、その扱いによって双方熟談の上で村境を取り調べ、安永九年（一七八〇）に境界を決定し、絵図が取り交わされている。（図4—48）

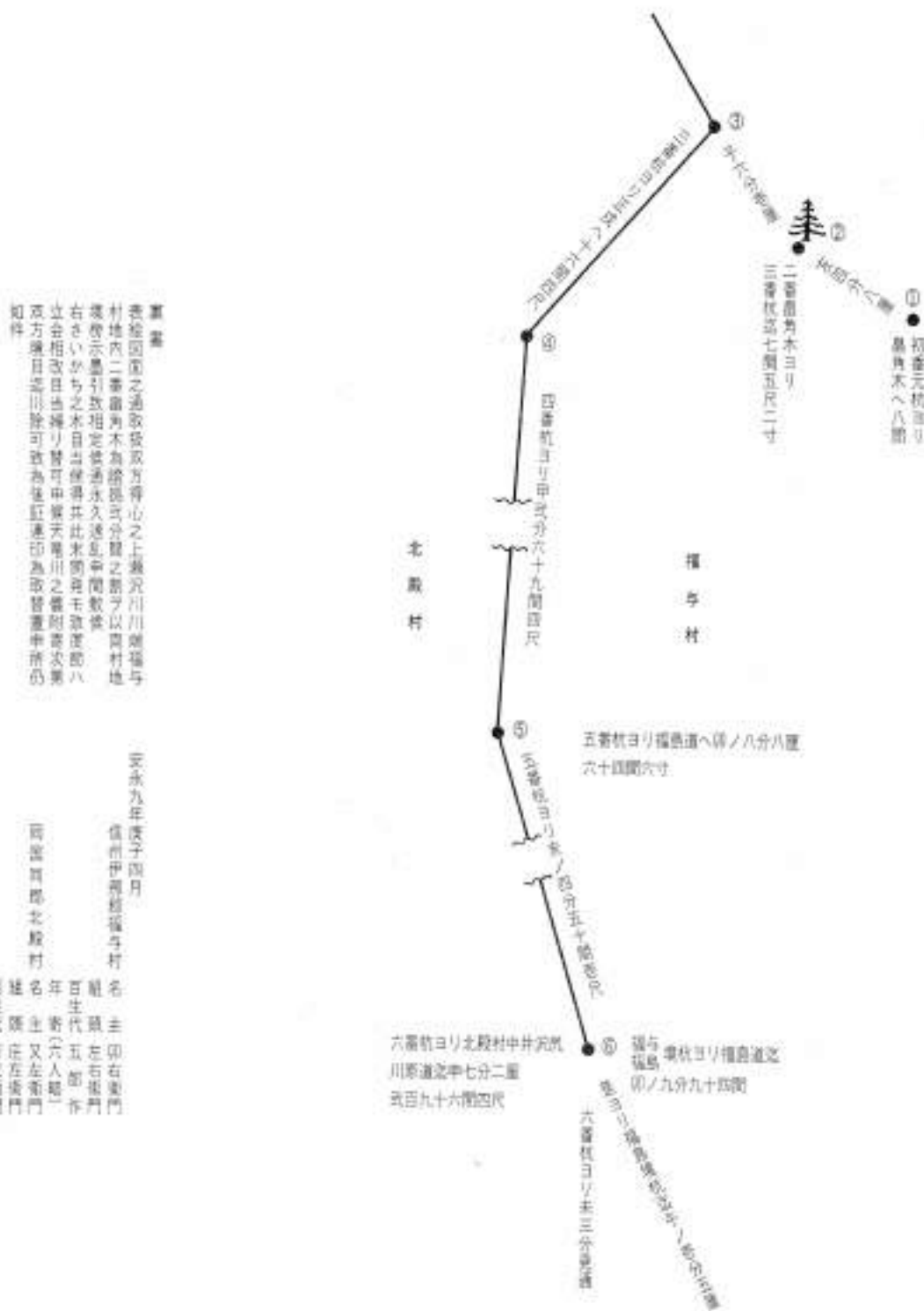


図4-40 北殿村・福与村境出入内済絵図(写)〈千代田文書〉

さらに、北殿区有文書によると文政二年（二八一九）には福島村との間に境争論が起き、松平丹波守の役人が出張して訴答両方をたまた上で田畑・福与・神子・三日町・木下村の名主の取り扱いによって境立てをした。ところが、文政十一年（二八二八）清水で古境杭が流失して再び争いとなり、福島村から北殿村を相手取り松本預り所へ訴え出た。松本預り所で吟味中再び先の五か村の名主が争いに立ち入り、双方に意見を加えて熟議内済ということになった。内済の趣意は次のようである。

一 川下老番杭は八尺東元杭の場所へ建て置き、両村境目に定め置き候。

一 武番杭は建て置き候杭より西へ六尺寄せ、尤も老番杭、三番杭へ見通し同村境目に定め置き候。

一 三番杭の儀は今般訴答にて最初見受け候處より、双方式間宛寄せ杭立ていたし西村境目に定め置き候。

一 川上四番杭は是迄打ち置き候杭より東南へ三間ほど寄せ、石積卵の場所へ杭立ていたし西村境目に定め置き候。

一 天竜川通以来川除け致し方は境目より双方式拾間宛寄せ候へ申すべく、尤も川瀬付け寄り水向き燕敷き村へは先方にて御川除け致す間敷く候。

前書の通り熟議内済致し候上は、因か所の標示杭双方御支配所共大切に相守り申すべく、右なる福島村より松本御役所へ差し上げ候願ひ書は右村にて御下げ願ひ候。右一件につき相互に以来御願ひが間敷儀致す間敷く候。これに依り訴答並びに扱い人一紙連印致し内済取り替わし候趣の如し。

文政十三年三月（以下略）

（北殿区有文書）

天保二年（二八三二）には、北殿村の川除け普請で堤防を築き新規に開墾したところが福与村の地内であるとして、福与村から奉行所へ訴え出て公事となっている。この訴訟でも訴答両方が呼び出されて吟

味が行なわれたが、裁断を受ける前に南小河内・南殿両村の年寄が争論に立ち入り取扱い人となって、双方に意見を加え念入りに争論の場所を取り調べ、結局、安永九年の絵図面に基づいて不分明になっている所を境立てすること、清口鑑定証文を取り交して結着している。

このように、対岸の村との境争論は何回も発生し、ときには奉行所まで達する大きな争論となり、村人の出費は大きなものであったと思われる。

二 明治以後における水との闘い

（一）災害の実態

明治一〇年代上伊那各村の有力農民によって組織された農談会の日誌の中に、「水害の恐るべく最も注意を要すべきことは、今また贅言を俟たずしてよく吾人の熟知するところなり。而して、未だ旧習を脱せぬ為勤めて土木を起すといえども一朝洪水あれば忽ち潰壊して其の害を被る。これまた其の宜しきを得ざるに他ならず」。『水害（防）止』は目下の急務にして一日も各自心得ざるべからざるものなるに、未だ平素中州を渡り取るの慣習なきは、これが媒介となりて水害をなす。又、山林を濫伐するときは土砂圧倒して水害をなす。これ水害を除くの点を知りて十全の方法を得ざるにより、例年水害を被るを常とせり、夫れ恐るべきことにあらずや」と述べており、明治になって水害防止は急務と考えられながら、現実には明治維新以来の森林乱伐が進み、土砂の流失が多くなって河川の不安定度が増し、水害はより頻繁に起こっておりその被害も大きくなっている。明治十七年は天竜川、大泉川とも洪水となり、南箕輪では明治以後における最大級の被害を被っている。その被害状況は次のようである。

堤防流失篇

○天竜川通り

北殿新地字島ノ木前一十手 百式拾間 従前分

字三日町 一沈枠 貳組 同断

一聖牛 四組

字日鏡田 一沈枠 三組

一聖牛 壹組

字建田 一砂利堤三拾間

一聖牛 七組

一沈枠 六組

字明盤 一沈枠 三組

一聖牛 壹組

南殿新地字城下 一聖牛 壹組

一沈枠 壹組

字大池 一聖牛 三組

一沈枠 壹組

田畑新地字沖川原 一沈枠 拾組

一沈枠 七組

神子榮新地 一砂利堤九拾間

一沈枠 八組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

一聖牛五組

大泉新地字下川原 一沈枠 貳組 従前分

一沈枠 四組

南殿新地字南田 一片枠 貳間 十六年度普請分

字朝田 一片枠 六間

田畑新地字現上 一沈枠 六組 従前分

一沈枠 三組

字機現中 一砂利堤一〇二間

一沈枠 二組

一沈枠 壹組

字機現下 一沈枠 壹組

字日影田 一片枠 貳間 十六年度普請分

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

一沈枠 貳組

上伊那郡長伊谷信成代理
同書記山本恭雄殿

上伊那郡南箕輪村
戸長 徳高孫三郎

(役場文書)

さらに、明治以降も災害、特に洪水発生のは度は江戸時代と大差なく、繰り返して被害を受けている。しかし、大正・昭和と進むにつれて水防技術及び施設がしだいに発達し、奥地林の植林も進んで河川が安定するようになり、被害は次第に減少して来ている。しかし、昭和の戦時体制下における森林の乱伐によって再び洪水の被害を増し、昭和二年の天竜川の洪水に際しては、北殿東地区に大浸水があり甚大な被害を受けた。昭和三六年の集中豪雨によるいわゆる三六災害は、上伊那郡下に極めて大きな被害をもたらした。南箕輪地域は集中豪雨地域からはずれたため被害が軽くて済んだのは幸いであったが、集中豪雨地域に入っていれば大被害はまぬがれなかったのではないかとと思われる。

二 明治以後の水害防止対策

1 明治初期の実態と水防の考え方

政府は、明治六年「河港道路修築規定」という大蔵省布達を出している。それには河川を幹川は一等、派川は二等、支川は三等とするなど河川の等級を定めること、工事は「河水の乱流を矯正し河身を良好に維持すること」、「河床の砂石堆積を浚渫する事、兩岸へ堤防を造築すること」等の方針を示している。しかし、これは江戸時代の川除け普請と大差なく、むしろ、住民への治水工事の義務付けをしたものであった。そのためか、引水して灌漑する「井掛りの村落は堤防川除け工事に關せず不公平の至りと云うべし」として、その川から引水し

ている村は川岸から離れている村も、川岸の村と一緒に組合を作り共にして水害を防止するよう勧告している。しかし、当地域においてはそれに該当するような条件がなく組合は作られなかったようである。

また、明治前期の水防技術についてみると、砂利堤、聖牛、梓類を中心としたもので、神頼中、合掌神の増加が目立つが、本格的な石堤は当地ではまだ現れず、江戸時代とあまり変わっていない。明治九年より同一八年に至る、南箕輪における川除け普請の実態を表示すれば表4-17のようであって、これによって当時の水防技術の段階を知ることができようであろう。

しかし、従来の水防の有り方に改善を加えようとする意識はしだいに芽生えてきている。当時の人たちが水害防止をどのように考えていたか前記農談会日誌に出てくる意見からこれを見よう。

「堤防を築造すと雖もまだ対岸相争い、相激するの弊害ありてこれを改めざれば完全の域には達するべからず。且つ望むらくは河身を定めて彼我の内に相軋なく、一致共同の方法を立てたならば必ず健全なる堤防を築造して永続すべきの良法と認む。」「これを改良するには他なし、治水土木会を開設することを希望す。……治水土木会は天竜川沿岸の村落を以て組織する見込みなり。」「堤防は改良したし、実在の習慣は其の仕様相違にして、一旦用うれば其の弊は毀損するも顧みず修むることなく実に遺憾となす所、夫れこれを改良するは治水土木会に如くなり。此の会の決議を以てせば定着其の方法の宜きを得べきものなりと信ず」とある。

河身が固定していないので、堤防築造その他の川除け工事に当たって、自村側の水防を強化すれば対岸に悪影響を与えるということ、対岸の村々の承認を必要としたこと、また、それをめぐって対岸の村と対立抗争をしたことは江戸時代を通じて繰返されてきたことである

するが如きは望まぬ。居常密に感覚する所あるなり。本村大泉川なり、僅かに地方税より補助する金を沿岸の地主にも分賦して、地先地先を各自に受（請）負いなさしめ堤防するに一人として雑木は用いざるなり、皆栗を用材とす。実に経済の点においてもまた大いに利益あるものなり。」「水害を予防するに容易に行なわれるは堤防に植樹するに如くならん。且つ対岸一致して中州を渡うの方法を行われば、第一番に結果を見らるべきものにして特に望むところなり。」「堤防に植樹するは賛成なり、かつ川除けに用うる材種は唐松に改良するに同意なり、而して、用材は皮を剥ぎて用うるが可なり、皮を存するときは朽れ易きものにして唐松といえども此の如くすること望む。」「

ここでは郡長の質問に答える形で述べており、主として川除け工事の用材の選定、堤防への植樹、中州を渡うことなどが話しに出ているが、石堤の築造についてはまだ話題にのぼっていない。

しかし、ここで注目すべきことは、治水の根本対策である雨水の急激な流出防止や、土砂の流失防止の措置について関心が高まってきたことである。政府は明治八年に堤防法案を提案しているが、その中で、「河川ハ降雨ノ量ニ因ツテ活動スルモノナリ、其ノ治理ノ法ニ於ケルモ毎川差異ナキヲ保タズ」と述べ、故に「予防ノ工ニ属スルモノ」として、

上流ノ樹木ニ草木ヲ繁茂セシムル事。

堤防ヲ山腹ニ設クル事。

堤防ヲ河床ニ築クコト。

以上雨水ノ河床ニ掃スルヲ連淡セシメ下流急激ノ因ヲ減ジ、併セテ砂土ノ流落河床地勢ノ害ヲ防グコト。

を挙げている。このようなことは、当時の有力農民の中にも充分意識されておられ、再び「農談会日誌」を見ると、「願うに昨年（明治一五

年）第三号の太政官布告を以て、国土保安の爲には民林と雖も伐木を禁ずること有るべしとあって、場所にもよるならんが、国土保安の大事件なればこれを禁ずるも時に当たりて差し支えなきや」との郡長の質問に対し、「該山の為彭瀝水害あると認むるときは、即ち国土保安に關する一大事なれば其地見分して、果してその爲に原因すとなれば一時禁ずるも差し支えなきものと信ず。」「第三号の公布は著に喜び居るものなり。」「国土保安の制を立てられたるは時世の然かしむるところか、今日よりその方法を立てておかざれば遂に覆うべからざるの時機到来して、其に臍を噛むも及ぶなきに至るべし、一日も早く実施せられ将来に水害を蒙らざらしめんことを望む」と述べている。これは乱伐の禁止、保安林の設定が中心のようであるが、明治中期以降になると広範囲に保安林の設定が進み、さらに、積極的な政府の奨励により盛んに植林が行なわれるようになるが、このような水害防止に対する考え方の進歩が、この植林を進める大きな要因になったと考えられ、事実として植林の普及と樹木の成長と共にしだいに洪水を少なくし、かつ、その被害を減少させたのである。

2 河川管理区分と水防施設

(1) 明治時代前期

明治六年の「河川道路修築規定」においては、「県官実地検査の上目録見解を以て官費せしめ、其の費用中官費幾分を支消すべし」とあって、大きな普請の場合は官費が支出されたものと考えられるが、河川修繕は地元負担が原則とされており、江戸時代よりもむしろ地元負担が多くなったが、ほぼ江戸時代の様式を踏襲していたものと考えられる。

明治八年、堤防法案が作られたことは既にみたが、その改正案で水害防止を「予防ノ工」と「防禦ノ工」に分け、予防の工として、次の

項目を挙げている。

○上流貯水ニ草木ヲ繁茂セシムルコト

○横渠ヲ山腹ニ設クルコト

○灌漑ヲ溪間ニ築クコト

○平原ニ至リ地ヲ達シテ灌漑ヲ開クコト

○河ノ流心ヲ矯メルコト

○河積ヲ速度ニ保ツコト

○河内ノ障害ヲ除キ、流降ヲホフス事

○放水ノ節度

これは、「地方ノ力ニ及ビ難キモノデアル為内務省ニ負荷（往國費負担）」とし、防御の工に属するものとして次のような項目を挙げている。

○沿水本支ノ堤防

○堤外前地ノ保護

○護岸ノ工

以上ノ水ノ地ヲ浸スラ防禦スル工ハ各地方庁ニ委任。さらに、明治九年の筑摩縣下開會議における「河流ヲ疏通スル法案答議」の第五条に、工事は大別して上下六款として次のように挙げられている。

一河川流ヲ矯正シ河身ヲ良好ニ維持スル事

一河床ノ堆積ヲ浚渫スルコト

一兩岸ハ堤防ヲ造築スル事

以上三件ハ果實地検査ノ上目録見解ヲ以テ案第セシメ、其ノ費用中官費幾分ヲ支消スベシ

一臨時ノ出水等ニテ衝突スル場所ハ速ヤカニ乱杭、蛇籠、大小壘等施設スベキコト

一臨時出水等其ノ他堤防敷設ニ属スルトキハ、速ヤカニ該川近傍ノ村市ニ於テ努力シ之ヲ防禦スベシ

一堤防敷設ノ場所ハ直チニ修繕スベキ事

以上三件ハ組合受持村々ニ於テ実地検査ノ上直チニ修築シ、水害ノ景況図面仕様概一同届出ズ可ク、其ノ費額ハ民費ノ事。但シ、非常ノ大水害ハ其ノ景實地検査ノ上幾分ノ官費ヲ支給スルコトアルベシ

これらによつて見ると、明治初期においては水害予防のため「予防ノ工」は国費が支出されるが、直接の水害防止のための「防禦ノ工」は地方税で、応急処置や小工事は民費（村費）で負担する原則が定められている。しかし、大工事で地方税や民力で実施困難なものは臨時国費で補助することになっている。

明治八年三月、筑摩縣は二、三等堤防官民の分取調を行ない、天竜川については東春近以南を官六、民四の割合でその費用を積み立てることを始め、また、明治一五年には各河川の工事は原則として町村負担としながらも

幹川の河川

七割

特に指定した二〇条の支川

五割

築摩縣後身補助を受けた河川

四割

数村共同して施行した慣行ある河川

四割

と、それぞれ補助することを定めている。さらに掲げた表4-17の天竜川の場合の普請費用の分担は、地方税（県費）六、協議費（村費）四の割合になっている。

明治一六年には「長野県土工条規」が定められ、次のように費用分担が決められている。

町村で計画し得ないもの

県費

争訟地で町村協議の上施行出来ないもの

町村費

その他

町村費

次に、明治一六年の本村における定式普請出来形（堀ノ井大東文

書)の集計したものを掲げ、その費用分担をみることにする。

△天竜川通り(南殿・田畑・種子・桑・三善地分)

枕杵 一七組 一組七四九五錢一厘 代金一三五四一六錢七厘

中聖牛 八組 一組七四二七錢七厘 代金 五八四二一錢六厘

砂利堤 一二〇間 費用は人足賃に含まれる。

蛇籠 三八本四分 一本五二錢五厘 代金二〇四六錢

他に大工六九、六人 一人三五錢 代金二四一八錢五厘

人足八六六、九人 一人二五錢 代金二四一八錢五厘

費用計 四五四四六二錢八厘

内 地方税負担 三九五四三三錢八厘

協議費負担 五九四二八錢九厘(注一三%)

△大泉川通り(大泉・南殿・田畑・三善地分)

続杵 一八間 一間当たり二四三九錢六厘 代金四三三二五錢

片杵 二二間 一間当たり二四二一錢九厘 代金二六四八一錢八厘

他に 大工 四七人 一人三五錢 代金四六四四〇錢

人足 一一九人 一人二五錢 代金四六四四〇錢

費用計 一一六四四二錢八厘

内 地方税負担 一五四八七錢五厘

協議費負担 一〇〇四五五錢三厘(注八六、四%)

これによると、天竜川筋の四部落が災害の総費用四五四四六二錢のうち、八七%の三九五四三三錢八厘を県費で負担し、大泉川の三部落の災害の総費用一一六四四二錢八厘に対し、一三・六%強の一五四八七錢五厘を県費で負担しているのみである。両者を合わせた県費負担の割合はおよそ七二%になっている。

さらに、明治十九年には県土工条規を改正し、河川を県管理河川と町村管理河川に区分し、町村負担の河川のうち補助河川に対しては二

分の一の費用を負担することになった。このとき天竜川水系で県管理河川となったのは天竜川・松川・中田切川・三峯川・上川である。

明治における河川管理区分と費用の分担は以上見てきたとおりであって、しだいに地元負担の軽減の傾向が認められるが、水防施設は膨大な費用を必要とするものであって、県管理の段階では飛躍的な発展は望むべくもなく、江戸時代に比し多少の進歩があったのみであった。

当時の水防施設はどの程度に整備されていたのだろうか。その実態を示す明治二〇年の「南筑輪坂堤調」が残っているため、それを掲げて実情を見ることにする。(図4-49と50)

明治二〇年代においては、北殿耕地地先の字ヒヤケ田、コモリメ、タテ田の二〇〇間ほどの間に堤防が無いが、他の地域はほぼ全川沿い堤防が造られている。しかし、内容をよく見ると、その堤防は全部砂利堤であって、高さは六尺から二間、馬踏みの幅は四尺から二間とまちまちであって、まさにつぎはぎの砂利堤である。当時はこの砂利堤によって川の水が田地に流れ込むのを防ぐわけであるが、この砂利堤は粗末な羽口に使って砂利を積み上げたもので、根固めも不十分であり強い水流にあえば簡単に崩れてしまうものであったと思われる。それで、この砂利堤を保護するために水の流れの強い所には、根固めとして蛇籠・沈み杵・合掌杵等が使われ、水制工としては、聖牛・合掌杵・続杵等が河川の状況に応じて据え付けられたのである。ところがこれらの聖牛や杵類の用材は松の木あるいは雑木であって、それを腐蝕で結束したものであるから、二・三年で腐朽してしまう状態である。図中の聖牛・杵類の大半が腐朽しているのは必定である。これが当時の水防施設の実態であったのである。

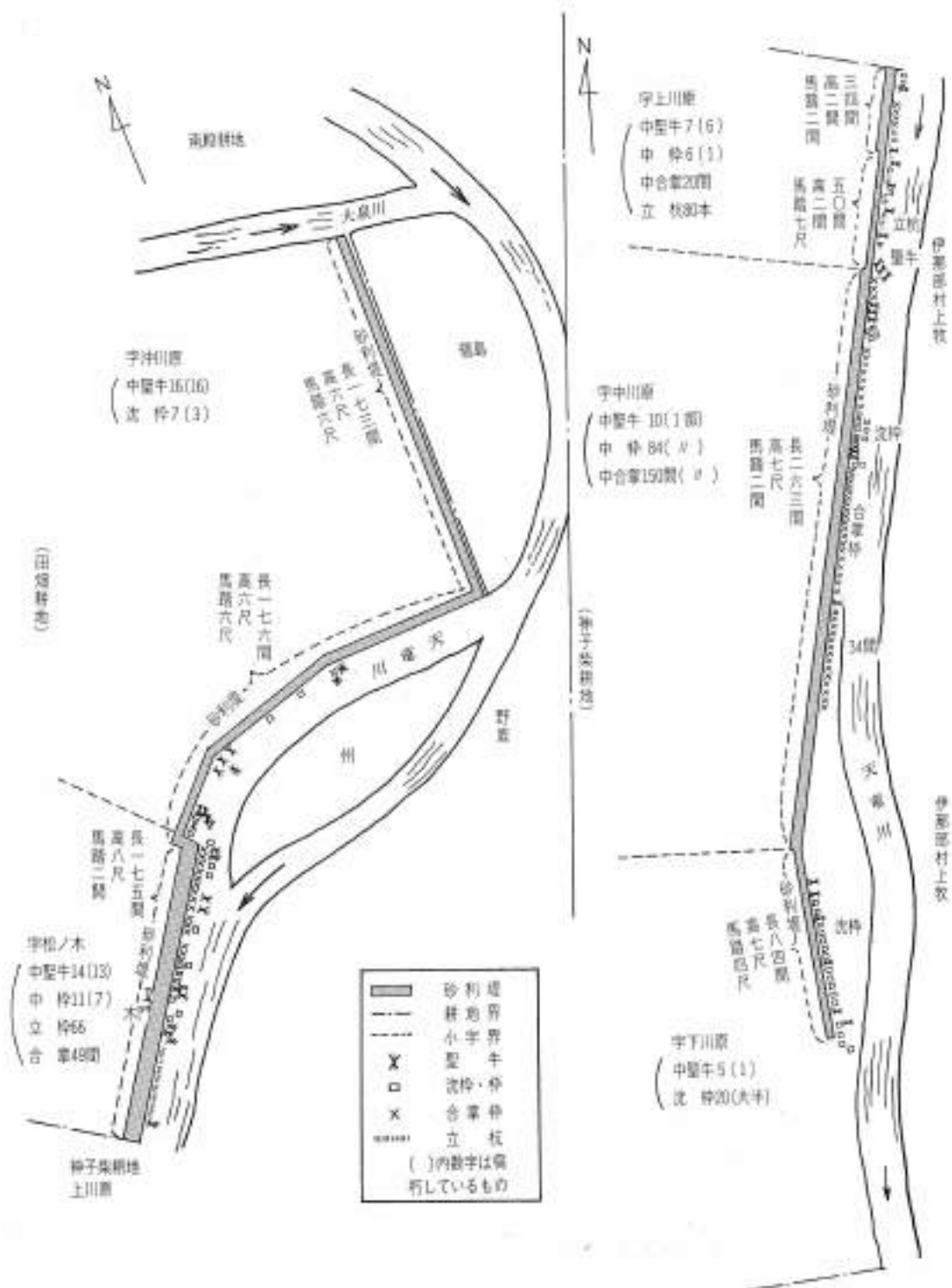


図4-45 明治20年天竜川雨災輸送堤の図一(写)右種子菜、左田畑(役場文書)

第2節 水との関わり

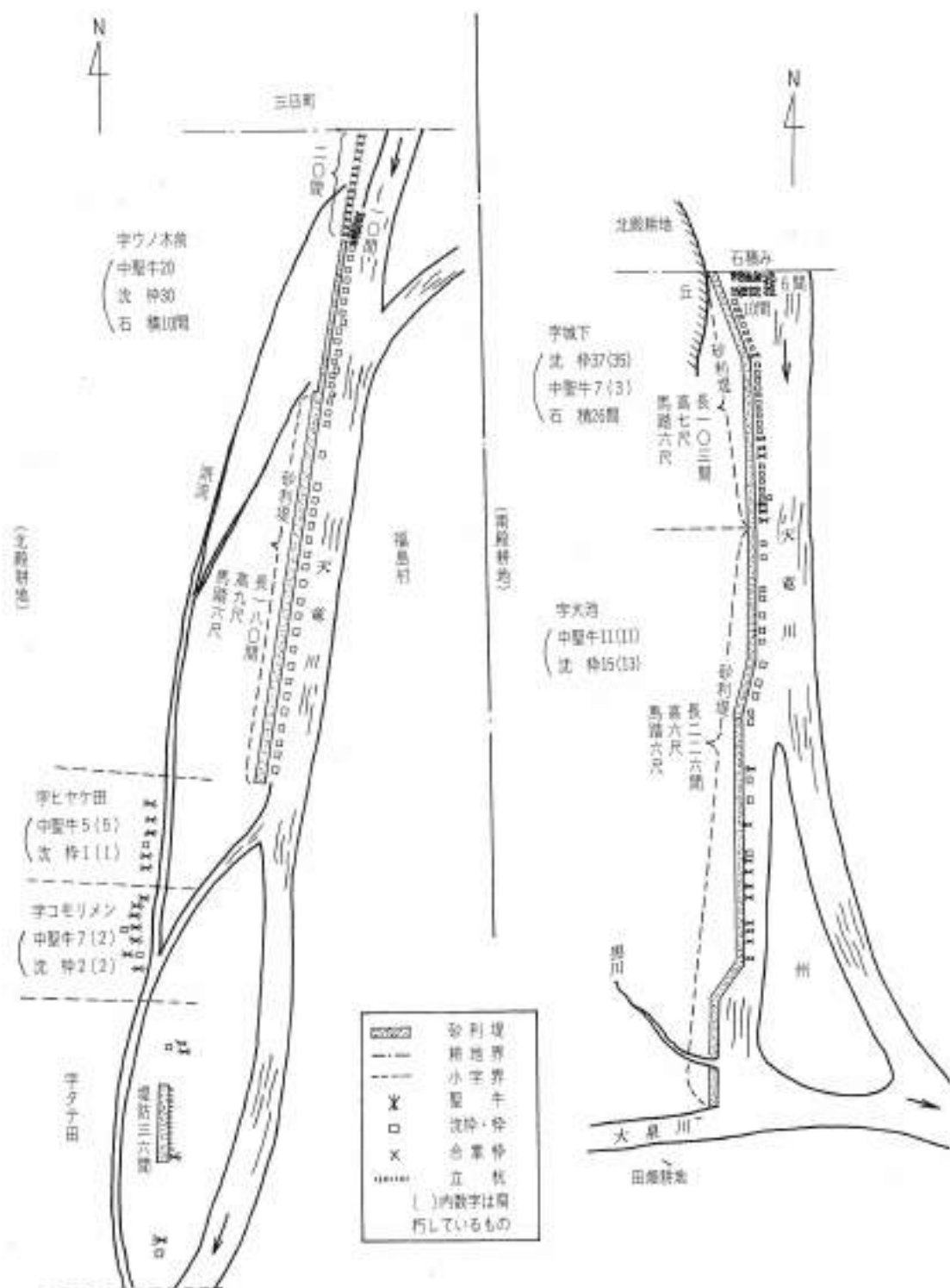


図4-50 明治20年天竜川南其輪被渡図二(号)右南殿、左北殿



図3-51 概略的天竜川護岸擁護（左人海築術による築堤作業、右出来上った蛇籠による堤防）

(2) 明治時代後期・大正時代

明治二九・三一年は、三年連続の水害で県下に大きな被害があった。県は明治二九年河川改修計画を立案し、三〇年より一二か年計画で多額の費用を投じて千曲川・天竜川・犀川・三峯川等、七河川の改修を始めたが、二九・三一年の洪水によって状況が大きく変化し、計画は中止されてしまった。

明治三五年県は治水堤防費を新設し、新たに河川の改修に着手しているが、多くは災害復旧にとどまって、本格的築堤には至らなかった。その後、明治三六年の県土工条規では天竜川と三峯川（萬達町より下流）が県管理河川になり、大正六年には天竜川と三峯川は国の河川法による準用河川になった。大正一二年には天竜川が内務省直轄で改修する河川に加えられると共に、県内一〇八の小河川が県管理河川に編入され、昭和四年には大泉川も河川法による準用河

川に加えられている。このように河川の管理が県・国としいに格上げされ、地元負担は軽減されることになり、それに伴って水防施設も逐次進んではいるが、まだ充分に水を制御する段階にはほど遠く、本格的な整備は近年のことである。

(3) 昭和における水の制御

昭和三年、西天竜用水の取水堰は、二つの意味で上流下流住民の争いを引き起こした。その一つは、天竜川流域部において天竜川の水をほとんど全部引用するため、下流の東天竜耕地整理組合外敷組合は灌漑用水不足となり、天竜川兩岸の農民同志の水争いになった。他の一つは、西天竜取り入れ口の「ローリングダム」設置によって、洪水時における諏訪湖水位の上昇による水害を恐れた周辺町村長は、昭和七年の洪水に際してローリングダムを引き上げてしまった。このため、西天竜耕地整理組合は予定水量を取り入れることができず、約四〇〇



図4-52 昭和25年大洪水による北原駅付近の被害

町歩の水田に灌漑できないという事態が発生し、諏訪湖周辺の町村と、西天竜耕地整理組合町村との間に一触即発の険悪な空気がなった。この事態は警察力によって鎮められたが、争いの原因が無くなったわけではないので、いつ同じような危険な状態が再発するかわからない状態であった。

県はこのような状態を放置することができず、諏訪湖の治水問題と、利水問題とを同時に考

慮した土木事業によって、各方面の摩擦を除く必要に迫られていた。県は昭和七年政府の救国農村振興土木事業を始めたのを好機として、急遽天竜川上流改良工事を計画し、それに基づき天竜川上流河川改良事務所が設置され、内務省の承認と補助を受けて直ちに改良工事に着手した。

工事は釜口水門の設置を始め、諏訪湖に流入している各支川の沿岸の工事、天竜川上流の護岸、用水路工事等広範囲であった。天竜川における工事は上流全線にわたり、ほぼ河床を一・八m掘り下げ流下能力を増し、釜口水門は幅七・三m、高さ三mの鉄製門扉を七個持つ水門とし、湖水の水位の維持と、ある程度の洪水調節の機能を持つており、これらの改良工事は昭和一二年に完成した。

この後、天竜川上流についてはめばしい水防工事は行なわれず、第二次大戦後の昭和二二年より二五年まで天竜川災害復旧工事が行なわれているが、単なる災害箇所復旧にとどまっている。しかし、復旧箇所は本格的な石堤が造られていることは言うまでもない。昭和二五年には天竜川の大洪水で北殿地区は大被害を被った。

昭和二八年になって、建設省は「治山治水基本対策要項」を策定し、長期的展望に立っての河川改修事業が始められた。さらに、昭和三五年から第一次五か年計画、昭和四〇年から第二次五か年計画に基づく河川改修が進められているが、天竜川上流のうち南筑輪地区はまだその工事区域には入っていない。昭和四三年から第三次五か年計画が始まり、昭和四六年には伊那市中川原の毛見橋から明神橋までの区間が建設省直轄管理区域に編入され、弱小堤の強化及び小橋部の護岸工事が進められ始めた。昭和四七年からの第四次五か年計画では神子榮、田畑の弱小堤の強化、昭和五二年からの第五次五か年計画により北殿地区の築堤の完成、塩ノ井・久保地区の護岸の強化が行われ

た。〔天竜川上流改良事務所三十年の歩み〕

このようにして、天竜川の防水のための築堤、護岸の工事は下流から順次進められてきており、現在のような連続した本格的石堤となったのは、僅かに数年前のことである。

昭和、特に太平洋戦争後の、築堤護岸工法の進歩は著しく、昭和二〇年代では堤防の根固めには木材を井桁に組んだ木工沈床が用いられ、元詰めには玉石が使われていた。また、護岸工法としては空石積、蛇籠による被覆が行われていた。

昭和三〇年代になると、コンクリートの使用が急速に増加し、木工沈床の元詰めを基礎コンクリートと一体とし、あるいは、コンクリートの十字ブロック等が使われ始め、護岸工法も練石積み为主体となっている。これは、コンクリートミキサーの普及による点が大いである。他の土木工作機械としてブルドーザー、ドラックライン等が使われ始め、

河川改修工事の進捗は著しく高まり、水防施設は急速に進んだ。



図4-53 法枠コンクリート護岸工法による堤防(北殿付近)

現在の根固めは、コンクリート十字ブロックを主体としており、護岸工法としては、上部は法枠コンクリート、下部は練石積みが多い。築堤の規模も、五〇～一〇〇年に一回起こり得るかどうかの最大水位に、さらに安全度を加えた大規模のものととなり、さきの根固めや護岸工法の進歩と共に、江戸時代や明治



図4-54 大泉川下流改修後の合流点付近

時代の水防施設に比べ格段の進歩を遂げたものとなっている。不測の事態の発生もあり得るので全く安心することは戒めねばならないが、長い間の人間と水との闘いは、ようやくにして人が水を制することができるようになったと考えられよう。

大泉川は、天竜川に注ぐ急流河川であって、その流域の地質は古生層の粘板岩が多く崩壊しやすく、山腹には随所に崩落が見られる。明治一七年には天竜

川と共に大泉川も大洪水となり下流兩岸に大災害が発生し、昭和七年にもかなりの災害が発生している。流域には豊かな田畑、森林が展開しており、土砂流失による危険と不安定な流況は下流民に多くの不安を与えていたが、昭和四年大泉川は河川法による準用河川に加えられ、同二四年ころから下流から県事業により兩岸の護岸工法として堅固な石堤が築造され始め、同三五年までに猪子芝付近まではほぼ完全な築堤が行なわれた。昭和四〇年に大泉川はさらに一級河川に編入されたが、猪子芝より上流、大泉新田付近までの間の護岸築堤はいまだにできていない。

一方で、上流よりの土砂流出を防止するため、大泉所に県砂防事業として砂防ダムの建設が行われた。この砂防ダムは、昭和四五年一〇月より三か年の工期で六億八五〇〇万円の費用を投じて、同四八年一〇月完成した。堤高三一m、堤前長一五七mの直線重力式のコシクリ

ートダムで、これによって下流地域の人命財産の被害を未然に防止することができると共に、堆砂でダムが満砂になるまで貯えられた水を利用して田畑四〇haの灌漑用水をも安定供給を可能にした。

昭和二〇、三〇年代に築堤された下流兩岸の石堤も、その後の出水で危険が感ぜられるようになり、大泉川下流砂防期成同盟会が結成され、この会の働きかけにより、新たに下流から改修が始められ逐次改修が進められつつある。

第五章 入会山野と村の生活

第一節 近世農民の生活と入会地

一 入会地の重要性

「入会原に御座候て、田地養いこい草刈り申し候」(北殿区有文書)、「田畑肥しは入会山野にて草刈り肥しに仕り候」(田畑明細帳)このように、江戸時代を通じて田や畑の肥料は山野の刈藪、および雑草、樺草から作られる厩肥が主体であった。

ヨーロッパ中世の三圃式農業のように休耕地を持って地力維持を図る方法と違って、我が国のように毎年同一の場所に作物を栽培し、しかも永続して生産力を維持してゆくためには、多量の施肥をすることが絶対不可欠の条件であった。

一反歩あたりの刈藪の使用量は少なくても一〇駄、多い場合には三〇駄を入れている例があり、畑作においては連作による地力の減退が顯著であるから、厩肥を大量に作ることは当時の農民の重大関心事であり、また努力点であったから、広い採草地を必要とした。「悪地場所にて御座候故、林沢山御座無く候ては諸作生い立ち申さず」(北殿区有文書)と述べているのは、この辺の事情を述べているものであろう。このように、当時の農民にとって採草地は農業を続けるための基盤であって、採草地なくしては農業は成立しないというのが実態であった。

入会地の重要性に関連して、百姓持林・草場の実態もみておこう。

当時の百姓持林・草場の保有状況を一部の村についてみると次のとおりである。

△南殿村(元禄一三年)

百姓持林 五町六反一六歩
百姓草場 一町八反九歩
一戸当たり平均 二反六畝二五歩

△田畑村(元禄一三年)

百姓持林 七町五反二畝一七歩
百姓草場 二町八反一畝二歩
一戸当たり平均 二反四畝一八歩

△神子柴村(寛政六年)

百姓持林 六町八反四畝四歩
百姓草場 一町四反 一歩
一戸当たり平均 一反六畝〇五歩

これらの百姓持林・草場は、村落や耕地の周辺に散在しているが、一戸あたりの保有面積は林と草場を合わせて一反六畝一二反六畝程度で、とうてい多量に必要とする刈藪や、一年中牛馬に与える林を賄える面積ではない。また、表5-1は田畑村の林野の保有状況を段階別に示したものであるが、農家戸数のほぼ半数の者が自分の林野を持っていないのであって、これらの農家はすべて入会林野に頼るより外に方法がないのである。

よって、当時の農民の大部分は水田肥料としての刈藪および厩肥の

表 5-1 田畑村百姓林百姓草場保有状況
(元禄13年百姓林草場改帳—戸別文書より)

	林	草 場	林と草場
0	18戸	26戸	19戸
5畝以下	10	8	5
5畝~1反	4	3	3
1反~1反5畝	4	2	8
1反5畝~2反	3	2	3
2反~3反		1	1
3反~1町	1		1
1町~2町	1		1
2町以上	1		1
計	42	42	42

徴収を可能とする条件としての、採草地である入会地に対する関心が深く、近世初期盛んに行なわれた賃租増収になる新田開発さえ、直接本田の施肥量を減少させるものとして反対する地元農民の意見が出され、それに耳を傾けざるを得ず、切迫えによる新畑仕立て等から生ずる入会採草地の減少によって起る訴訟に対しては、入会採草地の確保という主張を認める裁断をしている場合が多いなど、採草地の確保には細かい心づかいをしている。

入会地の利用は、採草地としての利用のみでなく、外にも農民の生活と深くかわりを持っていて、それは、農民の住居の建築又は補修の材料としての用材、橋、水路、川除け工事等材費請に必要なる用材、藤蓐等の資材の供給される場所であり、屋根材料としての萱もほとんど入会地の萱山から刈り取られている。

また、入会地は農民の日常生活に欠くことのできない燃料の供給場所であった。入会権を持った住民たちは、冬の十二月から翌春の四月ころまで薪山に出かけ枯木や枯枝等を採集し、また松の落葉などを採

原料となる萩・樺草となる野草を入会山野から得ていたといえる。こうして、入会地の第一義は採草地としての利用であった。外に草木灰の原料の供給の場でもあったから、当時の地力維持という農業生産を継続させる基礎となる場所であった。幕府や領主も賃租の

き集めてきて、家の近くに積み、あるいはごみ屋に積み込んでおき一年中のいろいろやかまどで焚く燃料としたのである。

さらに、「牛馬飼場」という入会地名が示すように、文字通り牛馬の放牧飼育が行われたり、山菜や木の葉の採取の場所でもあったのである。山菜や木の葉やきのこなどは農民の食生活にうるおいを与えるのみでなく、凶作の年には「百姓給物一切これ無く、初春より木の根を掘り、諸草の青味を持ち兼ね当日送りに申し」というように、農民の飢えをしのぐ食物の供給をしてくれる場所でもあったのである。

入会地は、そこから流れ出る谷川や湧水を飲用水、または灌漑用水として利用し得る村落によって入会利用される場合が通例であって、入会地は水源涵養という重要な意味も持っていて、入会地の利用は昔からこの点について十分な注意が払われていることが資料にも多く残されている。

このように、当時の入会林野は農業生産にとって重要な意味を持つだけでなく、消費生活全般にわたってはかりしれないつながりを持っていたのである。

二 入会の成立と入会権の確立

入会とは、一定の地域に住む農民が古くからの慣習上の権利に基づいて、定められた山地や原野に入り会って一定の約束に従い、その木や柴草等を採取することを言い、その収益権を「入会権」という。そのような入会採取の行なわれている林野を入会山、あるいは入会野と呼んでいる。

このような入会がどのように成立し、そして、入会権がどのようにして確立したのだろうか。

古代律令制社会においては、山野は国有であるが、各人の自由な利

用にまかされており、農民はその山野の入会的利用が許されていた。荘園制社会においては、山野も荘園的領有の対象となり、しだいに私有化され耕地と連関して利用される関係が生じた。すなわち、林野は耕地の従属物と考えられるようになったのである。当地は落原庄となり耕地と共に付近一帯の林野もその領主の領有となったと思われるが、人口も少なく耕地面積も少なかったこの時代では、農民の林野の利用は、かなり自由なものであったと考えられる。しかし、守護地頭が設置されてその勢力がしだいに伸長し、地頭請負、下地中分というような形で荘園領主の土地は押領されていき、やがて武士の支配する社会になってくる。鎌倉時代中期以降は、箕輪郷は藤沢氏が下地を管掌し、代々それを伝承していた。その配下としてそれぞれの地に小土家や有力な主層が存在したであろうと思われる。小土家や有力な主層たちは武士化して広い土地を持ち、隸属民を使って地主手作り経営をしており、その経営に必要な採草地としてかなりの分付山、あるいは地付山といわれるものを持っていたと考えられている。従属民はその従属関係に従って分付山や地付山を個別的に一定のわく内で利用していた。これ以外の余った広大な山野は惣山として村中に在在の無高、水呑み等の百姓も入会山として利用されたと考えられている。

このようにして、しだいに入会山野が生まれてきたと考えられるが、『北沢山の儀御領分村々入会い前々より相互自由仕り候』、『南沢の儀古来より私共村々入会い』、『往古より北沢、南沢両山相互に同様に入り来り申し候所』、『前々村々申し伝えを以て申し上げ候儀に付き入会と申す証書物もこれ無く候』、『以上北沢郷有文書』というように、往古よりの慣習であって、いつどのように入会権が成立したかという点を明らかにすることは困難であるが、律令制社会ころまで山野や荒沢はその土地の人々の自由な利用ができたものが、土地の

私的領有の進展、人口密度の増大につれて、しだいに山野の利用に制限が加えられてくるわけであって、その過程の中で入会山野や入会権が逐次成立してきたものといえることができる。

一般の入会権の成立は右のように漠然としたものであるが、真虫平林野（中野原の一部）については、入会権成立についての資料がある。それによれば、『文禄のころ（一五九二～九六）沢尻村が亡村になったとき、その土地を飯田城主京極修理亮から隣郷の百姓に出作を仰せつけられた。そのとき隣郷の百姓が願ひ出て、真虫平林野への入会を許されるようになった』（寛文九年御日安返答書 南蔵酒屋文書）とある。これは亡村になった沢尻の土地の出作を命じられたのを機会に、今まで入り会っていなかった林野に入り会う権利が認められたということで、入会権成立の珍しい例で、一般には入会の由来は漠然としたものが多い。

近世初期、林野に対する領主権確立のための努力が行なわれていた。それは、次のような形で進められたといわれる。

1 地方地行者の林野の知行を否定すること。

2 林野の全面的編入地化のもとに、次の二つに分ける。

イ 農民の利用地

ロ 農民の利用を禁止する林野（御立山・御立林）

この場合、一挙に慣習を改めることはできず、農民利用地の中で地付山、分付山等の村落上層（旧名主層）の個別利用地を農民からの書き上げで認めるという実態に即応した方策を採らざるを得なかったといわれている。『古島敏雄著『封建農業史』』しかし、農村内部においては従属農民が自立化して小農生産が確立するようになり、これら小農等による山野利用権の要求が強まってくると共に、しだいに村中入会の制度が強化されて来たようである。

さらに、村々から代官所へ差し出した書付けに基づいて仰せ付けられた年貢高を記入した請書と思われる次の資料がある。

入会山御年貢

御村山	七拾町歩	此の年貢米	七升
北沢山	貳百町歩	〃	貳斗
中野原	百貳拾町歩	〃	壹斗貳升
藏尾山	百七拾町歩	〃	壹斗七升
三本木原	貳拾町歩	〃	貳升
上ノ瀬原	貳拾町歩	〃	貳升
矢ノ南入り	五町歩	〃	五合
大泉所	百五拾町歩	〃	壹斗五升
牛馬割場	貳拾町歩	〃	貳升貳合

右は、入会山原野御地仰せ付けられ、名主・組頭・長百姓立合ひ取調へ差し上げ奉り候。此の度を以て御年貢仰せ付けられ候。慶長十一年。

宣暦七十五年十二月

以上殿元神子・桑村名主・桑市 大泉村名主 五郎左衛門

大置村名主 六郎左衛門 大泉新田村名主 伝藏

田畑村名主 彦市 北殿村名主 左右衛門

上戸村名主 源右衛門 久保村名主 源右衛門

南殿村名主 作左衛門 与地村名主 忠右衛門

布施弥一郎様御役所

(中野文書)

このように入会山野の検地は、検地役人が来て山野を実測して年貢を決定したのではなく、各村の名主・組頭・長百姓立合ひで取調べを行ない、その結果を役所へ報告するという略式の方法を採っており、年貢高は林野一町歩に米一合の割合で課されることになったのである。これによって、ここに名を連ねた村々は正式に該当の林野に入会

う権利を認定されたことになったわけである。

この検地により、今までの慣習上の入会の権利が、法による入会権にもそのまま認定されたわけであるが、その確定をめぐっていくつかの山論が発生している。また、入会権の確保と将来への保証をめざして、次のような興味ある資料が残っている。

恐れ乍ら書付けを以て願ひ上げ奉り候

当御領分村々の内入方地・南沢の儀、吉業より私共村々入り合ひ、御料所筑輪領地・北沢山の儀、是又御領分村々入会い来り能々より相互自由仕り来り申し候。然る所御料北沢山の儀、当年より山御年貢仰せ付けられ御領分入会村々より飯島御役所へ御年貢上納致され候に付き、私共村々よりも御領分南沢山御年貢多少に依らず御上納仕り度く存じ候。相応御年貢仰せ付け下し置かれ候様願ひ上げ奉り候。往古より北沢・南沢両山相互同様に仕り来り申し候所、南沢ばかり御年貢御上納御無儀候ては御支配違ひの儀につき、若し末々に至り入り合ひ差障り等の儀も出来仕り候ては難儀仕り候に付き、何とぞ御年貢当年より私共村々より御上納仰せ付け下し置かれ候様願ひ上げ候。

宣暦八年寅九月

布施弥一郎代官所伊那郡筑輪領

久保村・堀ノ井村・北殿村・南殿村・田畑村・大泉村・

内藤大和守様 与地村・中条村・上戸村・大置村・大泉新田村

御奉行所 各村名主名略

(北殿区有文書)

これは、筑輪領の北沢山、高遠領の南沢山は、筑輪領の村々、高遠領の村々が相互に自由に入り合って来た所である。ところが宣暦八年より山手年貢を納めることになり、筑輪領北沢山の年貢は高遠領の村々から飯島役所に上納したのでから、私ども筑輪領の村々も南沢山の年貢を高遠御役所に上納したので、年貢を多少なりとも申し付けて

欲しい。もし北沢山の年貢は高遠領の村々が納め、南沢山の年貢は箕輪領の村々が納めないでいては、御支配が違ふことでもあり、後目になつて南沢山に箕輪領の村々が入り会ふことができなくなつては村々が難儀するから、年貢を上納するよう仰せ付けてくださいというのである。この願いは高遠御役所に容れられて箕輪領八か村で米式斗七升九合五勺を上納することになったが、年貢を上納することで入会権を公認してもらい、後々までそれを保証しようとしているわけである。

なお、これに付随して、南沢山の年貢を米納にしたいと願い出したところ、米納の場合は地元村に納め、領収書は地元村から出るようになることと申し渡された。箕輪領の村々としては後々の証拠となるよう高遠藩役所からの領収書をとっておく必要があると考え、高遠藩役所へ直接金納することにした資料が残っている。いかに当時の村役人が入会権の確保に熱心であつたかがわかる。

三 南箕輪に關係ある入会山野

入会の林野には次のような形態のものがある。

①個人所有地への入会い：分付山、地付山等への従属農民の入会い。

②村中入会い：一村の住民だけの入会い。(内山、内野、内原等と呼んでいた。)

③村々入会い：数ヶ村の村々住民の入会い。

④御立山・立野等に対する入会い。

本村内においては①の分付山等は中世や近世初期には存在したと思われるが資料がなく不明である。③の内山内原等は、例えば神子柴村の春日道下の鉢落窪原(一五町歩)、島居原(二二町歩)、田畑村の春日道下の小坂原(二〇町歩)、前宮原(一五町歩)等がそれであり、現在も田畑区には内原という字名が残っている。各村々多少なり内原があ

つて、その村住民の惣入会であつたが、その面積は大きくない。④の御立山・立野については、各村明細帳に「御林、立野等一切御座無く候」、「御林御座無く候」とあり、刈取の刈取記録の中に「立山にて三六畝」という記述があるが、他に立山や立野に関する記録は全くなく、この地には立山、立野は無かつたと考えたい。したがって、当地における入会地の主体は③の村々入会いの入会地である。

入会地は前述の通り農業生産及び農民の消費生活にとって極めて大切な場所であるから、入会権の確保は村役の極めて重要な任務であつたのであろう。村の明細帳にはどの村も多くの頁を割いてこれを記録している。それらの資料に基づいて本村関係入会地を列挙すると次のようである。

△入会林場

一、大芝原 面積百八拾町歩程 野手米 壹斗八升

入会地 神子柴・田畑・南殿・北殿・久保

大泉・大泉新田・大泉・別庄

二、三本木原 面積凡そ貳拾町歩程 野手米 貳升

入会地 神子柴・田畑・南殿・北殿・久保

塩ノ井・大泉・大泉新田・上戸・中条・与地・大泉

野手米 壹斗貳升

三、中野原 面積百貳拾町歩

入会地 神子柴・田畑・南殿・北殿・久保

塩ノ井・大泉・大泉新田

山寺・西伊那部・東伊那部・狐島

野手米 貳升

四、上ノ原 面積貳拾町歩

入会地 神子柴・田畑・南殿・北殿・久保

塩ノ井・大泉・大泉新田・上戸・中条・与地・大泉

野手米 貳升

一、牛馬飼場 面積貳拾貳町歩

地元上戸 入会村々

野手米 貳升貳合

上戸・中条・与地・梨ノ木・南殿・北殿・羽広・大萱・神子榮（外に大泉・同新田・田畑・久保を加える）

一、北 原 面積（記載なし）

八か村總地元 入会村々

野手米

北殿・久保・南殿・田畑・吹上・大泉・同新田・大萱（外に木下・中曾根新田・富田入会い）

△入会新山

一、大泉所 面積凡百五拾町歩

地元大泉村 入会村々

山手米 壹斗五升

大泉・同新田・中曾根新田・吹上・羽広・大萱・神子榮・田畑・南殿・北殿・久保・富田

一、藏廬山 面積百七拾町歩

地元羽広（總地元）村入会村々

山手米 壹斗七升

羽広・大萱・大蓋・大泉・同新田・神子榮・田畑・南殿・北殿・山手米 五合

一、藏廬山の内 面積五町歩

入会村々

羽広・大萱・神子榮・大泉・同新田・田畑・南殿・北殿・梨ノ木（外に中条村殿屋敷を加える）

一、御射山 面積凡七拾町歩

地元与地村 入会村々

山手米 七升

与地・中条・上戸・大萱・北殿・南殿・田畑・神子榮・久保（外に大泉・大泉新田を加える）

一、北沢山 面積凡貳百町歩

冥輪嶺總地元入会村々

山手米 貳斗

与地・中条・上戸・大萱・大泉・同新田・北殿・南殿・田畑・神

子榮・久保

一、南沢山 面積凡貳百町歩

高遠嶺・御園・山寺・西伊那部・東伊那部・狐島

山手米 貳斗

（地名誤記、寺社等を含む）
地元荒井 入会村々 御園・山寺・西伊那部・東伊那部

狐島

冥輪嶺・与地・中条・上戸・大萱・大泉・同新田

北殿・南殿・田畑・神子榮・久保

（千桐原文書）

この中で地元村というのは、林野に対して地の利を占めていた村（主として山付きの村）、または、実際の必要に迫られて入会地に独自の工作を施して優位な使用権を得て来た村が慣行として確認され、その慣行の継続が地元村として認知存続をしてきたもので、山手米等をその地元村に集めて納入する場合もあった。また、入会の村々は時代によって多少異なり、山論等の結果後から入会いが認められたものがある。前の記載で入会の村々を並べた後に「外に」として村名が記入されているものは、後から入会権が認められたものである。なお面積は宝暦七年（一七五七）検地の際に入会村々役人立合い取調べによって差し出した面積で、江戸時代を通じてこの面積となっているが、実際の面積はこれよりかなり広い。

明治になって地租改正が行なわれ、明治八年、入会林野は民有地二種として入会いが継続されたが、その時の入会地の略図を示すと図5-11のようであり、面積は次のようにほぼ実態に近くなっている。

北 原 四一町四反 大 芝 三五〇町二反八畝

二町四方 四町八畝 三本木原 六〇町七反三畝

中野原 三〇五町二反八畝 上ヶ清原 二五町七反七畝

上ヶ清原 四六町六反七畝

第1節 近世農民の生活と入会地

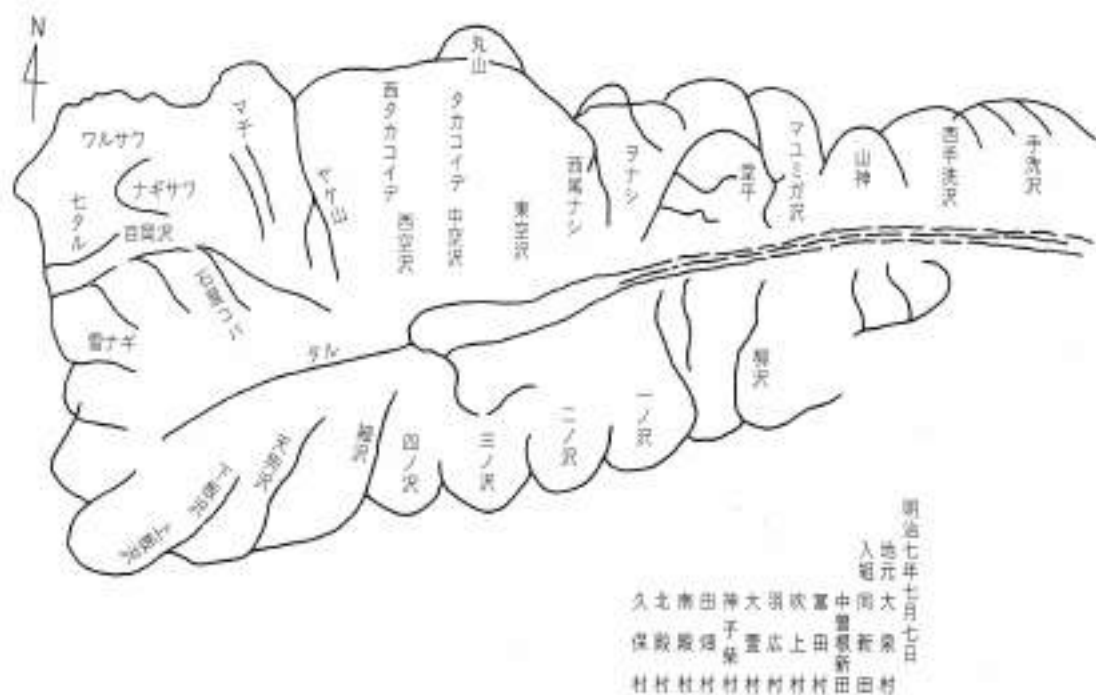


圖 5-2 大泉所略圖

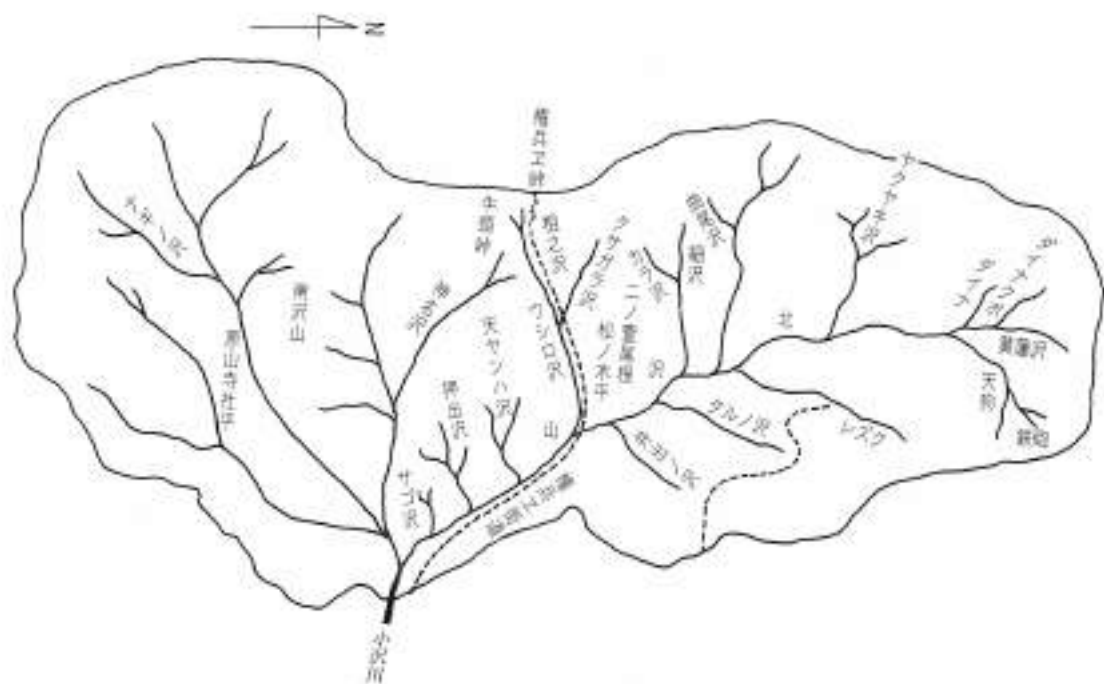


図 5-3 北沢山・南沢山（神名沢寺址等を含む）略図

牛馬飼場 二三町六畝
 蔵山 三六〇町
 北沢山 一七二八町
 蔵山の
 矢ノ南入り 二八町五反
 南沢(神名沢を含む) 一六五七町二反
 大泉所 八六四町
 御村山 四八三町九反一畝

注 (北原は明治四年分割後の面積である)

四 入会山野の利用の定め

入会山野がどのように利用されたかをみると、江戸時代初期の段階では資料に乏しく詳細は不明であるが、かなり自由な入会地利用が行なわれていたと考えられる。

ところが、人口密度の増大と共に中期以降になると入会地の利用について各種の制限が生まれてきている。江戸中期の入会地利用について、広範囲に利用法を定めた正徳六年(一七一六)の「相定め申す証



図 5-4 正徳6年入会山相定め申す証文の事 (部分)
 (鎌倉文書)

文の事」がある。入会地利用規定として初期の重要なものであるから、その全文を掲げることにする。

相定め申す証文の事

△御村山入りの事

一、五月刈草山の日五月節に入り候節日明け申し候。尤も荒山共に何方にてても刈り申す可く候。先例の通り。

一、秋刈り草は被刈り候日より刈り始め、尤も山に刈り置き仕らず日掃りばかり刈り申すべく候。

一、葛葉山の口、彼岸に入り候日より十五日明け、取り始め申す可く候。

一、荒山の口、秋土用に入り候日より廿九日明け、刈り申す可く候。

右御村山荒輪八か村と高遠領御村・山寺村都合拾か村入会右の通り候。其際相用い申す可く候。

△荒輪八か村入会原相定め申す事(注 中野原)

一、半夏入り候日より朝草刈り申す可く候。

一、夏草は、土用に入り候日より廿一日刈り始め申すべく候。

△右岡断北沢山相定め申す事

一、五月刈草、五月節に入り候日より刈り申すべく候。

一、夏草は、原口山神より大坂尻迄の内、夏土用に入り候日より廿一日に刈り始め申す可く候。大坂尻より奥山一切刈り申す間敷く候。

一、秋刈り草被刈り候日より刈り始め、尤も山に刈り置き仕らず日掃りばかり刈り申す可く候。但し、大坂尻より水無迄日向は二歳ヶ沢西尾根切り、夫より奥は荒山に立て置き一切刈り申す間敷く候。

一、荒山の口、秋土用に入り候日より三拾日明け刈り始め申す可く候。

△右岡断神名沢相定め申す事

一、北沢山の神よりすき嵐迄日影共に、半夏に入り候日より朝草刈り始め申す可く候。

一、右場所原草は土用に入り候日より廿一日刈り始め申す可く候。すき嵐より奥は一切刈り申す間敷く候。

一、秋刈草はすき嵐より屏風岩^{びんぷういわ}、彼岸に入り候日より、刈り始め申す可く候。尤も山に刈り置き仕らず、日掃りばかりに刈り申す可く候。

一、葎山の口、土用に入り候日より三拾日明け刈り申す可く候。但し秋土用のことなり。

一、御射山・神名沢・南沢山共に、稔^{なり}ぎとして売り薪木、売り材木、板子諸道具、売り刈草入会^{いりかい}の村へは格別、入会の外には一切売り申す間敷く候事。

右の通り村々相談の上相定め置候故は後々共に堅く相用い申す可く候。若し申し合わせ候儀相背き候もの候わば、相互に見合い次第に候^い・諸道具押さえ取り申す可く候。万一右に申し合わせ候儀未々に至り難儀仕り候儀も候わば、村々相談の上然る可き様に仕る可く候。後日の為取替わし証文并の如し。

正徳六丙申年

五月十二日

気輪八か村

与地村^あ 中条村^あ

上戸村^あ 大貫村^あ

大泉村^あ 同新田^あ

神子柴村^あ 田畑村^あ

南殿村^あ 北殿村^あ

久保村^あ

高遠嶺七か村

(村名略)

(鎌倉文書『果史資料四巻』)

このような入会地利用に関する規定は、それぞれの入会地ごとにしばしば取り決められており、それに基づいて入会地の利用が行なわれ

たとえ考えられるが、資料として現われたものにもとづき具体的な利用の姿を見てゆくことにしよう。

(一) 山野草の刈り取り

入会地が当時の農業生産および農民の消費生活に極めて重要な場所であることは既に述べたが、そのうちでも重要な意味を持っていたのは、いうまでもなく肥料源となる刈草と稗類である。

1 刈草刈り

刈草は春草ともいわれ、水田の肥料として田植一七〜八日前、陰曆五月の節(芒種)に入る前後ころから山の口明けを待って刈り始めるが、主として御射山、大泉所、北沢山、南沢山、神名沢等で刈っている。刈草は山の下草はもろみであるが、若葉の伸びた木の小枝を鎌を引掛けて折るように刈り取るので、ならやくぬぎの若葉は好適な刈草であった。山の口明けは地元村から各村々へ次のような回状が出され、それによって刈草山に登って刈り始めるのである。

見え

見え

一、御射山入り刈草山の口来る廿八日明け申し候。

一、北沢山の口来る廿九日明け申し候間、左様思召し成さる可く候。

尤も前方の通り泊り、刈り置き一切成さる間敷く候、以上。

亥ノ四月廿五日 神子柴村名

主

田畑村・南殿村・北殿村・久

図 5-5 葎山山ノ口明け回状(中宛文書)

保村・堀ノ井村・大泉村・同新田・大宮村・上戸村・中条村・与地村
右村々御名主兼中

(中野文書)

それでは、どのくらい刈敷が刈られたのだろうか、田畑村の一有力農家の記録をみよう。

已年刈敷刈り

已領日十五日(注田四月廿七日)に刈敷山に登る。

中 五月十六日

三才山(御射山)入り

五月二日に明く

北沢

五月三日に明く

美(鹿)鹿

五月七日に明く

立山 七拾五だん

野山 三拾二だん

ノ 百七だん

是の外は里

大清水拾七駄(注だん)

道端 貳拾五だん

堤下 六だん

足窪 拾貳だん

(門屋文書)

これは、江戸時代中期の例であるが、田植一五日前から共同の入会地で一〇七だん、内原が個人所有の林草場であるが判明しないが思で五六だん、計一六三だん(東敷で九七八束)を刈り取っている。御射山や北沢山等からの刈敷の運搬も大変なことであった。一日三回運びとして七五駄の刈敷を三頭の馬で運んでも八・三日もかかるのである。なお、一頭の馬では田植え期日に間に合わないほどの量である。なお、ここに掲げた山の口明けの回状の御射山、北沢山は泊り刈りは禁止しているが、このような禁止事項が入っているということは、それ以前

は泊り込みで刈敷刈りが行われたことを考えさせ、宝暦一四年(一七六四)の「入会山原申し定め」では、御射山の「刈敷山泊り一夜限り」と定めており、以前にはかなり多くの日数泊り込みで刈敷刈りが行われたことがわかる。

2 朝草刈り

朝草刈りは夏草刈りとも言われ、次のように規定されている。

「半夏に入り候日より朝草刈り申す可く候」(正徳六年中ノ原)「朝草は五月中(夏至)に入る日より五日目刈り始め申し候」(宝暦一四年大泉所・北原)「半夏より秋彼岸迄朝草刈り取り候」(文政元年大芝原)

このように、田植を終了後間もなく六月の末か七月の初めころから朝草が刈り始められる。主として秋草といわれる中野原・三本木原・上ノ原・大芝原・北原等で刈り取られるが、薪山といわれる大泉所でも「朝草は北まゆみの沢、南は一ノ沢切り、奥は一切入り申す間敷候」として場所を指定して刈っている。

朝草は、牛馬の糞とするだけでなく、褥草として厩肥を生産することとを大きな目的としていた。牛馬を飼っている農家は相応より広く厩を造り、地面を一面ほど掘り下げてその中に牛馬を入れて飼う。褥草として刈って来た株は多量に厩に投げ込んで餌とすると同時に褥草とし、株を投げ込む場所をたえず変えて厩の隅々までよく踏ませるようにした。投げ込まれた株によって踏み固められた褥草面はしだいに高くなるが、夏の土用ごろにはこれを荷い出して堆積し、二・三度切替えをして腐熟させ、麦作の肥料とするのである。

夏の土用以後の褥草は翌春作の肥料となるが、彼等ころまで毎朝、朝草を刈って、出来るだけ多くの厩肥を作ることが精農の要件であるといわれ、農家は競って朝草刈りに精を出した。

できるだけ多くの厩肥を作るために、朝草と称して遅くまで刈って

いた人もあったらしく、宝暦二年（一七五二）中野原萩場について「半夏六日目より秋彼岸限り一人にて馬一匹宛、四ツ（午前九時〜一時）迄に付け出し申す可く候、四ツ過ぎに付け出し申す者見付け次第其の者押さへ、其の村一切入れ間敷き事」というように馬の数と時間を制限し違背すればその村全体の入会を止めるという強い罰則が定められている例がある。

3 秋の干草刈り

「秋刈草は彼岸入り候日より刈り始め、尤も山に刈り置き仕らず、日掃り斗り刈り申す可く候」というように、朝草が彼岸入りころまでで終り、その後直ちに秋の干草刈りが始まる。主として御射山・北沢山・南沢等刈草を刈り取った薪山で刈られた。これは冬季間における牛馬の飼料と堀草に用いられるもので、勿論、藁や麦・粟・稗等の料も使われるが、長い冬季間の牛馬の飼育には多くの干草が必要であったと思われる。「薪草は土用に入り候日より廿一日日より刈り始め申す可く候」とあるのも、刈り始めの時期が秋彼岸入りころであることから、秋の干草刈りのことであると思われる。なお、これらの秋の干草刈りはすべて日掃りで刈ることを定め、刈ってその場に干して置くことも禁じている。

4 葛葉取り

葛は豆科の植物であつて栄養分に富み、牛馬の飼料として貴重なものである。そのため他の野草と区別して、「葛葉山の口彼岸に入り候日より十五日目明け、取り始め申す可く候」、「葛葉山の口の儀秋彼岸明けより七日の間前々通り相談懸け以て山の口明け、入り方村々一同に葛葉取り申す事」というように、葛葉採取だけ山の口明けの時期を特別に定めて採取している。牛馬を飼育している農家は貴重な飼料として競って採取をしたと思われる。

5 萱山

萱は肥料や糞としての利用でなく、住居の屋根材とし住生活上の必需品であり、主として大泉所、御射山、北沢山、南沢山等で刈り取っている。「萱山の儀屏風山より奥は萱山に立て置き、それより前は志っべい沢共に草山に刈り申す可く候」（南沢山）「いでの沢流れ切、日影は二ノ萱西尾根切、奥は萱山に仕立て置きそれより前は草山に刈り申す可く候」（北沢山）というように、一般に薪山の奥の方を萱山として、そこでは薪草、秋干草等を刈らないようにしている。萱山の口は通常「秋土用に入り申す日より三十日に明け刈り始め申す可く候」、「秋土用明け五日日より刈り始め申す可く候」という山の口明けの魁れを待って刈り始め、それ以前の刈り取りを禁止している。屋根の葺き替えになると多量の萱が必要であるから毎年の萱山で刈り蓄えておくが、他人から買ったりするが、それでも充分に準備することは困難で萱無尽を立てたりしたようである。

④ 薪の採取と用材の利用

薪は、日常生活に必要な欠くべからざるもので、薪山で採集した。枯木、枯枝、落葉などで、かなり自由に採集できたとし、正徳以前には何等制限らしき規定は残っていない。しかし、宝暦一四年（一七六四）になると、「入会山原申し定め」の中に次の規定が出てくる。

北 沢一薪 冬泊り十一月節（大雪）に入る日より一五月中、付け運び共に。

一薪 春泊り彼岸入る日より三十日中、付け運び共に。

大泉所一薪 冬泊り十一月節に入る日より十五日中、付け運び共に。

一薪 春泊り三月節（清明）に入る日より十五日中、付け運び共に。

これは、地元村々立ち合いの上の申し合わせであるが、薪山は初冬と初春の二回を中心に採集されたようであって、しかも、一二月と三月という寒い時期に山に野宿をして採集したことを示している。

用材（青木）は、正徳以前の段階では青木（常緑針葉樹）の類が用材としてどのように利用されたか明らかでないが、正徳六年（一七一六）の「相定の證文」（前掲）の中で、入会地で榎ぎとして売材木、板子をとる人があり、入会村々の人への販売は良いが、外村へは一切売らないこと、という記載があるところから考えれば、自家用ではかなり自由に利用できたと考えられる。しかし、時代が進むにつれてしだいに制限が強化され、明和七年（一七七〇）「大泉所山の儀村々榎ぎ山の事これ有り仕り尽山に相成り候に付き」として、次のような規制が生まれた。

一、青木並びに榎ぎ山の儀は止め山仕り候事。

一、手前の家作入用の材は其の越々大泉村に相達し、伐り取り申す可く候。

持山に伐り出し候者は、其の材名主に付け届け、一人過料五貫文ずつ入会村々へ指し出し申す可き相定めに御座候。

（中宿文書）

文政九年（一八二六）になると、次のように改められた。

一、青木の儀は、先々より留め木炭焼近來通りに伐り取り或は立木の皮むき候者これ有り不埒の政に候間、諸々村内へ徹數く申し渡し、以後右体の儀これ無き様致す可く、若し相背き候者これ有り候わば是又一同老か年は入山留め申す可き事。

附、青木柱位は少々入用御座候節は、大泉村へ相届け、其の上入会村々大泉村より廻文出し次第に致すべき事。

（中宿文書）

文政一一年になると次のように変更され、違背者個人に対する罰則

が強化されている。

一、青木類留め山にこれ有り候處、近年裏りに角木・長木・桐・榎・板・板子等の山榎ぎ致し、木炭儀、猶又生木の皮むき甚だ不埒の儀これ有り候間、以来右体の儀、或は諸木等致し候者は見付け次第諸道具並し押え大泉村へ申し届け、入会一同申し定めぬ通り木品大小に依じ代金差し出し候上、五か年違背の当人入会い致させ間敷き事。但し、よんどころ無き入用に付き柱以下は煩りに伐り取り候儀は勝手たるべき儀に致す可き事。

（中宿文書）

他の薪山については資料不足で明らかにし得ないが、制限は大泉所同様しだいに強化されたものと考えられる。

（二）榎ぎとしての入会地利用の制限

入会地は農民の榎ぎの場としてかなり利用された。特に熊高や小高の百姓は農業だけでは生活を支えることができないので、他に何らかの榎ぎをしなければならぬのだから、入会山は格好な榎ぎ場所であったと思われる。しかし、自由に入会で榎ぎ仕事をする、入会地本来の利用が保証できなくなるため、早くから榎ぎ山については制限が加えられている。

前に述べたように、榎ぎ山は認めているが、その売り先は入会の村々に限ることになっている。入会地が入会の村々の田地の肥料供給源であり、その村々の生活資料の供給場所であるという原則から当然の制限であろう。

宝暦二年（一七五二）になると、北沢山にては「泊りかせぎの儀一切仕り間敷く候事」、「秋彼岸山泊りかせぎ一切仕り間敷く候、その日限り、刈りの干し一切仕り間敷く候」として、榎ぎとして山に泊ることを禁止しており、また、先にみた通り青木類（若し持ぎ山に伐り出

第1節 近世農民の生活と入会地



図 5-6 近世における入会山野の利用模式図

し候者見出し候わば過科五貫文と一年間その村の入会を停止するといふように、種々山に対する大泉所山の制限はきびしくなっている。

④ 入会地利用の模式図

これまでに、入会地の薪山、林野のそれぞれの時期の江戸時代における利用の仕方を述べてきたが、これを模式的に図示すると図5-6のようになる。

図によってわかるように、春三月の彼岸入りからまず薪山での春の薪取りが始まり、五月の下旬からは最も忙しく重労働である刈草刈りが始まる。田植の直後から秋の彼岸までは毎朝、朝食前の朝刈りが行なわれ、秋彼岸からは秋干草刈り、続いて葛葉取り、冬刈りがあり、一二月からは冬の薪山が始まる。これらの入会地での作業には泊り込みで行なわれることもあり、年間を通じて労働延べ日数はどの農家も非常に大きいものと考

えられる。

このように、近世における入会地と農村生活との間には極めて密接な関係にあることが理解できよう。

第二節 入会地の争論

一 入会地争論の概要

江戸時代を通して入会地の争論は各地で頻りに起きているが、当地域でも残された資料に記されている主な争論を示すと表5-2のようになり、多くの争論がおきている。

入会地は田や畑の肥料供給源として、高請地に対する貢租を負担する基礎となる場所であって、特に年々高率な貢租を村として共同責任において負担しなければならないので、村の高請地の肥料は村として確保しなければならないことになるから、入会地争論は多く、採取用益の確保をめぐる村の全力を傾けて争われている。

表5-2 入会関係出入り(争論年表)(本村関係のもののみ)

出入(争論場所)	年	内容の概要	資料
真忠平林場 (中野原)	寛文六十一〇 (一六六六・一七〇〇)	小沢村より新畑・新林仕出し等輸送高請地境界不明にて争論、江戸にて公事裁許状給付面頂戴	清水家文書 北蔵区有文書
島居原	天和四 (一六八四)	神子柴村島居原を内原と主張・内原と入会地との境界不明として関係村々と争論、未着	北蔵区有文書
北原	元禄二 (一六八九)	北原に対し富田村中曾根新田入会権を主張、神文を提出して入会権を認めらる	大宗領文庫
同右	宝永一・四 (一七〇四・一七)	北原に対し本下村入会権を主張、認められる	〃
中野原・三本木原 大芝原	元文五・寛保二 (一七四〇・一七四二)	大芝村より中野原・三本木原・大芝原に新畑・林	千代屋文書

中野原林場	寛延元 (一七四八)	日影村が沢尻村の水を伐り、沢尻村が日影村の林を伐り、両村の争論となる。飯島所へ訴訟、内済	〇北蔵区有
同右	寛延四 (一七五二)	上戸・中条両村より中野原に新畑・林仕出し飯島所へ訴訟、内済	〇中宿
同右	宝暦二 (一七五二)	沢尻村より新畑・林仕出し飯島所へ訴訟、証文取替わし内済	〇北蔵区有
御射山新山	〃	上戸村が御射山へ大衆村の入会を拒否、飯島所へ訴訟、和熟内済	〃
島居原林場	宝暦八十一 (一七五八)	神子柴村が島居原を内原と主張し出入りとなる。江戸表にて内済	〃
御射山・矢ノ南入 牛馬郎場	宝暦七十八 (一七五七・五八)	山原年貢仰せ付けられ入会権確定をめぐって出入り飯島所にて内済証文取替わす	〇中宿文書
南沢・神名沢新山	享和八 (一七五八)	年貢納入に伴い神名沢を明記することを訴える年貢納入が認められ願の通りとなる	〇北蔵区有
中野原林場	安永五・七 (一七七六・一七八)	小沢村より新畑・林仕出し飯島・高請地役所へ訴え、取扱い済口証文取替わす	〃
同右	安永四・五 (一七七五・一七七七)	伊勢部山道商人会地、小沢村内野と新たに申立て、銭許と銭内済寛文中の銭許に従う	〇鎌原
三本木原林場	天明五 (一七八五)	三本木原一部大芝分と申し立て争論となる	〇千代屋

第2節 入会地の争論

南沢山の尻平沢	寛政一二 (一八〇〇)	南沢の尻平沢は西伊那郡 の内山であるとして主張し争 論となる	〇	"
大芝原林場	文政元 (一八一八)	羽広村大芝原へ畑・林・仕 出し入会地の林木切払い 等の所業あり出入りとな る	〇	北殿区有 "
寄合新田周辺	文政一 (一八二八)	寄合新田より付近に畑・林 切払い出し内済寛文の遺 付に從う、一部金で弁 償	〇	中宿 "
三本木原林場	天保一〇一 (一八三九)	三本木原の内大宜村地九 六町歩余の地置につき南 沢より新設、示談内済 寛政二年の裁許に從う	〇	久保大東 "
大泉所山新山	天保一二 (一八四二)	大泉所入会地と吹上村と の境争論	〇	中宿 "
三本木原林場	天保一三 (一八四三)	三本木原入会地への境切 り出し	〇	"
大泉所山新山	天保一五、弘化四 (一八四四、四七)	大泉所たる馬入れ道につ いて争論(入会地利用形 態)江戸表に訴訟、示談 内済	〇	"

○印 江戸奉行所まで出訴しそこで裁許又は和議内済せしもの

○印 地方の校所に出訴解決せしもの

表5-3に見るとおりかなり早い時期から争論が起きているが、早い時期の争論は入会地の獲得確保のための争論が多い。天和四年(一六八四)の鳥居原が内原か入会地かを争った出入り(当時争論を出入りといった)、元禄二年(一六八六)の北原に対する富田村、中曾根新田岡村の入会権の主張、宝永元年(一七〇四)の同じく北原に対する木下村の入会権の主張等がそれである。

次は、入会地に対し付近の村から切添え等による新畑、新林の仕出しによる入会地面積の狭小化に対する、他の村からの抗議による争論

である。元文五年(一七四〇)の中野原、三本木原、大芝原への大宜村からの新畑、新林の仕出しによる争論、寛延四年(一七五二)中野原へ上戸村、中条村からの仕出し、安永四年(一七七五)同じく中野原への小沢村からの仕出しに基づく争論等がそれである。この形の争論は江戸時代中後期を通じて最も多く発生している。

宝暦七・八年(一七五七・五八)の争論は、同七年に新たに山野の改めを行ない、その年貢を納入することになったことに伴い、入会権の確認をめぐって起きた争論であって、先に述べたとおり従来からの入会慣行が幕府や領主と、村との間に公的に確認されることになるが、村々の間で入会慣行の確認に若干のくい違いがあつて争論が起きている。宝暦七・八年の御射山・牛馬銅場・矢の南入りについて入会村々の確定、入会様式を定めた証文が取り交わされており、宝暦八年の鳥居原の争論、同年の南沢、神名沢に関する願い書等はこれの例といえる。

これらの外に、特殊の例として天保一五年(一八四四)の大泉所の争論のように、入会地の利用形式、内容をめぐる争論も生まれている。

以上のように争論の内容はさまざまであるが、その多くは代官所へ訴え出てそこで裁きを受け、または、二・三の隣村の村役人や年寄等有力農民の仲介が入り、その扱いによって熟談内済という形で証文を取り交わして落着くが、中には江戸奉行所まで訴訟を起こし(公事)、数年の歳月を費してようやく解決しているという例もある。江戸表へ出ての公事ともなれば、関係者が何人か江戸まで出向く旅費や、かなり長期にわたる滞在費などの訴訟費が多くかかり、農民の負担は大きくなる。したがって、中には「北殿村の儀往古より右原に入会い来たり候え共、因縁故出訴難儀に存じ奉り候に付き、右原入会を離れ申す

所存にて入方村へも断り相立て出入りに相加わり申さず候、これに依り出入出銭等も差し出し難く……(北殿区有文書)というように、困窮を理由に出入りからおりて入会権を放棄するといった例(鳥居原)も生まれるが、多くの場合村内はもちろん、各村々は「此の以後右出入りに付き御役所は申すに及ばず江戸御奉行所迄御訴訟に罷り成り候共、右出入りに付き路用その外諸入用……先格を以て遅滞無く□□差し出す可候。万一同出銭遅滞に及び候村方御座候わば右論所の義は勿論外入会山原へも一切入会い相退き申す可候……」というように誓約をして結束を固め、長期に争論も無い抜いている。これは、租税負担を通して共通の利害に結ばれ、他の村の侵害に対しては共同して必死になって自村の権利を守ろうとする強い執念が、繰返し起こる争論にもかかわらずその困窮に耐えて闘わせたと考えられるのである。

また、幕府は貢租の絶対額を減らすため、耕地の拡大に意欲を燃やしているが、開墾の対象地域がしばしば開墾しやすい平地の雑野に向けられる。雑野が開墾されることはそれだけ肥料供給の場所が減少することになるので、既存の農民はその開墾に反対することになる。左にその資料を掲げよう。

雑野入会村々相定め之事

一、此の度飯島御役所にて仰せ渡され候は、入会雑野大芝原・三本木原・上溝原此の三箇所原の内に、三拾町歩程新開致し候様仰せ付けられ候。此の儀只今迄有る成りの野山にても殊等刈り尽し、古田畑養いも末々不足致し、然る所に右新聞御開け致し候ては弥々以て古田畑養い不足致し、惣百姓困窮の基に御座候。然る上は、此の度御役所にて何分仰せ付けられ候共、右新聞御開け相成り申す間敷く候。これに依り入会村々の内に長百姓並びに水呑等に至る迄、右新聞御受け一切仕る間敷く相定め候。若し少し成り共新聞御受け仕り候村方これ有り候

雑野入会村々相定め之事
一、此の度飯島御役所にて仰せ渡され候は、入会雑野大芝原・三本木原・上溝原此の三箇所原の内に、三拾町歩程新開致し候様仰せ付けられ候。此の儀只今迄有る成りの野山にても殊等刈り尽し、古田畑養いも末々不足致し、然る所に右新聞御開け致し候ては弥々以て古田畑養い不足致し、惣百姓困窮の基に御座候。然る上は、此の度御役所にて何分仰せ付けられ候共、右新聞御開け相成り申す間敷く候。これに依り入会村々の内に長百姓並びに水呑等に至る迄、右新聞御受け一切仕る間敷く相定め候。若し少し成り共新聞御受け仕り候村方これ有り候

図 5-7 新聞拒否のための雑野入会村々相定め之事

わば右三か所は勿論外の
入会野山にも一切入れ申
す間敷候事。

(中略)

明和九年七月八日

種子集村 幕右衛門

田邊村 伝四郎

外六か村(略)

(堀ノ井大東文書)

これは、飯島役所から大芝原、三本木原、上溝原のうちで三〇町歩ほど開墾するよう仰せ付けられたが、この

雑野に入り会っている八か村の代表が集まって相談をし、この開墾の要請を、古田畑の養いが不足して百姓が困窮をする基になるという理由でこれを拒否することにし、さらに、もしこの約束を破って一村たりとも役所の要請を受けるような村がでたら、その村はこの三か所の雑野のほか、他の入会野山にも入らせないという罰則を定めた申し合

わせである。

この結果がどうなったか資料の上では判明しないが、たとえ支配者である幕府の役所の命令であっても、幕府に納める貢租を生産する古田畑を養うに必要な入会地を守るという大義をもって、村々は団結してこれに闘ったのである。

二 主要な入会地争論

一 真忠平の公事と裁許

寛永一三年（一六三六）ごろから、鳥居原・中野原・御射山・北沢山等の入会山原について、箕輪領と高遠領の農民の間で小ぜり合いが起きていた。それは、箕輪領内である鳥居原におおい新畑が開かれ、その新畑に対して高遠領民が入会地が減少するとして、牛馬をわざと入れて新畑の耕作を妨害することがあった。また、高遠領では保科肥後守の代に小沢入りで金銭が抑えられるようになり、そのため新家が立てられて真忠平の入会地に七畝ほどの新畑が開かれた。箕輪領はこれに抗議して新畑を押さえたが、高遠藩奉行から箕輪領奉行に対して新田の者を救うための多少の新畑の開墾を認めるように強い要請があり、箕輪奉行衆はこれを容認した。ところが、その後もしそかに新畑の開墾が進められて、国替で高遠藩主が鳥居主膳になったころには、その面積は三町四反ほどに増大していたのである。

このような状況下で、寛永一五年（一六三八）四月一八日より、箕輪領百姓は番人をつけて前記四か所の入会地に対して高遠領の農民の立入りを阻止することになった。この措置によって高遠領の御園村・山寺村・東伊那郡村・羽島村の四か村は江戸奉行所へ目安状をもって訴え出した。こうして、大きな公事となったのであるが、箕輪領からは佐生次右衛門が数人の事情をよく知った農民を召し連れて奉行所に出頭、松平出雲守の前で両者が対決し、事情をよく調査の上で山原の大方の問題は解決したが、真忠平の問題は高遠領前領主保科肥後守次第というところになった。そのため、山形の最上へ行ったが、そこではかすかべの庄屋扱いとなり、神慮が行なわれて双方次のような手形が交換されることになった。

一、今度山原の出入りについて江戸まで罷り下り、松平出雲守様御前にて様子互いに申し上げ、山原の儀は済み申し候。道より北の内沢町四方の内入相に定め申し候事実正也。

一、まむし平済み申さず、ついで保科肥後殿御口次第と御済みなされ候。付いて最上へ下り申し候てかすかべの庄屋習のてい衆あつかいに、高遠衆神慮成され候わば高遠領領分にきわめ、みのわより神慮成され候わばみのわ領分にきわめ申すべく候。

但し神慮高遠領にきわめ申し候。此の手形次第にてたがいにはよりかへし申し候。

其の為手形件の如し

寛永拾五年

寅十一月九日

天嶋弥吉殿

食田勘兵衛殿

清水介之丞殿

右表書きの通り相済む者也

寅の十一月十五日

長坂四郎守印

（南殿酒屋文書）

同 治左衛門

かすかべのせう人
唐沢長右衛門印
せきや次兵衛

このようにして出入りはいったん解決したが、それから二七年後の寛文六年（一六六六）ごろから再び争いが始まった。寛文六年に箕輪領から奉行所に提出された「體面書上」によってみると次のようである。真忠平の箕輪領内に立木が伸びて来たのでそれを切り倒したところ、高遠領から大勢が押しかけてきて鎧を振る鉄砲を打ちかけ、さらに与地の百姓を打ちのめす等の乱暴を働き、小沢村で新林を立てたところをなぜ切り払うかと、大境を無視した主張をしていると訴えてい



図5-8 寛永平争論裁許図

る。
その後は箕輪領に成育した松の木を忍び忍びに高遠領民が盗み取りをしたので、寛文九年（一六六九）、箕輪領で一斉に切り払ったところ、高遠領民が大騒ぎを二町ほど打ち越して来て沢尻村の林、居る所の桑の木等三九〇〇本ほどを夜中に切り荒すなどの暴挙があり、再び江戸奉行所での裁きを受ける大きな争いになった。

そのため、寛文一〇年（一六七〇）に幕府の検使が現地に来て現状を検分し、奉行所において次のような裁許が行われたのである。

裁許図裏書

信州高遠領御園村・山寺村・東伊那郡村・須島村・小沢村と、同国飯田領御子集村・田原村・殿村・久保村・大置村・中条村・与地村境論の事、高遠領よりは伊那郡道限りの南は高遠領、北は飯田領にて野は入相の由申し候。飯田領よりは真虫早より東へ八分目迄の由これを申し、双方申す処不分明に付き見分の為深尾五郎右衛門・赤井七郎兵衛検使仰せ付けられ、其の処に於いて当地及方百姓相対を以て境目委細に書き記し、伊那郡道より権現坂道より小坂迄は原の端通り、それより西は真虫早の北平の八分目双方の境たるべし。但し、入相の野は南は右の境、北は御園山道通り、西は小坂の下迄、東は春日街道迄の内双方入相たるべし。小坂西へは高遠領より一切入るべからず。但し、有り来りの道は往還すべし。入相野の内に沢尻村

の儀は先規入相の由双方取替わし証文これ有りとも雖も、拾六年以来飯田領より木植えの家居もこれ有る条、自今以後飯田領進退すべし。

勿論入相の内へ双方より新築新林一切致すべからず、後儀の為絵図の表裏目に墨引之に印判を加え双方へ下し置き候間水く違失致すべからざる者也。

寛文十戌年四月十二日

内藤 伊右衛門

赤右衛門 出雲

大隅 甲斐

山城 但馬（但馬守様御判給図表にこれ有り候）

大和 美濃（美濃守様右に同じ）

（役場文書・南蔵酒屋文書）

かくて、寛文一四年から始まった出入りは三二年後の寛文一〇年になってようやく江戸奉行所の裁許という形で決着をみたのである。

この後も、しばしば付近に新畑仕出し等の事件がおきているが、この寛文一〇年の裁許図が判断の基準となつて解決されている。

(四) 北原鉢場出入り

宝永元年（一七〇四）七月一五日、北原鉢場に木下村百姓四人が草刈りに入った。これを見た北殿村百姓の四人が木下村は入会村でないのに入つて草を刈るのは盗み刈りだとして、木下村百姓の鎌一丁と鞍一口を押え取った。すると、木下村の者が四〇人ほど押し掛けてきて押え取った鎌と鞍を奪い返すという事件が起きた。これが発端となつて出入りとなり、翌安永二年正月木下村から幕府奉行所へ訴状が出され公事となった。木下村の主張は、北原は古来から入り会つてきた場所であるといひ、他の入会八か村は北原へは木下村はいっさい入り会つていなかったと主張している。

同年四月二五日、評定所で吟味の予定になったが、検使役が定ま

り、訴客双方から口上書が差し出され、事情聴取が翌三年の三月まで続いている。この北原の録場は元禄二年（二六八九）に出入りがあり、富田、中曾根が入会権を獲得しており、この二村も争論に加わり、双方の主張の内容が複雑で容易に解決の運びにならず、同年八月、検使として新庄太右衛門と木暮明右衛門の二人が現場調査に來た。ここでも検使の質問に応じて双方から多くの口上書が出されているが、八か村側から出された口上書は二〇通にも達している。

(三) 三本木原・上ヶ清原・大芝原の争論（寄合新田）

……大萱村の者共入会の原中へ大分新畑新林仕出し申し候故、入会の村々より人を以て新畑新林引き候儀に申し遣わし候所、有無返事これ無く、此の末も切り開き申す可しとがさつたる申し方仕り候。これに依り是非無く御訴訟申し上げ候。御披見の上大萱村の者共召し出し新畑新林御渡し前々の通り仰せ付け下し置かれ候儀願ひ上げ奉り候。大萱村の新畑新林其の儘に立て置き候ては、入相村相立ち申さず過く難儀仕り候。殊に新畑新林仕り候証等も御座候間御意に前々の通りに仰せ付けなされ下し置かれ候わば有難く存じ奉り候。以上

（千村屋文書）

これは大萱村が入会原に対し新畑新林を仕出したことに対して、元文五年（一七四〇）入会村々一二か村が大萱村を相手取り、代官所に出した訴状の末尾である。

このようにして争論となったのであるが、大萱村としては切開いた新畑新林はすべて大萱村の内野の分であるとして承服せず、遂に江戸



図 5-4 三本木原上ヶ清原大芝原出入権争論地図（寄合新田の図）

公事となったのである。幕府から検使が来て現地を調査し、特に検地帳の土地を一筆ごとに当てることを行なわれた。そして、寛保二年（一七四二）十一月一二町七反二畝五歩半が入会地への養食であるとし、この土地を撥き散らしとして入会村々へ差し出すよう裁断が下された。したがって、この撥き散らし地は当然、株野となって入会利用されるべきであるが、実際には入会株場に戻されずに、入札によって羽広、神子柴、田畑、南殿の四か村が共同、すなわち寄り合いで買い取って畑のままで利用することになった。これが寄合新田と呼ばれるものである。

この寄合新田は一つの新田村になるわけであるが、実質的には一戸も農家はなく、右の四か村の農家が自作によって耕作し、名主は四か村の名主が交代で寄合新田の名主を勤め、年貢は寄合新田の名で納入するという形によって運営された。しかし、宝暦九年（一七五九）になって、神子柴、田畑両村はその持分を大萱村に譲渡し、寛政元年（一七八九）には南殿も同じく持分を大萱村に譲渡し、寄合新田は大萱、羽広両村のものとなって、それぞれ村の石高に加えられて寄合新田は解消したのである。

このようにこの新田新林の仕出しによる株野の争論は寄合新田を生み出したという点で、特殊な例であったということができよう。

四 大泉所たる一件争論

この争論は天保一四年（一八四三）八月里方の村の一部のものが大泉所のたるといふ所（図5-2参照）に、地元村である大泉村に連絡なしに新道（馬道）を切り開こうとしたことに端を発した山論である。

大泉村等五か村の山方の村々は「大多留に新道造り込み馬足自由に致し候ては入会拾三か村の村々多分の馬数を以て諸木伐り尽し候儀は三か年を待たず」□にて青木尽き禿山と相成り候間、水元絶え五か村用

水渡の儀は眼前にて……、というように馬道を作ることに伴う乱伐、水源枯渇を心配して反対し、大泉村外四か村より松本預り所に訴え出した。そして、遂に江戸奉行所によって裁かれる公事に発展した。

その後、示談が進み内済証文もできて争論が終わるかに見えたが、南殿村はこの内済証文に捺印せず、久保、塩ノ井を講じて訴え側になって天保一五年三月、江戸奉行所に逆訴訟を起こしたのである。審理開始後は奉行から何回も示談が勧められ相互の話し合いが行われたが容易に内済が整わず、訴訟より二年半を経過してしまった。

弘化三年（一八四六）四月に至り、ようやく示談が成立し、奉行所の裁断ということにはならなかった。その示談書の主要部は次のようになっている。

……右出入り御吟味中の所拾三か村入会、大泉所一山の中何れの場所にて牛馬索入れずとの議定これ無き上は今般の論所相手方にて牛馬差し留め候段心得違ひ、尤も相手村々へ一応の懸け合ひも致さず訴訟方並びに引き合ひ村預りに取り續い方致し候段是又訴訟方引き合ひの者其心得違ひの段夫々相弁え、猶亦たるの場所其の外共先年より有り来たるの道筋を以て牛馬通用致し候儀は相手方差し障り申さざる筈、且婦村の上一同立ち合ひ有り来たる道筋出入り中全く破損致し候場所の見極め候わば、元形見合ひ取り續いたし追って新道切り開き候か、又は有り来たるの道筋破損等出来候節は文化度諸口証文の趣に基づき大泉村へ相届け、入会一同熟議の上取り續い致す可く、その御相手方いわれ無き故障申す間敷く、其の外文政度議定相守り候旨にて双方申し分無く熟議内済……

（塩ノ井大東文書）

これによると、「何れの場所にて牛馬索入れずとの議定これなき上は、一論所の相手方にて牛馬差し留め候段は心得違ひ……」として南殿側の理論的主張は認めながら、一方で「たるの場所其の外共先年

より有り来たりの道筋を以て牛馬通用致し候儀は相手方差し障り申さざる筈」として、新道による馬道を否定し、実質的には大泉村四か村の主張が認められるという内容になっている。

なお、以後において新道切り開き、あるいはありきたりの道筋の取り継ぎに際しては充分に地元村に連絡し、入会村一同熟議の上で行なうこと、また、入会山の利用については文政年間に議定した大泉所山の入会利用規定を守るよう再確認するような内容になっている。

第三節 近代における入会地の変化

一 地租改正と入会地

(一) 筑摩県下における入会山野の地租改正

明治の新政になっても、農民の生活形式も幕末の状態で継続されていて、入会林野は重要な意味を持ち続けていた。

ところが、明治政府は近代的な租税制度の確立のために、明治六年七月地租改正条例を施行し、田畑や宅地のみでなく林野に対してもその作業を進めたのである。

林野は田・畑・宅地の地租改正作業の終了後から始めているが、既に明治六年三月「地所名称区分法」(太政官達一一四号)を出して政府の意図を示している。すなわち、凡ての土地を皇官地・神地・官庁地・官用地・官有地・公有地・私有地・除税地の八種に分類し、「公有地」とは「野方稼場の類、郡村市坊一般公有の税地又は無税地」という規定で、所有形態のあいまいなものを公有地とし、入会地はほとんど公有地に編入されたのである。

当初農民は公有地編入がどのような意味を持つものなのか、充分に理解ができなかったようで、後に提出された民有地編入の願い書の中に「維新以来公有地ノ名ヲ下スモ未開ノ人民字義ノ何タルヲ知ラズ、唯共有地ノ一名ト私想スルノミ」と記しており、上知(幕府に所領を返上する)して支配者が変わった程度に考えていたようである。しかし、中野原への入会のために次のような願い書が出されていることは、当時の政府と農民の間の微妙な変化を表わしているといえる。

悉く年々書付ケテ以テ願い上げ奉り候

私共村々入会字中野原ノ義上知仰せ付ケラレ承知候ニ奉り候。然ル共草刈リ

時節ニ立テ至リ空敷ク原野ニ朽チ腐リ候ハ歎カワ敷ク存ジ候間、油ツテ御所
置仰セ付ケラレ候迄従前入会村々ニテ株刈リ取り糞肥糞シ支ニ相成ラザル様
仰セ付ケラレ度ク、然ル上ハ是迄ノ通り野手米上納仕ルベク候間、何率格別
ヲ以テ御終意御許容成シ下シ置カレ度ク願ニ献願奉リ候。以上
明治六年六月二十七日
第十七大区八小区

筑摩県令

(以下入会二三か村代表署名略)

永山盛雄殿

書面ノ趣聞キ届ケ候条追ッテ入札相違シ候迄従前ノ通り相心得候事。

六月廿七日

(返ノ井大東文書)

印

入会地利用の願いは早速聞き届けられているが、この許可の文面の中にも「入札相違シ候迄」とあるように、明治七年一〇月に公有地は相当代価を払って払い下げを受けなくてはならないという通達を受け、公有地編入が単なる支配者の変更ではないことを知って、農民たちは驚き慌てたのである。

明治七年十一月、政府は太政官布告第一二〇号によって新たに「地所名称区分法」を公布し、全国の土地を官有地と民有地の二種に区分し、公有地という中間的なものを無くしてしまった。民有地はさらに一種と二種に分けられるが、一種は「人民各自所有の確認あるもの」であり、二種は「人民数人或は一村、或は数村所有の確認ある土地」とされ、所有の確認の無い限り土地は官有地に編入されることになった。このようにして入会地の地租改正は「所有の確認」の存在をめぐる争いとなり、民有となるか官有地とされるかという形で進められた。入会山野の官民有区分の確定のため政府は各村に入会地の「原由

書」を出させているが、南箕輪村では明治八年次のような原由書を筑摩県令あてに差し出している。

入会地原由書上

(注大芝原の分だけ掲げる)

△字大芝原

旧反別百八十町歩

第十七大区九小区

反別三百貳拾六町七反九畝九歩

伊那郡入会郷地元 南箕輪村の内

野手米 五斗四升

羽広耕地・大芝原耕地・大泉新田耕地・

吹上耕地

境 東へ春日道

西へ大泉所山

南へ寄合新田羽広耕地

北へ大泉村大泉新田吹上耕地



図5-10 入会地原由書上 (返ノ井大東文書)

右ハ古来ヨリ入会地ニテ、殊ニ肥利ヲ取リ致シ来タリ候処、去ル守曆七年野手税米上納仰セ付ケラレ、租税割割リ付ケニ百姓意場年貢ト記載コレアリ、右租税ノ儀ハ各村ハ分限高割リヲ以テ上納仕リ、前々ヨリ自由致シ候。此ノ段申シ上ゲ奉リ候。

(堀ノ井大東文書)

政府は明治八年六月地租改正事務局達乙第三号によつて、「三各地方山林原野池沼等官民有区別ノ儀ハ、証拠トスベキ書類コレ有ル者ハ勿論、区別判然致スベク候共、従来数村入会又ハ一村持チ、某々数人持チ等類年貢行存在シ、比隣郡村ニ於イテモ其処ニ限り進退致シ来リ候ニ相違無キ旨保証致シ候所ハ、仮令簿冊ニ明記コレ無ク共慣行ヲ以テ民有ノ確証ト認シ、是ヲ民有地ニ編入候儀ト相心得ベクニ」と、入会地官民有区別の規程を示した。筑摩県はこの趣旨に従つて官民有の区分をし、本村関係の入会地は一か所も官有地に編入されることなく、全部民有地第二種に編入されて、次のような通達を受けた。

「其ノ村々普通公有ト相唱ヘ候所相当代儀ヲ以テ御私イ下ダノ儀、昨七年十月中相違シ置キ候処詮議ノ次第コレ有リ、右ハ取り消シ従前ノ通り入山並シ免シ候条、地所ハ民有地第二種ト相心得此ノ旨更ニ相違シ候事。但シ左ノ通り請書差シ出ス可キ事。」

指令永山盛輝代理

筑摩県参事 高木盛矩

明治八年十月十五日

(堀ノ井大東文書)

各地において多くの入会地が官有地に編入されて、自由な入会利用ができなくなつたところが在つたのに比べ、全入会地が従来のままで入会利用ができる形で残され、しかも、相当の代償を支払つて払い下げを受けることも必要がなくなり、村全体が安心をしたことであり、

早速次のような請け書が入会村々連名で出されている。

御請け書(注北沢山の分だけ掲上)

字北沢山

南宮輪村之内

一、反別千五百九町六反歩

地元神子榮耕地

東御射山

入会外五耕地

西木曾奈良井川

西宮輪村の内

南神名沢

与地耕外四耕地

北横川山

伊那村一円

伊那郡村の内

東伊那郡耕外三耕地

右ハ昨年公有地並ビニ官林ノ旨仰セ渡サレ候処、従前野手税上納自由仕リ来リ候慣行ニ依リ更ニ民有地第二種ニ編入仰セ渡サレ承知致シ奉リ候。然ル上ハ相当価値相付シ本月終日迄ニ申シ上ゲ奉ル可ク候。コレニ依リ御請け書差シ上ゲ奉リ候以上。

明治八年十月十五日

第十六大区八小区伊那郡戸長中村喜平

第十七大区廿小区伊那郡戸長三沢信十郎

第十七大区八小区西宮輪村副戸長有賀九左衛門

同断 宣下源八

第十七大区九小区南宮輪村副戸長清水平一郎

戸長 高木省三

(堀ノ井大東文書)

(二) 長野県下における再調査

明治政府は先に公布した乙第三号により、「入会慣行の存在する土地全部を所有権の確証あるものと視認」して民有地に編入することは、官有地に編入する面積が極めて少なくなることを知り、半年後の八年十二月、「曾テ培養ノ労費ナク全ク自然生ノ草木ヲ採伐シ来タルノミ」の土地については、入会のどんな証拠書類も所有の確証とは見

なさないという、地租改正事務局乙第一号を公布した。

筑摩県は既に入会地の官民有区分を乙第三号の規程で決定してしまつたため、乙第一号は適用されなかったが、旧長野県ではこの乙第一号を適用して官民有区分が行なわれ、かなりの官有地編入が強行された（『県政史第一巻』）ようである。

ところが、明治九年筑摩県が廃止され、旧筑摩県下の大部分の町村は、長野県に編入された。そこで、地租改正のための官民有区分は次の資料のように再調査されることになったのである。

第十六大区第十七大区區長

各小区正副戸長一同

宛

各耕地地租調査代一名

右ノ山林原野改組ノ儀、旧筑摩県ニ於テ反別及ビ地価表トモ取り調べ引続キコレ有リ候所、南北部ト異ナリ候廉一同へ諮問候儀コレ有ル条来ル十一日午前十一時限リ西高遠町派出官旅宿へ前員連番無ク罷り出ズベク候此ノ旨相達シ候事。

十年三月七日 長野県筑摩出張所

（役場文書）

このように大区長、小区の正副戸長、各耕地の地租調査代を西高遠に呼び集め、派出官から山林原野の官民有区分の定め方が南と北（旧筑摩県と旧長野県）で異なっており、本省の達（乙第二号）に抵触している点があるからと、再調査をすることを言い渡されたのである。これに対し、各村々の希望は圧倒的に多くが旧筑摩県の調べのまま据え置くこと、ぜひとも更正が必要であるなら、第二次地租改正時にして欲しいとの考えによる願い書が次々に提出されたのである。それを見て、県もやむなく筑摩県決定のまま五年間据え置きの際で政府に伺いを立てたところ、「五カ年間据え置きノ積リ聞き及ビ申シ候所、成規

抵触ノ際ハ再調査遂ケ申シ立ツ可ク」と（役場文書）と再調査の実行を命ぜられた。そこで、県は再調査のため六月七日付けで入会地の「従前公有地箇所取調帳」として、原由慣行を二〇日までに提出するように指示した。その中に「是ハ検地水帳、小給書キ抜キ帳ニ記載コレ有ルカ、或ハ公証トスベキ書類コレ有ルカ、何村持ト唱へ自由致シ候カ、従前民費ヲ以テ苗木植付ケ又ハ培養手入レ致シ来リ候カ（中略）原由慣行及ビ税納有無詳記スベシ」（役場文書）としてある。

村としては早速「従前公有地箇所取調帳」を作成して提出したものであるが、これに付けて次のような証憑書類も提出している。

一、寛文一〇年 真由平絵図面一枚 一、宝永四年 北原絵図面一枚

一、宝暦七年 御割付付ケ 五通 一、宝暦十一年 御割付付ケ 二通

一、天保十一年 三本木原規定書一通 一、明治二年 入会外談書一通

一、明治四年 北原分割絵図面一枚 一、明治五年 南沢外口証文一通

しかし、再調査の間、入会村々の不安は大きく、県からの質問に対してであろうと思われる奉答書のはかに、次のような三か村總代の「上申」が出され、さらに、民有据え置き願い書が出されている。

上申

数号証書成續ヲ以テ旧筑摩県ニテ民有第二種へ編入仰セ渡サレ候間、此ノ上旧筑摩県処分御据ニ置キ成シ下シ置カレ候儀此ノ段願イ上げ奉リ候以上。

明治十一年二月十八日 右伊那村人民衆代 小坂又五郎

右西筑摩村副戸長 林宇右衛門

右南筑摩村副戸長 原新吾

長野県権令地務課直轄

奉答書の中では、長野県の南北を比べて山林原野に官民有の差の大きいことを理由に、山林原野慣行書等を出させて再調査をさせることは、人民の不信を招くものであると言ひ、さらに「民有ノ權ヲ剥奪シ

テ官ニ属サンヤト、實是豈在昔ヨリ自由進退シ賈租ヲ納ムル等完備然タルヲ、今特ニ此ノ地ヲシテ官ニ属シ山林原野ヲ徴セバ牧民何ヲ以テ産ヲ開キ田圃ノ養肥ニ充ツ、薪炭如何ニシテ充備ス、粒米何ヲ以テ炊クト、頑民ノ苦情極々タリ……(堀ノ井大東文書)と訴え、また願書においては「右山野ノ如キ實ニ人民安危ノ出ル処ニシテ、此ノ上何分ノ民有ヲ失シ候様相成リ候ケハ人民活路ヲ失シ、其ノ罪過ルニ道ナク、且ツ方今人民ノ苦情ヲ聞クニ対スル言ヲ得ズ」(同文書)として、農民の衷情とそれを説諭する言葉のないことを述べて民有額を置きを歎願している。

このような入会部落民一致の運動の効があつてか、再調査の結果「原由慣行成蹟調査並シ出シ候処書面山野ハ成規抵觸ノ義モ相見エザルニ付」ということで、明治十一年九月に民有地額を置きで結着がついた。こうして入会地の官民有区分という大きな問題は、本村関係分は全部民有地第二種に編入になり、実質的に従来と同様に入会のできる形で残されたことは、村の発展のために幸せなことであつた。

しかし、民有地編入に当たってそれぞれの入会地の面積は実測面積となつて、地価もかなり高く決定されたのでその一〇〇分の三の地租はかなり高く、それまでの山手野米代値の四・五倍の税額になつてゐる。また、地券交付に当たり、入会地の地引帳はそれぞれの村あるいは部落に分割して記入された場合が多く、それが後の入会地分割の一つの大きな引き金になつてゐる。

二 明治以後の入会地の利用と保護

(一) 入会地の利用

入会山野は明治になつても幕府治下とそれほど変わることなく利用されてゐた。特に明治の中期までは農業経営と農民の消費生活に欠か

せない場所であつた。水田の養肥としての刈敷は主として大衆所山、藏鹿山、北沢山、南沢山等の薪山で刈り取られてゐる。その明け山の通知を次に掲げる。

例一 癸卯第五七九号 明治四五年五月二十七日

村長 伊藤 保任

助役 伊藤 保

北沢山刈敷明ヶ山ノ儀田賃銀子五月節ヨリ三日間早メ六月三日ト決定故シ候間関係部落へ御示達相成リ度ク御通知申シ進メ候也

村役場

伊藤 輪村 役場宛

例二 丙第一二七号ノ乙

宇御村山刈敷明ヶ山ノ口明ヶノ儀六月五日ト決定候条、御部内一般へ御触レ廻シ相成リ度ク此設通知ニ及ビ候也

大正六年六月二日

役場

各区長殿

(役場文書)

この二例は明治末から大正時代のものであるが、いずれも役場からの公文書の形になつており、前者は入会の他の町村への通知であり、後者は村内区長への通知である。北沢山については地元部落である神子柴区長から村長に明け山通知が出され、それに基づいて村役場から他町村や村内各区に通知するようになっており、入会地における地元村という慣行はこの時代にまだ残つていたことがこの資料からわかる。

これらの入会地が村有という形になつてからの入会利用は、村有財産からの産物の採取ということになり、村議会の議決を経て明け山の通知が出されてゐる。

殊は、主として北原・大芝原・三本木原・中野原等の秋場といわれ原野で刈り取られてゐるが、刈敷同様明け山日限が定められ、入

表5-3 明治以降入会地の利用とその変容

	大泉所山	御射山 蔵鹿山 矢ノ南入	北沢山	南沢山
明治前期	<ul style="list-style-type: none"> 白木伐木炭焼等悉皆禁止（止ムヲ得ザルトキハ戸長役場ノ許可ヲ得ルコト） 検・樵其他草木ノ生皮ヲ刈グコト禁止 本則ニ背ク者一ノ五ノ年入山禁止、重犯ニモノハ警察ノ所断ニ委ス （明治一四・大泉所山保護契約書） 		<ul style="list-style-type: none"> 刈敷山五月節ニ明ケ半夏翌日ヨリ留山、秋止 秋止マデ草刈入山禁止 秋止前明山ノ儀被禁入七日前明山 （明治五・差上申濟口証文ノ事） 	<ul style="list-style-type: none"> 刈敷山ノ口五月節ニ明ケ半夏翌日ヨリ留山 秋止前明山ノ儀被禁入七日前明山ノ事
明治中期	<ul style="list-style-type: none"> 本山ニ火災アルヲ知ラバ警察ヲ表ス 警察ニヨリ毎戸一人ハ必ズ出動消火ニ努メ放ナク欠勤ノトキ罰金一戸二〇銭徴収（明治一七野火防衛規程） 植林地三カ所規約ノ事 （明治一八仮約定証） 	<ul style="list-style-type: none"> 共有人民ハ入山伐木ヘ収得不可、炭焼ハ禁ズ 北沢洞ヲ共同植林地トス植林地ノ伐木刈草ヲ禁ズ違反者十五年間入山禁止 植林地所内境界ニ防火線ヲ設ク （明治一八蔵鹿山保護法） 	<ul style="list-style-type: none"> 輪伐法ヲ以テ積木ノ生育ヲ保護ス 伐木禁止ノ場河デ伐木シタル者ハ代償ノ五〇倍ノ罰金ヲ償フコト 輪伐ノ箇所ハ一年一回見回リ 刈敷・夏草・意葉等ノ採取ハ輪伐ノ箇所ニカワラズ從前通り 刈敷・夏草等明山前日地元村番人見回リ 	
明治後期	<ul style="list-style-type: none"> 刈敷ハ芒種五目下リ明山ノ慣行 夏草ハ土用入十日目前 薪・切石年中制限ナシ 屋根板・小白木自家用ノミ・売物ハ禁止 （明治四四入会地慣行調査） 		<ul style="list-style-type: none"> 刈敷・夏草ハ芒種（六月五目下リ）明山ノ慣行 葉ハ秋後後明山ノ薪・切石年中制限ナシ （明治四四入会地慣行調査） 	
大正期	<ul style="list-style-type: none"> 大正五、大泉所山分割入会権解消 大正九、大泉所山南麓輪割受分村有統一決定 	<ul style="list-style-type: none"> 大正九、御射山入会権及ビ持分ヲ村有ニ統一化決定 大正九、蔵鹿山・矢ノ南入会権及ビ持分ヲ村有ニ統一化決定 	<ul style="list-style-type: none"> 大正九、北沢山人会権及ビ持分ヲ村有ニ統一化決定 	<ul style="list-style-type: none"> 大正九、南沢山人会権及ビ持分ヲ村有ニ統一化決定
昭和前期（戦前）	<ul style="list-style-type: none"> 昭和二、官行造林 昭和二、公有林野官行造林地保護及ビ産物採取条約制定 昭和九、公有林野官行造林追加 		<ul style="list-style-type: none"> 昭和七、北沢山分割入会権解消 昭和一〇、官行造林ノ為一部地上権ノ設定 	<ul style="list-style-type: none"> 昭和七、南沢山分割入会権解消 昭和八、南沢山・神部北沢山デ受ケル全
昭和後期（戦後）	<ul style="list-style-type: none"> 昭和二二、一部部落有山林野ノ所分 	<ul style="list-style-type: none"> 昭和二八、蔵鹿山十萬本植栽開始起ル 昭和二三、蔵鹿山・御射山入会地分割 昭和三八、矢ノ南入分割 昭和二三、三四蔵鹿山・御射山管理運営委員会発足、植林開始 昭和四三、生産森林組合発足管理 		

第3節 近代における入会地の変化

[illegible]

相札スコト
。取締りノ為野分員被
鑑札ヲ懸け方掛ク

。白露明野秋分中ニ止
。明野中午前中自由
刈り取り

。伐採・売却
。食糧増産ノ為開墾

合：入植開拓

会部落に通知されて一斉に入野して刈り取っているが、一般に午前中だけ刈り取る定めになっていたようである。

用材については、自家用であればかなり自由に伐採されたようである。屋根板、小白木等も自家用の伐採は認められていた。しかし、販売のための伐採は禁止されており、明治以後入会地の利用規定も逐次改訂強化され、また、造林も積極的に行なわれてその保護対策がとられ、入会地の分割や開墾等も大きな問題となり、入会地利用はしだいに多様化してきた。明治以降の入会地利用規定の概要および利用形態の変化は表5-3のようになっている。

（四）入会地の保護

時代が進むにつれて入会地の利用はしだいに多様化すると共に、気ままになる傾向を示し、人口の増加はこの傾向に拍車をかけることになる。そのため利用規定が厳しくなると共に、規定違反者に対する罰則も強化されている。一方で明け山前の盗み刈りなどを防ぐための見回りが定例化するようになっていく。明治一六年には村費に一〇円を計上し、次のような入会山の監視をしている。

入会山野ニオイテ刈敷臨ミ刈リノ者コレ有ル應相違キ候ニツキ、例年通り山番人足並シ出シ厳重取締リ方御注意コレ有リ度ヲ、就イテハ左記ノ通りノ割合ヲ以テ来タル二五日ヨリ施行相成ル様御執リ計ライ然ル可キト存シ候段申シ進メ候。

大泉所山・蔵鹿山へ 久保内村 大泉

申シ合ワセ山番差シ出シ申スベキ事

役場

南沢・神名沢・御射山 北殿・南殿・田畑
北沢蔵鹿山 神子・栄・沢尻
申シ合ワセ山番差シ出シ申スベキ事

（入会山分割史）

しかし、入会山の荒廃はしだいに進み、特に樹木伐採の増加が荒廃をひどくし、そのまま放置することは将来に大きな禍根を残すと考え、大泉所山については入会村々相害って、次のような保護契約書を定めて保護に努めたのである。

契約書（抜粋）

入会中大泉所山保護方法ヲ今般更ニ協議ヲ遂ゲ、該山ノ規定ヲ定ムル左ノ如シ。

第二条 白木及び炭焼等禁止ス

但シ止ムヲ得ザル場合ニ於テハ地元南沢・蔵鹿山長役場へ申シ出テ入会共有者ノ許諾ヲ得テ着手スルヲ法トス

第三条

。其ノ他木ノ生皮ヲ剥皮スルコトヲ禁ズ

第四条

放火セシモノヲ知りテ其ノ姓名ヲ告グズ、或イハ失火ヲ使視シ消防

第五条

本則ニ悖反シ若シタハ知りテ告グザルモノハ、一カ年以上五カ年以

内入山スルヲ禁ズ。該反重キモノハ警察官吏ノ所轄ヲ求ムルヲ法ト

ス。

第七条

入会集会ノ召集ニ応ゼザルモノハ入会協議ノ権利ヲ放棄ス。

右条款ノ規矩ハ入会ノ純利ヲ得ベキモノタレバ該者必ズ棄置スル事

勿レ、依ッテ担任ノ連署ヲ成シ後日ヲ保スル件ノ如シ。

明治十四年十二月十九日

上伊那郡南筑輪村久保耕地地代

丸山寛一

(以下入会各耕地代表者名略)

(堀ノ井大東文書)

翌年の明治一五年には北沢山・南沢山・神名沢の入会の村々は、この入会地の樹木を保護することを目的とし、二一か条に及ぶ「約定の証」を定めている。それによると「北沢、南沢ヲ区分シ輪伐法ヲ以テ樹木生育保護法ヲ設ケル」として、北沢、南沢共に輪伐地域と禁伐地域とに分け、輪伐地域だけで入山伐木を認め(ただし白木、黒根板、炭の自家用以外の伐木を禁止)、禁伐地域での一切の伐木を禁止している。さらに、輪伐、禁伐の地域を一〇年ごとに変更するという方法を取った。

刈敷、夏草、葛葉等は従来の規定に従い採取させているが、伐木と共に草刈りの違反者に対する罰則は厳しくなった。すなわち、樹木伐採禁止ノ場所ニテ伐木ヲナシタル者ハ伐木代価ヲ算シ五拾増倍ノ金額ヲ償フシム可キ事」、「刈敷、夏草、葛葉等入山期日ヲ犯シ禁伐シ、或ハ盗ミヲナシタル者ハ其ノ草ヲ取り揚グ十年間入山ヲ差止メルベシ」となっている。さらに、追加規定の中に、これらの規定が守られるように番小屋を造り、監守人二人を定めて保護を図るとしている。

入会地のより積極的な保護は植林である。国は地租改正により官有地を設け、より多くの官有林を作り、さらに森林の重要性を認識して植林を奨励し、その育成に努力を始めた。長野県としても明治一四年に植林奨励規則を制定し、少額ではあるが奨励金を交付して各村に植林をさせた。本村では入会地の北原に松の植林をしている。

第四節 入会山野の整理と林野の分割

一 入会林野の初期の分割

明治二年の中野原入会取り締りの「対談書」(堀ノ井大東文書)の中に、「入会山原ノ儀従前ノ仕来リモコレ有リ候処、連年自儘ノ取り計ライコレ有リ、且ツ又小黒原新発等ノ儀ニ付キ箕輪領ヨリ掛ケ合イ」に及んで、「箕輪領ヨリ手限リ入会原ノ儀割地開発」をしたいと提案されたことが記されている。このことに関連して明治五年の「示談書」(同前文書)の中に、「半中野原四分通り割地ノ分今般御松イ下ゲノ總御セ出サレ候所、右御松イ地相成リ候テハ入会總村活計ノ道ヲ失イ困難相極マリ、御園村、山寺村両村ノ儀ハ別ケテ難波ニ及ビ候ニ付キ」とあり、いったんは四分通り割地払い下げが伊那郡果から沙汰があったが、田高遠領の村々、特に御園、山寺両村から歎願書が出されて割地の事は、「総原ノ内式分通り、高へ五分戸数へ五分平等ニ割合イ違致ス可ク」と、二分通り割地すること示談が成立したことが示されている。この結果がどうなったか資料がなく不明であるが、入会原野が勝手気ままな利用になり取り締りも充分できないから、分割をして管理しやすくするか、開拓して利用しようとする動きがあったことが理解できる。

入会原野特に北原・大芝原・三本木原・中野原等は平地の原野であって、しかも村落の近くであるから、味を採取して家畜の飼料や肥料地の養肥源とするには便利な場所であるが、反面で、開墾をして畑として利用し、より有利な収益を上げたいという欲求もかなり強かったと考えられる。特に人口の増加、小作農民や兼業農民の増加は、入会地を開墾地として解放すべき圧力として働き、別に、用材及び薪炭需

第4節 入会山野の整理と林野の分割

図面半北原旧入会地一町立合資地反別及び
境界調査定数候條之相立人民永産權圖ヲ
守スベキ事也
明治十五年四月二十日

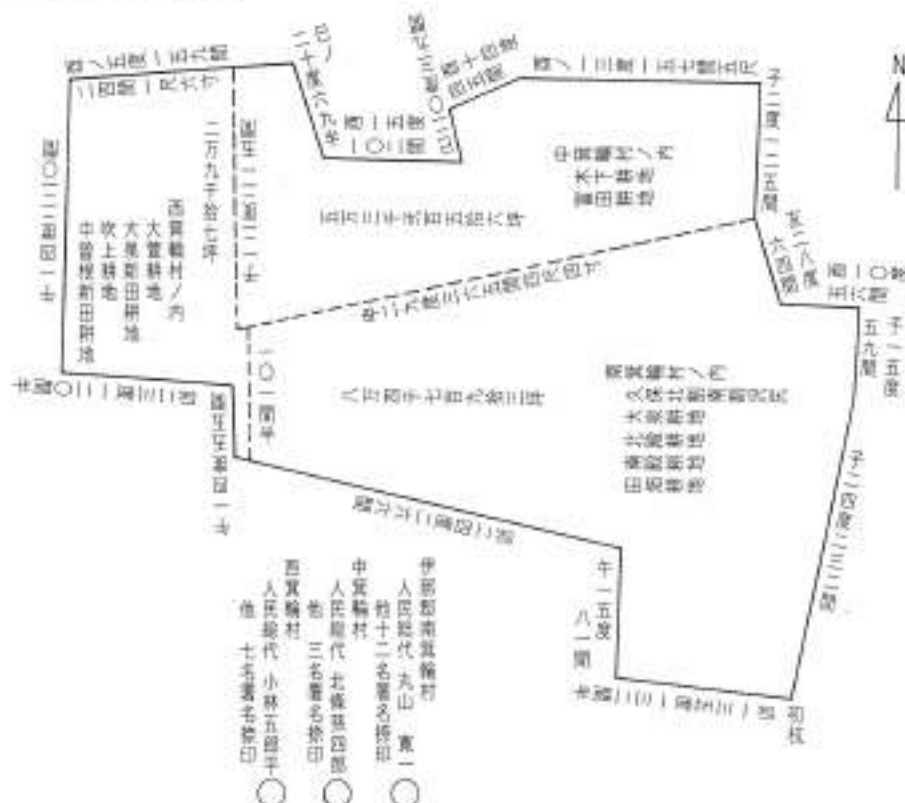


図5-12 北原第二次分割圖

- のようにさらに各個人に分割したところ、部落有の共有地として残したところ、南殿、田畑の割り受け地のように一括個人に買い取られて植林された所と様々である。
- 第二次分割は、第一次分割で割り残された原野の分割で、明治一五年に行なわれた。(図5-12) このとき旧村々はそれぞれ南宮輪・中宮輪・西宮輪の三か村に併合されたので、新しい三か村に分割するという形をとっており、それぞれの割り受け面積は次のようであった。
- 八万四千九百二坪 南宮輪村の内久保岡割・沢尻・大泉・北殿・南殿・田畑の各新地
- 五万三千二百六十六坪 中宮輪村の内木ノ下・富田各新地
- 二万九千〇一七坪 西宮輪村の内大宮・大泉新田・吹上・中曾根新田各新地
- (二) 大芝原の分割
- 大芝原は、明治一五年六月より分割作業が始められ、翌一六年四月次のような大芝原分割の「証」が作成調印の運びになり、五月に分割図が作成され裏書調印が行なわれた。(図5-13)
- 証
- 一、原野百五万三千三百五坪 大芝原全部
- 内三千四百九拾五坪 大泉新地并敷
- 此証千四百六拾坪 南宮輪村割譲区域二属ス
- 千八百六拾四坪 西宮輪村割譲区域二属ス
- 七拾万五千七百七拾五坪 南宮輪村
- 此証 三拾八万三千九百九拾七坪 明治九年調査新地宅地地代価調
- 三拾二万二千七百七拾八坪 同右反別受
- 三拾四万四千四百五拾三坪 西宮輪村



图5-13 大芝原第一次分制图

明治十六年五月廿六日

上海南京路333号

西其輪村

丸山寛一	征矢屋十郎	清水青	原信一	清水十郎	松沢源五郎	有賀一平
赤羽直	倉田三郎	清水重雄	清水平一郎	有賀光雄	日戸雄	森木恒三

源	有賀依四郎	源	有賀三郎
宮下源太郎	西村小文吾	林平右衛門	重盛五郎治
白沢 折藏	南新輪村戸長	景沢友三郎	榎高基三郎
西其輪村戸長		宮下源太郎	

此說拾四万八百六拾三坪

貳拾萬三千五百九拾肆

明治九年調查耕地宅地券代價
同右反別讀

捺印シテ交換スルモノ也

但シ里道及ビ繪テ

明治十六年四月

上伊那郡南筑輪總代

右ハ入会岡村總代一同立合イ去ル明治九年度地勢調査ニ基ツキ訂查リ遂ケ
標記反別ノ如ク分割ス。該境界線南端ヨリ広鉢地頭ケ寄合新田、東北隅栗ノ木
ヨリ丑ノ一分へ百三拾三間惣分武風、夫ヨリ戌ノ廿五分へ八間六分六厘ヲ距
リ宇新地驛坂路中央へ引キ付ク之ヲ解ギ、經界線東端ヲ以テ南只崎所有ト
シ、西部ヲ以テ西賀輪村所有トナス。斯ノ如ク分割整理經界線築設セル上ハ

丸山 寛一郎	赤羽 嘉一郎
征矢彦重郎	唐沢重一郎

大芝原の分割はこのように、北原での戸数への分割と異なり、地租改正時の地価と反別に割り当てる方式を採用している。

いずれにしてもこの段階で北原、大芝原共他村との入会関係は解消し、村内の部落だけの入会地になったわけであって、これがさらに各耕地へ分割されるのは明治三〇年代のことである。

二 入会山野の整理

明治になってから、入会地利用についての取り締りが不行届きになり、切り添え畑や立て出し林等による侵食がだんだんひどくなってきた。既に明治一三年、侵襲地の次のような解決の例が残っている。

示談書

大芝原ノ儀文政年度終面ノ通り更ニ越界相立テ申ス可ク、就イデハ切り添え畑ニテ共有ニ係ル部分ハ種々讀スベクハ勿論ニ候得共、数年ノ努力モコレ有リ、且ツ耕状等モ相受ケ候義ニ付キ、該本人ヨリ違ツテ相喚キ候ニ付キ、入会村々ニ於テモ勘弁ヲ加エ、畑ハ券面代価ノ壹倍（假令バ壹反ニ付キ三リ）トシテ本人ヘ売り渡シ申ス可ク、林ノ儀ハ立木ノ有無モコレ有ルニ付キ、實地ニ望ミ成分ノ代価相定メ是亦売り渡シ申ス可ク、尤モ耕状ニ関セザル分ハ悉皆撤去シ申ス可クコレニ依リ示談証件ノ如シ

明治十三年九月

上伊那郡西箕輪村惣代 倉田三郎

上伊那郡西箕輪村惣代（略）

（堀ノ井大東文書）

原 信一郎 清水 重雄
倉田 三郎 清水 斉
有賀 光彦 清水 十郎
清水平一 日戸 勝
松沢源五郎 有賀 一平
高木三郎 戸長穂高三郎

上伊那郡西箕輪村惣代 重盛兵太郎

（堀ノ井大東文書）

これは地租改正に際して侵襲地に地券を受けてしまった例であるが、地価の二倍の代価で売り渡すという形で解決している。このほかにも一三年、二一年等に侵襲地を売り渡した例があり、そのつど解決している面もあるが、長い年月の間に境界が不明確になっているところが極めて多くなってきた。このような事態を憂慮し、また一面で入会地分割の世論も高まっていた情勢を考へて、入会地の整理の必要性を痛感した穂高保三郎らは、村役場に働きかけて明治二九年五月に村に入会山野整理委員会を成立発足させた。そして、整理委員会は伊那町及び西箕輪村に働きかけて、その年から入会山野の実地整理にとりかかったのである。

この入会山野整理の内容について、終始指導的立場に立つて整理に努力した穂高保三郎の「入会山野実地整理日誌」（堀ノ井大東文書）によつて、その大要を記述しよう。この入会地の整理は明治二九年の五月から、同三六年の困難を極めた中野原分割終了の六月まで、足掛け八年の歳月を要し、委員会、総会等の会議二一〇余回、協議、談判を重ねること二〇〇回、境界踏査、実地測量、地図作成等を含め延べ五一五日の日数を費し、時には早朝から時には午後から深夜にかけて、時には行く先々に止宿して話し合いや作業を続けるなど、これに働いた委員や人足等の延べ人数はおびただしい数にのぼっている。

初めの中野原の境界実情調査を行なっているが、間もなく北沢、南沢両山の見回りになり、盗伐が発見されてその解決をした後、御料林との境界調査が行なわれている。この境界調査には御料局員立ち合い

表5-4 入会地特種分

ように、次のような入会地の特種が行なわれている。

入会地名	面積	金額	特種先
上ヶ渡原	新規立出分	五円(託書)	小沢(個)
"	"	"	大萱(個)
"(西部)	四丁五反五畝九歩	二〇五円〇銭	羽広
"	九反五畝一歩	九四四四一銭	"
三本木原	?	一〇〇円〇銭	大萱
"	立出分	?	"(個)
牛馬飼場	切添地	?	上戸(個)
"(大角坊北)	?	壹坪四銭	西宮輪村
牛馬飼場	四反二畝二五歩	一円〇銭	中桑(個)
中野原	立出分	六〇四〇銭	小沢(個)
"(宇ノ田)	五町一反 七畝一三歩	三一〇四六六銭	大萱(個)
"(宝剣)	一反歩	六四〇〇銭	大萱
"(沢尻)	六町六反 六畝一八歩	四〇〇〇円〇銭	沢尻
大泉所	一町三反四畝七歩	三六四〇銭	吹上

境界が確定すれば委員監督のもとに人足の人たちによって境界標を立てられ、あるいは境界線を描き立て、測量手を雇い入れて実地測量を行ない、入会地ごとに絵図面を調整する。絵図面ができると各委員が点検の後裏書をして署名捺印をして整理は終了する。永年の乱れを整理し、分割の基礎作りとなる大変な仕事であったと思われるが、それにもまして複雑に絡み合う利害関係を調整しつつ、長期間にわたって忍耐強くこの仕事をやり遂げた熱意と実行力には頭が下がる思いで

ある。

三 入会原野の後期の分割

(一) 共有原野分割に至る時代の大勢

「共有原野ヲシテ空シク放棄シ置クハ苦忍スル能ハザルナリ、以前ハ原野ニテ肥料ヲ取リタルモ今日ニテハ皆棄置シ成ハ草草ヲ作リテ肥料トシ多クハ棄セザルモノノ如シ、如何トナレバ何レノ原野モ芝草ヲ過半刈リ残セリ、努メテ之ニ落葉松、栗ハ勿論、櫟ヲ植栽シ以テ梓童ヲ飼養シ利益ヲ射、或ハ落葉ハ以テ肥料トセバ一舉兩得ノ便ト謂クベシ、果ムラクハ一村或ハ一耕地相譲リ相譲ツテ植栽ニ注意セラレンコトヲ望ム」。

(税務文書)

これは、明治一十六年上伊那郡下の有力農民で組織する農談会の第三回会議において、「共有山野ノ方法ヲ改良シ遺利ヲ拾フ事」が話題の一つとされ、その席上種子栽培地の高木省三の発言である。このころ既に落葉松が栽培されており原野の土地利用が減少していること、したがって、林刈り取りのための入会地の存続は共有原野を空しく放置しておくことだと感じており、植林をして入会地をより有効に利用することを説いているのである。

これに加えて、当時の上伊那地方は養蚕業が急速に発達していた。

明治二五年には上伊那の養蚕戸数は一万戸を超え、三一年には製糸会社上伊那社が創立され、三七年には早くも養蚕収入が米作収入を超えるほどの発達ぶりであって、それに伴う桑園の増加によって大豆粕、道徳炭石灰等の購入肥料施用の傾向がしだいに増加し、それが林の必要性を急速に減少させ、入会原野のありかたに大きな転換の気運を生み出したと考えられる。

一方、長野県は明治一四年二〇〇町歩以上の開墾可能な場所の調査

を命じ、開墾による国土の有効利用の点に着眼し、さらに、明治三四年には「公有林野整理規則」を定め、五町歩以上の公有原野の取り調べを開始するなど、この時代は一般民衆の開拓への欲求と共に、明治三〇年に国の公布した森林法に示された森林政策の遂行のために、公有林野の入会権的利用からの解放が大きな課題となっていた時代であったのである。

入会原野を開墾し、耕地として利用し、あるいは植林することがまさに時代の趨勢であって、これを感じとった人たちが入会原野を耕場として従来どおりの入会利用をするより、各部落あるいは個人に分割することによって、より有効に利用できると考えるようになった。ここに林野の広範囲にわたる分割が始まる理由があった。

(二) 中野原の分割

中野原分割の件は、入会山野の整理作業中の明治三三年末に提案されている。南箕輪村としては北原、大芝原の分割の問題もあり、原野分割推進のため各耕地より一名ずつを選び三三年二月に原野分割委員会を成立させた。それ以来、精力的に村独自で分割について話し合い、さらに伊那町や西箕輪村との協議も進めている。しかし、伊那町のうち小沢、平沢、坂下の三部落が中野原の分割に強く反対し、分割問題は容易に進展しなかった。そのうちに、南箕輪地内のある入会地に対する特別村税の問題が発生した。すなわち、村地籍内にある入会地に入会権を持つ他町村の部落に対し特別村税を賦課したのであるが、このことが問題になり、それが郡長の調停にまで発展することになった。このころ入会権の整理近代化は国及び県の方針であって、中野原分割問題は特別村税賦課の問題を契機として、郡長の関与のもとで進められることになり、分割問題はようやく軌道に乗り、明治三五年郡役所において一町二か村の協議会が持たれ、次のような決議が行なわ

れたのである。

- 一、東北隅に運動場を設置すること。但し、南北百間、東西一五〇間。
- 一、沢尻学ノ田の貸地を売却し、該金を以て南箕輪村特別村税を支弁すること。
- 一、入会一町二か村各五名ずつ委員を決定し、明六日より分割標準、その他必要事項を協議し、来る十一日入会懇合へ提出すること。
- 一、貸地売却代金の内南箕輪村反別割、伊那町、西箕輪村賦課額に対する分割を一町一村へ特別配当すること。

(堀ノ井大東文書)

こうして、一町二か村各二名による中野原分割委員会が構成され、分割作業が進められ、実地測量や問題点の解決の後、明治三六年五月分割を完了、七月に分割地図(図5-14)に裏書調印が行われたのである。その中野原の分割の明細は次のようである。

中野原分割明細

總反別参百六拾貳町五反拾八歩

内 五町参反拾八歩 縣道敷地分引キ

五町歩 運動場分引キ

引キ残り参百五拾貳町三反七畝参歩

内反別参百四拾町歩 分割ス

拾貳町三反七畝参歩 特売ス

此ノ割リ方

三分 地価割 三拾万六〇〇〇坪

貳分 反別割 貳拾万四〇〇〇坪

貳分五厘 戸割 貳拾五万二〇〇〇坪

貳分五厘 区割 貳拾五万二〇〇〇坪

地価 三拾六万百五拾三町七九畝五厘

百四二町キ 八四坪九合六勺

御 園	山 下	坂 井	荒 井	西 沢	小 沢	平 沢	横 山	日 影	施 新	上 新	下 新	新 島	伊 都 町 林	久 保 北 割	久 保 南 割	北 殿	南 殿	田 畑	神 子	大 泉 新 田	大 泉 新 田	上 戸	与 地	中 条
一七、六三六	一八、一四一	四、一二四	二、三八六	一八、五九三	二、二八八	三、五三八	五、二六八	二、三七八	一、八〇七	三、二〇九	一、四二六	一、四〇〇	一、五〇九	四、五五〇	九、八七二	九、三三三	五、二六二	一、〇一三	一、八一	一、四六六	五、一七五	八、〇四三	六、〇一三	五、四三八
八、四五二	九、一九六	一、九三五	一、六一四	一、五〇一	八、八五九	五、二一五	五、二一五	八、一七九	七、〇五一	一、七五五	一、一五一	六、二〇五	四、三五四	九、八八七	五、〇七二	一、七二五	四、六一〇	一、〇八六	八、一一一	一、七五三	一、三九八	七、二四一	九、五七六	五、七九五
八、〇八八	一、三三五	一、八三六	二、二八一	一、五二一	七、七六〇	五、四六五	五、七九三	八、七〇四	六、五五八	四、三七二	三、九三五	一、〇四九	八、〇八八	九、四〇〇	五、七九三	一、七八八	六、八八六	一、〇六二	八、一九八	一、三三三	一、七八八	七、一〇五	一、〇九三	六、八八六
九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八	九、八〇八
三、五六四	四、〇九一	二、七七四	五、五九九	四、七七六	三、一三七	一、九四七	二、一〇七	四、〇九一	三、三六二	一、七一五	一、五〇四	三、三〇二	三、〇二六	四、四九五	四、四	二、五	五、四	三、〇	四、六	三、六	四、七	五、	四、八	二、七
四、〇	四、二	四、六	六、三	五、四	三、五	二、二	二、三	四、六	三、八	一、九	一、七	三、七	四、四	四、四	四、四	二、五	五、四	三、〇	四、六	三、六	四、七	五、	四、八	二、七

反別 式五拾六町反三畝壹步

喜反二付中 九拜九會式勾

戶 三千三百三拾六戸

壹片二付半 百九拜三合

武拾六区
密区二村 九千八百八平

平野原入会各部落へ分割配賦方協議決定相成り立平会

委員

南元輪村 徳高孫三郎 倉田徳三郎

出雲次郎 日戸 三郎

伊那町 福沢伊那太郎 外二名（略）

西兵輪村 城取、易太郎 外四名（略）

割賦配当法左ノ通り

伊那町計 五拾五万五千貳百三拾四坪

南英輪材計 貳拾九萬三百拾四坪

西貢輪船計 拾七萬四千三百拾八坪

物計 百零万九千八百六拾六坪

北原・大芝原の分割

北原と大芝原については、明治一六年までに第

段階の分割が行われたが、北原の第一次、第二

分割で各部落に分割した残りがあり、それは他

との入会関係はなくなったものの、村内数部落

入会共有地として残されたままになっていた。

かし、この入会共有地も時代が進むにつれ、そ

趨勢として再分割は当然のことと考えられるよ

になった。

明治三十三年二月南箕輪原野分割委員会が設けら

第4節 入会山野の整理と林野の分割

れたことは既に述べたが、この委員会によって、北原、大芝原の再分割も進められることになった。その結果明治三四年二月北原の分割について次のような「協議決定書」が作成された。

協議決定書

上伊那郡南気輪村千六百三拾四番地宇北原

一、原野 反別式拾町七反八歩

久保北割・久保南割・大泉・北殿・南殿

田畑・沢尻 共有

右ハ去ル明治四年中分割ノ際割リ残シタル共有原野

ニコレアリ候。今ヤ時勢ノ進歩ト共ニ分割セザルベカラザルヲ感ジ、爰ニ

分割ノ協議和議イ候ニ付イテハ、分割ノ標準ヲ始メ其ノ他方法ヲ定ムル左ノ

各号ノ如シ。

一、原野中ニ縦横スル道路敷ニ付キ一同立チ合イ実地臨検セシニ、細密ニ調

査スル程ノ必要ヲ見認セザルニ付キ、圖ノ結果ニ任セ多少ノ有無ヲ論及

セザルモノトス。

一、分割ニ要スル費用ハ割リ受ケ反別ニ応ジ出金致スベキコト。

右ノ通り熟議決定ノ上分割致シ候ニ付キ、他日異議コレ無キ為各耕地担任者

署名捺印ノ上後長ニ残シ置クモノナリ。

明治三十四年拾貳月拾四日 南気輪村北原共有者總代

穂高第三郎 有賀謙次郎

原 信一 加藤 金弥

清水 重樹 小林 森弥

清水 正堅 松沢 角弥

倉田 三郎 唐沢 元一

倉田第三郎 原 幸徳

清水平一郎 堀九左衛門

(塩ノ井大東文書)

この協議決定書に基づく分割明細は次のようである。

北原分割方法明細

一、分割ノ標準ハ戸数割トナシ、総反別ノ五分ヲ現在ノ戸数ニ、其ノ五分ヲ

明治四年分割ノ際割リ受ケタル戸数ニ分割スルモノトス。

一、分割地盤ハ東西ニ区画相立テ北ノ方ヲ一番トシ、南引キニ致シ、各耕地割

リ付ケ反別ニ応ジ位置ノ場所ヲ定ムルモノトス。

一、各耕地部分ニ対シ開墾ナリ植林ナリ自由タリト雖モ、在来ノ道路ハ總テ

存スルモノトス。

尚東方從前分割ノ際境界ニ間通り存置シ各耕地割受ケノ場所へ通スル

便利ニ供スルモノトス。

北原入会各村戸数調

村(耕地)名	明治四年	明治三四年		
		普通戸	無号戸	計
久保北割	五一戸	七五戸	六	一二一
沢尻	一八	二五		二五
南割	三九	四三	九	五二
大泉	八八	一一六	八	一二四
北殿	九〇	九六	一〇	一〇六
南殿	四一	六〇	三	六三
田畑	七八	九二	一〇	一〇二
計	四〇五	五〇七	四六	五五三

明治三四年調べ面積

宇北原原野反別 廿八町貳反壹畝貳拾四歩

此ノ坪数 八万四千七百九十三坪

此ノ二ツ割

坪四万二千三百九十六坪五合

右ヲ明治四年度割リ請ケ戸數四〇五戸ニ割ル

壹戸ニ付キ 百四坪六合八勺二才

坪四万式千三百九十六坪五合

右ヲ明治三十四年現在戸數五五三戸ニ割ル

壹戸ニ付キ 七拾六坪六合六勺六才

此ノ仕訳（各耕地割受面積）

三町八反四畝貳拾貳歩

久保北割

貳町六反八畝貳拾五歩

久保南割

六町貳反拾壹歩

大泉

五町八反四畝貳歩

北殿

三町三畝貳七歩

南殿

五町三反貳畝貳歩

田畑

壹町貳反六畝拾九歩

沢尻

北原参画反別地備ノ誤

反別 貳拾町七反八歩

地備 金九町三拾八畝

壹町ニ付キ金四五錢三厘

一、地備金 壹町二八錢

久保北割分

一、 〃 八九錢

久保南割分

一、 〃 貳町〇七錢

大泉分

一、 〃 壹町九四錢

北殿分

一、 〃 壹町〇一錢

南殿分

一、 〃 壹町七七錢

田畑分

一、 〃 四二錢

沢尻分

計金 九四三八錢

このように北原については分割についての協議決定書以外に、明細

書までできあがっているが、実際には分割されずにいたようである。

それは、明治三十七年改めて大芝原及び北原の分割についての新たな「約定証」が作られていることから理解できる。この約定証は前年の三六年一月に作られた「約定書」に基づいて作られたものである。次のようなものである。

約定証

入会原野字北原及び大芝原ヲ各部落ヘ分割スルヲ左ノ各項ヲ協定ス

一、字北原ハ去ル明治三拾四年中協定ノ通り実地分割ヲ実行スルコト。

一、大芝原式百九拾九町貳畝貳拾四歩ノ内西端五拾町歩（先ニ植林セル場所）ヲ村基本財産トシ、東端五拾三町歩（学校ニテ植樹ノ場所）ヲ学校林トシ、残り反別百拾六町貳畝貳拾歩ヲ各部落ヘ分割スルコト。

一、大芝原分割法ハ左ノ歩合ニ拠ル

反別 壹歩（分） 地備壹歩（分） 戸數八歩（分）

但シ、反別地備戸數ハ明治三十七年九月一日現在ニ拠ル。

一、本月拾六日ヨリ技手ヲ雇イ入レ実測ヲ為サシメ、各部落分割区域ヲ定ムル事。

一、分割ニ際シ境界ニ入り込ミアル外端ハ売却スルコトアルベシ。

一、分割ニ関スル技手及ビ人足等ノ諸費ハ各部落分割坪數ニ応ジ負担スルモノトス。

一、分割委員ノ日当ハ各部落ノ負担トス。

右各項建議ナキ為署名捺印スルモノナリ。

明治三拾七年拾貳月拾壹日

各部落惣代署名捺印（略）

（堀ノ井大東文書）

大芝原の第二次分割については、北原に就いて明治三十八年一〇月、次のような分割契約証が作られ、各部落への分割面積も確定された

が、部落有財産村有統一化の動きによって、実地分割が行われなかつた。

たので契約証のみ掲げておくこととする。

分割契約証

- 一、今般原野整理上宇大芝原ヲ測量セシニ線反別式百五拾四町九畝九歩ノ内、反別百三町五畝九歩、村基本及ビ学林ニシテ植林スベキ分存置ス。
 - 一、反別百四拾六町五畝五歩各部落ヘ分割スベキ分、右各部落ヘ分割シ協議行届キ戸數ヘ八分、反別ヘ七分、地価ヘ七分ヲ標準トシテ分割シ、其ノ算出スル反別別記ノ通り精確ナルヲ認メタルヲ以テ入会部落一同此ノ割リ付ケニ付キ後日漸カ異議コレ無キ為各部落代表者署名捺印後証ノ為保存ス。但シ此分割ニ付テ久保北郷・大泉・北郷・南郷ノ四部落ト神子柴ト原野交換ニ付キ反別七反畝畝歩不足ヲ生ズルヲ以テ其ノ不足ヲ補充スル為大芝原ニ於テ右四部落ヘ特売スルコトヲ承認ス。
 - 一、分割位置略圖ヲ添付ス。
 - 一、本条約束來ル廿五日実行スルモノトス。
- 明治三十八年十月十九日

上伊那郡南箕輪村部落代表者署名捺印

(氏名略)

(堀ノ井大東文書)

こうして、北原のみ明治三十七年末 各部落への分割が完了したのである。

四 三本木原・上ヶ清原・牛馬飼場の分割

この三箇所の入会原野は、大芝原と同様に租改正のための地引帳作成に当たり、帳面の上では南箕輪、西箕輪両村へ反別地価とも分割して記載し地券の交付を受けている。しかし、其地の上での分割がされなかつたので次のような約条証が明治一五八三年に結ばれた。

約条証

- 一、宇大芝原 入会 神子柴・田畑・南郷・北郷・久保・大泉・大泉新田・吹上・羽広・大萱

一、宇上ヶ清原 入会 神子柴・田畑・南郷・北郷・久保・大泉・羽広・大泉新田・上戸・中桑・与地・大萱

一、宇牛馬飼場 入会 神子柴・田畑・南郷・北郷・久保・大泉・大泉新田・羽広・大萱・上戸・中桑・与地

一、宇三本木原 入会 神子柴・田畑・南郷・北郷・久保・大泉・大萱・大泉新田・上戸・中桑・与地

右原野ノ地引帳ノ通り夫々区分シ反別地価ヲ引キ分ケ券状書下付相成リ候得共、未ダ實地境界相立チ申サズニ付キ、周囲ノ境界取調ベ済ミノ上ハ小別ニ分割致スベキ事。

但シ實地相立候分ニテ余歩相生ジ候分ハ平等ニ分割致ス可キ事。

一、西箕輪村参状ヘハ南箕輪村各籍地ヲ除キ便様書換ヘ願イ致スベキ事。

右約条違背仕ル間敷ク候事。

明治十五年三月十五日

上伊那郡南箕輪村共有惣代 高木誠三 日戸 勝

有賀光彦 倉田三郎

同 郡西箕輪村各籍地惣代 (六籍地九名氏名略)

(堀ノ井大東文書)

さらに、明治一八年には次のような特約証が作られている。

特約証

入会共有地宇上ヶ清原宇三本木原ハ、曾テ分割致スベキ義ニ相成リ居リ候得共、事繁劇ニ涉リ未ダ執行相成ラズ居リ候處、今般原令ノ命モコレ有リ分割致サザルヲ得ザルニ付キ、本年融雪ヲ待ツテ速ヤカニ着手境界判然セシメ、本年四月限り地籍引キ分ケ申ス可ク候。仍テ特約証件ノ如シ。

明治十八年三月十九日 上伊那郡南箕輪村入会惣代

高木 誠三 松沢源五郎

清水平一郎 倉田 三郎

原保左衛門

同郡 西筑輪村各耕地惣代(五耕地五氏名略)

(重ノ井大東文書)

この特約証を見れば、当時、県が積極的に入会地の分割整理を指導していたことがわかり、また、入会各部落も分割の早期実現を希望していたようであるが、周囲の境界取り調べという困難な問題があったためか、実地分割は容易に進まず、明治二六年から三六年にかけて行われた入会山野の本格的な整理終了後、漸く分割の運びに至ったのである。こうして明治三十七年、三本木原・上ダ渡原・牛馬飼場の分割について次のよう決議書がようやく作られたのである。

決議書

上伊那郡西筑輪村

西筑輪村全部

一、字三本木原

西筑輪村ノ内与地・中条・上戸・大宣・大泉新田 入会地

同郡西筑輪村

西筑輪村ノ内与地・与地・中条・大宣・上戸・大泉新田 入会地

一、字上ダ渡原

南筑輪村全部

同郡西筑輪村

西筑輪村ノ内与地・与地・中条・大宣・上戸・大泉新田 入会地

一、牛馬飼場

南筑輪村全部

右共有入会地ニ長年今ヤ時勢ノ進退ト共ニ分割シテ、夫々整理ヲ為サザル可カラザルヲ感ジ、遂ニ分割ノ協議ヲ整イ候ニ付テハ、分割ノ標準ヲ始メ其ノ他ノ方法ヲ定ムル左記ノ各項ノ如シ。

戸数ニ四分 地価ニ三分 反別ニ三分
一、戸数、地価、反別共明治三十七年九月一日現在ニ拠ル。但シ戸数ハ本籍ヲ有スルモノニ限り、地籍反別ハ田畑宅地ニ限り、同村役場ニ付キ取調ベルモノトス。

一、各部落割リ受け位置ハ予メ各委員実地ニ就キ地形ニ依リ、不便無キ様区画立テ其ノ位置ヲ定ムルモノトス。

一、分割一切ヲ処理スル為委員ヲ一部落一名ヲ置ク。

一、各地籍ノ村長ハ委員会ヲ統轄シ、其ノ事務ヲ総理ス。

一、委員ノ日当ヲ金五拾銭ト定メコレヲ仕仕ルモノトス。

一、分割ニ關スル委員及ビ技手ノ日当、入足賃金其ノ他一切ノ費用ハ分割坪数ニ賦課スルモノトス。

一、原野總反別ノ内通數坪數ヲ控除シ分割坪數ヲ割リ出スモノトス。

一、分割ニ際シ外堀小部分ノ場所ハ委員会ノ決議ヲ以テ特光ニ付シ費用ニ充ツル事アルベシ。

一、分割事業ハ十月一日着手、十月三十日限り終了スルヲ以テ目的トス。

右ノ通り熟議決定ニ付キ各部落全權委員署名捺印シ、他日違約ナキヲ誓リモノトス。

明治三十七年九月廿五日

上伊那郡西筑輪村(各耕地全權委員署名捺印略)

上伊那郡南筑輪村久保 城喜代助 倉田安太郎 赤羽猪兵

久保南割 征矢勝三郎 征矢吉左衛門

大泉 出羽沢岩次郎

南殿 清水寛

田畑 日戸伝雄 植田青弥 植田弥太郎

神子安 有賀忠愛

(重ノ井大東文書)

この決議書に基づいて分割の作業が進められ、分割は完了した。その明細及び、各部落の割り受け面積は次のようである。

分割明細

△字三本木原 (図5-15)

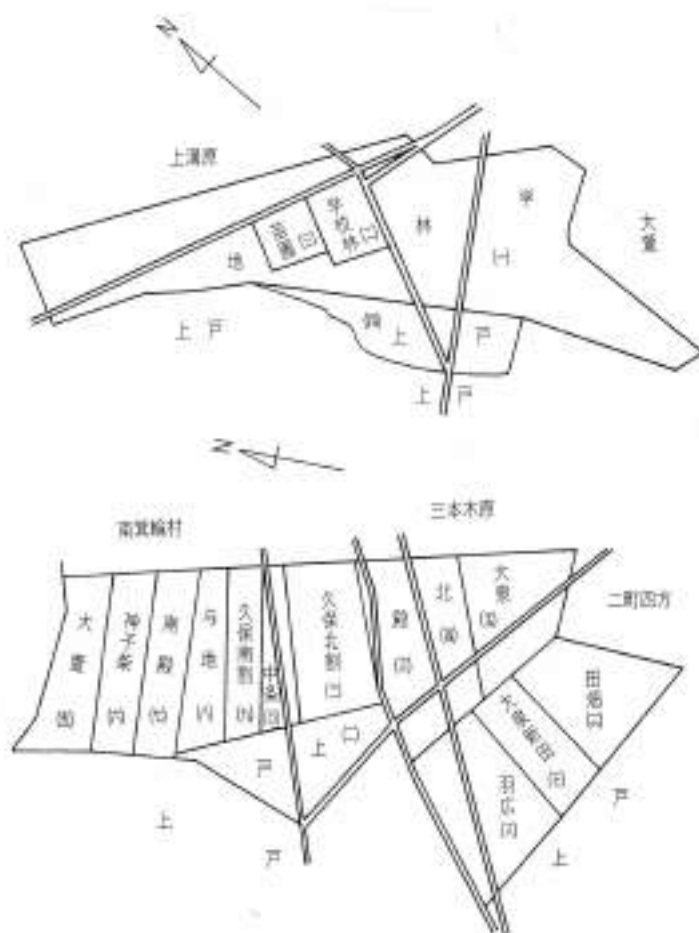
一、実測反別 六拾町四反六畝廿七步

一、〃 武反六畝拾四步 社地

合計反別 六拾町七反三畝五步

内反別 三町七反三畝五步 売却地

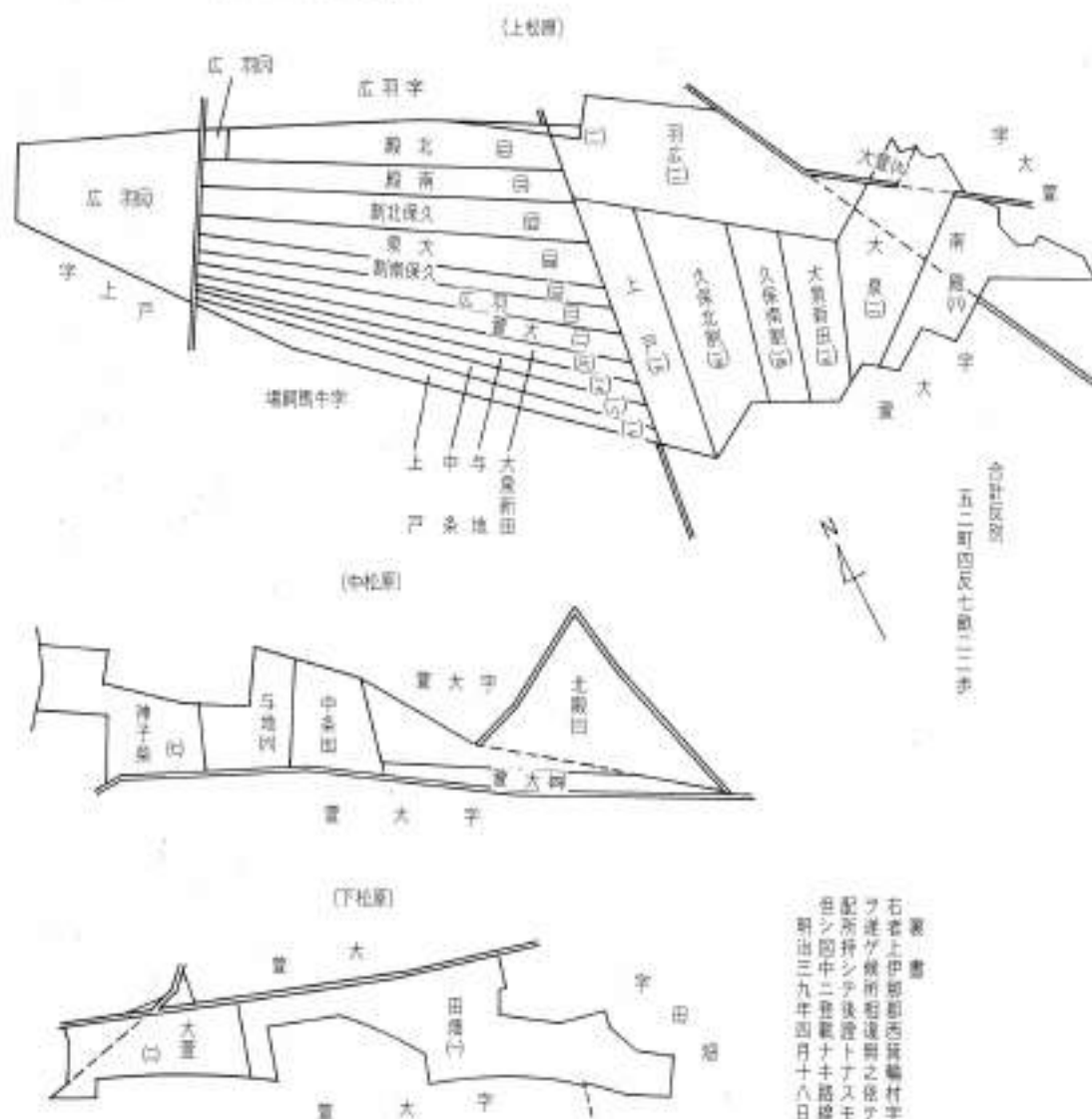
並引反別 五拾七町步



右者上伊勢郡半馬岡場分割測量方位図表反別等積
 定二調査ヲ遂グ候所相違無之依テ違著ノ上西其輪村
 南其輪村ヘ各面宛分配所待シテ後説ト為ス者也
 明治三十九年四月拾八日
 西其輪村 村長 重 藤 富士太郎
 分劃委員 有 賀 九 龍 十
 南其輪村 村長 清 水 重 幸
 分劃委員 助 役 佐 矢 久 吉 兵衛
 助 役 赤 羽 兵 七 名

図5-16 牛馬岡場分割図（略図）一部省略（堀ノ井大東文書）

第4節 入会山野の整理と畦野の分割



9236115

五二町四反七畝三丁六

右者上伊那郡西筑輪村字上瀬岡分郡測量方位員致到專精型調査ヲ遂テ候所相違明之候テ通署ノ上西筑輪村南筑輪村ヘ各々開明分記シ附申ニ登載ナキ路隔ハ益々通り之ヲ保存シ其幅ヲサバトス
明治三十九年四月十八日

[illegible]

図5-17 上ヶ清源分割図（略図）（塩ノ井大更文書）

反別老町歩ニ付キ拾四坪三合六勺、拾九坪余リ

総地価 拾五万六千八百三拾零円四拾零銭

地価百円ニ付キ拾零坪四合七勺七才

総戸数 千百九拾四戸

老戸ニ付キ拾坪零合

△上ヶ清原 (図5-17)

一、実測反別 五拾貳町四反七畝廿二歩

以下明細資料なく不明

各部落割受反別

久保北割	三本木原	上ヶ清原	牛馬飼場
五五五八畝一四歩	五町一反二畝一六歩	一町七畝一七歩	
久保北割	一、九一、二二	八二、〇九	
久保北割二合ム		二八、二二	
大泉	六、四一、一一	五、〇三、〇九	二、〇二、〇八
北殿	七、一九、一二	五、六五、二五	二、二八、二五
南殿	三、三四、二七	二、八〇、〇一	一、〇六、一九
田畑	六、〇〇、二三	四、四五、一八	一、九〇、二八
神子	四、三〇、二九	三、一九、二〇	一、三六、二六
南宮輪計	三六、三四、一八	二八、一八、二一	一一、五四、〇四
大泉新田	三、三二、一二	二、四五、〇〇	一、〇五、〇六
大泉	六、二七、一九	四、八二、一五	一、九八、二五
羽広	四、五四、二九	一、〇〇、九一	一、九一、一八
上戸	二、九八、二三	三、三五、二六	一、四四、〇一
中条	三、五一、〇八	二、二〇、一九	一、九四、二一
与地		二、五九、〇四	一、一一、〇七
西宮輪計	二〇、六五、〇一	二五、五二、一四	八、四五、一八

国 入会分割地の交換

入会原野は、以上のような経過によって全部各部落への分割を完了したが、部落より遠い所は不便であるから、できるだけ部落に近い所に集めようとするのは当然のことで、神子集で割り受けた大芝原・上ヶ清原・牛馬飼場の原野と、久保北割・北殿・南殿の割り受けた三本木原の原野の交換、また、北原において田畑部落の割り受けたと、久保北割・南割割り受け地の交換などが行なわれているが、後日部落有財産村有化の動きの中で大部分が破棄されたのでここでは省略しておく。

第五節 森林の育成と部落有原野の村有化

一 森林の育成（林業の発展）

（一）森林の保護育成の重要性の認識

村の指導的立場にあった有力農民は森林資源の重要性を早くから認識し、自己所有の山林等の樹木の養成や植林に心掛けた。しかし、一般農民は目前の利益を追うことに急であつてその意識は低く、入会山野の荒廢は進んでいった。このため、長野県は明治一四年植林奨励規則を定め、奨励金を交付して植林の奨励を始めた。

この植林奨励について時の上伊那郡長伊谷備は農談会の席上、「地方税より奨励スルハ細民ニ植樹ノ貴重ナルヲ知ラシメ必ズセヨト云フニアリ、サモセザルトキハ必ズ植林結果ハ視ルコト難キモノナレバ、奨励シ且ツ監督スルハ皆細民ヲ保護スルノ厚キニ出タルモノナリ」(役場文書)と述べている。この県の奨励に基づいて郡下二十数箇所に植林が行なわれた。神子柴の高木省三は明治一六年これらの植林地を視察し、その結果を農談会の席上で報告している。南箕輪村ではこのとき、共有原野である北原に松苗を植栽しており、その後引き続き二年間北原に植林をした。これは、本村の組織的植林の最初のものであると考えられるが、入会地のほんの一部に過ぎなかった。

森林の保護育成のために国は明治三〇年森林法を公布した。この森林法には、経済の保護を損じ又は荒廢の恐れあるときは、民有林に対しても営林方法を指定することができること、過伐や乱伐の跡地には造林を命ずることができること、若しその命令を怠る場合には政府の手で造林し、その費用を徴収することができること、従来無立の林野等正常の理由のない限り三〇年以内に計画に従い造林をしなくてはな

らないこと、必要と認める場所に保安林を設定することなどが盛り込まれていた。森林の保護育成、植林の推進に対する政府の強い態度が示されていて、これに基づいて本格的植林が始まったということができよう。

さらに、明治の時代は幕府政治の時代と変わりなく水害の極めて多い時代で、農民は毎年のように水害に悩まされていたが、殊に明治二九・三〇・三一年の連続の水害および霜害等の災害は大きな衝撃を与え、明治三二年県知事は森林に関する告諭の中で次のように述べている。

維新以来山林ノ法其ノ宜シキヲ得ズ、林相繼ク失シテ四山皆荒^ツ、森林ノ荒廢今日ニ至リテ其ノ極ニ達セリ、是ヲ以テ霜害年々ニ起リ、水害連年ニ生ジ(中略)ソノ被害慘憺ノ状得テ名状スベカラズ。(中略)畢竟森林ノ荒廢ニ依ラズンバアラス!

こうして、多くの人たちに植林、森林の保護育成の重要性が痛感されるようになり、森林法の公布と共に急速に各種の森林政策が推進され、植林の奨励、実行となったのである。

(二) 植林の奨励

県としては森林法を实地に推進するために、明治三一年苗木養成費を予算に計上し、三二年六月には県下一〇か所に県設苗圃を設置して樹苗を養成配布し、さらに、森林法施行規程を定め、民有林取締規則、林野火入れ及び焚火取締規則等を定めて森林の保護育成に努めている。

本村では、明治一三年郡長より植林奨励のため、樹木養成に精しく篤志なる者の氏名を報告する要請に答えて、穂高孫三郎・原八十吉・清水斎・有賀光彦・松沢源五郎・高木盛三の六名がこれに該当する者として報告されている。(役場文書)この外にも先にみた高木省三ら森

林の保護育成に先覚的な人たちが多数おり、また、歴代村長の熱心な指導のもとに、森林法の公布以前から積極的に植林にとり組みを始めている。

郡長あての入会関係調査報告によれば北原入会地の項に、「入会各部落へ分割ノ見込みヲ以テ戸数ヲ標準ニ区画ヲ立テ明治二十七年ニ植樹ヲシタルヲ以テ連カラズ林相ヲナス状況ナリ」(役場文書)とあり、二十七年に入会各部落によって植林を実施していることがわかり、明治二十八年から三十一年の四年間は毎年大芝原に植林を行なっている。その記録によると、「本村植林ハ村会ノ決議ニヨリ明治二十八年四月廿七日松苗、桐苗ヲ植エ付ケル、箇所ハ大芝原ニシテ西箕輪村トノ境界線ニ接シ東方六拾間ト定ム。尤モ境界線ハ南北凡ソ拾町ト見做シ、即チ拾町歩ノ植林トス。本村規定ニ基キ苗木一戸式拾本宛ヲ各耕地戸数ニ割受ケ左ノ通り施行ス」とあり、面積は四年で一〇町歩であるからそれ程多くはないが、村内全戸に一戸当たり二〇本の割合で各耕地に苗を渡し、各耕地ごとに植林地域を定めて植林をさせるという方法を採用して、全村的な植林とし、植林思想の普及にも努めているように考えられる。植樹の種類は初年度は松と桐が半々である。桐が多数植えられるのは、当時柞(クサ)を飼育することになり、期待が持たれたためであるのか、それとも刈敷あるいは薪炭用として植林されたものであるのか、その目的が不明であるが、苗の確保が困難であったこと、村民の反対があったことから二年目からは赤松だけになっている。

この初期植林と植林思想の啓蒙普及に大きな影響を与えたのが、当時の南箕輪小学校長福沢桃十であった。先生は生来植樹植林を好まれ、広々とした大芝原に学校林を設けることを村に要望しており、明治二十八年四月村会において大芝原本村分西部に一〇町の学校林を設けることが決議された。学校では同月二十五日職員児童総出勤で二町歩に

団栗約一万本を植えて付けた。このことを南箕輪学校林状況と記された報告書に次のように記している。

明治二十八年四月本村会ノ決議ヲ経テ本村大芝原西百拾九町歩ノ内西部拾町歩ヲ区画シ、本村学校トナシ三カ年間に団栗ヲ植ウル計画ヲナシ、同年四月二十五日二町歩ニ団栗九千九百七拾六本植エ付ケケシガ、次年度ヨリ苗木ヲ得ガタキヨリ同原中ノ自然生ノ赤松苗木ヲ移植スルコトトシ毎年九百七拾六本づつ同三十二年ニ至リ全部ノ植エ付ケヲナシ終リ、翌三十三年ニハ右ノ補植ヲナシタリ。

(小学校文書)

この学校林の設置及び植林には村民の反対がかなりあったようであるが、村有識者等の説得によって次第に緩和され、特に明治二十七年の小学校校舎の火災とその再建による大きな借財が、学校林の設置推進に強い影響を与えたものと考えられる。南箕輪学校林状況には造林を要する理由として「本村ハ明治二十七年村立小学校校舎ヲ焼失シ客年十二月ニ至リ漸ク完成セシガ、建築費ニ多額ヲ要シ今尚数千円ノ村債ヲ負担セルコトナレバ、小学校基本財産増殖ノ必要モ急ニ迫リオレリ」と書いていっている。

なお、児童生徒に造林の念を起し、且つ自然に親しみを持たせることを目的として、明治三五年には校地の一部に小さいながら林苗圃を設置して扁柏(ヒノキ)・落葉松・桐の種を播きつけ三六年には苗圃地一七〇坪を借地し、前年播きつけた苗の床替えをし、以後除草、施肥等の管理作業を行なって苗木の養成に努めている。このような福沢先生とその学校の姿勢が大きく村民の植林思想の啓蒙に役立ったものと考えられる。

こうして、明治三四年には村長清水平一郎は、学校林の創設と併せて森林愛護の精神を学童のうちより培う意図を以て、福沢先生の応援

のもとに大芝原東端より植林を始め、順年西方に及びほ富士塚付近まで植林し、学童に植林と山を愛する心を植え付けた。『入会山分割史』このようにして植え付けられた林地は、次のように新たに明治四四年四月一〇〇町歩の学校林として育成されることになった。

上伊那郡南沢輪村式千三百五十番イ号大芝原

一、原野百町歩 所有者南沢輪村

小学校基本財産造成ノ為右土地ヲ学校林トシ、其ノ収益ヲ学校基本財産ニ編入スルモノトス。

理由

教育ノ事タル國家ニ対スル義務ニシテ苟モ怠慢ニ附スルベカラザル事業ニ属ス。而シテ、教育費ハ年々増進スルハ既往ニ徴シテ明カナリ、依ッテ該原野植林ノ収益ヲ小学校基本財産トシテ将来教育上支障ナカラシメントスルニアリ。

右明治四十四年四月十日議決

(小学校文書)

明治三十七年には極めて大掛りな植林が企画されている。このことが同三十八年の郡役所へ提出した事務報告の控えに次のように書かれている。

明治三十七年十一月十九日開設村会ノ決議ニ基キ、明治三十八年三月県設上伊那郡南沢輪村式千三百五十番イ号大芝原、落葉松苗五万五千四百四十本、栗苗三万本ノ下附ヲ願イ、各部落ニ之ヲ分カチ苗圃ヲ設置シ養生セシメテ翌年春期ニ於ケル植栽苗木ニ充テサシムルノ企画ヲナシタリ、其ノ苗木ヲ各部落ヘ分布セシメハ

久保北割 赤松苗 六万九千七百七十九本

久保南割 ナシ

大原 赤松苗 九万九千七百本

北沢 赤松苗 五万五千本

南沢 赤松苗 九万二千五百本
田畑 赤松苗 十四万三千四百本
神子集 赤松苗 七万二千三百七十五本
外、落葉松苗、栗苗ハ赤松苗ノ比例ニ依リ交付シタリ

(役場文書)

この大量の苗を各部落のどこに仮植して養成し、またいつどこに植林をしたのか、植林の直接の資料は見当たらないが、明治三十七八年には三本木原・上芝溝原・牛馬飼場や中野原等の入会地が各部落に分割されており、中野原、三本木原等は各部落ごとに植林が行なわれており、入会地調査報告書(明治四十四年役場文書)によれば、中野原だけで植林面積が六六町余に達しており、三本木原も三十八年分割し各部落において植樹したから近き将来林相をなすだろうと報告しており、三十七年の大規模植林企画は中野原や三本木原の植林と考えられる。

明治四三年、国は公有林野造林奨励規則を公布し、同年七月、県は公有林野造林補助に関する県令を定め、特に町村有林野に有利な奨励政策がとられた。本村では早速この制度による補助金を受けて大規模な植林を行なった。この時の植林は次のようである。

明治四十四年四月 植樹補助一町歩ニ付キ三円九十三銭
大芝原 三十三町歩 赤松十萬本 コレハ赤松植林ニ付キ三坪二一本ノ割ニ

テ植樹

尾柏一万本 赤松植林中へ植樹スル

(役場文書)

以後、大正二年には赤松一五萬本を栽植するなど、大正八年ころまで大芝原、北原に連年のように植林し、七年には北沢山の南麓輪管理地域一〇町歩に尾柏三萬本の植林も行なった。

このようにして、かつて林場として利用された共有原野は一部閉鎖

されて畑となったが、大部分は森林として生まれ代わることになったのである。これらの植林地は初期のうちは下草が雑として採取されているが、やがて、間伐材、下打ち枝、落葉等の燃料採集の場所に変わった。

なお、このような林場から森林への大規模な転換期に当たり、膨大な苗木が必要となったことはいうまでもなく、その需要に答えるため、県下に一〇箇所の県設苗圃が設けられることになり、本村は明治三十二年七月にその県設苗圃を大芝原に設置するよう村会の議を経て請願をしている。県営技師の実地踏査の結果、大芝原ではなく、前官原に県設苗圃が設置されたことは次の資料からわかる。

県設苗圃用地貸借奉答第二回スル決議

南宮輪村七千九百十八番地宇前官原

一、原野拾四町五反四畝廿九歩ノ内

一、原野反別五町歩 種子榮共有地

右原野県設苗圃用地トシテ供与、貸賃料金拾四円承認スルコト

右本村会ノ決議ヲ経タリ

明治三十二年十月六日 南宮輪村長 清水平一郎

こうして、県設苗圃が村内に作られ大正六年ごろまで存続して大量の樹苗が供給され、さらに、明治四五年ごろからは、南殿宮ノ上に上伊那第一郡設苗圃（着手有賛議）が設置された。第二苗圃長谷村非持、第三苗圃駒ヶ根市赤穂

さらに、大正一一年に長野・飯田に官行造林署が設置されているが、そのころからであろう。北殿の原に飯田官林署箕輪苗圃が設置され、これは同苗圃が西天竜林地整理組合内の閑田地域に入ったために開田することとなり、昭和一一年に大芝原の西天竜幹線水路上に移転するまで存続し、重要な役割を果たした。

村においても、増大する需要に答えるため大正一一年から村設苗圃を設置し、昭和一八年ごろまで樹苗の養成を行なって森林育成に努めている。

これら苗圃のうち、郡設苗圃における樹苗供給の例を次に掲げておくことにしよう。

上伊那郡役所指令勅乙第一〇号

南宮輪村役場

大正十一年一月九日願イ出苗木下付ノ件聞届ク

但シ左記ノ通り心得ベシ

大正十一年三月十三日

上伊那郡長 堀江忠也

左記

一、駒輪苗木九万五千本 村有林野植栽分

一、古野校苗木 苗木本 (第一苗圃養成分)

(役場文書)

このように、県設や郡設の苗圃が村内に設けられたことは、村有林を多く持っていた本村にとっては有意義なことであったと思われる。

四 森林の保護育成

当時森林の荒廃の原因は乱伐と野火にあるとされ、森林の保護育成の上で火災防止は重大な問題点であった。既に明治一四年野火防衛規則を作り、その防止に努力しているが、県においては三三年「林野火入れ及び焚火取締規則」を制定している。村では明治四一年一二月より大芝原植林地の看守人を委嘱して其の保護に当たり、特に野火の予防と幼木の撫育等のため大芝原全域を巡視するようにした。それでも「明治四十五年三月二十三日午後四時頃大芝原西南端より焚火五町歩消失、同年四月八日大芝原の西方西宮輪村北部より焚火三反歩消失、

何れも南箕輪大泉部落消防手により消し止む」(郡部長宛報告「入会分制史」とあるように、幸い大事に至る前に消し止めてはいるが、野火の発生はあとを絶たなかった。そこで村では林野消防班を充実させると共に、大芝植林地に対し明治四十五年五月より翌年にかけて次のように防火線を設置した。

防火線 縦線(東西線)一本 幅一二尺 長さ千四百五十間

横線(南北線)四本 幅九尺 延長千五百七十間

総坪数 三千三百五拾坪

これは明治四三年に公布された公有林野造林補助規定による補助を受けて設置しているが、大正二年三月縦線の幅を三間横線の幅を二間に拡大し、さらに、昭和になつては大芝原における防火線の延長をし、北原にも防火線を設けている。

植林に対する一般的な管理保護については、本村は既に明治一八年に「植林地ニ関スル規程」を定め、その第五条に「本村植林地ハ向コリ給力年ヲ期シテ請負保管法ヲ以テ保管ス」として、請負人を定めて植林地の管理保護をすることを定めているが、明治四一年には新たに「大芝原植林地保管規定」を定めてこれにかえていた。この規定では、契約によって看守人を雇ひ、その看守人には生活の基盤として四間×三間の大きな番小屋と三町歩の土地を貸与し、常に現地に生活して植林地の管理保護に当たるよう定めている。

大正時代に入ると森林政策は各種補助金制度によって進められた。すなわち、林野保護奨励金、樹苗養成奨励金、林業技術職員設置奨励金等の補助金政策であるが、本村ではこれらの補助金を有効に活用し、森林の保護育成に努めているが、大正七年次のような植林地保護規定をもうけてその万全を期している。

南箕輪村植林地保護規程

第一条 本村有植林地ハ本規定ノ定ムルトコロニ依リテ管理ス。

第二条 村長ハ毎年植林地ヲ巡視シ其ノ状況ヲ調査スベシ。

第三条 植林地施業ノタメニ常設ノ林務委員三名ヲ置ク、其ノ任期ハ三カ年トス。

第四条 林務委員ハ本村公民中選挙権ヲ有スル者ヨリ選挙シ、委員ノ費用弁償ハ一日金拾五銭トシ支給方法ハ本村給与規定ニ依ルモノトス。

第五条 委員ハ毎月一回以上植林地ヲ巡視シ、左記事項ヲ調査ノ上意見ヲ附シテ村長ニ報告スベシ。

一、生育状況、改植補植間伐其ノ他ノ手入れ

二、防火線ノ状況

三、害虫並ビニ病害ノ予防駆除

第六条 植林地保護ノ為請願巡査一名ヲ置クコトヲ得。

第七条 村長ハ毎年年度予算ニ基ツキ落葉松、赤松、黒松等新林作業ヲナスモノトス。

第八条 委員ハ本村役場植林地台帳ヘ左ノ事項ヲ記載スベシ。

一、種類及ビ樹令別ノ大要

二、新植及ビ補植改植ノ年月日其ノ樹令別並ビニ苗木数

三、間伐採伐ノ種類及ビ其ノ数量

四、被害木ノ種類、樹令、数量

五、沿革ノ大要

六、其ノ他必要事項

第九条 植樹ノ伐採期ヲ定ムルコト左ノ如シ。

一、赤松 五十年 二、落葉松 五十年

三、杉 五十年 四、黒松 六十―七十年

第十条 林下草ノ採取ハ従来ノ慣行ニ依リ村民ニ採取セシメ、落葉ハ毎年村会ノ決議ヲ経テ期日ヲ定メ一般村民ニ無償譲与スルモノトス。但シ、既植

樹ハ勿論天然性ノ植樹ト雖モ伐取リ枝打チハ厳禁ス。

第十一条 植林地手入れ方法ハ毎年実地ヲ踏査シ樹齡ニ依リ其ノ区画及ビ期

日ヲ定メ、村会ノ決議ヲ経テ一般村民ニ手入レヲナサシメ、打チ枝ハ無償
譲与スルコトアルベシ。

第十二条 前条ノ決議ニヨリ一般村民ニ手入レ枝打チナサシムル場合ハ、村
長及ビ区長又ハ当該委員指揮監督ス。

第十三条 本規定以下ノ事項ニシテ管理上必要ト認ムルトキハ村会ノ決議ヲ
經テコレヲ定ム。

附則

第十四条 本規定ハ大正七年四月一日ヨリコレヲ施行ス。但シ、従前ノ規定
ハ本規定施行ノ日ヨリコレヲ廢ス。

大正七年三月十四日提出 南宮輪村長 征矢友三郎

(役場文書)

この規定は村有林に対する村長の義務、三名の常設林務委員の設置
とその任務、下草、落葉の採取及び植林地手入れ法等を定めている
が、外に諸般調査一名を置くことを得ることにしている。この規定に
基づいて「本村有林野植林反別式百九拾六町四畝貳拾貳歩、及び本村
各部落有林野村長管理に属する總反別百三拾九町壹反六畝五歩の保護
の爲」として、森林警察官の派出を申請し、大正七年四月一日から、



図5-18 森林保護のための特設調査配置許可通知

数年間特設調査の配置が認められ、植林地の保護取締りに当たってい
る。したがって、部落有林野であっても村長管理下にある林野は、間
伐、下草刈り、枝打ち等の手入れば村長に届出て、村役場から特設調
査に通報し誤り無きを期しているその一例をあげる。

乙第八二三号 十月十日

神子原区長ヨリ字三本木原及び中野原部落有植林地松枝打チ、本月十二日ヨ
リ三十日迄ニ於テ施行ノ旨届出候ニ付テ御了知相成リ度ク候。

大正七年十月十日 南宮輪村役場

黒沢特設調査殿

(役場文書)

さらに、大正十三年には「村有林ノ経営及び入会山野ヲ整理シ適當
ナル施設經營ヲ爲スハ本村ノ重要ナル事業ナリ、林業技術職員ヲ置キ
専ラコレニ當ラシメン為本規定ヲ設ケルナリ」(役場文書)として林業
技術職員設置規定を設け、奨励金の交付を受けて十数年間林業技術職
員を置いている。さらに同一四年には林野消防組織を作るなど公有林
野の多い本村にとって林業政策は村政の極めて重要な部分を占めてい
た。

次に、森林の保護育成の中で困難な問題は害虫駆除であった。大正
七年には北原の松林に松毛虫が大発生をした。その駆除のため七〇余
人の番人を配して一町六反余の松林に火入れをしている。もちろんこ
れだけでは害虫の拡がりは抑えられず、次のように多数の村民を動員
して捕殺を行なった。

乙第五八号 大正七年五月十七日

本村字北原植林地へ害虫発生ニ付イテハ駆除法研究ノ結果、捕殺ノ外方法コ
レ無キニ付キ、明十八日駆除致シ候条同日午前九時実地へ左記ノ職員携帶出
頭候儀御部内一般へ御触レ示シ相成リ度ク此段通知ニ及ビ候也。

各区長宛

村役場

一、小ナル「バケツ」若シクハ同様ナ品（害虫ヲ入レル器具）及び害虫ヲ取ルモノ。

目下農務多忙中ノ季節ニ付キ、人夫ハ男女ヲ問ワズ害虫ヲ捕殺シ得ラルル者ナラバ賞金キニ付キ、御承知ノ上御願レ示シ相成リ度ク候也。

（役場文書）

しかし、広い松林の中の松毛虫の駆除は容易なことではなく、六月一二日には小学校六年以上の男生徒が駆除に参加している。子供たちの捕えた毛虫は村によって買い取られているが、大人でも気味悪がつて尻込みをするようなことで、子供たちの中には気分を悪くし、翌日学校を休んだ者もあったと書き残されている。大芝原ではその年七月一二日、松毛虫の量を量にして一石三斗余捕獲したが翌八年にもかなりの発生がみられて、やはり何回も捕殺を行なっており、いかに松毛虫の駆除に苦心したかが想像される。

村有林生産物の販売

植林から下草刈りや枝打ち等の手入れや害虫駆除、火災防止等、村長以下村民全体の努力の結果は、既に「大芝原植林ハ成育良好ニシテ、大正四年十月信濃山林会總會ヲ開クニ当たり、其ノ視察団一行ヲ歓迎シ県下ノ賞賛ヲ得タリ」（役場文書）というほどになっていた。早くも大正一二年には村有林大芝原の一部が伐採され、その収益は基本財産として蓄積されるようになった。

議案第六号大芝原村有林一部伐採ニ関スル議案

南箕輪式千参百五十八イ号字大芝原

一、原野 植林反別式百拾九町式貳拾歩

所有者 南箕輪村

右植林地ノ内第四・五両林班ノ一部伐採其面積十町歩赤松二十五年生乃至二十七八年生、参万本、材積見込ミ九千貳百九十八石。右立木ヲ大正十二年三月ヨリ同十三年十二月迄ノ伐期ニテ売却シ、代金ハ村桑例ニヨリ基本財産トシテ蓄積スルモノトス。

大正十二年二月十五日提出 南箕輪村長 松沢那寿

村有林売却見込ミ

用材 壹万八千八百本 八千六拾壹石三斗

薪材 壹万貳千貳百本 百参拾貳捆

（塩ノ井大東文書）

この伐採中の大正一二年九月一日関東大震災があつて木材需要の急増となり、村長と専任林務は東京方面に需給関係の視察に行つてきている。その報告に「一、用材トシテ価値アルモノハ夫々製材シ置カバ、短時日ニシテ需要ヲ充タシ不用ニ帰スル如キ事ナキヲ信ズルヲ以テ成ル可ク伐採ニ注意シ用材トシテ価値アルモノハ之ヲ利用シ、其ノ他ハ架掛用材、薪材トナスヲ相当ナル方法ト認ム」と述べている。用材がどのように販売されたか不明であるが、薪材については「視察後各所ニツキ需要照会致シ候処何レモ一割五円以上ノ申シ込ミニシテ頗ル好況ニコレ有り、本村ノ為同慶ニ存ジ候。就イテハ右ノ次第ニテ特売ノ必要コレ無ク」として、次のように公売している。

村有林ノ間伐材ノ内左記ノ通り公売致ス可キニ付キ、立会下サレ度ク此ノ政通知ニ及ビ候也

大正十二年十二月一日 南箕輪村役場

村会議員殿

記

一、赤松薪 凡ソ貳百捆 但シ尺八寸四九積 南箕輪村大芝原シ

一、松葉 凡ソ貳千駄 同所渡シ

一、入札場所 南箕輪村役場

一、入札ノ日時 大正十二年十二月四日午後二時限リ

二、入札及ビ落札保証金各相場百分ノ五

開札ノ時 〆切リ後即時

(坂ノ井大東文書)

また、大正一三年には南箕輪村役場庁舎改築資金積立規程が作られ、村有林間伐採業収益金を毎年五百円以上積み立て、役場庁舎の改築資金の蓄積に重要な役割を果たした。これらは村有林生産物利用のごく初期の例であるが、その後の先人の汗の結晶が村の基本財産として、村財政の上に重要な役割を果たしている。

二 部落有林野の村有への統一

明治三四年、公有林野整理規則が定められ、五町歩以上の公有原野の取り調べが行なわれている。その目的は公有山野を芝地、牧草地として残す区域と、林地とに区分させ、植林の奨励と同時に入会権を解消し、市町村財産の造成も目指したものであった。国は明治四二年二月各府県に対し公有林野の現況を調査報告させている。この段階では全国の公有林野二九七万町歩のうち町村有は二二%、部落有七七%と圧倒的に部落有が多かった。政府は四三年三月公有林野造林奨励規則を公布し、市町村有又は町村組合有林野に優先的にこれを適用することによって、部落有林野の村有への統一をねらった。

これらの国の方針に基づいて県は明治四三年三月、内訓三号を布達した。これは、国の指示のもとに部落有財産を村有に統一して地方自治体の財源を強化すること、一方で統一された公有林野に施業案を実施して治水に利することであった。部落財産統一の目的は、部落財産統一過程報告の中の左の一文によく示されている。

「町村自治部落有財産トノ關係ハ自治行政上頗ル留意スベキ事情ニ属シ

テ、コレヲ統一シ又ヤムヲ得ザルモノハ純然コレヲ町村長ノ管理ニ移スコトハ、町村自治ノ発達ヲ遂ゲシメ、又区有ナルガ爲ニ荒閑セシ山野ヲ利用シ國富ヲ増サシムルコトハ一日モ差シ掛クベカラズ。」

(役場文書)

すなわち、当時まだ弱体であった町村制を確固なものにするために、町村自治体の財源を強化すること、町村有に統一することによって荒廃した山野の植林を容易にし治水の実を挙げ、ひいては国富を増すということにあったのである。

各町村はこれら国や県の指導のもとに部落有林野の町村統一への努力をしているが、この時期では本村関係の入会原野は全部部落有に分割されたばかりであり、入会山の方はまだ他町村の部落を含めた各部落の共有入会地として旧来の形のままで残されていた。したがって、これを村有に統一するということは簡単に進むことはなかった。明治四四年入会地の現況と整理計画とを郡長に報告しているが、入会地の整理について次のように報告している。

北原：入会整理ニ付キテ八部落有財産ヲ村有ニ統一スル計画ナレド、一朝旧慣ヲ打破スルモノナレバ遅タトシテ進行セズ。

中野原：部落有財産ヲ村有ニ統一スル計画ナレド、本原ノ如キハ部落有トシテ村長監督下ニ保存スルコトニ確定ス。

三本木原：入会整理計画トシテ、各部落ハ戸数地価反別ヲ標準ニ分割ヲナシタルモ、未ダ公費上ノ手續キヲナサズト雖モ各部落分割別ヲ受ケ方ニ対シ、植樹ヲナシ、或ハ開墾ヲナシタル部落モコレ有ル状況。

大泉所山・北沢山：本山ノ如キ年一年ト荒閑ニ属スル所以ノモノハ、要スルニ濫伐火災ニ因ス。依ツテ、各入会部落ヘ分割シ夫々適當ノ山林保護政策ヲ講ジ、管理スルノ得策ナルヲ見認、分割ノ協議ヲナスモ、旧慣ヲ打破スル一大革新ナレバ遅タトシテ容易ニ進行セザル状態ナリ。

(役場文書)

このような情勢の中で時の大山知事は早急に部落有林野を町村有に統一するよう訓示をし、さらに、「市町村に各部落の行政を統一して共同一致政治に努力することが目的であること、土地殊に山林原野は地方に属する財産として寧ろこれを保護するため、市町村に帰属せしむるの外に売却譲渡を許さないこと、などの方針を示している。こうして、県は大正三年新たに公有林野整理費を計上し、本格的に部落有林野の町村有統一に乗り出したのである。その主なる施策は、公有林野の管理区分を明確にして農耕に適さない所は植林を奨励、果林業技術員を増員して、町村有林野の振興策を作成援助することであった。

村としてもより積極的に村有統一化に努力することになり、最初に村有に統一されたのが大芝原であった。大芝原は明治三十八年の分割の際、村基本財産として五〇町歩、学校林として五三町歩が村有として残されており、他の部落への分割の分も実地上の分割はされたが、公簿上の分割は行なわれていなかったようで、早くから村有的色彩が強く、大正三年三月北原、三本木原を同一歩調に引き込んで、次の契約証書により村有に統一された。

契約証書

明治三十八年中大芝原ノ分割ヲナシ各部落ノ割リ受ケ区域ヲ定メタル所、明治四十三年七月本県内割三号ニ基ツキ、下名委員及び区長等ハ時勢ノ進退ニ伴イ、本村将来ノ自治發展ヲ期センガ爲メ部落有財産統一ノ協議ヲナシ、大芝原、三本木原、北原ノ三部落ヲ村有ニ帰属セシムルコトヲ決定シタルヲ以テ、後日違背コレ無キ為メ協議ヲ遂ゲタル決定事項ヲ列記シ、契約スルコト左ノ如シ。

第一條 本村宇北原東割反別三拾壹町三反六畝拾歩ハ、久保北割・久保南割・大泉・北殿・南殿・田畑・沢尻七部落共有ノ地、神子柴部落ヨリ該加

入料トシテ金參百円也ヲ受領シ、本村全部落ノ共有トシタル上無償本村有ニ帰属セシムルモノトス。

第二條(略)

第三條 本村宇三本木原東割反別參拾六町三反六畝貳拾六歩ノ内六町歩ヲ神子柴部落ヘ交換分譲シ、残反別ハ全部無償本村有ニ帰属セシムルモノトス。

但シ、神子柴部落ハ交換意図トシテ反別七反八畝貳拾參歩及ビ金六拾五円也ヲ本村全部落ヘ提供シ、該金ハ全部無償ヘ配当スルモノトス。

神子柴部落ト交換分譲理由左ニ

第一項 宇中松原下松原学校道下

一、反別壹町九反六畝七歩

神子柴部落割リ受ケ地

宇牛馬割地

一、反別壹町三反六畝二五歩

同右

宇上ノ清原

一、反別壹町貳反三畝拾三歩

同右

小計

四町五反六畝拾五歩

前記神子柴割リ受ケニ係ル原野ハ、久保北割・大泉・北殿・南殿ノ四部落ト交換シタルモ、該契約ヲ解除シ三本木原ト交換分譲ヲ本村全部落ニ於テ承認セリ。

第二項 宇大芝原ノ内

反別壹町九反四畝七歩

神子柴部落特売地

此ノ交換地宇三本木原ノ内

反別壹町壹反五畝拾七歩

右大芝原ハ明治三十八年中神子柴部落ヘ代金貳百五拾七円也ニテ特売シタル所、三本木原ノ内ニテ交換分譲ヲ相互承認ス。但シ該代金・前第二條中ニ包含ス。

第三項 宇三本木原ノ内西割

一、反別 貳反七畝貳拾八歩

神子柴部落特売地

右ハ久保北割・久保南割ニ於テ神子柴部落ヘ特売ノ地、神子柴部落有接近地

東部ヘ經換エヲ承認ス。

第四條 前第三條第一項神子柴部落割リ受ケ地ハ、久保北割・久保南割・大泉・北殿・南殿ノ四部落ヘ特売シ、四部落ハ該代金參百七拾四七拾

六銭ヲ本村全部落へ提供スルコトヲ相互承認ス。但シ、該代金ハ本村全部落へ配当スルモノトス。

四 部落へ特売地代金計参百七拾四七拾六銭（内訳略）

第五條 前一条ヨリ第四條ニ至ル配当金ハ明治三拾八年中大芝原分割當時ノ調査ニ係ル戸数ヲ以テ各部落へ分配スルモノトス。

第六條 大芝原・北原・三本木原ノ三原野ニ開スル、先年各部落ニ於ケル契約ハ全部無効トス。（注 割受ケ地交換の契約）

第七條 本契約証外各部落ノ専有ニ属スル財産ハ各所有部落ニ於テ適宜処理スルモノトス。

第八條 本村牛馬飼場、上ノ清原ノ上中下松原ハ先年各部落へ分割及ビ交換譲与ノ通り之ガ決行ヲナスモノトス。

第九條 本契約証ニ基ツテ分割及ビ所有権移転登記手續キ等其ノ他一切ニ付キ下名委員及ビ区長等ハ連帯責任ヲ負イ、各関係部落ノ便宜ヲ図リ是ガ遂行ヲ容易ナラシメ、万一契約不履行ニヨリ損害ヲ蒙リタル部落ヘハ相当弁償ノ処置ヲ取ルモノトス。但シ、第七條ニツイテハ此ノ限りニアラズ。

右確約必行ノ証トシテ八通ヲ作製シ各自署名捺印ノ上、各部落委員区長ニ於テ通達知ヲ所持スルモノナリ。

大正参年参月 部落有財產統一委員 三十名署名捺印（略）
各区長

（役場文書）

この契約書を見ると、村有統一化に当たってはいろいろの問題点があったことがわかる。北原に対しては神子柴部落は入会権がなかったもので、分割時の割り受け地もなかった。したがって、北原の村有帰属に当たっては趣意金として神子柴部落より三百円を、入会権を持って生じた他の七部落へ支払うことで合意に達した。また、分割に際して生まれた特売地の問題の調整及び分割後に行なわれた各部落相互間の割り受け地の交換の問題があった。交換契約については村有統一化に当



図5-19 大芝原村有統一化認可状

たつて今までのものは一切無効であることを相互に了承することによって御破算とし、これによって、ようやく条件整備ができて北原、大芝原、三本木原の村有統一化が実現したのである。

この村有統一化は次の資料によっても確認される。

・長野県指令林甲取第一七三八号

上伊那郡南箕輪村

大正三年六月二十日附ケ申請左記公有林野ノ管理区分ノ変更ノ件認可ス。

大正三年七月六日 長野県知事 石井一郎 記

南箕輪村字大芝原式千参百五拾八番イ号

台帳反別 式百拾九町式貳式拾歩

実測面積 貳百三拾五町貳反九畝式拾六歩 所有者南箕輪村

（役場文書）

・上伊那郡役所指令第八四七号

大正四年五月二十二日第三六九号 東部久保北側外六部落共有地（注北原）無償譲与ノ件

右町村制第十七条ニ依リ之ヲ許可ス。

大正四年六月七日 上伊那郡長井吉太夫印

(役場文書)

こうして、北原・大芝原・三本木原の三原野は村有統一化が完了した。しかし、村議会へは大正九年になって部落財産統一に関する議案として提出されている。その議案内容である「覚え書」の四条に三本木原、五条に北原村有統一化のことが、前掲、大正三年の契約証書と同様の内容で記されており、実際の村有化の契約書成立より六年後に可決されていること、また、北原の公有林野の村有取得届が、郡長の催促によって大正六年に提出されていることなど、村有統一化に係る複雑な要素の存在を感じさせるものがある。

なお、中野原については明治四四年の段階で各部落共有のままで村長管理下にあることが報告されており、大正九年の部落有土地整理について「覚え書」六条に「第一条乃至第六条以外ノ本村部落有土地(注中野原、牛馬飼場、上ヶ瀬原及び各部落の内原等)及び其ノ也財産ハ部落有財産トシテ存置シ村長ノ管理ニ移ス」(役場文書)とあり、中野原、上ヶ瀬原、牛馬飼場等は部落有のまま残されたのである。

第六節 入会山の分割と村有統一化

一 入会山の分割

(一) 大正五年の分割協定覚え書の成立

入会山の管理については既にみて来たように、明治一四年に大泉所山保護契約書、同一五年には南、北沢山樹木生育保護約定証等の山法を定めて取り締りに努力してきたが、乱伐と野火のために入会山の荒廃はとまらなかつた。明治三〇年には森林法が公布され、さらに、三四年には公有林野取締規則が定められているが、共有なるがゆえに自衛的な利用が妨を絶たず、さらに、複雑な利害の対立があつて植林や保護育成も思うにまかせず、山林の荒廃はその極に達した。一方で、国は山林の荒廃による災害を防止するため、保安林の広範囲な設定をすすめる。明治四二年ころ保安林の面積は数百町歩に及ぶ状況であつた。保安林に編入されれば山林としての利用は極端な制限を受けるので、荒廃の進むことと共に保安林への編入による山林の価値の減少が憂慮されていた。本村では早くからこの点に思いを致し、山林の整理と育成について鋭意努力を続けてきた。既に原野については明治三八年までに整理分割を完了して植林につとめ、早くも一部が美林に成長しつつあるのを見るにつけても、山林の整理とその経営の改善を急務と感じ、特に明治四二―三年には全力を傾けて分割整理の推進に努めてきた。

政府も林野の荒廃は、入会利用が最大の原因であることを指摘し、その分割整理が急務であることを提唱し、公有林野造林奨励規則を公布して部落有林野の村有への統一推進を図り、同年七月県は内訓三号を布達したことは既に述べたが、この内訓三号は入会権の解消、部落

有財産の村有への統一を意図していた。したがってそれは、入会地の分割整理を強力に押し進めるもので、県および郡の指導は強化されたが、長い間の入会権の慣習、特に地元や山元の拡大された特権的な意識を打ち破ることは困難で、分割への糸口を見付け出すことさえできないまま、数年を経過した。ところがたまたま大正天皇即位の御大典を機として、大正五年、上伊那において信濃山林大会が開かれ、本村大芝原の模範林が県下に広く紹介され、それが林業思想を広く啓蒙することになった。この機を利用した長井上伊那郡長の指導のもとに分割の協議が行なわれるようになり、同郡長の仲裁によってようやく分割への道が開かれたのである。すなわち、大正五年五月から七月にかけて分割の協議を重ね、時には深夜に及ぶ協議の末、北沢山、南沢山については五月二七日、藏鹿山及び矢ノ南入りについては七月三日、大泉所山については七月五日に分割協定書覚え書が作成調印されたのである。

左に北沢山、南沢山分割協定書覚え書を掲げる。(大泉所山・藏鹿山の分割協定書覚え書は後出)

南・北沢分割協定書覚え書

伊那町大字伊那字南沢・神名沢・原山寺社平伊一〇、〇〇一番

一、山林反別千六百五拾七町貳反歩

伊那町・伊那村・伊那郡ノ内東伊那郡・狐島・上新田・下新田

南沢輪村・西沢輪村・大萱・上戸・中条・与地・大泉新田

南沢輪村字北沢八三〇八番

一、山林反別千七百貳拾八町歩

南沢輪村・西沢輪村・大萱・大泉新田・上戸・中条・与地

伊那町・伊那村・伊那郡ノ内東伊那郡・狐島・上新田・下新田

右土地ニ対スル分割方法ニ付イテハ多年懸案中ノ是、今般上伊那郡長ノ仲裁

ニ依リ左記ノ通り協議決定シ茲ニ全ク解決ヲ告ゲタリ。依ツテ將來異議無キ為本書因通ヲ作成シ關係町村長並ニ郡長ニ於テ各意通ヲ保持スルモノナリ。

分割整理方法

第一条 西沢輪村と地部落へ井出ノ沢ニ於テ三拾町歩ヲ、其ノ専用土地トシテ西沢輪区域ニ編入スルモノトス。

第二条 伊那町横山部落へ拾町歩、平沢部落へ三拾町歩ヲ其ノ専用土地トシテ各部落接近地ニ於テ伊那町区域ニ編入スルモノトス。

第三条 伊那町西伊那郡部落及ビ南沢輪村へ、元地元記念ニ其ノ持分トシテ各式町歩ヲ贈与シ關係町村ノ区域ニ編入スルモノトス。

第四条 南沢輪村故高木三氏ノ本分割地ニ対スル功分ニ報ニル為、其ノ家督相続人ニ五町歩ヲ贈与スルモノトス。

第五条 伊那町常門寺へ字寺社平ニ於テ、式町歩ヲ縁故地トシテ贈与スルモノトス。

第六条 西沢輪村三井筋ノ上武拾間通り、堰下沢境ニ至ル迄ノ土地ヲ寺坪金參厘ノ割合ヲ以テ各關係部落へ特売スルモノトス。但シ、与地井筋ニ付キテハ堰下武拾間ヲ越エザルモノトス。

第七条 西沢輪村各關係部落ノ要求ニ応ジ北沢山地籍ニ於テ、貳百町歩ヲ寺坪金六厘ノ割合ヲ以テ特売スルモノトス。但シ、分割地ニ接續地域トス。

第八条 原山寺社平山ニ対スル縁故ニヨリ、寺町歩ヲ伊那町(御園、山寺ヲ除ク)關係部落持分トシテ譲渡シ、其ノ区域ニ編入スルモノトス。

第九条 一般分割方法ハ中野原分割ノ例ニ準ジ、大正五年四月一日現在ヲ以テ左ノ標準ニ依リ之ヲ定ム。

一、部落別 参分 一、戸数別参分(但シ戸數ハ本籍戸數ニヨルモノトス) 一、地籍別 式分 一、私有田畑宅地反別制 式分

第十条 分割地ハ町村別ニ区域ヲ分チ、其ノ位置ハ相互ニ於テ協定スルモノトス。

第十一条 分割整理費ハ分割地ノ立本(樹令ニ達シタルモノ)売却代金、及

ビ特売代金ヲ以テ之ニ充ツ。前項ノ費用ニ不足ヲ生ジタル場合ハ第九条ノ一般分割方法ニヨリ分配又ハ徴収スルモノトス。

大正五年五月二十七日 関係町村長並ビニ分割委員及ビ仲裁人署名捺印

(省略)

御射山については、実地調査や再三の協議にもかかわらず、地元村等の反対が強く協定の成立には至らなかった。当時、肥料は大豆粕全盛時代に入っており、稔安の使用も急増して刈敷の必要量の減少という要因も加わったといえ、大半の入会山について分割協定の成立にこぎつけたことは、村長以下委員の山林と村の将来を思う寝食を忘れた努力の結果であって、分割史上の大きな画期であったといえることができる。この協定成立について村長高木正直は「村民各位ニ告グ」という一文の中で次のように述べていることから重要性がわかる。

「林野分割整理ノ協定成立シタルハ本村ノ一大幸福ニシテ、安ニ新紀元ヲ画シタルモノト謂ハザル可カラズ。是歴代村長ノ遺訓ト委員諸氏ノ尽力ニ依ルト共ニ、長井部長ノ昼夜ニ亘リ熱誠ナル仲裁ノ功ニ帰セズンバアラズ。小職ハ是ヲ村民各位ニ報告スルノ光榮ヲ有スルモノナリ。……(中略)……爾今以後村民各位ノ自衛自愛ニヨリ個人富力ノ増進ヲ計ルト共ニ、協力一致シテコノ富源ヲ利用シ、村経済ト相俟ツテ本村前途ノ幸福発展ヲ確保スルノ光明ヲ認メタルヲ以テ、是ヲ各位ニ告グ共ニ奮勵向上ヲ期セントスルモノナリ。」

(役場文書)

(二) 大泉所山の分割

大正五年七月五日成立した大泉所山分割協定書は次のとおりである。

覚書

南其輪村字大泉所山二三五七号一ヨリイ号九二至九九
一、山林 合計反別八百六拾四町歩

南其輪村(部落数ハ中野原分割ノ例ニヨル)、中其輪村、富田 共有
西其輪村、吹上、大泉新田、中曾根、須広、大宣

右土地ヲ上伊那部長ノ仲裁ニヨリ左記ノ方法ヲ以テ分割スルコトニ協議決定シタルニ依リ、將來異議ナキ為本書四通ヲ作製シ関係町村長並ビニ部長ニ於テ、各一通ヲ保持スルモノナリ。

分割方法

第一条 西其輪村吹上部落へ接近地ニ於テ貳拾町歩ヲ、其ノ専用地トシテ西其輪区域ニ編入スルモノトス。

第二条 西其輪村羽広部落へ接近地ニ於テ拾八町歩ヲ、其ノ専用地トシテ西其輪区域ニ編入スルモノトス。

第三条 西其輪村大泉新田部落へ吹上部落専用地接近地ニ於テ貳拾町歩ヲ、其ノ専用地トシテ西其輪区域ニ編入スルモノトス。

第四条 西其輪村中曾根部落へ大泉新田部落専用地接近地ニ於テ八町歩ヲ、其ノ専用地トシテ西其輪区域ニ編入スルモノトス。

第五条 中其輪村富田部落へ一般方法ニ依ルモノノ外拾五町歩ヲ、一般分割地ノ接近地ニ於テ付与スルモノトス。

第六条 西其輪村関係部落ノ要求ニ応ジ、六拾町歩ヲ一坪六厘ノ割合ヲ以テ特売スルモノトス。但シ、分割地ニ接近地ニ接ス。

第七条 南其輪村ノ要求ニ応ジテ、大泉井堰ト大泉川トノ間ニ於ケル井縁特売地ヲ除キタル分ヲ壹坪六厘ノ割合ヲ以テ特売スルモノトス。

第八条 大泉井堰及ビ上井堰ノ同心ヨリ各式拾間以内ヲ、壹坪参厘ノ割合ヲ以テ関係部落ニ特売スルモノトス。但シ、上井堰ニ付キテハ現在堰口ヨリ

上方長サ貳拾間幅貳拾間ノ地ヲ包含スルモノトス。

第九条 南其輪村へ元地元記念トシテ壹町歩ヲ贈与スルモノトス。

第十条 一般分割ノ方法左ノ如シ。

一、部落別

二分

一、戸数別

四分 但シ、戸数ハ大正五年四月一日現在本籍者トス。

一、私有田畑地権制 二分 但シ、地籍ハ大正五年四月一日現在ニ依ル
 一、私有田畑反別制 二分 但シ、大正五年四月一日現在台帳反別ニ依ル
 第十一條 分割区域ハ東西ニ縦断シ南部ヲ南箕輪村、北部ヲ西箕輪村所屬ト
 シ、富田部落所屬地ハ其ノ接線地ノ中腹北方ニ於テ之ヲ定ム。

第十二條 立本ハ分割シタル所屬地ノ所有トス。

第十三條 大泉井及ビ上井親ノ水利権ニ付キテハ、分割後ニ於テ之ガ侵害
 行為ヲナサザルモノトス。

第十四條 分割整理ノ費用ハ特売地代金ヲ以テ之ニ充ツ。前項ノ費用ニ過不
 足ヲ生ジタル場合ハ第十條ノ一般分割方法ノ割合ヲ以テ分配又ハ徴収ス。

第十五條 本協定ニ付キ得來疑義ヲ生ジタル場合ハ、上伊那郡長ノ裁断ニ
 任スルモノトス。以上

大正五年七月五日

中箕輪村長 千葉 龍孝

他委三名(略)

西箕輪村長 堀内 今朝一

他委員一九名(略)

南箕輪村長 高木 正直

委員 徳高 駒次郎

征矢 友三郎

清水 正堅

出羽沢岩次郎

倉田 徳三郎

伊藤 鶴吉

山崎 大八郎

清水 国武

加藤 敬亮

日戸 伝雄

太田 文次郎

太田 徳重 仲裁人 上伊那郡長 長井喜太夫
 加藤 雅賢 (役場文書)

この協定に基づき各部落の大正五年四月一日現在の戸数・反別・地
 価を調査して分割面積を算出した。本村および関係部落の取得した面
 積は次のとおりである。

南箕輪村 四六〇町八反二畝二六歩(地元記念一町歩を含む)

西箕輪村 三九八町六反七畝一八歩(吹上二〇町歩、中曾根八町歩、羽広一

八町歩、大泉新田一二町歩の占有地を含む)

中箕輪村富田 六四町八反二畝一四歩

大泉井 一八町七反九畝五歩

上井特売 四町五反六畝一七歩

このようにして大泉所山は大正五年分割を完了したが、本村受け分
 のうち大泉井及び上井特売地の外は、一括して南箕輪村分として割
 受けており、各部落への分割はしなかった。こうして大正一三年部落
 有林野処分のため次のような議案が村会に提出され、それが可決され
 た。

議案十三号部落有林野処分ノ件

入会地分筆ノ表(表略)

右ハ入会権解消、土地分割整理ノ必要上左表ノ如ク所有権ヲ移転シ、入会共
 ノ他共同使用ノ慣行ヲ廃止ス。

字	地	番	地目	台帳反別	実測反別	地	価	所有者
大泉所	二二三五七イ号ノ一		山林	三四六町七二畝〇〇歩	三七八町七五畝一三歩		一五二町五七畝	南箕輪村
"	"	イ号ノ二〇	"	五、二〇、〇三	五、八一、一二		二、二八	"
"	"	イ号ノ一一	"	六、一一、二三	六、八四、〇五		二、六九	"
"	"	イ号ノ一二	"	一六、〇九、一五	一八、〇〇、〇〇		七、〇七	西箕輪村
"	"	イ号ノ一三	"	一四、六一、〇八	一六、三四、〇五		六、四三	大泉区
"	二二三五七イ号ノ一四		"	三三二、五三、〇〇	三六一、八二、〇〇		一四二、三七	西箕輪村

さらに、南箕輪・西箕輪・中箕輪の三村長連名にて大泉所 分割処分の申請が出され、次のように認可されている。

長野県指令林甲収第四一〇四号

上伊那郡南箕輪村長
上伊那郡西箕輪村長
上伊那郡中箕輪村長

昭和二年九月六日甲第六二九号 西箕輪村吹上区・大泉新田区・中曾根区・羽広区・大泉区・中箕輪村富田區共有左記ノ土地処分件認可ス。

昭和三年一月十三日 長野県知事 千葉 了郎

記

(村会議案と同様大泉所山の地番面積所有者表示につき省略)

(役場文書)

このように、大泉所山の分割は実質的には大正五年に行なわれたが、公簿上の分割は昭和三年に行なわれたことになる。(図5-20)

大正十三年三月廿八日提出

日決議

上伊那郡南箕輪村長 倉田正

(役場文書)

イ号ノ一五	五七、九六、一五	六四、八二、一四	二五、五一	中箕輪村富田區
イ号ノ一六	二、七七、二八	三、一〇、二五	一、二二	吹上、大泉、大泉新田、中曾根、富田區
イ号ノ九	一八、六五、一八	一八、六五、一八	一、四五、二二	西箕輪村
イ号ノ一七	一、四五、二二	一、四五、二二	一、四五、二二	吹上、大泉、大泉新田、中曾根、富田區
イ号ノ一八	二〇、〇〇	二〇、〇〇	二〇、〇〇	西箕輪村
イ号ノ一九	七、五八、一〇	七、五八、一〇	七、五八、一〇	南箕輪村
イ号ノ二〇	二、四五、〇〇	二、四五、〇〇	二、四五、〇〇	大泉區
イ号ノ八	五二、八三、〇八	五二、八三、〇八	五二、八三、〇八	南箕輪村

③ 北沢山および南沢山の分割

北沢山・南沢山の分割は、大正五年五月二七日に前述したように分割協定書覚え書が成立し、引き続き八月から一〇月にかけて十数日の境界査定、協議、及び実測調査を行ない、分割が円滑に終了するかに見えた。ところが実地につき分割地の取得位置を決定する段階になって紛糾した。それは、分割協定書に取得位置に関しては第十条に「分割地ハ町村別ニ区域ヲ分チ其ノ位置ハ相互ニ於テ協定スルモノトス」としてあって、はっきりと定めてなかった。そこで都役所に会し、あるいは町村別に会を重ねて意見交換をしたが、関係町村の意見が容易にまとまらなかった。大正一〇年一〇月には郡長による取得位置の提案もあったがまとまらず、こんな状態なら先に定めた協定覚え書を破棄して、組合を組織して管理すべきだという意見まで出た。しかし、協定成立以来多年にわたる分割遂行を研究して来たのだから、協定破棄は本意であるとして、あくまでも取得位置決定に努力を重ねることに落ち着いた。こうして、大正一三年まで都役所あるいは役場において会を重ねること三〇余回、八年の歳月を費しても意見はまとまらなかった。

その後八年間なんらの進展がなく空白の年月が過ぎたが、昭和七

第二條 大正五年五月二十七日協定書第七條ニ依ル西兵輪村ノ特売地

ハ、南部境界ヲ神名沢北尾根トス。北部境界ハ樺兵衛街道七曲リ登リ口ヨリ上郎ハ樺兵衛街道ヲ以テ境トス。七曲リ登リ口ヨリ下部ハ北沢本流ヲ境トシ、ザコ沢、押出沢、オオヤンバ沢、水無沢等ヲ含ム長キ一地域トス。

但シ、現地実測面積ヲ以テ打テ切り不足面積ハコレヲ要求セザルモノトス。

第三條 南兵輪村側ノ分割取得地ハ次ノ通りトス。南部境界ハ樺兵衛街道七曲リ登リ口ヨリ上部ハ樺兵衛街道トシ、東部ハ北沢本流トシ、西上部ノ地域ニ於テ樺兵衛街道ヲ基線トシテ北方ニ進行シテコレヲ取得スルモノトス。

但シ、大正五年五月二十七日協定書第三條第四條第九條第十條ニ依ル各取得地一切ヲ包含スルモノトス。

第四條 西兵輪村側分割取得地ハ、伊那町側及ビ南兵輪村側ノ前条取得地以外ノ土地全部トス。

但シ、大正五年五月二十七日協定書第一條第六條第九條第十條ニ依ル各取得地一切ヲ包含シ、面積ニ過不足アルモ相互異議ナキモノトス。

第五條 伊那町常門寺増与地ノ位置ハ伊那町側ニ於テコレヲ決定スルモノトス。

第六條 本件土地ニ關シ將來道路修築、林道開闢等ノ必要起リタル場合ハ相互協議便宜ヲ図リ、道幅九米以内ノ道路敷地ハ無償ニテ提供シ、相協力シテ造成セシムベキモノトス。

第七條 本件土地特売代金ハ監督官庁ヨリ処分許可ヲ受ケタル際其ノ十分ノ一以上ヲ納付シ、残金ハ拾カ年賦ヲ以テ納入スルモノトス。

但シ、代金ノ納付ヲ怠リ義務ニ背反スル行為アリタル時ハ、特売ヲ取り消スモ異議ナキモノトス。

第八條 本件ニ關シ疑義ヲ生ジタル場合ハ、監督官庁ニ其ノ裁断ヲ一任スルモノトス。

昭和七年拾月拾日

伊那町長 武田光治郎 伊那町山野整理委員(五名略)

南兵輪村長 清水 磐 南兵輪村助役 太田 徳重

南兵輪村山野整理委員 倉田 寛幹 征矢 信三

原 又重 清水 忠隆

倉田 可二 伊藤 雅雄

伊藤 護 山崎 清直

清水 秀文 有賀 太樹

加藤 元嘉 有賀 太郎

松沢 多 太田 廣登

伊藤 祐也 有賀 忠一

池上龜次郎

西兵輪村長 唐沢房直 西兵輪村山野整理委員(二六名略)

仲藏立合人 長野県農林技手 服部啓治郎

(役場文書)

この協定によつて各町村の割り受けた分は左のとおりである。(図5-20)

一、字南沢における特売地及び専用地区計四十七町歩

一〇町歩 横山区専用区域

三〇町歩 平沢区専用区域

二町歩 伊那町地元記念

二町歩 常門寺縁故地

三町歩 伊那町原山、寺社平地元特権

一、字北沢における特売地及び専用地区計二百六十七町歩

三〇町歩 与地区専用区域

二町歩 南兵輪村地元記念

五町歩 高木城三増与地

二百町歩 西筑輪村特売地

三〇町歩 井新特売地概算

一、南沢実測反別 一〇二町六反二四歩

内特売地等差し引いて 九七四町六反二四歩

一、北沢実測反別 一二二町五反六歩

内特売地等差し引いて 九六〇町五反歩

南筑輪村 五三九町一反五反歩（特売地を含む）

伊都町 一一一町三反歩（同右）

西筑輪村 五九八町六反三反歩（同右）

注 実測反別計と配分面計との間に三畝の誤差があるが資料のまゝにして置く。

四、蔵鹿山の分割と入会権の整理

蔵鹿山の分割についても、大正五年七月三日次のような分割協定寛書が作成調印されている。

蔵鹿山分割協定寛書

西筑輪村字蔵鹿山三、八二二番

一原野三百六拾町歩

西筑輪村：羽成・大置・大泉新田

南筑輪村：神子柴・田畑・南殿・北殿・大泉

共有

右土地ヲ上伊都郡長ノ調停ニヨリ左記ノ方法ヲ以テ分割スルコトニ協議決定シ、将来異議ナキ為ニ本書參通ヲ作成シ關係町村長並ビニ郡長ニ於テ各々通ヲ保持スルモノナリ。

一、境界協定方法

境界ハ現在西筑輪村ニ依ルモノトス。但シ、宇蔵鹿山ノ内矢ノ南入りノ境界ハ大正五年七月三日締結ノ宇蔵鹿山ノ内矢ノ南入りニ關スル境界協定方法ニ依ルモノトス。

二、分割方法

第一条 西筑輪村羽成部落へ接近地ニ於テ武拾町歩ヲ、其ノ専用土地トシテ西筑輪区域ニ編入スルモノトス。

第二条 西筑輪村大置部落へ南沢水源ニ於テ五町歩ヲ、其ノ専用土地トシテ西筑輪区域ニ編入スルモノトス。

第三条 西筑輪村大置部落用水堰分村以下兩岸ノ地ヲ、河心ヨリ各武拾町歩以内ニ於テ一坪金四厘ヲ以テ關係部落ニ特売シ、其ノ専用土地トシテ西筑輪区域ニ編入スルモノトス。

第四条 西筑輪村關係部落ノ要求ニ応ジ、武拾町歩ヲ一坪金壹厘ヲ以テ特売ス。但シ、分割地ニ接續地域トス。

第五條 区域ハ南北二区ニ分割シテ南部ヲ西筑輪村、北部ヲ南筑輪村ノ所有地トス。

第六條 立本ハ分割シタル所屬地ノ所有トス。

第七條 一般分割ノ方法左ノ如シ。

一、部落割 二分 一、戸数割 四分 但シ大正五年四月一日現在ノ本籍戸數ニヨル。一、私有田畑反別割 四分 但シ大正五年四月一日現在

台帳反別ニ依ル。

第八條 分割整理費ハ特売地代金ヲ以テコレニ充ツ、前項ノ費用ニ過不足ヲ生ジタル場合ハ第七條ノ一般分割方法ノ割合ヲ以テ分配又ハ徴収ス。

第九條 本協定ニツキ將來異議若シクハ係争ヲ生ジタル場合ハ、上伊都郡長ノ裁斷ニ一任スルモノトス。

大正五年七月三日

（調印者略）

（入会山分割史）

このように、大正五年七月に分割協定は調印されたにもかかわらず、その後の分割作業は容易に進まなかった。分割境界線設定に際しては關係部落の間に意見の相違があり、いずれも自分たちの考えを通そうとしてまもらないばかりか、地元の権利の主張が前面に出て来たのである。入会権は普通入会部落間においてその使用収益権は平等なものであって、近代法体系の中でもそれは平等なものとして公認さ

れてきたものである。ところが、入会山の実際の使用に当たっては、地元部落の人たちによって多く利用され、生活に密接に結びついており、その長い間の慣習によって入会山が自分たちの山であるような觀念を持つに至っていた。このような觀念に支配された部落民の感情が、分割に際して自己の利害関係と結びつけて今までのような有利な利益を存続させ、あるいはこの際さらに有利な状況を作り出そうとして、理不尽な地元権利を主張するようになったのである。

大正七年六月、本村村長と山野分割委員一名が蔵鹿山現地視察を行ったとき、分割協定の拠点である砲術神の祠の位置が一五〇間ほど西方へ移動していることを発見した。これは、当時神様が山へ登った事件と言われた。また、九月二〇日の境界線決定の日には両村委員の外に地元村の約半数くらいの人たちが立ち合いに参加、酒を飲んで氣勢を上げ測量を不可能にした。このように境界の拠点を移動したり、示威行動によって有利な分割を勝ち取ろうとするなどの不当な挙にでることのほか、先に定めた協定を全く踏みにじるような要求を次々と提出して強硬に主張し、協定第十条に規定された上伊那郡長の調停さえ全く不可能にするような状態になった。したがって、大正一〇年ころまで協議はほとんど進まなかった。

このようにして十数年間分割問題は空白反省の期間となったが、昭和一〇年になって蔵鹿山分割の問題が再び活発になった。同年七月郡技手の来村により分割の協議を始め、九月には郡役所から分割促進の通牒^{（通牒）}。さらに、昭和一二年には経済部上伊那出張所からの分割促進の勧告が出されたのである。本村としては分割促進のため昭和一〇年一月と、一六年四月の二度にわたり、県に対して陳情をし、その間西箕輪村と協議会を持ったが解決の道は開かれず、再び戦時体制下の空白の時代に入ってしまった。

昭和二二年二月敗戦処理下の日本農村に、新しく自主的な組織として上伊那農村建設連盟が発足した。これは、混乱した農村を少しづつ系統づけ、農民に自らの力で立ち上がる力を与え、農村に民主化の息吹きを送き起こした貴重な農民集団であったが、この初代理事であった清水国人は、その一連の組織として本村に農民会を設立した。この会長に推された清水国人は目前の山積みする問題と共に、入会山分割の問題も取り上げたのである。入会山分割に乗り出し分割委員長に選任されるや、空白になっていた西箕輪村との折衝に委員長公人として、あるいは西箕輪村委員長の知人として、西箕輪委員諸氏と熱意と根拠を持って地味な交渉を続け、さらに、昭和二二年四月村長に就任するや、村政における治山の重要性を強調して、分割促進に懸命な努力を続けた。しかし、大正五年の協定の線に沿って分割を進めようとする西箕輪と、協定を無視して大幅に地元の権利を主張し、自村に有利に分割しようとする西箕輪との間に妥協点を見出すことは容易なことではなかったようである。

このような中で次のような事件が起きたのである。昭和二三年二月五日、南箕輪の七名の者が、蔵鹿山の山の神付近で用材一二石（唐松）と、薪を採集して七台の荷馬車に積んで家に帰る途中、羽広区の者およそ四〇人ばかりに取り囲まれて手綱を奪われ、積荷に手をかけようとしたので、その不法をなじったが全く聞き入れられず、大勢の勢いで積荷を全部降ろされ追い回されるといふ事件である。これは、自家用材伐採として正当な入会権の行使で、これを阻止することは入会権に対する不当な行為として両村合同委員会を取り上げ、南箕輪委員より羽広の不法行為を責め、今後における猛省を促した。これは分割協議中に起きた問題であったので両村に微妙な影響を与えた。両村の間に深い溝のできることを恐れて両村委員長の間で話し合いが行な



図5-21 昭和38年原正秋によって書かれた入会山分割史

われ、事件十数日後、羽広部落より材木等の返却の通知があったが、用材、薪とも取りに行くことなく放置され、その場に朽ち果ててしまったという。これは極めて不幸な事件であるが、分割促進に無言の力となったと言われている。(入会山分割史)

昭和二八年二月、緊急造林措置法に基づき蔵鹿山四五町歩に対して植林が指定され、三〇年度までに植林を終了する必要に迫られた。ところが本山は分割協議中ということで分割が終了するまで双方植林はしないという申し合わせであった。それにもかかわらず、西箕輪村がひそかに植林を計画し、四月六日に植林をするように準備をした。これを察知した南箕輪村は四月五日急ぎ、村民一〇〇〇余名を動員して、一〇万本の苗木を先手を打って植林したのである。このことは、「植林問題でもある蔵鹿山、先手を取られにらみ合う」、「先制植樹で二村対立、蔵鹿山中に南、西箕輪」、「植林で再び対立、蔵鹿山の入会問題」等、諸新聞に大きく取り扱われ報道された。紛争の拡大することを恐れた伊那警察署から警備隊長が両村和解の仲介に入るといふ事態になったのである。

このような事態になってからは両村間の協議は行なわれるはずもなく、南箕輪としては去る二六年蔵鹿山伐採地に対する西箕輪村よりの、南箕輪を除外した一方的な伐採地等の報告書に対する地方事務所長への申立書、蔵鹿山の分割のため同山への立ち入り、並びに同山の木材搬出方一時中止の伊那地区裁判所へ仮処分申請書の提出を行ない、さらに、協議による分割促進が困難なことから、持分分割請求の調停を伊那区裁判所へ申し立てる等の方策をとった。それによって、次のような裁判書の勧告が出された。

勧告

申立人 上伊那郡南箕輪村字神子集・宇田畑・宇南殿・宇北殿・宇大泉

右五部落代表者 村長 征矢直徳

相手方 上伊那郡西箕輪村字羽広・宇大置・宇大泉新田

右三部落代表者 村長 原 賢一

右当事者間の昭和二十八年の第二号共有分割請求事件につき、当調停委員会は当事者双方に対し左の通り合意すべきことを勧告する。

一、申立人及び相手方は各部落の上伊那郡西箕輪村字蔵鹿山参千八百貳拾貳番山林(公簿上原野三六〇町歩)に対する共有権及び入会権を左の通り分割する。

申立人は一二番中北沢以西、一三番中東方より測定して三十二町歩を除く部分及び一四番全部につき入会権の全部を取得し、同山林其の余の地域に対する共有持分及び入会権を放棄する。

相手方は申立人が右共有持分及び入会権を放棄したる部分について共有権及び入会権の全部を取得し、同山林其の余の地域に対する共有持分及び入会権を放棄する。立木その他の毛土は土地に従って帰属する。

二、相手方は申立人に対し金五拾万円を支払うこと。

三、相手方は申立人がその得属山林の利用管理の為、相手方帰属山林内を通行し、及び新道路の開設、既設道路の改修をなすことを許容し、相手方

はこれを妨げないこと。

四、以上の他双方何等の要求をしないこと。

五、訴訟費用及び調停費用は各自負担する。

昭和二十八年九月二十八日

長野地方裁判所伊那支部調停委員会

調停主任裁判官 草深今朝重

(役場文書)

このような調停裁判の勧告が出され、本村としてはこの勧告の線で解決しようとした。ところが、西箕輪側はいったんは了承しかけたが、諏訪へ視察に行き地元村が有利に解決された例を聴き、急に態度が硬化して再び暗礁に乗り上げてしまった。そのため、三〇年三月裁判所の第二勧告が出された。それは西箕輪の要求を入れ、次のように変更されていた。

- 一の項のうち「申立人は二番中北沢西尾根以西」と三字加入
二の項のうち「金五拾万円」を「金五拾万円」に変更する。

(役場文書)

この第二勧告については、その場では両村とも不満で応ぜず物別れになった。特に西箕輪側の要求は二〇万円の支払いを免除せよというのであるが、これに対し南箕輪としては土地では譲歩するが五〇万円を二〇万円に減らし、なおそれを免除せよという相手に強い反発もあったが、何としても分割を成立させたいという基本的な心情から、二〇万円の代償として将来の施設の便を考慮し、岩の入り入口において最小限三町歩の土地を確保するという妥協案を提示した。この妥協案によってようやく両村の合意が成立し、三二年一月二五日調印が行なわれた。大正五年分割協定覚え書調印以来、分割の完結まで実に四年の歳月が経過した。その間、分割実施直前に振り出しにもどった

こともあり、時には激しい対立で険悪な空気がなったときがあり、反省空白の時代もあったが、その紆余曲折は時代の推移のなせるわざであったと考えられ、いずれの時代においても村当局者はもちろん、関係委員は共に全力を傾倒して来たのであって、この間に両村の交渉協議十数回、村内委員会、実地踏査等、実に一〇〇余回を重ねており、まさに苦節四〇余年の筆舌に尽せぬ努力であったと考えられる。

新たな薩摩山の分割協定者は次のようである。

薩摩山分割協定書

伊那市大字西箕輪字薩摩山の分割については、大正五年七月三日以来各権利関係者が分割の必要を痛感し、それぞれ協議を重ねてきたが結論を得られず永年の懸案となった。たまたま、昭和二十八年関係者から速やかに無立木地を緑化し治山治水の完べきを期するため、分割の必要な議が起り、その後慎重に検討の結果、今回次の入会地を互譲の精神により左記条項を定めて円満に分割し、共有権及び入会権を解消する協議が成立したので、ここに将来異議のないことを認め本協定書三通を作成し、各関係市村及び長野県において各一通を保持するものとする。

- 一、所在地 伊那市大字西箕輪字薩摩山三八二番地
一、面積 台地面積三八二番地原野三六〇町歩

実地面積三八二番地原野二七九町三反四畝

- 一、所有者 伊那市大字西箕輪の内

羽成・大萱・大泉新田

上伊那郡南箕輪村の内

神子榮・田畑・南殿・北殿・大泉

協定事項

- 一、伊那市大字西箕輪の内三部落を甲とし、南箕輪村の内五部落を乙として、伊那市大字西箕輪字薩摩山三八二番地山林に対する共有権及び入会権を解消し左記により分割する。

- 二、乙は12林班中北沢の西尾根以西、13林班東方より測定して三十二町歩を除く部分及び14林班全部につき共有権及び入会権の全部を取得し、同山その余の地域に対する共有持分及び入会権を放棄する。
- 三、甲は、乙が右共有持分及び入会権を放棄した部分について共有権及び入会権の全部を取得し、同山林その余の地域に対する共有持分及び入会権を放棄する。
- 四、甲はその帰属山林中より14林班入口即ち岩ノ入沢と本沢との合流点を中心にした箇所、幹線林道以南に於て三町歩を乙に分譲するものとする。
- 五、立木その他毛土は土地に従って帰属する。
- 六、甲乙とも帰属山林の利用管理のため林道の開設改良及び山元土場の設置を必要とするときは、合議の上最小限度の土地の使用と支障木伐採の補償料は無料にて許容し、且つ利用の自由を妨げないものとする。
- 七、林道の新設に要する費用の分担は取得面積の割合とする。
- 八、分割登記にあたりては土地台帳面積を測定面積の割合により按分する。
- 九、この協定に使用する図面は、昭和二十四年十月十五日長野県森林計画課五千分の一による。
- 十、この協定事項の実行にあたり疑義を生じたときは調停者に一任するものとする。

附帯事項

第四項に定めたる三町歩の個所の選定及び境界線の決定については地方事務所に一任するものとする。

昭和三十三年十二月二十五日

伊那市長

熊谷友一郎

西筑輪分割委員長 鈴木孫十郎

以下分割委員三十五名連署（氏名略）

南筑輪 村長 清水 國人

南筑輪分割委員長 清水 國人

南筑輪分割委員（便宜上三段に記載）

なお、本分割協定に基づいての各取得分面積は次のとおりである。

〔図5-22〕

村・部落名	台帳面積	取得面積
南筑輪 村	一五〇町七反七畝歩	一一七町六反六畝二六歩
西筑輪ノ内羽広	一一二町八反六畝歩	九四町四反七畝二〇歩
大筑	五四町一反三畝歩	四一町九反六畝二一歩
大泉新田	三二町五反四畝歩	二五町二反二畝二三歩
合計	三六〇町三反〇畝歩	二七九町三反四畝

（役場文書）

加藤 善高	加藤 五郎	征矢 嘉義
太田 庄衛	有賀 榮治	有賀 実
有賀 敬三	清水 清人	有賀 勝治
加藤 三治	清水 宗雄	原 義徳
高木 賢司	柴田宗太郎	清水 忠弘
藤沢 久勝	山崎 正義	原 勝治郎
木ノ島新一	有賀 一衛	清水 正次
小林 時春	清水 英一	唐沢 文亀

（役場文書）

（四）御射山の分割

御射山については、明治三五年ころから入会権の根理解消のことが持ち上がり、たびたび話題になったが実際に分割の協議に入ることはなく、大正五年、隣接地の蔵鹿山分割協定が成立した際に、それに引き続き分割すべく研究が行なわれた。しかし、進展が見られず、大正一三年になって入会関係部落よりそれぞれ御射山分割についての意見書が集められ、分割についての実質的な協議の時代に入ったように見え

協議は地元である西箕輪村の意見書を踏み台にして行なわれた。

この西箕輪側の希望意見に対し南箕輪村・伊那町側の意見は、西箕輪に付与又は特売する面積を少なくし、一般分収の部分の面積を大きくする考えで協議をしたが意見の一致を見ず、当時は大泉所や三本木原・上ダ溝原の分割後の処理及び、その後の育成作業を計画的に遂行するのに忙しく、結論を出さぬままに歳月が経過し、長い空白の時代が続いた。

昭和二八年になり、西箕輪村が県より四六町歩の造林指定を受け造林を迫られたことから、再び御射山分割のことが問題になってきた。そこで、各部落の間において協議を重ねられたが、そこには二つの問

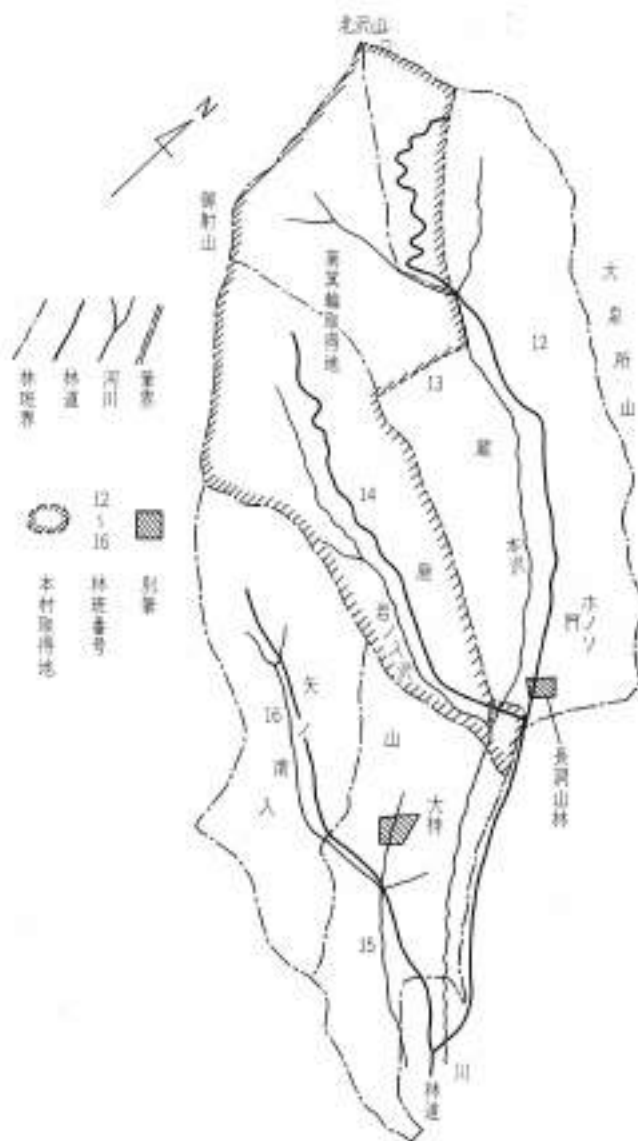


図5-22 御射山分割図

題点があった。その一つは、御射山の境界確認の後、二九年一〇月に実地測量をしたところ、台帳面積四八三町九反一畝の面積に対し、実測面積が二七二町一反一畝歩に減少していたことである。実測面積は台帳面積の五六%しかないものであって、その理由としては、

- 1 井出ノ沢四八町歩、南・北沢分割の際特売約束のもの、
- 2 本山麓、五町歩
- 3 接境地よりの侵食によるもの

等であるとしているが、1と2は別として、3に問題がある。御射山は明治二九年からの入会地の実地大整理のときも手の入らなかった所であり、また、御射山が部落に最も近い山であることによって、長

い年月の間に侵襲・立て出し等が進んだためと考えられ、分割の際には問題となるべきはずのものであった。しかし、境界決定の際に多少問題になったが、長い年月の事でいかんともなし難く、山添いの部落はもちろんであるが、南箕輪や伊那町の部落も大きな問題とすることなく、減少した面積のままで分割を進めることを了承せざるを得なかったようである。だが、この面積の減少が両者に少なからぬ心理的影響を与えたことは否めないように感ぜられる。

第二の問題点は、入会権の差をどう評価するかということであ

る。普通入会権は平等であるがこの御射山に対しては古くから入会権に差があったのである。それは、宝暦八年の「改替わし証文の事」の中の御射山の項に、「右山刈敷山の口の儀は神子集村より焼れ来たり、右山五月半夏より止め山に致し、上戸、中条村は尾根通り半夏過ぎに草刈り取り申すべき定め」とあり、さらに、御射山のうち、葛ヶ沢の項に「右沢の儀は上戸、中条村五月の山の口より勝手次第刈り取り申す可き定め御座候」とある。明らかに上戸・中条村の特権が認められている。この入会の特権をどう評価するかという点をふまえて、西筑輪側から強い意見が出されて分割問題の解決を長引かせたのである。

このようにして、大正一三年に出された関係町村の意見書をもとにして妥協点を見出すべく、何回もの協議が続けられたのであるが、容易に進まなかった。ようやく妥協の見通しができる段階に達した昭和三十一年に至り、地方事務所林務課において分割案が作成され、それをもとに協議を進め昭和三十二年二月二十五日、遂に協定成立にこぎつけたのである。その分割協定は次のとおりである。

御射山分割協定書

伊那市大字西筑輪字御射山の分割については、大正十三年十一月二十五日各権利関係者が分割意見書を提出して討議したが結論を得ず本年の懸案となっていた。たまたま、昭和二十八年四月十六日当時の西筑輪村役場において分割問題が再び起こり、その後各種権利関係者は討議熟議の結果、今回次の土地を左記条項により適宜をもって円満に分割し、且つ入会権を解消する協議が成立したので、ここに将来異議のないことを認め、本協定四通を作成し各関係市、町、村、区及び長野県において各寄附を保持するものとする。

- 一、所在地 伊那市大字西筑輪字御射山六四六七番一 同六四六七番二
一、面積 台帳面積 六四六七番一 四四七町三反四畝一五歩

六四六七番二 三六町五反六畝歩
実測面積 六四六七番一 二七二町一反一畝歩
六四六七番二

- 一、所有者 伊那市大字西筑輪の内 与地・中条・上戸・大萱・大

泉新田

共有

南筑輪村、伊那市大字伊那の内御射山・山寺

- 第一条 分割については南・北沢分割の例による。

- 第二条 三井筋上下二〇間の特売は、南・北沢分割の例により一九町一反六畝歩とし、一坪当たり一四五〇銭とする。

- 第三条 西筑輪五部落に対しての特売地は四二町七反八畝とし、一坪当たり三〇銭とする。

- 第四条 西筑輪三部落（上戸・中条・与地）に対し、各区二町八反三畝の専用道を附与するものとする。

- 第五条 旧御射山神社地として一町二反八畝歩を、西筑輪村へ附与するものとする。

- 第六条 西筑輪三部落（上戸・中条・与地）の地先三〇間通り、六町六反九畝歩を一坪当たり三〇銭にて前記三部落へ特売するものとする。

- 第七条 葛ヶ沢は宝暦八年の申し合わせにより二町一反四畝歩を、上戸・中条にて取得するものとする。

- 第八条 上戸部落へは地元記念林として、四町二反八畝歩を附与するものとする。

- 第九条 一般分取方法は南・北沢分割の例によって次の通りとする。但し、大正五年現在の数字による。

- 戸数割 三分 部落割 三分
地価割 二分 私有田畑宅地反別割 二分

- なお、右による一般分取割合は次の通りとなる。

- 西筑輪 三分五厘 南筑輪 五分 伊那 一分五厘
第十条 分割地は市村区別に三区域に分け、その位置は西筑輪に接続する領

所を西貢輪分とし、次に南貢輪村伊部の順に取得するものとする。

第十一条 分割については分割地の一端が林道へ通ずるよう分割する。但し、林道より支線を開設し、支線により双方の便宜を計ること。

第十二条 立木搬出についての道路は必要最小限度に限り、無償にて開設出来るものとする。但し、道路開設に支障となる立木については補償料を出すものとする。

第十三条 特売地の代金の分収は南、北沢分割の例によって行なう。なお、与地へ売却した農地の代金もこの例による。

第十四条 分割整理費は特売地代金をもってあてるものとする。

第十五条 この協定事項の実行に当たり疑義を生じたときは、調停者に任ずるものとする。以上

昭和三十三年四月十八日

伊部市長 熊谷友一郎郎

西貢輪委員長 鈴木 三郎郎

〃 分割委員 九名（氏名略）

南貢輪村長 清水 国太郎

〃 委員長 清水 国太郎

〃 分割委員（二段に記載する）

堀 安達郎 馬場 武男郎

原今朝五郎郎 原 孝也郎

有賀 一徳郎 佐々 嘉義郎

清水 清人郎 有賀 文武郎

加藤 善高郎 小林 時春郎

有賀 敏三郎 太田 庄南郎

伊部委員長 田畑五郎司郎

〃 分割委員 四名（氏名略）

（役場文書）

右協定に基づく専用特売地、一般分収面積および取得面積は次のよ

うである。

1 専用土地 四六町一反九畝

2 特売地 六八町六反三畝

3 一般分収面積

西貢輪分 五五町〇反五畝

南貢輪分 七八町六反五畝

伊部分 二三町五反九畝

各関係市村において取得すべき面積の計

西貢輪 一六九町八反七畝

南貢輪 七八町六反五畝

伊部 二三町五反九畝

このようにして、四〇年以上の長期にわたる難問題であった御射山の分割問題は解決し、それを祝福し記念するため、御射山入口の経ヶ岳林道端に分割記念石碑が建てられている。分割に対する長年月にわたる関係者多数の努力の結果の表現であると同時に、将来永く元の入会関係住民の願望に山の尊さと森林愛護の気持ちが養われることを願っているように思われる。

（四） 蔵座山のうち矢ノ南入りの分割

矢ノ南入りにしても、大正五年、次のような分割協定書覚え書が作成された。

覚え書

西貢輪村字蔵座山ノ内矢ノ南入リ三八二三番地

一、原野 貳拾八町五反歩

西貢輪村：須田・大室・大泉新田・上戸・中条ノ内蔵座敷

南貢輪村：神子・田畑・南蔵・北蔵・大泉

右土地ヲ上伊部市長ノ調停ニヨリ左記ノ方法ヲ以テ分割スルコトニ協議決定

共有



図5-23 御前山分割記念石碑

シ、将来異議ナキタメ本書参通ヲ作成シ関係町村長並ニ郡長ニ於テ各悉通ヲ保持スルモノナリ。

一、境界協定方法

境界 現在西気輪村因ニ抛ルモノトス。但シ、字藏鹿山トノ境界ニ付イテハ左記ノ方法ニ依ル。
西気輪村字藏鹿山三八二番、一、原野参百六拾町歩
西気輪村字藏鹿山ノ内矢ノ南入リ三八二三番、一、原野武拾八町五反歩
前記西第ノ全部ヲ実測シ各筆ノ台帳反別ニ依リ按分シテ其ノ境

界ヲ定ム。

二、分割整理方法

第一条 西気輪村上戸部落へ接近地ニ於テ宅町式反歩ヲ其ノ専用地上シテ西気輪区域ニ編入スルモノトス。

第二条 西気輪村殿敷部落へ接近地ニ於テ宅町式反歩ヲ其ノ専用地上シテ、西気輪区域ニ編入スルモノトス。

第三条 西気輪村梨木、殿敷用水堀分木料ヨリ以下両堤共河心ヨリ兩岸各式拾間以内ノ地ヲ、一坪金四厘ヲ以テ關係部落ノ専用地上シテ特売シ、西気輪区域ニ編入スルモノトス。

第四条 区域ハ南北二区ニ縦断シ南部ヲ西気輪村、北部ヲ南気輪村ノ所有地トス。

第五条 立木ハ分割シタル所屬地ノ所有トス。

第六条 一般分割方法左ノ如シ。

一、部落割 式分 一、戸数割 四分 但シ大正五年四月一日現在

本籍戸数ニヨル 一、私有田畑反別割 四分 但シ、大正五年四月一日現在台帳反別ニ依ル

第七条 分割整理費ハ特売地代金ヲ以テ之ニ充ツ、前項ノ費用ニ過不足ヲ生

ジタル場合ハ第六条ノ一般分割方法ノ割合ニヨリ分配又ハ徴収ス。

第八条 将来本協定ニ疑義若シクハ保争ヲ生ジタル場合ハ、上伊郡郡長ノ裁断ニ一任スルモノトス。

大正五年七月三日

(氏名略)

(役場文書)

この分割協定書は藏鹿山と同様、実地に移されないまま長い年月を経過してしまった。藏鹿山分割の際に矢ノ南入りの分割も一緒にという意見も出されたが、私有林との境界が判然とせずもつれてしまつて、矢ノ南入りだけ最後に残された形になった。

昭和三年に至り、御射山、藏鹿山が相次いで分割されたので、關係部落としてはこの山の分割に全力を集中することになり、藏鹿山分割の事後処理の後、昭和三年からこの山の分割にとりかかったが、ここにもいくつかの問題点があった。

その一つは、矢ノ南入りのうち「セイキが洞」は明治五年ころまで上戸部落の所有地であつたから、その点を充分考慮して欲しいという上戸の主張である。上戸部落の主張によると、慶應義塾以前は「矢ノ南入り」と「セイキが洞」に分かれており、セイキが洞は上戸部落の所有地で矢ノ南入りが入会山であつた。その証拠として現在の南入りの実測面積は五四町余りもあり、台帳面積は二八町五反歩である。それを差し引くと二五町歩がセイキが洞となる。上戸部落はセイキが洞を自分の山として手入れもし植栽もして来た。また、同地域よりの湧水は昔より飲料水として用い、租税も宝暦時代から明治初年まで上戸部落単独で納めてきたというのである。

ところが、明治八〇一〇年の山野の地租改正に当たり、セイキが洞も矢ノ南入りのうちとして地券を受け、以後の地租は入会部落全部で分担して納入している。さらに、上戸の主張に対してセイキが洞が上戸のものであるという話は初めて聞く話であるとか、矢ノ南入り全体をかつてはセイキが洞と呼んだのだという意見などが他部落から出されて、上戸の主張と対立し、全山を分割の対象とするか、セイキが洞を分割対象外とするかで紛糾した。協議の末全山を分割の対象とするが、地元である上戸の希望をくんで分割する線は落ち着いている。

二つ目の問題は矢ノ南入りに生育している立木である。かなり大きく成長している立木があり、大正五年に作成された分割協定書では立木は分割された所属地の所有とするとしてあるが、この立木の価値の上昇に利害がからみ分割の障害になったのである。この問題は、昭和三七年二月現地境界調査の際協議され、ようやく立木を伐採処分した後分割案を立てるといふ異例の方法で解決をした。

このように、立木の伐採処分が行なわれることになったので、立木の材積調査、伐採、入札売却、売却金の分配等のために一年間の日時を費すことになった。この後、両村の間で分割の話合いが進む途中、西箕輪村内各部落の意見のくい違いがあつてやや長引いたが、昭和四〇年四月になり、ようやく次のような分割協定書に調印が行なわれ、分割が実行されることになった。

蔵鹿山の内矢ノ南入り分割協定書

伊那市大字西箕輪字蔵鹿山の内矢ノ南入り三八二三番地の分割については、大正五年七月以来各種権利関係者がその必要を感じ、それぞれ協議を重ねてきたが解決に至らず本年の懸案となつていた。

時代の推移と経済的進展は森林生産力の向上を計らなければならない要請となつて来た。関係者にあつてはこの無立木の粗悪林を生産林地とし、又治

山保全の全きを期するため旧慣を改めて速やかにこれを分割し、新しい方向を定めようとする声が高まつてきた。昭和三十六年十二月より慎重討議を繰り返した結果、今回次の入会地を互譲の精神により左記条項を定めて円満に分割し、共有権及び入会権を解消する協議が成立したので、ここに将来異議のないことを認め、本協定書参通を作成し関係市町村長及び長野県において各参通を保持するものとする。

記

- 一、所在地 伊那市大字西箕輪字蔵鹿山の内矢ノ南入り三八二三番地
- 一、面積 台帳面積貳拾八町五反歩 実測面積 五拾壹・八畝
- 一、所有者 伊那市大字西箕輪の内羽広・大蓋・大泉新田・上戸・中条の内蔵屋敷・南箕輪村の内神子集・田畑・南殿・北殿・大泉

協定事項

- 一、伊那市大字西箕輪の内五部落を甲とし、南箕輪の内五部落を乙として、伊那市大字西箕輪字蔵鹿山の内矢ノ南入り三八二三番地原野に対する共有権及び入会権を解消し左記により分割する。
- 二、甲は第1・2・3・4・5林班にわたる全域につき共有権及び入会権の全部を取得し、第6林班の地域に対する共有権持分及び入会権を放棄する。
- 三、乙は甲が右共有持分及び入会権を放棄した部分第6林班について共有権及び入会権の全部を取得し、同山のその他の地域に対する共有持分及び入会権を放棄する。
- 四、甲乙とも帰属山林経営管理のため林道の開設改良山元土場及び土修築架線の設置を必要とするときは、合議の上最小限度の土地の使用と利用の自由を妨げないものとする。
- 五、林道新設に要する費用の分担は取得面積割とする。
- 六、用水路は相互にこれを保護するものとし、改良附け替等の必要あるときは協議のうえ土地使用の自由を妨げないものとする。
- 七、伐採木搬出、第四項及び第六項の事業実施のための土地使用は必要最小

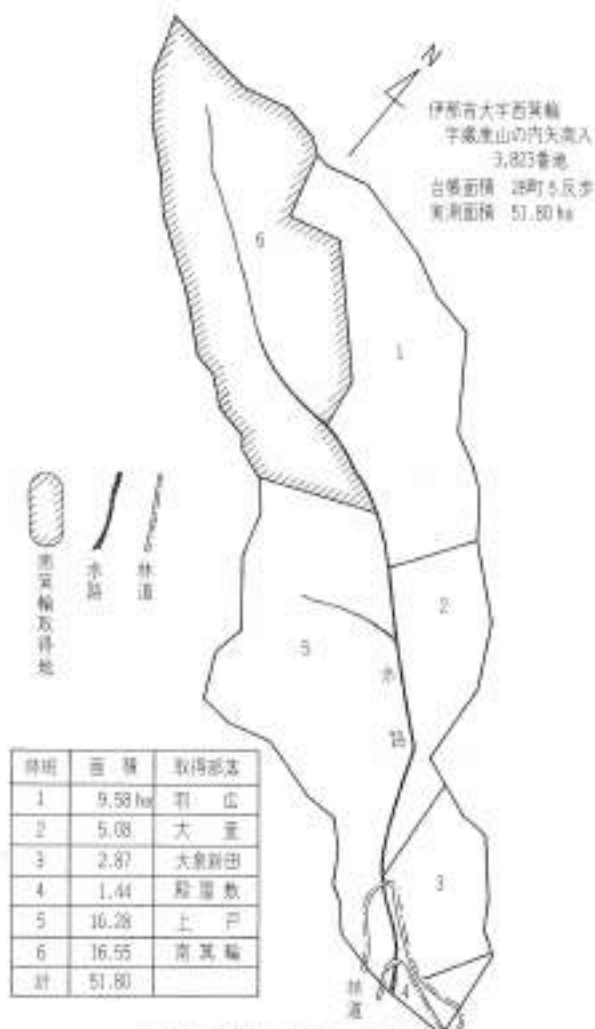


図5-24 麓鹿山の内矢ノ南入り分割図

眼にとどめ無償とし、立木に損傷を及ぼすときは時額により補償料を支払うものとする。

八、この地域内において治山及び第四項並びに第六項の事業実施のため、必要の石壁、切芝等の採取は協議のうえ自由のうちに許可されるものとする。

九、分割登記にあたりては土地台帳面積を実測の比例により按分する。

一〇、この協定に使用する図面は昭和三十七年二月二十七日上伊那地方事務所所蔵した三千分の一による。

一一、この協定事項の実行にあたり疑義を生じたときは、調停者に一任するものとする。

昭和四十年四月二十八日

管理者 伊那市長 原 賢一

西箕輪分割委員長 清水今朝義

二 分割後の運営と村有統一化

一 大泉所山・北沢山の村有統一化

部落有財産、特に入会地の村有統一化については明治末期以降鋭意努力が続けられ、入会原野については大正三年の契約によって北原、大芝原、三本木原の三原野が村有に統一され、入会新山はこれに引き続いて村有統一化が進められた。

大正八年、村は各区に対し大泉所山・御射山・北沢山等の村有統一化について意見を求めた。これによって、各区は区総集会を開き区民の意見を聞いて村長あて報告書を出している。その塩ノ井区の報告書

委員 一四名(氏名略)
 管理者 南箕輪村長 清水 国入
 南箕輪分割委員長 山崎 正義
 委員 九名(氏名略)
 調停者 長野県林務部長 金井 太郎
 分割によって南箕輪村及び西箕輪各部落の
 収取した面積は次のようである。

林道	面積	取得部落
1	九、五八畝	羽 広
2	五、〇八畝	大 重
3	二、八七畝	大泉新田
4	一、四四畝	殿屋敷
5	一六、二八畝	上 戸
6	一六、五五畝	南箕輪
計	五一、八〇畝	

(図5-24)

(税務文書)

を一例として掲げて見よう。

報告書

一、大泉所山、御射山、南北両沢其ノ他入会地ノ性質ヲ概シタル箇所ニ就イテハ当部落ハ、其ノ所有權及ビ入会權トヲ全然村有ニ帰属セシムルコトニ対シテハ一般異議コレ無ク候ニ付キ、此ノ段御報告申シ上ゲマス。

大正八年八月廿六日 塩ノ井区長 穂高徳二

南箕輪村長矢友三郎殿

（役場文書）

各区共村有統一化について賛成の報告がなされており、これによって、大正九年一月三日部落有財産統一に関する議案が「南箕輪村部落財産ハ別冊覚書記載ノ条件ニ基ツキ統一整理スルモノトス」として提案され、同日決議されている。この覚書の第一、二、三条には次のように記載されている。

第一条 南箕輪村字北沢八三〇八番山林実測面積千六百七拾町七反五畝歩、

南箕輪村字中野原八三〇六番ノ内一号原野反別四町五反六畝八拾町六反廿四歩、及ビ西箕輪村字御射山六四六七番ノ一、同番ノ二原野反別四町八拾六町二対スル、南箕輪村久保北割、久保南割、大泉・北殿・南殿・田畑・神子柴・沢尻各部落ノ入会権及ビ其ノ持分ヲ無償無条件ニテ本村有ニ統一ス。

第二条 南箕輪村大泉所二三五七番ノイ号一ヨリイ号九ニ至ル九筆山林反別八百六拾四町二対スル、南箕輪村久保北割、久保南割、大泉・北殿・南殿・田畑・神子柴、沢尻各部落ノ入会権及ビ持分ヲ無償無条件ニテ本村有ニ統一ス。

第三条 西箕輪村字藏鹿山三八二二番原野反別参百六拾町歩、字藏鹿矢ノ南入リ三八二二三番原野反別式拾八町五歩ハ、現在ノママ部落有トシテ存置シ、暫ク村長管理ニ移シ、追ッテ適當ノ方法ヲ講ジ整理ス。

（役場文書）

これをみると、大正九年の一月三日に、第一条で北沢山・南沢・神名沢・原山寺社平・御射山の、第二条において大泉所山の村有化が書いてあり、議会においてそれが承認されたわけである。しかし、この段階では、大泉所山だけが実地の分割が済んでいたのみで、まだ、公簿上の分割が未済であり、他の入会山ではまだ実地の分割もできていなかった。したがって、分割を予想して各部落の入会権及びその持分を無償無条件で村有に統一することにしたものとみられる。

しかし、実際分割後の山の運営はこの決議と幾分異なった形となっている。大泉所山については大正五年分割協定書覚書にも、全部落が入会権を持っていたためか、割り受け分は一括して南箕輪分と記載されており、南箕輪割り受け分は各部落へ再分割する気配は全く無く、大正九年の「覚書」によって新山のうちで最も早く村有に統一されたのである。

北沢山・南沢山等は、大正九年の村議会において村有統一化が議決されても、まだ、伊那町・西箕輪村との入会関係が続いており、昭和七年になって入会権の解消、分割が成立したのであって、この段階になって初めて実質的な村有化が実現したものと考えられる。

（二）藏鹿山・御射山・矢ノ南入りの管理運営

藏鹿山については大正九年の覚書では当分の間部落有のまま存置することになっていたが、昭和八年八月の統一委員及び区長合同会議提案によって、入会外三部落加入等に関する既存權益五部落懇談会が持たれ、さらに、統一委員全員協議会において分割後の村有統一化が決定されている。藏鹿山に対しては、久保・塩ノ井・沢尻の三部落は入会権を持っていなかったが、北原・大芝・南原等の新しい部落と共に、北原味野村有化の際の神子柴部落の例にない権利を取得する方

式が定められ、昭和二十四年七月蔵鹿山分割についての委員会の席において、このことを再確認のうえ決議している。しかし、昭和三十二年一二月の分割後は村有ということには成らず、三三年に今まで入会権を持たなかった部落の代表を準委員として参画させる形の、蔵鹿山運営管理委員会を発足させ、造林撫育等の運営管理に当たることになった。

その後、村に植林を委託し、昭和三四年以後多額の村費を投じて全村的立場で造林を行ない、四一年には入会林野整備組合が成立、さらに、四三年に蔵鹿山・御射山・矢ノ南入りをその対象地域とする南箕輪生産森林組合が設立された。この生産森林組合には入会権を持たなかった部落も、前記の昭和八年以来の村有化の動きの精神と、全村的立場での植林に対する費用、労力の負担が考慮されて加入が認められたのである。しかし、山に対する権利の差を組合加入の口数の差として残すことによつて、全村的な生産森林組合としたのである。

御射山については、大正九年の覚え書には村有統一化が決議されているにもかかわらず、昭和三二年の分割後、次のような覚え書が作られた。

御射山分割による南箕輪取得地に関する覚え書

永年の懸案であった伊那市大字西箕輪字御射山面積貳百七拾貳町貳反五畝の分割が南箕輪村長並びに各関係部落の協力により、昭和三十二年四月十八日日出度く協議が成立し調印となった。依つて本村側取得地の処理について種々協議の結果、関係部落は左記条項により植林維持管理処分等に当たることとし、将来異議のないことを認め、本覚え書九通を作成し、各関係部落及び南箕輪村に於いて各巻通を保有するものとす。

記

一、伊那市西箕輪字御射山六四六七番地の内、南箕輪取得地七拾八町六反五

畝については南箕輪村神子榮・田畑・南殿・大泉・久保・塩ノ井・沢尻の八部落の所有とし、八部落より保存分割登記を完了するものとする。

二、所有者八部落は、各二名の委員を選出し合議制により管理運営に当たる。

三、造林撫育を村に委託する場合は、村に於て地業した分の処分に際し各部落は分収額の二割を施行費として村に支払う。

四、税金その他に要する諸費用は分収率により各部落の負担とする。

五、分収方法は次の通りとし、大正五年現在の数字による。

部落別 三分 戸数割 三分 地価割 二分
面積割 二分

(入会山分割史)

なお、右による部落別分収割合は左記の通りとする。

部落	%	面積
大泉	一七・九〇	一三・四四
北殿	一六・六三	一三・〇八
南殿	一〇・五四	八・二九
田畑	一五・一一	一一・八八
神子榮	一一・二三	九・六二
久保	一一・四〇	一〇・五四
塩ノ井	八・八〇	六・九二
沢尻	六・二〇	四・八八
計	一〇〇・〇〇	七八・六五

が作られている。

記

一、伊那市大字西箕輪字蔵鹿山の内矢ノ南入り三八二三番地の内南箕輪取得地一六・五五畝については関係部落大泉・北殿・南殿・田畑・神子榮の五部落により、保存分割登記を完了するものとする。

二、前記取得地は、従つて関係部落の専用並びに管理に属する。

三、前記五部落は次の方法により分収することを約す。

(1) 五割を大正五年現在の関係部落平均割二分、地価割二分、面積割二分、戸数割四分とする。

(2) 五割を昭和三十三年五月三十一日現在の戸数割五分、面積割五分とする。

四、前記五部落は各二名の委員を選出し、合議制により管理運営に当たる。

五、税金その他造林保育及び運営等一切の諸費用は、分収率により五部落の負担とする。

六、前記第三項による部落分収割合は次の通りとする。

大泉 二五・〇七% 北殿 二三・一八七% 南殿 一四・二三一%

田畑 二〇・八二五% 神子集 一六・六八七%

昭和四十年四月三十日

五部落委員 署名捺印(略)

(入会山分割史)

矢ノ南入りはこうして入会権を持っていた五部落の共有として残され、五部落より各二名ずつ選出された委員の合議制により運営されることになった。

しかし、御射山、矢ノ南入りの両山は共に蔵鹿山と同様造林が村に委託されて全村的な力で植林されたことと共に、昭和四一年法律第一二六号「入会林野等に係る権利関係の近代化の助長に関する法律」に基づいて、各山ごとに入会林野整備組合が作られ、この組合の整備計画に基づき、南箕輪生産森林組合の発足と共に、権利の差による保存口数に差を持つ形で、全村的な生産森林組合の山として運営管理されることになったのである。

第七節 昭和の森林育成とその経営

一 大泉所山の植林

入会山の分割、入会権の解消は、それによって山林の適切な管理運営ができるからということが理由であった。したがって乱伐によってばげ山となった所には植林をすることが当然の要請であった。

ところが、その植林の方法について村当局と地元であった大泉部落との間に意見の対立が生まれた。国は既に植林の早期実現拡大のため大正九年官行造林方式による植林を奨励し始めていたわけであるが、村当局はこの官行造林方式によって大泉所山分割割り受け地四百町歩余を管林地域とする計画を立て、次のような議案を村議会に提出した。

議案第三十三号

本村公有林野中別紙内訳書記載ノ箇所見込面積合計四百町歩反八歩ヲ管林地域トシテ、左記事項ヲ以テ公有林野官行造林法ニ拠ル造林契約ヲ締結スルモノトス。

但シ、議決ノ精神ニ反セザル範囲内ニ於テ大林区署長トノ協議ニヨル場合ハ其ノ一部ヲ村長限リ変更契約スルコトヲ得。

大正十三年十一月十日提出 南箕輪村長 倉田 三

記

一、栽植予定樹種

杉(スギ) 落葉松

一、栽植予定期間

自大正十四年至大正二十三年 拾九年

一、伐採予定期間

自大正六十四年至大正八十三年 貳拾九年

一、存続期間

自大正十四年至大正八十三年 七拾九年

一、分収割合

国五分 町村五分

公有林野官行造林地施行申請地内取書

上伊那郡南箕輪村二三五七 イ号ノ一 イ号ノ二 イ号ノ三

台帳面積 三百五拾八町三畝貳拾六歩 (表裏面積四百町四反貳畝八歩)

(表裏文書)

この議案は一五年八月造林面積を一二九町二反五畝に減らして提案され議会において決定された。

このような造林計画に対し大泉区から強い反対が出たのである。大泉所山は大泉区が入会時代の山元であり、同山に水源を求めて五か部落養水の上井があり、古くから水源かん養のため真剣な努力を続けている。例えば天保一四年(一八四三)から弘化四年(一八四七)にかけての江戸奉行所まで出た大泉所山論はこの水源の枯渇を憂えての主張であり、明治六年から一二年にかけては幾度も水利権について紛争が起き、水利権擁護のために部落をあげて努力してきている。入会山の利用という点でもこの山を最も活用してきたのは山元の大泉であり、そのため入会山の保護についても最も関心が高かったのである。このような歴史的経過から生まれる大泉所山に対する大泉区民の心情が、官行造林に反対する機文を全村に配布させることになったと考えられる。

その機文の主旨は、「官行造林の目的は無立木山野に対し経営資力なき貧弱町村に植林させるのが目的である。本村は自己の林野に対し経営資力のない貧弱な町村ではない。吾等の先輩は大芝・北原・三本木原等に村営植林をして縣下の模範林を造成して来た。然るに今我々が本泉所山を官行に依託することとは先輩に対して顔向けができないではないか。大泉所山は四〇町程度の植林と他に多少の補植程度で充分で、平等に夫役をなせば百木代三〇〇円程度で足り、村の経済に大きな負担にはならないのに、四〇〇町余を入手に渡して顧みざるがご

ときは町村自治の本義にもとる」ということになった。

この反対論は、大泉所山の植林を必要とする面積についての認識に村との間に大きな食い違いがあるが、反対論者も「素誠以て本村将来の発展を希望する」とあり、このことは村当局においても当然充分に考慮した上でのことであったと考えられ、村会では水利権擁護と山の経営を判然と区別し、水利権擁護については次のような協定を結ぶことによって反対者を説得した。

議案第六号

大泉所山ニ関スル覚書協定案

大正十五年十一月十六日本村大泉所山造林ニ関スル左記協定覚書ヲ認定スルモノトス。

昭和二年一月十八日提出 決議 南箕輪村長 日戸伝章

覚書

上伊那郡南箕輪村大泉所山造林ニ関シ同議協定スルコト左ノ如シ。

記

- 一、大泉所山ノ水利ヲ保全スル為官行造林契約締結ノ際附帯条件トシテ水利保全ヲ圖リ契約スルモノトス。
- 二、一ノ沢右岸官行造林契約書以外ノ羽広へ通スル道路以下面積九反五畝貳拾五歩ヲ大泉所山地上ノ採取權ヲ永久ニ享有セシム。
- 三、大泉・大泉新田・吹上三部落特売地ニ接続セル保安林ヲ大泉部落へ依託保護セシメ、取替分取ハ官行造林ト同一歩合ト定ム。

但シ、右ハ村会ノ議決ヲ経テ効力ヲ生ズルモノトス 以上

大正十五年十一月十六日

上伊那郡南箕輪村 清水忠隆他大泉代表七名(略)

南箕輪村長 日戸伝章

同 助役 倉田 肇

書記 有賀 義次

林業技術員 太田 徳重

長野県 高山 課長

地方事務官 杉原 定寿

(役場文書)

こうして官行造林案は村会において議決され、昭和三年三月一三〇町歩の官行造林契約が結ばれ、同年四月三日官行造林事業の起工式を行なっている。さらに、役場文書によれば第二次官行造林契約に際し、追加として新たに二二町八反八畝の官行造林契約方を申請することになっている。

議案第四号

本村大泉所山ニ対スル公有林野官行造林ハ昭和二年三月二十五日契約締結済ノ後、更に別紙内訳書記載ノ箇所、裏面面積式百貳拾貳町八反八畝歩ニ対シ左ノ通り追加契約方ヲ東京営林局ニ申請スルモノトス。

昭和九年七月十日提出 同日決議

上伊都郡南箕輪村長 倉田友幸

記

- 一、植栽予定樹種 黒柏・落葉松・赤松
- 一、栽植期間 自昭和十一年 至昭和十七年
- 一、伐採予定期間 自昭和五十一年至昭和八十年
- 一、存続期間 自昭和九年 至昭和八十一年 七十三カ年

(役場文書)

こうして大泉所山は本村最初の官行造林地となり、大部分が官行造林方式によって官林された。なお、昭和二年七月には村の「官行造林地保護及び産物採取条令」を制定し、保護育成に努めている。

その後、官行造林地は昭和三十一・五一年の間に伐採が行なわれ、官行造林契約は解除され、跡地は村有林として村によって造林が行なわれており目下保護育成中である。

二 北沢山の補林

北沢山に対する植林は、入会権の解消分割前、既に大正六年「公有林野造林ニ関スル議案」が村議会に提案、即日可決されており、北沢山本村持ち分のうち一〇町歩に対し、大正七年に県の公有林野造林補助金を受け、費用三八九円で黒柏三万本を植林している。(役場文書)さらに、昭和一〇年になって次のように北沢山に対しても大泉所山官行造林の追加契約の形で官行造林の契約が結ばれている。

九造契約第三三三三号

公有林野官行造林変更契約書

昭和九年三月二十五日当事者間ニ締結シタル公有林野官行造林契約中左記ノ通り変更シタルニ付イテハ、双方署名捺印ノ上各添付ノ領収シ置クモノトス。

昭和拾年七月八日

東京営林局長 永松陽一郎
上伊都郡南箕輪村代表者 倉田友幸
上伊都郡南箕輪村長

記

- 一、左ノ造林地ヲ追加ス
信濃国上伊都郡南箕輪村北沢山八三〇八番ノ一
台帳面積壹千六百八町四畝拾八歩ノ内
此裏面積 貳百参拾壹ヘクタール参アール

但シ、別図面通り(図面略)

- 二、次ノ樹種ヲ追加ス 赤松
- 三、植栽予定期間ヲ自昭和貳年(昭和拾六年)拾五年間ニ変更ス。
- 四、伐採予定期間ヲ自昭和四拾六年(昭和九拾年)四拾五年間ニ変更ス。
- 五、存続期間ヲ昭和貳年三月貳拾五日至昭和九拾年参月参拾日、八拾九年七月間ニ変更ス。

但シ、前掲追加造林地ニ対スル存続期間ハ自昭和拾年七月八日至昭和九



図5-25 北沢山黄連沢造林地遺景

図5-26 北沢ダイナクバ樹林地 昭和31年植林
昭和38年撮影

図5-27 北沢山の現在の林相（昭和59年）

楽学校に演習林として貸与されている。

以上のほか、残された地籍はなお広く、村自体の営林計画に基づいて昭和二六年から連年植林が行なわれている。昭和二八年の植林の議案を掲げておこう。

議案五十一号の一村有林植栽に関する件

村有林北沢山の昭和二八年度秋季植林を左記の通り施行せんとす。

記

地籍

造林面積

樹種

数量

備考

宇北沢山八三〇八ノ一

一〇町歩

唐松

三〇〇〇〇本

昭和二十八年十月二十二日

専決

上伊那郡南箕輪村長 征矢直樹

（役場文書）

さらに、北沢山は昭和七年に分割が完了しているが、昭和三〇年になって官行造林契約に譲りが発見され、昭和三〇年八月に地番と面積（一五八町八反七畝二四歩に）の訂正の願い書を出している。

こうして、北沢山の官行造林は当初の契約よりかなり縮小しており、分割による割受面積五三九町余の三分の一以下の一五八町八反七畝二四歩になっている。この官行造林は植林とその管理が営林局によって行なわれている。

このような官行造林のほかに、昭和一八年に二二・四haが上伊那農

なお、昭和二六年から四〇年ころまでの間連年のように植林及び手入れが行なわれている。その状況は図5-28のようである。なお、この間昭和三〇年には黄連沢一〇町歩に水源林造成事業としての植林が行なわれており、現在は北沢山全山が植林を完了しており、その保護育成に努力が傾けられている。

三 平地林の経営

昭和に入ってから平地林の育成は村政の重要な課題として、村有林は勿論、各部落の共有林も植林、間伐等、力を合わせてその育成に努めている。昭和初期の資料を掲げてその実態を見よう。

乙第四三一号

昭和二年四月廿三日

南沢輪村牧場



図5-28 北沢山森林状況（役場文書より）

〇〇区長殿

村有林春季補植ノ件

来ル廿七日（雨天順延）別紙配当表ノ通り村有林春季植栽シ候間、同日午前八時現場着ノ予定ヲ以テ相当人夫出勤候様御取リ計ライ相成リ度ク候也。追ッテ苗木取リ扱イニ要スル費調等御用意コレ有リ度ク、植栽ハ補植ニシテ一人ノ功程百五十本乃至日本位ト存ジ候。

注意 穴ツヨク掘リ根ツ曲ゲズ植エテ後ラバ踏ミ付ケテ

昭和二年春季植栽苗木配布表

部落名	戸数	配布苗木数	苗木場所	植栽地
久保	九三	一、三九五	南郷上	村有林北原
堀ノ井	五四	八一〇	宮崎署苗圃	"
大泉	一三一	一、九六五	"	大芝
北殿	一三二	一、九九九	"	四林班ヨリ下向
南殿	八〇	一、二〇〇	"	三林班
田畑	一一三	一、六九五	"	六林班
神子地	七三	一、〇九五	"	七林班
沢尻	二二	三三〇	"	村有林 三本木原
計	六九九	一〇、四八五		

備考 配布苗木数ハ一戸当たり十五本ノ割合

(役場文書)

昭和九年には、村有林経営について抜本的なものとして「村有林施業案」が作成された。これは今までの村有林個々の育林計画から、大芝原・北原・三本木原・大泉所山・北沢山を一本にまとめ、これを通し番号の林班に分け、植林・補植・間伐・樹種更新・伐採等、村の林業経営の永年計画として立案されたものであって、以後この施業案に基づいて村有林の育成計画が着々と実施されているのである。いま、昭和初期から昭和二〇年までの主な植林、伐採等の作業を列記すると次のようである。

- ・植林 昭和二年 村有北原・大芝・三本木原 扇柏一万四八五本
- ・植林 昭和四年 村有三本木原四町歩 扇柏一万七〇〇〇本
- 理由 立木無き土地及び生長見込みなき樹種あるによる。
- ・植林 昭和五年 村有大芝原第六林班五町歩 扇柏一万五〇〇〇本
- 理由 林野火災の為荒廃せるところ

- ・植林 昭和六年 村有大芝原第四・五林班一・二町歩

松天然林除伐及び人工植栽

- ・植林 昭和七年 村有大芝原 扇柏二万本

- ・林道改修 昭和八年 村道二九分村道九三六号の内七三〇〇米

- 工費五八〇〇円うち県補助一一五〇円

- ・植林 昭和八年 村有北原八町三反歩 扇柏二万五〇〇〇本

- 理由 赤松存在するも生育不良につき

- ・林道開設 昭和九年 村有林大泉所山二七〇〇米 工費五三〇〇円のうち

- 県補助三、七五〇円

- ・植林 " 村有林北原一〇町歩 扇柏三万本

- ・村有林施業案作成(村有林経営の永年計画)

- ・植林 昭和一〇年 村有三本木原 扇柏二万五〇〇〇本

- ・植林 昭和一二二 第十林班の内五町歩第二、三町林班六町一反六畝 扇柏一万五六一六本

- ・植林 昭和一四四 村有大芝原第五林班ほか一六町三反五畝 扇柏五万四〇〇〇本

- ・植林 昭和一五五 村有大芝原第五・四林班一八町八反三畝 扇柏五万七〇〇〇本

- 理由 紀元二千六百年記念事業として

- ・伐採売却 昭和一六六 村有大芝原五林班六町一反六畝 二分の一択伐法 五〇〇石

- 理由 施業案に基づく択伐

- ・植林 昭和一六六 村有大芝原五林班のうち五町一反七畝 扇柏

- ・伐採売却 昭和一六六 村有大泉所山保安林一町七反九畝 皆伐 二〇〇石

- 理由 村有林施行案に基づき

- ・植林 昭和一七七 村有林大芝原五林班七町一反六畝 扇柏 二万二五〇〇〇本(補植)

- 理由 村有林施行案に基づき

- ・植林 昭和一七七 村有林大芝原五林班七町一反六畝 扇柏 二万二五〇〇〇本(補植)

- 理由 林野火災の為荒廃せるところ

- ・植林 昭和一七七 村有林大芝原五林班七町一反六畝 扇柏 二万二五〇〇〇本(補植)

- 理由 林野火災の為荒廃せるところ

第7節 昭和の森林育成とその経営

理由	施業案に基づき	
伐採売却	昭和一七年	村有大芝原八林班五町六反九畝
		二分の一択伐 五〇〇石
理由	施業案に基づき	
伐採売却	昭和一七年	大泉所保安林拾九町二反六畝
		皆伐 一二〇〇石
理由	施業案に基づき	
間伐手入	昭和一七年	村有林大芝原七林班一三町八反三畝
		間伐手入 二〇〇石
理由	施業案に基づき	
伐採売却	昭和一七年	村有大芝原三拾壹町二畝
		択伐法 一五〇〇石
理由	国民学校校舎増築資材を得るため	
伐採売却	昭和一八年	村有大芝原八林班七町五反八畝
		二分の一択伐 九〇〇石
理由	施業案に基づき	
間伐手入	昭和一八年	村有本木原拾三町九反五畝 間伐手入 四五〇石
理由	施業案に基づき	
伐採売却	昭和一八年	大泉所山九町六反七畝
		皆伐合 一〇〇〇石
理由	施業案に基づき	
植林	昭和一八年	大芝原第四一八林班一四町四反六畝
		間伐四万五〇〇〇本
理由	施業案に基づき公有林野造林奨励補助金を受けて	
		(伐採資料より集成)

このように、昭和初期から二〇年ころまで毎年のように大規模な植林、間伐手入れ等を行ない、また、施業案に基づく択伐、伐採等を精力的に行なっている。

部落共有の平地林は比較的早期に植林が行なわれているが、この時期においても引き続き行なわれている。中野原における北殿及び塩ノ井共有地、三本木原における神子柴共有地への昭和一七年度の植林などがそれである。

四 蔵鹿山・御射山等の植林

蔵鹿山・御射山については昭和三二年に至ってようやく協定が成立して分割の運びとなり、入会権が解消したことは既に見た。蔵鹿山についてはその際村有化の動きがあったが実現せず、昭和三三年に蔵鹿山運営管理委員会が発足して運営管理に当たることになり、植林施行を村に委託した。御射山も分割後八部落共有となったが、南箕輪側取得地の処理に関する覚え書によって植林施業を村に依託した。

村はこの蔵鹿山(矢ノ附入りを含む)御射山の植林を全村的な仕事として大規模な植林事業を開始し、村民はこれに協力して数年の歳月をかけて見事にこれを完了した。この時期、すなわち昭和三二年から三八年にかけて、村財政決算書をみると次のような費用が支出されている。

年 度	委託施業費	各山施業費	計
昭和三二年	五、八四一、八三五		五、八四一、八三五
三三	一四、四三〇、一八三		一四、四三〇、一八三
三四	九、八六〇、一一九	蔵鹿山 一、四一、九二一	一一、〇〇二、〇四三
三五	五、五八二、〇〇〇	蔵鹿山 一、九二、一五三	六、七七四、一五三
三六	四、九三〇、六三三	蔵鹿山・御射山 一、三五八、〇五七	六、二八八、六八九
三七	六、七七七、四〇〇	同右 一、〇三九、〇一九	七、八一六、四一九

三ハ	同右・大泉所山 七、〇三四、六九一	七、〇三四、六九一
総計		五九、一八八、〇一〇

(役場文書)

また、御射山・蔵鹿山及び矢ノ南入りの植林の年度と面積は次のようである。(図5-29)

年度	御射山・蔵鹿山・ 矢ノ南入り植林面積・ 樹種	蔵鹿山・蔵鹿山・ 矢ノ南入り植林面積・ 樹種	矢ノ南入り植林面積・ 樹種
昭三五	二七、七三ha (カラマツ)	二二、七四ha (赤松)	
" 三六	一八、一四ha (カラマツ)	一九、七九ha (カラマツ)	
" 三七	二〇、〇〇ha (カラマツ)	二九、八〇ha (カラマツ)	
" 三八	一〇、〇〇ha (カラマツ)	二〇、〇〇ha (カラマツ)	
" 三九	二五、〇〇ha (カラマツ)	一三、〇〇ha (カラマツ)	
" 四〇	天然林 三、三〇ha (赤松)	他 三、〇〇ha (赤松)	一六、五五ha (カラマツ)
計	九八、一七ha	一一五、二三ha	一六、五五ha

このようにして、三山に対する植林は完了しているが、この御射山・蔵鹿山・矢ノ南入りは、昭和四三年全村的な南箕輪生産森林組合を発足させ、その組合の森林として管理運営されるに至ったことは、先にみたとおりである。

入会山の分割は、明治末年ころから問題になり始め、大正五年の分割協定覚書が成立してからでも、矢ノ南入りの分割完了の昭和四二年まで五三年の歳月が流れている。まさに分割問題は半世紀余の長い期間の懸案であったわけだ。この間の歴代村長を始め委員諸氏のため



図5-29 蔵鹿山・御射山・矢ノ南入り造林地図

まざる努力の結果であって、終始主導的立場をとって来た本村関係者にとって、分割完了は筆舌に尽せぬ感慨を持ったことと思われる。また、明治以来早くから森林資源の重要性に着目し、森林を撫育して山を治め、それを基本財産として村の発展を図ることを村是として来た村人にとって、分割後巨額の費用をかけ全村一丸となって植林に励

五 村有林の利用と村財政

下枝・落葉等の利用



図5-30 蔵鹿山御射山造林記念碑

み、それが完了したことは将来への期待と共に大きな喜びであったと思われる。

特にこの蔵鹿山・御射山・矢ノ南入りは分割が非常に遅れ、この解決が大きな願望であり、その地への植林の完了は村の森林育成の一段落を示すものであった。この分割完了と植林を記念し、さらに、今は無き先輩の霊に対する手向けとして、また、今後の森林地育成への誓いを込めて、昭和四〇年七月、造林記念碑が建てられた。

記念碑は延川石を選び、長門町落合から和田峠を越して運ばれ、表面に「蔵鹿山造林記念碑」と記され、蔵鹿山の岩の入り入口の道の上に建てられている。当時の蔵鹿山管理運営委員会委員長であった山崎正義は、「将来この記念碑を仰ぎ見る度に、一層造林意欲を燃やして立派な奥地林とすることを切に願う」と述べている。

植林地大芝原・三本木原・北原枝打チ及び落葉採取二間スル議案

一、植林地大芝原（本村小学校基本財産編入ノ部ヲ除ク）

二、植林地三本木原

三、植林地北原

右三カ所枝打チ及び落葉採取期日大正七年十二月六日より同月廿八日迄拾三日間ト定メ、一般村民ニ無償ニテ譲与ス。

大正七年十二月三日提出 同日決定

南支輪村長 征矢友三郎

（愛媛文藝）

これは大正七年の例であるが、毎年、村会の議決を経て大芝原・北原・三本木原を各区に割り当て、期日を定めてその枯枝、下枝及び落葉の採取をした。この枯枝や落葉は各家庭ごとに薪小屋やゴミ屋といわれる所に蓄えておき、一年中の家庭の燃料として使用し、極めて重要なものであった。昭和になってもこの下枝や落葉の採取は続いており、このゴミ山が終わると農家の一年中の外の仕事が終わりになり、ほっとしたものである。

西天竜の開通によって多くの平地林が開墾されて水田になり、また、太平洋戦争中及び戦後の食糧増産と入植開拓によって村有林面積は減少し、一方で経済の高度成長とエネルギー革命の進展により、家庭燃料がプロパンガス・電気等におきかえられ、しだいに枯枝、松葉等の重要度は減少してきたが、大芝原の松の落葉採取はゴミ山と称して、昭和三〇年代まで続けられていた。

四 立木の伐採売却と村財政

大正時代、既に間伐材が薪として販売され、一部は用材として販売されるまでに成長しており、それらの収益が村基本財産として蓄積されている。昭和も一〇年代となると間伐材も大きくなり、村有林産業

案による採伐も順次行なわれてその収益もしだいに大きくなってきた。

このような情勢は村の財政の前途に大きな自信を与えており、昭和七年役場改築に当たり、村基本財産よりの繰り入れ使用を県知事に認可を受けるための申請書の中で、次のように述べている。

本村ニ村有林參百町六反歩アリ、近距離平坦地ニシテ全部三十年生乃至三十五、六年生立木地ナリ。内約二町歩ハ四十年生ニシテ「中略」前記三百町六反歩ノ村有林ハ數年ニシテ既ニ輪伐ヲ開始スベキ時期ニ達シ、目下施業案ノ施行計画中ナルニヨリ、輪伐ノ時ニ至レバ年々莫大ナル収入ヲ得、村財政上堅固タル基礎ヲ築クニ至ルモノナリ。

之ヲ要スルニ今回基本金繰り入レ使用ノ如キハ村財政上大局ヨリ考エ其ノ計画ニ徴助ダモ与エズ、何等ノ支障ヲ認メザルモノニシテ極メテ安全確実ナルヲ信ズ。外ニ尚本村ニ四百余町歩ノ村有林アリ、一部官行造林トシテ也ヲ天然造林トシテ官林シツツコレ有リ、村ノ将来ハ大ニ意ヲ強ウスベキモノコレ有リ候。

〔役場文書〕

この申請書のとおり村有林は南箕輪村財政のために極めて大きな寄与をしている。まず、昭和一七年国民学校校舎増築に際し大芝原三一町余を採伐し一五〇〇石が伐採利用され、昭和二二年には中学校校舎新築のため二五七万余円、昭和二五年には小学校増築のため二四〇万円の村有林収入を挙げている。そのほか、昭和三八年ころまで村財政における大きな臨時出費はほとんど村有林収入によって賄われているといつてよい状態である。村財政における村有林収入の比重をみると、昭和二〇年から三八年に至る一九年間の村税収入一億九七〇〇万余円に対し、村有林収入二億三八〇〇万余円と村税収入より多くなつており、特に大きな臨時出費のあった年の村有林収入はきわだって多

くなっている。（第六章第四節参照）

この時期の村財政は戦後の復興と、新しい村の建設のため巨額の資金を必要とする時期であったが、南箕輪村は明治時代からの村有林の育成振興に努力してきた先人の汗の結晶によって、この困難な時代を恵まれた姿で乗り切ることができたといえよう。

六 林道の開設

森林経営、特に奥地林の経営のためには林道の存在は欠くべからざる要件であるが、時代の進展に伴い自動車交通時代にふさわしい林道の開設が求められ、昭和二四年から伊那町・西箕輪村と協力して林道経ヶ岳線を開くこととし、その協定を結んで開設を始めた。それは図5-31のように西箕輪と地を起点として植物園に出、蔵鹿山・御射山の山腹を蛇行して北沢山に入り、権兵衛峠の北側尾根で国道三六一号線の本曹側と結ばれる、延長一万八〇〇一mの大工事である。

この事業遂行過程での昭和二八年の村会議案を掲げると次のようである。

議案第四十号

昭和二十八年度奥地林道開設事業に関する件

昭和二十八年度奥地林道開設事業として左記の通り、実施せんとす。

昭和二十八年六月二十三日提出

上伊那郡南箕輪村長 征矢直徳

昭和二十八年 月 日議決

上伊那郡南箕輪村村議会議長 高木嘉一

記

施行箇所 幅員及び延長 工事費



図5-31 林道経ヶ岳線概略図

西宮輪村 幅員 四・〇米
宇ダズガ沢 延長 八〇九米

三、一五〇、〇〇〇円

(役場文書)

この事業には国、県の補助を受けているが、大工事で莫大な費用を要することから、昭和三〇年度からは、県営事業として行なわれることになった。

このようにして、工事は進められ、できあがった林道施設は県より



図5-32 林道経ヶ岳—国道 361 号線全線舗装完成開通

無償譲渡され、村によって管理運営が行なわれた。こうして途中、三四年から一一年間ほど中断されていたが四五年から再開され五一年一月、全線が開通をした。開通までは二七か年の長い歳月を要しており、総費用額は三億一〇四万円の多額にのぼり、その費用負担は次のように行なわれた。

国庫補助 五〇% 一億五五五二万〇〇〇円
県費補助 二〇% 六二二〇万八〇〇〇円

地元負担 三〇% 伊那市(三分二) 六二二〇万八〇〇〇円
西宮輪村(三分一) 二一〇万四〇〇〇円

この林道経ヶ岳線の開通によって北沢山村有林五〇〇haが目玉をみるようになり、森林資源の効率的運用が可能になった。さらに、伊那と木曾を結ぶ林道として地域社会の発展に貢献することになったが、五七年七月には国道三六一号線の一部として国道に編入、建設省の管轄する道路となり、五九年には全線が舗装され、伊那谷と木曾谷を結ぶ重要な道路となった。

第八節 昭和における平地林の開墾・開発

一 西天竜完成による開田

入会林野の分割後は、大部分が平地林として生まれ変わったことは既に見てきたが、昭和になって再び大きな変化を遂げた。その最初の大きな変化が西天竜地区の開田である。

議案第三六号

村有林伐採並に土地開墾ニ関スル件

左記ノ土地立木ヲ伐採シ開墾スルモノトス。

一、南宮輪村大字大芝原式千三百五拾八番イ号ノ内別紙（略）ノ土地

理由 西天竜耕地整理組合地区ニ付キ伐採開墾セントスルモノナリ

昭和二年十二月廿一日提出 廿二日決議

上伊那郡南宮輪村長 日戸伝章

（役場文書）



図5-33 開墾の碑（大泉耕地整理記念碑）

このようにして、大芝原のうち西天竜水路下、春日道までの全部一三町四反余が開墾されて水田となり、多くの農民の小作地となった。また、西天竜耕地整理組合地域に入った左の部落共有林も開田された。

北原	一六二二・二三	原野	四町九反三畝四歩	久保共有
猪子芝	一四八五・〇	原野・山林	一町九反三畝二二歩	南殿共有
前宮原	六八四・一・二	原野	一九町二反九畝	田畑共有
前宮原	七九一・八	原野	一四町七反一畝二九歩	神子榮共有
島田原	八三〇・三・ノイ	原野	一七町歩	神子榮共有
中ノ原	八三〇・六・ノ二	原野	一二町一反四畝二八歩	神子榮共有

このほかにも、中野原・三本木原等に開田された所が多く西天竜の美田に生まれ変わり、郡下における主要米作地帯へと発展をしたのである。

さらに、西天竜開田に伴い今まで広がった桑園や作畑が極端に減少し、稲作単作地帯の性格を持つに至った。そこで農業の多角経営化を進めるため、大泉区は昭和四年知事の認可を得て大泉区北の北原の林野六町歩の耕地整理開墾事業に着工、昭和九年にはさらにこれを拡張して一六町五反余として開墾と耕地整理を行なった。

昭和一〇年一月この完成を記念して「開墾碑」が同地区に建てられている。また、同様に桑園や作畑を補うため、上ヶ清原四町四反余（田畑区割り受け地の林地が伐採開墾されて畑となっている。ほかにもこのような開墾があったと思われるが、さらに、昭和一一年北殿原にあった飯田宮林署苗圃移転先として大芝原の苗圃地が選ばれて五町歩が開墾され、翌年その拡張のため、さらに隣接地六町歩が追加開墾されて、苗圃として使用されるようになった。

二 戦時体制下の開墾

昭和恐慌の末期から、日本はしだいに満州事変、支那事変と戦時体制にのめり込んでいくようになったが、戦時体制下の食糧増産の要請に基づいて、部落有林、村有林等の伐採開墾が進められた。

△長野県指令一三林第一六一九号

上伊那郡南筑輪村久保

昭和十二年七月三日甲第七九五号要請左記土地処分件許可ス

昭和十三年三月廿一日 長野県知事 大村清一

記

上伊那郡南筑輪村字北原一六三番

一、原野 地積七町二反六畝式拾九歩

右一筆開墾

(役場文書)

△議案第六号

農産資源開発利用開墾事業施行ニ関スル件

村有林大芝苗圃西側地々地ヲ昭和十五年度ニ於テ式町式反ヲ開墾スルモノト

ス。

昭和拾六年一月十四日提出 同日決議

南筑輪村長 倉田友幸

理由 昭和十五年農産資源開発開墾助成事業トシテ助成金ヲ県ニ申請シ開

墾スルモノナリ。

(役場文書)

この事業は翌二月二日認可の通知を受け、大芝農産資源開発開墾事業として助成金を受け開墾している。

国は昭和十六年に農地開発法を公布して農地開拓団を設立し、さらに、一八年には食糧増産対策を定めて農地の開発を進めている。これに基づいて県は昭和二〇年八月に開拓増産隊を結成し、一三の開拓増産隊を県下に分遣して開拓を進めた。そのうちの一隊が本村の南原・大芝原を開墾している。別に農兵隊が三本木原、北原等に入り、伐採開墾を進めており、戦時体制下の末期には平地林のかなりの部分が開墾され畑として、食糧増産の一翼を担ったのである。

この戦時下から終戦後にかけて、上伊那農業学校および長野農林専門学校に対し広大な山林・原野が譲渡されている。(第四節行政参照)

三 戦後の入植開拓と部落有財産の処分

戦時中からの食糧不足による社会不安は敗戦による社会の混乱によって一層強められ、海外からの引き揚げ者、工場破壊や経済の混乱による難民者が甚に溢れ、社会不安はますます激しくなっていた。

昭和二〇年十一月、政府は敗戦によって生じた多数の生業を失った人に安住の地を与え、食糧不足の解消、食糧自給体制の強化を目指して緊急開拓事業実施要領を策定し、全国的な規模で入植開拓を進めることになった。

本村内には多くの平地の山林原野があり、この国の開拓政策に基づき開拓適地と指定されたところが多く、中野原から上ヶ溝原へかけての広大な山林原野の南原地区と西原地区に集団入植があり、大芝原地区にも集団入植が行なわれて、それぞれ開拓婦納組合として開拓が進められた。また、北原地区にも十数戸が入植して開拓をした。(入植開拓についての細部は第七章第二節入植による開拓の項参照)

このように入植によって、北原・大芝原・中野原・上ヶ溝原等の山林原野の多くが開拓されることになったが、この開拓は農地改革と関連して行なわれ、入植者だけでなく、周辺既存農家への増反分も同時に開拓が行なわれたのであって、その増反分を見ると大芝原では一戸一反一畝ずつ二七三戸の農家に、中野原・上ヶ溝原では一戸四反一畝ずつ三〇七戸の農家に、北原では一戸一反五畝ずつ八六戸の農家に売り渡されて開墾されたのである。

このようにして、終戦後の開拓によって、北原・大芝原・三本木原の一部を除き他のほとんどの平地林が耕地として生まれ変わり、新た

なる農業への大切な基盤となったのである。この開拓によって耕地となつたのは、村有地のみでなく部落共有地や私有地も買収の対象となつてゐるが、南箕輪村の未墾地（上ヶ瀬原・中野原・大芝原・北原）での開放面積は三〇八町五反余に達している。

各部落の保有していた部落有山林原野等は、政令第一五号により、部落有としての保有は許されなくなり、昭和二十二年六月各区一斉に処分された。

議案第二五号

部落有財産処分の件

政令第十五号に依り別紙の通り部落有財産を処分するものとする。

昭和二十二年六月三十日提出 同日決議

上伊那郡南箕輪村長 清水國人

（役場文書）

これは部落有財産処分についての村会の議案であるが、この別紙には、各部落において総会を持ち、部落有土地処分についての議事録、各部落共有地の場所と面積、地目などと、その各個人への分割処分の内容が記されている。これによって特殊のものを除き部落有土地はほとんど個人有に分割されたのである。

第六章 村の発展

第一節 明治維新と村人の動き

一 平田学と神葬復礼

幕末から維新にかけて既に述べたとおり、俳諧、和歌が普及し、寺子屋教育も盛んになり、遊歴の文人や志士との交わりのある者もあって、国学を受ける思想的土壌が培われているところへ平田学がはいってきた。

平田学は江戸時代国学の四大人の一人平田篤胤が唱導した復古神道を中心とした実践的学問である。

平田篤胤は安永五年（一七七六）秋田県に生まれた。幼時より漢学、医学を学んでいたが二〇歳のとき江戸に出て苦学力行、本居宣長の学風を慕い国学の道にはいり、その門人となり宣長の学問を祖述した。絶倫の精力を傾注して儒・仏・蘭学の知識までも自己の神学体系にとり入れ古典を神秘的哲学的に解釈し、いわゆる平田神道を樹立した。

その実践的性格の学風は、当時の尊王と佐幕、攘夷と開港等で世論が紛糾し、天下騷然たる時に際し人心を強く刺激し、平田門流の思想はしだいに政治色を帯び維新の志士の一大原動力となった。篤胤の没後はその養子鉄胤がその跡を継いだが、彼はあくまでも自分はその祖述者であるとして入門者はすべて篤胤没後の門人として通じた。平田門人になるには、先に入門した者の紹介によって入門の礼をとることになっていた。

小野村（現長野町）の倉沢義領は早くから平田門に入門していたが、

その紹介によって南殿村の清水政雄がまず没後の門人になった。清水政雄はまた幾人もの人を紹介して門人としていたが、その門人録から本村分を摘記すると次のとおりである。

平田先生授業門人姓名録（右肩の細字は紹介者）

殿村慶応二	清水又二郎	政雄	殿村慶応二	坂本眞胤	清水十左衛門	徳光
清水政雄	延命寺恵証尼		大泉慶応四	清水政雄	新助	喜平
清水善三郎	道直		清水三郎右衛門			稚康
倉田三郎兵衛	友善		清水要之助			重胤
倉田見代吉	重章	神子集	高木勘之丞			近礼

一方、同村の有賀家（大泉館）は美女（実は阪本天山の娘）桂が本曾馬籠の島崎正樹の父に嫁しており、またその娘を島崎家へ迎えようとする程に深い交わりを結んでいた。この島崎正樹は熱心な平田学の信奉者であった。従ってこの有賀家とそれをめぐる人びとの中にもその影響を受けた者があった。前に述べた「南殿里人六人一首の寿碑」の和歌にも見られる歌風が平田門のそれに通じているのを見てわかる。平田門に入門はしなくてもそれに影響された思想を持った人たちがいて、遊歴の国学者や尊王家との交わりを結び往来もしていた。

本村の平田門への入門を紹介した倉沢義領はかねてから廃仏毀釈の思想により仏式葬を止めて神葬に復礼することに大要骨を折って神葬復礼を許可されていた。その影響を受けて本村の人々の中にも、江戸時代には決して認められなかった神葬復礼を願ひ出る者が出てきた。

このことは本人にとっては改宗という大事であり、かつは従来宗門改めによって寺院の持っていた権限からの離脱であり、一方檀徒に依存

していた寺院の経済的基盤をゆるがせることでもある大問題であった。したがって当然、寺院側からの反対も強いものがあつたが、長い間の為政者からの厚い庇護に甘んじて墮落していた仏教者に愛想を尽かせていた人びとが寺院から離れるよい契機でもあつた。神葬復礼を望む者の中には平田学との関係がなくても寺院を維持する費用の点からだけでも改宗を望む者もあつた。明治になって神葬に改めた家々はその理由は思想の上からと、寺院側面に対する反感の上から等、一様ではなかったが、本村には平田学の影響による転宗者がまず先鞭をつけ、それにならって転宗した者がかなり多かつた。そのときの願書の一例を示す。

愚レ年ウ書付ケテ願イ上ゲ候

私儀

年来ノ志願ニ付キ家内一同神葬祭ノ儀御許下シ置カレ候様願奉リ候。就イテハ僧徒ノ手ヲ離レ候儀ニ付キ宗門改メノ儀ハ村役人ニテ相済シ、死亡ノ者コレ有リ候節ハ是レ亦村役人見分ノ上、身寄り近親ノ者葬主ニ相立テ、墓國古典ノ式ニ依リ葬礼執行候様ニ仕度ク、右願イノ通り仰セ付ケ候ワバ有難キ仕合ワセニ存シ奉リ候。コレニ依リ此ノ度願イ上ゲ奉リ候。以上

伊那郡北殿村

長百姓 庄右衛門郎

前書ノ通り願イ上ゲ奉リ候ニ付キテハ以後人別改メ、生死ノ取調ベ等村役人共ニテ取扱イ、御法度ノ邪宗門ハ勿論、總テ紛レガマ敷キ儀決シテ仕ル間敷ク、コレニ依リ私共一同奥印願イ上ゲ奉リ候

明治二巳年九月三日

右 百姓代 儀兵衛郎

組頭 久兵衛郎
名主 又左衛門郎

伊那郡

御役所

願ノ趣聞キ届ケ候事

後俊昌

御落合

(千根屋文書)

このようにして神葬になると現今の戸籍に相当する事務、キリシタシ禁制にかかる取締り等が寺院の手を離れて一切、村役人に移つたのである。

二 水戸浪士北殿宿通過

〔今様奇談〕

『今様奇談』という珍らしく貴重な記録が残っていて(南殿中恵)、水戸浪士が伊那街道大泉北殿宿を通行した様子が、くわしく絵入りで記されている。これは、北殿の山崎宇八郎孝輔の書き留めたもので、天保元年(一八三〇)からの書留を整理して全二三巻を一一冊に綴つてあり、明治一七年で終つてゐる。その巻末に「南葉輪北殿地山崎宇八郎絵入り日記、文字あやまり多く之有義行年六十九歳書」とある。この第三冊が第四巻と五巻の合綴で、水戸浪士のことが記されている。

いま、ここではこの「元治元年甲子歳浮浪一件」のうちから水戸浪士が伊那街道、特に北殿を通過した様子を、抄記しながら記す。

浪士一行は上州の下仁田から内山峠をこえて、元治元年(一八六四)の十一月一日に信濃に入り、佐久の平賀に止宿した。幕府では諸藩に命じて、その上京を阻止しようとしたが浪士一行は、大きな抵抗もなく、一九日には和田に止宿した。二〇日には和田峠で、諏訪・松本藩と衝突して双方犠牲者をだしたが、結局浪士軍が勝つて下諏訪に止宿した。

さて、翌二十一日高遠藩が平出で一戦もなく逃げ帰った状況と、同日松島宿泊りとなり、翌二二日北殿宿通過の状況とは、次のように記

されている。

(四) 高遠様一発もなし

……誠ニ能代末聞ノ事ドモデアツク。

同(元治元年)十一月二日高遠様御國へ、早出宿へ野木要様御同勢百五十人バカリ御國メナサレタ。

其ノ時、和田峠ノ一戦モ終ラテシマツタノデ、早浪士モ下諏訪泊リ、岡谷并当デ、早出宿へカカツテキタ時、高遠様御同勢、此ノ休ヅ見テ一戦モナク、沢底村へ逃グ入ッテシマツタ。

一人、諸士岡村元藏ハ馬ニ乗リ逃グダシタ所、馬ガソレテ沢底窪へ入ラズ、長岡村ノ方へ逃グ入り、宇三重園ト云フ所デ落馬シ、長岡村ノ医師ニカカリ、ヨウヤク少シヨロシクナツタノデ、右ノ沢底村へ参リ(誓ト)同道テオ屋敷へ帰ロウト行ク所、小河内村ト樋口村ノ間デ浪士ニ出合イ生捕ラレ、爰デ又ビツクリシタ。

又、沢底ボウへ逃入ツタ諸士ハ、長岡村へ下リ、土民ノ世話デ、漸ク夕飯ノ用意ヲナシタ。ソレカラ無テヨウチンデ、山ヅタイニ長岡村土民ノ案内デ、三日町村へ下リ、ソレカラ漸クチヨウチンヲ少シツケテ御膳陣ノ体デアツタ。ソノ一手ハ沢底村真交トイウへ出、夫カラチマヨイ、黒沢へ下ル者モ、又野口村畔松へ下ル者モアツテ、誠ニアリレデアツタ。

(南殿中東文書)

その様子を絵にして、「信濃國上伊那郡平出宿甲子十一月廿日ヨリ二十一日迄高遠様御國メ有増ノ図 一戦モ之無ク沢底村へ乱入ノ場」とし、平出宿園めから一戦もなく沢底へ逃げ、さらに落合から長岡新田を経て長岡へ出、ここで夕飯をたべ、三日町から逃げ帰ったものや、手良野口の畔松から逃げ帰ったものこと、また落馬した岡村元藏のことどもを絵巻物風に描いていある。このさまを狂歌で、

「そりや来たと逃げる沢底はよけれ共うろたえ武士の(生)捕の恥」

とやゆしている。

ここで、思わぬ落馬で逃げおくれ、生捕りにされてしまった岡村のこと、また固めの親玉であった野木が「親甘の肝腎要が逃げだして、あとの小僧はバラバラ」と、戦わずに逃げ帰った汚名のこと。いずれも当時の風評であったのであろう。

近世の夜明けに、高遠城で割腹して果てた仁科五郎盛信の勇姿と、明治の夜明けに一戦もなく逃走した姿とは、いかにも対照的であった。

四 北殿宿通過

サテ又、浪士ハ松島泊リデ、岡村元藏様ハせきやへオ預ケトナル。村ヤデ交易シタ者、又ハ金持ヲ呼出シ。用金ヲ取ルモノアリ。

金百五十兩 沢村酒屋儀右衛門 金六十兩 藤七岡村、

金六十兩 藤右衛門、浪士へ献金ナリ。

木下村儀古金七十五兩、金七十五兩 岡村土手長十、尊屋万七二人デ献金。松島宿北村、又ハ木下等ニ泊リ。木下越後屋二人、角屋二四人泊リ。第一ト申ス高屋二一人泊リ。オ貞ト申ス水タサキ女ト一コンクミ船ルモアツタ。

木下村青木トイウ茶屋ノ前デ大駕(火)ヲタキ、松島宿ハ三カ所バカリ大カガリヲタイタ。北村デ馬ヲモラツタ者モアツタ。

このように、浪士は松島や木下に泊った。そのころ生糸などの交易でもうけた者や金持から軍用金を献金という形でとりたてた。その額は合計四二〇両にもなっている。

いよいよ南宮輪通過である。

明日ハ廿二日四ツ時(午前十時)北殿村御通行ト相成ル。月番西間屋(大島)古石衛門、御伝馬井ビニ地方残ラズ、其ノ外是迄當テ来タ村々、南殿、田坪、神子柴、大賀、羽広、上戸、中条、与地、大泉、大泉新田、吹上、富田、中曾根、塩ノ井ノ人足ハ皆詰メテイタ。其賦ト鳴エルハ荷物又ハ諸色ノ世話ヲイタス者ノ名デアル。浪士ハ八、九百人通行シ、内、分持ニ水戸油田

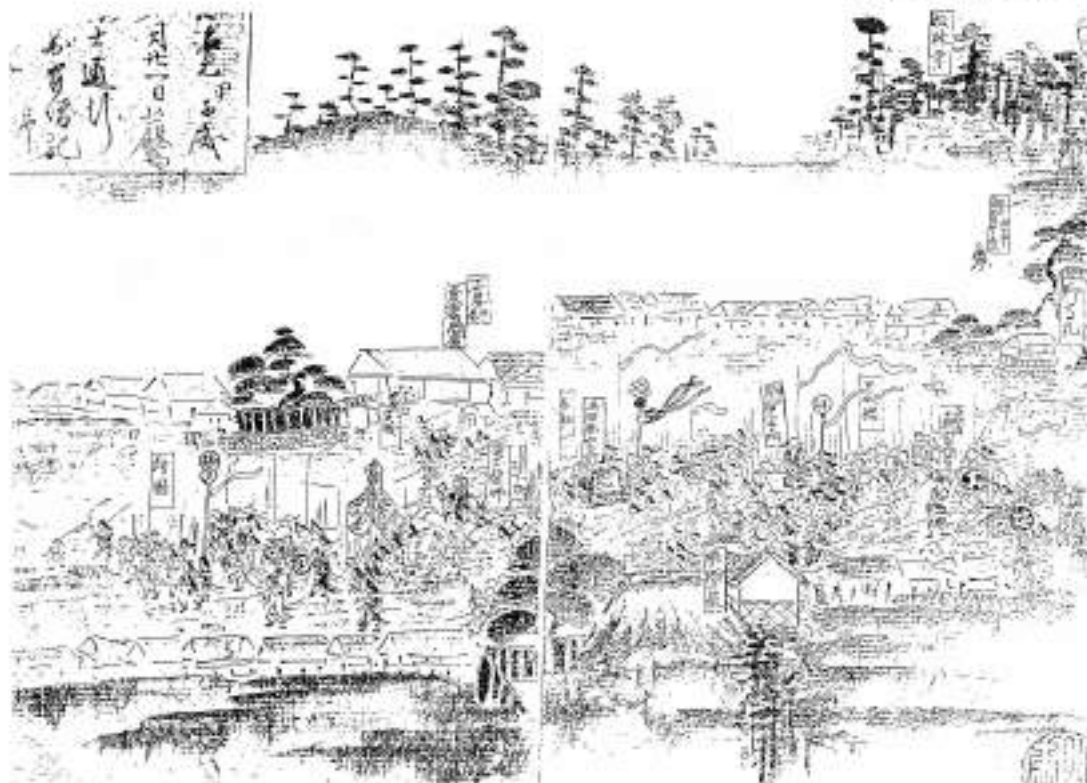


図6-1 水戸浪士北殿宿通行の図

氏ト書イタモノモアッタ。其ノ外、武田縣雲斎、田丸福之右衛門、千野新左衛門、足ト記シノアル具足齋ヲソノママ負ワセ来タ。并ビニ陣太鼓ニホラノ貝ヲ入レ、人足四人持テ来タ。陣鼓ハ四人持、右小砲玉薬二二三荷、諏訪方ノ諸品ヲ給ワテ来タヨシデアル。人足会所ハ角屋中町惣惣二、馬会所ハ千歳屋。

浪士一人、後カラ切株カゴニ乗リ来ル者ガアッタ。梅川竹四郎、藤田屋庄兵衛ノ休ム所デ、有賀屋又左衛門、問屋三郎兵衛二人、たばこ入レヲ又左衛門ガ差シ上テタ。三郎兵衛ハ四分一ノキセルヲ頂戴シタ、(貴)ツタモノデ松本御役人岡本勘三郎様、森川平次様御出役デ御礼シガアリ、右三郎兵衛ハ、松本御役所ヘ三納ノ節持参イタシテ、御役所(御目付)カラ頂戴シテ来タ。

又、此所ニ諏訪ノ医師ガ逗留シテイテ、浪士通行ヲ拝見シテイタ所。右ノ梅川ニ見トガメラレ、既ニ天鼓ヲ加ヘコウトシタ。松林寺ヘ過グ人ツタ。此ノ天鼓トイウハ切ルトイウ事デアル。然ル所ヘ、あひる、一羽、右梅川ノかごノ中ヘ入レ持ッテ来タ。あひるガ翼ヲヒッタノデ、あひるニ天チウツ加ヘコウトシタ。仙郎、磯古兩人ガ夫レハアシ(マズイ)トイッテ、仙郎ガあひるノ首ヲネジツタ。

マタマタ浮浪士持参道具、大筒十九挺、小銃数知レズ、生捕リノ間村元藏カビタシ浅黄、紋所欄ノトノ紋所、タチツケコハク嶋デツレテ来タ。夫ヨリ、上穂宿泊リ。道スガラ歌ニ

芦原ノ御国ノ為ト立出デア貝イタズラニ過ル月日ヲ

右ノ浮浪士種子榮ニテ讀ム

この浪士通行のさまは「元治甲子歳十一月廿一日北殿宿浪士通行ノ図有増記」(図6-1)の絵によく描かれている。その進軍の様はまことに賑やかで堂々たるものであった。

吹き流しの旗をもつ先頭に続いて、「報国」の旗をもつ徒歩の隊、さらににぎやかな旗や荷物が続き、「浪士医師」が馬上姿で、その後

に「奉勅」の旗をもつ一隊がある。

駕籠にのった総大将の「武田高雲斎」の後に大筒をひく一隊、副将「浪士田丸稲之右衛門」は馬にのっている。「日本魂」の旗をおしたてた後に、諏訪で分どった「高島千野新左衛門具足」が具足櫃のまゝ、四人で持った太鼓にほら貝、また大筒が二門、そして最後に岡村元蔵の「生け捕り元蔵」が歩いてついていく。

大泉北殿宿は合宿で、東側に北殿の「東間屋」、西側に「大泉出宿問屋」が描かれ、「下十日分、日番」と記されているのは、この水戸浪士通行の二二日は、下十日の日番で大泉宿の当番であった。そのそばに「貫獄」と記されているが、これは本文中にあるとおり、「荷物又は諸色世話を致し候者」である。

街道の西側に「諏訪医師松林寺逸入」と記されている一人の男は、浪士梅川にみとがめられ、天誅を加えられようとした医師である。「松林寺」もその向こうに見える。



図 6-2 浪士梅川より「きせる」頂戴の図

この一行のあとから切棒かごに乗ってきた浪士梅川竹四郎についても、もう一つの絵「浪士梅川ヨリきせる頂戴ノ図」がある。(図6-2)

浪士梅川竹四郎、甲子十一月廿日、当宿藤田屋ニテ休息イタシ右ノ場所へ当村ノ者二人語合ワセ、又左衛門ハ多葉粉入レ差上ダ、三郎兵衛ハ四分ノきせる頂戴イタシ候。外ニ仙弥磯古式人、梅川氏ヲ伊那郡宿へ送りシ人足ナリ

この絵はおもしろい絵で、まず藤田屋の看板が富士山の絵とたやで「たや」と描かれ、総髪に鉢巻をした浪士梅川から、問屋であり年寄りであった三郎兵衛が、きせるを頂戴して眺めている。「問屋年寄三郎兵衛」「浪士梅川ヨリきせる頂戴ノ図」と記され、浪士の前にはたばこ盆がおかれ、「年寄又左衛門」がそのやりとりを見ている姿が描かれている。

藤田屋の縁先には、切棒かごの前に二人の男仙弥、磯古がすわり、仙弥があひるに天誅を加えている。図には「磯古仙弥、右仙弥あひるに天誅くわえる図」と記されている。(図6-2)

かごをかつぐ人足にかりだされた仙弥が、まさに首をしめているのであるが、「天誅は首を切ること、それはいけない、切つてはいけない、首をねじる」などと、どこかにユーモアのある記述もある。

四 浪士追い打ちの通行

さて、浪士を追って田沼玄蕃の組に属する歩兵も通った。それは浪士通過より二日おくれた、十一月二四日の「夕七ツ時」(午後四時)であった。

あわただしく幕命をうけて追打ちの使者のゆききがあつて、北殿大泉宿も松島宿と共同しておびただしい人馬を用意して、難立てをする事になっていった。しかし、それはお泊りでなく、お休みだけであつ

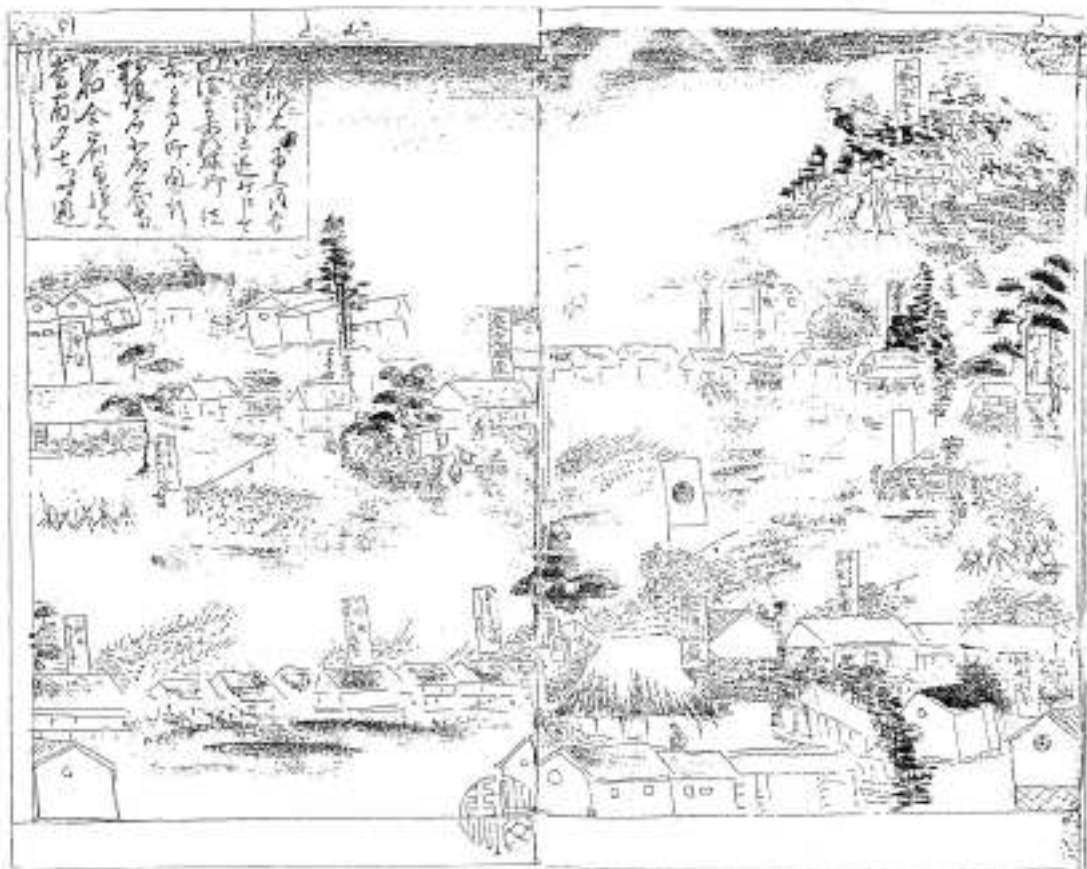


図 6-3 浪士通打ち（松島宿、北殿宿合宿で横立ての図）

た。まず、絵図によってその様子を記す。（図6-3）

絵図には「元治元年甲子十一月二四日、浮浪士追打ちとし、田沼玄蕃頭様御組歩兵方御通行、松島宿・北殿宿両宿合宿ニテ横立テ当宿夕七ツ時通行ノ事」と記されている。街道の南側の先頭には「歩兵方案内人宇八」が一隊に何か命令をしている。次に、東西の間屋前に相当数の一隊が通行している。「北殿宿間屋」前の一隊は日の丸の旗をおしたてている。そして後尾には駕籠とそれに従う一隊が進んでいる。

街道の東側には休憩しているのか、又統している隊が南と北に見える。「歩兵方御休松屋」というように記してあり、それから、北屋宿・北殿宿間屋・ちとせや・藤田屋・ちきりやの六軒が東側に、西側には南からあるがや・大泉出宿間屋がある。くら田や・よしだや・鎌倉屋の前には人ばかりがしている。この鎌倉屋主人が、この「今様奇談」の著者である。

鎌倉屋の北に見事な松の木があり、そこに「御高札」と記されている。そのずっと後方に「上野山松林寺」が見える。

絵図をみると、追手の大將田沼玄蕃に属する歩兵方陸軍奉行大井太郎助の引率する歩兵組五〇〇人の進軍の姿は、剣付き鉄砲の歩兵隊なので行動的近代代的であるのに、二日前同じ道を通った浪士軍はおびたらしい旗をおしたてて大砲から陣太鼓をもっていて、いかにも対照的であった。すぐにも追いつかれてしまうようにもみえるが、しかし、この追い打ち隊は、浪士軍につかず離れず、ゆっくり

進軍して追いつくをかける風はみえなかった。「浪士には追いつかぬよう道をそろそろ行くは歩兵仕なもの」とあなどられてもいたしかなかったのな戦意のなさであった。

このとき北殿宿で、かりだされた人足は二〇〇人で、馬は一八匹であり、総勢一三八四人の大通行であったという。(大泉中宿文書)

なお、浪士の一行は、二二日上穂泊、二三日片桐大島泊、二四日駒場泊、二五日上清内路泊で美濃へ出ていった。美濃から近江路をきけて越前へ入ったが北国の大雪に疲れて遂に金沢藩の軍門に降った。浪士たちは各方面の同情や運動も空しく、幕命により追手の田沼玄蕃によって、敦賀の松原において斬首、打首等の処刑をされた。

時は翌元治二年(慶応元年・一八六五)二月四日であった。

今様奇談には記されていないが、このとき松島からも一四〇五名が使役につれ去られていた。こうした者はむろん釈放されている。高遠藩の同村元蔵について、宮田宿の山浦藤左衛門が気の毒に思っ上穂宿で願下げを願ひ出たら山浦氏も縄をかけられ、からくも縄をはずして帰った。同村はとうとう敦賀までつれられていって、ここで釈放されることになった。

図 『天狗勢の本州縦断』

本村南殿出身の畑市次郎(後見)の、『幕末水戸藩の苦悩—天狗勢の本州縦断』という著書がある。著書は、幼いころ焚火の燃える炉端で、村の老人たちから水戸浪士通行の目撃談を聞いた。そのすさまじく痛々しい通行のはげしい感動がもとになって、この書はできたという。

この大著には筑波山拳兵から最後まで浪士の動きが記されている。和田峠の激戦などその多くを割愛して、『五、伊那路を行く』を抄記して『今様奇談』とちがう点を明らかにしたい。

天狗党の軍師は山岡兵衛で、隊伍の編成・布陣の隊形などは真に軍師に値していた。下仁田の戦い、和田峠で松本謀訪の軍を撃退して以来、もはやその進路を阻まんとするものもなく行進することができた。

下諏訪を出た浪士たちは、昨日の戦で疲れきった足をひきずりながら黙々と南に向けて急いだ。平出で大休息をし昼食をとり、戦死者の首は京都まで持っていく予定であったが、断念して平出の宗見寺裏に埋め、深傷負いで城を続けられない幾人かは涙の介錯で、ここに葬られた。

ここから浪士軍は二隊に分かれ、一隊は天童川左岸を赤坂、樋口、小河内と通り、一隊は右岸を宮木、新町、羽場、大田を経て松島で合流し、ここに宿泊した。翌二日松島を発った。

この間に高遠藩は防戦の準備と部署をきめ、四隊に分かれ一隊は本城の守衛、天神山には内藤兵衛、聖天原には岡野小平治、平出には野木要人を出陣させて、伊那の入口を守備させた。

野木の率いる一隊は初め長野に陣したが、平出の堀山に移って陣をはった。平出宿では家財を片づけ、老幼婦女はみな避難した。

二日早朝、斥候をだして探らせるところ、浪士の大集団が伊那に向かっているという。野木隊は砲一発も発することなく、陣を撤し、沢底、長岡新田の山をこえて平良に出て、天神山に引上げてしまった。その狼狽ぶりは、親骨の肝腎要が逃げだしてばらばらだという噂のとおりであった。武士に似合わないことだという人もあった。

しかし、浪士の「隊が何の抵抗もなく松島に向かい、避難していた人々もだんだん帰ってきて、安堵の胸をなでおろし、異口同音に高遠が攻撃に出ることなく、守備の方針を持したことをありがたがった。

二日夜、藩士のうち硬骨の土が、松島宿に宿営中の浪士を襲おうとしたが、藩の重役は採用しなかった。岡野小平治の一隊も、聖天原で浪士の通行後、数発の鉄砲を発しただけで、天神山へ引き下がった。

高遠町の古老が『花柳雜記』の中で、野木要人が熟慮した末、全軍を総転進させたのは、恐れをなしたのではない。こうして平和に伊那谷を通過す

るきつけをつくったことがわかって、野木要人の悪口をいう者はなくなつた。

『天狗勢の本州縦断』

ここでは野木要人のとった態度は、腰抜けとあざ笑う通説に対して、最も賢明な措置であったといっている。大衆は無責任な面白半分は誇張しているものだが、真実はその人の平常の行爲と、その時の情勢とを併せ判断すべきであるといっている。

飯田藩では、国学者のあつて、浪士に間道を通過させて、その成功を喜んでいたが、後に幕府からその無抵抗をとがめられて、城代家老と清内路の関守とが、切腹を命じられて、ついに犠牲者を出してしまった。

奇しくも同村のうちから『今様奇談』と『天狗勢の本州縦断』と、水戸浪士について二人が、力作を残してくれた。これはその通過が、沿道の住民に強い印象を与えた結果であろう。野木要人が幕末という時代に処して、侍大将らしい侍であったのか、それとも腰抜けであったのか、問題を残していることも興味深い。

三 おかげ祭り

慶応三年十一月一六日から三日間、この地方にもお札が降り、「おかげ祭り」が行なわれた。

この年の正月、明治天皇が天皇の位につかれた。一〇月には徳川慶喜は政権を奉還して、王政復古となった。多年王政に苦しんでいた住民は、新しい時代の到来を喜び期待してはいたが、因循続きで生活はよくならずどこか半信半疑の状態であった。当時信州諸藩の大名たちは日和見的で、尊王とも佐幕ともふみきれないでいた。

そこへ降ってわいたように、大泉村の四〇軒近い家にお札が降った

のである。これは王政復古こそ神様や仏様の「おかげ」によるありがたいものだ、信じこませた。

神社や仏様のお札が、家人の知らない間に、家の中や縁側などにおいてある。朝起きて、この札を見つけて、天からお札が降ってきたといつて、大騒ぎとなる。この世の中が幕政から王政へと大きく変わったのは、神様や仏様のおかげだ、おかげ祭りをしようということになった。「おかげだ、おかげだ、おかげだよ。ヤツチコロ、ヤツチコロ」という囃し言葉もどこからか伝わってきて、村人もうかれてその囃しをはやしだした。

お札降りは、近畿・東海方面から始まり、全国にひろまったのが、当村にもきたのである。次表のように何枚もの各地のお札が、どこからどのように配られたかと、ふしぎであった。

大神宮 (伊勢)	九、	風来寺 (愛知県)	一
善光寺 (長野)	九、	富士浅間 (富士吉田)	一
秋葉山 (静岡県周知郡)	四、	一三社 (諏訪明神)	一
津島様 (愛知県)	七、	加しま (茨城県鹿島)	一
えべす大黒 (出雲)	一、	水天宮 (江戸)	一
九頭竜 (戸隠村)	一、	赤野山・雲玉様等	

降ったお札は、右のように広い範囲からのものであった。お札はいろいろあったが、例えば富士浅間神社のお札は、御本尊がちゃんと状態に入っていた。

状態……「富士山 御守護」

内容 大山祇命
御本尊……「天津彦彦火瓊瓊杵尊」
木北開基姫命

お札が降った家ではそれをまず神棚に納めて灯明や供物をあげ、村の人々に振舞い酒を出して、お祝いをした。ふしぎなことに、そのも

てなしの可能な家々、つまり当時の有力者と目されていた家々に降った。田畑をもった家とか、以前名主を勤めたことのある家には、必ず

表6-1 大塚村へふったお札（慶応三年十一月十六日）

ふったお札	名	家号	ふったお札	名	家号
一、大神宮 （おはらじ）	新五衛門	（中宿）	一、大神宮 （おはらじ）	孫八	（丸や）
一、大神宮 （おはらじ）	源五右衛門	（北）	一、秋葉山 （おはらじ）	三郎左衛門	（西村）
一、風来寺 （おはらじ）	庄助	（マヌヤ）	一、九頭竜 （おはらじ）	忠七	（大東）
一、津島様二枚 （おはらじ）	彦右衛門	（油や）	一、加し末 （おはらじ）	利右衛門	（柳屋）
一、津島様一枚	半三郎	（白鳥）	一、大神宮 （おはらじ）	平之丞	（きたや）
一、春野山 （おはらじ）	軍藏	（安積や）	一、大神宮 （おはらじ）	新八	（原町大北）
一、津島様 （おはらじ）	伝三郎	（山道）	一、津島様 （おはらじ）	武左衛門	（清水幸吉）
一、富士浅間	伝之丞	（嘉久一）	一、大神宮 （おはらじ）	善右衛門	（？）
一、拾参社	男助	（西中村）	一、大神宮 （おはらじ）	平左衛門	（八平）
一、秋葉山	宇兵衛	（古や）	一、大神宮 （おはらじ）	宇兵衛	（古や）
一、秋葉山 （おはらじ）	善八	（柳や）	一、春野山 （おはらじ）	新作	（市）
一、善光寺 （おはらじ）	茂右衛門	（油上）	一、善光寺 （おはらじ）	五郎左衛門	（もんや）
一、大神宮 （おはらじ）	周平	（せきや）	一、同右 （おはらじ）	助三郎	（東村）
一、おびす大黒津島	六右衛門	（青木垣外）	一、同右	友七	（浜や）
一、江戸水天宮 （おはらじ）	善三郎	（唐沢要太郎）	一、同右	助右衛門	（大原や）
一、善光寺 （おはらじ）	源右衛門	（綱や）	一、秋葉山	仁左衛門	（唐沢や）
一、善光寺 （おはらじ）	伝右衛門	（遠藤）	一、善光寺	兵三郎	（市場大南）
一、大般若 （おはらじ）	半之丞	（八半）	以上三七戸	三九枚	
一、津島お守り	宇右衛門	（？）	おはらい……おはらいの時のお札		

お札が降っている。住民大衆に王政復古はありがたい、おめでたいということを、いかにしてわからせるかというとき、これはいかにも好適であった。これを「おかげ祭り」といった。

このおかげ祭りは、住民を有頂天にした。当時天下鎮であった当地は、高遠藩などより多少のよゆうはあったが、長い間の幕藩体制のもとで何事もいふなりになって忍びに忍んできた。そこへこのお札である。新しい時代の夜明けとばかり、日ごろ内に秘めていた抵抗意識が、一度に噴出したのである。

そして、ふしぎなことにこの祭りの「せわ人中」として一〇名、若者頭三名（中宿・市場・原町）が記されているが、名主の名前がない。従来、祭の世話役は必ず村役人である名主が、先頭に立っていた。このころは一年交代の名主であった。名主でない世話役、ここにも民衆の心を沸かしたたせるものがあった。

さて、祭の行列であるが、十一月の一日から一八日までの三日間各村々をねり歩いている。世の中が変わって王政復古になった喜びを、むしろに抱えながら、整然とした隊伍をくんで、はやし練り歩いたと記されている。その「難方」というのが、おかげ祭りのはやし方であった。これは後に記すように、

一本調子でどんどん進行するテンポの早いはやし方であった。

おかげ祭りの行列は次のようで、娘や子供を含めて村中の、鳴り物入りの大行列であった。

先箱 大とり毛 二入一並坂やつこ一立竿やうり一御幣一娘三十人程一御はやし
金もん先旗 小とり毛
右 方二十人一御みきすず 残らず付し踊 子二人一はやし方三味 三味 すりがね一太かわ
左 子二人一はやし方三味 三味 すりがね一太かわ

一つづみたいこ一中老残らず
一つづみたいこ一中老残らず
警固出

・三日間の日程は次のようであった。

・慶応三年 大泉神社（明神様）→大泉公園（二本から松）

・一月一六日 大泉神社（明神様）→大泉公園（二本から松）

・一月一七日 大泉神社（明神様）→大泉公園（二本から松）

・一月一八日 南殿（八幡様）→北殿（堀ノ井・久保・木下）

「おかげだ、おかげだ、おかげだね。ヤッチョロヤッチョロ」と走り歩いたのである。

庶民はこの囃言葉そのままに、新しい時代を迎えることのできたのは、神仏のおかげであると、この世直しの祭りを盛大にした。時節は長州再征の結果、米価をはじめ物価が上昇し、打ち続いた凶作や重税にあえいでいた民衆は、慶応元年から二年へと百姓一揆を爆発的に多くしたが、慶応三年から急にあの「ええじゃないか」の運動に変わり、百姓一揆は激減した。

これは「世直し」の要求を宗教的形態で実現したものであり、倒幕派志士らは大衆混乱を助長させ、幕府の支配力を麻痺させ、同時に人民の闘争をそらせ、この間に王政復古の大業を容易ならしめたものであると、(蓬山茂樹) いている。

とにかく、札の降った家は、たちどころに大騒ぎとなり、「それ酒

よ・餅よ・こわめしよ」と呼ばない人まで集まってきて、飲むやら、食うやら、こぼすやら、歌うやら、舞うやら、踊るやら、村中こぞって大騒ぎして、新しい時代の萌動によいしれた。

四 維新と村人の動き

当村一般住民が、維新の旗を肌で感じたことといったら、慶応四年（明治元年）の早春、討幕と年貢半減を布告して、伊那谷を北上してきた官軍先鋒隊の通行であったにちがいない。

この年の二月四日には高松隊（賈勅使）が官田に泊っている。これは鳥羽伏見の戦で敗退した慶喜を追って、勅命のないまま京都を出発して、各藩や幕府領に帰順を求めながら「官軍鎮撫隊」の旗を先頭に進んできた。高遠藩主内藤頼直は慶喜に随行していたので、慶喜と運命を共にする覚悟であったが、情勢が急変したので藩主のいない高遠藩では和戦の態度を決しかねていた。水戸浪士の通行後、大勢は帰順に決していた。伊那・松本・諏訪の各藩が帰順し、甲府も帰順した。先鋒隊は賈勅使であることを二月一〇日に布告され、甲府から悄然と中山道を京都に引き帰した。

二月五日には相模總三警衛隊（賈官軍）も宮田白心寺に止宿した。これは岩倉の東海道軍の出発前に京都を出発して、その先鋒隊となる命令であったが、東山道で伊那路を経て碓氷の関をおさえようとしていた。これも二月一〇日に賈官軍と布告され、情勢は一変して下諏訪で処刑された。宣撫にあたって「年貢半減」をにかけていることが勝手な行動とされたのである。

当時、当地域には平田学派が盛んで、これらの一行の進軍には進んで隊伍に参加したり、物心の便宜をはかったり、処刑に弔意を表したりしている。相模が明治五年に下諏訪の懸塚に祭られる時も、当郷

から多数が寄進している。勤王一途に心血をささげた功を讃えているのである。

そうして、維新の風雲を村の先達たちは次のように、同盟し、進んで尽力することを誓っている。

定約書ノ事

一、王政御一新ニ付キ天下統一ノ御趣意ニテ追々文明開化ニ及ビ候ニ付今般同盟ヲ以テ御國報謝ニ附イテハ窮民救助トシテ上願シ奉リ候所御附成シ下シオカレ候儀イテハ弊々精々尽力致スベク候依ッテハ御役所并ビニ地利取調ベ其ノ外入費ノ儀ハ追々法別相立テ候迄相互ニ割賦致スベク候此ノ如ク条約條上ハ連盟中不実申ス事ハ勿論成ルベク元費ヲ省キ精實ニ執リ計ライ申ヌベク候依ッテ誓紙ニ連印件ノ如シ

明治四年辛未年

神子柴村 高木誠三郎
羽田村 宮下源八郎
南殿村 清水平一
久保村 丸山寛一
富田村 向山五郎
(久保大東文書)

明治維新という大改革の時には、人の生き方は革命的である。ここに記す伊奈誠一郎は幕府方に組した一つの徹底した生き方を示している。

伊奈誠一郎（一八四三—一八九）幕末の志士で、天保一四年（一八四三）に神子柴村の高木勘之丞の次男で幼名を甲子次といった。南築輪村長もした高木正直の叔父に当たる人である。

誠一郎は幼年の折に江戸表に出て大叔父中村玄三方にあって医学を修業し、数年の後帰国して高遠藩の中村中作の塾に学んでいたが、後にまた西遊して、長崎で洋学を学び、帰国してから医師を開業していた。

青雲の志を禁ずることができないまま、再び江戸に出た。当時世は幕末の風雲が急を上げていて、勤王が佐幕かの対立の激しいときであった。神子柴村は古来幕府領であった関係からか、彼は幕軍に身を投じた。推されるままに幕府歩兵衛隊となり小監察にまで登用された。このために、明治初年の鳥羽伏見の戦いから上野の彰義隊の戦いにももちろん、会津の戦い、松前の戦いに続いて、遠く北海道函館の五稜郭の戦いまで奮戦した。戦は遂に利あらず挫かれの身となって、鹿児島に護送され幽閉されること年余、許されて帰ったのが明治三年三月で、静岡藩に引き渡されてから自由の身となり、久々に帰国したのは誠一郎二七歳のときであった。

当時中村黒水は、彼が最初から勤王方に組していたら、まさに上伊那の誇りとして輝いたことだろうといっている。しかし、「身をその仕ふるものに致し名分を高唱して、義を確守して後、力尽きて軍門に降り罪を待った大丈夫」と賞賛をしている。

後、大島圭介の紹介で、栃木県那須野原の開墾に従事し其耕園と称し、また乞正社とも称していた。伊奈誠一郎の「那須野原開墾の書類」を詳述することはできないが、一人が五反歩ずつの開墾耕作を任せられていて、合計一七町歩・二〇〇三〇戸の事業であったようである。

晩年は不遇で、その後茨城県警部となったり、広島県警部御用係となったり、滋賀県衛生課に転じたりした。明治一七年石川県警部補に推挙され、明治二二年五月一六日石川県七尾警務署長として在職中に死亡した。時に四七歳であった。

誠一郎の墓は石川県珠洲市の水澤寺に静しく立っていて、本村にはない。この烈士の墓を伊那の本村へ移そうとする動きもあるが、いまだ実現していない。



図6-4 征矢先生之碑

次に勤王方に組したものに征矢政十郎があった。いま塩ノ井中屋敷の玄關わきに建つ「征矢先生之碑」はその業績を語っている。

征矢政十郎（一八三二—一七八） 幕末の志士で、碁師でもあった。

天保二年（一八三二）塩ノ井村征矢良策の子として生まれた。一五歳の時、諏訪の岩波太左衛門に囲碁を学び、さらに江戸へ出て棋博士の井上因碩（幻庵）の門に入り、囲碁の技を磨いて五品（段）に至った。その傍ら塩谷岩陰について文を学んだ。

政十郎は早くから勤王の志があり、文久年中（一八六一—一六四）勤王の志士が京都に赴いていることをきいて、京へはせ参じようとしたが、母が泣いてとめたので思いとどまっていた。

元治元年（一八六四）水戸浪士が京都へ向かうのをまのあたりにみて、京都に赴いたが、時すでに遅く浪士は処刑されてしまっていた。

明治元年、岩倉具視の子具定が官軍の将として、東山道を江戸に進むことを知り、奮然としてこれに参加しようとし、塩尻峠までいったが、すでに通過後であった。これを追っていつて不審に思われて捕えられた（官軍に従っていったともいう）。とにかく半年後平和になって

任がとけ帰郷した。

明治政府の文教政策による学制がしかれ、国民ひとしく学校へいく世となった。政十郎はここで感ずる所があり、碁を投じて、小学校教員となり、子弟の教育に尽力した。

明治十一年八月一日没、享年四七歳。郷土の人や門人たちが碑をたてた。（図6-4）

第二節 南箕輪村の誕生

一 誕生とその経過

明治八年二月一八日の、布告第二一〇号によると、次のように南箕輪村が誕生した。

信濃国伊那郡 久保村塩ノ井共、大泉村、北殿村、南殿村、田畑村、神子柴

村

右合併、南箕輪村と改称。

右ノ通り合併改称相成リ候条此ノ旨布達候事

明治八年二月十八日

筑摩県令 水山盛輝

(税務文書)

明治五年四月の太政官布告、翌六年の大蔵省達によって、町村合併の方針が具体化された。合併の方針は弱小町村で民費がかさみ、住民負担の多い町村は、地勢の状況を見積もって合併すべきであるとされていった。筑摩県としては、「原則として一小区を以て一村」という方針であった。当時水山権令の強力な勧奨指導によって、管下は明治八年一月には合併がほとんど完了した。

しかし、南箕輪村が最初から六か村で合併しようとしたのではなかった。まず次の四か村が合併して、「穂屋村」を称しようとした。

村落合併願

一、戸数 七一 人員三一七口

反別 七八町三反二畝一七歩

二、戸数 三九 人員二四七口

反別 一五町八反七歩

北殿村

南殿村

一、戸数 七三 人員四〇三口

反別 六七町八反一歩

二、戸数 五三 人員三一一口

反別 四七町一反二畝七歩

合計 戸数 一二六軒 人員一二七八口

反別 二二九町五畝二歩

改称村名 穂屋村

右の通り村落合併村名改称示談相整い候間御許可成し下し置かれたく之に依つて地図相添え一同連印を以て願ひ上げ奉り候 以上

明治七年七月

略(各村副戸長連印)

筑摩県令 水山盛輝

(大和千文書)

ここでは省略した各村代表の印からみて、これは本気で考えられた合併願であった。それにしても「穂屋村」と称しようとしたことは、この地域が御射山神社に關係していたことを思わせることであった。

これにはずれている久保村は、地域の状況及び長い間の統治を異にした関係から、おそらく箕輪の方へ傾いていたと思われる。それに明治六年四月一日の大小区制では、久保村だけが第一七大区八小区で、他の大泉村、北殿村、南殿村、田畑村、神子柴村は第一七大区九小区であったので、筑摩県からも合併のすすめがなかったと思われる。その久保村が最初どこと合併しようとしたかは未詳である。

この幻の村「穂屋村」にはずれた大泉村は、水に苦しみながら共に五か井堰を守ってきた五か村と合併しようとした。すなわち大泉村、大泉新田村、吹上村、中曾根村、富田村と合併を計画していた。これは一小区一村の原則からははずれていたが、大泉所山、大泉川の水利権を中心とした村落共同体で、「落原村」と名づけようとしていた。

第6章 村の発展

もちろん「藤原庄」にちなんだ村名であった。この五か村は現在も同じ井組として深いつながりをもっている。

いろいろと曲折はあったが、次の「村落合併願書」が明治七年の八月二〇日にだされた。さきにだされた七月の藤原村合併願と同形式であるが、数字には若干のちがいが見える。これを表示すれば次のようである。



図6-5 旧六カ村合併願書付図

六カ村合併
反別 三三九、六四三、三三六、三三六、三三六
戸数 四四四、四四四
人員 三三三、三三三、三三三、三三三、三三三

改称村名
南宮輪村

村名	反別	戸数	人員
久保村	一八五、五八四、一九五	一〇三軒	五九五口
大泉村	九五、七二、二四	八〇軒	四六〇口
北殿村	七一、三二、一七	七一軒	三二七口
南殿村	二五、八〇、〇七	三九軒	二四七口
田畑村	六七、八〇、〇一	七三軒	四〇三口
神子村	四七、一二、〇七	五三軒	三〇一口
合計	三九六、三六、一五	四二〇軒	二二三三

村落合併願書

(前記表の通り)

右ハ今般御趣意ニ基ツキ私共村々合併、村名南宮輪村ト改称示談相懸イ候間、御許可成シ下シ置カレ度ク、之ニ依リ地図相添エ一同連印ヲ以テ願イ上テ奉リ候 以上

明治七年八月二十日 第十七大区九小区
伊勢郡久保村 副戸長 赤羽 誠作郎

久保村	赤羽 誠作郎	南殿村	倉田 十郎郎
大泉村	丸山 寛一郎	有賀 誠二郎	
北殿村	堀 与一朗	有賀 光彦郎	
南殿村	征矢定七郎郎	松沢源五郎郎	
田畑村	出羽沢善八郎	加藤 元造郎	
神子村	原 新吾郎	日戸 勝郎	
伊勢町	清水 宇宅郎	有賀 一平郎	
	倉田 三郎郎	高木 省三郎	
	有賀又七郎郎	加藤孫十郎郎	
	倉田庄一郎郎		

筑摩県様令 永山盛雄殿

(大和手文書、堀ノ井大東文書)

これには、地図(図6-5)と次の示談確証がついていた。

示談確証

今般村落合併の儀六か村申し合わせ示談相整い候条款左に

一、役所位置の儀六か村の地へ建築致すべき事

一、合併御許可相成る上は速やかに扱い所設立致し御意見を遵守し文書事務

他助日誌明瞭に記載し後勤支えざるよう取り計らうべくもつとも定式

御用並びに徴細の外は日勤通達集議致すべき事

一、堤防民費上納並びに諸費共其地限り課し申すべき事

一、田方並びに各用水諸費共其の耕地限り課し申すべき事

一、道路橋梁修繕費及び撤除丁場の儀従前の通り耕地限り課し候事

一、従前村持田畑林草場株場等は是迄の通り其の耕地限り勝手たるべき事

一、宿駅へ関係の諸費従前の通り其の外へ課し候事

一、合村中へ関係し候御用御休泊の分御出の儀役所へ御沙汰之ある節は何

れの耕地に御止宿相成り候とも御一毛金十二銭五厘づつ合村中へ割合い

申すべく尤も堤防等に付き其の耕地限り御用御止宿は分段の事

一、合併村々の内出張並びに役所へ出勤候とも行脚持参は勿論修致さず諸

事節儀を相守り申すべき事

一、右九款熟儀の趣水く限守違乱之なきよう親睦協力方諸厚く注意致すべく

後託のため仍って桑約停の如し

明治七年八月廿日

略(前記代表氏名印)

(大和手文書)

これによってみると合併とはいっても、従来の慣行通りで、その耕

地限りのことが多い。新たに役所を設けるほか宿駅だけは共同である

がこれも従前どおりで、ほとんど目新しいことはない。

このようにして一応、南箕輪村が誕生したが、定着するにはなお多

少のゆれがあった。例えば次の「分村御願」が神子柴耕地からだされ

た。

分村御願

長野県上伊那郡南箕輪村

戸数 五三三戸 神子柴、田畑、南殿、北殿、大泉、久保、堀ノ井、沢尻

……(中略)……

風土状態 別紙図面ノ如ク民屋緊密ニ各一方ノ区域ニヨリテ其ノ土

地ヲ占ムルヲ以テ気候通シ難ク交通又密ナラズ一村ノ名義アル

モ其ノ実各独立スルモノノ如シ

水旱 甲乙飲料ノ便否甚一ナラズ中ンツク美水ノ如キニ至ッテハ其ノ

利害ノ差異ナラザルナリ恐ラクハ合併ノ大ニ失セシヨリ費用ノ

多額ヲ要スルニ至リタリ(以下略)

このように、合併南箕輪の実状を詳細にのべ、合併したためにマイ

ナス面のあることを強調したのち、神子柴村は分村したいと願いでた

のである。

分村

上伊那郡神子柴村

戸数 六〇戸 人員三四八人(男一七六人女一七二人)

反別 二二一九町三七畝一四歩

地価 金二万三四八五円六〇銭

神社二社 (村社一 神社二)

学校一校 (美輪校 田畑ト飯ニ組合)

職員 東西五里 南北五里余

沿革 (略)

慣習 (略)

山川 (略)

風土状態 本村ノ飲料水ハ宇大清水ノ湧水ヲ以テ一村限りノ共有ニ属ス総

テ人情懇和ヲ冒トシ協同ノ事業進歩ノ状ヲ見ル

飲料ノ供用各自其ノ便ヲ得田圃水ノ如キモ亦敢テ不便ヲ覺ユル

ナシ平常ノ経済上概略合併村ト比較スレバ十ノ三四分ヲ減ズベ

キ見込ミナリ（其ノ大路ハ別條）

讀シテ讀解シ奉リ候。本村合併ノ理由ヲ考フルニ、旧武蔵原治ノ際戸籍編成ノ時大小区區ヲ定ムルヤ、舊政ノ便否ヲ問ハズ風土慣習ノ如何ヲ顧ミズ、必ズ一小区ヲ以テ早ヤ一村トナシモノノ如シ。是豈実際ニ適當シタルモノナランヤ。之ニ加エテ幅員広潤ニ過ギ甲乙氣脈當ニ通ゼズ治者被治者共ニ不便ヲ受ク……

在時日ヲ経過セバ、實ニ多額ノ費用ヲ徒勞セン事ヲ恐ル。苟モ是ヲ回復セント欲スルニ復旧分離ヲナサザルヲ得ズ。

依ッテ一同協賛整理イ候間神子榮ヲ復旧分離ノ上神子榮村ト稱シ他ハ是迄ノ通り南箕輪村ト稱シタク此ノ段願イ上ダ候各条御洞察相成リ願意辨許容ノ程讀解シ奉リ候也

明治十六年三月十八日

長野県信濃国上伊那郡

神子榮村地代表 高木佐右衛門

高木 恒三郎

路（七耕地代表十四名連印）

右戸長 穂高孫三郎

長野県令 大野誠殿

（大和手文書）

この願書には郡長伊谷脩も添書している。しかしこの願書は却下された。

願の趣意に及び候々候事

明治十六年十一月廿六日

長野県令 大野誠代理印

神子榮村の独立は、前記の如く成立しなかったが、沢尻村も独立を願って次の「村落分村願」をだした。

明治十六年 村落分村願 南箕輪村沢尻村地

分村 上伊那郡沢尻村

戸数 二二三戸

人員 一二一人 内男六〇人 女六三人

反別 三九町七反九畝一歩

内 宅地反別

畑 反別

山林原野 反別 一町四九畝二二歩
一四町七四畝〇八歩
二三町五五畝一四歩

地価金 九八三円〇九銭

神社 村社一社

寺院 之無シ

学校 二七番伊那郡学校と合併

幅員 東西三町 南北二〇町余

沿革

沢尻ハ往古ヨリ一小部落ナリシモ故アツテ民衆數ニ風セリ。尤モ口碑ノミ。外後承応三年ニ至リ脇坂淡路守之レガ再興ノ命アリ。既往モ縁故アルヲ以テ全ク久保村ノ組織ニ係レリ。延宝六年ニ至リ旧幕府代官設楽源右衛門檢地ノ期沢尻ハ朝札ヲ下附セラレ、支配ノ所異動換エ毎ニ書換エシ平常一村ノ交際ヲ困難セリ。明治八年ニ於テ當時南箕輪村ヘ村落分村ケテ合併セシモノナリ

慣習異動

沢尻ハ一村ノ名儀アラザルモ位置ヲ共有地中野原ノ中門ニ民屋ヲ占メ、周回原野ニシテ平素ナス所ノ交誼ノ状一一小部落ニ止マリ。

民衆其ノ他神事祭典ハ当地方部限リノ遠近悉ク其ノ慣習ヲ混一スベキ場合ニ至ラザルモノナリ

山川 本村ニ沿フベキ箇所ナシ

風土状態

蓋シ一小部落ノ飛地ニアリテ狀澤澤ニシテ當時南箕輪村全村ニ比例シガタキモノノ如シ。別紙ニ因スルガ如キ地形ニシテ交際密ナラ

水旱

ザルアリ。平素小ナリト雖モ一村ノ如キ義務ヲ成立スベキ状態アリ
 実ニ利害ニ殊別アリ

飲料水ノ如キハ人工ヲ以テ井戸ヲ掘削シ。或ハ横井戸等ヲ以テスル
 モ旱魃ノ年部ニアツテハ其ノ飲料ニ苦シムアリ。然レバ果シテ経済
 ノ得失相償ウナシ。況ンヤ田圃水ノ便ヲ得ザレバ現在村落ノ費用ヲ
 以テ流用スル能ハズ。其ノ不便云々ベカラズ。彼此費用ノ損失勝テ
 算スルベカラズ。當時全村ニ於テ斯ノ如キ費用ヲ共同スベキナキヲ
 以テ、反ツテ遠隔ノ地ヘ往復ノ費用ノミ相償ミ実ニ忍ビ難キ場合ナ
 リ。

今、分村ヲナスニ至ツテハ傍費用ノ減ズルヤ必セリ

(久保共有文書)

以上のように分村願の各項でみるように、余りにも小村であり、水
 も乏しく苦しい村であるが、あえて分村願いをだしたのは、位置が余
 りにも遠隔でありすぎることからくる支障のたえがたいことによる。
 この願いは次のように続けている。

況ニ分村ニ請願スベキ要點ハ蓋シ他ナラシヤ。状況地勢ノ止ムベカラズ
 ルモノアリテ敢テ請願ヲ要求ス。実ニ前各項ニ記載セシ異状アリト……
 其ノ他百般ノ事物ヲ論シ其ノ不便等ガテ尽スベカラズ。然レドモ旧幕府ノ
 制法ニ止ミガタク茲ニ再々月ヲ経ルニ至レリ。然ルニ明治八年旧幕府治ノ秋
 ニ村落合併ノ令アリ。之ニヨツテ等シク當時南箕輪村ニ合併シタルモ、今ヤ
 郡区編成ノ典準ニ際シテ之レガ分村ヲセザルベカラズト。実ニ当況ノ如
 キハ皆煩ノ場所、且ツ原野ノ中立ニアリテ、戸長役場ヘ一度往復スルニ三里
 以上ニ余ルノ里程アリテ、僅々タル一小用事ヲ達スルニ一日ヲ費ヤサザレバ
 其ノ用弁ヲ達スル能ワズ。殊ニ積雪ノ際ニ至ツテハ殆ンド道路ハ閉塞シ、為
 ニ県道ヘ迂迴シ此ノ往復ニ至ツテハ、四里以上ノ冗長ニ徒費シ困苦頗ル……
 ……目下租税ニ倍スル程ノ協議ヲ要求シ分村ヲ請願セシ所以ナリ。
 前条一々御察察アラセラレ特別ノ御裁議成シ下シオカレ、尔後況況ヲ改移シ、

表6-2 明治初期の村の合併

文化10年 (1813)		明治1 - 6 年 (1868—73)				明治8 年 (1875)		明治11年 (1878)		
村 名	石 高	村名	戸数	人口	旧区	大小区	村 名	大小区	村 名	
久保村	663,203	久保村	103	595	134	区17(8)	南箕輪村 419戸 2,333人	17(8)	南箕輪村	501戸
塩ノ井村	247,939	大泉村	80	460	〃	17(9)			2,518人	
大泉村	773,700	北殿村	71	317	〃	〃			参考	
北殿村	1029,149 (上知 61.75)	南殿村	39	247	〃	〃			西箕輪村	521戸
南殿村	60,913 (上知 240,708)	田畑村	73	403	〃	〃			2,981人	
田畑村	699,352	神子柴村	53	313	〃	〃	伊那村	514戸	伊那村	415戸
神子柴村	513,790	計	419	2335					伊那郡村	2,350人
(箕輪28ヶ村 10730,346)									中箕輪村	923戸
									4,743人	

表6-3 南箕輪村の成立と発展

- 6ヵ村合併
明治8.2.18

南箕輪村誕生



明治十六年

- 8組地となる
明治8.2.18



- 8区となる
大正3年



総代 唐沢金一郎郎
唐沢紋四郎郎
加藤 登賢
有賀福太郎郎
加藤善四郎郎
池上長五右衛門郎

- 11区となる
昭和21年



- 17区となる
昭和58年



これからの南箕輪村は、合併も分離もなく現在に及んでいる県下でも稀な村である。ただ、明治五年に大区小区が設置されてこの村は、筑摩県の「第十七大区九小区」になつたり、長野県の「南第十七区八小区」に

なつたり、長野県の「南第十七区八小区」に

この分村願いには一名が印を押していないし、年号だけで月日もない、それに役所の却下の印もないので、提出したかどうかはつきりしない。この文にあるように幕政下では、相当不便を忍んでいたが、新規のことは許されずすべて旧慣によっていた。いまや新しい時を迎えて分村したいという気持が切々と伝ってくる。交通事情が徒歩だけであったころのことであるから一層その不便さが強くひびく。しかし独立するには余りにも弱小であったので、たとへ願ひ出ても聞き届けられはしなかったと思われる。ここで沢尻のかかえている問題は、南箕輪村の問題として明治・大正・昭和と続き、その抜本的解決が期待され訴えられてきた。自動車交通の現代になって、その不便さはかなり縮小されてはいるが、

(久保共有文書)

なったりした。明治十一年にはこの大区小区制が廃止されて、旧に復して郡制が施行され、「上伊那郡南箕輪村」となり、大正一二年の郡制廃止まで六〇年間郡長の支配を受けた。

その間、明治二二年の市町村制の施行となって、県では有力町村を造成するとの趣旨から、町村の合併を強力に推進したが、南箕輪村は規模も大きく一村のまま十分独立にたえ得られるものと認められて、合併もなく、そのまま新村として認められた。

村の中は戦後とくに発展がめざましく、六か村が八耕地となり、大正三年から八区となり、戦後北原区大芝区南原区が誕生し、昭和五〇年には中込区もできて一二区となった。その概要は表6-3のようである。(昭和二四年、二七年に中ノ原区ができたが昭和三〇年には沢尻区へ合併した。)

二 飛地

県令 第十九号

県令第十八号ヲ以テ定メタル町村区域ニ在ル飛地ハ其ノ所在地ニ編入ス

明治廿二年三月十九日 長野県知事木梨精一郎

(役場文書)

この飛地に対する県令によって、思わぬ難題を西箕輪村からつきつけられた。大泉所山と北沢山が飛地だから西箕輪村に編入すべきであるというのである。

これに対して時の村長徳高孫三郎は県知事あてに上申書をだした。

それは県令の精神を知らざるもので、西箕輪村のうち、吹上・大泉新田・中曾根の三耕地は中箕輪村が南箕輪村に属すべきもので、事実、合併当時そんな裁判の手続きさえしているから、飛地

云々は猶予願いたいと明治二二年一月一八日に上申している。

南箕輪村では大泉所山や北沢山を飛地と考えることはできなかった。この件がおこる前の同年二月一日付の「飛地取調」でも中箕輪村へ原野六反歩余の飛地と、西箕輪村から八畝余の飛地が、登録されているだけである。

この最終書によると、飛地であるかないかの争いの一つは、大泉の新井であった。新井敷は二間幅でつながっているという南箕輪側の主張(図6-6)は次のように却下された。

西箕輪村共有大芝原ハ明治十六年四月南箕輪村共有大芝取土地籍ノ区画ヲナシ同年五月廿六日其ノ境界標ヲ確定シタルヲ以テ同年八月廿一日ニ至リ清見敷ヲ南箕輪村ノ一部ナル大泉耕地ニ充テシタルモ、地籍ハ売買ニ依



図6-6 南箕輪村の本村と飛地が新井敷でつながった図(二間幅)

ツテ受授ス可キ性質ニアラザルヲ以テ、タメニ西筑輪村ノ境界ヲ変更スルノ道理アラザルモノトスル

(役場文書)

しかし、もう一つの争い、大泉所山北沢山を西筑輪村へ編入することとは却下されて、南筑輪村の勝訴となった。

大泉所山及び北沢山ノ地籍ハ南筑輪村ト連絡スルモノニアラズ。然レ共縣令第十九号ハ現地ヲ所在地籍ニ編入セシムルモノニシテ西筑輪村ノ地籍以內ニ介在セザルニ山ノ地籍ヲ以テ同村ノ地籍ニ編入スベキ道理アラザルモノトス

(役場文書)

これに対して同年同月の三〇日には、西筑輪村から不服の上訴状がだされた。

それによると、天然の地勢からみても接する面積の広さからみても、西筑輪村に属すべきことは明白だと、るるのべたのち次のように上告している。

村境界ニ関スル争論事件上訴
長野県参事会裁決不服ノ上訴

訴願人 西筑輪村長 唐沢市五郎
被願人 南筑輪村長 穂高孫三郎

略

右ノ理由ニ付キ長野県参事会ノ裁決ニ服スル能ワズ。茲ニ御中ノ御裁判ヲ仰
ぎ候条願人請求ノ通り御裁明成シ下サレ度ク願イ奉リ候

明治廿三年八月三十日

東京控訴院長 松岡康毅殿

(坂ノ井大東文書)

この訴状は代言人をたてて正式なもので、南筑輪村でもこれに応じて時の村長がこの争論事件の「答書」をだしている。この答書は

西筑輪村の主張に一つ一つ反論したのち「付帯の上訴」をしている。

それは大芝原はもとも総地元の入会地であり、さきの新井敷を所有した大泉所地すなわち南筑輪村に地籍もあるとして、この井敷を南筑輪村の地籍に編入してほしいと、逆に南筑輪村から上訴している。

大泉所地籍ノ地籍ヲ被願人ニ編入セラルル様御裁判願イ奉リ候也
訴訟人費ハ願人ヨリ弁償受ケタケ候也

明治廿三年十月 日 右被願人 穂高孫三郎

東京控訴院民事第二局長 北村泰一殿

この上訴裁判の判決は、明治廿五年一月二八日に下った。これは長野の裁判と同じで、北沢山大泉所山は西筑輪村にとりかこまれていないから現地とはいえないとし、西筑輪村の主張は不当と退けられた。

付帯上訴の係争井敷は、所有権は売買できるが、地籍は売買できるものでないとやはり退けられた。「但シ訴訟費用ハ原告ノ負担タルベシ」と本村の勝ちとなって、西筑輪村の費用もちで落着いた。

明治廿八年二月付の県告示六二六号で、実際に飛地で境界の変更があったのは、中筑輪村から本村へ編入した区域が五輪塚の二畝二四歩と西天幹原西の一反五畝二二歩だけであり、逆に本村から中筑輪村へ編入された区域は、北原の一反九畝一三歩だけであった。

表5-4 江戸末期の本産物成と明治初期の地租の比較

北 農 (古科)	文久3年	慶応2年	明治2年	明治7年
	石 186,377	石 113,807	石 130,839	石 153,590
神 子 集	文久6年	安政4年	明治2年	明治7年
	137,046	114,459	99,197	119,982
南 農 (上知)	文化3年	慶応2年	明治2年	明治7年
	57,732	44,960	?	51,150

明治初期 地租改正前の租税の納入は、おおむね江戸時代の貢租の納入の形態を踏襲していた。徴税事務は村で統一して行なっているが、租税の中心は江戸時代の本産物成であった田や畑・宅地の貢租である。小物成であった百姓持林・草場及び入会地の税がこれに加わって地租として米の石数で税額が示され、さらに、地租の総石数に対し一石当たり三升の口米が諸掛りとして課税されている。これら納入すべき石数を、示された石代(米の値段)によって貨幣で納める代金納付方式をとっており、江戸時代とはほとんど同じであった。江戸時代に有ったとりもち代、麻綿売り出しは廃止されているが、運上、冥加等は雑税として種類を増加して別に徴収している。明治七年の雑税の諸済額によると、雑税の種類は紙すき税・石工税・売薬税・質屋税等二四種に及んでいるが、その総税額は少なく、税総額の一%にも満たない額である。同七年の南農輪全体の税額を示すと次のようである。

第三節 地租改正と村人の生活

一 明治初期の税制

地租の部

久保	一〇四五四〇九銭二厘	南農(古科)	五三二四二九銭九厘
堀ノ井	二五三、二五九	田畑	九五一、三〇四
北農(古科)	九六〇、一六五	神子集	七四九、四二一
〃(上知)	五四、三〇九	大泉	五六五、三一八
南農(上知)	三一九、四九八	小計	四九五、六六五
雑税(金村)	三七、九七四		
合計	四、九八九、六三九		

また、江戸時代末期の本産物成と、明治初期の田畑・宅地の地租を比較すると表6-4のとおりである。江戸時代末期、明治初期とも地租は貨幣で納めているが前記のように税額は石数で示されている。年度により税額はかなりの差があるが、江戸時代末期と明治初期とはほとんど同額であったとみて差し支えない、したがって、前にみたように税の種類や呼称の仕方に変化はあるが基本的には江戸時代の貢租の体系をそのまま引き継いでいると考えて差し支えないと思われる。

二 地租改正

(一) 地租改正の意義

江戸時代から引継いだ租税制度は、各藩・各領まじまじの代金納付

表5-5 江戸時代末—明治初期の米価の変動

年 度	1石当たり円
万治元年	円 1.940
慶応元年	3.558
〃 2 〃	7.356
〃 3 〃	3.640
明治元年	4.230
〃 2 〃	7.870
〃 3 〃	4.670
〃 4 〃	2.790
〃 5 〃	2.000
〃 6 〃	3.000
〃 7 〃	4.680
〃 8 〃	5.130
〃 9 〃	2.940
〃 10 〃	3.360

租であって、取納額はその年の天候に大きく左右され、さらに、石代金を納入する場合に納入金額はその年の米価の変動によって大きな影響を受けることになる。当時の米価は表6-15のように変動が非常に大きく、このような状況のもとにあつては財政収入額の予測すら困難であつて、近代的な財政計画を立てることは不可能に近かつた。

そこで、明治政府は中央集権国家として、全国的に統一された税制の制定、近代国家にふさわしい財政の確立を目指して大がかりな税制改革を行なつた。それが地租改正である。

この地租改正は、明治四年の田畑勝手作りの許可、同五年の土地永代売買の解禁と共に、土地を封建的諸制約から解放し近代的土地所有制度を確立することとなり、明治政府の諸改革のうち最も基礎的かつ重要な改革であつた。

(二) 田・畑・宅地の地租改正

地租改正は、まず明治五年二月政府によって土地所有者に、土地所有の証しとして地券を下げ渡すということを公布したことから始まつた。(この時の地券を壬申地券という)これに基づいて筑摩県は同年三月、農民の土地所有権を公認する地券を土地の売買が行われたとき、その買い主に下げ渡す旨を布達し、ついで一般の土地への交付のために次のような指示をした。

1. 持主立金いで一筆ずつ土地を取り調べ、その肥瘠、年貢米の多少などにより適当な値段を取りきめ、検地帳と共に提出すること。
2. 今までの無税地を書き出し適当な地価で払い下げを願ひ出れば、検査のうえ地券を渡すこと。
3. 田畑・山林・その他、一人別に取り調べ提出すること。

さらに、石高と反別を記した絵図の作成と、その差し出しをも命じている。

筑摩県はさらに明治五年九月、地券掛に権典事黒田直方のほか官吏一四名、雇一〇名を任命して地券交付の仕事を進め、各村々に「田畑一筆限地引帳」の提出を督促している。このときに提出されたものと思われる田畑一筆限地引帳の写が残っている。その一部を掲げると次のようである。

田畑一筆限地引帳(抜粋)

一等

三百七十九番字□□

田六畝拾五歩

持主 堀九左衛門

此の収獲米 五斗三升式合五勺

地価 金八円八拾七銭

七等

六百六十七番字同所

田六畝拾九歩

持主 同 人

此の収獲米 老石四升五合

地価 金拾三円九拾三銭

一等

五百八十一番字家ぞへ

畑 七畝貳拾五歩

持主 征矢義三郎

此の収獲 大麦 七斗八升三合

大豆 八斗貳升三合

地価 拾四円拾銭

八等

七百五十番字妻干場

畑 老反五畝歩

持主 征矢義三郎

此の収獲 稗 米石四斗三升七合
地価 五円九拾九銭八厘

(塩ノ井大東文書)

このときに提出された地引帳に記載された土地代金(地価)は、従来の上、中、下の等級と全く異なっていたり、村によっては面積が地帳の面積にとらわれて実地の面積を出さず、あるいは代価(地価)が不当に安く評価されているとして、筑摩県は明治五年十一月「説諭書」を出し、実地反別を地押し丈量(測量)をして適當の代価を一筆ごとに明らかにするよう再調査を命じた。

県は再調査に当たり「地券目録」を作らせ、厳しい規約のもとで実地測量をさせている。塩ノ井耕地の「地券目録」からその実地調査の様子を見よう。

再調査は、検地廻村附属林所平の出張指導によって行われており、その係官の指導を受け、その内容について二月六日村方で相談した後七日より実地調査を行っている。村中の土地について一筆ごとの実地測量、正確を期するための下帳の読み合わせ、絵図面の作製、作徳米調査、土地代価(実価)の取り調べ、本帳作製等の作業が行なわれているが、これは大仕事であって二月七日より始めて八月末までの間に一二日、毎日数人の耕地内の主だった人たちが出て作業をしており、その延べ人数は五五〇人に達している。二五〇石程度の塩ノ井耕地でこれだけの延べ人数を要しているのだから、大きな耕地では一〇〇〇―二〇〇〇人の延べ人数を必要とする大調査であって、その経費も莫大なものであったと考えられる。

この調査において実価(地価)がどのように定められたか明らかでないが、当時地価の決定にはいろいろの考え方があった。第一は、売買価格による地価決定の方法であって、農民側の申告によるものと比

較的低い地価に抑えられていた。その第二は、入札による地価決定の方法であって、これは政府の考え方であったが実情にあわないうとして採用されなかった。第三は小作地方式といわれるものであり、地主への小作料をもとに地価を算定する方法で、筑摩県下はこの方法によって地価を算定しようとした。第四は自作地方式といわれるものであり、収獲量を基にして地価を算定する方法であった。地価決定にもこのようにいくつもの考え方があり、ほかにも多くの問題点があり、どの程度壬申地券が交付されたかどうか不明である。本村関係地域内ではまだ壬申地券が発見されておらず、交付されたかどうか不明である。

明治六年七月、地租改正条例が公布され、地租改正は新しい段階に入った。この条例は旧来の田や畑の買納の法を廃止し、すべての土地に地券を交付する。地券調査が済み次第、地価にしたがい地価の一〇〇分の三を地租と定めるという趣旨であった。



図6-7 明治10年発行地券(田畑中屋文書)

筑摩県は既に壬申地券のための地押し丈量を行なっており、地価算定の段階に入っていたので、新たな地租改正条例にも大きな動揺なく移行していった。筑摩県の地価算定の方針は小作地方式で、国家・地主・小作人の取り分は次のように考えていた。(『県政史第一巻』)

国の地租 二二・二％
地主取分 四〇・二％
小作取分 三七・六％
しかし、この筑摩県案は国家収入が少くないとして政府から認められず、廃案となり、検査例第二則による小作地方式の地価算定方式に変更している。その地価算定方式を史料によって示すと次のようである。

田畑等賦仕方書上解

第十七大区九小區伊那郡久保村

〇一等

一田畑反歩 但し壹坪に付き米七合五勺

取種米 式石式斗五升

内

米壹石壹斗式升五合 種肥手間代作徳作人分

米壹石壹斗式升五合 小作米にみなし

代金三円七拾五銭

内

金壹円拾貳銭五厘

金三拾七銭五厘

残而金貳円貳拾五銭

地価金三拾七円五拾銭

(二一〇等略)

〇畑一等

一畑 壹反歩

取種大麦 壹石

代金壹円

大豆 壹石五升

代金三円五拾銭

代金四円五拾銭

内

金貳円七拾銭

金壹円八拾銭

内

金五拾四銭

金拾八銭

残而金壹円八銭

地価金拾八円

(二一〇等略)

右の通りに御座候。

明治七年六月

明戸長 征矢定七郎

赤羽 城作

丸山 寛一

筑摩県権令 永山澤藏殿

(堀ノ井大東文書)

この地価算定方式を見ると、種肥及び作徳分(耕作者の得金)を田一等で取種高の五割、畑の一等では六割、田の二〇等で六割五分、畑の二〇等で六割を差し引き、残りを小作料と見なすことにしている。この小作料から地租分及び村費分を差引いた残額を土地所有者の利益と考え、この利益(利息)を六分利で生み出す元金を逆算し、求められた額を地価と見なすという小作地方式で地価を決定している。この種肥代及び作徳作人分五割六割五分を差し引くという方法は、地価を安くさせ農民にとっては有利な方法であった。しかしこの方法も、筑摩県は小作地が一般化していないという理由で認められず、最後は、検査例第一則による地価算定方式(自作地方式)に変更している。

この自作地方式においても、筑摩県においては割引率(取種高から

地目	田	畑	宅地
等	一 三 五 七 九 一一 一三 一五 一七 等	一 三 五 七 九 一一 一三 一五 一七 等	一 三 等
久保耕地区反金	四八円九六銭 四四、七〇 四〇、〇五 三五、五九 三一、一三 九等まで	二一四、五〇銭 一六、一五 七、一〇 五、六〇 三、六〇 九等まで	三〇四、〇〇銭 二六、〇〇 四等まで
大泉耕地区反金	三二四、〇〇銭 三〇、〇〇 二八、〇〇 六等まで	一七四、〇〇銭 一四、〇〇 七、〇〇 三、五〇 八等まで	二九四、九〇銭 一九、一四 三等まで
北殿耕地区反金	四八円六三銭 四四、二八 四一、一一 二九、五〇 二七、五〇 九等まで	一五四、〇〇銭 八、〇五七 四、九五八 三、二九 七等まで	四〇四、〇三銭五 二六、七〇 四等まで
南殿耕地区反金	四三円三〇銭 四〇、〇〇 三九、一〇 三七、七〇 三六、八〇 三五、二〇 三四、〇七 三二、七一 三一、五〇	一五四、三一銭 一一、七一二 七、二〇七 四、七九五 二、七九八 九等まで	平等 二八四、〇〇銭
田畑耕地区反金	四二円一一銭 四〇、〇一 三七、九〇 三三、七九 三三、六九 三二、四八 二七、六七 二三、六九 一五等まで	一七四、五〇銭 一四、五〇 一二、九〇 六、〇〇 五、〇〇 一〇等まで	二九四、五三銭 二三、六六 三等まで
神子楽耕地区反金	四七円一七銭 三九、四九 三一、七九 前川原分 一、三七、〇〇 三、三一、〇〇 五、二三、〇〇 外 二一、〇〇	二二四、九二銭 一九、九二 一五、九二 原畑分 一、六、三七 三、四、五五二	二九四、九六銭 二三、九五 四等まで

表6—6 南箕輪村田・畑・空地の確保と反金（一反当たりの地価）

種肥代等を「引く率」に独自の「田畑割引法」を示したが政府の認めるところとならず、検査例第一則とおりの強制適用ということになったようである。その第一則の基本は次のようであつた。

- 1 算定米価は石当たり三円五九銭を中心とする統一物価を採用する。
- 2 種肥代は收穫物の一五%を差引く
- 3 利率は六%とする

これは、土地の等級を定め、その等級に基づいた收穫量を面積に乘じてその土地の收穫量を計算し、それから種肥代として一五%を差し引き、残りの金額を利子率六% (0.06) で除して得た金額を地価

- 1 算定米価は右当たり三円五九銭を中心とする統一物価を採用する
- 2 種肥代は收穫物の一五%を差引く
- 3 利率は六%とする

にするという方法である。これは、筑摩県の小作地方式の種肥代および作徳分として五〇・六五%を差し引く案に比べて、格段に高い地価になることは当然であつて、この種肥代一五%という点について、これを受け入れ難いものとして、村々総代連署の地租改正についての建議が行なわれている。

用することは不合理であつて、

當地のような瘠地の農民は生活が苦しくなり土地は荒れてしまふ。これでは御趣意が徹底しない。また収獲高によつて地価を決定するには種肥代を五〇%以上に見積もらねば不足がはなはだしい。これはすべての基礎になることであり、國家保護に

しかし、このような一七大区

上げての建議にもかかわらず、この要望は取り上げられず政府方針が強行された。この地租改正によって定められた各部落の土地の等級、およびそれに応じた地価は表6-6のようである。

地価決定に当たっては、江戸時代の村（明治初期の村）ごとに独自の方法で行なわれた。したがって、新しく定められた土地の等級は耕地によってかなりの差があったことは表6-6のとおりである。例えば水田の等級は久保耕地は一等から九等までの九段階、南殿は一等から一七等までの一七段階であり、同じ一等でも久保の反当地価が四八四九六銭に対し、田畑のそれは四二四一一銭、大泉は三二四一一銭というように大きな差があったのである。この点が後の地価修正に当たって大きな問題点になったのである。

三 山林原野の地租改正

山林原野の地租改正は田や畑の地租改正に続いて行なわれたが、入会地についての地租改正は官民有区分の決定という重要な問題を含んでいた。しかし、官民有区分の決定については「第五章、山野と村の生活」に譲り、ここでは山林原野の改め出しと地価の決定について、それがどのように行なわれたかを見よう。

入会地の地租改正に際し、明治八年十一月一日に筑摩県参事あてに報告した入会地の「入会村々出会取調」という資料がある。その一部を左に掲げる。

△宇大栗原

一、原野 反別三百貳拾六町七反九畝廿歩

地価貳百貳拾八圓七拾銭 但し老町に付き金七拾銭

右入会 餘地元 南宮輪村全、西宮輪の内大泉新田・大置・上戸・中

条・与地

（中略）

△宇大栗原

一、山 反別八百六拾四町歩 地元大泉

地価貳百貳拾六圓 但し老町に付き廿五銭

右入会 南宮輪村全、西宮輪の内大泉新田・大置・吹上・中曾根・羽

広・中宮輪の内富田

（中略）

右は今般山林原野民有に編入仰せ渡され、入会村々立会い取り調べ地元これ有り候分、又餘地元入会の分仕分け、反別地価相付け差し上げ奉り候是相違御座無候

明治八年十一月十三日

第十七大区

中宮輪村副戸長 西宮輪村副戸長

南宮輪村副戸長 伊那村副戸長

第十六大区

伊那村副戸長

筑摩県参事高木惟矩殿

（横ノ井大東文書）

これによると、入会村々出合いによって取調べを行ない面積と地価を算定して、入会村名を列記して報告している。面積をどのようにして決定したかは不明であるが、江戸時代の面積の数倍の広さになっている。それまでの入会地の面積は、宝暦七年（一七五七）初めて山手、野手を課されるようになった時農民側から申告した面積で、過小に見積もられていたが、今回の地租改正では所有権の確認ということがあったためであろう、実地につき取調べが行なわれたのかかなり正確な面積が報告されている。したがって改め出し率は極めて大きい。この面積が、後の入会地分割に際しての実地測量による面積算出まで入会地面積の基礎になっている。

また、地価については、林野は一町歩当たり七〇銭、薪山は一町歩につき四〇銭・三〇銭・二〇銭の三段階に分けて算出し報告している。しかし、この報告に対し国や県から地価が低いということで認められず、再三増額が要求されている。この地価増額の要求に対して、第一七大区九か村は次のような地価軽減についての上申書を提出している。

上申書

当大区内山林原野地価ノ概、過日總代ノ者親リ出舞説諭ニ基ツキ精々尽力、見込ミ相附シ候モ、未ダ低額ノ趣ヲ以テ今一層増額ヲ致ス旨仰セ聞カサレ、出果ニ於テ御請ケ仕リ難ク婦村ノ上集議ヲ遂ケ候處、先般總代ノ者上申見込ミノ金額ニテモ人民恐怖仕リ此ノ上御見込ミノ金額ハ到底分限ノ日達立子難ク三(中略)方今地租改正実地反別相改メ先般見込ミヲ附シ候額ヲ以テ旧租ニ比較計算スレバ十倍余ノ税額、且ツ別紙収獲ヲ以テ算スト雖モ過分ノ高価ニテ困却仕リ、此ノ上増加分賦税金等指圖エ形ノ出果仕リ候間前条ノ次第御減額成シ下サレ御仁澤ヲ以テ過日總代ノ者見込ミ相立テ候、金員ニテ御用済ミ成シ下シ置カレ度ク此ノ度願イ上テ奉リ候 以上

明治九年七月十三日 右大区内東筑輪人民總代

以下八か村總代署名

(堀ノ井大東文書)

これらの上申にもかかわらず、山林地価はさらに増額して申告しなければならなくなったようで、その時決定した地価は明治八年の取調べ報告の一・五・四・四倍程度の高い地価になっている。その地価の一部を比較対照して示すと次のようである。

入会地名	面 積	明治八年申告地価	決定地価
大泉所山	八六四町	二一六四〇〇銭	三八〇四一六銭
北沢山	一七二八町	五一八四四〇銭	七七三三七四銭
御射山	二二五町	五〇〇〇〇銭	二一八四七〇銭

大芝原 三二六町七九 二二八四〇〇銭 三四〇四〇三銭

注 大芝原の決定地価は分割後の南筑輪分よりの推計による。

こうして、入会地の地価はこの新決定地価によることになり、明治十一年「山林原野改租決定通知書」が次のようになっている。

中筑輪村 南筑輪村 村々正副戸長御中
西筑輪村 伊那村 南第十七大区

山野改租ニ付キ通般各大区編リ申シ立テノ地価町当タリヲ以テ新税施行ノ儀、其ノ際ニ應儀ノ上聞キ届ケ候条、明治九年ヨリ旧租相施シ規則ノ通り収税致ス可キ義ト相心得各村々へ通知ニ及ブ可ク此ノ段相達シ候事、

明治十一年十二月十八日

長野県令 増崎寛直印

(役場文書)

四 地租改正による「改め出し」と増税

地租改正が、地価を決定し、その地価に対して課税をするということのほかに、地券を交付することによって個々の農民に土地所有の権利を保障することであったから、そこに記載される土地面積は将来にわたって問題の起こらぬように、実地に即した正確な面積を記載しておこうという心理が手伝って、政府の増税の方針に沿った土地面積の改め出し(土地改め)によって面積が増すことが行なわれた。こうして地租改正前後の土地面積には大きな差が出てきているが、その状況は表6-7のとおりである。

筑摩県の田の改め出し率一四％は全国最高であるといわれるが、南筑輪村の畑の八二・四％もかなり高い改め出し率である。

また、旧入会地の改め出し率はさきに見たように一八・一八六四％と非常に高い。

表6-7 地租改正による改め出し状況

地 目	筑 摩 県	南 箕 輪 村
田 旧 反 別	15,932.85	106.39
田 新 反 別	34,127.45	152.91
田 改め出し反別	18,194.60	46.52
田 改め出し率	114.2%	43.7%
畑 旧 反 別	22,909.35	265.92
畑 新 反 別	31,342.61	468.04
宅地改め出し反別	4,682.96	16.60
総改め出し反別	13,116.22	33.51
改め出し率	57.25%	219.03
備 考	・県政史及び上伊那町村誌より作成 ・歩以下切捨て	

このように、改め出しによって面積が大幅に増大し、地価も農民の希望に反して高い価格に決定したので、地価の一〇〇分の三という税率による地租は、明治新政府に寄せた農民の期待を裏切って、その負担は軽減されるどころか、むしろ増徴されることさえ多かったのである。

地租改正検査例における国・地主・耕作者の取前を例示したものが表6-8である。収穫高の三四%が税として徴収されることが見込まれており、政府の考え方が税の軽減ではなく、いかにして新政に必要な財源を確保するか、という立場から地租改正が進められたといわれるとおりであって、全く江戸時代の重い貢租の継承で、それが完全な金納となり、凶年でも減免がなくなったという点では農民にとっては一層きびしいものになったともいえよう。

表6-8 地租改正検査例・地主・小作の取前（反当）

	貨幣表示	石高表示	割 合
地租及び村入費	1,632	0,544	34%
地主取前	1,632	0,544	34
小作取前	0,816	0,272	17
種 配 代	0,720	0,240	15
計	4,800	1,600	100

さらに新旧税額を比較したものが表6-9である。筑摩県（信濃部分のみ）について田租をみると、収穫高一石について租米は旧地租の場合四・八三二斗に対し、新地租では二・四三八五斗とほぼ半減しているが、改め出しが多いため旧地租九万七七八一石に対し新地租金を米に換算すると一万二三四九石となり、二一%の増徴となる。畑については二二%の増徴の計算になる。南箕輪村の場合は明治七年の旧租の総計が四一八一円余で同八年の新租の総計が三二四七円と二二%の減税になっている。これは、南箕輪の場合田の改め出し率が小さかったことによるものと考えられる。

この段階においては、山林原野の地租改正はまだ終了しておらず旧租のままであるが、さきに述べたように明治一年の地租改正によって入会山野の地租は激増した。増租の状態を入会山野の一部について例を上げると次のようである。

入会地名	江戸時代 (宝暦八 年以後)	明治九年分 (地価の 百分の三)	明治十年分 (地価の 百分の五)
北沢山	米六斗	二三四二錢二毛 (米換算七斗七合 三升七合)	一九四三錢四毛五毛 (米換算五斗六合 八升九合)
大泉所山	〃四斗五升	一四四〇四〇 (〃三石八〇一六)	九四五〇三 (〃二石七九四)
御射山	〃二斗一升	六四五四 (〃二石一八)	五四六七五 (〃一石六六九)
大芝原	〃五斗四升	一〇二〇〇九 (〃三石四〇〇三)	八四五〇七 (〃二石五〇〇)

明治九年の入会山林原野の地租は、明治十一年に地租改正終了によりさかのぼって徴収されているが当時の米価で租税金を米の石数に換算してみると、先に掲げた山林原野の地価軽減要求の上申書の指摘したように、六・一三三倍の高い地租を納入せざるを得なくなっており、

表6-9 民有地第一種税高新旧比較

南箕輪全体税額（上伊那町村誌より）			筑摩県全体税額（県政史一巻より）		
明治 7年 (旧租)	地 租 (米)	819石248升2合9勺	田	旧 地 租 (米)	91,781石144升1合
	同 上 代 価	4,051円66銭5厘		收穫1石に付き	448升3合2勺
	雑 税	96,181		新 地 租 (金)	400,138円60銭1厘
	賦 税	33,57		米に換算して	112,349石540升3合
	總 計	4,181,41.6		收穫1石に付き	244升3合8勺5
明治 8年 (新租)	國 税 金	3,201,円81銭	畑	旧 地 租 (大豆)	34,146石247升7合
	地 租	3,063,76		收穫1石に付き	248升2合1勺7
	雑 税	138,47		新 地 租 (金)	158円57銭5厘
	県 税	45,40		大豆に換算して	46,703石149升9合
	總 計	3,247,21		收穫1石に付き	244升3合3勺9
				差 引 増	8,557石341升8合

これによって村全体の租税額は増加した。

明治一〇年になって、農民の強い減租要求により地租は地価の一〇分の三から一〇分の二・五に引き下げられ、また米価の上昇によって農民の負担は軽減されたが、初期のうち国家財政収入の三分の二以上を地租という形で農民が負担をしていた。当時まだ商工業の発達が極めて不十分で他に財政収入のあてのなかった状況下とはいえ江戸時代とあまり変わらない重税であった。

五 地租軽減運動と地価修正

地租が封建的貢租とほとんど変わらないか、むしろ増税となっていくところから、各地で早くから地租軽減運動が行なわれている。政府は明治一〇年一二月税率を地価の一〇分の三から一〇分の二・五に下げたことは既にみたが、地価決定に際しての過大評価や不公平な評価に対する修正要求に対して、一三年五月特別地価修正の布告をした。これに力を得て、同年七月上・下伊那の戸長たちは連署して地価修正の嘆願をした。

南箕輪村においては、県令第六十九号による地価修正の下達に基づいて、明治二二・三三年に地価低減の修正が行なわれている。しかし、その低減の方法をめぐって村内に大きな対立が生まれたことを資料によって知ることができる。その対立における一方の主張は、明治八年の地価の決定は旧村（林地）ごとに行なわれたため、耕地によって著しく等級及び地価に差があるので、この際、村内が平等になるように修正しようというものであり、他方は、明治八年の地価決定は地味、利便等充分に考慮したうえで至当公平に評価決定したものであるから、現在の等級、地価を基準に平等に減価修正すべきであるというのであった。村は多くの地価評定人を選定して地価の減価修正にあたったわ

けであるが、両派の意見の対立は解けず評定人も両派にわかれて対立し、遂に後者の意見の評定人は辞任してしまった。そこで、前者の意見の評定人によって地価修正案が作られ、伺い書として県知事に提出され、その修正案が認可されてしまった。これに對し地主の多くが反対派として評定人のやり方をなじり、また知事の認可取り消しの請求をしている。このように村を二分して対立したことは村内融和のためには不幸なことであつた。その結果は明確でないが県知事の認可取り消しは行なわれなかつたようで、前者の意見に基づいた減価修正になつたものと考えられる。

明治一八年地価の永久据え置きが決定されているが、その後このように地価修正が行なわれるなど、当時の農民にとって地価は重大な関心事であつた。しかしその後の物価の上昇に伴つて地価は相対的に低下し、税の中の地租の比重はしだいに軽くなつてきた。しかし、農村における税のうちその中心が地租であることは昭和の時代まで続いている。

六 地租改正とその後の農民

地券交付を伴う地租改正は、農民の土地所有を封建的な諸制約から解放して近代的な私的所有として確立し、農民の自由な土地利用の条件を作り出した。しかし、すでに江戸時代に形成されていた商人・高利貸・豪農等のいわゆる地主的土地所有関係はそのまま認められ、直接の耕作農民ではなく地主的所有者に地券が交付されたので、地主と小作農民との間には高率現物小作料の取扱いにみられる封建的隷屬関係が新しい時代にもそのまま持ち込まれてしまった。さらに、地租の重い負担と地租金納化によって商品経済に不馴れなままに引き込まれることになり、しだいに高利貸や商人等にむしばまれて貧困化する者

が多く、自作農民の多くが自分の土地を賣入れし、あるいは売却して土地を手離すことになり、地主的土地所有の支配下に編成されていくことになつたのである。

第四節 村の行財政・金融

一 村の行政

〔明治前期の村政〕

1 尾州藩取所管下へ

(1) 預所から天朝領へ

慶応三年一〇月一四日、徳川慶喜は大政を奉還し、同年一二月九日王政復古の大号令によって、江戸幕府に替わって明治新政府が誕生した。そして翌慶応四年三月一四日には五か条の御誓文が宣布され、七月一七日には江戸が東京と改められ、九月八日には慶応が明治と改められて、新しい時代は着々と展開されていった。

そのころ村の地域は、二つに分かれて統治されていた。旗本の太田領が久保（塩ノ井を含む）と北殿の一部と南殿の大部分であり、大泉、田畑、神子柴と北殿の大部分と南殿の一部は、松本藩預かりの幕府領であった。この二つが新しい時代の波をかぶって次のような変遷をたどることになった。

まず、慶応四年一月一〇日に、旧幕府直轄地没収の布告がだされた。

是迄徳川支配いたし候を天朝と稱し居り候は言語道断の儀に候。此の度往古の如く總て天朝の御料に復し真の天朝に相成り候間左様心得べく候

〔長野県史〕

つまり、従来の天領は徳川氏個人のものでまやかしのものであったが、明治御一新のこれから天朝のまことの天領に復すというのである。前記の松本藩預所であった大泉村等は天朝の真の天領となり、尾州藩取所へ当分預けられたのである。当時尾州藩取所は本曾の上松

にあったが二月末に本山に移り、さらに三月初めには塩尻の本福寺に移って政務をとっていた。

松本藩主戸田光則に対する申渡書

是れ迄其の藩に預り居り候旧幕府天朝御領と相成り候に付き当分の内尾州藩へ御預けに相成り候。其の旨相心得書類等取揃え不都合之なき様早々引渡し申すべく候

慶応四年二月二三日

總督府執事

戸田光則殿

この申渡書に対し、藩主からは次のような返答が出されている。

今度御命の趣あらせられ候に付き、是迄御預かり旧幕府領五万四千六百石余村數百四十三か村尾張殿へ御渡し申す処件の如し

慶応四年二月二十三日

戸田丹波守

議定尾張大納言殿御内

遠山彦四郎殿

〔長野県史〕

このように幕府の天領であった松本藩預りの村々は、しごく平和のうち、天朝の天領となり尾州藩に預けられた。

(2) 一か月遅れた太田領

ところが、旗本知行所であった太田領は同時に尾州藩お預けにならず一か月遅れた。このたった一か月遅れが予見できなかったために、次のように、とんだ事件をおこしてしまった。太田領であった村々は、図6-8のように尾州藩預けばかりでなく伊那県のとくもおくれた。

松本藩預所であった大泉村、田畑村、神子柴村は村ごとだったので問題はなかったが、北殿と南殿には松本藩預所の幕府領と、旗本領であった太田領が混在していた。慶応四年二月二三日現在で天朝領になったと、お隣りで喜ぶのに、自分たちは相変わらず太田領である。

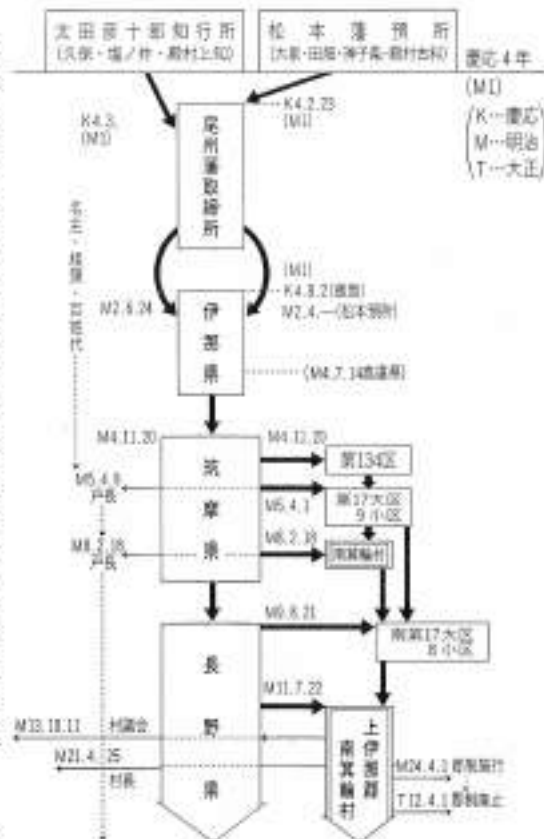


図8-8 明治初年の南寛輪の管轄変遷

上総御林屋

御役所

(井田文書)

かねてから太田領と幕府領の間にはかなりのちがいがあった。多年太田氏の苛政に苦しんできた箕輪五〇〇石八か村は、長文の嘆願書をだして、天朝の御領にしてほしいと運動をおこした。とくに同じ村の中が二分されていた南殿村は次のような嘆願書をしたためて、いちはやく訴えようとした。

恐れながら書付けを以て願ひ上げ奉り候

信州伊豆郡南殿村年寄文蔵同試二申し上げ奉り候。

何卒一村一手に御天領仰せ付けられ永く安堵に相続相成り候様。小前一同編纂に願ひ上げ奉り候。

慶応四年二月

尾州御預所信州伊豆郡南殿村

小前役人惣代 年寄 文蔵

太田榮之丞知行所同郡同村

小前役人惣代 年寄 試二

ある。その結果転落してしまふばかりの百姓がでてきている」と村の実状を訴えて、どうか村を二分しないで一手になるよう御天領尾州様御預所にならせてほしいと嘆願しているのである。

(3) 越訴事件

南殿村の役人は、これを木曾上松の飯陣屋へもって行って出訴に及んだ。しかし、この必死の嘆願は聞き入れられなかった。やむなく村の途についた。

たまたまその途中で、松島北割の一行と出会った。松島村も南殿村と同じ統治事情だった。松島村の一行も二月から騒ぎだてて強訴をたくらんで大勢で、小野村まで押しだしていたが、松島村の村役人が追っかけてきて、ようやくなだめて強訴をとり止めたところであった。

ところが、南殿村の出訴者と出会って、騒ぎは再燃してしまい、結局東山道総督府の役所へ願書をもって訴え出たが、これは取り上げら

れなかったもので、本山宿の尾州藩取締所へ強訴した。しかし、何の沙汰もなかった。強訴の衆は一時は非常に多かったが、だんだん沈静して少なくなっていたので、それでは松島北割を独立の村にさせてほしいと嘆願の主旨を変えて訴えたが、これも音なしだった。

結局この事件は、明治御一新に名をかり、御布告の趣を口実とした一味の策謀だとして、首謀者が処罰される結果となってしまった。その入牢人の赦免願が出ている。それによると、入牢させられたのは、南殿村年寄の鉄次と全八郎、及び松島村の年寄利助の三人であった。上知・古料と二分されて統治され、幕府領になったり私領（旗本領）となったりした村々の切なる願い、一村一手になりたいという念願は、明治御一新により、一挙に解決できると信じて行動したことは、やむをえない動きであった。

恐れながら書付けを以て嘆願し奉り候。

当御料所上古田村年寄青兵衛外五人申し上げ奉り候。太田榮之丞様御知行所北松島村年寄利助、南殿村同鉄次、同全八郎儀御地頭より御咎め仰せ付けられ御詮議中に当たり入牢仰せ付けられ……同人共儀素より虚勢の性質に御座候間、此の上殿刑仰せ付けられ候わば絶命に及ぶべきと地親共始め妻子の歎き見るに忍びず、近隣の者一同表裏難儀に在り、恐れをも願ひみず悲訴し奉り候。何卒、格別の御慈悲を以て御布告の趣旁々御諒察を以て御咎め御赦免成し下しおかれ候様、懇願一同惣代を以て此段幾重にも嘆願し奉り候以上

明治二己年二月

鉄次、全八郎地頭

南殿村 年寄 文蔵郎

同 親類

年寄 兵右衛門郎

同

北殿村

元藏郎

同 親類

元藏郎

伊那県御役所

上古田村 年寄 喜兵衛郎
(ほか二名略)

(箕輪町図書蔵)

この願書は病気で入牢むりということで受け入れられて、翌明治二年五月二十四日に願ひ下げになった。

五月二十四日 太田彦十郎知行所松島村などの六か村の昨年の越訴事件、願ひ下げ落着す。

(伊那県日記)

この村人の切なる願ひの運動は、このように多くの村人の共感と同情によって解決した。しかし、当時の文書すなわち、『太田知行所強訴一件上申書』によると強訴事件とされ、『小知の遊民悲願を憐憫せし始末書』(箕輪町原太郎蔵)では遊民とまでいわれて、入牢という結果になった。御一新に夢みた新しい時代への期待から、長年にわたる村の二分統治の弊を一挙に解決しようとした行動が多少行きすぎがあったとしても、それはやむをえないことではなかったか。むしろ入牢させられた惣代たちに『夜明け前』の主人公平蔵のなげきを見ることが出来る。

前述のように、慶応四年の二月二三日に尾州藩御預りとなった旧幕領に就いて、同年三月には太田領も同じく尾州藩御預りとなったので、嘆願の実はずに実現していた。大変革時にはこうした悲劇はとかくおこりやすいものであろう。

2 伊那県管下へ

(1) 伊那県の成立

幕府を倒した明治新政府の地方統治は、まず旧幕府領と幕府側についた諸藩の領地を没収して、県(府)をつくることから始められ

い、飯庁舎に移っていた。それでも一揆はつるばかりで、明治四年三月、中野をさけて善光寺町（長野市）へ移庁した。そこで県名も「長野県」と改称したが、この旧長野県は農民一揆の落し子として生まれたのであった。

明治四年六月二十四日に、伊那県に戸籍区がおかれた。全体で一七四町村を、三三三に区切つて統治しようとしたのである。従来の五十六か村を一区としたのである。この時に名主が「戸長」となり、組頭、百姓代は「副戸長」となり、戸籍に関する事務が取扱われた。その区内の戸数や生死出入り等の戸籍事務（壬午戸籍）がとりあえず取り扱われ、一般行政事務はまだ取扱われなかった。

こうした時代にはえてして、お先真暗なため思わぬ事件がおこったり、またゆきすぎもあるものである。「伊那県村役人入札法」の回状でもみられるように、村の三役を入札の場合にも、何でもこれまで役を勤めたものは一切だめと勘がいくすもの、旧例にのりかたまった者などがいたので回状が出た。つまり人材登用ということ、村を治めるに一番よい人を選ぶこと、ということがすなおに行われにくかったのである。そこで入札（選挙）の方法を、そのように指示したのである。（記名投票ということもいまでは珍しい）

伊那県時代は僅かに三年三か月という短い期間であったが、明治御一新の草創期で、大きな期待とまた失望の渦まく時であった。中でも生糸の輸出が始まったこと、飯島に伊那県学校が開校され、高遠の進徳館が高遠県学校と改称され、郷学校創設に関する布告がで、また麻薩置県の詔書が下つたりもした。どれ一つをとっても御一新の名にふさわしいものであった。しかし、一方で先にのべたように洪水や凶作になやまされた。維新への期待と、現実の混迷が錯雑している時代であった。

3 筑摩県管下へ

(1) 筑摩県の成立と戸長・副戸長制

明治四年七月一日、麻薩置県が断行された。いまままで主君と仰いできた藩主を廢するということは並大抵のことではなかった。諸藩は、例えば高遠藩が高遠県となったように、そのまま県となった。信州では藩から県になったのが一二県で、それに伊那県、長野県を加えて一四県となった。

しかし、これでは県の数が多く錯雑して行政上の不便が多かった。十一月には全国の県を改稱統合して、三府七二県にした。信州では東北信全体を長野県とし、中南信全体に飛騨を合わせて「筑摩県」として二県になった。時に明治四年十一月二〇日のことである。

筑摩県は松本に県庁をおき、東京、高山に出張所、福島、真島、高遠に取締所を設けた。権令には前伊那県大参事の永山盛輝（目黒兒島藩士）が任命され、教育権令といわれるほど積極的な行政を推し進めた。明治八年十一月永山権令は新潟県へ転出し、後任は参事高木惟矩（旧福井藩士）であった。

筑摩県は管内を一九九区に区分して（信州だけで一八〇区）新しい区、（改正戸籍区）を設け、当地域は第一三四区となった。

第一三四区

大泉村

久保村

同村内堀ノ井

北殿村

南殿村

田畑村

神子集村

『長野県市町村合併誌』

明治五年二月、たまたま第一三四区となった前記の村々が、後の南箕輪村になった。こうして江戸時代の「ムラ」の時代は終わって、一般行政事務は、この一三四区の区単位で事務を取扱うようになった。

明治五 申年

名主 有賀全八郎

組頭 有賀 清造

百姓代 山崎 清七

同年八月二〇日村吏御改正二付々古料庭セラレノヨリ合併ト相成ル

副戸長 清水 清

同 有賀全八郎

〔太田館文書〕

これは南殿村の例であるが、明治五年の中途の八月に村の三役が交替し、役名も名主組頭百姓代から戸長副戸長になったことが、うかがえる。この時の第一三四区では戸長が神子柴村の加藤孫十郎であって、他の村は副戸長だけであった。

なおここで特筆したいことは、元禄一二年（二六九）以来一七〇余年間、南殿村内は、上知（康本領）と古料（幕府領）とに分治されてきたが、ようやく一村になることとなった。その喜びが、「合併と相成る」と記されている。この村内分治は何かとトラブルのもとであり、結構な関係に難渋苦渋してきたわけであるが、その解消した明治五年八月二〇日は記念すべき日であった。

(2) 大区小区制

「筑摩県第一三四区」と県から直ちに区では、これではなお行政上の不便が多いので、この中間的な組織が必要となった。そこで、明治五年一〇月一〇日に、大蔵省布達一四六号をもって、県一區が、県一

大区一小区の地方行政体制になった。筑摩県では、県内を三〇大区一九九小区とし、大区に区長一名、小区に戸長一名、各村（部落）に副戸長二三名をおいた。これらはいずれも官選であった。

「筑摩県第一七九小区」（明治九年二月以降八小区）これが当村の第一三四区の改称であった。この奇妙な数字による呼び名をわが村と呼ぶことは、なじまない。江戸時代を通じて親しんできた行政単位は村であり、村名はその地のほりであった。その行政単位を一度に廃して新しく番号による組織がえをしたのである。また旧来の名主等による慣習を一切破棄して、面目を一新しようとして多くの名主を副戸長と呼ばせようとした。このへんに、中央集権的な短兵急さがみえる。

この時、第一七九大区の区長は、松島村戸長の日野香々彦であり、第九小区の「戸長事務取扱所」は北殿に設けられた。戸長副戸長は次のようであった。

戸長	神子柴村	加藤孫十郎	同	倉田 三郎
副戸長	田畑村	日戸伝四郎	同	堀ノ井村 征矢定七郎
同	南殿村	有賀全八郎	同	大泉村 原 新吾
同	北殿村	有賀又七郎		

〔堀ノ井大東文書〕

久保の副戸長が記されていないが、久保は第八小区に属していた。

なお、大区小区制もときどき手直しをしたらしく、『長野県史近代資料編』では第九小区であるが、『長野県市町村合併誌』では第八小区となっている。村内の資料でもまちまちであるが、明治九年一月までは第九小区で、二月以降は第八小区となっている。

この戸長、副戸長は官選であったので、従来の名主組頭と大きく違っていた。江戸時代を通じて長い間親しまれてきた名主組頭は、領主

に代わって村民を直接支配し村をめぐりに統治した幕藩体制下の末端行政官でもあったが、反面村民の側に立つ村民の代表であり、村民の生活万般のよりどころでもあった。いわば半官半民であった。

ところが、この戸長副戸長は官選で、一方的に明治政府の官吏でなければならなかった。明治六年三月、筑摩県の「区長事務章程」によつて、区長(大区)の権限を縮小して戸長、副戸長に重きをおくようになった。特に新政府の布告の徹底には、村役人は毎月二回、村民を集めて文書を読んで聞かせ、「御布告聴聞印帳」に印を押させている。戸長の職務内容は、戸籍・租税徴収・小学校の設置・徴兵調査など国家行政事務がほとんどであつて、自治体とはほど遠いものであつた。

いままでも名主のもとに一つの行政単位であつた「村」は、この時点で行政単位でなくなった。戸長の身分は最初には一般人民のままであつたが、明治七年三月から正副戸長とも官選になり、待遇も官吏に準ずるものとなった。すなわち、戸長が等外五等、副戸長が等外六等を仰せつかった。しかし、給与は官給であるはずであるのに、村の負担とされていた。

(3) 南箕輪村の誕生

筑摩県はこの一小区を一村にする目途で合併をすすめた。古い村々には人情・風俗のちがいが生産構造のちがいがあつて、合併は「水と油を同器にした」と評される無理があつた。しかし、その困難をおして一小区一村の原則が貫かれて合併が実施された。明治七年一月から翌明治八年二月にかけて、多くの町村が足早に成立した。旧村(町)の、九八四村が一七一町村(七%)に整理統合された。

我が南箕輪村も明治八年二月一八日に、久保村・大泉村・北殿村・南殿村・田畑村・神子柴村の六か村が合併して誕生した。

村落合併二付キ

明治八年二月北殿へ事務移所ヲ致ケ各耕地ヨリ諸藩村ヲ集合シ南箕輪村ト移ス

久保	副戸長	丸山 寛一	赤羽 誠作	征矢 定一
大泉	〃	清水 宇宅	原 新五	出羽沢善八
北殿	〃	倉田 十郎	同 三郎	有賀又七郎
南殿	〃	有賀 誠二		
田畑	〃	松沢源一郎	松沢源五郎	
神子柴	副戸長	高木 省三	有賀 一平	加藤孫十郎

(大衆館文書)

この合併により、南箕輪村の行政は各村落をはなれて「事務移所」で取扱われた。それは諸藩村を集めて、実際には五月から、官選の戸長副戸長ではじめられた。

明治八年五月ヨリ官制ヲ以テ

戸長	高木 省三
副戸長	有賀 誠二
〃	清水平一郎
〃	有賀 光彦
〃	倉田 三郎
〃	原 新五

(大衆館文書)

4 長野県管下へ

(1) 長野県庁の成立と移行分県運動

明治九年六月一九日夜、庁内から出た火で筑摩県庁は全焼し、飯庁舎を開庁においていた。この火災については当時から北信側の放火説

がもっぱら風評として流れていたが、今日では史料によって北信側のしかも上田に県庁を望む上田士族たちの親行であったことが確かめられている。『長野県政史』この火災を契機に筑摩県は、同年八月二日長野県に合併吸収されることを強行されてしまった。そのとき筑摩県の高山支庁管下である飛騨は岐阜県に分けられて、信濃一円を長野県とする今日の「長野県」となった。

長野県と筑摩県の統合に反対する運動はこの時相当盛んに行なわれたが、ついに筑摩県は廃止されてしまった。両県の並立時代は、わずかに四年九か月に過ぎなかった。新長野県の県庁は長野市（長野市）にある旧長野県の庁舎を用いた。

この長野市は南北を合わせた長野県の県庁所在地としては、あまりにも北に偏していたために、移庁論や分県論がことあるごとにもえあがった。明治九年の合併のときは松本と飯田に支庁をおくことで一応はおさまった。明治一〇年一月と翌年三月の二度にわたった、上田への移庁論は、内務省から認可されなかった。

明治一三年県会において移庁議案が提出され、県庁を県の中央、松本へ置くことが提案された。この時は南信側の議員の熱意にもかかわらず、北信議員のボーコット戦術にあって流されてしまった。この時から南北が相対視する状況はしだいにはげしくなっていた。明治一四年にも移庁の件を提案したが、またもや失敗に終わってしまった。

移庁論がいつも敗北に終わったので、今度は分県論が台頭した。明治一五年七月、県会議員の村上伝吾郎（上伊那郡）らを中心として分県運動が進められた。時の大野県令に分県を迫り、分県請願書を内務省に、その建白書を元老院に提出したが、いずれも許されなかった。明治一八年には、廃止されていた鳥取・徳島・福井・富山などの県が復活した。この機をのがしてはと、小里頼水（松本）らを中心に分県

運動が再燃した。

それは筑摩県再置の運動で、一二月松本に六〇〇余名が集まって分県の請願運動を激しく行なった。小里頼水・松尾千坂（下伊那）ら県会議員が総代となって上京し各方面に運動を展開した。明治二二年九月から翌年の八月まで、二人は東京に滞在して陳情をつづけた。その結果、明治二三年四月の元老院会議で四六名中三八名の多数をもって、分県論が可決してしまった。

この間北信側の非分県派も上京して反対運動を展開したので、明治二三年七月、内務省は分県論を拒絶してしまった。在京の木下尚江なども大同団結運動を展開し分県論を批判した。

分県論が葬り去られると、それは一転して移庁論になった。明治二三年一月、移庁議案を南信側議員が提出した。この時の勢力は、北信側二四対南信側二一の議員数であったので、事前の抱き込み政策があり一応成立するかにみえたが、それが事前にばれて逆襲され、ごたごたの末結局南信側が敗れてしまった。それから後もこの運動はあつたが、松本警務署襲撃事件がぼつ発したりした。こうして、明治二一年から二四年に及ぶ執拗な移庁分県運動は、いつも失敗に終わってしまった。

その後も、県庁の位置は北に偏していて南信側の不便がひどすぎるため、失敗しても失敗しても、移庁運動や分県運動は燃えあがった。そのおもなものをあげれば次のとおりである。中央自動車道長野線でも全通すれば、こんな南北信の抗争は終るのであろうか。

明治二三年 分県運動

明治三八・三九年 移庁運動

明治四一年 移庁論

昭和八年 移庁論

昭和三年

分県論

昭和三年

移庁論

移庁分県運動は単にその運動だけにとどまらず、遷都請願運動、松本五〇連隊、松本高等学校、新産都市指定など派生的なバランス問題をひきおこしている。長野県における南北信の対立的闘争の発火点はいつもこの県庁の位置から生じている。果たして大同団結の日はいつのことになるのだろうか。

(2) 三新法と上伊那郡の誕生

長野県の成立によって、私たちの村は次のように、南がつけられて呼ばれるようになった。

「長野県南第一七六八八小区 南箕輪村」

明治一一年七月二二日、「郡区町村編成法」が定まり府県会規則と地方税規則と合わせて、三新法と呼ばれる新しい時代を迎えた。

明治になって約一〇年余の統治の経験と、相次ぐ農民一揆や自由民権運動、西南戦争等の土族の反乱等から、政府は地方の政治に大きな見直しをせまられていた。

今日世情が騒然とし、地方の安寧が阻害されているのは中央集権の結果であるから、地方に自治の権限を与える必要がある。

この大久保利通の意見書が発端となって、政策の転回が始められた。

維新以来、古い村を否定してきたが、古い村は根強い生活圏として否定しきれない。行政区画をこの生活圏からきりなして、大区小区制という全く画一的な現実無視の区域としたが、これを廃止してもとの郡区町村制に帰しようとしたのである。

郡について、旧に復すといっても、区域が広すぎて施政に不便なものは分割が認められ明治一二年一月四日、県布達によって県内一〇郡が一六郡となり、伊那郡は上伊那郡と下伊那郡と二郡になった。まさ

に、上伊那郡の誕生であり、大区小区制の廃止となった。

「長野県 上伊那郡 南箕輪村」

と公称するのが我が村であり、今日まで続いている。

このように三新法は上伊那郡を設けたが、その郡区町村編成法案の冒頭説明にあるように、「第一、大小区の重複を除き以て費用を節す。第二、郡町村の旧に復し以て民俗に便す。第三、郡長の職任を重くし以て施政に便す」がその考え方であった。つまり町村自治の許容は郡長の設置を必須条件としていた。郡長の職務の中心は「郡制はもと市町村の監督を主として起すもの」といわれたように、町村の監督であり、町村をして国家行政事務の遂行を命令し監督するだけでなく、町村会に対して中止権・議決施行の拒否権までもっていた。

郡長は従来の大区長のように、単なる中間経由機関ではなく、管下の村々の戸長に対して、強い指揮権をもっていた。また戸長は、行政事務に従事する国県の委任機関であると同時に、町村の理事者としての執行機関であった。しかし、職務の比重は、大区小区時代の戸長と大差がなく、布告布達・徴収・徴税・戸籍・徴兵・地券・就学など国家行政事務の方が多くて、自治の権限もゆとりもごく乏しいのが実態であった。

(3) 戸長公選と戸長役場

明治一二年四月二七日、県は郡区町村編成法によって、戸長の公選を公布した。

明治一二年七月改正に相成り、戸長役場と改め、村中投票に換り、

高礼戸長 清水平一郎 筆生三名

「小区事務取扱所」が廃止されて、「戸長役場」と改称され、戸長清水平一郎と副戸長が筆生と改称されて三名民選されて出たのである。民選といっても、まず住民がこれを選び、当選者を県令が任命す



明治三十四年新築以前の
民家を利用していた村役場



図6-10 民家を利用していた役場庁舎とその平面図

る形となっている。今まで全く住民の発言権がなかったことを考えると非常に大きな変化であった。

戸長役場は図6-10のように民家を用いて始められた。戸長の給料は今まで村費支弁であったが、このときから地方税支弁（県費）とされ、県令がその額を定めた。これは戸長には必ず県令から辞令書を受けすべしとされた通達と同じで、戸長を官僚機構の手足として確保する措置であった。

以上によって戸長は、江戸時代の名主のように第一に行政機構の末端であるとともに、町村の理事者として、町村の公共事業に関しては

自由な権限をもつようになった。町村の公共事業とされたのは、町村の請願・神仏祭典・小学校の設置・勧業・水利・衛生などで、これらについて戸長が自治的に処理することができた。

(4) 区会から町村会へ

明治一〇年六月の県会において、区会開設の議案が生まれ、区会（大区）が開設されることになった。第一回の区会は明治一一年二月、県下一せいに開かれた。議題は、「小学校資金出資方法」と「不就学児童の就学方法」の二つで、いずれも教育関係のものであった。

特に小学校資金出資方法では、従来不安定であった元資金法（有志寄附による方法で、主として流産果が採用）と賦課法（一石につき五銭ずつ賦課する方法で、旧長野県が採用）のいずれでもなく、新たに地価・戸数・動産・学齢の四つに分割して徴収する方法がとられ、これによって教育財政の安定化がはかられた。

しかし、明治一一年に郡区町村編成法が公布され、大区小区制が廃止されたので、大区会議も一回限りで終わりとになった。

明治一二年六月、県会は「長野県町村会規則」を布達し、区会から町村会へと移行した。

- 1 町村経費の予算と賦課法
- 2 町村共有物の進退、金銭の公債、土木の起工
- 3 地方税戸数割の各戸への乗率

この三項の権限をもった。また、議員の選挙権・被選挙権は二〇歳以上の男子で町村内の土地所有者とされ、資格制限のきびしかった区会議員と比較して、財政上の制限はゆるくなった。その一方で、議案

提案権は戸長に集中し、議決事項も施行は認可制であり、県令が町村会の解散権をもつようになっていた。

翌一三年四月に区町村会法が公布され、従来の町村会規則は自然消滅となった。ここでは町村の公共に関する事件が議定されることになり、公共的性格は明確化されたが、町村会の開設は町村の自由となり、制限は依然として残った。しかし、長野県では自由民権運動が盛んになってこの年の二月一日には愛国社が愛国社の気運だったので、民権の基礎である町村会は、発足が早く明治一六年にはすでに九〇・九%の開設率となった。

(5) 南箕輪村会の開設

明治一三年四月八日「区町村会法」が公布され「村会議員」を公選するようになった。

ここではじめて、村には公選による理事者（戸長）と公選による村会議員とがそろって、自治組織が機構の上から整えられた。当時はまだ形ばかりではあったが、民主政治の第一歩であった。

訓書

本村、会規則別冊の通り取り付け施行仕りたく候間、御裁成下しおかれたく此の致願い奉り候也

明治一三年八月廿日

長野県令 磯崎寛直殿

上野郡 南箕輪村 戸長 清水平一郎様

(役場文書)

この願書は郡長伊谷格が一〇月一日付で奥印をし、県の認可は一〇月一日におりている。

この時の規則によると、村会議員の選挙は、次の甲乙丙丁の四組に分かれて行い、所得の差別がなく戸数で実施された。

甲組 五人 久保、久保南樹

戸数二一四戸

乙組 五人 大奥、沢尻

〃 一一九

丙組 七人 北殿、南殿

〃 一四〇

丁組 六人 田畑、神子柴

〃 一三四

明治一四年七月一六日、南箕輪学校を仮議場として、第一回村会が開設された。議員二三名中欠席一〇名、傍聴人二〇名であった。初代議長には高木敏三、副議長には松沢源五郎が選ばれた。

村会開設時の議事録によると、明治維新によって当時ほうはいとしておこった自由民権運動の姿を見ることができ、議員の欠席が多いことから自治いまだしの感もある。もっとも、議員は名誉職とされ、日常旅費のほかは無給をたてまえたので、財産のあるものでなければ議員にならない実情であった。

この村会で決議できるのは、村費の賦課徴収方法、村公共事業のこと、府県税の一部（地方税、敷金、営業税）の賦課徴収方法であり、国費の徴収を村民の責任として任せ、義務とさせられていた。

この創設期の村会では、村会日誌も村会成議案も、立派な活版印刷になって残っている。ここに、当時の人々が民主政治の発端として村会議員の詳細を、細大もらず公表して、その綿密丁寧さに驚かされる。

その時の「村会規則」は次のようであった。ここで第七条、八条にみられるように、郡長の権限が強く、村会決議は郡長に報告しなければならなかったし、郡長はその議決を中止させることもできた。

南箕輪村 村会規則

第一章 総則

○第一条第一款 水利土功及び村内公共ニ係ル事業ヲ起シ申請スル事

第二款 村内公共ニ係ル経費ノ予算及ヒ其ノ課税法ヲ定ムル事

第三款 村内共有物ヲ進退シ及ビ維持ノ方法ヲ設クル事

第四款 金銭ヲ公借スル事

○第二条 会議ハ例会ト臨時会トノ二類ニ分ツ其ノ定期ニ於テ開クモノヲ例会トス臨時ニ開クモノヲ臨時会トナス

○第三条 例会ハ第一條各款ノ事件ヲ議定ス

但シ経費ハ一四年(會計年度)ヲ以テ算立ツベシ

○第四条 臨時会ハ例会ヲ俟ベカラザル非常ノ費用(天災等ニテ臨時ニ生ジタルヲ算外ノ)及ビ例会中ニ於テ臨時ニ會議ヲ要スル事務ヲ議定ス

○第五条 例会臨時会ヲ論ズ會議ノ議案ハ都テ戸長ヨリ之ヲ発ス

○第六条 臨時会ハ其ノ特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其ノ他ノ事件ヲ議スルヲ得ズ

○第七条 會議ノ決議ハ議長ノ名ヲ以テ戸長ニ報告ス戸長決議ヲ相当ナリトスルトキハ都長ニ報告ス都長施行ヲ中止セザレバ直チニ之ヲ施行ス

○第八条 都長ヨリ村會議ノ施行ヲ中止シタルトキハ追ツテ都長指揮スルマデノ間ハ着手スルヲ得ズ

○第九条 戸長決議ヲ不當ナリトスルトキハ再議ニ附スル事ヲ得再議ニ於テモ相當ナラズトスルトキハ都長ヲ経テ県庁ニ具上シ指揮ヲ乞フベシ

○第十条 毎年度例會ニ於テ前年度第一條各項事業進捗及ビ費用決算ノ報告ヲ受ク

○第十一条 県令又ハ都長ヨリ會議ノ意見ヲ諮問スル事アルトキハ之ニ答議ス

○第十二条 會期中議員ノ内二人以上ノ發議ヲ以テ村内ノ利害ニ關スル事件ニ付キ建議セントスルモノアレバ先ズ會議ノ許可ヲ得テ會議ニ付シ可決スルトキハ會議ノ所見トナシ議長ノ名ヲ以テ直チニ県令ニ建議スル事ヲ得

○第十三条 村會ハ戸長職權内ノ事ニ付キ會議ノ意見ヲ問フ事アルトキハ之ヲ議ス

○第十四条 村會ハ議事ノ細則ヲ議定シ戸長ノ認可ヲ得テ施行スルモノトス

○第十五条 村會議會ニ當タリ議員ノ招集ニ応ゼズ開會シ難キ場合ニ於テハ

都テ前年度ノ議決ニヨリ施行スルヲ得

○第十六条 議員ノ任期中法ニ於テ議員タル事ヲ得ザル事故ヲ生ジタルトキハ退職者トシ(以下略)

○第十七条 村會議員ハ其ノ議定スル事件ニ付キ村總代トナリ或ハ自己ノ意見ヲ以テ其施行ヲ可否シ都長ニ請願スル權限ナキモノトス

第二章 選舉
第十八条 三十一條 (略)

第三條 議則
第三十二條 議員半数以上出席セザレバ當日ノ會議ヲ開クヲ得ズ

○第三十三條 會議ハ過半数ニ依ツテ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニヨル

○第三十四條 戸長若シクハ其ノ代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨趣ヲ弁明スルヲ得レドモ決議ノ數ニ入ルコトヲ得ズ

○第三十五條 會議ハ傍聴ヲ許ス 但シ戸長ノ命メニ依リ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聴ヲ禁ズルコトヲ得

○第三十六條 議員ハ會議ニ力リ充分討論ノ權ヲ有ス然レドモ人身上ニ付キテ發言發言ニ涉ルコトヲ得ズ

○第三十七條 議場ヲ整理スルハ議長ノ職權トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ懲罰ザル者アルトキハ議長之ヲ懲罰外ニ退去セシムルヲ得其ノ強暴ニ涉ルモノハ警察官吏ノ処分ヲ求ムルヲ得

第四章 開會

○第三十八條 村會ハ毎年四月九月ニ於テ之レヲ開ク其ノ開閉ハ戸長之レヲ指揮シ會期ハ五日以内トス但シ戸長ハ會議ノ衆議ヲ取リ其日限ヲ伸ブルコトアルト雖モ其ノ事由ヲ直チニ具申スルモノトス

○第三十九條 會議ノ論議法律又ハ規則ヲ犯シ或ハ權限ヲ越スルコトアリト認ムルトキハ戸長ハ其會議ヲ中止セシメ都長ニ具申シ指揮ヲ乞フヘシ

(役場文書)

(6) 飯田区裁判所管轄反對運動

明治九年九月一三日に松本裁判所ができ長野県と岐阜県を管轄し、管内には岐阜、高山の二支庁と、岐阜・長野・飯田・松本・御嶽の五区裁判所を設置した。同年一月一日には、その区裁判所の区画をきめたが、飯田区裁判所は伊那郡を管轄することになった。このとき、伊那郡のうち上伊那地区の村々はこぞって、飯田管内に入る不便を考へ、松本区裁判所になることを訴えた。

(7) 三新法の改正と戸長の官選

政府は緊急な対応として、明治一十七年五月七日、三新法を改正して、次のように農村の建直しをはかった。

- (1) 連合戸長役場の設置
- (2) 戸長の官選（県会がきめる）
- (3) 町村会に対する官僚制の強化
- (4) 町村費の徴収に対する強制力の付与

この改正はせっかく民選であった戸長が県会の選任となり、町村会も会期、議員数は県会がきめ、議案は戸長がきめ、地租納入者が選挙権や被選挙権をもつといった逆戻りのものであった。議長は今まで議員の互選であったが、戸長が議長になることになった。県知事・郡長・戸長という官僚的系列が強化されたものとなった。

この改正以前は国税、県税は滞納処分権が与えられていたが、町村費は協議費としてその権が与えられていなかった。そのため町村費の滞納は増えていたが、松方デフレによる不況によって、滞納はいよいよ増えてきた。もともと町村費のうち土木費だけは強制徴収権が明治一四年から与えられていたが、この明治一七年からの改正によって、町村費のうち多くの費目を強制徴収立てできるようになった。これと同時に戸長役場があまり小さくてはその負担にたえられないので、従来三〇〇戸以上とされていたものを五〇〇戸以上と拡大した。

これによって生活圏主体に小じんまりとまとまっていた村々は、一村一戸長でなく、数村で連合した戸長役場をもち、連合町村会議員も選ばれた。しかし、本村は標準の五〇〇戸をこえていたので、そのまま一村一戸長であった。そのままであったということは、行政単位としての村と生活共同体としての部落が分裂しないでいくことであった。

(二) 明治後期の村政

1 町村体制の形成

(1) 村長と村役場の発足

明治政府は、統一国家の実をあげるに急であつたが、そのためにも地方制度の改編に異常な熱意を示した。しかしそれは試行錯誤的であり、地方の実情にあわない不安定なもので、次のようにゆきつ、もとよりつした。

- ① 明治五年、大区小区制、ムラの否定の方向。
- ② 明治一一年、三新法体制、ムラを復活する方向。
- ③ 明治一七年、三新法改正、再びムラを否定の方向。
- ④ 明治二一年、町村制体制、村が行政単位となる。

市町村制上論

朕地方共同ノ利益ヲ発達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ増進スルコトヲ欲シ、隣保團結ノ旧慣ヲ尊重シテ益々之ヲ拡張シ、更ニ法律ヲ以テ都市及ビ町村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及ビ町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十一年四月十七日

（役場文書）

このように隣保團結の旧慣を存しながら、地方の利益を増進する道は、明治二十一年四月公布の「市制・町村制」によって、ようやく永続的な地方体制となった。

当時国会開設の要望が高まる中で、立憲制施行の基盤としての地方自治制の整備が必要であった。その趣旨は自治及び分権にたえる力をもった有刀町村をつくることにあった。すでに述べてきたように、明治八年までに一小区一町村の合併が進行され、郡下は二八町村となったが、これはあまりに旧慣を無視したものだったので、明治十三年ころから分裂がはじまり五六町村と二倍になってしまった。これでは細分化されすぎて、有力町村とはいえない。そこで三〇〇戸以上を標準にして合併が促進され、約半分の三〇か町村となり、明治二十二年四月一日施行の準備がととのった。明治維新以来、二〇年の地方行政の国内経験と、明治一五年に渡欧した伊藤博文らの西欧の国外経験とが、ここに結果してこの制度となった。

その合併促進の時も、本村は五〇〇戸以上もあったので、そのままであった。しかし、ここで戸長制度は町村長制度に改められ、「南箕輪村戸長」は「南箕輪村村長」となり、戸長役場は「南箕輪村役場」となった。以後現在にいたるまでこの制度となった。

当時の村役場は、民家を利用したものであった。この村役場は、明治三四年に新築されるまで使用されていた。

(2) 村長・助役（名誉職）の選出と郡長

町村制では、村長・助役は村民の直接選挙ではなく、村会議員の投票によって選ばれるようになっていた。収入役は村長が選出村会長の承認を得ることになっている。勤業・衛生・学務などの委員は、村会議員の互選によっていた。

しかし、村に対する郡長・県知事・内務大臣の監督はきびしく、村長・助役の選挙結果も、県知事の認可が必要であり、不適任と認められれば再選挙をさせ、なお不適任ならば、官吏を派遣して職務を管理した。本村にもそのような事例があり、次のような通知がだされた。

来る十一月十一日左の件議定のため南箕輪村役場内に村会を開設候条同日午前十時を期し御参集相成り度く此の段通知に及び候也。

明治三十五年十一月八日

南箕輪村代理村長職務管理

上伊那郡 書記 唐沢守三

村会議員 殿

一、村長□□許職二付キ事故認定の件

一、助役□□許職に付キ事故認定の件

一、村長選挙の件

一、助役選挙の件

(役場資料)

この通知は村会議員六名が職務管理唐沢守三に請求して村会を開会する運びとなり、そこで村長・助役を選挙した。

村長に委任された事務には、兵役・戸籍・土地収用・伝染病予防・河川・小学校・その他国県郡の行政事務があった。この事務に必要な費用を村の負担として執行しなければならなかった。政府はこの事務完遂のため、その費用の支出について強制予算制をとった。強制予算制というのは必要事務の支出を定額予算にのせず、またこれを支出しないときは、郡長はその支出額を定額予算表に加えるか、臨時支出させることができることであつた。

このような村長に委任させた国政事務は、村役場の事務のほとんどを占め、その費用も村財政の過半を占めた。こういう点から見ると、村役場は村の執行機関というよりも、まず官庁の出先機関であり、国家行政（富国強兵）を住民の負担で補強する感が強かった。

村長、助役は名誉職であり、職務上の実費弁償をするだけであつた。これは経費の節減により財政の健全化を図ると同時に有力者の登用をめざした結果だった。そのうえ、有力者を政治的地位につけた

めに、一種の強制手段も設けてあった。この名誉職を故なく拒否したり、退職する時は、公務参与権の停止及び村税の重課などの制裁が課せられた。

村長、助役の任期は四年であったが、この任期を持たずに辞職した村長が多かったのは、この名誉職によって一家の身代を傾けてしまうといった場合が多かったからである。そして、当時の村会議事録には、村長や助役の辞職理由を認めるか否かの記録が多く残っている。

(3) 村会議員とその等級選挙

町村制のもとでの村会議員は等級選挙制であった。選挙人は村内の「公民」の中から選ばれたが、その公民には次の条件があった。

① 満二十五歳以上の男子で、一戸を構えるもの。

② 二年以来継続き村の住民であるもの。

③ 村内で地租を納めるか、直接税二円以上納めるもの。

ここでは、公民か否かは二十五歳以上の男子で、資産がなければならなかった。地租を納める者、つまり土地所有者にだけ選挙権が与えられ、小作人等には与えられなかった。それとは逆に不在地主の場合は、②の条件である村内居住非居住に係らず、村税多額納税者には特免事項があつて選挙権が与えられていた。

村会議員も名誉職で、任期は六年であり、三年ごとに半数が改選された。選挙は等級選挙制で町村は二等級（市は三等級）に分けて行なわれた。それは村税総額の半ばにあたる者までを一級選挙人とし、その他を二級選挙人と分けて、それぞれの集団が半数ずつの議員を選挙する方法であった。一級選挙人は富裕者で少数であったが、その中から半数の議員を選べる仕組みであった。極端な場合は村税総額の半分を納める大地主は、一人で半数の議員が選べるという、地主優遇の選挙法であった。

さらに、二級の選挙を先にし、一級を後にしたので、一級選挙人は二級の結果をみて選挙できる選択権もあった。こういう地主優遇は、「町村制の理由」にみられるように「住民の多数に制せらるるの弊を防ぐ」ことを意図したものであった。この地主中心の等級選挙制は、大正六年まで適用され、同一〇年四月の改正でようやく廃止になった。

村会の権限は委任事務と固有事務を議決することであり、特に監督府の同意を必要とするもの以外は、その議決が村の意志となることができるようになった。これは三新法時代より大幅な権限を与えられるものであった。

しかし、名誉職的な色彩が強く、明治一七年の改正以後議長は村長が行なうようになっていて、執行機関と議決機関の別が判然としていなかった。ただ、後に決算村会の場合だけ、村長が議長の座を降り、議員の中から議長が選ばれるようになっていた。

2 郡制（発足・廃止）と村政

明治二三年五月郡制が改められ、明治二四年四月から長野県は九県のひとつとして初めて郡制を施行した。古代には郡司がいて行政単位であったが、中世から近世にかけては、郡は単なる行政区画であるにすぎなかった。ここではじめて郡が県と村との間にある行政単位となり、郡会と郡参事会を組織するようになった。郡長は県知事の任命であった。郡会議員は複選制で、郡内の町村会で選出した議員と郡内の大地主（地価一万元以上）が互選したものと、二種類あった。上伊那郡では町村会選出の二〇人と大地主議員六人の計二六人であった。当村からは倉田三郎が町村会選出議員として当選した。この第一回に上伊那郡の町村数は三十一か村で選挙権者は三七〇名であり、大地主の選挙権者はわずかに九名であった。郡会議員の任期は、町村会選出議員が

六年で三年ごとに半数改選、大地主議員は三年ごとに全数改選であった。

明治二十一年四月四日、上伊那郡役所が新築落成しているが、これには寄附金が各村へ多額にかかってきた。久保北割の例でみると、明治二〇年六月付で合計四五円も一耕地で寄附している。(最高一人一〇円) 明治二〇年といえは松方デフレの後の農村の疲弊したところで、米価一俵一円五銭であったことからみて、この寄附額は相当大きかった。しかも、戸長穂高印でまだ増額された寄附であった。

村に対する郡長の監督権はなかなか強大で、先述のとおり強制予算の権をもっていた。また郡参事会は、村会で議決すべき件を議決しないときは、代わって議決する権をもち、指定事項に関する村会の議決の許可権をも持っていた。そのほかに、村の行政事務の監査をする権や村会の議決の停止権、村吏に対する懲戒処分権、村会を解散することが出来る権をもっていた。

村にこのように多様な監督が加えられていたのは、村が反体制的な団体となることを強く警戒したからであった。

その後、明治三二年に郡制の改正が行われ、大地主議員制は廃止され、全議員が有権者―直接国税三円以上の直接選挙となり、被選挙権は直接国税五円以上の納税者となった。定員は三〇人と増加し、さらに大正八年には三五人となった。このとき本村からは高木誠が当選した。

なお、郡会には副議決機関として「参事会」が設けられた。これは郡長が議長となり、郡会議員が互選した三名と、県知事が郡内から選出した一名の計五名で構成されていて、権限が強く、多いときは年に三〇回も開かれた。本村でも大泉の上井の水論の時など、この参事会の強力な示談の指導をうけている。

この郡制は出発当初から問題が多く、中期的で費用がかかりすぎる等の廃止論が底流にあり、ついに大正一二年に廃止となってしまった。大正一五年には郡長もなくなり、郡役所は名実ともになくなってしまった。上伊那郡役所はなくなり「上伊那連合事務所」となったのである。

さらに昭和一七年一月から県の出先機関として、「上伊那地方事務所」となり、昭和五〇年一月「上伊那合同庁舎」が竣工した。いままで分散していた県のそれぞれの出先機関が、総合的にまとまって、一か所できるとするようになり便利になった。

地方自治団体としての上伊那郡は、明治二三年から出発して大正一二年まで三二年で幕を閉じたのである。

四 大正期の村政

1 陋習の打破

明治四五年七月三〇日、明治天皇崩御、皇太子殿下が直ちに踐祚^{せんそく}、神器渡しの式が行なわれた。その七月三〇日元号を大正と改められた。七月三十一日には各部落数代へ一般臣民が裏に服すように伝達された。九月一三日には御大喪の日で、本村小学校庭では遷葬式を行ない、在郷軍人、小学校生徒、各部落の青年会員、一般村民、村会議員、総代等が参列した。

ここから大正期がはじまるわけであるが、農村は好景気とインフレの中で疲弊していた。いたずらに華美を競い奢侈^{しよ}に流れている。とくに冠婚葬祭が不相応である。郡役所でも数年来この弊風の打破を議し、町村会に郡長から訓示があつて、全郡一致して弊風打破の実行をせまられた。空論を排して断乎^{だんぷ}実行して、冗費を節約し、農村の實力を充実し、産業を開発し、村民の福利を増進し、自治の伸展を期さなければならぬ。時の村長高木正直は先にたつてこれが対策をたて

た。

「南箕輪村陋習矯弊に関する規約」がそれであり、「申合書」が各戸に配布され貼布することになった。なによりも実行が大切と、冠婚葬祭の家では村の基本財産へ寄附するというもので、まず最初の家が口火をきりやすくされていたり、矯弊委員を設けてその遂行を促す役目とし、村民の署名捺印をさせたりしている。

この規約に基づいて、次のような「申合書」が各戸に配られて、その徹底を期している。

申合書（之レハ各戸へ配布シ貼付スルモノトス）

南箕輪村民総集會ニ於テ左ノ通り決議ス

一、婚姻ニ際シテ嫁娶スル荷物ハ具税戸數額等級十等前後迄箱數個以内同三十等前後迄箱數個以内 以下ハ箱數個以内クルコト

前二項ニ違背シタルモノハ具税戸數等級額五倍額負担ノ余裕アルモノト認定シ又義務アルモノトス

二、葬儀ハ一日トシ膳部ヲ廢シ會葬者ニ酒ヲ饗セザル事

枝義理ヲ廢スル事

三、旧曆ヲ用イザル事

四、入膳食兵士ノ酒食ノ饗ニ預ラザル事

（兵士ノ土産物及ビ他別ハ近親ノ外之レヲ贈ラザル事）

五、時間ヲ妨行スル事

六、ソノ他

イ、酒食ヲ強イザル事

ロ、盗ノ飲酬ヲ爾スル事

ハ、訪問ニハ用向キヲ直ニ陳ベ食事ノ時刻ヲ選クル事

左記ノ類ハ拒絶スル事

但シ協議ヲ経タルトキハ此ノ限リニ非ズ

一、物質イ・押売り・詐欺人

一、各種ノ寄附募集

一、孤児院・義兵等ノ売品

一、書籍類ノ予約募集

一、其ノ他ノ廣告募集強請

大正六年二月一日

以上

南箕輪村

2 区制の発足と推移

町村制はすでに述べたように、明治二十一年に施行されたが、その六四条一項に、行政区と区長を設けてもよいことになっていた。

町村ノ区域広狭ナルトキ、又ハ人口稠密ナルトキハ、所務便宜ノタメ町村會ノ議決ニヨリ、之ヲ數區ニ分カチ、毎區區長及ビ其ノ代理者各一名ヲオクサヲ得

この町村制施行とともに、村の補助的な機関として区制をしいた所が多かったようであるが、本村ではいまだ区制は施行しなかった。明治八年に南箕輪村が誕生してから、旧村（ムラ）は「耕地」と呼ばれ、その長を「総代」と呼んできた。そして町村制が施行されても「耕地」、「耕地総代」とおしえてきた。

明治三二年、北殿耕地では「区會」を設置したいと村議會に申請した。そしてその三月一五日には、村議會で満場一致で北殿區會が可決された。

しかし、これは郡長の許可するところとならず却下された。そこで、村會は同年四月二六日には次のように、取消している。当時は郡長の権限が強かったものでこうしたことがままあった。

明治三二年四月二六日、北殿區會設置の儀は、先に本村會決議を経て申請せしも、本郡長より却下に付き前村會の決議を取消したき旨を報告す。満場異議なし。

このようにあっさり取消してしまったので区會は成立しなかった。

こんな経過もあって、町村制施行後二〇余年を経て、ようやく、大正三年から区制が施行されるようになった。

区設置議定に関する議案

第一条 本村は町村制第六八条により左の区域を定め区を設置す。

久保北割・久保南割・大泉・北殿・南殿・田畑・神子榮・沢尻

第二条 各区に区長一名代理者一名を置く。

第三条 任期は一か年とし毎年一月一之を選挙す

大正二年十二月六日 提出

南宮輪村長 高木正直

この議案の理由には、各部落に總代があり、村の処務の多くはいつも依頼して処理してきたが、近來事務が繁多になり決滞して不便なため、区制をして行政の周到を期するところである。

この議決によって、従来の耕地は「区」となつて、大正三年から区制が施行されるようになった。

そして大正三年の一月一日の「村会議事録」には、村会で次の区長が選挙されている。

久保北割 区長 堀 貞雄 南殿 区長 有賀謙次郎

久保南割 区長 征矢 弘久 田畑 区長 日戸 伝雄

大泉 区長 田中 勝雄 神子榮 区長 太田文治郎

北殿 区長 倉田徳三郎 沢尻 区長 有賀 実直

この区制による区長と区長代理は、一般区民が選出するのでなく、村会で選挙された。大正三年正月の議会で、まず久保区長と区長代理が次のように選挙され、以下各区の選挙が行なわれた。

選挙 是より久保区長の選挙を行う旨を告げ用紙を配る

投票総数 七票

区長 堀 貞雄 七票 当選

区長代理 堀 貞雄 七票 当選

以下各区長選挙略

(役場文書)

なお、この大正三年から一五年を経た昭和三年にも、全く同様な「行政区設置」が議決されている。目的は全く同じであるが、区長と区長代理の選挙がなくなり、村長の推薦により村会が定めることになっているだけである。ここでもまだ区長は区民が選ぶ形とはなっていない。次の「議案三三三号」はその詳細である。

議案三三三号

南宮輪村行政区設置並ニ区長及び其ノ代理者ニ關スル規則

第一条 本村ハ処務便宜ノ為メ左ノ通り区ヲ設ケ各区ニ区長及び其ノ代理者一人ヲ置ク

久保 堀ノ井 大泉 北殿 南殿 田畑 神子榮 沢尻

第二条 区長及び其ノ代理者ハ本村公民中選挙権ヲ有スル者ヨリ村長ノ推薦ニ依リ村会之ヲ定メ任期ハ一カ年トス

第三条 区長ハ村長ノ命ヲ受ケ村長ノ事務ニシテ区内ニ關スルモノヲ補助ス

第四条 区長代理者ハ区長ノ事務ヲ補助シ区長故障アルトキ之ヲ代理ス

内ニ於テ村長之ヲ定ム

付則

本規定ハ公布ノ日より之ヲ施行ス

昭和三年七月十三日提出 同日決議

南宮輪村長 日戸伝雄

(役場文書)

各区の区長は「乙第三一號」のような告知書によって区長となつたのであるが、このことは昭和前期(戦前戦中)を通じて行なわれた。

例えば昭和十七年にもまだ区長は、議案第一号のように、村長が推薦し議会が認定していたのである。

乙第三一号

告知書

区長 堀 貞雄（外七人）

区長代理 倉田貞嗣（外七人）

頭書ノ通り推薦シ一月十四日ノ村会ニ於テ認定相成リ候間此後告知ニ及ビ候也

昭和四年一月十五日

堀 貞雄殿 外十四人宛

南宮輪村長 同

（役場文書）

議案第一号 昭和十七年度南宮輪村区長並ニ代理者薦定ノ件

推薦書

区長 赤羽 忠三 榑矢 真三 清水 謙 有賀 一衛

有賀 栄一 松沢憲太郎 高木 助松 有賀 芳藏

区長代理者（略）

町村制第六八条ノ規定ニ依リ前記ノ者ヲ昭和十七年度区長並ニ区長代理者ニ推薦ス

昭和十七年一月十日提出 同日議決ス

上伊那南宮輪村長 倉田友幸 同

3 米騒動と関東大震災

(1) 米騒動

大正七年の米価暴騰による本村としての対策は次のようであった。その財源には三種類あった。

一、金一六〇円 御下賜金

一、金二四三円二〇銭 中央及び県内寄附の分配金

一、金四〇〇円 長田國吉氏寄附金

困窮者の救済策は米の代金の補助として、役場で米券（一升、二

升、三升）を発行し、これを困窮者に配布する。米券をもっていけば二割引きで買える仕組みになっていた。なお、米価の調節をはかるため、外米一〇〇袋を購入して村内希望者に分配した。これは販売中止によって剰余金二五〇円余が出たので、郵便貯金として本村救済施設積立金規定を制定して保管した。

(2) 関東大震災と村

第一次世界大戦後の世界は、大正九年以降不景気に見舞われた。日本は大戦中のブームの反動で、不景気はとくに激しかった。好景気のなかで設立された多くの会社は倒産し、失業者も増加した。戦後、欧米諸国は輸出力を回復してきたので日本の輸出は不振となり、大戦中に蓄えた金や外貨も減少していく一方であった。

この最中に関東大震災が発生したのである。大正一二年九月一日、東京・横浜を中心とする関東地方一帯をおそった大地震と、その後に発生した大火のために、京浜地方の中心部は壊滅に近い大損害をこうむった。死者行方不明一四万人、全壊・焼失家屋六二万戸、総被害額一〇〇億円（当時の国家予算は二〇億円）という大被害であった。

本村では九月一日震災救助にのりだした。「赤誠」をもって避難民の救助にのりだした。北殿駅で在郷軍人会や農会と連絡して避難民の義捐を集め被災地へ送った。

九月一二日発送の分

(一) 食糧品 二二俵（四斗樽）

(二) 衣類雑品 七三四点

(三) 金一一九円七〇銭

九月一二日震災救助のため有賀源吉氏を東京へ派遣

一〇月二三日発送分

(一) 食糧、被服等 琉球包二個

南箕輪村の「村誌」は明治九年三月二〇日付けで上申したものがあ
り、四月五日付で筑摩県参事が朱書を加えて、なお調査に遺漏なくす
るよう返送したものである。

但し訂正の上は割額（木版すり）に付し原村の榮譽を掲ぐる機につき遺漏な
く調査届け出すこと。

明治九年四月五日

筑摩県参事 高木世矩郎

（旧村誌）

このとき訂正して届け出た「村誌」は『長野県町村誌』に登載さ
れ、そのまゝでは近隣町村のなかで、一段と光っているといわれて
いる。

この明治九年の村誌は一応完成しているが、先に記した大正の村誌
は日の目をみる事がなかった。大正六年に七五〇〇円の子算が翌年
は三九〇〇円に減額され、以後予算が見当たらない。またその時の資
料の片々も見当たらない。

(2) 役場庁舎の改築計画

役場庁舎は明治三五年の建造で事務の増加に伴い、狭くなり執務上
の不便が少なからずあった。そこで大正一三年宿直室を増築し、事務
室の外面に土間の廊下を設けて村民の便をはかった。その前年小学校
建築の落成式を二月一〇日に挙行了ばかりで多大の費用を要した
後ではあったが、大正一三年一月二日「役場庁舎改築資金積立規
程」を設け、庁舎改築のため毎年金五〇〇〇円を積立てることにした。

(3) 第一回国勢調査

大正九年、はじめて国勢調査が行なわれることになった。我々はじ
めての事業だったのでその趣旨の理解は容易でなかった。役場全員が
日夜各区に出張し、巡回して説明をし申告の正確なことに努めた。

本村では調査区を一二区に区画し、一区一名の調査員と三名の予備

調査員を置き、調査員の研究会を数回開き研究に研究を重ね、八月二
〇日に予備調査を行なった。この予備調査によって欠点の研究をして
万善の策をねった。

一〇月一日午前〇時現在をもって、役場吏員と調査員が協力して国
勢調査に従事した。其の結果は極めて良好で、左のようであった。

世帯数

七五八

男

一九三九

女

二〇八七

計

四〇二六

国勢調査は国勢調査の申告書を材料にして作成した。

(4) 土地賃賃価格制の発足

大正一五年三月三〇日法律第四五号により、土地の賃賃価格調査を
はじめた。これは明治初期の地租改正以来の大事業であったが約二か
年の短期間を以てこの大事業を完成する計画をたてた。その一〇月一
日に伊那税務署長は赤羽税務助以下一五名の事務嘱託員を嘱託し、土地
の一筆ごと等位を調査した。そして同年二月一八日には、本村の土
地の編級調査は久保から沢尻まで全部終了した。こうして「地価」は
「賃賃価格」となったのである。

この賃賃価格制による課税は、大正一七年度（昭和三年）より実施
されるようになった。

(5) 里道・作場道の村道編入

大正九年三月、道路法施行細則が制定され、従来の「里道」「作場
道」が全部「村道」に編入された。そして一層、道路愛護改修につと
めることとなった。

昭和前期の村政

1 昭和恐慌と村政

(1) 村の昭和恐慌

本村における昭和恐慌の実態を、養蚕業からみると図6-11のよう
に、昭和四年以降収量は漸増しているにもかかわらず、繭による村

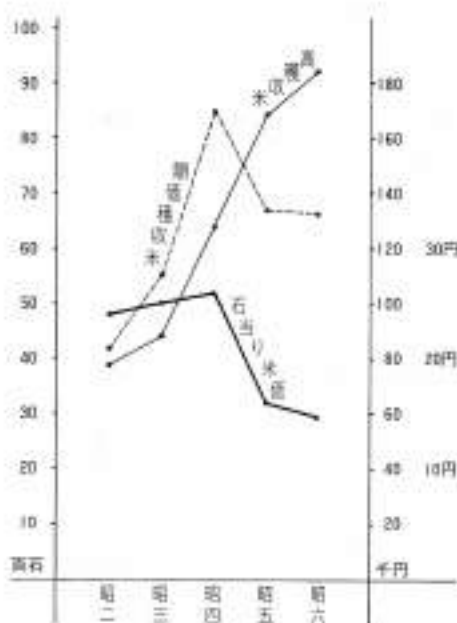


図6-12 米の収穫高・価額と石当り米価の推移
(南箕輪村)

(昭和四年以降…西天開田盛ん)
(昭和四年…世界恐慌)

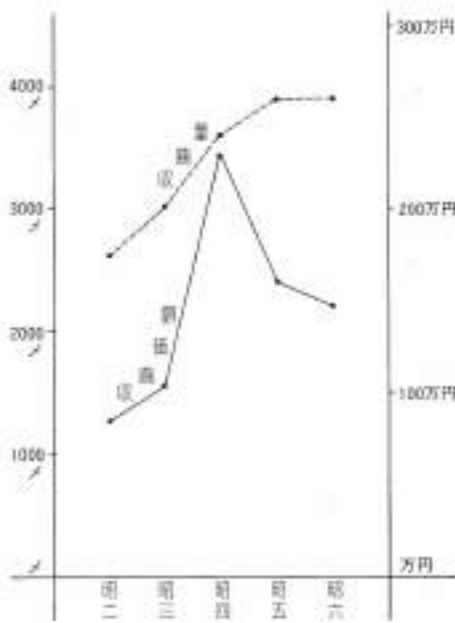


図6-11 昭和初期の収量・価額の推移 (南箕輪村)

(昭和二年は大霜害・秋蚕減産の年)
(昭和三年は夏秋蚕減産の年)
(昭和四年は世界大恐慌の年)

民の収入は激減している。大霜害や減産による昭和二・三年の収入よりも、昭和五・六年は労働多くしてむくいらなかった。
また、米作の側からみると、図6-12のように、西天竜による開田の結果、収穫高は激増しているのに、農家の収入は激減している。それは同国の石当たり米価の図によっても歴然としている。
この世界恐慌による不況の打開策は、いずれも焼け石に水のようなものであるが、以下のようなであった。

(2) 報酬給料の寄附

地方財政整理緊縮ニ関スル件依命通牒が、すでに昭和四年八月一日付けでだされている。それによると整理緊縮の実効をあげるよう一二項目が示されている。その中には、例えば庁舎・学校等の増築改築はたえうる限り見合わせる、人件費の初任給や増修の時期などを節約をはかるようにすること、出張旅費や視察費の支出をおさえること、当初予算で年度内所要経費をまかない追加予算に計上するがごときことのないようにすること、などが示されている。

昭和五年七月一八日には、『時局ニ対スル指示』がだされた。農家治産の要道は「量入制出」(入ルヲ量リテ出ルヲ制ス)の厳守にあるとして次のようにのべている。

農家治産ノ要道ハ「量入制出」ノ消極的經濟ヲ厳守スルニアリ 此ノ不況時ニ際シテハ自給自足ノ生活方法ヲ謀ジ、消費ヲ節約シ失費ヲ防止スルト共ニ此ノ閑散々産業ノ合理化ニ意ヲ注ギ……消費ノ節約ニ就イテハ昨年申シ合ワセテナシタル生活改善実行申合事項ヲ厳守スルト共ニ産業ノ合理化ニ就イテハ別記産業改善事項ノ施行ヲナシ以テ其ノ目的ヲ達スルコトニ勉メラレン事ヲ希望ス

(殺馬文書)

以上は物質的方面であるが、精神的方面としてさらに次のような指

示がなされている。

最近ノ不況ニ際シ著シキ精神的ノ刺激ヲ蒙リ神經過敏ニ陥ルノ傾向ヲ有スル時、動モスレバ輕率妄動ニ流レ思想悪化ニ傾キ易ク……今回ノ不況ハ元ヨリ生活ニ脅威ヲ与ウル甚シキモノアリト雖モ先年関東震災當時ノ事情トハ自ラ其ノ機ヲ異ニシ比較スベキモノニアラズ……依ツテ此ノ時局ニ処シテハ深甚ノ注意ヲ払イ嚴ニ人心ノ荒廢輕率危險ナル思想行動ヲ互ニ相戒メ堅忍持久自治ノ覺悟ニ努メ慎重ナル態度ヲ以テ此ノ不況ニ処スルコト此際最モ必要ナリト信ズ

(役場文書)

そして、村税の軽減を図ったが、その後歳入が暴落して、ますます不況の度を加えた。村は断固たる財政上の緊縮手段をとって、この急に際し、負担の軽減をはかり人心の融和をはかるうとしていた。其の趣旨の徹底を期するため、各区で小組合ごとに臨時会を開いて一般に誠知せしめられた。此の際第一に村税の完納に努められんことを望むとしている。そして時局対策として、財政計画ではほかに余地がないので、人件費の削減を次のようにきめている。

時局対策

一、……略……

二、役場吏員報酬給料減額寄附ノ件 但シ八月ヨリ實施

1 村長報酬 五割減額 此ノ金一七二円

2 助役報酬 三割減額 此ノ金一〇〇円八〇銭

3 収入役給料 二割減額 此ノ金 六七円二〇銭

4 有給吏員給料 一割減額 此ノ金一六〇円

5 使丁給料 六分六厘強減額此ノ金一六四

三、費用弁償並ニ二割費緊縮ノ件 (略)

四、役場吏員及ビ小学校教員使丁年未賞与全廃ノ件 (略)

五、小学校教員住宅料支給停止ノ件 (略)

(役場文書)
このようにして細大もらさず、村長から使丁までのあらゆる減額により総額二六五五円をうみだした。これは当初予算で九四九円を減額したあと、途中からの減額であるから大変な額であった。そのうえ、村税の徴収期を変更して、二期に納めたのを四期に納めるようにした。

なほ、第一二番目に産業の改善に関する農会の活動と負担の軽減もしている。

一、村農会経費節約負担軽減ノ件

○村農会長報酬全額 三六四円寄附

○副会長報酬全額 三六四円寄附

○農会技術員給料二割減額 一〇四円寄附

○其ノ他ノ緊縮 二四四円

計 三〇〇円

戸数割一戸当タリ二〇銭ヲ一〇銭ニ減額

地租割地租一円二付キ二三銭ヲ一八銭ニ減額

(役場文書)

このようにして、各農家の農会費の負担を軽減し、昨年申し合わせた生活改善事項はこの際履行厳守することによって、この不況をたえようとした。わけても中元の贈答を省き、節酒禁酒禁煙を励行することを求めた。

この不況は昭和六年から七年へと続き、この時の対策の一つとして、村長が村長にあてた寄附採納額が残っている。

寄附採納額

金貳百五拾八円一銭 但シ昭和六年四月より昭和七年三月迄毎月二十一円

五十銭寄附

右ノ金額本村村費負担軽減ノ費トシテ村費中へ寄附致シ度ク候間御採納下サ

レ度ク此ノ段割願イニ及ビ候也

昭和六年三月 日

南箕輪村長 清水 警政

南箕輪村 清水 警政

これは単に村長だけではなく、助役以下役場の吏員全員一五人、ほかに村会議員一人、計二六人に感謝状が村長名でだされている。感謝状には金額を記し、

右金額本村費中ニ寄附相成リ候段、感謝ノ至リニ端エズ 経済界未曾有ノ不況時ニ關シ本村費軽減ノ上ニ費スル所多大ナルヲ信ズ 茲ニ謹シテ感謝ノ意ヲ表ス

昭和六年五月三十一日

南箕輪村長 清水 警

(役場文書)

と感謝の意をのべている。

(3) 農家経営改善策

これらの節約、削減の実施だけでは、どうにもならない。昭和五年七月一七日に、各農家の経営改善策を次のように示している。といっても方策はただ複式経営化によって自給自足を高めることしかない。しかしそこに深刻な不況を思わせるものがある。

農家の現状に鑑み農家経営改善策

一、養蚕偏重の弊を改め農家収入を多面に求むること

二、一層経営を改善し自給自足主義経済に立脚すること

三、自家労働能率の増進に努め自家労働の範囲を以て農業経営の基礎たらしむること

四、複式経営化を図り労働力の分配を平均すること

五、収支を明らかにし以て自家経済の基礎を確立し冗費を節すると共に収入の途を積極的に講ずること

実行具体策

1 荒廃桑園を整理し農作物を栽培すること
桑園、水田には左記の作物を開作すること

イ、緑肥栽培をして金肥を節約すること

ロ、大小麦・大豆・蕎麦・粟・雑穀、其の他穀類を開作し、自家用醬油の原料・味噌豆・食糧の補給・小家畜の飼料たらしむること

3 家畜・鶏・豚・牛・山羊・家兎等を飼育し之より生ずる生產品の収入並びに自給肥料の造成を計ること

4 自給肥料の造成を計るため、緑肥栽培、家畜飼育、糞糞、人糞尿、木灰の完全処理、堆肥製造をなすこと

5 生産物は組合供出を主とし金割の分は乾薪保管又は合理的販売方法を講ずること

6 村内の乾薪場を解放し薪炭は自家にて加工処理すること
右改善を指導し、実行方法の円滑を期するため、農会の積極的活動を計ること

昭和五年七月十七日

(役場文書)

これらの不況対策をみると、太平洋戦争下の農村対策の実態と似ている。

(4) 低利資金の貸付け

深刻な不況に対して、県は低利資金による短債を村に転貸させる対策をとった。南箕輪村失業救済農山漁村臨時対策低利資金貸付規程によると、

一、耕地拡張改良事業

1 小開墾 一畝地五町歩以下ノ小開墾、一反歩一五〇円以内

2 水害復旧 田畑ノ水害復旧ニ限リ 一反歩当タリ二〇〇円以内

3 小設備の改良新設 一箇所九〇〇円以内

4 暗渠排水 一反歩当タリ四〇〇円以内

5 小用耕水改良事業

一反歩当タリ三〇〇〇円以内

右耕地改良事業資金貸付ケラ受クベキ者 十人以上連帯者

二、山林開墾事業

三、製桑改良事業

寛政桑園改植ノ目的ヲ以テ昭和六年春季以前ニ於テ古株ノ掘リ配シヲナ
スヲ要ス 而シテ昭和七年五月末日迄ニ植付ケラ了スルモノハ一段歩当
タリ七十五円以内 同年六月一日以後同年内ニ植付ケラ了スルモノハ一
段歩当タリ三十七円五十銭以内

右製桑改良事業資金ノ貸付ケラ受クベキ者 十人以上連帯者

四、以下略

(役場文書)

この資金は起債によって調達され、利率は年四分二厘以内であり、
借入先は長野県であった。

これによって、村内に貸し付けられた金は、次のようであった。

失業、救急農山漁村臨時対策低利資金
一、金 貳万貳千円 融通転貸資金総額

内訳

金参千五百円	耕地拡張改良事業資金
金五千六百円	製桑改良事業資金
金四千四百円	畜産施設資金
金貳万五百円	副業及び農業共同施設資金

昭和六年二月七日 提出

審査会長 清水 警司

(役場文書)

その他農村経済の難局には、応急資金等の必要を認め養蚕応急資金
は勸業銀行から各団体へ金一万四八〇〇〇円の融通を受けることとし

た。このとき大芝原西天竜開田地は保水力が乏しく、耕作上困難を来
したので、昭和六年春耕土の上から「トラクター」で鎮圧したとこ
ろ、好成績であった。

2 役場庁舎の改築

昭和七年二月一三日、村長清水警司は長野県知事石坂倉治あてに、役
場庁舎の改築のため、村基本財産繰り入れ使用の許可申請書(要請
書)を提出している。それによると役場庁舎は小学校分教場の廃舎を
改造したもので、狭隘で非効率で、諸事に支障を来している。この
の物価下落の時に、改築するが最もよい機と考えているとのべてい
る。財源としては役場庁舎建築積立金ならびに役場古庁舎売却金をも
ってこれにあて、不足金は基本財産積立金より繰り入れ使用したいとい
う許可の申請書をだしたのである。

村有林三〇〇余町歩の平地林は三〇年以上の立木地であるが、この
うち二町歩は四〇年生の立木で、これを売却処分してとも考えたが、
価格下落のとき見合わせて、この申請書によって改築したいというの
である。

議案第六号

南宮輪村役場庁舎建築二閣スル件

本村役場庁舎へ古キ建物ニシテ既ニ頽落シ且ツ極メテ狭隘ニシテ時代ノ進
進ニ伴フズ材目増ノ遂行上支障ヲ来シ其ノ弊達ヲ妨グルコト甚シ 依ッテ
茲ニ左記ニ依リ之ガ改築ヲナスモノトス

昭和七年一月十六日 提出

同日 議決

上伊那郡南宮輪村長 清水 警司

記

一、改築経費総額ヲ金八千円以内トス

一、経費支弁方法トシテハ役場建築積立金ヲ以テ之ニ充テ不足ノ分ハ基本財産積立金ヲ一時繰入レ使用スルモノトス
 一、準備手続整イ次第工事ニ着手シ現在ノ位置ニ改築スルモノトス 但シ工事着手ノ予定ハ昭和七年四月トス

(役場文書)



図面平上指

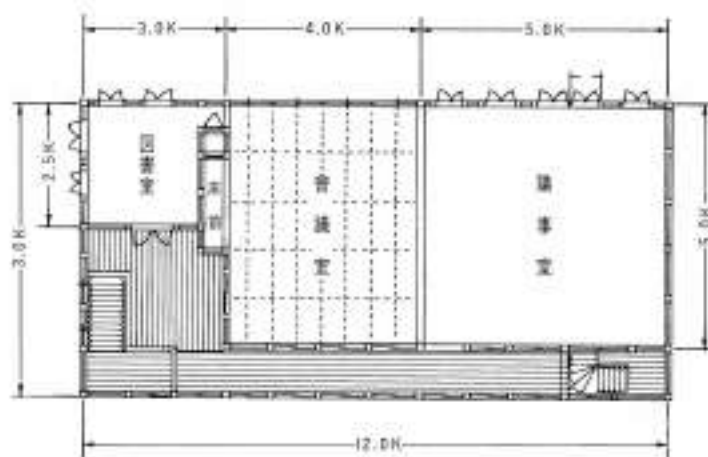


図6-13 議事室のできた役場庁舎と平面図

されている。この理由は増工事にあり、間口六間を七間にしたこと、外部の下見板にベンキをぬったこと、電燈を増設したこと、階段下物置をコンクリート造りとしたこと、窓掛を新設したこと、炬燵を三か所こしらえたこと、金庫台をコンクリートにしたことなどがその理由としてあげられている。

この年八月、前鑑が騰貴し材木値段も急騰したので、村有林の一部立木でまかなうつもりだったが、景気は一時的のもので木材価格も下落し売却が不利となったことなどをのべていることは先述申請書のとおりである。そしてこの平地林はすでに輪伐の開始時期となっているので、基本金を繰入れ使用しても、村財政は微動だもしないとのべ、この平地林のほかになお四〇〇余町歩の村有林があり、村の将来は大いに意を強くすべきものがあるとも述べている。

なお、このとき庁舎敷地として三六坪九合の土地を借りた記録からみると、敷地を拡張したものともみえる。

3 村有林施策基案

本村にとって林政が重要であることは、昭和前期を通じて変わらなかった。

まず、村設苗圃が営まれ、ここで苗木を育てて植栽することが続けられた。「事務報告」によると大正一一年からはじまり毎年一二反歩の苗木が養成され、その苗木と県設苗圃の苗木を加えて多くの植栽が行なわれている。

昭和七年二月には総経費が「金八千六百四拾六円」と変更して議決

昭和九年になって、村の林政にとって最大の収穫は「村有林施業基案」ができたことである。これはその後の林政の方向づけをするものであった。

村有林施業基案

本村の村有林は二〇〇〇余町歩あり、これが連年生長量は毎年一万二〇〇〇石（一町歩当たり一〇〇石とみる）となり、年収六〇〇〇余円（一石当たり五〇銭とみる）となる。施業案は森林を正常な状態に導き毎年この収入額に相当する財源を得ようとするものである。すなわち利用を永遠に保続しその収入額を適正にかつ永久保続する営林をしようとするものである。すでに大正八年三月県会で公有林野施林奨励金交付規程や荒廢地復旧奨励金交付規程でも、昭和二年一月の内務第一号の公有林野整理並びニ管理処分取扱方針でも、共有林の造林営林の方針は示されていた。

このように広大な村有林の適正な営林によって、将来永久に毎年一定額の収入を得ようとして、本村にも施業基案が作成された。これは果の森林技術である倉石貞三によって編成され、それに従って本村の村有林は施業され、村民に恩恵をもたらした。施業基案は大部なものである、その要点を示せば次のようである。

村有林施業案 施業基案 編成者 長野県農林技師 倉石貞三
一、総面積 二二六・一町四二

内施業地 一〇四九町五六

四切地

- | | | | |
|---|-----------|------|-----|
| 1 | 第一一第八林班 | 大芝原 | 地勢緩 |
| 2 | 第一〇林班 | 三本木 | 地勢緩 |
| 3 | 第一二一第一六林班 | 大泉所山 | 地勢急 |
| 4 | 第一七二第二二林班 | 北沢山 | 地勢急 |

林班平均面積 五九町七六（二一林班）

小班平均面積 一五町三（八二小班）

二、施業

樹種の選定は林業経営上の根元であるから最も意を用いる

本村は気候温暖で乾燥地が多いゆえ、赤松・落葉松・櫟の生育は良好であるが、櫟の生育は良好でない。適樹適地主義をとる

○赤松・櫟の混生する所はまず櫟木を伐り漸次赤松を植える。

○赤松の天然生立木地には保護を加えると櫟も生育するのでその計画をたてる。まず上木として赤松を利用しこの伐期が四五年、順次赤松を伐伐して櫟を殖し、その後四五年が最好期を迎えるそこで二分の一の択伐をして、櫟の発生を促す、この方法で総面積二七八町歩から連年六町一反八畝の保護の択伐新林業ができる

○櫟木・櫟などの生育地は四三七町歩あるから、ここは伐期を二五年にして連年一七町五反歩の保護の擇伐新林作業地とする

○依託林六町歩、保安林、官行造林地等（略）

4 村政運営の発展

(1) 村長の村会議長

明治一七年の三新法の改正で、区町村会法が改正され戸長が官選となったとき、それまでは議長は議員の互選が一般的であったのに、戸長が議長となることになった。

この執行と議決のはっきりしない制度は、明治時期だけでなく昭和の前期（戦前戦中）まで続いていた。もともと決算の認定だけは、村長も助役も議長の職務を行なうことを禁じられている。昭和三年の内務部長通達のとおりである。

(2) 議員の村会議長

昭和二年一月七日の村会會議録によると、ここであらび、村會議員の中から村會議長と副議長を選出した記録がみられる。

さきの内務部長の地乙発第一一九号の指示のように、まず年長議員

が議長の職務を代理し、仮議長の選挙をする旨を述べた。満場そのま
ま仮議長をせよとのことになり、議長、副議長の選挙になった。書記
が投票用紙を配って、投票した結果、議長に清水賢、副議長に松沢憲
太郎が当選した。いずれも九票中八票を得ている。

(3) 収入役身元保証

収入役は現金を扱うので、身元保証が必要であった。ここにある資
料は昭和七年のものであるが、このようにして、現在のチェック機能
でなく資産の保証によって収入役が認められた。

収入役身元保証ニ関スル調査

一、収入役身元保証規程設定年月日昭和七年四月十四日

二、規定シタル保証ノ内容

上伊那郡南箕輪村収入役身元保証規程

第一条 本村ハ本規程ノ定ムル所ニ依リ収入役ヨリ身元保証ヲ徴ス

第二条 身元保証ハ現金貳千円以上又ハ之ニ相当スル土地若クハ有価証券ヲ

提供スベシ

第三条 現金ハ郵便貯金又ハ確実ナル銀行ニ預ケ入レ、有価証券ハ郵便官署

又ハ確実ナル銀行ニ保管預入ヲナシ土地ハ低当權設定登記ヲ為スモノト

ス

第四条 身元保証ハ前条ニ依ル保証代ニ代タルニ直接間接年額十円以上ヲ納

ムル信用アル者二人以上ノ連帯保証ヲ以テ之ヲナスコトヲ得

第五条 身元保証ハ就職ノ日ヨリ十日以内ニ之ヲ提供スベシ

第六条 身元保証ハ退職事務引継ぎ後十日ヲ経過スルニアラザレバ之ヲ解除

セズ

第七条 現金及び有価証券ノ保管中生ズル収入ハ身元保証解除ト同時ニ之ヲ

本人ニ交付ス

三、身元保証ヲ徴シタル年月日

昭和七年四月二十六日

四、右保証ノ内容

身元保証書

担当者

今般本村収入役ニ就職致シ候是本村ニ対シ聯カ御達感御損害相掛ケ申ス間敷
タ方一損害相掛ケ候場合ハ直チニ弁償致シ申スベク本村収入役身元保証規程
第四条ニ依リ身元保証書差入レ候也昭和七年四月二十六日(以下略)

(役場文書)

5 教育用地の寄附

(1) 上農塾塾風教育用地

昭和九年四月、研究科「上農塾」が発足し、その塾風教育の場を求
めていた上農の村上校長は、最道の場所として中野原の郡下小学校の
連合運動会場などに使用されていた土地をみつけた。それは西天竜耕
地整理地区内で、南箕輪村、伊那町、西箕輪村の三か町村共有地であ
った。

昭和一〇年六月二十八日、南箕輪村役場で開かれた村議会に、この土
地の無償提供の件が上程された。土地を自分の生命のように大切にす
る農民心理もあって難航したが、村上校長の懇請によってようやく寄
付が可決された。結局、昭和一〇年九月九日、伊那町役場で、三か町
村の共有地五町歩余の寄附採納願に、三町村長が捺印した。

議案五〇号 寄附採納願ニ関スル件

今般県立上伊那農業学校計画ニカカル教育内容改正ニ伴ウ寄附建設並ニ
農場設定ノ件ハ農業教育革新上極メテ適当ナル施設ナルノミナラズ地方産業
開発上尙益少ナカラズト認ムルニ付キ右計画実現ノ場合ハ該施設ニ要スル西
天竜耕地整理地区内左記共有土地ノ寄附採納ヲ果ニ出願スルモノトス

記

上伊那郡南箕輪村字中野原八三〇六番ノ一

原野 台帳反別四町五反六畝二十一歩

実測面積五町四畝十四歩

右所有者 南宮輪村・伊那町・西宮輪村

昭和十年九月六日提出 同日議決

(役場文書)

この議決と全く同じものが三か町村長の署名で同年九月九日に署名捺印されている。そして昭和十一年一月四日には「上農寮」が新築落成式をあげ、本格的な熱風教育がはじまった。

しかし、上農寮の敷地は神子柴の共有地であったが、この地の寄附採納願も、さきの旧中野原入会林場であった運動場跡地のそれも、県の都合で寄附採納が保留になったので、とりあえず借地契約で、上農寮教育ははじめられていた。上農寮の敷地二筆合計三町七反余でその寄附採納願によると次のようであった。

南宮輪村九〇〇九番地 一、山林一町二反四畝一七歩

九〇一〇番地 一、畑二町四反八畝二七歩

この敷地は神子柴の共有地であったので、まず神子柴共有財産整理委員会委員長から村長に寄附採納願を出し、それを村から県に寄附採納したものと考えられる。運動場跡地は昭和二〇年二月に、神子柴共有地は昭和二二年六月になって改めて寄附採納願が提出され、県の採納となった。神子柴区では、共有地寄附の代償として、村との間に大芝原及び三本木原の土地の地上権設定の契約をしている。

(2) 上農校へ大陸科用地寄附

ア 大陸科用地の寄附

大陸に進出した戦争は、新東亜建設を旗じるしにしていよいよ急を付けてきた。上伊那農業学校では農家の長男、第一種生(昭和一四年度志願者は八割が長男)を主として入学させていたが、時局に即応させるべく二、三男を入学させる乙級をつくり、大陸進出を目標とし、そ

れを昭和一五年から実施しようとしていた。その校地の寄附採納願が、本村の村長から県知事にだされている。

寄附採納願

今般県立上伊那農業学校第一種学級増加ノ件新東亜建設ノ聖業實上馬地方子弟フシテ大體農業開墾ニ進出セシムベキ機メテ時勢ニ適応セル緊迫ノ要務ニシテ真ニ画期的教育施設ナリト確信致シ候間右学級増加実現ノ場合ハ上農寮近隣地タル左記本村有地ヲ無償寄附致シ度ク候条御採納相成リ度ク別紙村会決議書相添エ此ノ設願イ出候也

但シ寄附採納後県ノ都合ニヨリ右施設移転廃止等ノ場合ハ前所有者ニ無償下ダラ受クルモノトス

昭和十四年十月二十三日

上伊那郡南宮輪村長 倉田友幸

長野県知事 富田健治殿

記

一、上伊那郡南宮輪村宇島居原八三〇三番ノ二

原野 台帳面積 一町七反歩

一、(以下六筆)略

合計 台帳面積 九町五反三畝一〇歩

実測面積 一〇町歩

所有者 南宮輪村

右見積金額 金二万円

(役場文書)

この寄附した村有地は上農寮と隔たっていたために、近接の神子柴共有地と交換して寄附することになった。昭和十五年七月二五日に提出して二六日に議決になっている。

交換した土地の略図は次図のようであるが、面積は全く同じで、農場としては上農寮に近接したので使いやすくなった。

イ 大陸科用地無償払い下げ

昭和十四年十月二十三日付け上伊那農業高等学校（旧上伊那農業学校）第一種学級増設計画のため本村より無償寄附せる左記土地を今般大陸科廃止に伴い伴の該地寄附採納願出書但し書条項並びに寄附採納議決書但書の条項に基づき本村に無償払い下げ方申請の件承認ありし。

昭和二十四年二月二十三日提出 同月同日議決

上伊那郡南箕輪村長 清水國久

（役場文書）

このようにして、終戦後大陸科の計画は廃止されたのでそっくりそのまま返却されることになった。そしてその校舎四棟も不用となったので払い下げてもらい、村の西南地域の人々の共同施設にした。

(3) 農林専門学校用地三〇町歩寄附

太平洋戦争の戦局は急を上げ、中等学校の修業年限五年制を四年制に短縮するようになった。「修業年限四年に短縮されると、総合教育に支障を来し、上農教育はできなくなるので、むしろこの機会に農林専門学校を付設しよう」ということになった。村上校長は困難をのりこえてこの実現をはかった。

校地については文部省当局は一〇町歩でよいとの意向だったが、将来予想される大学昇格の機会到来に慮ることができるようにと、全国でまれな広大な五〇町歩を獲得しようとした。昭和十九年一〇月二五日開会の南箕輪村会で村上校長の深夜に亘る長時間の熱誠をこめた懇請によって、中野原森林地帯（上農隣接地域）の村有地と区有地の三〇町歩余の有償提供を統の村会で議決した。

これがもとになって、結局次のような土地が提供されて、合計五四町七反七畝という広大なものとなった。

南箕輪村有林地 二〇町九八 原杉蔵 所有地 〇町九〇

神子集区有林地 八町八八 原杉蔵門所有地 五町四五

田畑 区有林地 二町三三 南箕輪村有田 三町九三

大倉 区有林地 四町三〇 堀ノ井 区有地 八町〇〇

そして資金の調達や校舎の獲得、設置競争という苦難ののち、昭和二〇年四月から長野県立農林専門学校は開校のはこびとなった。

なお、このほかに、上農高校に昭和十七年に伊沢演習林として南箕輪村有林地北沢山を（横兵衛七曲り）二二町歩、昭和十八年から九〇年分収歩合五分五分で貸与した。

6 戦時体制下の村政

大正デモクラシーといわれるように、大正時代は何といっても言論・文芸に対する規制は、大幅に緩和された。とくに大正中期から昭和初期には、マルクス主義がさまざまな分野に盛んとなり、昭和恐慌と重なって、社会改造の動きとなり、とりわけ青年層をひきこんでいった。

しかし、満州事変を契機にして、しだいに規制が強められ、日中戦争から太平洋戦争へと拡大するにつれ、きびしい政府の規制下におかれ、挙国一致の戦時体制下では国民生活のすべてが統制され言論の自由もなく窮乏生活をよぎなくされた。

役場資料により、その概要を記すと次のようであった。

(1) 戦時下の統制活動

ア 勤労奉仕・国防献金・戦務祈願

満州事変のころから応召軍人家庭への農繁期の応援が、部落青年会等で行なわれてきたが、日中戦争の昭和二年ごろから一般的にもりあがった。

昭和一三年度からは文部省の通達もあって、学校生徒が農繁期の各農家へ出勤するようになった。桑畑の皮をむいたり、稲刈りを手伝っ

たりする生徒の集団をいたるところでみるようになった。

また国防献金、戦勝祈願が盛んに行なわれた。

イ 校地の寄附（事務局大）

上伊那郡南箕輪村大字四八〇二番イ

一、畑 八畝二六歩

同郡 同村大字四八〇二番ロ

一、畑 一反三畝二歩

同郡 同村字松香丘四八〇三番

一、畑 一反二畝一五歩

同郡 同村八幡道西四八〇一番ノ二

一、山林 三畝一八歩

同郡 同村字同 四八〇一番ノ三

一、畑 四畝二二歩

右土地南箕輪小学校校地トシテ寄附致シタク農間御採納相成リタリ願イ上ゲ候也

昭和二年

上伊那郡南箕輪村四九六五番地 有賀光登

南箕輪村長 倉田友幸殿

ウ 紀元二六〇〇年式典

昭和五年二月一日紀元節が、紀元二六〇〇年に当たるというので、各地で記念事業が行なわれた。

本村では、村有林の造成として、一八町八反三畝に、扇形五万三〇〇〇本の植林を、記念事業とした。なお、一〇月一〇日には各部落で神社の祭典（中祭）を行ない、肇國精神を發揚し、國運の隆盛を祈願した。

この年はすでに農村には物資の不足がおしよせ、砂糖やマッチが配給になり、米穀の町村別割当制が実施されるという状況にあった。一月には大政翼賛会が結成され、南箕輪支部でも部落や常会で、その実をあげるようになっていた。

エ 松脂及び松根油の採集

農商務省は昭和一九年に松根油の緊急増産対策をうちだした。松根

油や松脂はガソリンの代用をするものであった。当村でも壮年団等の勤勞奉仕によって、村有林からこの採集が行なわれた。二〇年にはさらに果知事からその採集の督励があり、一層この採集に力を入れた。

オ 村營製炭事業

昭和一〇年、農業計画にもとづき、村營製炭事業が試みられた。無経験のため、この年は役場、学校の日用消費量を生産するに困難な状態であったが、だんだん生産量を増加していった。通年焼は一萬、農閑焼は五萬であった。

昭和一一年には製炭者が一人となったが、次第に薪炭も不足がちになり、昭和一三年には小学校、役場の年間需要を満たして、相当余りがあるようになった。昭和一八年には公用の需要を満たした上、多量の割当てを供出できた。

本村の役場や学校ではこの恩恵に浴し、他町村から羨望のまどであつた。

カ 珪石採掘

戦時下物資の不足する中で、珪石の採掘が行なわれることになった。

珪石採掘承諾書

上伊那郡大字伊那半南沢神名沢原山寺社平一万〇〇〇一番ノ一

一、保安林 一四丁九反歩ノ内一〇〇〇坪

所有者 南箕輪村 伊那町ノ内（四区）西箕輪村ノ内（五区）

前記地籍ニ於テ下伊那郡飯田市大字飯田九二四番地中島峨ヨリ軍事製炭事業ニ必要ナル耐火煉瓦資材トシテ珪石採掘願イ出アリタルニ付キ之ニ承諾候也
昭和十九年五月二十六日

右土地管理者 上伊那郡南箕輪村長 倉田友幸

（役場文書）

キ 金属の回収

昭和一九年ともなると物資はいよいよ不足して、ついに金属類の回収が行なわれた。この年一月には防空法による疎開命令が発動し、砂糖の配給は八月一日に停止となり、学童の疎開令が翌年四月までとせられる状況のもとにあった。

金属類回収の重要度はいよいよ加重せられつつあるに鑑み左記の点留意の上回収上遺憾なきを期せられたし

- 一、壮年団米英撃撃軍用機敵船運動に伴う金属回収に関する件
- 二、公共団体金属回収に関する件 一月末日まで
- 三、警備台の撤去に関する件 一月十五日までに撤去、末日までに出荷、一月三十一日の供出量により（工作隊引取分に對し）国庫補助金が決定配給せらる

（投場文書）

これにより、昭和一九年には各家庭、各公共施設等の金属類や警備等が根こそぎ撤去され供出された。

ク 疎開世帯の受け入れ

昭和一九年にはすでに防空訓練が盛んに行われていた。防空従事者の扶助のため、当村にも次のように、実費弁償支払い規定が制定されていた。

議案第二十七号

防空法ニ基づく実費弁償支給規定制定ノ件

防空法ニヨリ防空法ニ基づく実費弁償支給規定ヲ別紙ノ通り制定スルモノトス

昭和一九年三月五日 提出 同日議決

上伊勢郡南宮輪材長 倉田友幸印

防空従事者扶助金支給規定

第一条（第六條（略））

（投場文書）

昭和一九年になると空襲がひんぱんになり、一月二十六日には、内務省が東京名古屋に改正防空法による初の疎開命令を発動した。

昭和一九年一月九日、本県（上田）に初めて米機が来襲し、同じころ松本（軍山辺）には爆弾を投下した。昭和二〇年二月一日には岡谷が空襲をうけ、三月九日には東京の下町が大空襲をうけて二万戸が焼失し一二万人の死傷者を出した。この後疎開者がどっと増えて、昭和二〇年には本村に一七〇戸、五一〇人の疎開者があった。いずれも割り込み世帯であったので、住宅難は表面上はなかった。

すでに昭和一九年八月から学童疎開がきまっていたが、本村には大きな寺院等がなかったため、学童の集団疎開はなかったが、縁故疎開による学童は、一五八名もあった。

ケ 農耕隊の開墾と衛生材料工場

▲農耕隊の開墾、食糧増産と液体燃料（松根油）確保のため農耕隊が北原山林の開墾をした。五月一日將校四名、下士官一名が、兵卒二六七名（朝鮮人）をひきつれ、国民学校を宿舎にして開墾をはじめた。終戦の八月一日まで継続した。

▲軍用衛生材料作業も国民学校を借用してはじめた。やはり五月一日からであった。女子工員が一〇名来場したただだったので、高等科の女子学童がその勤労作業に協力した。

二 村の財政

（一）市町村制以前の村の財政

政府は明治元年（一八六八）税法はしばらく旧慣によることとしたため、国も県も旧藩時代の制度により、税は村の石高に応じて課している。各村の費用も、村入用として石高や反別に依りて徴収していた

費目	明治八年	明治十年
府県庁及出張所倉庫等當給費	六、九五八	一三、〇四七
懲役場囚獄舎當給費	三五、〇四一	三九五、二二四
道路堤防橋梁修繕費	九五、五一〇	五七、八七五
布告并布達類入費	三、〇〇〇	二〇、〇九七
管内限連事ニ付調費	一二五、六〇五	四八、一七五
諸御用出頭旅費	六二、四八七	六七、三七八
区役所諸費	四六二、二一五	三六七、一八五
正副戸長以下給料	四、七四六	二五、八〇〇
国営社府県社村社營繕費	三五、四五三	一、六三八
祭典并選擇式費	一五、四一二	二七、〇〇〇
府県社郷社村社神官給料	〇、七七二	一四、五七九
檢見下組及内見其外一切費	四二、五六二	一五、四八〇
實米徴収費及實米五里内運賃	四、四八三	〇
山林調査費	四、八九五	〇
里程調査費	一六三、三六〇	二六、一〇〇
地勢調査費	五、〇九〇	〇
戸籍	六、五五四	〇
徴兵下調費	一六、六二六	〇
学校費	四、一五五	〇
道路掃除費	一三四、四七九	四、〇〇〇
用水水道費	一〇、一〇〇	〇
暴漲水防費	〇	〇
井堰守給料	〇	〇
消防入費	一、〇〇〇	九、〇〇〇
番人給料并諸費	一八、一五五	二、九四〇
其	〇	二、一〇〇
他	六四、八九六	〇
御國役	四、四三〇	〇
橋柱并水量税費	四八、七〇六	六、八〇〇
警察并當給費	七、一七九	五、六〇〇
郵便切干料	一、四一六	〇
馬糞札費	〇	〇

種別費	計	一、九八二、二七〇	一、二三二、二〇〇
開在社積金并調費	一、六四四		
旧助郷世帯返納	二二九、九八〇		
物産取調費	二六、六六二		
合	一、六九五		
計	一、九八二、二七〇	一、二三二、二〇〇	

ものと考えられる。

この徴収された村入用がどのように使われたか、幸いに明治五〇一〇年の民費書上帳が残されているので、それを掲げて、明治八年と一〇年の村費の支出内容を見ることにしよう。(表6-11)

このころ、政府は民費制指令を出して、民費の節約について指導をしているが、これはその資料を得るための民費調査であると思われ、正確な民費の姿を示しているといえる。これによると、正副戸長以下の給料、道路堤防橋梁修繕費が重要な支出項目になっているが、明治八年には、新しい政治経済体制へ移行のための地勢調査費、諸御用出頭旅費などの国政関連事務費、新産業開拓のための開産社積金等が目立っている。さらに非常に広範囲にわたって支出が行なわれ、年支出総額は二〇〇〇円に近い。明治一〇年には過渡期的な経費は減少しているが、まだ、かなり大きな負担になっている。

これらの費用がどのようにして調達されたかは、よくわからないが、おそらく村入用として徴収されたものと考えられる。

明治一一年七月に「地方税規則」が公布された。この地方税規則により今までの募集および区費は一括して地方税として統一され、各町村限りの入費は町村内人民の協議に任せることとなり、村入用は協議費という名称で徴収されることになった。また、戸長以下、戸長役場職員を除く、戸長職務取扱費は地方税(果税)支弁となり、小学校費用も一部地方税から補助されることが定められている。

各村においては、この地方税則および地方税賦課条例に基づいて村の協議費に関する条例がつけられている。南箕輪村においては明治一四年、次のような協議費支弁条例、協議費支出予算、協議費賦課条例が作られている。

明治十四年南箕輪村協議費支弁条例

第一章

第一条 衛生委員ノ定数ハ全村ヨリ四名ヲ撰挙ス

第二条 衛生委員ノ任期ハ滿一カ年トス但シ前任ノモノヲ再選スルコトヲ得

第二章

第三条 県道修繕及ビ掃除受持町場ハ其ノ沿道ノ耕地ニ於テ之ヲ負担シ、毎

歳融雪ノ期ニ於テ着手修繕ノ掃除ハ平常タルベカラズ、殊ニ降雪ノ際ハ必ズ振キ去ルベシ。

第四条 道路修繕及ビ掃除費ハ地方税配布金及ビ村内協議費共併セテ里程ニ除シ、其ノ町数ニ分賦ス。

一中箕輪村ヨリ滝ノ沢迄三町三十間 久保北割

一滝ノ沢ヨリ堀ノ井北殿迄六町 久保南割

一堀ノ井北殿ヨリ北久保堤迄廿二町六間北殿 南殿

一北ノ久保ヨリ大泉川迄五町廿三間平 田畑

一大泉川ヨリ道端橋迄拾四町十四間 神子榮

一道路橋ヨリ伊奈村迄五町十六間 神子榮

第五条 里道修繕費ハ、地方税配布金及ビ村内協議費共併セテ町数ニ除シ分賦ス。

一沢尻ヨリ神子榮ヲ経テ戸長役場ニ達スル凡ソ廿五町余 沢尻・神子榮

一大泉耕地ヨリ戸長役場ニ達スルモノ拾五町 大泉 北殿

第三章

第六条 地方税ヲ課スル戸数割ノ乗率ハ縣令ノ決議ニ準リ、本村負担ノ

金額ヲ建坪戸数、平等戸数ノ途ニ賦課徴収スルヲ法トス。
但シ戸数割ハ全戸出寄留者ハ免除シ、全戸入寄留者ハ之ヲ課スルモノトス。

(役場文書)

さらに、明治一四年度予算案は次のようである。

明治十四年度協議費支出予算

一、金廿五円〇五銭 衛生委員金費(給料・旅費・筆墨其他取扱費)

一、金三十二円五〇銭 道路費(県道修繕及ビ掃除費・里道修繕費)

一、金八十五円七〇銭 村会費(議員弁当料、書記俸給、活版費、諸雑費、小使給金、連合会議員弁当料)

計 金百四十三円二十五銭

(役場文書)

これによってみると、協議費の支出項目は衛生委員金費、道路費、村会費の三項目のみとなり、金額も一四三円と少なく、明治八一〇年の民費の一割程度に圧縮されている。これは、明治一〇年の政府の公布した民費制限令に沿った形としたためと考えられる。

この協議費の徴収は、協議費賦課条例に基づいて行われている。

明治十四年度協議費賦課条例

乙号成議案第一号

第一条 協議費ヲ課スル地価ハ七月一日ノ調べニヨリ、戸数ハ一月一日七月

一日両度ノ調査ニヨリ賦課スルモノトス。

第二条 戸数割ハ平等戸数割トス、但シ全戸出寄留ハ除キ全戸入寄留ハ協議費ヲ課スルヲ法トス。

第三条 徴収期間ハ之ヲ四期ニ定ム。

第一期 六月 第二期 九月 中

第三期 十二月 第四期 三月 中

但シ徴収期日ハ戸長ノ定ムル所ニヨル。

表6-12 明治一五―一八年協議費納入状況

年 度	地方税より下げ 渡し金	地 価 割	戸 数 割	建 坪 割	営 業 割	計
明治一五年	一四二四四二銭	六五七、七九七	二四六四〇二四	一九六四〇九一		三三八四五一
一六年	一四四、六三一	九〇二、一〇三	三二〇、三二〇	一四、三四五		一、〇四八、四五一
一七年	三四七、五五〇	一二五、四一〇	三三六、九一八	二〇、九六〇		一、六三〇、六四六
一八年	一、二五四、三九五					一、四三七、六八三

乙号成議案第二号

一金百四拾参円二十五銭

此訳 金百四二十八銭

地価金 一〇万四、一四二円一銭 金百円ニ付キ金九銭六厘三毛二糸

金 四拾貳円九十七銭 戸数割

戸数五〇一戸二割一戸ニ付キ金八銭五厘七毛六糸

(役場文書)

以上によって明治初期の協議費の全容がわかるが、これは南箕輪における財政全体の状態を示すものではない。同年の「戸長役場経費決算書」によると、支出総額は二六九円七七銭余になっており、二二円二三銭余の赤字決算になっている。この赤字部分を除外しても、協議費の外に一〇四円余の歳入があったことがわかる。その歳入はおそらく地方税下げ渡しであったと考えられる。翌明治一五年度の協議費支弁条列(予算書)では、予め地方税下げ渡し金が歳入に加えられて立案されているが、一四年の段階ではまだこのような形式が定まらなかったであろう。

さらに、地方税から支弁される戸長以下の給料旅費、職務取扱費等は別枠になっているのか、ここには計上されていない。学校教育費に

ついては、当時の大きな費目であったが、明治一四年以降学区町村会法第九条により、村協議費とは別個のものとして、学区毎に別途に徴収され使用された。明治一七年の、本村を含む第二〇番学区の教育収入予算書によると次のようになっていた。

一金四百六拾八円八〇銭 教育費

地価八分 戸数二分

内訳金三百七拾五円四銭 地価割

五万四千三百八十七円三十九銭二割一拾四ニ付キ六銭八厘九毛六糸内

金九拾三円七十六銭 戸数割

十七年七月一日調戸数貳百八十七戸一戸ニ付キ三十二銭六厘六毛九糸

(現在戸数二九三戸)

このように教育費は別途であり、やはり地価および戸数に賦課されている。十七年の協議費の地価割が地価一〇円につき八銭六厘、戸数割が七銭であったから、教育費負担はかなり高いものである。神社祭典等の費用も従来は村入用であったものが、この時期では村とは別の団体の費用として徴収されたものと考えられる。したがって明治一〇年代の協議費(村財政)を見る場合、これらの事情を考慮に入れてみる必要がある。

明治17	地租附加税 (74.0%)	戸数割附加税 (24.8%)	村税総額	1,218.89円
明治36	地租附加税 (34%)	戸数割附加税 (57%)	地租附加税 (12%)	4,695.74円
明治42	地租附加税 (12%)	戸数割附加税 (80%)	地租附加税 (12%)	6,899.21円
大正3	地租附加税 (12%)	戸数割附加税 (54%)	地租附加税 (12%)	7,385.73円
昭和2	地租附加税 (10%)	戸数割附加税 (75%)	地租附加税 (10%)	30,325.55円
昭和17	地租附加税 (25%)	村民税 (22%)	地租附加税 (12%)	16,408.48円

図5-15 村税の税目とその税収中の比重（南箕輪村）

なお、明治一五年一八年の村費歳入額は表6-12のようである。明治一五年長野県会は、戸長役場の仕事は町村独自の仕事で大部分であるとして、戸長給料その他費用の下げ渡しを半減したが、明治一七年になると、自由民権運動を抑え中央集権を強化するため、戸長以下の給料旅費は再び全額県費負担となった。このころから松方財政によるデフレ政策は農村を深刻な不況に落とし入れ、村財政を窮乏させている。

(二) 市町村制実施から大正時代の村財政

明治二十一年の四月市町村制が公布され、翌年四月から施行され

た。これによって従来の戸長制から、町村行政は町村長、助役を中心として運営されることになった。時の内務大臣から知事あての内訓に「町村制施行上最も重要なことは町村長、助役の人を得ることであり、有給による町村長を置くことは町村制の趣旨にそわず、将来に弊害を遺す恐れがある」とし、「自治は本来名譽職による奉公心によるものである」として、町村長、助役は名譽職として無給が原則であった。

これは、自治の基となる町村財政の確立していない段階における町村財政の膨張を抑える一方策でもあったと考えられる。明治中期の村財政の内容はどうかであったのだろうか。資料がなくこれを明らかにすることができないが、全県的な傾向としては、財政支出のうち二五%内外を役場費が占め、学区制廃止により教育費が再び村財政の最大の支出項目となって常時五〇%内外に達し、土木費が役場費について第三位の支出項目になっていた。そして財政は災害復旧費の急増、教育費の漸増で次第に膨張していた。

市町村制においては「租税を主たる財源とせず財産より生ずる収入をもって支弁すべきものとする」という考え方のもとに、明治二五年ころから、町村基本財産の造成による町村財政の確立を図ることが奨励された。こんな状況のとき南箕輪村においては、明治二七年小学校校舎全焼という重大事件が発生した。村では大きな借金をし数年の歳月を要して学校を再建したが、三四年の段階でその村債の償還に四、〇〇〇円ほどを必要としていた。これは当時の平常の年間の歳出額にほぼ等しい額であって、村財政にとって極めて大きな負担であった。

この火災を契機とし、明治二八年村議会は大芝原に一〇町歩の学校林を設置し、さらに同四年には一〇〇町歩の学校林を増設し、基本財産の蓄積に努力している。

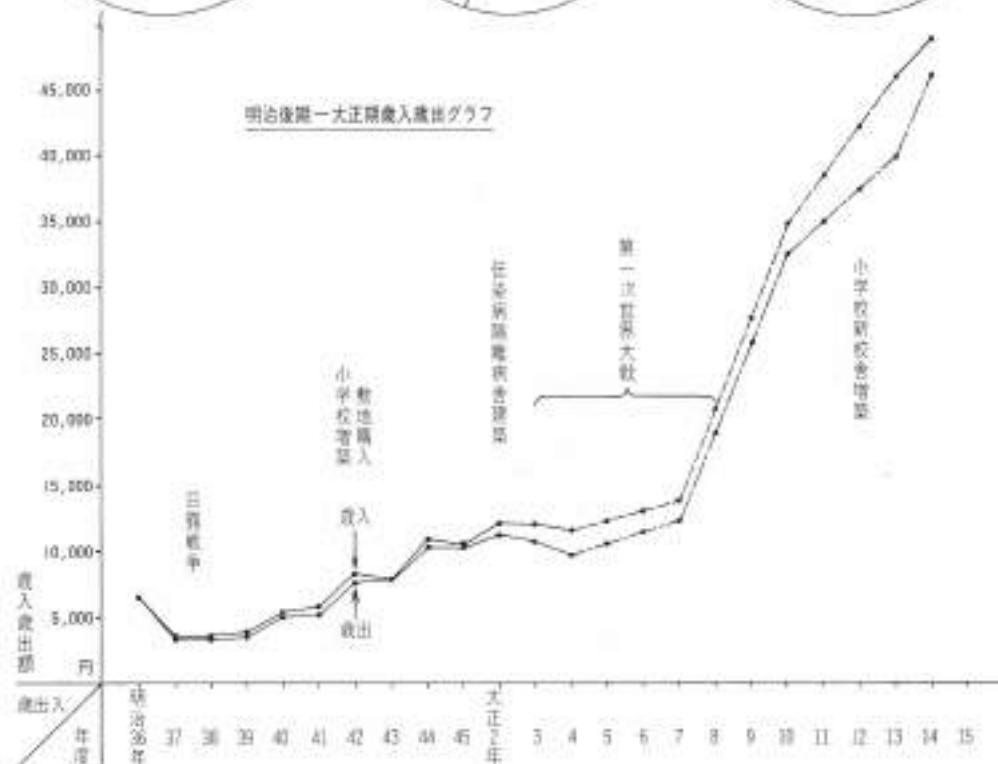
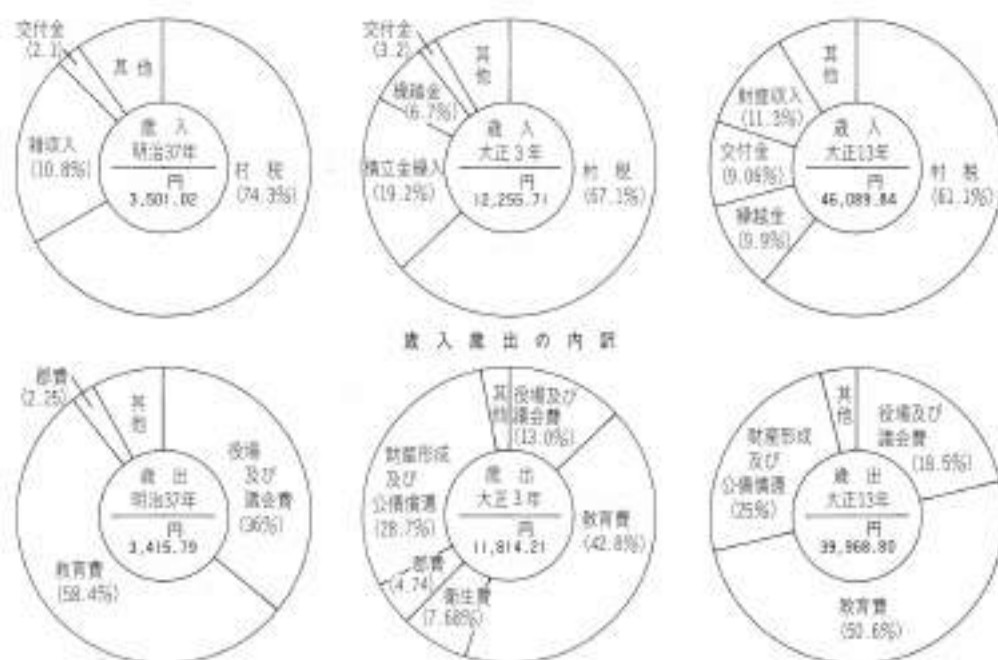


図6-16 明治36～大正14年収入支出の状況

明治四四年、市町村制が改正になり監督官庁の権限が強化され中央集権化が進み、それに伴って地方税制も改正された。これによって村は大正三年村税賦課徴収規定を作ったが、村税は依然として地租附加税、戸数割が中心であり、税収中に占める各税目の比重は図6-15のようである。明治の初期では地租附加税が圧倒的で全体の四分の三を占めているが、しだいにその比重は低下し、これに代わって戸数割附加税が大きくなり、明治四二年では八〇%を占めている。この傾向は昭和一五年の税制改革（戸数割全廃）まで続いている。

明治三六年以後大正期までの南箕輪村の歳入歳出の状況は図6-16のようである。

歳入面で見ると、全歳入中村税の占める比率が三七年で七四・三%、大正三年で六七・一%、同一三年で六一・一%とほぼ三分の二を占め、国や県からの交付金は大正一三年で僅かに九・〇六%になったのみで、財源面での自主性は強かったといえる。

歳出面で見ると、前時期に続いて教育費が最大の費目を示している。村の小学校の校舎の建築、修繕、教員の給与等すべて村負担であったためであった。次に役場経費および議会費が大きい。さらに、この時代は、伝染病がしばしば流行し、年によっては大きな負担となっている。大正三年、同一三年基本財産形成のための積立てが多いのも注目される。

明治末期以後村財政が次第に膨張している。これは当時一般的な地方財政の傾向として、中央集権の強化に対抗して町村自治の独立を全うし、世運の進歩を図る動きが強まったこと、道路交通などの公共事業費および教育費の増大、諸物価の騰貴などが原因とされているが、特に第一次大戦後の好景気と、本村においては、大正一二年の小学校新校舎（南校舎）増築などが原因で、財政の膨張は急激であった。

（三）昭和経済恐慌・戦時体制下の村財政

アメリカ合衆国に始まった世界経済恐慌は、昭和四年後半から漸次価格の暴落として農村経済を直撃した。漸次暴落は昭和五・六・七年と続き、特に昭和五年には米価の下落もあって農家の収入減は著しく、村財政に対して大きな影響を与えている。その第一は村民の窮迫による税金の滞納である。昭和六年・八年の村税の滞納状況を示す次のようである。

年 度	村税調定額	期限内納入済額	滞 納 率
昭和六年	二〇、一二四円	一五、二七九円	二四・〇%
〃 七 〃	一九、四四五	一五、四九三	二〇・四
〃 八 〃	一九、六六一	一七、五一〇	一一・〇

このため、村当局は基本財産積立ての停止、過年度積み立ての基本財産の歳入への繰入れなどのやり繰りのほか、積極的施策の抑制などによる緊縮財政によって不況を切抜ける方策を採っている。しかし、長期化する不況のため村民救済の措置を講ずる必要に迫られ、そのための予算を計上せざるを得ず、応急土木事業費として昭和七年に四、九二〇円、八年に八、五一八円、九年一万九、五六三円、一〇年には一万七、八八〇円を計上し、教育費の自然増と共に、昭和七年から財政は再び膨張を始めている。昭和の始めから、二〇年ごろまでの村財政の歳入出の状況をグラフによって示すと図6-17のようになる。

昭和六年失業救済農山漁村臨時対策低利資金制度が設けられ、村は県よりこの制度資金二万二、〇〇〇円を借り入れて村民に転貸をし、昭和七年には一万二、〇五〇円の養老応急資金を勸業銀行から、各種

団体に融資が受けられるよう措置をとり、九年には養蚕不況救済のため融資を受けて耕地改良事業等を実施している。

しかし、不況下で財政上極めて困難な時代であったにもかかわらず、村政推進の場としての役場庁舎の老朽狭隘化は放置することができず、数年来の計画に基づき新しい役場庁舎の建設（費用九、一四五円）が昭和七年に行なわれ、基本財産蓄積のための大芝原・三本木原・北原等の村有林に対する扇柏を中心とする植林と、手入れ間伐等の育成作業が大正末期から昭和九年まで続けられたのである。

村債については、すでに昭和二年自作農創設維持資金三万四、〇〇

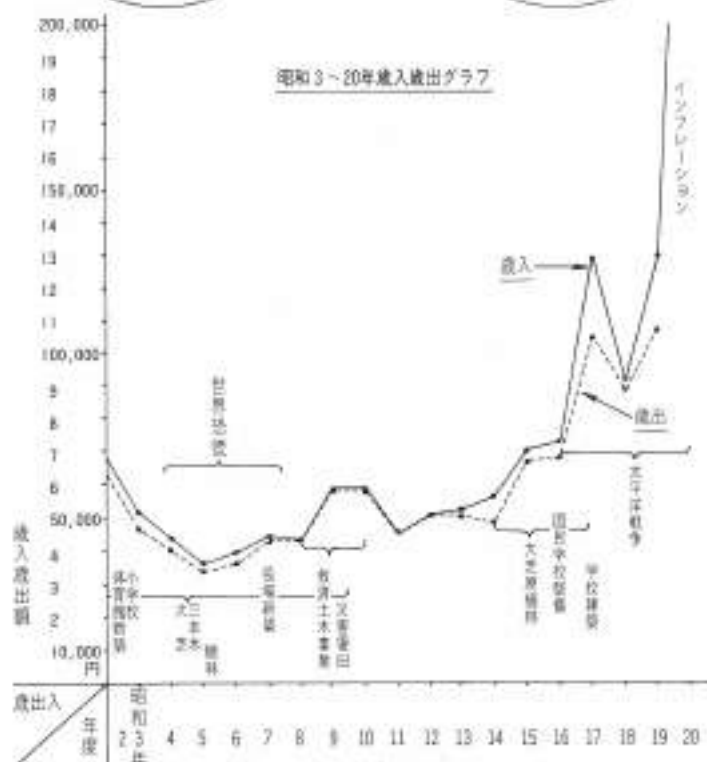
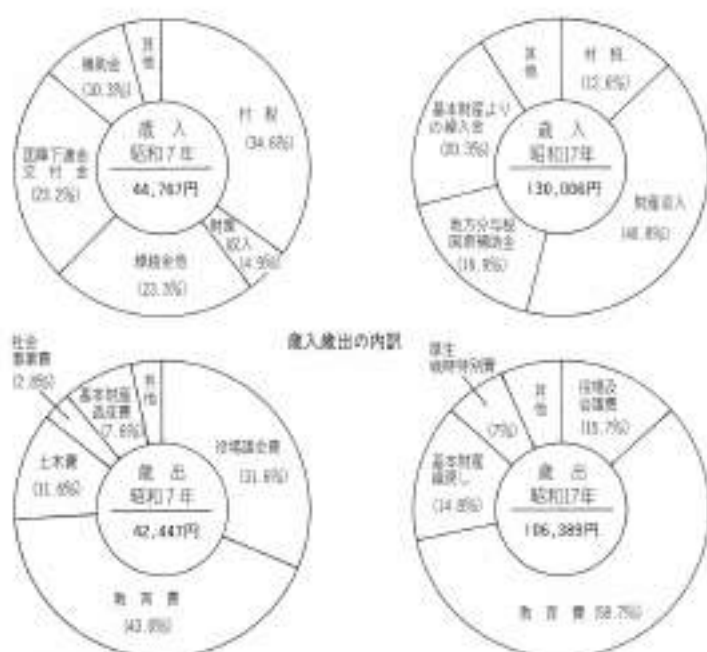


図5-17 昭和3～20年の収入支出の状況

〇円の起債があり、不況対策として先に述べた失業救済対策低利資金、養蚕応急資金等多くが村債の形をとっており、これが返済は転貸を受けた村民の返済によるわけであるが、不況の長期化によってその返済が多く、昭和一〇年代の行政の重要な課題となった。

昭和七年ころから各村に経済更生委員会が作られ、市町村経済の更生計画の策定実行、負債整理事業、町村財政確立のための努力が、戦時体制下の昭和一四～五年まで続けられた。

昭和一五年、また地方税制が改正された。これは地方税制の画期的改革であり、これに基づいて新たに南箕輪村税賦課徴収条例が制定さ

れた。その抜粋を示すと次のようである。

南筑輪村税賦課徴収条例(抜粋)

第一章 総則

第一条 略

第二条 本村トシテ課スルモノ左ノ如シ

国税附加税、地租附加税、家屋税附加税、営業税附加税、賦区税附加税、果樹附加税、反別税附加税、自動車税附加税、電柱税附加税、不動産取得税附加税、得税附加税、漁業権税附加税、狩猟者税附加税

独立税、市町村民税、身税、自転車税、荷車税、金庫税、扇風機税

大税

第三条 第六條 略

第七條 国税附加税ノ賦課率左ノ如シ

地租附加税 本税ノ百分ノ二百六十 家屋税 本税ノ百分ノ三百六十

営業税 本税ノ百分ノ二百六十 賦区税 本税ノ百分ノ十

第八條 果樹附加税ノ賦課率左ノ如シ

反別附加税 本税ノ百分ノ百 自動車税附加税 本税ノ百分ノ百

電柱税附加税 百分ノ百 不動産取得税附加税 本税ノ百分ノ百

第九條 独立税ノ賦課率左ノ如シ

身税、自転車税、荷車税、金庫税、扇風機税、大税(各賦課額略)

第十條 村民税ハ二十五等級ニ分チテ各納税義務者ノ賦課額ハ見立テニ依リ

毎年度村会ノ議決ヲ經テ定ム

(以下略)

(税場文書)

村税制は国税附加税、果樹附加税、独立税の三本立てになり、独立税内に初めて村民税が生まれ、戸数割が廃止された。しかし、地租附加税、家屋税附加税、営業税附加税等はしだいに弾力性を失い、市町村財政は政府からの配付税、地方分与税への依存度を高めることとな

り、昭和一八年の市町村制の改正によって自治的傾向は次第に否認され、国政―県政―市町村政という一元化がはかられ、村政は戦争遂行政策の下達機関として役割を持つようになったのである。さらに、村財政は昭和一九一六年の国民学校の整備、一七年の学校建築があり、時局関係費の増大、国政委任事務の増加、戦時インフレーションの高進などにより、その規模はしだいに膨張したのである。

例 太平洋戦争後の村財政

昭和二二年地方自治法が公布され、従来の市町村制は廃止され、地方税法も逐次改正された。二四年にはインフレーションの激化に伴う財政の急膨張に対処する住民税の大幅値上げ、二五年五月の地方財政平衡交付金法の公布があった。しかし、より根本的な変革は、二五年八月の、占領軍によるシャウブ税制勧告であった。これによって地方税制は根本から再編成され、現行税制の基礎が作られたのである。それは、町村税の中心に独立税としての町村民税と固定資産税を据え、その税収と政府からの平衡交付金(二九年度から地方交付税となる)、国、県からの補助金によって財政を運用するという骨組みが作られたのである。

戦後における財政はインフレーションによる自然膨張の外、民主的諸制度の制定によって歳出面の多様化とともに、絶対額も急膨張を示すことになった。戦後における南筑輪村の歳入歳出の状況をグラフによって示すと図6-18および19のとおりである。

村の財政を歳入面のみでみよう。まず、村税収入であるが、全歳入中に占める村税の割合は、昭和二五年の三二・八%からしだいに減少し、四〇年・五〇年度は一五・一七%台に低下している。五五年には二〇%台に回復しているが、全般的に減少傾向であることは否めない。反面で地方交付税、国、県の支出金または補助金の割合が非常に高くなっ

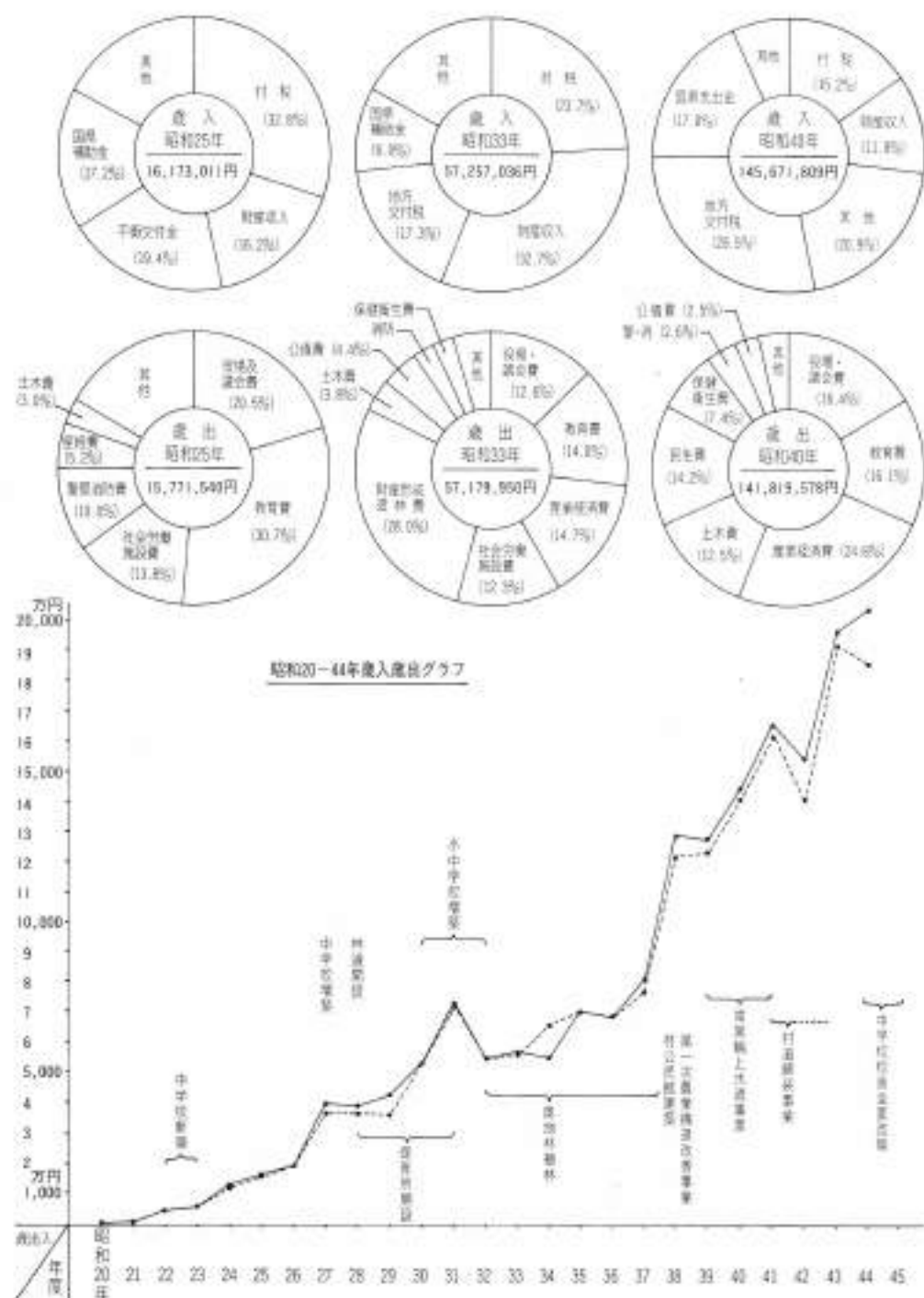


図6-18 昭和20～44年度収入支出の状況

第4節 村の行財政・金融

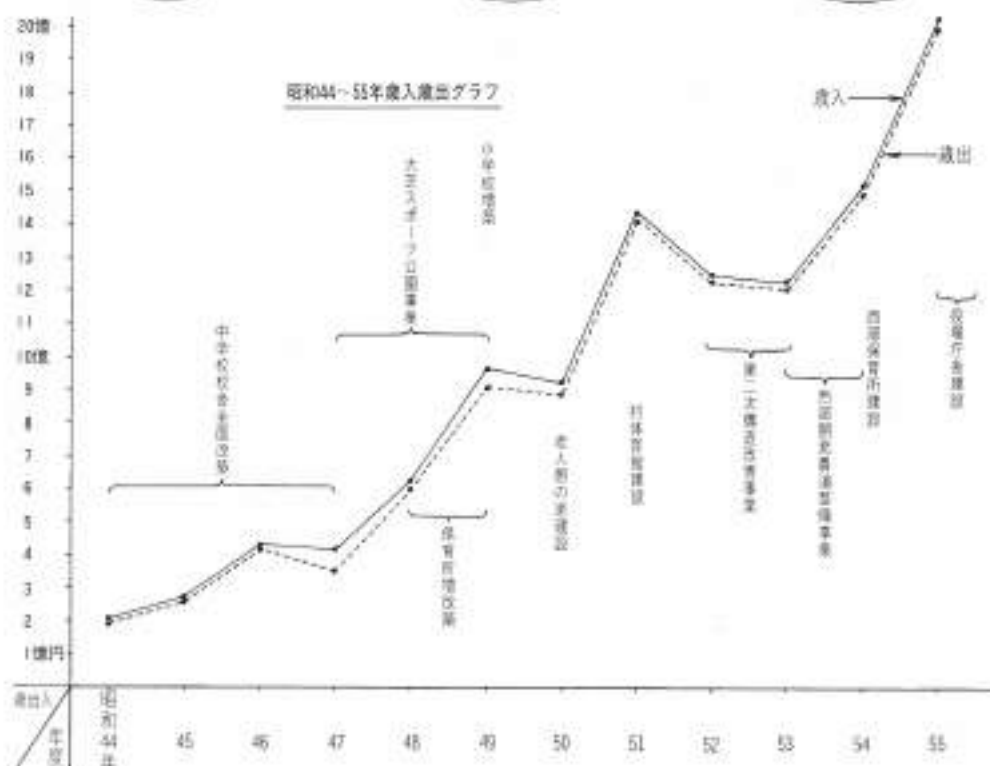
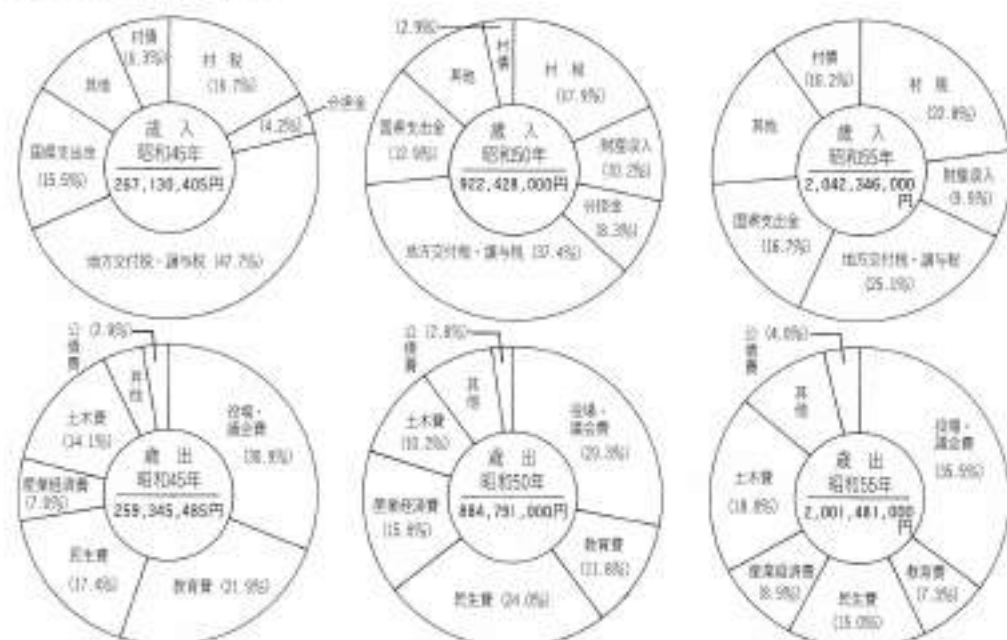


図5-19 昭和44～55年の歳入歳出の状況



図6-20 税収の科目とその比率

ている。昭和二五年の兩者合わせて三六・六％から、四〇年の四五・五％と増し、昭和四五年には六三・二％に達している。このうち地方交付税は定められた規準に従って算定交付され、その歳出は村行政の裁量に委されているとはいえある程度の制約は免れず、村独自の自主的財源はまさに三〇％程度で、俗にいう三割自治という実態が、財政面ではっきり示されているといえる。

なお、戦後における税収の内容は図6-20のとおりである。

次に財政を歳出面でみていこう。教育費は依然として大きな費目であるが、教員給が県費負担となったことから、平常年においてはその比率はかなり低くなっている。しかし、民主化の進展と共に社会労働施設費ないし民生費の増額となつて現われ、また、戦後の食糧の増産と農業の近代的发展のための産業経済費が増加し、さらに四〇年ごろから土木費が全歳出の一〇〜二〇％に達するようになっている。

昭和二六年一〇月に行われた社会保障制度の勧告に基づく施策、とくに二八年ころから始められた公設保育所の開設、民主化の要請による社会労働施設ないし民生費の増大、戦後のベビーブーム時に生まれた子供たちの学齢化による小学校校舎の増築の必要等が重なり、さりとて経済的復興は充分でなく、とくに昭和二八年の大冷害は農村経済

に大打撃を与え、町村財政は極めて困難な状態にあった。このため、昭和三〇年ごろ地方財政は極度に悪化し、赤字団体が急速に増加した。同年一二月このような地方財政を再建するため「地方財政再建促進特別措置法」が公布された。この法の適用を申請した赤字団体は再建債の発行を認められ、その利子補給を国から受けることが出来るが、国の強い指導統制を受けることになった。長野県も昭和三十一年、遂に財政再建団体となったが、その後の急速な経済の発展によって税収の伸びがあり、三六年再建団体から脱却することができた。

南箕輪村はこのような地方財政の困難な時代も、よく村民に大きな負担を課することなくして赤字団体に転落することもなく乗り切ることができた。その乗り切り策をみると、第一に基本財産の一般会計への繰り入れで、それは次のように行われた。

昭和二年	四二六、〇〇〇円	三四年	一六二、三八四円
二四〇〇	六〇〇、〇〇〇	三五〇〇	七、六三五、一二五
二八〇〇	四、六一五、一九七	三八〇〇	二、六五一、四〇〇
二九〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三九〇〇	六二六、〇〇〇
三〇〇〇	一、七〇〇、〇〇〇	四〇〇〇	八、九六七、〇〇〇
三二〇〇	二二九、九九八		
昭和三年	一八一、〇〇〇円	三八年	九、三〇〇、〇〇〇円
二七〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	三九〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
三〇〇〇	一、九二〇、〇〇〇	四〇〇〇	九、三〇〇、〇〇〇
三二〇〇	二二九、九九八		
三三〇〇	二〇四、九七二		

その二は村債の起債であり、それは次のようであった。

このように本村においても基本財産の一般会計への繰り入れ、村債の起債が行なわれたが、歳入総額から見ればそれほど大きな額ではな

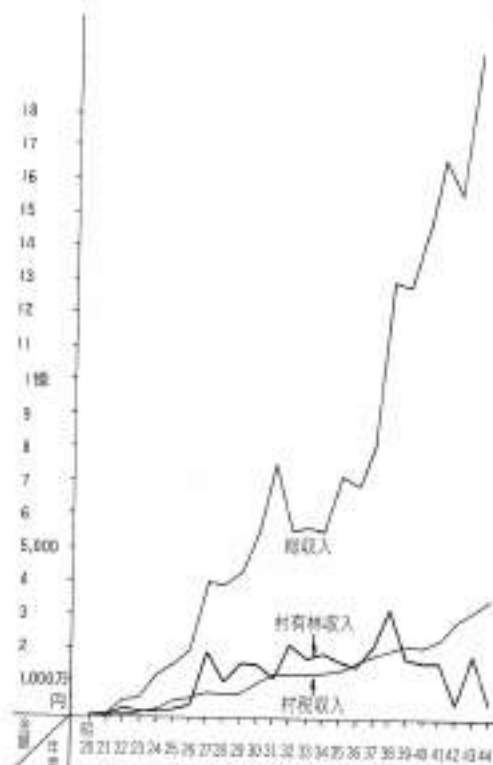


図21 村財政と村有林収入（昭和22～43）

く、村財政を救った最大の力を持ったのは第三の財産収入であった。南箕輪村は明治二八年ころから歴代村長の指導のもとに村民一丸となって、基本財産として村有林を育成してきたのであるが、それが漸く伐期に達しており、この村有林木の売却収入が二二年ころから四〇年ころまで、村財政に大きな寄与をしているのである。この時代の村税収入と村有林収入の状態を示すと図6-21のとおりである。

この村有林収入のうち、昭和三年から三八年ころまでは、奥地林の植林に伴う伐木の販売代金も含まれているが、大部分は明治の中ころから大正にかけて植林された大芝原村有林の伐木であって、昭和二七年から三八年ころまでは、その販売額が村税収入を上回っており、時には村税収入の倍以上の寄与をしている年もある。これが、南箕輪村の財政を健全な姿で推移することを可能にした最大の要因である。われわれは明治以来の先祖の汗の結晶のおかげで、赤字団体に転落することなく村を発展させることができたといっても過言ではないとい

える。

昭和四五年ころから村財政はまた急速に膨張し、五五年には役場庁舎建設という特殊事情はあるが二〇億円の大台に乗っている、このような急膨張の理由はどこにあるだろうか。第一は村の人口の急増である。昭和三五年ころから増加の方向に転じた村の人口は、社会的増と第二次ベビーブームによる出生率の増加によって、県下でも有数の人口急増村となり、それに応じた施策が必要になった。第二は、日本経済の発展が急速でこのころから地方の発展が目覚ましく、村内における産業従事者数が急増し、とくに第二次産業従事者数の急増がみられ、村税の伸びが著しくなった。第三は、右二条件のもとに当然に必要となる幼児保育施設の拡充で、保育所保育母の数は急増し村職員数中の過半数を超えるにいたったこと。第四は、このような状況の中で次々に継起する大型事業の実施である。昭和四四年から同四七年にかけての中学校校舎の全面改築、四八・五四年の各保育所の増改築、四九年の小学校増築、五一年の村民体育館の建設、五二・四年の第二次農業構造改善事業及び西部開発事業、さらに五五・六年の役場新庁舎建設事業等々である。これらは必要欠くべからざるものか時代の要請に基づくものが多いが、他面でかなり積極的な財政運営も行なわれているといえる。

このようにして財政の急膨張となったが、この財政支出を賄うため、次のように村債の起債が行なわれている。

昭和四五年	一六、七〇〇千円	五一年	二億五三、五〇〇千円
四六〇〇	四四、一〇〇〇	五二〇〇	五七、〇〇〇〇
四七〇〇	三三、一〇〇〇	五三〇〇	五九、〇〇〇〇
四八〇〇	二二、四〇〇〇	五四〇〇	八五、〇〇〇〇
四九〇〇	一億二四、八〇〇〇	五五〇〇	二〇七、五〇〇〇

五〇年 二七、〇〇〇千円 五六年 三四五、三〇〇千円
したがって、村債の償還（元利の支払い）のための年々の公債費支
払いも多額となり財政支出中の公債費が増加している。

年度	元利返済額	公債費比
昭和五〇	二五、一四七千円	四、九%
五一	二九、一八五	五、一
五二	五六、三〇七	八、五
五三	六二、一九二	七、五
五四	七〇、五六二	七、一
五五	八〇、二七二	七、四
五六	一〇一、四一九	七、七
五七	一二四、七七六	九、九
		予定

公債費比が一五%に達すると財政の危険信号といわれるが本村の実
態は、まだ公債費が一〇%未満であり、五六年末の県下平均の公債比
は九・五%であり、類似町村のそれと比較してみても悪い状態ではな
く健全財政が維持されているが、自主財源の確保と、財政の硬直化を
防止し、健全財政の維持には一層の努力が必要であると思われる。

その努力の一つが既に昭和四〇年代の半ばから、村の従来からの方
針を揺る動かす大きな問題として持ち上ってきた大芝原観光開発の問
題である。

大芝原観光開発は、今までの山林経営という方向の大転換で、村内
に賛否両論があったが、昭和四八年大芝原のうち一三万坪が伊那国際
ゴルフクラブに貸付け開発が行なわれ、協力一時金として一億四〇〇
〇万円を得、貸地料として坪一〇〇円（年間二三〇〇万円）が財政収入
となり、増大した財政規模の中では極く一部に少ないが、現在は貸地
料も坪一九六円七五銭に改訂され、財産収入の重要な部分を占めるこ

とになっている。

このような自主財源の確保は他の面でも努力が行なわれ特に工場誘
致等にその成果が現れつつあるが、今後さらに多方面での努力が要望
されて来る。

三 金融の発展

（一）従来からの方式による金融

1 土地売買による金融

明治になって土地に対する封建的諸制限は廃止され、土地の売買は
自由になった。しかし、田や畑は農民にとって生活の大切な基盤であ
り、これを失うことは農家経済の崩壊につながるものであるから、土
地を手放したくない気持ちは切実であったと考えられる。ところが、
土地以外に金融を受ける方法が無かったため、土地の売買はかなり
頻繁に行なわれている。明治時代の初期における本村内の土地売買の
実態を掲げると表6-13のようである。

明治一四年ころまでの年間の耕地売却件数は二〇、五〇件、面積で
二、五町歩程度、金額で二〇〇〇円内外でそれほど大きな額ではない
が、松方財政による米価の下落、農村の不況が明治一六年ころから始
まって二〇年ころまで続いており、この不況下の明治一七年の土地売
買は急速に増加している。耕地の売買件数で二二八件、面積で三〇町
歩に達しており、これは、当時村の耕地総面積六〇〇町歩の五%に当
たっている。この割合で一〇年経過すれば大半の土地が地主に集中す
る勢いであって、売買土地価格（山林原野を含む）もそれまでの二〇〇
〇円内外から、一挙に一〇倍余の二万余円に達している。

このように、不況時に土地売買が急増していることは農民の生活の
窮迫の姿と共に、他に資金調達の手がない当時の金融の実態を示して
いるといえよう。

表 8-13 明治初期南興輪における土地売買の実態

計	原野	山林	宅地	耕地	明治一〇年					
					件数	面積	金額	件数	面積	金額
件数	五〇	八	二	二	二二	四〇	五〇	二二	四〇	五〇
面積	五〇〇〇	八〇〇	二〇〇	二〇〇	二二	四〇	五〇	二二	四〇	五〇
金額	五〇〇〇	八〇〇	二〇〇	二〇〇	二二	四〇	五〇	二二	四〇	五〇
件数	五〇	八	二	二	二二	四〇	五〇	二二	四〇	五〇
面積	五〇〇〇	八〇〇	二〇〇	二〇〇	二二	四〇	五〇	二二	四〇	五〇
金額	五〇〇〇	八〇〇	二〇〇	二〇〇	二二	四〇	五〇	二二	四〇	五〇

2 無 限

庶民の相互金融の組織としての無限は、明治になってもそれが減少するどころか、ますます盛んに行われるようになっていく。家屋の改修、災害の受難、病氣、あるいは馬の購入等よほどのない資金の必要に迫られたとき、発起人（頼み親）は講（金）員を募って無限を始めるわけであるが、明治から大正、昭和初期へかけて、馬の病死に遭い、新しい馬の購入のためよく馬無限が当てられたようである。

無限は年二回盆と暮に開かれるのが通例であったようであるが、第一回は頼み親が取り人となり、二回以後はせりにより取り人が定められ、講が開かれるごとにその取り金を分割返済していくわけである。中には毎回の掛金が出せないような講（金）員もできてきて問題も多かったようである。しかし、まとまった資金を必要とする事態が生ずる限り、無限は絶えず新しく生れており、現在でも活用されている例がある。

昭和三年における南興輪村の無限の状態は次のようであった。

無尽講数	八二組
無尽金額	二万七、一〇〇円
未収金	九万九、七五〇円
講員数	一、二四四人
既得金	一〇万六、六九五円
一か年掛金総額	四万一、八二〇円
（村勢要覧より）	

1 開 産 社

開産社は、明治六年筑摩県令永山盛輝により管下の筑摩・諏訪・安曇・伊那四郡と飛騨国の大区長三〇名を招集して、彼等を発起人として設立を企て、明治八年三月より開業した半官半民の金融組織である。その目的としては、開産社発行大綱によると「一、業ヲ節メ産ヲ開ク」とあり、筑摩県民に資金を供給することによって新しい産業を育成するにあった。

この開産社の資金は、明治四、五年の朝鮮民救助積立金、果官一同の出資金、政府よりの拝借金の貸し下げ等によっているが、一般民衆からも次のように積立金を徴収している。

農民は田畑一反ごとに

士族は宅地三〇〇坪ごとに

一般市民は券状二〇四ごとに

米・雑穀一升ずつ積み立て

しかし、明治九年分の「開産社積立金小前帳」（役場文書）によると、村の総地価一〇万六、七二四円に対して、積立金七四、一四四円となっており、地価百円に対し七銭の積金を徴収している。

このような資金を基にして、目的に添った希望者に資金を貸与したわけで、希望者は村役場に資金借用願（願書には抵当に充当すべき土地を明記）を提出し、村役場でそれを審査し戸長の奥書を付して開産社に提出する。開産社はさらにそれを審査し、貸与の可否、貸与額を決定して役場を経由して本人に通知する仕組みになっており、借用人は改めて信用証書に抵当証書を添えて提出する。信用証書の一例を示すと次のようである。

記

一金四拾四也 利率一割二分

此ノ返済 元一六四利一元二八錢 明治十年八月二十五日迄

元二四利一元二〇錢 十月廿五日迄

元二四利一元四四錢 十二月廿五日迄

右ハ田圃ノ地起返リ資本トシテ正ニ借用申シ候、返済ノ儀ハ前書ノ通り割合致シ約定候上、万一本入滞リ候リバ受人ニテ井清致シ条則ノ通り御カセ違背致ス間敷ク、コレニ依リ別紙抵当証書相添エ差シ出シ候也

明治十年十一月十八日 第十七大区八小区伊那郡南真輪村

本人 加藤 某
 受人組合 加藤 某
 無組組合 加藤 某
 戸長 高木省三
 副戸長 原 新五郎

開産社御中

田 三カ所 三反八畝十四歩（略記）代値一六九円一三錢

右ハ今般資本金四拾四借用致シ候、抵当差シ出シ置キ候也相違御座無ク候以上

開産社御中

受人 加藤 某

〃 加藤 某

開書ノ通り地所地引帳ニ引キ合ワセ実地反別地価相違御座無ク候 以上

明治十年十一月

右村戸長 高木省三

（役場文書）

借入れ金額は、開産社資金が不足のためか希望額は貸してもらえず、内容によって異なるが二〇〇〇〇〇〇〇〇程度で、その利息は一〇〇〇円につき月一元となっており年利一割二分であった。借用期間は一年を原則とし、六か月の据え置きの後二か月ごとに三回くらいに元利を分割返済し、一か年に完済するという厳しい条件であった。抵当はすべて農地であり、商人等で農地を持たないものはその請人が抵当の土地を出しており、その額は代価（地価）が借入れ金額よりかなり多く、右の資料では四倍余になっている。

資金借入れの目的は開産社の趣旨に従っており、生活資金の借入れの例はなく、本村の例では開墾・荒地起返りの資金、綿屋・綿屋・酒造・製糸・縮緬・油絞り等の生業資金の借入れをしている。

開産社は農村不況の遂行により貸付金の回収が困難になり、また、各地に銀行の設立を見るに至って、明治一五年には早くも合議のうえ解散の決議が行なわれ、二三年にはその姿を消してしまつた。その間僅かに一〇年足らずであるが、明治初期は人々が新しい産業を求めて動き出していた時期であったから、金融上重要な意味を持っていた。本村では開産社貸出しの初年度である明治八年の借入れ希望数は一〇件で、その金額は四五〇〇〇円に達したが、実際に借入れができたのは五件、一五〇〇円であった。

表6-14 上伊那銀行・箕輪銀行の預金高と貸付高

項目		預 金		貸 付 金	
		現 在 高	期間預金高	現 在 高	期間貸付高
上伊那銀行	明治四四 上半期	491,816	1,325,347	778,632	1,273,844
	下 "	664,409	2,066,011	926,498	1,909,543
	大正六 上 "	761,567	2,371,303	1,429,843	1,946,513
	下 "	1,143,888	3,664,275	2,147,953	3,821,849
箕輪銀行	明治四四 並 "	16,260	34,137	52,354	82,538
	下 "	17,830	44,828	58,072	116,510
	大正六 並 "	26,275	31,454	93,876	49,655
	下 "	36,844	108,011	107,598	114,801

(1) 銀行の創立

明治九年、国立銀行条例の改正によって正貨準備の条件が無くなり、長野県内にも明治一〇年城下町であった松本に第十四銀行、上田に第十九銀行、翌年松代に第六十三銀行、飯田に第百十七銀行と四つの国立銀行が生まれた。

これらの国立銀行のうち、第十四銀行と第百十七銀行は当地方の金融にかなりの影響を与えたものと思われる。

これらの国立銀行は営業年限が二〇年間と定められていたので期限後はそれぞれ私立の銀行となった。日清戦争の勝利は日本経済を大きく発展させ、上伊那にも明治三三年に平出銀行（朝日村）、大綿屋銀行、上伊那銀行（以上伊那町）箕輪銀行（中箕輪村）、庚子銀行（赤穂村）が生まれ、また、他地方に本店をもつ銀行が数店、支店を郡内に

設け、明治三〇年代から大正時代にかけては銀行乱立の状態となったのである。

本村内には銀行本店、支店は設けられなかったが、近くの上伊那銀行などは村内金融にも関係が深かったと考えられ、両銀行の明治四四年と大正六年の預金及び貸付金の状況を示すと表6-14のようである。

しかし大正末期から、昭和の恐慌期にかけて、銀行は倒産、買収、併合が行なわれて、戦時体制下になっては一県一行主義がとられ、県内では、六十三銀行と十九銀行の合併によって生まれた八十二銀行のみとなった。

八十二銀行は各地に支店を持ち県内金融の中心機関となったが、戦時体制下にあつては貯蓄的機関としての性格が強くなっていた。

(2) 農工銀行

農工銀行は、明治二九年の農工銀行法の制定によって各府県に設立された不動産銀行で、長野県では株式会社長野農工銀行として長野市に設立され、松本にその支店（後には伊那にも支店）が設けられている。政府はこの設立に当たって一県三〇万円を出資して交付している。その目的とするところは農工業の改良発達で開業社の意志を継ぐものであった。その業務内容は、

① 田畑など不動産を抵当として年賦又は定期貸し付け

② 地方公共団体への提携貸し付け

③ 農漁業者二〇人以上の連帯責任を条件とする無抵当貸し付け

の三つであった。その後、法が改正されて産業組合貸し付けならびに耕地整理貸し付けも行なえるようになった。

こうして、農工銀行は農村における金融の中心の座を占めるようになった。本村内においても農工銀行からの借入は多く、いま一例を示

す。次のようである。

金銭貸借契約書

債務者 藤沢 某 加藤 某 他十一名

右代理人 藤沢 某

立会人 松本土族 郡郷良助

第一条 債務者藤沢某外拾貳名横井戸堀野田ノ費途ニ充ツル為左記ノ地所ヲ第一番抵当ニ書キ入レ、金壹千四百円ヲ利息壹分年九分ノ定メヲ以テ連帯責任ヲ以テ借り受ケ 株式会社長野農工銀行ハ之ヲ貸シ付ケ其ノ金円ノ受渡シヲ終了セリ

抵当左ノ如シ

田畑合三拾四筆 (略)

第二条 (略)

第三条 一〇カ年賦 上半期一〇九円七銭 下半期一〇九円八銭ズツ

第四条 第十二条 (略)

右関係人ニ読ミ聞カセタル処各自相違無キ事ヲ認メ左ニ署名捺印ス

明治三十二年六月拾三日

株式会社長野農工銀行取締役頭取 西沢善太郎殿

(税場文書)

これは田畑区の有志一三名が原の地域に横井戸を掘削し、畑五町歩、原野三〇町歩を園田する資金として、三〇〇〇円の借入を、一か年据え置き、二〇か年賦の条件で申し込んだのに対して、金額を一四〇〇円に減額、年利九分、一〇か年賦償還という条件で貸借契約が成立したものである。この横井戸計画は計画通りの水が出なくて不幸にして失敗に終わり、その返済には苦労があったことと思われる。農工銀行からの借入は外にも多く、個人的にも借用しているが、不動産

表6-15 南筑輪郵便局の郵便貯金及び為替業務取扱い高

年	種 類	貯 金			為 替	
		普 通 貯 金	定 額 貯 金	合 計	受 高	払 高
昭和30	件 数	5,464件	755件	6,219件	158件	203件
	金 額	12,301千円	7,719千円	20,020千円	796千円	1,496千円
"	件 数	4,334	1,085	5,419	181	214
40	金 額	28,305	24,601	52,906	2,707	5,666
"	件 数	4,946	5,850	10,796	356	279
50	金 額	166,716	343,930	510,646	10,978	14,922

銀行として開業社同様抵当がすべて不動産（農家では主として耕地）であったので、多くの土地が農工銀行の抵当に入れたのである。

この農工銀行も、大正九年の第一次世界大戦後の反動恐慌を契機として経営難に直面し、日本勧業銀行への合併方式が決定され、しだいに農工銀行がその姿を消していったが、長野農工銀行は昭和一九年の最後の合併のころまで存続していた。

3 郵便局と庶民金融

郵便局は本村にも開設され、明治の末期より通常の郵便業務のほか、郵便貯金の受け入れおよび為替業務の取り扱いを通じて、庶民金融機関として重要な役割を果たすようになってきた。

郵便貯金は零細な余裕金をこつこつと蓄え、あるいは目的を持った団体預金等に利用され、時には不時の必要に備

第4節 村の行財政・金融

[illegible]

表1-16 南興麵食業組合貯金受け入れ払い出しの状況

(國家聯合專家委員會) 1998)

えて貯蓄し、さらには家庭の財布代わりに活用する等庶民金融機関として顧しまれている。また、為替業務は学資金や商品代金、会費等の送受金に手軽に利用され、庶民の金融に格段の便宜を提供し、貯金と共にその取扱い高はしだいに増加している。戦後における南箕輪村郵便局の金融面の取扱い高を示すと表6—15のようである。

また、大正一五年からは簡易保険制度が定められて保険契約が始つた。それは保険であると同時に一種の長期の貯蓄としての性格も持つており、その取り扱い高は昭和五七年度において受け入れ保険料が一万四八一七件で一億七八〇四万余円に達している。

さらに、昭和四十七年六月からは貸付金制度も開始された。この貸付金制度は本人の郵便定額貯金及び積立貯金額の範囲内という条件があるが、五十七年度においてその取り扱い高は受け入れ一五九件、二四三六万金円、払い一九六件、三四四一万金円に達し、庶民金融機関として

て重要な役割を担っているのである。

四、產業組合—農業會

南箕輪村には大正一〇年二月、産業組合が設立された。この産業組合の主要な事業として信用事業が同時に開始された。

産業組合は商業組合法に基づいて設立されているもので多くの場合販売購買事業、利用事業等も行なわれている。信用事業は組合員を中心として多くの人からその余裕金を貯金として預かるほか、その貯金を基にして資金を必要とする組合員に貸与して、組合員の生産の発展、生活の向上を図るのを目的とした相互金融組織である。この信用事業は初期のうちは規模も小さかったがしだいに取り扱い高が増加しその後における村内農民金融の中心的存在に発展した。昭和四十八年は不況のときであるが貯金の受け入れ、貸付け金の状況を事業報告により示すと次のようである。

表6-17 南興輪産業組合資金貸出し状況

(産業組合事業報告書より)

年度	貸付区別	前年度末現在高		本年度貸付高		本年度償還高		本年度末現在高	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
昭和四年	無担保	六〇三	七八、六〇七・〇六	八三八	一〇四、三六二・〇〇	八八二	九四、二八二・〇七	五五九	八八、六八六・九九
	有担保	五	二、六五〇・〇〇	五	二、六五〇・〇〇	二	一、一六〇・〇〇	八	四、一四〇・〇〇
昭和八年	無担保	四五八	八四、三四四・八七	三五	三五、〇〇七・五〇	七九	六七、九三六・一九	四一四	五一、四一六・一八
	有担保	二二	一〇、七五三・八七	八四	三三、六七五・〇七	六七	九三六・一九	一〇六	四三、四二八・九四
合 計	合 計	六〇八	八一、二五七・〇六	八四三	一〇七、〇一二・〇〇	八八四	九五、四四二・〇七	五六七	九二、八二六・九九
	合 計	四八〇	九五、〇九八・七四	一一九	六七、六八二・五七	七九	六七、九三六・一九	五二〇	九四、八四五・一二

昭和四年は後半に世界経済恐慌が押し寄せ始めた年であるが、まだそれほど大きな影響を受けておらず一六万九千九百五十円程度の貯金を受け入れ、一四万四千三百四十円の払い出しをし、差し引二万五千〇〇〇円ほどの受け入れ地となっているが、昭和八年は恐慌の真の最中であって貯金受け入れ額は三分の一に減少、払い出し額も減少しているが受入れ額を超えており、農村不況の姿を明瞭に示している。

これに対し、組合員に対する資金貸出しの状況は表6-17のとおりである。

昭和四年の貸付金額は一〇万七千〇二四円で、貯金受入高の二倍余となり、償還高も九万五千四百三十四円と多く、活発な金融の姿を示しているが、昭和八年貸付高は同四年に比し件数で七分の一以下、金額で七〇%以下に減少し、不況時における農村金融の著しい萎縮の姿を示している。

両年度とも年度末における貸付金残高は、同年度末の貯金受入れ残高に極めて接近しており、組合の健全運営という点では問題があったとしても、当時産業組合信用事業が農村金融において重要な役割を果

していたことが理解されよう。

次に、貸付金がどのような使途で貸し出されているかを昭和四年についてその実態を見ると表6-18のようである。

昭和初期における組合貸付金の中心は肥料資金であって、表にみるように件数で六七〇件(七六%)、金額で六万五千四百一円(六六%)と圧倒的部分を占めており、ついで田舎の整理のための貸付けが一八一件、三万四千七百六円(三二・六%)で多く、生活資金の貸出しはごく僅かである。農家は多くが肥料・養蚕資材等の生産資材を借金して購入(掛買)し、出来秋にそれを支払うという形をとったのである。

産業組合は、戦時体制下に入り昭和一九年政府の指導に基づいて「農業会」として編成替えをし、南興輪産業会となった。産業組合の事業であった販売購買事業や信用事業等は継続実施されたが、農民の協同組織としての立場はうすれ、国策遂行のための協力団体、上意下達の間接となり、信用事業なども国策に沿った貯蓄増強のための努力がその中心となった。戦時中のため新たな投資をする気風が少なくなり、農民の中からも積極的な融資を求める声もなく、専ら貯蓄への関

心が高まり、本来の金融機関としての役割はなくなってしまった。

表6-18 貸付目的別件数及び金額（昭和四年）（農業組合事業報告書より）

貸付の目的	担保の有無別	同上件数	金額
旧債整理	無担保	一八一	三四、八七六・九七
資本金	土地担保	二	一、四〇〇・〇〇
肥料資金	無担保	六七〇	六五、四四一・五三
	有価証券担保	一	五〇・〇〇
養蚕資金	無担保	四	四八五・五〇
事業資金	無担保	一七	二、五九〇・〇〇
経済資金	無担保	六	七七〇・〇〇
土地買入	無担保	一	二〇〇・〇〇
資金	有価証券担保	二	一、二〇〇・〇〇

戦後の農村金融

1 戦後の金融の混乱と公益質屋

太平洋戦争直後の日本経済は、インフレーションと食糧危機による極端な混乱の時代であり、金融面においても特別な時代であった。戦争による施設・設備の破壊と老朽化、資材の不足等によって生産力は極端に低下し、これに大因作が重なって極端な物資不足に陥っていた。そこに戦時中抑圧されていた購買力が、そのころの換物指向の風潮を作り出して一気に吹き出し、物価は日に日に急騰した。

そこで政府は二年二月「金融緊急処置令」を公布して、二月に貯金その他の金融機関の債務を一切封鎖し、その支払いを原則として停止した。いわゆる預金封鎖といわれるものであり、同時に新円が発行された。封鎖された貯金からの現金払いは新円で行なわれ、世帯主には生活資金として月額三〇〇円、世帯員には一人一〇〇円の割合で支払

われたに過ぎなかった。また、手持ちの旧券は新円との交換が行なわれ、その際一人につき一〇〇円の新円が交換されて、これを超える旧券は貯金として封鎖されたのである。

さらに、同年八月一日を期して貯金を第一封鎖と第二封鎖に分け、個人では一人四〇〇〇円、法人その他の団体では一口一万五〇〇〇円以内を第一封鎖、それを超えた部分を第二封鎖とし、第二封鎖預金は凍結された。このようにして預金封鎖は昭和二年七月まで続き、通貨流通量は一時的に抑制することができたが、その後日本銀行券発行高はしだいに増加し、昭和二〇年末の発行高五五四億四千万円が同二年末には九二二億四千万円、二二年末には二一九一億四千万円になり、二三年末には三五二億四千万円と二〇年末の六・四倍になって、インフレーションの進行は止らなかつた。

このような情勢のうち、占領軍の指導に基づく経済安定計画が昭和二四年から実施され、それに基づく徴税は通貨の吸収を高め、一般には金詰まりとなり、経済界は沈滞した。ところが、たまたま二五年六月に朝鮮動乱が起り、日本経済は米軍の軍需品の調達により特需景気がおこりしだいに活気もどき、昭和二六年ごろには戦前の水準の生産力を回復し、さらに、同三年には「神武景気」といわれるほどの景気の上昇を示し、金融もまた活発化してきた。

しかし、農村における金融の状態は戦後の混乱を抜きさらず庶民金融は困難な状態にあった。そこで各町村に住民の金融の便を図るため公益質屋を設けるところが多かった。本村においても昭和三〇年ごろから村民の金融の便を図るため公益質屋を開くこととし、その業務を北殿区の村に委託して始めている。

この公益質屋は昭和三七年一二月まで続けられているが、これを利用した人数は年間三〇〇人を超え、質物は衣類・装身具・戦時中に発行

表6-19 公益質屋利用状況

(役員文書より)

年度	利用者職業							質物種類										貸出取納元利計		
	労働	小工	小商	農	漁	他	計	債券		業務用品		家具		装身具		衣類		其他		計
								口	点	口	点	口	点	口	点	口	点	口	点	
昭22	97	73	9	23	122	0	7331	10	3			2	3	21	19	323	610	81	92	437727
昭23	98	79	4	30	133	0	20364	47	19			1	1	27	28	361	668	55	52	491768
昭24	97	55	2	22	105	0	21302	28	13					33	30	247	518	30	27	337588
昭25	34	34	2	15	56		5146	11	4					28	27	129	200	16	14	184305
昭26	(資料が欠け不明)																			
昭27	8	6		1	4		19	2	1					3	3	24	50	2	1	3155
																		回収金	利子金	元利計
																		円	円	円
																		574,364	62,695	637,059
																		627,080	86,476	708,558
																		435,767	88,841	524,608
																		247,540	46,590	294,130
																		51,930	3,233	55,163

された債券・その他で、その中心は衣類であった。昭和三年の貸し出し口数四九一件、貸出金額六二万七〇〇〇余円に達し庶民金融としての役割を果たしたが、経済の発展、金融の正常化と共に利用者が減少してその使命を終わった。

2 農業協同組合

昭和二三年農業会の資産を引き継いで農業協同組合が発足し、購買事業と結びついた金融の仕組みによって、農家にとって切り離すことのできない金融機関となり、その信用事業はますます重要さを増している。

村民（特に農民）と農業協同組合との密接な関係を示す、貯金および貸付金の状況は表6-20のようである。

昭和二八年は戦後で最

悪の冷害による凶作年であり、三〇年は平年作の年であるが兩年を比較してみると、二八年は凶作のため貯金の受け入れが三〇年に比べ約五六%と非常に少なくなっており、反面で農協からの貸出高は冷害・風水害のため長期割賦貸付金が一六〇六万余円と大きく増加している。農家の経済状態がそのまま組合の金融面に反映されており、深いつながりがわかる。

昭和三〇年ごろから経済活動が発展し、農業協同組合の金融もすでに活発化してきているが、その貯金および貸し付けの動きは次のようであった。

まず、貯金の面をみると、昭和二九年ごろまでは備荒貯金・貯貯金等が奨励され、とくに貯貯金は出荷日を定めて各部落の集会所に集荷し、その代金を貯金にするという方法で零細な金額をこつこつと蓄えるという方式をとっていた。昭和三〇年ごろからは一・三・六貯蓄増強運動を展開している。農家の収入のうち一割を貯蓄に当て三割を次年度の生産費、六割を生活費に当てるようにする計画的貯蓄の奨励であり、さらに、昭和三六年ころからは各人の貯蓄高を所得一年分に高めようという運動が展開された。昭和四七年ころからは貯金高が急速に増加しているが、それは農家のなかで農外収入を得る人たちが急速に増加し、それらの収入が農協の貯金に回されるようになったことと、中央道や都市計画等に基づく土地の売却代金が大きく影響している。さらに、四九・五五年は農地の宅地化が急速に進み、その土地代金が大きく貯金高を増大させている。

貸付金についてみると、昭和三〇年ごろまでは農業資材や生活資金の貸し付けが中心で、貸付け方式は農業手形貸付や証書貸付の方法であった。昭和三十一年から岩戸景気といわれた時期に入り、生活の近代化・農業の近代化が叫ばれるようになり、台所や風呂の改善、農機具

第4節 村の行財政・金融

表6-20 南興輪船業協同組合の貯金及び貸付金の状況

昭和28年 ① 農協預金受入高の増減（円）

	前年度末現在高		本年度受入高	本年度払戻高	本年度末現在	
	件数	金額			件数	金額
普通貯金	5,482	25,904,844	152,739,715	139,481,612	4,898	39,162,947
定期貯金	745	12,099,702	11,524,212	12,299,971	607	11,323,943
定額貯金	5	5,400	23,400	19,000	10	9,800
小計	750	12,105,102	11,547,612	12,318,971	617	11,333,743
出資予約貯金	1,056	6,326,929	412,689	6,387,860	1,053	351,759
合計	7,288	44,336,875	164,700,016	158,188,443	6,568	50,348,449

昭和30年

普通貯金	4,538	26,929,298	250,137,808	247,883,179	5,568	29,183,927
定期貯金	731	16,555,548	42,562,941	19,707,092	1,020	39,411,397
小計	5,269	43,484,846	292,700,749	267,590,271	6,588	68,595,324
出資予約貯金	1,097	5,358,330	1,147,224	351,180	1,100	6,154,374
合計	6,366	48,843,176	293,847,973	267,941,451	7,688	74,749,698

昭和28年 ② 貸出金の増減（円）

	前年度末現在		本年度貸出高	本年度回収高	本年度末現在	
	件数	金額			件数	金額
短期	手形貸付	226	6,780,068	16,893,990	230	6,218,770
	証書貸付			18,380		
	農手貸付	389	6,655,800	23,204,475	611	16,246,970
	小計	655	13,435,868	40,116,845	841	22,465,740
長期	割賦貸付		16,068,200	144,000	1,021	15,924,200
	農漁資金貸	3	2,094,150	1,252,703	1	841,447
合計	658	15,530,018	56,185,045	32,483,677	1,863	39,231,387

昭和30年

短期	農手貸付	194	4,570,611	10,230,726	10,533,801	269	4,267,476
	手形貸付	300	9,865,715	34,644,779	22,603,047	302	21,907,447
	当座貸越						
	小計	494	14,436,326	44,875,505	33,136,908	571	26,174,923
長期	割賦貸付	909	14,379,695	3,256,500	5,301,982	211	12,344,213
	農漁資金貸	35	3,646,312	0	524,719	26	3,121,593
	合計	944	18,026,007	3,256,500	5,826,701	246	15,465,806
合計		1,438	32,462,333	48,142,005	38,963,609	817	41,640,729

（各年度事業報告より）

(新機械等)の購入資金の貸し付けが増加し、昭和三十九年ごろから所得倍増計画がしだいに具現して経済は急速に発展をし、生活面では住宅の改築、自動車・テレビ等の購入資金、生産面では引き続き農機具の購入のほか、耕地整理、区画整理、畦畔ブロック購入資金等が貸付金の中心になっている。昭和四十七年ごろから五三年にかけては本格的な住宅建築ブームとなり、その資金需要が多くなり、農業面では経営の専門化(酪農・肉牛・果樹等)大型化の指向が強くなり、それに必要な資金需要が多くなっている。四七―四九年は石油ショックによる金融の抑制があったが、この時期を除いてかなり活発な融資活動が行なわれた。これらの資金の借入れには次項に述べる各種制度金融が有効に活用されたことはいまでもない。最近では教育資金の貸し出しが増加している。

さらに、南箕輪農業協同組合は昭和四〇年より村指定の金融機関となり、村内金融の上で果たす役割はますます大きくなっており、昭和五一年からは伊那農業協同組合南箕輪事業所として、広域経済のなかでその事業を発展させている。

3 特殊銀行の設立と制度金融の発展

表6-21 農業関係制度金融の利用状況

年度	種類	近代化資金		改良資金		総合資金		農地取得資金		村単独融資事業	
		件数	金額 千円	件数	金額 千円	件数	金額 千円	件数	金額 千円	件数	金額 千円
昭和 47		12	3,420	25	6,782	1	5,410	6	4,750		
" 48		4	5,870	6	2,760	1	5,900	2	1,450		
" 49		13	22,500	7	3,273	5	48,920	6	6,240		
" 50		18	26,050	10	6,786	3	28,420	5	6,000		
" 51		33	61,700	5	2,728			6	6,000		
" 52		18	90,584	2	4,500			7	7,720	11	30,870
" 53		11	25,680	1	3,000			7	1,966	5	9,880
" 54		9	34,675	1	400			2	8,700	5	2,450

(役場文書・農協文書より作成)

表6-22 商工業関係制度金融の利用状況

年度	種類	村商工業振興資金		小規模企業事業資金		中小企業振興資金		同左側面防止分	
		件数	金額 千円	件数	金額 千円	件数	金額	件数	金額
昭和 49		9	7,700	20	24,280				
" 50		8	8,000	7	8,350	5	16,000		(公害防止 設備資金)
" 51		9	11,900	12	23,300	4	18,500	1	13,500
" 52		?	3,900		?		?		
" 53		?	44,500				81,600		
" 54		?	84,300		?		?		
" 55		11	18,800	11	26,000	13	99,000	1	11,000
" 56		18	29,400	13	37,000	11	61,500	1	12,000

(役場文書・農協文書より作成)

一般市中銀行からは、中小企業者や農業経営者、一般庶民は融資を受けることは困難である場合が多く、この点を補う目的をもって戦後に各種の特殊金融機関が設立されている。

昭和二四年には政府が全額出資の庶民への金融機関として国民金融公庫が設立され、二五年には国民大衆の住宅の建設及び宅地の購入資金を融資する目的をもって住宅金融公庫が設立された。更に、二六年には信用金庫法に基づいて中小企業者や勤労者を会員とし、それらに融資を目的とする信用金庫が各地に開店し、二八年には農林漁業の生産性を高める近代化を進めるために、長期低利の資金を供給する農林漁業金融公庫が設けられ、三二年には地方公共団体に必要とする資金を融通する目的で公営企業金融公庫が発足し、三八年には中小企業の近代化促進を図るため中小企業金融公庫が設立される等、金融組織は多岐になり、しかも公庫は直接の外に市中銀行や信用金庫、農業協同組合等を窓口としており、中小企業者や農業経営者、一般庶民も融資を受けやすくなった。

これらの金融機関による融資は、設立の趣旨から目的を持った融資であって、例えば中小企業の振興あるいは近代化、農業の改良、近代化等を促進するための法律に基づいてその条件に適合した場合に融資を受けることができるのである。このような金融を制度金融と呼んで表6-23 農林漁業関係の住宅金融公庫からの借入れ

年度	件数	金額	年度	件数	金額
昭和四八年	四五	五九、一六〇	昭和五三年	二二二	七〇九、四〇〇
四九	四二	七〇、二〇〇	五四	三三	九八、三〇〇
五〇	六四	一五九、〇〇〇	五五	四五	一五七、五〇〇
五一	三六	九一、〇〇〇	五六	二六	五七、〇〇〇
五二	二二八	六三七、六〇〇	五七	一四	四七、〇〇〇

いるが、その種類が多く特に農業に対しては多種の制度金融が行なわれている。

中小企業に対する融資は商工組合中央金庫のほかに、信用金庫、中小企業金融公庫等が融資を行う場合が多いが、これに対して県は中小企業振興資金（一般事業分特別事業分制度防止対策分、小規模企業事業資金の融資制度を定め、昭和四九年度から融資を開始している。

本村における制度金融の利用状況を表6-21及び表6-22のようである。農業関係制度金融の表のうちで村単独融資事業とあるのは、農業構造改善事業等のうちで、資金の融資を必要とするが制度金融の条件に合わないものに対して、村で融資を斡旋したものである。

制度金融のうち、大きな額のものに住宅資金の借り入れがある。住宅金融公庫の窓口は一般市中銀行も行なっており、その窓口を通しての借入も多いと思われるが、農協を窓口としている借り入れも多い。伊那農協南箕輪事業所を窓口にして融資を受けた件数と金額は表6-23のようであって、昭和五二、五三の両年の借り入れは、住宅建設ブームのついでに、金額共に非常に多い。

地方自治体においても経常収入によって財政を賄うことができない場合は、なんらかの臨時収入を求めるか、借入金によるしか方法がない。昭和三〇年ごろから地方自治体の財政収支が極度に悪化し、赤字再建団体に転落した町村が多かった。本村は幸いにして豊かな村有林を保有していたためその危機を乗り切ることができたが、それでも大きな事業をするときには他からの融資を受けねばならなかった。このような地方公共団体の資金の必要に応ずるため、公営企業金融公庫が昭和三三年に設立されたことはすでに述べたが、これを利用し、そのほかに大蔵省資金運用部資金、郵政省（簡易保険局資金）関東財務局等から融資を受けることが多い。これらは一般市中銀行より有利な条件

での融資を受けられ、本村においても、公有林野整備造林事業、校舎や体育館の建設、村営運動場建設、保育所建設・プール建設・道路整備・農業基盤整備・役場庁舎の建設等のため、昭和三〇年代の終わりとから毎年のように融資を受けてきた。

四 産業組合・農業会

（一）南箕輪村の産業組合

1 産業組合の設立

上伊那の産業組合はまず蘭や生糸の販売のための組合として発足した。明治一九年に伊那村（現伊那市）に上伊那蚕糸業組合が設立されたがこれは二三年に解散された。明治三一年に東春近に合資会社上伊那生糸が設立され、三三年に産業組合法が制定されたとき、この法に基づいて、有限責任上伊那生糸販売組合に組織変更をした。これが法に基づいた産業組合のさきがけである。

明治三八年四月一〇日大泉部落に有限責任大泉購買組合が設立された。これは本村に設立された最初の組合である。

さらに、同四年二月六日信用組合兼営が認可された。これが本村組合の先駆であった。

明治末から大正にかけて養蚕が盛んになり当村農家の生活はやや向上の方向にあった。先に述べたように本村の産業組合は蘭や生糸の販売を主たる目的として設立するのが主であったが、本村には明治三六年来長田製糸が、大正一〇年に高木製糸が開業されたり、伊那町にできた伊那社の組合員になる者もあって蘭や生糸販売の面における組合の設立要望はあまり切実でなかった。

第一次大戦から戦後にかけて糸価の高値と相まって、蚕糸王国長野県は空前の活況を呈し、養蚕を主体とする本村の農家はその中にあっ

て生活も豊かになった。

ところが大正九年五月に糸価が急激に暴落し、蚕糸業界は未曾有の恐慌におそわれた。夏秋蚕繭の暴落は甚だしく、現金収入を養蚕に頼っている農家の打撃は大きかった。大戦後の好況になれ、ようやく華美に流れようとした生活の建てなおしは容易でなく、負債処理に苦しむ農家が続出し、農家経済はとみに悪くなった。社会不安もさざし将来に対する憂慮の念を抱く人々も多くなった。そのため生産活動と消費生活を共同の力によって有利にしようとする要求が起こり、産業組合設立の機運が醸成された。そこで各部落から選ばれた設立発起人が集まって組合設立のことを議した。

大正一〇年二月設立発起人二三名によって産業組合法による有限責任南箕輪村信用販売組合設立となり、初代組合長に松沢郡寿を推し、南殿の「流屋」の一室を借りて事務所とし、組合員一三四名、出資一口三〇円、口数三九、出資総額四一七〇円という規模をもって出発したのである。

2 経営困難な草創期

産業組合の大事な部門である販売事業は、当時本村の主産物である蘭は村内の製糸工場や伊那町の伊那社に売られ、一方、西天竜の開田事業が進んで生産の多くなった米は西天竜農業倉庫に所属したため振わず、販売品は零に等しい状態であった。

大正一二年の関東大震災に際し、横浜の在庫製糸の五五%が焼失したといわれ、このとき長野県の製糸業も莫大な損害を被り製糸家の倒産が続出し、養蚕農家にその影響は直ちに及んできた。かてて加えるに一三年には霜害と干害にいためつけられて大正九年以来の不況はついに長期化した。

組合員の産業組合への期待は大きかったが組織そのものは未だ脆弱

であり、産業組合法の範囲内では農民の期待にこたえる程の力はなかった。そのころ産業組合の性格に関する論議も盛んにされた。産業組合は小生産者相互の互助連帯の組織をもって大資本に対抗するものだと考へも生まれ、欧米諸国にも論議が盛んであった。日本の場合、柳田国男は自由、進歩、協同、相助を、平田東助は信用、勤儉、共同、同業をもって産業組合を支える根本理念であると主張した。このような論議が盛んにされた中で、大正一〇年に産業組合全国大会では、産業組合は勤儉力行、思想善導、共存同業をもって根本方針とすべきであると決定してあった。この方針に基づいて本村の産業組合は相互扶助、共存同業の旗印のもとに発足したが、前述のとおり販売事業の実績をあげることができず、大正一四年三月に信用事業と購買事業だけとすることにし、名称も有限責任南箕輪村信用購買組合と改称した。

大正一五年にはまたまた桑畑の暴落により貸付金の回収困難の状況にあったが、組合員の要望もあり、組合長はじめ理事等役員の方力によって事務所を新たに造る議が起り、当時神子柴部落にあった高木館製糸工場が伊那町地区に移転したのを機に、女工の寮室などに使用されていた二階建て一棟を譲り受ける話がまとまり、昭和二年一月南殿の地にこれを移築して事務所を移すことができた。

この年春は大凍害を被り、三年には秋葉の大不作等があり組合員の経済状態は好転せず貸付金のこげつきも累積し、組合の経営は困難を極めた。一方、商工会議所など商人側からは反産業組合運動が烈しくなった。

昭和五年には産業組合青年連盟が創立されて組合活動を支える力となった。この年凍害で痛めつけられたところへ補助は一貫匁当たり二円台となり、晩秋蚕繭は一回五〇銭という値もつけられるほどに

なった。農村の不況は深刻化し、そのころ教員給は市町村支弁であったため、教員給の不払い、減俸などを訴える町村が多く出た。世相は不穏となり、一月には浜口首相が狙撃され、軍部によるファシズム化はいよいよ強くなった。日本の失業者は三二万二〇〇〇人あり都市で失業した者で農村へ帰れる便宜のある者は農村へ帰り、便宜のないものは浮浪者となって巷にあふれた。

このころ、農村は全国的に窮乏のどん底に呻吟しており、この社会状況のもと井上蔵相が殺され、犬養首相また殺害されるという政情不安が続き、昭和六年に勃発した満州事変はしだいに拡大され、日本は暗い戦争時代に入っていくことになった。その中で、この窮乏した農村救済の請願運動が起り、八月には教員臨時国会が開かれたほどである。農林省には経済更生部が設置され、これにより農山村経済更生運動の一環に産業組合拡充五か年計画が樹立され、産業組合未設置町村の解消、全農産物組合加入、全産業組合の四種（信用・販売・購買・利用）兼営化等々の運動が始まった。なお外郭団体として産業組合青年連盟の全国連合も結成された。これに対し、全国反産業組合の商権擁護連盟も結成され、商工省は反産業組合の態度を決定し、中央地方を問わず反産業組合運動が勃興した。

農村恐慌は農家の負債累積と、借金する力さえ喪失という困窮のどん底に陥り始めていた。

こういう状況の中で昭和六年には本村の組合長が姿をくらますという騒ぎが起きた。

そのときの組合の状況は左のとおりであった。

組合員数	五〇六人
払込出資金	一万八六二四円
積立金	一七二八円

貯金	七万六六三・一円
借入金	二万五八二・四円
預金	七四八円
貸付金	一〇万九七〇・七円
購買高	二万三二八・八円

この数字から察せられるように活動は活発でなく、貸付金の回収は困難で、いわば行き詰まった状況下にあった。

購買事業についてみると、店舗といっても店舗らしいものでなく、事務所が独立できたときからその片隅に品物をおき、荷車に日用雑貨を積んで、見本箱を持って風鈴を振って組合員の家を一軒一軒訪れてご用の向きを聞きながら売って回った。そのうち昭和九年ごろリヤカーを購入し、これはゴム輪だからたいへん楽になったと喜んだ。一四年には自転車を購入されて、これにリヤカーを付けて走り歩く仕掛けとなった。この状態は協同組合の初期まで続いた。

3 産業組合再建の努力

組合長が姿を見せず困難な経営から脱却する方策につき役員で検討協議して、まず組合長に征矢唯治郎を推すことにした。氏は当時組合の監事であったが、また、村の収入役の地位にあったためその承諾を得るには相当困難であったが、翌昭和八年一月ようやく就任してもらうことになった。

新組合長は役員のものに積極的に活動を開始し、まず負債整理に着手した。産業組合が危機に瀕したというので組合員の信用を得られず貯金は減少する一方、負債の利子さえ回収できないという状況のもとで、根気よく努力することによって着々と経営の挽回をはかった。村産業組合の再建は容易でなかったが地道な努力が重ね続けられたのである。

昭和七年には出資額を一口五〇円と変更し、八年一月に保証責任に変更した。糸価が上向きになり農産大豊作、米価も上昇して本村の組合事業は漸く好転して来た。九年一月には、現在の放送センターの所に利用部を設置し、穀類、製粉、精米等の利用事業を開始した。同年四月には保証責任南箕輪村信用販売購買利用組合と改称し四種兼営組合となった。

一五年には農家の収入が多く、漸く貯蓄目標が達成できるまでになり、出資も増加することができた。産調処理については一六年に伊那社の区域は正があり竜水社に加入することができた。

一七年には農業倉庫業が許可になり、事務所東側に農業倉庫を新築した。さらに、一八年には西天竜農業倉庫の区域は正によって、倉庫二棟を譲り受け、ようやく産業組合として十全の機能を発揮する状態になって来たのである。

(二) 南箕輪村農業会

太平洋戦争が長びき苦烈になってくると食糧増産が喫緊事となり、農民の使命はいよいよ重く、産業組合活動に期待される面が多くなり、本村の組合はそれにこたえる態勢が漸く整って来た。ところが国家的立場からは戦争目的遂行のために各方面とも統制が強化され、食糧増産のための農業団体は一本に統合されることになり一八年一二月には農業団体法が成立し、産業組合は解散命令を受けて解散した。

そこで一九九年一月、農会、産業組合、養蚕組合支部を統合して農業会とするべく、倉田友幸を委員長として設立総会を開いた。そして、県知事の認可を得て倉田友幸が会長となり南箕輪農業会が二月に誕生した。

これは、稲作、養蚕等の指導を一元化し、戦時体制に適合した農村

体制を作るための官制的組織であって、産業組合の小生産者相互の互助とか、共存共栄という組合的要素はなくなってしまう。さらに、戦時農村総合生産責任体制確立実施要項が示達され、農機具、肥料等生産資材は農業会を通して一元的に配給されるようになり、食糧増産確保のための作物の作付け割り当て、米麦等の食糧の供出割り当てとその完遂のための仕事が義務化され、戦時農政遂行のための上意下達の機関になってしまった。戦時下の総力戦体制という状況下ではあったにしても、松根油の採取までもしたのである。

さらに、軍隊や軍需工場の徴用工として農家の働き手が多数抜けた後の農村において、労力不足をどうして補うかも農業会の重要な仕事であった。その対策として共同作業が盛んに行なわれるようになったが、不足する農機具を補うため、現在の事務所北に農機具工場を作って、農機具の製作修理も行なっている。

終戦後は、二一年二月神子柴に、一月には大泉にそれぞれ利用部支所を建設し、榨搾機、精米機、精粉機を設置し、日常生活の便益に寄与することが出来るようになり、組合らしい活動が復活し始めた。

第五節 生産の発展

一 新時代への産業の模索

(一) 明治初年の産業の概況

本村は古来農業を主体として生計をたて立ててきた。村内で商工業を営む者はごく少なく、自給自足の生活を営んで米麦等農産物以外の産物は少なく、江戸時代後期から明治初年にかけて順次養蚕農家が増して現金収入の道が開かれ、婦女子による養蚕の生糸、真綿、絹織物などが生産されたがそれは僅かであった。

明治九年六月、長野県令に提出した旧村誌によると次のように記されている。

民業、男農桑ヲ専ラシテ兼テ蚕ヲ飼ウ者四百三十八戸、絹ヲ業トスル者貳戸、エタル者八戸、雑業ノ徒十四戸。女縫織業ヲ兼スル者二百二十八人、農桑縫織ヲ業トスル者五百八十一人、裁縫ヲ業トスル者二人(役場文書)とある。また、産物についての項をまとめると次のようになる。

表8-24 明治初期開算輪村の産物

産物	質	産額	移(輸)出先等
鶏	佳	雄一〇〇〇羽 雌七〇〇羽	自用の外他へ移出
安種	上	一〇〇〇枚	自用の外他へ
桐材	佳		他国へ
世材	中		他国へ
漆	中		他国へ
桑苗	上	八万本	山城大和土州その他へ
紙	上		石筆、印材として他へ
青石	白青色	二万余	他石とする
磐石			大半他国へ

綿織物	藍染	油	水	酒	花	手	玉	綿	白	絹	絹	真	縮	生	燕	小	松	大	江	鶏	梨	塩	米	清	米	穀
色木	櫓	櫓	櫓	櫓	櫓	櫓	糸	綿	綿	布	布	絹	絹	糸	糸	糸	耳	豆	豆	卵	子	子	子	子	子	子
並	並	佳	佳	佳	佳	佳	上・中・下	上・中・下	上・中・下	上	上	上	上	上	上	下	並	最	並	並	佳	美	上	並	下	下
二〇〇〇反	五〇〇反	五〇反	一七石余	三〇〇石	二八〇石	八貫	二〇貫	四〇〇〇反	二〇貫	二〇〇反	五〇反	一六貫	中折七〇〇束	四〇〇〇反	一五〇〇貫	五〇貫	並	五五二石余	並	並	並	並	並	並	並	並
少し他へ	幸他へ	他邦へ	四分通り他へ	他邦へ	他邦へ	半他国へ	半他国へ	三分通り他国へ	半他国へ	自用の外他へ	少し他国へ	湯平他国へ	湯平東京へ	三分通り東京や他へ	横浜へ	六分系にし四分他へ	三分通り東京や他へ	湯平他国へ	湯平東京へ	三分通り東京や他へ	湯平東京へ	湯平東京へ	湯平東京へ	湯平東京へ	湯平東京へ	湯平東京へ

(二) 新時代への産業の模索

1 開産社の融資からみた産業開発

明治新政府は殖産興業に熱意を傾注した。新政府の政策に忠じて明治六年筑摩県権令永山盛輝は管下の筑摩、安曇、諏訪、伊那四郡と飛騨の大区长三〇名を招集し、彼等を發起人にして開産社の設立を企てた。この開産社は「業ヲ勸メ産ヲ開ク」とを第一の目的とし、「県下ヲシテ産物ヲ精良ニシ、動植物ヲ繁殖シ、貿易ヲ拡張セシムルニ論ナク、苟モ人民ノ為ニ厚生利用ノ事ハ之ヲ考究シ、之ヲ補翼シ、其ノ事業ヲ成ヘシメ以テ治習姑息ノ弊ヲ矯メ、人心ヲシテ興起セシメントス」という理想を掲げて出発したのである。

本村民の利用状況を見ると、まず明治八年に次の件数の申込みがあつて、三〇円ないし二〇〇円借用して新しい事業を営もうとしてゐる。

一 柑屋営業	二	一 菓子製造	一	一 酒造営業	一
一 雑穀営業	二	一 縮緬工業	一	一 絞油営業	一
一 流地起き返し	一	一 藤箱営業	二	一 畑田成り	四

翌年からも営業資金を借りているが一〇年には三人が組合を作つて生糸製造業を始めようと借り入れてゐる。ほとんど農業一本でできた本村の産業もしだいに多様化していくことになる。(殺場文書)

2 水産業

(1) 鮭の養殖放流の試み

明治政府の勸農局は殖産事業の一つとして、河川に鮭の稚魚を放流して実績を挙げているというのを聞いた本村民は、天竜川にも放流して利益を挙げたいと考えてその実現についての建言をした。明治一年六月のことである。

夫レ信州ノ天竜川タルヤ皇國式等川ニ属シ其ノ水ヤ信州ノ諏訪湖ニ繋流シ終ニ遠州掛塚ノ海ニ注グ。其ノ流レタルヤ溶ケタル安流ニシテ激湍奔流ニ非ズ。且ツ清流ニ属スル清流タリ。近者蘭ク勸農局ニ於テ諸川ヘ鮭魚ノ養殖ヲ放養保育シ大イニ該地人民ノ滋養トナリ利益殊ニ甚シト。

中略

仰ギ寛クハ鮭魚ノ養殖ヲ天竜川ニ放養セバ其ノ近隣村落ヨリ山間僻地ノ人民迄富饒ヲ得ルヤ必セリ。然レバ則チ何ゾ當蝦蟇ノ利益ト年々同クシテ謂ラシヤ。宜シク此ノ事ヲ推測シテ採用相成ラバ鮭魚養殖保育ノ方法ハ川岸ノ村落大議事ヲ開キ然ル可キ方法相立テ養ワバ必ズ富饒ニ至ル可シ。然リ則チ該地ノ利益ヨリ漸々ニ近隣ニ及ビ卒ニ一國ニ公及スルニ至ル。是レ國國ノ一大事ト謂ザル可ケンヤ。是ヲ以テ敢テ愚蒙ヲ傾ラズ忠告建言スル事此ノ如ク也。

恐惶恐惶頓首頓首

南第十七大区八小區

南長輪村

明治十一年六月八日

有賀 光彦
倉田 三郎
清水平一郎

長野県権令権崎寛直殿

(殺場文書)

この請願によって県当局においてはそれを実現しようという方向に動いたようであるが具体化の方途はなかなか示されなかった。そこで一月になって再度請願したところ県の事業として実施する運びになった。

翌一二年一月勸農局員鍋木余三男、県吏眞野正雄両氏が来て村内湧水を北から南迄調査のうえ南殿のシンズラ清水を最適として字日向畑

の地に孵化養育池を作ることになった。

養魚池は最初、九坪五勾（三、二a）に四組の孵化器、五箱の養器、その他諸道具を備えて作られた。二月には勸業局掛一名、県の官員三名が来て南郷の清水十郎方に止宿し、村民一〇名に鮭養育についての講習をなし、準備を整えた。三月一〇日にいよいよ鮭卵が到着した。越後（新潟県）三面川で採卵した鮭卵が村上からはるばる送られて来た。その数凡そ六万粒であった。そのうち死卵が約一〇〇〇粒で電車も飛行機もない時代にどのようにして運んで来たものか。これだけしか死卵が出なかったことは成績がよかったとある。三月一杯で孵化が終り四月五日から鶏卵を与えて養育にかり五月下旬には養育を与えている。そのころはまだ牛肉がなかったのか松本まで牛肉買い出しに泊りがけで行って来てもいる。

五月二四日には県からの役人、郡からの役人、村の役人その他多数の人々の見守るなかでいよいよ天竜川字シヤリダシへ午前中に放流した。それ以前天竜川本支流沿岸の村々へ五月下旬より日数およそ六〇日間一切の漁業禁止の通達が出され放流地点へも次の制札が立てられた。

今般天竜川上流へ鮭鮭放流相成り候条五月廿日ヨリ日数六十日間本支流共漁業一切禁止タルベキ事、但シ本日限リ後ト雖モ鮭鮭ト認メ候ワバ一切捕獲相成ラザル事

明治十二年五月廿日

上伊那郡々役所

（放流文書）

同日午後には通船にて東伊那の猿岩まで行って放流式をした。二か月余養魚のうえ天竜川への回帰を願って約四万尾の鮭の稚魚を放流したのである。

二か月にわたる漁業禁止は業者にとっては痛手であったに違いない。

い。鑑札は戸長役場へ預けさせる処置をとり前期分の税は免除された。

さて、稚魚を放流した後約五〇〇〇尾を池に残して飼育した。飼育日誌を見ると牛肉、玉子、さなぎ、麦粉などを与えている。

また、この池に近接して池を作り鯉の養殖も試みた。この結果の記録は見当たらないからその成績のほどは不明である。

なにしろ当地とすれば前代未聞の試みであるから、參觀人はたいへんなものであったようであるが、その中に手良村野口の蟹沢正三は二〇〇尾の稚魚を分けてもらい自宅近くの池で養育を試みたとある。しかし、その結果は成功するに至らなかった。

一月末に二万粒、二月末に五万粒の卵を孵化させ、また琵琶湖産の鮭魚も孵化養育し翌一三年三月には田畑耕池字井天の地で三万尾を放流し、四月には宮田村字猿岩へ残りを、また鮭魚も放流した。

鮭は元気に育って帰って来いよの念願のうちに第二年目放流も無事終了した。

ところが一三年七月突然県会の議決によって鮭養殖事業は中止するとの報告がはいった。思わざる知らせを受けた関係者たちは種々対策を協議し、当局と交渉の結果請負事業として継続することになった。孵化放流等に係る費用一〇〇円下さればその余の経費は自弁でするというとり決めができたのである。村人の意欲のほどが窺われる。

一三年末七万五〇〇〇粒到着孵化養育。翌年三月、天竜川伊賀島へ放流。

一四年末には七万粒を孵化養育し、一五年四月天竜川下川原地籍において放流した。

また一四年末には第一回に孵化した鮭を養育していたものから採卵を試みたが成功しなかった。

五回にわたって放流したが村人、果民の願いも空しく遂に天竜川へ
鮭の躍る姿を見ることができなかった。

余 録

鮭魚を明治天皇に献上

明治一三年明治天皇東山道御巡幸のことがあった。天皇が東筑摩の
本山宿へお泊りのおり養育した鮭を献上することになり、天皇に二〇
尾、お伴の宮様や役人にそれぞれ三尾ないし五尾、新聞記者等へ二〇
〇尾差しあげ、その美味なるを賞された。

博覧会出品

明治一四年三月、東京上野で開催された第二回国内勲業博覧会に、
ここで養育した魚を出品した。越後三河川で採得したもの一〇尾、信
濃千曲川で採得したもの一〇尾を出品した。

3 鉱産物試験

大泉所山に鉱石の発見をしたから試験をしようという願いが明治一
二年に出ている。その種類六種、掘り出し見込み一か年平均五万切と
ある。

硝子石掘出願

大泉所山 信濃国上伊那郡南宮輪村

民有林内

一開坑場三千坪

但 硝子石・水晶・ヘケ石・白磁・油磁

平均五万切 若か年 掘り出し見込み高

右地所に於て開坑仕度く換開開き掘り下され度く願ひ奉り候也

長野県上伊那郡南宮輪村

明治十二年十二月廿四日 願人 總代

丸山 寛一郎

長野県上伊那郡南宮輪村

しかし採算はとれなかったようである。

(役場文書)

穂高孫三郎
原 八十古
高木 恒三
有賀 光彦
丸山 寛一郎
清水 寛一郎
高木 恒三
原 恒一
原 八十古

当村戸長清水平一郎印



図6-22 第3回農談会日誌

4 農談会

明治一五年四月、長野県上伊那郡農談会が伊那村常門寺において初
めて開かれた。定会員九名中本村からは有賀光彦が出ているが、有志
会員として四四名が列席した。

この会では農芸業について選種、耕種栽培、肥料、農具、農産物の

収穫、虫害防除、山林樹木、蚕桑等全般にわたって情報交換、討議が行なわれ、新時代に対応する農家経営のよりよき在り方への模索が行なわれた。ここではさらに進んで人会共有地分割の是非までも論じられた。

この会は同年一月にも開かれたが翌年からは一年一回開くことになった。その記録をみると本村からの出席者は他村に比して数が多く、かつ熱心に他の意見を聞きもし、自己の意見も開陳している。本村の先覚者の農業、林業経営への関心の深さが窺われる。

5 牧牛の金

明治一二年五月南北両村の有志者一八名は牧牛の端緒を開くことを企てた。そのことについて、八幡宮の朱印地であった所が維新に際して上知となって官有になっていった。その官有になった四ha余の地を借りてそこを牧草地とし、かつそこで牛を飼育繁殖させたいというのである。繁殖した子牛は家々へ配り、耕作に利用する牛にしたい。そうして人力を省き農耕の改革をなし農業経営の一変をはかりたい。それで、ぜひとも我々同志の結社に貸与してもらいたいという願いである。この趣意にしても、蛙の子を養殖する趣意にしても、一身一家の利益のみならずやがてそれが国益につながる事業であることを烈々とうたっているところに明治開化期における本村民の心意気がしのばれるのである。しかしその後の展開についての記録は見当たらない。

二 農業の歴史と技術の発展

(一) 明治時代の農業の進歩

1 新作物・家畜の導入と改良

(1) 作物

明治初期の畑作について「畑作物群物覧帳」（大南文書）という資

料をみると、江戸時代と作物の種類はほとんど変わっていない。

明治一〇年代中ごろから各地に勧業博覧会、共進会等が相次いで開催され、農産物も共進会等に出品されると、新しい作物や品種が盛んに導入されるようになった。

早くも、明治一二年には草薙が果樹業試験場より配布になり、一四年には製糖原料として蘆粟の栽培が試みられている。馬鈴薯は明治初期から我が国に導入されているが明治一十九年には当地でも栽培が奨励され、寒蕪（？）、玉菜（カンラン）、葉ボタン等の農民による試作の結果が発表されている。また、果樹類についても、開産社が苹果、梨、桃、李杏、葡萄、無花果、櫻桃、桜桃などの苗木を国の勧業寮に頼み出て取り寄せており、二年には、清国体菜・夏大根・節成り胡瓜・独乙大牛蒡・札幌人参等を村内で試作していることが資料（後掲文書）に残っている。このように、新作物導入に対して極めて積極的な動きを示している。

また、作物の品種の交流、選択改良についても極めて積極的であった。早くから農談会において自家の成績の良い稲の品種などを出品して紹介し合っているが、明治一六年果は「種子交換手続」を定めて、この風潮を助長して種子の交換を奨励し、「種子ノ交換及ビ精製ハ農事ノ上、目下ノ緊要ノ義ニ付キ」と上伊那郡長が述べているように、盛んに種子交換が行なわれている。

稲の品種交換について当時暖地・寒地のいずれから種子を求めると良いか議論されているが東北地方（岩手・福島等）から黒稲・姫稲・岩代坊主・新潟県から二本三、香川県から金比羅参りの参詣人に依頼して奈良早生と言う品種を取り寄せて試作し、当地に適する品種の選定に努力している。このうち二本三などは大正から昭和にかけてかなり広く栽培された品種になっている。

(2) 家畜

この時代から産馬の改良についても努力が行なわれている。明治一四年南筑輪では県から優良種馬の貸付けを受け、村内の雄馬六二頭に交配して八頭の小馬の生産を見、その結果を村長より県勧業課に報告している。(『穀場文書』)不幸にしてこの年の小馬は八頭中七頭が雄馬で、当時農耕馬として雄馬は使用しなかったため、農家の落肝ぶりが書かれているが、同一六年には、農談会の席上産馬の改良について活発に意見が述べられている。「農家ハ主ニ木曾馬ヲ使用ス。該馬ハ体格小ニシテ且ツ飼料少ナクシテ肥エ太リ之ヲ尊ブナリ。駄賃馬ハ他ノ産馬ヲ要スルト雖モ農耕ハ木曾馬ニテ足レリ。」というような考えもあったが、奥羽地方のように産馬の改良を図ることが良いという意見が多く出され、小野・川島等の産馬の改良の例を引き産馬の改良の必要を強調している。こうして、産馬の改良にも手がつけられている。

また、これより先、イタリア原種の蜜蜂の下付を願ひ出た農民もあり、新しい農業を目指す農民の意欲が表された資料の中からも感ずることが出来る。

2 稲作技術の発展

(1) 稲の品種

明治一〇年代から種親交換等、品種の選択・改良に対する関心が非常に高まってきて、多くの品種が他県からこの地方に取り寄せられたことは既に述べたが、明治二一年役場文書には、身上直し・奥州坊主・木曾中稲・赤早稲等の品種も移入され試作されており、これらの品種がどの程度に当地に定着したかは明らかでないが、品種数は急激に増加している。

明治の時代当地で多く栽培された稲の品種は次のような種類であった。

中筑坊主・毛京・青千石・美濃早生・浅間坊主・木曾錦・早沢坊主・四国坊主・毛島・赤新・坊主類

(『上伊那誌』より)

(2) 育苗

採種は「雄穂七、雄穂三ノ割合ニ採リテ苗ノ生育宜シク、穂一揃イニ出テ収量多シ」、「採種ハ雄穂ヲ多クスルコト」、「穂先半分ヲ種子トスルガ良シ」等、採種に対する心構えが説かれ、選種については、「種子ハ三日ヨリ四日光ニ晒シオキ、桶ニ水ヲ入レテ充分日光ニ暖メツレニ種子ヲ入レ、浮キタルヲ不良種ヲ腐敗セシム」等、必ずしも合理的ではないが、一部農民の中には大選による選種が行なわれている。そして、明治三七年には塩水選が県から指導奨励されている。しかし、どの程度普及したかは不明である。

催芽については、「種子ニ冷温適当ナル温湯ヲ注ギ上ニ覆イ、尚温熱ノ失ワザルヨウニ注意シ、三十時間程ヲ経テ蓋ヲ取り直チニ播種スル。四日ニシテ良ク発芽セリ」というように、温湯による催芽を試みる農民も現われている。

苗代様式は水苗代で、明治後期には踏み切りを作る短冊形が奨励されたが、一般的にはまだ依然として平苗代であった。播種量はしだいに減少して坪当たり四一五合ほどになっているが、先進的農民の中には「苗代一坪ニ三合五勺ヨリ多クハ播種シナイ。厚薄ハ苗想ク移植スルニ折損、枯損ノ患アリ、収獲ノ多寡モ苗ノ善悪ニアリ」。「苗代ノ薄時キハ雑草蔓延シ成育宜シカラズト雖モ、厚時キハ苗ノ性柔軟ニシテ移植スルモ生育遅延、徒ツテ、成熟モ遅シ、気候不順ナル年ニハ収獲少キモノナル故、薄時キニシテ苗床ヲ耕ルニ注意スルニアリ」(『上伊那誌』)として、薄播きの利点と、それへの指向がはっきり

と述べられている。

(3) 本田の耕起整地

本田の耕起については、明治一五年の農談会の席上、犁耕導入の必要性が話し合われており、同一九年には農談会の後に発足した郡勧業会の要望に基づいて、郡役所の計画によって各村二、三か所で、馬耕巡回実施講習会が行われ、本村においても三か所で馬耕が行われ、その犁耕本田の稲作試験結果が報告されている。このように、犁耕の積極的導入策がとられているが、一般農民による犁の導入はほとんど進んでいない。したがって、耕起は万能鋸で行なわれており、水稲耕作中最も重労働の作業であって、深耕することは容易ではなかった。

代掻きは牛馬を使用しての馬鋸による碎土、または、万能鋸での人力碎土の後、牛馬を引き回して踏ませを行い、大足踏み等によって植代がつくられており、江戸時代とあまり変わっていない。

(4) 肥料

肥料の中心は江戸時代と同様に藁が主体で、堆肥・落葉・糞・青灰・人糞尿等が用いられている。明治一六年の農談会席上「以前ハ原野ニオイテ肥料ヲトリタルモ今日ニオイテハ皆糞糞英ヲ播種シ、或ハ糞草ヲ作ツテ肥料トシ」と本村農民が発言しているが、糞糞英の栽培が乾田のみ可能であること、万能鋸による耕起には糞糞英栽培田は労力を多く要するという考え方があり、実際には発言内容ほど多くなかったようである。しかし、糞糞英が水田肥料として増加してきたことはわかる。

明治時代には購入肥料として魚粕、油粕、明治時代後期にはさらに大豆粕、過燐酸石灰等が使われ始めるが、それらは換金作物、当地では主として桑園に用いられて、稲に対する使用はきわめて少なかった。

石灰はすでに江戸時代から使われ始めているが、石灰の施用はその年には効果があるが、地質を悪化し、米質を悪くするものであるから、使用を禁止すべきであるという考え方があった。そのため、明治二一年郡役所は農商務省の指示に基づいて石灰の施用状況について調査を命じた。これに対する本村からの報告が残っているが、それによると、石灰の施用量はかなり一般化し、特に、天竜川沿岸沿いの水田に多く、刈敷や野草と併用する合理性がみられ、反当二五〇〜三〇〇貫を施用していると報告されている。

(5) 田植と除草

明治初期は「田方植付届」が毎年各村から県令に報告されている。これは百不足に対処するためと考えられるが、その届けによって当時の田植えの時期をみると早生種は六月八日〜一日、中生種は六月一日〜二〇日、晩生種は六月二〇日〜二五日となっている。苗代技術が未熟であって早期の育苗が困難であったから、田植えの時期は現在よりかなり遅かった。

栽培密度についてはかなり関心が高まり、先進的農家によって栽培密度試験が行なわれており、一般的には一坪（三・三三）の株数は五〇株程度で一株本数については、「一株二〜三本を度とし挿苗す、必ず多く植うるは成長に害あり、特に穂に大小あって不揃いとなるは挿苗の多少による」、「一坪五〇株とし二本植、三本植、五本植の試みをし精算せしに、三本一株が最も繁殖し収穫は二合多きを覚ゆ、故に三本一株が適宜なるべし」、「（農談会日誌）」として小株にすることが良いとしている。また、植付形式には正条植えがまだ普及せず、ほとんどおいらち（追耕）という不正条植えで、一部に片正条植えが始められた程度である。したがって中耕除草は手取りが中心であって、回数は三〜四回行なわれ、花鈴を背負って草を取るといふほどかなり遅くま

で行なわれており、炎暑の候の四つん這いで行なう田の草取りは非常な重労働であった。

(5) 病虫害防除

病虫害防除については関心が高く、特に害虫は目につきやすいため早い時期から注意をひき、蝗は既に江戸時代からしばしば大被害があったことが記録に残っているが、明治以後は他の害虫にも目が向けられた。浮塵子、腹達類の被害については明治一二年に

其ノ形初発微小ニシテ形容スベカラズ。縣長ズルニシテガイテ大キキ米粒位ニシテ青黄色ヲ帯ビ卵ノ形ニ似タリ。該虫稲穂ニ群居シ穂液ヲ吸取スレバ該穂凋落ス。依テテ今専ラ駆除法ヲ施シ候得共、自然郡内へ蔓延ノ程ヲ斗リ難ク候。

として、郡長より各戸長へ注意を喚起している。

さらに、明治二年には稲象虫の経過習性についての通達、同三年には稲苞虫に対する注意を出している。

このようにして、害虫についてはその発生の経過及び習性等についてしだいに理解が深まっているが、駆除予防については灯火誘殺、畦畔の雑草の焼却による越冬害虫の誘殺、水面へ油類を滴下しそれに害虫を払い落とすことなど多少の進歩が認められるが、他は捕殺が中心であった。

県は明治一九年「田圃害虫予防規則」を制定し、さらに二五年にはこれを整備しているが、本規則に基づいて駆除予防すべき害虫として挙げられている稲作害虫は次の四種である。

○稲の螟虫（異名シムシ・サシムシ、ズイムシ）

○稲のハマグリ虫（異名カタメムシ、チマキムシ）

○稲の泥虫（異名ドロコベムシ、ドロオヒムシ）

○稲の模造（異名ヌカムシ、ウシカ、コヌカムシ）



図6-23 稲のはぎ掛け

規則はこれらの害虫が発生したときは直ちに町村役場へ通報すること、駆除予防は一町村を単位に、発生状況によっては数部落または数か村を一地域として駆除すること、蔓延の徴候があるときは区域内の作人をして駆除予防に従事させ、他区域に蔓延の徴候あるときは隣接地区に通報すべきこと、などが定められている。共同防除の体制の確立は大きな進歩であるが、適確な防除法が明記されておらず、ただ区域内一致して駆除予防に従事すべきことが強調されているのみであることは、当時の技術の段階を示すものであろうか。

病害についてはまた幼穉な段階で、稲熱病についての郡長より各戸長あての通達が残っているがそれを見ると、天候不順や肥料過多あるいは軟弱な生長が稲熱病の発生を導くことは漸く理解されているが、稲熱病の病原菌の存在はまだ知らず、また、根腐れを稲熱病と同一視するなど誤った考え方もあり、防除の方法などはほとんどわかっていなかった。

(7) 収穫・乾燥・調整

刈取りは鎌によって刈り取られ、まだ大部分は刈干しが行なわれていた。明治一〇年代は稲架掛け乾燥が一部で始められたが、一般にはなかなか普及しなかった。第三回農談会日誌に「乾燥法ハハダ掛ケニ

如ナシ、実地亦種以南ハ風乾（ヘザ掛ク）ヲ用ウルヲ以テ米質頗ル良好ナルニ、本村、伊那村等ハ乾燥ニ注意セザルニヨリ米価低シ、当地方ガハザ掛ケヲ実施セザルハ、ソノ主ナルハ小作人アリテ加地子ヲ地主ニ取メザルヲ得ズ、故ニ地主ヲ注ギ最目ヲ重クスル如キ不良ノ者アルヲ以テ改良ニ至ラズ」と述べている。

脱穀は千歯が使われた。初期の内は竹製のものであったがしだいに鉄製のものとなり能率は向上したが、当時は稲の品種に有芒種が多く千歯扱きのため枝梗がちぎれてくるが多く、芒をとったり枝梗が

表6-25 明治時代稲收穫量と反当収量

種類	明治一三年			明治一五年			明治一七年			備考
	反別	全收穫量	反当収量	反別	全收穫量	反当収量	反別	全收穫量	反当収量	
合計	一五二町〇〇	二五八四、七〇	一、七〇〇	二四三三、七七	一、五八九	一八四四、五九	一、二四九	二、七四四石	平年作全收穫量	
早生	二四、二五	四二二、二五	一、七〇〇	三三三、〇九	一、五〇〇	二五四、三〇	一、二四九	二、七四四石	平年作反収	
中生	七一、七五	一二四八、四五	一、七四〇	一二三九、八四	一、六八〇	九〇九、三五	一、二四九	一、一八八升	一石八斗二升	
遅生	二八、〇〇	四九〇、〇〇	一、七五〇	四七一、一二	一、五八〇	三四九、九八	一、二四九		明治一七年は凶年であつた	
糯米	二八、〇〇	四三三、〇〇	一、五五〇	三七七、七二	一、四二〇	三三〇、九六	一、二四九			

(収場文書より作成)

(二) 大正より昭和前期の農業

大正から昭和の初期へかけては養蚕の全盛時代であつて、農業は養蚕を中心として展開している（次項養蚕の発展と衰退の項参照）が、他の農業面においてもかなりの進歩を遂げている。それは、明治三〇年に県農業試験場が設置され、耕種の各面にわたって研究成果が発表されるようになり、また、大正六年からは町村または町村農会に農業技術員を置くよう左のとおり指示され、その成果が次第に技術を上させたからである。

町村又は町村農会ニ農業技術員ヲ設置シ農事ノ指導奨励ヲナシムルハ、

ら穀を産すための棒打ちという特殊な作業が必要であつた。

調整には籾、唐箕、千石（万石）どうし等が使われた。

刈干しが一般的であつたため籾の水分はまだまだ多く、どの家でも籾を敷きその上に籾をひろげて天日で乾燥する籾干しという作業が二三日行なわれた。脱粒は土臼で行なわれた。

明治一〇年代の村の水田作付面積・收穫高・反当収量を表示すると表6-25のようである。

新米ノ啓蒙上最も緊要ノコトニ風土、サレバ、各位ハ明年度ヨリ之ガ設備ヲナス様相当措置セラレ、以ッテ普通農事ノ奨励ニ關シ遠慮ナカラシメントテ望ム（収場文書）

このようにして、農業は組織的に研究指導を受けるようになり、各面にわたってかなり著しい進歩を遂げるようになった。

1 金肥施用量の増加と緑肥栽培の奨励

購入肥料（金肥）の使用は既に明治一〇年代から始まっているが、それは商品作物の栽培を中心として広まり、当地においては桑園を中心として、大正・昭和とその使用量が急速に増加した。また、購入肥料

表5-26 上伊那における全肥使用高（農会年報及び「上伊那訪」）

		人造肥料	海産類	粕類	骨・血粉	糖類	雑肥類	合 計
		硫酸・過石・硫加・配合肥料・完全肥料等	鰯・粕・鰯・粕等の魚粕類	大豆粕・菜種粕・鰯粕等	骨粉・血粉・タンケー等	米糠・麦糠等	大豆・丸粕・石灰・下肥等	
大正一〇年	稲	34,287	11,885	88,170	12,182		3,320	149,844
	麦	10,713	795	2,333	712		4,532	19,085
	桑	100,933	100,849	137,975	4,352		18,954	353,063
	他	5,034	2,898	9,316	627		1,175	19,050
	計	150,967	116,427	237,794	17,873		27,981	551,042
大正一三年	稲	92,093	18,477	66,253	12,913	133	6,253	196,122
	麦	12,721	250	1,520	169	1,610	503	16,773
	桑	186,841	75,992	225,787	2,253	5,869	5,855	502,597
	他	17,904	2,080	6,507	131	1,107	1,113	28,842
	計	309,559	96,799	300,067	15,465	8,719	13,724	744,334
昭和五年	稲	118,371	20,874	59,913	19,691	201	42,490	261,540
	麦	11,365	776	2,619	69	666	530	16,015
	桑	185,165	70,445	109,407	2,125	1,807	48,310	417,259
	他	11,646	3,660	5,776	272	840	1,824	24,018
	計	326,547	95,755	177,715	22,157	3,514	93,144	718,832

中では人造化学肥料の増大が著しい。上伊那郡における大正から昭和初期にかけての金肥使用高を表示すると表6-26のようである。

上伊那郡下の肥料の施用総額は大正一〇年が五五万一〇四二円であり、同一三年には七四万四三三四円と僅か二年間で約三五%の増加を示している。昭和五年は不況のため大正一三年に比べやや減少しているが、人造肥料は増加している。さらに内容を詳しく見ると、大正時代購入肥料の施用量の六〇・七〇%は桑園に使用されているが、稲作に対する使用量もしだいに増加し、昭和五年以降の桑園の暴落、養蚕の衰退と共に桑園施肥量は急速に減少し、施肥対象の主体が稲に代わってくる。本村内の施用量の調べでは昭和八年のころ水田の施肥量が桑園施肥を超えるようになった。

このような施肥量の増加は、昭和五年の繭価の暴落と米価の低落による農家経済の苦境に際し、それが重圧となって農家経済を破壊した。これに対処するため、このころから盛んに自給肥料の増産が奨励されるようになってきた。堆肥の増産はもちろんのことであるが、大量に生産される蚕糞の有効利用の方法として堆肥利用が指導され田や畑には緑肥の栽培が勧められた。

緑肥としては、水田裏作としての紫雲英の作付け、桑畑には間作としてザードウィッケン・ヘアリーベツチ、やや遅れて上田えんどう等の蔓性豆科の緑肥を作り、これを肥料として鋤き込むことが勧められた。

大正八年の紫雲英の作付面積は村全体で四五町歩程度であり、西天間田地区は初期のうち保水力を損ねるということで紫雲英の作付けは禁止されていたので、急速には伸びなかったが、最盛期には百数十町歩の田畑に緑肥が栽培されていた。

2 病虫害防除技術の進歩

農業の組織的研究指導体制の下で、比較的早く指導普及されたのが
病虫害防除技術であった。

施肥量の増加と共に稲作の最大の病害となった稲熱病も、はつきりと病名が確立し、その病原に対する認識も進んで前後の駆除予防策が的確となり、昭和初期には発生予防のために石灰ボルドー液の散布をするを、村農会が農家小組合長会で指導しており、実際に散布が行なわれたのである。

麦類の病害予防としては、大正三年に種子の塩水選が奨励され、大正末期には黒穂病類、斑葉病予防のために種子の風呂湯浸法が奨励され、さらに雪腐病予防のためにコロイドボルドー液の散布が有効であることを報じている。〈長野県農会事報〉

各種の野菜についてもそれぞれに病名や病原が確定し、駆除予防法がしだいに進歩したことを伺わせる資料が見られるようになるほか、駆除予防のための農薬も急速に登場してきている。昭和初期における主な農薬を列記すると次のようになる。

殺菌剤：石灰ボルドー液（普通石灰・少石灰・過石灰）

銅石けん液 石灰硫黄合剤

殺虫剤：除虫菊粉 除虫菊加用木灰（石灰）合剤

ダリス粉 硫酸ニコチン ネオトン 硫酸鉛 硫酸石灰

昭和五年、西天竜岡田初期においては、新田病と俗称される稲赤枯病が相当広範囲に発生した種子で、農家組合長会等でその対策が示されているのも興味深い。

3 農具の進歩

犁耕は明治時代から奨励されているが容易に普及しなかった。しかし、大正時代になるとしだいに普及し始め、大正一三年の上伊那郡下の牛馬耕をした水田の面積は五五四五町余になっており、その時の水

田面積が七七一六町余であったから七〇％余が牛馬による犁耕をしたことになっている。〈長野県農会事報〉本村における犁耕面積は不明であるが、昭和になっても西天開田地区は犁耕によって水持ちが悪くなるという考え方があり、西天地域の犁耕はやや遅れたようである。また、大正初期足踏回転脱穀機が伝わり始め、同一〇年ごろにはかなり普及し、板摺機、万石等も改良され脱穀調整を中心として農具の発達が進んだ。

ほかに、中耕除草用の回転除草機、薬剤散布用の噴霧機が使用され始め、動力源として水力・畜力の外に石油発動機・電動機等が利用されるなど各種の農機具が生まれている。このように昭和にはいると各種農機具が製造販売されるに至るが、特に満州事変以来の農村労働力の不足が農機具の発達を促した面もあり、昭和一三年、県経済連が優良農具一覧表を作製しているが、それに挙げられた農機具の主なものは次のようであった。



図5-24 足踏回転脱穀機（大王のころ一般に普及した）

人力農具：麦播種機、水

田中耕除草機（回転

除草機）

麦土入れ機 噴霧機（薄

付き、肩掛け、背負型

半自動）足踏回転脱

穀機、板摺機、唐箕、

絞機、板摺機、唐箕、

万石、板打機、縦繰

脱穀機、製麹機、製

麹機、板摺機、蒸切

機、板摺機、製麹機、

産毛刈取機

畜力農具：犁（單用・双用） 碎土機 煤中耕除草機（カルチベーター）

畜力用水田除草機、畜力用脱穀機、畜力用精米機

動力農具：電動機、石油発動機、木炭ガス発動機、動力噴霧機、揚水ポンプ、動力脱穀機（普通型・昇降機付）、穀類選別機、動力精米機、動力精製機、動力精粉機、動力製糞機、動力製打機、動力縛上機、動力肥料粉碎機

肥料粉碎機

（役場文書）

4 農業会の活動と農業の進歩

明治三十二年六月農會法が公布され、翌三三年には各町村に農會が成立しているが、大正一二年ころから県・郡・町村農會とも固期的な活動期にはいつている。県・郡農會はそれぞれ農會時報を発行、それに農業情勢や農業技術等を発表して農民の啓蒙指導に当たり、町村農會においては村農會長の下に各区農會長、さらにその下に農家組合長を配して農民を組織し、区農會長及び農家組合長をたがひ召集して協議會、打ち合わせ會等を開いて協議指導を重ね、各農家組合は定例の組合會を持つて目的達成に努力している。

大正一三年の農家組合準則の第二条に農家組合の目的が次のように明示されている。

第二条 本組合は和衷協同相互補助ノ精神ヲ涵養シ、併セテ左記事項ノ達成ヲ期スルヲ目的トス

成ヲ期スルヲ目的トス

一、農事改良施設 一、保健衛生ニ關スル施設

一、火防上ノ施設 一、教育ノ普及向上

一、家計經濟ノ改善並ニニ野畜思想ノ涵養

一、納稅義務ノ遂行 一、農事ニ關スル研究調査

一、其ノ他農家ノ福利ヲ増進スベキ事項

（田畑南部動力組合文書）

農家組合の目的は農事の改良研究調査のみでなく、保健防災・教育

・納稅・貯蓄・家計等生活全般にわたっているが、事業の中で大きな比重を占めたものはやはり農事関係の仕事であった。同年、村農會は農家組合に対して、共同耕作地の設置・組合採種圃苗圃の設置・肥料灌漑の設置・甘藷の栽培・自家用醬油の製造・緑肥栽培・麥種共同催青・病虫害一斉防除等に補助金を出して奨励しており、さらに、同年の農家組合協定実行事項として村農會から示された内容は次のとおりであった。

(1) 稲作の改良増殖

イ、奨励品種の栽培 Ⅱ、苗代の薄蒔き（坪三合以下）

Ⅲ、苗代の駆虫（一回以上） Ⅳ、苗代の両抜き（二回以上）

Ⅴ、小株密植（坪六十株一株二・三本）

Ⅵ、一番除草（植付け後二週間以内）

Ⅶ、稲架掛け

(2) 麦作の改良増殖

Ⅰ、奨励品種の栽培 Ⅱ、大麦の作付け（家族一人一畝以上）

Ⅲ、広蒔きと土入れ

(3) 自給肥料の改善

Ⅰ、紫雲英（坪当たり二貫以上刈る）

Ⅱ、加里（反当木灰十貫以上）

Ⅲ、有機質肥料施設（堆肥又は綠肥二百貫要積額は五十貫以上）

Ⅳ、便所へ過磷酸石灰箱設置

Ⅴ、桑園緑肥栽培

(4) 蚕桑の改良

Ⅰ、桑園の改植 Ⅱ、春蚕桑育 Ⅲ、埋糞法

(5) 消費の節約自給

Ⅰ、自家用醬油の製造 Ⅱ、麥糞の堆肥

（田畑南部動力組合文書）

このような協定実行事項を示して各農家に對してその実行を促し、各農家組合の実行の程度を全村的に採点し、優良農家組合を表彰した。また、苗代品評会等も毎年のように実施して農事の改良普及に努力している。

このようにして、大正末期から昭和にかけての農業会の活動は農業の発展に對して極めて重要な働きをしていたのである。大正一五年に黒枝師を招いて村内全域にわたって土性の現地調査をしているのも農会の仕事であり、農業改良に對する農会の意欲が感ぜられる。

5 昭和の経済恐慌と農村

昭和四年秋に始まった世界経済恐慌は日本経済を直撃し、特に農村に深刻な影響を及ぼした。日本の輸出品の大半を占めた生糸はアメリカ合衆国の不況によって暴落し、必然的に繭価の暴落となつて養蚕農家をおそい、たまたま昭和五年は稲は豊作で米価の暴落をひきおこした。昭和初期の繭価と米価の低落状況は表6-27のとおりである。

こうして世界経済恐慌は農家経済を破綻し、さらに、製糸工場等からの失業者多数を抱えた農家は未曾有の苦境に追い込まれたのである。

表6-27 昭和初期の繭価と米価

	繭一貫当り 平均値	米一石当り 平均値
昭和三年	五、三七	二六、七〇
〃 四 〃	六、三九	一六、〇〇
〃 五 〃	二、六九	一七、〇〇
〃 六 〃	二、九五	一七、〇〇
〃 七 〃	二、七五	一七、〇〇
〃 八 〃	—	—
〃 九 〃	—	—
〃 一〇 〃	—	—
〃 一一 〃	—	—
〃 一二 〃	—	—

済ができないという困難に陥ってしまったのである。

不況克服のため、昭和六年、県の失業救済臨時対策低利資金二万二〇〇〇円を借り受け、林地拡張事業(二四〇〇円)・蚕桑改良事業(五六〇〇円)・畜産諸施設資金(三五〇〇円)・副業及び農業共同施設資金(二万五〇〇〇円)等を対象になる村民に融資し、さらに、昭和九年には養蚕不況救済事業として、各部落に林地改良事業を興し、部落がその事業を請け負う方式をとって困窮者に対する救済に役立てた。(以上後編文書)

県は昭和七年から県下二五〇の町村を指定して、農山漁村経済更生計画樹立の指導奨励をしているが、長期にわたる養蚕業の不況に直面し、今までの農業経営の有り方を反省せざるを得なくなり、「農業経営改善奨励事業」を新たに始めることになり、その事業設置趣旨に次の如く述べている。

「現在未曾有の養蚕業の不況に遭遇し、本県養蚕関係農業経営は之を将来継続してゆくことができない。…中略…農家を以て養蚕資金時代の夢より醒めしめ、家族的小農経営の本質に立脚せる堅実な経営形態に推進せしめねばならぬ」としている。

こうして、養蚕偏重を改めて新しい立場で農業経営改善を推し進めて長期にわたる不況を克服しようとした。

このため、県下二三か所に農業経営改善指定組合を設定している。南箕輪村では種子第五組合(農家戸数二〇戸)が指定を受け、指導員の指導のもとに経営の改善を図りその実績を昭和九年に発表している。その概要は次のようである。

種子第五組合経営改善実績

耕作条件の増産(水田三町一反八畝歩 大麦四反八畝小麦三畝歩の作付面積の拡充を)。米九三石、大麦九石の増産をなす

有畜農業の確立に牛三頭、豚九頭、山羊二頭、鶏二十七羽、兎百七十五羽増殖し、自給肥料及当増肥（糞肥）三十五萬其の他五十四萬を増産す
 宅地利用の改善に柿・葡萄・梨・楓等果樹苗木を共同購入配布す
 婦人部活動促進に自家用醤油・花紙・味噌・農産加工・漬物等共同製造実行

負債整理償還に負債総額一万四千七百八十二円、一戸当たり七百三十九円、共同耕作生産により償還

（授産文書）

これは早に種子第五組合のみならず、村の農家全体がこのような方向に動いたものと思われるが、その内容を見ると、養蚕に代わるものとして稲麦の増産と有畜農業の確立をうたっているが、その有畜農業も消極的なものであってその主目的が堆肥の増産、肥料の自給のための畜産という方向であった。次の宅地利用の改善による果物類の自給、婦人部活動による醤油味噌等の自給等、現金支出面の縮小ということ、総合して自給自足体制という殻に閉じこもる形で不況切り抜け策になっている。当時の農業政策の基本が農本主義に基づく家族的小農経営の維持であり、堅実な経営の推進が経済的恐慌に強い自給自足体制の確立という方向に進んだのは、止むを得ないことであつたかも知れないが、進歩への道はむしろ閉ざされたといつてよい。

負債整理については、この第五組合は一戸当たり七三九円（当時米一石二〇円として約三七石五分）の負債を持っており、非常に大きな負債になっているが、共同耕作による生産物によって返済する計画を立てているが、果たして返済に何年かかっただろうか。昭和十四年現在で南箕輪全体の公的機関よりの借金は次のように残っていた。（表6-1）

これは公的機関からの借用のみであつて、各農家においては他に産

表6-1 昭和十四年負債額（南箕輪村）

起債目的	当初起債額	昭一三年末未償還額	借入先	借入年	借入利率
自作農創設維持資金	七、四〇〇円	五、三〇七円	農	昭和三年	五分五厘
耕地改良拡張事業	一、七九〇円	八四九円	農	昭和三年	五分五厘
畜産改良	八、四〇〇円	六、一七、八〇	農	昭和三年	五分五厘
養蚕改良	五、六〇〇円	五、六〇〇円	農	昭和三年	五分五厘
農業共同	二、四〇〇円	二、四〇〇円	農	昭和三年	五分五厘
中小商工低利資金	一〇、五〇〇円	七、二九、一一	農	昭和三年	五分五厘
	七四〇	四七、四三	農	昭和三年	五分五厘

業組合や個人からの借入金も相当額存在したものと考えられ、農村の負債は莫大なものであった。これらの借財の返済は当時の農村の最大の難問であつて、各村とも、経済更生計画を立て、あるいは、負債整理組合をつくつてその整理に当たつたのである。

6 稲作技術の発展

大正時代および昭和前期は、農事試験場を中心とする組織的研究の成果がしだいに普及し、稲作技術は長足の進歩を遂げている。

(1) 品種

従来からの品種と共に、農事試験場等によって作出された品種が普及し始め、品種数は多くなっている。まず、大正時代に当地で多く作られた品種を挙げると次のようである。

管島・二本三・中城坊主・農内早生六八号・白千石・関取・愛国・白鶴・からす・沖見・白毛

昭和になると試験場作出の品種が多くなつており、昭和四年西天竜

耕地整理組合は農事試験場より原種に分譲を受け、篤農家で増殖したもので西天開田地区の水田に適するものとして次の品種を奨励配布している。

畿内早生二二号・関取・管島・銀坊主・畿内早生六九号・保村・亀治・有芒愛国・無芒愛国・松島・明神種この外に一般品種として大和錦・穀部良・白毛種・大正種・福島種・東京種等が作られており、後になって信濃三三・陸羽一三二号・農林六号・農林一四号等の新品種が栽培されるようになっていく。

(2) 育苗

選種には塩水選が行なわれるようになり、浸種は播種し五〜七日、または川（池）浸し七〜一〇日が行なわれた。苗代形式は大正時代は水苗代の平苗代が一般的であったが、昭和になり播幅四〜五尺に一尺の踏切りを作る短冊形が一般化し、さらに揚床苗代にすることが指導されている。しかし、揚床苗代の普及はあまり進まなかった。

肥料はしだいに化学肥料が使用されるようになり、合理的な施肥設計も行なわれるようになった。昭和初期の苗代に対する本村農会指導の施肥標準は次のようであった。

苗代一坪当たり

基肥 腐熟人糞尿 二貫〇〇〇匁

過磷酸石灰 三五匁

硫酸加里 三三匁

追肥 一回に硫酸・過磷酸石灰各一五匁以内

播種量は昭和にはいると坪当たり二合を標準として薄播きが奨励され、中には坪一・五合あるいは一合播きという農家も現れている。苗代坪数は本田一反歩に対し一二〜一五坪を用意した。

苗代管理については、苗代を温暖に保つための工夫が重点事項にな

っていて、風の強く来る方向に対して風除けを設けること、落水口は水口と反対方向にすること、水の管理としては発芽するまでと夜間や寒い日・雨天には深水とし、その他は浅水にすることが指導された。床面剝離に対しては夜干し、細砂あるいは細土の散布を行ない、害虫防除は一斉駆除が奨励され、日時を定めて早朝の除虫菊水灰合剤の散布等が行なわれた。

(3) 本田の耕種

牛馬耕による本田の耕起はかなり普及し多くはこれによったが、まだ万能鋸による人力耕起もあり、深耕のため二段打ちなども行なわれた。代掻きは通常荒代、植代の二回に分けて行ない、神土は馬鋸または田車が使用された。西天竜田地区は漏水防止のため代掻きの回数や時間等を定めて特に丁寧に丁寧に行なうよう指導し、その検査も行なわれた。肥料のうち堆肥等は耕起前に散布し、他の肥料は荒代播きの後散布するのが通例であったが、化学肥料使用の増加に伴い、収穫に影響する重要な要素として地区ごとに標準施用量を示し、三要素に過不足なきよう指導が行われるようになった。昭和五年の西天竜水田の標準施用量は次のようであった。



図25 田車による代掻作業

植付けは六月五〜二〇日ごろ行われ、一坪の株数は六〇株を標準とし、一株二〜三本植が普通で、昭和になってからはほとんど縦横を正しく通す正条植になった。

表 6-29 西天竜地区標準施肥量(反当)

種類	数量	N	P	K	備考
堆肥	二〇〇	一・〇〇	〇・五二	一・二六	元肥
硫酸安	一〇三	〇・六〇	一	一	
骨粉	一〇三	〇・三五	二・三〇	〇・〇二	
硫酸加	一〇三	〇・三五	一	一・四四	
大豆粕	五五	〇・三〇	〇・〇七	〇・〇九	
鯨粕	五五	〇・四五	〇・一〇	〇・〇九	
石灰	二〇	一	一	一	
合計		二・七〇	二・九九	二・八一	

(田畑南部動力結合文書・西天竜地区の要より)

表 6-30 大正末—昭和初期稲作付面積・収量・反当収量(南筑輪村)

年度	項目	作付面積	収量	反当収量	備考
大正一四		一六六、三	三、八四一	二・三〇九	
昭和二		一六三、二	三、五四六	二・二二五	
三		二〇四、五	四、三七七	二・一四〇	
四		三二一、六	六、四三三	二・〇〇〇	
五		四〇五、三	八、三九六	二・〇七一	
六		四六五、〇	九、一五三	一・九六九	
七		四六五、〇	九、一七九	一・九七四	
八		五八一、三	一一、五五六	一・九八九	
昭和二		一六六、三	三、八四一	二・三〇九	
三		一六三、二	三、五四六	二・二二五	
四		二〇四、五	四、三七七	二・一四〇	
五		三二一、六	六、四三三	二・〇〇〇	
六		四〇五、三	八、三九六	二・〇七一	
七		四六五、〇	九、一五三	一・九六九	
八		四六五、〇	九、一七九	一・九七四	
九		五八一、三	一一、五五六	一・九八九	
昭和二		一六六、三	三、八四一	二・三〇九	
三		一六三、二	三、五四六	二・二二五	
四		二〇四、五	四、三七七	二・一四〇	
五		三二一、六	六、四三三	二・〇〇〇	
六		四〇五、三	八、三九六	二・〇七一	
七		四六五、〇	九、一五三	一・九六九	
八		四六五、〇	九、一七九	一・九七四	
九		五八一、三	一一、五五六	一・九八九	

(後継資料より作成)

西天竜の開拓
により面積急
増に初期低
反収は初期低
下

除草は手取りまたは雁爪・回転除草機・八反取り等の農具が使われ、初期は土壌の反転の多い雁爪または回転除草機で行ない、後は八反取りや手取りで行なうものも多く、三〜四回の除草が行なわれた。第一回目の除草は種付け後一〇日以内に行なうよう指導された。出穂後まで除草が行なわれており、炎天下の手取り除草は農業労働の中で

も最も苦しい労働であった。

(4) 収量と乾燥調整

収量は鎌によって行なう手刈りであるが鋤の出現により能率が上がった。稲架掛け乾燥はまだ全般には普及しておらず、昭和初期になっても稲架掛けの脱行が重点指導項目になっていた。脱穀は足踏回転脱穀機の普及によって非常に能率的になっている。

参考のため大正末期及び昭和初期の稲作付面積・収量・反当収量を掲げると表 6-30 のようである。

(四) 戦時体制下の農業

1 戦時統制と食糧増産

世界的な経済恐慌の最中の昭和六年九月、満州事変が勃発した。それは上海にも飛び火して同一二年にはついに日華事変へと拡大していった。このため、軍需の拡大という形で景気は回復に向かったが、このような方向で景気回復が図られたことは不幸なことであり、その結果がついに昭和一六年一二月太平洋戦争に突入することとなり、暗い苦しい戦時体制の時代が続くことになった。

この戦時体制のもと、昭和一四年二月には米穀配給統制法が公布され、同一二年には小作料統制法、同一五年には青果物配給統制規則が公布されて、果樹・蔬菜の作付面積の統制が行なわれて花の栽培が禁止された。さらにこのころから生米の輸出の道が途絶え養蚕が急速に縮小されるに伴って、桑園の整理と大豆や麦の作付けが強要され、戦時体制下の農村は食糧増産を至上命令として統制されることになった。これにより経営改善による畜産導入等、新しい農業への芽生えも全く摘み取られる結果となってしまった。

米については先に述べたように昭和一四年に米穀統制法が公布されて、農家の産米は統制米として大部分を供出していたが、一五年五月

には奉公米供出運動が進められ、一四年産米で各農家の保有していた米の供出が半強制的に各村に割り当てられ（本村割当量三三四俵）、これを各部落に割り当てていく。割り当てに当たっては各部落における残米量を斟酌して部落に割り当て、各部落においては部落総会・農家組合総会を開催して趣意を徴し、供出督励には役場は勿論、農会、産業組合・区長・農家組合長・部落指導員・青年団幹部のほか、小学校や駐在巡査の協力を求めて実施するほどのものしきであった。さらに、同年一〇月には米穀は国家管理に移行した。この国家管理については村農会から各農家組合長あてに出された通知から見るとその骨子は次のようである。

1 生産又は小作料として受け入れたる米穀の数量より自家保有米（飯米及び種子）を差し引き残額全部を出荷すること。

2 管理米は総て玄米にして二月末日までに供出のこと。



図6-26 米の供出風景（西天竜農会倉庫前にて）

このように米が最重要に国家管理に移されると共に、麦作についても麦類の配給統制規則が制定され、各村、各農家組合に対して出荷割り当てが行なわれ、各農家組合はその出荷割り当て数量に対する請書を提出し、それが充分消化し得るようにならなければならなかった。

戦争末期になると米麦の供出割り当てのみでなく、

甘藷・馬鈴薯に対しても供出割り当てが行なわれた。したがって村としてはその供出割り当ての完遂のため、各部落に作付け割り当てをし、それに基づいて供出割り当てをしたのである。昭和二〇年度の馬鈴薯・甘藷の作付け割り当て数量は表6-31のようであった。

昭和一八年度に農工課が北原の村有林を開墾し、食糧増産を図ったのもこのような情勢下のことであった。

表6-31 馬鈴薯の作付・供出割当と甘藷の作付割当（昭和二〇年）

部落	馬鈴薯作付け 割当面積	馬鈴薯供出割当量	甘藷作付け 割当面積
久保	一町三三三畝	一、四〇二・七八〇	六町四一畝
塩井	一、〇七	一、二八・五五〇	四、〇五
大井	二、三六	二、四八九・一三九	九、六六
北殿	一、四四	一、五一八・七九九	六、六六
南殿	一、四三	一、五〇八・二五〇	五、二二
田畑	二、一二	二、二六六・〇〇六	七、七八
神子	一、六五	一、七四〇・二八八	六、二七
沢尻	一、三〇	一、三七一・一三六	三、三〇
計	一一、七〇	一三、三九四・九四六	四九、三五

（税務文書）

2 諸物資の不足と農民の協力

戦時体制下にあつては総てが軍需優先であつて、あらゆる面の物資が不足しがちであつた。農業にとつては肥料は重要な生産資材で食糧増産には欠くことのできないものであつたから、政府も優先的にその

表6-32 戦時体制下の農機具及び肥料の配給

品名	農機具				品名	肥料			
	昭和 一七	昭和 一八	昭和 二〇			昭和 一七	昭和 一八	昭和 二〇	
動力脱穀機	一三八	一二三			硫酸アムモニア	二六、五二〇	一九、七八〇	九三六	
人力脱穀機	五九	六五			石灰	九、九一二	七、六〇〇	七二八	
噴霧器	一〇	三			過燐酸石灰	九、五〇〇	八、五七〇	三六〇	
土入れ器	六二	七六			トーマス燐肥	三、五〇〇	四、六三〇	一〇六	
犁	二八	五〇			配合燐肥	三、二二〇	四、〇〇〇		
フタ取	四五	五三			大燐アルミナ	二、八八〇	五、九三〇		
毛羽取	二	一			S豆粕	九、八八〇	九、四〇〇		
製薬機	二五	一二			魚粕	一、六四八	八、〇〇〇		
白動耕転機	一六	一			高嶺土	一、四六〇	八、〇〇〇		
砕土機	一	〇			高度物	三、六四〇	五、八〇〇		
石油ポンプ	一	一			特種灰	八、八〇〇	九、二〇〇		
重油機	〇	一			生灰	三、八〇〇	五、二〇〇		
草刈機	?	?			石灰粉	?	?		
稲刈機	?	?			灰末	?	?		

(穀物文書)

確保に努力したと思われるが、それでも昭和一五年から配給制度になり供給量はかなり減少している。とくに硫酸製造工場の多くが火薬製造工場に転換し、輸入品に頼っていた硫酸加里・過燐酸石灰等の原料は輸入が極めて少なくなり、燐酸肥料はトーマス燐肥・燐酸アルミナ等によって代替されたが、その不足は補うべくもなかった。

農機具もまた充分な供給は得られなくなっていた。兵器製造に欠かせない金属類は早くから回収が行なわれている。不要になった金属類はもちろんであるが、時にはまだ使っている鍋や鉄瓶さえ供出するありさまで、寺の梵鐘などはほとんど徴発された。したがって、農具等

の供給は不足し勝ちであり、既に昭和一五年に古い犁先や犁床を回収するに当たって「故犁先ニ関シテハ客年十二月中国収力通機致シ置キ候処、其ノ実績不良ナルタメ已ムテク回収ノ如何ニ拘ラズ申請ニヨリ処理イタシ新品ヲ配給シオリ候エ共、爾今故犁先ヲ回収シ取扱要領ニヨリ処理スルモノ以外新品配給相成リ難キ旨本県ヨリ指示之有リ候条……」(田畑南部動力組合文書)というように、犁先などの大切な農具さえ古い犁先と交換でなければ新品の配給を受けられないという状況であった。戦時下の南宮輪村に配給された農機具及び肥料の数量は表6-32のようであった。



図6-27 病疫予防共同作業

農産物で軍需物資として重要視されたものは食糧のほかは生糸があった。生糸は輸出の途絶ではなほだしく衰退していたが、国内唯一の繊維資源及び軍需物資として増産を要請され、また、桑条の皮も繊維資源として剥皮供出を命ぜられ、さらに、兎の飼育が奨励され、老人や子供の仕事としてどの農家も兎を飼うようになり、その毛皮は軍部供出毛皮として買い取られた。

3 労力の不足と共同作業

戦争状態が長びくにつれて、軍人あるいは軍属として応召するものや、軍需工場等に動員されるものがますます多くなり、農村の労力不足が顕著になってきた。特に一家の大黒柱の抜けた応召農家の労力不足は深刻であった。それにもかかわらず食糧増産のため各種の統制が行なわれている状況の下では作付けの割り当てを消化し供出を完了しなければならなかった。

このような農村労働力不足に対処してとられた対策が隣保共助と共同作業であった。昭和一五年果に農業共同作業実施協議会が作られ、共同作業推進について協議をし、その実行を農村に指導監督をしている。

こうして、農村は労働力の不足を共同作業、隣保共助の体制によって応召農家の耕地も作付け管理が行なわれるように努力をしたのである。

三 養蚕業の発展と衰退

(一) 明治時代の養蚕

1 養蚕発展の概要

明治の初期は、政府も一般民衆も新しい産業に対する模索の段階であって、養蚕についての政府の態度も同様であった。例えば、明治三年民部省は「養蚕方御下問書」を出して養蚕の実状を下問し、同七年には桑樹に対する培養方について取調べを行なっている。しかし、蚕種や生糸が開港以来、主要輸出品となっていたこともあって、南信濃を中心として明治六年に結成された開産社の資金貸与項目の中にも、その一つに「荒蕨ノ地ヲ拓キ桑茶……等ヲ地味ニ応ジ之ヲ栽培スルコト」その二に「養蚕牧牛ヲ始メ豚鶏……ヲ盛大ニ蓄ウ事」として、養蚕は資金貸与の主要対象となっていたことなどからみて、養蚕は期待される産業であり、急速な成長を遂げ、やがて農業のうちの重要な部分に成長した。

明治九年に県は付属養蚕奨励金を設置し、このころから生糸輸出が急増しているが、同一〇年には長野県は日本一の蚕糸県となり、同一三年には製糸業のみならず生糸輸出货量においても群馬県を抜いて一位になるほどの急成長を示している。

南箕輪村においては、明治一〇年に収繭量二二八〇貫、同一三年に二五〇〇貫、同四年には春蚕について飼育戸数二七四戸、収繭量二八〇石六斗七升となっている。その詳細は表6-33のとおりである。同年の夏秋蚕は、別の資料によって収繭量一九一石三斗一升八合とあり、年間合わせて四七一石九斗九升となり、当時の繭一石はおよそ一〇貫であったから重量として四七一九貫となり急速に増大していることがわかる。

表6-33 明治24年養蚕取調表

部 落	養蚕増立枚数	収 入 額	桑 葉 高	飼育戸数
久保北洞	四三・一五枚	三九・七九	二二・八四〇	二七戸
久保南洞	四一・五	三六・六四	九・六九四	三一
北 洞	三九・〇	二九・二〇	四・八七五	三三
大 洞	六二・〇	五三・四七五	一〇・四〇四	五六
南 洞	二一・〇	二七・〇七	五・一一〇	一六
田 洞	五三・九	四六・〇四	一五・〇三五	五七
神子洞	四四・七六	三九・六四	六・四〇六	四一
沢 洞	九・八	八・八二	一・八四四	一三
計	三二五・一一	二八〇・六七五	六六二・〇八・二	二七四

(坂ノ井大東文書)

明治初期は養蚕が主体であったが、同一二年に松本地方に二・三社の秋蚕種製造会社が生まれるに及んで、次第に夏秋蚕の飼育が行なわれるようになった。政府は、夏秋蚕は繭の品質が悪いこと、桑園が荒廃することを理由にあげ、秋蚕亡国論を唱えこの抑制にかかったが、春蚕は他の農作物を栽培する農繁期と重なり労力が競合することから、農家は自然と夏秋蚕へ指向する傾向を持ち、夏秋蚕の飼育はしだいに増加した。養蚕農家戸数では春蚕より夏秋蚕の方が多い状態になった。こうして、明治三十七年には上伊那郡下の桑園面積は三〇〇町歩に達し、養蚕収入が米作収入を超えるに至っている。

また、これに伴い桑の品種改良、蚕の飼育技術も著実に進歩している。

2 桑の栽培

桑の栽培は養蚕の基礎であって、明治維新による田畑勝手作りの許可のもと、養蚕の発展に先だってしだいに桑園が増加した。南箕輪村では明治二〇年に桑園面積が四〇町歩余、同二三年には四九町歩余に

表6-34 明治一八年桑の栽培法

項目	栽培者	食田 三郎	赤羽 只雄	伊藤美代吉	征矢代五郎
桑の種類	城下 甲州	城下 甲州	城下 甲州	甲州	城下 甲州
肥料(反当)	酒生粕 八〇ノ	糞 六〇ノ	酒生粕 三〇ノ	酒生粕 四八ノ	
仕立 方	城下根刈 甲州木立	根刈 木立	木立	根刈 木立	
反当植樹数	一一〇〇株	六〇〇株	六〇甲株	一八〇〇株	
反当採桑量	二二〇ノ	一四〇ノ	一五〇ノ	三八〇ノ	
桑苗仕立方	城下力取 甲州曲取	城下根分 甲州枝伏		城下根分 甲州枝伏	
桑園所有面積	七反	三反		二、五反	
年々上繭収量	二石八斗 一三石	一石二斗 一石六斗		二石九斗 一三石三斗	

(分場文書より作成)

なっており、明治末には確かな資料が見当たらないが一〇〇町歩を超えたものと推定される。

桑の栽培方についても関心が高まり、明治一六年の農談会日誌の中にも桑の品種についての記録があり、当時の品種として雲文竜・坂東・城下・飛騨桑・小坂・鳳返し等が挙げられ、飛騨桑は肥沃地に適し、小坂は瘠地にてもよく、鳳返しは瘠地にも適し蚕に最も良し、とその特性を述べている。

さらに、明治一八年における桑の栽培法を掲げると表6-34のようである。これは当時の先進的農家の栽培法を表にまとめたものであるが、桑の品種は城下と甲州桑で城下は根刈り仕立、甲州は木立ちにして、反当たり株数は六〇〇〜一八〇〇株とまちまちで、反当たりの採桑量も一四〇貫〜三八〇貫、桑園反当たり収桑量は四〜九貫とかなりのひらきがあり、その生産力はまだ低いものであるが、既に七反

歩の桑園を持つ農家があったことがわかり、当時の栽桑の概要を知ることが出来る。

明治二〇年には「況々農商工事ノ改良進歩ヲ企図スベシ」(会則第三條)として上伊那勸業会が作られているが、その勸業会の問題の中に桑の栽培については次のように挙げられている。

○桑園ハ改植セザル可カラズ、其ノ方法如何

○桑ノ在來種ハ何ヲ良シトスルカ、又他地方ヨリ移植種類中生育ノ良好ナルモノハ何ナルヤ

○桑園ノ培養及ビ其ノ伐採方法

○桑園ノ肥料及ビ其ノ使用季節

これによつてみても品種の選択、栽培法に関心が高まっていることがわかり、さらに、同年村会の決定により、十文字・飛騨等二八品種五二七本の桑苗の送付を受けて、桑の品種の育成試験を行なっている。つぎに、明治三八年の果農会桑園経済調査資料『鳥史資料』の上伊那の部分によつて、明治後期の桑の栽培について見ることにしよう。まず桑の品種についてみると、種類はきわめて雑多であるが多く栽培されている品種は小牧(城下)・鼠返し・甲州(金澤桑)・四ツ目(四方咲)・丸尾・飛騨等を挙げている。また、仕立て方と用途については次のように述べている。

○小牧・鼠返し・十文字……根刈り 春葉用・夏秋葉用

○甲州・四方咲・丸尾……中刈り 春葉用・春秋葉用

○飛騨……高木造り 春夏秋葉用

明治中期以後夏秋葉飼育の発展により、桑葉の過度の収獲が行なわれて桑園の荒廃が進んだため、桑園の改植と合理的利用がこのころしきりに叫ばれるようになっていたが、当時の根刈り仕立ての桑の利用法には次の様式が一般化したようである。

一年目……夏秋葉に摘葉

二年目……春葉に刈り取り 秋葉に摘葉

三年目……株直し 夏秋葉摘葉

これらの利用法と共に肥培にも意が用いられ、施肥量もしだいに増加した。特に繭の販売による現金収入の増加が金肥の使用を増加させたように思える。大豆・大豆粕・油粕・餅粕・過燐酸石灰等の購入肥料が使われるようになり、明治四〇年の上伊那郡下の桑園の平均施用額は反当二〇円に達している。

なお、桑の病害については紋羽病・赤繭病・萎縮病・青葉病などが挙げられている。

3 飼育法

明治初期の飼育法は天然育(清冷育)といわれる自然の温度による飼育が行なわれていた。明治一六年の郡下の有力農民を集めて行なった農談会の席で飼育法について話し合いが行なわれているので、その一部を掲げて当時の飼育法に対する考えを見よう。

温暖育と清冷育とあり、殊に下伊那郡下には温暖育を要するなり。目今欧州にては少しく火氣を用うる處、客歲十一月の果桑集議会の時も既に温暖育を要するにありとの説多く見えたり。然ればその得失如何かと思はる。何となればこの辺はまだ専業者なくして農間に成すものなれば天然育が實地適切なるものなり。温暖の如きは二十七八日の僅かの日数にて首尾をなすと雖も温暖育は瞬間とても油断の出来ぬものならずや。然るに、清冷養の如きは養室に甚しく風を入れず、且つ天井に穴を明け空気を通し自然の氣候にまかせて飼養をさすときは必ず繭は現われるものなり……

(役場文書)

これによつてみると、当地においてまだ一般には清冷育といわれる天然飼育が行なわれていた。その方法は、温度は自然のままであるが、

表6—35 国産蠶糸 (蚕の飼育法・明治一八年)

飼育者	項目	産品種	原種枚数	産取量	昇立よりの日数	原種一枚当り 産起き部数	飼育法	給桑回数		熟葉の扱い方	一枚当たり労力	原種一枚当たり費用	原種一枚当たり養桑量	稚蚕飼育温度	除沙
								一 二 三 四 五	給桑回数						
倉田 三郎	本春白	三枚	上繭三石七升 玉繭三斗七升	四〇日	長三尺五寸横二尺三寸 七十八枚	初めに温暖育 次第に清冷育	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	一つ拾ひツガ の枯枝に宿み	三五人	九〇銭	一六五メ	F七二―七三度	一日一回	
赤羽 只雄	掛合	二枚半	上石六斗 一斗五升	五〇日	同上 七十五枚	同上	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	同上	三〇人	七五銭	一六〇メ	F七〇度	同上	
伊藤 美代吉	真蚕	一枚	上九斗五升 一斗五升	四五日	同上 五十枚	温暖育	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	同上	三五人	?	一八〇メ	F七〇―七五度	同上	
征矢 代五郎	後夏閑取	二枚	上二石 三斗	三六日	同上 七十枚	同上	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	一 二 三 四 五 六 七 八 九 十	一つ拾ひ 蓋産	?	一四五〇銭	一九〇メ	F七〇度	同上	

(2) 遺囑文書上均作成

強い風が入るのを防ぎ、換気のためには天井に穴をあけておくという方法である。

明治一八年に博覧会若しくは共進会等に繭を出品し、その出品物を解説した資料が残っている。それをまとめたものが表6―35である。

これは先進的農家の飼育法と考えられるが、稚蚕は温
暖育でF七〇―七五度で飼育し、後に清冷育に移行す
るものと、上簇^{ウサカ}まで温暖育であるものとあるが、給桑
回数は一輪で一日七―一〇回、五齢でも五―六回と多
く、除沙は一日一回であるが、蚕種一枚当たり三〇―
三五人と多くの労力をかけている。熟蚕は一つ拾いで
ツガの枯枝に上簇し、一人だけが蔭^{カゲ}簇を用いている。
掃き立てより収穫までの日数は三六―五〇日で農家に
よって大きな差があり、蚕種一枚で上簇を平均一石
（約一〇貫）ほどを得ているが、玉繭の割合が非常に
高く上簇の一―一・五割になっている。

明治三〇年の先に掲げた第三回勸業会において、養蚕に關して議題とした問題はつぎのようであつた。

其ノ一、要室ハ如何ナル構造ヲ以テセバ可ナルヤ、

其ノ二、微粒子汚毒ノ微アル狂蘇ヲ全廢シ精撰蘇ノミヲ飼

育スル方法

其ノ三、聖種ノ貯藏

其ノ四、資糧催育ノ方法

其ノ五、挿キオロシヨリ上竊マデ教育上如何ナル方法ヲ用

〔投稿文書〕

給桑の方法については、これまでほとんど桑葉を刻んで与える飼育であつた。そのため桑葉のしおれるのが早く、いきおい給桑回数を多くする必要があつたが、やがて全芽のままで給桑する方法が始めら

れた。この全芽育は、蛋が不揃いとなり繭の品質が劣るとして製糸業者から敬遠される傾向があつて容易に普及しなかったが、給桑回数減らし、かつ、給桑量と労力の節約となることから、養蚕能率の向上という要望に添つており、對桑育と全芽育の折衷した方法を経て、明治末にはしだいに一般へ普及するようになった。

養病についてはすでに明治一六年の第三回農談会日誌の巻末に養病の種類とその原因および予防法が書かれている。養病としては節高病・頭透病・湯養病・縮養病・驚養病・透養病・雜病の七種類が上げられているが、節高病は腫病であり、頭透病は空頭病、湯養病はおそらく硬化病であろうと考えられるが、これらのうち一種の病氣について原因および予防法についての記載をみよう。

頭透病：原因 居蚕（眠蚕）の節桑葉を被せ、且つ、空氣不通にして蒸れより生ず。凡庸の養蚕家桑葉を能く着せ居付けたりと自得するが、三、四日を経るに従い不揃いになる。居蚕のとき病原を醸し、四日を経て病重くなるものなり。

予防法 居蚕のとき桑葉を被せざるよう注意、且つ、其の日毎に養蚕を換え空氣の流通を図る。

現在の養病の知識からみれば幼稚なものであるが、養病に対する強い関心と防除意欲を読みとることが出来る。明治時代養病について特に注意されたことは微粒子病の予防であつた。これは主として養種取締り上の問題であるが、政府は明治一八年に養蚕組合規則において、養病予防のための養卵検査を行なうことを定め、さらに、同一九年、養種学理・養病検査・顕微鏡使用法の講習を行ない、長野県においては同年五月に長野県養蚕組合取締所・養病検査所を設けて養卵飼育・養体生理・養体病理等の教育及び養病検査を始めている。明治二九年には民間の養種組合が「養微粒子病研究団体」を組織し、微

粒子病について研究を行なっている。それにもかかわらず、微粒子病はますます増加の傾向を示し、明治三八年には養病予防法が公布され、同四四年には県下数か所に養病予防所が設置され、上伊那には伊那町に養病予防事務所が開設された。

このように、明治の後半から遂次組織的科学的な研究と改良が進められ、養蚕業は国内における重要な産業として、経済活動の中心に据えられてきたのである。

二 大正時代・養蚕の最盛期

1 概況

大正時代は養蚕と製糸の最盛期であつた。第一次世界大戦中および戦後の日米経済の発展、生糸輸出の好況に支えられて養蚕業は異状な発展をした。糸価は大正九年の低落の時期を除いて比較的順調に推移し、生糸は我が国最大の輸出品として、国、県、そして製糸業者が熱心積極的に養蚕農家を指導し、空前の隆盛を見るに至つたのである。

まず、大正のごく初期から一代種蚕の飼育が始まり、県は桑の優良品種を指定品種として農家に栽植させ、また、養蚕組合の設立を奨励した。大正一一年には県養蚕試験場を設置して桑の栽培、養蚕法の試験研究、養病予防法等の研究を行ない、さらに蚕の奨励品種を定める等の積極的指導をした。このようにして、長野県は大正五年には全農家に對する養蚕農家の割合が七七％になり、同一四年の産繭額は一〇〇〇万貫を超えた。上伊那郡下は大正七年には産繭額が一〇〇万貫を超え、養蚕農家戸数は一万五八〇〇戸に達し、大正八年の糸価高騰時の県下は養蚕王国として空前の活況を呈した。

南箕輪については、大正時代前期は資料に乏しく充分判明しないが、大正一四年の養蚕の概要は次のとおりである。

養蚕収入は全農家収入のほぼ六四%を示し、稲作収入の二・二倍になっている。いかにこの時代に養蚕が重要な地位を占めていたかが理解できよう。養蚕は現金収入の源であるばかりでなく、農家収入の中で副業的地位をはるかに超えて、主要産業になっていたことを示している。

種 類	金 額	百 分 比
養 蚕 収 入	三〇六、三四六	六三・九一%
稲 作 収 入	一三七、一五三	二八・六一
其の他・作物収入	一七、九六八	三・七五
畜 産 収 入	一、五二〇	〇・三二
林 業 収 入	一六、二二五	三・三八
水 産 収 入	一六七	〇・〇三
合 計	四七九、三七九	一〇〇・〇〇

(村勢一覽表より作成)

表6-36 大正一四年南箕輪の農・林・水産業収入

この養蚕の飼育戸数は全農戸数六五〇戸の六三%、夏秋蚕は六八・五%に達し、桑園反別一八九町八反は全畑面積四八二町歩の三九・四%弱になっている。収量は三万貫に達し、販売価格は三〇万円を超えている。この養蚕の農業の中での地位を見るため、同年の南箕輪の農業収入の内訳を掲げると表6-36のようである。

季 別	飼 育 戸 数	掛 立 枚 数	収 量	価 格	桑 園 反 別
春 蚕	四〇九	二、二四五	一三、七四九	一三三、七四九	一八九・八
夏・秋 蚕	四四五	三、八六六	一六、五三六	一七二、五九七	七・三
計	一六、一一一	三〇、二八五	三〇六、三四六	一九七・一	

(村勢一覽表より)

2 桑の肥培管理

養蚕の発展につれて桑の栽培もますます重要度を加え、桑園面積も逐次増大して大正一四年の南箕輪全体で、一九七町歩余に達したことは既に見たが、栽桑技術に対する関心も高まってきた。県は大正七年に桑の指定品種(四〇種)を定めて各地に見本園を設置し、さらに同九年には全町村に「一か所ずつ指導桑園を設けて栽培の指導に当たっている」。

しかし、大正時代の栽桑上特に注目すべきことは施肥量の増加である。大正一〇年の上伊那郡下の稲及び桑に対する全肥施用量は表6-37のとおりであって、硫酸アムモニア・過磷酸石灰・配合肥料等の化学肥料と、糠粕・鰾粕等の魚粕類及び大豆粕・菜種粕・餅粕等の油粕類の三種類がほぼ同額使用されているが、当時の桑園面積で考えると反当たり施肥額は六円強となり、水稲の反当たり施肥額二円強のほぼ三倍になっており、中には反当たり一五・一六円の施肥をした養蚕農家もあった。

表6-37 大正一〇年上伊那の全肥施用量

団 料 の 種 類	桑 園	稲
化学肥料(硫酸過石・配合肥等)	一〇〇、九三三	三四、二八七
魚粕類(鰾粕・鰾粕等)	一〇〇、八四九	一一、八八五
油粕類(大豆粕・菜種粕等)	一三七、九七五	八八、一七〇
骨粉・血粉類	四、三五二	一一、一八三
糠粕類(大豆・丸餅・下肥・石灰)	一八、九五四	三、三二〇
合 計	三六三、〇六三	一四九、八四五

さらに、四年後の大正一四年南箕輪の金肥使用額は表6-38のようである。桑園に対しては八万三三〇〇円の費用を投じ反当たり四三円余を使用し、水田の六倍強になっていることは、養蚕に対する農民の意

表 6-38 大正一四年南其輪金肥使用量

種類	反別	金肥使用額	同上反當り使用額
水稲	一六六・三 _{町反}	一一、〇〇〇 _門	七 _町 二二 _畝
桑	一九七・一	八三、五〇〇	四二、三六
麦	六・五	一一〇	一、六九

氣込みが強く感ぜられる。

3 費重法の進歩

大正時代養蚕の発達に大きく貢献したのが一代雑種の採用である。大正三年、県内に欧州黄蠶種が導入されているが、そのころから性質の異なつた二つの品種の雌雄を交配して生まれた雑種第一代（F₁）が、その両親のいずれよりも強健で収繭量、繭質共に良好であることが立証され、早くも同四年、片倉組は一代雑種の蠶種を伊北地区に配布して飼育させ、県の奨励もあつて一代雑種の飼育は急速に広まつた。さらに、大量均質の生糸の生産が商品価値を高めることから、蚕の品種統一に対する要望が強くなり、大正末期には県は蚕品種の指定を行なうようになってゐる。大正一四年の県指定品種は全部一代雑種になつてゐる。

飼育法についても次第に進歩している。県は大正の初期から養蚕組合の結成を繰り返し奨励しており、組合の設置によってようやく養蚕教師を置くことを指導しているが、大正四年よりはこれに対し補助金を交付、さらに同八年から養蚕教師規則を制定する等養蚕の指導体制を整えている。この養蚕教師が農家を巡回指導することによって、養蚕の知識は深まり、各農家の飼育法もしだいに科学的合理的になった。

養蚕農家一戸当たりの蚕種揚立数量もしだいに増加し、大きな養蚕

農家では労力が不足し、雇用労力が使われるようになってゐる。「**挂**」といわれる労働力**短旋業者**が盛んに活動したのもこのころである。しかし、第一次大戦中の労賃の高騰によつて労働力の雇用が不利となり、これを軽減する方法として労力が少なくて済む全芽育が広まり、さらに、粗放的飼育法である桑桑育が始められるようになった。大正九年および同一五年の上伊那郡内の飼育法と、その割合は表6—39のようであつた。

大正時代上伊那郡下栗岡育法の割合

大正九年			大正一五年		
飼育法	戸數	割合	飼育法	戸數	割合
飼養育	三、五八四 _戸	二四、七%	飼養育	一、〇〇一 _戸	六、八%
劉芽育	五、三七五	三七、一	劉芽育	一、四三六	九、八
全芽育	五、三七五	三七、一	劉芽全芽育	二、〇三八	一三、九
劉芽全芽育	七、五	〇、五	全芽育	三、〇七二	二〇、九
全芽全芽育	七、五	〇、五	桑養育	七、一四三	四八、六
計	一四、四八四	一〇〇、〇	計	一四、六九〇	一〇〇、〇

表 6-42 大正一五年間内務省調査法

特殊飼育法	戸数	得立枚数
行灯育	九二五戸	六〇五一枚
石灰育	三二	二五八
多桑育	三〇	一七三
箱飼育	四二	二、八一〇
覆蓋育	八	六八
温布育	二九	二〇〇
複式養果育	九四	五三〇
計	一五三九	一〇、〇九〇

また、大正七年には石灰膏が、同一〇年には箱飼、同一一年に温布育が始められているが、本村内にもこれらの飼育法が何ほどか広まって来たものと思われるが、資料が乏しく詳細は不明である。大正一五年において、これら特殊飼育を行った郡内の養蚕戸数と揃立て枚数は表6-40のようであった。

これらの飼育法はそれぞれ特徴を持っている。石灰膏の石灰散布は、眠に入るとき蚕座を乾燥させる方法として普通飼育においてものちのちまで応用され、覆蓋育、温布育等の桑葉の萎れを防ぐ飼育技術は後の防範紙飼育へ発展したものと考えられ、箱飼いの方法は現在の稚蚕共同飼育に継承されているように考えられる。

上機については、この時代はほとんど折敷機が使われるようになった。この折敷機は一回の使用で使えなくなり多くの蚕が必要でもあったので、養蚕家は冬季間にこの機を毎年作り、また、売買もかなり行なわれた。

繭の販売は各地区各農家ごとの長い慣行によって行なわれていたが、いかにして有利に販売するかは極めて重要な問題点であったわけであるが、現金が直ちに手に入るという魅力が強くて、自宅において仲買人に販売するという農家が多かったようである。大正一四

表6-41 大正一四年上伊郡内春繭販売状況

販売方法	戸数	繭販売量	同比率
繭市場販売	一、九六二戸	六八、七四九貫	一二・八%
養蚕家自家販売	五、四四〇	一八一、一四〇	三三・六
組合製糸販売	六、四八五	二三六、三六九	四三・九
製糸場持ち込み販売	一、五〇八	五二、四六四	九・七
合計	一五、三九五	五三八、七二二	一〇〇・〇

年の上伊郡内養蚕農家の春繭販売状況は表6-41のようである。

大正九年生糸価格暴落による養蚕不況対策として養蚕組合は、乾燥保管、繭の共同販売等を重点に努力しており、大正三年組合製糸としての竜水社が発足し、組合製糸に対する販売がしだいに増加してその比率は四三・九%となっているが、まだ養蚕農家の自家販売が三分の一と、かなり多く残っており、また、このころからしだいに営業製糸会社との特約取引も始められるようになった。

(四) 昭和前期の養蚕の衰退

1 概況

昭和に入ってから養蚕業は大きな受難と変動を余儀なくされた。まず、昭和二年には全縣下に大凍霜害があり養蚕家は致命的打撃を受けているが、南箕輪においても桑園約二〇〇町歩(全桑園)に霜害を受け、春蚕の揃立て数量は約四〇%の減となり、この年は秋蚕も連蚕が多くて養蚕家の困窮はひどかった。よって村は霜害対策資金として一万九〇〇〇円、養蚕緊急資金として一万七四〇〇円を借り入れ救済に当たっている。(後場文書)

昭和三年、四年は比較的順調であり、昭和五年には村としては最高の取引量を上げた年であったが、昭和四年秋から始まった世界的経済恐慌は生糸価格の暴落となり、養蚕家に致命的打撃を与えた。それ以後養蚕業は衰退の一途をたどることになった。

昭和初期の激動期における南箕輪の養蚕の状況は表6-42のようである。

昭和五年の繭の値段は一貫匁が二円代で、大正時代的好況時の価格の四、五分の一の安値で、特に秋蚕の繭値は一円五〇銭という安値も出るほどの暴落ぶりであった。したがって、県下における昭和四年の桑園反当たり所得は八五円二五銭であったが、昭和五年には二八円四

表6-42 昭和初期の養蚕の概況

年度	飼育戸数	収 量	同上 価格	一戸当たり 収 入 額	一戸当たり 飼 料 費
昭和二年	四九二	二六、二三九	一四五、七〇七	二九六、一五五	五、五五
三	四八〇	三〇、〇九七	一六一、七五五	三三六、九八	五、三七
四	四八六	三六、〇七八	一三〇、八〇六	四七四、九〇	六、三九
五	四八〇	三八、六六六	一〇四、三四五	二一七、三八	二、六九
六	四六九	二八、六〇五	八四、二九四	一七八、七三	二、九五
七	四一七	二一、一九二	二九、二五九	七〇、一六	二、四〇
八	四二二	一〇、四六六	五七、一四〇	一三五、四〇	五、四六
九	四一〇	七、五八〇	一六、八五七	四一、一一	二、二〇
一〇	四一二	七、九九九	二二、六九四	五五、〇八	二、八四

注 昭和二、六年 各年度事務報告（税務文書）昭和七、一〇年 養蚕のみ（小学校資料）

七銭、昭和六年には二三四五銭に激減し、経済恐慌は養蚕家に最も深刻な打撃を与えたものである。

このような状態であったから、昭和六年三月に県の養蚕課は養蚕業不況対策として、養蚕家に対し次のような不況対策を示している。

- (1) 無謀増立の禁止
- (2) 粗放飼育をしない
- (3) 蚕品種の統一
- (4) 桑園の整理改植
- (5) 日給肥料の増成

さらに、養蚕偏重に対する批判がしだいに強まり、昭和七年に国は桑園整理補助の制度を設け、県はこれに基づいて第一次桑園整理改植三年計画を開始、同一〇年には養蚕業更新五年計画を立てて養蚕業偏重よりの産業転換の方針を示して、第二次桑園整理五年計画に入っている。村としては直接に当面農家の苦境を救うため、昭和六年に失業救済農山漁村臨時対策低利資金二万二〇〇〇円の転貸資金を用意し、耕地拡張改良事業・養蚕改良事業・副業および農業共同施設事

業等に貸与し、昭和九年には県費による補助を得て養蚕不況救済土木事業を実施している。

このような状態であったから養蚕の減少は目を追って進み、その時、西天竜用水路完成による西天竜畑地帯の開田が進行中であったから、西天竜地区の桑園は大部分水田に変え、具体的な詳細の数字は資料がなく不明であるが、桑園面積は急速に減少した。

昭和十四年には対米関係の悪化により生糸の輸出が途絶え、生糸はほとんど国内用のみとなり、多くの製糸工場が閉鎖に追い込まれた。同一六年、太平洋戦争爆發によって生糸輸出は完全に途絶え、さらに、戦時体制下の食糧増産の要求が強まり、桑園整理の強制割り当てで行なわれる状態となって養蚕の衰退は一層顕著になったのである。

ところが、戦時体制下において外国からの綿や羊毛の輸入ができなくなり、繊維資源の確保、軍需物資としての生糸の需要（落下傘用）にこたえるため「絹は兵器なり」の合言葉のもとに、限られた桑園と乏しい肥料の中で盛んに繭の増産が要求された。国内繊維資源として桑の枝条の皮を斜いで供出するよう命ぜられたのもこのころである。しかしながら、整理された残りの桑園と、乏しい施肥量と不足した労働力のもとでは養蚕の盛り返しは困難であった。また、昭和二〇年には凶作による食糧事情の急激な悪化により、県下の桑園一万三〇〇〇町歩の整理計画が立てられるという状況であった。

2 養蚕と飼育技術の発達

桑園は昭和五年ころまで増加していたが、それ以後はしだいに減少している。南筑輪においては西天竜開田との関係もあって昭和三年の二九〇町二反歩が頂点で、西天竜開田により急速に減少し、さらに食糧増産のための桑園整理が進められている。しかし、反面で荒廃桑園の改植も進められて反当収桑量の増加には意を用いている。また、昭

表6-43 昭和七年長野県の桑の品種と栽培面積

品 種	反 別	割 合
鼠 返 し	二二、〇七、七	四一、〇 %
小 牧 (城 下)	一四、五一、二	二五、八
一 ノ 湖	三、八六、四	六、九
島 ノ 内	二、〇一、三	三、六
四方秋 (四ツ日)	五、四一、五	九、六
改良鼠返し	四、六五、七	八、三
飛 騨 桑	一、六四、九	二、九
福 島 大 業	九八、一、〇	一、七
計	五六、一七〇、四	一〇〇、〇

〔県史資料〕

和五年より竜水社は稚蚕用桑園の設置を奨励し、稚蚕に好適な桑品種の植付けには奨励金を出すなどの指導をしており、「改良鼠返し」などもこのころから導入されている。

長野県における桑の品種と栽培面積は表6-43のようになってい

る。蚕品種はほとんど一代雑種となつて在来種は姿を消し、さらに、大正時代は黄繭種がかなり多く飼われていたが、黄繭種の生糸の需要の減少から全部白繭種にもどつた。

飼育技術の向上については、すでに大正の初期から養蚕組合の設置と養蚕教師をやといその指導を受けることが奨励されていたが、昭和六年蚕業組合法が公布され、養蚕実行組合が法人として組織されるようになり、部落単位で養蚕実行組合が作られて、養蚕指導員が養蚕農家を巡回指導することになり、飼育成績は向上した。

飼育法としては、昭和一〇年竜水社傘下の組合に採用指導した防乾紙飼育がある。これは給桑した蚕座の上に直接パラフィン紙等の防乾



図6-28 改良まぶしをひろげたところ

ち、戦後回転機が出現するまで使われた。

繭の販売については、昭和の初期からの組合製糸への出荷が多くなっているが、経済恐慌による産繭の減少により、竜水社は傘下二二工場を昭和七年に五工場に整理統合し、一方で営業製糸は不況に際し特約取引制度を拡充してこれに対抗する形となり、特約取引による販売が増加している。しかし、特約取引制度は弊害が多く、昭和一〇年三月繭検定規定が公布され、同一一年には養蚕処理統制法が成立し、府県単位に繭の検定品位による取引をするようになり、繭販売の問題は合理化された。

四 昭和後期（戦後）の養蚕

1 概 況

食糧増産のため昭和二〇年に県下で桑園一万三〇〇〇町歩を整理する計画が立てられたことは先に述べたが、この計画は途中で中止され

紙を覆い、桑のしおれるのを防ぐ方法で、桑葉量の節約になるばかりでなく給桑回数も減らすことができ、稚蚕から四齢ごろまで有効であったので全郡的に広まった。また、上簇は昭和になつてから葉を細い針金等で網状に編んだ改良簇が使われるようになった。これは何回も繰り返し使用できるばかりでなく、上簇や収繭の手数が省けることが大きく、かつ、集着き繭が少なくなつて繭質の向上に役立



図6-25 省力型飼育方式の養蚕（給桑）

た。それは食糧輸入のための見返り物資に生糸が重視されたからである。そして、昭和二二年国は蚕糸業復興五か年計画を立て、果は養蚕合理化のための桑の増植改良と稚蚕の共同飼育を奨励した。しかし、昭和二三年の南箕輪の桑園面積は九三町余と、最盛時の三分の一以下に減少しており、しかも、桑の価格が他の物価ほどには上昇もせず、思うような増産はできなかった。ところが昭和二六・二七・二八・二九から蚕桑価格が上昇し養蚕熱が高まってきた。桑園の面積も二八年には一〇二町歩と回復の兆しを見せ、稚蚕の共同飼育の普及による養蚕の安定化もあって、養蚕は農業の中で再び重要な地位を占めるように見えた。しかしながらその後、化学繊維の発展によって生糸の需要は減少し、特に昭和三三年の生糸価格の暴落が養蚕に対する期待を無くさせ、畜産や果樹等の新興種目への転換が目立つようになり養蚕は再び減産の方向に向った。

この間、養蚕の大きな変化は飼育戸数の著しい減少である。昭和三〇年ころ養蚕戸数は五〇〇戸を超えていたものが、同四〇年以降急速に減少し、昭和五〇年には一八〇戸と三分の一程度に減少し、昭和五六年には僅かに二五戸になっている。これは経済の高度成長、工業の発展による就業機会の増大により、農家人口の工業への流出、兼業農家の増大と表裏をなすもので、

農家の現金収入源を養蚕から兼業化の方向へ向けたものと考えられよう。したがって、他方で残された養蚕家は一戸当たりの飼育量の増大という方向をとり、昭和三〇年代から四〇年代前半は戸数の減少にもかかわらず総収量は増加の傾向さえ見せたのである。このような傾向は当然のこととして省力型の飼育方式を奨励させ、養蚕専門的農家も現れ、年間の飼育回数も四回、五回と増加している。

2 養蚕と飼育技術の進歩

昭和二二年、国は蚕糸業復興五か年計画に基づいて養蚕の合理化を推進した。その内容は、桑園の増植改良と稚蚕共同飼育の奨励であった。

桑園の増植改良については、品種の更新と老朽低位生産桑園の改植による生産力の増大であって、品種はほとんど改良鳳返しであった。また、三〇年ごろからは稚蚕共同飼育の特設が進んでいる。

蚕の品種についても逐次、強健良質を目的として改良が進められている。

飼育法についてみると、戦後も初めのうちは各農家ごとにトタン箱飼育等による稚蚕飼育を行っており、中蚕期は籠飼いで吐蚕期に桑桑育（春蚕）にするという方法が一般的であった。しかし、稚蚕の飼育の良否が蚕作の良し悪しに大きく影響すること、個々の農家が早くから蚕室を用意して少量の稚蚕に多くの資材と労力をかけるという不経済性から脱却し、周到綿密な共同管理によって蚕作の安定を求め、労力資材の節約が可能な稚蚕の共同飼育が脚光を浴び、それが奨励されるに至った。こうして、各地に共同稚蚕所の建設が進められ、南箕輪においても昭和二四年から稚蚕共同飼育が行なわれるようになり、

昭和二八年には上伊那郡における稚蚕共同飼育は九九%に達するほどの急速な普及をみた。

上簇法については、昭和二七年に竜水社が回転簇の普及を始めた。回転簇はボール紙で細かい多数の方形の枠に組んだもので、一枠に一匹ずつの熟蚕が飼育できるようにになっている簇で、これを一〇枚くら

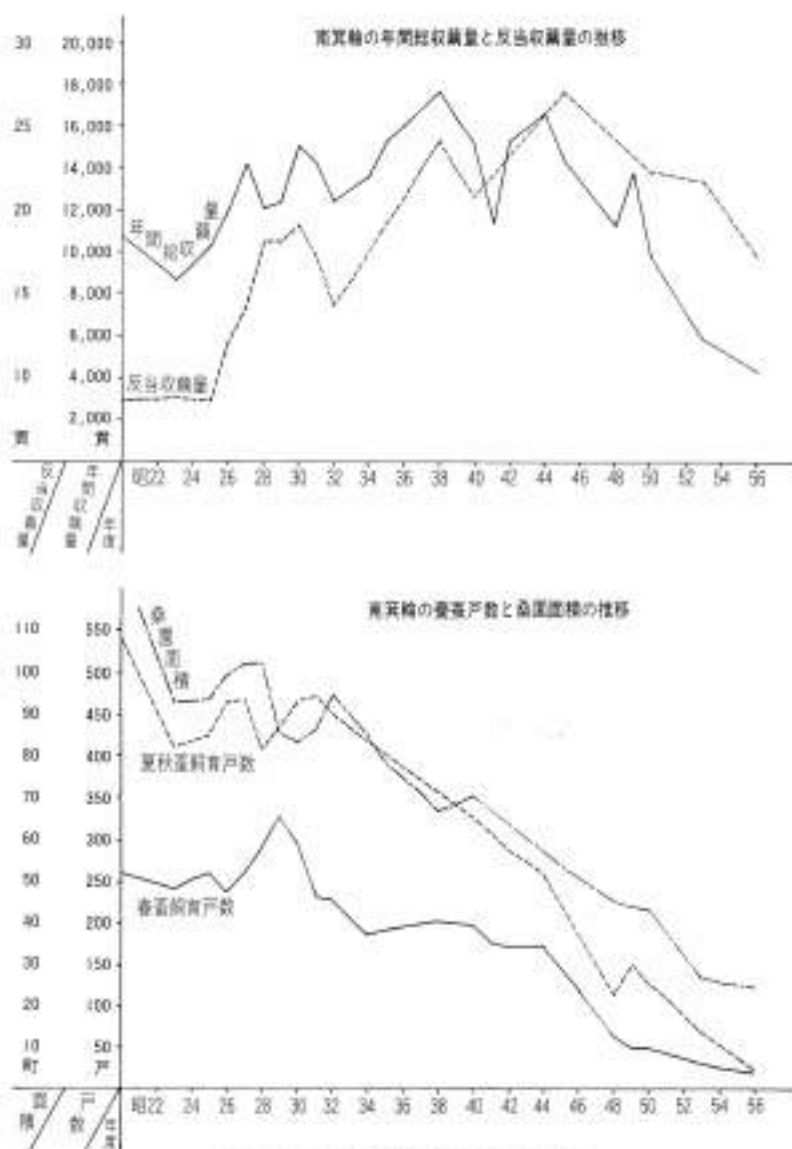


図5-30 戦後における南其輪の養蚕の推移

- 1 健康性蚕品種の育成
- 2 桑園管理能率の向上
- 3 稚蚕共同飼育

姿を変えることとなる。省力型養蚕として考えられた内容は次のようであった。

い枠にさして針金で空間に吊し回転できる様式になっており、二段、三段と吊すことが可能で上簇場所が少なくてよく、かつ、空氣の流通が良く繭質が向上し、収穫が容易である等多くの利点があるため急速に普及している。

このようにして戦後の養蚕は、桑園の生産力の増加と飼育技術の向上によって、表6-30のように桑園一反歩当たりの収量は急速に向上している。昭和二〇年代前半の反当たり収量は八〇〜一〇〇貫から、同三八〜四〇年の七五〜九〇kg(二〇〜二四貫)へと急上昇を示している。

昭和三年の生糸の暴落は養蚕業を窮地に追い込んだが、これを契機として養蚕は省力型養蚕へ向かうこととなり、大きく

4 年間桑蚕育の採用

5 協業養蚕

桑園管理能率の向上のためには、桑の畦幅を六尺くらいに広げて機械力による管理とマルチ農法等が考えられ、年間桑蚕育の普及のためには、桑の仕立て方や収穫方式の変更が必要で、いろいろとその様式が改良された。また、三十八年ごろから蚕の屋外飼育が始まり、各養蚕家は飼って簡易養蚕用鉄骨ハウスを建て、麻布、ビニール等で周囲を囲って屋外で飼育を行なっている。

こうして、養蚕の生産性は急速に向上しているが、生糸の需要が縮小傾向であり、今後の発展はあまり期待できそうもないのが現状である。

(四) 蚕種製造業



図5-31 屋外飼育のための鉄骨ハウス（大泉にて）

江戸末期から明治初年にかけては養蚕の先進地小泉上田方面から買入れた蚕種によってわずかに蚕を飼っていたが中には自家製のもので間に合わせる者もあった。

明治十三年第一回長野県共進会に繭を出品した際の説明書がある。

養蚕並産地

長野県管下信濃国上伊那郡南筑輪村有賀二、五ナシト云ウ夏蚕種、桑ヨリ自種ニシテ飼来リ、明治七年ニ至リ大繭ト称スル夏蚕種ヲ得ル、其厚薄ヲ知ラ

ズ、五ナシト大繭トヲ以テ掛ケ合ワセ明治八年以来ノ自種ナリ云々」とある。旧村誌には「蚕種 質上 一〇〇枚 自用の外他郡へ（役場文書）」とあるが明治八年には次の布告が出された。

蚕種製作ノ儀 自製ノ製造 無印紙ノ蚕種持立テノ儀ハ御規則ニ付リ御禁止ノ処、中ニハ無印紙製造ノ蚕種持立者モコレ有ル懸風聞コレ有リ候ニ付……云々（役場文書）

の通達を受けて勝手に製造することはできなく検査を受けることになった。

明治八年に南殿村から筑摩県権令へ提出した上申書に明治七年分として、「養卵紙七六枚、金二二円二五銭……云々」とある。

明治一八年の共進会に繭を出品した征矢代五郎の解説には次のようにある。

明治十五年玉無ノ種へ大繭種ヲ掛ケ合ワセ、自製ノ卵紙ニシテ関取ト名称ス保存方ハ秋風起ル迄冷気ナル所ニ提ケ置キ降雪ニ至リ土蔵へ入レ移置ノ気候ニ至リ網ノ箱ニ入レ寒水へ浸サズ成ルタケ土蔵ヲ離シ 土蔵ノ中央ニ提ケ置キ小繭前後ヲ以テ養蚕ヲ注意ス（役場文書）

この年の繭出品者は、赤羽誠作、赤羽只雄、征矢代五郎、倉田三郎、伊藤美代古の五名であるが征矢代五郎の外の者は蚕種を小泉郡芳田村産のものを用いたとある。明治一九年の村内特有物産表には養卵紙二二〇枚金四八円一枚につき金四〇銭とある。

微粒子病の予防などのため、明治一九年蚕種業組合規則ができ、また、産繭の品種も改良しなければならぬ状況となった。蚕種製造技術が次第に高度化し、一戸当たりの製造高が多くなると多額の資本と高い技術が必要とするので自家で勝手に蚕種を製造することが困難となった。次に掲げる蚕種製造人も明治二〇年代はほとんどが他の業と兼業であった。

以上の二表からも察知できるようにこの要種製造という事業はなかなか困難で長く続く業者は少なかった中で赤羽忠三は大正四年一代交雑製造研究のため結社した正交社に入社して一代交雑種の製造をし

(上伊那要種製造)

年次	明治三十五年	同四一年	同二年	同六年	同十一年	昭和二年	同七年	同十年	同十一年	以後なし
数	四人	〇	三	〇	二	三	三	二	一	〇

表6-44 村内要種製造業者数

なお明治三五年から昭和二十二年までの南箕輪村の要種製造業者数は次のとおりとある。

(役場文書及び上伊那要種製造)

居 所	姓 名	開 業 年	開 業 年
八三番地	征矢岩五郎	明治三三年	
二五三	倉田嘉代十	明治三四年	
五〇五	唐沢勇次郎	明治三四年	
一六五	唐沢兼蔵	明治三四年	
一四〇	清水半十郎	明治三五年	
二九四	有賀光彦	明治三五年	
二九四	加藤敬亮	明治三六年	
二一〇	白鳥泰次郎	明治三六年	
神子榮	原齊次郎	明治三七年	
久保	伊藤健致	明治三七年	
神子榮	赤羽忠三	明治三七年	
田中壽三郎	田中壽三郎	明治三七年	
有賀忠一	有賀忠一	明治三七年	
清野やえ	清野やえ	明治三七年	
山崎弘	山崎弘	明治三七年	

た。一代交雑種は片親の虫質強健という性質と、他の親の蘭質良好等の両親の長所を有するので現代では一代交雑種だけが飼育されている。

四 西天竜の開田

1 概 要

西天竜水路は、諏訪湖から流れ出す天竜川の肥えた温かい水を、岡谷市川岸から揚水して、辰野町・箕輪町・南箕輪村・伊那市の天竜川西岸の地帯約一八〇haを潤し、小沢川に至るまでの約二六haにおよぶ灌漑用水路である。南箕輪村と箕輪町との境の春日街道沿いに、巨大な開田記念碑が建立されている。その碑文に、この西天竜開発事業の機軸がよくまとめられているのでそれを掲げる。

西天竜水路（水をあつめ物を豊かにす）

上伊那郡西天竜村地整理記念碑

坂田園田官正三位勲一等 伊沢多喜男題額

西天竜地整理組合地区一帯ノ地ハ、長野県上伊那郡伊那富利、中箕輪村、南箕輪村、西箕輪村、並ビニ伊那町ニ跨リ南北四里ニ亘ル海拔二千四百尺ノ台地ニシテ地形概ネ平坦ナルモ、地勢上殆ド水利ノ便ヲ欠キ為ニ広漠タル林野、荒廃セル桑園ソノ大半ヲ占メ食糧自給ノ策立タザルコト既ニ久シ。是ヲ以テ藩政時代以来先覚ノ士ガ諏訪湖ヨリ疎水シテ水田ヲ開拓セント欲シタルコト一再ニ止マラザリシモ終始容易ナラザルヲ以テ実現ヲ見ズシテ空シタル十年ヲ経タリ……（中略）……関係官庁ノ指導援助ト組合員ノ協和精励、組合当時者ノ刻苦経営トハ克ク万難ヲ排シテ竟ニ此ノ大事業ヲ完成ス。

然レドモ創業トモニ守成ノ難アリ、水利暢達ノ業其ノ責亦後人ニアリ。而シテ其ノ恵沢ヲ被ル者亦後人ニアリ。後人其レ勤メテ田シテ勉メザルベ



図3-32 鍾水豊物の碑

ケンヤ。因リテ其ノ概要ヲ記スト云ウ。

昭和十九年十月

仏印印度支那派遣特命全權大使蘭間正四位勲三等

木下 信撰

東京高等師範学校講師

田代其次書

《碑の原文のまま文字は新字体になおす》

この碑の石は仙台市外の稲井村から、昭和一六年に七千円で求めた大石で、長さ二八尺、幅八尺、厚さ二尺もある。当時は戦時下で輸送が困難であったので高遠出身の板倉順間伊沢多喜男の力添えによってようやく木下へ鉄道輸送された。碑面には昭和一九年一〇月と記されているが、やはり太平洋戦争でのびのびになりようやく昭和二五年一〇月建立された。建設費には二二万円を要した。「鍾水豊物」は「水を鍾めて物を豊かにする」意味で、西天竜にびつたりのことばである。碑文は木下信の撰文で田代其次の書である。西天竜の成立の由來が詳細に記された碑面に対して、碑陰には細かく関係者八三〇余名の氏名が刻まれ、その中に本村関係者も多くある。

2 西天竜用水開発まで

経ヶ岳山麓の広大な扇状台地上に水を引こうとした歴史はすでに江戸時代から始まっている。

資料に残された限りでもすでに文化三年（一八〇六）に小野村の直八が、また、安政三年（一八五〇）には高遠藩の伊東伝兵衛が高遠藩領地内のみ伝兵衛井を造り、さらに、明治以降は民間有志が発起して幾度か開発計画を立て、その実現に努力しているが、遂に成功を見るに至らなかった。しかし、その先人たちの努力の跡は尊敬に値するものがある。その詳細は「第四章水を求めての第一節三」に記述したので参照されたい。

3 西天竜用水路の開発

(1) 西天竜用水路開鑿期成同盟会

明治三十九年に結成された「西天竜用水路開鑿期成同盟会」は、土地所有者の足並みが揃わず数年間膠着状態になっていたところが大正七年の米騒動にみる米価の高騰と、第一次世界大戦の教訓としての食糧確保の要請から再び活発な活動を始めることになった。

新しい期成同盟会は、前同盟会委員を解任し新たに町村会の選出した委員によって構成し、上伊那郡長を会長に、関係町村長を委員に推選して発足し、次のような活動を始めた。

関係町村長及び委員へ土地所有調べ作成を依頼すること。

当用水路関係区域土地所有者の同意書を徴すること。

同意証書

西天竜用水路関係区域を耕地整理地区に編入し本県耕地整理奨励規程により交付されたる設計書及び規約に基づき耕地整理組合設立に同意を表するため左に記名捺印候也

大正八年二月

上伊那郡

村町

番地

氏 名

この同意書によって土地所有者の総数の二分の一以上、所有する土地の三分の二以上の同意が、耕地整理組合成立の必要条件になっており、同意証書の確保には各委員が当たったが、この同意証書は後年事業施行上の有力な意志表示書類として重要な意味を持ったのである。

大正八年四月には開墾助成法が公布され、同年五月には同盟会の要請に基づき県の測量設計調査が始められ、一二八日の日数を費してそれが完了した。

さらに、西天竜開墾事業を組合事業として施行する場合県費の助成を得るため、堀江会長外数名が出席して知事に要請をした。このように、着々と耕地整理組合へ向けて準備が進められたのである。

一方、十一月九日には県参事会議員黒河内一太郎外四名が同二一・二二日には赤星県知事が取入れ口より、放水点の小沢川までの実地踏査を行なう、その準備は整えられていった。

(2) 西天竜耕地整理組合の設立

大正八年十一月二五日、西天竜耕地整理組合設立認可の申請が次のように行なわれた。

耕地整理組合設立認可申請書

今般上伊那郡伊那富村外四か村に於て、耕地整理組合設立致し度く、換条耕地整理法に拠り御認可相成り度く設計書、規約並びに耕地整理法施行規則第四十四条の事項を具し大正二年長野県令第拾号により左記事項を併記し此の設申請候也

大正八年十一月二五日

伊那富村中箕輪村南箕輪村伊那町代表各二名連署

南箕輪代表 征矢友三郎

長野県知事赤星典太殿

真木 正直

記 (略)

この申請は十一月二七日、県知事より認可された。こうして、十一月四日耕地整理組合の創立総会がもたれ、次の目的を持って発足した。

- 一、導水路を開鑿し、天流川の流水を分水し之を地区内に誘致し灌漑を行なうこと
- 二、開墾、地目変換、其の他区画形質の変更
- 三、上記の事業を施行し、農業偏重の農業経営を改め、米の増産を図り組合員の経済を安定せしめ、引いては国家の政策に寄与せんとするものである。

組合発足に当たって、組合員数一五七〇人のうち、同意証書を提出した組合員は一三六五人であった。

以下、耕地整理組合による西天竜完成とその後の事件、改修等主要事項を年表的に表記することにする。

年 月 日	摘 要
明治三十九年十一月	西天竜開墾五か町村の有志を郡農会に集め、協議して天竜用水路期成同盟会を組織する。郡へ三百両寄附し、測量設計等郡に依頼する。郡へ六万兩議決される。
四〇年 二月二六日	郡費臨時土木費として、測量設計のため一八六六兩議決される。
四一年 九月三〇日	天竜川疎水工事計画説明書、同工事仕様書、同予算設計書が完成。
四五年 六月 七月	長野県は基本調査事務所を開設し、調査完了。地区内有志五〇余名郡役所に参加し、水路開墾について黒の旗号から詳細な説明を受ける。開墾調査委員会を組織する。
大正 二年 一月	上京し農商務省にて耕地課長、農務局長、内務省にて市町村課長に面談し、開墾事業について指示を受け、援助を依頼する。

大正

七年 八月

七年 九月 四日

七年 十月 四日

八年 二月

八年 四月

八年 五月

八年 十一月 二五日

八年 十二月 二七日

九年 一月 二七日

九年 二月 二七日

九年 三月 二七日

九年 四月 二七日

九年 五月 二七日

九年 六月 二七日

九年 七月 二七日

九年 八月 二七日

九年 九月 二七日

九年 十月 二七日

九年 十一月 二七日

九年 十二月 二七日

農商務省技手三名来郡し、諏訪湖流量、西天地区の現況調査。

開保町村長、有志者十名、幹線水路予定地を調査。期成同盟会に開墾調査委員会を推薦的に依頼し、新委員を選出する。

西天竜用水路開墾期成同盟会規約を制定。経費収支予算決定。

農商務省から長野県上伊那郡西天竜土地利用計画書が発行される。

開会に於いて開墾助成法が制定される。

農商務省課長、県知事等相繼いで川岸取入れ口から小沢川までを現地踏査する。

西天竜耕地整理組合設立認可申請を本県知事に提出。

赤星典太郎知事から組合設立の認可を受ける。

一月四日創立総会。

県会において西天竜用水路費補助金九万二千六百四十七円の大予算が満場一致をもって可決せられる。

上伊那郡役所内において事務を開始する。

民野公園において起工式を挙ぐ。一月幹線導水路工事着手。

第一期工事竣工する。(川岸の取入れ口から官所のサイフォン出口まで) 組合事業。

第二期工事竣工。(官所から北大出の北沢川まで) 組合事業。

第三期工事事業として竣工。(北大出から中箕輪・南箕輪村界まで)。

開田工事始まる。(石山り、米価二五〇〇銭)。

第四期工事事業として竣工。(南箕輪村北村界から沢尻放水路まで)。

第五期工事事業として竣工。(沢尻から小沢川終点まで)。

幹線導水路の通水式を挙げる。村人みな幹線水路端に集まり歡喜して水を迎う。或は水にとびこみ、或はその水を飲む。式典は小沢放水路踏段清手前まで世紀の水を見ながら行なう。(米価二五〇〇銭)。

川岸の取入れ口の頭首工(ローリングダム)完成。用水不足のため中箕輪を境に上下流で水争いとなり、時間給水制に改める。幹線導水路欠

五年

六年

八年

一〇年

一三年

一五年

一七年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

二五年

米価暴落のため財政計画の立て直しを行なう。

石山り(米価一五〇〇銭) 幹線水路欠損。

諏訪湖沿岸地区民との間に水量についての争議。鈴木県知事仲裁。

開田以来の大豊作となる。(米価一九〇〇銭)。

代価期に一月の大洪水。その後長梅雨。(米価二五〇〇銭)。

幹線水路欠損。

西天竜耕地整理事務所において竣工祝賀式挙行。

幹線水路欠損。

鍾水豊物の記念碑建立。除幕式。関係物故者法要。

西天竜土地改良区となり組織を変更し、総会を行なう。

県営により幹線導水路の改修工事。

県議会において、県営西天竜発電所計画が承認される。幹線水路大改修工事。

発電所竣工し発電開始。

(四) 南箕輪における西天竜の開発

1 開田の経過

南箕輪村地籍の幹線導水路工事は、昭和三年二月起工し、同年の一月竣工した。その長さ一里一五五〇間(五六五四間)、中箕輪村と南箕輪村の村界から沢尻の放水路までの区間で第四期工事として行なわれた。飛島土木株式会社が、二四万九四六三円五一銭で請け負っている。

南箕輪村地区では幹線導水路工事よりも一年早い昭和二年から開田工事が始められている。大泉区の整理工事請負契約書(昭和二年)によると、開田計画の年次割に従って、関係地域に道・水路および各業ごとに杭打ちをし、地上物は土地所有者が取り去ることになっている。

表6-45 昭和二年開田工事概要（大泉分）

工事種類	筆数	面積及び延長	額負金	平均単価	上記請負外金額以役数	備考
一、開田整理工事	七	反六・五	二五・三	二・五	八	
二、開田整理工事	二六	一八・〇	二二・二	二・五	〇	
四、道路工事	三	一・〇	一・〇	一・〇	〇	
九、旧田整理工事	一七	一七・〇	四・八	二・八	〇	
一〇、旧田整理工事	二	二・三	〇	〇	〇	
一一、其他整理工事	一	一・〇	〇	〇	〇	
計	六	三三・三	三三・三	三・三	〇	

る。そして、各部落ごとに開田組合が作られ、道・水路の作成から開田整理工事一切がその組合の請負いによってなされている。前記契約書によると、大泉の場合は表6-45のようである。

夫役供給の方法は、請負人は工事に必要な夫役を確実に提供するたため五日前に組合に申し出す。施行期限は昭和三年一〇月一日から同四年四月三〇日までとなっている。それは、西天竜新地整理組合整理工事請負規則と工事仕様書に則ってなされたものである。

大泉川左岸の四町一反歩は耕土が少なく、心土が砂礫ばかりであるので、特別地盤補強工事に指定された。床土三寸（約九センチ）を搬入して礫三分を混入して、充分搗き固め、耕土は二寸（約六センチ）の厚さに客土し、畦畔は瀬水の無いよう入念に築き上げることとされている。

開田は西天地区全域では次のように施行された。

第一区 伊那富村地籍 第二区 中箕輪村地籍

第三区 南箕輪村地籍 第四区 伊那町地籍

この表によれば、南箕輪村は第三区であるが西天竜地区全域の四六・六％の地籍を占めているので、西天竜用水の影響を極めて

表6-46 開田工事の年次別面積（大泉分）

（単位 反歩）

年度	昭和2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	計	各区の百分比
第一区	一・五	三・五	三・五	一・五	三・五	三・五	〇	一・五	三・五	三・五	三・五	三・五	二五・〇	一・五
第二区	一・五	三・五	三・五	一・五	三・五	三・五	〇	一・五	三・五	三・五	三・五	三・五	二五・〇	一・五
第三区	一・五	三・五	三・五	一・五	三・五	三・五	〇	一・五	三・五	三・五	三・五	三・五	二五・〇	一・五
第四区	一・五	三・五	三・五	一・五	三・五	三・五	〇	一・五	三・五	三・五	三・五	三・五	二五・〇	一・五
計	一・五	三・五	三・五	一・五	三・五	三・五	〇	一・五	三・五	三・五	三・五	三・五	二五・〇	一・五

表6-47 大正一一年以降の玄米産出相續調

（右当たり）

年度	大正一一年	一二年	一三年	一四年	一五年	昭和二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	一〇年
米価	三五・〇〇	三〇・〇〇	二七・〇〇	二二・〇〇	二〇・〇〇	二五・〇〇	二二・七五	二二・〇〇	二〇・一五	二〇・五〇	一八・五〇	一九・〇〇	二四・〇〇	二五・〇〇

強く受けていることがわかる。昭和三年には驚くほどの面積が開田され、この一年で第三区全域の二五%もが竣工され昭和五年までの四年間に六二%が完成している。南箕輪の村人がいかに水を待ち望み、水田になることに念願をかけていたかがよくわかるのである。

しかし、開田工事が始められると、時を同じうして米価が暴落し籾価が高くなるという農家経済の大変動に会うことになった。(籾反収二八〇貫とし、その価八四四〇〇銭)(昭和四年)

そのため、開田延期、負担軽減等の運動が各地区から起こり、一時は開田工事が進まぬようになりはしなかつた心配された。ところが開田した第一年次の稲作の成績がまことに良好で、全国平均で反収約二石弱(米五俵弱)の収量という年なのに、西天開田では反当二石九斗(米七俵一斗)の成績を挙げたので、前途に明るい見とおしがついた。その後、連年の農村不況、特に養蚕不振のため、農家の現金収入はたいへん少なくなった。そのため開田工事で一日一二時間以上も働いて、その賃金が上人足五〇銭(組合の見積りは三〇一四〇銭)にもなり、結構不況対策にもなって、朝早くから夜おそくまで、つめて仕事をした。

開田期間中は労賃の変動があったり、土地の高低や木の株の大きさや地質などによって、反当の工事費は計算できないが、田一反歩におよそ延人夫一〇〇工とされていた。一反歩当たり、幹線水路費・道水路費・開田費等を含んだ総工費は一〇〇〇円と査定されており、そのうち土地所有者の負担金は六五〇円で、残り三五〇円は県および国庫の助成金によったものである。であるから村人は、自分の田は、自分の手できちんと開田の仕事に従事した。

2 開田工事の方法と苦勞

(1) 水田の形

水田の区画は南北に三〇間(五四・六五間)東西に一〇間(二八・二五)の一反歩(一〇a)を基準にして杭打ちがされた。幹線水路から東に、平均して一枚の水田ごとに約〇・七五間の標高差で作られる。工事はその設計書により、県の監査員と耕地整理組合の係員の指揮によってなされることになっていた。工事用の杭は多少にかかわらず移動してはならないことが厳重に注意された。

(2) 開田整地工事の施行

開田工事に関する方法や順序も工事仕様書によって定められている。その順序は次のようである。

- | | |
|---------------|------------|
| ○拔根荒起し並びに礫石除去 | ○地盤練り、敷層散布 |
| ○表土翻ね掛け | ○表土掘削し |
| ○土割打ち | ○雑工 |
| ○畦畔築き立て | |

ア 拔根荒起し並びに礫石除去

工事に着手するに当たって、予め設置してある標杭(基準杭)によって各水田の水杭を打ち、その田の計画された水田面の高さを決めて監督員の検査を受ける。その後拔根や石の取除きを行なうのである。畑地を水田にするのは桑の拔根等で比較的容易であり、拔根器(三ツ又になった支柱の下に滑車をかけ、根にチェーンを巻いたり鉤をかけたたりして滑車の原理により根を上引き抜く器械)でも唐鍬でもできた。しかし、山林を開田する場合、大本の株に当たると非常に苦勞をしたものである。大型機械がなく、ほとんど手作業である。唐鍬やつるはし、のこぎりなどで掘りとりねばならなかった。入念に掘り取らなくては水持ちが悪いということで検査が受からないので、手にマメを作りながら

られている。たいがい二〇坪の面積の土置場を、田の中央に三か所作ったものである。土置場は表土を置く前によく床締めをし、藁を厚く敷いておく。表土はよい土を六寸（約一八〇mm）以上刻ね除けて雑物を取り除き、土置場に積み重ねる。その量は一反歩に対して、三〇立方坪（約一八〇m³）以上と決められた。

機械力のはとんどない当時は、みな脊（せ）によって人の肩でかついで積みあげられたものである。着ているハッピの肩はすり切れ、肩からは血が出、やがてタコが当たるといふ苦勞をしたものである。脊もまた自分で用意しなければならぬので、一日働いて疲れたからだで、夜なべに藁縄を手でない、それで脊を作っては翌日使ったものである。脊は二人でかつぐので、気の合った人でないと無駄な力がかかってうまくいかなかった。

ウ 土羽打ち



図6-33 伏拝後開田前の状態

取り除いたものである。しかし埋め土の方で、水田計画面より二尺（六〇cm）より深いものはそのまま埋めてもよいという規定があるので、そんな場合はみなで大いに喜んだものである。

イ 表土初退け

松根や石の取り除きが終ると、水田基準面の丁張りに基づいて表土置場を作る。表土置場は一反歩で六〇坪（約二a）の面積と決め



図6-34 西天庵開田工事（畦畔も出来て中央の盛土は耕池である）

西天地区は西から東へ

かけてゆるやかな傾斜地が一般である。したがってほとんどの水田は土手が必要とし、その土手は切土か盛土をして作られる。切土盛土の法勾配は一割とし、盛土の場合は水持ちをよくするため、下から亀石か千本溝（せんぼんこう）で畦畔のところまで入念に掘き固め、高さ一尺ごとに筋芝を植え込んで、

それを斜めに上から土羽打ちをして仕上げるようになってい。厚い重い板に柄をつけたもので入念に土羽打ちが実行された。

エ 畦畔築き立て

畦畔は粘土質の土で八寸の高さに掘き固めて盛り上げる。天端（てんばた）は一尺八寸（五五〇mm）とし、耳芝を植え付けた。畦畔ができあがると大よその田の形ができあがるのである。

オ 地盤練り

地盤練りは床締めともいう。まず床三寸（九〇mm）を掘り起こしてから灌水して、地盤の高低や凹凸を修正する。その後鍬や万能鍬その他のものを使って土を攪拌（かくはん）して練り上げる。そして適当に乾燥したところで、馬を何頭かつないでぐるぐると歩かせるか、ローラーを引くか、あるいは四輪または二輪の荷馬車を馬につけてぐるぐると引かせたり、または蟻（あ）（太い丸太に四つの持っところをつけた蟻のような形をした



図6-35 開田床締りの状況（四輪効用車
を引き回している）

た。この作業が終わると灌水して、保水検査を受けた。同時に地盤の高低についても検査された。

力 表土掘均し

地盤が固められると、その上に敷土をなるべく厚く敷いた。水田の少ない土地柄であるから、この敷土は他所から共同購入されたものである。そして、床土と表土とが田起こしの時すぐ離れるように敷土をしたものである。敷土をした上へ、積み上げてある表土をむき、田の全面に均一な厚さになるようにする。この時もまた積み上げた土を登に入れて、田の全面にかついで配るのである。表土を積み上げた時と同じように、着るものの肩はすり切れ、皮が破れて血がにじんだものである。

このような苦しい作業でも、折からの農村不況によって他所から働きに来る人たちが多かった。伊那里村や美和村から青年衆が大ぜい働

もの）亀石（丸く平たい重い石のまわりに溝を掘って針金を巻き、それから引繩を出した亀のような形をしたもの）など適当なものを使得、隅々までいいねいに搗き固めた。（後になってトラクタが、湧水で保水力のない田の床締めに使用された。）水がないところへ水を引くのであるから、一滴も漏らしてはならないと、農民はみなまじめにこの作業をし

きに来たが、苦しい労働に耐えきれなくて、一人帰り二人帰りして、間もなくみな帰ってしまった。東筑や木曾からも来た人があったが、それも長続きしなかった。朝鮮の人たちも働きに来たが、この人たちはよく苦しみに耐え粗食に耐えてがんばっていた。寒い冬も掘立小屋のようなところで暮らしていた。故郷へ送金でもしていたのであろうか。中には厳しい労働に耐えぬいて、南筑輪に定住するようになった人もいた。とにも角にも村人はそのきつい労働に耐えなければ開田ができなかった。自分の田になるのだからという意欲だけがその苦しみに耐えさせてくれたものであろう。豊かに波うつ稲穂を夢見ながらその念願のゆえに開田作業は進んでいったのである。

表土が大よそ均らし終わると、表土置場の地盤（床土）をまた出して、第二回の灌水をし地盤締りを行ない、その後表土を平らに均らすという作業をして完成した。

手 雑 工

田の床締りが終わって表土が均らされると、その後、水田の水掛け口と吐き口を作った。それらは地形によってどこに作るのがよいかを考え、現場監督と相談しながら設けたものである。

また、作業に出る人にはみな賃金が出るのではなく、賃金は耕地整理組合費から支出されるので、組合費が非常に多額になるため、所有地に応じて無償の夫役が課された。大きな地主は夫役に出ることが不可能なため、希望する小作人に夫役に出てもらって、その田を耕作させるなどの便法をとった人も多い。

3 西天竜開発による土地利用状況の変化

耕地整理にあたっての関係面積と耕地整理組合員数は表6-48のようであった。

この数値は西天竜の計画段階のものであるので、面積などは少し異

表6-48 町村別耕地整理関係面積と組合員数

種別	町村	伊那市	中井村	南箕輪村	西箕輪村	伊那町	合計
面積		八二・六四一六歩	四六六・三七〇八	五七七・一六二三	二・五八〇八	一一四・八六一八	一一三八・六四一三
面積の%		六・七%	三七・六	四六・二	〇・二	九・三	一〇〇・〇
組合員数		一八二	六三〇	五四九	六	二〇三	一五七〇

表6-49 西天竜地区整理前後の土地利用比較表(南箕輪村分)

地目	整理前	整理後	面積	反当価格	価格	面積	反当価格	価格	面積	反当価格	価格	面積	反当価格	価格
比較	面積	反当価格	価格	面積	反当価格	価格	面積	反当価格	価格	面積	反当価格	価格	面積	反当価格
耕地整理前	五・五九	九〇〇	五〇三二〇	四〇〇	八七四〇〇	一〇六三四八〇	二二〇	三三二二〇	二六四二七六	四六・二四	六〇	二七七四四	六〇	二七七四四
耕地整理後	五八〇・三四	一〇〇〇	五八〇三四〇〇	四九・〇六五〇〇	二四五三〇〇	一・六六二二〇	一九七二	八・八六	六〇	五三一六	〇・二二四二八	〇・二二四二八	〇・二二四二八	〇・二二四二八
差	五七四・七五	一〇〇〇	五七五三〇九〇	四八・四七五〇〇	二四五三〇〇	一・六六二二〇	一九七二	八・八六	六〇	五三一六	〇・二二四二八	〇・二二四二八	〇・二二四二八	〇・二二四二八

なっているが、関係町村の中で南箕輪村が最も多い。因みに昭和五四年現在、西天竜地域の田の面積は一一八〇haで作付反別は一〇一三・八haである。南箕輪村は田が四六一ha(作付四四二・一八ha)である。したがって、南箕輪村は全西天竜地域の三九・〇七%(作付では四三・六二%)を所有していることになる。西天竜開発によって南箕輪村は稲作中心になった。

西天竜開田以前は水田面積が村全体の僅か五%で、耕地のうちでは畑の占める割合が高かった。

これを西天地区だけに限って、耕地整理前と耕地整理後の南箕輪村の土地利用の比較表を示すと表6-49になる。

この数値は西天竜用水路開設の基本調査の段階のものであるから、後に横川と深沢がサイフォンによるようになったため、計画幹線水路

を東に一五〇メートルほど移動する計画変更をしたので、実際は余程すくなくなっている。それにしても、畑・山林・原野が減少し、水田面積が飛躍的に多くなっていることがはっきりとしている。したがって天竜川畔の水田と合すれば、南箕輪村は米作地帯として位置づけられ、農家も米作中心に移行せざるを得なくなった。そして土地の地目が田に変わることによって、地価は差引総額四六五万円余も高い評価額に変化したのである。

4 大泉耕地整理

西天竜ができることによって、桑畑も普通畑もみな水田になってしまふ。養蚕による年何回かの現金収入も必要であるし、牛馬の餌となる雑穀や、麦・大豆などもなくてはならない。大泉の地主ら三一名が相図って、大泉集落の西の西天竜幹線水路の西側の大森林地帯を開墾

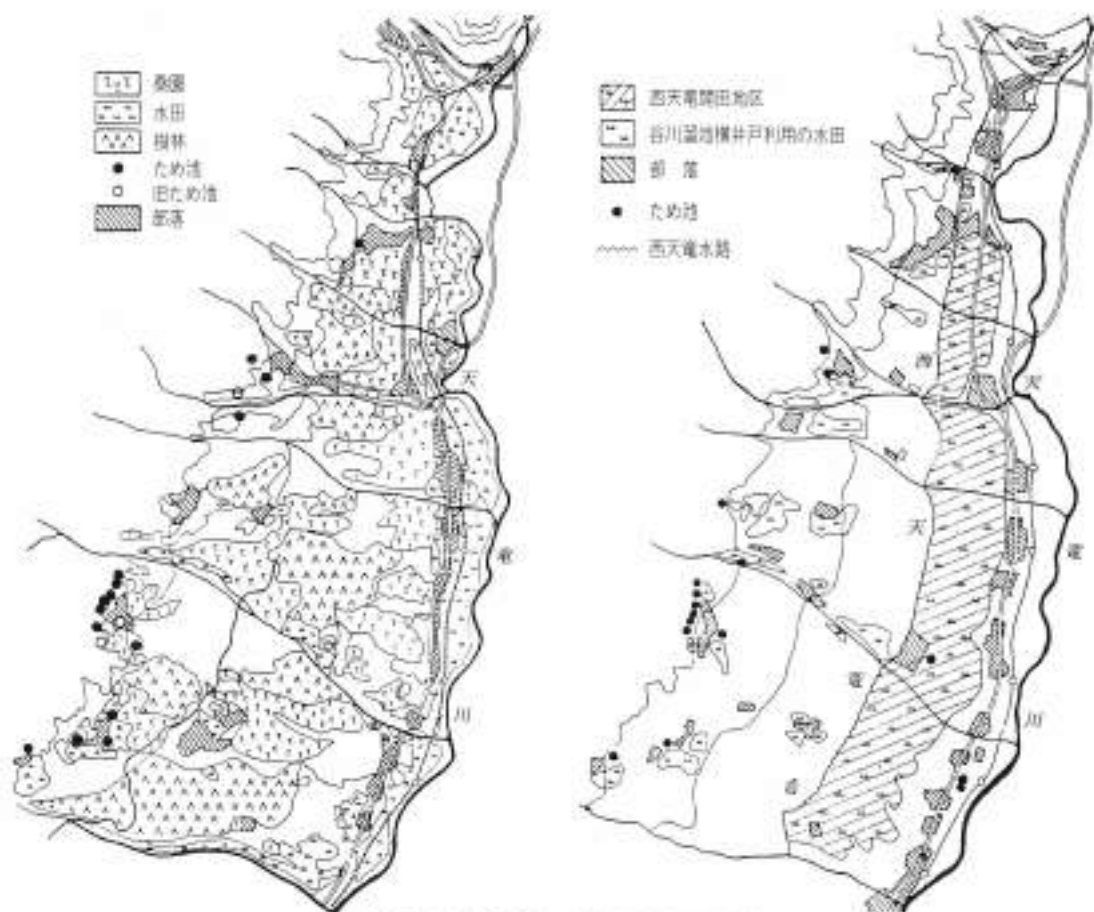


図6-36 西天竜開発前の姿(左)と開発後の姿(右)

し、畑地を造成することになった。

昭和四年一月県知事(鈴木信太郎)の開墾認可を受けた。当初の計画は、地主一六名で開墾予定面積も約六町歩であった。

昭和七年七月設計変更の認可を受けている。その結果、地主三一名、開墾予定面積約一六町五反余に拡大された。総事業費は一万円という巨額であったが、自家労力を充てたり、開墾すれば耕作できるといふ契約で借りた人の労力で開墾したりしたものである。西天竜の開田作業に比べ開墾は比較的楽であった。国から交付された助成金は四〇〇〇円、県からの補助金は三〇〇円であった。

この開墾は昭和四年から始められたが、西天竜の開田作業と同時にあったので、なかなか大変であった。当時この地の山林は、樺や榎の林と松林が主であった。樺の林の後は土地が落葉でよく肥えていて、よい畑になった。昭和一五年ごろまで開墾が続いたが、今も地名として大泉耕整の名が残っている。その後、昭和一八年ころから戦時下の食糧増産ということ、韓国の人たちによる軍隊の農耕隊がその西側を開墾し、広大な畑地ができた。

今、村道唐松線を西に上り、西天竜幹線用水路の西約一〇〇mのところの道北側に開墾の記念碑が建っている。

この開墾事業によって、現在のような果樹園も乳牛の牧草畑も桑畑もできた。米作の単作地帯から稲脚し

表6-50 地区内関係町村の土地生産状況（西天竜開田前）

町村	作物		米		桑		大麦		小麦		大豆		粟		紫雲英		蕎麥		そば・大豆	
	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量	作付・収量
伊那町	収量	作付	一五二、九	六五二、二	八一、五	一三、〇	一五七	九二	一五、八	一一八、二	二〇、〇	一四〇、〇	四〇〇	八、〇	三、〇					
西貢輪村	収量	作付	二四一、一	二九五、〇	〇〇	一	一	七二	二四、七	一五八、〇	八二、〇	四九二	一四、七	四六、〇	二五、〇					
南箕輪村	収量	作付	二五、四	二五〇、〇	〇	八、〇	一二〇	八四	二八、〇	一五四、〇	二九、〇	四九二	一四、七	四六、〇	二五、〇					
中箕輪村	収量	作付	六八四、三	七一四、〇	〇	七〇	三、五	一五〇	三〇、〇	一一五、〇	一一、〇	九六、七	四〇〇	一〇二	一五、二					
伊那富村	収量	作付	九二二、〇	二八八、八	〇	二、〇	四〇、五	八〇、五	一〇、〇	二五、〇	一一、〇	八八、〇	一一、〇	一五、〇	五、八					

て多角経営の農業を指向した大衆の先人の見とおしのよさが感じられる。田中静雄が中心になってこの事業は実行された。

西天竜開田に伴う開畑は、このほかにも多く行なわれている。

5 開田当時の農業経済

西天竜開田前の南箕輪村の農家戸数は六〇〇戸であって、その平均耕作反別は、水田が三反五畝、畑が三反八畝、桑畑が四反二畝、雑草均反別は一町一反五畝であった。これは近隣の他町村に比して非常に広い耕作面積であった。けれども反当収量になると、例えば土地が狭い伊那富村は反当収量が一七貫（約六四畝）であるのに、南箕輪村は平均七貫（約二六畝）しか収量がないというように、土地の生

産力に大きな差があった。

西天竜開田前の関係町村の、その主な作物の生産状況をみると、普通畑は労力を多く要するの、比較的面積が広い。そのため、肥培も充分でなく、稀には荒畑になっているものもあった。普通畑の作物は、夏作として稲、粟、大豆、そば等で、冬作には、大麦、小麦の栽培が行なわれた。

表6-50で米の中には稲も含まれているが、水田はいずれの町村もほとんど天竜川畔にある古田であって、水田を拡張することはできない状況にあった。したがって、農家の経済は養蚕を主とし、藪蓐の變動がその経済を左右する要因であった。養蚕農家では春夏秋冬の三期を

とおして、多い人は三〇〇貫、少ない人でも二〇三〇貫の収穫量であった。しかし、昭和五・六年の米価の暴落の後を追うように米価が暴落し、その後昭和九年以後米価は持ち直してきたが、西天竜耕地整理組合の事業費負担金は、反当たり二円の組合費と反当米八斗（換算金二〇圓）であって、それを提出するのがたいへんであった。そのほかに、公租公課や水利費や肥料代などを計上すると、差引赤字になるような状態であった。西天竜開田は、そのような経済的な困難さの中で実施されていったのである。

6 工事費の償還

西天竜耕地整理組合がなされ、畑や山林、原野が田になることによって得られる増益分の計算がされて、工事費の償還計画が樹てられている。

西天竜耕地整理組合における整理費総予算は大正八年設立認可当初四三三万七四五一円であった。しかし、時代の変遷と物価の変動によって大正一一年の各年度収支計算見込書では五六七万二六九五円六六銭となり、最終的には六四六万七〇一二円となっている。そのほか夫役人員二七万五九八八人であった。

西天竜耕地整理組合の事業の全部は借入金をもって施行することが方針であった。借入先の日本勧業銀行の貸付方針は、財政計画により返済可能な米石量に米価一石三五円を乗じたものを目標とした。米価の変動やばなはしい農村不況のため、昭和一〇年ころに組合はたい

へんな財政危機に陥っている。そのため長期借替調査を作り勧業銀行に借入期限の延長による年賦償還額の減額を懇請した。

経営困難な理由は、①開田費の増加（土壌が軽いので予期以上に用水が浸透し、トラクターによる床締めに多額の経費を要した）②幹線水路の補強ならびに支線水路費の増加（冬季間の寒気激しく凍結破損のため補修工事による多額の経費を要し、また支線水路の増加による出費も多くなる）③補償費の増加（天竜川から灌漑用水を取り入れている二〇余の他組合に、西天竜の揚水によって水位が低下したことへの補償、設丘下の部落や耕地への湧水と飲用水供給に対する補償など）④事務費の増加（敷地にわたる設計変更、土地買収費の増加、工事遅延のための事務費の増加など）⑤農産物価の下落（大正七年ころの好況時の計画で、米価石当たり三五円と見積もったものが、米価暴落して石当たり一五円となる）⑥組合費の滞納（組合員二二〇名。経済不況による滞納）などであった。

借入金は返済しなければならぬ。そのため、昭和四〇年まで負担金を徴収することにして、償還計画が樹立されている。償還予定額は日本勧業銀行に対して、六三三万六六一六円三〇銭である。県や国からの助成金及び補助金は開墾助成金として昭和一一年まで三二四万三八一九円五〇銭、補助金として、道・水路費・開田・災害・増産等の名目で、県から一〇八万六〇三九円が昭和一四年まで来ている。

収益差額徴収金というのは、組合員からその所有する土地を組合で借り受け、これを田に切り換えてまた地主に貸与するという形にする

表6-51 年度別収支差額徴収金

年度	昭和三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四
反当額	一〇、九七	五、六八	五、四五	一一、三七	九、〇四	一四、三七	一五、九九	一五、七〇	一七、〇〇	一七、二七	一七、一七	五、〇

ので、山林や原野や畑が田になったための収益の差を米や金で徴収するものである。これは土地によって異なるが、一俵から二俵くらい、改畑でも二俵くらいは徴収した。年度別の収益差額徴収金は表6-51のようである。

耕地整理の計画当初の反当負担額は三一五円七〇銭であった。開田費は一反当たり五五〇円三六銭、開畑費は反当一一六円八六銭、旧田整理費は反当八一四八六銭、旧畑整理費反当六九円七四銭とされていた。

西天竜耕地整理の事業は、当初予算四一六万円の総費用という設計で実施に移された。ところが、取入れ口の変更、頭首工をローリングダム設置に改変、水路敷の買収費の増額、上流下流漁業及び水車用水等に対する補償費、幹線導水路工事の変更、経済界の異変による米価暴落の暴落、等々により財政計画を幾度も変えざるを得なかった。しかし、終戦直前や敗戦後の食糧不足は米価を暴落に高騰させ、一升三五銭くらいの米がやみ価格一升一五〇円という狂乱ぶりであった。そこで、借入金で四〇年で返済するというのを、昭和二〇年十一月開田から二〇年で、今後の二〇年分を一括繰り上げ償還したのである。南箕輪村分の繰り上げ償還金は、反当二二〇円であった。この償還についてはインフレーションのことで、さまざまな問題はあったものの、繰り上げ償還ということで解決された。反当一升五合くらいの米代で負担金が全額償還されるのであるから、耕地整理組合にとっては大へん福音である。けれども米の保有にも供出の残りという限界があった当時としては、土地を多く所有している地主は、土地を売って償還するという操作をしなければならぬ人もあった。

昭和二〇年十一月、西天竜耕地整理の大事業の借入金の返済も終わり、事業の完了をみたのである。

四 西天竜農業倉庫

西天竜耕地整理組合は、昭和二年から開田工事を行ない、差額徴収米の収納・保管・販売を有効適切にする研究の結果農業倉庫を建てることになり、昭和三年八月有限責任販売組合として西天竜農業倉庫が生まれた。

差額米徴収というのは、反当たり二円の組合費の外に、反当たり最高八斗を標準とした開田前後の賃貸料の差額を徴収したものである。

それから一五年間に、組合員数八五〇人、入庫数量玄米五万三七一四俵を数え、設備においても倉庫七棟、五八〇坪となり、県下屈指の農業倉庫となり、稲作と農家経済発展の重要な働きを果たしてきた。

ところが、戦時体制下の食糧事情がむずかしくなり、米穀の国家管理に移行するに伴い、昭和一八年五月、各町村の産業組合に移管経営をすることになり、西天竜農業倉庫は発展的に解消した。しかし、その倉庫は農業協同組合の倉庫として重要な役割を果たしている。

五 まとめ

西天竜用水路および開田計画の完成によって、南箕輪の農業は大きな変革を遂げた。畑作地帯で養蚕を主とする農業経営から米作を中心とする農業経営に変わったのである。

この西天竜地域の変容は図6-37のようになったのである。

南箕輪地域も当然のことながら、同じように変容した。

わずか水田五ha（〇・八%）しかなかった地域が、急に五八〇ha（九〇・七%）見渡す限りの水田地域となったのである。従来からの水田一〇〇ha余と合せて、伊那の穀倉地帯に発展した。

諏訪湖から流れてくる温かい水も肥料分の多い水は稲作に最適で、秋取り以上の玄米がとれる美田となった。しかも、機械の導入し

やすい乾田であり、水田規模であり、道路状況である。そのうえ専門の水番（水利夫）がつくので水のかけひきも省かれる。これらの諸条件が重なって西天竜地域の農業は戦前戦後を通じて農民の生活を豊かにした。

江戸時代よりの長い地域の念願が見事にのびた西天竜地域に立つて、このような美田をもたらし先人のスケールの大きい志とその労苦辛酸を忘れてはならない常に感謝しなければならぬ。

しかし、すでにのべたように大衆耕種のように水田一辺倒による農業経営の弱体化を未然に防ごうとした先覚者もある。高度経済成長下の現在、あえて一言加えるならば、西天竜米作地帯という小成に安んじて、兼業農家が主力となって、本当の専業農家が育って来ない。西天竜開田にもやはり功と罪がある。これからの農業を考えると、この両面の検討が重要である。

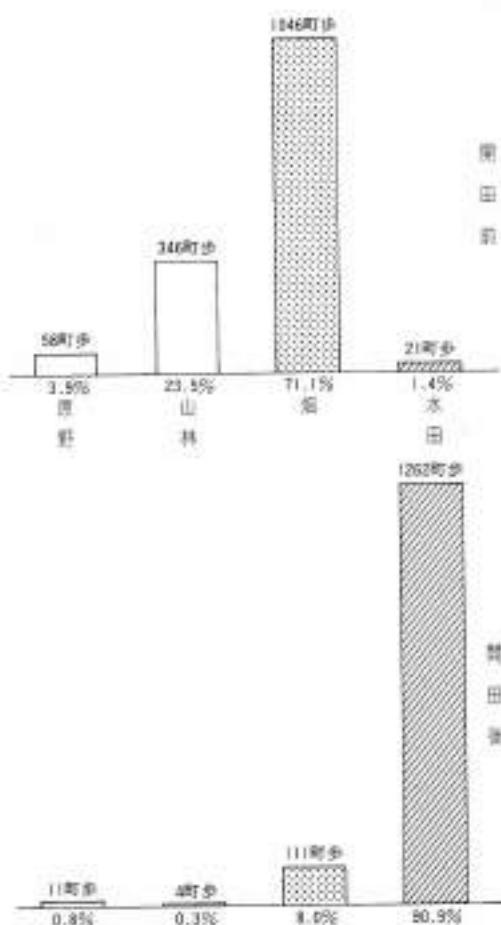


図6-37 西天竜地域の農地分布

五 畜産および園芸の導入

(一) 畜産の導入

1 明治・大正期

明治六年の開墾社条例の第八条世人の心得の中に、養蚕・牧牛を始め豚・鶏・家鴨を盛大に蓄うこと、とあり、畜産を導入することが開墾社から資金を借り入れる一つの条件になっていた。また明治一五一年ころからは産馬の改良がこの地方でも問題になり、新しい家畜の導入の気運が生まれ、明治三八年には国の試験場から種豚が配布され養豚の気運も一部には生まれてきた。

しかし、日本は昔から稲作を中心とした農業で、水田は湛水（たんすい）することから連作による減収がほとんどなく、ヨーロッパの「家畜なければ農業無し」といわれる有畜農業と異なり、無畜系譜の農業が続けられてきた。日本農業においても全く家畜がなかったわけではなく、馬や牛は飼われていたが、それはほとんど役用として使われ、合間に堆肥を踏ませる養畜といわれるような飼育であった。鶏は多少飼われていたが一戸で五、六羽という小規模なもので、これも畜産というにはほど遠いものであった。

大正二年に出された、畜産奨励に関する郡役所の指示がある。その指示の内容をみると、馬を中心に増殖し、農家の役用とすると同時に国防上の要（よう）の無いようにしようとするもので、農業経営の重要な構成要素とする真の意味の畜産奨励ではなかった。

このように明治から大正にかけて日本農業はずっと無畜系譜を続けてきているといえよう。このことは、

明治中ごろから昭和の初期まで、養蚕が全盛時代となって畜産にほとんど目が向けられなかったことによって、一層顕著になったように考えられる。

2 昭和の経済恐慌以後

昭和四年秋から日本の農業に襲いかかった経済恐慌は養蚕業に大打撃を与え、飼育と養蚕を中心とする農業の有り方に反省が加えられるようになった。

昭和六年に県の不況対策に基づいて、本村においても失業救済農山漁村臨時対策低利資金貸付規程が作られ、その融資対象の中に牧野整備、畜産協同施設の設置の項があり、当時一四〇〇円の融資を受けて畜産の導入が図られており、昭和七年には南箕輪農会は農業経営改善の一環として養鶏組合を設置し、補助金を出して副業養鶏の発達を促している。これによって品種もコーチン・ミノルカ等から次第に卵用種専用の白色レグホンに変わり羽数も増加した。

昭和九年農業経営改善組合に指定された神子柴第五組合（農家戸数二〇戸）の経営改善計画の中に「有畜農業の確立」という項目がある。この組合では当時馬六頭・豚三頭・山羊一頭・鶏一一三羽・兎三一羽を飼育していたが、さらに、牛三頭・豚九頭・山羊一頭・鶏一七羽・兎一七五羽を導入、増殖をして経営の改善を図ろうとしていた。しかし、家畜導入増殖の主目的が自給肥料の生産による購入肥料の節約にあり、併せて畜産物の収入を得るということで、ここでも副業的な域を出たものではなかった。

要素価格の暴落による養蚕の苦境に対処する方法として、国は昭和六年から有畜農業という語によって農業転換の方向を示してきているが、それに対応した当地の具体的姿はいま見てきたようであるが、昭和一〇年、松本蟻ヶ崎に県種畜場が設立されて中小家畜を中心に優良

種が配布されることになり、各農家はしだいに有畜化への道を歩み始めた。

山羊は飲用乳を自給するため、また小規模農家の自給肥料生産のため飼育が広まり、デーン種を中心にして長野県は全国一の山羊飼育県となった。本村においても昭和一七・一八年、急速に頭数が増加した。

山羊は養蚕など養蚕の副産物が利用できることから養蚕一体経営と呼ばれてかなり普及した。

豚も小額資本で導入が可能であり、資金の回収が早く優良な自給肥料の生産ができることから比較的早くから導入されたが、飼料がほとんど購入飼料であるため小規模飼育の形で普及した。このように中小家畜を中心に、経済恐慌切り抜け策として始まった畜産はしだいに増加の傾向を見せた。昭和初期からの中小家畜の飼育頭数の消長は図6-38及び39のようである。

だが、戦争の激化と共に農家の人手不足が著しくなりまた、家畜飼料も供給不足となり、乳牛はもちろん豚・山羊等の中家畜、鶏などが急減し、農業有畜化の傾向は後退してしまった。

反面で馬は軍用馬の確保という観点からその改良が図られ、軍馬資源保護法により軍用保護馬の飼育者に補助金が出され、馬の頭数は増加しているが、軍馬の価格は一般物価に比して著しく低く、軍馬の増産育成は経済的にははたしく不利であって、食糧増産政策と同じく農民に犠牲を強いるものであった。こんな中で役牛は徴用の恐れがなく自給肥料の増産と労力不足を補うため急速に頭数が増加している。

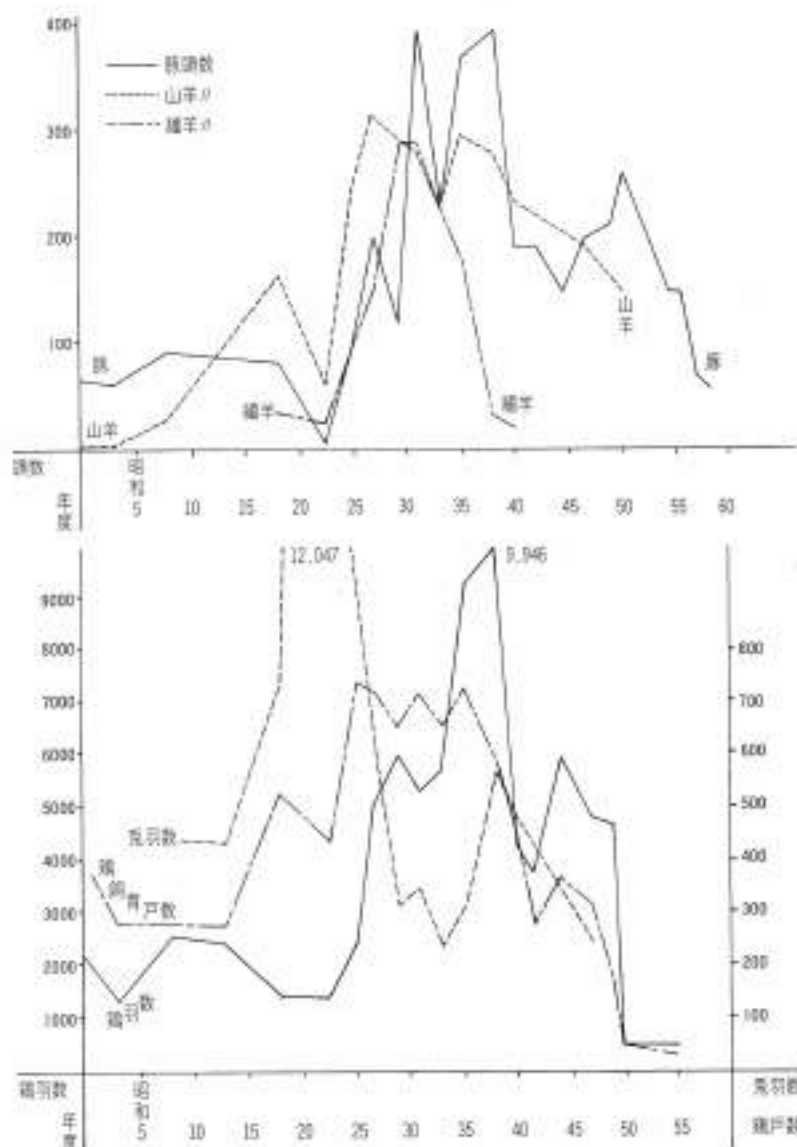
また、養蚕は昭和七年から陸軍被服廠が農村救済の意味で毛皮の買い上げを始めてから、その飼育は老人や子供の仕事として奨励され、戦時中も総力戦体制のもとで急速に増加し、その肉は農家の貧しい食

生活の貴重な蛋白質源となったのである。

(二) 園芸の導入

1 明治・大正期

江戸時代においても柿・胡桃・栗・桃・苹果・梅などの果物が作られ、大根・蕪・人参・牛蒡・里芋・つくねいも・茄子・漬瓜・なんばん等多くの野菜類が栽培され、それらは主として自給的生産であった



上 図 6-38 馬・山羊・鶏羊の飼育頭数の変化 (南宮輪村)

下 図 6-39 牛・豚・鶏の飼育頭数の変化 (南宮輪村)

が、一部では売買も行なわれていたようである。

明治になると勸業政策が盛んになり、園芸面でも新しい作物の種類や新品種の導入が繁げく行なわれるようになった。早くも明治七年には国の勸業寮は、各種の種苗の新種を導入配布している。その時の筑摩県には次のようなものが配布された。

当時これらの新種が本村にどのように配布され栽培されたか不明で

表5-52 勸業寮配布の種目

種類	数量	種類	数量
甘藷	四種	梨	二本
大豆	二種	葡萄	七本
落花生	二種	いちじく	五本
玉蜀黍	二種	すくり	二本
とうもろこし	二種	古き	三本
落花生	二種	李	一本
蘋果	五本	まるめろ	一本
桃	三本	ふきすくり	三本

ある。

明治一〇年に勸業寮果樹試作地、翌一一年に果樹農場の設置、一三年には松本農事会が結成され、やがて勸業試験場となり、同一八年には下伊那郡立農事試験場（大正一五年果樹試作下伊那分場となる）同三〇年には県立農事試験場が設立されるなど、園芸作物に対する指導体制や栽培技術の開発が進んだが、一部の地方にりんごやぶどうの栽培が始められたが、当地方は馬鈴薯と甘藷が新しい作物として普及をみた程度で、目立った園芸の発展はみられなかった。

これは、明治中ごろから養蚕の発展が著しく、農民の関心がほとんど養蚕に向けられていたからである。この当時の状況を長野県農事試験場設置の趣意に次のように述べていることからわかる。

養蚕ノ盛ナル地方ニ在リテハ、民心専ラ蚕事ニ傾注シ、普通農事ノ如キハ自カウ之ヲ怠ルニ付スルノ憾ナキ能ワズ、固ツテ其ノ進歩ノ視ルベキモノナキハ遺憾トスルコトコトナリ、依ツテ農事改良ノ權限ヲ示シ、

大正四年には下伊那郡大島村で和梨の栽培を始めているが、それほど普及はせず、また野菜栽培は全般的に大根・漬菜・茄子・牛蒡が主

なもので、ほとんど自給のための栽培であって、農民の心はほとんど養蚕に向かっていたのである。

ところが、大正九年絹価が暴落し、養蚕は不況に陥り、これを契機として県は果樹や野菜栽培の本格的な普及活動をはじめ、同一〇年に長野市箱清水の地に果樹試験地が設置され、一一年には硫酸ニコチンが苹果の害虫に対し、硫酸鉛がしんくい虫の駆除に効果を上げ、ようやく苹果の経済的栽培が可能となり、北信地方に苹果の栽培が広がっていった。また桔梗ヶ原や富士見高原には甘藷が栽培され、農業経営の中に園芸作物が重要な役割を果たすような位置を占め始めたのである。

本村における野菜栽培はまだ自家用のみであったが、大正の末期ごろより田畑の有賀利映が大泉川沿岸の水田に野菜を作り、近所の農家の残り野菜などと共に荷車に積んで伊那町方面へ売り歩くことを始めた。これが、この村における野菜販売の始めであったと思われる。

2 昭和前期の園芸の発展

昭和の初頭、上伊那農業学校の農場主任村上明彦（後の同学校長）は先見の明を持ち、上伊那地方の水田と養蚕の組み合わせによる単調で不安定な経営を改善するため、経営の中に果樹を導入することを目指した。その理由とするところは次のようであった。

(1) 当地方は降水量が少なく日照時間が多く、病虫害の発生が少ないので、果樹栽培に適した自然条件をそなえている。

(2) 二十世紀の主産地島取果より京浜の大消費地に近く輸送販売に有利である。

(3) 養蚕より果樹栽培の方が稲作と組合わせた場合労力配分が良くなり、かつ反当収量が高い。

こうして昭和元年に学校に果樹園五〇aを新設し、梨・りんご・ぶどう

表6-53 農村不況下の農産物反当収支（昭和七年）

種類	反当収量	収入金額	支出金額	差引残	種類	反当収量	収入金額	支出金額	差引残
米	二、七七五	六〇四九四	五七九〇二	三月九二	白菜	一、〇〇〇	七〇〇〇	五一二〇	一八八〇
小麦	二、〇八〇	三〇・一六	二五・九四	四・二二	牛蒡	五〇〇	七〇・〇〇	五六・四五	一三・五五
大豆	一、三〇〇	一七・五五	一四・〇三	三・五二	甘藷	八〇〇	五六・〇〇	四〇・二五	一五・七五
蕎麥	一七、二〇	六八・七八 (一ノ四四)	六四・三五	四・四三	苹果	二八〇	九四・五〇	七九・五五	一四・九五
こんにゃく	四五〇	二七〇・〇〇	一六八・六九	一〇三・三一	梨	七八〇	二五〇・〇〇	二二五・六二	二四・三八
大根	三五〇〇	四七・五〇	三五・六五	一一・八五	くるみ	二、四〇〇	四八・〇〇	三四・五六	一三・四四

う・桃などを栽培し、特に二十世紀梨の栽培に力を入れた。

昭和五年からの藩領の暴落は養蚕家に大打撃を与えたのみでなく、他の農産物も下落し農村は一大苦境に陥った。そのため養蚕偏重の経営に対する反省が生まれたが、農産物の中では表6-53のように園芸作物が比較的有利であった。

このような情勢のもとで、上伊那農業学校における二十世紀梨の好結果を見て、上伊那郡内に初代上伊那園芸協会長となった桃沢匡勝ら十数人の二十世紀梨栽培の先駆者たちが現れた。本村北限の有資格者もその一人であって、本村二十世紀の本格的栽培の草分けとなった。かくして、早くも昭和六年秋には上伊那園芸協会が発足し村内では昭和七年に南箕輪果樹組合が結成され、果樹園芸発展のために努力が注がれたのである。

また野菜栽培者もしだいに増加し、昭和七年、中部農会連合による青物市場が開設されることになり、伊那町に青物夜市が開かれ、野菜栽培農家の生産物販売の便を図り、その栽培を奨励することにもなった。しかし、本村は西天竜完成により西天竜帯はほとんど開田され、

（上伊那園芸協会より作成）

するため、産業転換五か年計画を樹立し、果樹や野菜の栽培を奨励し、北信地方では養蚕より果樹栽培が優位に立ち、高冷地においては甘藷・白菜・美濃早生大根が各地に栽培され、国鉄小海線の沿線や菅平高原等が野菜の生産地になった。

長野県農会は逐次発展する園芸農産物に対処するため幹旋部を設け、野菜・果樹・沢庵漬などの統制を図り、共同販売等の市場対策を行なう。その発展に努めた。また上伊那園芸協会は梨・苹果等主要果樹の栽培要項を制定して生産面の統制をする外、販売面での統制など多方面にわたる統制指導を行ってその発展に努力している。昭和十一年上伊那園芸協会が定めた奨励品種は次のようであった。

梨：二十世紀、バートレット、好本号、フリー
苹果：紅玉、国光、デリシヤス、ゴールデンデリシヤス、インド

昭和十三年には上下伊那を併せて伊那果実出荷統制委員会を発足させて、伊那産果実特に二十世紀の有利な販売と市場の開拓を目指し、同一四年にはりんご五〇万箱、梨五〇〇箱の海外輸出を図るまでに発展をしてきたのであり、上伊那園芸協会の組合員数も昭和一〇年ごろ

園芸作物の作付けは余り進まず本村からこの市場に参加した者はなく、僅かに南限の唐木正利、清水宗雄、山崎定一らが果樹類の苗を育て付近の農家に分譲し、生産した野菜を伊那町の商店に販売した程度であった。

果は養蚕の不況から脱出

表 5-54 明治8・10年営業種目と人数

営業種目	明治8年	10年
宿 営 業	19	21
荷 積 車 営 業		3
煮 売 "		13
甜 屋 "		10
古 着 古 道 具 "	5	8
洋 物 "	3	4
質 貨 "	2	2
菓 子 "	9	2
雑 菓 子 "		2
茶 商 "		4
小 間 物 "	1	1
販 物 "		1
統 統 "	3	1
焼 死 牛 馬 買 入 "		1
漁 漁 "	19	15
岩 石 掘 取 "		7
人 寄 定 席 "		4
売 力 車 "		4
髪 結 "	2	14
魚 鳥 扱 商 "	4	
音 由 三 味 線 "	1	
牛 馬 売 買 "		8
計	68	124

(注ノ井大東文書)

の三三名から昭和一六年三八五名、昭和一一年の八〇九名と著しい増加を示している。

しかし、戦時体制下に入るとしだいに各面にわたり統制を強化するに至り、園芸農業は大きな打撃を受けることになるのである。昭和一五年には青果物の配給統制が行なわれるようになり、県内作物では馬鈴薯・大根・とうがらし・人参・牛蒡・甘藷・白菜・梅・桃・桜桃・柿・梨・苹果・ぶどうの一四品目が統制規則の適用を受けることになり、同一六年には農地作付統制によって、主要食糧作物の作付けが優先され、果樹の新植が禁止された。さらに、果樹は不急不用作物として非難を受けるに至り、果樹園芸家による「果樹園芸報国運動」などが行なわれる状態に立ち至った。しかし、果樹は結果最盛期をむかえる樹木が多くなり、一九年ごろまでは生産が増加した。だが、昭和二〇年には果樹園整理転換令や肥料・農業・労力等の不足によって大幅な減産を余儀なくされたのである。

六 商工業の発展

1 商 業

1 明治初年の商業

明治の新时代を迎えても本村のほとんどは農業で生計を立てていた。中には農閑わずかに農産物を売り、または日用雑貨を受け売りする者がある程度で商業としてとりたてて言えるほどの者はなかった。

明治九年の旧村誌には民衆篇に商業と称する者の数は記載されていない。表 5-54 に見られる営業種目に商業者の数がわずかにあるがそれらは農業の片手間にする営業であった。旧村誌には「物産」及び「製造物」の項に「自用の他外他へ輸出す」とあるは仲買人に売り渡すか、農間に集荷したものを出す程度で商業としてとり立てるほどではなかった。維新以後は職の自由は許されたが、それを営むには鑑札が無くてはならなかった。

明治八年一月「諸職人名前書上」、同一〇年八月「果樹営業鑑札料、営業税金仕訳名前簿」を整理してみると次のとおりである。

宿営業 鑑札料一円、年平均止宿一〇〇〇人以上税五円、五〇〇人

表6-56 大正十二年物価と購入先

品名	単位	価格	購入先
豆腐	一丁	一〇銭	松島豆腐屋
落雁	一斤	二二	組合
馬肉	一斤	四〇	油野屋
赤砂糖	一斤	一八	組合
黒砂糖	一斤	一四	神田亀
せんべい	一斤	二〇	沢屋
マツチ	一斤	五	組合
かし	一斤	一五	組合その他
コンニャク	一斤	五	瀧屋
ムシ	一斤	三三	伊那町塩屋魚店
そうめん	一斤	五	沢屋
醤油	一升	四〇	伊那町重盛
松いか	一〇〇匁	三〇	伊那町塩屋
油揚げ	一枚	五	松島豆腐屋
酒	一升	九〇	糸屋
ローソク	一本	一	組合
ちようちん	一巻	三五	沢屋
石けん	一こ	一〇	伊那町電灯会社
電球	一足	一〇	伊那町電灯会社
麻裏ぞうり	一足	六五	沢屋
歯みがき	一袋	二七	組合
筆	一本	七	沢屋
鎌	一丁	四五	伊那町鳩屋金物店
甲掛たび	一足	九七	伊那町美ノ半
ボーシ	一足	一六	組合
びく	一足	三二	伊那町にて
ごむ靴	一足	一〇〇	組合
敷島たばこ	一箱	一五	糸屋
湯札	一箱	二〇	梅の湯
糸代	一箱	一五〇	伊那町魁屋
魚代	一箱	三〇	吉村屋

ブリキヒシヤ	一	七五	征矢市衛
ホーキ	一	六五	行商
さらし	一尺	四	沢屋
からかさ	一本	七〇	藤倉
組紙	一回	五	組合
理髮料	一足	二五	山崎秀恵吉
シスタび	一足	七八	伊那町板屋
油代	一〇	一〇	井口商店
お茶	一〇	二〇	沢屋
菓子	一五	一五	正英屋
剪定鉄	一三〇	一三〇	伊那町鳩屋
太物	二〇〇	二〇〇	伊那町大丸洋服店
巻紙	一〇	一〇	井口
下駄	一足	四二	組合

(世屋文書)

商店が各部落に点在しているだけで商店街を形成するにはいたらなかった。

南殿の「使屋」の大正一二年の「金銭出入帳」を見ると当時の物価がわかるばかりでなく、その購入先もわかる。日用雑貨のこまごましたものは村内の商店でまかなったがややまとまった買物には伊那町や木下、松島まで出かけた。

表6-56中組合とあるのは大正一〇年に設立された「南箕輪村信用販売購買組合」のことである。この組合の歩みや商業活動については別項に述べる。

明治後期から大正にかけて商家は余り変わらないが、明治後半期から養蚕が盛んになり、桑園への肥料の需要が増大して新しい商家が出た。大正初頭に塩ノ井の「大阪屋」が「内外肥料並びに英中アンモニア指定商」となって肥料商を始めた。村内ばかりでなく吹上方面

や福島方面まで販路を広げ運搬は四輪馬車を雇ってやったという。その後塩ノ井の「古屋」ついで「大湊屋」も始め、南殿の「徳屋」は米穀ばかりでなく肥料も扱い始めた。薩の仲買商は季節的のもので副業的のものであった。

明治末期から大正、昭和の初期にかけて養蚕家と製糸家の中間にあつて活躍した。村内ばかりでなく他郡、他県にまで出かける者もあつた。「俵屋日記」に次の記事があり当時の状況が目に見えらる。

大正六年八月九日 晴天 雷雨有

夏登早口ノ薩カキニテ掃キ立テ當時ハ六貫見込ミナリシガ意外ノ上成績ニテ七貫八百位有リタリ。一貫目ニ対スル値段ハ九円三十銭、但シ八日ニハ拾円ノ買入有リシモ拾五円ト値張り廻リ、七十銭安ニテ本ノ下製糸ニ売リタリ

薩仲買人が商魂を発揮すれば養蚕家もまた商売気を出してこれと駆け引きするさまがうかがわれる。製糸工場が組合製糸に統合され、養蚕家がその傘下にはいるまではこのような状況が続く。薩は仲買人が目利きによって値段をつけた。したがって家によって相違があつた。

4 戦時統制下の商業

昭和六年に満州事変が勃発し、一二年には日華事変へと大陸における戦線は拡大の一途をたどった。それとともに国内の生活物資はしだいに不足していった。国は戦争目的達成のために戦時経済統制を始めた。戦争目的遂行のため以外の品物生産は抑制されたり禁止されたりする一方軍需産業が急速に勃興した。

一四年には物価統制令が施行され、まず、清酒・麦酒・清涼飲料の販売価格が統制となった。一五年には米・みそ・醤油・塩・マツチ等一〇品目の切符制が決まり、翌一六年二月にはこれらのものは家族数や家族の年齢に応じた切符による配給となった。長野県では酒類配給統制規則を定め町村ごとに小売店を整理して共同配給所を作らせた。

一七年四月には中小商工業の整理が行なわれ、企業整備が行なわれるようになった。

このように企業整備が行なわれ、配給制度が実施されて物資は自由に売買できなくなり、米・塩・油類・衣料等は行政機関を通して配給通帳が消費者に渡され、商店は各商品別の組合が荷受けしたものを消費者の切符の点数に応じた量を配給または販売するに過ぎないという状態になった。

商品の価格はすべて公定価格で取り引きされるはずであつたが、乏しい物資の統制が強化されると一方には闇取引が横行するようになり、経済警察が忙しくなった。

戦争が激烈になると生活必需品はいつそう欠乏し切符による、買得る点数は持つていても買える品が無いという状態も起きてきた。酒・魚・たばこなども隣組を通じて配給するようになり、本村の商店は閑店休業という状態が続いた。長田百貨店などは大泉所でマンガン採掘のための事務所をおきその筋から派遣された人と共にマンガンを採掘に従うという状態が終戦時まで続いた。

(二) 工業

1 職人

明治維新を迎えて一般民衆は職業を自由に選ぶことができるようになった。明治初年の村民の生業をうかがうことのできる資料に明治七年の「雑税皆済帳」がある。また、明治九年と一一年に上申した「村誌」も村民の生業を知るうえによい資料である。今その二資料によって工業を考えてみる。工業といっても職人衆による手工業の域を出ていない。これによると当時の職人には、紺屋・紙簾・石工・大工・鍛冶・木挽・桶師・左官・墨師・杓・豆腐屋・硯石製造業があつたことがわかる。その「雑税皆済帳」の一部分を抄出する。

[illegible]

圖6-40 明治7年甲戌鹽稅估額帳簿上內容一節

一金貳拾五錢
新規
一金貳拾五錢
同新

(中略)
一金八拾七錢五厘
左官税
一金五拾錢
萱屋根郎税

(以下念)
合金三拾七円九拾七錢四厘
右ハ甲戌雜税金書面ノ通り収納済セルムル者也

明治八年五月十日
右村戸長
副戸長
總百姓
美濃県権令 永山盛輝閣

(役場文書)

また明治一〇年と一五年郡長宛の報告によると本村の工産物は表6—57のとおりである。

明治二十四年の「営業台帳」によると職人衆は表6—58のとおりである。

明治二十四年上申の「農工諸雇賃銭」によると、当時の手工業者の賃銀は表6—59のようである。

2 手工業

(i) 水車

明治年間の精米は専ら水車によった。段丘崖からの湧水や沢の水、大泉川や大清水川からの引水を利用して外で水車を回し、屋内で搗臼と挽臼を据え、米を精したり、粉を挽いた。總べて屈出をし税を納めねばならなかった。自家用だけのものは一個か二個の搗臼と挽臼を持ちわすかに近隣のもとめに応じるぐらいであったが中には近隣村内ばかりでなく、近郷の家からも委託を受けて営業するものもあった。明治二四年の営業台帳によると村内に四〇戸の水車持ちがあった。一〇

表6-57 明治二〇・一五十年間保生産高(南光村)

品名	産出高		価金		平均一個價格		備考
	一〇年	一五年	一〇年	一五年	一〇年	一五年	
絹織物	一一五反	一一五反	七五円	一〇五〇円	三月	七円	一反当たり
生絹	三五反	二〇〇反	八七五〇銭	一〇〇〇円	二四五〇銭	五円	一反当たり
七々々	一五〇反	二〇〇反	二四〇円	一一八〇円	一四六〇銭	八円	"
結子	六八反	二〇〇反	七五円	一〇〇円	三四六〇銭	五円	"
白木綿	九八〇反	一〇〇〇反	四九〇円	一〇〇〇円	五〇銭	一円	"
綿布	一、三五〇反	二五〇〇反	一一一五円	三二五〇円	九〇銭	一四三〇銭	"
生糸	五六貫	一三五貫	一七四三円	六七五〇円	二八〇円	五〇円	〇年の価一コホリ
織色木綿	一、一六八反	五〇〇	四〇一七銭	二五〇〇円	六〇銭	五円	五年の価一貫当たり
真綿	二〇〇貫	二〇〇貫	二九〇〇円	九五〇〇円	二四五〇銭	三円八〇銭	一反当たり
	三〇〇〇反	二〇貫	三〇四四五銭	二四四	十五銭	一二円	一〇毎に付

(役場文書より作成)

表6-58 明治二四年村内職人数

職種	人数
機織工	9
官工	12
工工	26
石工	3
鍛冶	12
根立	4
物産	2
織機	2
六袋	3
足提	1
時計	1
利利	1
油	1
計	77

表6-59

	月給		
	上	中	下
大工	5円	3.75円	
左官	6	5	
石工	6		
木挽	5	3.75	
家根織	6	3.00	
建具織	6		
和服仕立	6		
日給			
鍛冶職	18銭5厘		
	月給		
	上	中	下
下男	2円	1円20銭	75銭
下女	1円20銭	60銭	30銭

(役場文書)

(2) 綿織物
個以上の日を持つ家が一二戸あり中でも堀一郎は最も多く二四個の綿日を持って営業した。大正年間にはいと発動機や電力による精米機が出回るようになり順次水車は姿を消した。

たいがいこの家には機織機はたオリがあつて農間に婦女子は機織りに精出して自家用衣類の綿布を織った。別表(表6-57)のように生産をあげた。

(3) 絹織物

明治初年の生産については別表(表6-57)にあげた。その後南殿の清水嘉六は自家の工場で生産したものを共進会に出品して受賞している。

なお明治一五年の生産額は表6-57のとおりであるがその後、絹織物は工業としての発展を見なかった。

(4) 製紙業

楮コや柘ハナコの皮で紙を作り中折紙として産出した。製紙セシ殿各一廻をもつて二業者により年々およそ二〇〇束製した。明治年間の売り値は一束五〇銭前後であつた。この仕事も主として農間作業であつた。

(5) 醸造業

酒類の醸造については明治八年の醸造税納付通知書によると、有賀林作、加藤孫十郎、倉田信重、日戸勝、松沢齊治、清水齊の六人が清酒を醸造し、右のうち、加藤孫十郎は濁酒を、清水齊は焼酎と醤油の醸造をしている。

明治二〇年本村の産額は清酒五六〇石、価五七五円、販路管内、製造人三人、職工一人とある。

明治二四年地方税営業台帳によると醸造人は次のとおりである。

酒造営業人 日戸勝、植田齊治、倉田信十 以上三人

自家用料人 高木正治、赤羽猪兵、高木昌三、日戸伝雄、小島彦八、原信

一、日戸伝衛、真木才吉、倉田三郎、木ノ嶋三郎、松沢孝幸
以上十一人

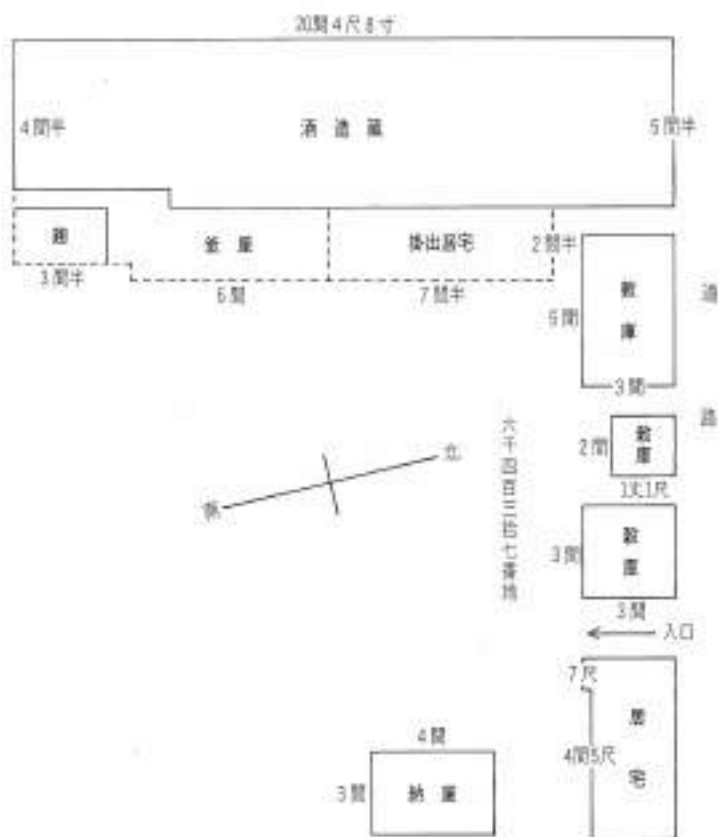


図6-41 酒類製造場図面(田畑大東文書)

なお、いま、明治二九年期の日戸勝の申告書によると酒類見込み産石数は次のとおりとある。

一 清酒 五百石

一 味噌 老石老斗八升

一 焼酎 老石

なお酒造杜氏は「岐阜県から雇い入れた」とある。

酒造りには産石量に応じて納税しなければならないからその保証物件または保証人を定めて申請しておかなければならなかった。この年

の必要な保証金額は一二五〇円であった。それに見合う保証物目録によると本人所有田地のうち五四筆、合計反別三町五反四畝一四歩でこの地価が一二五〇円五九銭であった。酒造りには設備投資を多額に要したせいか木村の酒造家では現代まで持ちこたえる家はなかった。

(6) 染色業

明治一〇年に鑑札を受けて紺屋営業をした者が一〇人ある。倉田久内、征矢彦三郎、征矢保作、田中喜代、有賀市郎兵衛、伊藤文太郎、山崎市蔵、松沢弥三郎、加藤与平、小林藤蔵であった。

明治二四年には六人に減じ、二五年に一人新たに開業したが二人廃業した。

このころ木村には藍葉の生産が相当量(田村誌に、「質尋常、出来高凡そ二五〇〇貫」とある)あり、清冽な湧水が豊富であるところから染色業には適地であったが、その後目ざましい発展は見られなかった。

(7) 菓子製造業者

明治二四年の地方税営業台帳によると菓子製造者は次のようであった。

居 所	姓 名	備 考
五〇八番 五一七番 二四六番 二五〇番地内一番	加藤 喜代三郎 油 上 鉄太郎 小阪 三千太郎 倉田 為太郎	小売・出売・仕入れを兼ねる " " 明治廿五年十二月五日廃業

3 製糸業

(資料文書)

(1) 家庭座繰時代

江戸時代は米麦等の穀類生産を主とし、田畑に桑を栽培することを

禁じられていたため庶民はわずかに田畑の畦畔や荒地に栽培した桑で蚕を飼い自家用の絹や真綿を製造していた。江戸中期以後になると商品流通が信州の農村にも浸透してきて幕末になり開港後は生糸の需要が増加し、明治になると作物の自由が許可され、本村でも輸出用の生糸を製造するようになった。「田村誌」(明治九年編)に「生糸上、五〇貫横浜へ輸出」とある。

昔の製糸は手繰であった。屋内の土間か軒下へ土がまを築き、鉄製の二升鍋をかけて繭を煮、右方に置いた牛首の繰わくを右手で回し、左手で数粒の繭から引き出した糸を巻きとるという方法であった。糸は太く、せいぜい一日に二升ぐらいの繭を繰るのが普通であった。幕末には座繰法が工夫された。座繰りは一人で二つ以上の繰り枠を回転させることができるし、また、足で枠を回すこともできて能率をあげることでできた。養蚕を副業とする家の婦女子が農間に副業として繰糸するに過ぎなかった。その生糸を、これと農閑期に生糸売買を副業とする人または商店の人が各戸を回って買い集めこれを東京横浜等の生糸商人または問屋に売り込んでいた。

(2) 機械製糸工業

ア 有賀又七郎の製糸工場

明治七年に北殿の有賀又七郎は工女一〇名で自宅で座繰りによる製糸を始めた。同一〇年には三〇名の工女による機械製糸工場を設立した。そのことについて明治一四年第二回内国勸業博覧会に生糸を出品した際の出品票に添え書きされた説明につぎに述べてある。

説明書

物 名	生 糸	方 言	出 品 人
			長野県信濃国上伊那郡南長輪村二百六拾四番地 平 民 有賀又七郎

産地製造場

長野県下、上伊那郡南佐輪村二百六拾四番地有賀又七郎宅地ニ明治十年機械場設立製造ス。本場開口八間半奥行四間半二階付、附属建物、蒸気釜カ所、煙道カ所、水利ハ各用水ヲ用ウ。食糧カ所、機械ハ工女三十人立デ釜蓋三十、取蓋三十胸器蓋也。湯氣ハ銅丸種ニテ仕掛ケ水ハ竹種ニテ仕掛ケイナツマ挽キ大糸樹根本場裏ニテ製ス。薪置場ハ本宅ヲ用ウ。薪ハ上下ノ伊那郡及ビ東西筑摩郡村落戸々ニテ養蚕繭出来ノ際上等購買イ入レル。

製造法

運転ノ力、水車、径八尺、蒸気機三石入、焚火口立場ノ熱度百二十度、繰糸場ノ熱度八十度、元機繰一ト繰元機二升釜毎ニ自分ニテ口口出ス。口出シハ廻轉ヲ用ウ。繭ノ附数五粒、大繭ノ寸ハ周五尺七寸、四百回デニール十二ナリ。然レドモ夏蚕トハ熱度異ナリ適宜ニシテ製造スルナリ。

開業沿革年曆

上伊那郡南佐輪ノ儀ハ養蚕ニ適スル地勢ト雖モ素ヨリ生糸製造ノ者乏シク、多クハ自用ニ供スルノミ。御機新ノ際ヨリ人民開明ノ思沢ニ浴シ、桑苗ヲ裁殖シ大イニ養蚕古人未ダ得、繭ヲ得ルコト欲シニ月ニ増殖ス。余ヤ是ニ於テ明治七年ニ至リ僅カニ工女十名ノ座繰糸ヲ試製シ、同八年九年三年間試製致ス。余リ田野粗製ノ品位ニ属シ年々利益ヲ得ル事甚ダ少シ。コニ於テ座繰製成シ、明治十年養蚕シ、諏訪郡平野村中山社ヘ謀リ、同年機械生糸製造所設置シ、同社ヨリ教師宅名、女工五名雇イ、其也近隣ヨリ合ワセテ工女三十人ヲ雇イ生糸製造ノ業ヲ開始、十一年製造ス。十二年ニ至リ、御機内各社ノ機械ヲ堅固シ、而シテ新製發明ヲ養蚕シ、機械ヲ正シ、糸ヲ得ル良法ヲ得テ以テ製糸致ス。是上等ノ繭ニ至リ、随ッテ利益少ナカラズ。既ニ同年横浜共進会ヘ出品ノ所、第四等ノ御機織ニ成リ内務大臣御賜ノ証書、白銀五枚褒賞ヲ賜ウ。五内大ニ感ジ、拝受仕ル。猶且ツ進んで以テ逸品ノ生糸製造致シ度ヲ志願ニ候ナリ。

産出高統計

明治十三年 從六月 至十二月 産出十二個六百八十斤等 此ノ代價凡ソ金六千九百五十円、

(役場文書)

イ 征矢代五郎の製糸工場

明治一四年には塩ノ井の征矢代五郎が製糸場を開業した。その規模は左の届書によつてはばわかる。

御 届 書

一 給五人機機械 工男三人 工女十五人

一 蒸気機ノ質 鉄 木製

一 繭ノ厚サ 三分

一 同長サ六尺 直徑四尺

一 同火氣ニ接スル面積 六尺

一 重量器 ナシ

一 活輪 ナシ

一 製造年月不詳

一 製造場所及ビ人名 上伊那郡南佐輪村 征矢代五郎

右ノ通り生糸機械新築本年七月ヨリ営業仕リ候ニ付キ此段御届ケ申シ上ダ候也

明治十四年七月

製造人 征矢代五郎
戸長 清水平一郎

長野県令代理

長野県少書記官 島山東信殿

(役場文書)

ウ その他の製糸工場

明治一〇年七月に大泉の清水半十郎は原源右衛門、酒井喜代市、清水郷作らと製糸場開業資金として開産社に資金の貸与を申請してゐる。

また、塩ノ井の征矢五郎古も明治一二二年の「諸稼ぎ人名前書上」(塩ノ井大東文書)に生糸製造営業と記載されている。しかし、これら

の工場の規模や産額等については記録が今のところ見つからないので経営状況等不明である。

工 明治中期村内の生糸生産

表6-60 明治中期村内の生糸生産額

年度	項目	産出額	代 価	平均 額
明治9		56,000	1085.60	1戸・付 円換算 8.81.6
10		71,000	2126.40	円換 480
11		67,200	2262.59	1戸・付 円換算 41.11
12		67,900	2919.70	43.00
13		70,000	—	50.00
14		108,000	—	55.00
15		135,000	6750.00	50.00
16		72,000	3839.80	53.333

明治17年以降不明

二〇年・二四年の農商工事通信には生糸の欄は空白になっている。明治一五年までは順調に発展してきたが、一六年になると糸価が暴落し、それに加えるに国際商品として規格が定まりすべて検査をして出荷しなければならなくなった。まずデニール検査によって太さをそろえた。デニールは生糸を四五〇m巻き取れる器械に巻きとった目方を

はかって決めた。一デニールは四五〇mが〇・〇五gである。明治末年になると主要輸出国であるアメリカで消費する生糸はほとんど薄物に限られるようになったので太さをそろえるばかりでなく糸

の工場に限定されるようになったので太さをそろえるばかりでなく糸

むらも検査せねばならなくなった。糸むらの検査はセリブレン検査機を使った。この機械は黒い布張りの枠に生糸を巻き並べ、サンブルの写真とくらべて点数をつけるものである。工女たちはこの両検査によって自分が繰糸したものに格付けされ、点数評価されるので泣かされたものである。

このようにして、設備の改良や購入等に小さい資本では立ち行かないことや隣接の木下、松島に機械工場が設立され、かたがた本村の生糸工場は成り立たなくなったのでなかろうか。しかし本村の養蚕は年を追って盛んになった。

才 長田製糸工場

明治三六年七月長田国古は北殿の三四六番地旧郵便局の北に製糸工場を開設した。最初は一〇〇釜ほどの規模であった。しだいに工場規模を拡張して大正五年には表6-61の規模となった。

これだけの規模の工場で消化する繭は村内はもとより近隣の村から集めるばかりでなく関東関西にまで「繭買い」に出かけ遠くは九州鹿児島にまで行ったという。工女もまた村内や近隣の村からばかりでなく新潟、富山、岐阜県あたりまで行なって募集して来た。

大正八年には伊那街道沿いにあった工場を北殿駅前に移して規模を拡大した。長田国古の後は長田頼利、憲雄兄弟が継いで経営していたが大正一四年に株式会社にした機会に長田頼利は伊那町へ行って別の天祐社長田製糸所を開設したので憲雄がこの社長となって経営を続

表6-61 長田製糸工場（自大正三年至大正四年）

木 製	織 機	織 機 数	繰糸式別 ケンネル四口以上	工 女 数	そ の 他	繰 繰 別	動 力 別	生 糸 生 産 額	生 糸 皮
二二六				三三六	七	蒸 氣	水	四五、九三〇 斤	六九六〇 斤

（大正五年三月農商省農務局調・桑史五）

昭和三三年の経済界の世界的大恐慌に我が国の製糸業界も大きな打撃を受けそれに加えるに人絹の急速な発達に製糸業界を圧迫した。昭和四年に一〇〇斤につき一、一七〇円であった生糸が六年には五二〇円に暴落し、繭価も一貫当たり一〇円以上もしていたものが二円台に下がり、昭和五年の晩秋蚕は一円八〇銭にまで暴落するというありさまであった。

昭和四年から五年一月にかけて全国の製糸工場が一斉に休業し、その後も運転釜数の二〇％を封印するという製糸業界はさんたんたる状況に陥った。そのあおりで長田製糸は工場を廃して、昭和五年北陵商事として呉服等の販売店に転じ、後にはさらに店名を長田百貨店と改めた。



図 6-42 北陵長田製糸工場（上全景、下工場内部）

力 高木館製糸場

大正一〇年に高木藤五は、下平町四とともに合資会社高木館製糸所を神子柴に開業した。

釜数五〇釜、女工五五人、男工五人の規模で動力は清水川からの引水による水車であった。

繭は村内、西菱輪産のものや伊那町にあった委託倉庫（現伊那市駅の東北、信用金庫のあるあたり）で開設された繭市場でも買入れたのであった。

下平町四はそのころ伊那町にあった山本館下平製糸所の経営にも参画していたが、大正一五年に山本館と高木館を合併して株式会社高木館下平製糸所を経営することとなり、神子柴の高木館は廃止し従業員は全部新会社に移った。建物は信用組合に譲った。高木藤五は取締役



図 6-43 神子柴、高木館製糸場

となつてその方へ移った。

キ 共同揚げ返し工場 天佑社

明治三十八年三月に共同揚げ返し工場の天佑社が久保の地に設立された。

輸出製糸は規格をそろえ直ちに織機にかけられるようにすることが

要求された。小枠に繰糸

したものを大枠に巻き返

して「かな」にし、糸ね

じりと称する工員が規格

に合わせて三〇かなで一

括にし、さらに一六括を

一捆として荷造りをして

出荷した。(二捆の重量は

九貫匁が標準であった。)こ

の揚げ返しは個々の工場

でも行なわれたが共同で

行ない品質の統一をする

ことがよかった。そこで



図 6-44 天佑社共同揚げ返し工場内部

東箕輪の三井、箕輪の今、本村の長田外一工場が加入して設置された。その規模は次のとおりである。

表 6-42 共同揚げ返し工場の規模 (大正三年至大正四年)

4	共同揚げ返し 工場敷	共同に加入 せる釜数	揚返し 窓数	工女数	動力	共同揚げ返し 生糸量	生糸百斤揚 返し費用
594							
366							
33							
水車							
69450							
15							

(大正五年二月農商務省農務局調査史料五巻)

第六節 戦争と南筑輪

一 戦争と南筑輪

(一) 西南戦争

明治五年十一月徴兵の詔が発せられ、つづいて翌六年徴兵令が公布になり、兵農の区別を除き国民皆兵を基調とする徴兵制度がしかれた。このときの兵制改正により筑摩縣は第三軍管（名古屋城白）の管轄下にはいった。

明治一〇年二月、徴兵制度下はじめての戦役が南国鹿児島でおこった。いわゆる西南戦争である。この戦は徴兵によるいわゆる庶民兵が、旧武士出身兵を打ち負かした歴史的なものであった。

本村からも一人、塩ノ井の征矢梅之助が従軍したが、さいわいにして無事生還したばかりでなく、その戦功により勲八等の受章をした。しかし、上伊那出身者のうち一名が戦死してしまった。

(二) 徴兵制度

西南戦争のはじまる前、すなわち明治六年一月一〇日徴兵令が発せられ、二〇歳に達した成年男子を徴集し、常備軍（三年兵役）、後備軍（常備軍終了後、四年中応召義務）国民軍（上記二軍以外の一七・四〇歳の男子）の三種に分けた。さらに兵制を整備し、全国に六軍管を置いた。旧長野県は第一軍管（東京）、筑摩縣は第三軍管（名古屋）の管轄下におかれた。このようにして国民皆兵をねらいとする徴兵制度が成立した。

しかし、国民皆兵を理想としながらも、実際には兵役免除制度があつて、常備兵役に服する者の数が意外に少なく、実質的な国民皆兵ではなかった。

免役制度の概要を列挙すると次のようであった。

- 1 身長五尺一寸未満の者
- 2 病氣のある者
- 3 犯罪者
- 4 官吏
- 5 陸海軍生徒
- 6 官立学校卒業生及び在學生
- 7 戸主及び相続人
- 8 代人料納入者
- 等

二 二か条

このような多くの免除事項があつたため、免役者の数が多く支障をきたしたので、明治一二年、一六年の二回にわたり徴兵令を改正し、免役条件を制限するようになった。

このように満二〇歳になった男子が全員壮丁として徴兵検査を受けるようになったことは、武家時代における元服と同じ意味をもつようになり、男子一生の一節目として大きな意義をもつようになった。こうして合格者はそれぞれ各兵營に入隊、二年から三年の訓練を受け、この制度は内容的には多少の変遷はあるにせよ、明治、大正、昭和へと太平洋戦争終戦まで続いたのである。

村の「事務報告」から、村内徴兵検査の結果を表にしてみると、次表のようである。

四 日清・日露戦争

1 日清戦争

明治政府発足以来、国運は日に日に隆昌にむかい、近代化の一途をたどった。明治二十七年八月一日、突然朝鮮問題に端を発して清国に宣戦を布告、いわゆる日清戦争が始まったのである。この戦争は徴兵制度確立以来、わが国が外国と事を起こした初めてのものではあった。

開戦以来あいつぐ我が軍の勝利に、村民の心も戦勝気分に通じた。かなりいたようである。この日清戦争においての上伊那郡内の戦没者は三十一名、本村の戦没者は一名であった。（『上伊那誌』）

2 日露戦争

明治二七・八年日清戦争において清国に大勝した我が国は、世界の列強と肩を並べ、さらに朝鮮支配への野望を持つに至った。時あたかも満州へ進出を企てたロシアは、満州から撤兵せず、鴨綠江(朝鮮・満州の境)へ進出し、交渉も思うように進展せず、朝鮮半島への脅威からとうとう我が国はロシアに対し、宣戦を布告したのであった。時に明治三十八年七月一日、ここに一年有七か月にわたる「日露戦争」が始まったのである。大ロシアを相手にしての文字どおり我が国の命運をかけた戦争であったと言えよう。

表6-63 南其輪村内地兵検査結果

		壮丁 人数	合 格		徴集 猶予	徴集 免除	徴収 延期	兵役 免除	その他
			当せん 入	補充兵					
明 治	41年	37人	4人	14人	2人	1人	人 3	14人	2人
	43	36	14	11	5				3
	44	45	14	13	7				11
	45	45	14	12	4				15
		壮丁 人数	合 格		徴集 猶予	不 合格	海軍志願		
			当せん 入	補充兵			志願	採用	
大 正	2	37	19	6	4	8		6	1
	4	48	10	22	3	13		6	3
	6	39	10	17		12			
	8	41	9	16		16		1	1
		壮丁 人数	合 格			不 合格	海 軍		
			現役 入	補充 兵役			志願	採用	
大 正	9	28	4	12		12		1	1
	11	31	3	第1乙種 22		13	16	1	1
	13	41	17	16		7	1	1	
	15	39	9	7		19	2	1	
		壮丁 人数	甲種 合格	第一 乙種	第二 乙種	第 二 補充兵	徴兵 免除	兵役 免除	徴集 延期
昭 和	2	40	12	1	9		17	1	
	3	48	9	3	5	7	16	6	2
		壮丁 人数	現役 入	第 一 補充兵	第 二 補充兵		徴集 免除	徴集 延期	その他
昭 和	6	55	6	16	3		17	1	3
	8	54	13	9	9		18	2	3
	9	66	14	19	3		23	2	5
	12	55	14	20	6		10	4	
	14	67	42	12	4		5	4	2
	16	75	37	21	5		4	8	
	18	64	31	9	10		2	8	4

(牧瀬文書事務報告より作成)

開戦以来各地において激戦が展開され、我が軍においてもかなりの犠牲が出た。旅順・仁川沖の戦い・旅順港封鎖・黄海の海戦・二〇三高地の戦い・旅順攻陥・奉天の戦い・日本海海戦等いずれも我が軍の勝利には帰したが、陸戦として補充の兵士が召集されていった。当時の役場兵士の記録(明治三十八年事務報告)には次のように記されている。

最も急速に取上げアナスベキモノナルニヨリ、勉勵ノ結果毫モ違算ナク、実施ノ場合ニオイテ遅延躊躇スルコトナク、終局マデソノ事務ヲ全ウシタリ。

(役場文書)

当時現役兵はもちろん予備役兵の召集等で兵事事務の多忙さが窺われる。生活面でも戦争協力のため、村の予算もかなりの緊縮財政を強いられようである。貯蓄の奨励・節約の実施・応召軍人家族の慰安救護・従軍軍人の慰問・肥料の確保のための豆科植物の栽培、さらに予算面では土木費教育費の削減・各種補助金、奨励金の削除等かなり広範囲にわたった。

そしてとうとうわが村においても、下士官・兵あわせて七名の戦没犠牲者を出したのである。(上伊那の戦没者、将校一二名、下士官四三名、兵一九四名)これらの戦没者は主として第一師団で第三軍乃本將軍の指揮下にはいり、旅順・奉天等の戦いに参加した兵士たちであった。

戦死者七名の英霊も無言の凱旋をし、うち一名、神子柴出身の高木榮三の村葬は一足早く行なわれ、表6-64に記す五名の戦死者合同村葬は明治三十八年一〇月一五日営まれた。

(四) 戦時体制と太平洋戦争

1 太平洋戦争のはじまるまで

(1) 日露戦争以後

わが国は世界列強に伍し、軍備拡張への道を着々と歩んでいった。わけでも国内には軍隊万端の気風が日増しに高まり、村内においても帝國在郷軍人会南支輪分会の発足・愛国婦人会の結成・海軍思想の普及・徴兵事務の警察署所管・村役場に兵事主任の設置・青年訓練所、実業補習学校に軍事教練指導員の配置・青年学校設立等軍事体制への強化が日を追って進んでいった。

(2) 満州事変・上海事変から日中戦争へ

大正三年の対ドイツの第一次世界大戦、大正七年のシベリア出兵等の戦争を経て、昭和六年九月満州事変が勃発した。翌七年一月には戦

火が上海にまで及び、いわゆる上海事変が起こった。この満州事変から上海事変にかけてわが村からもかなりの数の出征兵があった。

昭和七年の南支輪村役場の「事務報告」の中に次のように記されている。

日支事変ニ依り動員下令ヲ令セラレ応召セシモノ左ノ如シ、

動員下令年月日 昭和七年二月二四日

松本歩兵第五〇連隊 清水國人也 一名

宇都宮輜重兵第一四大隊清水正人 他 二名

同年中何レモ復員下令無シタリ

(役場文書)

同年の事務報告「勤労奨励」の項には、「教化総動員ノ趣旨ヲ体シ、従来ノ本村生活改善申シ合ワセノ実行ヲ強調シ、村農会ト協力シ本村農業更生経済計画遂行実現ニ努メタリ」と書かれており、当時の世相の一端をうかがうことができ、さらに「青年訓練所」の項には、「教練指導員トシテ飯島義人他二名之ニ当タル。…訓練所振興ハ重大ナル時局ニ鑑ミ、焦眉ノ急ナルヲ以テ、各区長・軍人分会ニ依頼シテ入所勧誘セリ」とある。

このようにわが国の中国への軍事侵略が拡大していくにつれ、軍国色一色にぬりつづき、やがて昭和一二七年七月、蘆溝橋における日中両軍の武力衝突により、泥沼のような日中戦争(支那事変)が開始された。

時の近衛内閣はこの非常事態に際し、戦争目的達成のため、尽忠報告の精神を振起して、これを日常の業務生活の間に具現しようと、同年九月九日「国民精神総動員」を国民に要請した。

この時に、村には国民精神総動員実行委員会が設置され、この趣旨の普及につとめ、特に青年男女の奮起をうながした。国民精神総動員



図6-45 軍人の携帯した手帳
 部団・連隊・兵科・出身地を年月日戦時着衣衣履大小区分および軍人としての経歴が記載されている。

運動は「貯蓄の実行」「食糧増産運動」「消費の節約」「軍事援護」等を目標に掲げ、村民に戦意の高揚・戦後の護り強化等を訴え、その徹底を図った。

一方、中国における戦いの激化・拡大にともない、第一四師団に動員下令があり、村内の在郷軍人にもかなり多くの召集令状（いわゆる赤紙）が下達され、歓呼の声と日の丸の旗に送られて出征していった。このようにして、戦争の長びくにつれ、村民の生活面もすべて戦時体制に組みこまれた。村の戦後の援護活動について次のよう記録が残っている。

昭和十二年七月七日支那河北省廣清縣附近に於て我が陸軍夜間演習中……（中略）……東洋平和樹立ノ為、特兵ノ応召出征トナル。是等關係事務及ビ応召者ノ志氣鼓舞激勵並ニ見送り、戦後ノ護リニ當タリ、軍村一致ノ協力援助ニヨリ村民一丸トナリ、出征軍人後援会ヲ設ケ、応召出征家族ノ慰問並ビニ扶助ノ完備ヲ期ス。コソテ特兵ヲシテ戦場ニ後援ノ要ナク、長期抗戦ニ對シ軍村協同打開ニ邁進シ、マスマス戦後ノ因メニ遺跡ナキヲ期セシメントス。

（役場文書）

日中戦争がはじまって以来、戦時体制のもと行なわれた主な関連事項をひろってみると次のようなものがあげられる。

(1) 昭和十二年

・義勇隊開拓農業移民の奨励

・出征軍人遺族会への勤労勸励奉仕隊組織

・小学校高学年児童及び青年学校生徒奉仕する

(2) 昭和十三年

・義勇隊開拓青少年義勇隊 一名送出 以後毎年送出

・国民精神総動員家族計画樹立、これを実施した。

・軍用候補兵訓練会を組織する。

・軍用大砲四回にわたり供出・箱こぎの面鉄鋼材二〇九貫及び軍用真綿として五〇五一貫製造、六貫にして供出・鬼毛皮一〇二〇枚供出。

(3) 昭和十四年

・南茨輪村戦後奉公会を組織した。（援護団体を一括）

・青年の体力の増強をはかるため「体力章検定」を実施する。（二五歳、二五歳）以後毎年実施

・消防団が警防団組織に改められた。（定員四四六名）

・白米禁止令が出された。白米一七分づき以上禁止

・重要物資が配給制になった。

・（農林水産用の灯油、軽油、釘、肥料、農機具等）

・地代・家賃統制令・小作料統制令が実施された。

(4) 昭和十五年

・青年学校職業科実習地として大芝原に戦国農場五反歩を設けた。

・奉公米供出にいて警備応援のもとと強行された。

・みそ・醤油・塩・砂糖・など切符制決定。

・国民服制定

・暴利行為取締り規則により、公定価格の認可のあった物品に際、協定値

格品には額の表示をした。

・優良多子家庭が表彰された。(四家庭)

・南筑輪村労働員協議会が設置された。

・大政翼賛会結成の通達が出た。

(5) 昭和一六年

・翼賛青年団が結成された。(二六・四五歳)

・大政翼賛会運動を奨励する一定年齢層の組織

・村内各区の隣組単位の常会が毎月開かれるようになった。

・食糧類の自給的供出がはじまった。(火鉢・脚立・物干・干草等)

・尋常高等小学校が「国民学校」に改められた。

2 太平洋戦争と敗戦

大本営陸海軍部発表、一二月八日午前六時三〇分

「帝國陸海軍は本日未明西太平洋上において米英と戦闘状態に入れり」

「軍艦マーチ」の賑やかな音楽とともに、ラジオからこの発表が流

れた。わが軍の真珠湾奇襲攻撃およびマレー半島上陸により米英との

間に戦争が開始され、太平洋戦争の幕明けとなった。

一六年末までにグアム島・ウェーキ島・香港を攻略、

一七年に入ってマニラ・シンガポール・ジャワ・ラングーンをおと

し入れ、緒戦の予想以上の戦果に、村民の戦意も大いに高まった。この

ように戦場の範囲が広まるにつれ動員下令が次から次へと行なわれ、

兵籍にある予備役、後備役にある者、第一補充兵および第二補充兵の

者はもちろん第一国民兵に至るまで召集されることになっていった。

一七年からは第二国民兵まで兵籍に編入、召集を受けるようになった。

た。このため村内においては、働く男手が日を迫って少なくなり、物

資の配給も乏しく、苦しい耐乏生活を強いられながらも、戦争遂行の

かけ声だけは勇ましかった。

・村民一九トナリ、益々戦後ノ後援並ビニ軍事機密ノ相談所ト相マツテ店石
出征家族ノ扶助ニ完ベキヲ期シ、村兵ヲ第一線ノ戦ニ忠告セシメ、モツテ
長期戦ニ対シ軍村總局打開ニ邁進シ、戦後ノ困ノニ遺物ナキヲ期セリ

(昭和一七年事務報告より)

(役場文書)

そして昭和一七年六月、ミッドウェー海戦による日本海軍の敗北以
来、米軍の攻勢がはじまり、昭和一八年ガダルカナルの撤退、アツ
島の日本軍全滅、一九年からの米軍機の日本本土空襲の激化、サイバ
ン島の玉砕、つづいて二〇年になっての硫黄島・沖縄本島の玉砕、広
島・長崎への原爆投下、ソ連の参戦で幾多の激しい戦いを経て、とう
とう八月一五日ポツダム宣言受諾による終戦をむかえたのである。

このように敗戦、玉砕(全滅)が続くにつれ戦没者の数も多く、無
言の凱歌をする兵士が多くなっていた。最後の勝利を信じ、神州不
滅を信じて戦ってきた村民も、やがては本土決戦・一億玉砕の声を聞
きつつ、絶望の淵に立たされたのである。

当時の乏しい記録の中から、当時の村民の生活にかかわりのあるも
のを拾ってみる。(戦争・兵事等に關する記録帳簿類は終戦直後その筋の指
令により、ほとんど焼却処分になされてしまったという)

(1) 昭和一七年

・軍用保護局として検定検査の結果六〇余頭合格

・金庫回収令公布により、寺院の梵鐘・仏具など強制的に供出させられ

た。

・衣料の点数切符制が実施された。村内への配給 軍手一五〇五双 毛布

一四枚 手ぬぐい一五六七本 カスリ米一三三枚等

(2) 昭和一八年

・学生の徴兵猶予撤廃により学徒出陣あり。

・衣類の材料として桑の皮、あかそなどを採取して供出するようになった。
・軍需工場へ軍需に、徴用に労働者を数多く送出した。

・緊急軍事施設建設のため、協力会の発動により本村において二月二日より毎月三五名ずつ協力出動した。

これは一八年八月より現伊那市六道原に竣工された「陸軍伊那飛行場」への勤労動員で、一九年一月ころには特攻訓練が開始された。作業員は毎日五〇〇〜六〇〇人から一〇〇〇人くらいが動員され、昼夜兼行で建設に懸命の努力をし、急場しのぎの飛行場が完成し、村からも通称「赤トンボ」と言われた練習機が飛来した。

・国民体力法により、満一五歳から二五歳までの男子の検定を実施した。
・女子体力章検定会を実施した。(数え年一五歳から二三歳までの女子一〇人)

上級一六人 中級四八人 初級一八人 終級二八人

(3) 昭和一九年

・学童の集団疎開が開始されたが、本村にはなかった。そのかわり疎故関係の疎開が一八年九月ころより一九年、二〇年にわたってかなりの数があった。二〇年度には合計一五八名にのぼった。

・燃料の不足を補うため松根油製造の指令があり、増産対策に努力した。
・この年より食糧不足が急を付けてきて、その増産に必死であった。

(4) 昭和二〇年

・農林勤務隊が食糧増産及び液体燃料確保のため本村に到着、南兵衛國民学校を宿舎にして北原の山林五十町歩の開墾にあたった。

・自給肥料の増産が行われた。

・肥料工場の軍需工場への転換により全面的に肥料の供給不足をきたし、自給肥料によって補わざるを得なかった。

・堆肥 人糞尿 刈草 草木灰 れんげ草 萱草 野草 わら 等

・戦災者用の衣類等の配給があった。

・配布品 二・毛布二・モンペ五・手ぬぐい二四・半ズボン一シャツ三

足袋二〇等

・陸軍衛生材料廠が来村、作業をはじめた。

同廠伊那出張所長より軍用衛生材料作業につき、校舎借用の申し入れがあり、五月一日より女子工員一〇名来校、八月一日まで作業を行なった。その間、当村高等科女生徒も作業に加わった。

国 慰霊碑・戦没者名

戦没者の慰霊については太平洋戦争前「忠魂碑」を建立し、年々慰霊祭を執行してきたが終戦後連年駐軍の命により撤去した。その後、昭和四四年「慰霊碑」を建立、碑陰にその芳名を刻み、年々慰霊祭を執行している。(上巻参照) なおこの碑には戦死、戦病死者のほか、青少年義勇隊、満蒙開拓関係者および公務関係殉職者等、計二〇〇余柱の芳名が刻まれている。

表 6-64 戦没者名簿(軍人関係)

遺族会名簿によるも転出入等の関係で記載漏れもある。

(順序不同)

戦没者氏名	戦没年月日	戦没場所
有賀三三郎	明治三〇・一	広島陸軍病院
高木 栄三	明治三〇・八	廣州開東州
征矢万千代	明治三〇・一八	廣州大石橋兵站病院
征矢 弥七	明治三〇・二九	廣州二〇三高地
倉田春三郎	明治三〇・二九	廣州奉天城外
有賀放太郎	明治三〇・二六	廣州奉天城外
坂取 善吉	明治三〇・二六	廣州沙河万宝山
松沢三郎	明治三〇・二九	廣州柳家屯
清水 信三	大正二・八・三	豊橋市海岸演習中殉職
白鳥 義教	明治三〇・二六	海軍大泉自宅療養
山崎 隆行	明治三〇・二六	広島衛戍病院
倉田 幸雄	昭和七・二〇・元	廣州黒竜江省克山県

第6節 戦争と南支那

有賀 重幸	有賀 貞良	伊東 博人	下島 英雄	征矢 利美	征矢 輝雄	堀 敏秋	有賀 三郎	倉田 隆吉	植田 忠治	加藤 次郎	丸山 広	清水 孝好	高木 秀美	清水 芳雄	関根 信吉	有賀 忠文	唐沢 雄三	加藤 友光	征矢 得之	唐沢 清可	清水 末治郎	小林 政司	松沢 太郎	唐沢 重信	唐沢 次雄	原 道広	山口 文晃	松沢 重臣	本村 勝男	有賀 忠敬	入戸 治男	
〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	
北太平洋方面	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	中国雲南方面空爆作戦中	
戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死
唐沢 泰人	有賀 宏平	原 義人	中林 孝義	白鳥 義徳	唐沢 千明	唐沢 義男	加藤 明	北条 栄一	松沢 寛	丸山 広	唐沢 市衛	清水 幸治	牛山 一良	唐木 喜雄	原 忠直	倉田 勘藏	松沢 二郎	松沢 直治	丸山 三郎	征矢 七衛	倉田 健	堀井 長雄	永井 正光	山崎 一男	征矢 一男	安藤 務	五味 丈夫	高木 利保	征矢 幸一	白鳥 三	有賀 一三	
〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	〇・二・九	
中国北支	西カロリン島	ビルマ方面	台湾高雄港内	自宅襲撃中	テニヤン島方面	パシー海峡海上	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区	ビルマ シタタン地区
戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死	戦死

戦没者氏名	戦没年月日	戦没場所	戦没状況
三沢 進	1941.9.20	マリアナ群島方面	戦死
原 利徳	1941.10.27	ビルマ カタ島	戦死
小島 正行	1941.10.28	台湾沖	戦死
唐沢 金人	1941.10.28	台湾沖海上	戦死
小林 慎三	1941.10.28	フィリッピンマンドロ島方面	戦死
加藤 義男	1941.10.28	フィリッピン方面	戦死
藤沢 範雄	1941.10.28	フィリッピン東方海上	戦死
酒井 弘人	1941.10.28	フィリッピンレイテ島	戦死
池上 安人	1941.10.28	瀬戸内海上	戦死
黒沢 芳周	1941.10.28	東部ニューギニア ウエワク	戦死
穂高 正秋	1941.10.28	陸軍病院若松療養所	戦死
小松利根雄	1941.10.28	フィリッピン レイテ島	戦死
出羽沢重春	1941.10.28	パラオ諸島ベリコ島	戦死
有賀 久勝	1941.10.28	フィリッピン メレヨン島	戦死
原 重人	1941.10.28	自宅にて療養中	戦死
征矢 庄平	1941.10.28	台湾沖海上	戦死
油上 昭夫	1941.10.28	太平洋方面	戦死
小沢 芳雄	1941.10.28	フィリッピン コレヒドール島	戦死
丸山 基康	1941.10.28	茨城県鹿島郡白島村	戦死
酒井 博義	1941.10.28	ビルマ イラワリ島ゴゴン付近	戦死
加藤 利治	1941.10.28	ニューギニア アイタベ作戦	戦死
原 正利	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
上田 喜一	1941.10.28	セレス島方面輸送船団	戦死
清水 辰雄	1941.10.28	硫黄島	戦死
唐木 正春	1941.10.28	中国湖南省衡陽県	戦死
征矢 孝行	1941.10.28	ニューギニア ブーブ	戦死
清水 四郎	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
関根 勉吉	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
耳塚 英雄	1941.10.28	中国 中支方面	戦死
北川 米一	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
清水 美行	1941.10.28	ブーゲンビル島	戦死
清水 和行	1941.10.28	南洋群島方面	戦死

高木 良雄	1941.10.28	静岡県沼津市本町	戦死
高木 重理	1941.10.28	フィリッピン クラーク島	戦死
加藤 修治	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
飯島 勝由	1941.10.28	沖縄県 首里	戦死
唐沢 重信	1941.10.28	フィリッピン ルソン島ワクタム高地	戦死
池田 守雄	1941.10.28	ビルマ フモンカード	戦死
小林 賢	1941.10.28	中国武昌 兵站病院	戦死
清水 正孝	1941.10.28	ソコモン群島	戦死
征矢 克郎	1941.10.28	沖縄本島那覇付近	戦死
加藤 正巳	1941.10.28	台湾新竹州武第一五八部隊	戦死
安積 保	1941.10.28	フィリッピン バラリン島	戦死
岩佐甲子男	1941.10.28	中国河北省	戦死
沢田 直志	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
安藤 節雄	1941.10.28	ニューギニア ウエワク	戦死
加藤 清弘	1941.10.28	沖縄本島	戦死
小林 高治	1941.10.28	フィリッピン ルソン島	戦死
倉田 正雄	1941.10.28	中国湖南省安仁県	戦死
高木喜美善	1941.10.28	中国山東省	戦死
高橋 通夫	1941.10.28	フィリッピン ルソン島 イフガオ州	戦死
倉田 徳衛	1941.10.28	沖縄本島	戦死
出羽沢善弥	1941.10.28	フィリッピン セブ島	戦死
唐木 元観	1941.10.28	中国 南支那戦病院	戦死
太田 義人	1941.10.28	フィリッピン レイテ島	戦死
加藤 春雄	1941.10.28	フィリッピン ミンダナオ島	戦死
川上 光雄	1941.10.28	フィリッピン レイテ島	戦死
高木 重冬	1941.10.28	ビルマ ベーク山中一四二高地	戦死
原 一美	1941.10.28	広島県 呉方面	戦死
松沢 義雄	1941.10.28	フィリッピン ルソン島野戦病院	戦死
飯塚 男	1941.10.28	フィリッピン レイテ島	戦死
赤羽 孝一	1941.10.28	東京にて戦死	公死
唐沢 武雄	1941.10.28	フィリッピン バタアン州バンゴール	戦死
伊藤 四郎	1941.10.28	東部ニューギニア	戦死
原 伯郎	1941.10.28	満州牡丹江省寧安県	戦死
征矢 国雄	1941.10.28	満州牡丹江省綏芬河	戦死

二 満州開拓団と満蒙開拓青少年義勇隊（義勇軍）

(一) 満州移民の概要

満州開拓移民は、昭和七年から大陸政策の要として、また、深刻な不況の農村更生策の一つとして遂行され、大別して満州開拓団と、満蒙開拓青少年義勇隊の二方法で送出された。

この満州開拓という大量移民政策は国家の大事業であった。満州事

征矢 義高	〇二・八・六	満州にて	公務戦死
藤沢 孝一	〇二・八・三	岩手県岩手郡湯田村	戦病死
下平 正一	〇二・九・七	中国湖南省	戦病死
穂高 千鶴	〇二・〇・二	中国湖南省長沙病院	戦病死
日戸 章	〇二・三・二	ソ連チタ	戦病死
丸山 清志	〇二・三・五	ソ連 アングレン市	戦病死
伊藤 富男	〇二・一・一	タイ国泰緬鉄道二五七地点	戦病死
池田 正甲	〇二・一・二	中国黒河省 黒河第一病院	戦病死
北条 政人	〇二・二・六	北陵 自宅療養中	戦病死
矢沢 源十郎	〇二・二・一	中国 山東省	戦病死
唐沢 松太郎	〇二・三・五	ソ連 カダラ地区	戦病死
木下 久太郎	〇二・三・六	ソ連にて	戦病死
三沢 実	〇二・四・七	田畑 自宅療養中	戦病死
征矢 清志	〇二・五・七	樺ノ井 自宅療養中	戦病死
原 恵美	〇二・七・五	松本陸軍病院	戦病死
小野 正古	〇二・八・二	中国湖南省付近	戦病死
有賀 嘉文	〇二・二・九	南陵 自宅にて療養中	戦病死
有賀 武	〇二・二・六	西部ニューギニア	戦病死
唐沢 利男	〇二・二・七	国立長野療養所	戦病死
山崎 喜明	〇二・三・二	ソ連イルクーツク収容所	戦病死
白鳥 半吉	〇二・五・四	国立長野療養所	戦病死
種代 義雄	〇二・八・六	戦地後遺症	戦病死
清水 文賢	〇二・六・元	南陵自宅療養中	戦病死
沢田 兼三	〇二・九・三	戦地後遺症	戦病死

変当時は昭和恐慌の大不況時代で、特に農村は極度の不況にあえぎ苦しんでいた。この農村不況を打開するため満州移民が重要国策としてとりあげられ、五族協和、王道楽土建設の理想をにかけて、全国的な運動として実行に移された。

昭和七年一〇月試験（武藝）移民として第一次弥栄村、続いて第二次千振郷、第三次瑞穂村、第四次城子河、哈達河と四年の経験を重ね、その成果をふまえて同一一年から本格的移民政策にふみきり、時の政府は満州開拓を十大国策の一つとして、二〇〇か年に一〇〇万人、五〇〇万人の大量移民計画をたてた。

昭和十三年には一四一五歳の少年による満蒙開拓青少年義勇隊の第一次送出が行なわれ、一四年には日満両国政府によって「満州開拓政策基本要項」が制定された。

このように着々と進められた開拓移民は、全国で一般開拓団二四万二〇〇〇人、青少年義勇隊二万二八〇〇人その他四九〇〇人で、合計二七万人となった。

長野県では市町村長を中心として分郷計画を立てられ、一般開拓団二万六三三二人、義勇隊六九四二人、その他四六七人、合計三万三七四人の多きに達し全国第一位の移民送出県になり、昭和十八年四月一八日全国地方長官会議の席上、天皇より特に県知事に満州開拓に関する御下問があるほどであった。

送り出された長野県の満州開拓移民の概況は、図6-46のようであり、特出して多いのが下伊那郡で分村移民が四か村もある。次いで上伊那、東筑摩であるが、上伊那の分村移民は伊那村一か村だけであった。

全満各地に入植した人々は、それぞれ厳しい環境、過酷な自然条件と闘って立派な成果を収めつつあった。しかし、入植地の決定（土

跡の買収や取得」はすべて満洲開拓公社によって行なわれていたが、公社と旧地主（現地主）との間に不当な売買契約や強制立ち退きなど

が多くあり、これらの不満がやがておとずれた破局の日に一挙に爆発し、惨禍を助長することになった。

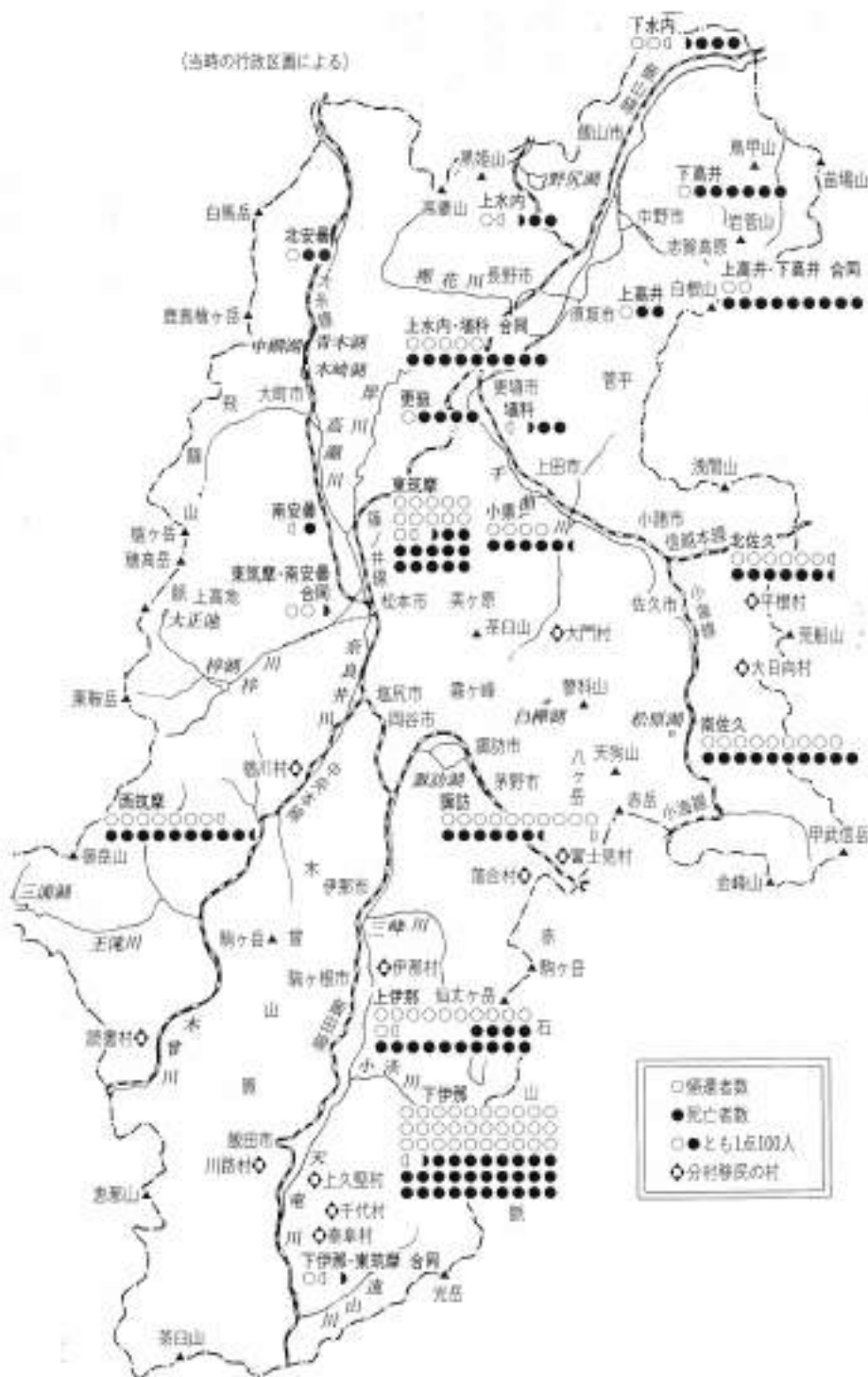


図6-45 長野県より送り出された満洲開拓移民（『長野県満洲開拓史』より）

昭和二〇年八月九日、突如としてソ連軍が侵襲してきたが、すでに関東軍は秘密裡に兵力を南方に移動していた。開拓民は北方ソ連国境の辺境の地に置き去りにされていた。さらにソ連参戦後はソ連国境防衛のために開拓団に根こそぎ動員がかけられ、ほとんどの青壮年男子は開拓団を後にし、残されたのは老幼婦女子だけであった。

昭和二〇年八月一日、日本の無条件降伏によって、無防備、無抵抗の開拓団に、周囲の中国人の襲撃があり、ソ連軍の略奪があつて平和な開拓団は、阿鼻叫喚の巷と化した。奥地から逃避行を続けた団員は、飢えと寒さと病魔のため幼児から老人、婦人と弱い者から尊い生命を落していった。世界移民史上未曾有といわれた大悲劇の中で、一〇余年間営々と築きあげた開拓事業は一瞬にして崩壊してしまつた。

満洲開拓移民で無事帰国した者一万七千九百八十八人、殉難者一万四千九百三十三人、残留者八千八百八十八人、行方不明者二二〇〇人という悲惨な結果となつた。破局のとき、上伊那郡送出者二五五〇〇人のうち、半数以上の一四〇〇〇人（五四・九％）が帰還できなかった。

しかし、このような、大混乱、大惨事の中にあつても、なお民族を超え怨念を超えた人類愛ともいふべき温かい行為が各地であつた。このことは、それから四〇年を隔てた今日において、日中友好の絆となり、残留孤児の肉親探しにみられる中国人養父母のあつたことを、全国民が感激にむせびながら初めて知ったことであつた。改めて中国人の寛容さに頭の下がる思いである。

本村出身の満洲開拓移民が、献身的熱誠をもつて渡満し、空しかった「理想境の建設」に邁進し、結果として決して消し去ることのできない悲劇となった史実をここに記すのは、犠牲となった人々の鎮魂と平和の尊さを訴えんとするものである。

四 満洲移民の気運

昭和七年三月の拓務省の満洲大移民計画（二〇万戸五〇万人）に基づいて、本県ではその四月知事を長とする信濃海外協会が「愛国信濃村」の建設を決議した。昭和八年からは第一次の弥栄村について数次の試験移民（武蔵）が行なわれており、それが一応の成功をおさめ家族を呼び寄せる段階に達した。

こうした実績をふまえて、昭和一二年には重要国策として向こう二〇年間に一〇〇万戸、五〇〇万人の大移民計画がたてられた。

弥栄村の名前は不況下の農村にひろがり、移民熱は急速に高まつた。昭和一二年には早くも南佐久郡の大日向村が分村して吉林省に移住した。これが刺激となつて、県下各村にも分村移民の世論が湧きおこり、一四年四月には郡下の町村長が満洲移民の現地を視察した。

移民費は大人一人八〇円、子供一人四〇円の補助金と、営農補助金一戸当たり七五〇円が支給され、その他補助金を合わせて一戸平均一五〇〇円が、日露両国の折半で交付される仕組みであつた。胸一本で満洲へ行けば二〇町歩の地主になり、やがては内地の資産家以上の生活ができるという宣伝が反響された。

四 本村からの開拓移民

本村からの開拓移民は昭和一二年の水曲柳開拓団に加わった清水安雄があり、これが本村からの移民の先駆けである。以後一四名が本村から移民をしているがその開拓団を表示すると表6-65のようである。

1 水曲柳開拓団

この開拓団は初め松島自由移民団水曲柳開拓組会と呼んだが、入植後四年目の昭和一五年に独立して「水曲柳開拓団」と称した。吉林省水曲柳には中国人三万人、朝鮮人一一〇〇〇人もいる所への入植であつた。

表6-65 本村に開拓する関係移住民

次別	①水曲柳開拓団	②中和鎮信濃村開拓団	③富貴原開拓団
名 称	昭和一二二年 水曲柳開拓団	第七次 昭和一二三年 中和鎮信濃村開拓団	第一次 昭和一七年 太平信濃村開拓団
入植形態	分散自由移民	長野県単位集団移民	集団分都移民
所在地	吉林省水曲柳	浙江省中和鎮	興安省阿榮旗太平鎮
入植式日	昭一二・三・一六	昭一三・三・二二	昭一七・四・一〇
送出母体	下伊那郡町村会	長野県	上伊那郡北部一〇村 富貴原開拓団 出本部
終戦時人員	二六六戸・一〇九二人 一名	二八二戸・一六四人 二名	九七戸・二九六八 一名
本村出身団員			

たので、用地の獲得には無理があった。この地は気温が最高三〇度C、最低零下三〇度という大陸的な厳しい気候の所であったが、土質は腐植土壌で地味は肥えていた。

団は昭和一二年からしだいに入植者が増え、水田三五〇ha、畑二四二〇ha、放牧地八〇ha、採草地六〇〇ha、ほかに貸付地水田八〇ha、畑五〇〇haの合計四〇三〇haの耕地があった。昭和一三年には稻熱病で全滅という失敗もあったが、同一五年の紀元二六〇〇年には全満を代表して榎原神宮へこの米を献上した。北満へ五〇tの余剰米を送り出せるようになり、昭和一七年には村政に移行していた。

2 中和鎮信濃村開拓団

全体的にはまだ移民熱はそれほど高くなかったが、前二回の県単独移民団の成績が良好であったので、大量移民の気運をはかり、昭和一二二年二月第七次信濃村の団員募集のために「満州信濃村建設の榮」が

作られた。その開拓団の営農計画の概要は、土地一戸当たり二〇haで、内訳は畑九ha、水田一ha、林野牧草地九ha、宅地等一haであった。応募資格は農業が充分でできること、政府補助金は一〇〇〇円で当時の最高額であった。

こうして、第七次中和鎮信濃村開拓団は募集域から二八三戸が集まり、そのうちで上伊那四六戸、下伊那五三戸と南信の人々が多く、本村からは加藤良介、清水健男が加わった。

この開拓団は初め東安省五道崗へ入植予定であったが、現地調査の結果不適当として入植を拒否し、中和鎮へ入植に変更した。治安は決して良くなかったが、昭和一三年二月先遣隊が入植、一五年には各部落とも個人住宅、畜舎が完成して二次、三次の本隊が次々と入植し、部落の共同経営から四戸単位の組の共同経営に移行した。

昭和一六年からは各戸に畑一五ha、水田一haあての耕地を配分して個人経営に入り、四年目には自給自足ができ、個人経営も確立し、教育、医療なども充実していった。行政面では同一六年から街村制に移行し、経済面では開拓農業協同組合を作った。

この時の団員数三一八人家族数一一〇〇人、耕作面積は水田五〇〇ha、畑一五〇〇haであって、農産加工として清酒九〇〇kg、味噌二万五〇〇〇kg、醤油九〇〇kg、大豆油三六〇kgの生産があり、管内優秀組合として浙江省長から表彰された。

3 富貴原郷への入植

(1) 分郷計画の樹立

昭和一六年四月、上伊那郡建設の郡町村長会議が開かれた席上で、一七年から始まる拓務省の第二期移民計画による上伊那郡開拓団は、上伊那北部の富貴原郷、西春近以南の一〇町村の伊南郷、東部の三峯郷の三郷の建設が決定した。

昭和十七年三月五日、北部一〇町村で町村組合を設立することが議決され、つづいて一〇月二二日には「富貴原郷開拓建設組合規約」が議決された。

議案第三十六号 町村組合設立ノ件

南支輪村ハ満洲富貴原郷開拓建設ニ関スル事務ヲ左記町村ト共同処理スルタメ町村組合ヲ設クルモノトス

記

伊那町・西支輪村・南支輪村・中支輪村・手良村・箕輪村・東支輪村
朝日村・小野村・川島村

昭和十七年三月五日提出 同日議決

上伊那郡南支輪村長 倉田友幸(印)

(役場文書)

この町村組合に組合規約が作られ、中支輪村役場内に事務所をおき、富貴原郷開拓建設委員がおかれ、各町村に送出割当てを行なつて、農業会、翼賛壮年団、軍人会婦人会の協力によって応募者を募り、その結果つぎのような開拓移民者が集まった。

南支輪村 一一戸 伊那町 二四戸 箕輪村 一〇戸
中支輪村 二〇戸 川島村 一戸 朝日村 八戸
西支輪村 一四戸 小野村 一戸 東支輪村 一戸
東支輪村 四戸 中沢村 一戸
戸数計 九五戸 人数計三〇三人

(2) 富貴原郷の入植

昭和十七年四月一日、興安東省阿榮旗(アール)太平溝に入植し、「太平溝富貴原郷開拓団」と称した。入植地は大興安嶺の末端丘陵地の広大な平坦地帯で(図6-47)、地区内には小川が幾筋も流れ、灌漑が多かった。北東には伊南開拓団がいたほか、少し離れた南方には三基開拓団がお

り、周辺にはすでに開拓団が入っていた。土質は砂質腐植土で、表土は浅かったが地味は肥沃であった。

地区内には中国人集落四つと蒙古人集落があり、以前は匪賊の巣(と)つと云われていたようであるが、入植当時の治安は良好であった。原住人は表向きは人ずきも良かったが、日本人に対する反感は強く、根にもっていて親しみがなかった。

昭和十七年三月幹部、団員合わせて一〇人の先遣隊(本村の植田福弥も先遣隊の一人として出発した)が入植したが、そのときすでに中国人の家屋を買収して宿舎も倉庫も間に合っていた。農地も中国人の耕していた熱地を買収あげてあつてすぐ農耕ができた。

作物の成育は順調で、おどろくほどの収穫があり、母村からは勤労率仕隊が作業の応援(本村では清水元美唐沢武男の二名が八月二四日奉仕隊として出発)に行っている。また、昭和十八年には送出本部のとりはからいで富士見分村から桐原長人(長野出身)を校長として迎え、在満国民学校を開校した。

入植三年目の昭和十九年からブラウ(畜力用燃料)農法に切り替え一戸で八haを耕作し、みごとに収穫をあげ食糧は自給自足の域を超え、三分の一は供出することができた。このころから大陸農業のいい匂いが出て来て、昭和二〇年からは個人経営に移行すると張り切っていた。

部落も二〇年四月には六部落となり、九七戸、二九六人が瑞穂・花崗・大和・宗平・旭等と名づけたそれぞれの部落に落ち着いて、ここをわが第二の故郷と部落長を中心に将来の夢をふくらませていた。同一年には診療所が開設されており、学校も児童数が二〇余人にふえ、先生も四人となり、子供たちの歌声も明るく王道楽土は目の前にあると思えた。

第6節 戦争と南箕輪

表6-66 本村出身満洲開拓団の状況

〔長野県満洲開拓史〕より〕

氏名	性別	続柄	生年月日	年齢	本籍地	家出発の日	出征	生死の別	最終消息	現地最後の場所	生死の事由
清水 安雄	男	本人	大正・三・元	(29)	大泉	二五・二		帰還	三・二・三	新京市南大房身難民収容所	引揚げ
月子	女	妻	〃六・六・五	(28)				死亡	三〇・二・八	新京市	病死
重子	〃	長女	〃	(5)				〃	三〇・二・一	〃	〃
征夫	男	長男	〃	(2)				〃	三〇・二・一	〃	〃
美智子	女	二女	〃	(1)				〃	〃	〃	〃
第七次中和鎮信濃村開拓団(戸数二八二戸 人員一、一六四人)											
加藤 良介	女	明子	一・五	(36)	榑子榮	二四		帰還			引揚げ
加藤 良	男	長男	昭六・四・六	(14)				〃			〃
八志美	女	二女	〃六・七・三	(11)				〃			〃
八留	男	二男	〃二・一・一	(9)				〃			〃
八巳人	男	三男	〃三・二・四	(7)				〃			〃
八末	女	三女	〃五・六・七	(5)				〃			〃
八千代	女	四女	〃七・二・七	(3)				〃			〃
八重子	女	長女	〃一・一・六	(15)				〃			〃
清水 健男	男	本人	〃	(38)	大泉	二五		死亡	三〇・八・三	浜江省延寿具中和鎮	引揚げ
竹子	女	妻	〃	(38)				〃			自決
弘司	男	長男	〃	(7)				〃			〃
達夫	男	二男	〃	(5)				〃			〃
第十一次太平洋高貴原開拓団(戸数九五戸 人員三〇三人)											
安藤 五男	男	本人	昭六・一・五	(17)	久保	一八・三		帰還	三・二・六	チチハル	引揚げ
伊藤 庄治	男	本人	昭六・九・九	(34)	大泉	二〇・八		帰還	三・二・七	〃	引揚げ
みさ子	女	妻	大正・二・一	(30)				〃			〃
今子	女	長女	昭四・五・五	(6)				死亡	三〇・三・七	興安東省阿榮旗黒	ハシカ
光子	女	二女	〃七・二・七	(3)				〃			〃
富貴子	女	三女	〃八・六・一	(1)				〃			〃
子子	女	四女	〃	(0)				〃			〃
伊藤 光子	女	本人	大正・三・六	(28)	大泉	一八・三・三		死亡	三・二・一	内蒙古市	病死
伊藤 光子	女	妻	大正・一・七	(24)				死亡	三・二・一	興安東省阿榮旗黒	引揚げ

植田	正子	女	妻	本人	大八二・一五	(32)	田畑	六・二・〇	婦還	三・〇・〇	興安省阿榮旗果	引揚げ
片桐	貞子	女	妻	本人	八・三・四	(26)	北殿	八・一・三	婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
八重子	あき子	女	妻	本人	八・三・三	(44)	北殿	八・四・八	婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
千恵子	八重子	女	妻	本人	八・三・三	(15)			婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
古龍	千恵子	女	妻	本人	八・三・三	(13)			婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
富美子	古龍	女	妻	本人	八・三・三	(10)			婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
千代美	富美子	女	妻	本人	八・三・三	(7)			婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
義次	千代美	女	妻	本人	八・三・三	(13)			婦還	三・三・三	興安省阿榮旗果	引揚げ
ひふみ	義次	女	妻	本人	八・三・三	(37)	南殿	八・六・八	婦還	三・〇・一	興安省阿榮旗果	引揚げ
美穂子	ひふみ	女	妻	本人	八・三・三	(4)			婦還	三・〇・一	興安省阿榮旗果	引揚げ
詔次	美穂子	女	妻	本人	八・三・三	(2)	南殿	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
婦郎	詔次	女	妻	本人	八・三・三	(41)	南殿	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
良子	婦郎	女	妻	本人	八・三・三	(26)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
政文	良子	女	妻	本人	八・三・三	(21)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
ふみ	政文	女	妻	本人	八・三・三	(37)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
本沢	ふみ	女	妻	本人	八・三・三	(26)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
宮下	本沢	女	妻	本人	八・三・三	(20)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
園枝	宮下	女	妻	本人	八・三・三	(0)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
勝美	園枝	女	妻	本人	八・三・三	(42)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
茂男	勝美	女	妻	本人	八・三・三	(39)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
はる子	茂男	女	妻	本人	八・三・三	(13)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
悦子	はる子	女	妻	本人	八・三・三	(11)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
守夫	悦子	女	妻	本人	八・三・三	(7)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
青枝	守夫	女	妻	本人	八・三・三	(1)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
千子	青枝	女	妻	本人	八・三・三	(25)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ
山崎	千子	女	妻	本人	八・三・三	(25)	大芝	八・三・三	婦還	三・一・六	興安省阿榮旗果	引揚げ

長い日数がかかった帰還であった。

④ 満蒙開拓青少年義勇隊

1 概 要

青少年は士気旺盛であり、気候風土への適応力も強く純真で規律正しいので、満州開拓移民として最適と期待され、青少年義勇隊として、昭和一〇年約一〇〇〇人の送出があり、一二年には三〇〇〇人を伊拉哈に入植させた後、「満蒙開拓青少年義勇隊実施要領」を定めて、三年には一挙に二万七〇〇〇人を渡満させた。

当初青少年義勇隊は各県混成の隊員であったが、昭和一七年からは長野県は県出身者だけで編成して送り出した。一八年になると戦局が拡大し、応召や入営兵がふえ、陸海軍志願兵の割り当てもあって義勇隊応募者が減少し、その割り当てに足らない状態では、小学校高等科担任や、役場職員は家庭訪問をして勧誘に努めるという状況であった。応募者は内原訓練所で開拓魂と集団生活の訓練を受けて渡満した。

表6-67 本村に開拓ある満蒙開拓青少年義勇隊

名 称	第一次	第二次	第三次	第四次	第五次	第六次	第七次	第八次
長岡義勇隊開拓団	昭一三・七・一九 〃一三・九・三〇 一七〇人	昭一六・三・二四 〃一六・六・一六 二三五人	昭一七・三・二五 〃一七・五・一〇 三〇一人	昭一八・三・二三 〃一八・九・九 二〇九人	昭一九・三・二四 〃一九・五・二〇 二二三人	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六
西海義勇隊開拓団	昭一六・三・二四 〃一六・六・一六 二三五人	昭一七・三・二五 〃一七・五・一〇 三〇一人	昭一八・三・二三 〃一八・九・九 二〇九人	昭一九・三・二四 〃一九・五・二〇 二二三人	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六
信州綜合義勇隊開拓団	昭一六・三・二四 〃一六・六・一六 二三五人	昭一七・三・二五 〃一七・五・一〇 三〇一人	昭一八・三・二三 〃一八・九・九 二〇九人	昭一九・三・二四 〃一九・五・二〇 二二三人	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六
長岡義勇隊小隊中隊	昭一六・三・二四 〃一六・六・一六 二三五人	昭一七・三・二五 〃一七・五・一〇 三〇一人	昭一八・三・二三 〃一八・九・九 二〇九人	昭一九・三・二四 〃一九・五・二〇 二二三人	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六
三井義勇隊小隊中隊	昭一六・三・二四 〃一六・六・一六 二三五人	昭一七・三・二五 〃一七・五・一〇 三〇一人	昭一八・三・二三 〃一八・九・九 二〇九人	昭一九・三・二四 〃一九・五・二〇 二二三人	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六
長野第一一勝岡中隊	昭一六・三・二四 〃一六・六・一六 二三五人	昭一七・三・二五 〃一七・五・一〇 三〇一人	昭一八・三・二三 〃一八・九・九 二〇九人	昭一九・三・二四 〃一九・五・二〇 二二三人	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六	昭二〇・三・三 〃二〇・四・六 四・六

渡満後の生活はすべて軍隊式で一個中隊におよそ三〇haが与えられ、馬一五頭、牛六頭、豚八〇頭を飼育し、農耕は主として馬を使って行なった。ここで三年間の訓練生活の後未開地に入植し、そこで初めて自分の土地を持ち、「大陸花嫁」を迎えて世帯を構えるという筋道であった。

2 本村関係義勇隊開拓団

本村に開拓ある義勇隊開拓団は表6-67のようであった。

(1) 長岡義勇隊開拓団 (図6-48の①)

長岡義勇隊は本村出身者が参加した開拓団のうちでは最初のもので、三年余の訓練の後安江省長崗に入植をした。長岡の治安は良好で入植以来一度も被害を被ったことがなく、近くに中国人部落三と、ロシア人民家三〇戸ほど、朝鮮人の小部落があったが開拓団に協力的で、対団感情は極めてよかった。開拓団は総戸数一八戸で上伊那からは一五戸、一八人が入植していた。

表6-68 本村出身の義勇隊

氏名	性別	続柄	生年月日	年齢	本籍地	家出発の日	出征	生死の別	最終消息	現地最後の場所	生死の事由
第一次長門義勇隊開拓団(戸数一八戸 人員二一三人)											
清水 義男	男	本人	大正・六・四	(23)	南箕輪村	一三・七・八	帰還	三・九・三		北海道稚内市	復員
宝石義勇隊開拓団(戸数二七戸 人員六五人)											
唐沢 国太郎	男	本人	大正・三・三	(22)	南箕輪村	一三・二・五	死	三・九・三			復員
唐沢 子	女										
唐沢 子	女										
第四次西海渡竜川義勇隊開拓団(戸数二四戸 人員二五七人)											
土屋 一利	男	本人	大正・六・三	(18)	南箕輪村	一六・六・一	帰還	三・八・八		シベリヤ	復員
池上 昭二	男	本人	昭・三・一	(18)	南箕輪村	一六・六・一	死	三・八・八		ハルビン	復員
藤沢 呈治	男	本人	昭・三・六	(18)	南箕輪村	一六・六・一	帰還	三・一・三		シベリヤ	復員
第五次信州聯合義勇隊開拓団(戸数三〇戸 人員三〇七人)											
第三義勇隊開拓団											
安藤 五雄	男	本人	昭・一・五	(17)	南箕輪村	一七・三・四	帰還	三・二・一			引揚げ
唐木 男	男	本人		(17)	南箕輪村	一七・三・四	帰還	三・二・一			引揚げ
北原 信一	男	本人		(17)	南箕輪村	一七・三・四	帰還	三・二・一			引揚げ
北林 秋雄	男	本人	昭・三・五	(17)	南箕輪村	一七・三・四	帰還	三・二・一			引揚げ
福代 卯三郎	男	本人	昭・二・三	(17)	南箕輪村	一七・三・四	帰還	三・二・一			引揚げ
第六次鉄國義勇隊小池中隊(戸数二〇九戸 人員二〇九人)											
遠藤 今朝治	男	本人	昭・一・六	(16)	南箕輪村	一八・三・三	帰還	三・六・九		蒲陽市鉄西区	引揚げ
征矢 昭三	男	本人	昭・三・四	(16)	南箕輪村	一八・三・三	帰還	三・六・九		蒲陽市鉄西区	引揚げ
金田 四良	男	本人	昭・二・五	(36)	南箕輪村	一八・三・三	死	三・一・一		蒲陽市鉄西区	病死
熊倉 文男	男	本人	昭・三・七	(16)	南箕輪村	一八・三・三	死	三・三・五		蒲陽市鉄西区	病死
清水 文男	男	本人	昭・三・二	(17)	南箕輪村	一八・三・三	帰還	三・六・九		蒲陽市鉄西区	病死
堀 富夫	男	本人	昭・三・二	(16)	南箕輪村	一八・三・三	死	三・六・九		蒲陽市鉄西区	病死
第七次三江義勇隊四角中隊(戸数二七戸 人員二八二人)											
安積 司	男	本人	昭・三・三	(15)	南箕輪村	一八・三・三	帰還	三・六・六		奉天紅梅取資所	引揚げ
唐沢 正一	男	本人	昭・三・二	(15)	南箕輪村	一八・三・三	死	一八・七		鉄鋼機械研究所	肉腫
清水 文男	男	本人	昭・三・三	(15)	南箕輪村	一八・三・三	帰還	三・一・九		ハルビン桃山分校取資所	引揚げ
正木 千治	男	本人	昭・三・七	(16)	南箕輪村	一八・三・三	死	三・一・九		ハルビン桃山分校取資所	発疹チフス

〔長野県蒲陽市史〕より作成

し、二〇年には多くの隊員が入営する状況の下で終戦をむかえた。この小池中隊の中隊長小池吉郎は、教育会から懇望されてその任についたのが南箕輪小学校の訓導であった。なお庶務指導員は本村出身の訓導倉田四郎で、そんな関係から本村から六名が隊員として参加し、うち三名の尊い犠牲者を出す結果となった。

(6) 三江義勇隊西角中隊（同図の②）

南信三郡出身者をもって編成され、本村からは四名の参加者があり、昭和一九年五月渡満、鉄腰訓練所に入所、二〇年三月、三江省訓練所に移ってここで終戦を迎えたが中隊長が病死し、本村出身者も二名尊い犠牲者となった。

なお、第八次第十一勝岡中隊も編成されたが、渡満前に終戦となったので省略する。（本村関係四名）

3 物故者慰霊像の建立

上伊那教育会と上伊那市町村会が発起者となって、青少年の戦争犠牲者の慰霊のため、「平和を象徴する少年の立像」を建立したのは昭和三五年である。

その趣旨によると、次のようになっている。

今回遺族会、同級生、義勇軍生存者等の要望に応えたと共に、これら物故者の慰霊像を建設し、尊い犠牲者の霊を慰めると共に、更に強く平和を永久に維持したいわれらの念願の結晶として、水くこれを折念しようとするものである。

満州移民については、当時長野県は一般の開拓団においても義勇隊においても全国一位の好成績をもっていた。しかし、戦後になって冷静に考えてみると、『満州開拓史』に前長野県農協中央会会長荒沢敏次のことばが、悲しくも真実であり、悔恨として心に残る。

……特に私の心に残る悔恨は、満州移民の問題であります。これは個人が



図5-48 少年の像

その責めを負う性質のものではないにしても、協同運動の列に加わった者全体が、結局は日本農民の貧困が、大膽進出といった形で利用された結果になってしまった事実に対して、自分達の不明が今なお悔やまれるのであります。

ブラジルなどへの移民のごとく、旧満州へのそれも終始平和的なものであったとはしなかった。

当時移民した人々は国のために、五族協和の旗の下、民族を超えた共存をそこに築こうと念願しており、その限りそれは真実であったが、その基盤に平和のなかったことよって一切は壊滅して大きな惨禍を残してしまった。そうした平和への折念がこのブロンズの慰霊像となったのである。それはまた多くの人の悔恨像でもある。

本村では義勇隊ならびに開拓団の物故者の、献身的な犠牲に対して、村公民館の庭の慰霊碑に名を刻んでその霊を慰めている。その碑陰には四二名の名が刻まれている。

戦後本村に移住した家族もあるので昭和六〇年現在慰霊碑に刻まれ

ている物語者は次のとおりである。

表6-1 義勇隊・開拓引揚物語者（順不同・別巻）

池上昭二・熊倉文男・堀富夫・唐沢正一・正木千治・倉田四良・有賀みさと

清水健男・清水竹子・清水弘司・清水達夫・清水重子・清水征夫・清水美智子・伊藤今子・伊藤光子・伊藤富貴子・伊藤兼義・沢田昭次・山崎俊子・立石その・立石浩子・立石夏子・立石はなみ・芝野時子・杉本定雄・大沢三郎・大沢正明・片桐千代美・武井弘重・杉本恵子・平松けさよ・平松勝雄・平松勝・松沢富美子・山崎千代子・山崎ふみる・征矢克彦・倉田英光・田畑誠・伊藤君子・原正芳

第七節 交通の発達

一 道路事情の変遷

（一）伊那街道の発展

脇道としてにぎやかだった伊那街道は、明治以後も伊那谷交通の大動脈としての役割を果たした。明治の初め伝馬所がおかれ（明治元年）宿駅制が全廃され（四年）、伝馬制度、助郷制度が撤廃される（五年）という驚くべき動きの中で、自由な交通ができるようになり交通量も増え運輸も盛んになり道路の改善の必要性が増大してきた。

そこで、国・県とも旧来の掃除丁場ごとに道路改善をするよう布達し（千葉県では明治五年「市街道路掃除規則」、明治八年管内道路の大修築計画・国では明治六年「河港道路修築規則」、明治九年道路制度改定）、道路の改修が行なわれるようになった。

伊那街道は明治六年には第二等道路となり、同九年には県道に指定され、重要道路として扱われている。明治七年の「伊那街道橋梁経費五ヶ年取調帳」（役場資料）によると、南箕輪分は延長五〇町一三間、板橋が一四ヶ所あり、道路幅は一丈五寸となっている。費用は七分の四が民費（村費）で賄われた。人馬の交通が盛んになるにつれ、道路の曲りを直したり（明治十二年には南箕輪分延長は四九町三八間に短縮した）、道路の幅が広げられた。当時、通行の上からも工事の上からも難所となったのは橋である。土橋・石橋・板橋と場所や経費の都合でいろいろあったが、明治十一年刊行の『長野県町村誌』によれば、伊那街道の橋は全部土橋で村内に八つあり、すべて幅九尺となっている。特に天竜川への架橋は大変で、北殿から福島への北殿橋の架橋については苦勞話がいくつかに伝え残されている。



図6-50 神子柴（信号機南）より南園へ通じる旧県道

短くなった。）

明治八年、県では将来車馬通運の便を盛んにするため道路の大修築を計画、迂曲を直し、高低を平易にして道幅を広げようとした。当村から出された開墾調査図（役場文書）によると、ほぼ現国道に近いものを計画している。

国としては兵馬の通行の便のため、地区としては運輸の便を図り通行の安全を守るため、道路の改修は大切なことであった。地区民の負担も大きく困難な事業で、明治九年の「道路管轄費取調書」（役場文書）によれば必要人員四六八人、その賃金六一円八六銭となっており、各耕地（現在の各区）への割当てがなされている。明治一六年の七道開墾事業費義捐金は（南長輪分は関係がなかったが）村内で二八七円五八銭負担している。とにかく町村財政において道路改修の負担は大

きかった。

それでも、道路改修はしだいに進み、明治二〇年には、高木城三郎の運動により県の幹線道路として改修が認められて、同一年から改修が行われた。このとき天竜川間近を通る線も検討されたが現在の路線に決定した。しかし細部にわたってはいろいろの論議があり、県の改修路線決定案に対し路線変更を内大臣山縣有朋に願い出した資料（同屋文書）も残っている。

明治二十四年には伊那街道は県道になり、同二六年完成予定であった改修は二八年にずれこんだが、幅九尺だった道路が幅三間になり、曲がり直され、平坦になり、交通が楽になった。このおかげでこの年には、伊那街道に乗合馬車が走りはじめている。伊那街道の工事費は一二万七千九百円であったが、地元の寄付金に負うところが多かった。現在の国道一五三号線の原形がここに出来上がったわけである。

道路の改修は交通事情を変え、伊那街道は荷車・運送馬車の往来がはげしくなり、明治二十四年の国税営業人台帳（役場文書）によれば、当村に人力車一台、荷車八〇台以上、積荷馬車六八台があつて営業をし、街道沿いの人家も徐々に増加した。その後自動車も現れ、明治末には乗合自動車が運行され始め、道路の改修も盛んに行なわれた。大正八年には、道路法公布により伊那街道は、県道長野飯田線と改名され、昭和二九年には国道一五三号線（二級国道）となり、舗装されるに至った。

当時の道路は、木下から久保の旧道（段丘下の集落の中の傾斜道路）を通り、塩ノ井で現在の国道と一緒にになり、ほぼ現国道なりに南に進み、南殿みさかの所で大きくS字状に曲がって（現在一部旧道として残っている）田畑に至り、角川鉄工場東から旧道に出てドライブイン（大懸）の西を通って、神子柴信号機の所から御園の集落へとつながって

しかし、近年の自動車時代を迎え、県道として全面改修をし、その際大泉の所は集落の東を通るようにし、現在の交通量はなかなかのものである。

この道も、物資の流通、集落の増加とともに見直され、昭和七年には県道編入の申請をし、改修をして機能の回復を図っている。昭和一年の村の記録には「新県道伊那中箕輪線（春日街道）は完全に手入れして県へ引き継ぎをした」とあり、手入れをしているが、交通量が少なく、なかなかよい道路にならなかった。

1 春日街道（県道伊那中箕輪線 村内五二五〇m）

(2) その他の道路

行者への危険がせまり全面に歩道がつけられるようになった。



図5-51 塩ノ井右 県道153号線 左 旧国道（南より写す）

昭和三〇年に交通量の増加、道路幅の狭さから再び国道改修が求められ、国道改修期成同盟会が発足して運動をし、その改修が行なわれることになった。補償問題などでこれより予定より遅れたが、昭和四〇年現在の国道一五三号線となったのである。当時としてはこんな広い道路は必要ないと住民は思っていたが、今日の交通量の増加と大型車の通行により道幅（七・五m）の狭さを感じるようになり、歩

表6-70 道路の発展（村勢要覧より）

種別	国 道	県 道	村 道
年			
大正 15年		1.8	7.5
昭和 3年		6.5	297.0
" 8年		6.5	297.0
" 13年		18.1	285.0
" 24年		4.2	301.0
" 30年	4.8	4.4	229.0
" 35年	4.8	4.4	229.0
" 40年	4.7	15.3	275.0
" 50年	9.1	8.3	292.0

(2) 吹上線
北殿ソヤ美谷室北から大泉を経て吹上へ至る重要な道路である。これもかつては、狭い曲がった道路であったが、バスを運行させるようになって拡張され、りっぱな道路になった。昭和五四年には県道に編入された。

天竜川を渡る重要な道路で古くから利用が多かった。しかし、橋の架設が大家で何回となく流され、区費や寄附によって地元の人々の苦勞でかけられた。土橋から木橋、現在のコンクリート橋へと変わってきている。

(1) 北殿—福島線

村勢要覧をみると表6-70のように、重要道路がたくさんあるわけであるが、そのいくつかをあげる。

3 その他

近年、林道経ヶ岳線が完成し、これが国道三六一号線に組み入れられ、昭和五九年に全線舗装が行なわれて車で権兵衛峠越えができるようになった。近代道路としてよみがえってきた。

わけてきた。

現在、国道三六一号線が伊那谷から木曾谷へ峠越えで抜ける重要な道路で、南箕輪としては沢尻・南原区を通っている。明治二六年には県道として認められ改修の手が入っている。しかし、急坂の険路で車中心の交通に変わって来た大正以後利用は減り、近年幻の街道などと言われてきた。

2 権兵衛街道（旧道伊那中箕輪線 村内七八〇〇m）

現在、国道三六一号線が伊那谷から木曾谷へ峠越えで抜ける重要な道路で、南箕輪としては沢尻・南原区を通っている。明治二六年には



図6-52 中央自動車道伊勢インター入口

(3) 村道の舗装

村道の舗装が始まったのは昭和三八年からで、押し寄せる車時代を迎え、道路の拡幅に至る所までなされ、舗装され、橋は永久橋にと変わっていった。

③ 近代交通路

1 中央自動車道

(村内全長三・九km)

昭和三〇年、国土開発縦貫自動車道建設法案が国会に出され、同四〇年に紆余曲折を経て東京・小牧間の

建設が実現されることになり、伊那にも高速自動車道が通ることになった。この道路の正しい名称は「高速自動車国道、中央自動車道、西ノ宮線」で、広い扇状台地の真中を南北に縦貫するものである。期待と不安の中で計画が着々と進められ、被買収者組合の人々と話がまとまったのが昭和四六年一月のことである。そして、五一年三月に南の方から、伊北インターまで開通し、現在では全線開通し、伊那盆地と首都圏や中京圏との距離が著しく短縮し、この地方の社会、経済に大きな影響を与えることになった。

2 大規模農道の開通

昭和四六年、上伊那地域広域市町村協議会では、その計画書の中で農産物の搬出、森林資源の開発、観光開発などを図るために道路の整備をすることを国や県に要望した。それが西部農業開発の一環とし



図6-53 大規模農道（大芝公園東付近）

て完成した西部大幹線農道（農免農道）である。本村では南原地区の権兵衛街道を起点として、大芝スポーツ公園東を通り箕輪町に達する道路で、四七年に着工され今日見られるようなすばらしい道路となった。

3 その他

昭和四七年の村報には「着々進む村道整備計画——これから道路は幅七m以上に必要がある。全部落に東西の大型村道、村を南北に縦断する道路として、久保神社―神子柴水道水

源地西までの道路を五〇年までに完成させたい」という記事が載っている。これは実現されていないが、現在までにいくつかの道路は完成している。その他、経ヶ岳林道が五一年に完成し、天竜川沿いに南北の大型道路（産業道路）も部分的ではあるが南部から逐次造成され、近年における道路の発展は著しいものがある。

二 運輸事情の変遷

明治以降一二〇年間の運輸事情の変遷は、すさまじい進歩と変化の歴史である。

明治の中ごろまでは江戸時代と同じように、人力と牛馬の背に頼る荷物の運搬であったが、明治も二〇年代に入ると車による運搬が盛んになった。荷車・人力車・運送馬車・乗合馬車の時代と言える。明治

の末から大正にかけては鉄道が敷かれ、自動車の出現を見、商品流通も盛んになって大量輸送の時代となり、汽車や電車、乗合バスや貨物自動車等による人や物資の大量輸送が始まった。そして、それがますます大型化してゆく中で、第二次世界大戦を迎え、戦後はますます自動車の進出により、自動車運輸中心の時代を迎え今日に至っている。

(一) 中馬から運送馬車へ

江戸時代の陸運機関は官営の伝馬（宿駅當番）と民営の中馬であった。

1 伝馬所から陸運会社、内国通運会社へ

明治元年、政府は宿駅の間隔制度を廃し、伝馬所を設けた。伊那街道にも一七駅設けられ、当村では宿場があった関係で北殿に駅がおかれた。北に松島駅、南に伊那郡駅があった。北殿駅には定員として人足五人、馬二匹とあり、他に「二等備え御請書」に人足七〇人、馬四〇匹が見られる。

禁止し上げ申す官方二等備え御請書の事

一、人足五拾人

馬三拾疋

一、人足七拾人

馬四拾疋

右の通り宿方定額の外上下共御定め賃銀の外今般常備御規則通りの賃銀御後し御座候得ば前頭の人馬数何時にても逐漸無く差し出し方行届き申す可く候、これに依り御受書差し上げ申し置候候件知し

(役場文書)

この伝馬所は官営ではあったが、予算の枠内での希望者の請負制で運営された。北殿駅では一年分として人足一人一四疋二分、馬一匹二九疋で請け負っている。しかし、始めてはみたものの人馬の調達、上納金の徴収など思うにまかせず運営困難に陥り、明治四年に政府は民

表6-71 伊那街道に定め立て人馬請負金表（一部）
（堀ノ井大蔵文書より）

人足数	馬数	人馬請負金 年分	人馬請負金 年分	人馬請負金 年分	藩県局	宿名里程
八人	一匹	十五兩	三十兩	百五十兩	伊那高遠藩	宮本 二里
同	二匹	同	同	二百八十五兩	伊那高遠藩	松島 一里
同	同	十四兩二分	二十九兩	二百七十五兩	伊那高遠藩	北殿 一里
同	同	十五兩	三十兩	三百兩	伊那高遠藩	伊那郡 二里
同	同	同	同	同	高遠藩	伊那郡 八丁
同	同	同	同	同	高遠藩	宮田 一里

営に切りかえ、各宿駅相對距離による陸運会社を作らせることにした。左に陸運会社規則書の一部を掲げる。

陸運会社規則書（抜粋）

伊那街道 北殿大泉宿控

旅人案内トシテ会社へ張り出し候御規則書

一、陸運会社ノ儀ハ一切ノ御旅行便宜ノ儀相成ム儀ヲ旨ト致シ取り結ビ候モノニ付キ、何レノ身分ヲ論ゼズ当社へ御申し入レ成サレ候ワバ何時ニ限ラズ、幾ジテ定式賃銀ニテ人馬請負テ御世話申スベキコト

一、離立テノ儀幾ジテ御申し入レ方御着順ニ隨イ、早速イノ外ハ何様高貴ノ御方様ニテモ別格ノ離立テハ堅ク御断リ申シ候事

一、早速イハ是夜旅行ノ御急を其ノ他多分ノ離立テ御申し入レ成サレ候御方ハ前以テ御案内状御送シ出シ成サル可キ事

(中略)

一、諸荷物トモ日方七貫目迄ヲ人足一人、四拾貫目迄ヲ馬一疋ノ度定メ、是ヨリ相増ス分ハ左ノ割合ヲ以テ御増分賃銀請取リ申ス可キ事

人足 七百目迄ヲ五分、七百目以上迄四百目迄ヲ五分、其ノ他是ニ準ズ

馬

四貫目迄ヲ五分、四貫目以上八貫目迄ヲ五分、其ノ他是ニ準ズ

一、早速イハ定メ賃銀ノ七割五分、但シ西上刻ヨリ五下刻迄五時ノ間ハ宅信
五割ノ賃銀御私成ナル可キ事

(中略)

右ノ通り会社一同申シ合ワセ規則相立テ申シ奉リ候間何卒御免許成シ下シ候
キ候様上奉リ候以上

明治五年壬申 二月

伊那郡宿	根津清衛	外二名
北殿宿	倉田三郎	
大泉宿	原吉郎	
松島宿	日野嘉衛	
外伊那街道一四宿連署	(略)	

(中宿文書)

民営になったとはいえ半官的な陸運会社の運営には問題も多く、明治八年には解散を命じられ、新たに内国通運会社が設立された。筑摩県では一番組から九番組までの分社と設立所があり、北殿・大泉・立所は八番組に入っていた。めまぐるしく名称や規則が変わっていたが、運輸の内容としては以前とあまり変わっていない。しかし民営となったので、官用貨物でも賃金を収受し、一定の賃金でだれにでも賃人馬を供給した。

2 中牛馬会社

中馬というのは、中部山岳地帯の駄賃馬に対する特別の呼び方で、農民が農業の暇をみて自分の馬の背に荷物を積んで自由に運搬し稼ぎの足にしたのが初まりで本来は副業であったが、しだいに専業になっていったものである。したがって公の街道(五街道)ではなく、脇往還やその他の街道で盛んになっていった。伊那街道は中馬道として明治に入っても繁栄していた。しかし、官営の陸運会社ができ仕事は順

調にいき出すと、中馬稼ぎの人々と競り合いにならざるを得なくなり紛争も多くなっていた。そこで、中馬稼ぎ人たちは陸運会社、通運会社に対抗するため中牛馬会社の設立を考え、許可を得て、あちこちに中牛馬会社を設立した。当村の近くでは高遠と飯田にでき、明治一三年五月、飯田中牛馬会社に当村の有賀元彦、清水堅造が株金二五円を出して参加している。営業規則に一款の重さや一里についての植段が決められ、鑑札をもらって会社の仕切りに従って仕事をした。しかし、これでは中馬の規則にしばられず、継ぎ立てをしないという特質はうすれ、中馬稼ぎたちにとってやりにくいものであったので、実際には会社に入らないで仕事をしているもぐりの中馬が相当数いたものと思われる。

3 両会社の対立と合併

両会社の競争対立は激しく、紛争が絶えずそのたびごとに県令の指示で協定していた。その中で両会社合併の動きが出て、明治六年には筑摩県令に「陸運・中馬両会社合併規則書許可願」が出され、それには北殿・大泉駅も記名している。合併規則の一部を次に掲げる。

陸運会社 合併規則
中牛馬会社

今般運輸牟利の爲中牛馬会社元立ての運輸許可相成り候に付き筑摩管内一般陸運会社と合併方法相立候規則左に決定せり

第一條

一、陸運会社の人馬は左の體形の通り鑑札相渡し置き候事

以下略

(役場文書)

しかし、もともと成立の出発点が異なる両会社は部分的に協力をしながら対立を繰り返して、やがて中牛馬会社は解体し小運送業者となっていた。そうこうしているうちに道路の改修が進み、荷馬車が導入

表6-72 通運・中牛馬会社の取扱貨物量

会社別	運輸貨物量	うち 元 貨物
通運会社	小 諸 田 10,000 駄	800 駄
	上 上 諸 田 12,000	3,500
	上 上 諸 田 17,000	5,000
	松 本 田 13,000	3,500
	飯 田 13,000	2,100
	計 65,000	14,900
中牛馬会社	小 諸 田 28,000	1,000
	上 上 諸 田 25,000	1,800
	上 上 諸 田 22,500	7,000
	松 本 田 4,000	720
	飯 田 3,800	1,800
	計 83,000	12,320

(明治15年)『県政史』より)

されて、明治二〇年代の後半から運送馬車時代へと進んでいくことになる。

ともあれ、明治二〇年までは中馬を中心とした牛馬の背による運搬の時代であった。北殿の明和坂に見られるような狭い道路や坂のある道を、荷をいっばいに積んだ牛馬が行きかう風景が想像される。

4 運送馬車へ

明治一一年	馬 三五〇	荷車 八
一六年		二八 人力車 一九
二一年	駄馬 九二	二九
二三年	七八	五八
二四年	営業 二一	八〇
		二一

(明治一一年「長野県町村誌」他は役場資料より)

以上は当時の記録であるが、急激に増えていく車の様子がよくわかる。明治の初めより道路整備に力を入れてきた県は、明治二十一年、県道伊那街道の大改修にとりかかり、二八年に改修が終わった。道路が良くなるにつれて車が多くなっていった。商品の流通が多くなり、経済の仕組みが変わり、生活の行動範囲が広がりとともに物資の大量運

送が必要になってくる。馬何頭分もの荷を一台の車につけて運ぶ運送馬車は時代の要求でもあった。

明治二〇年代後半からこの運送馬車が増え、伊那街道をにぎやかに往来した。牛は二輪車が多く、馬は四輪車で多くの荷が積まれ、運送馬車の時代は昭和二〇年代まで続いた。その間に電車や自動車も入ってきたが、電車はまだ輸送力が小さく、駅から他の場所へ運ぶにはどうしても馬車が必要であった。また、自動車の普及はなかなか進まなかったからである。

(二) 人力車・乗合馬車・自転車

1 人力車・乗合馬車・自転車

人を運ぶものとして、江戸時代は馬とかがだけであったが、明治時代になると車が現れ、いろいろな交通用具や機関が出てきた。人力車・乗合馬車・自転車などがそれである。これらについては上巻民俗編を参照されたい。

2 大正時代の交通

ここで大正時代の交通事情をよくあらわしている日記があるので、一部抜粋して紹介しよう。

大正六年

八月三〇日、米(白米四俵)を荷車で伊那町御殿前まで運ぶ。三日町より玄米六駄運賃七〇銭にて運ばせる。

九月三〇日、昨夜の吹き降りにて電車が故障を生じ、不通となりたれば、自動車道を往復し、通行人多く通いたれば県道はときならぬにぎわいなり。

一〇月六日、山寺七宅より荷車を新調して警察に印を受けに行きたり。前車は小森源助君に売られたり。

十一月二六日、自転車と人と突きたりて、おばあさんの命あぶなしとの話

なり

大正七年

四月二〇日、木下青年会は自転車にて伊那町へ競争せり

大正九年

五月八日、諏訪御柱に行く人が非常に多く通るので、自分も行きたくなってきた。

六月二九日、木下まで自転車、木下から電車、辰野から汽車で米の買い出しに行く。

十一月五日、午後は白米を荷車で運びたり。

十一月一日、午前一二時には県庁より自動車二台で道路改良官伝説が来て、役場の前で演説をした。

(徳島文書)

④ 伊那電気鉄道から飯田線へ

山の中に住む伊那の人々にとって近代文明の先駆とも言える鉄道は夢であった。それが、先人の苦勞の結果伊那電気鉄道として敷設され、それによって物資の流通ばかりでなく文化の進展がみられた。やがて、国鉄飯田線となり、あふれるばかりの人や物資を運んだが、自動車時代を迎え、その働きは衰退の一途をたどった。

1 伊那電車の開通

鉄道中央線の話を持ち上るや、南箕輪からも素早く声が上り、明治一七年政府に対して諏訪から諏訪湖沿いに上伊那へ入るよう請願書を出した。さらに、二五年には中央線伊那谷通過期成同盟会を結成して運動をしたが、同二七年、ついに帝國議會において木曾回りが決定された。これではならじと、辰野―飯田間鉄道敷設を働きかけ、実現にまでこぎつけたが、経費がかかり過ぎるということでこれも駄目になってしまった。

表6-73 伊那電車軌道株式
会社府県別株主数 (M4.11.30)

府 県	株主数	株 数
東京	258	15,235
東京	793	9,662
神奈川	35	2,091
大阪	16	554
兵庫	6	358
千葉	11	276
静岡	8	254
山梨	6	249
埼玉	5	139
山梨	1	100
秋田	1	112
山梨	1	100
滋賀	5	98
岐阜	41	772
計	1,187	30,000

「伊那電車軌道株式会社事業報告」
より

そこで、辰野―飯田間に有志の力によって電車を敷設しようということになった。すなわち、明治二八年伊原五郎兵衛を中心に「伊那電車鉄道株式会社設立趣意書、敷設請願書、起業目録見書」などを作り政府に提出した。同二九年には上伊那の町村長たちが「伊那電車鉄道敷設請願につき意見上申書」を提出、三〇年二月に内大臣より敷設の許可を受けた。早速株式募集を始めたが、これが大変なことであった。当時日清戦争後の不況でなかなか集まらず関係者は苦勞をしたようである。創立は明治四〇年になったが、株数のうち辰野県人が持った株は全体の三分の一弱であった。関係者は村々を巡回しては趣旨を説明して集めようとしたが容易に集まらず、一時は中止というところまでいってしまった。

しかし、必死の努力が実を結び明治四〇年八月第一回の払い込みをすることができ、ようやく創立にこぎつけた。当分の割当株数は次のようであった。一株一円で久保七五株、大泉四八株、北殿二七株、南殿三七株、田畑五五株、神子集一九株、沢尻八株。(村税の等級によって割当) 資本金一五〇万円、社長は辻信次、伊那電車軌道株式会社と名付けられ、四一年九月工事に着手し、四二年には辰野―松島間が開通した。資金繰りに苦しくなかなか工事がはかどらなかったが、

県からの補助金（四五年から一〇か年三〇万二三五二円）を受け何とか四四年には木下まで、四五年一月には御園まで延長、大正一二年によりやく目的地の飯田まで開通した。

敷設当時の路線は、起点の辰野西町から松島の追分までで、ほぼ伊那街道の東側を通っていた。南箕輪の部分も、部分的には現在の路線より西へ寄ってカーブが多かった。

大正一三年、輸送力の向上とスピード化のために現在の路線に改められた。

当時の伊那電の様子を少し拾ってみよう。

○辰野―松島間の運賃が一二銭で高いと評判が悪く、利用者が少なく利益が上らなかった（明治四二年）

○客車は三二名定員の木製トロリー電車で、貨車は三ト積みであった。

○最大時速一三㎞ほどで力もなく、大黒川を渡る坂へ来ると動かなくなることもあり、時には乗客が押したといひ、辰野―伊那間を二時間三〇分かかったという。

○明治四五年前期決算では、収入三万七二四七円六八銭五厘、支出一万六二四四円三厘、利益一万一〇〇三円六八銭三厘で、かなり高い利益を上げている。

○最初のころの南箕輪地区の駅は次のようであった。

北からくば、しおのい、きたとの、みなみとの、たばた、みこしばで各部落に一駅ずつあったわけで、そのうち、停車場は南殿だけで、他は停留場であった。

○大正八年、辰野―松島間運賃二六銭（当時米一升二〇銭）大正九年には辰野―伊那間三七銭を五〇銭に値上げした。

○現在残っている北殿駅・田畑駅の開業は大正一二年一月一日であった。ともあれ、念願の電車が通り伊那谷の住民は大喜びであった。

2 伊那電と運輸

伊那電の大正五年の一日の貨物輸送量が一七〇トに過ぎず運輸能力は極めて低いものであった。そこで、大正一三年軌道の改良とともに、ボギー車や電気機関車の導入を図り輸送力向上を目指した。

また、伊那電の運輸では、辰野駅の中央線との連絡が大きな問題であった。これは、輸送業者の馬夫組合との折合いがつかず解決に七年もかかったが、ようやく大正五年に解決し中央線と直結した。

もう一つ、伊那電の運輸を考えるうえで東海線への連絡という問題があった。これも昭和二年には三信鉄道（天竜線まで）とつながり、昭和十一年には豊橋まで通じて、交通運輸の力を大きく延ばした。

3 飯田線へ

昭和一八年、鉄道省では、伊那電、三信鉄道、鳳来寺鉄道、豊川鉄道を買収し、国営として飯田線という名称のもとに運営することにし



図6-54 開通当時の田畑駅



図6-55 昭和の初めころの伊那電北殿駅

表6-74 北殿駅貨物扱量の推移

年 度	発貨物	着貨物
昭和13年	1,439 t	329 t
" 24 "	3,753	1,457
" 30 "	8,685	6,676
" 35 "	13,020	11,488
" 41 "	11,045	9,289
" 45 "	14,709	14,052
" 50 "	24,820	22,630
" 57 "	20,075	11,680

「村勢調査」より

表6-75 伊勢電・南殿・北殿駅乗降客数および収入額

年 度	乗 客	降 客	収 入
南 殿 駅			
1919(大 8)	11,996	...	2,234
20(9)	20,486	...	2,380
21(10)	26,956	...	2,598
22(11)	32,602	...	3,255
23(12)	42,934	32,782	8,776
北 殿 駅			
24(13)	69,011	68,719	8,282
25(14)	54,925	52,701	13,687
26(15)	62,739	61,974	13,451
27(16)	66,294	67,093	10,810
28(17)	80,988	88,499	10,466
29(18)	65,293	67,362	10,721
30(19)	65,377	64,663	10,181
31(20)	53,523	54,676	8,252
32(21)	42,246	40,981	6,675
33(22)	42,665	41,316	6,639
34(23)	42,234	40,699	6,439
35(24)	42,683	41,506	6,537
36(25)	44,817	43,716	7,024
55(30)			304,775
65(40)			327,520
70(45)			218,197
75(50)			175,200
82(57)			144,175

『歴史資料』北殿駅資料より

た。

飯田線が果たした役割は大きなもので、伊勢谷交通の足として、また物資供給の動脈として果たしてきた力は限りないものであった。いまここに当村内駅による資料でそれを振り返ってみよう。

表6-75は南殿駅および北殿駅の乗客数と収入額等を示したものであるが、大正八年から一二年までは南殿駅が南貨物の主要駅で年間一万二〇〇〇〜四万三〇〇〇人の乗客数で一日平均三三人から一七人と増加し、大正一二年から北殿駅が開業してからは北殿駅の資料となっているが、戦前における最高は昭和三年であってその乗降客数合わせ一六万九〇〇〇人余で、平均一日の乗降客数は四六四人余となっている。戦後は昭和四〇年で年間三二万七五二〇人、一日平均九七九人余となっていて、交通の重要な役割を果たしていた。

しかし、四〇年代の自動車交通の発達に伴って乗降客数はしだいに減少し現在は最盛時の四〇％近くに減少した。

北殿駅の貨物扱量は昭和一三年の発着合わせて一七六七tから、昭和五〇年の四万七四五〇tと二七倍強に増加して、貨物輸送の重要な部分を占めていた。しかし、これも、経済の発展による当地方の貨物移動量の増加ほどには伸びず、貨物自動車の発達によりその取扱量が減少に転じ、一日七〇t程度扱っていた北殿駅が五九年二月をもって貨物の取扱いを停止した。

こうして、一日一〇〇人余の客を扱った田畑駅は既に昭和四五年には完全無人化し、国鉄経営合理化の線に沿って北殿駅も完全無人化の方向に進んでいる。これは時代の流れといえようが、地域発展のためには悲しいことである。

四 自動車交通の発達

1 バス

自動車のなかで最初にとり入れられたものは、乗合自動車である。明治四一年飯田町の馬車会社である一貫社の警津光之助が、資本金一



図6-54 伊那自動車創立当時の乗合バス（伊那バス資料より）

○万円で南信自動車株式会社を創立し、同四年二月、一六人乗りのフランス製自動車を三台購入して飯田―伊那間四九kmの営業を始めたのが県下のバス営業の始まりであった。なかなかのぎざいりで、大正二年にはイギリス製の車を五台購入している。

現在の伊那バス株式会社の前身である伊那自動車株式会社が設立されたのが大正六年ごろであり、同八年一〇月伊那―高遠間の自動車営業を開始した。車は四両で乗合が三台、貸切が一台あり、一台の定員は六名であった。その後大正九年には乗合、貸切とも一台ずつ増し、同一三年には乗合六両、貸切三両となり、同一五年には乗合一〇両と発展した。自動車も大型になり、昭和四年には一六人乗りの乗合自動車が一両走っている。

伊那―辰野間は、伊那乗合自動車株式会社という会社が営業権を得て昭和初年に営業をしたらしいが、実態はよくわからない。大正一五年に中箕輪村に伊那乗合自動車商會というのがあったのは確かである。これより先、明治四四年一二月の信濃毎日新聞の記事によると、「南信自動車株式会社は、二台の車にて飯田―辰野間を毎日三往復をなす予定なり」とあり、実際にどの程度走ったか定かでないが走っていたことは確かである。古老の話によると、昭和の初め、確かに乗合自動車があり、手を上

げれば止まって乗客させてくれたし、白い旗を道路わきに立てておく。と伊那行ききの自動車が止まって乗せてくれ、赤い旗を立てておくと箕輪行ききの乗合自動車が止まって乗せてくれたという。ちなみに、当時県下にどのくらい乗合自動車があったかというと、大正一五年に県下で一八九台、同年の自動車運転手試験受験者一八四三人中、合格者三五〇人であった。（『県史資料』）

明治末から大正、昭和にかけては、鉄道・乗合自動車時代と言える。当時走っていた乗合馬車はそれに押され、やがて姿を消していったわけである。大正一二年に伊那自動車株式会社が、乗合馬車所有の中村普松より馬車および営業権、山際たきより伊那―高遠間の同権利を買収するなどは、その姿をよくあらわしている。

乗合自動車の隆盛に目をつけ、昭和初年盛んに営業許可願が出されている。

このように乗合自動車に対する関心は高かったものの、現在のバスのように運行時間が守られなかったようであり、道路状態もよくなかったので問題点も多かった。

やがて、昭和恐慌によって乗客数が減少して経営も苦しくなり、また戦時体制下にタイヤの不足、木炭車による運行（昭和一六年伊那バスは一七両の木炭車運行）などで、県警は保安上、バス会社の合併を勧めた。赤穂―伊那間を走っていた昭和自動車株式会社、天竜自動車株式会社の伊那自動車株式会社への合併（昭和一四年）はそれを示している。また、当時伊那電気鉄道と並行してバスは運行しているものがあった。

さて、当村関係地区のバスの運行は次のようである。

昭和一五年一二月、伊那―辰野間（二九km）の伊那乗合の営業権を伊那自動車引き継ぐ。

昭和一六年四月、伊那本線長野駅前―松島―伊那―赤穂駅前―上片瀬間の免許を伊那自動車株式会社が受ける。

昭和二四年二月、吹上線、北殿―吹上間路線免許を受け、伊那―北殿―吹上間の運転開始。

昭和二五年一月、手良線、北殿―宮前間の免許を受け、伊那―北殿―手良間の運行開始。(四四年二月、路線変更で廃止)

昭和二六年三月、みず急行(長野―松本―伊那―飯田)運行開始、利用者減少により昭和五〇年三月廃止。

昭和四一年四月、塩ノ井―南木下間国道バイパス路線運行開始。

昭和四六年三月、辰野―飯島間ワンマンカーになる。同八月吹上線もワンマンカーになる。

昭和五三年三月、辰野―駒ヶ根間乗り替えなしの直通運行となる。

昭和の初め、いくつかの乗合自動車会社が入り乱れて走っていたのが、昭和一六年伊那自動車株式会社が上伊那一円の営業権を引き受けるようになった。しかし、昭和二三年一月より、飯田線と中央線の短絡というものを地域住民の利便のため伊那高速間およびそれ以遠の茅野と長谷村へ国鉄バスが運行されている。

運行回数をみると、伊那―辰野線は昭和二五年六回、四一年三五回ぐらい、五〇年三二回、六〇年三一回、吹上線は昭和二五年三回、四一年一五回ぐらい、五〇年一四回、六〇年六回である。

昭和の初め鉄道と競争していたバスは、戦後、道路さえあればどこへでも入って行く便利さと、燃費の制安さによって急速にのびたが、やがて自家用車に追われるようになって現在に至っている。しかし、国道一五三号線を走る辰野―伊那間のバスは現在でも利用者が多く、地元重要な足となっている。

自家用車に追われたバスは、観光事業に目を向け観光バスを各地に走らせ、また、高速自動車道の開通に応じて特急伊那―名古屋間(昭

表6-75 南信越における自動車
の増加

	貨物自動車	乗用自動車
大正15	1	0
昭和3	2	0
13	0	0
24	1	0
29	11	3
48	582	667
50	715	1,173
55	1,050	1,283
60	1,114	1,404

和五一年)、さらに特急伊那―新宿間(昭和五九年)の高速バスを運行させ、大都市圏への時間短縮により、大勢の客を乗せて走っている。この長距離高速バスの運行が鉄道を圧迫しているのが現状である。

2 トラックによる貨物輸送

乗用車よりトラックの方が遅れて入ってきた。大正一五年に筑摩郡の小野光司が松本飯田間でトラック営業を始めたのが、伊那谷のトラック便の初めらしい。

明治三九年に中央線が全通すると、伊那谷の貨物輸送は運送馬車を中心となった。大量の荷が鉄道で輸送されてくるにしたがって、駅付近は運送馬車や業者でにぎわった。大正一〇年には上伊那に運送馬車が一〇五〇台あったといわれる。

しかし、トラックの出現によってやがて運送馬車は貨物自動車に変わっていく。昭和一六年に伊那市に「伊那貨物自動車株式会社」が生まれ、営業を始めた。この時期は戦時統制化にあり、戦時陸運非常体制がしかれ、当時高速・辰野・伊那・宮田・赤穂・飯田にあった六社が統合されて「上伊那貨物自動車株式会社」になった。

昭和二〇年終戦により統制が解かれたが、車の老朽化、燃料不足などで運休が多かった。しかし、同二五年の朝鮮動乱をきっかけに産業界が活発となり、運輸事情が増大し、トラック輸送が活発化してきた。

昭和三〇年代に入ると燃料も安く手に入り、産業界はますます活発

表5-77 自動車保有台数(南筑輪)

	貨物車			乗合用		乗用		特殊用途用			小型 二輪車	軽自動車				合計
	普通	小型	被けん引	普通	小型	普通	小型	普通及 小型	三輪車	特殊 車		乗用	貨物	三輪車	二輪車	小型
40年	6	76	1	0	0	32	7	1	2	3	11	62	23	31	892	1,147
41.3	7	119	1	0	1	56	8	1	6	3	19	116	30	25	974	1,366
42.3	5	203	1	0	1	99	10	1	7	3	24	173	28	25	1,012	1,602
43.3	21	302	1	0	1	140	8	1	8	3	35	186	22	25	1,070	1,829
44.3	31	415	1	0	1	248	9	4	10	4	67	205	13	25	1,160	2,193
45.3	31	498	1	2	0	322	9	0	11	5	121	209	7	23	1,118	2,357
46.3	33	563	1	3	1	616	12	2	12	11	179	226	0	18	1,126	2,803
47.3	31	550	1	4	1	676	14	1	13	13	230	259	0	33	1,181	3,007
48.3	36	566	2	5	3	871	14	1	14	15	260	305	0	35	1,134	3,261
50.3	37	600	2	5	3	900	15	1	15	16	270	310	0	36	1,200	3,410
55.3	40	660	2	5	3	980	16	0	10	17	300	350	0	36	1,300	3,725
60.3	44	700	2	6	4	1080	17	0	17	18	320	370	0	37	1,400	4,015

(役場資料より作成)

化して、トラック業界もそれにつれて盛んとなり、トラックも大型化し、トレーラー車も使われるようになった。こうして合併していた会社も再び分散しさらに新しく進出してきた会社も加わり、路線、客の奪い合い競争も激しくなってきた。

個人の荷運びは昭和三〇年ごろまでは、荷車、リヤカー、牛馬車等であったが、これも軽トラックが普及し、トラックによる輸送が一般化した。

現在近辺にある貨物輸送業者は、日本通運、近鉄トラック、信州名鉄など数多く、それに加えて近年、戸口から戸口までをうたい文句に宅急便が盛んになり、トラック業者を圧迫してきている。今や鉄道輸送に完全にとって替わって貨物の輸送はトラック一色になる勢いである。

3 自動車類の著しい増加

自動車は昭和四〇年代に飛躍的に普及するに至るが、本村における四〇年以後の自動車保有数の推移は表6-77のようである。

乗用車についてみると、昭和四〇年四三台(普通・小型・軽乗用合計)であったものが四五年には一〇倍の四四三台、六〇年には一四〇四台と四〇年の約三三倍に達している。すさまじいモータリゼーションと言わざるを得ない。村内にもいたるところに自動車販売店が見られるようになっていく。

このような自動車の増加による交通量の増加は、必然的に交通事故の増加となり、死傷者数が増し交通戦争といわれるほどの大きな社会問題となり、北殿区が老人交通安全モデル地区に県より指定される等、交通安全対策が重要な問題となっている。

三 天竜川通船・渡し舟・橋

(一) 天竜川通船

天竜川通船については、文政年間(一八一八—一八三〇)種子梨の孫市らの努力によって始められたことはすでに見て来たが、明治以降どうなっていたであろうか。

明治四年の伊那県の調べでは、上下伊那に五〇艘の船があったといわれている。これは県の時代の通船一〇〇艘の計画よりかなり少ないが、何祖かの通船業者によって運航されたように考えられる。また、天竜川通船は地形・水量からみて下流の方が盛んであったことは当然で上流は少なかったと考えられる。明治初年の上流の通船は上は坂下（現伊那市入世）から下は下伊那郡平岡村の満島までであったが、明治四年伊那県は伊那より上流での通船を許可し、翌五年岡谷村尾沢辰之助が自費で渡瀬事業を行なっており、尾沢辰之助はこの五年岡谷から静岡県掛塚港に至る舟運業を始めている。

坂ノ井大東文書に年月が記されていないが明らかに明治初期のものと考えられる次のような願書がある。

天竜川通船開鑿願

上伊那郡南輪村 高木 誠三

倉田 三郎

原 八十吉

清水 十郎

清水 一郎

右八通回当国諏訪郡南輪村より遠州掛塚港迄通船開鑿致シ度ク、上下伊那郡ト諏訪郡ト有志者ヲシテ起業願イ立テノ所、已ニ本県ヨリ静岡縣（現静岡県）へ御願會ノ未定地御立會イノ御検査相成リ夫々有志等へ書面ヲ以テ願イ出ス可ク御検査相成リ候ニ付キ、則チ有志共協議中御出相成リ候ニ付キ先ズ以テ高木誠三ヲシテ総代トナシ差シ出シ置キ、曾々御検査官へ夫々申シ立テ置キ同御出官川瀬清直殿御帰原ノ際自費出邊及ビ諸規則方法等相伺ウ可キ運ビニコレ有リ候所、既ニ御帰原相成リ候様承知仕リ、右ハ当近傍ニ酒酒店等設置セザレバ都合ニ付キ位置決定ノ上願イ上テ可ク候得共、自費開鑿及ビ諸規則等ノ如キハ天竜川沿岸三郡ノ有志相会シ協議致ス可ク候ワデハ完結セザル

義ト存シ奉リ候。且ツ本部ノ義ハ中央ニ位置ヲ占メ居リ然ル可ク御執リ斗ワイ集會相成リ結局相違ケ候様願イ上テ候也

右 原 八十吉

高木 誠三

清水 十郎

倉田 三郎

清水 一郎

（坂ノ井大東文書）

この願書の結果がどうなったか資料がなく不明であるが、この願書の中に上下伊那・諏訪郡の有志が起業願イ立てをしたとあり、前記の岡谷村尾沢辰之助らと関係があったものと考えられ、当時の舟運への関心の高さを示しているように考えられる。

明治六年、筑摩県では天竜川通船運賃定めを布達しているが、それによると岡谷から掛塚港まで五里三〇町を三日がかりで運行し、下り荷の運賃一駄九〇銭四厘、上り荷は一四五八銭四厘であった。当時の船は長さ七間四尺八間三尺、幅四尺四寸五寸で、積載量は三〇〇〜四〇〇貫であった。

明治一五年には南向村に通船を行なう会社が生まれたようで、坂下から船を下ろして上伊那地方の諸産物を運んだといわれ、その時、清水十郎もこれに参画したものと考えられる。村人の営業人調べによると明治一六年には小回船一艘（三間七尺三厘）南蔵清水平一郎、明治二六年、小回船新規原文五郎というのが見え、当村においても舟運に着眼していた人が何人も出ている。

明治三〇年代に入ると、田畑の加藤敬亮らは、南向村の下平の通船や人夫を雇い入れて、月に一二回、一・三・六・八の日に坂下と上郷村別府間を、米・石や客などを乗せて下り、帰り舟に塩・茶などの運

送を行っている。また、明治三五年には福島の松崎竜之助が天竜川運輸株式会社を設立して、坂下一時又間の定期通船を行い、同三六年には坂野一時又間の通船にまでひろげた。当時の時間運賃表によると、当村に關係した船着場は野底の尺立で、辰野の朝日橋から運賃一六銭とある。山形市史現代篇に、いずれも数年で廃棄している。通船が盛んであったのは明治三〇年代までで、やがて陸運におきかえられていったのである。

(二) 渡し舟

現在のように治水が行なわれなかった昔は、天竜川の水も季節によって変わり、渇水期は渡り易く、春から秋の出水期にはその渡河も難儀であった。

江戸時代、田畑に私設の渡しがあったという話は伝わっているが確かなことはわからない。いずれにせよ、当村から野底、福島を経て手良・高遠方面へ、福島から本村へくるには天竜川を渡らなければならぬ。橋を架けることは大変な費用と労力のいることであり、しかも永久橋とはいかない往時のこと、渡し舟があったことは確かであろうが、はっきりしたことはわからない。

記録を少し拾ってみよう。

『長野県町村誌』に、天竜川、幅広き所五〇間余、水最も深き所六尺余、浅き所二尺に下らず。急流にして水波甚だ清し。舟渡ありといえども運送便利ならず。

役場文書の天竜川調（明治二〇年）激流にして平常は河身を單歩渡るを得るも、洪水時は渡し舟もかなわず橋梁、渡津は小城中（本村北殿地区より田畑地区）にこれ無し。

明治末ころの話、北殿の渡し舟の権利は当時まで問屋が持っており、堀越が実際の運営をしていた。

記録の上からはきちんとしないが、北殿と田畑に明治年代にあったことは確かである。（『北殿の渡し舟については上巻第五章参照』）田畑の古老の話によると、明治末、両岸から川を越えて太い針金が張ってあり、それを伝って舟で渡してくれたという。七、八人乗りの舟で、土手の小屋に居て他所から来た人が、「オーイ」と声をかけると舟を出したということである。

この渡し舟は大正時代はもちろん、昭和の始めまで続けられたが、永久橋が架かるようになると必要がなくなり、姿を消した。

(三) 橋

明治十一年の『長野県町村誌』に「天竜川の橋二か所。北殿橋長さ三三間、幅六尺、土橋。神子架橋長さ三五間、幅六尺、土橋」とある。明治十九年の「橋梁架設補助願」に「前略 北殿耕地内天竜川へ架設する橋梁の儀は、去る明治一三年度に於ては官の御目論見でできましたが、その後の大洪水で全部流出しましたので、古木を集めて有志で仮架設して一時の通行の便を図ってきました。しかし、古朽木の故にその後大破し、危険になったので取りこわしてしまいました。この橋は伊那村大橋と三日町大橋の中央に位置して重要であるので、御目論見下され補助費をお願いします」とあり。また、明治四三年に次のような願い書が出された。

橋梁架設願

北殿橋が流失したままになっています。渡船があるといえども、船夫の住家遠く往々呼応しない。消防隊後地区の福島に火事があっても行けないし、郵便物も困っています。関係部落有志の出資を以て板土橋を作って無料で通行させたいので御許可願いたい。

明治四三年 月 日

北殿總代 倉田源治兵衛

黒沢 謙雄

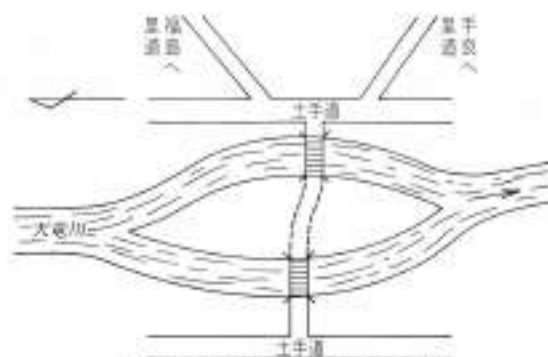


図5-57 明治43年橋梁架設時の図面

福島総代(略)
県知事大山綱昌殿

(つなや文書)

この願いは聞き届けられて図のような橋ができた。

以上見てきたように、古来橋による天竜川渡河の苦労は大変なものであった。治水がうまくいっていない昔はせつかく架けてもすぐに洪水で流されてしまうので、北殿橋はその後も永久橋になるまで何回も流された。

橋が板橋であったが、土橋が多かった。土橋というのは川原に太い丸太を打ち込み、その上に丸太を並べ、小枝などをおいてその上に土砂をのせて踏み固めたものである。板橋は、土を盛る代りに板を打ちつけたものである。その外に、時には丸太を二本組み合わせて結んだだけの丸太橋もあった。

洪水のたびに流失や破損をするので修理や架橋が思うにまかせなかった。しかも、地元負担がほとんどで官費を支給されることは少なく、寄附金や区費で賄われていた。前記の明治四年の北殿橋の工事では原材料費一四〇円をかけ、寄附金四九七円三五銭(當時酒一升四二銭)を集めてやっている。また、昭和三年の役場事務報告を見ると、「天竜橋地元架け替えに就きては、村より一五〇円の補助をなし完全なる橋梁とし交通を安全ならしめたり」とある。



図5-58 永久橋となった北殿橋(昭和9年)

当村地域で天竜川に橋が架かっていたのは北殿と田畑(神子橋)の二か所。明治から永久橋になるまで何回か架けられ、何回か流され、地元民と水との関いの連続であった。橋の位置も護岸と川床の状態を見てかけられたので、大体的位置は現在に近いが、架け替えのたびに上下に移動した。

永久橋になったのが、天竜橋(北殿)は昭和九年、明神橋(田畑)は昭和三十八年のことである。

天竜橋は延長九三・五m、幅四mの一等橋として、明神橋は延長一一〇m、幅三・七m、工費一八六五万円の一等橋として架設されて、現在に至っている。

橋の名前については、北殿橋は役場文書によれば、昭和三年には天竜橋と書いてあり、昭和七年には北殿橋(橋長八二m幅二・三m工費一万円で災害復旧工事)とあるので、両方の呼び方で呼んでいたと思われる。しかし、永久橋になってからは天竜橋と呼ばれるようになった。明神橋の由来は定かでない。

第八節 生活の近代化

一 消防・駐在所

(一) 消防

1 明治以前の村の消防

幕藩時代において消防組織が進んでいたのは、城下町および宿場町であり、その中心になったのは武家火消しと町火消であった。村部においては、村内の壮丁の責任であって名主がこれを統轄し、火災を未然に防止していた。村内三戸あるいは五戸ぐらいまでを一組とし、順番をきめて一〇月から翌年三月ころまで夜警をしたという。消防器具としては特別の設備もなかったが、村（今の部）名を染抜いた纏（よ）一旗を公費で作し、平素は名主の役宅に備え置き、火災の際には名主の指図でこれを持ち出した。器具といっても水桶・水龍・鳶（たづな）口ぐらいで、各人が随意の設備として携帯しておいた。警鐘の備えもなかった。寺の梵鐘を乱打して火災を知らせ、壮丁の出動を求め人命財産の救護にあたったといわれている。その応援区域も隣村はもちろん壮丁の交際ある村落へはかならず出動応援したものである。

2 各村消防組の誕生

明治七年十一月、筑摩県は全県的に消防の組織の改革・充実を目ざして「火災之節消防規則」の原案を示した布達を出して指導し、消防器具の定数、指揮命令系統・応援の区域など、形の上では整備されてきた。時あたかもこの翌年、明治八年二月久保村・大泉村・北殿村・南殿村・田畑村及び神子柴村の六か村が合併して新しい南筑輪村の誕生をみた。そして消防上の任務もこの旧六か村を一体とみなして活動するようになった。

北殿においては明治八年十一月二十六日付けをもつて筑摩県へ次のような消防組設置の出願をしている。これが本村における消防公許団体の最初といえよう。

御願書

第一七大区九小區伊那郡南筑輪村北殿新地坊長頼代有賀又七郎・清水吉願イ上ダ奉リ候。私共村地ニ於テ火災消防ノ為、壮快豪ヲ聚合其ノ名称ヲ消防方ト附シ非常火災燃起等コレ有ル節ハ第一防無ノ導防方致サセ候間此ノ段御聞キ済マシ成シ下サレ度ク謹ミテ懇願奉リ候。以上

右 有賀又七郎

清水 吉郎

明治八年十一月二十六日

筑摩県参事高木惟矩殿

右ノ通り願イ出候間取次ギ差シ上ダ候以上

右副戸長

倉田 三郎

有賀 光彦

書面ノ趣趣キ置キ候条其ノ方法悉細書面ヲ以テ申シ出ス可キ事

明治八年十一月二十日

筑摩県参事 高木 惟矩

消防方法器具上申

一、壮快者四八人ヲ消防方トス 但シ満十七歳ヨリ満四十歳ノ者

一、馬籠 一本 一、北殿消防方ト記シタ旗 一本

一、北殿消防方ト記シタ高張一本 一、鳶口 一五挺

一、竹梯子 二挺 一、水桶 小大 一〇三

一、龍吐水 參挺

右ノ通り消防方法申シ上ダ仕リ候也

第十七大区九小區伊那郡北殿新地坊長頼代

筑摩県参事 高本慎雄殿

明治一〇年ころになって、大泉・田畑・神子榮・南殿各耕地では若者組を廃して非常組又は消防組等の名称と呼び、消防組を設置するようになった。それぞれ規約を作り活動を始めたが、南殿耕地の消防組規約を左に掲げる。

南殿耕地消防組規約

明治十年南殿耕地内有志ノ者及ビ壯丁ノ者相謀リ非常救社ヲ設立ス

目的

今般耕地内壯年ノ者ヲ團結シ非常救社ト稱シテ火災等ノ際ハ自他ヲ問ワズ応援ノ一助トナシ震田暴風ノ際ニハ水防ニ従事シ暴虫発生ノ時ニ於テハ駆除等ニ従事ス都テ勢力ヲ要スル非常ノ場合ニ出勤ス

南殿非常救社消防規則

第一条 消防入社ハ年節一五歳ヨリ三〇歳迄相勉ムベキ事

第二条 非常火災アル時ハ勿論他村ト雖モ全員火元ヘ馳セツケ急度救助致スベキ事

第三条 消防諸器械等ハ一層注意ヲ加ヘ毀損セザル様致スベキ事

第四条 社員中ハ勿論派員出先ト雖モ実意ヲ旨トシテ喧嘩口論ノ舉動抑ツテ嚴禁ノ事

第五条 社員投票ヲ以テ担当人ヲ推選シテ之ニ一切ノ事務ヲ担任セシムベキ事 但シ担当員三名ニシテ年々初会投票ヲ以テ交替ノ事

第六条 従来若連ノ諸器械等ハ一切之ヲ担当人ニ託シテ所藏致スベキ事 社中諸人費ノ割合ノ義ハ一戸ニシテ二名社員ノモノアリ或ハ三名ノモノアリ且ツ二名人社ノモノハ七分五厘ヲ配付シ三名ノモノハ

有賀又七郎 ⑧

清水 齊 ⑨

右村副戸長 倉田 三郎 ⑩

有賀 光彦 ⑪

六分六厘六毛ヲ賦課スベキ事

第八条 器械損失ノ義ハ該器械ノ者ニア定価二分ヲ償イ其ノ八分ヲ社中ニテ出金致シ器械被損致スベカラザル事

以上

消防器械

- | | |
|-------|-----|
| 一 消防口 | 一五個 |
| 一 梯杓格 | 一五本 |
| 一 提灯 | 二五個 |

(役場文書)

明治一七年一月堀ノ井耕地も消防組を設置、明治二三年一二月久保耕地にあつても消防組を設置し、同盟会と称するようになった。各耕地の消防組織は大同小異であつて、役員選挙も互選でそれぞれの役に就任活動をしたのである。

3 消防組織の発展

明治二二年町村制施行を契機として郡下各町村の消防組も着々と整備されていった。明治二三年からは消防組は警察署の指揮統制下に入つた。そして明治二七年二月一〇日勅令第一五号により「消防組規則」が公布され、市町村を単位とする消防組の基本的な制度が確立された。

消防組規則 第一条

府県知事水火災警戒防禦ノ為必要ノ地ニ消防組ヲ設置スルトキハ、此ノ規則ニ定ムル所ノ条規ニ依ルベシ

(役場文書)

長野県においては、この規則を受けて「消防組規則施行細則」五二か条を定め、消防器具の標準を示して既設の消防組の飛躍発展をはかつた。

第8節 生活の近代化

本村においては、明治二八年四月前記勸令に基づき、南箕輪村各耕地消防組を一括連合して南箕輪村消防組とし、各耕地消防組（現在の分団）を部と改称、八部となした。その時の指令は次のようである。

南箕輪村消防組定員并ビニ各部定員別紙ノ通り定ノラレ候条御送致ニ及ビ候也

明治二八年五月六日

伊形警察署長

警部 紋島 新助四

南箕輪村役場 御中

南箕輪消防組

其ノ組消防手定員四一八名ト相定ム

明治二八年四月一九日

長野県 四

南箕輪消防組

其ノ組各部消防手定員左ノ通り相定ム

明治二八年四月十九日

長野県 四

久保部	五〇名	南殿部	四三名
塩ノ井部	四〇名	田畑部	七五名
大泉部	七五名	神子柴部	四五名
北殿部	六〇名	沢尻部	三〇名

（役場文書）

当時の消防経費は各耕地がすべてを負担し、最有力の機械器具としては腕用ポンプが設備され、住民の消防に対する期待も大きく、また各戸にはバケツなども用意された。組員の団結も極めて固く、消防力も相当に強いものになっていった。村消防組各掛も人数が示され、それぞれに活躍した。

明治三一年における各掛

総掛 一五人

警部掛 一一九人



図5-59 明治時代の腕用消防ポンプ

部	応援区域
久保部	福与・三日町・松島・木下・福島
塩ノ井部	三日町・福与・福島・野底・木下・松島・大泉新田
大泉部	羽成・中曽根・大泉新田・大萱・吹上・木下・松島
北殿部	福与・三日町・福島・野底・上牧・御園・山寺・坂下・木下・松島・大泉新田・大萱
南殿部	上牧・野底・福島・御園・山寺・坂下・荒井・古町・木下・松島・大萱・大泉新田
田畑部	上牧・野底・福島・御園・山寺・坂下・荒井・古町・大萱・大泉新田・木下
神子柴部	上牧・野底・福島・御園・山寺・坂下・荒井・古町・大萱・大泉新田・木下

萱

萱

給水掛 七一人
火先掛 一七四人
信号掛 一六人

なお当時（明治二九年ころ）における各部の火災時における応援区域も次のようにこまかく指示されていた。

沢尻部

明間・山寺・坂下・荒井・西町・古町・小沢・平沢・横山・延島・大宮・与地・中条・羽広・上戸

4 大正期における消防組

大正期においては、火災・水災・地震等が頻発しており、各地区消防組の活動もめざましかった。大正五年五月一〇日の中箕輪村（現箕輪町）松島の焼失戸数一〇七戸の大火・大正八年伊那町（現伊那市）の一四四戸の大火等、隣接町村の災害に応援出動し、消火に活躍している。当時の消防組織は組頭——部長——小頭——消防手となっており、幹部の社会的地位をみると、公職経験者が多く、村においても名誉職的な存在であった。大正末期になって、長野県は消防組の志気奨励に金馬車使用認許制度をとり入れたり、功労章等の表彰制度を設けたり、あるいは消防講演会・活動写真等による防火思想の普及につとめた。

5 警防団の設置

昭和六年の満州事変に続いて昭和一二年から始まった日中戦争も、いよいよ長期化の様相を呈し、国民挙げての戦時体制の下、民間の防



図6-60 まとい（組）各組の標（しるし）としたもの下についた替状のものが掲げ



図6-61 初期の動力消防ポンプ

空自治団体であった防護団と合併して、昭和一四年四月一日の勅令により防空水消防を任務とする「南箕輪村警防団」に改組、各部はそれぞれ警防分団に変わった。以後団長・副団長等の制度になり、民間消防組織が警防団として戦時的に再編され、警察の指揮下に入って活躍、昭和一六年一二月八日太平洋戦争開戦から昭和二〇年八月一五日の終戦を迎えるまで国や県の強い統制の下にあった。

6 自治体消防団の発足

太平洋戦争敗戦により民主的國家を目ざす日本に、各種制度の改革が行なわれた。戦時中警察権の範囲内にあった消防制度も警察と分離され、昭和二三年八月完成した国土の復興と国民の生命財産を地震や風水害等から守るために、今までの警防団を解消し、新たに市町村消防団が組織された。

本村においても昭和二二年七月「消防団条例制定の件」が議会に提出、即日議決されて名実ともに新しい体制による自治消防へと発足したのである。

つづいて昭和二四年四月「南箕輪村消防関係条例制定の件」が議会上に議決され、即日議決になりいっそうの充実をみたのである。当時における団員の定員は三八〇名で、内訳は団長一人・副団長一人・分団長八人・副分団長八人・班長三十七人・団員三二五人であった。さらに消



図6-62 最近における自動車ポンプ操法の訓練

防委員会が設置され、村会議員より四名、学識経験者から四名の計八名がこれになり、消防団の運営に関する諮問機関の任にあたった。

このように久保・塩ノ井・北殿・南殿・田畑・神子榮・大泉・沢尻の八分団をもって組織化された本村消防団も、時代の推移にともない消防力の科学化・機械化・近代化・スピード化など近代消防へと飛躍的に発展をとげていった。特に旧来からの甌用ポンプから動力ポンプへさらに自動車ポンプへと近代化の一途をたどり、村民の消防力の充実に対する関心もいっそう高まり、村としても年々消防費の増額等により消防行政もますます発展を続けていった。昭和二二年本村消防団に自動車ポンプが初めて入り、これが北殿分団に配置され、近代的消防車として村民の注目の的となり、間もなく起こった飯田市の大火（昭和二年四月二〇日）に出動し、その威力は現実をもって村民に示されたものである。そして以後

各分団とも自動車ポンプの導入に力を入れ、可搬ポンプ自動車を含めて全分団に自動車ポンプが配備されるに至り、この機械力の近代化は全焼火災を年々減少へともっていった。

一方、消防の近代化が進むにつれて道路の整備・貯水池の適正配置、消火栓の整備、消防屯所の新設等々と進められた。

昭和四八年広域消防発足とともに本村も伊那消防組合に加入

表6-73 昭和53年現在の消防力

団長	副団長	本部長	本部長	ラッパ長	ラッパ長	ラッパ長	分団長	分団長	班長	部長	団員
1	1	1	1	1	1	1	9	9	24	1	180

区分 分団名	団員数	自動車 ポンプ	小型動力ポン プ(付積載車)	貯水槽	消火栓
第1分団	29	1		7	20
第2分団	20		1	5	25
第3分団	29	1		6	30
第4分団	29	1	1	17	33
第5分団	25		1	8	14
第6分団	29	1		8	33
第7分団	25	1	1	5	15
第8分団	20		1	5	7
第9分団	17		1	9	2
第10部	4			1	5
合 計	227	5	6	71	184

し、常備消防体制も伊那消防署の管轄下になり、ますます充実強化されてきている。

昭和五三年十一月十九日、自治体消防制度三〇周年記念式典が盛大に行なわれた。式典に先立ち、消防団員が村内を行進して回り、その整然たる陣容に村民一同頼もしさと力強さに拍手を送ったものだった。

昭和五三年現在の消防力は次表のとおりであった。

この三〇周年記念式典を機に、消防団運営に伴う機構改革の機運が高まり、昭和五三年消防委員会にこの件が諮問され、その答申をもとに翌五四年四月一日より新しい機構による消防団が発足した。団員の数もこれによって、昭和三三年三一人・三九年二二〇人が二〇〇名の五分団に統一された。

表6-80 昭和54年 村消防団組織表



分団名	部名	団員数	地域
第1分団	第1部 第2部	23 18	久保ノ井・中保込
第2分団	第1部 第2部	23 23	北南田
第3分団	第1部 第2部	23 23	田子
第4分団	第1部 第2部	18 15	沢南
第5分団	第1部 第2部	25 6	泉・北大大
計		197	(残3は団長・副団長・本部長)

このように、消防組織の拡充強化、施設設備の機械化ならびに近代化、消防技術の向上、村民の防火防災思想の普及徹底等がそれぞれあいまって近代消防の目覚ましい発展をみたのであるが、近時住宅の急増・人口の増加・工場の進出等により火災の態様も複雑多岐の方向をたどるものと考えられる現況である。さらに地震、水害等不慮の発生も絶えず念頭におかねばならない今日、消防団の置かれている使命は重かつ大であると言わねばならない。

表6-81 村内消防の状況

年次	団 数	分 団 数	団 員 数	消 防 職 員 数	可 搬 動 力 ポ ン プ	手 引 動 力 ポ ン プ	自 動 車 ポ ン プ	積 載 率	火災発生 件数		被 災 世 帯 数	焼 失 棟 数	焼損面積		損害見積額(千円)		
									一 般	林 野			一 般 (㎡)	林 野 (a)	総 額	一 般	林 野
昭和56年	1	5	200	—	5	—	4	5	5	—	3	7	845	—	35,646	35,646	—
56	1	5	200	—	5	—	4	5	5	1	3	8	241	900	18,335	11,335	7,000
57	1	5	200	—	5	—	4	5	4	—	2	5	249	—	14,707	14,707	—

しかも、かつての農村における若者のように常時家にいる者が年々少なくなり、団員の確保が困難になった。しかし団員は団員として教養訓練を絶えず積み、防火防災の防止に努力している。常備の消防署も機動力を発揮して村民の生命財産を守っている。村民一人一人これらにこたえるよう一致協力して火災を出さないよう心掛けるべきである。

昭和五五―五七年の村内消防の状況は表6-81のようである。

四 南箕輪村日赤奉仕団

婦人会の組織を借りて、昭和五五年一〇月、日赤奉仕団が本格的に行動を開始をした。

日赤奉仕団の活動としては非常災害時における救急活動、消防活動における炊き出し、おにぎり作り、規律訓練、日赤資金募集などで、同年六月には団服が全員に支給され、その団服貸与式が行われた。

四 駐在所

1 駐在所の誕生

日本の警察制度が、明治維新以後西諸国の制度を取り入れて、近代化への道を歩み出したのは明治八年三月の「行政警察規則」の制定によるものと言える。この規則第一条には、「行政警察ノ趣意タル人民ノ危害ヲ予防シ、安寧ヲ保全スルニアリ」と明記され、警察の定義づけがされている。（『長野県警察史』）

この規則の発布によって、中箕輪村に松島屯所が設置され（発足当時は民家を借り受けて庁舎に使用）、本村はその管轄下にはいることになった。つづいて明治九年四月松島屯所は筑摩県第四警察出張所に昇格、巡査の人数も増員され、わが南箕輪村は出張所直轄になった。

明治一〇年には、伊那村字坂下に飯田警察署伊那分署が開設されて



図6-63 日赤奉仕団慰問式記念（昭56）

また、同年一月一日には南箕輪消防団と日赤奉仕団の秋季合同演習が大芝グラウンドにおいて行なわれ、日赤奉仕団の出席者は班長以上でその人数は一一名の多人数で、全員団服に身を固め、バッジをつけ、手ぬぐいの鉢巻をして三角布を持つといううりりしい姿で訓練が行なわれた。炊き出し、おにぎり作りなども行なっている。

昭和五七年二月には、中込奉仕団の発会式が行なわれ、村奉仕団に入団した。

その管轄区域に指定されている。明治一九年一二月になって、分署が昇格して伊那警察署と呼ばれるようになり、つづいて明治二二年五月巡査受持規定により第三号受持区になった。

その後、幾たびかの移り変わりを経て、明治三八年五月南殿地区旧役場庁舎南隣の民家を借り受け庁舎にあてたが、同年村有建物に移転し、昭和一二年まで続いた。

昭和八年六月第九号南箕輪村受持区に変更、昭和一二年七月南殿五、〇一一番地の一（有賀光則所有）に新しい駐在所の建築に着手、一〇月二〇日落成、一月六日移転完了、駐在所業務を開始している。この建物は木造瓦葺き平屋で三八坪あり、戦中、戦後を通じて、約四七年間にわたり、現在の駐在所に移転新築されるまで同所において、村民の生命財産を守りつづけてきた。特に太平洋戦争下のいわゆる戦時体制下における駐在所の任務は幅広く、軍の統制力も強く、村内の治安維持等にたいへんな苦勞を重ねたようである。

また昭和二〇年八月一日の終戦以来、終戦処理・生活必需物資の不足・思想の混乱等……警察制度の改革とあいまって、広範囲にわたる村の平和維持に僅か一名の駐在所員の努力は察するにあまりあるものがあった。

2 新警察制度の発足

昭和二二年一月七日、法律第一九六号をもって新警察法が制定公布され、翌二三年より画期的な機構改革が行なわれて国家警察と自治体警察の二制度が誕生した。そして同年三月七日より「国家地方警察長野県上伊那地区警察署第六号南箕輪村巡査駐在所」と呼ばれるようになった。

昭和二七年四月一日は管轄区域の変更があり、上伊那地区警察署が伊那地区警察署となり、村駐在所は第一三号南箕輪村受持区に変更、

つづいて、同二九年七月一日より現行警察法が施行され、新たに県警伊那警察署が発足、村は第一五号受持区となった。

さらに昭和四四年四月一日受持区の再編成により、中野原・西原・南原を第一三三号西箕輪警察官駐在所に、沢尻を駅前派出所にそれぞれ移管した。同時に受持区の呼称を第七号所管とした。

昭和五五年三月二七日公安委員会規則一号により、南箕輪村警察官駐在所も二人制勤務となり、人口の増加・交通量の増加等に対応できるようにいっそうの充実をみた。同時に第一担当区を久保・中込・塩ノ井・北殿・南殿及び北原に、第二担当区を田畑・神子柴・沢尻・南原・大芝及び大泉とした。

このように駐在二人勤務により、庁舎の手狭と老朽化の面から新築の件が持ち上がり、昭和五六年九月南殿区山崎正所有の畑四八〇番地の二に移転新築を決定、着工、翌五七年三月二〇日落成、二三日に移転して執務を開始、今日に至っている。

駐在所に掲げられている長野県警察重点目標

- ・基本方針 安全と平穏な県民生活を守る警察活動の推進
- ・目 標 1 少年非行の防止

2 交通死亡事故の抑止

3 犯罪・窃盗犯の予防と検挙

4 暴力団犯罪の検挙

(駐在所文書)

3 犯罪を防止し平和な村に

(1) 交通安全指導

緑と豊かな自然に恵まれたわが村も、近時工場の進出等にとともに、人口の増加が極めて著しい。伊那市のベッドタウン化した現在、複雑な社会情勢・経済状況とからんで、いろいろな問題をはらんで来

ている。

その第一は交通事故の増加である。中央自動車道の開通・道路網の拡充・車輦の増加等いろいろな面から考えられるが、交通事故の防止は緊急な課題である。昭和三二年有志による「交徳会」が発足し、自主活動によってこれが防止につとめてきたが、同三四年ころ全戸加入による安全協会が、続いて同四九年南箕輪村交通安全協会が組織化され、警察の指導のもと、積極的な活動をして効果をあげている。その目的は次のようである。

- (1) 交通安全の研究、施設およびこの実践活動に関する各種の事業
 - (2) 交通安全指導者の指導養成
 - (3) 交通事故の原因調査とその防止の資料策定配布
 - (4) 一般への交通安全指導啓発
 - (5) 会員相互の連絡協調
 - (6) 表彰及び弔慰
 - (7) 婦人部活動の推進
 - (8) その他 必要と認める事項及び伊那交通安全協会が実施する事業
- 最近における交通事故の発生状況は次のようである。

表6-32 村内及び伊那署管内の交通事故発生件数

() 内伊那署管内

区分 年	発生 件数	死 者 人	傷 者 人
55	43 (389)	2 (8)	57 (474)
56	39 (438)	1 (9)	63 (551)
57	42 (378)	0 (6)	55 (471)
58	30 (327)	2 (4)	34 (407)
59	49 (330)	0 (5)	65 (419)

(伊那警察署資料による)

(2) 少年非行防止

少年非行の低年令化・集団化・万引の増加・シンナー等の乱用・飲酒喫煙の増加等がさかんに言われ、大きな社会問題になっている。さいわいにして現在本村においては顕著な事例は現れてはいないが、「防犯いな」の統計資料によると、昭和五八・五九年度は次のようになっている。

表8-53 少年非行の発生件数

年度	伊那署管内	内南箕輪村 (居住地)					
		凶悪犯	粗悪犯	窃盗	知能犯	風俗犯	その他
58年度	157人	0	0	7	2	1	0
59年度	155人	0	1	9	0	0	1

備考
発生比率
伊那署管内の合計に対する
南箕輪村の率
57年度 5.7%
58年度 6.4%
59年度 7.1%

本村は「青少年健全育成推進の村」を宣言し、駐在所、青少年健全育成協議会（九節社会教育参事）等協力して非行防止に努力している。

(3) 犯罪防止

駐在所二名の警察官は本署と緊密な連絡をとりあい、村民の生命財産の保護・交通事故の防止・犯罪の予防等に日夜献身的な活動を続けている。村民に親しまれる駐在所として重要な存在になっている。

交通安全協会・防犯協会・駐在所連名で、毎月定期的に発行している防犯ニュース「道しるべ」は、手書きでカットもあり、「わかりやすく有益」と村民に評判もよく親しまれている。

南箕輪村防犯協会会則も昭和五二年に整備制定され、防犯協会が犯罪の防止等へ積極的に取り組んでいる。各区には会長（村長）の委嘱を受けた防犯指導員が置かれ、区の自主防犯活動の中核として活動をしている。

○南箕輪村防犯協会々則（抜粋）

(1) 目的 本会は犯罪を予防し、犯罪のない社会をつくることを理想とし、村民の防犯思想を高揚し、もって明るい社会の実現を期し、積極的に活動することを目指す。

(2) 事業 本会の目的を達成するために次の事業を行なう。

- ① 防犯対策の調査研究
- ② 防犯宣伝
- ③ 防犯施設の強化拡充
- ④ 関係機関団体との連絡協調
- ⑤ 青少年の健全育成並びに非行防止
- ⑥ 優良防犯団体、防犯功労者の表彰
- ⑦ その他協会の目的達成のため必要と認める事項

（役場文書）

二 保健衛生

ハ 村の保健衛生

明治年間、衛生行政は国、県、郡、町村の基本路線がととのい、南箕輪村においても、県や郡長よりの指令が戸長を中心に村の衛生委員の活動によって確実に遂行されていった。明治二〇年の天然痘の流行は県下にも大量の死者を出したので、その防疫のための諸施策が講じられた。

明治四一年に設置された連合衛生組合は村行政の保健衛生を担当し、明治後期から大正、昭和にかけて、その任は重く、業績も顕著な

ものがあつた。

大正期には肺結核が多発し、国家的な社会問題となり、大正八年には現行の結核予防法が公布された。また、各種伝染病も依然として猛威をふるい、村民の衛生思想の向上は村行政の重要施策として村民の施政方針にも取りあげられた。

大正八年、南箕輪村長施政方針の一三に衛生思想の向上として「公衆衛生の向上を図り、伝染病を絶無ならしむるは、まさに村経済のみならず各人の幸福を増進するゆえんにして、進んでは、村民各目をして保健衛生に留意するに至らしめざるべからず、この目的を達するには、衛生組合の活動に待つこと多く、数年来不注意なる患者の突発ありしも、他に伝染せしめざりしは、衛生組合の尽力にして、ますます、同組合の発展を望むこと切なり」とある。

大正一五年村施政方針の七に保健衛生に關して、「衛生保健は民族の発展、人類の福利を増進する根幹であります。幸いに本村には数年間、伝染病患者を出さないが、進んで衛生保健に留意せられ、自己生命の長寿、子孫の繁榮、民族の発展を圖られんことを望みます」とある。

昭和初期における村民の衛生思想の向上や保健衛生諸施策の推進は連合衛生組合を中心に各区ごとに設けられた衛生組合によって行なわ

れた。昭和二年の事業報告によると

「同年の如く衛生小組合を賛助し、春秋二期清浄法施行せり。一般衛生思想向上のため、良成績にて未済者はきわめて少数になるに至れり」とある。

1 伝染病予防対策と治療

明治一三年、伝染病予防規則が公布され、六種の法定伝染病が定められた。明治一九年から二〇年にかけて、コレラや天然痘が全国に大流行し、さらに他の法定伝染病患者の数も多く、住民の生活をおびやかしていたわけであるが、明治一六年からの村内伝染病発生と種痘の実施状況を示したものが表6-84である。

明治一四年、郡医が公選制となり郡医選出区画についてみると、南箕輪は第3区画で六か村、二六八五戸であり、上伊那郡全体は七区画、七名の郡医がいたわけである。また、南箕輪村を實際に受け持ったのは、福島村の小平現であった。

明治一六年の記録によると、上伊那郡下の衛生委員は公選され、大きな権限をもっていたが、郡医と共に、伝染病の予防は最も重要な仕事であった。

表6-84 伝染病発生数および種痘接種状況

年次	腸チフス	赤痢	トラホーム	ジフテリア	種痘接種状況	備考
明治一六	四人	二人	一人	一人	春季 八五二 秋季 八六八 善感 六七 不善感 五三七 五七〇	未接種 三八八人
一九	五	一				「 一六八
二〇	二	一				「 一〇二
二二						二二年一二五年記録不明

(役場事務報告より作成)

ザルハ本村衛生ノ一欠点ト言ワザルヲ得ズ」と衛生委員が慨嘆している。

春秋の定期の種痘接種については、次のような通知が出ている。

本県訓令第七二号種痘法施行規則第一一条により大正六年度秋季種痘を本月二十四日、午前一〇時を期し、本村小学校に於いて施行被検者、別紙、人名録に受検するよう慎重御注意相成り度此の段御願ひ候也

大正六年十二月二日

南宮輪村役場

各区長連合衛生組合長殿

(役場文書)

明治二八年の予防接種法によると次のように三回の定期種痘が義務づけられていた。生後二か月一二月(第一期)、小学校入学以前六か月以内(第二期)、小学校卒業前六か月以内(第三期)。このような定期種痘のほか流行のおそれのあるときは臨時種痘を実施した。また、このように予防接種が徹底されても外国旅行から帰った人の中にときに発病するものがあつた。しかし、しだいに減少し、ついに発病の危険がなくなり、昭和五一年には世界天然痘終息宣言が出され、種痘接種は行なわれなくなった。

(3) 腸チフスの予防と治療

明治二一年、上伊那郡長より南宮輪村長あて、腸チフスについて次のような訓示が出されている。

腸チフス病の義について本年九月、本県第二号訓令及び第二三四号訓令相成り候所、該病たるや他に原因するものありといえども、多くは飲用水の不潔に類し候儀にて、山間僻地に至りては、水質の良否を問わず従来の習用により不潔なるをも顧みず、飲用に供するもの往々之有り。そもそも水は人生一日も欠くべからざるものにて、ひとり該病のみに限らず百種の病も、飲用水に關係するものなれば、よろしくこれを採用せざるべからず。

ついで、その部内において井水を用いず停滯汚濁の汚水を用いる村落に於てはよくその利害を懸念し、漸次井戸を穿たしめ、精良の水を用い候様尽力すべし。井水といえども分析せざればその良否は判明ならざる儀に候えども、他の汚水に比すれば、先ず善良なるものと言わざるを得ず。井戸を穿つについては、一時巨費を要するも、同心戮力するときは、あえて難事にあらざるべし。限間の小害を捨て、将来の大利につく意を速やかに奉行せしむべし。右訓示す。

明治二一年一〇月五日

上伊那郡長 金井清志

南宮輪村戸長高木三郎

(役場文書)

腸チフスの罹患者は明治初年からの記録に残り、死亡者も多く出た。そこで郡長の訓示となつて広く全部に井戸を穿ち井水を用いることの大利を説く結果となつた。

南宮輪村でも明治から大正初年にかけてはある周期をもつて発生し、大正一〇年の大量発生をピークに下火になったかに見えたが昭和九年に至つて再び発生した。

昭和四年の郡役所への事務報告によれば、「四月以来郡内各所に腸チフス患者の発生、恐慌をきたせしにより衛生組合を督促し、衛生ボスターを配布し、大いにその予防に努力せり」とあり、衛生組合を中心とした取り組みがわかる。また、昭和一五年には大泉に腸チフスが発生し、上諏訪警察署の通報により患者及び付近の消毒がなされた記録があり、以後一六年・一七年・一八年と連続して発生をみた。とくに、一七年には久保に四名の患者が出て、消毒、予防注射などで大変であった。

(4) 赤痢予防対策

明治三〇年二月県下に赤痢流行、県は郡長、郡書記、警部を検疫

官、検査委員に任命。九月一四日県は、赤痢まん延について告諭を出す。(一月一日より県内感染三二〇二名うち死亡五五八名「九月二一日調」)同月赤痢流行のため、県は町村にも伝染病予防委員を任命態勢を整えた。

この年の赤痢患者本県は全国第七位。

この年本村の赤痢患者は表6-84のとおり患者数三二、内死亡者五で本村もまた赤痢流行の渦中にあった。

明治三十八年赤痢流行の状況について役場の事務報告には次のように述べている。

明治三十八年八月二三日医師原参三ヨリ大泉二名ノ赤痢擬似症届出トナルヤ、翌二四日南殿ノ三名赤痢患者届出トナリ、マスマス大泉南殿ニ於テ蔓延症候ヲ極ムル兆候ニ付キ、各部衛生組合長ヲシテ予防注意ヲ厳重ナラシムルト同時ニ、大津澤ヲ施行セシメ、一方ニ急遽ヲ以テ村会ヲ開設、伝染病予防委員及ビ役場吏員、警務官吏ノ熱心ナル尽力ニ依リ漸クニシテ隔離病舎開舎ノ運びニ至リ、患者ヲ収容シタリ。之レガ事務員トシテ書記松沢勝守其ノ事務ヲ執リ、担当医トシテ原参三ヲ雇イ予防委員、村長、助役及ビ書記ハ交替ヲ以テ之レガ監督ヲナシ、患者ハハ係書記、選査、検査委員出張シ、交通遮断及ビ消毒等ニ従事セシム。連日ニシテ患者六名ヲ発出シ、ナオ蔓延スルノ傾向ナリシモ予防委員、事務委員ノ事務熱心ト其ノ他書記、助役、村長監督周到ト医師ノ尽力ト依リ九月二六日患者快癒閉鎖ノトコロ、消毒人夫牧事人夫ノ健康隔離ニ付キ十月一日ヲ以テ、全ク隔離病舎閉鎖ヲナシタリ。コノ日数泰拾五日間、費用二百拾一元七拾銭五厘ナリ。

注(大泉、南殿の患者名は記載を省く)

(役場文書)

村民が流行病の発生に対して恐怖し、その対策に対して真剣にとりくんだことがほうふつとする記録である。ちなみに当年の歳出中、経

常衛生費は一四四八一銭五厘であったのと比べて流行病対策の臨時支出の大きかったことがわかるのである。

また、大正一一年以来、昭和二年まで伝染病患者を一人も出さず好成績を収めてきたが、昭和二年に赤痢病患者四名を出したときの報告は次のように記述されている。

大正一一年以来伝染病患者を出さざりし好成績なりしも本年度において左記の通り患者を出せしは誠に遺憾の至りなり。六月二四日堀ノ井、男(二〇歳)赤痢患者届出あり。直ちに隔離病舎に収容せり。衛生組合を啓発し、該予防法を努力せり。幸いにして、伝染者を出さず。七月一二日治癒転帰閉鎖せり。

九月一日堀ノ井、女(七三歳)赤痢患者届出あり。直ちに病舎に収容せり。悪性の赤痢にして、重症なりし故、最善の努力も効なく、七日死亡せり。

九月二〇日堀ノ井、女(一七歳)女(八〇歳)赤痢患者届出あり。直ちに隔離病舎に収容せり。十月六日治癒転帰、七日閉鎖せり。

(役場文書)

以上三回、延べ四人の赤痢病患者に費した経費はおよそ六一〇余円、堀ノ井区より連続して赤痢病患者を出したので区民はもちろん、村民としても非常に恐れ、これ大事とばかり、村当局は区民を啓発し各飲用水路及び便所、汚物捨場等につき徹底的に大消毒を実施した。

(5) ジフテリア予防

明治一三年法定伝染病に指定されたジフテリアの患者が本村に出たのは記録の上では明治四一年であるが、その予防、治療等の資料が乏しくよくわからない。

昭和六年に「本村にジフテリア患者四名発生、内三名死亡、警察署と協力、これが消毒施行せり」とあり。昭和一五年の報告にはジフテ

リヤ患者発生のため、学齢前の者及び学生の中で希望者に予防注射をした。その数四七九人。昭和十七年に「ジフテリアの予防注射、入学前の児童と国民学校初等科三年生のものに日割りをつくって実施した」とあるくらいである。統計では大正三年の六名、六年の一三名と大量の罹患の記録がある。

(6) トラホームの予防と治療

明治四三年からトラホーム患者数の報告がある。これはトラホームの患者が年々増加し、四一年ころから急激に暴下にまん延したため、トラホーム防止の告諭が出され、四三年には各町村ごとにその検診が実施されたからであろう。同年の報告によれば、

一、トラホームの検診ニ関シテハ前年ニ比シ患者数著シク減少ノ傾向ヲ示ス
トイエドモ、ナオ三百十九人ノ患者アリ、約九分ノ多数ニ上ルヲ見ル。

とあるところから、全村民の九%が罹患していることがわかり、これでも前年より著しく減少しているところから推察すると大変なまん延であった。

以後の罹患数は表6-84のとおりで減少する傾向であるとはいえず、調に減少したのではない。大正八年には

一、トラホームの検診ニ関シテハ十一月二十五日より十二月二日迄ニ各区ニワタリ幾レ無ク施行ス。其ノ結果患者数百拾五人、前年ヨリ拾貳人ノ増加ヲ見ル。而シテ該患者ニ対シテハ連合衛生組合ヲ活動セシメ極力治療ニ関スル注意ヲ促セリ

(役場文書)

と報告されている。翌大正九年にはトラホーム予防法が施行され、次のように全村民の検診を行ない治療券を発行して治療を促している。

一、トラホームの検診ニ関シテハ施行規則ノ改正ニ依リ四月二十二日より五月四日ニ渡リ本村在住者全部ニ対シ施行シ、患者ニハ治療券ヲ渡シ治療ヲナ

サシメ現在患者数九十二人トナレリ。

受検者 三七六六人

患者数 一七一人

治療ヲ受ケテ治療セシモノ七九人

(役場文書)

大正十年の検診については、

一、トラホームの検診ニ関シテハ施行規則ノ改正ニ依リ左記ノ日割ニテ各部落ヲ検診施行セリ、其ノ日数八日間、現在人員

男一千九百拾三人 内患者六拾七人

女二千二百二拾三人 内患者七拾二人 村一般通シテ女子ハ衛生思想之

シキ為、男子ニ比較シテ患者多数ナリ

治療ヲ受ケ治療セルモノ百二拾一人

(役場文書)

大正一五年にはトラホーム高率町村に指定され、その予防と治療に万全を期している。その報告は次のとおり、

トラホームニ対シテハ高率町村ニ指定セラレタルニ付キ四月五日ヨリ十二日迄八日間全村民ノ検診ヲ行ナイ四月二八日より六月二八日迄二ヵ月間小学校ニ於テ治療ヲ開始ス。患者総数百拾五人、内全治者百八拾五人。治療ニ際シテハ患者ノ出席歩合多ク動ヲテ全治者多数ヲ算シタリ。

(役場文書)

昭和三年には全住民の検診を行ない五月四日より七月四日まで六二日間小学校に治療所を設け小平医師を主治医として極力治療につとめた。

昭和四年には工場、小学校及接客業者だけ検診を行なって次の表のように報告している。

表6-85 トラホーム検診結果(昭和四年)

種別	性別	検診人員	重症	軽症	疑似症	計
接客業者	女	八二	—	—	—	—
工場従業者	女	二二	—	—	—	—
学生	女	四〇	—	—	—	—
合計	女	一四二	—	—	—	—
接客業者	男	八二	—	—	—	—
工場従業者	男	二二	—	—	—	—
学生	男	四〇	—	—	—	—
合計	男	一四二	—	—	—	—
合計	男女	二八四	—	—	—	—
接客業者	男女	一六四	—	—	—	—
工場従業者	男女	四四	—	—	—	—
学生	男女	八〇	—	—	—	—
合計	男女	二八八	—	—	—	—
重症	男女	—	—	—	—	—
軽症	男女	—	—	—	—	—
疑似症	男女	—	—	—	—	—
計	男女	—	—	—	—	—

昭和六年の事務報告には「本県衛生課より医師出張接客業者ノ健康診断並ビニ検診ヲ行イタリ。検診人員壹百六人ノ内四名ノトラホーム軽症患者ヲ出シタリ」とあり、以後の事務報告にトラホームに関する記事は載っていない。衛生思想の普及や、予防治療の徹底によって漸く終えんしたものと思われる。

(7) 結核予防

法定伝染病に指定されなかったが結核は明治以来、亡国病と恐れられ、その死亡率は長く第一位の座を占めていた。とくに大正期には結核が多発し、国家的社会問題として対策が急がれた。大正七年には人口一〇万に対し死亡者が二五七と急増するや、翌八年に結核予防法が施行された。

長野県でも全国組織をうけて、長野県結核予防協会が創立され、講演会、衛生模型展覧会を開くほか、県当局などと協力して印刷物、活動写真などで県下一斉に結核予防の宣伝を行っている。

南箕輪村でも結核予防は行政の重点施策として取りあげられ、大正八年の村長の施政方針には「公衆衛生向上を計り、伝染病を絶無なら

しむるは、村経済のみならず、各人の幸福を増進するゆえん」とし、とくに衛生組合の活動と呼びかけ、尽力を求めている。

その甲斐あってか大正一四年の村の報告文書を見ると「接客業者ニ対シ結核検診ヲ行イタルモ患者ト認ムルモノ無ク其ノ他伝染病等ノ發生無キハ喜ブベキナリ」とあり大正一五年の村長施政方針にも「幸い本村には、数年間、伝染病患者を出さない」とあり、結核の予防に万全を期した保健衛生行政の姿がうかがわれる。

全国的にも大正七年を頂点としてその後戦争中は多少の消長はあったものの結核の死亡率は順次低下の動きを示し、広く国民の意識化ができてきた。昭和一一年の役場文書によれば「十二月一日ヨリ七日迄結核予防国民運動週間トシテ女子青年会衛生副長ヲシテ其達成ニ努力セリ」とある。

終戦後の四、五年は戦後の混乱期で県下でも結核による死亡者が四二二二人と最高を示した。南箕輪でも昭和二六年には届出された結核患者は一名あった。しかし食糧事情の回復とともに、国民の栄養面でのバランスもとれ、昭和二六年の抗生物質の防疫上使用は結核を一挙に撲滅させるほどの威力を発揮した。同年の結核予防法によって国民の健康診断や予防接種が義務づけられるに至って、結核の早期発見、早期治療が実施され、不治の病でなくなり、昭和三〇年には、死亡率、第五位、昭和三四年には第七位と急激に下ってきている。

(8) 流行性感冒

大正七年から九年にかけて全国に大流行したスペインかぜは患者二四〇〇万人、死者三〇万人を出す惨状を呈した。以後流行は断続しながら現在に至っているが、昭和三七年にインフルエンザ予防特別対策として、全国の幼保小中の、幼児・児童・生徒に予防接種が行なわれるようになった。

スペインかぜの大流行に関し、大正八年二月二日の日付けで南
 箕輪村でも、流行性感冒予防心得が全戸に配布されたが、当時はまだ
 医療技術面でも衛生思想面でもレベルの低いものであったが、それな
 りに、真剣に取り組んでいる姿や、当時の様相が知れる貴重な資料で
 あるので以下に全文を紹介する。

流行性感冒予防心得

はやりかぜは如何にして伝染するか。はやりかぜは主に人から人に伝染す
 る病気である。かぜをひいた人がせきやくしやみをする時、目にも見えな
 い程に細かいしぶきが、三、四尺まわりに吹き飛ばされ、それを吸いこんだ
 者は、この病にかかる。

かぜを引いて治った人も、自分の間は鼻の奥やのどにこの毒がのこって
 おり、また健康な人の中にも鼻やのどに毒をもっていることがある。これらの
 人々のせきやくしやみとばしりも病人同様危険である。

かからぬには

一、病人または病人らしい者、せきをする者に近寄ってはならぬ。病中、話
 などするのは病人のためでもないから、見舞いにいっても、なるべく玄關
 ですまがよい。病家ではお客様を、かならず病室に案内してはならぬ。
 二、沢山人の集まっているところに立ち入るな。時節柄芝居、よせ、活動写真
 などには行かぬがよい。急用ならざる限りは、電車などにも乗らずに歩く
 方が安全である。

かぜの流行するときに、人と話をする時は用心して、三、四尺はなれ、
 人のせきやくしやみのとばしりを吸いこまぬように注意なさい。

三、人の集まっているところ、電車、汽車などの内では必ず呼吸保護器をか
 け、それでなくば、鼻、口を必ずハンケチ、手拭いなどでかくるくおおいな
 さい。

ハンケチも手拭いもあてずに、無遠慮にせきする人、くしやみする人か
 ら遠ざかれ。

四、塩水か、お湯にて度々うがいせよ。うがい薬があればなおよし。食後、寝
 る前に必ずうがいを忘れるな。

五、子供、年青者、持病ある者、からだの弱き者はかかり易く、また、かか
 ると重くなるから常に、便通をよくし、腸、胃をこわさぬよう用心せよ。
 六、風邪をひいたら

一、かぜをひいたなと思ったら直ちに、おどこに潜り込み、医師を呼べ。

ただのかぜとばかりにして、売薬療治で安心するな。外出したり、無理を
 すると肺炎を起こし、取り返しつかぬことになる。

二、病人の部屋はなるべく別にし、看護人の外は、その部屋に入れてはなら
 ぬ。看護人や家内の者でも、病室に入るときは必ず、呼吸保護器をかけ
 よ。

三、治ったと思っても医師の許しのあるまでは外に出るな。虫歯の揺り返し
 よりも、この病の再発は怖ろしい。

そのほか気を付けること

一、家の内外をきれいに清掃し、天気の良い時は戸障子を開け放て。窓の掃除
 は、なるべくちりの立たぬように雑巾がけをするのが一等。家のまわり
 は、ちりの立たぬように、まず、水を撒いて後には、学校、幼稚園、寄
 道、工場などではことに是等のことに気をつけよ。旅行客、貸し座など
 は、客のない間は日中必ず、障子を開けておけ。

二、夜具、寝まきなどは、晴天の日には必ず、日にさらせ。

三、用心に亡びな。健康者も用心が肝心。予防注射も用心の一つ。

四、人間でせきやくしやみをするときは、公德を重んじ、必ずハンケチ、手
 拭いなどで口をおおえ。

五、病人のたん、鼻汁などでよれたものは便所に捨てて、煮るかまたは、薬で消毒せよ。病室内のよれたものの始末は医師に相談し、てぬか
 りのないようにせよ。

(9) 日本脳炎の予防

日本脳炎は流行性のウイルス疾患で死亡率も高く治っても手足の硬直まひや知能障害などの重い後遺症が残り、人々に恐れられた病気であった。戦後大流行した昭和二三年には法定伝染病に加えられた。

日本脳炎の予防接種は、昭和二九年に始められたがワクチンの副作用が予想されていたにもかかわらず、年々改良され、昭和四〇年代後半に入ると小中学生、保育所幼児を対象に九五%前後の者が接種を受けるに至った。このころになると、全国的にも長野県でも患者数が減少し、予防接種の成果があらわれてきた。そこで毎年行なっていた接種を昭和四七年には改正し、満三歳で一回、満四歳で追加接種一回を接種し、以後小学校三年、中学校一年とそれぞれ、一回の追加接種接種を行ない、対象者の範囲を減少した。これはワクチン研究の成果をもとに接種法を改正したもので南箕輪村でも県の指令を受けてこの年に改正されている。

2 清潔法の実施

明治二八年五月町村清潔法施行規則が定められた。本村はこれによって次の清潔法施行順序が定められた。

南箕輪村清潔法施行順序

第一条 本村ハ明治二八年本県令第十六号ニヨリ本村内清潔法ヲ保護スル為ノ清潔委員八名ヲ置ク

第二条 略

第三条 略

第四条 清潔委員ハ毎月二回以上其管轄区域内ヲ巡視シ衛生委員ト謀リ第四條以下ニ定ムル所ノ清潔法施行事項ニ付キ各日ノ注意ヲ喚起シ其ノ清潔ヲ保持セシム

第五条 清潔委員ハ公衆用ノ便所ニハ毎週二回以上之レヲ改良シメ溜溜ヲ防

グ糞池及ビ周囲ニハ適當ノ消毒薬ヲ撒布セシムルモノトス

第六條 清潔委員ハ溝渠下水汚水溜水等ハ浚渫掃却ヲ為スベキ事ニ注意シ其ノ疏通ヲ良クシ、若シ破壊等ノ箇所アルトキハ関係者ニ就キ修繕ヲナサシムベシ、但シ伝染病流行時ニアリテハミダリニ溝渠下水等ヲ掘掘スベカラザル様注意シ、溝渠下水汚水ヲ汲み取り道路ニ散布セザル様、各管轄区域ノ人民ヘ指示スルモノトス

第七條 伝染病流行ニ際シ消毒薬ヲ疑アル溝渠下水便所汚濁等ニハ相當ノ消毒薬ヲ入レ敷重ニ清潔法ヲ行フモノトス

明治二八年六月十一日提出

南箕輪村長 高木誠三

(役場文書)

この清潔法は以後毎年春秋二回実施し、指定期日に村吏、清潔委員、衛生委員、駐在巡查同行で各戸を巡視点検し、畳、衣類の日光消毒を行なうことなどこまかく指導した。清潔が実施された家には「春(秋)季清潔法実施済証」の札を門口に貼付した。特に優良と認めた場合は金色の紙を貼って清潔の徹底を図るようにした。

大正六年役場からの通知を次に掲げる。清潔法実施がかなり厳しいものであったことが推察できる。

秋季清潔法実施通知

大正六年度秋季清潔法、左記日割ヲモツテ施行候条区内一般ニゴ示達相成リタタ此ノ段通知候也。

追ッ而 家屋内外大掃除等清潔ナラシムルハ勿論、検査ヲ受クルヨリ厳

重ニ達シコレ有リタタ申シ添工候也。

大正六年十一月二二日

南箕輪村役場

各区分、連合衛生組組合長殿

(役場文書)

このような清潔法実施は大正、昭和と続けられ村民の衛生思想の向上に資するところ大であり、その精神は現在の南箕輪村の「廃棄物処理及び清掃に関する条例」となって生きている。

3 乳幼児検診

日中戦争が始まると衛生行政も戦争遂行のための、いわゆる「健民」活動にしばられてきた。ことに昭和初期の不況から国民の栄養、体力の低下が著しく、とくに農民の健康が劣悪であった。そんなとき、昭和一三年に厚生省が誕生し衛生行政が一段と強化され、乳幼児の検診も行なわれるようになった。以下は南箕輪村の乳幼児検診の記録である。

昭和十四年

乳幼児ノ体力向上ノ為厚生省ノ指示ニヨリ八月二十一日、八月二十三日ニ亘リ本村診療所ニ於テ乳幼児男六一名女五一名計一二二名ノ検診ヲ行イタリ 以下略

昭和十五年

乳幼児ノ検診

養育優	良	普	不良	保育上注意ヲ要スル者	計
三〇名	三七名	六一名	七名	四名	一三九名

以上の検診は主治医、補助として村産婆、看護婦、母性指導委員、女子青年役員が担当して行なわれている。

4 国民体力検査

前記「健民」の衛生行政の方針を受けて、青年の体力増強を目的として体力章検定が行なわれた。昭和一四年、五年の記録は次のようになっている。

昭和十四年

次代ノ中堅タルべき青年ノ体力ノ増強ヲ図リ国力ヲ培養センガ為昭和十四年度ヨリ体力章検定ヲ実施スルコトト相成リタルニ依リ、是ガ為全ヲ期スベク学校職員・青年会員・軍人分会等ト協力シ十一月三十日午前九時ヨリ施行セリ。其ノ成績左ノ如シ。但シ十五歳ヨリ二十五歳迄

受検人員 九四名 内初級 一一名 中級 三名

昭和十五年

青年体力検定

上級一名、中級五名、初級三〇名、級外甲二〇名、級外乙三二名、

級外丙三七名、計一二五名。

初級以上二ハ厚生大臣ヨリ合格章ヲ授与ナル。

(役場文書)

このように、戦時体制下の国防的見地からの男子青年を中心として、体力検定はその成績を競い合うようにして体力向上を目指していた。

このほかに、国民体方法による検診も行なわれた。

5 伝染病隔離病舎

本村の伝染病隔離病舎は仮病舎を建築し伝染病患者発生の際は患者を収容してきたが、明治四五年監督庁より伝染病予防法施行細則に準じた病舎を建築するようにとの指示により一五〇〇円の準備積み立てをした。仮病舎は、大正二年老朽の故をもって売却取りこわされた。

そして同年宇羽場四七六九番地に建築した。その費用は建築工事費一八八七円四五銭、敷地購入費八九一円、総額二六六九円四五銭で、うちその四分の一の六六七円四七銭が県の補助であった。当時敷地の持主であった有賀栄二はこのとき、二二七円六〇銭を敷地購入費に充てるよう指定寄付をした。

患者室五、看護人室、浴室、便所の一棟、事務室、医務室、炊事室

の二棟、消毒室、人夫室、屍室、焼室、物置、便所の二棟、計三棟の規模で、周囲に高さ四尺の板塼をめぐらせた構えで同年一〇月竣工使用を開始し、昭和四年まで使用した。

昭和四年一二月に本村は伊那町、西箕輪村、西春近村、東春近村、富原村、美原村、手良村と組合立の伝染病院の設立をきめた。この一町七か村の伝染病院組合はその事務所を伊那町役場におき、病舎は伊那町小黒に設立した。組合会議員の定数は四〇名で伊那町一二名他村は四名で各町村から選らばれた名誉職で任期は四年であった。また組合長、代理、収入役は伊那町の三役を当て、その経費は毎年四月の各町村の戸数によって決められ、伝染病患者に關する費用はすべて患者の発生した町村の負担とした。

昭和二八年には町営中央病院に併設することになった。三〇年には伊那市、西春近村、南箕輪村による上伊那中央伝染病院組合に改組し、三三年にはこれに箕輪町が加入、翌三四年には高遠町、長谷村、河南村が加入した。

昭和四〇年には従来の組合を解消、伊那中央保健衛生施設組合に変更になってこれに移管した。五〇年には辰野町がこの施設組合へ加入し、五一年には伊那施設組合が廃止になり駒ヶ根市、飯島町、中川村、宮田村が委託となり上伊那郡市全域が伊那中央総合病院敷地内にある隔離病棟施設に集ることになった。

6 村診療所

昭和九年村は診療所設置を計画した。村議会の議案には次のように設置理由を述べている。

南箕輪村診療所設置ニ關スル件本村ハ地勢上村内病弱者並ニ妊産婦診療ニ極メテ不便ノ実情ニ在ルヲ以テ莫費補助ヲ得テ村内適當ノ場所ニ診療所ヲ設置シテ病弱者及ビ妊婦ノ診療ヲ容易ナラシメ以テ村民保健ノ増進ヲ圖ラン

トス

昭和九年十一月六日提出同日決議



図6-64 村立国保診療所

(役場文書)

このときの設置案によると予算は二九一六円とある。

昭和一〇年になって設立が認可になり一二月八日地鎮祭、一月上旬棟式、翌四月三〇日に落成式を行った。

主治医として原参三医師を嘱託し、八月五日から開所した。原医師は一二月辞職し、百瀬医師が代わった。同年の事務報告によると

「病弱者ノ診療ヲ容易ナラシメ村民保健上裨益スルトコロ多ナリ。……」

(救済文書)

とある。

昭和二年四月一日に南箕輪村五〇一一番の地に国保診療所として発足、同二年九月二五日設置者を南箕輪村に変更した。

二十七年四月一日国保医師としての医師が辞任し、後任者確保が困難であるとの理由により、診療所を休止した。診療所休止後の施設は原千秋医師に貸与し診療を続けていた。

昭和四十六年よりは同医師も診療を休止、再開の見通しが立たないの
で五十六年二月二五日付けをもって正式に廃止届を出した。

三 郵便・電信・電話・有線

(一) 郵便

1 明治初期の郵便

明治新政府となり、各種の行政改革が進められたが、新しい郵便制度の構想を当初においてはもっていなかった。

明治元年四月、会計官のもとに郵便司を置き、新しい郵便制度をとり入れようとしたのだが、実際には江戸時代からの飛脚制度をそのままにして活用するよりほかはなかった。同年七月には飛脚料金表を定め、一二月には京都・東京間に定期便を開設した。

現在、わたしたちが利用している「新式郵便」の構想が立てられ、

計画が進められたのは、明治三年五月、前島密が郵便局長に任命され、翌四年八月に郵便頭になってからである。明治四年一月に太政官から「郵便創業の布告」が発せられた。今の郵便ポストにあたる「書状集箱」が配置されており、同年三月一日には、「賃銭切手」「書状

切手」などと呼ばれていた四種の郵便切手（電切手）が発行された。

近代郵便が発足したのは明治四年三月一日である。この日午後二時、大阪を発した上り第一便は七五時間あまり経て、四日午後五時三〇分東京に着いた。運送料金は一貫四〇〇文であった。『郵政百年史』

創業当初の利用は、新式郵便についての知識が普及していないこともあって、官用通信が中心であり、民間の利用はあまり多くなかった。しかし、明治四年五月、新貨条例の制定（一文位の郵便切手を四単位に改正、同年七月廃藩置県が実施され、新政府による行政組織の一元化が全国に及ぶにつれ、郵便路線も急速に普及していった。

上伊那に郵便制度が整ってきたのは、明治五年七月一日、県内に二八か所の郵便役所・郵便取扱所が設けられ、伊那谷に次の三か所が設置されてからである。

四等郵便役所 飯田（奥村収蔵）
郵便取扱所 伊那郡（根津清衛）

高遠（池上正太郎）

なお、同年二月一日には松島郵便取扱所（日野嘉新）が設置され、集配事務が開始された。久保村、北殿村はこの郵便区に所属していた。

郵便物の運送は松本・飯田の各郵便役所の脚夫が早朝に出発し、街道沿いに設けられた各郵便取扱所の郵便物を集配し、中間地である伊那郡駅で落ち合って交換していた。次の資料は当時の郵便制度をよく伝えている。

○筑摩県管下郵便往復日割記抄（関係部分のみ）

一、松本ヨリハ毎日午前五時、飯田ヨリハ午前六時伊那郡へ往復ノ脚夫ヲ仕出し同所ニテ落着合ひ、郵便物交換ノ上、同所或ハ、若ニ二駅で遠近ノ地迄立テ戻リ、一泊翌朝五時ヨリ遅レザルヨウ出立シ帰郷致スベキ事。

一、伊奈部ニ於テハ、毎日松本・飯田及ビ二・四・六・八ノ日高遠ヨリ脚夫同乗ヘ到着候ワバ、夫々郵便物交換ノ諸世話致スベキ事。

一、右郵便路線中、塩尻、小野、宮本、松島、北殿、伊奈部、宮田、上穂、飯島、片桐、市田ノ各郵便取扱所ニ於テハ、郵便物差立テ、請ケ取り方共、松本、飯田兩地ノ脚夫取リ扱イ信託ト心得ベキ事。

但シ、本文各地ニオイテハ松本、飯田ノ脚夫到着前、自駅ニ集リシ郵便物ノ届ケ先地名郵便区分致シ置キ、脚夫立テ寄リ次第暫時ノ猶子ナク請ケ取り渡シ方取リ計ラベキ事。

一、高遠ニ於テハ、松本・飯田ノ脚夫伊奈部ヘ到着ノ時刻ヲ見計ラシ、二・四・六・八ノ日正午一二時ヨリ、同所ヘ往復ノ脚夫ヲ出シ、夫々郵便物ヲ交換シ、直ニ帰郷致スベキ事。

一方、明治六年三月一〇日、太政官布告「郵便規則」により、郵便事業の政府専掌を確立し、信書の運送は駅頭の特任とするにとともに、郵便料金の全国均一制を実施した。(明治六年四月一日郵便料金の全国均一制がとられるまでは、距離制を原則とした里程制が採用されており、距離不明地への料金の判断など、取扱者、利用者ともに悩むところであった。全国均一制は、このような不便を解消し、利用者に

表6-86 郵便料金表(明治六年四月実施)

種類	基本料金	付加及び特殊料金
書状	二匁まで 市内 二銭 市外 一銭半	不便地増料金 一銭 書留料金(全国一律) 四銭
新聞等	一匁一部 日方にかかわらず 二匁二部以上 一匁一六匁ごとに 市内 一銭半 市外 一銭	同右
見本品	八匁ごとに 市内 二銭 市外 一銭	同右

(旧松島局長日野家文書)

便利になったばかりでなく、遠距離の場合には低料金で信書が送達できるようにになった。利用者にとっては画期的な改正であった。

郵便料金の全国均一制の実施により近代郵便としての実質を備えた新式郵便は、利用者の拡大をめざして次々と新しい制度の実施や旧制度の改善を行なっていった。その主なものを上げると次のようになる。

明治 六年 二月 郵便はがきを發行

〃 七年 一月 日付け印を使用

〃 八年 一月 郵便為替を創始

〃 八年 五月 郵便貯金を創始

〃 一二年 三月 電信中央局設置、国際電報の正式業務の開始

明治一〇年代にはいると、郵便はもろろん、貯金、電信、電話など近代郵便制度のほとんどが整えられていったことがわかる。しかし、中央での制度がそのまま地方へ普及していったわけではない。中央での急速な発達とは、地方ではかえって旧制度とのまさつを大きくした面も見られるのである。

2 南箕輪郵便局の沿革

明治五年六月一日、中箕輪村松島郵便取扱所が中箕輪村六四六番地に開設された。この時の郵便区の中に現在の南箕輪郵便局の区域である久保村、北殿村、吹上村の三地区が含まれている。したがって近代郵便制度が南箕輪村に及んだのは明治五年からであった。三地区は松島局の市外区となっており、郵便物の集配は隔日に一回であった。

南箕輪郵便局の前身、北殿郵便取扱所が松島郵便取扱所から分離独立したのは明治七年一月一日であった。場所は南箕輪村二三三番地、平屋板屋根ぶき、局員住宅の一部という記録が業務沿革誌に残されている。開設時の局長は明確でない。明治八年一月一四日、七等郵便物取扱役、倉田三郎が任命されている。

郵便制度の創業時には、郵便取扱所は各駅に設置され伝馬所の一隅を区切って使用することが多かった。倉田三郎は北殿駅において伝馬の任にあたっており、伝馬所、助郷廃止後も陸送会社を営んでいた。この関係から郵便取扱役に任せられたものと考えられる。

以下、年代を追って沿革を記していく。

明治 七・一・一

北殿郵便取扱所（無集配）
南箕輪二三番地平家建

八・一・一四

七等郵便取扱所取扱倉田三郎
右廃止松島郵便取扱所に編入

一八・一一・三〇

南箕輪郵便取扱所（無集配）
内国為替・貯金受払・小包及び通常引受事務開始

三八・四・一

南箕輪郵便局三等（無集配）
外国為替、為替金店事務・取立金事務開始

四〇・四・一三

振替貯金事務開始
郵便集配事務開始

四一・一一・三〇

北殿・南殿・塩ノ井
久保・神子柴・田畑・大泉・沢尻・西箕輪一円

四三・三・三一

電信・電話事務開始
南箕輪三等郵便局長 倉田 正

大正 三・七・一

局長更迭により局舎を南箕輪村三四六二の二番地へ移転、瓦ぶき土蔵造りの民家改造、二階建

一一・一二・一

局長 伊藤 護
航空郵便の取扱開始

昭 和 一・一〇・一九

局舎を南箕輪村三四六四番地へ新築移転、職員一〇名

五・五・二〇

市内郵便の取扱開始

一〇・八・二六

一二・八・一六

連達郵便の取扱開始

一四・六・二三

電話交換事務開始

一六・二・一

通信官署の等級廃止、特定局となる

三二・三・三〇

電話交換事務廃止 伊那電報電話局へ統合

三八・二・一四

南箕輪郵便局長 三沢信良

四三・八・二五

電報配達業務廃止 伊那電報電話局へ統合

四七・一〇・三一

局長 田中 弘

五一・三

局舎を南箕輪村三三五八の三番地へ新築移転、鉄筋平屋建三二〇㎡

五八・六・二三

局長 知久昭夫

3 南箕輪郵便局の現況

(1) 戦後の郵便業務の発展

戦後「民主化」という基本路線に基づいた各種法令の改正や激しいインフレによる経済の混乱により郵便事業も多くの困難に見舞われたが、経済の復興と共に、危機を脱し、大きく成長して来た。

普通郵便の配達数で見ると二〇年代の後半から増加を示し始めた。



図5-55 昭和初年の郵便局（北殿）

表6-87 郵便配達数の変遷（南箕輪郵便局）

	普通郵便配達数 (1日平均)	年賀はがき配達数 (千通)
26	343	33
30	1,368	62
35	1,210	63
40	1,730	106
45	3,211	145
50	2,790	226
55	2,923	271
59	2,980	291

郵便物が、四〇年代に入ってから頂点に達していることがわかる。これは、朝鮮戦争後（昭和二十年）急速に発展して行った日本経済の動きと一致しており、南箕輪郵便局管内においても、経済活動や人々の交流が盛んになっていった様子がうかがえる。

昭和五〇年代に入ってから郵便物が減少して来ているが、これは電話の普及による影響である。この時期にダイヤルによる全国即時通話が達成され、私信は電話で、手紙はダイレクトメールや各種印刷物中心へと移り変わっていったのである。これに対し年賀はがきは、ほぼ一本調子で伸びてきている。年に一度、親しい人々に送るあいさつ状としての性格から、電話など他の情報伝達手段の影響を受けることが少ないからである。

なお、郵便局の業務の中で見落とすにはならないものに郵便貯金、保険、為替、各種年金など、村の金融機関としての役割がある。郵便貯金や保険は戦前戦後を通じて、村民の最も身近な金融機関として親しまれ、利用されてきた。また、郵便貯金や簡易保険の積立金融資で小中学校の校舎や村民体育館の増改築、役場庁舎の建設などがなされている。昭和五六年には貯金のオンライン化が実現し、保険についても昭和五八年にオンライン化されている。

(2) 現 況（昭和五九年三月）

局名 南箕輪郵便局

所在地 上伊那郡南箕輪村三三五八の三（北殿）



図6-66 南箕輪郵便局

郵便切手売りさばき所 二〇

業務内容（昭和五九年度）

①郵便業務郵便取扱回数（1日平均）

引き受け 九七〇 到着 三〇三七

差し立て 八六一 配達 三二四六

②為替・貯金業務

郵便貯金受入 四万七、三一七件 金額二億七千二万一千円

郵便貯金払出 一万二七九三件 金額二億六千六万九千九百円

③保険年金業務

受け入れ 五五二二件 金額 三九六〇万円

払い戻し 七二〇件 〃 二億八千〇六万円

四 電信・電話

区別別内訳

南箕輪村 人口九、五一四

世帯数二七五〇

伊那市西箕輪 人口五、〇三五

世帯数一三九三

合計 人口一四、五四九

世帯数四、一三三

局舎状況 鉄筋平屋建 土地五四

二、建物三一〇㎡ 職員数

一八名（内務八名、外務一〇名）

保有車輛 自転車三、原付自転車

三、自働二輪車九（九〇cc）計一

五台

区内郵便施設 郵便差出箱二五

（館内施設も含む）

1 電 信

我が国に初めて電信線が架設され、官用通信が開始されたのは明治二年八月九日であった。場所は横浜で、距離は八〇〇m程度であったという。この時すでにヨーロッパでは大西洋横断海底線が敷設されており、世界はすでに国際電信網整備の時代に入っていた。

伊那に電信線の架設工事が始まったのは明治一八年三月であり、同年一月一五日に待望の伊那電信分局が伊那市坂下区宮本町に開設され、電信業務を開始した。しかし、上伊那全城が伊那電信分局の担当だったので、受信された電報は普通郵便と同じ扱いであり、多くの時間がかかった。電報の利便性はあまりなかった。しかも和文一音信（一〇字以内）一五銭とかなり高かった。利用者の限られた人ばかりであった。

南箕輪郵便局に電信、電話回線が架設され、電信電話事務が開始されたのは、明治四四年九月二日である。回線は松島—南箕輪線であり、接続局は松島郵便局であった。

当時電信電話が開設されていた局は、伊那・松島の両郵便局であったため、南箕輪郵便局は開設と同時に大変広い電信区を受け持つことになった。記録によると次の地区である。

南箕輪郵便局電信区

直配地区

南箕輪村（沢尻を除く）、西箕輪村大字新田（雲雀畑を除く）、伊那町大字堀島、手良村大字沢岡（中坪・野口・堀の内を除く）、箕輪村大字堀島石仏・卯ノ木、二軒屋
直配地区外

西箕輪村（大泉新田を除く）、手良村大字沢岡（中坪・野口・堀の内）

この電信区は各地区の郵便局に電信業務が開始されると同時にそ

らに移され、本来の南箕輪地区へと固定して行った。

昭和十三年一月一日 手良局の電信業務開始により、前記地区より手良村一円を除く。

昭和十四年三月三十一日 西箕輪局の電信業務開始により前記地区より西箕輪一円を除く。

ところで、当時電信線を架設するには多額の費用が必要だった。そこで、電信業務の開設促進のため各地区では人足や電柱を寄付したり、上納金を出したりした。一刻も速い情報が藩の産地であった伊那谷の人々には必要だったのかも知れない。

電信開設当時の利用者がいたのか不明であるが「上伊那誌」に「電信利用においては、創設当初から民間の利用の方が多かったが、明治二〇年前後郡下全城を担当していた伊那局で一日平均三、四通しかなかった。電信局の増加と共に利用者は急激な上昇を示し、大正時代へ入ってからは三〇〇通から五〇〇通が扱われるようになった」と書かれている。電話が普及していなかった当時では大切な情報伝達手段であったことがわかる。

表6-18は戦後統計資料の得られた部分について抜き出したものである。昭和二〇年代から三〇年代にあっても電報はかなりの取扱数があった。しかし、その数はしだいに減少して来ていることがわかる。そして五〇年代に入ると電報はすでに情報伝達的手段としての価値を失っていることがわかる。ちなみに昭和五六年に扱われた電報の内訳を見ると慶弔電報四八通、その他六七通と、かろうじてその面目を保っているが、昭和五九年度の二五通はすべて慶弔電報である。電報が本来の意味を失っていった最大の原因は電話の普及にある。特に五〇年代に入って爆発的に普及した電話に電報はその地位をゆずり、今はかろうじて「文字で残る」特長を生かして慶弔の式場で披露され

表5-58 電報取扱数及び村内電話加入数の推移

年 度	電 報 取 扱 数	電話加入数 (南箕輪村)	伊那局管内 電話加入数
昭和26	4,707	22	726
29	4,343	36	902
32	3,507	53	1,479
35	3,535	55	1,816
38	3,738	56	2,227
40	4,163	131	2,619
49	108	866	—
54	107	2,363	—
55	114	—	—
56	115	2,552	17,659
57	62	2,752	18,674
58	39	3,069	21,680
59	25	3,216	—

る存在になってしまったのである。

昭和 四三・八・二五電報配達業務廃止、伊那電報電話局へ統合。

2 電 話

南箕輪郵便局で電話業務が始まったのは電信が開始された明治四四年九月二一日である。開設当時の電話加入者数は不明であるが郵便局に残されている資料で見ると昭和一四年単独加入者が六、通話局一とになっている。電話業務が開始されてからすでに三〇年近い年月を経ていることを考えると、電話の普及が大変な困難をともなっていたことがわかる。

電話の普及をおくらせた原因の一つは電話の架設に大変な費用がかかったことである。例えば大正元年、電話増設工事費の個人負担は九七円であったという。(伊那市史) つまり、当時は電話架設工事の大部分を加入者が個人で負担していたので、この個人負担に耐える者であり、それに見合う利用者でなくては電話を引くことはできなかった。

た。明治四三年の「上伊那郡郵便局特設電話番号表」で電話加入者の職業を調べてみると、まず役場、警察、などであり次に料理業、旅館業が続き銀行、商業等となっている。これらに製糸業、医師を加えるとはば一〇〇%となり、当時の電話が情報を多く必要とし、また、その速さを必要とした職業の人々が利用者の中心であったことがわかる。電話の普及をおくらせたもう一つの原因は、通話料が大変高かったことである。次は松島局よりの料金表であるが、当時の生活から言えば割高なものであった。

電話通話区域及び電話料金

明治四三年一月二一日より左ノ通り定メラル

松本 二〇銭 上諏訪 一五銭 平出 一〇銭 伊那 一〇銭

高遠 一〇銭 赤穂 一〇銭

なお、明治四四年八月二一日には、「東京 六〇銭、長野 二五銭 甲府 二五銭」などが追加されている。これらが追加されたということとは、この時追加された各地への電話線が開通したことも示している。

南箕輪郵便局における電話業務の歩みは次のようであった。

明治四四年九月二一日 電話事務開始

特別加入区域

南箕輪村(久保 坂ノ井 大泉 北殿 南殿 田畑)伊那町(福島 西村

上手村 鈴村)

市外通話区域

伊那 高遠 上諏訪 下諏訪 西春近 飯田 赤穂 岡谷 平出

昭和一四年六月二三日 電話交換業務開始

「二四・六・一」 伊那電報電話局開局

「二七・八・一」 日本電信電話公社となる

昭和三三・三・二〇

交換事務廃止 伊那電報電話局へ統合。同二二日

〃 四一・二・二七

ダイヤル自動式電話開通

〃 六〇・四・一

日本電信電話公社が日本電信電話会社（NTT）

となり民営化される。

電話加入数をみると表6-88のようであるが昭和三二年ダイヤル式自動電話が開通してから、ようやく増加傾向を示し始め、四〇年代の後半から、五〇年代に入り、飛躍的に増加していることがわかる。ダイヤルを回すだけで全国どこにでも直接話し合える電話の便利さは他の通信手段にはないものであり、それがまた電話の普及に拍車をかける結果となった。現在では手紙を書くよりも電話で用事をすませるのが一般的な生活になっている。

3 有線電話

南箕輪村農業協同組合が農事放送施設（有線放送）の設置を決定し、入札会を開いたのは昭和三三年八月二三日であった。翌二四日、松下電器産業株式会社松本出張所宛に落札通知書が組合長理事征矢善一郎名で発送されている。落札金額八〇〇万円工事期間は九月一日から十一月一日までであった。正式契約は八月二六日になされているが加入戸数一一〇〇戸を基準としてのものであった。

工事は契約通り九月一日から始められた。工事中労働者や電柱の確保など、農協は最大限の努力をしている。また、電柱の皮剥きなど、各区で労務を提供するなどの協力があつた。一方、工事の進行と共に加入者の募集も併行して進められた。加入者工事負担金は組合員三〇〇〇円、非組合員は五〇〇〇円であった。そのため、組合員に加入し、有線を設置する家もあった。しかし、組合員でありながら加入申込みをしない農家などもあり、各部落役員を通じて加入を促すなどの努力を



図6-67 南箕輪有線本部

している。

計画当初一一〇〇戸の加入を予定し工事を開始したのであるが、三三年一〇月にはほぼそれに近い加入者を得ている。公社電話の設置数の少なかった当時としては公社電話への接続は魅力があつたであろうし、居ながらにして隣近所と連絡がとれるということも都合のいいことであつた。

有線電話業務の許可がおりたのが昭和三三年一〇月二五日である。南箕輪有線本部ではこの日を運用開始の日としている。本部は南箕輪村四九三六番地へ設置した。機種はナショナル手動式交換機である。設置費用は付帯工事を含めて八五万一千三百六十四円であった。資料からもわかるように有線電話は発足二年めにして、加入者の間にすっかり定着している。公社電話の少なかった当時としては、有線は村民の情報伝達手段として大きな役割を果たしていたのである。

有線放送事業の沿革

- 昭和三三年一〇月二五日 手動式有線放送電話業務許可、交換及び放送開始
- 〃 四三年一〇月二五日 自動式有線放送電話業務許可
- 〃 四五年一〇月二二日 公社電話との接続開始
- 〃 四七年 五月 一日 南箕輪農協から伊那農協へ継承
- 〃 五〇年 五月二〇日 公社電話との夜間接続廃止（午後九時から午前七時まで）

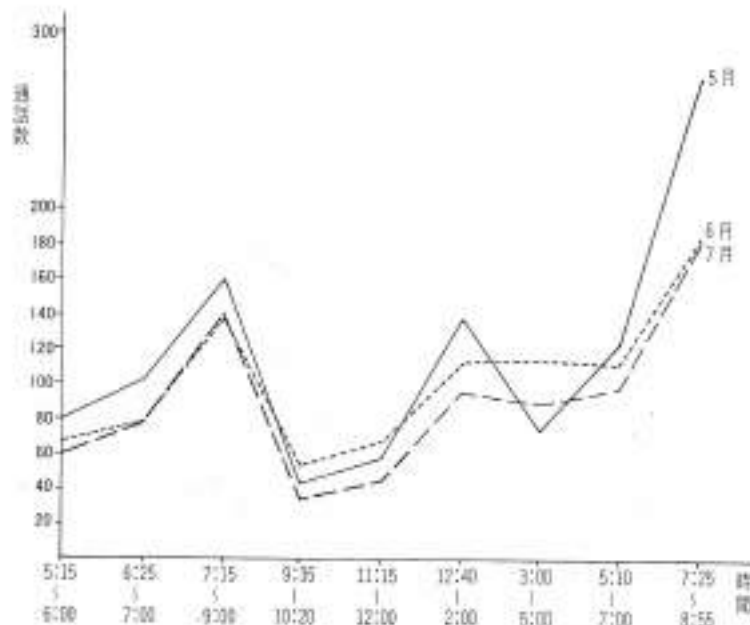


図6-68 時間別平均通話数（昭和35年）

昭和五一年 五月 一日 公社電話との接続時間短縮（午前八時三〇分から午後五時まで）

〃 五三年 四月 一日 公社電話との接続廃止

有線放送事業の現況

公社電話の普及と共に、公社電話と結ぶ有線電話業務はしだいに魅力が失っていった。しかし、昭和四三年自動交換機が設置されてからは村内は無料で通話できることになり、かえって利用は増加したとい

表6-69 有線部落別加入率 59年3月31日現在

	世帯数	有線加入数	未加入数	加入率	
久保	206	141	65	68	内 中原寮49 仙丈荘 3
中込	171	2	169	1	
塩井	96	89	7	93	
北殿	638	416	222	65	
南殿	176	153	23	87	
田畑	340	222	118	65	
神子	377	155	222	41	
沢尻	279	48	231	17	
南原	132	66	66	50	
大芝	115	35	80	30	
大泉	225	205	20	91	内老人ホーム76
北原	15	14	1	93	
合 計	2,770	1,546	1,224	56	

おれている。

ところで、情報伝達網として最も大切な普及率はどうなっているだろうか。表6-69でみると有線加入率は一五四六となっており、全世帯に対する加入率は五六％である。これは昭和四〇、五〇年代に南箕輪の世帯数が急激に伸びたのに対し、有線加入者が伸びなかったことを意味している。ちなみに昭和三六年度加入者一一五五に対し、昭和五八年一五四六だから、実質増加台数は三九一台だけである。この結果、有線放送はしだいに全村的な連絡放送網としての意味を失って来ているのが現状である。

本来、有線放送は農事有線放送として、スタートしている。発足当

1 村勢要覧

〔一〕南箕輪村勢要覧と村報「南みのわ」

村内の各種統計を主体とした「南箕輪村勢要覧」が役場から発行さ

四 報 道

②基本料金 月額 九〇〇円 基金 一五〇円

七〇三

①加入数 一、六五三（公共施設、団体、事業所等を含む） 電話機数一、

・有線放送事業の概要（昭和五十九年度末）

最後に有線放送の現況は次のようである。

初は村内世帯数にしろる農家世帯の割合が高かったこともあり、全村への連絡放送網として活用されていた。しかし普及率が五〇％台になった最近再び農事放送としての色合いを強めて来ている。

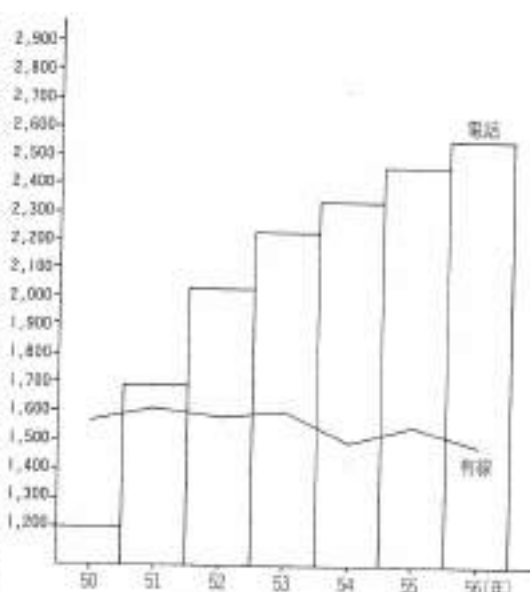


図7-59 電話と有線の加入状況の推移

れている。

細かな統計が記されており、村の発展を知るうえで貴重な資料となっている。

大正一五年四月調製の村勢要覧の項目は次のようである。

- (1) 土地戸口その他 (2) 教育 (3) 勧業 (4) 財政 (5) 兵事及び衛生
(6) 交通 (7) 摘要

その後の要覧は統計項目は細かくなり、役職者の氏名なども記されるようになるが、基本的には、大正一五年のものが生かされている。最近の村勢要覧、昭和五七年版を見ると統計主体であることに変わりはないが、表紙は役場新庁舎のカラー写真であり、統計の各種グラフを用いてカラー印刷をするなど、見やすくなりやすい編集に心がけていることがうかがわれる。頁数は一四ページとなっている。

村勢要覧は毎年又は隔年に発行されていたものと思われるが、残念ながら大正一五年以前のものはよくわからないし、それ以後のものも抜けてしまっているところが多い。貴重な資料となるのに残念なことである。

2 村報「南みのわ」

村報「南みのわ」の第一号が発行されたのは昭和四四年九月二〇日である。それには、村議会の報告、伊那西部地域農業開発、村財政についての報告、その他村の行政機構について述べてある。

村報がほぼ現在の形になったのは、昭和四八年一〇月一〇日発行の第七号からである。今までの報告形式から、村民の生活に役立つ記事が多くなり、写真も多く使われ、活字も大きくなっている。一面に村の人口と大きな写真、横書きという形式はこの時からのものである。

村報は当初、定期的に刊行されてはいなかった。年二回発行というのが普通であった。これが毎月一回、一日に発行されるようになった



図6-70 村報南みのわ

現在二紙発行されている。「南みのわ新聞」と「南箕輪日報」である。

南みのわ新聞

創刊 昭和五六年七月二日
発行所 箕輪町松島「南箕輪新聞社」発行人 藤原光三
発行部数 一二〇〇部 定価 一か月八〇〇円
南箕輪日報

創刊 昭和五九年一〇月二四日
発行所 伊那市御園「南信日日新聞社」
発行部数 一二〇〇部 定価 一か月六〇〇円

2 一般紙の購読

地方紙と言われている信濃毎日新聞、中日新聞、南信日々新聞、伊那毎日新聞等それに全国紙と言われている読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、サンケイ新聞、その他各種産業新聞、スポーツ新聞など村内で購読されている新聞の種類は多い。昭和四一年調査の資料(図6-71)

のは昭和四九年七月一日発行の第一号からである。以後毎月発行され、昭和六〇年一月一日号が第一三三三号となっている。頁数は一二二〇ページである。昭和五七年に縮刷版が発行され第一号から掲載されている。

(二) 新聞

1 南箕輪の新聞

南箕輪の名のついた新聞が

表6-90 日刊新聞の購読部数と普及率の推移 (村勢要覧)

年(昭和)	購読部数	普及率
26	978	82.2%
29	1,164	97.2
30	1,151	98.4
32	1,150	98.4
35	1,195	93.7
38	1,426	107.9
40	1,452	106.8
42	1,452	106.7
43	2,030	140.7

新聞名	購読部数	100	200	300	400	500	600	700	800	900
信 毎	833									
朝 日	302									
毎 日	50									
読 売	50									
中 日	374									
日本経済	10									
産 経	5									
計	1,550	1世帯部数1.2部(世帯数1.402)								

図6-71 南箕輪の新聞購読状況(昭和41.9「上伊那誌」より)

によると長野県関係の記事が多い信毎が最も多く、次にやはり県南の記事の多い中日が続いている。信濃毎日新聞は昭和一七年、新聞戦時統制により、県紙としては信毎だけとなる機会に恵まれ、それまで北信地方中心の地方紙だったのが一躍県下全域をカバーする、全国でも名を知られる地方紙へと発展した。

昭和五〇年代に入り、電送による全国紙の印刷が可能になり猛烈な販売競争が行なわれた。発行部数の多い全国紙の伸びが大きく、本村においても、読売、中日新聞の部数が伸びたといわれている。しかし、最近における購読部数の変化は配達区域が複雑に入りこんでいたり新聞販売店の系列化などから正確な

数字をつかむことはできていない。

次に、新聞の普及状態はどうであろうか。村勢要覧による統計は昭和四三年までで、その後のものがないのは残念だが、購読部数は着実に伸びて来ていることがわかる。普及率もあがり、昭和三八年には一

〇〇%を超えている。昭和四三年には一四〇%あり、その後の各新聞紙の部数増加を考えると、現在では、平均一世帯二紙購読時代に入っているのではないかと考えられる。現在一般紙の一月の購読料金は一九〇〇円である。二紙購読するとなりの出費になる。それにもかかわらず購読部数が伸びているのは、情報伝達手段としての記録性、地域性という新聞の特性を最大限に生かしているからであろう。テレビが急速に普及した昭和四〇年代、一時新聞の危機が言われたが、新聞はその中から立ち直って、村民の間になくはない情報源として定着してきていると言えよう。

四 ラジオ・テレビ

1 ラジオ

わが国でラジオの本放送が開始されたのは大正一四年七月である。その後各地に放送局が開設され、ラジオはしだいに全国へ普及していった。伊那谷へ強力な電波が届き、ラジオが普及し始めるのは昭和一三年一二月、松本放送局が開局してからである。それ以前にもラジオ受信機はあったが電波の届き具合、受信機の性能や価格が高いことなどから、ほんのわずかな台数しかなかった。昭和一四一五年から普及し始め、戦争の始まった一六年には前年の倍近い契約数となった。戦事中のラジオは音と言葉で戦況を伝えるマスメディアとして当局によって活用され、受信者にとっては臨場感あふれる報道として受けとめられていた。そして、戦争末期には、敵機の襲来を即刻伝える情報手段として活用された。このため、戦時中にもかかわらずラジオの普及はあまり衰えを見せなかった。しかし、普及率から見ると、後に出てくるテレビのような爆発的な伸びは見られず五〇%を超えたのが、松本放送局の開局後一〇年以上を経た昭和二五年であった。その後順調に増加しているが契約数のピークは昭和三三年の八八%であり、その

表6-91 ラジオ・テレビ契約数と普及率

(村勢調査)

年度	ラ ジ オ		白黒テレビ		カラーテレビ	
	契約数	普及率	契約数	普及率	契約数	普及率
24	532	46.8				
26	662	55.3				
27	694	58.6				
30	976	83.4				
31	989	80.0				
33	1,098	88.0				
35	912	71.5	194	15.2		
38	234	18.4	1,036	87.2		
40	28	2	1,230	89.0		
42			1,268	93.2		
44			1,320	97.5	27	1.0
52					1,720	84.0

後は急速に低下している。これは、テレビの普及による影響で、全国的に同じような傾向を示している。

ラジオの契約数はしだいに減少していったが、ラジオが普及しなくなったわけではない。昭和三〇年八月トランジスタラジオが発売され、ラジオの小形、軽量化が達成されてからは、一台のラジオを家中で聴く時代から、一人一台の時代となり、好きな番組を好きな時間に一人で聴くようになって行ったのである。腰にラジオをぶらさげ、農作業に励むといった姿が見られるようになったのも、携帯に便利な小型ラジオが行きわたってきたからであった。

2 テレビ

昭和二八年二月一日、本放送が始まったテレビが普及するのは、ラジオに比べはるかに短い時間であった。村の統計で見ても本放送開始後一〇年で八七%の普及率を示している。

見知らぬ世界の国々の様子や中央のできことが映像と音で伝えら

れるテレビは、地方の人々にとっては大きな驚異であり、まして、現場の状況を生々しく伝えるニュースは迫力に富み、ラジオに比べテレビの魅力ははるかに大きいものであった。

昭和四〇年代に入るとテレビは茶の間になくはならないものとなつていったのである。

テレビのカラー放送が東京と大阪で始められたのは昭和三五年である。カラー放送が充実しカラーテレビが各家庭に行きわたるにしたがつて、白黒テレビは、カラーテレビにその座をゆずっていくことになる。南箕輪の資料で見ると昭和四四年が白黒テレビのピークでその後はカラーテレビが中心となつて行くことがわかる。

ところで、このころから茶の間には大型のカラーテレビを置き、個室には小型テレビを置くというような複数テレビ時代に入つていった。また、VTRの普及により画面を録画することが可能となり、好きな放送を録画しておいて、暇な時ゆっくり見るとか、画面を保存しておくなどの新しい利用法が可能になり、テレビはますます生活に密着した存在となつて来ている。

第九節 文化と教育

一 学 芸

(一) 短 歌

1 明治以後和歌・短歌の流れ

近世の和歌はおおむね古歌集の『万葉集』『古今集』『新古今集』にそれぞれが基準をおいたために、一面では近世の生活に密着しない点があり、創造性に乏しいところがあり類型的・概念的な傾向があった。

明治になつても初期は旧態依然の作品ばかりであった。二〇年代になると漸く和歌文学の改良論も行なわれ、いわゆる新派短歌運動と称される和歌革新の動きが盛んになってきた。新派短歌とは旧派和歌に對して呼ばれる名称で近代短歌のことである。

旧派が伝統的流派による古習墨守の題詠主義に對し、新派は、自由な個性的な実景、実情主義である。旧派歌人は貴族・国学者・僧職・神官・大地主等であり、新派は国民文学としてすべての層、特に若い人たちの手によることとなった。

明治も三〇年代になると正岡子規の『歌よみに与ふる書』と謝野鉄幹の『亡国の音』等によって旧派を脱して近代短歌への提唱があり、その主張を裏作によって示した。与謝野鉄幹らのロマン主義、尾上松舟らの叙景主義、島本素彦らの写生論による写実的万葉主義、自然主義を主張する流派、若山牧水らの主情的印象主義、前田夕春らの理知的客観主義等々の主義主張があり、明治後期から大正にかけては、そ

それぞれの結社や会員組織による雑誌の発行があり論争があつて歌壇はかつてない賑わいを呈し、作歌人口も庶民層に拡大して増大した。

昭和になると自由律短歌やコロタリヤ歌人による作品が現れ、戦時になると愛国調がうたわれたが、一般的には他の文化とともにまひ状態になって終戦を迎えた。

終戦直後は短歌は俳句とともに「第二芸術」であるとの批判もおこり歌壇はかつてない不振状態に陥ろうとしたが、間もなく結社雑誌も戦前に戻り歌集の刊行、短歌文学書も続行され量的にも盛況を示して新しい歌風も多彩に現れた。

アララギ派の短歌 アララギ派の短歌は明治三〇年代の初め、正岡子規（一八六七—一九〇三）が短歌革新を提唱し、万葉集を重んじ、写生を旨とすべきことを主張して充足した根岸短歌会を源流とする。子規の没後は歌誌「馬酔木」の発刊によって門下はこれによったが明治四一年「アララギ」が刊行され、伊藤左千夫とその門弟である斎藤茂吉、島本赤彦・土屋文明らによって子規の説を継承深化し歌壇の主流を形成しつつ現在に及んでいる。

アララギと信州との関係は左千夫在世当時から深く、特に島本赤彦（一八七六—一九二六）は諏訪出身で小学校訓導、校長、視学等を歴任し教育界においても偉大な存在であった。その影響は県下の教育者に及び、アララギに傾倒して作歌を志す者が多く、勢い、その影響は教員たちにも及んだ。赤彦の影響を直接受けた本郡出身の教師には松沢平一・松井芒人・三沢孔文・藤沢古実等がある。これらの人々の外にアララギ派の著名な歌人がしばしば本郡に来て上伊那のアララギ派の人々に強い影響をもたらした後述するように本村の中にもこの派に属する歌よみが出た。

太平洋戦争終了後間もなく長野市に発行所を持つ「ヒムロ」が発行されて甲信越のアララギ派の会員はこれによる者が多かった。同誌は発行所を松本に移して現在に至っている。

「流域」は昭和二二年、松井芒人らによって伊那に誕生した。これはアララギの歌風を目標とし、その分身的存在であるといえる。

「国土」は、昭和一四年島本赤彦の高弟藤沢古実（一八九七—一九六七）主宰によって創刊され、二五年まで続いていた。その後、しばらく休刊していたが四〇年再び復刊した。しかし古実の死によって廃刊になった。

潮音派その他 「潮音」は大正四年太田水穂（一八七六—一九五五）らによって創刊された。水穂は東筑摩の広丘に生まれ、長野師範を卒業し、しばらく教師生活を送った後、明治四一年上京して若山牧水らの歌誌「創作」の刊行にも関係した。水穂は芭蕉に傾倒し、さび、しおり、におい、響き等芭蕉が俳諧に提唱した要素を短歌の世界に移し、象徴主義による新風を開いた。アララギの万葉調写生主義に対立する新古今の象徴主義を主張した。

「白夜」は昭和三八年に潮音の象徴的傾向による宮原茂一らによって創刊された。茂一の死後は宮原あつ子によって継承されている。現在は潮音、白夜系の連中が一緒になって「上伊那短歌会」を結成している。

「美穂」は大正一一年高遠町において豊島晃（一八九二—一九四五）によって創刊された。晃は弟の烈（逸名）とともに窪田空穂（一八七七—一九六七）の主宰する歌誌「国民文学」によってその指導を受けた歌人である。「美穂」は昭和七年廃刊になった平明な現実主義的傾向を重んじた。

2 国学者並びに平田門系の和歌

江戸時代中期以降勃興した国学は幕末になると地方にも浸透してき
た。さらに明治初年には平田篤胤没後門人が出て平田学を信奉する人
たちが本村にも出た。

元来国学の先達たちは和歌を作ることと学問をする方法の一つとし
ていたから、国学を学ぶ者は必ず和歌を作るというならわしがあっ
た。本村にもその風を受け名主や地主階級の国学を学ぶものにしたが
って作歌する者が出た。とりわけ平田門流は国学の伝統をついだ花鳥
風月を詠ずるばかりでなく、敬神尊王愛国の思想的な感慨をうたう傾
向のものが多かった。

春の田をかへすがへすも咲き匂ふ花に心をつくる賈通の

賈通

御行

草も木もなびく神代に立ち婦里君が御幸にあえるうれしき

〃

御幸を祝ひ奉りて

いつる日の国のさかへはますかがみ曇りなき世に逢ふぞうれしき

穂高孫三郎



図5-72 賈通の石

賈通（一八八七）は本名征矢五郎吉（五六五）塩ノ井
幕末から明治にかけて利支や真白らの影響を受けていると思われるが
むしろ平田派の傾向の歌が多い。前記「春の田……」の歌碑が塩ノ井
の国道沿いに建てられている。

「南殿里人六人一首寿碑」の和歌と作者

南殿行者坂の中途、西側にあった龍崎開境内にこの碑がある。碑陰
には「安政六年己未歳三月十八日」とある。

進斎母大綱みし子 時年八十二歳

ながらへて鈴のかゝるも嬉しきに君が恵みをかきねつるかも

織部 清水政守 時年六十四歳

いつしかもいはたのをの月影にぬれて吹良ん秋のはつ風

小文治 有賀其翁 時年五十九歳

千早振松のを山姥神垣にかはらぬ春の花も咲きける



図5-73 南殿里人六人一首寿碑



図6-74 仙翁先生筆塚の碑

油言 有賀光敏 時年五十九歳

竜川を月もわたりて筏船こぎゆくかみに千鳥鳴くなり

次郎兵衛 有賀守義 時年九十九歳

多なびける霞のなかをこえゆかむ名こそこの関の花の盛りに

重左衛門 清水光康 時年五十一歳

世の中のうつるならひもさく花は昔の春の匂いこそすれ

有賀光敏（一八〇二—一八六八）通称はその号。農事の傍ら諏訪の武居見龍について詩歌を学び、また書をよくし近郷の子弟にも教えた。その編著に「追斎輯録詩歌集」がある。没後その子弟によって「追斎先生筆塚」が桜が丘に建立された。選文は本書の武居用拙である。

神陰にその漢詩（後出）と和歌二首が刻まれている。

南殿の人たちの和歌

春風はまだ寒けく窓の戸を開るも惜しき梅の花香

南宗

打渡す風の末の色見えて若葉深ふ木下の里

初年に羽うち交はし舞ふ鶴の千歳の松に鳴き初めにけり

幾かなる秋津島根の松が枝になれ住む鶴は万代の声

霜さゆる月の光も匂ふかな細枝に三つ四つ梅の初花

春立つや霞初れば鶯の声もとかにうたふ山かな

千まち田のうるはんばかり横井戸の水し来しなばうれしからまし

積るときかざしの花と思ひしが今咲く見れば手折る枝なし

夢ぞとは常にいへども東の間に今日の祝に逢ふぞうれしき

匂ひぬる花のさがけはこりに早咲き初むる庭の梅が枝

夏蛭よし尚秋蛭よし日本の國にまれなる蘭ぞかきける

御車にささげてもかな信濃なる横捨山のまろき月影

うなめ等と共にふみおも学ぶかな世の嬉しさを教へきとして

蘭夜の月にかすみで見ゆるかなよしの山の花の下陰

群肝の心つくして一寸じに我墓園の道をこそゆけ

竜川

一真

敬亮

有賀光彦

同

大宗

有賀守南

国当

有賀士俊

有賀誠二

清水徳光

清水政雄

山口和一

おしめども春はかへらじ散る花を袖につつみてかたみにはせん

野村黒尾子 南殿

有難く拝す心の通じしは千草の花とあらわれにけり

原新吾 大泉

神の木の雪にそひへて曉の気高く見ゆる蔵神の森

原正章 大泉

ます純真に澄みたる鵜亀の齢を共に写しては見ん

信隆

四季ありて皆それぞれに変われども心は同じ六つの玉川

輝濟 木下勇久保

年月の重なる儘に名にめでて千代をへなりに興竹の杖

眞平 山崎清助北殿

3 潮音系の短歌

桑の葉の風りは青く提灯の灯に照らされて我が帰るなり

青山樺三郎

かの暗くはあはれ山鳩吾れもいつか山鳩となり泣いているかな

同

青山樺三郎（一八九一—一九七二）本名松沢修一郎。田畑

若くして上京、府立一中から第八高等学校、早稲田大学に学び、さらに長野師範学校を卒業して大正六年より昭和二年まで県下の小・中・高校に教鞭をとった。

短歌をはじめ若山牧水に師事したが後に太田水穂の指導を受け「潮音」に作品を発表した。大正一一年松本在住のとき同志と「山河社」を結び歌誌「山河」を主宰した。大正一五年「山河社」は解散されたがその後は小学校長を歴任しながら作歌道に精進し続けた。当時長野県の教師たちは多くアララギ系に属している中で異彩を放った。歌集

に『山と太陽』『山河』『帰去来』等がある。
なお南箕輪小学校校歌はこの人の作詞である。



図6-76 倉田月歌集と「箕輪の月」

訪友のたたへて云ふにはこらしく仙丈岳と雪の山さす

倉田月歌

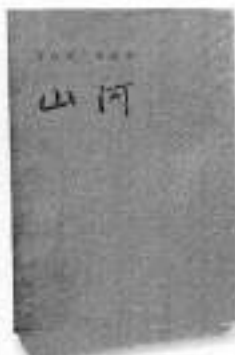


図6-75 青山樺三郎歌集『山河』と『帰去来』

かくあるは必然性と謂ひながらひそかにこころ開き爪切る

同

月哉は明治末年から作歌を始め太田水穂が「潮音」を発刊すると直ちにこれに参加して社友となった。水穂没後は四賀光子に師事した。昭和三十七年同志とともに「かたばみ会」を結成した。三十九年七月村公民館にその活動の一環としての「南箕輪短歌会」発足の中心となった。四〇余名集り、「かたばみ会」は発展的に解消した。四〇年には合同歌集「穂波」が発刊され第二号が出るほどに勢いづいた。この会は流派にこだわらない集まりであったが、指導的立場にあった小学校長中原大三の転出、月哉の他界によって漸く盛んになろうとしたところで瓦解した。

月哉には歌集「箕輪の月」正統二篇がある。

前記「訪友に……」の短歌は中部保育園西に教え児等によって建てられた碑に刻まれている。

朝光は西駒ヶ嶺に射しそめてやがて伊那谷あまなく照らす

堀伊波穂 久保



図6-77 堀伊波穂歌集「仙丈の見える里」

経ヶ岳扇状地帯ひろらなりみ祖も海もここに終す

同

堀伊波穂「白夜」会員。歌集に「千丈岳の見える里」がある。

かまどの火焚きみて焚く老母あれば炊飯器買ふとふ吾娘なだめつ、

滑川朝千代御子栄

ときならぬ露と見しは休田にひろがりて咲くおもだかの花

同

滑川朝千代「潮音」会員、歌集「おもだかの花」がある。

ふくよかな頬に流るる雪あり雪に埋れし路傍の地蔵

有賀殿夫 南殿

有賀殿夫は俳句も作るし日本国も描く多趣味な人。はじめ「白夜」の会員となった。

「白夜」および「潮音」系歌人による「上伊那短歌会」の作歌と作者を左に。

染め直す毛糸のかなの貴の色反射まぶしく春の陽はさす

原正秋 大泉

台風の振りこぼしたる朝の雲を踏みにじりつつ種刈り急ぐ

城取彦三郎 久保

おかつぱの髪にリボンをつけし娘は初潮をわれに告げてうつつむく

小島ゆき子 神子栄

寒さをも忘れて雪遊びする孫の手のしもやけはぶつくりはれる

太田つや子 神子栄

忽然と行手覆ひし巨大なる裏富士見えてバスどつとわく

宮坂幸蔵 久保

針持てばおのつと心静まれりシルクワールのやはき感触

藤沢弥栄子 田畑

さわかき若葉となりて衣替へ競ひつつ映ゆ大空のもと

宮坂おはへる下びの岩清水父母の墓前に涙みてまゐらす

原 利江 神子榮

4 アララギ・ヒムロ・流域系その他の短歌

村人ら利持ちよりて低利資金償還延期の願書作る

仁科弥生 神子榮

戦ひに行く勇なき父の墓辺の石を拾ひて行きぬ

加藤明治 塩ノ井

いとけなきさきはひなりし日を憶へり木苺赤き山に這入りつ

同

父母の老いつもりけむみちのくの満ちふ雪の光わびしも

日戸力雄 田畑

日戸力雄（一八九三—一九六三）晩年は伊那市に住む

同

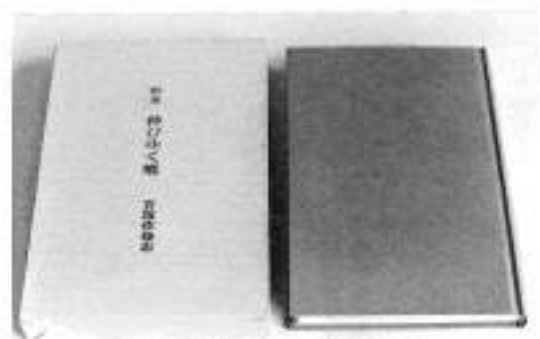


図5-78 宮坂佐登志歌集「伸びゆく郷」

泉湧く南斜面のあたかき雪解の土平にはこべ花吹く

原 正寿 大泉

肌にしむ夕風受けて庭に見る仙丈ヶ岳の明るき夕映

宮坂佐登志 南原

幅広き北本市内の大通り二轢連結のバスのつらなり

同

宮坂佐登志 本名智「アララギ」「流域」「ヒムロ」の会員。歌集に「伸びゆく郷」がある。

襟乳に曉起きて庭に見る西空紅く月輝けり

武井小夜子 南原

季節花つぎつぎ咲ける庭ありて頼り居れども心足りおり

清水氏子 南殿

草葉煙さくりておれば紅紫の盛れる上に花こぼれ落つ

清山美代 北殿

手をつなぐ道祖神を見て帰る道祖本林にカケス飛び交ふ

加藤芳子 沢尻

果敢まで工事に通ふ夫と子に子傭の懐炉を持たせやりたり

根橋君代 南原

アジサイの花時過ぎて咲くかげにすがれてかたき紅花の種

堀井八重子 沢尻

二世らの代となり元拓地にも日曜は日曜のムード漂ふ

中村春子 南原

野炊き終え道野の峰にともる灯を見つつ車に積む和重し

征矢まつ子 塩ノ井

亡き姑に教はりたりし数字より減塩にして味噌を醸しぬ

原恵淳子 大泉

南浜輪船歌会員 人と作品

草家にあかときめざめわがおれば黒つぐみきて鳴き止まぬかも

藤森茂子 北殿

植え終へて腰をのびしつ見渡せば稲葉に夜露の玉光る見ゆ

有賀利道 北殿

春雷のとどろき止みて谷川の俄かに顔音高まりにけり

北条 優 北殿

寂れし身よこたへおれば今日もまた強が寄り来て就辺に鳴く

有賀なつ子 南殿

陽だまりに漬菜そろへるばが背に隣がはひり来る

小島ひさ 神子榮

初刈りに吾を案じて聞く嫁の優しきことばに靡み忘るる

丸山柳武 神子榮

いそいそと針運ぶ手はつつまやか眼鏡をかけて母は衣縫ふ

原 泉 大泉

軒先を通る度毎大根に手を伸べて見る加減いかにと

太田清子 神子榮

頑なに振みつづける老いし夫心相らげん今日も文書く

高木ときと神子榮

名も知らぬ秋の小草の一もとが刈田の畦に地につきて咲く

萩原澄子 久保

寒き夜は我家の風呂が一番と勤め滞りて吾子湯に浸る

小林神沙子 田畑

甘露煮か漬物にせむかと秋茄子にしばし見とれぬ紫の濃さ

山崎みよ子 南殿

毎日の日記のはしに歌を書き拙きながら生きがひとしつ

原かずと 神子榮

胸ヶ岳に鶴鳴笛の影立つもいつになく寒き野良あけとなる

嫁がせし娘を促びつつこの夕べ妻とテレビを頼り見て居り

山崎や十子 南殿

岩登る赤きダイヤルも陽を受けてピンを打つ手に落石止まらず

中村隆太郎 南殿

梅雨けむる白樺の湖静まりて小舟いくつか岸によりそふ

原 光治 神子榮

羽織地はできないままに今ここにかたみとなりて母は逝きけり

蜂谷伊佐樹 北殿

札に行きもらひて帰る路の苔はる苦き味をにぎはす

山口実子 北殿

西雲山の端遠く飛ぶ鳥を眺めて独り雪原に立つ

中林慎子 南殿

脱校に追はるる日々に野も山も秋のもみぢは増して行くなり

蜂谷 誠 北殿

初孫が来るかと夫はおせい且距離にあたり電車待ちおり

堀恵美子 久保

春雨の夜はけぶりて沖の火のごと北殿団地あかりの見ゆ

有賀静子 南殿

立春に不渡検さへ凍りつき朝顔めきてバスに間に合う

上原千尋 北殿

いく度か又歸ひ直すこの市国学生寮より戻りて五年

小林寿美 田畑

畦草の中に一本みそはぎの刈るには惜しと庭に移せり

有賀里子 北殿

梅雨やうと芽生えてふくらみぬあの上の枝心になるらむ

丸山清一 久保

倉田はな 北殿

旧の土手には投げ出して野良のひる筆運ふ手に沢の匂へり

北原つたえ 沢尻

産報会以来久しき工場に再び出でん百姓われも

沢田光雄 北原

さきやかに生きたしと思ひ今あるを祖母の墓前に詣でて告げぬ

伊藤久子 小学校

雪なさに種蒔きの影立ちて野良明近き春とはなりぬ

北原とみえ 沢尻

初日より紙一ぱいに文字はねて孫の面影まざまざ浮ぶ

高木まつ子 神子榮

以上の湖音楽やアララギ系に属さない人と作品を左に。

冬の林このひとところ陽のぬくし子どもの声の近づきて去る

高木澄夫 神子榮

寂しさは夕べますます深まりて後の梢の雪の輝き

同

高木澄夫「創作」会員となる。歌集に『冬の林』がある。

子が植ゑし花かんらんはそれぞれの色にさへつつ秋たけにけり

小原青蝶



図6-73 高木澄夫歌集『冬の林』

初水張りしと告ぐる子等の声朝のしじまに高く聞こゆる

同

小原青蝶、川柳文芸の項参照。短歌は「美穂」による。白蓮歌句集

「秋寂」がある。

なき人に見せばや愛ら秋の来て西天竜の福のさざ波

白馬堂 塩ノ井

白馬堂は本名征矢次郎、煤月と号し、俳句も作った。この歌は塩

ノ井神社南の歌碑にあるものである。

(二) 俳諧から俳句へ

伯先や鶴翁なき後本村の俳文学はその余勢を受けて命脈を続けていた。

高木布精（一八二一—一八四）は文化九年木下の萩原家に生まれた。通称は要助、後に一郎といった。母は神子榮高木甚右衛門の娘。木下の「きくや」に嫁入りして要助をもうけたが後継縁して要助（布精）を連れて実家に帰った。

布精は高遠町の某呉服店の番頭になったが商売よりむしろ文学を好み風雅を愛していた。たまたま商用で岡崎に赴き鶴田卓漁の門をたたくに及んでいっそう俳諧に興味を持ちついて学ぶようになり、結局は商人に不適格ということで呉服屋をやめて家に帰った。当時伊那には越後長岡生まれと伝えられている漂泊の俳人井上井月がいて諸方を回っていた。布精はこの人と風交あり、明治初年に親交のあった伊那市土牧の人唐木菊園と共に俳諧を興行している。

人声の空につかへて花日和

春の景色を見せる小唄

市に振る櫓桶の若鮎盛りわけて

そばへよる犬を足で追ひやる

菊園

井月

布精

同



図6-80 布精の短書

(後略)

後年伊那俳壇の大御所となった孤島の馬場凌冬はその師事していた空羅なき後は布精の指導を受けている。井月とともに興行したものである。その一部を上げる。

楓の葉やもう戻り来る手習子
残雪を産ぐ庭の打水
臘月ろうげつの支度しどの調ふて
俵の外へ廻る米虫

凌冬
井月
布精
冬

(後略)

なお布精は布青といったときもある。その俳句を左に

東風吹くや柱につたふ紐の塩
宵に来て居たか何処より初からず
梅咲くや軒に干したる厨布くふ回

布青
布精

布精の門人は主として木下・田畑・神子榮・横山・小沢あたりにかけて多く、文化・文政年間の俳諧の盛んであった後を受け継いで上伊那俳壇を盛んならしめたのは布精の力で、その後は凌冬夫妻によって継がれたといわれている。明治一六年に『蜀魂集』に段文を書いている。

明治中期になって正岡子規が連句非文芸論を唱えて以後連句は微々たるものとなりほとんど俳句だけが作られるようになった。俳句という語は寛文三年（一六六三）の尾鱈集に見られ、元禄ごろにも見られるが一般化したのは明治になって子規の俳諧革新運動が活発になってからで俳諧の発句の意味から五・七・五の短詩を俳句と専らいうよう

になった。
時代が進むとともに俳句の世界も時代に適応しようとしてさまざまな運動があり流派の消長があったが本村の人々はにわかにならずに一新することもできず布精なき後は馬場凌冬、那美夫妻の影響を受け、いわゆる旧派の流れの中にいた。

明治三年に凌冬が先達となって伊那市坂下に円熟社を設けると多くの人がその傘下に集まった。布精門下もまたこれに加わった。凌冬は明治三五年九月に没したがそのあとは妻那美女を指導者に推し、小林翠朝が社長となって結社は維持された。

明治二七年荒井某人が円熟社の支社ともいべき嬌風社を木下に興すと当村久保からも一貫、美和女、月哉・鶴州・都外・いね女等がこれによった。

一貫（一八七一—一九三六）木村徳太郎、詩歌句庵一貫と称した。箕輪町三日町に生まれた。後久保に住した。若いころは農業に従事する



図6-81 一貫句碑（日ぐらし塚）

傍ら島山啓について漢字を修め詩文の素養を得た。また、清水宗叔について和歌を学び、ついで俳諧を学んだ。はじめ箕輪吟社を起し後進の指導をした。久保に住するようになって円藝社の支社ともいうべき金麗会を創始した。さらに伊北の数社を合して北竜会を創立し初代会長となり、当地方俳文学界の先達となった。円満無碍の性格で流源のいかんを問わず多くの結社とも関係し、交遊も広く風雅の士であった。昭和十三年没（六八歳）翌一四年三月門人・知己等によって「日ぐらし」塚が建立された。

日ぐらしや目先にせまる夜の帷

一貫

この塚は久保旧伊那街道沿いの西側にある。この塚建立の日集る者五〇余名。詩歌句庵において追悼の俳諧連歌「歌仙行」を塚の句を枕にして興行した。

網や眼先に迫る夜の帷

一貫

水より上る月前の冷

利支

露ながら風尾意ここと折りとて

松翠

越かれたる見の木屐より脱ぎて

清流（寛暢）

（後略）

このときの宗匠は根津芦丈、集まった人々は久保をはじめ近郷の一貫生前の知友たちであった。

ちなみに芦丈は昭和にいたっても俳諧連歌の宗匠として、俳諧連歌の命脈を保った人である。

日ぐらし塚建立記念句集が発刊された。歌仙の外遺作百句余と門人知己追憶の句を載せ序文を芦丈が書いている。そのうち本村人の追憶句を左に

彼岸会の鐘又響き響きかな

久保 松翠

春泥や灯火消へて行きなづむ

北殿 一風

呼び止らん人影淡し月籠

久保 北斗

この風なるを知らず花の春

雪峰

花に風語行無常の世なる哉

海山

雪崩来て訪はん方なしのち導

芝園

香焚いて柳一枚を手向けり

丹月

草しきや仰げば句碑あり藤ありて

伊波穂

月雪の昔語らん舌の花

塩ノ井 月

其の徳の朽ちぬ碑文や舌の花

松亭

井藤やわく碑面を撫て、舌え返る

水師

この記念句集に載せられた一貫の一二五句より二句摘録する。

はなびらの崩れてゆらく牡丹かな

美和女

岩かげに透す樓あり百舌の声

美和女

美和女（一九一三）東松園美和女、久保の人。凌冬門下で後那美女に師事す。

寝ころんで留守居ながら遠花火

美和女

庭掃除済んで振舞ふ新茶哉

美和女

その他嬌風社に属した人の句

皮足袋をはき飽きもせぬ翁哉

月説

十の糸は数知らぬ子も手まり哉

覺州

この雨に色香もさめぬ桜かな

栗

送り出す客に春待つ名残哉

みね女

明治三三年南殿龍興閣の奉額に近郷の俳人が句を寄せている。そのうち本村分を左に。僱主は「正風会」山崎清高・山崎大三・鹿角健雄

・池上貢で宗匠凌冬の選である。

どれもみな食はれそうなり春の草

梅月

晴した友の来にけり春の雨

泉山

残る雪の煙もたはむや花のちり

光彦

一声は神のみつげやほととぎす

日の当るまでの光や枝の霜

茶の花の語や春の雨

声ふるく鳴くや新田の初かはづ

旅人の休んでも居る清水哉

一羽来て人の目につく鶯哉

明治二九年八月南殿の池上（おのゑ）と鉄筆館一筆は『明治俳諧百人集初

篇』を編集起板発行した。この集は遠くは秋田、武州、甲州等の俳人

の句もあるが大部分は諏訪、伊那の俳人のものである。芭蕉の肖像と

句、其角、嵐雪の句を巻頭におき一頁に一人の句と俳画を載せた雅致

ある俳句集である。そのうち木村関係の採録されているものを左に掲

げる。

新年のゆきや袴の朝きよし

袴着や子の下駄直す親心

月や□花見の里やはととぎす

降り出して一声雨の時鳥

明治三四年鼎の子貢は父の志を継いで『明治俳諧百人集後篇』を編

集起板発行した。そのうち木村関係の採録されているものを左に掲げ

る。

白雪の中からせわし梅の花

米の飯を占ふ二百十日哉

花見えて一汗ふくや上り坂

赤心を語る一と問や茶立虫

姿のまやうがほしや菊の花

見つくせぬ秋の鰯の野山哉

戻り気は誰もつかぬや花の山

真清水の音の高き上御代の春

きん女

香花

酔月

源泉

拾月

芳月

大星

田畑

北殿

南殿

大星

田畑

北殿

南殿

大星

田畑

北殿

南殿

大星

田畑

北殿

南殿

大星

田畑

北殿

南殿

大星

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

明治俳諧百人集

應理は南殿有賀應理風一庵

と号す。桑山は南殿清水甲

子太郎萬本堂と号す。俳画

をよくした。文人との風交

多く辞世の句「杖に身をま

かせて彼岸まうでかな」が

墓石に刻まれている。光月

は南殿池上貢、彫刻師鉄筆

館と号した。

以上見てきたように俳文

学人口は相当数あったが明

治以後ずっと旧派の流れに

いて月並調の作句をなして

いた。そのうち我が国の俳文学界の流れが月並調からの脱却を試みて

いる風潮の影響を受けて作句上に新味を出して行こうという流れも見

られるようになった。昭和初年久保西念寺の住職鶴田方周・木村一

貫・赤羽椿翁・馬場武雄等久保の同志とともに「金蘭会」を結成し

た。金蘭会は西念寺の山号に因んだ名である。メンバーの家を回って

月例句会を催し、時には近隣の門塾社や箕輪吟社・北竜会などの会員

の来会するものもあって一時は盛んであった。そのうち宗匠の一貫は

故人となり、太平洋戦争が燃烈になり同志の死去等によりしだいに衰微

し、終戦後解散した。金蘭会会員の句を左に掲げる。

灯を遠慮して出たものの五月端

来客の顔知先つよし初笑ひ

瓢天狗思ひ思ひや泊山

竹の子の味ひゆかし育の膳

北斗 久保

近江

玉章

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

千秋

親心知らで仔馬の走り居り

渡舟呼ぶ磯堤や春の草

寝かす子に又寝かされて昼寝哉

延びぬふ節のたぐましき

桑梓の芽苞光りし雨雲ふ

雨に散る梅情しみてもおしみても

通知はふ所にはじけかし蝶遊ぶ

彼岸会や梅の遺墨に香の煙

花衣曇みつ春を惜しみけり

いたづらに孕み穂食む仔馬哉

しら雪や青田のへりを日もすがら

細りたる水も目立つや雪の川

水師は金龍会の創立に参画しその解散にいたるまで芝園と共に先達として活躍した。水師夫妻の追悼遺稿集に『白梅集』がある。馬場家の墓には夫妻の句碑がある。

森の木の遠世香に立つ老翁

水師

伊波穂 久保

水師 久保

雪峰 "

昇月 "

芝園 "

松亭 "

月哉 久保

寿山 "

松翠 山梨

一貫 久保

都外 "

いね女 "



図6-83 久保馬場水師夫妻句碑

晩や梅の白さの寒うして

近江

昭和二十二年四月俳句結社「みすゞ」社が美郷小学校において結成され、俳誌「みすゞ」が九月から発行された。この誌の選者は中村六花と根津芦丈であった。しばらくして俳句は六花、連句は芦丈がそれぞれ分担することにしたが芦丈系の人たちはこれを不満として脱退した。「みすゞ」はしばらくは連刊、欠刊をなし一時は存続さえ危ぶまれたが関係者の努力によって断続的ながら続けられ六花が選句に専念するころ——昭和三十九年ころより経営が軌道に乗った。

六花俳風の系譜は

子規—碧梧桐—乙字—月草—梅の門—六花

ということまで子規の唱え出した新俳句の流れに属しているとされている。

本村から熱心に投稿している人々と句を左に掲げる。

女坂園のどこかにリラ句ふ

春泥やボケットベル鳴る石切場

焼きあげしうぐいの腹の朱は消えず

踵子の指しなやかに春の宵

昭和五五年、南慶有賀殿夫、有賀喜代志等が中心となって「南寛輪句会」をはじめた。初めは矢島井声、後、白鳥思峯を師匠として毎月作句に精進している。会員の句を左に掲げる。

初なりの胡瓜一本友の手に

石楠や幾節白き飯道

笑む栗や子等見上げける午後三時

台風の迫る気配や草の蝶

川底に金魚草ゆれ春そこに

つばくろや国旗掲し精米所

有賀喜代志

有賀 芳子

原 みき子

篠田 洋子

長田 広子

中村よし子

滝沢 季子 北殿

酒井 昌好 "

有賀 殿夫 南殿

伊藤美智子 大泉

雲龍羽集 小鎮守の夏木立

梅雨冷や重なる足に踏まるとふ

(四) 川柳文芸

本村に新川柳作句者のあらわれたのは昭和になってからである。昭和四年北殿の小原青蝶が中心となって同志六人とともに「伊那川柳吟社」を結んだ時に始まる。初めは会員の家を回って句会をしていたがそのうち伊那や飯田方面からも入会する者が出て来たので伊那へ出て句会をするようになり句誌「川柳伊那」を発行するようになった。

句誌「川柳伊那」は号を重ねること一二二号になり、会員は二〇〇人を超えた。(昭和五九年九月現在)

北殿駅に昭和四六年八月から川柳を掲載して電車待つ人々の心を和ませている。初めは青蝶の選により掲載していたが青蝶なき後は会員の互選によって掲載句を決めることになって現在に及んでいる。

小原青蝶(一九〇二—一九七四)本名正雄、少年のころから俳句や短歌を作り仕草のころ一時作句作歌活動を止めていたが晩年にいたって川柳を作るようになりNHKや諸種の新聞に作品を発表し、当地方柳壇の先達となった。

教師といふ名で面白へ手が縮み
吸ひさしが思案のそばで仄になり

本村の川柳人口は三〇人に及んでいるが一〇年以上作句を続け「川柳伊那」の会員となっている人と句を左に掲げる

おれなりに生き抜いて来て古稀となり
風邪ひくのはがき風邪の床で読む

病院の診察待つ間の雑感

舌打ちをすれば気の済む程の日々

清水 量子

伊藤美智子

有賀敏光 南殿

有賀里子 北殿

征矢春樹 飯ノ井

中村春子 南殿

節回し繰り返して終ひ風呂

都志照子 北殿

都志照子は「六文銭上田吟社」にも所属し、篠井駅掲載川柳、伊那毎日新聞、防犯信州等の選者もした。

また、「川柳しなの」や池田県民の川柳社「すだち」によって作句を送り続けている。

童話・その他

1 童話

加藤明治(一九二一—一九七〇)

加藤明治は明治四四年堀ノ井の加藤利三郎の長男として生まれた。



図6-84 童話「水つき学校」加藤明治著

つ新聞雑誌に作品を発表した。

昭和三四年童話集「あんずの花と牛車」発行、そのころ「NHK子ども時間」などで童話を放送などもした。翌三五年童話「平十となしの花」「つるの声」など一連の短篇で日本児童文学者協会「第九回児童文学新人賞」を受賞した。

昭和三九年信州児童文学会会長となる。翌四〇年「水つき学校」出版、翌四一年には「水つき学校」によって「児童福祉文化賞」を受賞し、厚生大臣より表彰された。翌年「水つき学校」は全国学校図書館協議会より必読図書に推薦された。単行本ではこの外に「つるの声」

伊那中学校(現在の伊那北高等学校)を経て長野県師範学校を卒業。諏訪郡川岸小学校訓導となりそのころから歌誌「アララギ」へ短歌の投稿を始めた。また、短歌とあわせ童話を盛んに書き島田忠夫の指導を受けつ

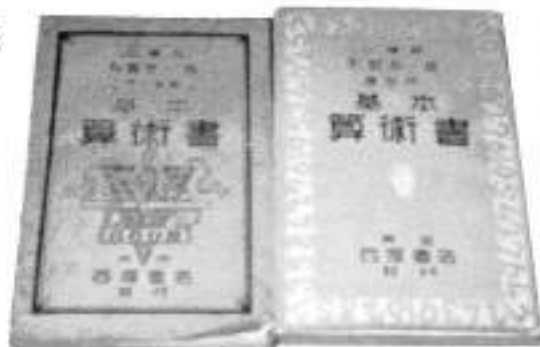


図8-86 『基本算術書』有賀栄一著



図8-85 童話『天神様』清水俊雄著

『コナシ原の鈴虫』等がある。

なお、伊那中学校在職時代に「伊那中学校校歌」を作詞した。また、昭和二六年には「南箕輪村民の歌」を作詞した。

清水俊雄（一九三〇—）

箕輪町福与に生まれ大泉の住人となった。昭和五八年童話集『天神様』を発行。

2 数 学

有賀栄一（一八八〇—一九四七）

有賀栄一は明治一三年南向村（現中川村）に生まれ、後南殿の有賀家を継いだ。明治三六年長野県師範学校を卒業し、以後県下各地の小学校に勤めて大正五年北安曇北城小学校長に任ぜられて以後は各地の尋常高等小学校長と農工補習学校や実業補習学校長を兼任した。

3 漢 詩

漢詩の作者は稀であった。迪斎有賀光敏は数十篇をその著「迪斎詩歌集」に載せている。その一篇を左に掲げる。

興、諸子泛舟、天竜川、

艇、早回舟、迎、月、来、長江、景色、固、四、開、

夜深、時、影、進、々、響、鳴、響、響、何、處、響、

なお「迪斎先生筆談」の碑陰には左の一篇が刻まれている。

立秋

懸、院、風、来、一、葉、飛、更、看、雲、雨、打、窓、扉、

長、壁、微、月、如、流、水、心、緒、悽、然、惜、昨、非、

二 教育の発展

我が国は今日就学率その他の面で世界有数の教育の普及した国といわれている。これは一朝一夕にして成し遂げられたものではない。それは明治以来、政府が近代教育の普及につとめ、また、国民が子弟の教育に熱心であったからである。

明治になって政府は国民皆学の近代教育を強力におし進めたがそれより以前、幕府の文治政策、諸藩の藩校、庶民を対象にした寺子屋教育や私塾の普及があったことを見のがすことができない。

国民皆学の教育は、一時国家の政策に添った方針と内容によって国民を戦争にかりたてたのに大きな役割を果たし、あるべき教育の姿がゆがめられたこともあった。しかし今日庶民は教育に期待をかけることと過去のいかなる時代よりも大きいにもかかわらず教育上の問題の多いこともかつてない時代である。

本村は児童全入できる保育所からはじまってすぐれた施設ある小中学校があり、地域内に高校、大学があり、さらには高等技術専門学校も

ある。

(一) 就学前教育

1 保育所の教育

幼児期は人間の性格形成のうえで最も大切な時期であると言われる。小学校入学以前の幼児には身体的生活・知的生活・情緒的生活・社会的な生活が調和的に発達するように配慮し民主社会人としての人格形成の基礎を作るよう保育しなければならない。このことは本来は家庭で行なわれるべきであるが、現在は望ましい保育が十分に行なわれない状況にある家庭が多い。そこで第七章第四節一において述べるように本村においては就学前の全児童が収容できるに足る保育所を設置し、この集団の中において養護と教育とが一体となって豊かな人間性をもった子供を育成しようとしている。

(1) 保育計画

保育所の保育目標は厚生省の保育指針に次のように示されている。
ア くつろいだふんい気のなかで、情緒を安定させ、心身の調和的な発達を図ること。

イ じゅうぶんに養護のゆきとどいた環境のなかで、健康、安全など日常生活に必要な基本的な習慣や態度を養うこと。

ウ 積極的な遊びや仕事を行なうように促し、自主、協調などの社会的態度を養うこと。

エ 自然や社会の事象について、興味や関心をもたせること。

オ 日常生活に必要なことばを豊かに正しく身につけさせること。

カ いろいろな表現活動を通して、創造性を養うこと。

キ 生活のいろいろな面を通して、豊かな情緒を養い思考力の基礎と道徳性の芽ばえをつちかうこと。

本村の保育所では右の指針に基づいて次の七領域を設定し、これを



図6-87 舟をつくるぞ



図6-88 学芸会

年齢と季節に応じて具体化した案を立てて保育を行なっている。

一 健康安全 二 社会 三 自然 四 言語 五 音楽 六 造形 七 給食

村内の五保育所は絶えず連絡を密にし、研究し合って目標が達成できるように歩調を合わせて保育を行ない小学校へ入学したときそれぞれの保育所からの児童の生活態度等に矛盾のないように配慮している。昭和五九年度 保育日程、休み、年間の主な行事、保育計画を次に掲げる。

(2) 保育日程（必要により日程を変更することもある）

期 間	保育時間		備 考
	登 園	退 園	
四月 五日			
四月 七日			
四月 八時三〇分			
四月 一時三〇分			
児童の状態により降園させる			

四月 五月 四月 五月 五月 一月 三月	九日 六日 六日 七日 五日 三月 二月	一日 一日 四日 四日 四日 二日 二六日	〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	三時三〇分 三時三〇分 三時三〇分 四時〇〇分 四時〇〇分 三時三〇分 三時三〇分	(家庭訪問) (昼食開始) (午飯開始) (午飯開始) (午飯開始) (午飯開始) (午飯開始)	年少 年少 年少 年中長 年中長 年中長 年中長
--	--	---	---------------------------------	---	--	--

注(1) 土曜日は一時〇〇分退園、日曜祝日は保育は休む

(2) 職員研修会等必要により、臨時休園や保育時間を短縮することもある

(2) 長時間保育は退園時刻を午後五時と六時まで、

(3) 保育休み（必要により変更することもある）

区 分	期 間
お盆休み 年末年始休み 希望保育 年度末年度始休み	八月一三日 八月二九日 一月三日 二月二日 三月二七日 四月三日

(4) 年間の主な行事（昭和五九年度）

行事		行事	
八	川遊びますつかみ大会	九	防災訓練・親子交通安全教室 運動会・歯科検診 遠足・祖父母参観
七	水あそび大会・七夕祭り	一〇	老人ホーム運動会参加 半振り・焼牛大会
六	歯科衛生指導	一一	七五三・健康診断 保育参観（父・母・祖父母の都合つく人）
五	交通安全指導 子供の日・母の日・親子遠足		
四	身体測定 家庭訪問 歯検診・健康診断		

(5) 保育計画の一例（中部保育所昭和五九年二月）

主題 表現あそびや集団あそびを楽しむ



図6-89 大きいものができたぞ

<p>新入児健康診断 遊戯会・お別れ会 お別れ遠足 ひな祭り・防災映画鑑賞</p>	<p>老人ホーム慰問 記念撮影・修了式</p>
---	-----------------------------

その他 各月誕生会・避難訓練・身体測定

保育実習生受け入れ（上巻・中学三・大学生等女子）

目 標	年 長	年 中	年 少	三才未満児
○寒さに負けず 元気に遊ぶ	○友達と一緒に 集団遊びに リズム遊びに 積極的に参 加する	○集団遊びを 発に遊ぶ ○寒さに負け ず元気に遊 ぶ	○寒さに負け ず元気に遊 ぶ ○友達と一 緒に遊ぶ ○表現遊び をする	○寒さに負け ず元気に 遊ぶ ○着るの習 慣をつけ る ○食器を正 しく持つ ○姿勢でこ ばさないよ うに食す
・健康				

保育を本来の目的とする保育所から、教育を目的とする小学校へ入学するについては幼児にとっても、家庭にとってもそれなりの準備がいる。小学校側にとっては、保育所でしつけや身体的・情緒的・知的能力の伸長にどんな配慮がなされて来たかを知る必要があり、保育所側にとっては、身体的、性格的、家庭的に特に配慮を要する児童についてはわけても詳細な連絡をして児童の望ましい成長発達に資する話し合いをすることが望ましい。そこで本村の保育所と学校とは何回かの連絡会を持って適正な入学措置を講じるようつとめている。ただここで問題になることは、保育所は役場の生活課の管轄、小学校は教育委員会管轄になっていることである。このことは国の段階において保育所は児童福祉法によって設置する福祉施設で厚生省の管轄に属し、小学校は学校教育法による教育施設で文部省の管轄に属しているためである。

2 小学校との連絡

以下自然・言語・音楽・造形・給食の領域略

社 会	安全・健康
<ul style="list-style-type: none"> ○約束や決まりを守り友達と協力して遊ぶ。 ○社会や国の行事に喜んで参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○寒さに負けず戸外遊びや体を積極的にする。 ○身の回りを清潔にする。
<ul style="list-style-type: none"> ○自分の行事に参加する。 ○自分の役割に力を入れて取り組む。 ○最後までやりとげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○寒さの中でも清潔に留意する。 ○雪道の歩行に気を付ける。
<ul style="list-style-type: none"> ○ルールを守りいろいろな活動に参加する。 ○友達と協力して楽しく遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○寒さに負けず戸外で元気に遊ぶ。 ○うがい、手洗いをきちんとする。
○ ○	安 全
<ul style="list-style-type: none"> ○自分のことは自分でできる。 ○遊びや運動に集中し、自分でする。 ○遊びに喜んで参加する。 ○少しのことは我慢し、友達と仲よく遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○排他を自分から知る。 ○早目に便所にいく。 ○手洗いをきちんとし、きれいにふく。 ○ぬかるみや雪道を注意して歩く。

この管轄の異なるのを解消して一元化すれば保育所と学校の連絡はより円滑になると思われるのである。我が国では学校教育法によって幼稚園を設け、幼児教育を行なうことになっている。しかし現今の実情は幼稚園の数は少なく、本村の幼児はほとんど保育所において保育されている。そして保育の内容は幼稚園の教育内容とほとんど変わりがなく、計画されている。現今の社会状況は幼稚園と保育所を一元化して就学前教育の統一が望まれている。

3 小学校の就学前教育

小学校に入学して来た児童が早く学校に慣れ教育活動が円滑に進められるようにするために南箕輪小学校の就学前教育計画は次のように立てられている。

昭和五十九年度就学前教育

ねらい

来年度就学予定児を対象として、保護者・地教委・保育所とが連絡を密にして、下記の計画に従い、入学児童の受け入れ態勢を整える。

計画

五月 小保連絡会 現一年生を担任されていた保育所の先生方との連絡
六月 小保連絡会 来入児（年長組）を担当されている先生方との連絡

結

七月 第一回来入児調査（地教委）教科書注文の関係
八月 小保連絡会 運動会について

九月 来入児名簿作成、運動会招待（表現・旗拾い）

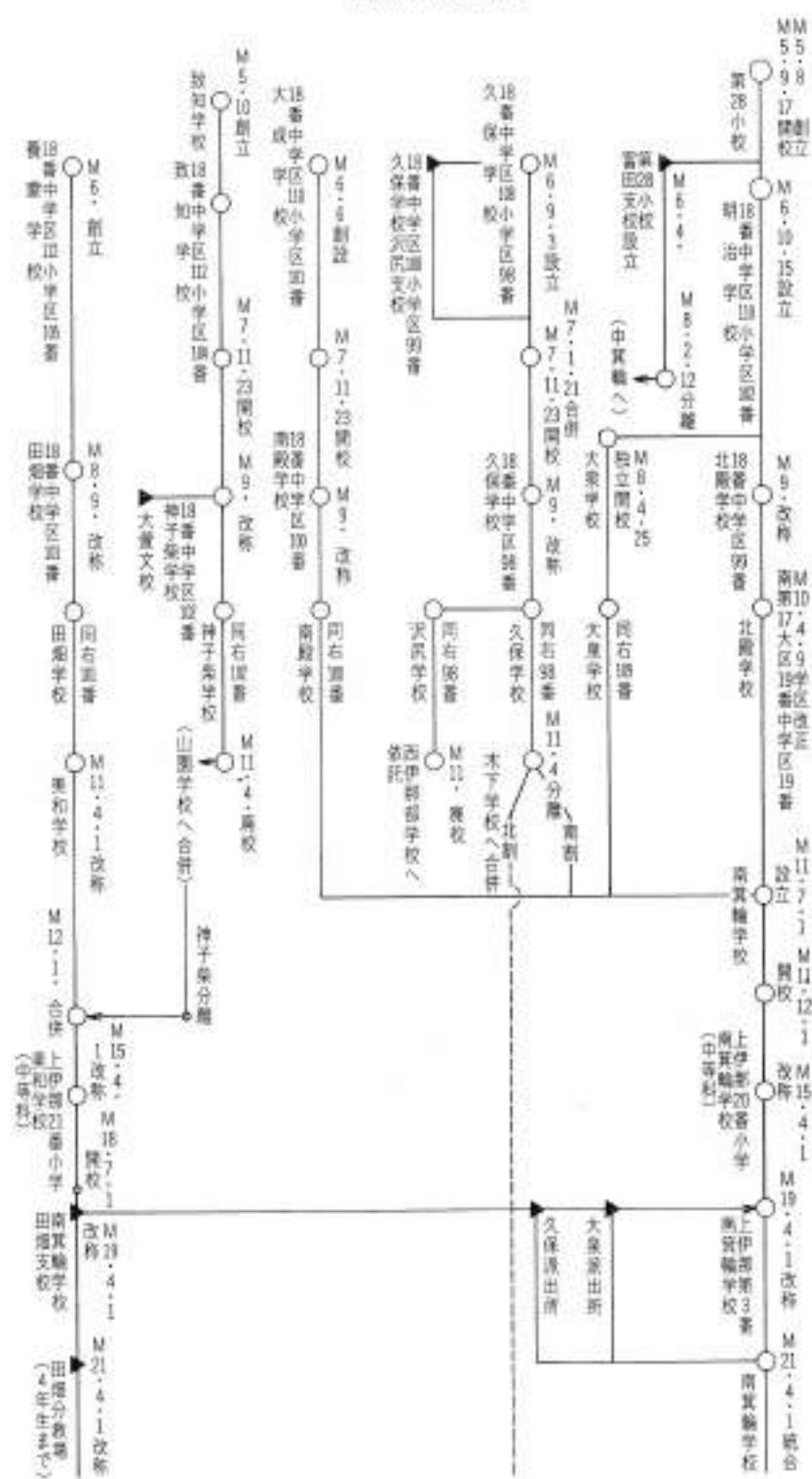
十一月 来入児健康診断（歯科・内科・耳鼻科）知能検査

十二月 来入児保護者入学準備説明会「入学のしおり」により校長講話

二月 一日入学身体測定、入学準備説明会・校長講話・PTA結成

三月 小保連絡会・用具注文・学級編成・入学準備

南其輪小学校沿革表



三 学校教育の発展

1 明治初期の村の教育

1 郷学校の創立

南其輪村に近代教育の扉を開いたのは明治五年八月久保、大泉、北

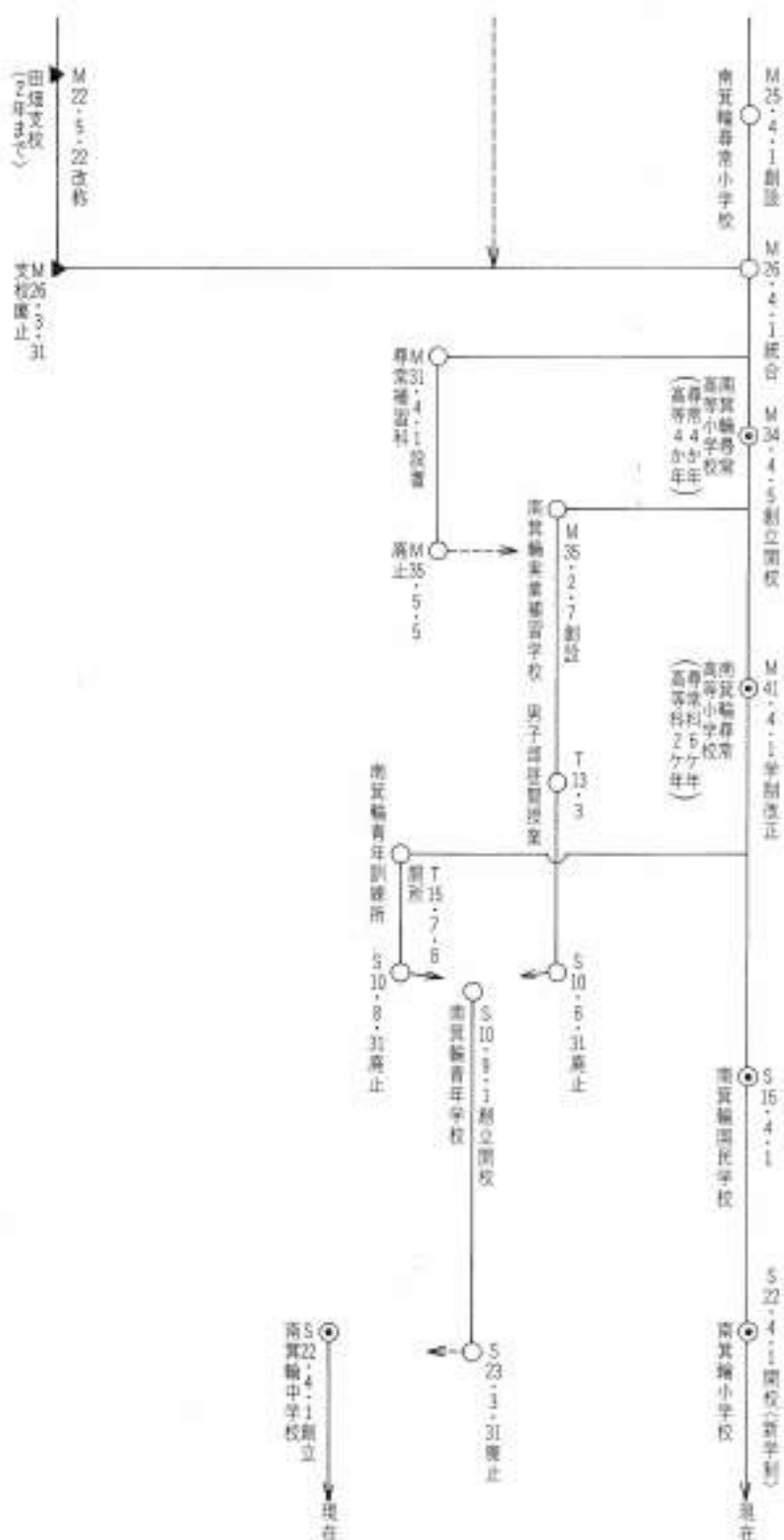
殿、南殿四か村の組合組織で北殿村松林寺に創立、第二八番小学として同九月開校した郷学校である。

郷学校というのは、「学制」が施行される以前に何か村（ムラ）が協力して資金を拠出して一般民衆の子弟の教育をめざして設立した学校のことである。筑摩県では松本に創立した県学に対する称として管

下町村に創設させた学校をこう呼んでいた。

筑摩県は郷学校を民費をもって設立させるため、まず学校世話役を民間から選任することにした。

明治五年六月二三日、權令永山盛輝は管内の主だった者を松本の県庁に招集（伊那郡から三七名）して、学校世話役を申しつけ、学校設立の趣



旨を説いて協力を求めた。その際本村からは北殿の有賀又七郎、神子柴の高木省三の二名が招集された。

ついで同年七月七日には高遠取締所（県庁の出先機関）において「第一二八小学校世話役」二四名が任命された。

これらの人々の協議によってまず、久保村、大泉村、北殿村、南殿

村の四か村組合学校としての郷学校を設立することになった。

組合による郷学校は官費によらず民費によって設立するのがたてまえであった。そこで有志者は分にに応じて出金すること、ただしこの金は学校元備金としてそのまま提出者に預けておき年々定められた利息だけ出すこと、県庁からは補助金を出し県官も分にに応じて出金し、運営の基礎となる資金出達の具体的方法が定められた。

本村では組合による郷学校は当時廃寺届の出されていた北殿村松林寺を充てることにした。

明治五年九月一日校名「第廿八番小校」として開校した。

2 「学制」時代の教育

(1) 義務教育諸学校

明治五年八月「学制」が公布されるまで郷学校は筑摩県独自の教育機関であり、他の府県にもそれぞれの方針に基づいた学校が設立され、その運営方法も教育内容も一致することがなかった。

「学制」はわが国学校制度を初めて全国的に整備統一しようとしたもので今日の日本の教育の基礎を築いた画期的な意味を持つ法律であった。

「学制」を頒布すると同時に文部省は従来各府県でそれぞれの方針で設置していた学校をいったん廃止するよう布達した。本県では前述のように六年二月からこれに添った学校を設立するようになった。

表6-92 学制による南筑摩の学校

学校 位置町村	学 校 名 称		教 員		生徒数	書庫 設備費	薪費 諸費	小使 給	出納 総計	元資金 利子	授業料	納額 合計	不足
	区	番	氏 名	年令 身分									
久保村	一〇八	九八	久保 後藤 杉蔵	二三 士	七二	一五七	四〇	一八	一七	一四七	八〇・五	六一・五六	一四二・〇六四・九四



図6-3 久保学校

明治六年一〇月、二八番小校は明治学校となった。

明治六年九月には久保学校が組合立から分かれて独立開校、その支校の久保学校沢尻支校も開校した。

同六年六月南殿村に大成学校開校。

同年田畑村に養蒙学校開校、同七年十一月神子榮村に致知学校開校。ただしこの学校はすでに明治五年一〇月に創設されていたものを学制の趣旨にのっとった学校一〇四番致知学校と称したのである。この致知学校は明治九年に神子榮学校と改称すると同時に大倉支校をもった。

しかし一一年四月山園学校（現伊那市）へ合併のため廃校したが翌一二年一月にはこれと分離して、田畑学校を改称した美和学校に合併した。

明治六年学制施行による本村の学校は次のとおりである。

(2) 「学制」の教育内容

「学制」による小学校は尋常小学校を上下の二等に分けこの二等は男女共必ず卒業すべきものとされた。

下等小学では算術・算術・算術など一四の教科があった。また上等小学には下等小学教科の上に算術・算術・算術など四科目があり、さらに外国語、記簿法など四教科をとり入れてもよいとされた。このように「学制」においては教科の数が多く、内容においては国語科的なものと理科的なものが多かった。さらに洋算もと入れられていて、藩校や寺子屋の教育内容とは大きく違っており西欧風の教育内容をとり入れて行こうとする意図がうかがわれる。

就学年齢は、下等小学は六歳より九歳まで、上等小学は一二歳より一三歳までに卒業させることを原則とするが事情によっては断断を加えてもよいとされた。

文部省は「小学教則」を編成し、これらの教科を発達段階に応じてどのように教えるかを示した。これによると下等、上等小学とも八級

久保村ノ内	一〇八	九九	沢尻	福沢清三郎	五八	農	一二	二三	四	三	五	二四	一五	五	二〇	四
南殿村	一一〇	一〇一	大成	芳原雄也	二八	士	三〇	五六	「十九」	一	四九	一〇五・七二	一・二九	四五	四	
北殿村	一一〇	一〇二	明治	矢部 盛堂	四二	士	六六	一四四	二五	一二	一〇一・一三	八九・八〇	二〇・二二	一一〇・〇二	二・九八	
神子柴村	一一二	一〇四	致知	大下 弘	二五	士	三〇	四六	一〇	七	五	五二	三三・七五	八・六三	四六・三八五	六三
田畑村	一一二	一〇五	養蒙	山崎 就正	二九	士	三六	六一	一四	一五	一六五・二五	四九	一一・二五	六〇・二五五		

より一級に分け、各級の修業期間を六か月とし、級ごとに教科の内容と教授法とを具体的に示して、試験によって八級から七級……一級へと進級させるようにした。

筑摩県は明治五年九月この教則をもとにして県としての教則の編成に着手し、「筑摩県課業一覽表」を翌六年四月管内に配布し、この教則の徹底を図ろうとした。

(3) 就学状況

筑摩県の就学率は明治七年六六%（全国平均三三・三%）であった。村内全校の数字はわからないが明治学校の同年の報告書に次のようにある。

就学生徒 七一人 内男 三二人 北殿村

女 七人 北殿村

不就学者 三二人 内男 一人 北殿村

女 二人 大泉村

この数字によると就学率は六八・九%となる。他の六校もこの割合と推察すれば本村の就学率は筑摩県の平均より下らないといえる。女子の不就学者の多いのは当時における全国的傾向であった。

(4) 学校の統廃合

明治八年に旧六か村は合併して南箕輪村となり各村はそれぞれ耕地となった。

同年一月には通達で「校名はすべて村地の名を用いること、各学校の名称の儀(中略)その属耕地協議の上その村名又は耕地名をもって直ちにその校名と致し申すべし……」と校名変更を指示された。

これにより当村は明治学校は北殿学校に、養蒙学校は田畑学校に、大成学校は南殿学校に、致知学校は神子柴学校というように所在地の耕地名をもって校名とするように改めた。

続いて翌九年八月二〇日には、筑摩県を廃止してその四郡を統合して信濃国一円を長野県と称するようになった。同時に学区の改正も行なわれた。本村の小学校は第一七区第一九番中学区に属する小学校となった。ちなみに明治学校は「第一七区第一九番中学区第九番小学北殿学校」の表札を掲げた。

(5) 大泉学校独立

明治七年一二月、大泉村は明治学校組合から分離独立校設置の動きを始めた。北殿村としては分離を望まなかった。しかし両村で二か月半もかけて研究した結果、離校することに示談が成立し、翌八年三月大泉学校設立許可を得て明治八年四月二五日大泉村中西の屋敷内に開校した。

(二) 明治中期の村の教育

1 南箕輪学校の誕生

明治九年には養蒙が不況であったこともあって農村が不景気に陥

り、学校運営費である元資金の利子も延滞が日増しに多くなった。明治一〇年には各所で元資金減額を願う動きが表面化した。本村には一村一校によって運営費の円滑をはかろうとする動きも協議されるようになった。同年一月から一二月にかけて官員前田広衛は全科卒業生試験に立ち合いのために各校を巡視し、あわせて就学の奨励と一村一校制を強く勧奨し、元資金二〇〇〇円以上の集金が不可能の村落学校の場合は学校合併をするよう勧告した。本村の各小学校は元資金がいずれも二〇〇〇円に満たなかったものでこの前田広衛から特に「村一校一校合併の御説諭」を受けた。

これにより一〇年一二月に漸く、北殿、大泉、南殿の三校を合併して南箕輪学校を設立しようとし、そこへ久保南割耕地が参加して合併しようとした。久保北割は木下学校へ合併することになって久保学校は廃止することになった。これにともなう支校の沢尻は西伊那郡学校へ合併することになりこの時から沢尻地区の児童委託が始まり今日に及んでいる。

神子柴学校は一二年四月御園山寺学校へ合併した。田畑学校は独自で美和学校と称して独立校とし、神子柴を吸収合併して学校を維持しようとしていた。翌一二年神子柴は美和学校に合併をして、この段階では一村一校は実現できなかった。

南箕輪学校敷地については幾か所かの候補地があり、そのうちの一つには八幡宮東南の官有地の払い下げを受けようとの企てもあったが、幸い「桜ヶ丘の地賃し渡し」の申し出があって、地主有賀光彦と貸し渡し契約が成立してそこに決定、新築費の寄付もまとまった。合併する各学校の旧建物を利用するための材料運搬や土木工事は村民が請け負って校舎が建築された。

一二月一日新校舎に「第六大学区第十九中学区南箕輪学校」の標札

を掲げ南箕輪小学校が誕生しこの日より授業を開始した。爾来この日を
もって南箕輪小学校の開校記念日としている。

2 「教育令」の実施による村の教育

(1) 「教育令」の公布と教育の衰退

明治一二年九月政府は「学制」を施行して新たに「教育令」を公布し、翌一三年四月より実施されることになった。「学制」は全国に小学校を普及させた点では大きな成果を挙げた。しかしそれは欧米の制度を模倣した面が多く教育内容等が国当時の実情にそぐわない点が多々あった。

「教育令」は教育を人民自治の立場からとらえ、国や県はなるべく介入せず、町村住民の協議によって小学校を設立し維持させて行こうとするところに特色があった。この教育令は後に自由教育令とも呼ばれた。それは次の点に特色があったからである。

○学務委員の公選

○小学校設置維持の自由

○就学年限の選択制

「教育令」の実施は、教育内容の混乱、学費の滞納、教師の質の低下、就学年の低下等、全国的に教育の衰退をもたらした。

(2) 「改正教育令」の実施による教育の充実

「教育令」は地方の実情に即応した教育ができるように期待したが結果的には教育の衰退を来した。衰退した教育を挽回すべき意図をもつて明治一三年一二月「改正教育令」が公布された。

「改正教育令」の特色は次の諸点である。

○学務委員の任命

○就学義務の強化 最低の就学期間を三か年とし、年間授業週数や一日の授業時数の規定づけ

○教則の府県編成 文部省の教則編成に基づいて各府県が教則を編成し、文部省の認可を受けること

○教員任用制度の強化、教員は県が任命し、給与、資格にも厳しい規定を設ける

明治一五年度から「改正教育令」が施行された。「小学校教則綱領」の公布とあいまって、小学校の課程が、初等科、中等科、高等科の三等科に分かれることになった。修業年限は初等、中等科が各三年、高等科は二年とし、各等科とも一学年は六か月間とした。本県の教則は次のようであった。

表 6-93 長野県小学校教則

初等科	修身 読書 習字 算術 唱歌 (当分欠)	時間外ニ
中等科	修身 読書 習字 算術 唱歌 地理	三年(六級)
高等科	修身 読書 習字 算術 唱歌 地理 物理 化学 生理 幾何 経済	三年(六級) 二年(四級)

これにより南箕輪学校は中等科となり校名は「上伊那第二十番学区南箕輪学校」となった。

明治一五年一二月制定の南箕輪学校の「小学校規則」には

第一条 (但書) 但シ学齢外児童ト雖モ入学志願ノモノハ本条同様教授スベキモノトス

第二条 入学ハ年中二期ト定メ八月一日ヲ以テ其ノ期日トナスベシとある。就学奨励強化方策の一端がうかがえる。また入学期も教則で一年を六か月間としていることから二月と八月になっている。

(3) 再改正教育令の実施と一村一校の実現

「改正教育令」は「教育令」によって衰退傾向にあったわが国の教育を充実した方向に向かわせようとしたが、農村は不況下にあった再

度教育は衰退の危機にさらされた。そこで政府は明治一八年八月「再改正教育令」を公布してこの事態に対処しようとした。その主たる特色は次の諸点である。

○教則の緩和

○小学校場の融通性ある認可

○半日授業や夜間授業を認める

○学務委員を廃止して学校の管理を戸長に委ねる

この再改正教育令は地方の実情に適應し経費の節減を図る意図もあつて学校統合もすすめるものであつた。

本村では一九年三月一村一校の南箕輪学校とし、田畑に支校を、大衆と久保に派出所をおくこととした。

明治一五年九月大衆耕地から南箕輪学校より分離希望の願書が戸長宛に出され翌年には大衆学校設立の請願が出された。しかし前述のように「再改正教育令」の趣旨により小学校の統合によって「南箕輪小学校大衆派出所」が設置されることになったのである。

③ 明治後期——明治二〇年以後の村の教育

1 「小学校令」の施行

明治一九年四月一〇日「小学校令」「中学校令」「師範学校令」が公布された。続いて小学校令に基づいて「小学校の学科及び其の程度」が定められた。これは「国家主義の立場から教育体制を根本的に整理する」意図より発した一大改革であつた。

改訂法令および規則等は翌二〇年四月から施行された。小学校の修業年限は尋常・高等とも各四年とし、学齢は六歳から一四歳にいたる八か年で、父母後見人は尋常小学校四年を修了するまでは児童を就学させる義務があるとして、義務教育という新しい教育方針が確立された。また、土地の状況によっては簡易科の設置を認めその修業年

限は三か年とした。

2 「学年制」の開始と教育の実態

級制から学年制へ

学年は「小学校ノ学年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル、之ヲ一学年ノ修業年限トス」というように「長野県小学校規則」によって定められ、二〇年四月一日から学年制を施行した。そこで旧令の学級編成法から学年編成法に移行するについての措置は次のようにした。

旧令 新令

中等五・六級——尋常科四年

初等三・四級——尋常科三年

初等五・六級——尋常科二年

この学級編成では明治二〇年の南箕輪の学校には尋常科二学年に該当する児童は皆無であったが二二年度卒業生はなかった。

3 小学校令による教育課程

長野県は小学校令に基づいて「小学校学科及び其の程度配当表」を「小学校規則」に盛りこみ二〇年四月一日から実施することになった。各学年の年間指導計画・授業時間割等を制定したが文部省の再度の「小学校令」改正・追加に伴い県でも二一年一月規則を改正し各部に通達した。

小学校の学科は、修身・読書・作文・習字・算術・唱歌・裁縫・体操で、教科書は文部省編纂発行のものが主で、算術は個人編纂、習字は信濃教育会編纂のものを使用した。

4 小学校制度の整備と教育目的の明確化

明治二二年二月一日「大日本帝国憲法」が公布され翌二三年には第一回帝国議会が召集され、わが国に立憲政治が行なわれるようになった。

った。教育も改革が行なわれ、二三年一〇月七日には「改正教育令」が公布、二五年四月から施行され小学校の教育目的が明確にされるとともに学校制度の整備期に入ったわけである。

「教育に関する勅語」が二三年一〇月三〇日に発布され以後約六〇年間第二国会失効決議になるまでわが国教育の根本理念となった。

「教育に関する勅語」は一般に「教育勅語」と呼ばれた。一〇月三一日文部省は「教育勅語」の謄本を全国の学校に頒布し、その趣旨の貫徹に努めるよう訓令した。

また、二四年二月に上伊那高等小学校へ両陛下の御真影が下賜されたのを初めとして順次各校にも下賜された。本村の学校へ「教育勅語」が下賜されたのははつきりしていない。南箕輪小学校は二七年の火災で焼失し、二九年五月再交付になった。その通知の末尾に

「追々田畑支校ノ分至急御返納致ス可ク候也」とあるところより察すると両校へ下賜されていたものと思われる。御真影は三四年一二月三〇日に奉迎の式典を挙げた。勅語謄本と御真影は校内一定の場所を選び最も尊重に奉置するよう知事の訓令があつて、学校ではこれを神聖なものとして厳重に奉護し、式日には式場に移して奉拝奉読した。勅語奉読の後に一同は「勅語奉答歌」を斉唱し、校長は勅語の趣旨を簡々と説論した。

また、修身教科書の冒頭の見開きに、教育勅語を掲げ、生徒にはこれを暗誦させ忠君愛国、皇運扶翼のための国民道徳の高揚を図ろうとした。

5 支校、派出所の統合、南箕輪尋常小学校

明治二〇年代になると大泉および久保の派出所の生徒は順次本校へ通うようになり、田畑支校も統合への機運となり明治三〇年三月南箕輪尋常小学校へ統合となりようやく一村一校となった。

6 学校火災と建築

明治二七年一二月三日天長節（明治天皇誕生日）のよき日を祝い学校で風船（熱気球）をあげたところ、風船が校舎の草屋根の先端にからみ、その火によってたちまち燃え広がって校舎は燃え落ちた。

そのころはどこでも祝日とか運動会には風船をあげるのが例であつたという。

火災後は直ちに仮校舎の建築にとりかかり、わずか一週間で仮校舎一棟を建築して授業を再開した。しかしこの仮校舎は郡役所から「……向コウ一カ年ヲ限リ」の期限つきで許可されたものであった。学校新築についてはなかなか困難な問題があつた。第一は資金調達である。

新築に要する費用は主として旧役場の残余金と村内一般よりの義捐金をもって充てること、ただし一部分は村税によって負担することもあるとの方針をたてた。

しかし明治二七年八月一日に我が国は清国と戦争を始め翌年四月一七日に漸く講和条約調印はできたものの、多額の戦費負債と戦後経済界の不安定のとときであったので村民が学校建築資金を調達することは容易なことではなかった。

第二は敷地の問題であつた。

敷地については借地料や売買契約等で地主側となかなか円滑な折り合いがつかず難航した。明治三三年一〇月になって有賀光彦から敷地及び通路敷の寄付申し出があり一〇月一六日村会において寄付採納決議がなされ、校舎建築が実現し得る運びとなった。

敷地問題の交渉より解決への過程及び建築費調達の苦労については『南箕輪小学校百年史』に詳しいからここには省くが学校焼失から七年度にしてようやく竣工したことはそれらのことが如何に困難な事業

であったかが察するに余りあることである。

竣工式当日御真影御下賜奉迎式典を挙行政した。

7 学校林の設置

昭和二年四月小学校基本財産の必要を痛感した村では村会の決議を経て大芝原に学林を造ることを計画し、設置することになった。このことについては第五章第五節に述べた。

明治三十七年日露開戦を機に、同年八月一九日付で長野県は「学校林造成につき」の訓令を発した。これをうけて九月一九日上伊那郡役所は「征露記念学林設置規程」を発し、その第一条において「町村は本規程により条例を設け明治四十六年までに記念林を設置すべし……」と学林設置を義務づけた。しかし本村においては既に学林設置は進行しており、同規程に準ずることは容易であった。

明治三十八年村では「南箕輪尋常高等小学校学林設置規程」を制定した。そこでは計画の要旨、大要を述べているが第四期計画が完了した間もなく四十四年には規定を改訂し造林を続行している。その規定によると大芝原百町歩を小学校基本財産造成のための学林とし、その収益を学校基本財産に編入するものとしている。

後年の報告書によると次表のように実施したとある。学林経営には後年の管理運営にあたっては随分苦心経営があったことは十分推測できることである。巷間話題となり「南箕輪村の豊富な山林資源」と羨望されたことは長い歳月、村をあげての努力の結晶の賜であった。六〇年後の南箕輪小学校全面改築の大きなささえともなった。このことについては、南箕輪尋常高等小学校は初代校長福沢桃十が村の先覚者と志を同じくして愛林思想の普及と実践に努めた功績もまた大なるものがあつたといわれている。

表 8-14 学校林植林の状況

年	別	区域	樹種	苗木数	費額	備考
明治二八年	四月二七日	第一区	門松	三千本	九百五十銭	苗木代
明治二九年	四月二七日	第二区	赤松	五千本	七百	苗木代
明治三〇年	四月二七日	第三区	落葉松	一万本	二千五百	苗木代
明治三一年	四月二七日	第四区	赤松	一万本	七百	苗木代
明治三二年	四月二七日	第五区	落葉松	三万本	拾円五十銭	無料下付
明治三三年	四月二七日	第六区	赤松	三四、六四〇本	拾円五十銭	
明治三四年	四月二七日	第七区	落葉松	三三、二〇〇本	拾円五十銭	
明治三五年	四月二七日	第八区	赤松	一七八、八四〇本	拾円八十	
明治三六年	四月二七日	第九区	落葉松			
明治三七年	四月二七日	第十区	赤松			
明治三八年	四月二七日	第十一区	落葉松			
明治三九年	四月二七日	第十二区	赤松			
明治四〇年	四月二七日	第十三区	落葉松			
明治四一年	四月二七日	第十四区	赤松			
計						

8 補習科設置

「改正小学校令」によると「尋常小学校又は高等小学校ニ補習科ヲ置クコトヲ得」の条文がある。これにより南箕輪尋常小学校には、明治三一年四月に尋常補習科が非公式に設置された。三二年五月八日に修業年限二か年の補習科設置と教科課程が許可になった。この補習科設置のねらいは、尋常科卒業生の学力を補うためであった。当時はまだ南箕輪に高等科が無く、家庭の余裕と資力のある児童は伊那村の上伊那高等小学校か中箕輪のその分校へ通った。しかし大部分はそこへ通うことはできない。それらのための補習科設置が切望されていたのである。この補習科は三五年五月廃止になった。

9 南箕輪尋常高等小学校

(1) 学校制度の整備期

日清戦争に勝ち、日露戦争に至る間に我が国の近代産業がようやく発達しはじめた。明治三〇年代に教育制度はしだいに整備された。小学校令、中学校令が改定されるとともに、新しく実業学校令が定められ、さらに専門学校令も公布されて、初等・中等・高等の各段階に

わたって学校制度が整備された。

三十四年四月「再改正小学校令」が施行され「小学校令施行規則」がはじめて定められた。これによって尋常小学校を四年に統一し義務制によったことは先に述べた。

高等小学校は二年、三年又は四年としたが、二年制の高等小学校をなるべく尋常小学校に併置することとして義務教育年限の延長に備えた。

明治三十二年に「小学校教育費国庫補助法」が定められ、同三三年にこれを改正して「町村立小学校国庫補助法」が公布された。これによって尋常小学校では授業料を徴収しないことが原則となって財政の面からも義務教育制度の振興がはかられた。

明治三十六年には小学校令を一部改正して「小学校教科書は、原則として文部省が著作権を有するものに限る」として国定教科書制度が成立し翌三十七年四月から施行された。このようにして教育の思想・内容の面から国民教育の統制が強化された。

(2) 再改正小学校令による新しい出発

明治三十四年四月の「再改正小学校令」の施行は南箕輪村の教育の上でも一大転機をもたらした。

たまたま南箕輪尋常小学校は前述のとおり、大災焼失後の建築が進められて、明治三十四年九月には竣工の運びとなるよう目安がついたときであったので、再改正による高等科を併置する申請をした。これが認可になったので明治三十四年四月五日「上伊那郡南箕輪村立南箕輪尋常高等小学校」の標札を掲げて修業年限四か年の尋常科に修業年限四か年の高等科を併置した学校の開校式を挙行して校長以下一名の職員をもって新しい出発をした。このとき裁縫科を加設することになったのはじめて女の先生一名が任用された。

三十四年度の尋常科卒業者のうち高等科へ進学した者は男子の七四％に当たる二八名、女子では五〇％に当たる一二名で進学率は約六四％の成績であった。

小学令再改正令施行後の教科課程はこれ以後の昭和一六年三月の「国民学校令」施行にいたるまでの間、教科目は固定化され、しかもその内容は国定教科書の使用によって、全国的に画一化されていた。

改正の主要点のうち教科目についての注目点をあげると、従来の読書・作文、習字を「国語」へ統一し、読む、書く、作るの機能を関連づけ国語教育を一元化しようとした。算術科は理解と習熟と応用の三段階を区別した指導を要求し、従来の算算か珠算かの問題を解決し、筆算を正法とし、土地の状況によっては珠算を併せ用いることができるとした。また日本歴史は、国史といって、国体の大要を知らしめ兼ねて国民たるの責務を養うものとして、国民教育を志向する国史教育に転換された。

10 実業補習学校設置

明治三十五年一月一日「実業補習学校規程」が改正公布され四月一日施行になった。これは実業教科を主とし、普通教育の補習を従とする学校である。

明治一〇年代後半ごろから、農・工・商業等に関する学校がしだいに整えられてきたが、明治二十六年に文部大臣になった井上毅は実業教育の振興に力を注いだ。実業補習学校規定をはじめそのほか各関係学校の規程を定めその後の産業教育発達の基礎を作った。

明治三〇年代になると実業補習学校設立への動きが活発になってきた。本村においてもその動きがあったところへ、三十四年九月村長宛に郡役所から同年冬期より開校できるよう設置の勧奨があった。

これを受けて村では実業補習学校を南箕輪尋常高等小学校へ併設するよう申請し明治三十五年二月七日に許可されたので直ちに同月をもって修業年限五年の南箕輪実業補習学校を創設したのである。

はじめは一月より三月まで毎週男子は二時間女子は二時間、四〇年からは一月より四月まで授業を行なった。大正五年からは修業年限を一か年延長した。大正一三年からは従来の男子部の夜間授業を昼間とし、そのため専任教員をおくことになり、一月からは半か年通学制度に改め実業教育の実をあげようとした。就学率は年々増加し大正五年には男七〇、女八七人であったが以後減少傾向に転じた。

11 御真影の奉戴・奉安殿

明治三四年一月末日に新校舎の竣工と当校に高等科が設置されたのを機会に御真影の拝戴を申請、同年二月一日奉迎の式典を挙げた。



図6-91 奉安殿

これより先明治三四年六月には、小学校令に基づき、「小学校祝日大祭日儀式規程」を文部省令によって定められ、学校における儀式の際は、御真影奉拝・教育勸諭の奉読を必ず行なうこととした。こうして忠君愛国・皇運扶翼のための国民道徳の高揚を図ろうとされた。

同年一月文部省は学校に下付された天皇皇后の御真影と勸諭謄本とを校内の一定の

場所に最も鄭重に奉置するよう訓令を出した。

当校の御真影奉安については新校舎建築の設計に際して奉安所がも

りこまれた。すなわち

「教員室ノ奥正面二位スル所ニ御真影奉安殿ヲ設ケ、鄭重ナル設備ヲナセリ。祝賀式等ノ際ニハ屋内体操場ヲ裝飾シテ式場に代用セリ」と。

このようにして天皇絶対主義教育は形の上からも推進されていくのであった。

当校に奉安殿が建設されたのは大正一四年のこと、五月二四日に上棟・落成・遷座の各儀式を一挙に行なった。以後登下校時には職員および児童は奉安殿に最敬礼することが通例となった。

奉安殿の建築費はすべて村民の寄付によってまかなわれた。寄付額については、農家組合各戸当たり金貳円の割合であった。

なお昭和二年に体操場が新築された際には、場内に式典時の奉安所も造られた。

御真影の奉戴については校長はじめ職員は常に細かい神経を使ったものである。火災等、非常時の避難奉安所も定められた。戦後駐留軍の指示によって奉安殿は姿を消した。

12 義務教育の延長と教科目

明治四一年「小学校令中改正令」が施行になった。この改正の主眼点は、従前の小学校令では義務教育を尋常科四学年としていたものを二か年延長して六か年とし、その上に高等科を二か年置くということ。第一点、教科目は、尋常小学校は修身・国語・算術・日本歴史・地理・図画・唱歌・体操・裁縫（女子のみ）の一〇科目、高等科は従来の教科目のほかに手工・農業・商業のうち一ないし数教科を加えることが第二点である。

新令による義務教育の延長によって保護者の中には就学に難色を示すものもかなりあった。村当局も学校も全力をあげて理解を得ることに啓蒙に努力した。

その結果良好な成果を挙げ尋常四年卒業生男三二、女三四人のところが新令の第五学年に進学した者男二八、女一三人で進学率は六二・一％に及んだ。

また、小学校令の改正にともなう各教科書とも全面的に改訂され、第二期の国定教科書時代がおとずれるわけである。この改訂では第一期の国定教科書に対する批判や各方面の意見をとり入れ日露戦後という時代を背景にして国家主義的色彩が濃厚になったといわれる。

13 学齢児童保護会の発足

明治四一年一月一八日「南箕輪学齢児童保護会」が発足した。この会の目的は規定第一条に次のようにうたわれている。

「本会は貧困にして就学若しくは出席し能はざる学齢児童を保護し就学出席せしむるを以て目的とする」

つまりこの会は貧困家庭の児童に対する就学出席のための補助をするものであった。

14 校舎増築

新令による義務教育年限の延長によって明治四一年度南箕輪尋常高等小学校の児童数は五〇〇名を超えた。そのうえ実業補習学校生徒数も増加しさらに年次ごとに児童数の増加が見込まれた。

明治四二年九月増築のため地ならし工事が始まった。この工事は各部落負担工事で行なわれた。一月一日には南箕輪学校開校記念日を記念して開校記念式典に落成式を兼ねて挙行了。この日はじめて学芸会を挙行し村民あげて祝った。

翌四三年さらにまた将来実業補習学校女生徒七〇人が収容できる五

間に五間半の大きな教室を増築した。また、同年校地を七畝二〇歩拡張した。

15 特別学級の設置

明治四三年一月家庭貧困児童のための特別学級を設置した。これは冬期の農閑期と製糸工場の休業期をねらって開設したもので児童は男三〇、女三三名で一学年より六学年までの児童に修身・国語・算術・地理歴史・理科・図画等の基礎についての復習であった。この特別学級は次の理由によって翌年三月に廃止された。

学齢児童中貧困ニシテ従来成規ノ課程ヲ履ムコト能ハズ年齢ノ長シタルモノヲシテ一学級ヲ編成シ特別ノ教授ヲシタルニ是等全部其課程ヲ終了シタ

（小学校文書）

特別学級に関連して、その当時の学齢児童のうち、製糸工場へ就職して小学校へ就学しなかった児童の調査がなされた。四四年五月二四日現在の数字は左のとおりであった。

尋四 二人 尋五 一四人 尋六 四人

尋常科四年生以上の貧困家庭で製糸工場に就職し就学できない児童が右のとおりあって、就学督促が容易でなかった。このような製糸工場に勤く学齢児童を救う道として、やがて製糸工場内に特別教授を行なう施設が設置されるようになった。すなわち製糸工場に雇われる不就学児童に、各工場または数工場共同して一切の費用を負担して特別教授を施すことが義務づけられた。

大正八年五月三〇日南箕輪村長田製糸場の長田国吉は特別学級実施認可願および実施届を提出した。

その内容は、大正八年三月一日から同年十二月三〇日までの間、居宅二階において当製糸場に就業中の学齢児一〇名に教育を施すという

もので、これは直ちに認可された。

例 大正から昭和初期の村の教育

明治四〇年代から大正を経て昭和初年は教育の量的拡大があり、内容的には自由教育が興隆しやがて退潮していくという時期であった。その背景となったのは第一次大戦前後のデモクラシーの思想であり、新理想主義の哲学や人道主義的文芸思潮、新教育運動などであった。人間性の自覚に基づく教育革新の動きが起こり、個性を尊重、自主性を重視の信州教育の歴史的特質が遺憾なく発揮された。一方自由教育に対する批判と公権力の弾圧もあってこれに抵抗する事件が続発し、教権の確立が盛んに論議された。昭和八年二・四事件によって自由教育の方向がほぼ完全に挫折し、教学刷新による国体明徴の教育へと屈折していくのであった。

皇室中心の国家主義的教育は国の方針として堅持される中にあって、信州教育には自由教育の実践がみられ、個性尊重、人格主義を基調として展開された。信州白樺派の教育運動、児童自由運動などは児童中心の教育となり、教師の内面的追求も活発となり、西田哲学やアララギその他の諸種の研究グループが誕生した。

こうした状況の中にあつて、信州白樺派教員に対する事件、教員赤化事件、教員給料未払いや延滞、給料の強制寄付等さまざまな問題があつた。

1 校庭拡張

明治後期には校舎増築があり、児童数も増加する、そのころからにわかに庭球や野球が盛んになってきた。野球は広い運動場が必要で、大正期になると、対外試合も多くなり郡の野球選抜校にも推される状態ではますます広さが要求された。

大正四年二月、大正天皇即位記念事業として運動場一九三一坪が拡

張された。

2 子守児童

小学生の就学義務については不就学の原因が主として家庭の貧困にあった。県では明治四四年一月一三日訓令で「学齢児童就学奨励会規則」を示して学費補助、援助の組織と活動を勧奨して来た。しかし中には子守がてらに登校する児童があり近隣の学校では特別に子守学級を設けるところもあった。本村ではそれを特設しなかった。大正四年七月七日役場から、学齢児を雇っている者に対して次の通達を出している。

……乳児ヲ養フイテ出校セシムルハ諸君ノ弊害ヲ認メ且ツ自己ノ利害ノ為ニ就学ヲ妨害スルハ義務教育ノ精神ニ悖リ候ニ付キ貴方ニシテ自家ノ子守ヲナス為特ニ許可シタル場合ヲ除ク外断然厳禁スル事ニ致シ……

(小学校文書)

その年学校で、子守児童の調査をしたところ自家の子守六名、他の家の子守一二名がありその中に男子が二名あった。その中に尋常科二年生が三名あることは驚くべきことであった。

3 南箕輪事件

第一次世界大戦後における自由主義思想を反映して、児童中心の自由教育の実践が県内に運動となって顕在化し拡大された。一方、白樺派の教員や児童自由派の主張による教育運動が起こった。白樺派の教育運動は雑誌「白樺」によって人道主義、理想主義を標榜し、印象派の美術を紹介したことにも共鳴する青年教師たちが児童を熱愛し「自己を生かす」教育をめざしたもので大正七、八年を頂点として展開した。形式にとらわれない新鮮な教育で、ときに気分教育と批判される向きもあったが、個性を尊重し、児童の自覚性や表現を重視する児童中心の教育であった。

「白樺」の地方会員は長野県が最も多く、そのほとんどが小学校の青年教師で、明治末年から、自由教育の方向を模索していた小学校教員・師範学校生徒は白樺派の文学運動に共鳴するものを見出したのである。彼等は最も徹底した自由主義教育者であった。図画は児童の自由運動、綴り方は大人の模倣から児童の創作へと、表現教科の改革が唱えられ、童話・童謡・児童劇などの芸術教育運動と相まって、児童中心の教育が小学校教育の全領域に及んだ。

白樺派の人道主義・自由主義は、社会主義などと誤解され易く、白樺派教員は危険思想の持ち主とみなされ易かった。このことから、白樺派の活動が高揚するとともに、白樺派を批判し、弾圧する動きが頻発した。その一つに南箕輪事件があった。

信州白樺派の発形成期に、赤羽王郎・笠井三郎・中村亮平の三人は重要な役割を果たしたがその中の一人笠井が南箕輪事件の主人公である。

笠井三郎は白樺最盛期の大正八年九月一八日に南箕輪尋常高等小学校へ転任して来た。当時の校長は中山漢吉であったが笠井は信任が厚かった。在任中の大正八年にウイリアム・ブレイク展や柳宗悦の講演会を、南箕輪村をはじめとして七か村で開催したり、赤羽王郎とともに、泰西絵画展・版画展・ロダン展を県内各所で開催することなどに精力的に活動した。

同僚の中には笠井の思想に共鳴同調する者もあったが、中には不快の念を抱く者があった。また村内には白樺の思想は危険思想だと誤解する者があって共に笠井排撃の火の手をあげ、青年会長らがじかに面接し辞職を強要することがあったりしてとうとう転出せざるを得なくなり、東箕輪小学校へ首席訓導として転任することになった。これを教育界の南箕輪事件と言っている。

4 校舎増築・体操場新築

大戦後大正九年には米価が暴落し米穀業界は未曾有の恐慌に襲われ、農家の窮乏はその極に達した。その後景気は低迷し村財政も苦しいおりではあったが、校舎増築の必要にせまられた。

大正一二年四月村の失業対策事業も含めて小学校校舎増築に着手した。普通教室一・一教室一の一階建ての校舎が一二月落成し翌一月二日から使用を開始した。

この校舎増築にともなう校地の拡張も行なわれた。

また、大正一三年から採用用にストロップを備え付けた。体操場を昭和二年八月一日着工、木造平家建て一〇間に二〇間と昇降口・奉安所・物置等付設して一〇月二日上棟式を挙行した。

国 昭和初期から戦時下の村の教育

1 二・四事件

昭和四年一〇月ニューヨーク株式市場大暴落に端を発した世界恐慌は日本にも次第に深刻な影響を及ぼした。米価の暴落により米値はますます暴落して農村恐慌が始まった。翌五年には米値はますます暴落して農村窮乏ははなはだし、労働運動は激化し、左翼運動の組織化がすすんだ。これに対する政府の弾圧が激しくなり、このことは右翼運動の台頭を導くことにもなった。

昭和六年九月には満州事変が勃発し、翌七年一月には上海事変、五月一日には大義首相の暗殺等々政情、経済上の不安はいよいよ深刻となった。

教員給の支払延期、分割支給、俸給一部寄付等々に加えて欠食児童が出るという状態にまでなった。こうした中で、治安維持法違反の名目で教員や文化運動関係者が多数検挙され、昭和八年二月四日県内全域から教員の検挙者が出た。これがいわゆる「二・四教員赤化事件」で

ある。四月までに六五校、一三八人が検査された。本校から一名の訓導が警察の取り調べを受けたが、友人に検査があったことからの取り調べであったことで検査されるには至らなかった。

2 色刷り教科書の使用

昭和八年度から国定教科書が、色刷りになった。「小学国語読本」は「サイタ サイタ サクラガサイタ」で始まる。従来は単語から始まった国語教育がこのときから文章をもって始まる文章法で色刷り教科書が採用されるようになった。明るく児童に親しめる教科書となったが国粋主義的教材がより多く加えられた。「尋常小学修身書」は翌九年度から使用となったが、巻三までは色刷りのさし絵がはいった。内容的には国家主義的な比重が重く、忠良なる臣民の育成をめざして、団体観念の明瞭を主眼とするものであった。

3 戦時期の学校

(1) 国民学校となる

昭和一二年の日華事変（日中事変）後は教育面にも次第に戦時的色彩が強くなり、一六年暮れに太平洋戦争となつて後は、急速に戦時教育体制が強化された。一八年には教育の「戦時非常措置方策」が決定され、同一九年には「決戦非常措置要綱」に基づく教育の非常措置が実施された。同二〇年五月には「戦時教育令」が公布されて、平常の教育活動はほとんど停止された。

昭和一六年に「国民学校令」が公布され、明治以来親しまれてきた尋常高等小学校の名称が「国民学校」に改められた。そして国民学校は初等科六年、高等科二年で皇国民の基礎的錬成を目的とし、教育内容の改革が実施された。

(2) 国民学校教育の実態

皇国民錬成の目的に沿うべく国民学校の教科は従来のものを統合再

編成して次の五群にまとめられた。

国民科（修身・国語・国史・地理） 理科（算数・理科） 体育科（体操・武道） 実業科（農業・工業・商業・水産） 芸能科（音楽・習字・図画・工作・裁縫・家事）

このうち実業科は高等科だけ、他は共通であったが芸能科は、初等科四年以上で女子に裁縫が課せられ、男子はその分だけ工作を学ぶことになった。高等科では体育科と実業科は男女によって時間数や内容が異なっていた。

(3) 二宮金次郎像の建設

勤王力行の模範人物として二宮金次郎が明治以来学校教育にしばしばとりあげられて来た。戦時下国民学校の教育方針に添う人物として児童にその精神を崇敬させるようその像が各地の学校に建立される風があった。

南箕輪国民学校へは奥山安五郎からその像一基の寄付採納願いが昭和十七年五月一三日提出され、これを学校正門脇に建立することになり、長く児童に親しまれた。

(4) 満蒙開拓義勇隊の送別

昭和一三年に満蒙開拓義勇隊の募集があり以後年々制り当て募集があり、満蒙の地へ幾多青少年を送り出している。第六章第五節五に詳しく述べた。

(5) 校旗・校章の制定と校舎増築

昭和一六年一月三日の明治節に「南箕輪国民学校校旗」の入魂式を実施し、校章とともに校旗が誕生した。

戦争は日増しに激しく物資欠乏の中にあったが校舎教室狭隘はなほだしく不足の理由により初等科教室、青年学校教室も不足の理由によって昭和十七年九月起工、翌一八年一月木造二階建て校舎一棟を

増築完成した。

4 南箕輪青年訓練所設置

「学校教育実施案」が大正一四年に国会で成立し、翌一五年四月「青年訓練所令」が制定され施行されることになった。

本村では大正一五年六月二十九日村会において「南箕輪青年訓練所規則」を決議し、七月八日小学校において開所式を挙行政した。

同規則によると訓練所の目的は「青年ノ心身ヲ鍛錬シテ国民タルノ資ヲ向上セシムルヲ以テ目的トス」とあるが教科課程でもわかるように、軍事教練を主軸にし、訓練所を終えて徴兵検査につながるいわば、徴兵予備軍的な性格のものであった。

南箕輪青年訓練所の主な事項は次のとおりである。(1) 訓練期間は四年、入所年齢は一六歳以上一七歳未満(事情によっては一七歳以上も認める)(2) 訓練項目の課程及び訓練日、時間は表6・95・96のとおり。

(3) 訓練は毎年一月から一二月まで。

表6・95 訓練項目

職業科	科学通普					数	項目及科目 修身及公民科	年次
	農	理	地	歴	数			
業	業	科	理	史	学	訓	科	
								第一年次
25	5	5	5	10	25	100	25	
								第二年次
25	5	5	5	10	25	100	25	
								第三年次
25	5	5	5	10	25	100	25	
								第四年次
25	5	5	5	10	25	100	25	

表6・96 訓練季節訓練日及訓練科目ノ訓練開始ノ時刻

訓練季節	訓練科目	日	訓練開始ノ時刻
一月	修身及公民科 教練普通 学科 職業科	六六日	午前九時ヨリ同十一時半 午前九時ヨリ午後二時
二月	同 右	七八日	同 右
三月	同 右	六八日	同 右
四月	修身公民科 教練	五五	午前六時ヨリ同八時半
五月	同 右	三三	同 右
七月	同 右	二二	同 右
八月	同 右	二二	同 右
九月	同 右	二二	午前七時ヨリ同九時半
十月	同 右	三三	同 右
十一月	同 右	三三	同 右
十二月	同 右	八日	午前九時ヨリ十一時半 或ハ午前六時ヨリ八時半

職員は主事一(小学校長) 学校職員五、在郷軍人二であった。

軍事教育の目的を主軸とした青年訓練所には昭和二年から教練査閲が実施された。この査閲は毎年実施された。査閲は全く軍隊的なものでその内容は年々厳しくなった。

青年訓練所は青年学校開設によって廃止となった。

5 南箕輪青年学校設置

青年学校は昭和一〇年三月公布の「青年学校令」によって、同年九月一日に全国の市町村に一斉に開校されることになった。本村は実業補習学校学則を変更して青年学校とし、青年訓練所を統合して小学校

1 敗戦による教育の急転回

昭和二〇年八月十五日、長期にわたった戦争は敗戦で終結した。日本は連合国軍の占領下にはいった。教育も当然GHQ（連合国最高司令官総司令部）の管理下におかれた。

軍国主義的な教育思想と戦時教育体制とを一掃するための指令が次々と出され、それによってわが国の教育は改革されてきたのである。まず「国家神道」「神社神道」を政府の手から離し、公教育においてこれを廃除すること、「修身、日本歴史及び地理の授業停止」に関する指令が出、学校ではあわただしくこれに対応していかなければならなかった。これらの授業時間は他の教科にふり分けられた。

神道と結びついた教育は否定され、軍事教練は廃止され、御真影、勅諭勅本は奉還され、奉安殿や忠魂碑の撤去等が次々になされた。本校の奉安殿は二一年八月撤去。

指令に照して望ましくない教科や教材は廃止または削除されることとなり、国史、地理等の教科書は児童から回収された。また、国語教科書も児童によって解体され不適切と指示された部分が抜き捨てられたり、墨で塗りつぶされたりした。

昭和二十一年七月、長野県軍政部に教育担当官ウィリアム・ケリーが着任して学校視察をし、指令に対して適切な対応を欠くと判断した学校には厳しい指導を加え、ときには校長の退職をせまることがあった。

2 新しい教育への模索

昭和二十一年四月七日、米国教育使節団が国書をGHQが発表し、根本的に日本教育の転換をせよと。各種の禁止事項が出され、新教育推進のための各種の法令や規則がいくつか出された。

教材や文房具など不足ははなはだしく、教科書など印刷されたままで裁断も製本もしてないものが配布されてそれを児童が自分で切つて

綴じて使用するというようなありさまであった。

六月二十九日GHQは日本地理、一〇月一二日には国史授業の再開をそれぞれ許可した。国史は「くにのあゆみ」を使用して授業が再開された。

音楽科では八月から、戦時中イ、ロ、ハの音名唱法であったものをドレミの階名唱法へ移行することとなった。

昭和二十二年からローマ字教育を行なうための実施要領が示された。

『当用漢字表』、『現代かなづかい』の内閣訓令が一月に公布され、以後これに従った国語表記が実施されるようになった。

3 新学制の実施・中学校の誕生

占領軍は二〇年一〇月二日「日本教育制度に関する管理政策」を指令した。それによると、軍国主義・国家主義思想の普及禁止、議会政治・国際政治・国際平和・個人の権利思想及び集会・言論・信教の自由などの基本的人権の確立に資する教育を行なうことを求めた。

同時にまた、自由主義、反軍国主義のために教職を追われた者は復職させ、反面職業軍人ないしは軍国主義、国家主義の極端な鼓吹者は罷免せよとされた。一〇月三〇日には「教職者適格審査」の指令を出し、適格の認定がなければ教職につけなくなった。いわゆる教職者の追放が行なわれた。

『教育基本法』の制定公布（二二・三・三一）これによって新憲法に基づいて、教育の目的や方針を定め、基本事項について条則を明らかにした。これは従来教育勅語によって律せられてきた教育行政が、国会で定めた法律によるようになった点で実に意義深いものである。

『学校教育法』の制定公布。これにより六・三・三・四制を実施し、国民学校は小学校と改称し、義務修業年限六年の南箕輪小学校となり昭和二十二年四月七日開校式を挙行した。同日義務制の南箕輪中学

校も開校した。

4 教育委員会の発足

昭和三年七月一日教育委員会法が公布になり、〇月五日に第一回教育委員の選挙が行なわれ長野県教育委員会が発足した。

南箕輪村教育委員会は二十七年十一月一日公選による委員によって発足した。

昭和三十一年六月には「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」

が公布され教育委員は任命制となり選挙によらず村長が任命し議会の同意を得て決定することになった。教育委員五名のうち教育委員、教育委員長及び職務代理者は委員の互選によって決める。教育委員の任期は四年である。

5 週五日制の実施

G H Q の提唱によって土曜日の授業をやめて、その日は教職員の会合・研修会・学校行事に当て他の五日間は授業に集中できるようにする。一面児童生徒は自主的、計画的に家庭、社会行事等にも積極的に参加することによって、自覚性、社会性を自ら養う場を与えようとの意義を持たせようとした。

昭和二三年一〇月から五日制を実施した。しかし実施してみると時間割の編成、特別教室の使用割、土曜日の具体的内容の組み合わせ等の校内事情と、家庭や地域社会の協力を得ることへの啓蒙等種々な問題があった。この週五日制は二七年度をもって長野県教育委員会の決定により打ち切られた。

6 新しい教育計画

新学制発足後新教育の教育計画が模索の中で順次立てられるようになった。

学習指導要領 新教育指導計画の基をなす「学習指導要領」略してC

・S)が二年より文部省から試案として告示された。

この内容は、全国各校が共通して守り、実施すべき指導事項と、地域や学校の実態により、適宜取捨選択、応用する事項の二つから成り、各学校の創造的な教育計画を要望している。従ってこれを実施した上で、提起される諸問題を整理し検討を加え、国情や地方の実情に合うようその後たびたび改定された。

カリキュラムと単元学習 C・Sに基づいて作成する教育指導計画をカリキュラム(教育課程)といつて各校はそれぞれ独自のものを作成した。

カリキュラムに基づいて、児童が実際に行なう学習活動が「単元学習」である。これはある一つの学習事項につき、教師と児童との話し合いによってお互いの知識や経験を出し合ってその学習の目標を決め、それを達成するための条件や必要事項を選び出し、これをどのような順序で、どんな方法で追及し、解決したらよいか時間配当等を決め、その学習の結果の考察・評価・反省・今後の課題等について確かめ合う、その始めから終わりまでを一まとめにしたものを「単元学習」というのである。

学習は児童が主体で教師は児童の学習につき、つまずいたらヒントを与え、横道に外れようとしたら引き戻してやるというような援助と指導をするのである。

学習は児童の個性を伸ばすことに重点が置かれ、教材も単に教科書に頼るだけでなく、児童の経験のすべてが大切な要素や素材となる。

学習活動は、読書・話し合い・調査・見学・実験観察・資料収集・整理・記録・報告・製作・図表化・劇化等の多面にわたり、学習の目標によりこれらが適宜に取り入れられる。

学習形態は個人学習・グループ学習・全体学習が適宜取り入れら

れ、児童個々の発言・活動の場や機会を多くするようにし、児童の自発活動を盛んにさせる学習に努めている。

7 校歌の制定

校歌制定の要望が職員やPTAから強くなり、歌詞も一般から募集した。応募による一作品を審査したところ適当なものがなかった。そこで松沢修一郎（筆名青山三郎）に作詩を依頼し、井上武士に作曲してもらった。昭和二五年度秋季大運動会当日校歌制定発表会を行った。

8 新しい教科書の採択

教科書は明治以来長い間国定教科書が用いられてきたが新学制になるとともに検定制度になって、昭和二四年から検定に合格した教科書について各地方で展覧会を行ない、市町村教育委員会が採択した教科書を用いるようになった。

昭和三七年三月三十一日「義務教育諸学校の教科用図書は無償に関する法律」が公布になり、三九年二月三日「教科書無償措置令」が公布され四月から新一年生に教科書が無償供与され以後学年を問わず中学三年生まで無償配布となっている。

9 委託児童の契約

南箕輪村の学校教育の中で一つの特質として、学校に遠隔な地区の児童を伊那市へ委託して教育していることがあげられる。

この委託制度の歴史は明治一一年四月沢尻学校廃止に伴って、沢尻の児童を西伊那郡学校へ委託したことに始まっている。

昭和二七年度教育委員会の発足によって教育行政は地方教育委員会が行なうことになり、伊那町教育委員会と南箕輪村教育委員会との間にあらたな委託児童契約書が取り替わされた。その契約では委託児童は沢尻・中の原・南原及び神子集原の一部に居住する児童であること、そのうち南原の一部西原の児童生徒は西箕輪小中学校へ他は伊那小中

学校へ委託することは従来と変わりがない。契約書はその後二度の改定をした。現在の契約書は次のとおりである。

学校教育事務の委託に関する規定書

伊那市（以下「甲」という。）が、南箕輪村（以下「乙」という。）から、学齢児童生徒の学校教育の委託（以下「委託生」という。）を受けることについて地方自治法第二五二条の一四第二五二条の一五及び学校教育法第三一条に基づき甲と乙は次のとおり約定する。

一、委託事務の範囲並びに管理執行

- (1) 甲が乙より委託する委託生の学校教育に係る事務の管理及び執行に関しては、甲の教育委員会が担当する。
- (2) 乙が甲に委託する委託生は、乙の沢尻区、南原区及び神子集原の一部に居住する者とする。
- (3) 委託期間は、学校教育法第一九条及び第三七条に規定する修業年限とする。
- (4) 委託生の就学すべき学校については、甲の教育委員会の指定するところとする。

二、委託事務に要する経費の負担

委託事務に要する経費の負担については、次の各項により委託料として乙は甲に納付するものとする。

- (1) 委託料は、委託生の在籍する学校の当該年度の教育費の決算額（交付税算入額を控除）を当該年度の学校基本調査の児童生徒総数で除し、当該学校の委託生数を乗じて得た額とする。
- (2) 委託料の支払いについては、乙は甲が前項より算出した額の二分の一の額を九月末日までに残りの額を毎年度末までに概算により納付し、決算額によって次年度に精算するものとする。

三、校舎等施設の新設、増改築等に要した経費の負担

- (1) 校舎等施設の新設、増改築に係る分担金は、分担相当事業費を前項

二の(1)後段の例により算出した額を、当該事業の起債事業償還年数により、分割納付するものとする。

(2) 分担相当事業費

「総事業費」(「補助金」+「交付税算入額」とする。

総事業費は、施設の新設等に要した経費及び起債利子

(3) 総事業費から補助金及び起債を控除した額に係る分担金は、当該事業年度の次年度に一括納付するものとする。ただし、昭和五十七年度以前の事業費に係る分担金は五年分割納付する。

(4) 学校用地の取得による分担金は、甲乙協議のうえ定めるものとする。

(5) 分担金の支払いは、二の(2)に定めるところによる。

四、規定の変更等

この規程を変更、廃止するときは、地方自治法第二五二条の一四第二項の規定により、甲乙協議のうえ決定するものとする。

上記の規程を約するため、本書二通を作成し、甲乙それぞれ押印のうえ、各自その一通を保有する。

昭和五十八年四月一日

受託者 伊那市長 三澤 功博

委託者 南箕輪村長 三澤 肇

設定 契約書 昭和二十八年九月二六日

変更 規程書 昭和四十六年二月 五日

変更 規程書 昭和五十八年四月 一日

委託について契約書ととりかわして一〇年後に委託児童生徒を南箕輪小中学校へ編入しようとする動きが起きた。それは昭和三十四年度以降の南箕輪小学校の児童数が減少の一途をたどりはじめたことに起因したのである。

すなわち在籍児童数が昭和三十四年度の七六五名一八学級が三十八年度には六〇二名一四学級となり、四十四年度には五〇〇名一三学級となる

ことが推定されたためであった。

そこで昭和三十八年一月二日小学校において、村理事者、教育委員とPTA理事の懇談会をもってこのことを討議した。

当時の委託児童は一六〇名あり、これが全員来れば、適正規模の学校を保持することができて教育の実を挙げるためにきわめて有効であるということ。第二には村民が同一学校の同窓生であれば今後民主的な村作りをするのにもっとも大切な村民の意識疎通に有利であり、村民の精神的紐帯を固くするために有効であるなどの理由によって委託児童をすみやかに編入することが望ましいとされた。

しかしこのことは一部地元民の反対その他の理由によって実現することができなかった。

10 学校給食

小学校において学校給食の行なわれた記録は昭和八年に初めて見られる。その前年実施した報告に左のとおり述べられている。

「昼食に『ムスビ』として赤味噌を付けて給与し、また現品を白米にて交付し、特に栄養悪きものに対し滋養として学校農園生産の鶏卵並びに山羊乳を給与せり」

この経費として村から交付された三三円一銭のうち食料費一七円七〇銭、設備費一四円〇〇銭、残金四一銭とある。これは貧困にして昼食を持参できない児童へ給与したもので僅かなものであった。

以後年々学校給食の交付金があったが、昭和一一年度の二八円三九銭を最高にして順次減額一五年には僅かに六円五〇銭とある。

戦争が拡大し食糧状態が悪化されるに伴い児童の体位、健康状態が不安になって来て栄養補助が問題となった。

昭和一六年一二月から全校生徒に味噌汁給食を開始した。一七年には味噌醸造計画として一人当たり大豆三〇粒を配って家庭において味噌

畔空地に児童自ら栽培し、これを集めて学校で醸造し、給食する計画を立てている。

一八年度は大豆は学校の収穫、麹は落穂拾いによって得た米を学校で製造したもの、汁の実家は家庭より集め、一部学校自給のものを使う。このようにして得た材料によって味噌汁給食を戦後まで続けた。

昭和二十二年一月新給食室が設置されさらに二五年には給食用がま湯が新築された。小中学校の冬期間みそ汁給食がPTAの手伝いを得て実施されるようになった。

二五年九月からはガリオア資金による脱脂粉乳の配給を受けて、ミルクと味噌汁による年間給食が行なわれた。しかし、二六年六月にはその資金による寄贈は打ち切られたが、同年末までは政府補助によって給食は継続した。

二五年六月一日付で県の指定により給食指定校となった。

二九年四月一日より完全給食を開始した。その材料となる小麦粉や脱脂粉乳等は政府があっせんするものが主となった。小麦粉は指定工場に依頼してコッペパンに加工してもらった。

小中学校の完全給食が実施されて約二か月後の昭和二十九年六月三日に「学校給食法」が制定公布された。これによって学校給食の基礎が定まった。

栄養士を昭和三〇年から任用した。

給食専従者は三二年九月から五名入れてPTAの応援手伝いはいらなくなった。五三年度からはさらに一名増員された。

給食室は昭和五二年全面改築して面目を改めた。そこから中学校へは五二年一月から自動車で調理済みのものを運搬するようになった。

11 PTAの活動

昭和二十二年三月わが国を訪れていたアメリカ教育視察団は、「父母

と先生の会」の育成強化を指摘した。

二二年五月には保護者会結成準備委員会を開催し、結成までの準備を始めた。六月には規約審議、役員選出を行なって南箕輪小学校父母と先生の会(PTA)が昭和二十二年一月二日設立大会を開いた。

翌二十三年九月二三日の大会において小学校部・中学校部・各学年PTAを置くこととなった。その目的とするところは家庭と学校の関係を緊密にし、父母と教師とが相協力することにより、互いに新しい民主的教育に対する理解を深め、児童生徒の訓育、教育的環境の整備等に遺憾のないことを期するにありとした。

以来PTAは、総務・教養文化・保健厚生・校外指導の五部門の委員会を設け、それぞれ部門の計画によって活動している。

南箕輪小学校PTAは発足当初から小学校、中学校一本のPTAであることは他にほとんどない特色である。

PTA母親文庫 昭和二十五年信大付属小で県立長野図書館の本をPTAに貸し出したのが始まりで二六年以上伊那図書館が加入してから郡内の多くのPTAが加入した。役員が二か月に一回ずつ伊那図書館に集まって図書交換をし、部校して各部署に配り回覧して親たちの読書の便を図っている。なお上伊那PTA母親文庫の会では、文集「石楠花」を毎年発行し、その年度の行事や、会員の読書感想文、生活雑記を掲載して、読むことにあわせて書く力を伸ばそうとしている。

(以上「南箕輪小学校百年誌」によって記述してきた。資料その巻詳細は同誌によって見られたい。)

南箕輪中学校の歩み

開校 新学制による義務教育の三か年の南箕輪中学校は昭和二十二年四月八日開校式を挙行した。校長以下職員一五名、新入学生一三九、生徒数三一五名をもって誕生した。校舎は小学校と道を距てた北

に建設された一棟が専用で、他の教室、職員室は小学校敷地内のもので共用で充足した。

翌二三年には北校舎、公仕室、宿直室が完成して、体育以外は中学校敷地内で行なわれるようになった。一〇月二六日より授業五日制を実施した。

二五年村営グラウンドが完成し中学はこのグラウンドを使用することになり、これを視して村と学校合同大運動会を開催した。

校歌・生徒会の歌制定 二五年三月藤沢古実作詞、高本東六作曲の校歌ができた。この歌碑は昭和五五年第三回卒業生寄贈により校門西側に建立された。歌碑は時の校長北原青雲の揮毫によるものである。また、生徒会の歌は昭和四七年度生徒会員から募集し、学級会、本部で討論した歌詞に征矢欣治作曲でできた。

修学旅行 戦中戦後は交通や食糧事情で一時中止していた修学旅行を二二年になって三年生が松本へ一泊二日で実施することから始まった。翌二三年には諏訪方面へ二泊三日、二四年には関東東海方面へ二泊三日、二六年から関西方面へ二泊三日で修学旅行をするようになった。

体育館・特別教室落成 産業教育指定校 昭和二八年四月一三日体育館と特別教室が落成。特別教室棟には音楽練習室・音楽室・木工準備室・動力室・木工室をとり、動力室には動力鉋盤・昇降盤（鋸）木工旋盤・製粉機・粉砕機・研磨盤を設置し、木工室には九台の工作台を入れ、職業家庭科男子コースの施設の完備につとめ、七月末には郡下で最初の産業教育指定校となった。

翌二九年一月には産業教育研究発表会を公開する。

また、家畜舎を築造し給食の残滓によって豚の飼育を開始した。

プール完成 昭和三四年八月二〇日体育館の北に二五×一五m、水

深一・一・一・三〇mのプール完成。九月七日に第一回水泳記録会が行なわれた。

植林作業 昭和二四年五月大芝原へカラマツ一万本ヒノキ二〇〇本植林した。二六年四月一〇日には学校植樹の日として大芝原へヒノキ二万本植樹、(この年まで一〇万本近い苗が大芝原へ植えられる)と学校日誌に記されている。年々中学生は植林をしたり、校打ち作業を行ったりして明治以来の林業経営の伝統を新学制になっても受け継いでやっている。なおまた愛鳥週間には大芝原に小鳥の巣箱を取り付けたりして来た。

中部行事参加 新制中学の授業や体育等特別活動も体制が整って来て対外試合や行事に参加するようになったのは昭和二六年ころからである。

中部陸上競技会にはじめて参加したのは二六年七月で同年一二月に音楽会、球技(野球・排球・ソフト・雑球)には翌二七年から参加している。上伊那陸上記録会には昭和四〇年から参加している。

体育大会 昭和三三年度より従来の運動会にかえて体育大会を行なうようになり、陸上競技記録会とする。

新校舎の建築 昭和四五年七月より新校舎起工、四六年本館・宿直室玄關竣工、一〇月六日落成式、八日新校舎へ引越した。

五八年には増築一二月二五日落成、さらに音楽棟の増築は六〇年一〇月竣工。

特色ある行事 本校の特色ある行事として次のものがある。

○大芝原植林と校打ち作業については先に述べた。

○経ヶ岳歩大会 毎年秋全校生徒参加で行なう。昭和二八年より実施。

○若竹祭 昭和四五年第一回文化祭、四七年には文化祭を若竹祭と名

称を改める。

このときの費用は年々落穂拾いや廃品回収によって得た金を充てる。なおこの祭り中に祖父母を招いて感謝の会を催している。

○勤労生産活動と花壇造り。

Ⅵ 村内にある県立と国立学校

1 伊那技術専門学校

伊那技術専門学校 所在地 南箕輪村字三本木原

設立の目的 「職業訓練法」に基づいて長野県が次の目的をもって設置した施設である。

① 技能労働者の職業に必要な能力の開発向上。

② 短期間のうちにその職業に必要な技能および知識を習得させ、有為な労働者の養成をする。

③ 職業の安定と働く人の地位の向上を図り、経済および社会の発展に寄与する。

これらの目的を達成するために左の業務を行なっている。

① 養成訓練

新規に職業に就こうとする人を対象にして職業に必要な基礎的な技能・知識を習得させるための訓練。

② 向上訓練

養成訓練を受けた人や相当程度の技能・知識を有する人を対象に、その有する技能・知識の程度に応じて、さらに必要な技能・知識を追加して習得させるための訓練。

③ 能力再開発訓練

職業の転換を必要とする人を対象にして新しい職業に必要な技能・知識を習得させるための訓練。

2 上伊那農業高等学校

明治二八年八月一日郡民の切なる要望の結晶として、郡立上伊那農

学校が当時の伊那村字伊那部の民家を借用して開校した。翌二九年四月新校舎が竣工して移りそこで整った郡立上伊那農学校開校の式典を挙げた。

三十七年に県立移管、長野県立上伊那農業学校と改称した。明治四〇年代は郡下唯一の最高教育機関であり、県下に誇る名実ともに充実した農学校となった。

その後学則の改正収容生徒等いくたの変遷があったが、昭和一〇年四月村上明彦校長が中心になって上農寮風教育を創設し一種五年生全員を入寮させた。上農寮の用地は中野原の地に伊那町、西箕輪村、南箕輪村の寄付によった。

昭和二三年四月六日、新制高校開校式挙行、九日校名を長野県立上伊那農業高等学校と改称した。二四年四月一日定時制課程を伊那町立伊那東高等学校より移管。定時制は中心校と四分校からなっていたが三三年中心校に統合した。

昭和四六年、南箕輪村中野原の現在地に新校舎建築を開始し、四九年、画期的で独得な近代校舎の一応の完成により移転した。

校舎周辺に農芸畜産等の実習地のほか、小黒山、北沢山等に総面積七一万㎡余に及ぶ学校林を持っている。

定時制は通学の便等で従来の位置に残されている。

3 信州大学農学部

本学は長野県立農林専門学校を母体とし、昭和二四年の学制改革に際し信州大学に包括されて、農学科および林学科からなる農学部として発足したものである。

長野県立農林専門学校は太平洋戦争中に中等学校が修業年限を四年に短縮させたときを機に、上農に農林専門学校を付設しようとする校長村上明彦を中心に関係者が強力な運動を展開した結果、昭和二〇年

二月五日文部省より、長野県立農林専門学校設立認可となった。

校地は南箕輪村の村有地と一部区有地、それに西箕輪村からとさらに若干の個人有地の提供により、海拔八〇〇mの森林地帯を中心に中野原に五五haの地を得た。

校舎は伊那商業学校の校舎の譲渡を受けて移築した。

昭和二〇年四月、農科四〇名、林科四〇名で開校した。校長は上農の校長村上明彦が兼務した。二三年第一回、二四年第二回卒業生を送り出したが二四年の学制改革により信州大学農学部へ包括されることとなった。農林専門学校は二七年七月一日廃止された。

信州大学農学部は前述の農林専門学校を母胎として、昭和二四年五月三日農学科、林学科の二科をもって発足した。以後学科や講座の増設を行ってきたが四七年には大学院農学研究科修士課程を増設し年を追って内容の充実した学部となっている。

本学部の特色はその立地条件にあるといえる。すなわち本邦国立大学中最も高い標高八〇〇mの地に位置すること、構内は老樹多く農学部によさわしい自然環境にあつて異色ある大学教育を可能にさせている。

付属農場は学部構内に二四・三ha、八ヶ岳山麓標高一三五〇mの野辺山高原に二一ha設けられている。

付属演習林は学部構内、西駒山麓、手島沢山、野辺山にあり、また、上久堅と桂小嶋に試験地がありその面積は合計五三〇haに及んでいる。

学部定員は昭和五八年現在、園芸農学科三五、林学科三〇、畜産学科、森林工学科、農芸工学科各四〇名ずつ計一八五名。大学院は各修士課程とも一〇名ずつである。

四 社会教育

(一) 概 説

明治政府は明治初年から一〇年代、王政復古、天皇親政を大教宣布運動を通じて国民に周知させようとし、これに併せて文明開化政策をとったが、特に社会教育に力を入れたというわけではなかった。

明治二〇年代から後半にかけて、通俗教育と称して社会教育に類する企画に取り組んできたが、本郡においては、明治三七、八年の日露戦役ころから、農業、養蚕業の技術改善講話、時局問題の講演、時局と修養に関する幻灯会と写真展や講演会等が各地に催された。

大正期に入り、文部省におかれた社会教育課は図書館、博物館、青少年団体、処女会、成人教育、特殊教育、民衆娯楽の改善、普通図書認定等に関する事務分掌を行なうことを決めた。これらは、昭和の戦前戦中戦後においては国策遂行の手段に利用されたのである。また、青年の軍事訓練及び思想対策の一つとして「青年訓練所」の開設を奨励した。これに対し、長野県連合青年団は、軍事教育偏重の青年訓練所に反対し、実業補習学校の充実を要求した。しかし、このような政策批判が許されたのは昭和初期までで、その後、戦時体制の進むにつれて社会教育は国策に沿った国民教化の役割を果たすことになった。

戦時期においては、各種社会教育団体が、翼賛体制に統合されて自主性を失ない、社会教育施設も、圖書の検閲、グラウンドの農園化などで、本来の機能を失っていった。

昭和一六年六月教育審議会の答申により、青年と婦人と成人との三者を社会教育の主な対象とし、あらゆる人に結びつくものとして体系づけられた。文化施設として図書館、博物館、指導項目として、展覧会、映画、幻灯、演劇、音楽、レコード、宗教、文芸、美術、放送、演

芸、玩具、生活文化、趣味、娯楽を取り上げた。こうして、昭和二〇年までの間は社会教育は行政上から姿を消し、社会教育局は廃されて国家教育局に改められ、青年学校令の強化と共に戦時体制一色に変わってしまつてやがて終戦となった。

(二) 社会教育諸団体

1 概説

社会教育団体は六歳くらいの子供から青年、婦人、老人に至るまで年齢の幅がある。またスポーツ団体のように自らの好みによって成り立つ団体もある。

一方その諸団体の成り立ちをみると、研修のために自主的に成立し運営しているものもあれば、行政上、国家政策上作られた団体もある。

それらは、近代日本が歩んで今日に至っている国際、国家、社会の情勢が反映していることは明らかである。同じ団体でも、明治、大正、昭和と変化する来たのもあれば、昭和二〇年の終戦によって一たん解消され、名称が同じくして内容の変ったものもある。また、戦後新しく生まれた団体もあり、現代的活動を歩んできたが、また昔行なわれたことを復活させようと考えているものもある。

学校教育と相まって社会教育諸団体が、平和で健康的な福祉国家をめざして活動を盛んにし、今叫ばれている生涯教育、継続教育が行なわれていくことを願うものである。

2 青少年団体

(1) 子供会

数え年六歳くらいから一四歳くらいまでの子供の仲間の子供達といひ、天神様仲間、天神様、どんと焼き仲間などがあつた。明治なかばころから子供の会として発展した。子供の会は小学校入学と同時に加入し、役員は会長、副会長、会計で高等科の生徒の中から選ばれた。子

供の会の仕事はどんと焼き、鳥追い、天神様のお祭り、まんどなどが主であつたが、その外に幻灯会をして衆人伝、忠臣孝子物語、歴史上のできごと、名所旧跡などを映して楽しむこともあつた。昭和になつて日曜日の朝早く道路の清掃もするようになった。

青少年団 昭和一六年二月一四日 高度国防国家体制建設の要請に即応させるために、青少年団体を統合して学校教育と一体のもとに訓練体制を確立する必要があるものとして自主的青少年団を解散させて、大日本青少年団を作り、二〇歳以下の者を団員とし、各町村に分団を設けさせられ、同一七年六月大政翼賛会の傘下に統合され、以来決戦非常体制に組みこまれた。少年団員は小学校と相まって児童に団体的実践訓練をほどこした。青少年団長は市町村長、副団長は小学校長が任ぜられた。昭和一九年戦局激化となり直接戦力としての要求から単位団体である男女青年団を統合、少年団は解散し生徒隊に切り換え昭和二〇年八月の終戦まで続いた。

少年団 昭和一六年八月八日文部省は「学校報国団」(少年団の組織)の編成を指令した。しかし当村ではすでに同年四月二九日南箕輪青少年団結成と、同時に青少年団入団式をすませ、編成ができていた。

少年団については、すでに昭和八年三月一〇日の「児童生徒二対スル校外生活指導ニ関スル件」の学務部長通達によって、少年団組織はできて募道等を毎月一日と一五日清掃したり月一回神社の清掃をした。

地区児童会 戦後、小学生は、各地区に子供会ができ、現在では地区児童会として組織され、PTA校外指導部の援助を得ながら自治的活動をしている。

部落(地区)児童会のきまり

〇この会は部落(地区)での生活や行事などについて話し合い計画を立てて

実行する会である。

○この会は、会長、副会長、書記をおく。

○この会は、新年度はじめ、長期休み前、その他必要なときに開く。

この会は、各部落（地区）におく。ただし北原は久保へ、大芝は大泉へ合併し、北原はそれを南北に分ける。

（小学校文書）

部落児童会の活動は、部落によって若干異なっているが通学路の確認、自転車に乗ってはいけな場所の確認、非常時の集団下校の班編成、行事―花火大会、度胸だめし、球技大会、はんど炊きさん、その他、どんど焼き、天神様、まんどなど、昔からの行事を引き継いだり復活したりしている。

(2) 若 連

男子が一六・七歳になると若者組へ入った。「若連」という呼び方が親しまれた。正月に若者組に入り三五歳まで会員であった。後に三〇歳になり、大正初期あたりから青年会に変わっていく。

若者組の一番大切な役目は村の氏神様の祭事を引き受け、祭りの行事ができるようにつとめることであった。幟を立て、灯笼や提灯をつけ、あるいはそれらの祭典を管理した。昔は、今のように娯楽が多くなかったため、祭の日には地芝居や踊りをして神に奉納して村人を楽しませることが若い衆のつとめであると同時に楽しみでもあった。

若連は自主的に運営され、区によって矯進会（大泉）、愛心協同会（北原）、敬心クラブ（久保）、好友会（田原）などの会名があったが、どの若連もきまりが厳しく、新しくはいった者は先輩の指導と命令に従わねばならず、従わないと仲間外れの制裁を受けることもあった。

好友会規約（抜粋）（明治三十五年）

第壹条 本会ハ田原好友会ト稱ス

第四條 本会ハ同郷青年ノ親睦ヲ篤クシ品格ヲ修メ知徳ヲ増進センガ為ナリ

第六條 本会ハ談話会則ノ定ムル所ニ依リ談話会ヲ開催ス

第七條 本会ハ諏訪社祭事ニ関スル事務ヲ処理ス

第八條 本会ハ年齢十五歳以上参加以下トス。養子ト雖モ参加可トス

第十六條 懲罰委員ハ定ムル所ニ依リ懲罰事件ヲ審査シ且ツ会長ノ諮問ニ応

ズ

第三十條 本会員ハ品行ヲ方正ニシ会則ヲ遵守スルコト

第三十二條 開会中此ノ規約ニ違イ及ビ罵詈訾人身攻撃其ノ他議場ノ秩序ヲ紊ス者アル時ハ会長之ヲ警戒シ又ハ制止シ、又ハ発言ヲ取り消シム、

若シ命ニ從ワザルトキハ会長ハ会議ヲ終ル迄発言ヲ禁止又ハ会席ヲ退去セ

シメ又ハ相当ニ懲罰ヲナス

第三十五條 本会ニ於テ謝儀等ヲ授リタル会員ハ之ヲ懲罰委員ニ訴エテ処

分ヲ求ムベシ。懲罰委員ハ審査ノ上相応ニ之ヲ処分スベシ

第三十九條 懲罰ハ左ノ如シ

(一) 大会ノ席ニ於テ諸費ス

(二) 過料金銀シ毫錢以上五拾錢以下

(三) 大会ノ席ニ於テ相応ノ詫言ナサシム

(四) 除名

(五) 絶交

第四十三條 本会員ハ会外ト雖モ本会名譽ヲ毀損シ、其ノ他不都合ノ所為アル者ハ相当ニ懲罰スルコト

談話会則

第一條 本会ハ好友会規約第六條ニ基ツキ、毎年十一月ヨリ翌年五月マデ毎月二回開催ス

第六條 本会ハ無通知欠席スルニトテ許サズ止ムヲ得タル事故アリテ欠席スル場合ニハ其ノ旨座長ニ通知スベシ但シ年齢十五歳以上此ノ限りニアラ

ズ

第十一條 本会ニテハ演説、談話、討論、質疑等ヲナス

(田畑神社文書)

(3) 青年会

若者組、あるいは若連も大正期あたりから青年会となり、年齢も二七歳くらいまでになっている。

大正期の郡下の青年会の様子を年表的に示すと次のようである。

大正元年：一〇月一三日伊那小学校において、上伊那青年代表者が開かれ、①町村青年組織統一に関する件、②体育奨励、③実業補習教育の普及振興に関する件が協議された。

大正二年：上伊那連合青年会が結成され、会長に郡長を推戴した。

大正三年：連合青年会の会誌が創刊され、第一号が発刊された。大部分の青年会で図書を備え付けた。

大正八年：下伊那では自立青年会の運動が活発で、いわゆる官製青年団脱皮の動きが始まり、その影響を受けてこの年青年会自由化の声が高まり、上伊那連合青年会では会員中から会長を選挙した。

大正一〇年：長野県連合青年団が結成された。

昭和期に入ると農村が経済不況へと進む中で、思想や政治問題が活発に論じられ、昭和六年ころから支会の祝会等があつて前途に暗い影が感じられて来た。さらに、しだいに読後運動が活発になった。

本村の青年会は、大正期には会員の教養を高めるために図書の購読が行なわれ、「背負い箱」になっている書籍の後面に背負いなわをつけたものに書籍を詰め、巡回文庫として地区から地区へ巡回して利用することをした。また、部落対抗の運動会も行なわれた。

昭和に入っても初期は大正時代と同様な活動が行なわれていたが、

しだいに戦時色が濃厚になるにつれて読後活動が多くなり、昭和一六年には自主的な青年会が解散させられ、官製の大本日本青少年団の傘

下に入り、二〇歳以下の青少年を団員として各町村に分団がつくられた。さらに、同一七年には大政翼賛会の傘下に統合された。昭和一九年、戦争が激しくなり男女青年団を統合し、総力を戦争遂行する組織の一翼として終戦まで活動した。

戦後は新しい考えによって各町村に青年会が結成され、農事改良、演劇研究、原水爆禁止運動、憲法擁護運動、体育競技、村を明るくする運動、四日クラブの事業を公民館活動と協力して行ない、郡連合青年会、郡市連絡協議会等の組織も生まれている。

氏神様の祭事等も地区の神社役員と協力して行なうようになり、祭りの演芸等もだんだん少なくなつて来た。しかし、最近また少しずつ復活のきざしが見えはじめている。

(4) 処女会

大正のころできた若い娘の集団である。読書、裁縫、踊りなどをして教養を身につけたり、修養といつて名士の講演会を聞くとか、料理の講習会を開いて花嫁修業に役立てるなどの事業が行なわれていた。

(5) 女子青年会

昭和初年に処女会が女子青年会となったものである。

なお、大日本青少年団として大政翼賛会傘下にあつた昭和一七年六月以降は、女子団員は皇国女子青年に適切な実践的修練がほどこされた。昭和一九年戦局激化となり、直接戦力としての要求から単位団体である男女青年団を統合し、昭和二〇年八月の終戦まで続いた。

戦後は、青年会として男女統一している。女子部とし青年会活動を活発にし、母親大会などにも協力参加したりしている。

3 婦人団体

(1) 婦人会

昭和一七年四月二六日愛国婦人会、大日本婦人会、国防婦人会が統

合して、大日本婦人会上伊那支部が結成されたが、昭和二〇年七月、大政翼賛会の解散に伴って解散した。

戦後、本村では、昭和二三年に婦人会が発足した。

行政的な関係や活動の都合上、農協関係の組合会生活部、日赤奉仕団、消費者の会、結核予防婦人会などと深いつながりをもって活動している。

次に、南箕輪婦人会の会則を掲げる。

南箕輪婦人会会則

第一条 本会は、南箕輪婦人会という。

第二条 本会の事務所を南箕輪村教育委員会事務局内に置く。

第三条 本会は南箕輪村各区婦人会を以て組織する。

第四条 本会は婦人相互の親睦を計り教養を高めると共に、地域社会の発展に寄与することを目的とする。

第五条 前条の目的を達するため次の事業を行なう。

- 1 各種講演、講習会の開催
- 2 各種資料の収集調査視察などの実施
- 3 本会の目的に合致する事業の他団体との共催
- 4 組合生活部、日赤奉仕団、消費者の会、結核予防婦人会、生活改善推進に関する事業

第六条 本会に次の役員を置く。

会長 一名 副会長 一名 理事 一九名以内

任期は一年とし再選を妨げない。

第七条 会長副会長は現年及び新年度役員により会員中より選出する。理事は各区婦人会正副会長を充てる。

第八条 会長は会務を総理する。副会長は会長を輔佐し会計を司る。理事は会長副会長をたすけ事業の遂行にあたる。

第九条 会議は役員会、定期総会及び臨時総会とする。役員会は会長、副会

長、理事を以て組織し、必要により会長が招集する。定期総会は毎年四月に開催し、臨時総会は必要に応じて役員会の決議により開催する。

第十条 定期総会で次のことを決める。

1 事業計画、経費の賦課徴収方法

2 前年度経費の収支決算の承認

なお、昭和五九年度南箕輪村婦人会の主な事業は次のようである。

南箕輪村婦人会の主な事業（昭和五九年）

四月二二日 日赤奉仕団奉仕講習を大芝グラウンドで行なう

四・三〇 総会（役場講堂）

五・ 日赤奉仕団奉仕講習に協力

六・九 消費者の会総会に協力

六・一六 農協生活部部長以上研修会に参加（南本保養センター）

七・七 水産訓練を大芝プールで行なう

七・一〇 ゴミ質改善チラシ及水切り袋会員一人一枚無料配布

七・一〇 青少年非行防止学習会

七・一〇 原水爆禁止募金

八・一 交通事故防止運動（チラシ配布）

八・六 原水爆禁止アピール

八・二〇 一日婦人環境村議会及び大芝高原の視察研修

八・二八 消費者の会事業に協力（村内業者との話し合い）

九・一 日赤防災訓練（救急法）炊き出し訓練

九・九一〇 研修旅行（生活部と合同）

九・ 結核撲滅十字募金に協力

九・ 長野県西部地区地震に義援金を送る

一〇・一八 雑糞水処理について学習及び環境衛生施設見学

一一・一 赤十字血液センター視察（日赤奉仕団事業）

一一・一八 日赤奉仕団秋季演習を大芝グラウンドで行なう

同日消費者の会事業に協力（不用品即売会）

一・一 米消費拡大事業に協力（料理講習会五カ所）

一・二 村基本構想について各班で検討

一・三 村基本構想のまとめ提出

一・四 北部ブロック研修、長野公民館で行なう

一・五 アフリカの子供を飢えから救う資金カンパ

一・六 日赤募金団出初式

一・七 結核予防婦人会奉仕活動（松本市）

一・八 老人ホーム慰問

三・一 二 村議会傍聴

三・二 消費者の会協力事業（飲食まつり健康食展示コーナー）

本村婦人会では、以上のような事業の外に充足当時から生活改善の一環として引き継がれてきている事業に、「貸衣装」がある。花嫁衣装の貸与から始めていたが、最近では江戸袴が主で、紋付、モーションなども貸与している。

昭和六〇年度の南箕輪村の婦人会の会員数は八一一名であり、班の数は七三、役員数は八八名である。同年二月の婦人会大会において、婦人差別撤廃条約の批准に向かって地について婦人活動を展開することを「申し合わせ」として採択している。

(2) 農協生活部

農協生活部は農協婦人部と言っていた。購買の推進に当たったり、婦人農業学校に参加したり、研修会を開いたりしている。研修会では、生活改善、営農改善、料理講習会などを行なっている。農協としても農業後継者作りに力を入れている。米価要求大会には生活部も協力参加している。

(3) 結核予防婦人会

婦人会活動の中に含まれていて、複十字シール募金運動、成人病予防、結核募金活動、などを行なっている。ボランティア活動としては、昭和五六年年度の記録によると慰問金とおむつを持って松本東国立病院に行き、重度心身障害児の慰問を行なっている。

(4) 若妻会

公民館活動によって生まれた会であって、初めは若妻を対象に妊娠調節や育児などの指導を目的としたが、その時の集まりがそのまま継続して現在親睦の気持も含まれている。地区によっては「白百合会」と言い、結成された年度によって同年代の婦人の会として「むつみ会」「椿子会」「若妻会」などと名称がつけられている地区もある。

(5) 仏教婦人会

西光寺、松林寺、常円寺、嶺頭院等の檀家や、地区に寺がある所の婦人が集まって和讃をしたり、寺院巡りをしたり、春は花祭りに、秋は浄土会に総会をもつて法話を聞いたりする婦人の会である。

4 老人団体

(1) 初期の老人団体

老人たちの集まりは、すでに戦争前に自然発生的に生まれている。昭和一五年ごろ久保には、会員相互の親睦と、生きてゆくための行事を行なう「修養会」が生まれている。組織は五〇歳から七五歳ぐらいまでの婦人たちが中心で、男性もある時期には入会していたようである。

お互いに気の合った人たちが始めあい、常に一五、六人はおり、具体的な活動としては寺の住職を指導者として各種の証文を覚えたり、法話、講話を聞くこと、春秋彼岸、釈迦の生誕日、涅槃日、盆の仏迎えの行事等への参加、会員間に葬儀があった場合は弔問・誼経などを行ない、なお、御詠歌なども歌ったようである。組内に葬式があった

場合、お墓参りに行くまえ仏前でお経を唱えて行くが、そのお経をあげるのも多く修養会の人たちであった。

会の運営は合議制で、初めは月一回西念寺に参集し、後は会員の家に順番に寄り集まって行ない、会費を出し合って運営し会終了後はお茶に漬物程度で交流を深めていた。

この会は昭和五〇年ごろ自然消滅の形となったが、この久保の修養会のような形の老人の集まりは、塩ノ井、北殿、大泉などにもあったようであり、外の部落にも存在したと考えられるが、詳細は不明である。

戦後経済が成長し、生活の安定が進むにつれて各地に自然発生的に老人の集まりが生まれてきた。〇〇長寿会、□□友愛会△△老人会等と、その地区地区による老人有志で結成され、その運営もまちまちであった。

初期のうち、これらの集まりは正式な団体ではないので、その起源や内容は判明しない点が多い。

各区老人クラブの報告によると、田畑は昭和三十一年、塩ノ井は同三十六年、神子柴・大泉は同三十七年、南殿は三十八年発足したことになる。

これらの有志による老人クラブの人たちがどんな活動をしたか、それぞれ地区によって異なり判明しない点が多いが、久保では月二回ほど雑種工をし、道をないながら時局の話をしたり、名士の講演を聞いたりして農村の進み方などを話したという。

また、神社仏閣の清掃、公民館や停留所庚申塚道路等の草刈りや草取り、草ぼうき、雑巾の寄附等の奉仕活動を行なった地区が多く、菊の栽培観賞、藤の花見会を催したり芸能人を招いて歌や踊りを習い鑑賞会を開いたりしているところも多い。地区によってはお花見のこ

ろ、老人と若妻の会を持ち五平餅を食べながら話し合いをし、嫁と姑の問題など互いに理解を深めるための取り組みをした例もあり、有意義な活動が行なわれている。

(2) 老人クラブの組織化と発展

経済の発展と共に日本人の寿命はしだいに伸び、老後の生活をいかにするかということがしだいに大きな問題となってきた。平均寿命の伸長と高齢化社会の伸展とともに、老人たちの生きがいを求める要望も強くなり、政府は昭和三十八年「老人福祉法」の施行によって、老人クラブ等に国・県の補助を行なうよう進めるなど、国も県も老人の福祉のみならず、その生きがいのある生活の創造を目指して努力するようになっていく。

このような情勢のもとで、昭和三十八年ごろ、時の村長清水国人は、老後の生きがい対策と長寿を祝う意味で、村費支出により長寿会を発足させた。この長寿会の発足当時、全区に老人クラブが発足している状態ではなかったが、この残された区にもしだいに老人クラブが生まれて全村的な組織となり、昭和四〇年五月には南箕輪老人クラブ連合会規約が成り、長寿会は連合会に統合されることになった。

こうして、年一回総会を開催し、また演奏会、バス旅行などが行なわれ、老人の親睦と楽しみ場の場となった。

長寿会の段階においても、回を重ねるにしたがい、疑問点が生まれ、当時の倉田会長は慰安、演奏から脱するのが好ましく、歌舞演劇を考へなければならぬことを提案している。先に政府が老人福祉法を施行し、三十八年の八月、国・県の補助を受けるに当たっては、老人クラブ運営基準に適合するクラブでなければならぬとして運営基準が示されているが、この基準はさらに検討が加えられて、昭和四四年六月各都道府県知事、指定都市市長あてに「老人福祉費補助金交付要

は在宅福祉事業補助金交付要綱により、各老人クラブに助成することになった。



図5-32 老人クラブの活動（ゲートボール）

綱」が通達された。

その運営基準には、目的の項に「老人生活を健全で豊かなものにし、老人福祉を増進することとを目的とするものとす」とあり、また活動の項には「老人クラブは全員の教養の向上、健康の増進、地域社会との交流を総合的に実施するものとし、老人クラブの活動は年間を通じて恒常的かつ計画的に行なうものとする」と示されている。

さらに、昭和五四年十一月国

これらの方針に基づいて、老人クラブは単なる慰安・演習レクリエーションから脱し、教養講座、社会奉仕、スポーツ等を重点におくよう指導され、南箕輪老人クラブ連合会もこの基準に従って運営され、国・県の補助を受けて活動をしている。

現在、南箕輪村老人クラブ連合会は会員数一一〇〇人に達し、現実には一堂に会した総会が不可能に近い。そのため各クラブ連合会代表五一名が選出され、それらの代表による総代会の形で運営されている。

各区の老人クラブの運営も、前記の方針に添った活動が展開されており、その内容を見ると従来からの奉仕活動のほか、西部大地震義捐金募集やねたき老人の慰問などの奉仕活動が加えられたり、交通安全故防止のための交通安全講習会などが行なわれているが、スポーツと

してゲートボールやマレットゴルフが取り入れられ、老人クラブの活動は活発になり、特にゲートボールは村内の競技会はもちろん郡大会、県大会まで行なわれ、郡大会や県大会で優勝するチームが生まれるほどの発展を示している。

この老人クラブの運営費用は会員の負担による会費と補助金を中心になっているが、昭和五八年の村老人クラブ連合会への補助は次のように行なわれた。

昭和五八年度、老人クラブ連合会 事業補助金等交付

村費補助確定額 二六万〇〇〇円

補助事業の目的

村内一二老人クラブの連繋を図り、総合的事業を計画実施し老人福祉を推進する。

（役場文書）

各区の老人クラブに対する村補助金（内国・県補助金が三分の二）は総額は六九万二〇〇〇円で、会員数に応じ三段階になっている。なお、各区の老人クラブ会員数、合同回数、費用等を一覧表にして示すと表6-98のようである。

大芝、北原、中込の各区は老人数が少なく、このままでは助成の対象とならないため、三クラブを合併し、西部老人クラブとして五一年発足した。しかし、三区ともかけ離れていて合同の会合等は不可能なため、その後助成を受け分けあつて個々の区で活動をしている。

5 青少年健全育成協議会

「青少年健全育成推進の村」を宣言した当村は、「南箕輪青少年健全育成協議会」を結成、村を挙げて青少年の非行防止・健全育成に取り組むことになった。昭和五一年「地区育成会」を組織各区より選出された推進員による活動が始まった。明日の社会の担い手である青少年

表6-98 各区老人クラブ会費と運営費

(昭和五八年度)

会 名 称	会 員 数	会 合 同 数	運 営 費				合 計
			会 費	村補助金	区補助金	その他	
久保老人クラブ	一三三	一一	四八、〇〇〇 ^円	七〇、〇〇〇	四五、〇〇〇	一六三、〇〇〇 ^円	
塩ノ井老人クラブ	七三	一八	一四、六〇〇	六四、〇〇〇		五〇、〇〇〇	一二八、六〇〇
北殿老人クラブ	三二	一七	一一〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇		八五、〇〇〇	二七五、〇〇〇
南殿老人クラブ	一二七	二〇	二五、四〇〇	七〇、〇〇〇	四五、〇〇〇		一四〇、四〇〇
田畑老人クラブ	二二二	二二	九四、〇〇〇	八〇、〇〇〇	六九、〇〇〇	四六、〇〇〇	二〇九、〇〇〇
神子柴老人クラブ	七二	一六	三五、五〇〇	六四、〇〇〇		五、〇〇〇	一〇四、五〇〇
沢尻老人クラブ	六七	一六	一一、〇〇〇	六四、〇〇〇			七六、〇〇〇
南 原 長 寿 会	七一	一一	二五、五六〇	六四、〇〇〇	五〇、〇〇〇		一三九、五六〇
大泉老人クラブ	一〇五	一三	一〇〇、八〇〇	七〇、〇〇〇		六、六〇〇	一七七、四〇〇
北原老人クラブ	二〇	七	一〇、〇〇〇	二二、〇〇〇	五、〇〇〇		三七、〇〇〇
大芝老人クラブ	二五	一一	一一、五〇〇	二二、〇〇〇	二五、〇〇〇		五九、五〇〇
中込老人クラブ	二六	一一	一三、〇〇〇	二二、〇〇〇			三五、〇〇〇

を健全に育成するためには、いろいろと好ましくない問題を地域の問題として、地域の住民全員の責任において解決し、明るい村づくりを目ざしての活動であった。

さらに、昭和六五年より県知事委嘱「青少年健全育成指導員」制度が発足、推進員と連携して健全育成活動に当たっている。その活動は遊び場の設置、有害環境の除去、危険箇所点検、スポーツの奨励、魚つり大会、非行防止懇談会、講演会等各方面にわたっている。

昭和五六年よりは「村内高校生親の会」も発足、各高校生の親の立場からも率先して非行の防止と健全育成に取り組む。また「少年友の会」の積極的な活動も大いに期待されている。

次に「青少年健全育成推進の村宣言の決議」を掲げると次のようである。

わが南箕輪村は古くから豊かな自然に恵まれ、明るく住みよい村としてわれわれの誇りとしてきたところである。

しかるに、近年急速に進行している地域の開発と道路の開通に伴い、加えて伊那市近郊という地理的条件により、各種の娯楽施設や、風俗営業等の進



図-93 魚つり大会

出するところとなり、これが善良なる村の風俗ことに青少年健全育成に与える影響は多大なるものがあると思われる。

村の将来の担い手である青少年が心身共に健全に成長すること、明るく住みよい生活環境を守ることがわれらの等しく願うところである。

もとよりこれらのことは、住民一人一人の自覚によることは大切なことであるが、一方村の取り組むべき姿として積極的に悪い環境を排除し、村の環境の浄化に努めるべき責務があると確信する次第である。

以上の趣旨により、村の清潔な環境を保持し、将来を担う青少年の健全育成を推進するため、ここに南箕輪村は「青少年健全育成推進の村」とすることを宣言すべきであると決議する。

昭和五〇年九月二日 南箕輪村議会

(後掲文書)

6 社会体育団体

昭和四〇年代に入ると県下いたるところに早起き野球熱が高まった。勤労者の体位向上と親睦を目的とした早起き野球の結果が当村でもできないかという気運が盛り上がり、昭和四五年村公民館活動の一環として村内各種団体、官庁、各部落公民館に呼びかけ会員を募集した。

こうして、同年七月、参加九チームを得て南箕輪早起き野球会が結成された。当時参加人員は一三一名で、事務局は村公民館に置き、予算は一チーム当たり一〇〇〇円で発足した。

昭和四九年度からは公民館活動からは独立して自主的に運営される社会体育団体となり、同五〇年からは南箕輪村早起き野球連盟と改称され、五五年には一七チーム、三〇五名の参加者を持つ体育団体に発展した。

この間、昭和四八年度から早起き野球南信連盟、県連盟に加入し、各種大会に参加し、大芝球場が完成後は上伊那選手権大会や南信予選

大会の主幹を勤めるなど役員を中心とし和気あいあいの内にも活発な活動を展開している。

前項の村内スポーツ施設の整備に伴い、早起き野球のみならず昭和四七年には夜間ソフトボール連盟、同四九年には婦人バレーボールリーグ戦が結成され、以後十数団体が結成されている。これらの社会体育団体は公民館活動や教育委員会の社会体育指導のもとに成立しているものが多いが、やがてそれが独立して自主的に運営される社会体育団体として活動し村民の融和と地位の向上に重要な役割を果たしている。

なお現在における社会体育団体の状況は表6-19のようである。

表6-19 南箕輪における社会体育団体

(昭和五九年現在)

団体名	結成年	人数	活動会場	活動日・時間
早起き野球連盟	昭四五	一七チーム	大芝野球場	日曜祭日を除く 毎朝A.M.五・三〇―七・〇〇
婦人バレーボールリーグ戦	昭四九	一三チーム	村民体育館	毎週大・木 A.M.七・三〇―九・三〇
夜間ソフトボール連盟	昭四七	一八チーム	大芝野球場	日曜・祭日を除く毎日 P.M.七・〇〇―九・三〇
ママさんソフトボール連盟	昭五八	五チーム	小学校校庭	毎週金曜日 P.M.七・三〇―九・三〇
ママさん卓球クラブ	昭五一	一九名	村民体育館	毎週金曜日 P.M.七・三〇―九・三〇
卓球クラブ	昭五一	一三	村民体育館	毎週水・金・土 P.M.七・三〇―九・三〇
役場バトミントンクラブ	昭五七	二四	村民体育館	毎週木曜日 P.M.五・三〇―七・〇〇
婦人バレーボールクラブ	昭五六	一七	村民体育館	大会前に練習
婦人ソフトボールクラブ	昭五七	一七	村民体育館	毎週水曜日 P.M.七・三〇―九・〇〇
少年野球クラブ	昭五七	一七	小学校校庭	毎週日・祭日 P.M.三・〇〇―五・〇〇
南小下ラゴンス	昭五四	三四	大芝小運動場	毎週月・水・金 A.M.六・〇〇―八・〇〇
サッカークラブ	昭五一	二六	大芝小運動場	毎週月・水・金 P.M.七・三〇―九・三〇
北陵ソフトボール友の会	昭五五	四二	小学校校庭	毎週土曜日 P.M.七・〇〇―九・三〇

バトミントンクラブ	昭五七	三七	小学校体育館	毎週金曜日 P.M.七・〇〇―九・三〇
婦人バスケットボールクラブ	昭五九	一二	村民体育館	毎週土曜日 P.M.三・〇〇―五・〇〇
軟式テニスクラブ	昭五二	三一	大芝 デニココート	毎週月・水 P.A.M.五・〇〇―七・〇〇
ジャズ体操クラブ	昭五八	四五		毎週月・水・金 P.M.七・三〇―九・三〇

社会教育施設

1 文化的施設

本村における社会教育のための文化的施設は、現在のところ公民館のほか、図書館と郷土館のみである。

(1) 図書館

本村の図書館は、明治三三年五月東宮殿下の御慶事を記念し、「南箕輪通俗図書館」として設立された。

それは、村内有志者の図書や寄附金によって通俗教育(社会教育)の資料となる若干の図書を収集し、事務所を南箕輪小学校内におき、随時貸出しや閲覧に供した。しかし、図書購入費等が少なく一時不振であった。

大正天皇御即位の盛典を記念して、巡回文庫の制をとり入れ、大いに拡張した。同窓会・青年会の事業とすることが適切であるとして、寄付金の募集に着手したところ、当時としては巨額の金二三〇余円が集まった。この一般の熱誠にこたえるべく、図書館の基礎を固めるため「館則」を定め巡回文庫を設け、書籍八個を造り、各箱に図書を納めて村内八部落に一箱ずつを配り、順次巡回することになり、大正元年十二月巡回文庫開式を挙行している。その後の動きを年表的に示すと次のようである。

大正二年七月

図書館令により知事に開申

大正四年三月 長野県知事より表彰状

大正 五年一〇月 基本金造成を図り村内有志者の熱心により金七五〇円を得

を得

大正一〇年一月 事務所を組合の階上に移し、貸出し及び閲覧に便す

このように、その後順調に発展して、図書室が南箕輪信用購買組合事務所階上に設けられ、毎月一〇日・二〇日・三〇日が開館日で閲覧及び貸出しを行なった。

蔵書数は一五四七冊となったが、時代の進運にみあった図書購入費とはいえず、一般の満足する程度には至らなかった。

そこで、村当局は「南箕輪村図書館基本財産蓄積条例」を作つて、村立図書館の設立の準備を始めたのである。

この基本財産の蓄積は順調に進んで、昭和四年には「南箕輪村立図書館」が設立された。それは通俗図書館の蔵書を受け継いでおり、同年二月六日、通俗図書館長倉田寛幹より村長あて次のような寄付採納願が出されている。

寄付採納願

別紙目録ノ通り図書寄付仕度ク候間御採納下ナレ度ク申請候也

昭和四年二月二十六日 南箕輪通俗図書館長 倉田寛幹

南箕輪村長 日戸伝幸殿

一 圖書一八八三冊

修身類	一七六冊	伝記類	一二七冊	宗教類	二二冊
社会類	三〇冊	家事類	六七冊	哲学類	一六冊
教育類	一八冊	農業類	一二九冊	文学類	七八四冊
地理類	三〇冊	経済類	三三冊	歴史類	一〇七冊
理科類	二七冊	政治類	一四冊	漢文類	一〇冊
数学類	三冊	評論類	三一冊	母史類	一四三冊

商業類 四冊 洋書類 一冊 辞書 八冊

法律類 一三冊 雑 九六冊

(校場文書)

村立南箕輪図書館は館長には村長が当たつたが館務は青年会が行ない、相変わらず巡回文庫をとり入れて、通俗図書館とあまり内容は変わつていなかったが、次のような図書館規程が作られている。

議案第三六号

村立南箕輪図書館規程

第一章 總則

第一条 本図書館ハ村立南箕輪図書館ト称シ図書室ヲ南箕輪信用購買組合階上ニ置キ村長之ヲ管理ス

第二条 本図書館ハ南箕輪村公衆一般ノ閲覧ニ供ス

第三条 本館ハ特許者ノ寄附金及ビ寄附圖書ヲ採納ス

第四条 本図書館ハ巡回文庫ノ制ヲ併設シ農閑時ニハ村内各區ヲ巡回閲覧セシム 但シ巡回ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム

第五条 館務ハ主トシテ南箕輪青年会之ニ当タルモノトス

第二章 役員

第六条 本館ニ左ノ役員ヲ置ク

館長 一名 副館長 二名

評議員 五名 理事 若干名

第七条 館長ハ村長トシ館務ヲ總理ス

第八条 副館長ハ本村小学校校長並ビニ本村青年会長ニ嘱託シ館長ヲ補佐シ

テ館務ヲ掌理ス

第九条 評議員ハ館長ノ推薦ニ依リ任期ヲ二年トシ本館ノ諮問機關トス

第十条 理事ハ各區二一名ヲ置キ各區青年支會長ニ嘱託シ館長ノ指揮ヲ受

ケテ圖書ノ管理運用ニ当タル

第三・四・五章略 昭和四年十一月二十五日

(校場文書)

この図書館は南箕輪信用購買組合の贈上におき運営されていた。昭和三年ころ旧役場二階会議室に移し、暫定的に図書室と呼んで運営されていたがその活用は極めて少なくなっていた。

昭和三十九年には村公民館が竣工開館したことにより、専用の図書室が設けられ、そこに図書を移し、以後毎年図書の購入をして蔵書の増加を図り一般への図書の貸し出しを行ない利用を図っている。

しかし、現在蔵書数も少なく、一般の利用もまれで社会教育の発展に充分役立っているというとはできない。蔵書数の面においても施設や運営の面においても画期的な充実改善が望まれている。

(2) 郷土館

郷土館は、昭和四十六年中学校新築に伴い旧校舎が不用となったため、旧校舎の一部を解体して公民館東側北に移築し郷土館としたもので、面積は一四八㎡である。

館内には村内遺跡より発掘された土器や石器などの考古資料、村内から収集された民俗資料が陳列され、最近寄贈された植物標本等が収納されている。しかし陳列も管理運営もまだ整っておらず、今後の整備改革が望まれる状態である。

2 スポーツ施設

本村の社会体育の施設は昭和四〇年代後半から急速に充実をしてきている。

大芝スポーツ公園はまず昭和四十七年に野球場とアーチェリー場、四十八年に陸上競技場が造られ、四十九年には村民プールが完成、五〇年には大芝陸上競技場に夜間照明施設ができ、五十四年には六面のテニスコートが完成した。また、大芝陸上競技場は冬季節スケート場として利用され、付属施設として憩いの家及び宿泊施設を持ち、総合的なスポーツ公園として、村内外の多くの人々から利用されている。

村民体育館は五一年に、主競技場の外に階下に卓球場、柔剣道場、トレーニング室等を持つ総合体育館として完成し、村民一般の社会体育の場として活用され、また新築された小学校体育館及び小・中学校校庭も社会体育の場として夜間村民に解放利用されている。

こうして、体育施設は文化施設に比し格段に整備されているといえよう。(詳細は第七章第五節参照)

第七章 新しい南箕輪

第一節 人口と職業

一 戸口の推移

明治以後における南箕輪村の戸数（世帯数）および人口の推移は、表7-1および図7-2のとおりである。表7-1の明治前半の数字は当村役場文書、塩ノ井大東文書により、明治三十一～大正五年は県統計書、大正九年以降は国勢調査に基づく長野県統計資料によった。

(一) 人口の推移

南箕輪の人口の推移は、表7-1および図7-2によってわかるように、1、明治初期より大正五年前に至る人口増加期、2、大正五年前より昭和一九年に至る人口停滞期、3、昭和二〇年より同二五年前に至る人口変動期、4、昭和二六～二九年に至る人口漸減期、5、昭和三〇～三六年以後の人口急増期に分けて考えることができる。

1 明治初年より大正五年前に至る人口増加期

この四五年間では人口がほぼ倍増し、年平均の増加人数は四六人ほどであった。この時代社会的増加はほとんど考えられないから、高い出生率に基づく自然的増加であったといえる。（出生率死亡率の項参照）

2 大正五年前より昭和一九年に至る人口漸減期

この時期は出生率、死亡率ともに前期と大差なく、自然増加率が二〇パーミル程度でかなり急速に増加しているにもかかわらず、人口が停滞気味であるのは社会的減によるものと思われる。社会的増減を示す適切な資料がないが、当時の出寄留者が常時一〇〇〇人内外、入寄

留者が二五〇～三〇〇人程度であり、これは毎年の寄留者の現在数を示すものであるが、転出者の多かったことを推量させるものである。これを具体的事象で考えるならば、大正から昭和の初期にかけては製糸工場への製糸工としての就業のための出村が多く、昭和七、八年ころから太平洋戦争中までの戦時体制下の時代は、軍需工場への就労や動員、軍隊への応召等が大きく社会的減に関与したものの考えられる。

3 昭和二〇年より同二五年前に至る人口変動期

昭和二〇年村の人口は急増しているが、これは、戦時体制下に行なわれた都市からの疎開者がまだかなり残留しているところへ、各地からの引揚者と軍隊からの復員者、敗戦に伴う経済の混乱による一時帰村者等が大きな要因になっている。その後、疎開者は逐次都会へ引き揚げていったが、開拓者の村内への入植、婚姻の増加による出生率の増加（このときの出生率の増加を第一次ピークと呼ぶ）があり、二〇年の急増など内容的に大きな変動期であった。

4 昭和二六～二九年までの人口漸減期

この時期は生活もやや安定し出生率の低下が著しく自然増が減少したに加えて、経済の復興に伴って都市に職を求めて転出するものが増え、村内人口は漸減をした。当時は毎年三〇〇～四〇〇人が転出し、転入者との差が毎年一〇〇～二〇〇人になっている。

5 昭和三〇～三六年以降の人口急増期

この時期は医学の進歩と医療行政の発展により、死亡率は低下して一〇%以下になったが、出生率はさらに急速に低下したため人口の自

表7-1 明治以後南箕輪村の戸数・世帯数・人口の推移

年	戸数・世帯数	人口			資料出所	備考
		総数	男	女		
明治5	戸数 420	2,259	1,145	1,114	塩ノ井大東文書	(1戸当人数)
9	" 462	2,417	1,227	1,190	役場文書	5.38
15	" 526	2,719	1,370	1,349	" "	5.23
18	" 519	2,731	1,375	1,356	" "	5.16
25	" 527				上伊那町村統計調査	5.23
31	" 531	3,246			上伊那誌現代篇	6.11
35	" 541	3,351	1,725	1,626	"	6.19
40	" 624	3,638	1,864	1,774	"	5.83
45	" 598	3,890	1,931	1,959	"	6.50
大正5	" 680	4,333	2,237	2,096	"	6.36
9	世帯数 758	4,025	1,936	2,087	国調 長野県人口付表	5.3
15	" 752	3,906	1,964	1,952	" "	5.19
昭和5	" 825	4,349	2,144	2,205	"	5.27
10	" 881	4,420	2,228	2,192	"	5.02
15	" 869	4,466	2,228	2,238	"	5.14
20	" 1,038	6,180	2,907	3,273	村勢一覽	5.89
22	" 1,105	6,150	3,042	3,108	国調	5.56
25	" 1,197	6,360	3,165	3,195	"	5.31
30	" 1,236	6,248	3,122	3,126	"	5.05
35	" 1,272	6,043	2,989	3,054	"	4.75
40	" 1,361	6,146	3,028	3,118	"	4.52
45	" 1,568	6,660	3,329	3,331	"	4.28
50	" 2,048	7,676	3,822	3,854	"	3.75
55	" 2,446	8,874	4,337	4,500	"	3.62
58	" 2,704	9,439	4,688	4,751	村報1月1日現在	3.49



図7-1 中込団地の成立（昭和50年中込区となる）

然増加率は小さくなっていく。それにもかかわらず人口の急増しているのは社会的増によるものである。それは、一戸当たりの子供出生数の減少、それによる転出可能な二、三男一女の減少したこと、それと表裏して工場の地方分散によって地方における就職機会の増大が転出者を減少させた。この反面で南箕輪が伊那谷における交通に便利な地理的位置を占めていることによって、ベッドタウン的性格を持つに至り転入者が増加したことによる。特に、浅間塚団地、中込団地等の村営、県営の住宅団地の造成にみる積極的な人口吸引策もあって転入者が急増したのであって、昭和

四五年以後は毎年一〇〇〇二〇〇人ほどの社会的急増になり、自然増と合わせて県下でも有数の人口急増村となっている。

四 戸数・世帯数の増加

表7-1の戸数・世帯数については、大正五年までは戸数、それ以後は世帯数になっており、若干の差異はあるが大勢を知ることができよう。

図7-2にみるごとく戸数は、昭和一五年ごろまでは多少の浮沈はあるもののほぼ漸増の形になっている。明治初期四二〇戸であったも

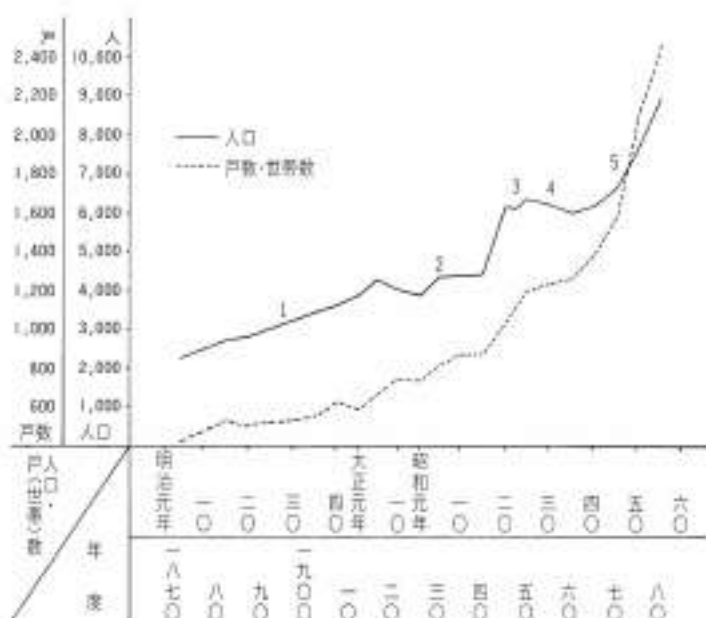


図7-2 明治以降南其輪村の戸数(世帯数)・人口の推移

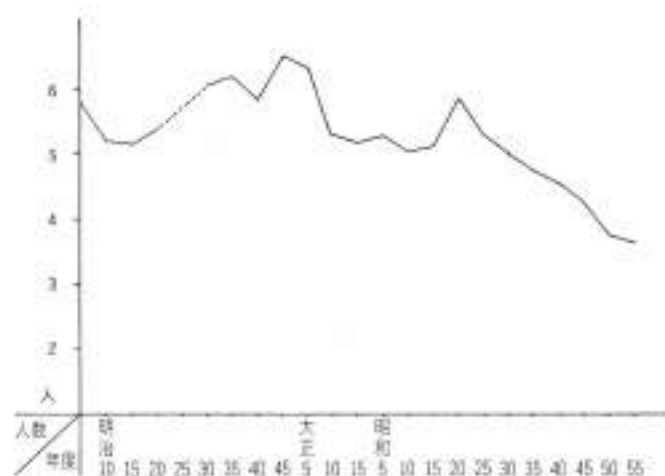


図7-3 1戸(世帯)当たり家族人数の推移(南其輪村)

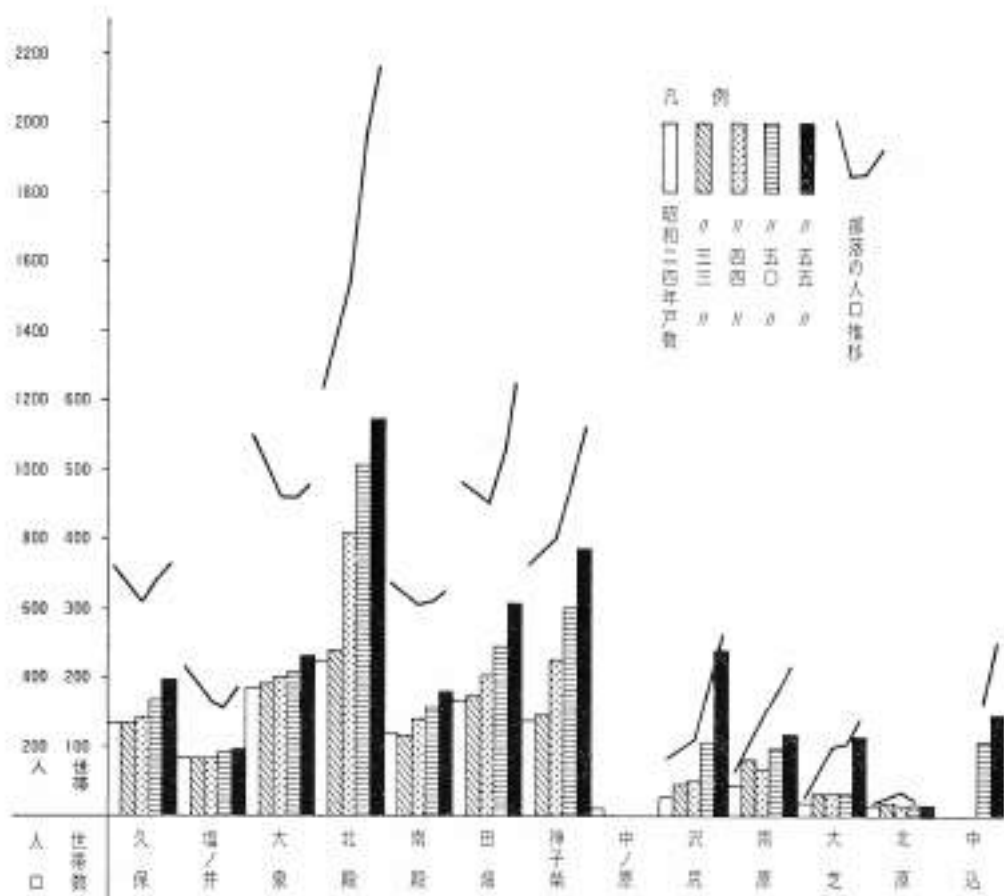
し、年平均五・八・七世帯の急増である。これは先に述べた住宅団地の造成等による他町村よりの転入、家族形態の核家族化の傾向等が大きく影響しているものと考えられるが、さらに、信大農学部下宿生、老人ホーム入居者等が世帯数に計上されているのも大きく関係している。

戸数に関連して一戸(世帯)当たりの人数についても、明治前半は一戸当たり五人強であるが、明治後半から大正五年ごろまでは一戸当たり一人強増加して六人強となり、大正九年以降は世帯になるが

のが昭和一五年には八・六・九世帯となり二倍強で、毎年の平均増加戸数(世帯数)は六・五戸(世帯)である。

昭和一五年より同二五年に至る間は、世帯数が急増している。これは戦時中の疎開者による世帯の増加、戦後の引揚げ者および、北原、大芝原南原等への開拓入植者による世帯の増加が主なる要因となっている。

昭和二五年以後一〇年間は世帯数の増加率は鈍るが、昭和三五年からは再び急上昇に転じ、同五五年までの二〇年間に一二・二世帯から二四・七世帯へとほぼ倍増



() は大泉所・農専

昭和24	世帯数	130	80	184	222	118	165	137	10	28	42	19	11	(4)
7.1	人口	721	430	1,088	1,216	677	970	714	45	165	133	51	41	(15)
昭和33	世帯数	131	80	190	237	113	171	144		43	80	30	13	
4.1	人口													
昭和44	世帯数	136	80	199	406	138	202	174		49	67	30	15	
10.1	人口	611	337	825	1,553	696	913	803		220	263	197	65	
昭和50	世帯数	164	90	204	506	154	243	249		103	93	31	15	108
10.1	人口	673	315	922	1,969	620	1,038	984		351	349	204	50	323
昭和55	世帯数	193	92	229	570	177	305	384		237	115	111	14	142
10.1	人口	721	365	951	2,157	649	1,240	1,110		524	432	237		526

昭和24、33は村勢一覧表。昭和44以降生活課調べによる。

図7-4 部落別世帯数及び人口の推移

一世帯当たり五人台にもどり、昭和三〇年代までこれが続いているが、その中で昭和二〇、二二年は引揚げ者等による世帯人数の増加が読みとれる。

昭和三五年以降はしだいに一世帯当たりの人数が減少して四人台となり、さらに三人台へと少なくなっている。

(三) 部落別世帯数、人口の推移

明治時代初期の南箕輪村は久保（沢尻を含む）、塩ノ井・大泉・北殿・南殿・田畑・神子柴の七耕地で構成されており、総戸数は四二〇戸であった。その中で大泉耕地が最も戸数が多く八五〇六戸、次いで田畑耕地が八一〇二戸、北殿耕地が七〇戸前後であった。

明治八年より沢尻耕地が久保耕地から分離独立し、昭和二一・二二年に開拓入植によって南原・大芝・北原の三部落が生まれ、それぞれ南原区・大芝区・北原区となり、かつて一部落となっていた中ノ原が沢尻区に併合され、さらに、昭和五〇年には一〇〇戸を超す中込団地が中込区として独立した。

このように、部落そのものに分離併合や変化発展があるわけであるが、その中における世帯数や人口の推移には部落によって特色がある。戦後における各部落の世帯数と人口の推移を示すと図7—4のようである。

図によってわかるように、世帯数が急速に増加している部落は北殿で、昭和二年の二二二世帯から、同五五年の五七〇世帯と二・五倍強になっており、毎年一世帯増加した計算になる。特に四〇年以後の急増が目立

表 7-2 高箕輪村における人口動態

項目 年度	出生		死亡		自然増		死産 (実数)	婚姻 (実数)	離婚 (実数)	転出			転入			転出入差 (実数)	(社会増減) (実数)
	定数	人口につき (1000人)	定数	人口につき (1000人)	実数	人口につき (1000人)				総実数	県内 (人)	県外 (人)	総実数	県内	県外		
明治5	91	40.3	35	15.5	56	24.9											
" 15	103	37.9	51	18.7	54	19.8				(参 考) 出家留		入家留					
大正14	159	41.0	76	19.0	83	22.0	9	81	9	970			272				
昭和2	169	43.0	91	23.0	78	21.0	11	59	6	982			277				
" 7	193	44.4	81	18.6	112	25.7	5	83	9	1011			262				
" 12	194	43.4	92	20.6	102	22.0	4	90	3	1165			323				
" 23	200	32.1	63	10.1	137	22.0	9	144	9	431			373				- 56
" 25	154	24.2	65	10.2	89	14.0	0	109	7	443			249				-184
" 28	167	26.9	77	12.3	90	14.4	14	118	12	400	309	91	287	204	83		-113
" 30	147	23.5	51	8.2	96	15.3	9	123	3	294	152	142	224	126	98		- 70
" 32	151	24.6	63	11.9	88	14.4	10	142	10	286	139	147	192	110	83		- 94
" 35	82	13.4	50	8.1	32	5.2	3	43	2	228	139	84	193	136	57		- 35
" 38	81	13.1	48	7.7	33	5.3	0	155	4	244	145	99	272	205	67		+ 28
" 40	75	12.2	62	10.1	13	2.1	4	56	4	300	169	131	350	257	93		+ 50
" 42	98	15.5	43	6.8	55	8.6	0	87	4	335	197	138	329	244	85		- 6
" 45	114	17.1	13	2.0	101	15.2	1	115	6	422	231	191	541	379	162		+119
" 48	127	17.7	54	7.5	73	10.2	12	79	7	393	230	163	602	441	161		+209
" 50	144	18.7	69	8.9	75	9.7	8	55	2	485	293	192	612	456	156		+127
" 53	144	18.5	44	5.2	100	11.9	8	47	4	440	284	156	565	427	138		+125
" 55	141	15.9	47	5.3	94	10.5	4	39	2	437	278	159	619	488	131		+182

つが、それは住宅団地の造成が大きな原因になっている。外に世帯数の増加の著しい部落は沢尻・神子柴・田畑・大芝部落である。沢尻・神子柴は信大農学部の下宿生がかなり世帯数の増加に關与しているが、一般世帯数の増加も多い。大芝部落の世帯数中には老人ホーム入居者が加わって五五年度の急増になっている。

世帯数の増加の比較的小さい部落は大泉・久保・塩ノ井・南殿・北原の諸部落である。

部落別の人口についてみると、おおむね世帯数の増加に準じているといえることができるが、世帯数の増加の少ない大泉・久保・塩ノ井・南殿の各部落は昭和四〇年代に人口の落ち込みがみられ、五〇年代に回復する形をとっているのに対し、北殿・神子柴・沢尻・南原の各部落は人口の落ち込みの時期はなく、ずっと上昇を続けており特に北殿の増加よりは著しい。

二 人口動態

明治以降における南箕輪村の人口動態に関する各種の数値を示すと表7-2のようである。

1 自然的增长

自然的增长は、出生数と死亡数との差であって、出生率と死亡率が人口の自然的增长を決定する。

1 出生率

出生率は通常人口一〇〇〇人中で年間何人出生するか、その比率パーミル(‰)で表わされる。南箕輪村における出生率及び死亡率の変化の状態は図7-5のとおりである。

明治初期から大正を経て昭和の初期まで三八・四〇‰でかなり高い出生率を持続しているが、戦時体制下に入ってから「人的資源確保」と

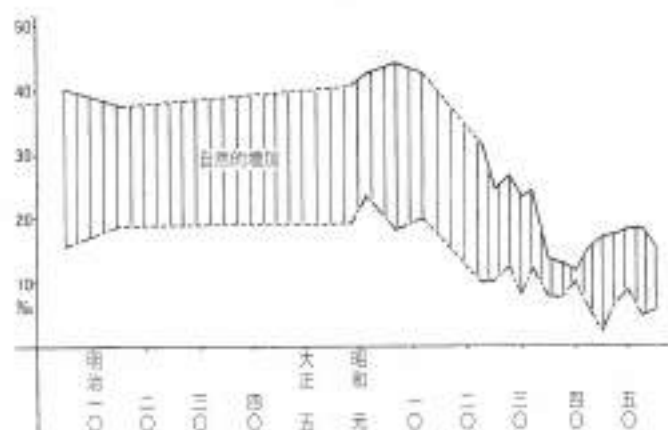


図7-5 南箕輪村における出生率・死亡率の推移

年以後はさらに急速に低下し一二・一五‰程度になった。

昭和四五年以後は第二次ベビーブームの時代になり一七・一九‰と僅かに出生率が上昇しているが、この時期を経過するにつれてまた一五‰程度に下がりがつつある。

2 死亡率

死亡率も、人口一〇〇〇人中の死亡者数の比率で表現されるが、南箕輪村の死亡率を見ると、明治から大正を経て昭和二〇年ころまで一五・二〇‰となり高い状態で推移し、その後急速に低下し一〇‰内外になり、昭和三五年以後はかなり変動が多いが毎年一〇‰以下を示

か、「生めよ殖やせよ」というような政策的指導もあつてか四三・四四‰と異常に高い出生率を示した。

昭和二〇年代前半はベビーブームの時代であり、出生率はまだ高くて三〇‰程度であつた。その後人口の圧力が政治問題となり、積極的な家族計画運動が推進されて出生率は次第に低下し、昭和二五・三五年ころは二五‰程度になり、昭和三五

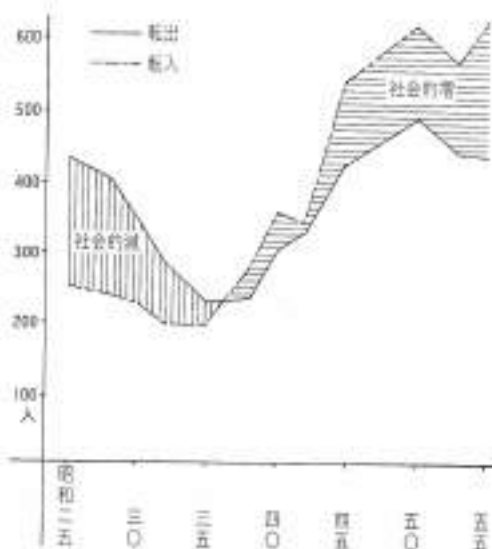


図7-6 南箕輪村における人口の社会的増減
(実数で示す)

し、平均六・七六という低い死亡率になっている。

このような死亡率の低下は平均寿命を大幅に向上させることになっているが、これは医学の進歩、保健医療行政の進展、保健意識の向上によるものである。

3 自然的増減率

自然的増減率も人口一〇〇〇人につき何人増減したかという千分率で表わすのが普通である。明治初期から昭和二二年ころまでは二〇、二五とかなり高い増加率を持続してきたが、昭和二五、三二年は一五内外に同三五年以降は五・八と非常に少なくなった。この時期の子供たちが小学校に入学するころ、小学校生徒数の減少が問題になったが、昭和四三ころから第二次ベビーブームに入り、再び一〇%代に上昇している。

(二) 社会的増減

昭和二五年以後、南箕輪村における転入、転出の状況及び社会的増減の実態を示すと図7-6のようである。

1 転出

昭和二八年ごろまでは転出者が毎年四〇〇人以上になっており、高い数字を示していた。これは主として都市の復興につれて疎開先から都市に引き揚げていく者と、都市での新たな生活の場を求め就職をするため転出する者とが主体であった。その後、昭和三七、八年前までは二五〇人前後の比較的少ない水準で推移している。ところが、昭和四〇年ごろから経済の高度成長期を作り出した工業の急速な発展によって都市の労働力需要が増大し、それに応じて転出者（特に若年層）が増加し、同五〇年には最高の四八五人に達している。しかし、それ以後は石油ショックや工場の地方分散等の影響でやや減少気味になっている。

2 転入

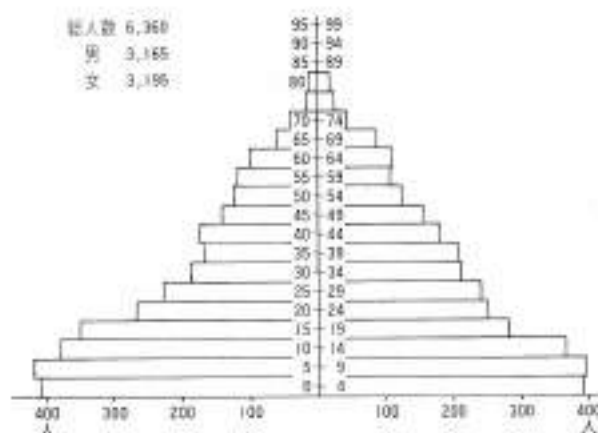
昭和二五年ごろから三五年ごろまでは転入数は漸減傾向で、二五〇人前後から一九〇人前後に減少したが、昭和三七、八以後は急上昇し、四〇年には三五〇人、四五年には五四一人、五〇年には六一三人と多くなっている。このような転入の増加は、本村内産業への就労のための転入ではなく、本村に居住地を求めての転入であって本村人口急増の最大の原因となっている。

3 社会的増減

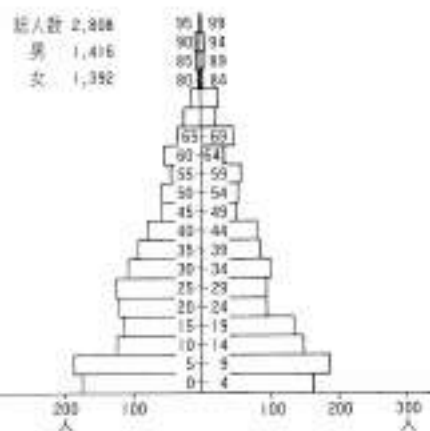
転入数と転出数との差が社会的増減であって、南箕輪村においては、昭和二五年には転出が多く一八三人の社会的減であったものが、年と共に転出が減少し、同三七年ごろに転入数が転出数を超えるようになり、社会的減から社会的増に転換した。

その後、転出の増加にもかかわらず転入増がこれを上回っており、

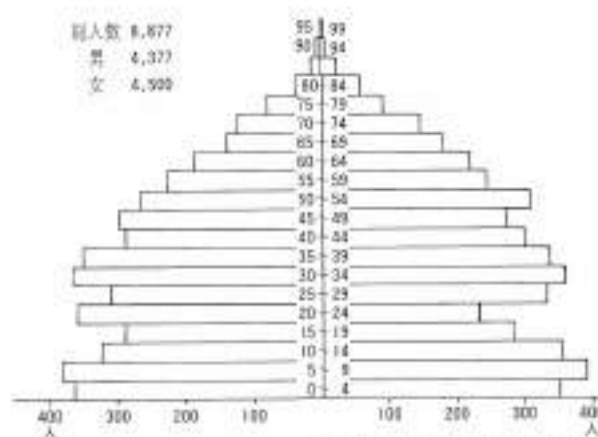
昭和25年(役場文書より作成)



明治17年(墓ノ井大東文書より作成)



昭和55年(役場文書より作成)



昭和40年(役場文書より作成)

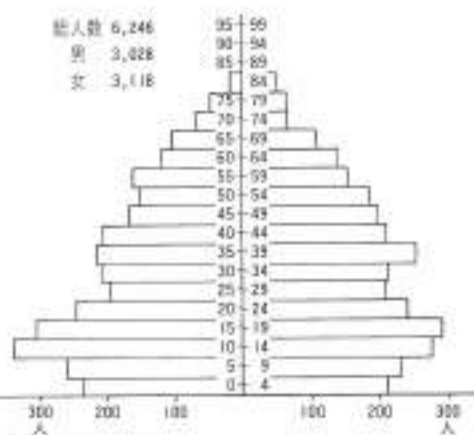


図7-7 南箕輪村における年齢別人口構成の変化(実数)

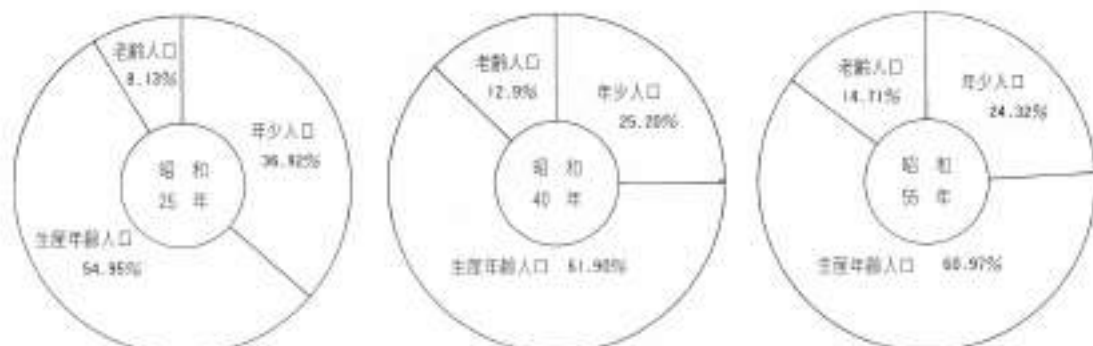


図7-8 南箕輪における年少人口、生産年齢人口、高齢人口構成比

同四五年以後は毎年一五〇、二〇〇人の社会的増になっており、自然的増をはるかに超えている。

三 人口構成

(一) 年齢別人口構成

南箕輪村における年齢別人口構成を図示すると図7-7のようになる。図の人口ピラミッドは横軸に男女各年齢階級の実数をとってあるので、ピラミッドの面積は村の総人口の大小をも表現している。

明治一七年の人口ピラミッドはツリガネ型に近いものであるが、底辺部がやや拡大して江戸時代のツリガネ型のピラミッドから、人口構成が若返りをする過程を示している。しかし、まだ全体として細く立ったピラミッドで、総人口は少ない。

昭和二五年の人口構成は典型的な富士山型のピラミッドで、出生率が高く人口の自然的増加の多いことを示し、第一次ベビーブームによる幼年人口の増加がきわだっている。男子の二〇、三〇代の落ち込みは戦争の影響と村外就職のためと考えられる。

昭和四〇年の人口構成は、同二五年以降の出生率の急速な低下による幼年人口の減少によってツリガネ型になっている。自然的増減では停滞的傾向を示すものである。

昭和五五年の人口構成は、第二次ベビーブームにより幼年人口の増加があり、社会的増による人口全体の急増で面積の広いピラミッドになっているが全体としてツリガネ型である。これからは、幼年人口の減少、老齢人口の増加によってさらに典型的なツリガネ型、さらにはツリガネ型に進むものと考えられる。

(二) 年少・生産年齢・老齢の人口構成

年少人口、生産年齢人口の構成比を円グラフによって示したものが

図7-8である。

この図は、一四歳以下を年少人口、一五、五九歳を生産年齢人口、六〇歳以上を老齢人口としたものであるが、年少人口は昭和二五年の三六・九%から、四〇年の二五・二%、五五年の二四・三%へと減少し、老齢人口は八・一三%から一四・七%へと増加し、明らかに人口の老齢化が進んでいる。

さらに、年少人口と老齢人口は生産年齢人口によって扶養される被扶養人口である。したがって、この被扶養人口と生産年齢人口との構成比が、人口構成上の重要な点であるが、その点についてみると、昭和四〇、五五年は生産年齢人口比が六〇%を超えており、非常に有利な時代であったといえよう。しかし、これからは老齢人口がさらに増加し、老齢化社会に突入することは必至の状態であって、村としても多くの問題をかかえ、それに対する対策を迫られるであろう。

四 村人の職業

(一) 産業別人口構成

戦後における南箕輪村民の産業別人口構成を示すと、表7-3および図7-9のようである。

太平洋戦争直後の昭和二二年の就業者の産業別人口構成では、八一・三%が農業を中心とした第一次産業就業者で、南箕輪村は典型的な農業村であったといえる。残りの一八・七%は第二次産業と第三次産業で分けていたが村は農業及び農民を中心として動いていた。

その後、日本経済の発展と共に第一次産業人口が減少し、第二次、第三次産業の就業者が漸増の傾向を示し、特に昭和四〇年以後はその変化が急速になった。昭和五五年においては、第一次産業就業者は一・九・六%にまで減少し、第二次産業就業者が最も多くなり全体の四

表7-3 産業別就業人口構成（国調による）

	就業 者数	第一次産業				第二次産業				第三次産業							其の他
		総数	農業	林業	漁業 水産業	建設	製造	建設	製造	建設	卸小売業	金融 保険	運輸 通信	電・瓦斯 水道	サービス	公務	
昭二一	総数	2,942	2,303	2,371	22	0	284	1	48	235	265	21	55	10	76	96	2
	男	1,721	1,300	1,278	22	0	222	1	47	174	199	14	47	9	63	70	1
昭二二	女	1,221	1,003	1,093	0	0	62	0	1	61	66	7	8	1	23	26	1
昭二五	総数	3,109	2,394	2,372	21	1	321	1	87	233	304	74	108		138	59	
	男	1,735	1,300	1,181	19	0	257	1	86	170	278	39	90		94	45	
昭三五	女	1,374	1,194	1,191	2	1	64	0	1	63	116	35	18		44	14	
昭三〇	総数	2,902	2,229	2,308	20	1	297	3	67	227	466	79	93		216	71	4
	男	1,670	1,109	1,095	13	1	239	3	66	170	322	44	81		142	51	1
昭三五	女	1,322	1,120	1,113	7	0	58	0	1	57	144	35	12		74	20	3
昭三五	総数	3,371	2,258	2,216	38	4	563	1	113	489	550	166	89		215	63	1
	男	1,703	996	965	30	1	367	1	111	255	340	76	80		119	50	0
昭四〇	女	1,668	1,262	1,251	8	3	196	0	2	194	210	90	9		96	13	1
昭四五	総数	3,364	2,241	2,204	33	4	537	1	108	428	588	149	85		281	55	
	男	1,704	989	961	27	1	354	1	105	248	361	83	76		144	43	
昭四五	女	1,660	1,252	1,243	6	3	183	0	3	180	225	66	9		137	12	
昭五〇	総数	3,867	1,675	1,653	20	2	1,254	2	191	1,061	938	271	144	5	405	86	
	男	2,049	670	652	16	2	770	2	160	588	609	172	128	5	221	69	
昭五〇	女	1,818	1,005	1,001	4	0	484	0	17	473	329	99	16	0	184	17	
昭五五	総数	3,864	1,046	1,022	21	3	1,486	4	275	1,207	1,329	440	168	7	509	109	4
	男	2,297	498	480	17	1	950	3	254	683	849	208	153	7	318	82	2
昭五五	女	1,567	548	542	4	2	536	1	21	514	480	172	15	0	251	27	
昭五五	総数	4,580	897	896	28	3	2,023	6	413	1,604	1,666	547	206	5	690	147	4
	男	2,665	454	427	24	3	1,199	6	352	841	1,000	316	189	4	346	114	2
昭五五	女	1,925	443	439	4	0	824	0	61	763	666	231	17	1	344	33	2

単位：千人

四・二%を占めるに至った。第三次産業就業者も第二次産業の発展に伴って増加し、三六・二%になっている。

第一次産業のうちでは農業が九七・七%で圧倒的であり、第二次産業では圧倒的に製造業が多く、昭和五五年において七九・三%を占め、残りの二〇・四%が建設業になっている。第三次産業ではサービス業が最も多く、五五年度で四一・七%、次いで卸・小売業が三三・〇%と多く、運輸・通信関係・公務がこれに続いている。

就業者の男女の割合についてみると、第二次産業では製造業に女性の進出がめざましく、昭和三〇年ころは女性の就業者は全体の二五%程度であったが、急速に増加して現在は四〇・四五%に達している。第三次産業には女性の進出は早くから行なわれていたが、近年はさらに多くなりとくにサービス業、卸・小売業関係への就労が多く四〇・

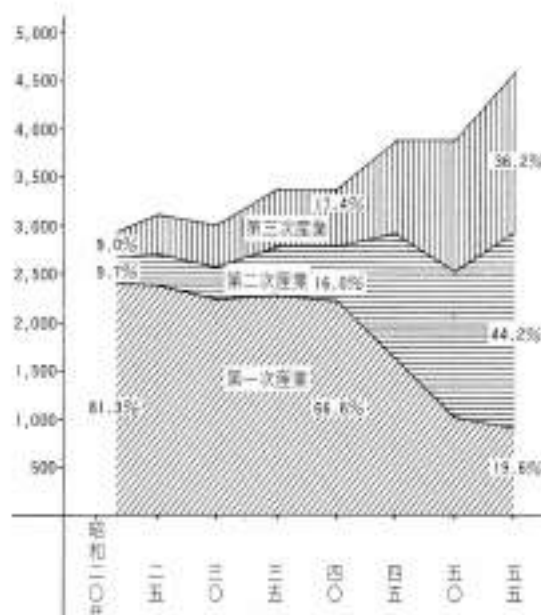


図7-9 兩院論における産業別就業人口構成比の推移

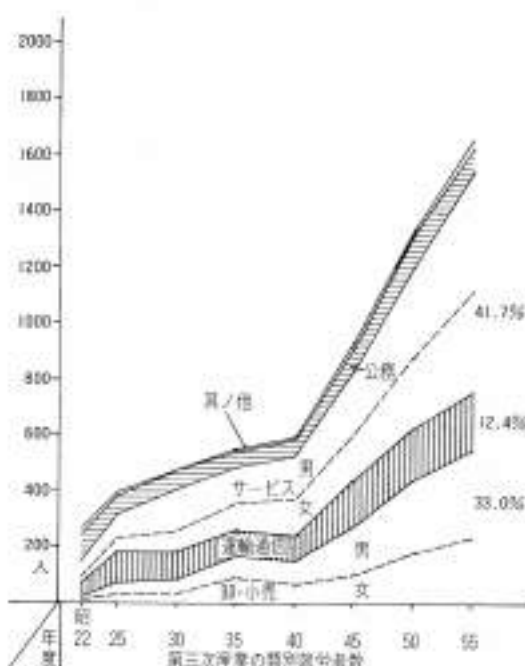
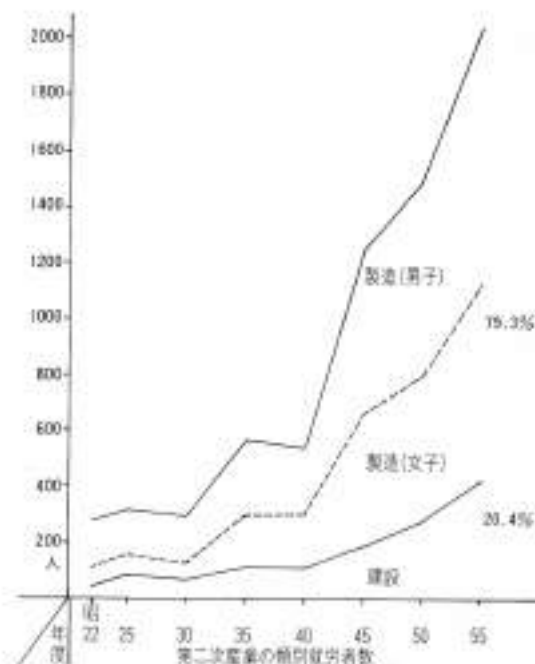


図7-10 第二次・第三次産業別就労者数の増加

表7-4 就業者の就業上の地位別人口(国調による)

		総数	被雇用者		自営業者		家族従業者		役員	
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
昭和30	男女計	1,670 1,322 2,992	497 202 699	29.8 15.3 23.4	817 96 913	48.9 7.3 30.5	356 1,024 1,380	21.3 77.4 46.1		
" 35	男女計	1,704 1,660 3,364	646 374 1,020	37.9 22.5 30.3	797 343 1,140	46.8 20.7 33.9	261 943 1,204	15.3 56.8 35.8		
" 40	男女計	1,809 1,666 3,475	843 490 1,333	46.6 29.4 38.4	743 230 973	41.1 13.8 28.0	223 946 1,169	12.3 56.8 33.6		
" 45	男女計	2,049 1,818 3,867	1,156 617 1,773	56.4 33.9 45.8	702 413 1,115	34.3 22.7 28.8	130 781 911	6.3 43.0 23.6	61 7 68	3.0 0.4 1.8
" 50	男女計	2,297 1,567 3,864	1,493 799 2,292	65.0 50.1 59.3	638 254 892	27.8 16.2 23.1	79 499 578	3.4 31.8 15.0	87 15 102	3.8 0.9 2.6
" 55	男女計	2,655 1,925 4,576	1,786 1,104 2,890	67.3 57.4 63.1	665 256 921	25.0 13.3 20.1	89 547 636	3.4 28.4 13.9	115 16 131	4.3 0.8 2.9

五〇%に達している。

二 就業上の地位別人口

就業者の就業上の地位についての人口構成を示すと、表7-4のようになる。

昭和三〇年では、就業者のうち自営業者が三〇・五%、その家族従業者が四六・一%で合わせて七六・六%となり、被雇用者は僅か二三・四%と少なかった。

ところが同五五年になると、自営業者及びその家族従業者は合わせて三四・〇%に減少し、逆に被雇用者が六三・一%となり、独立小企業の相対的減少と、当地においても従業者を雇用する企業の規模と数が増大した結果であると思われる。

三 農業従事者について

農業村として発展してきた南筑輪も、昭和五五年では農業就業人口は全就業人口の二〇%を割り、就業者数からみる限り農業村ではなくなってきた。しかし、これは国勢調査に基づく数値であって、調査基準の異なる農林業センサスによる数字は表7-5のようになる。

表7-5 農業人口と農業に従事した人口

年度	項目	農業に従事した人口		
		農家人口	自家農業にだけ従事する人口	自家農業と他の仕事に従事する人口
昭和四五年		四、七一一	一、五九四	一、四五五
" 五〇 "		四、四六三	一、三八四	一、六四九
" 五五 "		四、三四三	一、二六八	一、五六二
	合計		三、〇四九	三、〇二九

これで見ると、農業のみに従事した人口は、昭和五五年でなお一六八人おり、国勢調査による同じ年度の第一次産業就業者(ほとんど農業従事者)八九七人より三七一人も多い。これは、農業就業人口の定義に再調査で差があるためと思われるが、農林業センサスによる農業従事者数も見逃せない数字であり、さらに、他の仕事と農業の両方に従事した人口が一五六二人ある。これを加えると二八三〇人となり、農業に従事する人口の比率は全就業人口四五七六人の約六二%と

なり、まだかなり高いものである。

これらの兼業的従事者が、農業を主とし他を従とするか、あるいはその逆であるか、さらに、農業経営主であるか、家族従業者であるか、より具体的な分析を必要とするが、職業という観点から考えるとき過渡的性格というべきものであって、このような兼業的職業構造の解消される社会の発展が期待される。

農業従事者人口については、近年その高齢化が問題にされていることもつけ加えておきたい。

第二節 戦後の村政

一 戦争後遺症の克服と村政

(一) 飢饉からの脱出のための村政

昭和二〇年の敗戦の年は食糧事情は全くどん底であった。戦争中からの肥料の不足・労力不足・地力荒廃は到底増産をのぞめる状態ではなかった。

そこへ、復興や疎開などで長野県下には約一〇万人の人口増があり、食糧不足はいよいよ深刻化した。さらに、この年は春以来の低温多雨に加えて、収穫直前の九月二十八日に暴風（果物の落下二〇万貫、ソバ・稲に大被害）にみまわれ、一〇月五日と九日一一日に大豪雨があって、県内田畑の流失七〇〇ha・死者行方不明四四人という災害があり、大凶作で、二七万tもの減収であった。南箕輪村においてもこの年の米の収穫高は七六〇八石と平年作の六割強にすぎなかった。

昭和二年になって食糧の窮乏はいよいよ深刻になり、GHQの覚書によって一月に輸入食糧の放出で何とか飢饉をしのぎ、二月には食糧緊急措置令が公布され、主食の供出拒否に対して強権発動（三年以下の懲役または一万円以下の罰金）をされるようになった。だが同年三月までの供出量では、四月いっぱいしか配給できないという破局的状況にあった。

一方、配給量の不足や遅欠配から、米価が高騰し一升三〇〇〜五〇〇円（配給米価は二四五〇銭）と未曾有の高値となった。供出完了のため農家に提供出（配給米受給農家となる）を強行するという非常手段で市町村を警備し、一方で米の取締りを強化した。農業村であった我が村の行政も、国家危急存亡の時と考えこの方針に協力をした。

この強権発動は、県で四二八名の収用官を動員したが、ほとんど効を奏しないことがわかり、強権供出制度に一応の終止符を打ち、民主的な「食糧対策委員会」において行なわせることに転換した。こうして、国は七月からの食糧配給量を一人一日二合一勺の一割減の一合八勺に引き下げ、不足量はすべて輸入食糧に依存することにした。村民の中には山野に野草を摘んでようやく壽命をつなぐ者も多かった。

昭和二二年からは食糧調整委員会が各町村に発足し、食糧の生産、供出の割当て等の業務をその委員会によって民主的に行ない、以後数年間食糧の増産、供出割当ての完遂に向かって、食糧危機突破のための重要な役割を担うことになった。

昭和二二年は幸いにして平年作を上回り、また、二三年も豊作であったことから食糧事情は好転し、二四米穀年度からは配給量が一人一日二合五勺、さらに二合七勺に増配され、食糧事情は次のように逐次緩和されるようになった。

- 。昭和二四年一〇月一日 サツマ芋自由販売となる。
- 。二五年一月一六日 米の闇値が公定値段を下回るようになる。
- 。二五年四月一日 魚が自由販売となる。
- 。二五年八月一日 肥料が自由販売となる。
- 。二七年度産米 長野県の反収三七三kgとなり全国第一位となる。

こうして食糧不安は解消され、飢餓からの脱出に成功した。

(二) 衣・住・職業等の回復のために

1 衣・住の回復

衣生活の維持のため真綿は戦時中から貴重品として扱われ、戦後は農業有畜化の掛け声と共に綿羊やアンゴラ兎等の導入が盛んとなり、羊毛の小加工場も各所に生まれ、一時ホームスパン（太い手つむぎの糸

で織った織物）がもてはやされた。しかし、衣料も工業生産力の回復と共に生産量が増し、次のように衣生活が回復した。

- 。昭和二四年一月四日 ゴム製品統制撤廃。
 - 。二五年四月一日 綿製品が自由販売となる。
 - 。二五年九月一日 衣料切符廃止となる。
- こうして、行政は衣料切符の割り当て交付という面倒な事務から解放された。

住居については、当地域は空襲もなく、住宅事情は比較的よかったが、住宅に困ったのは引揚者、未引揚者家族、疎開者等であった。住宅は建築費と土地とが必要であって、食糧や衣料のように早速にゆかず、長い期間を必要とした。

昭和二四年建築資材の統制が解け、住宅建築が始まり、住宅組合融資住宅とか、公営貸し住宅などの建築が行われるようになった。村では同二五年七月次のような「厚生住宅建設要領」を定めた。それによると、一戸七坪五合の住宅を久保・塩ノ井・北殿・田畑の各部落に建て、低廉な家賃で貸せるといふもので、建設に当たっては村有林の木材を素材で四〇石支出し、国庫の補助金四万円を建築する計画であった。

昭和二五年度 厚生住宅建設要領

一、南筑輪村が主体となり住宅に困窮する引揚者、未引揚者家族、又は母子家族に対し低廉な家賃をもって貸与する。

二、建設住宅戸数 四戸（認可の内示あり）

木造平家建一戸七坪五合（別添紙面）のもの

（本年度分として久保・塩ノ井・北殿・田畑各部落一戸宛）

三、建設費、建設に要する木材一戸につき約二〇石（製材素材にて四〇石）を村より支出しこれに国庫補助金一戸につき四万円を充当し建設するも

のとす。



(役場文書)

図7-11 厚生住宅設計図

この製紙工場の詳しいことはわかっていないが、別に製革工場も計画された資料が残っている。

3 授産所の設置

昭和二三・四年ごろ授産所が設置されており、同二五年三月二八日提出同日付けで、南箕輪村授産所決算の監査がすみ村会の認定がなされている。

この授産事業は営利を目的とするのではなく、職災者、海外引揚者、未亡人等を対象とし、その経済更生の道を立てさせるためのものである。この事業を遂行するため金一〇万円の運営資金を借りることがここで決定されている。

二 農村および村政の民主化

(一) 農地改革

数世紀にわたる封建的圧制のもと、日本農民は奴隷化してきた経済的極貧を打破するため、日本帝国はその特作農民に対し、その労働の成果を享受させるため、現状より以上の機会を保障すべきことを指令する。

この占領軍司令部の指令によって離航していた農地改革の修正原案（農林省原案を閣議で修正）が議院を通過し、「農地調整法改正案」として昭和二〇年二月公布された。これが第一次農地改革の始まりである。

ところが、この第一次農地改革は不備、不徹底であるとして、連合軍や、野党・農民組合などの民主的勢力から強く批判され、GHQ勸告という形で第二次農地改革案が提示され、それは「農地調整法改正

外国人でなくても「鬼小屋」と評されるようなものであったが、昭和二五年七月二七日の議会でこの補助金計一六万円を村費で立て替へ払いをすることが議決された。

2 村営製紙工場の設置計画

戦争直後は食糧衣料のみでなく、物資の不足はひどいものであり、紙も不足のひどいものの一つであった。

昭和二二年、村が半沢に設置しようとした村営製紙工場は、そんな紙不足から、山林資源を使って多少なりそれを緩和し、同時に新しい産業を求めたものであろうか。

議案第四〇号 村営製紙工場設置の件

昭和二十二年に於いて村営製紙工場を南箕輪村字半沢五三四〇番地に設置するの件を提案す

案」及び「自作農創設特別措置法」という形で無修正で成立し、昭和二年一月〇月公布された。この法律に基づいて第二次農地改革が二年から四年にかけて実施された。(農地改革の詳細については第三節農地改革参照)

この農地改革は占領下、GHQの勧告という形でもなければ到底実現し得ないような大改革であり、農村における地主の支配体制はほとんど崩壊し、村の経済的民主化が達成され、また、村政民主化の基盤は整備されたということができる。

(二) 村政の民主化

1 南筑輪村協議会

昭和二〇年八月十五日、太平洋戦争の無条件降伏の日である。莫大な人命と財産を失った果ての敗北であったのであるが、必勝を信じさせられていた国民の衝撃と虚脱感は深刻なものであった。

軍国主義から一転して民主主義へといわれても、何をどのようにしてよいかわからない。そうした混乱の中から、新しい方向を探すには、従来ならば二、三の指導者有力者の意見によっていたが、ここに民主的な「協議会」がもたれた。

そのため次のような書状が村内六一人の有志に配られ、第一回協議会が開かれた。

前略 急激なる時代の変革は村内外各方面に大々的変革を要せられ今や必然的に此の問題を取り上げざるを得ざる時期に到達致し候

茲に於いて村当局先導の下に村内外各種団体代表者、有力者の各位をわずらわし真に全村一体の村是を樹立し是等の処理に譲りなからしめ度く候。

ついては、御多忙中まことに御迷惑の事ながら別紙規約御熟読の上御賛同賜わり第一回合会を村役場の改革問題におき、五月十九日午後二時より役場二階にて研究致したく何卒御足労煩わし度く候。先ずは御依頼旁々御願

い迄時間は時節稍厳守致し度く候

(役場文書)

第一回協議会は役場の改革問題を討議するというのである。ここにもあるように、村当局が主唱して協議会の規約を作って実施しようとしている。

南筑輪村協議会規約

- 一、本会ハ南筑輪村協議会ト稱ス
- 二、本会ハ村内各種団体代表者及び有志者ヲ以テ構成スル
- 三、本会ハ事務所ヲ本村役場内ニオク
- 四、本会ハ村政其ノ他村内各種重要問題ニツキ之ヲ調査研究スルト共ニ協議ヲ尽シ是等問題ノ処理運営ニツキ確固タル方針ヲ樹立スルモノトス
- 五、本会ニ於テ取り上グル重要問題ハ左記ヲ先トス
 - 一、村役場ノ改革
 - 一、農業会ノ改革
 - 一、村立中学ノ設置
 - 一、村有林野ノ処理
 - 一、保健組合ノ改革
 - 一、森林組合ノ改革
 - 一、部落会廃止後ノ処理
 - 一、供出対策
- 六、本会ニ於テ議決セラレタルコトハ夫々ノ機関ヲ通ジ之ヲ実現ヲ期スルモノトス

(役場文書)

第一回協議会の記録はないが、第三回の記録が残っている。八月二六日午後二時から開催され、出席者は村長、収入役、書記(二)の四名と各種団体代表七名、および各区からの有識者二四名の計三十五名であった。この第三回の協議会は四議題をとりあげている。

まず第一に、協同組合設立の件を協議し、農民組合の研究をもとにして、三〇人くらいの設立準備委員会をあげて、設立したいということになった。農業会代表もいてそれに異議がなかった。第二が食糧調整

委員の件で各部落から二名くらいの候補を定めることがきまり、第三が林道開発の件で奥地開発のため林道開設の件が議された。第四は文化協会設立の件で継続研究となった。

なお、PTAの設立などが協議されたらしく、次のような通知が、昭和二年になってだされている。

乙第三九号 昭和二十三年二月二日 南豆輪村長 清水国入
委員（倉田良修外六三名）殿

村協議会開催の件

明日午後一時から役場で村協議会を開催、左記の件を御協議願います。御出席願います。

記

- 協議事項 一、PTAの設立について
- 二、村政の運営について
- 三、犯罪防止につき村の執るべき態度
- 四、供出対策の反省
- 五、災害補償法共済組合設立について
- 六、参議院議員の選挙について

（役場文書）

このように、敗戦後の急激な変革に、衆知を求めていくとした協議会は、民主的であった。このような大衆の討議を経て、役場が民主化され、農業会が農業協同組合となり、PTAが生まれ、共済組合が設立されるなど、今日の本村の基盤ができていった。

2 地方自治体の成立

日本国憲法の地方自治に関する規定をうけて、地方公共団体の自主性・自律性を高め民主化を徹底するため、知事・市町村長などの直接公選、住民の直接請求、地方議会の権限強化などをはかった地方自治

の基本法が昭和二年制定され、日本国憲法と同時に施行された。

戦後最初の地方制度の改革は、東京市制・府県制・市制・町村制の全面改正の形で行われ、昭和二年九月公布された。（改革四法）この法律によって従来と打って変わった次のような内容を持つ地方自治制が成立した。

- (1) 成年男女住民に参政権を広げる。
- (2) リコール制を採り入れる。
- (3) 首長の公選制を実施する。
- (4) 不信任議決・議会解散権（首長）を認める。
- (5) 選挙管理委員、監査委員を創設する。

これによって地方分権、住民自治の方向へ大きく転換し、とくに首長の公選制は地方の民主化を促進した。この改正で、地方団体は自治団体と改称された。

昭和二年四月一五日、公職選挙法が公布され、五月一日施行された。選挙権は二五歳が二〇歳に、被選挙権は三〇歳が二五歳になった。

昭和二年一月三日公布の日本国憲法が、昭和二年五月三日実施したのはこびととなった。昭和二年までは村議会は一〇名で構成されていて、いわゆる翼賛議員であって、その議会の議長は村長があつていた。

新憲法下の町村制になって、地方制度がかわり、村長は議長ではなくなった。そこで村議会は議員の互選によって初代議長を選出した。

そして、次のように村会議員の「定数条例」が議決され、議員数は一挙に二二名となった。そればかりでなく、選挙管理委員が選挙により四名選出され、その委員のもとで二二名の村会議員が選出されたのである。

南筑輪村々会議員定数案例

町制第十一條第二項により本村村會議員を左の通り定む

左記

一、議員定数 二十二人

二、議員の定数は町制條例を以て特に之を増減することを得

三、議員の定数は選挙法を行う場合に非ざれば之を増減せず

但し著しく人口の増減ありたるときは町村会の議決を経て知事の許可を得之を増減することを得

昭和二十二年二月二十八日提出 同日議決

上伊都郡南筑輪村代理助役 征矢直徳

(役場文書)

このようにして、村議会は昭和二十二年度からようやく議員による議長によって議事がとりあつかわれるようになり、議決機関と執行機関とが分離して、地方自治の第一歩を歩むことができたのである。昭和三十一年から議員定数は一六人に減員された。

3 村議会活動の発展

地方の自治がしだいに充実していくなかで、単に村内の問題だけでなく、県内・国内の問題にも関心を示すようになった。その主なるものをあげれば次のようである。

・分県決議書 昭和二十二年

・原水爆実験即時禁止協定要求決議 昭和二十二年

・諏訪湖下水道天竜川放流反対決議 昭和四十七年

分県決議書

決議書

長野県は人口二〇三万九〇〇〇人、面積一万三六〇〇km²に亘る広大な全国第三位の大県にして、これが行政庁たる県庁は古くより長野市に置かれある関係上、地理的其の他諸般の見地よりして県民の受ける不利不便は

枚挙に暇のない現状であった。過去七〇年に亘る移住論分県論は県政史上の一大計画として県民の願望に刻み込まれて来た。今や民主主義下の我が国に於て多年の宿願たる分県実現断行の声（中略）……本村議会は率先してこれが即時実現を熱烈に要望する次第である。

昭和二十二年二月十五日

上伊都郡南筑輪村村會議長 有賀一衛

長野県知事 林 虎雄 殿

(長野県會議長松橋久左衛門 殿)

(役場文書)

これは昭和二十二年二月一二日付けの、南信県會議員代表北原金平の「長野県南北信分県決議書作成について」の村長あて文書にこたえたものである。

この決議書は二月一七日、浅間東山温泉で開催された、長野県分県促進期成同盟会出席のあり、提出されるようになっていた。なお、各地区の分県促進期成同盟会を結成し、至急規約・役員名簿を送付願いたいとも記されているので中南信で運動を展開したものであろう。

原水爆実験即時禁止協定要求決議 昭和二十二年一月八日、議案第六四分で原水爆実験即時禁止の決議がなされた。

原水爆実験の即時無条件禁止協定を要求するの件

原水爆実験の即時無条件禁止協定を左記により要求するものとする。

記

一、私達は日本政府が世界各国特にアジア・アフリカ諸国と共同して、原水爆実験の即時無条件禁止協定締結を国連総会に提案することを要求します。

一、私達は日本政府が米英政府と日本への原子兵器持込み禁止を結ぶことを要求します。

一、私達は日本政府及び国会が被爆者医療法を、被爆者の生活保障を含む援護法に改善し、被爆者の遺族の援護を立法化することを要求します。

昭和三十三年十一月八日提出、同日議決

(役場文書)

諏訪湖下水道反対決議 昭和四十七年三月「諏訪湖下水道反対決議」がなされた。諏訪湖下水道の流末を天竜川に放流する計画は、下流の住民の生命をおびやかすことから、この反対決議となったのである。

「人権尊重の村」宣言 昭和五十八年四月一日から向う一か年間、南箕輪村が法務省から「人権モデル地区」に指定された。村ではこの指定をうけて、住民の基本的人権の尊重とその擁護について、正しい理解と意識をたかめるため講演会や子供たちの作文募集、人権相談所の開設、立看板の建立などの事業を計画し展開した。

なお、三月定例議会において、「人権尊重の村」宣言が次のようになされた。

人権尊重の村宣言

社会は、個人の尊厳と両性の本質的平等を基礎とする人の和で成りたち、和は民主社会を確立するための基幹であって、それは同時に、各自の自覚とたゆまぬ努力によって培われるべきものである。

しかるに、産業経済の発展と国民生活の向上は目覚ましいものがある反面、これに伴う急激な社会変遷、あるいは家庭生活の変容等も生じ、その結果人間性外、社会意識の稀薄、道徳心の欠如、法秩序軽視の風潮など基本的人権の尊重を阻害して営まれる民主社会の発展を阻害するものである。

こうした社会情勢下に鑑み当村では、人権意識の高揚をはかるをもつて、かかる精神面はもとより、人権共存の立場から意識啓発に鋭意努め憲法精神に則り、平和で明るい民主社会の建設に村民の総意を結集し、一踏

まい進するため、ここに南箕輪村を「人権尊重の村」とすることを宣言する。

(役場文書)

非核平和宣言 昭和五十九年二月二十四日、非核平和村とする宣言が行われた。

非核平和村宣言に関する決議

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。

しかるに、今なお各地で武力紛争や戦争が絶え間なく続いており、これらに用いられる兵器は、ますます強力化、高度化し、核軍備の拡大が進み、人類が平和のうちに生存する条件を根本から脅かす段階に至っている。

わが国は、世界唯一の核被爆国として、また、平和憲法精神からも核兵器の廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきである。

よって、本村は戦争のない明るい住みよい明日の世界を願い、ここに南箕輪村を「非核平和村」とすることを宣言する。

昭和五十九年十二月十四日

南箕輪村議会



図7-12 非核宣言の塔

国鉄北殿駅無人化の意見書 昭和六〇年三月三十一日から北殿駅が無
人化され、停留所化することになった。

村議会は五九年一二月の臨時村会で同駅維持の意見書を運輸大臣等
に送った。伊那谷開発同盟会では静岡管理局へ反対陳情をした。北殿
駅の無人化は飯田線の将来とともに本村に大きな影響を与えるであ
ろう。

三 昭和二〇～三〇年代の諸施策

(一) 新しい社会に適應する施策

1 中学校校舎の建築

敗戦となっても教育のことは一日もゆるがせにできない。昭和二二
年四月から新学制による南筑輪小学校と南筑輪中学校がそれぞれ開校
式を行った。いわゆる六・三制の発足である。しかし、中学校には校
舎がないので、とりあえず二教室の新築がきまった。

議案第三六号 中学校校舎新築の件

昭和二十二年に於いて県の許可を得て中学校校舎二教室を新築するの件
を提案する。

昭和二十二年九月八日提出 同日議決

(役場文書)

以後、教育施設設備の充実については第六章第九節参照

2 公民館の設置

飢餓からの脱出によりやがて成功した日本は、文化国家建設の第一歩
に公民館の建設をすすめた。すでに昭和二五年の三月には、県では公
民館運営協議会も結成していた。

昭和二五年次のように、本村でも公民館設置条例が議決され、公民
館の教育の充実をはかることになった。

議案第七三号

南筑輪村公民館設置条例制定に関する件

昭和二十五年七月七日 提出 同日議決

上伊那郡南筑輪村長 清水国八

3 有線放送の設置

昭和三三年四月二六日、村議会において「有線放送業務について」
が時代の要求に応じて議決された。

設立準備は、村・議会・農協・公民館・区・婦人会・青年会・小中
学校・教育委員会・農委委員会等々で、「有線放送建設委員会」を構
成し、その重要事項について審議を重ねてきた。

施設は加入者の各戸へテレフォンスピーカーを入れ、農協本所と加
入者の間を結ぶため架線工事をする。施設の経費は総額一〇〇〇万円
でその内訳は次のようであった。

経費一〇〇〇万円の内訳

負担金	三五〇万円	本所施設	一五〇万円
借入金	二五〇万円	加入者宅	三七〇万円
助成金	三〇〇万円	架線	四六五万円
		工事外	一五〇万円

昭和四三年八月一七日、有線放送更新の陳情があり、その助成金一
五〇〇万円を求められたが、一〇〇〇万円を助成することに決まっ
た。これによって有線放送は電話式になり近代化された。

(二) 福祉向上のための施策

1 国民健康保険事業の充実

昭和二三年五月一八日、本村の国民健康保険組合の診療所に村費補
助金の交付申請が、その理事長清水国八から出されている。それによ
ると木造瓦葺き平家建ての事務室と応接室に玄関の破風造りや廊下な

と計一三坪五合で、計一〇万四三〇〇円の予算である。このうち五万三〇〇〇円は国庫の補助金であるから、残金の五万一三〇〇〇円と素材六三石を村費補助としてほしいというのである。このようにすでに健康保険組合が成立していたが、国民健康保険法の改正により、この事業は村営として運営されることになった。

国民健康保険法の改正により国民健康保険事業を村営とする

昭和二十三年八月三十一日提出 同月同日 議決

上伊那郡南元輪村長 清水国入 画

議案第三九号

昭和二十三年度南元輪村国民健康保険料賦課の件

一、金一六万九三〇〇円 毎月保険料 世帯主数一〇九六八 一人一か月
平均一五五円

一、金一万〇九六〇円 世帯主一〇九六八平均割 世帯主一人金一〇円
一、金一万一五四〇円 昭和二十三年度被保険者五七七〇人 人頭割一
人二円

合計 一九万一八〇〇円也

昭和二十三年一〇月二十五日 提出 同日議決

南元輪村長 清水国入

(後編文書)

この年のこの事業が村営になったため、五月には保険組合の理事長清水国入が八月以降村長清水国入で事業を施行して村民の健康保険業務のみならず、積極的な健康管理に努力することとなった。

2 養老院の建設（老人ホーム）

扶養義務者のない高齢者を保護するための施設に収容し、適切な環境を与え保護を加え、さらに文化生活に浴せしむるとともに老人の福祉を図る。

このような目的をもつ施設を考えたことは、時の村長の卓見であった。反面、核家族化がすすみすぎて、こうした老人が多くなりつつあ

たことにもよる。この件について、昭和二十三年一〇月、共同募金事務局長の話では、養老院の建設の場合、共同募金から建築費の六割、品費の八割が出る。運営は国で八割、県で二割と分担して行なう。一階建てで二階は許可しない。火災予防のため鉄筋で防火ブロック建てであると知らされた。

昭和二十三年八月、いよいよ建設となったが、安曇寮を参考に、六尺廊下を四尺五寸にして坪数を節約することになった。建設地ははじめ田畑・南殿が選ばれたが地元反対にあい、結局大芝地籍となった。この間大泉区と大芝区の間土地や水の面倒な問題があったが、関係者の理解と努力によって、現在地が選定された。

この地も狭いためさらに、県設苗は跡地への移転がうわさされている。

昭和二十三年八月一日より、老人福祉法の施行により、「南元輪老人ホーム」と改称され、入居や目的も福祉法にそって、定員八〇名で運営されている。

(三) 産業発展のための施策

1 土地改良事業の推進

昭和二十四年八月四日土地改良法が公布された。それまでは耕地整理事業といわれていたが、「土地改良事業」と改められ、直接耕作者によってなされるようになった。これは農地解放によって自作農化された多くの農民の、土地改良への高い意欲の結果である。土地改良を希望する農民は一名あれば県知事の認可を得て、土地改良区を設立することができるようになったのである。

昭和二十五年二月一五日、県道飯田線（国道一五三号線）以東を耕地整理することが可決され、この画期的な「利田地」（第四章）節水を求め「参照」の大事業がなされるようになった。

議案第四二号 土地改良事業区ニ関スル件

本村外二町一カ村共同ニテ県道飯田線以東ノ排地整理ヲ実施セントス

昭和二十五年二月十五日 提出 同月同日議決

上伊那郡南筑輪村長 清水国八

2 工場誘致

昭和三十四年一月三〇日、議案五五号で工場誘致の議が提案されて、南殿区の大河原へ興亜工業が進出することになった。一反歩二〇万円で五町歩の一〇〇〇万円、土地を失う人は一万二〇〇〇円で就職させ、下うけ工場は二〇ぐらいでき、黒川に橋をかけるという条件であった。

昭和三十五年二月一五日、工場誘致が具体化され、協力費として六〇万円（反歩二万円）が決定し、一〇〇〇万円を興亜に敷地買収資金として貸し付け、就職者二二人がきまつた。これが工場誘致第一号であり、以後多くの工場が工場誘致条例（昭和三十九年八月制定）によって誘致されている。

四 昭和四〇年代を主とした村政

(一) 中央自動車道と村政

交通の改革は、政治・経済・文化等その地域すべての改革につながる。当地域の交通は、主要な道路や鉄道が木曾谷を通るか、伊那谷を通るかによって大きく左右された。古代の官道の東山道は伊那を、次の時代の中山道は木曾谷を、そして、鉄道の中央本線も木曾谷を通った。今度の中央自動車道は伊那谷を南北に縦貫した。

中央自動車道の通過によってもたされる変革は、まだ始まったばかりであるが、すでに各方面に及んでおり、地域の人たちはその効果を期待し、村政はまたこれに対応した施策をとらねばならない。

1 ルート発表まで

昭和三十二年、国土開発縦貫自動車道建設法が公布されて以来、「中央自動車道西宮線」（中央道という）の建設については、当地域を通るようにと、陳情が地方公共団体を先頭にして繰り返された。

はじめは、富士吉田から静岡県を経て、赤石山脈をトンネルで貫き飯田へ出る構想が伝えられた。しかし、県民の要望が実を結び、三十九年六月に諏訪回りに変更となった。それから、四〇年一二月に甲府・小牧間の基本計画が公表された。

当初の建設予定ルートは、航空測量図に該当範囲を一〇〇m幅で描いたものであった。

昭和四十二年一月一日には飯島町・箕輪町間三六・六kmのルートが発表になった。そこで当村にも、「中央道用地関係者組合」（後の被買収者組合）が発足した。それから同じ一月には郡下一一農協に政策委員会が結成され、用地買収等の窓口は農協が当たった。

一方で昭和四十二年一月一〇日、上伊那地区の中央道建設用地内の埋蔵文化財の緊急分布調査が行なわれ、調査遺跡数一一二に及び、本村内でも大芝東遺跡、北高橋遺跡など重要な遺跡が発見された。

2 設計協議

中央自動車道は東京と名古屋を結び、伊那谷を縦貫することになり、伊那谷産業の将来を左右する交通の大動脈となるもので、地域の期待は大きかった。

郡下では南部から設計協議がはじまり、一部では用地の買収もすすんでいたが、昭和四十六年一月現在で設計協議の終了した市町村は、飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市西春近地区・箕輪町で本村はまだであった。その原因は西部開発前提の設計協議であったので、西部開発の動向いかんでは設計がちがうというにあった。

それは、西部地帯の将来を考えると、たとえ西部開発を断念したとしても、西部開発計画路線程度のもは中央道と交差ができる配慮をしておかないと、子々孫々まで悔いを残すということであった。そこでまず第一段階として西部開発前提の設計協議案に基づいて、村内を五地区に分けて、それぞれの地区の対策委員と協議を進めることになった。こうして設計協議によりやがて入ることができた。設計協議以後はスムーズにすすんで中央道の工事は順調に出来ていった。次のように開通が行なわれたのである。

昭和五〇年八月二三日 中津川駒ヶ根間開通

昭和五一年九月一八日 駒ヶ根伊北インター開通

昭和五六年三月三〇日 伊北小瀬沢間開通

こうして中央道時代を迎えることになった。

3 西部開発事業

伊那西部開発事業は、中央道の関連事業として具体化してきた。昭和四二年一月、「中央道があるだけでは地域住民の直接利益にならない」として、関係機関と受益者があげて運動を進めてきた。

はじめ、地元としては三三〇〇haを全部水田の開発として国営事業を要請して推進してきた。ところが、米の生産力の向上と豊作、さらに国民食生活の変化等により、昭和四五年には米の生産抑制が、四六年からは米の生産調整が実施されるという農業情勢となった。こうした中で西部開発は全水田から田畑輪換へ、さらに畑作中心の計画と変えざるをえなくなった。このことが、西部開発事業が地元で歓迎されない原因となった。

この西部開発については別項第四章第一節及び本章第三節五に詳しくいのでここではその事業計画だけを記す。

1 国営産業振興事業 事業費四〇億円 補助率八〇%

2 県営大規模畑地帯綜合土地改良事業

事業費五三・七億円 補助率七五%

3 県営大規模農道（関連事業）

事業費一八億四千万円 補助率四六・五% 県費三五%

なお、大泉上田区面整理事業もこの事業の一環として昭和五〇年五年に実施されている。この事業の問題は残っているが、すでに当地区は西部開発の実施範囲内に入ってきている。

（二）農業振興地域整備計画

1 概 要

近年における高度経済成長のもとで、社会経済情勢は著しく変わり、とくに工業開発および交通網の発達にともなう、農地の無秩序な転用と農業経営の粗放化等農業の危機が叫ばれるようになった。今後とも農産物の安定的な供給及び生産性の高い農業経営の育成を実現するために本村では、「魅力ある農業地帯」を実現しようと農業振興地域整備計画をたてることになった。

この農業用途区域設定には各地区の意見要望を組み入れ、昭和四六年以降一〇か年間を見通して立案し、昭和四九年一月には県知事の認可をうけた。こうした用途区域の決定により農業と農業以外の土地利用との調整を図りながら、農業生産の基礎である優良農地を確保できることになったのである。

農業振興地域になると次のような利点が考えられていた。

（一）農業振興の重点的な実施がなされる。

①各種農業関係の補助事業が優先的に実施される。

②資金の融資事業が集中的に行なわれる。

③長期にわたって活用できる事業が優先される。

（二）税制上の優遇措置がとられる。

①課税所得税、登録免許税がそれぞれ軽減される。

②農地等の買いかえについては、課税の繰り延べ措置が認められる。

③生活環境施設の整備が促進される。

④村ではこの地域の環境施設の整備に努める。

農業振興地域整備計画は「農振法」とも呼ばれる、「農業振興地域の整備に関する法律」（昭和四十四年法律第五八号）によるもので、本村ではその地域指定が昭和四十六年度にされ、その整備計画が昭和四十七年に策定された。

昭和四十九年三月の『南筑輪農業振興地域整備計画書』には、次の四項が記されている。

- 1 農用地利用計画
- 2 農業生産基盤の整備、開発計画
- 3 農地等の権利取得の円滑化計画
- 4 農業近代化施設の整備計画

以下この計画書によって、その概要を記す。

2 農用地利用計画

本村地域農業の将来あるべき姿を明らかにし、村の総合振興計画に呼応した土地利用計画をたてる。村發展上最も大きな問題となるものの一つは、農地と市街地・工場用地との競合である。土地利用の各種混在による公害の発生により、生活環境をみだすことのないよう配慮し、農業にあつては生産性の高い農用地を維持し、調和ある農業地帯を実現しようと計画した。

こうした農用地を設定するにあたって、次の諸点を配慮して設定を行った。

・水田地帯……西天竜幹線左岸一帯

・畑作を中心とした水田・酪農・樹園地帯……西天竜幹線右岸一帯

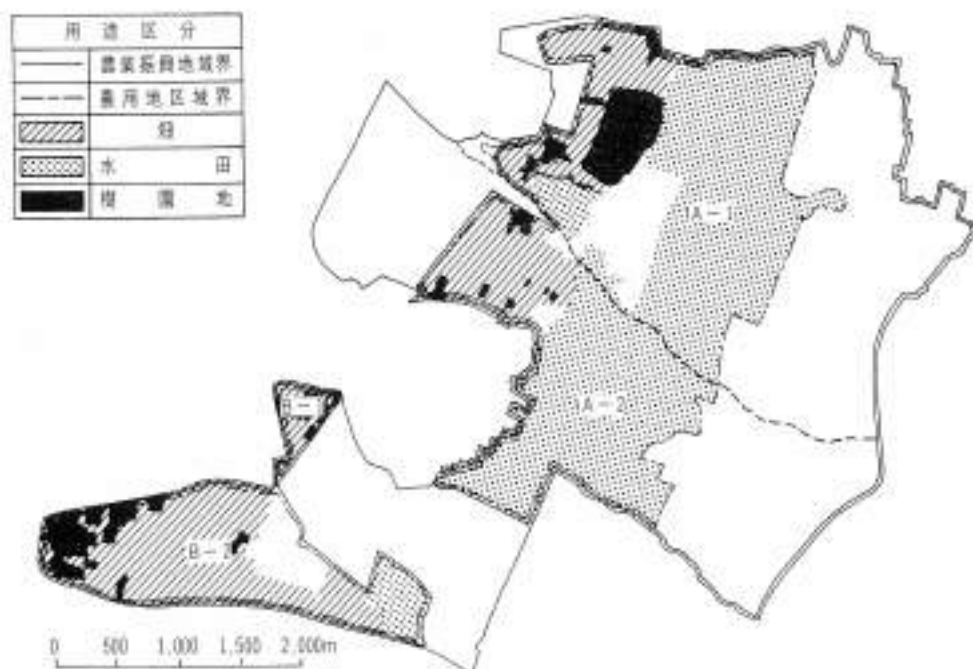


図7-13 南筑輪土地利用計画図（土地利用区分概念図）

本村地域内にある現況農用地一三三四haのうち、次にかかげる三〇四haを除いて、七九三haを農用地区域と設定した。その除外地の内訳は次のようであった。

- ・中央自動車道路 土地の分筆登記ができてから除外
- ・大規模農道 同右
- ・墓地公園 同右
- ・集落内に介在する農用地 一一四ha
- ・天竜川沿岸地帯の都市計画地域の農地 九〇ha
- ・国道一五三号線沿い市街地の農地 九九ha
- ・村道二八号線（吹上線）沿い河側 一四ha
- ・県道沢尻、箕輪線沿い河側 一三ha
- ・県道伊豆、日根線沿い河側 一一ha

以上合計三〇四haを除いて七九三haを農用地とし、用途別に図7-13及び表7-16のように区分されている。

表7-16 用途区分の概要

地 域	現 況	用 途 区 分
天竜川沿岸地区	水田率八五%	都市計画で除外
国道一五三号線沿線	市街化すすむ	住居地帯で除外
西天竜水田地区	水田率九〇%	優良農地（稲作）
西部畑地区	畑率九五%	優良農地（飼料作物・野菜）
大芝原・中野原	畑	同右
大泉耕種・北原	畑	優良農地（桑園・樹園・飼料）
沢尻・南原の一部	市街化	除外

3 農業生産基盤の整備・開発計画

農振地区内にある西天竜水田地帯は約五〇〇haあるが、水田の農業

近代化に対処するために、圃場が狭い地区については二〇a以上の区画に基盤整備する。西天竜幹線水路上段部畑地三二九haについては、伊那西部開発事業の地域として畑地灌漑を全面的に実施し、圃場整備を図り、地域の開発に努める。

土地基盤整備開発計画

地区別計画と地区越え計画があり、その概要は表7-7のようである。

表7-7 地区別計画と地区越え計画

地区別計画	事業の種類	事業の概要	受益面積	備 考
A-1	農道整備 圃場整備 排水施設 灌がい	農道網整備のための新設改良 区画整備 用排水路の整備のための新設改良	八〇ha 一三 八〇	上田、上ノ平、善内林、大泉川原、南高根、高根の各地籍
A-2	農道整備 圃場整備 排水施設 灌がい	農道網整備のための新設改良 土地基盤整備 用排水路の整備のための新設改良	九〇 五 九〇	大芝原地籍
B-1	農道整備 圃場整備 排水施設 灌がい	農道網整備のための新設改良 土地基盤整備 用排水路の整備のための新設改良	二三 二三 二三	三木木地籍
B-2	農道整備 圃場整備 排水施設 灌がい	農道網の整備のための新設改良 土地基盤整備 用排水路の整備のための新設改良	一六九 一六九 一六九	中野原地籍

(2) 区域総合計画

事業の種類	事業の概要	受益の範囲		備考
		受益農用地区域の範囲	受益面積	
伊那西部農業開発事業	農道新設 概八〇〇m	芝、大泉、北原、大	一、一三四ha	通過延長 四、〇〇〇m

四 都市計画

明るく住みよい、しかも近代的な村づくりを進めるために、かねてから進めてきた都市計画が、昭和五三年一月一九日に決定した。

用途地域 約六八五ha

都市計画道路 一四路線

都市計画公園 五〇・六ha

1 用途地域

これは土地利用計画で、住居・商業・工業が快適で利便で安全で能率が確保できるよう、それぞれが競合しないよう、地区割を定めることである。本村の用途地域は表7-8及び図7-14のとおり、住居三種類、商業一種類、工業二種類の合計六種類である。

これら種類別の特性を生かすため、建物の新築・増改築の場合には建築基準法の規定により制限がかかる。その制限の一つは住居地域と工業地域にそれぞれ制限を設けて、住工混在を解消しようとするものであり、その二つ目は、建築物の形態の制限で、一定の密度の確保と日照・通風・景観等の確保の配慮がされるようになっていく。

その「建物の用途制限の概要は表7-9のようである。

表7-8 南筑輪都市計画用途地域一覧表

種 類	面 積 ha	容積率 %	建ぺい率 %	面積構成比 %
第1種住居専用地域	約 142	60以下	40以下	(20.7)
	約 19	80以下	50以下	(2.8)
第2種住居専用地域	約 118	200以下	60以下	17.2
住 居 地 域	約 302	200以下	60以下	44.1
近 隣 商 業 地 域	約 11	200以下	80以下	1.6
準 工 業 地 域	約 80	200以下	60以下	11.7
工 業 専 用 地 域	約 13	200以下	60以下	1.9
合 計	約 685			100.0

2 都市計画道路

この道路は、間隔およそ五〇〇m、幅員二m以上、鉄道との交差は立体式、道路と道路との交差は平面式で一四路線を計画した。それは表7-10のようである。

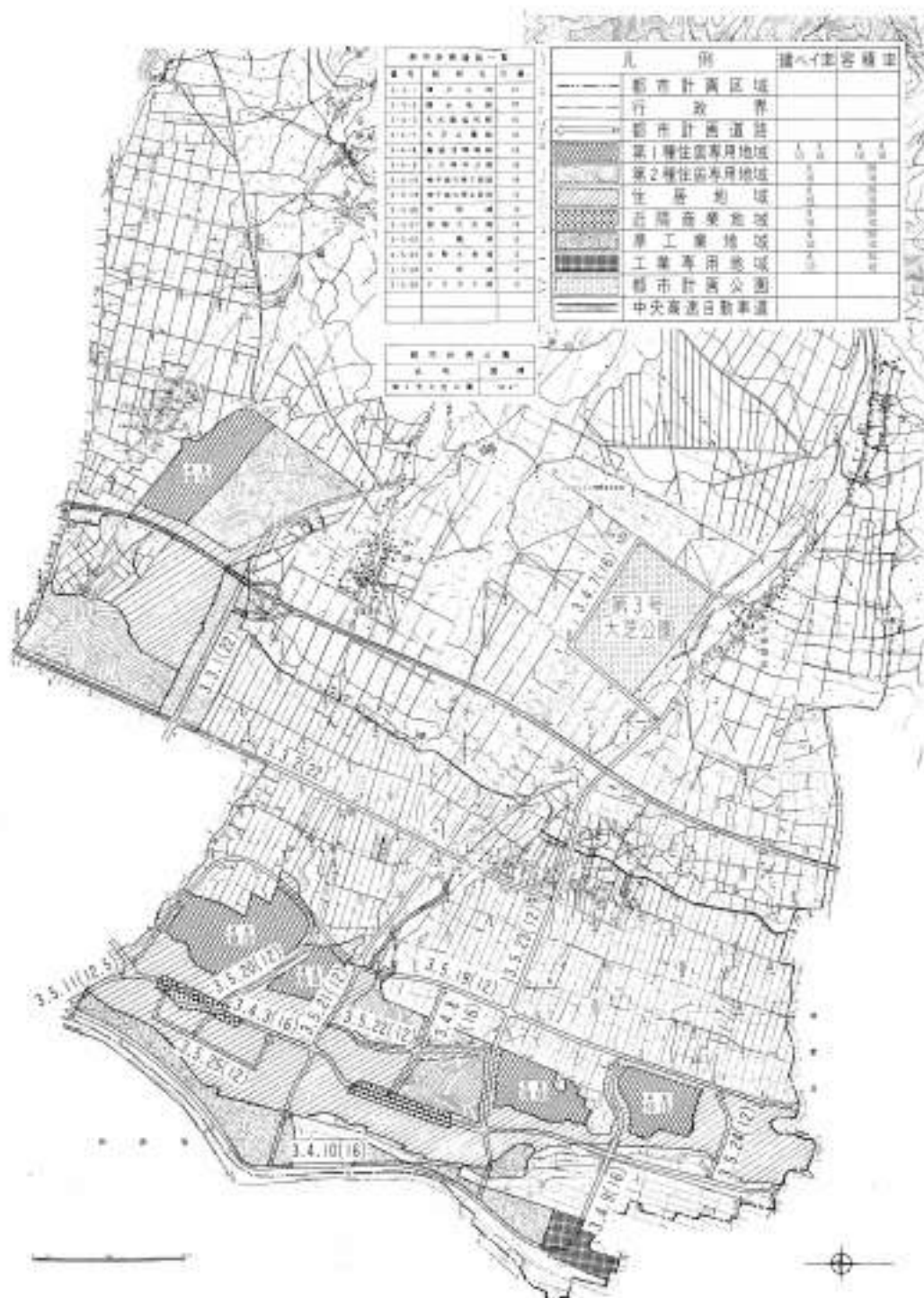


表7-3 建物の用途制限概要

区分	例示	第一種 住居専用地	第二種 住居専用地	住居 用地	近隣 商業地	商業 地	準工 業地	工業 専用地
住宅	住宅、共同住宅、寄宿舎、下宿 兼用住宅(住宅で事務所、店舗、作業場等を兼ねるもの)	(×)						×
学校 公益 施設	幼稚園、小学校、中学校、高等学校 図書館、博物館 神社、寺院、教会 養老院、託児所、公衆浴場、診療所 送迎派出所、公衆電話所、一定規模以下の郵便局 大学、高等専門学校、各種学校 病 院	×						×
商業・ 娯楽 施設・ その他	物品販売を営む店舗(百貨店を含む)飲食店 上記以外の店舗、事務所、公会堂 ホテル、モーテル、旅館 ボーリング場、スケート場、水泳場 まあじやん屋、ぱちんこ屋、射的場 劇場、映画館、演芸場、観覧場 待合、料理店、バー、キャバレー、ダンスホー ル、トルコ風呂 営業用倉庫 床面積 50㎡ をこえる車庫 自動車教習所、床面積の合計が15㎡をこえる畜舎	(×) (×) × × × × × × (×) ×	×					×
工 場	パン屋、米屋、豆腐屋、菓子屋などの食品製造工 場等で一定規模以下のもの 作業場の床面積の合計が50㎡以下の工場で危険性 や環境を悪化させるおそれが極めて少ないもの 作業場の床面積の合計が150㎡以下の工場で危険 性や環境を悪化させるおそれが極めて少ないもの 作業場の床面積の合計が150㎡をこえる工場また は危険性や環境を悪化させるおそれがやや多いも の 危険性が大きい、又は著しく環境を悪化させる おそれがある工場	(×) × × × ×	×					
危険 物	火薬類、石油類、ガスなどの危険物の貯蔵、処理 の量が少ない施設 火薬類、石油類ガスなどの危険物の貯蔵、処理の 量が多い施設	×	(×) ×	(×) ×				(×)
特殊 施設	卸売市場、と畜場、大葬場、汚物処理場、ごみ焼 却場	×	(都市計画において位置を決定したものなど)					

(×)は建ぺいできないもの(ただし特別の許可を受けて建てられる場合がある)

表7-10 都市計画道路一覧表

種別	名		位置		延長 (m)	幅員 (m)
	番号	路線名	起点	終点		
幹線	三・三・一	霞状北線	字三本木	伊那市美濃	約八三七〇	二二
線	三・三・二	瑞状南線	字春日道東	伊那市伊那郡	約九六七〇	二二
街	三・四・三	名古屋坂線	伊那市伊那郡	伊那市・神子榮	約八七五〇	一六
路	三・四・七	大芝公園線	字南高根	伊那市・北殿	約二二一〇	一六
	三・四・八	農協浅間線	字北ノ久保	大芝	約一八七〇	一六
	三・四・九	上川原中込線	字上川原	北殿	約一四二〇	一六
	三・四・一〇	神子榮久保下段線	字上川原	北殿・田畑	約三九三〇	一六
	三・五・一〇	神子榮久保上段線	字下ノ沢	田畑・北殿	約五二六〇	二二
	三・五・一九	赤坂線	字田ノ久保	田畑	約二二一〇	二二
	三・五・二〇	田畑大芝線	字神河原	田畑	約二四一〇	二二
	三・五・二二	八幡線	字山腰	北殿	約二二八〇	二二
	三・五・二三	北殿大泉線	字中川原	大泉	約三六一〇	二二
	三・五・二四	久保線	字久保田	久保	約七〇〇	二二
	三・五・二五	下ウカク線	字掛田	田畑	約一八八〇	二二

3 都市計画公園について

都市計画は地域住民の娯楽、福祉の向上のため、現在プール、野球場、陸上競技場、アーチェリー場のできている大芝公園を、都市計画公園として、今後施設の充実を図るものとする。(詳細は図参照)

四 地籍調査

昭和五五年から一〇か年計画で本村内も地籍調査が行なわれている。現在まだ進行中であるが極めて大切な歴史的な調査であるので、その大要を記しておく。

地籍調査は、国の行なう国土地調査のうち、市町村を事業主体とする細部調査の一つで、土地を一筆ごとに、字・地番・地目・面積・所有者等を明らかにして地籍簿を作り、また一筆ごとの土地を測量して形

状・面積を明らかにして地籍図を作成することである。

この調査結果は、地籍簿及び地籍図として保存され、国土庁の認証を経て法務局に送付され、土地登記簿の記載が改められるのである。

調査は村内を一〇区分して、一〇か年計画で実施され、測量は業者委託で行なわれている。

調査費用は一筆当たり平均三〇〇万円程度で、この費用分担は、国が六分の四、県と村が六分の一ずつとなっている。

四 大芝村有林の開発

本村における大芝村有林の重要性は、いまに始まったものではない。古来重要な林場として農民の生活を支え、明治になってからは森林資源として村財政をうるおしたので、他町村の住民から羨望されて

きた平地林である。

中央道の開通を迎えて、この村民共有の平地林にも、新しい時代の波がおしよせてきた。山林経営に代わる新しい経営が要請されてきたのである。

1 大芝開発調査委員会

昭和四三年三月、「大芝開発調査特別委員会」が設置され、一六人の委員がその予備的調査を行なうことになった。大芝の山林経営によってうるおってきた本村も、山林経営では見通しが暗くなってきたからである。

中央道の開設にともなう開発するのがよいという意見から、専門家の診断によって開発の方向を探ることになった。ゴルフ場とか別荘地の案が話しあわれた。

昭和四五年一月、「大芝開発審議委員会」が設置された。これはゴルフ場開発委員会ではなく、ゴルフ場開発を研究問題とする委員会と性格をかえた委員会であった。それだけに、この委員会の意見は尊重されることになった。

昭和四六年一月三〇日、大芝開発審議委員会の倉田恒雄委員長から、時の村長木ノ島新一にあてて「答申書」がだされた。

大芝村有林をゴルフ場並びに別荘地として全面積を貸しつけることについて諮問をうけたが、委員会の意見は諮問も修正されて「大芝開発全般についての意見」となって、次のように答申されたのである。

一、村有林の開発は中央道開通時点が有利と思われるが、社会情勢の変化と村財政事情等を考慮して一部（一三万坪程度）をゴルフ場用地に貸しつけるもやむを得ない。

二、その他の村有林については、今後研究を重ね、長期的視野に立つて効率的でしかも有利な方向へ逐次段階的に開発を推進すべきである。但し當時

村民が自由に利用出来る施設を計画の中に必ず盛り込むこと。

三、今後の開発は単に大芝のみに止まらず、地域全般にわたるものと思われるので諸情勢に対応出来るよう長期展望に立つて村有林の利用を考えること。

（後場文書）

2 ゴルフ場開発問題とスポーツ公園の発足

昭和四六年三月一五日、議会から大芝開発促進決議書がだされ、同年七月には村当局から、次の大芝原の賃貸借契約が提案された。

一 開発の方向

1 大芝原

スポーツ公園一四万坪 村宮（池、野球場、バレーコート、テニスコート、プール）

ゴルフ場一七七ホール 三二万五〇〇〇坪

基本別荘地（会社寮三〇） 四万六〇〇〇坪

附属施設（ハウス、駐車場、グリーンベルト） 三万九〇〇〇坪

2 大泉所

一般別荘 三〇〇戸 ロッジ（ホテル） 一

レストハウス 一 各種クラブ施設（乗馬、ボート等）

フィッシングセンター サイクリングコース

ヘリポート アルプス展望台

二 開発効果の予測

(1) 村への直接収入

賃地料 五二万坪×五〇円（坪）＝二五五〇万円

固定資産税 建物二〇億円×八〇%×以前＝二二四〇万円

利用交付金 四万五〇〇〇（人）×二五〇円＝一一二五万円

計 五八六五万円

(2) 間接収入

従業員（地元採用） 二〇〇名 給料一万七〇〇〇円

物資の供給 一〇万人の消費 一億円

（二）貸付条件

地代 坪当たり 五〇円

地代の改定 三年毎に行う

期間 三〇年間で必要により更新する

（後場文書）

以上が開発の提案であるが、これに続いて「大芝・大泉所の村有林の現状」も次のように記されている。

大芝 総面積 四五万坪（幼木面積二四万坪）

大泉所 総面積 四〇万坪（幼木面積一八〇〇〇坪）

評当り年間収入 一八円（伐期立木八〇〇〇坪）

総面積 六〇万坪（幼木で今後三〇年収入なし）

こうして木材の収益性よりも開発が有利であるとの資料が示された。

この提案に示されたように、木材の収益性は低く、量的にも限界があるので、開発をしなければならないことは時代の勢いであった。しかし、大芝を貸し付けるといふことは財産処分という重大なことであるので、部落懇談会をしたり、公聴会も開いた。昭和四十六年七月二四日、村公民館での公聴会には公述人として賛成反対それぞれ一人が公述している。村内には根強い反対意見もあった。

昭和四十六年八月二三日、議会第一常任委員長は委員会の審査報告書で、「原案は種々不備の点があるので賛成できない。」と否決の報告をした。大方は開発の方向であったが、大芝開発という全村民の願いを多数決で処理せず、村の将来を考え一日も早く円満な開発を期しての全委員一致の結論であった。

こうして従来村で考えてきた開発の方向を振り出しに戻して、新た

な開発方向を見出すことになり、昭和四十六年一二月に「大芝開発推進委員会」（二六名）が発足した。

その中から一〇名の小委員会も構成され、会議を何回か重ねて開発の推進をはかった。しかし、これといって具体的進展もなく昭和四十七年が終わり、翌四十八年になっても動きがみられなかった。

一方で昭和四十七年になって、ゴルフ場問題ときり離して、村民のひとしく要望している「スポーツ公園」については、早急に実現すべきであるという意見が全員の一致するところとなった。

スポーツ公園は各種の施設が設けられるよう、全体の構想をたてた上で、まず野球場を四七年度で造ることになった。企業と関係のないコンサルタントの新日本設計事務所に依頼して構想図を作成した。

（図7-15）

こうして大芝開発の問題は、ゴルフ場が足らなっていたので、まずスポーツ公園から発足するようになったのである。

3 ゴルフ場貸借借契約の成立

昭和四十八年五月一九日、土地貸借借契約書が村と、信州伊豆国際ゴルフクラブとの間に成立した。その概要は次のようであった。

貸借期間 昭和四十八年五月二二日から一五か年間

貸賃料 一坪当たり一〇〇円（一三万坪）

貸賃料の改定 三年ごとに行なう。（消費者物価指数による）

一時支払金 一億四〇〇〇万円（地方債）

深層水ボーリングの禁止（五m以上禁止）

同年の五月二二日、この借契約は本契約として議決され、ようやくゴルフ場問題は解決したのである。

契約内容は前期借契約と同じで、契約期間は昭和四十八年五月二二日から一五か年間で昭和六三年五月二二日まで、満了の一年前に話し合

い更新することができるようになっている。

賃賃料改訂の基礎は次のようになっている。

総理府統計局発表の(1)経済成長率、(2)全都市消費者物価指数、(3)周囲の土地の賃賃料金、の三条件を参考として料金改定額を算出する。

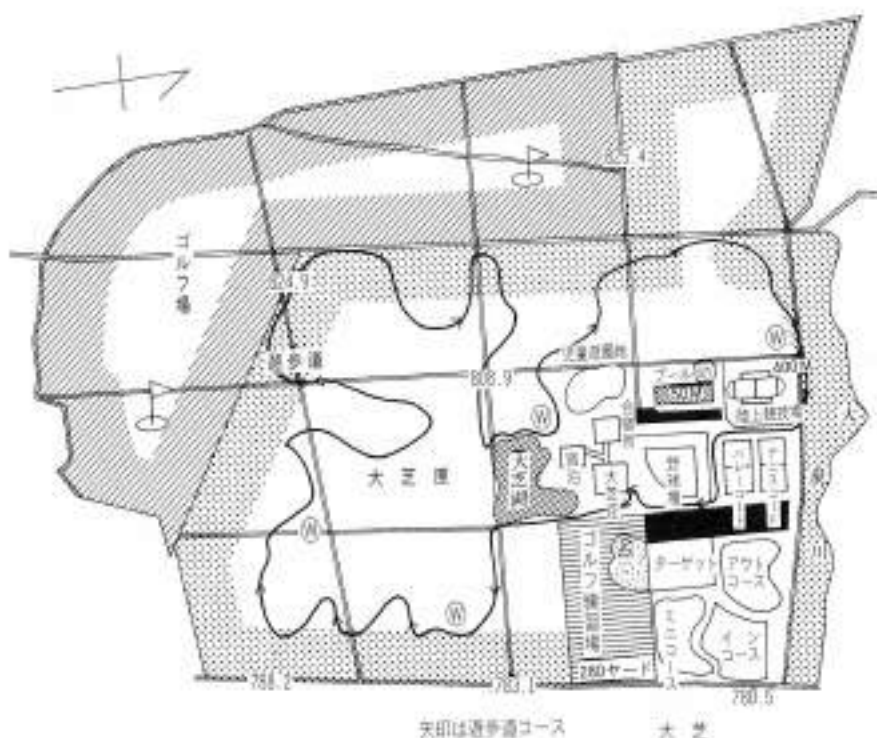


図7-15 大芝スポーツ公園の構想とゴルフ場

村民の大芝原は、森林経営では立ちゆかない時勢のもとで、賛成反対のはげしい討論を経て、結局円満に解決して、スポーツ公園となりまたゴルフ場として一三万坪が貸与されたのである。

4 大芝スポーツ公園の充実発展

その後、大芝スポーツ公園は各種運動施設が着々と整備され、憩の家として大芝荘が建設され、都市計画公園として大芝池などが造成されているが、その詳細は第五節の二、厚生福祉の項を参照されたい。

なお、昭和五年八月一九日、「南筑輪村研修センター」が落成した。この施設は通産省の工業再配置促進整備事業で、二二〇〇万円の国庫補助と信英・大明両社の協力によってでき、各方面の研修に利用されている。

五 行政機構等の発展

(一) 村内行政機構の推移

昭和二年制定の地方自治法は次の特色を持っていた。

①住民自治の飛躍的拡充である。婦人に参政権が与えられ、知事・市町村長の直接選挙制が取り入れられた。とくに首長その他の機関の構成者の解職の請求権や地方議会の解散の請求権などが与えられた。

②団体自治が大幅に充実にされた。行政警察的な取締りが条例でできるようになり、果も自治公共団体であり、従って知事も自治体の長として、官僚的支配体制の出先機関ではなくなった。

こうした特色を持つ自治が初めて与えられたわけであって、本村の行政機構は次のように充実にいった。

第2節 戦後の村政

まず、昭和二十四年にはまだ機構というほどのものはなく、雑居型であったが、昭和二十六年にはややその職分が分化した。しかし、今度は逆に各個前進で統一が欠け、ようやく、昭和三十三年になって議会が議決機関らしい地位を占め、教育委員会も独自性を持ってきた。

昭和二十四年には一般書記の外に、農地委員会書記、保険組合書記、保健婦・開拓組合・普及員などが見えるが、これは当時民主化の過程

村長	1	24
助役	1	24
収入役	1	24
書記	14	24
農地委員会書記	4	24
保険組合書記	2	24
保健婦	1	24
開拓組合普及員	1	24
村会議員	20	24
監査委員	2	24
農業調整員	18	24

村長	1	26
助役	1	26
収入役	1	26
補佐	2	26
庶務	1	26
戸籍	1	26
消防	1	26
税務	3	26
結業	1	26
配給	1	26
統計	1	26
厚生	2	26
土木	1	26
耕地	2	26
農地	2	26
林務	1	26
国保	3	26
保健婦	1	26
改良普及員	1	26

図7-16 昭和24・26年の村行政機構

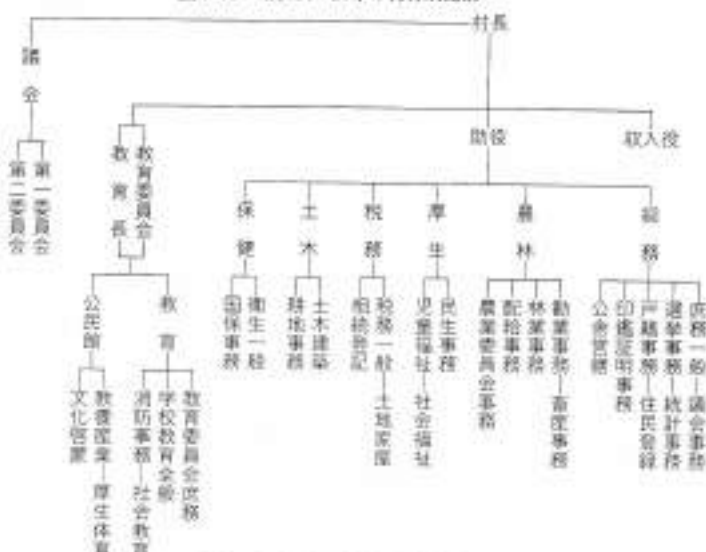


図7-17 昭和33年村行政機構



図7-18 昭和39年村行政機構

で、重要施策の処理であったので、混乱の中から立ち上がる時代を思わせる。

昭和三十三年では消防事務が教育委員会に属していたが、今日では考えられないことである。

昭和三十九年度ともなると、消防団が村長直屬となり、各委員会(選挙管理・農業・固定資産評価)や監査がそれぞれ独自の地位を与えられ

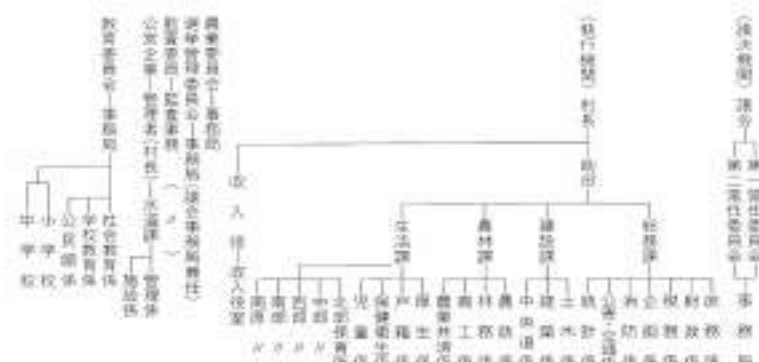


図7-19 昭和47年村行政機構

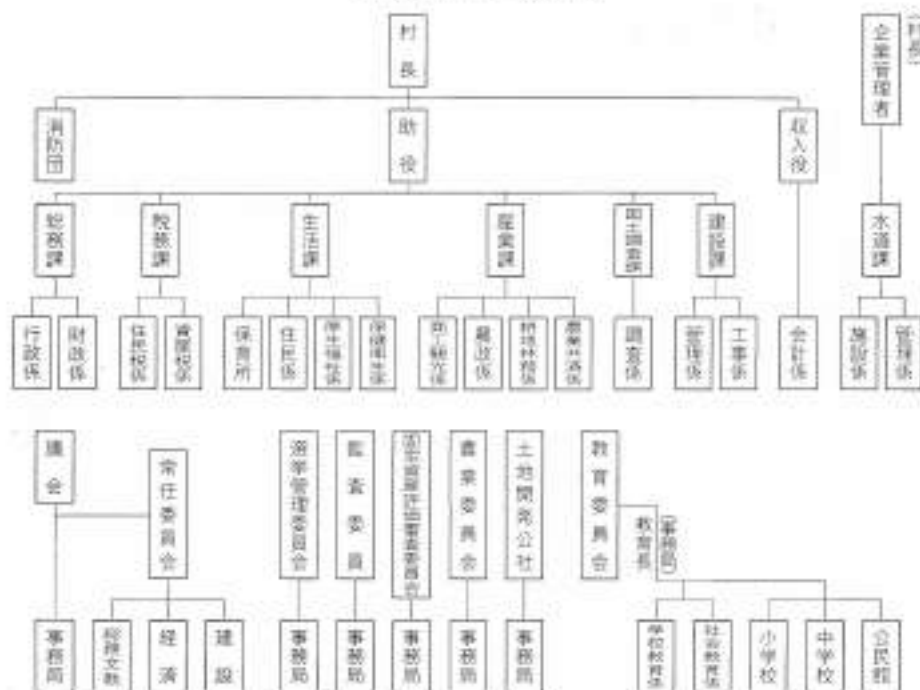


図7-20 昭和58年村行政機構

(二) 町村合併の波

敗戦によって、すべてが新しくなることを求める時代となった。昭和二八年町村合併促進法が公布され地方事務所で当時の伊那町を中心とする一町七か村の合併計画が策定され、同年一二月九日には関係町村長・助役・議会代表・教育委員・区長・学校長・婦人会長・青年会長・公民館長・自治普及員等一四七名が参集を求められて、合併研究懇談会が開かれた。伊那町はこの大同団結によって一挙に伊那市になろうとして熱心に周囲に合併を働きかけた。何回かの懇談の結果、富県村・美郷村が合併の意思表示をし、続いて手良村・東春近村及び西筑輪村がこれに加わった。合併の意思表示をしなかったのは本村と西春近村の二か村であった。

ている。昭和四七年度の機構は生活課の中で各保育所の位置が明示されている。昭和五八年度の機構は最も現在に近いものであるが、ここでは、議会の常任委員会が建設・経済・総務文教となっている。

情があった。伊那町側の強力な呼びかけに対し、合併問題の研究に入ろうとした一月末に突如として村有林払下げに絡む汚職事件が起き、村会議員の一部と助役に収賄行為があることが指摘され、従来とかく

村会議員不信任論がささやかれていた村内に、火がついたように議会不信任の声があがった。

村育願部はこの汚職事件の鎮静を待って合併問題の研究にうつらざるを得なくなった。時を稼いでいるうちに、二月となり約東の期限（二月二十五日正午）が迫ってきたので、七日ごろから研究を開始した。村会が四班に分かれて県内各地を視察し、二月一二日に全員協議会で合併の可否を検討した。この大問題を村民に知らせないではということと、急ぎよ一三日には拡大委員会（村民約一八〇名）を招集したところ、「この重大事項を村民に知らせなかった……」という怒りをつるし上げに終始した。もともと合併に対する村民の最大関心事は村有林（山林）の保持ができるかどうかにあった。首脳部どうしの会議で、一四日夜には①大芝原の村有林の完全保持②北沢山山林八〇〇町歩の解放（各部一〇〇町歩）をとりつけることができた。

一五日の村民大会ではこの二項目を、村民に公開することもできなく、二月一五五正午という時間切れとなってしまう。土壌場のこの約束も結局反故となり対等合併の道はとざされ、吸収合併の道しか残らないこととなった。

こうして、昭和二年四月一日から、伊那町・富里村・美郷村・手良村・東春近村が廃されて、この区域が新しく伊那市となった。

伊那市が誕生してからも機会あるごとに合併の話しいは進められ、昭和三年三月一三日県知事の合併勧告がだされた。その後再び知事の勧告がだされたりして、昭和四〇年四月一日には、ついに西春近村も伊那市へ編入された。

しかし、その去就が注目されていた南箕輪村は合併しなかった。住民の代表一八五名によって研究もなされたが、伊那市との合併は時期尚早という意向となって、合併の気運にはならなかった。なお、昭和

三六年六月二八日には住民の世論調査もなされたが、合併の機運が現われず、同日の議会において、合併の可否はもう少し時期をみて定める、村議会は独自の研究を進めるとの方針が決定され、今日に至っている。

このように、南箕輪村が、明治八年に奇しくも旧六か村を合併して誕生して以来現在まで、縮少（分置）もなく、拡大（合併）もなく、今日まで続いているのは、県下でも珍しい。かりそめの合併であったかに見えた南箕輪村は生活圏からみても規模からみても、ゆるがえない適正なものであったといえるのであろうか。

村の基本構想策定のため、昭和五九年八月一日からの村民世論調査の結果によると、図7-21のように、合併反対が賛成を二倍半も上回っている。これは村民一九七七人の階層別、職業別調査であった。

ついでに町制施行の可否の結果は図7-22のようで、村のままでいきたい者が多かった。しかし、商工業者には町制施行希望が多い。



図7-21 合併への意見



図7-22 町制施行の意見調査

(四) 百年を迎えた村政
南箕輪村が成立したのは、明治八年二月一八日で、昭和五〇年が一〇〇周年にあたった。

村では議会・教育委員会・区長会・学校・商工会・農業委員会・PTA・婦人会・青年会等の代表によって「記念行事計画実行委員会」を構成し、記念行事について審議し、次の記念行事を実施した。実施の期日は十一月二三日であった。

(1) 記念式典 功労者の表彰・村花(きく) 村木(赤松)の樹定 記念講演会

(2) 南箕輪村誌の編纂 五十七年の予定

(3) 記念誌の発行『村の百年のあゆみ』

(4) 記念文化祭の実施 中学校の若竹祭にあわせて行なう

(5) 記念植樹 大芝村有林の一隅を記念の林とする

- (6) 村有林の手入 大芝へ全戸一名参加し、一斉手入れ
- (7) 社会体育館の建設 中学校校舎跡地に本年度建設
- (8) 村内花いっぱい運動 各戸に草花の種・苗を配布
- (9) 重要書類の保管施設建築

01 航空写真の作成

02 中学校プラスバンドの充実

なお、昭和三六年には村民歌が決定し、同四四年には村報第一号が発刊され、同四九年には村章がきまり、同五一年には村文化財第一号(新四国書)が指定され、村誌編纂委員会が発足している。

Ⅲ 役場庁舎の新築

昭和五五年八月着工、竣工同五六年八月三十一日、で役場新庁舎が落成した。

新築以前の庁舎は昭和八年五月、木造二階建てでできてから五〇年近い年月を経、戦前、戦中、戦後を通じて村行政の中心としてその使命を果たしてきた。当時の職員数は一五人くらいで足りていたが、その後村民要望の多様と行政需要の増大、行政事務量の増加にともない、七一人の職員数に増加してきた。大小一五回にわたる庁舎の増改築や補修補強を行ってきたが、事務能率の低下や支障、外来者の不便、駐車場の狭さ等、村民サービスに事欠く状況にたち至っていた。

新庁舎建築に当たって第一に敷地の問題があったが、駐車場は八幡森に神社庁の許可を得て造成し、敷地は山崎家の土地の割譲というような協力によって、南箕輪村四八二五の一番地に決定した。

総工費七億円、鉄筋コンクリート、地下一階、地上三階、延べ三七〇八㎡の新庁舎の概要は、次の表7-11のようであった。

この工期によって工事は進行し、九月一九日落成式、一般公開が九月二〇日、庁舎移転は九月二五日から二六日に行ない、新庁舎での業

第2節 戦後の村政

表7-11 後援庁舎の工事概要

- 位置 南箕輪村4825—1番地
- 面積 敷地面積 10,306.00㎡
建築面積 1,694.85㎡
延床面積 3,708.26㎡
- 構造 庁舎棟 鉄筋コンクリート 地下1階 地上3階
車庫 鉄骨 1階
倉庫 鉄骨 1階
自転車置場 軽鉄 1階
- 各階面積(㎡)

	地階	1階	2階	3階	屋上	合計
庁舎棟	645.23	1,385.15	654.71	641.68	71.79	3,398.56
車庫		178.0				178.0
倉庫		81.2				81.2
自転車置場		50.5				50.5
合計	645.23	1,694.85	654.71	641.68	71.79	3,708.26

- 工期
着工 昭和55年8月23日
竣工 昭和56年8月31日
- 事業費内訳
本体工事 495,000,000円
設備工事 124,000,000円
電気工事 81,000,000円
合計 700,000,000円
- 工事関係者
設計監督 神城建設設計事務所
本体工事 宮下・原・西部建設共同企業体
設備工事 エビヤ鉄工設備㈱
電気工事 新井電気工業㈱

務開始は九月二十八日(月)からであった。

県下二番目の人口急増という、躍進する南箕輪村にふさわしい新庁舎がみごとに竣工した。この新庁舎を拠点として村政の改革進展を村民一同が期待している。

(五) 広域行政組合

行政組合は町村合併とはちがって実質的である。地方公共団体の事務の一部を共同処理するために設けられ、その経費は合理的に組織団体が出しあって運営されている。

当地域ではすでにのべたように、昭和一七年に、伊那町・西春近村・東春近村・富原村・美郷村・西箕輪村とわが南箕輪村で、「上伊那中央伝染病院組合」が結成されていた。(昭和四〇年解散、伊那中央保健衛生組合となる)

また、戦時中に満州移民のため、昭和一七年三月五日「富貴原郷園拓団建設組合」を結成した経験もある。こうした実績をもとにして、し尿処理の組合ができた。

1 伊那中央し尿処理組合

昭和三八年には「伊那中央し尿処理組合」が設置されるはこびとなった。

南箕輪村・伊那市・西春近村・箕輪町・高遠町・長谷村・河南村の一市二町四か村による共同し尿処理組合である。すでに農村でもし尿を肥料としてはほとんど使わず、各家庭でその処理に苦しむようになっていたので、この施設は村民に喜ばれた。しかし、最初は大トラブルも多かった。

昭和四〇年一二月、伊那中央保健衛生施設組合となり「伊那中央衛生センター」といい西春近地籍にある。昭和五三年から五四年にかけて一四億五〇〇〇万円をかけて大改修工事をして、処理能力が一・二

から二〇〇に強化された。

なお、し尿の汲み取りは市内の四業者に委託して地区割りで行なっている。

2 上伊那地域広域行政事務組合

「上伊那地域広域行政事務組合」は、昭和四四年四月の自治省の「広域市町村圏」の設置要項にもとづくものである。市町村の独立性は尊重しながら、広域で共同処理した方が効率的な公共事業をとりあげ、あわせて過疎化の解消を図るという目的であった。

上伊那の全市町村二市四町四か村は、昭和四五年八月、広域市町村協議会を結成し、翌四六年九月に組合設立の認可があり、「上伊那地域広域行政組合」として発足した。（本村では四六年八月議決）

同組合が共同処理した事務は、当初の郡市民会館の建設にはじまって、次のように推移した。

(1) 昭和四七年七月、郡市民会館の建設落成。

(2) 昭和五二年八月、広域水道の水調調査を横川・沢川・地域のダム建設可否の調査を行った結果、沢川と決定した。伊那市・駒ヶ根市・箕輪町・宮田村と南筑輪村の五市町村の企業団となる。着々進行中。

(3) 昭和五二年一〇月、各市町村の人口・税その他の電算事務を一括処理するため「情報センター」の開設をする。（伊那市伊那郡）

(4) 昭和五三年一二月二〇日、全域の「伝染病隔離病舎」の建設が、伊那市中央病院敷地内に完成した。

(5) 昭和五四年四月、「食肉センター」（宮田村中越）の管理をはじめ。

(6) 昭和五四年一月、「上伊那郡病院群輪番制運営費補助事業」と「上伊那提督覚ライブラリー」の管理を実施する。

なお、「流域下水道調査」も行なったが、実施は各ブロック毎の建設に傾いている。このほか赤石林道の建設、国立青少年の家の誘致な

どもとりあげられた。

3 大泉所山砂防ダム

昭和四四年一月二日、大泉所砂防ダムの起工式が行なわれた。現地に県会議員、建設事務所、村会議員、村理事者等関係者三七名が出席して鎮入れを行なった。

この砂防ダムは本堤防と副堤防とよりなっている。

高さ 横の長さ 体積 貯砂量	本堤防		副堤防	
	一五・五m 四二m 三四〇〇m ³ 一四一〇〇m ³		八・〇m 二七・二m 八二〇m ³	

昭和四六年完成し、事業費は一億四〇〇〇万円、国、県費でできた。ダム建設によって、次のような「覚書」がとりかわされた。

覚書

大泉所山砂防ダム築造に当たり、関係市町村及び水利関係者は下記条項を確認し承諾した。

記

第一条 この覚書の対象となる水没地の位置は次のとおりとする。

左岸 南筑輪村大字大泉所山二三五七番の六

大泉生産森林組合所有

右岸 南筑輪村大字大泉所山二三五七番の三

南筑輪村所有

第二条 砂防ダム完成後における水資源の活用については、慣行による現在の使用水利権は尊重し、その他は関係市町村で計画した地域開発のための生活用水、産業振興等の用水に充てるものとし、水利権者と談合の上決定するものとする。



図7-23 上伊那電算情報センター

増えつづける行政事務に
対処するため、郡城内二市
四町四か村で構成している
広域行政事務組合では、昭
和四八年より研究・検討を
加えた結果、今後の行政事
務の効率化・住民福祉の向
上を確保していくには、コ
ンピューター利用なしでは
考えられないとの結論に達
した。そして組合の正式な
決定機関で郡下各市町村が
共同で導入利用することに

これによると、このダム慣行水利権者は、大泉と大泉新田、吹上、
富田、中曽根の五か井組である。この慣行水利権については「水を求
めて」の項に記してある。

4 行政事務の近代化（電算）

昭和四五年八月五日

南筑輪村大泉区長

唐沢今朝雄

伊那市西筑輪吹上区長

有賀茂安

〃 〃 大泉新田区長

清水文雄

筑輪町中曽根区長

大槻忠治

〃 富田区大泉所年番

白鳥東洋一

伊那市長

三沢功博

筑輪町長

建田重人

南筑輪村長

木ノ島新一

なった。

その後、どんな形で利用したら最も効率的・経済的な運営ができる
かを検討した結果、究極的には「人」に関する情報ということにな
り、「住民記録」（住民基本台帳）の電算化を中心に業務を進めてきた。

住民基本台帳業務のコンピュータに記憶させる項目は、

住所・氏名・生年月日・性別・続柄・住所を定めた年月日・転出入年月
日・国保関係・国民年金関係・児童・福祉手当関係・身障・社会福祉・公
費・医療・選挙事項等。

であった。

これら電算事務処理により、生活課の窓口事務を一か所で受け付け
総合窓口として集中管理し、村民へのサービスになった。

この上伊那電算情報センターは昭和五二年九月に旧上農高校敷地跡
に完成し、翌五三年一月稼動した。

第三節 農業経営の変革

一 農地改革

(一) 農地改革の経緯

1 太平洋戦争時下の農業政策

戦時下における食糧確保は、至上命題として農民に課せられた。四面を海に囲まれた日本は、戦時下には食糧を外国に依存し輸入することもできない。まして軍需産業に国力を傾けねばならないときなので、それを支える食糧の増産は急務であった。我が国は世界的にみて非常に高い反当収量をもっていたが、戦時中農産物の供出割当てという形でその生産力の維持が図られてきた。けれどもその高い反当収量を維持するに必要な労働力が、戦争の熾烈化によってもなるとしての出征や軍需工場への徴用としてとられ、農村は人手不足が深刻となっていった。それと同時に、肥料が極度に不足していった。化学肥料は配給でごくわずかに手に入るだけで農民は、山から落葉や雑木の葉のついた「刈りしき」をとったり、土手草で堆肥を積んで肥料にした。田の裏作にレンゲ草を作ったりした。すこし手のある家で家畜の厩肥があれば上々であった。

このような事態に対処し必要量を確保するため政府は食糧増産と供出および配給に厳重な国家管理を行なった。そして法令でそれを定めていった。

小作料統制令（昭和十四年）

臨時農地価格統制令（昭和十六年）

農地開墾法（昭和十六年）

臨時農地等管理令（昭和十六年）

農地作付統制規則（昭和十六年）

農業生産統制令（昭和十六年）

食糧管理法（昭和十七年）

このように矢つぎばやに出された法令による戦時農業政策の展開は、耕作農民の意欲を高める方向に進められ、この方向は戦後も引き継がれることになり、幾多の矛盾や問題をかかえながら進行していった。ことに、労働力の不足は一方では耕作の放棄となって表われたが、働き手を軍隊にとられたがゆえに、止むなく耕作地を縮小せざるを得なくなった家庭が多くにのぼっていた。また、食糧の統制によって、開価格が生まれて異常に高騰し、小作料は金納化と同時に著しく低く定められることになった。また、配給食糧の不足を補おうと狭小な農耕地をあさって農地は極度に細分化され、小規模兼業農家が激増した。

2 戦後の農地改革

昭和二〇年（一九四五）太平洋戦争は終結した。アメリカの日本占領政策が五項目で示された。その社会秩序の民主的改革に関する五項目の一つに「日本の産業機構の民主化」という項があり、それによって土地の所有形態が、非常な変革の渦に巻きこまれていった。

昭和二〇年十一月二日、閣議において農地調整法の大改革が決定された。それは、健全な農家の育成により、農業生産力の発展を図ることは、食糧生産確保の要諦であるばかりでなく、日本再建の基礎であるから、自作農創設の強化、小作料の金納化などの措置によって、農業の停滞の要因であった農地制度を根本的に改革するという趣旨の、第一次農地改革案であった。

その内容は、

(1) 自作農を今後五年以内に広汎に創設するため、在村地主の所有地五

町歩を超えるもの、および不在地主の農地を小作農に解放し、その対価は必要に応じて年賦償還とすること。

- (2) 小作料を金納化し、これを制限していくこと。
(3) 市町村農地委員会を随所別選挙による強力なものとする。

この三項目が主なものであった。

これに対して国会において強力な反対があつて、一時は農地改革が不成立に終わるのではないかと形勢も見えた。しかし、連合軍総司令部の「農地改革に関する覚書」が発せられることによって審議を進めざるを得なくなり、一部を修正して、昭和二〇年二月二十八日、ようやく改正農地調整法が成立した。そして翌年二月一日施行となったが、占領諸国にも国内の農民組合からも大きな不満があつて、より徹底した改革が望まれ、必然的に第二次農地改革へと動いていったのである。

昭和二十一年六月十七日、連合国の対日理事会は、占領各国から出された農地改革案のうち、英国案を骨子とする勧告案を作成した。日本政府の第二次農地改革案は、これに基づいて具体化され、農地調整法の再改正と自作農創設特別措置法の二本立てとして法制化された。

その内容はおおよそ次のようである。

- (1) 在村地主の小作地保有限度を一町歩とする。
(2) 不在地主の所有する小作地全部と、在村地主の所有する一町歩を超える小作地とは、小作農が買い受けを希望すると否にかかわらず政府が買収し、そのうえで小作農に売り渡す。
(3) 自作農創設の期間を昭和二十三年末までの二か年間とする。
(4) 開墾可能な未墾地も政府が買収、開発を行ない、自作農を創設する。
(5) 市町村農地委員会の構成を、小作五・自作二・地主三に改め、選挙権を成年者農民全員に拡大する。

- (6) 小作料の金納化と、その最高額を設定する。

- (7) 小作契約については、口頭契約を廃止して証書契約とする。

- (8) 農地に対する統制はいっそう強化し、所有権・耕作権の移転を許可制とする。

昭和二十一年八月四日、マッカーサー元帥の声明によって、二つの法案は九月七日国会に提出、一〇月一日無修正で両院を通過成立した。そして、両法案はその月と翌月に公布、一か月後に施行となった。これによって、市町村農地委員の選挙が同年十二月二十一日一斉に行なわれ、農地に関する大改革が始められたのである。

四 南箕輪における農地改革

南箕輪村においても国会で成立した改正農地調整法と自作農創設特別措置法にもとづいて、南箕輪村農地委員の選任が行なわれ、実質的な農地改革への取り組みが始まった。

1 農地の買収

(1) 解放農地の規定

自作農創設特別措置法では、第三条によって次の農地を国が買収すると規定した。

- ① 不在地主の所有する小作地
② 在村地主の保有限度を超える小作地
③ 在村耕作地主の経営限度を超える小作地

在村地主の小作地保有限度面積は、全国平均では一町歩であるが、各府県の戸当たりの耕作面積と経営面積によって差がつけられ、長野県では平均を八反歩と規定した。更にそれが、五反地区・六反地区・七反地区・八反地区・九反地区の五区域に分けられた。上伊那郡は六反地区と七反地区と決められたが、南箕輪村は農村で耕地も広いので、七反地区となった。つまり、南箕輪村在住の地主は、七反歩以

下の小作地は今後も持つことができるが、それ以上の小作地は解放しなければならぬということである。

また、耕作地主の経営限度面積は、全国平均が三町歩、長野県が二町六反であった。上伊那郡は一町八反か二町三反と決められたが、南箕輪村は二町三反であった。

(2) 買収計画

南箕輪村農地委員会では、買収計画樹立の基礎資料を作成するため、昭和二十二年一月一日公布の農林省令第二号農地調査規則により、昭和二十二年二月一日現在で、各部落の農地票を調製した。各地主から記載してもらって提出したところもあるし、補助員によって調査記載して提出した部落もある。この農地票の提出によって、自作農創設特別措置法の主旨が徹底され、地主の中にも農地解放もまた止むなしとする心構えが生じてきた。

不在地主の小作地および在村地主の保有限度を超える面積や経営限度を超えるものは、村農地委員会によって買収計画が樹てられた。農地委員会からは、委員会が土地台帳から調べ出したものと各地主から提出された農地票によって、各地主に解放すべき面積が示達された。各地主は、それによって解放すべき土地を一筆ごとに書き出して、農地委員会に提出した。

太平洋戦争後、国内の富裕者から徴収した財産税または戦時補償特別税に土地の物納が認められた。それは、税務署から連絡があり、物納許可農地として大蔵省からの管理換えの手続きをすることによって、これらは、急速に解放農地の中に含まれていった。

村農地委員会では、提出された農地票や不在地主の農地などを整理して買収計画を樹てた。樹立された計画は公告し縦覧に供した後、県農地委員会に送付され、その承認を受けた後、県知事の地主に対する

る買収令書によって買収されたのである。

南箕輪村における一町歩以上解放した在地地主は表7-12のようである。

表7-12 一町歩以上の開放在地地主数

解放面積	地主数	解放面積	地主数
一町二町未満	一八人	七町八町未満	〇人
二町三町未満	一一人	八町九町	二
三町四町	四	九町一〇町	〇
四町五町	二	一〇町以上	一
五町六町	一		
六町七町	三	合計	四二

南箕輪村における農地買収計画実施状況は表7-13のようである。

(3) 南箕輪における農地買収

買収はとりあえず問題の少ない不在地主所有の小作地から始められた。第一号を例にとると、基礎調査年月日、昭和二十二年二月一日。計画樹立年月日、同年六月八日。縦覧年月日、同六月九日から六月二〇日。買収の時期、昭和二十三年三月二日となっている。長野県農地委員会の承認は同三月二日である。県農地委員会では、各市町村から提出される買収計画の処理に追われ、早く提出されたものでも遅く処理されるという、書類山積の状態が続いた。

このような時、昭和二十三年一月長野県庁の火災があり、農地改革に関する書類の大半が焼失した。昭和二十三年二月一九日付け上伊那地方事務所長の通知は次のような内容のものである。

農地関係焼失書類の整備に要する諸費について

（前略）農地改革関係書類は全部焼失したので、再調を急務とするため、その事務を各市町村農地委員会にお願いしたい。（中略）そのための書記手

表 7-13 農地買収の計画実施状況

号	期 日	田	畑	宅 地	採草地	建 物	買 収 対 象 地 主
1	22. 6. 8	47.115	.123				不在地主 2 人
2	22. 7. 28	30.407	17.414				不在地主 22 人
3	22.10. 1	116.212	80.528				区有
4	22. 6. 8	104.911	12.923				不在地主 25 人
5	22.10.28	41.206	6.503				村外および不耕作地主 16 人
6	22.10.18	71.515	22.524				個人共有 33 人
7		不 明					
8	22.11. 8	57.907	34.204				不在地主 28 人
9	22.10.18	270.811	45.026				伊那町不在地主 73 人
10	22.10.18	45.104	19.523				西箕輪村不耕作地主 24 人
11	22.11. 8	357.623	103.928				村有・共有 10 件
12	22.11. 8	741.016	179.616				在村地主 85 人
13	22.11. 8	171.029	51.400				在村地主 21 人
14	22.12.10	113.028	39.722				不在地主 13 人 社寺 6 在村地主 90 人 共有 3
15	23. 1. 8	160.427	62.927				不在 26 人 在村 65 人 社寺 1 区有 1
16	23. 6.15	283.517	658.521	440.96			不在 21 人 社寺 2 区有 3 在村 81 人 個人共有 8
17	23.11.10	170.804	159.705	1089.00	80 2 24		在村 158 人 不在 18 人 区共有 7 共有 3
18	24. 6. 1	65.315	34.300	18936.66	9.1 17		在村 148 人 不在 16 人 社寺 1 個人共有 8
19	24. 9. 1	3.129	244.609				社寺 1 個人共有 3 在村 107 人 区共有 1
20	24.11. 2	15.006	26.114	1260.95	1.7 03		在村 32 人 区共有 2 伊那電鉄 1
21	25. 1.30	44.726	18.916	898.44		1675	在村 36 人 個人共有 2
22	25. 7. 2	31.006	14.124	1117.51	7.1 00	38.5	在村 44 人 不在 4 人
23	25.12. 2	6.807	4.725	938.4	1.1 20	98.5	在村 12 人
24	26. 2. 8	16.030	8.018	173.60	7.0 00		在村 18 人
25	26. 6. 5	7.621	2.523	168.00	2.2 00		在村 13 人 農林省 3
26	26.10.20	13.928	10.915		5.0 00		在村 16 人 区共有 1
27	27. 3.15	29.912	.216		2.5 26		在村 3 人 区共有 2
28	27. 4.10	—	5.118		.0 29		在村 3 人 区共有 1

当、金二八五六円（南箕輪村分）

（役場文書）

表 7-13 ではこのほかに、社寺所有の土地や区の共有地も解放の対象としていることがわかる。各区では、その時の区役員の個人名として保有したところもあるし、小作者の同意が得られず、小作者個人に解放となったところもある。宅地や採草地が田畑より遅れて解放の対象となったことが示されている。これは、自作農創設特別措置法の第一五条による農業用付随施設としての買収であった。この宅地解放は、赤穂約四万七〇〇〇坪、中箕輪約四万四〇〇〇坪、南箕輪約二万五〇〇〇坪で上伊那郡では三番めに多い坪数であった。

牧野の買収については、最初は格別の法的措置はとられていなかったが、耕作者の地位安定のため、家畜の飼料あるいは肥料源として農業経営に密着する牧野の解放がとりあげられ、昭和二十二年一月一六日施行の法改正によって、農地と同様に強力な買収がされるようになった。南箕輪村では、大芝原・北原・南原・中野原などの村有林・区有林・個人有林がその対象となった。

表 7-14 買収計画の達成率

(昭和22.12.2現在)

部 落 名	買収該当 地主の人数	解放すべき農地面積	昭和22.12.2までの 買 収 面 積	買 収 未 了 面 積	達 成 率
久保	19	反 歩 183.4.13	反 歩 133.0.22	反 歩 50.3.21	72.5%
塩ノ井	14	163.5.08	87.0.27	76.4.11	53.2
大泉	25	463.5.03	315.7.27	147.7.06	68.1
北殿	14	363.9.03	245.5.29	118.3.04	67.4
南殿	13	223.1.22	189.0.24	34.0.28	84.7
田畑	12	156.2.21	125.6.17	30.6.04	80.4
神子	16	97.5.03	63.9.27	33.5.06	65.5
沢尻	6	47.7.07	19.7.15	27.9.22	41.3
計	119	1699.0.20	1180.0.08	519.0.12	69.5

表 7-15 部落別面積別の農地解放者数

(昭和22.12.2現在)

部 落 名	5反未満	5反～1町	1町～2町	2町～3町	3町～4町	4町～5町	5町以上
久保	10	4	2	1	1	0	1
塩ノ井	4	4	3	2	1	0	0
大泉	6	8	4	4	0	0	3
北殿	5	2	4	0	1	0	2
南殿	4	3	3	1	0	1	1
田畑	2	5	3	0	1	1	0
神子	8	4	4	0	0	0	0
沢尻	2	3	0	1	0	0	0
計	41	33	23	9	4	2	7
%	34.4%	27.7	19.3	7.6	3.4	1.7	5.9

社寺有の農地については、二三年一月七日付けで出された村農地委員会の通知に次のようにある。

今般農林次官通達に因って、社寺有農地の七反歩保有の扱いは認められなくなりましから、之が政府買い上げ計画に資するため、別紙圖書簿記入の上、一月二十日限り御提出下され度く御依頼する。

(教場文書)

買収計画は表7-13のように入れたものの、比較的順調に進められた。昭和二年一月二日現在の表7-14では、六九・五%の達成率を示している。

表7-14は、在村地主の買収計画であると思われるが、昭和二年の春に、既にこの進捗率であった。個人の財産を強制的に買収するのであるから、相当に困難な問題が山積したのであるが、連合軍総司令部の指示でもあり、敗戦という現実の中で、国家のためには仕方がないんだという戦時中からの意識も手伝って、順調に進められていった。この表でみると南殿、田畑の達成率が高いのは、所有小作地二〇余町歩を自発的に解放し、自作農創設に貢献した地主側農地委員がおったためである。

表7-14でみてもわかるように、大泉は耕地面積も広く、解放農地もまた広い。買収該当の地主の人員もまた多い。西天地区の田の解放が多かったためと思われる。

(4) 農地買収にともなう問題

西天地区の田は、昭和の初年に開田されたところであって、借入金によって工事が行なわれた。その借入金返済が一七年間というのが、戦時および戦後の米価の急

激な高騰その他の関係で一括支払いとなった。それまでは収獲米の一部を差額米として小作者が西天龍耕地整理組合に納めていて、それで借入金返済を賄っていたが、一括支払金は全部が所有者である地主のところへかかってきた。四方八方金策を工面してやっと借入金を支払ったところへ、この農地解放である。踏んだりけったりという実感を味わった地主が多かったにちがいない。

表7-15は表7-14と同様に農地改革初期の集計であって、その後さらに零細な土地解放が行なわれるのであるが、それでも、五反歩未満の解放地主が全体の三四・四％、一町歩未満の解放が六二・一％の多きに達している。保有限度の二町三反以上で解放した地主は、僅かに二二名（二・八・五％）である。このことから、いかに零細地主の農地解放が多かったかを知ることができる。

解放在村地主の大部分は農業経営者であって、自ら額に汗して営々として農事にいそしみ、自分の汗の結晶によって購入した土地である。あるいは、荒地を手に入れたままながら開墾し、石稜を拾い堆肥を入れ、石灰をまいて美田にしたものである。そのように僅かずつ耕地を広げてきた篤農の人が多いのである。そういう人々が戦争によって働き手を召集され、自作地を少なくせざるを得なかったという事情の人が多い。中には戦地から主人が帰ってくるまでという約束で時貸ししていた土地もあったのである。中にはお国のためにと、戦争で働き手が戦死してしまった家もある。あるいは、僅かな土地を郷里に残して公務員として他出し、老後を親類縁者の多いわが村に帰って、自適な生活を送ることを楽しみにしていた不在地主も多いにちがいない。そういうことを一切不問に付して一律に農地改革が行なわれたのであって、幾多の矛盾や問題が含まれておりながら、非情な法による改革は進んでいったのである。

(5) 農地の買収価格

農地の買収価格は、田が貸賃価格の四〇倍、畑が四八倍と規定された。また、宅地は貸賃価格の五五倍、牧野採草地は四五倍であった。報償金は解放農地が保有限度面積である二町三反以上のところについては出す、限度内の面積にだけ支給された。それは、田では貸賃価格の一一倍、畑は一四倍、牧野採草地は一・一倍であった。したがって、二町三反以内の解放の場合には、田は貸賃価格の五一倍、畑は六二倍で買収されたのである。貸賃価格はその土地のいろいろな条件を考えてつけられたものであるから、同一の地域内にあっても差があり、天竜田と西天田ではずいぶん開きがあった。表7-17に示されるとおりである。

表7-17でわかるように、買収価格は貸賃価格によって総べて決定された。昭和二年一月二〇日付け県知事あての南箕輪農地委員会からの文書によると、自作農創設特別措置法、第六條第三項ただし書きの認可申請として、土地台帳の貸賃価格では不適当とみられる農地については、近傍の類似地の貸賃価格を添えて申請している。公平な価格を作ろうとした努力がみられる。

上伊那郡の買収価格の平均は、一反歩（二〇・八）当たりで、田が五七九円五〇銭、畑が二四九円三一銭であった。南箕輪村の平均は、田が五一四円五四銭、畑が一八六円八二銭である。郡的にみても小作者に有利な価格で買収が行なわれたのである。

表7-16は表7-13と対照してみるとわかるように、一一回めの買取までは不在地主や区有・村有・共有の土地であって、したがって報償金は全くついていない。一二回めから在村地主の土地買取であるから報償金も相当の額にのぼっている。また、宅地に対しては報償金がつかなかった状況も知ることができる。地主に対しての土地代金の支

表 7-16 買収農地の対価および報償金

	田		畑		宅地(対価)	採草地		建物(対価)
	対価	報償金	対価	報償金		対価	報償金	
1	26,598.45		23.10					
2	23,870.80		4,256.16					
3	48,256.10		8,257.74					
4	44,224.95		1,597.26					
5	22,695.70		1,641.12					
6	44,397.30		5,505.60					
7								
8	37,867.00		15,397.38					
9	125,772.10		6,256.32					
10	23,319.95		3,568.08					
11	142,355.40		18,683.52					
12	387,764.46	70,238.79	45,301.02	7,479.95				
13	81,601.85	14,924.60	8,257.74	1,096.85				
14	62,846.90	12,964.71	11,255.52	2,740.46				
15	85,045.99	13,853.44	16,034.22	2,169.72				
16	155,485.70	13,088.74	83,447.44	5,697.89	1,961.76			
17	90,320.95	16,650.70	35,604.30	6,592.43	7,438.20	2,122.56	166.54	
18	32,255.70	4,494.11	7,985.41	273.30	126,282.96	2,662.65		
19	1,963.90	409.09	48,341.72	6,216.07				
20	7,097.90	1,104.29	6,189.54	822.92	8,773.60	346.05		
21	27,118.60	3,145.78	4,665.22	883.54	5,398.80			1,574.00
22	16,935.10	2,165.84	4,904.54	552.12	6,619.25	1,810.62		2,800.00
23	3,312.15	397.10	1,283.94	233.66	6,727.60	41.85		18,600.00
24	7,248.46	1,191.19	2,041.62	540.82	9,594.20	8,960.00		
25	4,316.45		689.70		5,544.00	340.48		
26	6,997.22		1,877.88			2,528.90		
27	22,848.90		115.20			75.15		
28			1,837.92			2.70		

注 表7-13の買収計画に基づく土地の対価である。

払いは後日になり、金券で一五年償還のものであった。

当時の経済事情は、戦後の物資不足によるインフレーションが相当に深刻であった。ことに食糧は危機的ともいえるほど乏しく、藜や雑穀を配給の米の中に入れて炊くのはいい方で、非農家では食べられる野草で量をふやした粥をすすって生命をつないでいる人も多かった。食糧は配給では充分でない。農家では供出をした残りの保有米を、いわゆるかつぎ屋のおばさんなどに売って生活費に充てる家が多かった。当時の米は貴重品で一升(約一・八斗)一〇〇円していた。したがって、米五升か六升で西天庵の田一枚が政府によって売買されたのである。畦豆(当時は田の畦に大豆や青豆・黒豆などを作っていた)だけで田一枚が買えるといったものである。

2 農地の売渡し

(1) 売渡し計画

地主から買収した農地は、その土地を小作していた人に売渡されることになっており、買収と売渡しがなるべく短い期間のうちになされるように配慮された。そこで、買収する時に小作者名を地主が

第3節 農業経営の変革

表 7-17 農地の買収価格

1. 田の買収価格（村内各所から抽出）

部 落	字	地 積	賃 賃 価 格	対価(買収価格)	報 償 金	摘 要
久保	深田	反 1.019	円 15.60	円 624.00	円 171.60	天竜田
塩ノ井	蒲田	1.211	17.90	716.00	196.90	"
南殿	大川	724	16.96	678.40	186.56	"
神子	柴川	1.010	20.68	827.20	227.48	"
久保	戌亥	1.001	9.02	496.10	99.22	西天
北大	石道	1.003	9.26	509.30	101.86	"
田泉	春日	1.002	10.31	567.05	113.41	"
久畑	前宮	1.003	5.87	322.85	64.57	"
塩ノ井	天徳	1.003	20.97	838.80	230.67	中段
		1.110	15.00	600.00	165.00	"

2. 畑の買収価格

部 落	字	地 積	賃 賃 価 格	対価(買収価格)	報 償 金	摘 要
塩ノ井	明和坂	反 1.722	円 6.96	円 334.08	円 97.44	
南殿	浅間	1.002	2.74	180.84	38.36	
北大	石行	.711	2.80	184.80	39.20	
大神	泉耕	1.002	4.62	221.76	64.68	
神子	殿垣	.724	7.02	336.96	98.28	
田子	中野	1.103	3.33	159.84	46.62	
北畑	上野	1.320	2.92	192.72	40.88	
久殿	郷土垣	.715	7.06	338.88	98.84	
北大	官ノ上	.800	2.01	132.66	28.14	
	北原	1.105	2.23	107.04	31.22	

3. 原野の買収価格

部 落	字	地 積	賃 賃 価 格	対価(買収価格)	報 償 金
北久	殿保	反 910	円 8.40	円 378.00	
南殿	蔵ヅ	920	3.77	169.65	
塩ノ井	明堂	410	5.63	253.35	
	中込	300	1.80	81.00	

ら記入して提出してもらい、
他方小作者からも耕作者調査
と買受け申込みがなされた。

告示 南浜輪村農地委員会

農地買受け申込書の取調めについて（昭和二三・一・六）

土地を借りて耕作してある方で、その土地が買収されて政府所有となった人は、売渡し計画の参考のために、買受け申込書を御出し下さい。

イ、字・地番・地目・地積が違っていると受け付け困難です。正確に調べて御出し下さい。

ロ、期限は二月十日迄で締切ります。

ハ、申込書は委員会にありませう。一枚五十銭宛。

（役場文書）

昭和二三年の新年早々から売渡しに関する業務が始められていたのである。売り渡される幸運の人は、買収の時期にその農地を耕作していた小作農で、自作農として農業に

精進する見込みのある者でなくてはならなかった。ごく零細な飯米農家にまで売渡すことは零細農を固定化すると、二反歩以下の小作農には売渡しを保留した。また、売渡しを受ける機会を均等にするために買取した政府の農地と、在村地主の保有地とを交換した上で売り渡す処置を講ずるようになっていた。しかし、これらのことは難しいいろいろな問題をもっているため、部落ごとの農地管理組合でなされるところもあるが、それはごく小敷であった。

解放された農地とそれを耕作していた小作人をつき合わせて買受人ごとに集計した。農地委員会では買受人の職業・農業経営・買受けによる自作農化する面積の割合・交換買受けなどについて検討し審査して決定した。作られた売渡し計画は農地委員会の承認を経て、県知事の売渡し通知書の交付によって実際の売渡しとなった。村農地委員会では、その令書によって登記の申請事務を行なって所有権の移転が完了したのである。南筑輪村における売渡し計画原案の作成は三月中旬、審議および売渡しの承認を四月中、代金の払い込みまたは年賦償還契約は七月八月中、同時に通知書を発行し、一〇月末までには登記済みにしたという考えであったが、実際は大幅に遅れた。

(2) 売渡し農地の代価

農地の売渡し価格は、地主からの買取価格と同一であった。そして、買受申込書にその支払方法を一時払いにするか年賦償還とするかを希望として記入して提出することになっていた。一反歩の田が南筑輪村の平均が五一四円五四銭、畑の平均が一八六円八二銭で、郡平均よりも田で六四四円九六銭、畑で六二四円九銭安くなっている。想像もできないような安値であった。前に述べた買受け申込書一枚が五〇銭であるから、それと田の一角の値段が釣り合うのである。田一反歩を米五升もあれば買え、畑になるとその米五升で二反五畝歩も買えたのである。

したがって、年賦償還による代金支払いをする者はほとんどなく、多くが一時払いであった。このような安値によって売渡しがなされたことは小作者にとっては大いなる福音であるから、解放を受けた者と受けないものの利害は相反しており、所有農地の差はかえって大きくなった面もある。

(3) 売渡し面積

昭和二三年三月一日の南筑輪村農地委員会から村民への通知によると、当日現在で買収はその九割九分が終わって農地委員会の承認待ちという状態であったようである。

表7-18および表7-19を比べてみると、昭和二三年と二六年では面積の把握に相当な開きがあるが、農地改革が進むにしたがって解放すべき面積が明らかに増えてきたり、ごく零細な解放地主の解放すべき農地などが明らかになくなったためであると思われる。いずれにしても南筑輪村では自作地と小作地が相半ばしていたものが、総面積の八割五分が自作地になったということである。表7-18の農地改革後の小作地一八五町歩は、地主の貸付け保有限度の七反歩以内の土地および売渡しできない農地である。

南筑輪村における売渡し面積は、田が三〇七町歩、畑が一八五・二町歩、牧草地一一・六町歩、宅地二万四九〇坪であった。これにより、一人平均三反八畝歩の売渡しをうけ、その対価は平均で約一四九〇円である。

解放農地を最も多く買受けた人は一町歩の余であるが、それは戦時中も幸いなことに働き手が戦争にも軍需工場の徴用にもいかずいた家である。しかし、そういう家はごくすくなく買受け五反歩未満の家がほとんどであった。上伊那郡の平均が一人一〇〇〇円（當時は農一貫匁三・七五匁）約一〇〇〇円であった）の金で農地二反三畝歩の売

表 7-15 南箕輪における自小作

(昭和23.3.1)

摘 要	自 小 作 地	自 作 地	小 作 地	合 計	小作地の割合
統計センサス農地源による自小作地別	472町歩	406町歩	878町歩	46.2%	
買 取 済 み 面 積	3	315	318		
農地改革後の自小作地別	723	185	908	20.4	

表 7-19 売渡計画審議議書

(昭和26年)

農 地 概 況	
イ. 耕地面積	1026町 6反 4畝 12歩
ロ. 農家戸数	1,149戸
ハ. 1戸当耕作面積	8反 9畝 12歩
ニ. 自作地総面積	518町 9反 8畝 21歩
ホ. 解放予定面積	434町 2反 3畝 01歩
ヘ. 解放後における自作地面積の総面積に対する割合	8割 5分
ト. 地主保有面積	7反歩
チ. 自作経営面積	2町 3反歩

渡しを受けているので、南箕輪村はそれよりも非常に多くの売渡しを受けたことになる。また、売渡しを受けた農家を経営規模別にみると、耕作反別三反未満の農家は平均一反四畝ほどの土地を買い、一町歩以上の耕作農家は平均四反四畝歩以上の買受けとなっている。経営規模が大きいほどたくさん売渡しを受けている。働き手がその時ちようどあったということにほかならない。

(4) 南箕輪村における売渡し

南箕輪村における売渡しは昭和二十二年一〇月二日から始められた。農地売渡し計画第一号である。二六人の対象者への売渡しであった。一号は田が二四反九畝二歩、畑が一五反八畝一五歩であった。それが第二号(昭和二三・一二・二)になると、田が五五町九反六畝九歩畑が一町五反一畝一八歩であって、売渡しの対象も六九八人の多きに達している。第四号では財産税物納農地の売渡し、第六号は大芝原の村有地や各区有農地共有地の売渡し、第七号で伊那町・西箕輪村の小作人への売渡しなどそれぞれ特徴的な売渡しが行なわれている。在村地主買取地の売渡しはその後行なわれ、第一六号(昭和二四・七・二)ころには大よその売渡し完了している。しかし、その後もすこしずつの売渡しが続き、第二六号(昭和二六・一一・一)農地委員会から農業委員会と改称されながら、第三一号(昭和二七・九・二)まで続いている。未墾地の買取と売渡し、開拓も大芝原・南原・中野原・北原で行われているが第二節の二、入植による開拓の記述を参照されたい。

三 南箕輪村の農地改革の結果とその省察

1 農家および農地事情

村の総面積は表7-20で明らかなように、四一三町歩で耕地面積は八九九町歩である。一戸当たりの耕作面積は八反六畝で、全戸がほとんど農家に該当し米作を主体とする単作農村である。

表 7-20 種別面積および業種別人口等

(昭和27.10.20)

種 別	反 別	内 訳	種 別	摘 要
村の総面積	4,139 ^反 10		一戸当たりの耕作面積	8反6畝
耕地面積	899.1		総戸数	1,130 ^戸
田		525.8	農家戸数	1,043
一毛作		323.7	専業農家	548
二毛作		202.1	兼業農家	495
畑		373.3	商工業戸数	67
普通畑		254.6	その他の戸数	20
果樹園地		18.2		
その他の		100.5	総人口	6,228 ^人
山林	2,720.0		農家人口	5,810
公有		2,402.0	商工業人口	323
私有		318.0	その他の人口	95
原野	366.0		生産物	
宅地	35.7		米	11,990 ^石
雑種地	118.2		麦	1,014 ^石
			蕎麥	11,978 ^石

表 7-21 農地および農家の状況

(昭和27.10.20)

	農地改革前	農地改革後	増 減 (△)
自作地	4,607 ^反	9,515 ^反	4,908 ^反
小作地	5,589	691	△4,908
内訳			
在村保有小作地	3,382	691	△2,691
不在地主小作地	1,206	0	△1,206
法人団体小作地	1,011	0	△1,011
自作率	45%	93%	
自作農	526 ^戸	663 ^戸	137 ^戸
小作農	306	295	△ 11
小作農	53	55	2
小作農	95	30	△ 65
計	980	1,043	63
在村地主	679 ^人	250 ^人	△ 429 ^人
不在地主	264	0	△ 264
法人団体	117	0	△ 117

農地改革前は表7-21の示すとおり自作地は四五%であったが、約四九〇町歩にわたる小作地解放の結果、自作率は一躍して九三%となった。自作農も一三七戸増え、小作農は六五戸減って三〇戸となった。表7-21によつて農地改革による成果が明らかにされる。

なお、表7-20、表7-21の耕地面積に差があり、表7-21の農家戸数に改革前後に差がある。これは、村有林をはじめ区有林や個人有林の未算地買収が行われて、村内四か所の開拓組合の設立と同時に、入植増反者の手によつて新開畑がなされたためである。

2 農地等の買収および売渡し状況

農地や採草放牧地・宅地の買収および売渡しの

第3節 農業経営の変革

表 7-22 農地等買収状況

(昭和27.10.20)

区分種類		農 地			採草放牧地	宅 地	建 物	未 墾 地 そ の 他
地主		田	畑	計				
在 村 地 主	面積	1,762 ^反	844 ^反	2,606 ^反	36 ^反	21,647 ^坪	340 ^坪	反 坪
	対価	933,612 ^円	193,813 ^円	1,127,425 ^円	17,143 ^円	158,123 ^円	48,947 ^円	
	人員	473 ^人	206 ^人	679 ^人	5 ^人	130 ^人	9 ^人	
不 在 地 主	面積	632	574	1,206	3	1,740	38	
	対価	315,889	71,342	387,231	458	9,880	4,100	
	人員	183	81	264	2	10	1	
法 人 団 体	面積	611	400	1,011	75	1,303		
	対価	234,144	74,490	308,634	727	8,747		
	人員	78	39	117	1	10		
財 産 税 物 納	面積	75	10	85				
	対価	51,140	1,868	53,008				
	人員	1	1	2				
合 計	面積	3,080	1,828	4,908	114	24,690	387	
	対価	1,584,785	341,513	1,926,298	18,328	176,750	53,047	
	人員	735	327	1,062	8	150	10	

表 7-23 農地等売渡状況

(昭和27.10.20)

種 別		面 積	筆 数	売渡人員数	対 価	反当対価	一人平均 売渡面積
売渡済 農地等	田	3,070 ^反	4,026	1,903	1,589,401 ^円	519 ^円	
	畑	1,852	2,042	1,317	346,483	186	3反80
	計	4,922	6,068	3,220	1,935,884	392	(売渡実人員 1296人)
	採草放牧地	116 ^反	93	51	18,891	163	2反28
	宅 地	24,690 ^坪	287	234	176,750	7 ^坪	
	建 物	378 ^坪	12	12	53,074	140	
国有農地	農 地	11 ^反	13				
	採草放牧地	2	2				

表 7-24 経営面積別売渡状況

(昭和27.10.30)

	売渡農地面積	耕作3反未満	3反～5反	5～10	10～20	20～30	30～50
面 積	4,922 ^反	235 ^反	673 ^反	1,802	1,960	239	23
%	100	4.8	13.7	36.6	39.6	4.8	0.5
戸 数	1,295 ^戸	164 ^戸	282 ^戸	414	383	47	5
%	100	12.7	21.8	32.0	29.6	3.5	0.4

表 7-25 売渡の機会均等のために行なった交換分合

(昭和27.10.2)

	関係地主数	関係耕作作者数	国の取得したもの				地主の取得したもの			
			面 積				面 積			
			田	筆	畑	筆	田	筆	畑	筆
自作法第23条による所有権交換	15	15	25 ^反	30	—	—	25 ^反	30	—	—
自作法第25条による耕作権交換	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

状況は表7-22・表7-23・表7-24・表7-25に示すとおりである。集計が年をおうごとに異なっており、解放農地の面積は多くなっているが、昭和二十七年は農地改革の終点に近いので、確定的な数字であらう。

農地の買収面積を上伊那郡下の各町村別にみると、南箕輪村は、田では赤穂町の五三三町歩、飯島村の三六八町歩に続いて三番目であり、畑では中箕輪町、赤穂町、西箕輪村に続いて四番目である。郡的にみても非常に多くの農地の買収売渡しが行なわれたことがわかる。

また、表7-24の経営面積別売渡状況を郡全体と比べると、郡では五反～一町歩が最も多く四二・八％、次に三反～五反が二二・六％であるのに、南箕輪村では一町～二町歩経営農家が最も多く解放農地を売り渡しているのである。南箕輪村が他町村に比較して農業経営規模が大きかったことが明らかである。

3 農地改革の省察

戦後に行なわれた農地改革は、既に述べてきたような幾多の問題をはらみながらも、敗戦直後ということと、連合国の占領下という特殊情勢の下で進行され、大きな混乱もなく終了した。平時においては、このような改革は流血なくしては実現不可能な大改革で、その目標とするところはほぼ達成されたものと考えられる。

農地改革は、連合国による日本の民主化政策のうち、財閥解体などと共に経済の民主化の重要な項目になっていたものであって、農業において収穫高の五〇％という高率の現物小作料を收取し、地主側の恣意的傾向の強い口頭による小作契約という不安定な小作人の耕作権は、地主が小作人の生殺与奪の権を握っているといわれたものである。この日本の地主制度は農村の民主化をはばむ最大の要素と考えられており、農地改革はその廃絶が主目標であったが、その目標は達せられた

第3節 農業経営の変革

といえよう。

この点については、既に戦時中食糧の確保増産という至上命令を達成するため、耕作農民に有利になるよう農政が進められていたが、農地改革はこの方向を一層徹底したということもいえるのであって、なお在村地主に対し一町歩（当地では七反歩）の小作地の保有が認められてはいるが、改革前全耕地の五五％が小作地であったのが七％に減少し、その小作地は新たに公布された農地法によって特作権が安定し、小作料は自作地にかかる固定資産税やその他の税に比べて、余り差がない程度（一反歩七五円）に低く押さえられることになったのである。こうして、地主制は農地に関する限りほとんど意味を持たなくなったのである。

次に、食糧の増産確保という面でも農地改革は功を奏したということができる。当時食糧の不足は絶対的であってその増産は至上命令であったが、生産資材である肥料、農機具、農薬等の供給は不足し勝ちで、その確保による増産は望み薄であった。頼るのは農民の生産意欲のみであったが、多くの小作農が自作農となり得たようになれば大きく、収穫物の全部が自分の収入となることと、農産物が比較的高値に売れるという事情も手伝って農民の生産意欲は高まった。山野の野草を刈り集めて肥料とし、あるいは排水や客土をして土性を改良するなど、その成果が自分の財産である田や畑の価値の増加となること、増産になることであるから、骨身惜しまず働くことになったのである。こうして、稲作についてみると、昭和三六年ころまで（昭和二八年の冷害の年を除き）技術の発展普及を促しつつ、総生産量、反当たり生産量とも急速な伸びを示したのである。

以上のように、農村の民主化は進められ、農業の生産力は高められたが、農地改革によって作り出された農家は、依然として明治以来

表 7-26 農地改革前後の経営規模別農家戸数の変化（南箕輪村）

経営規模		3反未満	3～5反	5～10反	1～1.5町	1.5～2町	2～3町	3～5町	合 計
年 度									
昭 22	実 数	156	171	368	191	64	28	2	980戸
(8. 1)	%	15.9	17.4	37.6	19.5	6.5	2.9	0.2	100%
昭 25	実 数	117	155	452	236	70	18		1,049戸
	%	11.1	14.7	43.1	22.5	6.67	1.7		100%
昭 35	実 数	100	147	354	249	182	36		1,068戸
	%	9.4	13.8	33.1	23.3	17.0	3.4		100%

表 7-27 農地改革前後の専・兼業別農家戸数（南箕輪村）

農家別		兼業農家		合 計
年 度	専業農家	第 一 種	第 二 種	
昭 22	360	514	106	980
" 25	555	339	155	1,049
" 30	648	229	184	1,061
" 35	354	423	291	1,068

貫かれて来た農本主義に基づく家族的小農経営であった。表7-26にみるように、五反未満の零細経営は減少し、五反以上、一町五反未満の農家が増加し、二町以上の農家数は減少した。一般的にみて経営規模が平均化したのが、その規模は小さく過小農である。そして、農地の保有限度が当地では二町三反歩と限られたため、それ以上の規模をもつ農家は姿を消してしまったのである。

かつて自作小農経営が政治的安定勢力として、また、安い労働力や強くて忍耐強い兵士の供給源と考えて、たえず没落しようとする農民を救済して、安定勢力として保つため自作農創設維持政策がとられてきたのであるが、この農本主義的考え方は、農地改革においても貫かれていたようである。特に、二町三反以上の農地の保有が認められなかったことは、過小農を脱して近代的企业的経営へ発展しようとする農民の芽を摘みとり、他の多くの産業が資本主義的企业として発展する社会において、農業のみが家族的過小農経営に押しとどめられたのである。

この五反一町五反という規模の経営では、大部分の農家が農業だけでは生活を維持することができないのであって、特に他産業の経済的發展によってそのことが明瞭になって来た。昭和三〇年ころまでの食糧難の時代において、このような規模でもむしろ専業農家の増加となって表われている(表7-27)が、その後急速な兼業農家の増加を示すようになり、健全なる自作小農の維持という農業政策は根本からつき崩され、農地改革およびそれに続く農地法の考え方は検討を迫られ、すでに、昭和三六年の農業基本法にその新たな方向が打ち出されたのである。

二 入植による開拓

(一) 戦後における入植開拓の概要

昭和二〇年といえど、日本は太平洋戦争が無条件降伏という有史以来の結末を迎えた年であった。長い戦争で都市は戦災に焼かれ、田畑はやせており、一般生産物資も食糧も極度に欠乏していた。狭い国土には、復員軍人、海外からの引揚者、軍需工場や戦災工場等の失業者等で満ちあふれ、人々はその日その日の糧を得るのに精一杯であるばかりか、社会不安はしだいにつのつていった。

昭和二〇年十一月、政府は敗戦によって生じた多数の生業と住宅を失った人々に安住の地を与え、食糧不足の解消と自給体制の強化を目指して、緊急開拓事業実施要項を策定した。これは、およそ一五五万町歩の開墾、一〇万町歩の干拓、二二〇万町歩の土地改良を年次計画で完成し、一〇〇万戸(内地八〇万戸)を入植増産させる。増産は自作農創設を目標に集団入植させるという大規模な計画であった。

これらの事業の推進の根拠は、昭和一三年に公布された農地調整法であり、これは戦時における食糧増産を図るため未墾地解放の道を開き、また、昭和一六年には農地開発法を公布し、一八年には食糧増産対策を定めて農地の開発を進めた。これらに基づいて県は昭和二十一年に開拓増産隊を組織し、そのうちの二隊が本村の大芝原や、南原の一部を開墾しており、また農兵隊が三本木原、上ヶ溝原、北原等の山林の伐採開墾を進めた事実があった。

当時村内には、北原・大芝原・中野原など広大な山林原野があり、しかも、それらは水利面を除き開墾用地としては良い立地条件にあったから、当然入植開拓の適地として知事指定の対象となった。それは、昭和二十一年正月のことであった。また、村の二、三男等の青年た

第3節 農業経営の変革

表7-20 開拓関係人権開拓の状況

地区	開拓関係の姿	事業主体	入植者	入植年次	入植地面積	開拓組織の移行	入植地の売却期日	増反・存反・状況
北原	村有 区有 私有 山林	北原 開拓団	自由業者 外地引揚者	昭和二年 一〇戸	一三町歩 一戸当分配面積 七・一〇反	昭二一 北原開拓団	昭二九・一	八六戸 一戸当たり 一・五反
大芝	村有 区有 私有 山林 野	南筑輪 農業会	村内出身子弟 満蒙開拓引揚者 果開拓増産隊	昭和二年 二九戸	四八・六町歩 一戸当分配面積 一町六反七畝 付帯地 七町歩	昭二二 大芝開拓増産組合 昭二三 大芝開拓農事実行組合 昭二四 大芝開拓農業協同組合	昭二三・七 一・二五・七	二三七戸 一戸当たり 一・一反
南原	村有 区有 私有 山林 野	果實農輪 事業所	地元況尻部落子弟 岡谷説開入植者 果開拓増産隊	昭和二年 四〇戸	六四・八町歩 一戸当分配面積 一町七反歩 付帯地 八町歩	昭二二 南原開拓増産組合 昭二三 南原開拓農事実行組合 昭二四 南原開拓農業協同組合	昭二二・七 一・二八・一一	三三〇七戸 一戸当たり 一・五反
西原	区有 私有	果實農輪 事業所	上戸・中衆・与地 出身者子弟	昭和二年 二三戸	四五・〇町歩 一戸当分配面積 一町九反歩 付帯地 六町三反歩	昭二二 西原開拓増産組合 昭二三 西原開拓農事実行組合 昭二四 西原開拓農業協同組合	昭二二・七 一・二八・一一	一・五反

ちの間からも大芝原などの開拓の気運が生まれて来た。さらに、昭和二〇年一二月には農地調整法が改正され第一次農地改革が始められており、先の林野に入植開拓が行なわれることになり、それは順調に進むかに見えた。

しかし、実際に入植を希望して開墾に従事しようとしてもそこには大きな障害があった。すなわち土地所有者の解放拒否、異議の申し立

て、入植者に対する反感等であった。北原・大芝原・中野原等の林野は村有・区有・私有等の種々の所有形態を持ち、その筆数も三〇〇余に及び、その所有者との解放交渉は地方事務所係官を交え入植者との間で行なわれたが、その解決は容易ではなかった。

それは、戦時中ならいざしらず、幾分なり民主的風潮の生まれたこの時期には、未墾の私有地の解放の法的根拠がうすかったことによる

ものと考えられる。

ところが、昭和二十一年一〇月、「自作農創設特別措置法」と「農地調整法（改正案）」が同時に成立し、第二次農地改革が始められた。この特別措置法には「政府は自作農を創設し、又は、土地の農業上の利用を増進するため必要があるときは、農地及び牧野以外の土地で、農地を開発しようとするものを買取することができる」とあり、この法的根拠に基づいて、農地改革と関連させて、入植開拓は急速に進むこととなった。

長野県は、昭和二十二年に長野県開拓協会を設立し、さらに、二十四年四月県開拓委員会を構成した。この中に適地調査部という部会が設けられ、この適地調査部によって開拓適地が調査選定され、地元土地所有者との間の解放の折衝が行なわれたのである。解放された用地は政府が買取し、入植者や他の農民に売り渡すという方法で用地の解放を進め、集団入植による開拓が行なわれたのである。

こうして、北原・太芝原・中野原と上ヶ溝原に昭和二十一年から集団入植が行なわれ、その入植戸数は当初よりはかなり減少しているが現在一〇〇戸を越えている。その入植開拓の状況を一覽表にしたものが表7-28である。

このように、各地に入植開拓が進められたが、開拓そのものが非常に困難な仕事であったばかりでなく、自然的条件も必ずしも恵まれたものではなく厳しいものであった。これら開拓地に共通の困難点は

- 1 水を確保するのが容易ではなかったこと
- 2 土地が強酸性であり、気象条件も厳しいこと
- 3 交通が極めて不便であったこと

であって、入植開拓者はこれらの問題と長い年月の間、血みどろの闘いをしなければならなかったのである。その間何人かの脱走者が生ま

れているが、現在、新しい農業地帯として発展している姿を見ると、感慨無量なものがある。

(二) 南原における入植開拓

1 入植者と開拓に至るまで

(1) 地元帰農組合

昭和二十一年の早春、中野原の一角で六名の手による開墾の作業が行なわれていた。これは戦後の上伊那では最も早い開墾であった。他所においては土地解放の話合いがなかなか進まず、計画はあっても実際には着手することができなかった所が多かった。この六名の入植者は地元沢尻部落の西天竜幹線付近に居住する農家の子弟で、戦時中都会から疎開していた者、徴用されていた者が終戦で実家へ帰った者、満州義勇隊より帰還した者らであった。原義重郎はこれらの人々の処遇を考え、中野原の開拓を計画した。しかし、ここは全て区有・法人有・



図7-24 南原開拓地の現況（一画）（昭和29秋）

私有の土地でその解放は至難なことであった。そこで、まず親交の厚い当時の北殿区長有賀一衛を説得し、中野原の北殿区有林の解放に成功して開拓の端緒を得、さきの六名により開墾小屋を建て、昭和二十一年の春早々に入植を行なうことができたのである。

(2) 同谷帰農組合

終戦直後の昭和二十〇年の秋、当時の岡谷市長林七六は、かつて同谷市で送り出し

た満洲開拓同谷郷の引揚者の受け入れと、市内疎開者の処置対策として国内開墾を計画し、その候補地として上伊那に目をつけ時の西箕輪村長小坂昇と話し合いの末、西箕輪村に依頼することになり、同年二月には一八戸の入植希望者を送り出したのである。

西箕輪村長の予定していた土地は、中野原の自分の土地を含めた場所であり、地籍は南箕輪に所属していた。なお、この地区は私有地が多く、所有者は西箕輪村・南箕輪村・伊那町等にひろがっており、その解放は容易ではなかった。殊に西箕輪村においては地元（中条・上戸・与地）の入植希望者、増反希望者等多数に上り、他所者の入植には風当たりも強く、厄介視するに至り、加うるに南箕輪村の地籍ということで、岡谷からの入植者受け入れはむずかしかった。

すでに現地に到着した一八戸の人々は厳寒の冬を迎え、大萱井筋の傍に共同宿舎を建て、ひたすら入植地の解放を期待し、年の暮には留守居の二、三名を宿舎に残してこの拠点を確保することに努めた。岡谷市としてはこの対策に苦慮し林市長は南箕輪村に働きかけ、遂に受け入れの諒解を得、現在の三組と五組の地に入植と決定したのである。これについては、すでに現地にあって二、三男の入植の世話をし、指導に当たっていた原義重郎の配慮が大きかった。

(3) 開拓増産隊

長野県開拓増産隊上伊那支隊は昭和二年四月結成され、北安曇郡松川村増産隊本部において一か月の訓練を受け、上伊那郡における開拓に従事することになった。これは、時の長野県知事物部篤郎が国内開拓の重要なことを思い、各郡に隊員を募集し一三支隊を編成し、松川に増産隊本部を置き必要な技能訓練を施し、入植と食糧増産の使命遂行を期したものである。

上伊那においては、四〇余名の応募者があり、支隊長に入戸勝人が

任命され、副支隊長一、指導員二名の幹部四名が決定された。松川における一か月の訓練は無事終了したが、入植地の設定は前述のように障害が多く容易に決まらなかった。当時の地方事務所耕地課長大久保清利は大変心配し、献身的に説得に努めたが入植地は決定に至らず、このため、支隊長としては四〇余名の隊員を抱え、その処遇に困却、責任を感じて辞任するに至った。やむなく、全隊員を一時実家に帰して待機させ、増産隊事務所は地方事務所へ置き、幹部隊員のみ出勤して、耕地課や中央会の係員と協力して入植地の獲得に努めた。その結果、一〇月に至って、新山馬広（美馬村の旧地）に四名、南箕輪村大芝原に九名、同中野原に八名、計二一名が入植の決定を見た。

中野原に関しては原義重郎の斡旋により村当局の諒解を得、当地区に入植することになったが、土地の開墾に關しては地主の許可を得なければならず、その交渉は容易ではなかった。耕地課・農地課の係官と共に数回に渡り訪問懇請をして一月に至り、ようやく上戸の鈴木正弥の所有地四反歩余の解放を受け、開墾作業の導入れをすることができた。四月以来実に七か月を要し、この間の退隊者は二〇余名の半数に及んだ。

(4) 西原開墾組合

西原地区は中野原の西端に位置し、出身者はほとんど上戸・中条・与地の三部落の子弟及び縁故者であり、土地の所有者は同部落に属する人々が主であった。

昭和二〇年の秋、岡谷綿納組合の人々が時の西箕輪村長小坂昇の斡旋により、戦時中、農兵隊によって簡易開墾を実施した約二二町歩があり、これに麦の作付け等を行ない入植意欲にあったのに刺激され、地元部落としても増反を希望する者、入植を希望する者が多く、これを優先するための運動を起こし、急速に開墾意欲を高め、地元出身者に

よる開拓の実行に入ったのが昭和二十一年である。(岡谷からの婦農組合の人々は後に南原開拓団と合流した)

入植者のうち与地出身者九戸は権兵衛街道沿いに入植、中条出身者七戸と上戸出身者の七戸は中央中条道路沿いと北側に入植した。西筑輪村において開拓計画を模ったのは大萱・上ヶ瀬原・中野原の三地区で、土地解放に当たっては地主の猛反対、異議の申し立て等非常に困難な状態であり、さらに、増反を希望する者が多数にのぼり、土地の配分には一方ならぬ苦心をした。ことに、増反には地元有力者の発言が強く、入植者への配分面積が一町歩を割る状態で、後数次にわたる買取工作が行なわれたのである。

こうして、中野原地区は一戸当たり平均一町九反余を確保できたのは幸いであったが、これは、増反者が割当て面積を開墾し切れず入植者に回したのも一因となっている。このことは、当時の開墾作業がいかに困難なものであったかを物語っている。

2 その後の開拓の進捗

(1) 南原地区

南原(中野原地区)においては、以上の地元入植者、岡谷より婦農組合入植者、開拓増産隊入植者の三者が合体し、昭和二二年初頭に南原開拓増産組合を結成し、原義重郎を初代組合長に推した。この年、「筑輪開拓事業所」が設立され、その事務所は上伊那地方事務所内に置かれ、西原(上ヶ瀬原)地区と共に県直営事業として開拓事業が進められた。すなわち、開拓地の測量、土地解放交渉、国による土地買取と売渡、入植者の営農指導、物資の配給等が行なわれ、ようやく開拓は軌道に乗った。

翌二三年四月、南原開拓農事実行組合と改められ、更に、二四年の農業協同組合法の施行により、正規の法人として南原開拓農業協同組

合が登記され、開拓事業の遂行に努力をした。

こうして、入植以来二十七年を経て、営農、建設工事等順調に進展を見、昭和四九年、次のような開拓農業協同組合の解散宣言をすることができた。

解散宣言

昭和二十一年入植以来、開拓精神に則り、新しい村造りに邁進した我等は、茲に南原開拓農業協同組合を積極的に解散する。

昭和四十九年四月二十一日

南原開拓農業協同組合

組合員代表 立石 威

(殺場文書)

こうして、昭和四九年四月末から開拓行政を脱して一般農家に移行、普通の農家として一人前の扱いを受けるようになったのである。



図7-25 南原開拓記念碑「拓魂」(昭和47、建立)
「拓魂」は開拓精神を現わし、単に開拓事業を記念するのみでなく、この魂を永く子孫に伝え、村造りの原点としたい志願をこめたものである。

(2) 西原地区

昭和二二年に開拓農事実行組合が結成された時は西箕輪村に所属しており、二三年農業協同組合法の公布により、西箕輪開拓農業協同組合となり、地籍は南箕輪村で農協は西箕輪農協の組合員という変則的な立場におかれ、多くの不便があった。しかし、開拓事業は原直営事業として進められ順調に行なわれた。

開拓が進捗するにつれて、南箕輪の南原開拓団との境界を設定する必要に迫られ、地方事務所耕地課長の斡旋により、両組合の代表により現地調査を行ない、昭和二三年最後の協定に達した。立会人は南箕輪村長清水国一、西箕輪村長原賢一、開拓者代表原儀重郎・有賀正男外数名であった。これにより開拓組合の境界が確立され、両者互いに開拓に専念し、共同開墾も実施して大いに進捗を見た。(この境界は開拓組の界であり南原区としての区制には関係がない)

前記のように西原地区開拓組合員の出身はほとんど西箕輪村であり、行政面においては強く西箕輪村住民たることを望んで地籍の変更を求め、再三運動が行なわれた。昭和二七年一〇月には入植者の連判



図7-26 西原地区開拓記念碑「拓魂」
(昭和53.12.建立)

になる「西箕輪村住民希望申請書」を作成し、両村長を通じて議会に提出しその承認を求めた。その後も南箕輪村役場において再三陳情活動が行なわれたが議会の承認は得られなかった。

現在、自治法の定めるところにより、南原区制施行により同区に編入されている。開拓者同士として相通ずるところがあり互いに協力して区の発展につとめている。

3 開拓者の苦勞

(1) 南原開拓者と水

南原地域は、昔は中野原と称する入会地の林野で、一面の原っぱであった。標高七五〇～八〇〇mの扇状地の中間に位置し、東に傾斜しているがほぼ平坦である。この地形からすれば理想的な農耕地であるが、古くから戦前まで放置され、わずかな赤松からまつ等の林と広い原野とであり、耕地としては全く利用されていなかった。

これは土地がやせた火山灰土で、作物がよくできなかったこともあるが、何よりも第一に水のないことが原因であった。流水はもちろん、飲用に供する水は皆無で、「水のない所に人は住めない」ということばのとおりであった。戦後の諸事情から、この人の住めないという場所に入植しなければならなかったのである。

入植のその日から困ったのは水であった。飲む水がないのである。約二㎞離れたところに大萱井筋(赤羽井筋)が通っていた。この水を汲んで露命をつないでいた。降雨の際には、できるだけ雨水を溜めておいて利用した。大萱井筋の水は、小沢川から引水した水で、水利権の複雑な水であった。この水を正式に分与してもらうことは並大抵のことではなかったのであるが、その努力が重ねられていた。

しかしながら衛生上からみても、水汲みの重労働からみても、もっと近くに水を求めたかった。近くの水といえば、大萱井筋の水を分与

してもらい南原地区まで引水することと、地下水を汲む井戸に求めるはかなかった。これはいづれも難事業であった。以下、水を求めた努力の跡を振り返ってみることにする。

ア 赤岩井堰（大萱井堰）の水

約2km離れた所に、大萱井筋と称する水田灌溉用の水路が通っていた。この水路は明治初年まで水利の乏しさに苦しんでいた大萱が、北沢川赤岩地籍からようやくして引水したいわゆる赤岩井堰である。明治御一新というような大変革期でなければ、また筑摩県本山盛徳というような強い役人がいなければ、このような水利権のない水を新しくひくことはできなかった。

この乏しいしかも貴重な水を分けてもらうことは、至難のことであつた。しかし、戦後しかも現に入植してしまっている人々に、生活用水を分けなさいということではできない。

国においても開拓の用水の重要さを認め、畑地灌漑の名目で水源のあるところには国庫補助により通水の道が開かれた。

当地区は先に岡谷県農組が入植を計画した昭和二十一年に、大萱水利組合から大萱井筋の水を分譲するという困難な約定を成立させることができた。敗戦後という非常な時代であつたからこそできた約定であつた。この水は単に大萱区とだけの話ではなく、北沢川（小沢川）の水利権をもつ五部藩邸即ち小沢区、荒井区、坂下区、山寺区、西町区の了解を得なければならなかった。その話し合いは耕地課の係官を交え、数次にわたって開かれて、ようやくしてできあがつた。画期的なものであつた。

次の「水利権に関する約定書」がそれである。これは正式には「赤岩井堰一部変更約定書」と表記され、入植者一八戸の飲料水として、大萱井堰中の四角林で、径三寸土管を六尺水單にすえて、その水を引

くことを認めるというのである。そのため上流からの取水を増すために、従来三尺六寸であつた大萱の取水橋口を四尺に拡張するというものであつた。

昭和二十一年三月二十六日、関係六区の総代の印と地方事務所長・伊那町長・西筑輪村長・耕地課長の名が連ねられている。

水利権に関する約定書

昭和二十一年三月二十六日

伊那町

西筑輪村

大萱区

赤岩井堰

一部変更

約定書

分水割改造に付き一部変更約定

昨二十年秋期大洪水にて赤岩井堰一部を壊し根底より欠損したるため、明治十六年締結の約定第貳條の條款に基づき両者立ち合ひ協議の上、従来の木造橋にては、度々流失又腐朽等のことあるに鑑み、之を石造の橋に改め堰堤の石積に組み込み堅牢のものとなし、新西筑輪村と地籍籍字係四角林の入植者十八戸の飲料水として、大萱井筋中同地点に径三寸土管の取入口六尺を水平に据えての引水を割譲するに、長野県庁上伊那出張所耕地課よりの請いにより上流よりの増水を限り同井筋の保全に付き考慮すること、右地点外に引水せぬことを条件として水割分度左の如く改む。

一、旧水割分水定度一丈八尺（分柱を除く）の内伊那町橋口一丈四尺四寸大萱井堰橋口三尺六寸

一、新水割分水定度一丈八尺（分柱六寸を除く）の内伊那町橋口一丈四尺大萱区橋口四尺

右の通り両者惣代協議の上約定す。之に要する費用は大萱の負担とす。但し、多額の費用を要する場合は伊那町にても上司に向ひ助成を仰ぐことに協力なす可し。此の条款の外全約定については寸毫も違ふも犯すものにあらす。

依って右一部変更約定に連署捺印候也。

昭和二十一年三月二十六日

上伊那郡伊那町

小沢区 惣代 印

山寺区 〃 〃 印

荒井区 〃 〃 印

西町区 〃 〃 印

坂下区 〃 〃 印

大宮区 〃 〃 印

給木新平 印

林八十司 印

小坂井 印

伊那町長 印

西筑輪村長 印

上伊那地方事務所長 大久保清利 印

(伊那市役所文書)

この約定によって、水利権の問題は大筋の了解がえられ、続いて大
萱区との間に協定が結ばれた。「南原開拓地利用水に関する協定書」
がそれで、これには分水嶺の大萱分が従来三尺六寸であった所を四寸
広めて四尺となった。そして先には飲料水に使用すると限定されてい
たが、分与された水はいかように使ってもよろしいとなった。しか
し、その使用前に大萱井筋からの集水や隧道の工事をすることが条件
になっていた。

南原開拓地利用水に関する協定書

今般南筑輪村より南原開拓地灌漑用水を西筑輪村大萱水路西筑輪村与地
地籍(四角林)より申し受けたき希望申し込みが有ったに對し西筑輪村とし
ては左記事項充分了知の上ならば如何様に御利用相成るとも異存なきに付き
御希望に副ふ為協定いたします。

記

一、南筑輪村北沢地籍小沢川より大萱用水路取入口に於て分水嶺を四寸拡め

此の水を開拓者に分与す。但し二十一年の協定に依る。

一、大萱水路を地区に到達するまで共用させること。

一、建設工事集水隧道の費用は大萱水路を整備し使用するを条件とする事。

昭和二十六年十一月一日

西筑輪村長 塚 賢一 印

南筑輪村長 堀 善左衛門 〃

立合人 耕地課長 竹内 恒男 〃

〃 〃 〃 〃

(役場文書)

隧道をコンクリートで巻立てる工事は開拓者の責任において実施し
なければならぬ。これはきびしい条件であったが、幸いに国庫の助
成をうけ完成することができた。工事費は四〇〇余万円であった。隧
道には鋼板に「農地開発建設工事 長野県」とさざまれている。この
ようにして、開拓地区内に通水ができるようになった。

畑地灌漑施設として、昭和二七年に測量が実施され、昭和二八年
工された。石綿セメント管埋設延長二〇〇〇m、総工費八〇〇万円
で、昭和三十一年に完成した。



図 7-27 大萱用水より開拓地への畑地灌漑施設

この水は、図7-27のように四角林で分水され、権兵衛街道に沿って流下し、開拓地に入って二分され、一つはそのまま東進して伊那町（伊那市）中野原開拓地区をうるおし、一つは北進して中条上戸部落出身の人植地を通り、東に折れて南原開拓組合地区を東進して西天竜幹線に至る、全長二〇〇〇m余に及ぶものである。

この施設によって、水の問題が解決した。

一応、完成したこの施設であり、西原や中野原では現在でも使用しているが、なお衛生上の見地から不備の点が多かった。大萱井筋は土型であったため降雨のたび水が濁り、伝染病の危険にさらされながら飲用しなければならなかった。

昭和四一年になって三〇〇余万円の県費補助をうけて用水管を更新し、濾過施設をして、ようやく安心して飲用できるようになった。開拓以来二〇年たつて、ようやくえられた安心であった。

なお、一つだけの濾過池ではまだ不十分であったので、昭和四七年には八六五万円をかけて「専用水道敷設工事」が施工されるようになって、始めて完璧した水道となった。

ここで水利用の問題は一応の解決をみたのであるが、しかしこれは開拓地が新しく水利権を獲得したのではない。開拓地に水は分与したが、赤岩井堰についての口出しをすることは、許さないと水利用の制限がついている。明治一六年の赤岩新堰約定書の第三条にもとづき、取入口水量の制限が、念をおされて確約されている。

「開拓地分水約定書」は次のようにものしいものであった。先にも述べたように、もともと水利権のない大萱区が、明治御一新という大転換期に、ようやくにしてみえた大萱井（赤岩堰）にも、水使用の制限がついていた。いま、新しく開拓地がわりこんできたのであるから、その制限が改めて確認されたのである。それは昭和二七

年三月六日のことで、連署者のもののしきからも、その念おしの強さがおしはかれる。

開拓地分水約定書

昭和二十一年三月二十六日締結の約定書に基づき大萱井筋より開拓地十八戸の飲料水として分与したる約定は今回申入れに依り中の原開拓地域に分与することを承認し更に左記條項を確約する。

記

一、赤岩分水木中大萱分の三尺六寸なるを四尺として即ち四寸を拡大したるは旧来の木造物を石造となすに付き種々の理由によれる条件にして開拓地の為のみの拡張に非らず従って赤岩堰に就て容喝を許さず

一、非常なる旱魃にて流末の用水に差し支え田地の旱魃ある場合は明治十六年三月二十日の赤岩新堰約定書第三条に基づき取入口水量の制限をなすことあり

右開録者一同合議の上約定連署捺印す。

昭和二十七年三月六日

坂下区民代表

荒井区 " "

小沢区 " "

西町区長

山寺区長

西筑輪開拓農業組合

尾崎 静直

西村 重雄

尾崎 才一

立石 威

古林 俊三

田村二左衛門

白沢 利行

小林 行造

三沢 定良 外三名

唐沢 清志 外四名

根津四郎左

柿木 次和 外四名

尾崎 静直

西村 重雄

尾崎 才一

立石 威

古林 俊三

田村二左衛門

白沢 利行

大置水利組合代表

本山 喜八外一〇名

立会人 耕地課長 竹内 恒男

伊那町長 熊谷友一郎

伊那町助役 田畑五郎司

(伊那市役所文書)

このようにして、この困難な赤岩井堰(大置井堰)の水は、条件づきではあるが分与されることになった。これは敗戦直後という生死をかけたのつびきならぬ時代と、関係者の努力、善意等や国庫の助成等々によって、ようやく成立した尊い賜物であった。

しかし、それにもかかわらず、時代と共に水の需用は増すばかりで、赤岩井堰の水だけでは絶対量が不足していた。そこで、この井堰の水と併行して求められて来た「井戸」について語らねばならない。

イ 井戸の水

大置の井堰の水は土型の水路で降雨の際はひどく濁った。この水を飲用することは衛生上からみても好ましくなく、もっと良質の水を、もっと近くの水をと願う心が一つになって、井戸を掘ることになった。

井戸を掘る計画をたてこれを実施しようとしたとき、果して水がでるかどうかがあやぶまれた。付近の古老の話では全然出ないという。なお、悪いことには、そのころやはり水に苦しんでいた大芝原開拓地(大芝区)で井戸を掘ったが失敗に終わったことであった。

しかし、ここに水が得られなければ、永住することを断念しなければならぬ。開拓の命運を賭けて、開拓増産隊(現在の南原四組)がこの冒険な作業にとりくんだ。昭和二年の春先のことである。従来の井戸の掘り方では鬼子に多くの人手がいった。開拓地で毎日開墾をすすめていかなければならぬとき、人手をとられることは致命的な痛

手であった。そこで労力の効率をよくするため、満州式の巻揚式を採用した。そのおかげで、作業は意外に捗っていった。

一か月余りを費して、深さ一五間掘ったところ、幸いにも地下水脈に掘りあたった。まことに天佑であった。立派に飲用できる水が、こんこんと湧いてでてきた。付近の人が出ないという水がでてきたのである。

思いがけない井戸掘りの成功によって、飲用水を確保することができたのは、開拓民を喜ばせ勇気を与えた。これに力を得て井戸利用の道が開かれ、共同井戸四か所ほかに個人井戸二か所で、一応の需要を満すことができた。

その後家畜の増加に伴い水の需要が多くなり、それにともなつて汲み上げの労力からも解放されたいし、火災等、有事の際の不安もあったので、さらに技術的に用水問題を解決しなければならなかった。

南原開拓組合では、この問題解決のため、「大型井戸」の掘削を計画した。独自の計画だったため全組合員が当番制で、昭和三四年一二月厳寒の候に昼夜兼行で作業に当たった。一か月余りを費して十数間を掘ったが、これは水量が少なく、残念ながら失敗に終わった。

その後も常に水の抜本的解決を求めてきた。昭和三八年国の補助事業として、地下水脈の電探を実施したところ、調査結果はうれしくも有望と認定された。そこで本格的なボーリングをすることになり、二か所二業者によって、地下一〇〇m余を掘削した。ついに、清冽な水を掘ることができた。総工費三〇〇余万円であった。

この豊富な地下水を水源として、昭和四二年に完全な水道施設ができ、近くで豊富な水を労力を費やさずして何不自由なく使えるようになった。入植以来、二〇有余年の歳月を費したのである。

ウ 水に苦勞した思い出

入植の日から困った水の問題は、先に述べたように、みごとに解決した。そして水が解決するとともに、南原のめざましい発展は、まことに目をみはるものがある。しかし、入植当初からの、水に苦勞した思い出は、後々まで語りついでいきたい。

共同浴場 井戸掘削に成功した後の話である。火山灰土の開墾作業は、一日の勤めを終わると身体が隅々までその灰土が滲入しこれを洗い落とすのはよいでない。不足する水を多く使うわけにはいかない。入浴水の節約のため共同浴場を設ける案がまとまった。井戸の傍に風呂場を建て、当番制で沸かし交互に入浴した。五衛門風呂の小さな風呂に二〇名余りの入浴で後に回った者はほとんど泥水と化し、湯に浸り、かえって汚れがひどくなるほどであったが、それでも気持ちがよいと喜んだものである。だから伊那町に所用で出かけても、開拓地から来た者は何となく汚れており一目でそれと判り、「あ、開拓が来た」といってからかわれたもので、殊に子供たちは伊那小学校に通学していたので馬鹿にされると悲しかった。

洗面器の水 朝起きて洗面をする水がもったいなくてただでは捨てられない。これで器具を洗う、洗濯をする。その他に何か洗わないともったいないのでこれを取っておく。この癖が抜けず今でも洗面した後、水を捨てるのを忍び、子供たちから後始末が悪いと小言を言われるが、身にしみた癖はなかなか治らない。

水汲みの苦勞 乳牛の飼育も段々と進み、一頭飼育より三頭五頭と多くなると、これに飲ませる水を汲むのが大仕事で一五間もある深井戸からの縄繰りは女手ではこたえる。一頭の牛に三杯五杯を要するので、全部に飲ますとへとへとに疲れ、その労働に耐えられず夫婦の争いに発展、あるいはこれがもとで別れ話まで持ち上がるといった例

もあった。今完備された水道の給をひねるとき、ふと往時を思っただけの感に耐えない。

火災 隣接する伊那市中野原開拓地の出来事であるが、子供の火遊びから昼火事が起きた。火はまたたく間に本屋に燃え移り全焼した。日中のことではあり、近くには多くの人が畑仕事をしていたので、直ちに馳せつけて消火に当たったのであるが、消火用具といえどスコップとジョレンぐらいのもので、初期消火に一杯のパケツの水さえあれば大事に至らなかったのにと悔やまれたのである。水の大切さ、貴さを身をもって知らされた一つの体験であった。

(2) やせた酸性土・霜害・悪路

開拓地一帯はいわゆる「黒ぼく」といわれ、酸度(四)四・五の強酸性土壌でほとんどの作物に不適であり、栽培をしても生産の上らぬ土地である。当時は物質不足でこの酸性を矯正する石灰も手に入らず、堆肥もなかった。やむなく毎朝食前作業として一里余の道程を牛馬糞を拾い集めて堆肥を作った。また、下肥を天秤でかつぎ上げて肥料とし、雑草をかき集めて投入し土地の肥培を図ったものである。

当初、付近の人からあのような土地では百姓はできぬ、一二年もすれば逃げ出すだろうと言われたほどの土地であった。事実、大豆を作っても三・五寸くらいしか伸びず、麦は四・五個くらい、甘藷は護国(品種名)を作ったのであるが肥大せずピンポン玉くらいのもので穫れず、わずかに陸稲が反当二・三俵くらい穫れただけである。

気象関係も悪く、標高七五〇・一八〇〇mの準高冷地のため、初霜は一〇月一〇日、晩霜は四月二二日ころ(二七日のことあり)で、この害を受け易く、作物の種類も自ら制限を受け、当時の主作物は大豆、そば、陸稲であった。入植後数年を経過して地味も肥え、野菜等換金作物を耕作し出荷できるようになってからも、しばしば凍霜害を受ける

常習地帯である。これが幸か不幸か、酪農経営へ向かわせる原因となったといえよう。

次に、交通・道路状態は最悪であった。道とは名ばかりで、上戸・中桑道・権兵衛街道等は幅員は五間と広くとってあっても、中央がくぼみ溜れた川という状態で、雨降りともなれば谷川のごとく、また、赤色の火山灰土のため粘り着き、滑り、人の足でやっと拾い歩きができるといふありきまで一切の車輛は途絶、自転車はかついで歩くという悪路であった。

この道の改修には、開墾作業のかたわら全員連続一か月の勤労奉仕を行ない、どうやら道路の形をなすようにしたものである。このつらい思いが、すべてはまず道からという合言葉になり、すべての作業は道を最優先とする気風を生み出し、今日では村一番の道路ができたのである。

(三) 大芝原における入植開拓

1 大芝原開拓の概要

昭和二〇年一月、政府が緊急開拓事業実施要領を決定し、それが具体的な施策となって実施に移されたところ、村内では大芝原開拓の気運が青年たちの間から、澎湃として湧きあがって来ていた。

この青年たちの動きのうちで、南殿の有志青年によって結成された大芝原開拓青年同盟の運動は、当時民主的先驅的農民団体として結成された南箕輪農民会（会長清水国入）の支援を受けながら次第にその輪を広げ、ついには、村青年会の全面的な協力を得ることになり、全村的な青年運動として盛り上がりつつあった。

しかし、当時の大芝原は天下の美林と誇り、村有林として村の台所を賄う大切な財産であったから、これを開墾して畑にするなどということは、村にとっては大変なことであったに違いない。村当局は当然

のように強い拒否反応を示した。したがってより強い運動を展開するため農民会が中心になって南箕輪村開拓組合を結成し、事務所を農民会（現在の伊那農協南箕輪支所）の一隅に置き、幹事が常勤して全村的開拓運動の推進にあたった。そのころの時代の火勢が手伝い、関係者の精力的な活動もあって遂に村有林開放の内諾を得て、先遣隊員の募集をしたところ八人の応募があったので、端午の節句を期して入植式を挙行入植を決定した。昭和二十一年五月五日のことである。

当初は共同開墾ということで営林署苗圃の倉庫を借り受け内部を改造して共同生活に入った。開墾第一丁を頼りの原始的な開墾で前途多難を思わせたが、二〇歳前後の血気盛んな若者たちのことだからそんなことは意に介しない。四天竜の幹線水路わきの松林の中にドラム罐の風呂を置いて野天風呂としやれこんだり、幹線水路に飛び込んで水



図7-28 入植当時の共同宿舎

泳をしたり、時には夕食後裸足で町へ映画を見にいったりして、共同生活は質素ではあったがなかなか楽しいものであった。八月には県の開拓増産隊一二人が入って来て共同宿舎は一段と賑やかになったが、食糧難の時代のこと故共同生活も食糧の調達には苦勞が多かった。続いて第二次本隊八人が年内には顔を揃えて、入植者はおおよそ予定の人員に達した。このあと共同宿舎での生活は村外出身者の



図7-29 入植当初共同生活における開墾日記と炊事日記

増産隊を中心に個人家屋完成まで続けられた。開墾当初はまったく海のものとも山のものとも先の見えない状態であったから、前途に見切りをつけて離脱する者も多く出たが、すぐに補充入植を希望する人もあって、最終的には二九戸で集落を形成した。当初の計画では村内二、三男対策として出発した事業であるが、村内出身者は九人に過ぎず、二〇人は村外出身者を受け入れる結果となった。村内出身者に脱落者が多かったことも併せて興味深い点である。

二一年九月に大芝原開拓組合を設立し、第一回の総会をひらいているが、翌二二年二月大芝原開拓組合と改称、同年七月大芝原開拓農事実行組合として法人化され、更に二三年一月には農協法の施行によって大芝原開拓農業協同組合となり、昭和四九年開拓行政が一般行政に移行されるにともなう組合が発展的解散をとげるまで入植者の団結のよりどころとなり、また事業推進の母体としての役目を果たした。

開拓用地は大芝原村有林を主に一部共有林、私有林をあわせて九六町七反歩余りが国に買収され、入植地、増反地に分けて配分された。入植者は仮配分によってそれぞれが開墾に取り組んだが、五〇・一六〇

年生の松の株を取り除くために、大葉拔根や機械拔根を導入したが、余り成果が上がらず取り止めとなった。したがって開墾は全部開墾銀一丁で仕上げられたもので、その苦勞は筆舌につくせぬものであった。二五年には正式に土地配分が行なわれて宅地を含めて一町八反歩の土地が各人に売り渡され、外に付帯地六町八反歩余りが共有地として売り渡したかったが、後にこの内の一部は国が買取する際の内約があったということで元地主に返却され、また一部は水利権の代償として大泉区に移譲された。土地が売り渡したくなったこともあって開墾作業も急速に進み三〇年の成功検査の段どりとなったのである。

開拓地の建設は、開墾を進めると共に水を引き道をつくり家を建てること、同時に進められなくてはならない。水を求めての長い年月に及ぶ苦闘の歴史は、特筆すべきものであった。道路の建設は水の確保が優先されて遅々たるものであったが、区画整理がされて道路用地は確保されていたので、春秋の砂利敷作業によってしだいに悪路は解消された。住宅の建設は意外に早く、昭和二二年の三月最初の戸が建ってから二四年には全戸が完成するというスピードであったが、これは村有林から立木二〇石ずつの特別払下げがあったことが、大きな助けとなつての結果であった。狭いながらも生活の場が完成したことによって单身者も次々と結婚し子供も生まれて、開拓地には活気が漲った。二四年の秋には電燈工事が完成し入植以来のランプ生活に別れを告げた。前途に光明を見たような明るさであった。二七年には開拓地の西端に隣接する村有林内に神社を創建し、大芝神社と定めた。其後現在地に移転し敷地五畝歩を正式に村から譲り受け、四九年には大工柴田宗太郎父子の手によって新社殿が造営された。例祭日を一月三日と定め、島山宮司によって祭祀がとり行なわれている。又境内には天満宮も祀られ、毎年子供たちが集まって天神様のお祭りが行なわ



図7-30 昭和30年代初めころの開拓地

用にもこと欠くありきまであったが、馬糞拾いや落葉集めから始めて、まず土地を肥やすことに専念した。家畜も山羊・鶏・細羊・豚の小動物から、役用の牛馬も入って来た。陸稲・麦類・雑穀・薯類と作物もいろいろになったが、地力のない悲しさで、干魃や凍霜害の被害を受け易く、この年代の終わりにおいても、農業所得で家計を賄える農家は稀で、ほとんどの

れる。公民館も三三年の暮にでき上がった。村から無償払下げられた小学校の旧校舎を解体復原し、内部をすっかり改造し、さらに玄関構えも堂々と仕上げられて、部落の中央に建てられた。会議室三室に大広間、炊事場、物置を備えた公民館は、各種会合に利用されて今日に至っている。

昭和三〇年には、国による成功検査が行なわれて開墾作業の一応の完成を見るが、それは外見的に畑の体裁ができたというだけのもので、作物が生育し経営が成り立つための農地としては、はなはだ頼りない極端にやせた火山灰土でしかなかったから、これを周辺の既耕地に負けない耕地とするためには、長い年月の忍耐と努力が必要であった。

開拓地での農業経営の変遷を見ると、昭和二〇年代は、開墾と建設に明け暮れた時代であるから、農業生産に見るべきものはなく、自家

者が既存農家の手伝いや土木工事で糊口をしのいでいたのが実情であった。

昭和三〇年代は、二〇年代末から高まった酪農熱（協乳運動等）によって乳牛の飼育農家が増え、ほとんど全戸に普及する勢いであった。しかし、その飼育規模は一、二頭から数頭止りで、又乳価も不安定であったから、農家は現金収入の道を求めて四苦八苦した。梨・桃・葉タバコ・短根人参・スイートコーン・長芋・桑苗と、数多くの換金作物が試みられては消えた。農協の生産資材代金の未払いが累積して、供給停止の寸前までいったのもこのころである。三五年には加工トマトの契約栽培が導入された。生産者価額が保障されていたこともあり、栽培指導も行届いたのでほとんどの農家に普及し、酪農とともに経営の柱として重要な作物となった。高度経済成長の波にのっ



図7-31 運動場で日光浴をする牛（昭和42.2）
多頭化が進むにつれ、このようなのんびりした
風景もみられなくなった

て、日本人の食生活が向上し、トマトジュースやトマトケチャップの消費が爆発的にふえ、その栽培面積が急速に増大したのもこのころである。

昭和四〇年代に入ると、隆盛をきわめていたトマト栽培も、労力の問題や連作障害による病害の多発等によってしだいに衰微し、代わって酪農専業多頭化

の時代に入る。

多くの農家が酪農専門経営をめざして多頭化をはかったが、また兼業化の波も急激におし寄せて、子弟のほとんどが他産業に就労する一般的な現象があらわれた。畑地灌溉による西部開発事業が実施段階に入りながら、関係農家の猛烈な反対運動を受けたのも、これらが要因となって強く働いたものと思われる。四八年のいわゆるオイルショックによる生産資材の高騰は、畜産経営を圧迫して小規模経営の脱落を早めた。

昭和五〇年代には兼業化がさらに進み、農業経営をやめる農家も出て来たが、一方で大規模化はさらに進み、中核農家を中心に設備の近代化が図られ、農業後継者を中心に大型機械の共同利用も盛んに行なわれて、作業の能率は飛躍的に向上し生産は増加した。しかしその反



図7-32 大芝開拓記念碑「拓碑」（昭和47.3建立）

面急激な設備投資は経営を圧迫し、低経済成長期に入ったこともあって需給の均衡がくずれ、その結果として五四年から生乳の生産調整が実施され、又乳価は据置きとなり、あわせて肉価は低迷して畜産経営は困難な時代に入った。入植以来四〇年、開拓地は大きく変貌をとげた。かつての瘦せ地はその生産力と肥沃さを誇り、設備は近代化して経営は拡大した。道路網は完備し、住宅も新改築されて生

活環境は整備された。周辺には大小の工場が進出して就業の場のこと欠かない。宅地化の波も足もとまで押し寄せている。このような変化の中で、青春の夢を一途に大芝開拓に託した若者たちも、すでに其の大半は老齢に達し、世代交替の時期に入った。初代が守り育てて来た農地や生活環境を、どのように守り発展させていくか、変転きわまりない時代に対処する、新しい世代の取り組みが注目される。

2 大芝開拓と青年運動

終戦の翌年、昭和二十一年の二月のはじめ、南殿の一軒の農家の炬燵をかこんで三人の青年が語りあっていた。大芝原の村有林を開墾して百姓をやるという相談であった。村有林を開放してもらうとなるとよほどの覚悟ではじめないと、実現はしないだろうというので、運動のための組織をつくることになった。大芝原開拓青年同盟がそれである。彼らはその趣意書を起草しそれを持って村民の同意を求めることになった。手始めに、南殿の区内を一戸一戸歩いて趣意を説明し賛同



図7-33 昭和21年村青年会運動会に使った大芝開拓組合即製応援旗

の署名をもらった。あらかたの区民の賛同に力を得たので、次に村青年会の弁論大会に弁士を立って、大芝原開拓の必要性を力説した。

反響は予想以上に大きく、村青年会（古村秀明会長）は早速後援活動をはじめ、各部落に後援者を置いて、盟友の募集活動や、実現への積極的協力を約束した。それから僅かの日数を経て、各部落から集

まった盟友は三〇余名の多きに達した。そこで、「大芝原開拓について」の建白書」を村当局（赤羽七村長）に提出し早期実現を陳情した。四月初めには、農民会が中心になって南箕輪村開拓組合が結成され、五月五日の先遣隊入植となった。

先遣隊員八人は、一人の妻帯者を除き二〇歳前後の青年で、このあと本隊として入植した増産隊をはじめ入植のほとんどが、一〇代、二〇代の青年であった。

大芝原の開拓は、名実ともに青年による一大運動であったのである。

3 戦後の開拓と農民大会

南箕輪村における戦後開拓と清水国人のかかわりは、農民会長時代と村長在任中の二期に大別される。

終戦直後の昭和二〇年の秋から二一年にかけては、復員兵士や、外地からの引揚者、あるいは軍需工場の失業者、都会からの疎開者、等々が農村にひしめいていた時代である。国全体が有史以来の敗戦という冷厳な現実のもとに、職を失い食に飢え茫然自失の状態にあった。この村も例外ではなかったが、老人や女子供で長い間の留守を守って来た家々には、働き盛りの男たちが続々と帰って来ていた。長い戦いに奪われていた労働力と、比較的知識水準の高い人材が農村に還元された時代でもある。したがって、早くも新しい文化活動のさざしめも見られたし、いろいろの組織づくりも試みられていた。これらの中で、いち早く結成されたのが南箕輪農民会である。終戦直後のことであるから、村の政治、経済をはじめ全般にわたって戦時中の古い体制がそのまま温存されていた。この古い殻を打ち破って、新しい農村の姿を追求すべく結成されたのがこの会で、清水国人を中心に新進気鋭の人々が参加した。後に戦後の復興期に村内のいろいろな分野でその推進

力となった人々の集団である。

この農民会が取り組んだのが戦後の開拓事業である。昭和二〇年一月政府は緊急開拓事業実施要領を閣議決定し、二一年一月には村内の山林原野のうち平坦地にあるものの大部分が適地として果知事の指定を受けた。農民会はこの情報をつかむと、村内農家の二、三男対策として其の実現に乗り出す。其のころ現在の南原地区では原義重郎等が、また、大芝原地区では南原の青年たちが開拓の気運を醸成しつつあったので、清水国人はこれらの人々と連絡をとり支援体制を整えていった。適地指定があったと言ってもまだ法的拘束力はなく、手をこまねいては用地の取得は困難で、村有地、共有地、私有地と複雑多岐な関係者を、説得し理解させることは難事であった。この時期における彼の精力的な活動は、特筆大書すべきものであり、戦後の南箕輪は彼の存在を無視して論ずることは不可能であろう。戦後の混乱期に、家業を顧みず東奔西走した農民会長時代の活躍は後に開拓村長の名声をはせた基礎をなすものであろう。



図7-34 上伊勢開拓10周年記念祝賀式の清水国人

二一年四月、南箕輪村開拓組合を結成し自ら組合長となり土地解放の折衝に専念した。四月の終りには大芝原の開拓について村当局と大筋の了解が成立し、五月五日に先遣隊を現地に入植させた。南

原地区でも話し合いが進んで共同開墾に着手した。更に両地区とも果の開拓増産隊を受け入れるなど、次々と入植者をふやしていった。

当初の計画では村内二、三男対策として出資した事業であるが、より広い視野から事業の推進を図らなくてはと、関係者を説得し村外からの受け入れに踏み切ったものである。このあと昭和二年四月から四一年三月にかけての一九年間のうち一五年一〇か月にわたり村長の要職にあった清水国人は、陰に陽に開拓者の立場を擁護し、その健全な成長を助けた。開拓地の水の確保についての水利権交渉に仲介役として骨を折ったり、神社社地を村有林内に設定することについて議金を説得するなど、その一例にすぎないが、村内各開拓地に共通してその存在の意義は大きかった。

4 大芝原開拓と水

この地帯が未墾地として残っていた最大の原因は水利の便がなかったことにある。木曾山脈から流れ出た水は伏流水となって地下に浸透し、地下水位は極めて低く、井戸水も出ないというのが古くからの定説であった。

このような地帯に入植して開拓を行なうには、まず飲料水を確保することが先決であった。大芝開拓を指導した清水国人はこの点を重くみて、水の見通しがつくまでは軽々しく現地に入植させてはまずいと考へ、この問題の解決に全力をかたむける決意をしていた。ところが、血気にはやる青年たちは遂に二期早期入植を図り、昭和二年の五月には先遣隊として現地入植を遂行した。この時から水道完成まで約一三年間、水利権者の大泉区との懸案であった分水施設の改善、土地権利の移転登記についての円満解決に至るまで二六年間、入植者二九戸による長い長い水を求める闘いが始まった。

当時は、地区の東端を流れる西天竜幹線水路の水が主要な用水源で

あった。ある人は天秤で、ある人は荷車で、道とは名ばかりの泥と埃の道を苦勞して運んだ。その水が炊事洗濯から一切の用を足したが、その確保のための苦勞は並大抵のものではなかった。

水の問題を解決するには、まず水源の確保が先決であるが、すでにほとんどの水源は既存部落に占有されていて、関係者は頭を痛めた。

その結果三つの案について検討がなされた。第一は大泉川の伏流水を集水する方法、第二は当時既に廃井となっていた大泉区の大泉所山四ノ沢を水源とする新井を改修復原して導水する方法、第三は電気探査による地下水脈の発見利用であった。第三の方法については専門家に依頼して探査を試みたが、水脈を発見することはできなかった。(最近に至って地区内の二、三の事業所では豊富な水脈を掘り当てて利用しているが当時の技術では探知ができなかった) 第二の大泉所からの導水計画は、水量も豊富であり最も有望視されたが、予算的に水源までの距離が遠すぎる点と、水利権交渉の困難さが併せて配慮された結果、第一案を実行することになった。これより先、昭和二年の秋には自力で縦井戸の掘削を試みたが、一五間近く掘り下げても水は出なかった。当時は終戦直後のこととて麻縄もなく、玉縄をより合せて太縄をつくり、丸太やぐらを組んで古井戸の滑車をつるし、交替で穴を掘り下げた。養人のこととて随分苦勞もし、また縄が切れかけて危険な場面もあった。

本格的な導水工事は昭和二年の三月にはじまった。大泉川左岸直下の伏流水を大泉新田と吹上の中間点で集水し、川底を右岸に渡り大芝原の村有林を斜に横切って、部落の西端に達し、部落の中を縦断して給水する構想である。飲用水道としては補助対象とならなかったのに、畑地かんがい施設として計画実施された。工事は賦役を主体としたが、集水隧道などの一部工事は請負工事として進められた。昭和二



図7-35 水道工事に取組む関係者
(羽田地籍にて昭和29.11)

二年には隧道工事を含む導水路の掘削を完了し、翌三年一月請負師生力補三によって水源地に縦坑二か所が試掘されたが、其の成果を見ぬまま、二月には大泉新田唐沢栄一の請負によって集水隧道の掘削、導水管の敷設工事が始まり、六月には全線にわたってヒューム管の敷設工事が行なわれて、希望の通水を見た。

同年一月二四日には開拓祭を兼ねて水道の完成祝賀会が行なわれ、入植者全員の外二〇余人の関係者が集まって盛会であった。しかしよるこびも束の間、この水道は大きな欠陥をさらけ出した。それは水路の構造的な欠陥と水量の不足によるものであるが、二六年に集水隧道一〇〇mの延長工事を実施しながらも、断水、過水をくり返し、遂に枯渇した。昭和二五年ころからこの水源に見切りをつけ、新しい水源を求める声が出て来たので、昭和二七年には各方面に運動を展開することになった。

新規事業について当局は既に大きな事業量を消化していると難色を示し、また新しい水源として上げられた四ノ沢の水利権者である大泉区は開拓付帯地全部を交換条件に示すなど、実現は困難かと思われるが、村当局はじめ関係者の努力が実を結んで事業認可となった。大泉

区との折衝も数次にわたる談合の末、大泉井美水賃借契約が締結された。工事は昭和二八年二月着工、二八年度導水路工事一八〇〇m、二九年度導水路工事一二〇〇mの施工によって、既設の水路の末流に取付けが完了し通水を見た。しかし既設の区間が、半丸太のくり抜き樋で地面に露出しているため、冬期間は完全に凍結して一滴の水も流れない。そこで昭和三十一年には半額地元負担の付帯工事を計画し、七三八mの導水路と、集水池を、同年二月から正月にかけて厳しい寒気と雪の中を、全員出役による突貫工事で完成した。さらに三三年には簡易水道として各戸に配管利用するための工事を行ない、大芝村有林内に貯水槽を設け、下流一二五mに塩化ビニール管を埋設して、通算一三年目に漸く近代的な水道が完成した。これまでに施工された水路の総延長は七、七六三m、総工費四〇二万五八四四円、二九戸に賦課された総人工数四、三一七人、一戸日量三石(五四〇ℓ)の代償として譲渡した山林四九七一・九坪である。それはまさに、汗と涙の結晶としての貴い水であった。

ところが、開拓と水との困難な関係はそれで終止符をうつことにならない。分水量を厳格に制限するために設置された分水柵からは僅か一三〇ℓの水道管であった。

水源から流れ込んだ落葉一枚でも口をふさげば、水は完全に止まる不合理な施設であったから、これが月の内に何回となく繰返すので水道係の苦勞は並大抵のことではなかった。断水を繰返す水道に住民の不満はたかまつた。

計器を取り付けて使用制限をしたが、たびたび断水をしては計器も用をなさない。分水施設の改善を申入れたが埒があかない。この状態が昭和四一年の村営水道完成まで続いたが、四七年大泉区もようやく重い腰をあげて、土地の所有権移転登記を条件に分水施設の改善を行

なったが、この時この水道は、村営水道の補助的役割を果たすに過ぎない、いわば畜舎用の水道でしかなかった。

かつて二九人の開拓者が水を求めて往復した足跡は、一本の細い道をかたちづくり、大芝原の山林を北西に横切り、分かれて一本はそのまま大泉川の河川敷を斜めに渡り、一本は真直ぐ西に向かつて大泉所の水源に至る。この水路にそった一本の足跡の道を、人々は水の道と呼んだが、今は苔むし草繁って跡かたも無く、時代の変遷を思わせる。

④ 北原における開拓

北原の開墾は、村有及び私有の山林と原野で、これは戦時中、食糧増産の目的で農兵隊を動員して、簡易開墾と称し大畦に荒起しをしてこれを耕起してない雑草に覆って盛土とし、この上に作付け（ライ麦、甘藷、ソバ、陸稲等）する方法で耕作したが、間もなく終戦となり、農兵隊が引き揚げた跡である。岡谷出身の笠原龜之助所有地が不在地主ということで、解放農地として当初七名に対し八反歩が完り渡され、これが入植の発端となった。

その後、当地区に入植する希望者は個人でそれぞれ交渉して土地を買入れて営農に当たり、北原の開拓地を形成した。大芝や南原のように政府が地区全体を買収して入植者に割り渡したのではなかった。したがって、面積も少なく一人当たり一町歩内外で、小団地開拓と呼ばれた。小団地とは五〇町歩以下の開拓地で政府からの開墾助成金は無く、自己資金に頼り、政府よりは融資を受けて開墾経営に当たるという不利な条件であった。したがって、入植者の出入りも多く、苛酷な労働に耐えず去る者も多かった。しかし、順次戸数が増加して現在では一四戸となり一部落をなし少数ながら区制をしくに至った。

開拓地共通の問題点であった水利については、北原も例外とはなら

ず苦勞をした。幸いにもこの地籍は七〇八間掘れば飲用に適する水が出て、飲用水には既設の井戸を利用することができた。

しかし、既設の井戸は個人有であり水量も不足するので共同で規模の大きな井戸を掘削することを計画した。村の助成を村長にお願いしたところ理解ある協力が得られ、大入地籍に村有地の払下げを受けて井戸二基を掘削した。この井戸二基を一連につなぎ、フオートを設けて電気揚水を行ない水道施設として完成した。これによって飲用水はもちろん、洗濯等の生活用水のほか、家畜飼養等の用水が確保されるようになった。

この水道施設の完成に当たり、村長清水国人の恩恵を永く銘記するため「以和清水」の碑を建て記念とした。その碑面に「清水国人村長此の地に水道を創設、区民の福祉を図る。茲に碑を建て其の功徳を不朽に伝ふ。北原以和清水水道組合」とあり、組合長上原千尋以下十一名を連記し、感謝の誠を表している。



図7-36 北原「以和清水」碑（昭和33）

三 農業経営の近代化

(一) 戦後の食糧増産時代

戦争という暗く長い苦難な時代は、昭和二〇年八月敗戦という形で終わりを遂げた。そのため、戦地からの復員、外地からの引揚者等で国内人口は急増した。しかし、同年の食糧生産は肥料や資材、あるいは労力不足から全国的に著しい凶作であった。南箕輪村においても稲作の平年作が一萬一〇〇〇石程度のところ、この年には七六八〇石しか収穫がなかった。

国全体が食糧不足に陥り、その危機は深刻であった。配給食糧は極度に少なくなり、それだけでは生活できない都市の住民は食糧を求めて、盛んに農村に買い出しに出た。農家はこれらの人たちに食糧を売り、あるいは衣料品などと交換したが、取引きの値段は公定価格の数倍の値であった。米や麦だけでなく馬鈴薯、甘藷、鶏卵、南瓜等何

表7-29 南箕輪村の主要食糧作物の作付面積及び収量

年度	種類		米		大		小		甘		馬	
	作付面積	収量	作付面積	収量	作付面積	収量	作付面積	収量	作付面積	収量	作付面積	収量
昭和一二	五八・一 _反	一一、五五九 _石	一六・三 _反	四〇八 _石	一四・九 _反	二七〇 _石	—	—	—	—	—	—
一二	五〇六・二	七、六八〇	五四・五	四一四	四九・一	二八六	四九・三 _反	九六、一三五 _石	—	—	二二・七 _反	二六、一二九 _石
一三	四五八・〇	一一、三五八	五八・九	一、二四八	四九・四	五四七	三〇・五 _反	一〇七、〇五五	—	—	二〇・三	五二、一七一
一四	四五四・〇	九、四二九	四六・八	四六八	三八・三	二五二	二七・八 _反	一一、二〇〇	—	—	一九・八	九、九〇〇
一五	四七二・〇	一一、九九〇	四六・二	五三二	四一・二	四二二	—	—	—	—	—	—
一六	四七一・〇	五、七二〇	五六・二	一、三六〇	四一・二	七三二	—	—	—	—	—	—
一七	四八七・六	一三、一三一	五八・五	一、六九一	四九・〇	八二八	一六・〇 _反	四六、四〇〇	—	—	一七・九	二五、五九七
一八	四九八・二	一四、一四一	五三・九	一、二三六	四二・四	七二六	一四・二 _反	四八、三〇〇	—	—	一七・八	四三、四三二
一九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二五	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二七	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二八	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

でも食糧になるものは高い値段で売ることができたので、農家は比較的豊かな生活ができた。したがって、農民の心理としてできるだけ多くの閑米となるべき保有米を確保しようとしたのは時の勢いであった。

このため政府は昭和二一年二月食糧緊急措置令を公布して米穀の強制収用を行ない、進駐軍も強力にこれを援助し、臨臨米穀の増産を行ない、また、措置令に違反するものには罰則が課せられた。

それにしても国内食糧の絶対不足はまぎれもなく、占領軍からの援助物資によってどうにか露命をつなぐという状態であったので、戦時中にも増して食糧増産は農民に課された至上命令であった。そのため国の政策はもちろん農民自身も主穀を中心に、甘藷・馬鈴薯を含む食糧作物の作付面積をふやし、反収の増加に懸命の努力をした。戦後における南箕輪の主要食糧の作付面積及び収量は表7-29のようである。

こうして、戦後の農業は主穀中心の農業の傾向を一層強くし、南筑輪は広大な西天竜水田地域を持つ伊那の穀倉地帯として、稲作中心の農業を発展させた。

(二) 農地改革後の農業

昭和二十一年に始まり、同二十三年に終わった農地改革は土地改革史上画期的なものであり、農民の階層に大きな変化を生じた。従来大きな問題となっていた地主的土地所有制度は大地主の消滅によってほとんど解体し、大部分の農民は自作農民になった。

自作農化した地主の多くは条件に恵まれた耕地を経営し新農村の富農層の有力部分を形成し、農村の指導的立場に立ち、小作農民は自作農になり得たことにより、当時の農業をとりまく有利な状況と共に生産意欲を高めることになった。しかし、自作農にはなかったもののそのままでは農業経営者として自立し得ない程度の小規模農家が多数存在しており、将来の農業発展には大きな問題点を持っていた。また、農地改革による農地保有の上限が二町三反に制限されたことにより、近代的大経営への発展の道も閉ざされた形になったのである。

このように農地改革はいくつかの問題点を持ちながらも画期的な改革であり、農村は民主化され、食糧増産の要請に添って数々の新技術が導入され、生産力は急速に上昇したのである。

1 保溫折衷苗代の普及

昭和二十五年ごろから保溫折衷苗代が本村にも本格的に普及し始めた。これは、短冊揚床苗代の播種後に床面の保溫のため油紙を被覆し、踏切り溝にのみ灌水し、発芽後苗が3cm位に成長したころ油紙を除き床面まで灌水して普通苗代状態にもどす方法である。この育苗法によって苗代播種期及び田植期を一日二週間ほど早めることが可能となり、健苗の育成はもちろん冷害の克服に大きな効果を挙げ、



図7-37 保溫折衷苗代の油紙掛け

反当収量を著しく高めた。やがて、これはビニールの発明によってビニールトンネル苗代や、ビニール畑苗代等へも発展していくことになった。

2 品種改良と優良種子の普及

作物の品種は農事試験場において作出されたものが多くなり、品質よりも強健で多収であることが選択の基準になっていた。当時の稲の品種についてみると、

農林一七号が安定多収品種として最も多く、中世無芒愛国、アキバエが強健で気候に鈍感な強健多収品種として、また冷害に強い品種として陸羽一三二号・藤坂五号・尾花沢一号等が選ばれ、酒米としてたかね錦、糯米として収量の多い信濃種三号が多く作られた。

麦については、昭和二十四年の奨励品種として次の品種があげられている。

小麦：伊賀筑後オレゴン・農林六八号・農林六九号・農林二七号・農林六六号・農林三九号

大麦：信濃一号・備前早生・白麦・雷龍・金糸四六号・細麦・会津四号

昭和二十六年より県は種子確保、優良種子普及策として、果試験場で採種した原種を用い、各町村に補助金を交付して採種圃を設置させ、または委託する等の方法で、稲・麦・大豆・玉蜀黍・耐寒性紫雲英の

優良品種の普及に努めており、本村においても多くの採種圃が作られた。

特記すべきことは、この時代五箇年計画に稲種第一代(F)品種が登場したこと、馬鈴薯で二化性植薯が利用されるようになったことがあり、これによってこれらの作物の収量を飛躍的に増加させた。

昭和三十一年における南箕輪の主要作物の品種と、その栽培面積は次のようであった。

1 水稲		農林一七号	二二・一	町
		チタマ	九八・二	
		アキバエ	五五・九	
		信濃三三	一三・四	
		たかね錦	九・四	
		シロガネ	八・六	
		その他	五三・四	
	計		四七〇・〇	
2 大麦		信濃一号	三一・三	
		金津四号	一〇・三	
		コンゲン麦	一八・九	
		みすず大麦	〇・八	
		その他	〇・七	
	計		六二・〇	
3 小麦		農林六九号	一八・一	
3 農業の進歩				
4 玉蜀黍		農林二七号	六・五	
		ユーク小麦	一・一	
		その他	〇・三	
	計		二六・〇	
5 大豆		長交二〇二号	三四・四	
		〃 一六二号	一〇・六	
	計		四五・〇	
6 雑穀		兄	一九・五	
		赤夷	八・八	
		その他	一・七	
	計		三〇・〇	
7 雑穀		近成一号	一三・五	
		最上種一号	四・二	
		その他	二・三	
	計		二〇・〇	

農業のDDTは終戦直後、進駐軍によって我が国に持ち込まれ、蚊や蚊の駆除に使われたが、それが農薬として使われるようになり接触型の殺虫剤として卓抜な効力を発揮し、続いてBHCが導入され各種

害虫駆除に広く活用された。

昭和二八年は出穂直後の長雨と冷気によって稲熱病の大発生がみられ、四一六割の減収となり村として救済事業を実施したほどであったが、このときから有機水銀剤が稲熱病に卓効があるとして本格的に使用され、その予防に大きな効果を発揮した。さらに、パラチオン等の有機燐剤が従来の薬剤で駆除困難であった害虫まで有効な殺虫力を示し、昭和三二年ころからはヘリコプターによる農薬の空中散布が行なわれるようになり、広域の一斉防除が可能となるなど、病虫害防除の面では長足の進歩を遂げた。

しかし、三〇年代後半から農薬が問題となり始め、特に有機水銀は人体内に蓄積し致命的害を与えることが判明して昭和四一年より農薬から追放され、有機燐剤は誤用懸念等による人体への危害が考慮されて高毒性のものは禁止されて低毒性のものに切り替えられ、有機燐剤としてのDDT、BHC等も農薬から姿も消した。しかし、これらの農薬に代わる新しい農薬が次々と研究開発されており、どの農薬を使うべきかに迷うほどに種類が多くなっている。



図7-38 昭和28年の冷害
被害状況視察のため林知事来村。村では農民大集会を開き知事に陳情した。

表7-30 南筑輪の稲作反当収量

年 度	反 (10 a) 当収量
昭和20	1,503.0
23	2,479
25	2,076
26	2,540
28	(547) 1,211
30	2,693
32	2,838
34	(3.56) 534%
36	(3.78) 568
38	(3.54) 531
40	(3.23) 485
42	(3.80) 571
44	(3.56) 534
46	(3.23) 485
48	(3.78) 568
50	(3.92) 588
52	(4.16) 624

昭和32までは村勢一覽より

昭和34以降「伊都米の歩み」より

を導入し……とし、その時点での無畜農家二〇七戸のうち、経営規模と経営形態をみて有畜化の可能かつ必要なる農家一〇〇戸を選定し、第一次および第二次の導入によって有畜化を図った。(詳細は六畜養及び飼料の発展の項参照)

県は昭和三十一年から三五年にかけて、国の

昭和二十四年には除草剤として二四Dが普及を始め、続いてMCP、PCP等の接触型殺草剤、PCP、シマジン等の土壌処理による発芽抑制剤が開発され、特に茎葉に散布して種は枯れるが根は枯れないというような、植物の属間選択性のある薬剤の開発は画期的なことであり、これらの除草剤の使用によって、水田の手取り除草の苦痛からはほとんど解放されることになり、畑作においても除草剤は幅広く活用され、農作業体系を大きく変革させた。

農業としてはこのほかに成長促進あるいは抑制効果を持つホルモン剤等も、落果防止、摘花果、落根促進、生長促進、あるいは単為結果等園芸作物を中心に多方面に応用されるようになっていく。

4 施肥法の改善

戦後肥料は食糧増産のため比較的順調に供給されており、施肥量の増加と相まって施肥法の研究改善が盛んになった。施肥法の改善で注目すべきことは穂肥の理論の研究である。これまで稲は基肥中心の施肥であったが、稲の生育期を分けて栄養成長期と生殖成長期とし、その栄養成長期から生殖成長期への転換直後の幼穂形成期に、窒素肥を追肥することが穂長を長くし、その後の結実を良好にし、収量増加に役立つことが明らかになり、この理論によった施肥法が一般化したのである。

さらに、老朽化水田と秋落ち現象の理論が解明され、鉄分の補給として赤土の客土、鉄粉の散布、無硫酸根肥料の使用、晩期追肥等一連の秋落田対策が行なわれ、河原地帯や中段地区の老朽化水田に対し相当な効果を挙げた。また、脱穀現象の理解も深まり、それに対処する深層施肥等も行なわれるようになっていく。

以上みてきたように、品種改良による多収品種の採用、保温折衷苗代の普及による健苗育成と早期田植え、施肥法の改善、防虫害防除技術等の一連の技術進歩により、稲作の反当たり収量は急速に向上した。戦後の南筑輪における稲作反収の増加の状況は表7-30のようである。

四 新農村建設の動き

食糧危機も去った昭和二六、二七年ごろから、主穀中心の農業に対する反省が生まれ、経営の合理化・新しい農業への指向の動きがしだいに生まれてきた。昭和二十七年、国は日本の無畜農業の体質改善を目指し、有畜農業創設資金を設けた。南筑輪においては、特に昭和二八年の大因作が主穀(稲作)中心の農業経済に深刻な影響を与えたことを反省し、二九年に畜産振興計画をたてた。その計画の趣旨の中に、「因作後の農業経済を建て直すには経営の展開を必要とする。かかるときは村民経済を将来ともに健全ならしむる大施策として大量の家畜を導入し……」とし、その時点での無畜農家を二〇七戸のうち、経営規模と経営形態をみて有畜化の可能かつ必要なる農家一〇〇戸を選定し、第一次および第二次の導入によって有畜化を図った。(詳細は六畜養及び飼料の発展の項参照)

新農村建設政策に基づいて一五三の農村地域を指定し、新農村建設事業を推進しているが、本村は昭和三年に西筑輪地域と一緒に新農村建設協議会を作り、新農村建設振興計画を立案し、国の補助を受けて事業を実施した。そのうち本村関係分の概要は次のようである。

1. 土地条件の整備……区画整理二〇町歩

2. 耕種改善事業

本村については保福折衷時代の完全実施と、種痘催芽所における健苗育成、耐病性品種の導入、麦類、大豆については肥料の増進技術の改善と病害防除施設の整備を目的として、

種痘催芽所 三棟 農業倉庫 三棟

共同水磨 一か所 動力攪拌機 五台

動力噴霧機 二台 採種圃の設置

3. 園芸振興

共同集荷所建設 二棟 共同防除施設 二か所

4. 畜産振興

乳牛導入 二〇一頭 集乳所(建物及び冷却施設) 九棟

役肉牛導入 三〇頭 共同育種所 一か所

豚(種畜)導入一〇〇頭 家畜管理所 一か所

鶏羊導入 飼料自給促進施設

鶏導入 三六六三羽 畜舎改良(南みのわ) 一五〇棟

堆肥舎改造三七〇棟(南みのわ)

5. 養蚕振興事業

桑園改良 六五〇反(南みのわで二六〇戸)

6. 林業振興

索道建設二〇〇〇m 林道開設一万二〇〇〇m

人工植栽 二六〇町(松・唐松・榎)

本事業は、最後の林産振興だけ村及び森林組合が推進主体である

が、他は全部農業協同組合が推進主体となって事業を進めた。これらの事業は一般助成事業、特別助成事業、自力事業の三種に分かれており、特別助成事業は助成率が高く事業全体の推進役を果たした。

この事業内容を見ると総合的であって、この時点での各分野の問題点を改善する程度で、新農村の建設というには方向性ははっきりしないものであった。

新農村建設事業としては外に農事放送(有線放送)施設の新設がある。これは、国の補助を受けて昭和三年一〇月に完成しているが、農家相互を有線連絡をすることによって、連絡の効率化、農業の指導、普及の徹底に大きな効果をあげ、農民意識の高揚、発展にも重要な役割を果たすことになった。

四 農業の機械化と労働生産性向上

戦後も初期のうち水田の耕起には犁が使われていた。その犁もしいに改良され二段型も使われ、深耕と耕土の上下の入れ替えが可能となり、畑においてはカルチベーターが使われて中耕除草に効果をあげた。しかし、脱穀調整等の定置作業以外はほとんど畜力に頼っていた。

ところが、経済の復興もしいに進み工業の生産力も回復する過程で、かつて軍需工業であったものが農機具製造に転換したものが多数あり、農機具の研究開発と供給が増し、その売り込みが盛んであった。

他方、農業においては土地生産性は品種改良・施肥技術の改善・病害防除技術の進歩により急速な向上を示しているが、労働生産性の向上が遅れていること、外国農産物輸入の圧力がしだいに強くなり、日本の農産物の生産費が著しく割高であることが問題となり、労働生産性の向上が日本農業に課された緊急且つ重要な問題になってきた。



図7-39 ロータリー式自動耕転機

ここに、農業機械の異常なほどの急激な普及がみられることになったのである。

戦後、農業機械発達の特徴は各種機械の自動化、特に移動作業機の動力化である。昭和二〇年代中ごろから動力耕転機が日本的な形で出現し、機械化促進法が公布された昭和二七年ころから本村にも導入され始めた。初期のものには作業部分がクランク式のものとしてロータリー式の二種があったが、しだいにロータリー式になり性能も向上して急速に普及した。

昭和三〇年代後半は農機具ブームを巻き起こしており、運搬用具も三〇年ごろまでは荷牛馬車が圧倒的に多かったが、しだいに耕転機用トレーラー・三輪自動車・農用トラックへと切り替えられていき、農耕牛馬はその役割を終えて農村から姿を消すに至った。畜力用牛馬の減少状況は表7-31のようである。

昭和三〇年代になるとトラクター（初期はハンドトラクター）も普及を始め、四〇年代には稲刈機、続いて田植機が動力化され、今までの農機具のうち立ち遅れていたところがほとんど一挙に解決された。その後各種の優秀な農機具が開発され、農作業のほとんど全分野にわたって機械化が進み、かつ普及している。本村における農業機械の普及状況は表7-32のとおりである。

表7-31 農機具の普及に伴う
役牛馬の減少
(村勢一覽より)

年度	牛馬	馬	役肉牛
昭和22		307頭	107頭
25		316	201
27		266	253
29		207	287
31		187	284
33		173	235
35		157	249
38		28	278
40		19	276
43		—	308
備考	昭和25年ころまでの役肉牛はほとんど役牛と考えられるがそれ以後役牛は馬と共に減少し、牛の頭数の増加はほとんど肉牛である。		



図7-40 農用トラクターによる水田耕転作業

このような機械化によって、農作業の労働能率は急速に向上した。稲作については一〇アール当たりの所要労働時間は戦争直後の二四〇・二五〇時間から、昭和三七年には一四〇・一五〇時間になり、同五〇年には一〇〇時間を割るに至り、所要労働時間の割合は戦争直後の二・五分の一になったことになる。

このような機械化の進展による稲作作業体系とその所要労働時間、および長野県平均を示すと表7-33および表7-34のようである。

このようにして、単位時間当たりの労働粗生産額は、反収の増加と作業の機械化とによって、戦争直後の三・四倍に達した。しかし、純

表7-32 農業機械における重要機械の普及状況

年度	機械				収 獲 調 整 用 機 械				そ の 他			
	原 動 機	耕 耘 用 機	田 植 機	自動 散 粉 機	サイ ン ダー	動力 脱穀 機	ス タ ー	コンバイン	乾 草 機	刈 割 機	牛 馬 車 用 トラクタ	力 カッター
昭和22	26	5				205				14	290	
25	417	70				?				?	434	
27	399	89	2	10		281				72	407	
30	183	79	22	61		290				40	486	
32	303	91	24	69		273				44		
35	299	221	126	90		467				153		3
38	212	159	391	115		427				66	41	101
40	45	195	496	142		376				3	56	103
43	?	?	612	?		?					237	?
48		370	800	90	200	530	30	23	86			390
50	?	?	106	313	628	270	110	41	?		619	210
51		?	512	333	647	270	150	45	?		?	230
54		298	616	353	748	296	179	61	186		881	258
56		538	662	418	752	?	204	87	186		961	274

注1 年度により統計項目や分類の方法が異なっていて不備であるが大体の傾向はつかわる。

2 48年以降の収穫調整機械は実数の合計である。

表7-33 南冥輪における稲作作業体系と10a当たり所要労働時間

昭 和 37 年				昭 和 50 年				
作 業 内 容	作 業 体 系	比 率	10a 当 り所要時 間	作 業 内 容	作 業 体 系	比 率	10a 当 り所要時 間	
育 苗	保温折衷苗代	85%	15.0	育 苗	保温折衷苗代	10%	15.0	
	ビニール畑苗代	15			ビニールトンネル箱育苗	90		
耕 起 代 掻 き 呼 込	耕 耘 機	95	14.0	耕 起	耕 耘 機	70	6.0	
	トラクター	5			トラクター	30		
	人 力			代 掻 き	耕 耘 機	90	7.0	
施肥(含む追肥)	人 力	100	8.0		トラクター	10		
田 植	人 力	100	28.0	施肥(含む追肥)	人 力	60	8.0	
中 耕 除 草	人 力	60	5.5		機 械 力	40		
	除 草 剤	40		田 植	田 植 機	90	4.0	
用 水 管 理	個 人	18	2.0		人 力	10		
	共 同	82		中 耕 除 草	除 草 剤	75	5.0	
病 虫 害 防 除	小 形 防 除 機	34	2.0		人 力	25		
	大 形 "	5		用 水 管 理	個 人	25	10.0	
	ヘリコプター	61			共 同	75		
刈り取り架掛け	人 力	100	39.0	病 虫 害 防 除	動力散粉機等	100	4.0	
脱 穀	動力脱穀機	100	16.0	刈り取り架掛け	バインダー	85	16.0	
運 搬	テ ー ラ ー	80	14.5		コンバイン	10		
	自 動 車	20			人 力	5		
乾 燥	蒸 干 し	62	14.5	脱 穀	動力脱穀機	90	15.0	
	小 形 乾 燥 機	38			コンバイン	10		
調 製	小 形 粗 摺 機	5	運 搬	ト ラ ッ ク	?	8.0		
	大 形 "	95		ア イ ラ ー	?			
				調 製	粗 摺 機	100		
					人 力	100		
計			144.0	使 装			98.0	
(10a 当たり収量 540 kg)				(10a 当たり収量 588 kg)				

(第1次、第2次農業改善事業基礎調査より)

(投稿文書)



図7-41 バインダーによる稲刈り

表7-34 長野県稲作収量 反当たり 150kg 当たり 所要労働時間

項目 年度	反 (10 a) 当 収 量	反当たり所 要労働時間	150kg (一石) 当たり所要 労働時間
昭和	kg	時間	時間
35	535	207.6	58.2
36	549	204.3	56.0
37	554	194.1	52.6
38	537	180.5	50.4
39	546	183.7	50.5
40	518	175.3	50.7
41	560	175.6	47.1
42	570	175.8	46.2
43	591	165.5	42.0
44	547	160.4	44.1
45	564	151.4	40.4
46	531	136.7	38.6
47	540	128.1	35.6
48	588	124.1	31.7
49	547	103.2	29.3
50	622	100.1	24.1

(長野県農林統計より)

労働生産性はそれほど向上はしていない。それは日本農業の場合経営面積が小さいために、農業機械の利用日数が極めて少なく、単位面積当たりの農機具償却費が非常に高価につくからである。

数十万円あるいは一〇〇万円というような高額の投資をしても、それを利用する日数は年間数日、長くても一〇一〇日程度の機械が多く、しかも耐用年数が七八年と

短く、使用単位時間当たりの償却金額は高額になり経済的合理性が極めて少ない。しかも、これらの高額機械の購入には掛買いや借入金によるものが多く、その返済に苦勞をするのが実態であって、いわゆる機械化貧乏の事実が存在している。

この機械化の矛盾を解決する道には経営の大規模化と、共同利用の二つの道がある。経営の拡大は耕地の拡大を必要とするので簡単には実現が困難であるため、共同利用の道が奨励された。こうして、一時農業機械の共同利用、進んでは共同経営まで行なわれた。一部では共同化が続けられているが、現在は多くがかつて共同利用であったものが個人利用に解体しており、農家の兼業化とそれによる現金収入の増大が、ますます個人利用の方向に向けており、農業機械化に関する大きな問題として残されている。

四 農家の階層分化と兼業農家の増加

1 農業経営の階層分化

農地改革によって小作農が減少し多くの自作農が成立したが、その経営規模は農地改革以前より平均規模においても減少し、多数の小規模自作農家になった。また、最大所有規模も当地では二町三反歩で頭打ちになっており、大規模経営へ発展する道も閉ざされていた。この中において、各農家の間に経営の変化があり、農地の移動が行なわれている。戦後における南筑輪の経営規模別農家戸数の変化、農家の階層分化の状況を示すと表7-35及び図7-42および7-43のようである。

農地改革によって作り出された昭和二五年の農家の経営規模から見た階層は、農家戸数の約半分の四五二戸が五反一町層で、次いで一町一・五町層が二三六戸で、内階層を合わせて全農家戸数の六五%

表7-35 経営規模別農家戸数の変化

年度	昭和二二	二五	二八	三〇	三五	四〇	四五	五〇	五五
三反未満	一五六	一七一	一四〇	一〇〇	一一一	一五四	二〇一	二二〇	二二〇
三反一町	三六八	五五二	四〇〇	二五五	一七三	一六三	一五七	一七六	一七六
町・町五	一九一	二二六	二四九	二四九	二四九	二四九	二四九	二四九	二四九
町五以上	六四	七〇	八二	六四	七三	九三	七三	七三	七三
計	二八	一八	一六	二一	二一	二一	二一	二一	二一
五町以上	二	二	二	二	二	二	二	二	二
計	九八〇	九八〇	九八〇	九八〇	九八〇	九八〇	九八〇	九八〇	九八〇

(村勢一覽による)

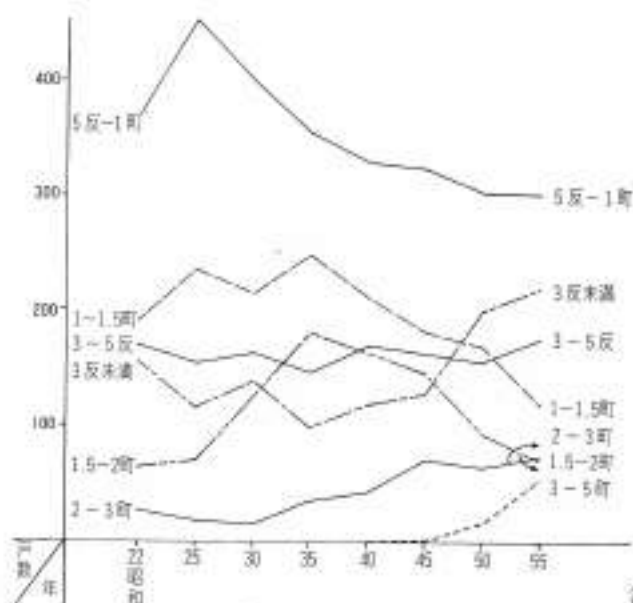


図7-42 戦後の経営規模階層戸数の推移

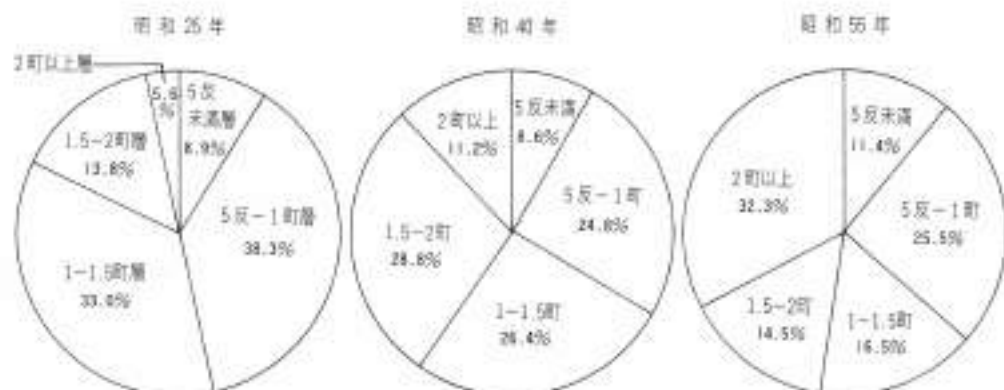


図7-43 村内各階層の耕地占有比の変化(本図は各階層の中央値反別戸数を乗じて算出した)

を占めていわゆる中堅農家層を形成した。ところが、昭和五五年においては六八八戸から四二三戸へ、割合では六五・六%から四二・六%と著しく減少した。これに反して五反未満層および二町以上層の農家が増加している。

これは、五反一町五反の間の二階層は農家として自立するには経営規模が小さく、もっと経営規模を拡大して自立経営を目指すか、逆に面積を縮小して農業以外の収入を求める兼業化の道に進むか、その取捨選択を迫られていたことを示しており、全農家戸数の約二三%の二百数十戸がそのいずれかの道を選んだものと考えられる。(図7-42)

一・五町二町層の農家は、昭和五五年ごろまでは次第に増加している。この

階層の農家はそのころまでは自立可能な経営規模として一応自立経営農家を目指したものと考えられるが、四〇年ごろからの経済の急成長により、この程度の経営規模では農業のみによる自立の困難なことを感ずるようになり、両極へ分解する傾向を示して急速に減少するようになったと考えられる。

二、三町層は昭和三〇年に最低を示すが以後しだいに増加し、自立経営を目指して努力しており現在の中堅農家となり、昭和四〇年ごろからは再び三町以上の専業上層農家が生まれ五〇年代以後急増している。

このようにして農家は三反未満の農家と二町層以上の農家の両極に分解しつつあることを明瞭に示している。しかし、二町層以上の農家の占める経営耕地の合計をみると全村内耕地のうちで占める割合が昭和二五年においては五・六％であったのに対し、同五五年では三・三％と増加している。(図7-43)これらの農家が今後中堅自立経営農家としてさらに規模を拡大して経営を安定発展させることが期待されるものであるが、それには、この傾向の一層の進展が必要であって、今後なお多くの問題点があるであろう。その一つは、昭和四〇年以後五反一町層の農家数があまり減少していないことである。農機具の進歩と省力的農法の進歩によって、第二種兼業農家でもこの程度の規模の耕作は可能であるということであろうか。

(二) 兼業農家の増加

農家の経営規模階層の変動と関連し、戦後の農業で著しい動きは兼業農家の増加である。南筑輪における専業別農家戸数の変化は表7-36のようである。

戦後の昭和三〇年ごろまでは工業の復興が充分ではなく、食糧増産が盛んに叫ばれていた時期であったので、専業農家数はしだいに増加

表7-36 南筑輪における専業・兼業別農家戸数の変化

年度	専業農家	第一種兼業農家	第二種兼業農家	農家戸数計	備考
昭和二二年	三六〇戸	五一四戸	一〇六戸	九八〇戸	臨時農業センサス
二五	五五五	三三九	一五五	〇四九	村勢一覽表
三〇	六四八	二二九	一八四	〇六一	
三五	三五四	四二二	二九一	〇六八	農林業センサス
四〇	一八一	四三三	四〇七	〇四一	
四五	一五九	三五三	五三二	〇四四	
五〇	一一三	二〇七	六八四	〇〇四	
五五	一一三	一五八	七二三	九九四	

し、昭和三〇年では全農家戸数の六七％くらいが専業農家であった。ところが、それ以後日本経済の高度な成長と共に専業農家数が急速に減少し始め、四〇年ごろまでは第一種兼業農家(農業を主とし他の仕事を従とする農家)が急速に増加した。昭和四五年以降各地方自治体等による工場誘致も盛んに行なわれ、工場が地方に分散するにつれて農家の主要な働き手さえも工場勤めをするようになり、脱農業化傾向の顕著な第二種兼業農家(農業外の仕事で主で農業に従事する農家)が急増し、昭和五五年にはそれが全農家の七二・七％に達している。

このような兼業農家の増加は、昭和三〇年以降の急速な経済の発展に伴う工業の労働力需要の増大、また工業の労働生産力の急速な発展が農業の労働生産力の発展をはるかに越え、工業従事者の所得が増大して農業従事者との間に格段の優位が生じたことなどによるものである。さらに、経済の発展は第三次産業も急速に膨張させ、これらの産業への農業従事者からの移動もかなりあり、農家の兼業化へ一層の拍車をかけたためである。

これはまた、農業の機械化の進展と共に農業就業人口の減少をも招



図7-44 南筑輪の農家人口就業状況 (農林業センサス及び郡市勢要覧による)

ねており、昭和三五年の南筑輪の農業就業人口が最大で二七二名であったものが、昭和五五年においては二六八名と半数近くに減少している。

さらに、農家の世帯員が農業とその他の仕事とにどのようなかかわっているかをみると図7-44のようである。

この図によって農家の兼業化の実態を知ることができるが、この時期農家戸数はおよそ一〇〇〇戸内外であるから、農家人口の中で専ら他の仕事に従事するものと、自家農業と他の仕事に従事する者を合わせると、一戸当たりで一・五人、一・七人程度いることになり、これが農家を兼業農家たらしめている要素であり、昭和五五年においては農業だけに従事する者一二六八人に對し、前者の兼業農家たらしめている人数は合わせて一七三四人で一・三七倍と多くなっている。

兼業農家のこのような増加を

可能にした要因に農業機械の開発とその普及があり日曜や祭日等の休日だけでかなりの規模の農業が可能になり、また、兼業による現金収入の増加が機械化を促進するという、相互因果関係が生まれているように考えられる。

しかし、このような兼業農家の増加は、農業の担い手の質の低下になっている。いわゆる三ちゃん農業といわれるのがそれである。若い者は工場等に勤め、残ったかあちゃんやおぢいちゃん、おばあちゃんが農業をするという農家が多くなり、農業の改善進歩に対する意欲が少なくなり、また、農業後継者不足という深刻な問題が生まれて来ている。

五 農業基本法と農業構造改善

(一) 新しい農業への課題と農業基本法

昭和三六年六月、農業基本法が公布された。これは、農業界から久しく待望されていたものであるが、その背景はどこにあったのだろうか。

日本農業は戦後かなりの進歩を示したけれども、工業や商業の飛躍的發展に比べるとその度合いは小さく、家族的小経営という枠の中に閉じ込められた形で発展には限度があり、特に労働生産性の発展の立遅れが著しく農業と他産業との間の所得格差が拡大してきた。ここに大きな一つの問題点があった。

農産物の輸入は戦後急速に増加している。特にM・S・A協定に基づくアメリカ合衆国からの小麦の輸入は日本農業の麦作に壊滅的打撃を与え、三〇年代後半から麦の作付面積は急速に減少し、大豆もまた輸入大豆に押されて四〇年ごろには本村でも最盛期の四分の一以下に減少した。このほか、輸入自由化の拡大により農産物は多くの影響を受け

ており、これら輸入農産物の圧力に対抗することのできる農業の確立は、現在の日本農業に課された最大の課題になっている。

更に、経済の発展と共に国民全体の食生活が大きく変化し、従来の主穀（米）に味噌・汁・漬物という食内容から肉類・牛乳・卵等の動物性蛋白質の摂取量の増加、ビタミン類・無機塩類等を豊富に含む果物・野菜等に対する需要が増大し、全体として農産物に対する需要構造が大幅に変化してきている。戦後の食糧不足の時代には専ら主穀中心の農業が奨励され、農業生産力も主穀を中心に発展させて来たのであるが、これを変化した需要に応じた農業生産に変革する必要に迫られてきた。特に本村は西天竜地域の広大な水田を持ち伊那谷における穀倉地帯として、主穀中心の傾向は強く、これからもその傾向が強く残るものと思われるが、需要構造の変化に応じた農業経営の確立に真剣に取り組む必要が痛感されるに至っていた。

以上述べて来たような農業を取り巻く情勢に対処するため、日本農業の向かうべき針路の策定が要望されていたのであって、この針路を定め、政策目標を掲げたのが農業基本法である。したがって、以後の農業政策はこの農業基本法に基づいて進められることになった。

この基本法に示された内容は、農政の目標として「農業と他産業との生産性の格差が是正されるように農業の生産性を向上させること、および農業従事者の所得を増大して他産業従事者と均衡する生活を営むことのできるようにすること」を掲げ、この目標を達成するために施策の基本として次のような項目があげられた。

1. 農業生産の選択的拡大
2. 生産性の向上と生産量の増大
3. 農産物の価格安定
4. 農地移動の円滑化による経営規模の拡大

5. 農業構造改善事業の実施

これらのことを年々具体化するための政府の責任が法によって課されているわけであるが、これらの施策によって市町村段階で具体的な姿として現れて来たのが農業構造改善事業である。昭和三十六年から一〇年計画で第一次構造改善事業が始められ、同四五年からは第二次構造改善事業が行なわれている。この構造改善事業は、農業生産の基盤整備、農業近代化の施設導入、生産の選択的拡大を目的とし、適地適産を基調とした生産地形成を目標として進められてきた。

(一) 南箕輪における第一次構造改善事業

本村における第一次農業構造改善事業は、昭和三十八年から四一年にかけて、南箕輪中央地区として大泉川兩岸の大泉・南殿・田畑地区に對して行なわれた。その事業計画の構想に次のように述べている。

この地域は全耕地の約六〇％を占める水田の経営合理化を目的とし基盤整備を行なう。トラクターを中心とする大型農業機械を導入し、近代化された生産手段によって生産の増大を図り、省力された労働力をこの地域の水田経営と最も有機的に結合し得る肥育牛事業に集中して、一大産地を形成するにある。

これによると、基幹作物である稲作を中心としてこれを合理化し、省力された労力と水田裏作利用により肥育牛飼育を行ない、自立経営農家の育成を図るというにあり、その基盤整備事業としては、水田区画の大型化（三反歩区画にすること）は保留し、橋梁と農道の整備に重点を置き、経営近代化施設としては大型農機具の導入と、畜舎・堆肥舎の整備を行なっている。その事業内容と事業費の概要は表7-37のようである。

(二) 畑作総合改善パイロット地区設置事業

県は国の計画に基づき昭和四十六年畑作総合改善パイロット地区設置

目標経営類型

類型区分	作目構成	所得目標	経営面積	生産規模	労力構成
1 水専業経営	米	二、七〇〇千円	水田 四ha	水稲 四ha	基幹二人
2 複合経営	米・トマト	二、七〇〇千円	水田 三・五ha	水稲 三・四ha トマト 〇・一ha	"
3 複合経営	りんご・米	二、六〇〇千円	果樹園 〇・八ha 水田 〇・八ha	りんご 〇・八ha 水稲 〇・八ha	"
4 複合経営	乳牛	三、六〇〇千円	飼料畑 二・四ha 水田 〇・六ha	飼料畑 二・四ha 乳牛 二頭	"

この目的達成のための構造改善事業は次のように実施された。

北部地区農業構造改善事業の計画と実施

事業種目	事業内容	事業量	事業費	事業量	事業費
水田農業施設	トラクター 三九PS 自脱コンバイン 農機具格納庫	三台 六台 三台	三三、八四〇千円	二台 五台 三台	二七、八七七千円
園芸農業施設	スピードスプレ ーヤー五〇〇リ トラクター 三九PS	二台 一台	五、一〇〇千円	二台 一台	五、五六六千円
畜産農業施設	農機具格納庫	一台	九、七三〇千円	一台	一一、六三六千円
水田作地施設	現乾燥調整施設	一棟	二〇〇、〇〇〇千円	一棟	一九四、三三五千円
単独融資事業	りんご園造成 パイプハウス 導入 乳牛舎・ 乳牛導入	一六人 一〇人 五人	四六、九〇〇千円 一三、〇〇〇千円 三七、〇〇〇千円	一六人 〇人 四	八、五九六千円 事業計画 変更中止 三九、三九八千円

上記事業を五二年より四六年で実施

(役員文書)



図7-47 第二次農業構造改善事業水田作地施設ライスセンター内部



図7-48 第二次農業構造改善事業水田農業施設—コンバイン

北部に5台南部に4台計9台導入された

2 南部地区構造改善事業

この地区は田畑・種子・柴・南原を含む地域で、水田地帯の稲作を中心とした農業経営と、畑地帯の酪農・野菜を中心とした農業経営の地域として、長期の見通しの上に立って水田地帯と畑地帯との稲作と畑作の相互利用等有機的結合を考慮しつつ、米・野菜・酪農・花卉を基幹とし、構造改善事業によって農業施設、生産施設団地を整備して生産性の高い自立経営、共同組織の育成をすると共に規模の拡大を図り、左の目標のような地域農業の中核的担い手である近代的经营を確立することを目的としている。

目標経営類型

類型区分	作日構成	所得目標	経営面積	生産規模	労力
1 水稲・野菜 複合経営	米・トマト	二、八〇〇 ^{千円}	水田三・六ha	水稲三・五ha トハウス〇・一ha	基幹二人
2 酪農専業経営	乳牛	三、六〇〇 ^{千円}	飼料畑 三〇ha	同上	"
3 花卉専業経営	カーネーション	二、八〇〇 ^{千円}	水田〇・三ha	ガラス温室 二一〇〇 [㎡]	"

この目的達成のため次のような事業が実施された。

南部地区農業改善事業計画と実施

事業種目	事業内容	計 事業量	事業費 事業量	事業費 事業量	事業費 事業量
水田農業施設	トラクター 三九P.S. 自脱コンバイン 農機具格納庫	二台 四台 九〇 ^台 一棟	二〇、七〇〇 ^{千円}	二台 四台 一棟	二二、九六五 ^{千円}
畜産団地造成	牛舎付番一式 地 肥 舎	七棟 七ヶ	一四三、五〇〇	五ヶ 七ヶ	一二七、四四五
園芸団地造成	ガラス温室一式 作業 舎	一六棟 一ヶ	二〇四、二〇〇	一六ヶ 一ヶ	二〇二、一九六
単独融資事業	パイプハウス導入 農用トラクタ導入	二〇〇 ^台 五〇 ^台 五〇 ^台	一六、〇〇〇 二〇、〇〇〇 三、二五〇	〇 五八 四四 ^台	計画変更 により中止 一四、九八〇 二、六〇〇

右記事業を五二年より四四年で実施

(役書文書)

(四) 西部農業開発事業

中央高速自動車道は伊那盆地西部の畑地帯を南北に縦貫することになった。この中央自動車道開設に伴うメリットを求め、昭和四二年伊那北部中央道関連農業開発推進協議会を組織し、従来後進農業地域とされてきた西部地域の農業開発についての施策を、県や国に強く要請した。これによって、昭和四二年から伊那西部地区について国営土地改良事業の計画が始められ、辰野・箕輪・南箕輪・伊那の一市二町一村にまたがる西部畑作地帯に対する「西部農業開発事業」が行なわれることになった。その当初計画の概要は次のとおりである。

1. 国営かんがい事業（農林省直営）

受益戸数 六三七戸（本村関係分のみ）

全面積 三二八七ha（本村関係四七ha）



図7-48 畜産団地（酪農）の牛舎・堆肥舎



図7-49 園芸団地のカーネーション温室

事業費 四三億三〇〇〇万円

2. 県営畑地帯総合土地改良事業（県営）

受益戸数 六三七戸（本村関係分のみ）

全面積 二六七〇ha（本村関係四四七ha）

事業費 五三億二〇〇〇万円

内容 畑地かんがい

区画整理 全体面積一七三六ha（本村関係三三五・六ha）

3. 広域営農団地農道整備事業（県営）

受益戸数 六三七戸

大規模農道 二七ha 南冥輪村内 九・二ha

幹線農道 三六ha 同右 四・一ha

支線農道 一〇〇ha 同右 七・一ha

事業費 一〇億三三八万円

この開発事業の中心は西部畑作地帯に対する畑作かんがい事業であって、用水源を天竜川沿いの排水路に求め、南冥輪村畑地先で最大毎秒三・一八六m³を確保し、二か所に揚水機場を設置して台地上に二段送水をし、上下二段の南北に広がる幹線水路、調整池等の水利施設を「国営かんがい事業」として施工し、それより先の配水幹線水路、調整池・圃場内施設及び区画整理等は「県営総合土地改良事業」として施工し、二六七〇haの土地の畑地かんがいをし、六一八haの水田に用水補給をすることになっていた。

この事業は昭和四七―五三年の工期で始められ、途中で受益戸数、受益面積等に若干の変更があり現在なお進行中であるが、これによって中央自動車道に並行して走る広域大規模農道を中心に四通八達する農道や、基盤整備事業や、揚水施設の整備により、中央自動車道の開通と共に見違えるような景観が生まれつつある。

しかし、当初この揚水計画は西部畑地帯全域を水田に造成する目的で立案されたもので、それが米の過剰傾向による国の農政の転換により、計画は田畑換へ、さらに畑かんがい事業へと変更したものであって、当初の氣勢をそがれたことはいなめない。

本事業の主目的である畑かんがい事業が、このようないきさつから生まれたものであること、個人の施設費に多くの資金が必要であること、当地域が年降水量一五〇〇―一六〇〇mmでそれほど過乾燥状態になることが少ないことなどから、事業施設の効果的運用について問題があるようである。この点については関東農政局・県関係機関・土地改良区・関係市町村や農協等鋭意研究協議が重ねられているが、今後の大きな課題となっている。

4. その他の農業振興事業

昭和四五年、野菜指定産地の振興事業として、農業協同組合が事業主体となって野菜の集出荷場が作られた。

昭和四六年、地域特産農業推進事業として、果樹や野菜のうち、青果トマト・加工トマト・短根人参等を中心として野菜特産地形成を推進するため、神子柴地区御射山社跡北側、春日街道沿いに野菜の集出荷場が建設され、さらにそれは五〇―五一年の広域営農団地総合施設整備事業によって、大型広域集出荷場として拡張充実され、五四年には、野菜輸送合理化推進事業によって助成が行われ、野菜保鮮共同施設（野菜予冷庫）が付設され、事業主体である伊那農協における果樹野菜類の中心的集出荷場となった。

一方、稲作経営においては田植機械の普及に伴い、機械植用育苗方式の合理化のために大型水稻共同育苗施設設置事業が実施され、八幡宮の北に大型の水稻育苗施設（育苗センター）が昭和四六年に設置され、現在この育苗センターにおいて毎年一五〇ha内外の機械植用種



図7-50 広域集出荷場施設整備事業による広域集出荷場

苗の緑化苗が育成配布されている。

昭和四八年には、稲作転換拠点集団育成事業として青果トマトの集出荷場にフォークリフトが備え付けられほかに、自給肥料総合振興対策事業によってサイロ機械、乾草貯蔵庫の設置に助成が行なわれている。

さらに、伊那市が事業主体として進めた新農業構造改善事業の一環として、農村地域改善事業地域施設整備事業が行なわれ、伊那農協が事業実施主体となり、さきの

広域集出荷場に隣接して二億九〇〇〇万円（うち補助金約二分の一）の巨費を投じてりんご選果場が建設され、昭和五九年よりりんご専門の選果場としてその稼動を始めた。この選果場はマキ式センサーカメラ式形状選別機を備え、一日六五〇〇ケースの選果能力を持つ大型選果場である。こうして先に建設された広域集出荷場は梨のほか、現在、ピーマン・スイートコーン・アスパラガス等の野菜の集出荷を野菜予冷庫の合理的利用と組み合わせ運営されている。

なお、この間、村単独事業としては、りんご団地化推進事業・畜産環境整備地力増進事業等が行なわれた。

このようにして、農業基本法によって指向された農業の方向が一步実現されているように感ぜられる。村全体として南箕輪村は依然として水田中心の農業であるが農産物の選択的拡大の線に添って、酪

農・果樹（種化りんご・花卉等を経営の中心に据えた農家が生まれて来ており、また、上からの指導という形ではあるが、大規模生産流通施設を中心として協業化についても徐々に進んでいると考えられる。

しかし、これらの推進された事業に直接関与している個々の農民が、農業基本法の目指している中堅自立経営農家として充分に確立されているかという最も重要な問題点になると遺憾ながら極めて不十分であり、特に稲作を中心とした中堅自立経営農家の育成はほど遠いものがある。社会経済状況の変化は、農業基本法の立場を越えてさらに進んでいるといえよう。

六 畜産および園芸の発展

(一) 畜産の発展

1 戦後の畜産の発展

戦後二、三年は食糧増産に必死であって畜産の停滞は続いた。しかし、昭和二五年ころから再び農業有畜化が進められた。

果は昭和二二年第一次畜産振興計画を策定し、翌年から生産性の高い家畜を中心に増殖を進め、さらに、二五年には第二次畜産振興五年計画を立てた。この事業によって二七年からの有畜農家創設事業や二九年の高冷地酪農振興事業が始められた。

この果の計画のもとで、村は昭和二九年に南箕輪畜産振興施設計画を樹立した。その概要は次のようである。

畜産振興施設計画

昭和二十八年の大凶作により（中略）農業経営を建て直すには経営の大転換を必要とするかかる時村民経済を将来共に健全ならしむる村の大政策として、大量の家畜を導入し、貸付けによって、現在の役肉牛二九六、乳牛一三〇、種羊二七九、山羊三〇〇を併せて酪農村を形成し、地肥の増産により農耕地の培養地力の増進等を計り、乳価の現金収入と同時に農産物の生産性向上に

より、村民経済の安定を期したい。

有畜農家創設増進整備

一、目的 有畜農家を創設することにより、農業経営合理化を推進し、その生産力を高めることを目的とする。

二、目標 現在の無畜農家戸数二〇七戸中、経営規模と経営形態から見て有畜化が可能であり且つこれを必要とする一〇〇戸、これを三年以内に有畜化することとし、第一次計画として経済自立計画に基づき、乳牛二〇頭・役肉牛一〇頭・種羊・山羊種畜各一〇頭、約五〇戸を有畜化する。

(役場文書)

南箕輪村貸付乳牛委託管理規程

第一条 村長は長野県家畜貸付規程の主旨に基づき、この規程の定むるところにより貸付乳牛の飼養管理を委託する。

第六条 貸付乳牛の貸付期間は五年間とする。(以下略)

第八条 管理者は第六条の期間内にその貸付乳牛から生産された最初の牝牛を借り受け頭数と同頭数村長に返納しなければならない。

(役場文書)

このように村は第一次計画として右記の家畜頭数を導入し五〇戸の農家(後の五〇戸は第二次計画)を有畜化する。特に乳牛は資金がかかるので、貸付規定を設けて農家の導入を便している。このような振興計画は村として始めてのものであって、各農家の導入による有畜化は急速に進み、乳牛については二七年ごろから酪農ブームに入っていたが、第二次計画と共に村内酪農振興の大きなステップになったのである。

こうして、二九年度末には村内乳牛は一五〇頭を超え、三三年には二六〇頭と急速に増加し、森永乳業・協同乳業・三協乳業の系列化に入って牛乳を販売し、現金収入をもたらしたが、各農家の飼育規模は

一・二頭で、まだ副業の域を脱するまでには至らなかった。

昭和三年には、果は第三次畜産振興計画を立て、さらに三一・三五年には新農村建設事業が始まった。南箕輪は昭和三年に西箕輪と協同して地域農村振興協議会を作り、各種振興事業を行なっているが、そのうち畜産振興に関する本村関係分は表7-39のようである。

表7-39 新農村建設のうち畜産振興事業

事業名	事業量	事業内容	推進主体	受益範囲
乳牛導入	二〇一頭	導入	南箕輪農協	四〇戸
役肉牛導入	三〇頭	導入	"	一〇戸
豚導入	一〇〇頭	種用及子豚導入	"	二二〇戸
種羊導入	一四一頭	子種羊導入	"	六〇戸
鶏導入	三、六六三羽	導入	"	四〇〇戸
集乳所建設	九棟	建物及び冷却施設	"	四〇〇戸
共同育雛所	一棟	建物施設	"	四〇〇戸
家畜管理所	一棟	"	"	九四二戸
飼料促進施設	一〇〇反	飼料調整	"	九六〇戸
カッター	八八	"	"	九六〇戸

この事業の中心は家畜の導入と施設の整備で、乳牛はじめ中小家畜の導入を積極的に進め、施設においては集乳所を作って集乳の合理化を図り、また家畜の高価な個体の増加に伴い疾病予防のため家畜管理所を設置し、家畜の健康保護を図り、養鶏のためには共同育雛所を設置して育雛の技術的経済的負担の軽減を図るとしている。村の有畜化も軌道に乗った感じである。

このように、有畜化は進んできたのであるが、経済の発展、社会情勢の変化につれて家畜の種類による盛衰が甚だしい。かつて家畜の中心であった馬は動力農機具の発達導入、車両の発達によって昭和二〇

年代後半から急速に減少し、四〇年代ではその姿を見ることが出来なくなり、役牛も馬より多少後まで残ったが馬と同じ道をたどった。また、戦後の衣料不足の時代、幅をきかした縮羊も三〇年代には急速に減少し、鶏は三〇年代の中ごろ急増し、一〇〇羽〜二〇〇羽と飼育規模を大きくした農家が数多く生まれたが、鶏卵価格の変動等により四〇年代に急減し、現在では鶏を飼う農家は珍しくなり、山羊、豚はやや遅くまで飼育頭数が維持されたが第二種兼業農家の増加と共に次第に減少している。これに代わって増加してきたのが、乳牛と肉牛の大家畜である。南箕輪における家畜の飼育戸数及び飼育頭数の変化の状況は表7-40及び図7-51・52のようである。

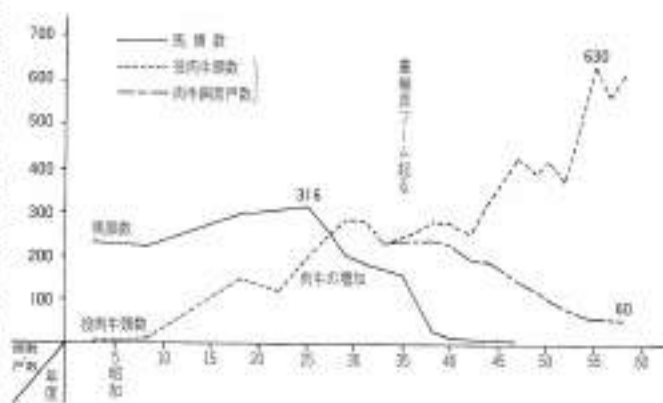


図7-51 馬・役牛飼育戸数と肉牛飼育戸数の変化（南箕輪村）

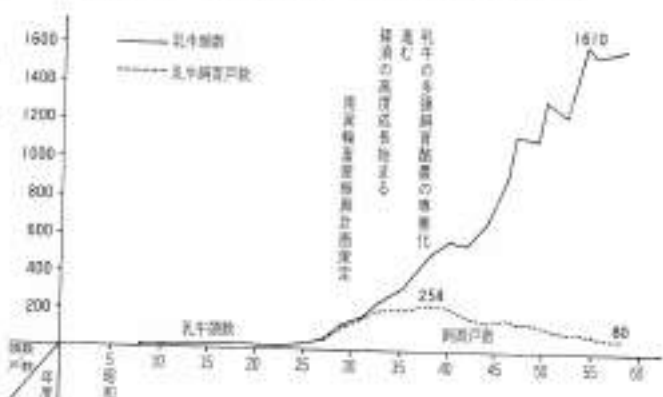


図7-52 乳牛飼育戸数・飼育戸数の変化（南箕輪村）

2 畜産経営の多頭化・専業化

昭和三十八年から始まった村の第一次構造改善事業によって水田経営と有機的に結合し得る肥育牛事業を導入したことはすでに述べたが、この計画によって肉牛舎六〇棟、堆肥舎五〇棟が建設され、多くの農家が一〜二頭の肥育牛の飼育を始め、肥育牛の頭数はしだいに増加し、四七年には四〇〇頭を超えている。

この肉牛の飼育は稲作の補充部門として、既存農家の雑多な部門を整理し補充部門を拡充して技術の高度化をはかり、自立経営の確立することを目的としており、従来の副業的畜産よりは一歩前進した意図を示していたが、経済の発展はさらに経営の合理化、効率化を要求していた。

一頭飼育よりは二頭飼育、二頭飼育よりは五頭飼育の方が飼料の購入、飼養管理、販売等すべてに合理的であって、一頭当たりの生産費は安価となる、このような合理化の出来ない農家は経済的競争に落伍することになる。このようにして、副業的経営としての畜産は、農家の兼業化とともにしだいに減少し、家畜の飼育戸数は減少し、逆に一戸当たりの飼育頭数はしだいに多頭化の傾向を示すようになった。その傾向は特に昭和四〇年代中ごろから顕著になった。（表7-41・図7-53）

このような傾向の中で、元来副業的性格を持つ山羊は急速に減少し、豚・鶏等の飼料をほとんど購入に頼らなければならぬ家畜は、徹底した大規模化、合理化を図らなくてはならないため、村内ではしだいに衰退してゆくことになった。

昭和五一年から始まった第二次構造改善事業は、このような情勢の上に立って一層それを推進させるものであった。この事業の自立経営

表7-40 南筑輪における家畜の飼育戸数・飼育頭数

年度	馬		役肉牛		乳牛		豚		種羊		山羊		鶏		兎	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数
昭和1		265	1	1			66					3	395	2,130		
3		234		5			60					4	286	1,334		
8		227		8	1	1	88					29	280	2,608		443
13											150	165	278	2,443		434
18	291	295	139	146	16	20	48	67	30	37	161	168	530	1,476	499	737
22	302	307	125	125	9	11	6	6	12	21	20	40	431	1,408	820	2,047
25	310	316	195	201	20	23	89	113	72	100	243	252	735	2,415	452	910
27	266	266	253	253	51	56	149	199	104	145	304	313	717	5,080	221	386
29	205	207	279	287	112	131	72	116	209	290	289	294	701	5,975	155	322
31	187	187	284	284	167	176	361	391	237	284	262	279	717	5,256	152	350
33	171	173	230	235	204	260	127	224	176	224	197	221	650	5,688	124	241
35	156	157	240	249	217	305	223	371	160	181	290	297	727	9,229	119	306
38	28	28	239	278	254	520	192	305	30	31	264	280	593	9,946	158	568
40	19	19	232	276	238	587	113	192	19	22	224	231	450	6,243	91	479
42			191	253	198	563	75	193					271	3,748		
44			190	337	170	669	80	149					370	5,900		
47	5	5	140	430	170	1,150	40	200			180	190	320	4,870	70	250
49			130	390	150	1,120	30	210					180	4,700		200
50	5	6	120	420	200	1,330	10	260				150	50	500		
54			60	560	100	1,610	10	150					30	200		
55			60	630	90	1,560	-	150					30	500		
58			60	620	80	1,600	10	60								

育成計画の中に次のように述べている。



図7-53 酪農経営の多頭化と近代化（昭和40年代末～50年代）の進んだ牛舎

酪農生産団地造成により酪農専業経営志向農家が参加し、所得目標三六〇万円以上の規模拡大と経営合理化を図るため飼料生産、飼料購入、生産物出荷、糞尿処理等一体的にすすめ、或いは飼料畑の確保と水田の飼料畑化により飼料栽培の機械化一貫作業の協業化をす

表7-41 南筑輪における家畜飼育の多頭化

年度	1戸当たり飼育頭数	
	乳牛	肉牛
昭和35	1.4	1.0
38	2.1	1.2
42	2.8	1.3
47	6.8	3.1
50	7.5	3.5
54	16.1	9.3
58	20.0	10.3

すめ、粗飼料自給率を高め、大規模酪農専業農家を育成する

〔後援文書〕

このような目標実現のため、大型牛舎（七）増設、トラクター兼用処理機、農機具格納庫等の諸施設を行なっており、ほかに多頭化のために乳牛の導入を行なっている。ここでは明らかに、酪農の多頭化と専業化を目標としていることがわかる。

もちろんこの間の個々の酪農家の真摯な努力と多額の投資が行なわれているわけであるが、畜産はかつての副業的畜産から、専業的経営へ脱皮したことを示している。

(二) 園芸の発展

1 戦後の果樹園芸の発展

太平洋戦争が終結し、戦後の混乱がやや収まると園芸農業は再び活気を取りもどして来た。早くも昭和二十二年には北信地方の果樹栽培家の要望をふまえて、果樹試験場須坂園芸分場が設置（三四年には果樹試験場に昇格）され、二三年には農林省は野菜増産のため産地を指定し、指定された産地には肥料を増配する措置をとるなど、しだいに園芸農業はその地歩を固め、昭和二十四年には作付統制令が廃止されて果樹の新植や、園芸作物の選択が自由となり食生活の変化につれて園芸農業は畜産業と共に、長野県農業の花形部門として成長することになった。

本村においても二十世紀梨の栽培は、昭和三〇年代に急速に増加し、三五年には三五haに達した。しかし、本村は依然として稲作中心で、他町村に比べると少ない方であった（表7-42）。また、村内の蘋果および梨の作付反別と出荷量の消長は図7-54のようである。

この間園芸農業は技術面においても著しい進歩を遂げている。果樹園芸についてはその整枝剪定においては大きな進歩がある。梨は

表7-42 上伊那市町村別果樹園地面積表

果樹・年次	りんご		日本なし	
	昭 30	40	昭 30	40
市町村				
野 町	46.8	53.0	10.6	10.0
真 町	58.5	64.0	35.0	65.0
飯 町	20.3	25.0	23.6	65.0
高 町	11.7	16.0	3.1	1.0
南 町	6.4	11.0	9.0	17.0
宮 町	11.5	15.0	5.0	7.0
中 川	27.0	32.0	22.0	47.0
長 谷	3.3	3.0	1.2	1.0
計	185.5	219.0	109.5	213.0
伊 那 市	41.4	45.0	50.9	63.0
駒 根 市	25.0	31.0	16.6	24.0
合 計	251.9	295.0	177.0	300.0
収 穫 量 (t)	2,338	4,560	2,229	8,970

従来、折衷式樹仕立が行われていたが、桃沢匠勝によって自然の樹勢を損なわない方法として栽植密度を反当一〇本ぐらいとし、地上四〇（五〇cm）から四本の主枝を伸ばして細に着ける盞収式樹仕立が案確立され、苹果においても栽植密度を反当一〇本ぐらいとし、変則主幹形の主枝及び垂主枝を真直に伸ばす革新的技法を採用するようになった。

農業の進歩も著しく、従来のボルドー液・硫酸鉛中心の農業から有機合成殺菌剤・抗生物質・DDTやBHC等の有機塩素剤・有機P剤等の殺菌殺虫効果の勝れた薬剤の出現のほか、散布機具の進歩、共同防除等によってすぐれた成果を示すようになった。土壌管理についても従来の精耕法から、深耕による有機物の施用のほか、省力法として

備し、栽培者を募集しカゴメトマト会社との契約を結び、昭和二八年には上伊那トマト組合が結成され、本村は南箕輪支部として、この年一・五haのトマト栽培が始まった。この年は不幸にして六月下旬より八月中旬に至る記録的な長雨のため他の作物と共にトマトも壊滅的な打撃を受けたが、栽培農家の新しい農業を起そうとする熱意はさめず、契約栽培という安定性もあって二九年には三ha、三〇年には一〇haと急速に栽培面積は増加して県下有数の産地になった。

栽培面積の増加に伴って、加工用以外に青果トマトを栽培し、大都市に向けて出荷販売する輸送園芸が当地にも始まり、若い園芸農家たちの熱意は燃え、夜の二時ころまで農協の屋根下を借りて選果荷造りの共同作業が行なわれ、また、米進駐軍の土壌検査に合格し、その指定産地として本村から特需トマトを供給したのもこのころのことであった。

こうして、トマトはその後も村の野菜園芸の柱として発展を続け、南箕輪トマト組合は昭和三六年に発展的に解消するまでその推進力となっていたのである。

農業用のビニールの使用は、本村においては南殿の清水一清が昭和三一年ビニールハウスとして初めて本格的に利用し、トマト、胡瓜などの栽培を行なった。その後ビニール利用の園芸は急速に発展し、施設園芸用ハウスの構造も改良され大型化し、ガラス温室も作られるようになった。

昭和三五年ごろには南殿に蔬菜生産組合が結成されて、伊那における唯一の青果物市場であった丸伊青果市場と契約して出荷するなど近郊園芸農業も始まり、四〇年代に入ると、農業協同組合も野菜園芸の振興に力を入れるようになった。

青果物の生産が増加するにつれ、選別、荷送り等も共同作業による

標準化と規格化が強く要求されるようになり、園芸関係農家からの共同集出荷場建設の要望が高まって来た。そこで、昭和四五年南箕輪農協が事業主体となり、野菜指定産地振興事業として南殿宮ノ上へ野菜の集出荷場が建設され、同時に大型ハウスによる共同育苗場も設けられた。

野菜園芸の拠点である集出荷場の完成は村の野菜園芸の発展に大きな役割を果たし、トマト、長芋などを中心に生産出荷が盛んになった。

3 選択的拡大、米の作付制限と園芸農業

園芸作物は選択的拡大部門であるが、産地間の競争、輸入果物の圧力、価格変動等多くの課題を持っている。

二十世紀梨は比較的収益性が低く栽培面での省力化が困難であることから栽培面積は漸減傾向であり、本村においては三六年以後急速に減少し、現在ではごく一部に残っているのみである。これに反して、昭和四八年から、りんごが急速に栽培されるようになり、梨と交代する形を示している。(図7-54)

りんごについては、輸入果物の圧力もあり、既に生産は停滞気味であるが、新品種への転換、新産地の形成、矮化栽培による労働生産性の向上に、その改善目標を置いて停滞性の打破に努めている。

本村のりんご栽培もこの目標に従って昭和四八年畑作総合改善パイロット地区設置事業として、西部畑作地帯に一〇haの矮化りんご団地が造成され、つがる・ふじの二品種を中心として五〇年度から出荷が始められ、さらに五〇年度には果樹新産地開発促進事業として果樹園面積の増大と大型防除機の購入による経営の近代化合理化が進められ、五八年現在二〇haを超え、出荷量は四万箱を超えるようになっていく。伊那農協管内の西箕輪地区等のりんご団地と合わせて、流通市

場での評価を高め得る団地を形成するよう努力中であり、五九年には大型のりんご専用選果場も建設された。

四〇年半ばから始まった米の作付け制限・水田利用再編成事業は、真剣に将来の農業のありかたを考えさせるようになり、野菜類も重要な転作物として次々と新旧の野菜が登場してくるようになった。昭和四十六年上伊那中部八農協が合併し伊那農業協同組合となり、野菜園芸の各部会もこれにつれて広域的なつながりを持つようになり、生産販売の面で有利になったが、このころから交通機関、特に高速自動車道の発達による貨物輸送の発展により農産物、特に青果物の市場状況に大きな影響を与え、従来伊那の野菜類は東京市場が重点であったものが東北地方の進出によって、中京や関西市場に重点が移るようになった。また、全国的な転作のため需給の変動が著しく安定生産が困難な状態になっている。

本村においては、昭和四十七八年ころからスイートコーン、アスパラガスが作られ始め、一部にレタス、ピーマン、カリフラワー、ブロッコリー等の洋菜類が栽培されるようになっていたが、村内における販売野菜の種類と栽培面積の消長は図7-56のようである。

四〇年代半ばまでは加工トマトと山牛蒡が作られ、それに長芋が途中から入り、四十七八年ころからはトマトのほかにスイートコーン、

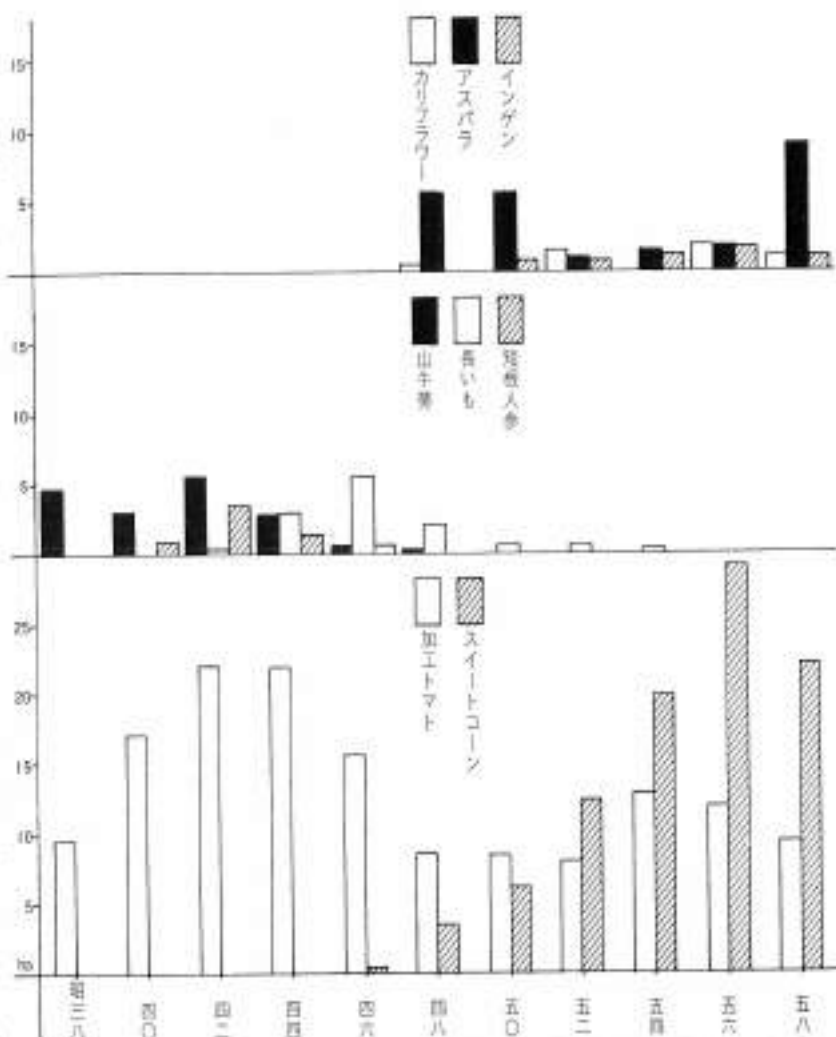


図7-56 南筑輪における野菜（販売）の作付面積の消長（伊那農協南筑輪事業所資料より作成）

アスパラガス、カリフラワー、インゲン等が中心となって大きく種類が変化し、現在はトマト、スイートコーン、アスパラガスが中心になっている。

野菜類は作付面積の増減が容易であり、また年度による豊凶の差が大きいので需給のバランスが崩れ易く、経営者にとっては不安定な面が多い、この点すでに昭和四一年に野菜生産出荷安定法が制定され、

四六年には野菜生産出荷安定資金事業が行われており、当地としても農協の施設として野菜冷凍庫を建設し輸送販売の合理化に努めているが、村内における野菜生産は漸くその確にいたばかりであって、まだ産地形成が行なわれたという段階に達したとは言いがたい。常に新しい感覚と今後のたゆみない努力によって、産地としてその地歩を確立してゆくことが必要であると思われる。

4 花卉園芸の発展

本村における花卉園芸の歴史は浅いが、野菜のハウス栽培の経験を生かし、数戸の園芸農家が、ビニール温室によって昭和四二年ころから、シクラメン・てっぽうゆり、カーネーションなど花卉栽培を行なって成果をあげ、村内における花卉栽培の先駆となり、更に、ばら・しきり・ストック・アルストメリアなどがとり入れられその種類と面積が次第に増加している。

次に花卉園芸で注目すべきは、第二次農業構造改善事業の中で行なわれた園芸団地造成事業である。この事業は五人の志望者によって経営されるべくガラス温室一六棟、作業舎一棟を建設し、カーネーションの栽培が行なわれているが、その栽培用床土設置の構造、土壌消毒機、省エネルギー対策等各人の創意を生かして、共同の力によって立派な成果をあげ、国内はもちろん諸外国からの研修者が訪れるほどの進んだ経営をしている。

以上のような、花卉の施設園芸に比し一般の花卉園芸はまだ発達が遅れている。花卉園芸は極めて集約的で、技術的にも資本の面でも高度なものが要求される精密農業ともいえるもので、なお一層の研究努力が望まれる。

七 米の作付制限と総合農政への対応



図7-57 花卉園芸温室（清水一清）



図7-58 花卉園芸団地のカーネーション

稲作技術の進歩と全国的な開田ブーム（昭和二〇―三〇年代）等による稲作面積の増大によって米の生産額は著しく増大した。

反面食生活の変化によって米の需要量の減少となり、米は不足から過剰へと転換し、政府保有在庫米は昭和四三年ころから急増した。そのため、政府は同四四年から米の生産制限に踏み切り、同四五年には全国で三三万七八〇〇haという本格的な作付け減反を実施した。

大部分の農民はこれに反対の姿勢を示したが、農業協同組合を中心として、この過剰傾向を放置しておけば、やがて食糧管理制度が崩壊するであろうという見通しから、食糧管理制度を守るために減反政策に協力せざるを得ないという方針をとることになり、農民もこれに協力せざるを得なかった。

全国的にはこの米の慢性的過剰という状況を見てとって、稲作に見切りをつけ園芸や畜産等に転向する農家もあり、政府目標を一〇〇%

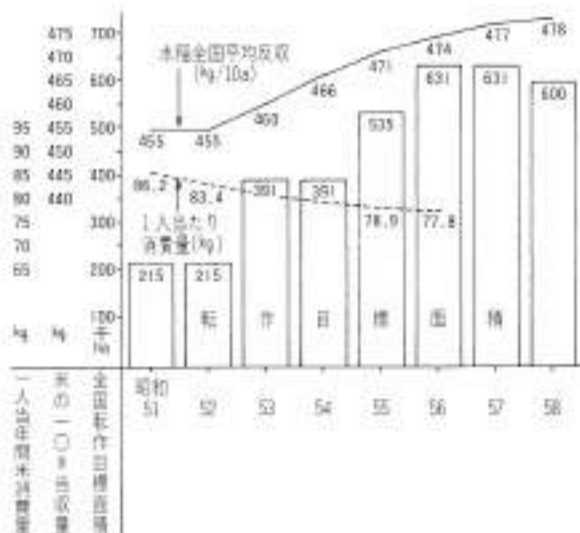


図7-59 全国水稲平均反収・1人あたり米消費量の変化と転作目標面積

以上達成することになったが米の過剰傾向はいつに緩和されず、減反面積はしだいに増加し、四七年には実減反面積は五六万六〇〇〇haに達した。

この段階における政策は米の生産量の減少による過剰米の解消が目標であって、減反をした水田は転作が半分、休耕が半分という状態である。そのいづれにも減反奨励金が交付された。しかし、この米の作付制限は日本農業の重大な転機となったのであり、かつ小農経営の破綻を決定的にすることになった。

本村のように水稲耕作に最大の努力を傾注してきた農民にとって、農業の将来に大きな不安を持つことになった。戦後二〇年余食糧増産という至上命令により米の増産に励み、広大で優良な水田地帯を持つ村として、米作に力を入れることによって農家が豊かになり村が

表7-44 南翼輪における転作面積

年度	割当面積	実施面積
昭和45	41.0 ^{ha}	46.06 ^{ha}
46	87.7	82.93
54	67.05	81.10
55	96.0	102.0
56	135.8	135.89
57	135.8	142.14

昭和五三年より米の生産制限は、水田利用再編対策事業となり、減反をした水田は他の作物を作付けすることを義務付け、単なる休耕田には奨励金が出ないことになった。その転作は一時しのぎでなく、それぞれ地域に適した作目を選定し、需要に応じた主産地あるいは特産地として育成し、将来にわたって米の生産量を抑制しようというものであった。

しかし、その転作目標面積は次第に増加しており、南翼輪村の転作面積は表7-44のようになっている。昭和五十六年度以降は農家保有米面積を除いた

表7-43 戦後における米価の上昇

年度	150kg当り米価
26	7,890 ^円
28	10,976
30	10,170
32	10,138
33	10,008
34	10,008
35	9,998
36	10,604
37	11,782
38	12,875
39	14,600
40	15,947
41	17,552
42	19,200
43	20,337
44	20,337
45	20,609
46	21,412
47	22,381
48	25,617
49	33,984
50	38,980

案えると思っていた心の動揺は大きかった。とくに米は他の農産物に比べ収益のあがる作物で、農基法の公布された昭和三六年以降も表7-43のように米価も年々値上げされ、安定した収益を保障されていたからである。

残りの水田面積の約三分の一の面積を転作しなければならぬことである。その転作の作目については農協等により研究指導が行なわれているが、農家の中には奨励金対策としての傾向も強く定着傾向は少ない。その点について昭和五三年一月農業委員会が水田利用再編成対策について村内農家に対してアンケート調査をした集計結果の一部を掲げてみよう。

水田再編成対策事業アンケート結果（一部）

一、転作に対する態度

- ・自主的にやった 二二三人（三五％）
- ・仕方なくやった 三一人（四八％）
- ・他人に頼んだ 七人（一二％）
- ・無回答 三一人（五〇％）

二、転作をして一番困ったこと

- ・収入減 二二七人（二八％）
- ・稲作より労力がかかった 二一人（二六％）
- ・転作作目の選択 一九人（二四％）
- ・別に困らなかった 一〇六人（一三％）
- ・無回答 九六人（一二％）
- 三、休耕田へも奨励金を出すべきと思うか
- ・思う 四四七人（六八％）
- ・思わない 一〇八人（一三％）
- ・無回答 三四人（一五％）

（東京農村部より）

この結果を見ると転作の定着が進まないのは、転作政策も世界の食糧事情や冷害の発生等を考え数年にして解消されるのではないかという期待を持つ心理があること、稲作よりも有利安全な作目が容易に見当たらないこと、兼業農家の増加により転作に真剣にとり組む意気込み

に欠けることが原因になっているように感ぜられる。その場しのぎの転作から、将来の農業や村のあるべき姿を目指しての転作定着への努力が村の農政や農家に課された大きな課題となっている。

米の生産調整の始まった昭和四四年九月、政府は「総合農政の推進について」と題する基本方針を示し、その農政の基本方向として、次の六項目の柱を示した。

- 1、規模が大きく生産性の高い近代農業の育成を図る。
- 2、米の生産調整を図り、需要に見合った農業生産を推進する。
- 3、農産物の価格の安定を図り、流通の近代化を図る。
- 4、農業で自立しようとする農家に対しては農業所得により、それ以外の農家については農外所得の安定増大により、他産業従事者との均衡のとれた所得生活水準を確保することに努める。
- 5、離農を希望するものが円滑に離農できるよう援助促進する。
- 6、農村地域の生産基盤と生活環境を総合的に整備し新しい農村社会の建設を計る。

この政策の中で、近代農業の育成という項では「農業が産業として確立できるよう規模が大きく、生産の高い高効率農業経営ないし農作業単位をできるだけ高範囲に育成することが重要」とあり、はつきり規模の大きい自立経営農家の育成を目指し、貧農切り捨て政策と非難された性格を持っている。貧農に対しては、農外所得の安定増大という兼業化の方向と、離農を希望する者が円滑に離農できるよう援助するという離農の方向である。

このため、昭和四五年農地法の一部を改正して、農地の所有制限の撤廃、小作料統制の廃止、農業生産法人の農地取得の緩和を打ち出し、日本の長年の農政の基本方針として来た家族的小農経営と自作農主義は捨てられ、また、農協による農業経営受託の推進を図る等、農

地の流動化を進めると共に農業規模拡大の道を開いた。この考え方は第二次農業構造改善事業計画にも採り入れられている。昭和五二年から始まった本村の第二次構造改善事業計画書に、自立経営農家の経営類型と目標規模を示し、協業など集団的生産組織及び広域営農集団の育成を併記して、大規模自立経営農家の育成を目指している。

農外所得の安定増大这一点については、農家の兼業の機会を確保するというねらいを持った「農村地域工業導入促進法」を昭和四六年に成立させており、工場の農村地域への進出が進み、農家の兼業家が進んでいるが、都市労働力の不足対策、低い賃金を求めている農村地域への工場進出という工業側の労働力不足対策の傾向が強く、また長年の農民の土地に対する執着心の強さから完全な農業からの離脱は容易に達しない。

農村地域の生産基盤と生活環境を総合的に整備する、の項目では農業振興地域整備計画制度が主要な施策となっているが、本村における農業振興地域整備計画では次のように述べている。

「近年における高度経済成長のもと社会経済状況は著しく変じ、特に工業開発及び交通網の整備進展に農地の無秩序な荒廃、土地利用度の低下、農業経営の粗放化による生産意欲の減退の中で、今後とも需要の動向に即応した農産物の安定的供給及び生産性の高い農業経営の育成実現のため、『魅力』ある農業地帯を実現するため村では四六年以降おおむね十年を見通し、今後とも農業の振興を図る地域を明らかにし、その地域の諸条件に即応した土地の農業上の利用計画、土地基盤整備、農地保有の合理化、農業近代化施設の整備にわたる総合的な整備計画を立て……」とし、農業振興地域を指定し、これが昭和四九年十一月知事の認可を受けた。

このように、昭和四五年以後の農政およびそれに対応する村の動き

もみな四四年に示された総合農政の方向に添ったものである。この政策に添って兼業農家の増大は顕著であるが、離農者は昭和四五年以後一〇年間に僅かに五〇戸程度で、第二種兼業農家の大部分は老後の保証手段としてか、主業に対する生活の補助手段としてか、または財産としてか、さまざまな理由によって農地を保有しており、農地の流動化はそれほど進んでいない。したがって一方の自立経営農家の規模拡大も一部に三町以上以上の農家戸数の増加が認められるが、その数は極く少数であり、それが自立経営農家として他産業従事者と同等又は以上の経営を充分に確立したとはいえない状態といえる。そこに、自立経営農家を目指す者が非常に少なく、農業後継者の問題が深刻な問題となっている理由があるように考えられる。しかし、兼業農家を支える農業従事者の高齢化はかなり進んでおり、当然農地の流動化は大きくなるものと考えられ、今後十数年の農業の動きは他産業の動きとも関連し、極めて注目されることである。

八 農業協同組合

(一) 南筑輪農業協同組合

1 農業協同組合の設立と発展

昭和二〇年八月一五日無条件降服という今までの日本人には考えられないこともできなかった悲惨な条件で太平洋戦争は終結した。独立の主権を失い、占領軍の絶対的権力のもとに国家機構は根本的変革を迫られた。政治も経済も教育も占領軍の命を受けて変革せざるを得ない事態となったのである。農村もまた民主化を図る主意によって、まず、農地改革が実施された。

二二年十一月、今までの官制的な農業団体でなく、自主自立のものでなくてはならぬという主旨による農業協同組合法が公布された。農

民の経済的社会的地位の向上を図るを目的として設立するのであるという意識づけをさせたものである。

農業会を解散し、協同組合設立の発起人会を設置して準備を進め、二三年二月設立準備総会を開き、三月九日南筑農業協同組合設立総会開催、四月設立認可となり発足したのである。

八月には農業協同組合（農協）の六つの県連合会（教育指導、信用販売、購買、農村工業利用、農業販売）も発足した。

このころから農協は着々と業務を拡張充実し活動が活発になっていった。

二四年には稚蚕共同飼育が始まり、塩ノ井・大泉・田畑に飼育所が順次落成、二五年には保溫折夏苗代の普及指導を始め稲作農家はほとんどこの方法を取り入れた。またこの年から輸送事業もオート三輪車によって各組合員へ物品を届け、また、組合員の農産物の出荷、結婚の際や移転のときの運搬等の業務も行なった。

二五年には農協婦人部も結成し、敗戦の虚脱感から立ち直ろうとする農民の物心両面からの援助所となり、続いて農協青年部を結成して、農業協同体および生産協同体としての機能を遺憾なく発揮できる方向に向かった。昭和二六年には県経済連合会が発足し、この年、順次日用品等の統制が撤廃されていくのであるが、二五年六月二十五日未明朝鮮戦争が勃発して、我が国には特需景気が起こり、産業経済活動は活発になり、農協の活動も活発になった。

二七年には生命共済事業を開始し、事務所を新築した。この事務所は村の公民館を併設して、一応二階を公民館として使用することで建設費の半額を村から支出されたが、三一年には事務所建物を全面的に村から譲り受け、さらに金庫室を造りこれを機会に購買店舗を新しくして購買事業を活発に推進し、さらに、オートコンペアーを購入し、

共同遊樂場が造られ、組合としての形態はしだいに整えられつつあった。

しかし、一方で農家の経営は必ずしも健全な姿ではないことから、農家経済の計画性の樹立を目指し、県信連の指導のもと昭和二八年から、一・三・六運動を展開した。これは農業収入の一割を租税公課に、三割を再生産資金に、六割を生活費に当てるという。農家経済に計画性を持たせ、貯蓄を増強すると共に再生産費を確保することを目的としたもので、農業協同組合活動としての積極面を示すものであった。

2 農業近代化適応事業

戦後の食糧危機を脱し、日本経済の発展につれて、従来の主穀中心の農業経営に反省が加えられ、新時代に即応した農業が求められるに至り、長野県は昭和三一年から新農村建設事業を始めた。当村も西筑輪村と共同して新農村建設事業を昭和三二年から始めたが、農業協同組合はその多くの事業主体となり、農業倉庫二棟、家畜管理所、共同育雛所、種痘催芽所、集乳所九棟等を建設し、乳牛、肉牛、豚等の導入をすすめる。また、果実の集荷取扱も始め、農協は農家の援助所となった。

さらに、三三年には有線放送電話が設置され、組合員のほとんどが加入した。組合員相互の連絡に便を与えたのみならず農事放送等情報伝達に大切な役割を果たすことになった。これは四四年には自動化され、四五年には公社との接続も開始して村民の生活に多大な便益をもたらした。しかしこの接続は公社電話の普及によってその使命を終えて五三年に廃止し、有線は村内加入者相互の通話と放送だけの事業になった。

三四年には久保部落に利用部ができた。三五年には一〇、一五種類

の日用品を箱詰にして全組合員の家庭に配置し、職員がその詰め替えに月二回ずつ巡回するという、配置購買を実施して、消費者の便宜を図って実績をあげた。この方法はその後車の発達、冷凍食品の出回りによる食品革命、店舗のマーケット化によって中止した。しかし、三九年には移動購買車（ひとしお号）を始め四一年にはこのさらに大型車（ひまわり号）が巡回して消費者の便を図り購買事業の実績を挙げている。

三四年にはガソリンスタンド竣工、翌三五年には北部集荷所落成、アトラス会計機導入、三六年にはヘリコプターによる空中防除、家庭用プロパンガスの取扱開始、経理システムの伝票化等々と近代化適応の条件を整え、三九年には生活センター落成、園芸事業全村一体共販体制のため移動果場を園協より譲り受けた。

四〇年には村と指定金融機関契約、四一年には各種施設（農機具サービスセンター、ガソリンスタンド、理容所、漬物工場、購買事務所）落成、九月には農繁期共同給食を行ない、この年米集荷量四万俵突破の記録を作った。四三年にはまず池事業開始、四四年には生活センター、資材倉庫の増設を行ない四五年には会計機導入により貯金事務が機械化されるなど、時代の進運に伴う各種業務、施設設備の改革を断行しつつ農協活動は年を返うて充実し活発に行われてきた。

この間、農業生産発展のため、稲作・園芸作物・家畜飼育・養蚕・病虫害防除等の新しい技術の指導普及に努め、また、米価要求や農民のための農業政策の策定等、全国的組織の中で活発な農政活動を展開してきたのであり、昭和三六年の農業基本法が公布されてから、その基本法に対応する諸事業を進めてきた。

しかし、南筑輪は開拓地を除き依然として稲作中心の農業であって、農協活動においても米の集荷販売と、多くの農業倉庫をもっている。

でその利用による収益は大きな比重を占めていた。ところが、昭和四〇年代なかばころから米の過剰傾向が顕著になり、稲作の減反政策がとられるに至り、農家の経営のありかたはもとより農協経営の有り方にも、新事態に対応する変革が迫られるようになってきた。さらに、昭和四〇年代以降日本経済、とくに商工業の急速な発展、地方分散に伴って、兼業農家（とくに第二種兼業農家）が増加し、三〇年代前半ころまでの専業農家を中心とした比較的同質的な組合員から、第二種兼業農家が過半数を占めるという、組合員意識の面でも、組合に対する要求内容の面でも異質の組合員で構成されることになり、今後の農業の動向とあわせて、農業協同組合の運営は困難な問題を負うようになった。

3 業績の推移

信用・購買・販売の三業務を行なう組合として、大正一〇年に発足した本村の産業組合は、途中で信用と購買事業のみとして販売事業を一時中止したが、昭和八年からは販売事業を復活し、利用事業を加えて経営するようになった。

戦時中は農業会に統合されたが、戦後は農業協同組合となり着々と経営組織と規模を拡大強化し、昭和二八年には信用・購買・販売・加工・輸送・生産の六事業部を持つ経営となり、三一年からは、金融・購買・販売・農業倉庫・加工製造・利用・共済・農業生産・生活改善・団体協約専属利用契約の一〇事業部の経営となった。昭和三三年からはこれに放送事業が加わり、同三四年からは観光事業までを加えるに至り、産業組合から農業会、農業協同組合と、その発展過程を顧みて事業の種目といい、その取扱い高といふ驚嘆するばかりである。昭和四六年二月には産業組合からの創立五〇周年記念式典が盛大に行なわれた。しかし、時代の変化に即応し、より広域な大型農業協同組

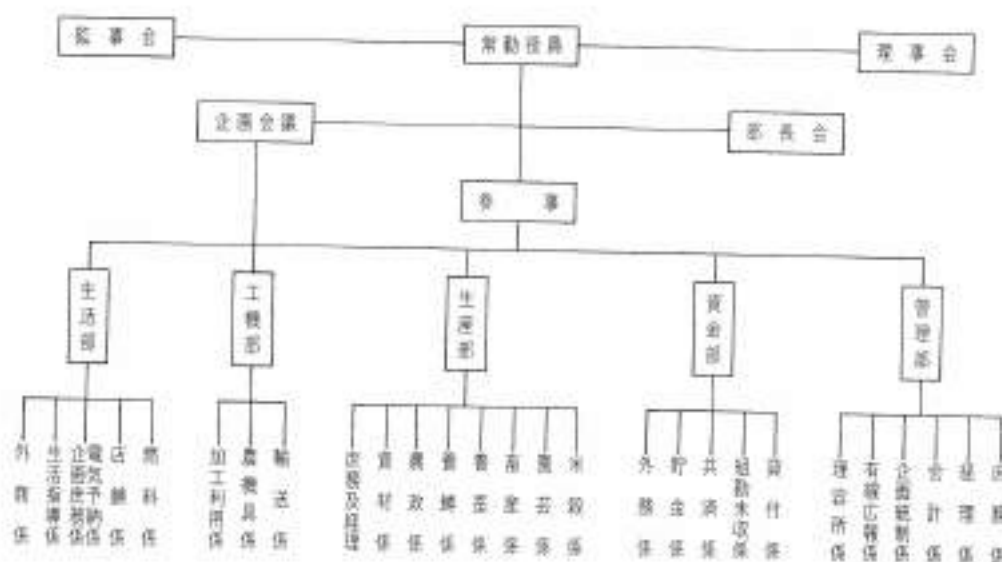


图7-60 南苑輪選業協同組合機構圖

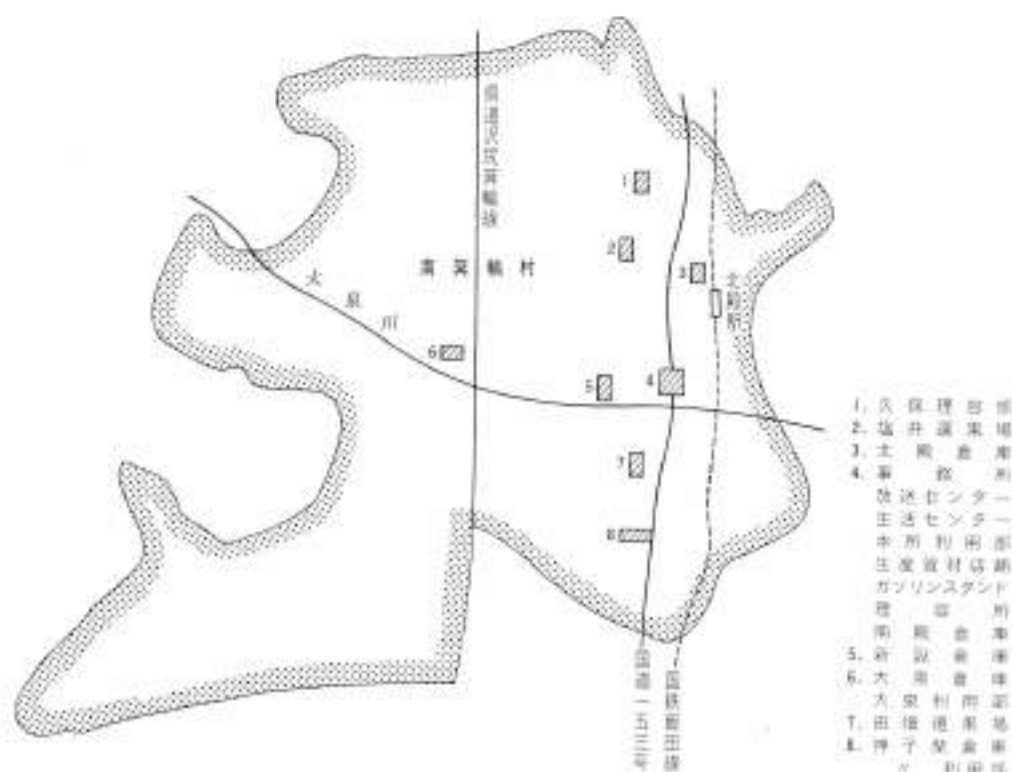


图7-61 兩貨輪停泊於碼頭時(四)

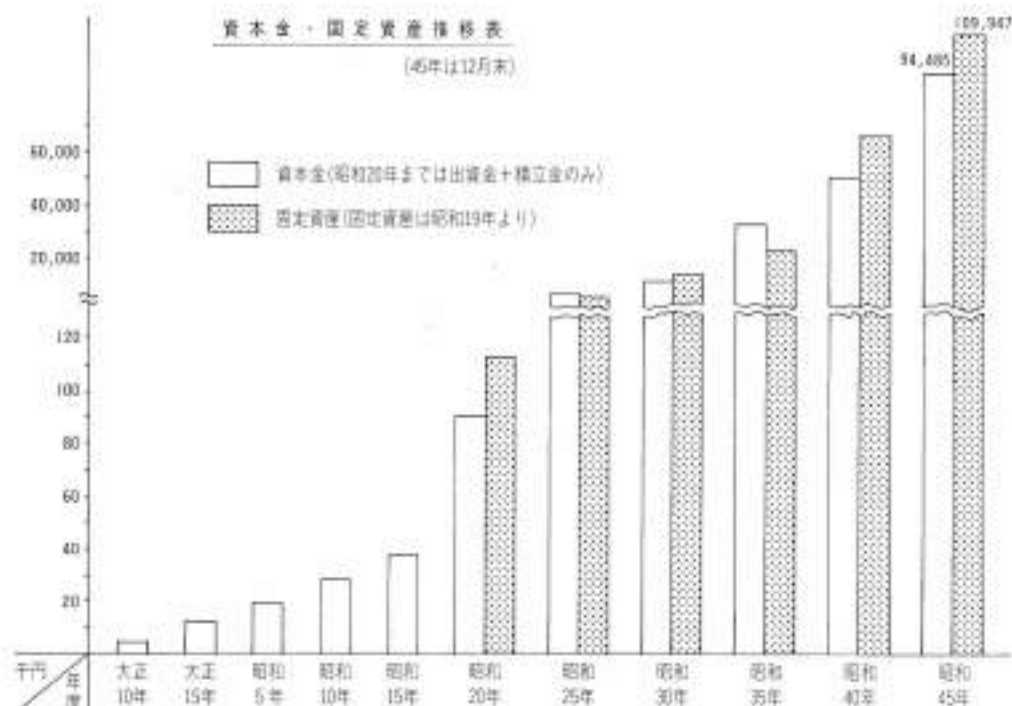


図7-62 資本金・固定資産推移表

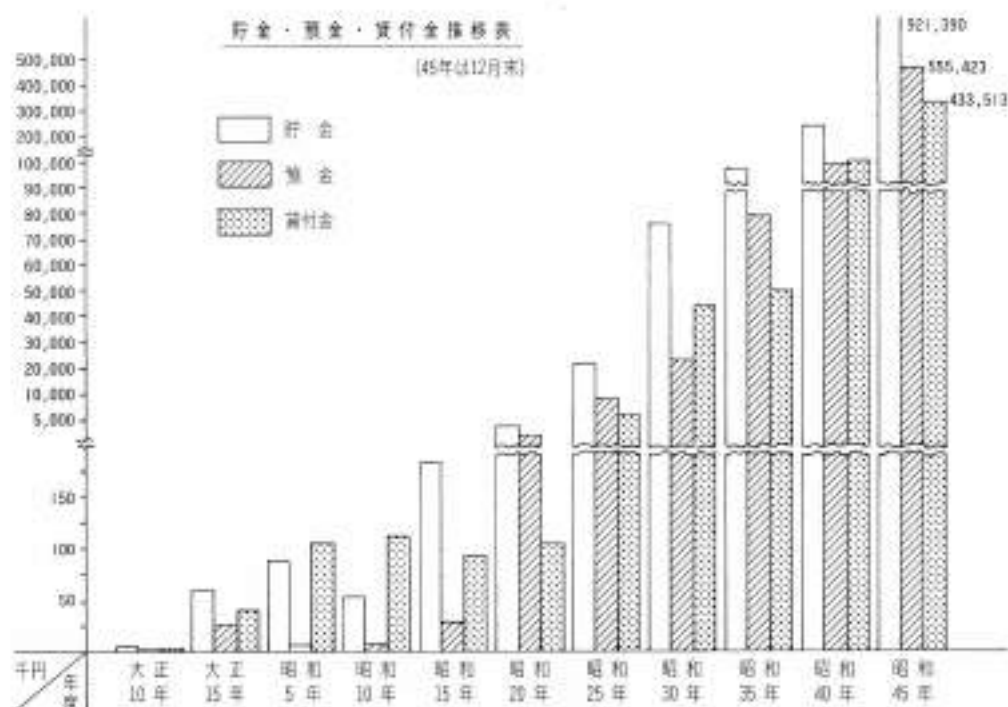


図7-63 貯金・預金・貸付金推移表

第3節 農業経営の変革

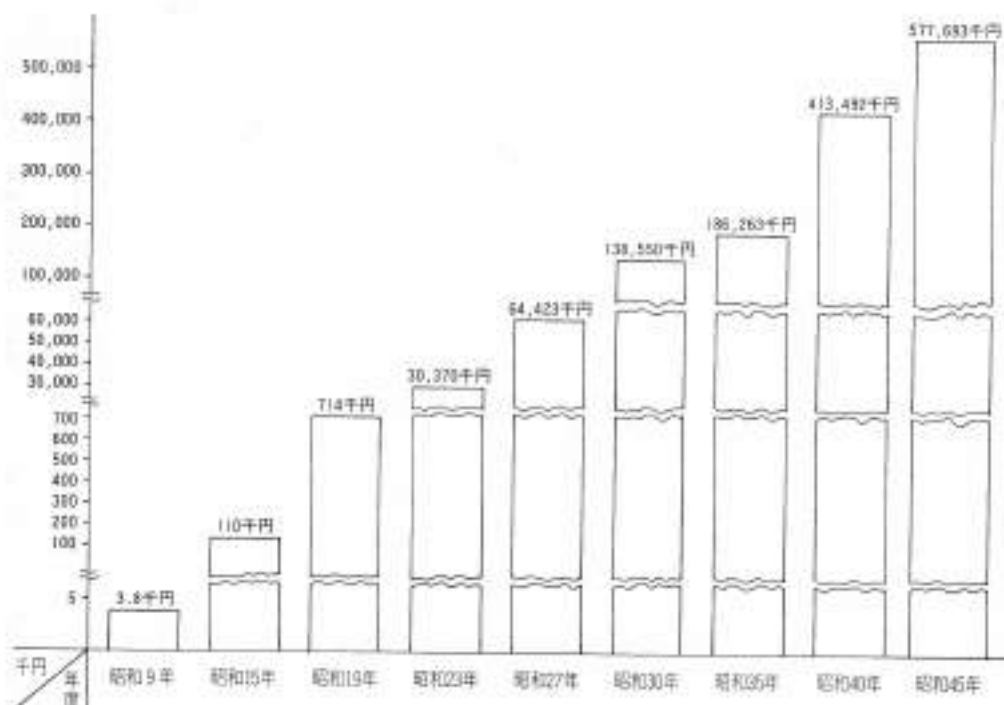


図7-64 販売品販売高推移表

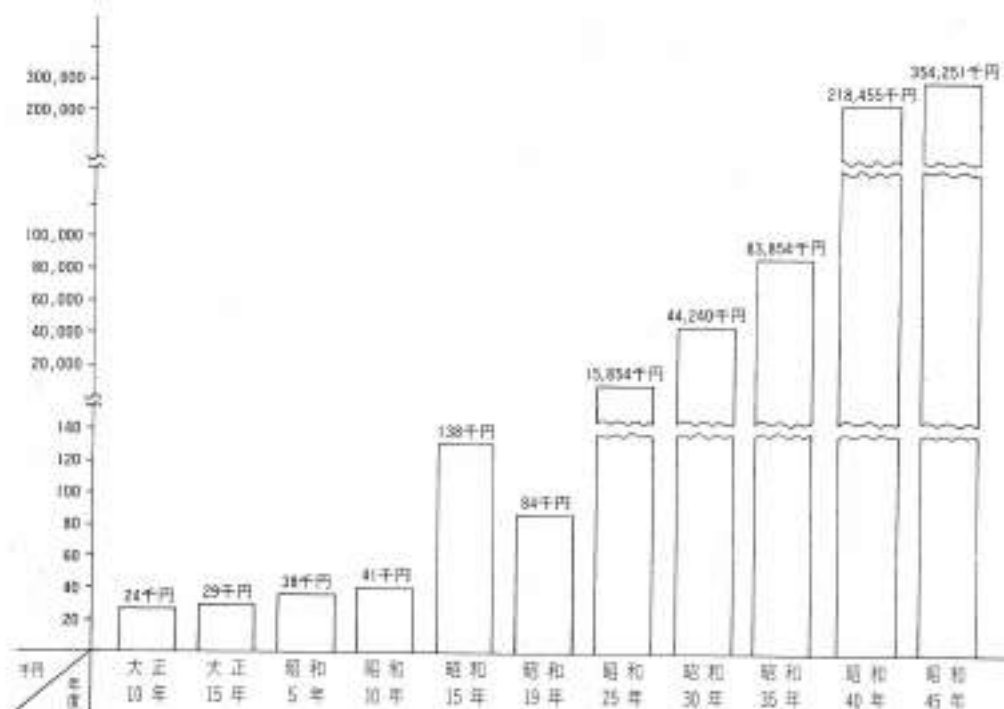


図7-65 購買品供給高推移表

表7-45 南筑輪農業協同組合業績の推移

項目	大正一〇年	昭和五年	昭和二年	昭和二八年	昭和四三年
組合員数	三五九人	五〇二	一、〇三三	一、〇五三	一、二八〇
出資金	二、六一三	一七、三〇二	一〇〇、〇〇〇	五、二九五、〇〇〇	二九、九三〇、〇〇〇
出資予約金	四三				一六、四一〇、〇〇〇
積立金	四	一、一三三	九、〇〇〇	七、一五九、六四七	二二、三九八、〇〇〇
固定資産	四		四六七、〇〇〇	五〇、八四八、四四九	一四一、六九四、〇〇〇
貯金	三、一一四	八四、二八八	五、六五七、〇〇〇	二一、一二八、二五五	五八九、八四三、〇〇〇
借入金	四	二〇、一七〇	一三、〇〇〇	三九、二二一、三八七	八四、一三五、〇〇〇
貸付金	七六	一〇五、九八五	二二、〇〇〇	一三、六〇二、〇一九	三七五、九四九、〇〇〇
預金	四六六	三、一六六	四、二八〇、〇〇〇	六九、四三五、〇八二	三一四、二九二、〇〇〇
販売高	四			三四、三一六、二五二	六九五、九八九、〇〇〇
購買高	四			一、一五六、一八三	三五七、三五九、〇〇〇
利用料	四			四〇七、六二〇	二、三〇三、〇〇〇
剰余金	四				一〇、九九二、〇〇〇
共済契約高	四				一、五八〇、〇〇〇

合とするため、上伊那中部地区八農業協同組合が合併することとなり、昭和四七年に伊那農業協同組合として発足することになった。

合併直前の機構と施設の概要及び、それまでの業績は、図7-60と65及び表7-45のようである。

二 伊那農業協同組合

1 上伊那中部八農協の合併

経済の発展により、経済的規模はしだいに拡大し大量取引きでな

れば、商品の流通市場において有利な取引が困難になってきた。これは販売はもとより購買においても同様である。特に、農産物においては広い地域で統一した技術指導のもとに優良均質のものが大量に出荷されること、また、常に市場の動向を把握しそれに適応することが必要であり、旧村単位の小規模農協では、このような時代に適応することは困難である。

このようなことから、昭和三六年、国は農協合併助成法を施行し、同三八年には全国中央会も、農協合併の方針を決定した。当地方にお

いてはようやく四〇年代になり組合員の所得向上と生活安定の機能を充分發揮するためには、広域農協建設、いわゆる合併による大型化が緊要であるというのが大方の見方となった。上伊那では北部、東部、中部、南部に各一農協があることが地理的条件の上からも行政との連携の上からも妥当であろうといわれた。そこで昭和四三年合併を目指したが若干数の農協が同時発足をするまでに機が熟さなかった。四六年四月所期目的達成のため、中部地区の各農協ごとに合併研究委員会を組織し、さらにその代表八三名による中部地区農協合併委員会を四六年八月発足させた。その後研究協議と組合員との対話を重ね四七年三月各農協ごとに部落懇談会を持ち合併の予備契約書と総合経営計画などの内容について組合員の理解と了承を求めた。四七年三月にいたり漸く関係市町村長、関係団体立合いのもとで南箕輪村、西箕輪、伊那市伊那、手良、美濃、富良、東春近、西春近の八農協がそろって合併予備契約書の調印式を行い、同日研究委員会は合併推進委員会に発展的に切り替えがなされた。さらに組合員との対話を重ねて四七年三月二十八日、八農協が一斉に合併臨時総会を開いて合併の決議がなされた。その後所定の手続きをふんで五月一日設立記念式典を開催する運びとなり伊那農協同組合が発足することになった。

基本方針

わが国高度経済成長政策は、国内的には物質の昇騰、公害の多発などによる生活環境の破壊をもたらし、国際的には輸出優先に対する批判を生じ、特にアメリカの新経済政策の展開により、いままでの政治経済政策は、根柢からゆすぶられ大きな転換を迫られている。

そのため農業にあっては従来の無定見な農業政策により、食糧の自給度は近年低下し、農業生産の停滞をもたらしてきたが、今回さらに農畜産物の自由

化の進展、米の生産調整、産業資本の農業への進出、若い労働力の撤退から高齢化、婦人化の一途を辿り、農業者の不安が増大している。

一面、農村生活においても通信施設、交通機関の発達整備がなされることもに家庭電化が進み、一般的生活意識の変化にみられるように家庭経済、生活環境、様式とも急変しており、このような経済社会が農業、農村をまきこみ、さらに農協の経営環境も大きく変わって行く時代であって、八〇〇〇余名の組合員の組織力の結集をはかり、協同体としての機能を強く發揮し、強力な農政運動を一層展開していくことと併行して、組合員の所得の増大と生活向上をはかるため次の事項を基本方針として、その実現につとめたい。

記

- (1) 合併の成果をより發揮すべく、組合員の意志がより一層反映されるよう組織の整備、強化をはかり民主的運営につとめる。
- (2) 国の政策転換を迫る基本農政確立の運動を進め、営農団地造成による生産基盤の確保とともに、生産性の高い農業を押し進める。
- (3) 地域社会に根を下ろした生活活動を進める。
- (4) 農協の経営管理の近代化、役員員の資質の向上をはかり、組合員サービスの向上に努める。
- (5) 組合員、農協、連合会による事業面での機能分担を明確にし、総合力の發揮につとめる。

（第一会総代会資料 農協文書）

2 伊那農協の発展

大型化した伊那農協は合併設立時の基本方針によりつつ、各事業所で所持してきた施設設備を順次改修し、さらに新施設設備を拡充強化して農協事業の充実発展をはかっている。

現在（昭和五八年）の機構は図7-66のように本所は五部二課、八支所は四課と有線放送課と出張所のしくみになって時代の進展に応じて各種事業を近代的に進めるよう努力している。

ようになった。現在一七部会が作られている。

農政活動としては、米価闘争をはじめとして、果樹・野菜・牛乳・肉類・鶏卵等農産物の価格安定対策の要求を掲げ、さらに、たえず変動する農政に対し、国内食糧自給率向上を基礎にした基本農政の確立の要求を進めている。

購買面では、肥料・飼料・農薬・一般資材等の生産資材は予約購買、共同購入によってより安価な購入を目指し、組合員の利便をはかっている。

金融面では貯金、貸付け等電算処理を行ない、オンライン稼働、D C(現金自動支払い機)を本所ほか支所にも順次設置して業務の迅速、正確が期されるようになった。また、村の指定金融機関となったり、営農業務も扱うようになって、他市町村との金融面での連絡がとれるようになった。

共済事業は取扱い範囲を拡げ、生命・建物・子ども・傷害・自動車・火災等の共済契約を奨励して、その契約高を急速に高め、また、学生寮の斡旋、共済友の会旅行、保養センター利用等を行ない、共済還元資金の利用、共済証書担保貸付等、はば広い活動を行なっている。

生活およびその指導面では、生活センター(Aコープ店)を経営して、農家の生活物資の安価な供給を図り、中央店に結婚式場、披露宴場を併設し、貸衣装、理美容室も備え、また、葬儀における祭壇等も用意して組合員の利用に供し、観光事業も行なっている。さらに、組合員及びその家族の集団検診をはじめ健康管理の活動、家計簿記帳の普及と諸学習の開催等指導面の活動も行なっている。

以上の諸活動を円滑、かつ積極的に推進するため、青壮年部や婦人部を結成して、これを側面から応援する態勢が整えられている。

大型農協となつてからの業績を図示すると次図7-67と68のよう

ある。

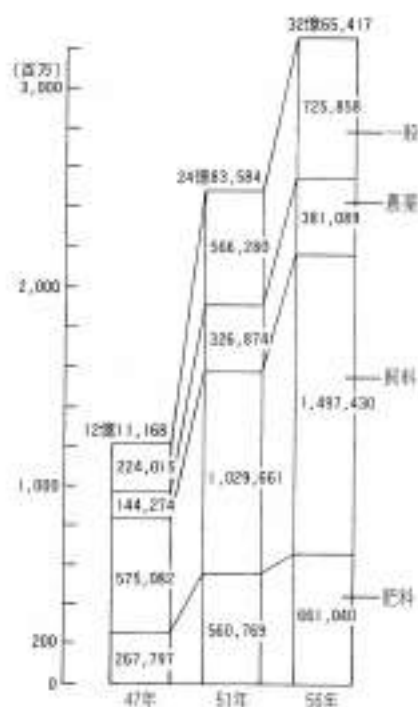
以上のようにして、農業協同組合は農家と生産消費のすべての面で深い繋がりを持ち、農協なしには農家の生活は考えられないほどになつており、農協の発展はめざましいものである。

しかし、経済の発達は、農業基本法の段階を越えて進み、外国農産物の圧力はますます強くなって来ているにもかかわらず、他産業従事者と同等またはそれ以上の所得を確保し、外国農産物に充分対抗できる農産物の生産を可能にするような、生産規模の拡大と生産コストの低下を実現した自立経営農家の確立はまだ進んではいない。また、国内における農産物需要の改革に応じた生産団地の形成が充分にできたという段階にはなっていない。

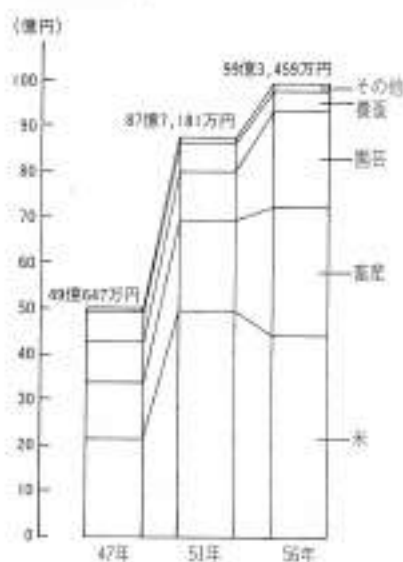
このような問題は、米の作付制限による水田再編事業によって既に考えられている問題であり、単に農協だけの責任とするには余りにも大きい問題であるが、農協は農家と共に真剣にとりくまねばならない大きな課題であると考えられる。

第3節 農業経営の変革

生産資材の利用高の推移

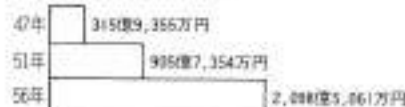


販売品数従高の推移



共済の契約高推移

長期共済保有契約高総額



工機資材の利用高の推移



生活資材の利用高の推移

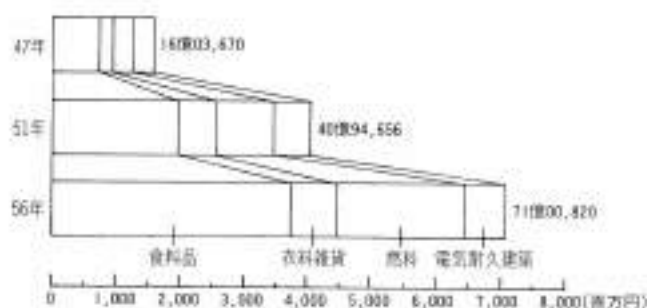


図7-68 伊那農業協同組合の業績(2)

第四節 商工業の発展

一 田園工業都市への歩み

(一) 第一次産業から第二・第三次産業へ

太平洋戦争後の南筑輪の産業別就業人口の推移をみると表7-46及び図7-69のとおりである。

第一次産業の農林業主体で発展してきた本村も、昭和四〇年代になると第二次及び第三次産業が急速に伸びる反面、第一次産業就業者の減少が著しい。これは農機具の導入によって農作業の能率が上がり、人力が著しく省かれるようになり、その余った労働力が他産業に吸収されていくことと、工場誘致による企業の進出が年を追って増加したことによると考えられる。

昭和二五年の農業就業者は総就業者の七六・三％であったのが、五〇年には二六・四％に減じ、一方製造業就業者は三一・二％となって製造業就業者は、農業就業者を超えた。しかし、第二次・第三次産業従事者の増加したが、そのまま村内の第二次・第三次産業が発展したということは意味しない。なぜなら他市町村の産業への従事者と、他市町村よりの本村産業への従事者の差を考慮しなければならぬからである。

(二) 製造業の発展

戦後の深刻な食糧不足はしばらく続き、古来、農業をもって立ってきた本村は食糧増産に力を傾けたが、戦時中一たん中止していた製材業がまず操業を再開した。また、化学工業の大明化学工業株式会社は北殿に工場を興した。

昭和二四年には製材および木製品四、化学一、紡績一の工場があつ

表7-46 産業別就業人口（南筑輪村、15才以上）

（上伊那郡市勢要覧より）

年次別		昭和22	25	30	40	50	55
総 数		2,942	3,169	2,985	3,364	3,864	4,580
第一次産業	農 業	2,393	2,372	2,159	2,204	1,022	866
	林 業		21	55	33	21	28
	漁 業		1	1	4	3	3
第二次産業	紙 業	283	1	0	1	4	6
	建 設		87	79	103	275	413
	製 造		233	202	428	1,207	1,604
第三次産業	卸 小 売 業	366	74	117	149	440	547
	金 融 保 険 業		15	44	16	36	52
	運 輸 通 信 業		108	99	85	168	206
	電 気 ガ ス 水 道 業		—	—	—	7	5
	サ ー ビ ス 業		138	166	281	569	690
	公務員・その他		59	60	55	112	147
						不動産業	
						9	

表7-48 工業種別・機械別工場数・製造品出荷額の伸び

業 種	年度別 事業所総数 規模別		41年		40年		52年		57年		58年	
	11		22		45		61		68			
	総 数	1人 19人	20人以上	総 数	1人 19人	20人以上	総 数	1人 19人	20人以上	総 数	1人 19人	20人以上
食糧	1		1	3	3	1	2	2	1	2	2	
繊維				1	1		2	2	2	2	2	
衣木	1		1	1		1	1	1	2	3	3	
家具	2	2		3	3		2	2	2	1	1	
印刷				1	1	1	2	2	1	1	1	
化学	1		1	1		1	1	3	2	1	3	1
土石	1	1		2	1	1	1	2	1	2	1	1
金属	1	1		1		1	1	1	1	1	1	
機械				3	2	1	4	3	1	6	6	7
電機	3	1	2	4	3	1	2	1	6	6	7	7
輸送				1		1	16	2	23	5	27	5
精密	2	1	1	1	1		2	6	1	1	10	1
その他	11	6	5	22	15	7	45	35	61	53	68	8
従業員数(人)	347		598		762		1,303		1,274			
製造品出荷額(万円)	47,283		170,359		772,554		1,690,279		2,093,497			

(民間工業統計書)

工業を業種別にみると現在、電機工業が多く三分の一強を占め、ついで、精密・金属・機械工業が多く、特殊な地場産業というようなのは発展していない。
規模別にみると従業員三〇人以上という事業所は僅かに八事業所で、他は全部小企業である。

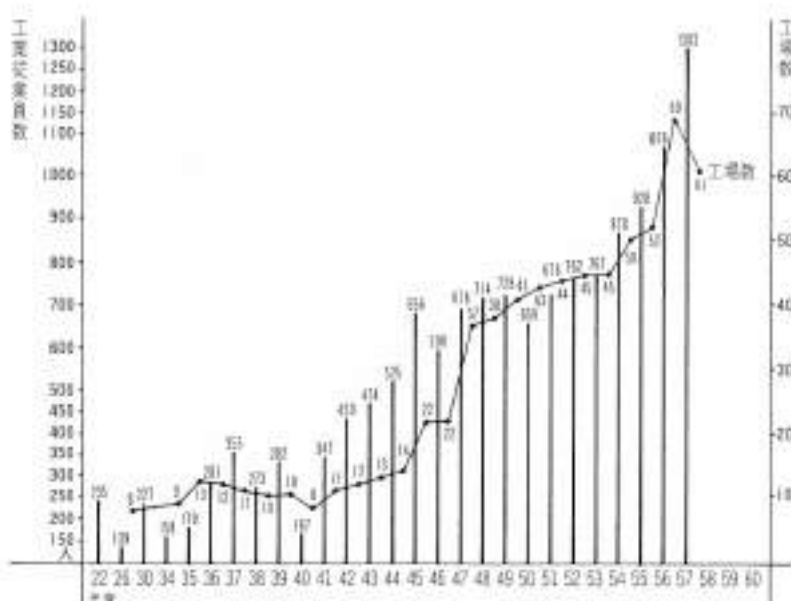


図7-70 工場数と工業従業員数の増加（南箕輪村）

(四) 建設業等の推移

建設業は五〇年代になって著しく増加している。

表7-49 建設・電気ガス水道・運輸通信業者の推移

業種	年次
建設業	27 31 33 35 38 41 43 44 47 50 51 53 56
電気ガス水道業	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
運輸通信業	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

(上伊勢郡市勢要覧)

四 工業振興策

1 工場誘致条例の制定

昭和三〇年代にはいると日本経済が高度成長をとげるとともに工業も急テンポで発展してきた。長野県では昭和三七年九月「低開発地域工業促進法」により、小諸・伊那・駒ヶ根がその指定を受けたが、翌三八年にはその範囲が広げられ小諸佐久地区、伊那地区となり南箕輪地区はその中に含まれることになった。そこで本村は三九年八月「南箕輪村工場誘致条例」を制定して村内工業の振興を図ることになった。その要旨を抜粋してみる。

第一条 この条例は本村内に工場を誘致又は増設する者に対して村民税、固定資産税を減免するほか便宜を供与し、もって産業の振興を図ることを目的とする。

第二条 この条例で工場とは営業のための物品を製造し、若しくは加工又は印刷の目的に使用する場所をいう。

第三条 村長は第六条第二項の規定により指定した者に対し、次の奨励措置を講ずるほか、敷地、資材、資金（金融ほか）のあっせん、その他必要な事項について便宜を供与し協力する。

一、工場を新設又は増設する場合三年間、新設に対しては各年度の村民税（均等割を除く）及び固定資産税を、増設する場合はその増加分に対する固定資産税のみを減免する。

第四条 第三条の規定による減免率は次の各号による。

- 一 村民税 初年度 十割 二年度 八割 三年度 六割
- 二 固定資産税 初年度 十割 二年度 八割 三年度 六割

右のような助成を得ようとするには「投下固定資産評価額」が新設の場合は五〇万円以上、増設の場合は三〇万円以上のもので、従業員一〇人以上を有する事業所であることという条件があった。

この条件によって新設又は増設で指定申請をした事業所は六事業所あった。

2 都市計画の策定による工業振興策

昭和四八年に都市計画区域の指定を受け、五〇年にはそれに基づいて南箕輪村総合計画をたてた。そのうち工業については「……村内の工業は工場数、従業員数、出荷額とも順調に発展してきた。然しながら全体的には小企業が大半であるため経済変動に左右されやすいのが現状である。」という認識の上に立って「中央高速道路等交通網の発展により今後とも工場の進出が充分考えられる」として、「天竜川沿岸の工業用地域に工場誘致をおこない、農業近代化によるところの余剰労力を有効に活用し住民の生活安定と明るい村づくりにつとめる」という目標のもとに今後における方向として次の三点をあげた。

- イ、天竜川沿岸に工業団地の造成を行う。
- ロ、無公害企業の誘致につとめる。
- ハ、産業道路の新設及び整備をはかる。

〔昭和五〇年南箕輪村総合計画書〕

これからさらに三年経った五三年一月には「南箕輪都市計画」が決

定認可された。それによると、①道路、②、用途別地域 ③、公園が計画され、工業地域は準工業地域と工業専用地域が指定された。準工業地域は約八〇ha、工業専用地域は約一三haと計画された。さらに昭和五七年には工場誘致条例及びその特例を合わせた「南箕輪村企業振興条例」を制定し工業振興策を講じた。

3 企業振興条例制定

昭和五七年には先に定めた「工場誘致条例」及びその特例を廃して改めて「南箕輪村企業振興条例」を定めて工業等の振興策を講じた。先の誘致条例と変わった主な点を挙げる。

第一条 この条例は南箕輪村が低開発地域工業開発促進法（昭和二六年法律第二一六号）第二条の規定により低開発地域工業開発地区として指定されている間、村内に工場を新設し、又は増設する者に必要な処置を講じ産業の振興を図ることを目的とする。

第二条（変更）

第三条 村長は第五条の規定により指定した者に対し当該指定の翌年度から三か年間工場を新設し、又は増設した部分に対する固定資産税の課税を免除する。

第四条 工場を新設し又は増設するため村長の指定を受けようとするものは、投下固定資産のうち家屋又は償却資産に係る取得価格の総額が一、二〇〇万円を超えるものであって、かつこれを直接当該事業の製造の用に供するものでなければならぬ。

条例がこのように変わった点からみても産業資本等について時代の推移の急テンポであることが感ぜられる。

2 木工業

事業所名	所在地	代表者名	資本金 (単位万円)	従業員数	主要製品又は事業名
福岡光学子	南陵五三三九	福岡元市	四〇〇	一八	カメラ顕微鏡レンズ
福岡電機	南陵五二八七	福岡正人	一〇〇	一八	通信用抵抗器
福岡製作所	南陵四九五七	福岡孝子	一〇〇	一八	プレス製品
伊那木冶金	北陵四〇〇六	山崎重久	四〇〇	一六	金属熱処理
伊那製作所	北陵三〇二五	深沢知広	一〇〇	一八	精密部品加工
堀製作所	久保二六八	堀正一	一〇〇	四	抵抗器
鈴木製作所	田畑六一二四	有賀孝郎	一〇〇	二七	メーター文字板
筑輪精工	南陵五四二二	山崎民雄	六〇〇	五	コンプレッサー、バルブ
ヤコブ製作所	南陵五四二二	古江要一	一〇〇	四	研磨
古江製作所	北陵四三六四	田畑美	一〇〇	四	タイムスイッチ
電南製作所	田畑六〇七一		一〇〇	四	ストロボ部品

3 機械工業

事業所名	所在地	代表者名	資本金 (単位万円)	従業員数	主要製品又は事業名
江戸木材工業所	北陵三七一一	入戸とき子	四〇〇	九	建築用木材 組立材料
エコー楽器	北陵二九四〇	岩井健雄	一〇〇	二三	ギター
清水チップ工場	北陵三二二三	清水喜代人	一〇〇	四	チップ
月岡芸装	中野原	西岡政美	一〇〇	七	時計台
東信木材	南陵五四四二	山崎辰雄	二、五〇〇	七	一般用建築製材
山木材料	塩ノ井三九三	百瀬博	一、〇〇〇	五八	時計木枠、小物家具
丸山木材	神子榮七一九六	丸山益男	六〇〇	一三	建材
伊那商事	北陵四三三〇	友成達雄	四〇〇	二六	スポーツ衣料
伊那商事	南陵九七五八	小林一美	二〇〇	八	トレーニングシャツ
ニューソーイング	北陵四二二一	山崎勇	一〇〇	七	子供用アクセサリー

4 食品工業

事業所名	所在地	代表者名	資本金 (単位:万円)	従業員数	主要製品又は事業名
彈保商店	田畑六二〇九一	彈保武義	五〇〇	二三	和洋生菓子

5 化学及びその他の工業

事業所名	所在地	代表者名	資本金 (単位:万円)	従業員数	主要製品又は事業名
伊那クリンサービス	田畑五六四五一	梁永実	二〇〇	七	プラスチック再生処理
伊那ブロック工業	田畑六四五一	北沢千秋	五〇	一五	コンクリートブロック、U字溝
信濃ゴム	神子柴八三〇四一五七	田辺信	六〇〇	五	事務用ゴムローラー
大明化学工業	北畑三六八五一二	池上房男	六、〇〇〇	一四四	硫酸アルミニウム、明礬類
神日東理化学研究所	田畑六六五五一	古畑東逸	一、〇〇〇	四	硫酸アルミニウム、明礬類
晴海産業	久保一〇三五	堀秀臣	五〇	一〇	アルミナホワイト、タイパック
マルタ工業	神子柴七五三四	田中靖	二、〇〇〇	三九	セラミックス材、無機工業薬品
					脱色剤、土壌改良剤
					テーパークロス
					生コンクリート、ヒューム管、U字溝

6 村内の大工場(昭和五八年現在従業員五〇人以上)

1 大明化学工業株式会社

昭和二年八月 北畑に工場設立 白土より浄水剤及び製紙サイズ剤の硫酸アルミニウムの製造開始。また、アルミ資源を原料とする無機薬品も製造してきた。

二年 研究所を開設して新製品の開発に努める。翌二六年には硫酸アルミニウム規格制定により白土を原料とする製造は採算がとれなくなつて中止した。

三八年一〇月 合成宝石の原料の新製品工業化に成功。

四一年九月 浄水剤「タイパック」を開発し特許を得。

四三年四月 東京に工場新設操業開始。

五〇年九月 研究所新築。

五四年一二月 北畑工場を増設して各種ポリ塩化アルミニウム、液体硫酸アルミニウムの最新技術製造設備を導入。

五六年九月、新技術開発事業団の委託を受けて高純度アルミ製造法開発に着手し、五八年七月開発に成功し本格的に生産を開始した。

なお食品添加物や写真用ミョウバン、焼ミョウバン、アルミナホワイト各種セラミックスの素材原料のタイミックス医薬品の原料、消火器具等順次開発企業化に努めている。従業員一四〇名が働いている。

製品は各都市の上下水道局、製紙や製菓、インキ、フィルム等の製



図7-71 大朝化学工業株式会社(研究所)



図7-72 興亜電工中央工場

造会社に納めるほか、諸外国に輸出している。社長は松本武松(武井方介)池上房男と変わって来た。

2 興亜電工株式会社中央工場

興亜電工中央工場は昭和二六年四月南殿地籍に設立された。同南殿工場は同じ地籍内に五二年八月に設立された。

興亜電工は昭和一五年向山一人によって東京に興亜工業社を創立して抵抗器の製作を開始したことに始まる。翌一六年に組合製米伊那社の跡地に興亜電工伊那工場を設立し、コンデンサーの製作を開始した。これは伊那地方電子産業の草分けである。戦時中は軍需省監督工場の指定を受けて抵抗器とコンデンサーを製作し軍の要請にこたえていた。終戦後は電気ゴツ、電熱器、電気アンカ等民間の需要に応じるものを一時期作ったが二一年には可変抵抗器の製作を開始し、その

後は各種の抵抗器やコンデンサーを開発して業務を拡張してきた。

昭和二二年に株式会社とし、二五年には社名を興亜電工株式会社とした。諸所に分工場を設立し中央工場や南殿工場はその一環である。

現在(昭和五七年)中央工場には八五名、南殿工場には一九名の従業員が働いている。なお家庭内職におよそ一〇〇名ほどに部品の製作を依頼し、村内には四〇名ほどがこの仕事にたずさわっている。

製品は関東、関西はもとよりアメリカや東南アジアへ輸出している。

3 株式会社フォルテ

フォルテは昭和一七年伊那市に株式会社伊那町木工所として創設された。戦時下の当時は男子は軍人として召集されるか軍需工場に徴用されたので伊那町の産業が不振になるのを憂え女子を主とした木工所を起し、軍需産業の一環として兵器の箱類を製造した。終戦直前には中島飛行機の伊那工場となったが、終戦後、伊那木製品工業株式会社として本村の堀ノ井に同名の北殿工場を作り主として精工舎の時計の本枠を作ることを始めた。

昭和四三年に隣接地に第二工場を建てたのを機に伊那町の工場から生産資材を全部引越して業務を拡張し、時計の本枠の外に密接セットも作った。五三年には社名を株式会社フォルテとし、時計の本枠とワインラックを作っている。従業員は最初の会社が伊那にあった関係で伊那の人が最も多く、それに地元の人が加わり、さらにパートとして地元の婦人が働いている。

社長は初代長田頼利、次が小池健吾、次いで小松光雄と変わり現在

は百新博である。

4 信英通信工業株式会社西駒工場

信英通信工業株式会社は昭和二十七年伊那市において電解コンデンサーの製造を開始したことに始まる。

テレビ・VTR・ステレオ・テーブコーダー・ストロボ・電子計算機・自動販売機その他各種通信機器産業機器等の電子製品に欠くことのできない重要な部品であるアルミニウム箔電解コンデンサーの製造販売会社である。西駒工場では各種コンデンサー、各種ハイブリッドICの製造をしている。

製品はルビコン・ブランドで業界屈指のコンデンサーメーカーとしての地位を確立しており、特にストロボ用コンデンサーは業界第一位の生産を誇ると自負している。

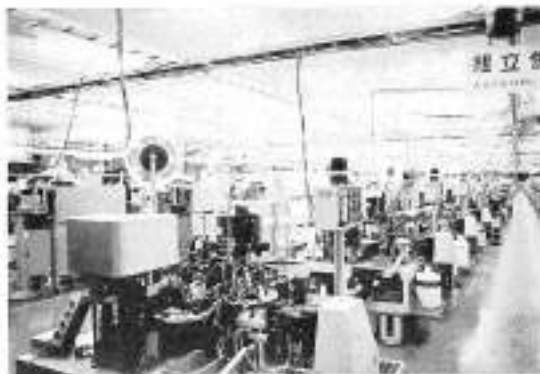


図7-73 信英通信「西駒工場」

昭和五十四年四月に南箕輪村北原に新しい生産拠点として西駒工場を建設して操業を開始した。

この工場の特徴は周囲をとりまく豊かな自然と、最新鋭機導入により一貫した自動化生産システムにあり社長登内英夫は公害のない緑のふるさとづくりを旨とし地域社会に少しでも貢献したいと努力を重ねている。

支店・営業所・出張所を国内各地に持ち、系列会社一

社その他海外に五社を有している。

従業員八〇〇余名その西駒工場に五〇〇余名働いている。なお部品の製造は下請けに出し村内の相当数の人々がこの仕事にたずさわっている。

5 信英蓄電器株式会社

信英蓄電器株式会社は昭和四十八年九月信英通信工業と日本蓄電器工業の共同出資により西川原の地に昭和四十八年設立翌四十九年九月から操業を開始した。

この社の製品はアルミ電解コンデンサーメーカーに使用されている電解アルミ箔である。これは電気容量を得るための電子部品でアルミ電解コンデンサーは各種電源の整流部、各種電子回路の増幅部等に使用される電気機器の構成上欠くことのできない部品である。したがってアルミ電解コンデンサーはテレビやオーディオ機器やコンピュータ、マイコン、ワードプロセッサ電子複写機等のOA機器をはじめ産業用機械、自動車等のあらゆる電子回路に広く使用されている。その他カメラのストロボフラッシュや小型モーターなどにも使用され、その使用範囲はしだいに拡大している。急速に進むエレクトロニクス時代に大いに期待される産業である。



図7-74 信英蓄電器工業株式会社全景

工場は四十九年以後拡張、社長

登内英夫副社長永田伊佐也、従業員数一七〇余名で生計発展しつつある。

一 戦後商業の発展

(一) 商業発展の概要

昭和二〇年八月一日、戦争は終わったが経済統制はさらに続いた。

品物の公定価格は定まっていたけれども敗戦の混乱に乗じていわゆる闇物資が出回り闇価格で取引されるものが多かった。二〇年九月発表の長野県公定価格をみると、米一俵(六〇匁)六〇円、果物や野菜の一貫匁あたり、りんご上物三円、梨二円六〇銭、柿一円九〇銭、カボチャ一円三〇銭、大根七五銭、ゴボウ一円九五銭であったが闇価格はその一〇倍以上で取引されるものもあった。一〇月の発表によると甘藷の供出値段一貫匁五〇銭配給値段五八銭ということであるものが、闇値は七十八円から一二三四もするし、米一升は公定価格七五銭がその一〇倍もして取引されるという状態であった。農家は供出量を割り当てられ、自家保有米も厳しく定められていた。農家以外の者は割当て食糧だけでは足りず農家へ買い出しに行き、金以外の衣料その他の物と、米や芋などと交換することが行なわれ、持っている物をしだいに持ち出すので竹の子生活でやっと生命を保つということがいわれる時が続いた。

しかし、戦後の混乱がおさまる二四年にはようやく甘藷、ゴム製品が統制を外され、ついで二五年には木炭、魚類、綿製品、肥料などの統制が撤廃され六月朝鮮動乱が勃発するととばつばつ商店に商品が現れるようになり、村の商店も再開されるようになった。

この年農協や「俵屋」では肥料取扱いの許可を得て肥料の販売を始めた。

長野県登録第一九九号

指定肥料取扱業者

昭和二五年一月一日認可

南筑輪村四九四番地

有賀 益雄

昭和三〇年代になると国民生活はしだいに安定し四〇年代になると物資は豊富になると共に日本各地に総合食品販売店としてのスーパー店が現れ、大資本と提携した専門店が現れるようになった。

昭和四四年には北隣の吉村商店や藤吉屋商店がボランティアチェーンのチェーンショップの店となり、さらにこの両店は五四年になるとオランダに本部があり全国的に連鎖店を持つスーパーの店となった。その他の商店もまた大資本の特約店となるなど時代の流れに連れまいとする状況になった。四〇年代後半から五〇年代にかけて商店や飲食店が急速に増加し、店舗の姿も近代的な装いをこらすようになった。その増加の状況は商工会の発展の項に述べる。

農協は三五年八月から各家庭への配給購買を実施し、三九年九月からは移動購買車の巡回を始め販売を手広く行なうようになった。一方、有線放送での宣伝も盛んに行ない一般商店と競合している。

昭和五八年八月村と消費者の会がアンケート調査の結果をまとめたところ、村民が村内商店を利用するのは近隣の市町に大型店ができたことと、しかも二三年の調査のときよりも四・五%減少していた。このように村外での買物が多くなったのは近隣の市町に大型店ができたことと、自家用車が普及したことによる影響が大きいと思われる。

中央道西宮線の開通や本村を通る道路の事情が良くなるに伴い本村工業の発展が目ざましく、人口も年を追って増加の傾向にあるから商業活動はいっそう活発になるはずである。

生活様式が近代的になり、物資が多様かつ豊富になり、商店の種類

も多くなりつつある。とくに自動車等の乗り物関係の商店が増え、ガソリンスタンドなどは近代商業の一特徴であるといえよう。「依屋」が三四年にスタンドを開業し、農協も続いて開業した。そのほか四スタンドが次々に開業した。また、モーターバイクや自動車の販売、修理や車の部品販売の大手会社の代理店ができたリプロパンガス配送センターなどができたり、ドライブイン等もできた。

従来、村内消費者を顧客としてきた商店のほかは商業圏が他市町村に及び、さらには一般通行の乗用車やトラックの乗員までが客とな

(二) 村内商業名鑑

(昭和五十八年版「長野県商業名鑑」より。昭和五十七年六月一日現在)

(従業員数五人以上の事業所 従業員数A:五〇一人・B:一一一～一五五人・C:一六一人～二〇〇人・D:二〇一人～二九九人・E:三〇〇人以上)

1 卸売業

事業所名	本店	所在地	資本金 (万円)	従業員 規模	主要販売商品名
卸アルプス商会伊那営業所	支	南殿 四九二六―三	九〇〇	A	自動車部分
卸伊那松柏	支	沢尻 九四一〇	一〇〇	B	荒物、他の化学製品、紙
伊那電機	支	神子柴七五七〇―二	四五〇	B	エアコン、パナソニック、電装品
岡野電機	支	田畑 六五五二―一	五〇〇	C	医薬品
岡野工業伊那営業所	支	田畑 六二七四	八〇〇	C	工作機械、工具
土屋薬品	支	久保 八四一	五〇〇	A	医薬品
フジヤ機工	支	神子柴七四〇八	九八〇	B	さく岩機、パレーター
ブリジストンタイヤ長野販売所	支	神子柴七二四〇	八〇〇	B	自動車部品

2 機物・衣服・身の回り品小売業

事業所名	本店	所在地	資本金 (万円)	従業員 規模	主要販売品名
館長百貨店	支	北殿 三七一七	七〇	A	呉服、和装品その他
日本染色	支	神子柴八九九六	五五〇	A	紳士服、婦人服

って、一般家庭も社会の生活が近代化するのにこたえ得る商業へと、村の商業は変貌しつつある。

戦後本村の商店数の増加の状況は次のようである。

表7-50 本村商店数の増加

商店数	年度
28	昭和30
30	31
45	35
48	39
56	42
56	44
71	51
80	52
106	55
108	57

(全国統計調査表および上伊那郡市勢要覧による)

3 飲食料品小売業

事業所名	本支店	所在地	資本金	従業員規模	主要販売商品名
倉田豆腐店	単	北殿 西三四六	一〇〇	A	豆腐
前藤古屋商店	単	北殿 四七四六	一〇〇	A	鮮魚・調味料・果物
前古村商店	単	北殿 三三九四	二〇	A	調味料・鮮魚・乾物

4 自動車・自転車小売業

事業所名	本支店	所在地	資本金	従業員規模	主要販売商品名
有賀モータース	単	南殿 四七九二	一五〇	B	乗用車
東邦オート販売	単	神子榮七五四一	四、八〇〇	A	乗用車、トラクタ
トコタローラ南信伊那営業所	支	神子榮七四〇四	三、〇〇〇	D	乗用車、トラクタ
長野トコベツト伊那営業所	支	神子榮六四五一	九、九五〇	C	乗用車、トラクタ
日南プリンス松本販売伊那営業所	支	北殿 三七一八	一一五	A	自動二輪車、自転車
前垣越サイクルセンター	支	神子榮七二九一	一一五	A	自動二輪車、乗用車、自転車
前垣越サイクルセンター	支	田畑 五九七二	一、五〇〇	A	乗用車、トラクタ、自動車部品
前九源自動車工業	支	久保 九二四一	九、八〇〇	A	乗用車、トラクタ、部品
ココタローラ伊那自動車	支			A	

5 家具・建物・じゅうぎょう

事業所名	本支店	所在地	資本金	従業員規模	主要販売商品名
ソヤ工業	単	塩ノ井三二七三	一、〇〇〇	A	家具、じゅうたん、カーテン

6 その他の小売業

事業所名	本支店	所在地	資本金	従業員規模	主要販売商品名
イナガス	単	神子榮七二四一	一、〇〇〇	D	プロパンガス、ガス器具
前伊那北工機商会	単	神子榮七三一一	五六〇	B	農機具その他工機
伊那農協ガス配送センター	支	神子榮七二四〇一		B	プロパンガス

伊那農協南支輪事業所
 西原屋商店
 柳中川新聞店
 南信ヤンマー販売所

支 支 支 支
 南 四九三六
 神 七三〇四
 田 七三六六
 北 八二八八

四、五〇〇
 六〇〇
 七〇〇
 A H A C
 肥料、飼料、農機具
 ガソリン、燃料、農機具
 新聞
 農機具

三 商 工 会

南箕輪村商工会（任意団体） 昭和二八年村内商工業関係者が集まって任意団体としての商工会を結成した。

発足当時の会員数は三八名（商業関係二八、工業関係四、士建業関係四、その他二）であった。昭和二九年度の事業計画書を見ると次の一二項目を挙げている。

郡下商工業者大会参加、商工活動啓蒙宣伝、会報の発行、工場訪致、交通運輸強化運動、会員活動助成、商工祭、物産展示会、従業員慰安、観光研究、講演講習会の開催、工業技術研究等。

このような計画と意気込みであったが初めは、会員相互の親睦、情報交換などが主で、順次本格的な活動をするようになった。

南箕輪村商工会（法人） 昭和三五年六月「商工会組織等に関する法律」が制定されたので、同年一〇月二二日従来の任意商工会を解散して新たに法制にのっとった「南箕輪村商工会」を設立することになり、翌三六年五月法人として登記した。そのときの目的として掲げたところは次のとおりであった。

村内における商工業者および一般市民の公正な世論を結集し、あわせて社会一般の福祉に資し、もってわが村経済の発展に寄与する

発足当初は親睦、情報交換等であったが三〇年度から商店では利用者の購買金額に応じ一〇〇円につき一枚ずつのサービスマン券を出すようになった。初めのうちはその枚数によって、映画館の入場券を出した

り、観光ホテルに招待するとか、温泉や旅行に招待するなどした。しかし現在はその枚数に応じた購買券を発行するようになった。

三六年度法人として認められてからは小規模事業指導補助費がつくようになり、金融、税務に関する指導事業を開始した。初めのうちには宮田村商工会と兼務指導員によったが四二年に専任指導員が置かれるようになり、六〇年には増員し二名となり本格的な商工業振興のための経営改善指導事業が実施されるようになった。

現在（昭和六〇年一月）は事務局長、経営指導員、補助員、記帳職員の名が常在して業務の遂行に当たっている。

現在商工会の商業部、工業部、建設業部および青年部、婦人部においてそれぞれ活動している。そのおもな事業は経営改善事業としては金融経理、税務等の指導、各種講習、講演会の開催等を行なっている。また、従業員表彰、会員家族慰安事業等によって団結と親睦を図るためのレクリエーションを行なったり、地域商工業振興について行政に具申する等の諸事業を行なっている。ちなみに昭和五八年度の指導、あっせん回数は表7-52、54のとおりである。

会員増加状況は表7-51のようである。

表7-51 商工会会員の増加状況

年 度	二八	三〇	三五	四〇	四五	五〇	五五	五九
会 員 数	三八	四六	五一	九八	一三八	一九二	二四二	二八七

表7-52 相談指導件数

(昭和59年度)

業 種 別	指 導 対 象 企業数	巡 回 指 導								指 導 対 象 企業数	窓口指導 (通信、電話等も含む)							
		金 融	税 務	経 理	経 営	労 働	取 引	そ の 他	計		金 融	税 務	経 理	経 営	労 働	取 引	そ の 他	計
製 造 業	43	23	25	16	18	20	4	19	125	56	170	48	9	25	11	11	7	282
建 設 業	25	14	5	3	14	6		3	45	48	138	40	4	19	11		3	215
小 売 業	41	23	33	4	30	17	2	14	123	51	133	23	4	9	17		3	189
卸 売 業										1	1							1
サービス業	11	6	11		1	1		5	24	27	49	26	5	4	2	1	3	90
そ の 他																		
計	120	66	74	23	63	44	6	41	317	183	491	138	22	57	41	12	16	777

表7-53 講習会等の開催による指導 (指導回数及び人数)

(昭和59年度)

区 分	指 導 対 象 企業数	金 融		税 務		経 理		経 営		記帳継続		労 働		そ の 他		計	
		回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
集団指導	142			5	153	6	96	2	29			2	37	5	97	20	412
個別指導	116			6	250	3	85			8	62					17	397
計	258			11	403	9	181	2	29	8	62	2	37	5	97	37	809

表7-54 金融のあっせん・推せん状況

(昭和58年度)

区 分		あ っ せ ん ・ 推 せ ん 件 数	貸 付 件 数	あ っ せ ん ・ 推 せ ん 額 (千円)	貸付額 (千円)
国民金融 公 庫	一 般 ・ 特 別	12	11	60,500	53,500
	② - I 資 金	26	26	47,400	47,400
	② - II 資 金	2	2	6,800	6,800
	計	40	39	114,700	107,700
そ の 他	環境金融公庫				
	県 制 度 資 金	15	15	69,100	69,100
	市町村制度融資	19	17	38,500	33,500
	商工貯蓄共済 その他金融機関	4	4	23,000	23,000
計		38	36	130,600	125,600
合 計		78	75	245,300	233,300



図7-75 南英輪村農工会館（昭和57、10落成）

しかし小規模事業者で入会していない業者に対しても希望があれば相談や指導あつせんに応じている。

会館 南英輪村商工会は築込当時村公民館に事務所を置いたが四三年に北畠駅旧官舎跡地の払い下げを受け、同年一二月商工会館を建設してそこへ移った。会員数が年を追って増加したので四八年に増築した。表7-51に見られるように会員は増加し、駐車場の不備、建物の老朽化、手狭等により新会館建設の要望が高まり関係各方面の協力援助を得て五七年五月現在地に着工一〇月落成した。

五九年度会員のうち商業部一二〇工業部八八建設部七九計二八七このように会員数は年々増加の一途をたどっているが本村の工商业者中の小規模事業者は表7-55のとおりで、ちなみに商工事業所数は三七一で、商工会に入会していない事業所が相当数ある。

表7-55 小規模事業者の内訳

業種	建設業	製造業	卸小売業不動産業	運輸業	サービス業	合計
事業所数	九八	九六	一一〇	四	六	四一
						三五五

第五節 新しい生活

一 公民館活動

(一) 公民館の誕生

終戦の混乱から立ちあがり、新しい日本の進むべき道を示した民主的な新憲法の公布をみたのが昭和二十一年一月三日、施行されたのが翌二十二年五月三日のことである。新憲法の精神をふまえ、新しい国づくり・村づくりの方途として公民館の設置とその教育が要請されてきた。

すなわち、昭和二十一年七月文部次官通牒「公民館の設置・運営について」が発せられ、隣の旧伊那町では昭和二十二年四月上伊那図書館内に公民館を開設している。「長野県社会教育史」によると、長野県では次官通牒に基づき、同年九月各町村自治体に民主主義の実践訓練を与え、科学思想の普及、平和産業振興の基礎づくり、そして新日本建設のための郷土の教育・交友・産業とを一体化する中核機関としての公民館を設置するよう「町村公民館の設置並びに運営について」の教育民生・内務部長連名の通牒を出している。

その内容の項目は次のとおりである。

町村公民館の設置並びに運営について

(昭二二・九・九)

町村公民館の設置運営要項

- 一、公民館の趣旨及び目的
- 二、公民館運営上の方針
- 三、公民館の設置及び管理
- 四、公民館の維持及び運営

五、公民館の編成及び設備

六、公民館の事業

(一) 教養部

(二) 図書部

(三) 産業部

(四) 集会所

(五) その他事業

七、公民館設置の手続き

八、公民館の指導

九、備考

(設場文書)

この構想が各地区の公民館設立への大きな指針になり、それぞれ準備に入ったのである。つづいて昭和二十四年六月社会教育法が公布され、目的・組織・設備・予算・運動方針・管理者等が明確に示されたことにより、各町村はそれぞれ公民館設置条例・同公民館規程・同運営審議会規則・同分館規定等を制定して活動を開始した。

本村においては、昭和二十五年七月七日「南筑輪村公民館設置条例」がはじめて議決公布されている。各区においてはこれを機に従来よりあった

図7-76 村公民館

公会所・農協・学校等を利用して公民館活動がはじまった。村においては役場内に事務所を設置し、当面集会所施設がなかったため、隣の農協の二階大広間・学校裁縫室等を借用、公民館関係の諸会合・催

し等に使用していた。当村は村理事者が公民館長を兼ね、主事一名が実際の仕事にあたった。

当時の「公民館設置条例」及び「公民館規則」は次のようである。

南筑輪村公民館設置条例

第一条 本村に公民館を設置する。

第二条 この公民館は南筑輪村公民館と称し、事務所を南筑輪村役場に置く。

第三条 公民館に左の分館を置く

久保分館 榎ノ井 大泉 北殿

南原分館 田畑 神子柴 沢尻 南原

分館の運営は別に之を定める

第四条 公民館は教育委員会が設置されるまで村長が管理する

第五条 公民館に左の職員を置く

館長一名 副館長一名 主事一名 書記一名

第六条 公民館の経費は村費、補助金その他をもつてこれにあてる

第七条 公民館運営審議会委員の定数は一〇名以内とし、任期は一年とする。委員がその職務を行なうために必要な費用弁償の額は南筑輪村費用弁償額率額支給条例により支給する

第八条 本条例の実施に必要な細則は別にこれを定める本条例は公布の日から施行する

昭和二十五年七月七日 議決

○南筑輪村公民館規則

第一条 本館は南筑輪村公民館と称し南筑輪村役場に置き分館を各部落公会所に置く

但し北原は久保分館に、大芝は大泉分館に、中の原は沢尻分館に当分の間含するものとす

第二条

本館は南支輪村民の爲に實際生活に即する教育學術及び産業・文化・体育に関する各種の事業を行ない、もつて村民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする。

第三卷

本館は村民全員を館員とする

第四条、第八条(略)

第九条 本館は第二條の目的を達成するために左の部門を設けて事業を行な

5

- 一、總務部 庶務會計
- 二、教養部 文化講座・討論會・郷土資料の公開等を行ない、知性の向上を計る
- 三、体育部 各種の運動競技等を行ない、体位の向上、村民の融和を計る
- 四、産業部 科学的教養を担当し、各種機關と連絡を密にし、各種産業の研究懇談会等を開き、生活の合理化を図る
- 五、社会厚生部 社会事業一般についての研究及び村民の保健、衛生・授産指導の厚生事業に協力する
- 六、図書部 圖書の貸出・購入斡旋・整備を行ない、教養の向上に資する
- 七、文化部 演劇・音楽・映画その他の文芸を通じて民主的平和的な個性の向上を計る

第二〇条、第二三条（略）

第一四條 この館則を変更するには公民館運営審議会に於て三分の二以上の承認を経なければならない

第五條 二の館馬

昭和二十五年 月 日より施行する
(役場文書)

このようにして戦後の社会教育は、既存の公会所・部落集会所・農協・学校等を利用して公民館活動として展開されていった。当時にお

ける重点対象は青年・婦人層にあった。しかし活動が活発・多様化されるにしたがい、既存の建物は老朽の上、しかも手狭で不便を感じるようになり、村費補助あるいは寄附金等による新しい公民館等各種施設、建設の必要が叫ばれるようになり、戦後の物資不足・経済状況の混乱等を乗りこえ、旧学校校舎の払い下げや村からの補助等を得て、新しい公民館（分館）建設への機運が盛りがつていった。

(三) 各区公民館（分館）の建設

昭和二年二月一日村議会協議会において、大泉公民館建設の周
題が議せられた。これは区民の総意と協同組合の要望による稚蚕所併
設の公民館であつた。後日議会において建設の件が決定、村の補助に
よる新公民館（分館）建設の第一号となつた。つづいて翌年塩ノ井も
これになつて稚蚕所を兼ねての公民館を建設した。年を追つて建設
された公民館は左のとおりである。

公民館(分館)	建設年度	構造	面積	備考
大泉公民館	昭和二五年	木造二階	四三四㎡	移築所を兼ねる
塩ノ井	二六年	木造二階	三六八㎡	移築所を兼ねる
久保	三〇年	木造一階	二一八㎡	
北原	三二年	木造一階	一〇三㎡	
大芝	三二年	木造一階	一七三㎡	
南蔵	三二年	木造二階	三三三㎡	
南原	三二年	木造一階	三三三㎡	
沢尻	三二年	木造一階	一六三㎡	
北蔵	三四年	木造二階	三四三㎡	
神子柴	四二年	木造一階	二〇〇㎡	
田畑	四九年	鉄骨・木造二階	六五九㎡	村公民館地区館として
中込	五〇年	木造一階	一〇〇㎡	中込区独立発足
西郊地区館	五八年	鉄骨二階	五〇一㎡	大泉区に建設・村地区館として

塩ノ井公民館は老朽化が激しく昭和五一年に新築されている。なお、南原区内に西原公民館がある。

三 南箕輪公民館の建設

各区公民館が続いて建設されるなか、役場・農協・学校等を利用して行なわれていた村公民館活動も、村民の意識要望の高まり、活動の活性化等により、活動の中核ともなるべき村中央公民館建設の機運が盛りあがった。

昭和三十七年二月議会に議案第四九号として次のように提案され、議決されている。

議案第四九号

文化センター（中央公民館）設置について

南箕輪に下記により文化センター（中央公民館）を設置することについて地方自治法第九十六条第一項第七号の規程により、議会の議決を求める。

記

1 設置の場所 南箕輪村宇賀香丘四、八〇二番地

2 名称 南箕輪村文化センター（中央公民館）

昭和三十七年二月二日提出

南箕輪村長

清水国太郎

昭和三十七年二月二日議決

南箕輪村議会議長

徳高 昇和

（役場文書）

右のような議会決議をもとに、昭和三十八年度事業として中央公民館の建設にかかった。その建設概要は次のようであった。

・構造 鉄筋コンクリート

二階建て

・面積 七三八㎡

・建物内部

講堂（大会議室） 結婚式場

事務室 図書室（兼応接室）

青年児童室 会議室 講座室（調理室）

用務員室 倉庫 便所（二階二階各一）

当時としては、モダンな建設で、人目を引くに十分であった。

そして、昭和三十九年四月 竣工落成式を盛大に挙行、同時に使用が開始され、以後文字どおり村の公民館活動の中核的役割を果たして今日に至っている。

四 公民館活動の場としての各種施設

1 南箕輪郷土館の建設

昭和四十六年完成 一階の面積一四八㎡

一階には村内各遺跡より発掘された土石器類等の考古資料、植物標本等が展示され、地階には民俗資料が多数陳列されている。

2 各種体育施設

施設	建設年度	規模	備考
大芝野球場	昭和四十七年	一四、四二八㎡	
大芝アーチェリー場	昭和四十七年	射的場	テニスコート併設
大芝陸上競技場	昭和四十八年	二一、六〇〇㎡	後に冬季スケート場も兼ね
大芝村民プール	昭和四十九年五〇〇㎡	ハコリス	幼時利用円形プールも完成
村民体育館	昭和五一年	一八五九㎡	
南原グラウンド	昭和五一年	五、六〇〇㎡	村へ移管
大芝テニスコート	昭和五一年	タレイ 四画	五三年二画完成 計六画
大芝村民プール	昭和五四年二五〇㎡	六、六八三㎡	ミニグラウンド
大芝小運動場	昭和五四年	六、六八三㎡	
大芝テニスコート	昭和五九年	全天候型四面	

さらに、近時社会体育活動の人口増にともない、小中学校の体育館及び屋外運動場を開放し、児童生徒の学習に支障のないかぎり、休

日・夜間等この使用を認め、その便をはかっている。

なお夜間使用の必要上、大芝屋上競技場・テニスコート・プール・小学校運動場・小中学校体育館・村民体育館には夜間照明の設備を施して、利用の便をはかっている。

国 主な公民館活動

1 学級・講座等

公民館活動が開始されたころは、その活動の対象は主として青年・婦人層におかれていた。昭和二五〇〇年ころ、はじめて女子青年学級を開設、主として和裁・洋裁・料理・生花等の講座内容で、農協の二階や学校、役場二階等を利用して昼間に開かれ、しばらくの間続けられていた。

昭和二八〇〇年には、生活体験研究発表会が公民館主催で開かれた。村内から選ばれた青年・婦人等により、農業問題・家庭生活・生活改善・青少年問題等その内容も幅広く、有意義な発表会であったため、その後は年一回は開催されることになっていた。

つづいて昭和三二年には県教育委員会指定の婦人学級が開設され、月一回、年間には一二回も開級、その活動を通して婦人のあり方・成果等について発表会を持ち好評を得た。これがやがては文部省指定の婦人学級開設にもつながり、昭和三七〇〇年には婦人学級が機動的な活動を行なうようになっていった。そしてこのころ家計簿をつける運動が公民館を中心に広まっていった。

昭和三九年中央公民館完成を機に、村政を知るための青年学習運動・増大農学部の教授、学生、村民を交えての農業振興運動も実施され、これらに参加する村民も多く、若妻会・短歌会等も作られたのもこのころである。

昭和四四年ころになり、書道教室が開級され、受講生も多く、現在



図7-77 文化講演会風景

人講座は次のようである。いずれも参加することにより語らいの場や仲間づくり、くらしの中に生きがいを求めることに狙いをおいている。

○社会教育学級

・高齢者学級 六五歳以上の男女 年間一〇回

郷土の歴史・農業について、社会見学・健康とレクリエーション・生きがいとは、差別の問題・みんなで話そう その他

・婦人学級 婦人 年一〇回

婦人と労働・婦人と健康・消費生活・税金・レクリエーション・食生活のみなおし・身近な差別・社会見学・その他

青年学級 青年男女 年一〇回

人間関係・スポーツと仲間づくり・結婚問題・郷土と歴史・青年と役割・身近な差別・その他

は終了生を中心に自主的な運営による教室が続いている。昭和五四年ころには俳句教室が開かれ、これも書道教室と同様自主的な学習活動が現在もつづいている。その他現在に至るまでには、家庭教育相談事業・同和教育事業等をはじめとして文化教育面での幅広い教室講座等が持たれ、おおいにその成果をあげている。

昭和六〇年度における村公民館主催の社会教育学級および成

○成人講座

- ・盆 裁 成年男女 年一〇回
- ・てん 刻 成年男女 年一〇回
- ・陶 芸 成年男女 年一〇回
- ・村の歴史 成年男女 年一〇回
- ・版 画 ・しめ縄づくり ・ちぎり絵 ・墨絵等
- その他

家庭教育学級・家庭のしつけ講座・文化講演会等

つぎに体育スポーツ関係の教室・講座等についてみるに、昭和四六年剣道教室がまず開かれた。これは中学校体育館を開放して早朝にもたれた。昭和五一年から五三年までスポーツ振興モデル村の指定を受け、村民体育館の建築完成とあいまって各種スポーツ教室（少年スポーツ教室も含む）が開設され、ますますその活動が活発になっていった。その指導には従来より設置されていた体育指導員および新しく設けられた補助員がこれにあたった。

昭和五六年になって、県より三年間の派遣社会教育主事（スポーツ担当）の配当を受け、健康づくり教室を開設した。さらに昭和六〇年には社会教育主事（主としてスポーツ）の配当があり、各種スポーツ教室・講座・健康づくり教室等の指導態勢が整った。また本村には体育協会がないため、これに代わるものとして昭和五九年より「南箕輪村社会体育指導者協議会」を設置した。これは体育指導補助員制度をなくして、村内各スポーツの指導的な立場にある者を種目毎に数名ずつ委嘱して一四部をつくり、その連絡協議会をもって村内各スポーツ教室、大会等の指導にあたっている。その指導部は次のとおりである。

野球・ソフトボール・バレーボール・バスケットボール・テニス・卓球・陸上競技・サッカー・バドミントン・レクリエーション・野外活動・剣道・柔



図7-78 少年スポーツ教室（空手）

・卓 球（夜）	一般
・社交ダンス（夜）	一般
・バドミントン（夜）	一般

2 生活改善運動

戦後の混乱期が過ぎ、物資が豊富に出まわるにつれ、生活もだんだん華美になってきた。特に冠婚葬祭においてその傾向が強かった。そして村民からまず結婚のあり方について手をつけようとの声があがってきた。

○花嫁衣裳について

昭和二六・二七年の二年間村婦人会の会長等が、生活改善の一環として花嫁衣裳を裾下に先がけて婦人会で購入、その利用を奨励した。当時村へ強く働きかけて村から一五万円の補助を受け、三組そろえたのが今日の婦人

道・空手
昭和六〇年度におけるスポーツ教室は左記のようである。

○少年スポーツ教室

野球 四五人・剣道 二七人
柔道 二一人・空手 五六人
○成人スポーツ教室

・軟式テニス（昼の部）婦人
対象 年一〇回・五・10月
・軟式テニス（夜の部）一般
年一〇回・五・10月
・レクリエーション（昼）高
令者 年一〇回・六・10月
年一〇回・12・3月

会の花嫁衣装貸し出しのはじまりである。(『郷土人史「あゆみ」より』)
○公民館結婚式

昭和三十九年待望の中央公民館完成により、公民館結婚式が生活改善の一環としてはじまった。昭和三十九年四月二十八日挙行の式を第一号に、以後年々盛んになり、会費制の奨励とあいまって一時は年に三〇組前後もあった。しかし近時公民館結婚式がほとんど行われなくなっている。

○生活改善推進協議会設置

昭和五〇年、年を追って派手になりつつある日常生活や、冠婚葬祭の不合理的を改め、生活改善推進運動の徹底をはかるため、村長を長とする「南箕輪村生活改善推進協議会」を設置、全村民の協力を得て強力な運動を展開していった。特に毎年「申しあわせ」事項を検討し、金戸に配布して徹底をはかるようにした。

昭和五九年度 申しあわせの要点

1 結婚披露宴について

- ・なるべく会費制とし、会費五、〇〇〇円以内とする。
- ・会費制以外の場合、祝儀は五、〇〇〇円くらいに努める。
- ・引き出物は廃止し、招待状にそのことを明記する。

2 葬儀について

- ・香典は一、〇〇〇円以内にし、お返しはしない。
- ・隣組の手伝いは、原則として二戸一人で一日で終わるようにする。
- ・休憩所の接待は簡素にし、村内の人は焼香だけにし、休憩所には寄らないようにする。
- ・花輪は自粛する。

3 新盆について

- ・見舞いは五〇〇円以内にする。
- ・酒・主食は出さない。

4 入学祝いについて

- ・祝い金は二、〇〇〇円以内、又は相当額の品とする。
- ・小学校入学の時一回だけのお祝いとする。
- ・お返しはしない。

5 新築祝いと普請見舞いについて

- ・上棟祝いは一、〇〇〇円くらいとし、落成祝いは簡素にし、いずれの場合も引出物は出さない。
- ・普請見舞いはなるべく廃止する。

6 病気見舞いについて

- ・見舞い金は一、〇〇〇円以内とする。
- ・お返しはせず、余快の折、礼状又は電話等でお礼をのべる。

7 出産祝いについて

- ・出産見舞いは一、〇〇〇円以内又は、相当額の品にし、お返しはしない。

- ・その他のお祝いについてもなるべく簡素にする。

8 災害見舞い等について

- ・前記の生活改善の主旨によって簡素化につとめる。

(役場文書)

3 成人式

本来は一月一日が「成人の日」であるが、他県等へ他出就職の者、あるいは在学中の者の正月帰省の期を選び本村では一月三日に行っているが、好評で出席率もよく成果をあげている。村長式辞・来賓祝辞・激励のあとの成人者代表の意見発表、つづいてアトラクションが行なわれている。

4 文化祭

第一回村民文化祭が行なわれたのは昭和四九年一〇月二十七日のことである。当時の村報によると、次のようなことが書かれている。



図7-19 村文化祭会場（一部）

行なわれた中学校の若竹祭にみえた人も数多く鑑賞されました。また式典後の各分館よりのステージ発表には、会場一ぱいの観客より盛大な拍手をうけ、盛会裡に終了しました。」

（役場文書）

また昭和五二年四月二・三日には、村民体育館完成記念文化祭が盛大に開催された。作品の展示鑑賞、田楽座の記念公演共催発表会があり、盛況であった。

このように村をあげての文化祭は、毎年中学校の若竹祭にあわせて、村公民館で作品の展示、村民体育館での各分館及びグループのステージ発表で盛大に開かれるようになって今日に至っている。年とともに出品点数も多く、ステージ発表に出演する種目も変化に富むようになってきた。

5 各種スポーツ大会

村民体育祭 相当前からそれぞれ種目ごとのスポーツ大会が持たれ、各分館対抗の形で行なわれていたのが、春夏秋冬に分けて村民体育祭という名称で開催されるようになったのは昭和五二年度からである。

春季村民体育祭 バレーボール

夏季村民体育祭 野球およびソフトボール

秋季村民体育祭 軟式テニス

冬季村民体育祭 卓球およびバドミントン

右以外に、近年壮年ソフトボール大会・ゲートボール大会・壮年野球大会・女子ソフトボール大会等、各種大会も実施され、大芝スポーツ施設の充実とともにスポーツ人口の増加とあいまって年々体育活動が盛んになってきている。なお村民運動会は五三年度を最後に中止になった。

6 各区公民館（分館）活動

公民館活動の原点は各区の活動にある。各分館では分館長・主事を中心に、それぞれ各区に適した活動を立案し積極的に推進している。村では地区開設事業補助金を支出し、その活動を支援している。その活動内容も多岐にわたり、それぞれ各区の年中行事化し、区民に定着している。

一 厚生福祉・衛生

（一）保育所

1 保育所開設の要望

昭和六年ころより春秋の農繁期に地区の婦人の善意によって季節託児所が開設されて喜ばれたことがあった。

第二次大戦中働き盛りの男子が戦争や軍需工場に動員され労働力が不足したりえ、食糧増産が強く要請された。水田面積の多い本村では母親たちもいよいよ多忙になり、託児所設置が要望された。戦争は終わっても引き続き食糧増産は要求されその後終戦夫婦が激増し、保育所の必要性はいっそう高まった。

「児童福祉法」が昭和二十二年二月一二日に公布され、翌二十三年一月から施行になった。

この法によると保育所は「日々保護者の委託を受けて、保育に欠ける乳児又は幼児を保育することを目的とする」とあり、また、同法には「特に必要あるときは、その他の児童を保育することができ」と規定されている。母親の勤労、病氣その他の理由によって乳幼児の世話が十分にできない場合毎日その乳幼児を預かって保育する施設である保育所は県の奨励もありその設置の要望が高まった。

昭和二十四年九月村議会において北殿地区に保育所設置のことが協議された。しかしこれはいろいろの点において実現する段取りになることができなかったが母親たちの設置に対する要望は年を追って強くなった。

2 保育所の設置

(1) 北條幼稚園（私設）

昭和二十六年に北條の北條道子は自宅に保育所を開設した。公費の助成のない私設のものであったので田地その他のものを売却して資金を調達して自宅を改造したり遊具を調えた。幼児を募集したところ六二名の希望があったので馬場いちを補助にたのんで開設した。

翌年は入所希望児が八〇名に及んだので、高校卒業の女子二名をさらにたのんで経営した。

昭和三十一年に村立の中保保育所の建物ができたので遊具等一切の設

備品をそこへ移し保育を続けたが、三十一年四月からは村立中保保育所に移行した。

(2) 村立保育所の設置

昭和二十八年二月田畑・神子柴地区から保育所設置の要望書が村当局に出された。これを機に村会で協議のうえ、村としては北部・中部・南部・西部の四か所に設置することが望ましいとして順次開設するという方針をとった。

まず南部保育所設置についてみると概ね次の経緯をたどった。

昭和二十八年二月二日、村会において設置決定、その条件として次の四点が決った。

- 一 建設費、設備費の八〇％村費支出のこと。
- 二 土地購入費、地均し費は地元部落負担のこと。
- 三 設計監督費は地元部落負担のこと。
- 四 建設工事の実施は促進土地元部落で行なうこと。

北部・中部・西部の保育所設置についても南部とはほぼ同様の条件で行なわれた。しかし南原はやや特殊の経過をたどった。経過は次のようである。

南原保育所設置の経過

昭和三十一年四月地元民の要望によって南原、沢尻地区の幼児を対象に四月一―十一月（八か月間）の季節保育所を南原園拓組合事務所を開いた。これは建て坪わずか一一坪のバラック建てで、そこへ四八名の幼児が集まった。

村から一〇万円の補助を得、保育料として月額五〇円を徴収し二名の保育で運営した。弁当持参、味噌汁を与えたがその味噌は持ち寄りであった。また、米軍放出の脱脂粉乳を給したりもした。二名の保育を依頼するといっても併地のことで有資格者を得るに困難であった。



図7-80 ぐっすり昼寝

昭和三二年小学校改築を機に校舎の一棟の払い下げを受け、それに調理場、玄關を建て増し、公民館兼用の保育所とした。広々とした建物での保育ができ子供も親たちも大喜びであった。

昭和三六年四月ようやく常設の保育所としての認可を受けた。四五年より村職員としての保母が勤務することができ公に認められた僻地保育所となったが所長は南部保育所長が兼任で週二回来所した。四八年所長がおかれ、ようやく完全独立の保育所となった。

昭和五一年になり沢尻、南原地区民の要望を受けて、村当局は南原に独立の保育所建設をはかり県知事宛に認可申請書を提出した。そのおりの保育所を必要として述べた理由は次のとおりである。一〇月一日南原保育所として正式認可になった。

保育所を必要とする具体的理由

南原保育所は現在地域公民館を借用しており、最も近い保育所より三・六kmも離れておりへき地保育所である。一五五戸の農家戸数のうち専業が六〇戸平均二haの相伴酪農地帯で平均一五頭の飼育である。一棟兼業六五戸、二棟兼業三〇戸であり兼業農家の母体は農業や地域内工業へ勤めている。又伊

那市のベッタタウンとしての急増地域でもある為現在の借用施設での保育は不可能であるため、定員を六〇名とし併せてへき地保育所の解消をはかりたい。

(役場文書)

(3) 五保育所の歩み

北部保育所		西部保育所	
昭和三年二月一日	工事着工	〃 一〇・二四	開所式
〃 五・二二	入所式	五〇・三・二三	増築移転工事起工
三二・三・三一	乳児室拡張	〃 六・二	竣工
四二・一一・	乳児室増築	五七・一一・六	未満児室二増築
四九・三・	保育室二増築	二九・一〇・一五	起工
五二・一〇・	乳児室改造	三〇・四・二〇	竣工落成式
五九・一一・	全面改築	三〇・五・一	開所式
中部保育所		三〇・六・一七	認可
三〇・七・二〇	建物竣工	三一・四・二六	三歳未満児保育開始
三二・三・三〇	認可	三七・一〇	テラス完成
〃 四・一	村立移管開所式	四四・七	プール完成
四一・九	保育室三増築	五四・一二・二〇	新保育所落成式
四九・四	未満児室一、保育室三増築	五五・一・七	新保育所にて保育開始
五四・九	屋外遊び場拡張	七・一一	新プール完成
南部保育所	長時間保育開始	南原保育所	季節保育を南原開拓事務所開設(四月一)
二八・九・二九	竣工落成	三〇・四	
〃 一〇・二四	認可		

三二・

小学校旧校舎一
棟転下を受け

三六・ 四

公民館と兼用
常設保育所とな

四五・

保母が村職員と
なる、所長は南

(4) 入所措置および保育料

本村では昭和三十九年四月一日付けをもって「南箕輪村保育所設置条例」を児童福祉法に基づいて制定した。同条例によると設置の目的は「児童福祉法第三十九条に基づいて村内の保育に欠ける児童を保育することを目的とする」とある。「保育に欠ける児童」を入所させることが本来であるが村内に幼稚園が無いし現今はほとんどの家庭が多忙で共稼ぎに母親が働きに出るか、家にあっても下請けの内職をしていいる。また農家でも年中忙しく幼児期に必要な保育を十分に得ないとして、入学前の全児童を入所させている。

保育所名 定員(昭和五八年一〇月二二日改訂)

南部保育所 一三〇名

西部保育所 八八名

中部保育所 一八〇名

北部保育所 一一〇名

南原保育所 六〇名

保育所運営費と保育料 保育所運営費は国八割、県一割、村一割の負担区分によっており、積算は厚生省の基準を基礎に定められてい

部保育所長兼務
専任保育所とな主任保母をおく
独立保育所建築南原保育所とし
て認可

る。

保育料は表7-56の基準表によって徴収している。生活保護法による被保護世帯からは徴収しないがその他を一六にランク付けして階層別に徴収している。兄弟二人以上になると二人目以上は半額にして保護者の負担の軽減をしている。

(二) 厚生福祉行政の発展

明治維新の急激な社会の変動と経済界の混乱によって、生活の困窮する者が急増したが、これらの人々を救うため明治政府は明治七年「恤救規則」を制定した。これは隣保あるいは縁者の相互扶助を基本としたものであった。ただ、狼身で鹿鹿の者、七〇歳以上で働けない、病気で働けない者等に救助金を渡すことにした。

昭和四年に救護法を制定して、生活の困難な特定者に生活扶助、医療扶助・助産扶助・産業扶助を行なうことを定めた。公的扶助が一步前進したわけである。

終戦後、社会福祉に関するいろいろな法律ができ、公的扶助が行なわれるようになった。生活保護法・児童福祉法・身体障害者福祉法・精神障害者福祉法・老人福祉法・母子福祉法・以上を福祉六法というが、この法律をもととし、他にも福祉に関する法律があつて、国や県、市町村の責任において実施され民生委員が協力している。

昭和二二年に児童福祉法二五年に生活保護法が制定され二六年三月二九日に法律第四〇五号により総括して社会福祉事業法の制定となった。村としてもこの法律に基づき、村長を長とする社会福祉協議会を設立させることとなった。

福祉団体は、身体障害者福祉協会、昭和五〇年ころまでは未亡人会と称した母子福祉会・遺族会・愛友会などがあり、その育成を図ってきたが、とくに県の指導により強化されてきたのが手をつなぐ親の会

表7-56 昭和59年度南箕輪村保育料徴収基準及び徴収人数

各月初日の在籍措置児童 の属する世帯の階層区分			3歳未満児	3歳児	4歳以上児	階層別 徴収人数 ()内半額
階層区分	定 義					
A	生活保護法による被保護世帯		0	0		2 ^人
B	前年度分の村民税非課税世帯		8,000 ^円	6,000 ^円	5,000 ^円	12
C ₁	A前非 B年課 階分税 層の世 帯を所 帯除 得 き 税	前年度分の村民税課税世帯であって均等割の額のみ の世帯	15,000	8,500	7,500	6
C ₂		所得割の額が 5,000円未満	16,000	9,000	8,000	11(3)
C ₃		〃 5,000円以上	17,000	10,000	9,000	11(1)
D ₁	前 年 分 の 所 得 税 課 税 所 帯	3,000円未満	19,500	13,000	11,000	13(1)
D ₂		3,000円以上15,000円未満	20,000	13,500	11,600	25(2)
D ₃		15,000 〃 30,000 〃	20,500	14,000	12,200	28(7)
D ₄		30,000 〃 60,000 〃	21,000	14,500	12,800	67(11)
D ₅		60,000 〃 90,000 〃	21,500	15,000	13,400	57(8)
D ₆		90,000 〃 120,000 〃	22,000	15,500	14,000	39(6)
D ₇		120,000 〃 150,000 〃	22,500	16,000	14,600	50(11)
D ₈		150,000 〃 180,000 〃	23,000	16,500	15,200	24(2)
D ₉		180,000 〃 210,000 〃	23,500	17,000	15,800	33(4)
D ₁₀		210,000 〃 240,000 〃	24,000	17,500	16,400	31(9)
D ₁₁		240,000 〃 270,000 〃	24,500	18,000	17,000	26(7)
D ₁₂		270,000以上	25,000	18,500	17,600	79(16)

2人以上は半額

長時間保育料 所得税非課税 2,500円

〃 9万円未満 3,000円

〃 9万円以上 5,000円

（精神薄弱者父母の会）と老人クラブである。

在宅老人福祉として老人家庭訪問事業が行なわれているが、本村では昭和五十八年一月二五日訓令第二号によって、「南箕輪村老人家庭奉仕員派遣事業運営要綱」を定め身体上又は精神上障害があつて、日常生活を営むのに支障がある老人に対して老人家庭奉仕員を派遣して、老人の日常生活の世話を行ない、老人が健全で安らかな生活を営むことができるよう援助することになった。

条例として明文化したのは五十八年になってからであるが、実際は四五年四月から嘱託員一名をおいてこの趣旨に沿った活動をしている。四七年四月からは村吏員の奉仕員を二名にふやした。

対象者は南箕輪村に住所を有し、老衰等により日常生活を営むのに支障がある、おおむね六五歳以上の者及び心身障害者のいる家庭で家族が介護できない状況にある場合となっている。

また、奉仕員の行なうサービスは、次に掲げるもののうち、必要と認められるものだけである。

○家事、介護に関すること

・食事の世話

・衣類の洗たく、補修

・住居等のそうじ、整理整頓

・身の回りの世話

・生活必需品の買物

・医りよう機関等との連絡、通院介助

・その他必要な家事、介護

○相談、助言に関すること

・生活、身の上に関する相談、助言

・その他必要な相談・助言

これら老人等の介護について、本村では昭和五〇年三月二七日条例第四号をもって「南箕輪村老人介護手当支給条例」を制定し、寝たきり老人及び心身に重度の障害のある者を介護する者に手当を支給し、その慰労と福祉の増進に寄与することを定めている。

老人福祉に関しては他に、敬老祝金、老人医療給付などがあり、老人医療給付については、国・県の事業にあわせ低所得者に対しては村独自として六七歳以上の老人の自己負担分を扶助している。

1 社会福祉協議会

昭和二六年社会福祉事業法によって、本村でもいち早く社会福祉協議会を発足させた。現在社会福祉協議会事業は役場生活課・厚生福祉係を窓口とし、村の社会福祉行政と並行して行政の及ばない面での福祉活動を推進している。

(1) 主な活動

- ・心配ごと、行政相談の実施
- ・福祉団体との懇談各種事業の企画、推進
- ・共同募金活動の推進
- ・歳末助け合い、社会を明るくする運動、募金活動
- ・施設の慰問、寄付
- ・在宅寝たきり老人の慰問、援護
- ・低所得世帯、独り暮らし老人援護
- ・世帯更生資金の活用と償還指導

(2) ぐらしの資金貸付け事業

低所得世帯を対象に当面の生活費として、短期・無利子で貸付けを行う。最高一〇万円。

(3) 福祉団体への協力、助成。(一) 内閣和六〇年三月現在会員数

・身体障害者協会（八〇人） ・母子福祉会（三三五人） ・老人クラブ連合会（約一、一〇〇人） ・義援会（二二六人） ・愛友会（一二〇人）
・徳義老人会（五人） ・手をつなぐ親の会（二八人） ・県部落解放審議連絡協議会。

(4) 社会福祉協議会大会参加・その他研修会参加

2 民生委員協議会

民生委員法第七一条によると、その任務を次のように定めている。
「社会奉仕の精神をもって保護指導のことに当たり、社会福祉の増進に努める」

昭和五十六年度は本村には女性三名を含む一名の民生委員がおかれ、具体的には次のような活動をしている。

生活保護家庭の調査、検討。介護者の実態調査。独り暮らし老人の訪問、相談。社会を明るくする運動への協力。心配ごと相談の実施。福祉団体との懇談。各種事業の企画。施設の訪問、寄付等。世帯厚生資金の活用と指導。その他生活の相談、指導等。なお民生委員は児童委員を兼ねている。

他に犯罪に結びつく心配のある者の善導の目的をもった保護司の制度があるが本村でも二名がその任にあっている。

3 国民年金

我が国の公的年金制度の歴史は公務員を対象とする恩給制度に始まり、昭和二九年に一般被用者を対象とする厚生年金制度の全面改正、昭和三六年、自営業者等被用者以外の者を対象とする国民年金制度の発足を経て、国民皆年金体制が実現するに至った。昭和五七年一月一日現在の本村の国民年金の状況は次のとおりである。

総人口 九二五一人

二〇歳～五九歳人口 四九七八人（五三・八％）

被保険者数 強制 一三九三人

任意 五四八人

国民年金受給権者数（昭和五八年三月）

老齢年金（提出） 六七九人（二億一六八万五五〇〇円）

障害年金 二七人（二七三〇万六二〇〇円）

母子年金 九人（六〇一万三二〇〇円）

寡婦年金 六人（二一〇万七二〇〇円）

老齢福祉年金 三〇〇人（九〇三六万六〇〇円）

障害福祉年金 四六人（二八三九万二二〇〇円）

(四) 厚生福祉施設

1 老人集会所施設（赤松荘）

老人集会所施設としての老人憩いの家赤松荘は昭和五十一年三月村公民館の西隣りに新築、翌四月より利用を開始した。一三一・三五㎡の木造建築で集会所二、機能訓練室、浴室、厨房室等あり老人の健康増進・教養の向上・リクリエーション等利用している。

利用についての設置条例によると
第二条に、目的として、「老人集会所施設は、老人の健康増進・教養の向上・リクリエーション及び憩いの場として老人福祉の増進に寄与することを目的とする」とあり、村長の許可を得て利用することとなっている。



図7-81 老人集会所施設「赤松荘」

る。また管理規則の第五条「赤松荘の使用時間は次のとおりとする。午前九時より午後四時まで」、第六条には使用者は原則として村内居住の六〇歳以上の老人とする。営利を目的とした会合等には使用しないこと等がある。

2 南箕輪老人ホーム

施設の沿革 昭和三二年、時の上伊那町村長会長清水国人の発案により、上伊那郡社会福祉協議会を母体とし、辰野町・箕輪町・南箕輪村・長谷村・高遠町・河南村・西春近村・宮田村・飯島村・中川村の各町村長を役員として、社会福祉法人を設立し、養老院が精神薄弱者施設の建設を協議した結果、養老院の建設が決定された。

場所は南箕輪村で提供し、建設にあたっては前記一〇か町村に伊那市、駒ヶ根市が加わり、一二市町村で建設費用を負担することとなった。

地籍は初め田畑、南殿が選ばれたが地元の反対にあい最終的には大芝地籍と決定した。

昭和三三年、社会福祉法人南箕輪養老院と名称を決定し、同年八月、施設建築に着手、同年十二月二〇日、竣工、同時に法人申請をなし、昭和三四年一月一日、認可された。

施設は、社会福祉事業法による第一種社会福祉施設として、生活保護法による「扶養義務者のない老廃者を保護するため施設に収容し、適切な環境を与え、保護を加えさらに文化生活に溶せしめるとともに老人の福祉を図る」ことを目的としている。

定員は昭和三三年度分三〇名として設置認可申請をし昭和三四年一月二〇日、正式に認可を受け、同日、南箕輪養老院として開院した。以後、三四年一〇月二五日、第二期工事を完了し、十一月一日より定員五〇名、三八年六月三〇日、第三期工事を完了、翌七月一日より定



図7-62 老人ホーム

員七五名と規模を拡大し、今日に至っている。

三八年八月一日より、老人福祉法が施行され施設の運営内容が一変し、施設に入寮した老人は、生活保護法による収容から老人福祉法による入居と目的が変わり、施設名も南箕輪老人ホームに変更された。さらに老人福祉法の施設運営基準の変更に伴い、養護老人ホームのほか、特別養護老人ホーム、生活費を四万円ぐらゐり支払う軽費老人ホーム等の施設が併せて運営されるようになり、昭和五四年四月一日より従来の定員一割増の収容が認められなくなったため、定員八〇名と変更して現在に至っている。

南箕輪老人ホームの定員の変遷 職員数 入居者の町村別人数等は表7-57のようである。

3 大芝スポーツ公園

南箕輪村大芝原村有林は面積一五〇・二五haの平地林で赤松、ひのきの二段共林として育成、年々村財産収入の主要部分を占めたが、山林経営の不振から財政基盤弱体化の改善、村民憩いの場開設、中央道の開通等総合的判斷の結果、観光開発にふみきることとなった。

(1) 野球場

建設年度 昭和四七年度

表7-57 南箕輪老人ホームの定員と入寮者

入寮者の定員の定額

区 分	34年1月～10月	34年11月～ 38年6月	38年7月	38年8月～ 54年3月	54年4月～
定 員	30	50	75	75	80
取 扱 員	40	60	82	82	80
準 拠 法	生 活 保 護 法			老 人 福 祉 法	
摘 要	定 員 の 1 割 増 が 認 め ら れ る				定員1割増無し

職員の定員の定額

区 分	34年1月～34年10月	34年11月～38年6月	38年7月～54年3月	54年4月～58年4月
定 員	7	9	13～18	19～19
現 員	7	9	13～18	20～21
摘 要	職員の定員については老人福祉法施行に伴い寮母・指導員・栄養士 等が毎年増員があり現在に至っている			

入 寮 者 の 出 身 地 別 (昭和58年度)

部 市 名	町 村 名	人 数	摘 要
上 伊 那 郡 伊 那 郡 市 市 郡 下 伊 那 郡	辰 野 町	10	53
	箕 輪 町	13	
	南 箕 輪 村	8	
	長 谷 村	1	
	高 遠 町	10	
	飯 島 町	5	
	中 川 村	2	
	大 鹿 村	1	
	高 森 町	1	
	下 桑 村	2	
塩 尻 市 市 市 市 市 諏 訪 市 市 市 市 市 諏 訪 市 市 市 市 市 南 安 曇 市 市 市 市 市 飯 田 市 市 市 市 市	下 諏 訪 町	8	1 1 1 1
	登 科 町	1	
		1	
		1	
合 計		80	

(2) 陸上競技場

面積 一万四千二八㎡
建設費 三一〇〇万円
昭和五二年、八〇〇人収容の観覧席を建設、経費は一〇九五万円。
昭和五八年の使用状況、一般開放、二四一回、早起き野球、二〇〇回、使用団体、一〇四、使用人数、延一万七二八八人、開放期間四月一六日、一月一三日。



図7-83 大芝公園ロータリーに立つ「日本のふるさと」像



図7-84 陸上競技場は冬季間スケート場となる
(写真はナイトスケート)

(3) プール

五〇mプール

建設年度 昭和四九年度

敷地面積 一万〇八七八㎡

使用状況 二万二〇八四人(夜間七日間開放八七人)五八年度

五〇m、ハコース、水深、一二〇、一四〇cm

二五mプール 幼児プール併設

建設年度 昭和五四年度

使用状況 二万二〇八四人

(4) テニスコート

敷地面積 三六〇〇㎡ 六面

建設費 二一九一・三万円

昭和五八年使用状況 星二二日、夜七五日開放、延五五九八人使用

全天候テニスコート三面 昭和五九年、完成 建設費二〇〇〇万円、四月一

四日オープン

(5) フィットネスセンター

建設年度 昭和四七年度

建設費 二九三万円

フィットネスコース 二八、ミニコース 六

(6) 憩いの家大芝荘

体育施設等利用者のための休憩宿泊施設として昭和四八年に完成した大芝荘がある。

五三団体、ソフトボール会場にそなえて、大浴槽及び調理場等が改築され、昭和五四年には、宿泊者六一九八人、日帰り利用者、三万八九二七人、計四万五二二五人の利用者があり、その利用額は六〇〇〇

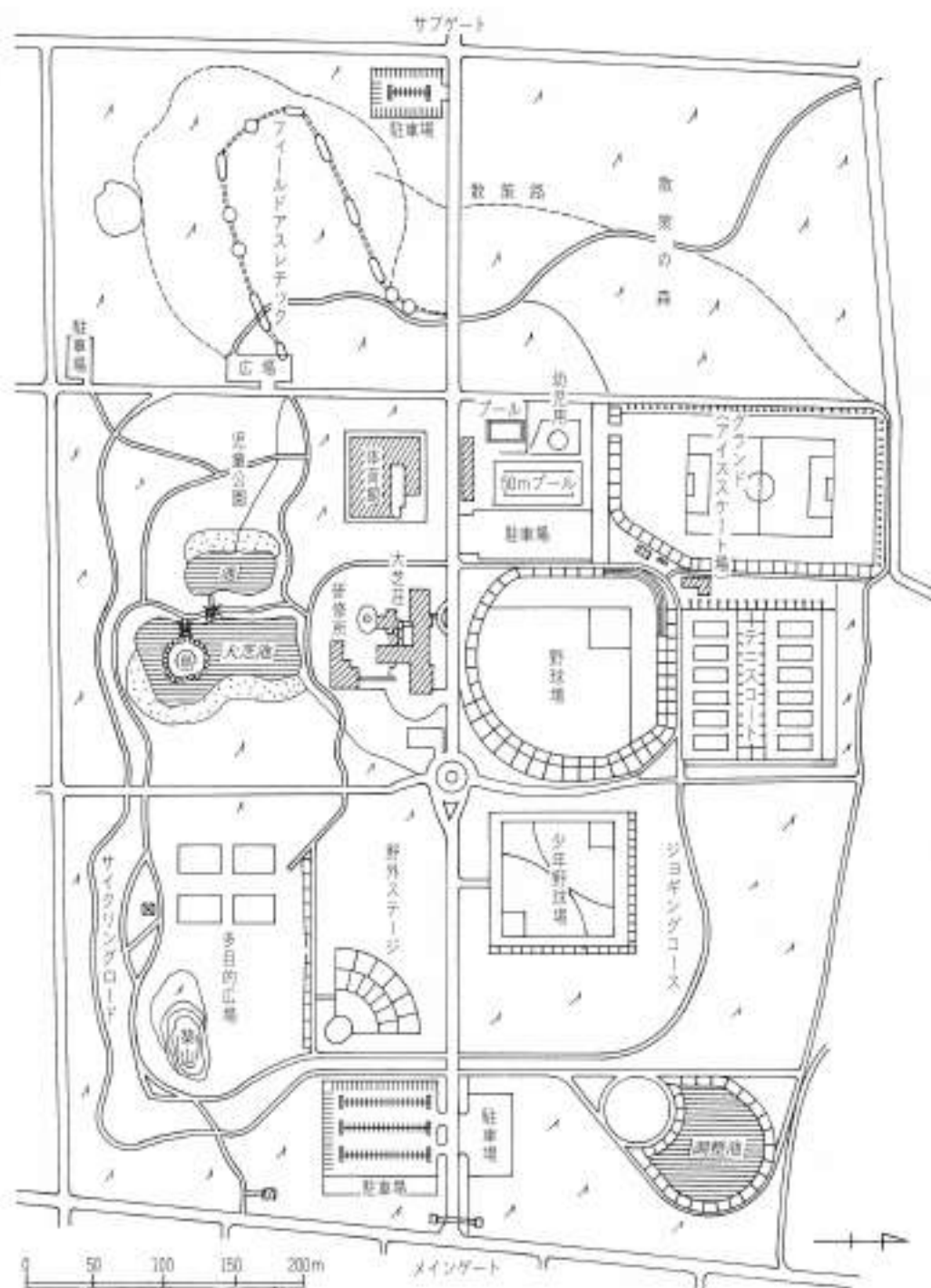


図7-85 南箕輪村大芝公園基本計画（略図）

万円をこえている。ほかに昭和五四年に、大学ラーメメン店舗、昭和五五年にパーベキニー施設二棟が設置され、好評を得、利用者が多い。

(7) 大芝池

大芝の南側の位置に、約九九〇〇㎡の面積の人造池を計画した。この事業は都市計画公園事業として行われ、昭和五五年より五七年までの三か年計画で完成をみた。総工費、約一億円。

大芝池は六五〇〇㎡と二八〇〇㎡のふたつの池を造り結び、それぞれの池に二三〇〇㎡と九五八㎡の州浜を設け、子どもが水遊びできるようにするとともに大きな池には一四五㎡の中島を設け橋をつないでいる。また大きな池にはニシキゴイ、小さな池にはマス・イワナ等を放流している。湖水の水は約三〇先の一級河川・大泉川の清流より引水（大泉下井）している。湖水の周囲は八五〇〇㎡の芝張りとなっており、その他は村木である赤松等でおおわれているほか、大型遊具、憩いの広場が設置されている。また、引水及び放水路の川端にはたくさんのお花を植え、五月から六月にかけての開花期には実に美しく咲き乱れ、訪れる人の目を楽しませるなど年間を通じて地域住民はもちろん、他地域の人々など多くの人々に親しまれている。

なお、大芝運動公園の建設整備は現在進行中であり、その基本計画は図7-85のようである。

4 村民体育館

建設年度 昭和五一年度

敷地面積 六四〇一㎡

建設面積 一八五九㎡

総工費 二億五三五六万八〇〇円

昭和五七年使用状況

アリーナ使用、一万六八二人、トレーニング室使用、三二四人、卓球室使用、一五三二人、道場使用、一二九八人、会議、ミーティング室使用、六九八人、合計、三万〇六七三人。

その他に、学校開放体育施設として小・中学校の校庭と体育館の利用が行われているが、小中併せて、校庭利用、七一六〇人、体育館使用、二二二三人となっている。

四 保健衛生の進歩

1 戦後の保健衛生行政

戦後、わが国の保健衛生行政はめざましい進展をとげた。とくに、伝染病による死亡率の低下、公衆衛生サービス・医療サービスの向上・医療技術・医療装置の進歩は目ざましく、健康にして文化的な国民生活を営むことのできる状態に近づいている。

しかし、このような現状に達するため、保健衛生行政には真剣な努力がはらわれてきたのであって、戦後の村の保健衛生行政は各種施行法、各種条例のもと、役場生活課を中心に推進されてきた。また、村内各区より選ばれた衛生部長、各組衛生係が保健衛生業務に協力し、各地区での保健衛生の向上を目指し、村と一体となって努力した結果である。

しかし、高度経済成長による食生活の変化等により、脳卒中、心臓病等が多くなり、また、各種ガンによる死亡率が高位を占めるようになり、公害の発生や、交通事故の多発など、健康に対する国民的な課題も新たに生まれている。

本村の昭和五〇年代における、保健衛生行政中、予防接種、結核健康診断、成人病検診等の状況は表7-58のようである。

2 保健センター

昭和五七年三月、村民八七〇〇人の健康管理、健康づくり推進の中

表7-53 昭和50年代南箕輪の予防接種と成人病検診

1 予防接種者数(人)

区 分	年 度	52	53	54	55	56
日 本 脳 炎		471	638	656	362	458
インフルエンザ		3,010	3,009	2,985	2,625	2,572
生ワクチン		275	247	290	336	258
三種混合		213	467	243	480	603
麻しん			124	69	118	63
風しん			47	49	35	27

2 結核健康診断(人)

区 分	年 度	52	53	54	55	56
問 接 撮 影		2,137	2,066	1,827	2,140	1,862
精 密 検 査		29	29	18	23	37

3 成人病検診(人)

(1) 循環器検診

年度	区分	受診対象者	受 診 者	正 常	要 観 察	要 指 導	要 医 療
52	脳卒中	3,707	979	533	446		
53		3,804	1,070	550	227	67	223
54		4,074	1,041	512	283	66	141
55		2,693	1,044	240	375	266	163
56		4,254	1,135	608	74	254	199

(2) 胃 検 診

年度	区分	対象者(希望)	受 診 者	異常なし	要精検者	要医療者	要医療 %
52		480	364	356	8		
53		461	405	330	75	11	2.7
54		493	390	304	86	20	5.1
55		483	383	340	48	12	3.1
56		584	508	445	63	19	3.7

(3) 婦人検診

年度	区分	対象者(希望)	受 診 者	異常なし	要精検者
53		439	331	322	9
54		488	367	362	5
55		488	356	335	21
56		540	363	356	7

(2) 利用運営

昭和五三年から国民健康づくり事業を、昭和五五年からは新たに婦人の健康づくり事業を導入し、住民の健康づくりに積極的に取り組んできた。こうした事業の教室・指導を効率的に配置し、さらに一般検診・予防接種等の効果的な利用運営を図っている。

昭和五八年度の保健センター使用の状況は表7-59のようである。

施設内容

管理部門	事務室	資料室
保健指導部門	保健相談室	
保健増進部門	栄養指導実習室	
検診部門	検診室	検査室
共通部門	会議室	待合室
		便所



図7-56 保健センター

心とし、また、村の保健衛生業務の中心として南箕輪村保健センターが建設された。現在は各種予防接種・各種検診のほか健康相談・健康教室など総合的な保健サービスの拠点となっている。

(1) 建設概要

建設費 九五九三万二〇〇〇円

建設規模・構造 鉄筋コンクリート二階建、約五〇〇㎡

3 多様化する保健衛生業務
(1) 清掃事業

ごみの収集処分については、戦後、青年会等が中心に年六〜一二回程度収集していたが、昭和三九年六月、南箕輪村等処理対策協議会が村当局、議会議員・青年会・婦人会によって結成され、廃棄処理研究委員会が設置された。その研究成果をもとに、昭和三十九年一月、廃棄処理場の建設に着手し、一二月二五日、総工費三八万円で竣工され、翌四〇年より村による収集が開始された。その後収集を業者委託とし、昭和五一年には新処理場の建設をみた。昭和四七年三月本村は「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」(四五年一月成立)に基づき「南箕輪村廃棄物の処理及び清掃に関する条例」を制定し、それによって現在は役場生活課を中心に各地の衛生部長の協力を得て、およそ次のような業務を行っている。

不燃物の収集処理

村内業者に委託収集処理を行なうもので毎月決められた日(毎月二回)にガラス、陶器類と金物類に分類して村内七二か所に提出するもので、大芝の南箕輪村不燃物処理場において処理される。この施設は昭和五一年七月一日着工、同一〇月二〇日竣工したもので、総工費は一六〇万円。処理能力は一〇トの不燃物を五時間で処理し、金物類はプレスし



図7-57 村営不燃物処理場(大芝)

表7-59 58年度保健センター使用状況

	項 目	回 数	人 員	備 考
母子保健	乳 児 健 診	12	342	2ヵ月 9ヵ月 12ヵ月児対象 離乳食相談も実施 諏訪児童相談所より来庁し相談実施 信濃医療福祉センターよりPT等来庁し実施
	4ヵ月児健診	10	123	
	1歳6ヵ月児健診	5	127	
	3歳児健診	5	146	
	育児相談	12	24	
	6ヵ月児相談	12	108	
	移動児童相談	3	18	
予防接種	母子訓	1	5	春、秋1回 ツ反2回、BCG2回 月1回
	ポリオ	2	222	
	麻疹	1	62	
	日本脳炎	4	588	
	インフルエンザ	4	376	
各種検診	ツ反・BCG三種混合	4	380	6月2回、3月2回 管理検診 循環器検診、胃検診、婦人の健康診査者
	三 種 混 合	12	485	
	胃 検 診	4	165	
	乳 房 検 診	3	201	
	婦 人 科 検 診	3	163	
	婦人の健康診査	4	304	
	結核健康診査(精)	1	5	
教室・相談	循環器検診	1	71	受講生50名 受講生50名 受講生7名 循環器検診の結果異常者
	検診の結果説明会	4	256	
	健 康 相 談	11	48	
	健 康 教 室	10	455	
	わかば教室	10	472	
	すこやか教室	3	21	
	病 態 教 室	1	7	
会議	健康教室OB会	2	15	推進員会10回、役員会3回
	健康増進推進員会	13	325	
その他	保健婦打合せ会	5	21	胃検診、循環器検診、婦人科検診
	検診カード等の整理	72		
	健康に関する調理実習	4	92	
	献 血	3	290	
	健康づくりの集い	1	233	
分類別集計	その他の事業及び会議	52		
	母子保健	60	893	
	予防接種	27	2,113	
	検 診	20	1,165	
	教室・相談	37	1,018	
	会 議	18	340	
分類別集計	その 他	132	635	
	計	294	5,146	

て業者に売却し、ガラス類は粉砕して埋立地に捨てる。昭和五九年度より廃棄家電物は別袋に入れ、処理することになった。

可燃物等生ごみの収集処理 業者委託で提出期日はごみ処理計画表（夏期は月八・九回、冬期は四・五回収集）により村で指定した袋に入れて村内四二カ所、地域ごとに提出できることになっている。

し尿処理 昭和五三年一月から汲取業者の地区割制を実施し、現在光商會、共栄衛生会によって汲み取りが行なわれ、一般家庭は定期定額制が重量制となっている。なお、し尿処理に関しては、伊那中央保健衛生施設組合によって行なわれるが、南箕輪村としても各地区から搬出された衛生部長の中から毎年二名を協力員として選び、衛生セ

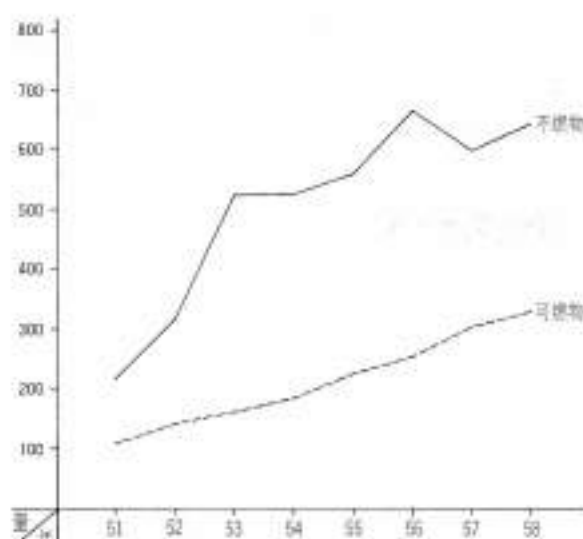


図7-88 南箕輪におけるごみ処理量の増加

表7-60 ごみ収集容器設置数（昭和60.7.現在）

区名	設置数	区名	設置数	区名	設置数
久保	6 <small>カ所</small>	北殿	17 <small>カ所</small>	沢原	8 <small>カ所</small>
中込	2 <small>カ所</small>	南殿	5 <small>カ所</small>	南原	8 <small>カ所</small>
塩井	5 <small>カ所</small>	田畑	10 <small>カ所</small>	大北	3 <small>カ所</small>
塩大	8 <small>カ所</small>	種子集	11 <small>カ所</small>	芝原	1 <small>カ所</small>

クターのモニターとして、し尿処理に関する一般住民の苦情等を聴取し、年二・三回開かれる会議に意見を反映することとしている。

河川、道路の清掃 河川愛護と生活環境整備のため、毎年八月、村内一斉に河川清掃を行う。各区の区長・衛生部長・土木部長が中心に各戸一名以上が参加、河川内外の廃棄物の除去・雑草の除去・放置物の除去を目的に行なわれる。なお、参加者には若干の補助がある。

村内一斉清掃 廃棄物の処理及び清掃に関する条例、第四条・第三項の規定（建物の占有者は建物内全室にわたって清潔にするため村長が定める計画にしたがい年二回以上大掃除を実行しなければならない。）により、春秋二回、村内一斉に大掃除を実施し、生活環境の整備と保全につとめ、清潔にして、健康な生活環境の保持につとめることを目的とする。そのためとくに、次の場所を重点に定め実施する。

一般家庭 住宅の内外、便所、南舎、堆肥舎、倉庫、ごみ捨て場、雑排水及び放流先（水路）

工場・事業所等 事務所・店舗・工場・倉庫・食堂・便所・その他付属建物、廃棄物の処理場、排水路及び放流先。

公共用建物 建物の内外、便所、廃棄物の処理場、排水路および放流先。

各地区の実状に応じ用水路、道路側溝等の清掃、なお当日は村内一斉うじ駆除および床下消毒も実施される。

村内一斉清掃点検 春秋一斉清掃の点検は各区衛生部長・各衛生係・役場生活課職員で点検班を構成し、春秋は点検区内にある一般住宅の内外の清掃状況、とくに、排水、ごみ処理状況などを点検し、点検指導票を配布し、ステッカーを点検の証として各戸にはることを行

表7-61 土壌浄化方式施設に対する市の補助

①

補助の対象	浄化槽の種類	補助額
生活排水処理施設を新たに設置するもので1基当りの総経費20,000円以上のもの	土壌浄化方式	(1) 雑排水処理施設 1基当りの設置費の30%以内、ただし最高限度額40,000円
		(2) し尿浄化処理施設 1基当りの設置費の10%以内、ただし最高限度額80,000円
		(3) 雑排水+し尿浄化処理施設 同一世帯で(1)・(2)の処理施設を設置しトレンスで合併処理する施設には最高限度額110,000円
	3槽式以上の浄化槽	1基当りの設置費の30%以内、ただし最高限度額5,000円

②

区 分	割 合
(1) 集団で設置する場合	12 10
(2) 共同の施設を設置する場合	13 10

目標・65年度までに50%

56年	20.1%
57	21.4%
58	22.8%
59	25.0%
60	

土壌浄化法とは、地表面1mぐらいの土壌にせい息している土壌動物・土壌微生物・植物根などを活用し、また土壌そのものも持っている物理的、化学的性質を利用して排水を浄化しようとする工法である。

古来から、土を掘って汚物を埋めておくことは、世界中のどの民族も行なっていた慣習で、しかも最も確実な汚物の処理法であった。

この原理を利用し、土中

った。秋季は主に、共同で使うごみ集積場の見回り、山林・道路・河川に捨てられてある廃棄物の現状について点検を行った。こういう方法による点検は、昭和五十六年以後廃止された。

(2) 環境衛生事業

雑排水の処理 家庭雑排水は従来、縦穴による直接地下浸透が河川等への放流によって処理していた。しかし近年になって人口急増に伴って住宅新築が進み、生活排水のたれ流しが問題になってきた。本村では昭和五十六年三月「南筑輪村公害防止条例」を制定した。そのうち雑排水についての規則によると、「生活排水及び事業排水を排出しようとする者は、村長が認める土壌浄化方式による排水処理施設又は排水中の有機物その他を沈殿浮上分離し、ろ過もしくは酸化分解のできる機能をもつ三槽式以上の浄化槽を設置し、排水処理をするよう務めなければならない」と規定された。「前項の規定は、この規則施行の期現存する建築物又は工事中の建築物の生活排水及び事業排水についても適用する」とされた。

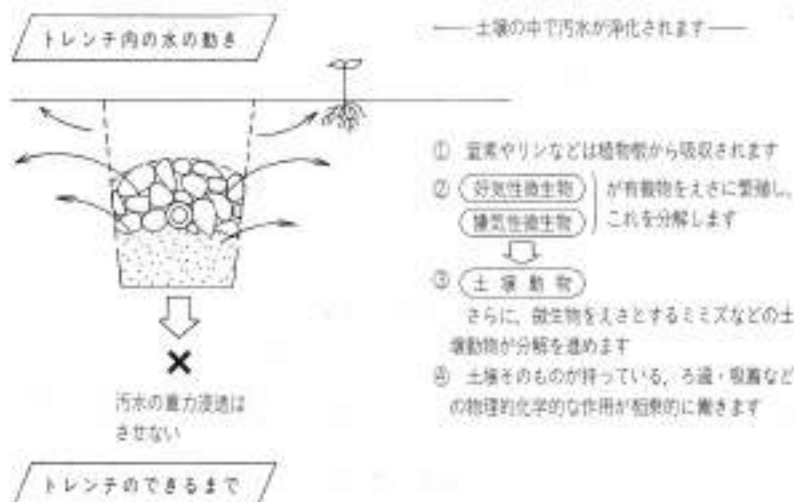
五三年には土壌浄化方式又は三槽式以上の浄化槽を設置する者に対しては補助金を交付する要綱を定めて、河川及び地下の水質汚濁を防止して生活環境の保全を図ることにした。五九年三月一九日の条例による補助の要綱は次のとおりである。

表7-61の②は同表①による算定額にそれぞれ二割又は三割を加えた額であることを示す。これにより雑排水適正処理五か年計画による進行状況は次のとおりである。

に溝を掘り散水管を布設し、土の粒子の毛細管現象により汚水を浸潤させて土中の比較的浅い部分で浄化させる方法が土壌浄化法である。

床下消毒 春の村内一斉清掃に併せて実施されている。一戸当たり五〇〇グラムのスミチオン粉剤を村で無償配布する。

ウジ駆除 床下消毒と同じく、春の村内一斉清掃時にノックダウン・ハ水溶剤を村で無償配布する。



①床掘りし、合成シートを敷く ②砂を敷き、水平に散水管を置く ③レキ、アミ、土の順に埋めて完成

図5-59 土壌浄化法の浄化のしくみ

(5) その他の業務

狂犬病予防事業 登録と予防接種 狂犬病予防法に基づき年一回の登録と年四月・一〇月の二回の予防接種を行ってきたが昭和六〇年から一回になった。不用犬の回収は保健所で野犬の捕獲は市町村と保健所で行なう。

精神衛生関係業務 精神障害者の保護 収容等を行う。

家ネズミ駆除 運動月間、二月・十一月にネズミ駆除を行なう。村で薬をあっせんし、各家庭で駆除。

ブユ駆除 ブユの幼虫は流れが速く、きれいな水に生息している。各区用水路に六月八月の第三日曜日に投薬をし駆除する。

(3) 防疫事業

伝染病予防業務 保健所の指示により、発生の防止、その処理（収容・消毒）について業務を行う。

結核健康診断業務 保育園児・小中学校児童生徒にツベルクリン反応検査・BCG接種・一般対象者に六月・レントゲン撮影の実施。

各種予防接種業務 法定伝染病のジフテリア・日本脳炎・破傷風・インフルエンザ・風しん等の予防接種を行う。

(4) 成人病予防事業

胃腸病検査業務 三〇歳以上の全村民対象、希望者は一〇〇〇円の個人負担。

脳卒中検査業務 一般にいう循環器検査の中で三五歳以上全員が検査を受ける。一〇〇〇円個人負担。

子宮ガン検査業務 五〇〇円個人負担。

食品衛生関係業務 食品取扱業者の許可、検便、し尿浄化槽の健全な管理運営をし、水質汚濁防止に努めるとともに、設置者の組合、し尿浄化槽維持管理組合の事務局を担当する。

墓地関係業務 墓地公園の管理運営、使用許可等

その他の業務 献血業務は村民対象に年四回。アメリカシロヒトリの駆除。大麻・ケシ等の栽培撲滅。公害関係の苦情受付処理等の公害関係業務を行う。

4 国民健康保険

戦前に制定された国民健康保険法は任意設立、任意加入であったが南箕輪村では昭和一八年度国民健康保険組合が設立された。しかし、間もなく終戦となり、社会の混乱や経済界の変動で、その運営は困難をきわめたようである。

昭和二二年、法の改正があり、この事業が市町村の事業となり、全戸義務加入と変わったので、その業務が役場に移行され、全村民を対象として、南箕輪村国民健康保険、(以下国保という)として新発足し、同年、九月一日より業務を開始した。この保険も初めのうちは五割給付であったが、昭和三八年には世帯主七割、家族五割、昭和三年より全員七割給付となった。

また、昭和四九年には高額療養制度の発足、基金の積立が開始された。

昭和四六年度に老人医療制度が発足しさらに昭和五八年二月一日、老人保険法が施行されて今日に至っている。

本村における国民保険の加入者および保険税収納状況および療養費の状況は表7-62のようである。

表7-62 国保加入者・保険税収納・療養費実績

① 国保加入者の世帯(南箕輪村)

項 目 年 度	国保加入者 (年間平均)		村の人口 (年度末)		割 合	
	世 帯	被保険者数	世 帯	人 数	世 帯	人 数
昭和44	841 ^世	2,866 ^人	1,522 ^世	6,563 ^人	55 [%]	44 [%]
46	836	2,775	1,630	6,908	51	40
49	842	2,672	1,916	7,702	44	35
52	880	2,663	2,316	8,232	33	32
55	1,014	2,829	2,523	9,006	40	31
57	1,065	2,834	2,659	9,399	40	30

② 保険税収納状況

項 目 年 度	保険税調定額	世帯当たり調定額	被保険者1人 当たり調定額	収 納 額	収 納 率
昭和49	32,420,510	97,000	11,000	32,372,590	99.55
52	63,813,790	72,516	23,909	63,702,870	99.83
55	91,199,320	89,940	32,237	90,638,470	99.89
58	109,810,470	99,787	44,765	108,958,320	99.22

③ 療養給付費・診療費の年度別実績表

区 分 年 度	件 数	日 数	費 用 額	受診率	1件当たり		被保険者1人当たり	
					1件当たり 日	1件当たり 費用額	費用額	上昇率
昭和49	14,509	54,081	111,742,218	543,001	8.72	7,702	41,320	1.44
52	15,566	52,572	185,653,530	633,215	3.88	11,927	69,559	1.68
55	18,215	53,797	236,328,349	643,867	2.95	12,974	83,538	1.20
58	14,019	42,987	183,729,067	571,504	2.62	13,106	74,900	0.90

5 福祉医療

本村では昭和四十八年八月三〇日、条例第二七号によって「南箕輪村福祉医療費給付金条例」を制定して老人等の医療費を給付することによって健康の増進と福祉の向上に寄与することをほかった。この条例は国の法令の改定に従って数度の改定を経たが概略は次のとおりである。

- ・ 給付対象者 六五歳以上の独り暮らしの老人、六七歳以上の低所得者、乳幼児、重度心身障害者、母子家庭の母子、父子家庭の父子等。
- ・ 給付金の額 この条例による給付金支給額は医療保険による療養費のうち国民健康保険法による一部負担金の額、その他各種共済組合法による療養費のうち個人負担に相当する額。

6 健康づくり推進協議会

近年人口の高齢化や栄養の不適切な摂取、運動不足等に伴い、高血圧や心臓病等の循環器疾患や肥満および肥満と関係ある糖尿病等の代謝異常疾患や貧血等の増加が大きな問題となっている。これらの問題に対処するため、自分の健康は自分で守るという認識のもとに各人が日常生活において栄養・運動・休養のバランスをとることを基調として、地域住民に密着した総合的健康づくり対策を積極的に推進する必要があるとする厚生省や農林省、伊那保健所などの要請を受けて昭和五三年度に本村にも、健康づくり推進協議会が設置された。

(1) 事業実施主体と協議会の構成

保健所 保健所長は、市町村が実施する健康づくり推進事業が円滑に行われるように指導援助を行う。

市町村 実施主体は市町村で、市町村長はこの事業を円滑に推進するため、関係行政機関、民間団体等と連絡を密にし、協力を得て事業

を実施する。

南箕輪村健康づくり推進協議会の構成（昭和五三年度） 村長・村会議長・国保運営委員会会長・南箕輪地区医師（二名）・教育長・健康推進委員代表三名・婦人会代表二名・衛生部長会長・農協事業所長・伊那保健所長・以上一四名

(2) 事業内容

推進協議会 年間三回開会し、年間事業計画の作成、検診、健康教室などの日程調整、健康づくりの集いの日程等検討を行う。

健康づくりの集い 健康づくり講演会、一般住民を対象に健康増進推進委員活動の発表や料理展示会、健康相談などの健康づくりの集いやよりよい健康づくりの知識の普及のため健康づくり講演会を医師・栄養士・保健婦・健康増進推進委員にて行う。

家庭健康教室 健康づくり教室 三〇～四〇歳の婦人を対象に健康づくりの知識と技術の普及のため、年間六回の健康づくり教室を医師・保健婦・栄養士により実施。

保健教室 三〇～四〇歳の肥満者を対象に年間三回、健康づくり教室と同様に実施。

母と子の保健教室 中学生、高校生と母親を対象に主として健康づくりのための食生活の知識を身につけるため年間二回、右記と同様に実施。

高血圧予防教室 一般住民を対象に日常生活の中での高血圧予防の知識の普及のため年間三回実施。

健康増進推進員研修会 各地区より選ばれた健康増進推進員を対象に健康増進の知識と技術を各地域に広めるための研修会を年間一〇回実施。

巡回指導 循環器要指導者（村内三〇名）を対象に日常生活の中での

健康指導を中心に医師、栄養士によって巡回指導、年六回実施

健康づくりの広報活動 村報への「健康づくりだより」の掲載、有線放送での健康問題PR、健康増進推進員の活動内容を紹介する「健康増進推進だより」年一〇回の発行、健康知識の向上と検診結果の記録のための「健康手帳」の作成、以上いずれも全村民を対象に業務を実施している。

7 食生活の改善推進協議会

前述の健康づくり推進協議会は実施主体が市町村であったが、県保健予防課内に本部をおき、県下一七保健所に支部をもち、昭和五五年現在、各市町村ごとに七六の分会をもつ、食生活推進協議会の組織があり、南箕輪村も分会を組織して、村民の食生活改善推進のために活動している。



図7-90 健康増進推進委員の研修

この会は保健所と市町村が開催する健康教室を修了したものをもって会員として、①栄養・運動・休養の調和を基本とする健康づくり、②食生活を中心とした健康づくりの案内役、③調理実習を含む講習会の開催などを主な事業として活動している。

8 南箕輪村健康増進推進員

「自分の健康は自分の手で守る」という地域に密着した総合的健康づくり対策の一環

として、昭和五四年よりこの制度が発足した。各地区よりその人口に比例し、区長推せんによって、現在三一名の健康推進員が任期二年で選出され、毎月一回の勉強会によって得た知識を各地域に普及することや各種健康診断の補助をすることなどを通して、村全体や各地区ごとの健康づくりのために活躍している。

表7-63 昭和50年基本構想課題の評価(到達度)

	◎実現	○実施中	△検討中	計
外 部 的 課 題	1	2	2	5
内 部 的 〃	2	9	1	12
基 礎 的 条 件	1	4	1	6
産 業 振 興		4	1	5
文 化 厚 生		4		4
行 財 政		2		2

(昭和50, 新基本構想による)

村政はこの計画に基づいて施行され、中央道開通後の地域的な課題及び分野別の課題にとりくんできた。

それから一〇年たった昭和六〇年に新しく二一世紀をめざした「南箕輪村新基本構想」ができた。これによってその評価を記しながら、昭和五〇年代の村政の課題とその到達度を記すことにする。評価は表7-63の記号によって記す。

第六節 南箕輪村の課題と展望

一 南箕輪総合計画書

昭和五〇年四月に策定されたこの「南箕輪総合計画書」は、五〇年代一〇年間の村政の計画を示したもので、この計画に基づいて村政は進められた。

この書は次の三部からなっている。

- 基本構想：村の将来とその基本的施策。期間一〇年。
- 基本計画：村政の方向を示すもの。期間五年。
- 実施計画：行財政の中に具体化するもの。期間三年。

1 昭和五〇年代村の地域的課題と評価(到達度)

(1) 外部的課題

① 中央道の開通とインター設置による大都市への時間的短縮による当村への影響。(△)

② 西部開発事業完成による当村の農業政策。(○)

③ 国道三六一号線、並びに大泉所ダム完成による灌漑水利政策。(◎)

④ 広域行政による住民福祉の向上。(○)

⑤ 広域下水道の完備。(△)

(2) 内部的課題

① 村道・農道の整備改良、なかんずく国道一五三号線バイパス道路の早期完成。(○)

② 大泉所山の治山砂防工事の推進。(○)

③ 農業基盤整備と機械化、協業化の推進。(○)

④ 生活環境の改善、住宅施策の確立。(○)

⑤ 教育文化の振興。(○)

⑥ 企業育成と無公害企業誘致。(○)

⑦ 大芝村有林、大泉所の観光開発。(○)

⑧ 開発公社、土地開発公社の運営。(○)

⑨ 下田地区工場団地開発。(○)

⑩ 社会体育館の建設。(○)

⑪ 大芝スポーツ公園のゴルフ練習場、テニスコート、バレーコートの建設。(○)

⑫ 〇〇、及び社会体育館建設。(△)

2 昭和五〇年代村の分野別課題と評価(到達度)

(1) 基礎的条件的整備の構想

① 大泉川ダムを利用し、治山治水と水資源の活用。(◎)

② 国道一五三号線西側全域の区画整理、町政考慮。(△)

③ 天竜川沿いに第二バイパス建設(△)、工場団地の形成(○)

④農業地帯の再整備整備、近代農業の推進(○)

⑤住宅団地を設定、恒久発展を図る(○)

⑥土地利用計画をし村の豊かな発展を図る(○)

(2)産業振興の構想

①農振地域に振興施策を重点的に行う(○)

②林業は増産更新を達成し、早期育成林、協業化推進(○)

③専業農家の規模拡大、省力化協業化の推進(△)

④中小企業(第二、三次産業)の育成(○)

⑤住宅計画を促進し、無公害企業の誘致(○)

(3)文化・厚生施策向上の構想

①児童老人の保護、保健衛生の徹底、地域環境の美化調和のとれた福祉施設

の充実強化(○)

②学校教育施設の充実、人口増に対応する施策(○)

③青少年健全育成、公民館活動、社会教育施設の拡充(○)

④文化財の保護、郷土館の利用(○)

(4)行政運営の合理化

①住民主体とした行政の近代化、広域行政の促進(○)

②税源の確保、財政運営の改善(○)

以上のように評価されているが、これは村政の発展を示すとともに、昭和六〇年度への課題(とくに△印)ともなっている。

(二)昭和六〇年度の村の課題

昭和五九年度の南其輪村地区計画によると、一二区の区民の共通課題として次の九項目がとりあげられている。これはすなわち村政への要望事項でもあるが、これを表示すれば次表のようである。この表に○印のない区でも、これを改めて問われれば、課題とするであろうと思われる。これからの村政でさけて通れない問題ばかりである。

表7-64 12地区の共通課題一覧

地区名 共通課題	久保	中込	塩ノ井	北殿	南殿	田畑	神子榮	沢尻	南原	大芝	大泉	北原
大芝公園の整備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
児童公園・運動場の兼併	○	○	○	○	○	○	○	○				○
水路・河川への水質保全	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
農振みなのおし			○	○	○	○			○	○	○	○
地域・家庭での青少年育成		○	○	○	○	○			○			
委託児童・小学校建設問題							○	○	○			
伊那市合併問題		○				○	○	○	○			
長時期間保育	○	○	○	○	○	○			○			

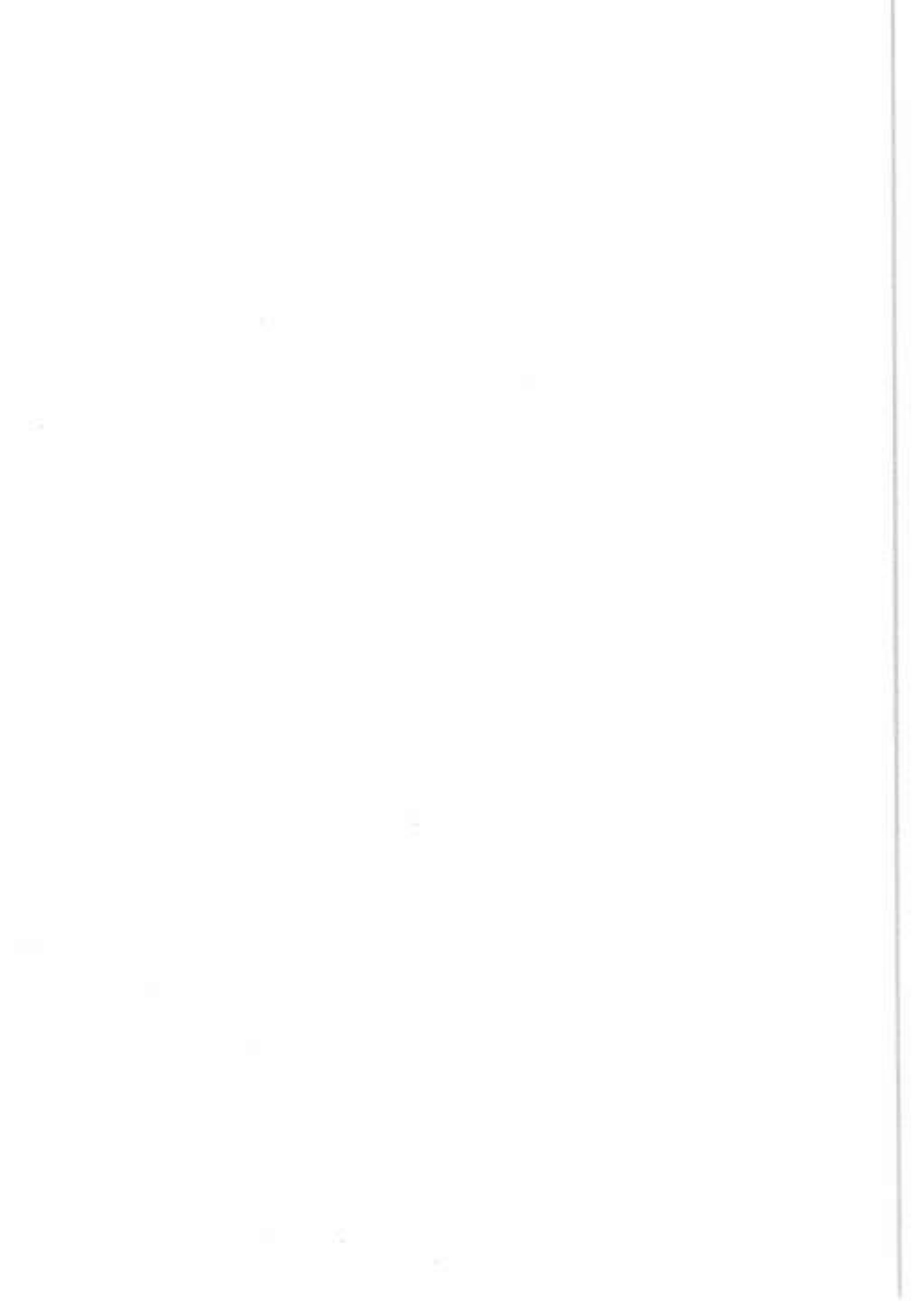
これは、村政の昭和六〇年代以降の課題というべきである。

こうした課題をもちながら、村では次のような基本目標をたて、また各區は各區の基本目標を次のようにたてている。とりあえず今後一〇年間の目標であるが、六〇年代から七〇年代、さらに二一世紀への目標となるのではなからうか。

村の基本目標と各区の目標

村民すべてが文化的で豊かな明るい生活を営むことができる、自然の中に発展への息吹きが広がり、文化の香る村

- 1 久保区 道路が整備され文化とふれあいの育つ区
 - 2 中込区 短絡道路を実現し、清潔でふれあいに満ちた区
 - 3 塩ノ井区 子どもと自然を大切に、いつも一つにまとまる区
 - 4 北殿区 町への躍進をにない、あらゆる世代、世帯がふれあえる区
 - 5 南殿区 緑と水の静かさを守り、人の和を広げる区
 - 6 田畑区 清潔な水を大切に、区民の活気あふれる区
 - 7 神子柴区 縦貫道路を実現し、躍進と融和に満ちた区
 - 8 沢尻区 村と区の連帯を強め、活性化する区
 - 9 南厚区 大地の上に新しい息吹が広がり、郷土愛あふれる区
 - 10 大芝区 恵まれた自然の中に道路の安全性を確保し、区民が一つにまとまりふれあえる区
 - 11 大泉区 伝統ある団結した不屈の区民性を大切に、文化的な発展を求めつつ、懸案課題を実現し、ふれあいと活動の広がる区
 - 12 北厚区 自然環境を守り、新世帯がつどう活気ある区
- 村の目標も区の目標も、自然環境を生かし、人と人のふれあいを基礎とした、文化的で豊かな明るい村づくりを目ざしているといえよう。



卷末付表

一 歷代役職者一覽表

付 名主（天和—慶応）
 同 歴代戸長・村長
 同 村議会議員
 同 教育委員

消防局長

四 産業組合長・農業協同組合長
 三 商工公長
 二 県会議員・市会議員
 一 白

注 天和より前は資料が少ないので割愛した
上し大田 古く幕府領

[illegible]

寛保	享保	元文	寛政	天明	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保	文政	嘉永	弘化	天保
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

[illegible]

付 表

[illegible]

(一) 歴代戸長・村長

○戸長

- 1 加藤 源三郎 (明治5・6年)
- 2 日 戸 勝 (明治7・8年)
- 3 高木 省三 (明治9・11年)
- 4 清水 平一郎 (明治12・14年)
- 5 徳高 孫三郎 (明治15・18年)
- 6 高木 省三 (明治19・21年)

○村長

- 1 徳高 孫三郎 (明治22・5・25・1)
- 2 清水 寛 (明治25・5・25・10)
- 3 高木 悌三 (明治26・3・28・7)
- 4 松沢 源一郎 (明治28・8・31・10)

- 5 清水 平一郎 (明治32・4・34・4)
- 6 原 信一 (明治34・6・35・11)
- 7 清水 平一郎 (明治36・11・38・5)
- 8 清水 重樹 (明治38・7・41・7)
- 9 赤羽 潜兵 (明治41・9・44・5)
- 10 清水 正堅 (明治44・6・大正2・6)
- 11 高木 正直 (大正2・7・16・3)
- 12 佐 矢 玄三郎 (大正6・4・11・4)
- 13 倉田 才助 (大正11・5・11・8)
- 14 松沢 源三郎 (大正11・9・12・3)
- 15 倉田 正 (大正12・3・14・3)
- 16 日 戸 信章 (大正14・5・昭和4・5)

- 17 清水 幹 (昭和4・6・8・5)
- 18 倉田 友平 (昭和8・6・20・6)
- 19 赤羽 菊七 (昭和20・6・21・12)
- 20 清水 国入 (昭和22・4・26・1)
- 21 堀 善左衛門 (昭和26・2・27・3)
- 22 佐 矢 直徳 (昭和27・5・29・3)
- 23 清水 国入 (昭和29・3・41・3)
- 24 佐 矢 吉郎 (昭和41・3・43・12)
- 25 木ノ島 新一 (昭和44・1・49・2)
- 26 三 沢 肇 (昭和49・3・1)

(二) 村議会議員

○明治三年

(臨時議員)

- 1 清水 宇宅
- 2 山崎 清一郎
- 3 堀 五郎
- 4 赤羽 政策
- 5 廣沢 金一郎
- 6 有賀 一平
- 7 倉田 新吾
- 8 倉田 十郎
- 9 清水 十郎
- 10 徳高 孫三郎
- 11 有賀 又七郎
- 12 倉田 太郎
- 13 赤羽 政八
- 14 佐 矢 彦十郎
- 15 木ノ下 衆之助
- 16 加藤 孫十郎
- 17 倉田 富
- 18 出羽 武善八
- 19 松沢 源五郎
- 20 原 延左衛門
- 21 松沢 源一郎
- 22 唐沢 紋四郎

- 23 佐 矢 潜三郎
- 24 有賀 光彦
- 25 伊藤 順順
- 26 加藤 仁兵衛
- 27 日 戸 勝
- 28 佐 矢 代五郎
- 29 有賀 誠二
- 30 高木 左右衛門
- 31 清水 三次
- 32 田中 喜七
- 33 原 新吾
- 34 伊藤 美代吉

- 1 丸山 寛一
- 2 清水 十郎
- 3 有賀 誠二
- 4 木ノ下 衆之助
- 5 赤羽 嘉一
- 6 松沢 源五郎
- 7 唐沢 金一郎
- 8 清水 三次
- 9 原 信一
- 10 清水 重樹
- 11 有賀 光彦

- 12 田中 喜七
- 13 有賀 又七郎
- 14 倉田 三郎
- 15 佐 矢 代五郎
- 16 有賀 一平
- 17 日 戸 勝
- 18 清水 齊
- 19 松沢 源一郎
- 20 倉田 太郎
- 21 加藤 元造
- 22 高木 悌三
- 23 徳高 孫三郎

- 1 日 戸 伝幹
- 2 松沢 源五郎
- 3 清水 三次
- 4 高木 悌三
- 5 倉田 富
- 6 佐 矢 彦十郎
- 7 清水 齊
- 8 松沢 源一郎
- 9 清水 平一郎
- 10 原 信一
- 11 赤羽 嘉一

注 1 選出された議員をそのまま掲げ任期途中での死亡や病気等による辞任は記載しなかった。
2 記名順序は議会における議決番号順とした。

○明治四年四月より

○明治五年四月より

付 表

12	日 戸 野	12	原 信一	3	清水 正徳	4	加藤 精致	5	日 戸 信章
13	丸 山 寛一	2	赤羽 嘉一	2	倉田 孝一郎	5	清水 寛	6	清水 義宣
14	清水 十郎	2	松沢 源一郎	4	狂矢 吉左衛門	6	狂矢 勝三郎	7	狂矢 友三郎
15	唐沢 重一郎	4	倉田 徳三郎	5	清水 平一郎	7	倉田 弥次郎	8	原 幸監
16	狂矢 代五郎	5	丸 山 寛一	6	日 戸 伝雄	8	日 戸 伝幹	9	高木 正直
17	原 幸監	6	原 八十古	7	松沢 源一郎	9	有賀 謙次郎	10	高木 正直
18	原 幸監	7	高木 健三	8	原 幸監	10	原 信一	11	赤羽 健兵
19	有賀 光彦	8	清水 平一郎	9	日 戸 伝幹	11	有賀 重徳	12	有賀 重徳
20	倉田 太郎	9	倉田 三郎	10	赤羽 嘉一	12	赤羽 只雄		
21	伊藤 順蔵	10	倉田 喜代	11	出羽 岩次郎				
22	倉田 三郎	11	日 戸 勝	12	高木 誠				
23	木下 桑之助	12	清水 寛						

1	丸 山 寛一	1	原 信一	1	有賀 謙次郎	1	馬場 元太郎	1	伊東 祐也
2	清水 平一郎	2	高木 誠	2	清水 寛樹	2	有賀 忠愛	2	狂矢 嘉十郎
3	有賀 光彦	3	松沢 源一郎	3	酒井 野美次郎	3	山崎 大八郎	3	山崎 清直
4	清水 平一郎	4	清水 正徳	4	加藤 健致	4	有賀 重雄	4	倉田 重吉
5	清水 平一郎	5	赤羽 嘉一	5	狂矢 定一	5	狂矢 友三郎	5	伊藤 三郎
6	松沢 源一郎	6	日 戸 伝幹	6	赤羽 猪兵	6	松沢 房次郎	6	木下 左門治
7	高木 健三	7	赤羽 嘉一	7	日 戸 伝雄	7	松沢 房次郎	7	唐沢 正一郎
8	赤羽 嘉一	8	加藤 敬亮	8	倉田 弥次郎	8	清水 正徳	8	倉田 才助
9	日 戸 伝雄	9	赤羽 只雄	9	原 信一	9	伊藤 健吉	9	酒井 寿美次郎
10	高木 誠	10	赤羽 嘉一	10	日 戸 伝幹	10	清水 正徳	10	松沢 大三郎
11	松沢 源一郎	11	原 幸監	11	狂矢 勝三郎	11	清水 寛	11	酒井 寿美次郎
12	原 八十古	12	清水 寛	12	狂矢 勝三郎	12	清水 寛	12	日 戸 伝章

1	丸 山 寛一	1	原 信一	1	有賀 謙次郎	1	馬場 元太郎	1	伊東 祐也
2	清水 平一郎	2	高木 誠	2	清水 寛樹	2	有賀 忠愛	2	狂矢 嘉十郎
3	有賀 光彦	3	松沢 源一郎	3	酒井 野美次郎	3	山崎 大八郎	3	山崎 清直
4	清水 平一郎	4	清水 正徳	4	加藤 健致	4	有賀 重雄	4	倉田 重吉
5	清水 平一郎	5	赤羽 嘉一	5	狂矢 定一	5	狂矢 友三郎	5	伊藤 三郎
6	松沢 源一郎	6	日 戸 伝幹	6	赤羽 猪兵	6	松沢 房次郎	6	木下 左門治
7	高木 健三	7	赤羽 嘉一	7	日 戸 伝雄	7	松沢 房次郎	7	唐沢 正一郎
8	赤羽 嘉一	8	加藤 敬亮	8	倉田 弥次郎	8	清水 正徳	8	倉田 才助
9	日 戸 伝雄	9	赤羽 只雄	9	原 信一	9	伊藤 健吉	9	酒井 寿美次郎
10	高木 誠	10	赤羽 嘉一	10	日 戸 伝幹	10	清水 正徳	10	松沢 大三郎
11	松沢 源一郎	11	原 幸監	11	狂矢 勝三郎	11	清水 寛	11	酒井 寿美次郎
12	原 八十古	12	清水 寛	12	狂矢 勝三郎	12	清水 寛	12	日 戸 伝章

1	丸 山 寛一	1	原 信一	1	有賀 謙次郎	1	馬場 元太郎	1	伊東 祐也
2	清水 平一郎	2	高木 誠	2	清水 寛樹	2	有賀 忠愛	2	狂矢 嘉十郎
3	有賀 光彦	3	松沢 源一郎	3	酒井 野美次郎	3	山崎 大八郎	3	山崎 清直
4	清水 平一郎	4	清水 正徳	4	加藤 健致	4	有賀 重雄	4	倉田 重吉
5	清水 平一郎	5	赤羽 嘉一	5	狂矢 定一	5	狂矢 友三郎	5	伊藤 三郎
6	松沢 源一郎	6	日 戸 伝幹	6	赤羽 猪兵	6	松沢 房次郎	6	木下 左門治
7	高木 健三	7	赤羽 嘉一	7	日 戸 伝雄	7	松沢 房次郎	7	唐沢 正一郎
8	赤羽 嘉一	8	加藤 敬亮	8	倉田 弥次郎	8	清水 正徳	8	倉田 才助
9	日 戸 伝雄	9	赤羽 只雄	9	原 信一	9	伊藤 健吉	9	酒井 寿美次郎
10	高木 誠	10	赤羽 嘉一	10	日 戸 伝幹	10	清水 正徳	10	松沢 大三郎
11	松沢 源一郎	11	原 幸監	11	狂矢 勝三郎	11	清水 寛	11	酒井 寿美次郎
12	原 八十古	12	清水 寛	12	狂矢 勝三郎	12	清水 寛	12	日 戸 伝章

付 表

7	倉田準	10	有賀太樹	11	清水啓	12	佐矢修三	○昭和八年四月より			1	原又重	2	木ノ島 駿	3	堀 伝一	4	高木賢司	5	倉田友幸	6	松沢 多	7	藤真正一	8	原孝也	9	堀取彦三郎	10	田中静男	11	山崎光雄	12	高木喜一	○昭和二年四月より			1	原 又重	2	倉田可二	3	倉田友幸	4	太田徳重	5	田中地耕	6	木ノ島 義一	7	佐矢政道	8	有賀貞雄	9	堀 一雄	10	馬場武男	11	小林 義一	12	高木喜一	○昭和三年四月より			1	堀取彦三郎	2	加藤三治	3	松沢勝守	4	松沢太郎	5	堀 昇三	6	倉田友幸	7	唐沢 一	8	佐矢悦雄	9	清水 善	10	唐沢義男	11	有賀実直	12	有賀一衛	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄	○昭和三年四月より			1	清水重成	2	唐沢賢雄	3	原 今朝五郎	4	原 義重	5	城取義美	6	馬場武男	○昭和三年四月より			1	佐矢直徳	2	有賀一衛	3	加藤善高	4	堀 義雄	5	堀 通男	6	有賀源吾	7	高木喜一	8	原 今朝五郎	9	清水宗雄	10	原 義重	11	唐沢義	12	佐矢善一	13	堀 義一	14	山崎弘	15	山崎清治	16	太田庄衛	17	松沢太郎	18	伊藤繁雄	19	清水英一	20	高木賢司	21	松沢修一郎	22	酒井吉雄			
---	-----	----	------	----	-----	----	------	-----------	--	--	---	-----	---	-------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	-----	---	-------	----	------	----	------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	-------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	----	------	----	------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	------	-----------	--	--	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	------	---	--------	---	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	-----	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	------	--	--	--

付 表

1	倉田 恒雄	4	松沢 美	7	小林 正	10	倉田 三千穂	13	有賀 正	16	有賀 今朝雄
2	有賀 文成	5	伊藤 男一	8	松沢 伝	11	有賀 正	14	松沢 貴	17	有賀 今朝雄
3	清水 重成	6	清水 重成	9	丸山 健男	12	有賀 文雄	15	征矢 良平	18	有賀 今朝雄
4	清水 重成	7	倉田 信章	10	有賀 芳郎	13	有賀 文雄	16	北原 達	19	有賀 今朝雄
5	加藤 貞夫	8	原 元次	11	城取 武雄	14	征矢 守三郎	17	松村 寛	20	有賀 今朝雄
6	高木 藤五	9	矢沢 利章	12	征矢 守三郎	15	入戸 勝人	18	丸山 忠	21	有賀 今朝雄
7	山崎 光重	10	有賀 正直	13	清水 一清	16	木ノ島 崇雄	19	加藤 寛	22	有賀 今朝雄
8	穂高 昇	11	高木 貞友	14	清水 安雄	17	征矢 良平	20	丸山 芳人	23	有賀 今朝雄
9	原 勝治郎	12	有賀 文成	15	木ノ島 新一	18	有賀 芳郎	21	有賀 今朝雄	24	有賀 今朝雄
10	藤沢 久勝	13	有賀 文成	16	征矢 良平	19	有賀 芳郎	22	有賀 今朝雄	25	有賀 今朝雄
11	太田 庄衛	14	征矢 清人	17	〇昭和三年四月より	20	征矢 守三郎	23	有賀 今朝雄	26	有賀 今朝雄
12	原 正三郎	15	三沢 清	18	〇昭和三年四月より	21	北條 優	24	有賀 今朝雄	27	有賀 今朝雄
13	吉田 和男	16	沢田 今朝雄	19	〇昭和三年四月より	22	清水 貞雄	25	有賀 今朝雄	28	有賀 今朝雄
14	堀 安雄	17	〇昭和三年四月より	20	〇昭和三年四月より	23	有賀 文雄	26	有賀 今朝雄	29	有賀 今朝雄
15	征矢 清人	18	〇昭和三年四月より	21	〇昭和三年四月より	24	有賀 文雄	27	有賀 今朝雄	30	有賀 今朝雄
16	〇昭和三年四月より	19	〇昭和三年四月より	22	〇昭和三年四月より	25	有賀 文雄	28	有賀 今朝雄	31	有賀 今朝雄
17	〇昭和三年四月より	20	〇昭和三年四月より	23	〇昭和三年四月より	26	有賀 文雄	29	有賀 今朝雄	32	有賀 今朝雄
18	〇昭和三年四月より	21	〇昭和三年四月より	24	〇昭和三年四月より	27	有賀 文雄	30	有賀 今朝雄	33	有賀 今朝雄
19	〇昭和三年四月より	22	〇昭和三年四月より	25	〇昭和三年四月より	28	有賀 文雄	31	有賀 今朝雄	34	有賀 今朝雄
20	〇昭和三年四月より	23	〇昭和三年四月より	26	〇昭和三年四月より	29	有賀 文雄	32	有賀 今朝雄	35	有賀 今朝雄
21	〇昭和三年四月より	24	〇昭和三年四月より	27	〇昭和三年四月より	30	有賀 文雄	33	有賀 今朝雄	36	有賀 今朝雄
22	〇昭和三年四月より	25	〇昭和三年四月より	28	〇昭和三年四月より	31	有賀 文雄	34	有賀 今朝雄	37	有賀 今朝雄
23	〇昭和三年四月より	26	〇昭和三年四月より	29	〇昭和三年四月より	32	有賀 文雄	35	有賀 今朝雄	38	有賀 今朝雄
24	〇昭和三年四月より	27	〇昭和三年四月より	30	〇昭和三年四月より	33	有賀 文雄	36	有賀 今朝雄	39	有賀 今朝雄
25	〇昭和三年四月より	28	〇昭和三年四月より	31	〇昭和三年四月より	34	有賀 文雄	37	有賀 今朝雄	40	有賀 今朝雄
26	〇昭和三年四月より	29	〇昭和三年四月より	32	〇昭和三年四月より	35	有賀 文雄	38	有賀 今朝雄	41	有賀 今朝雄
27	〇昭和三年四月より	30	〇昭和三年四月より	33	〇昭和三年四月より	36	有賀 文雄	39	有賀 今朝雄	42	有賀 今朝雄
28	〇昭和三年四月より	31	〇昭和三年四月より	34	〇昭和三年四月より	37	有賀 文雄	40	有賀 今朝雄	43	有賀 今朝雄
29	〇昭和三年四月より	32	〇昭和三年四月より	35	〇昭和三年四月より	38	有賀 文雄	41	有賀 今朝雄	44	有賀 今朝雄
30	〇昭和三年四月より	33	〇昭和三年四月より	36	〇昭和三年四月より	39	有賀 文雄	42	有賀 今朝雄	45	有賀 今朝雄
31	〇昭和三年四月より	34	〇昭和三年四月より	37	〇昭和三年四月より	40	有賀 文雄	43	有賀 今朝雄	46	有賀 今朝雄
32	〇昭和三年四月より	35	〇昭和三年四月より	38	〇昭和三年四月より	41	有賀 文雄	44	有賀 今朝雄	47	有賀 今朝雄
33	〇昭和三年四月より	36	〇昭和三年四月より	39	〇昭和三年四月より	42	有賀 文雄	45	有賀 今朝雄	48	有賀 今朝雄
34	〇昭和三年四月より	37	〇昭和三年四月より	40	〇昭和三年四月より	43	有賀 文雄	46	有賀 今朝雄	49	有賀 今朝雄
35	〇昭和三年四月より	38	〇昭和三年四月より	41	〇昭和三年四月より	44	有賀 文雄	47	有賀 今朝雄	50	有賀 今朝雄

同 教 育 委 員

年 度 委 員 長

委 員

員

27	高木 義章	34	高木 義章	41	伊藤 繁雄	48	堀 健市
28	高木 義章	35	高木 義章	42	伊藤 繁雄	49	堀 健市
29	清水 正成	36	高木 義章	43	伊藤 繁雄	50	堀 健市
30	征矢 幸治	37	高木 義章	44	伊藤 繁雄	51	堀 健市
31	征矢 幸治	38	高木 義章	45	伊藤 繁雄	52	堀 健市
32	高木 義章	39	高木 義章	46	伊藤 繁雄	53	堀 健市
33	高木 義章	40	高木 義章	47	伊藤 繁雄	54	堀 健市
34	高木 義章	41	高木 義章	48	伊藤 繁雄	55	堀 健市
35	高木 義章	42	高木 義章	49	伊藤 繁雄	56	堀 健市
36	高木 義章	43	高木 義章	50	伊藤 繁雄	57	堀 健市
37	高木 義章	44	高木 義章	51	伊藤 繁雄	58	堀 健市
38	高木 義章	45	高木 義章	52	伊藤 繁雄	59	堀 健市
39	高木 義章	46	高木 義章	53	伊藤 繁雄	60	堀 健市
40	高木 義章	47	高木 義章	54	伊藤 繁雄	61	堀 健市
41	高木 義章	48	高木 義章	55	伊藤 繁雄	62	堀 健市
42	高木 義章	49	高木 義章	56	伊藤 繁雄	63	堀 健市
43	高木 義章	50	高木 義章	57	伊藤 繁雄	64	堀 健市
44	高木 義章	51	高木 義章	58	伊藤 繁雄	65	堀 健市
45	高木 義章	52	高木 義章	59	伊藤 繁雄	66	堀 健市
46	高木 義章	53	高木 義章	60	伊藤 繁雄	67	堀 健市
47	高木 義章	54	高木 義章	61	伊藤 繁雄	68	堀 健市
48	高木 義章	55	高木 義章	62	伊藤 繁雄	69	堀 健市
49	高木 義章	56	高木 義章	63	伊藤 繁雄	70	堀 健市
50	高木 義章	57	高木 義章	64	伊藤 繁雄	71	堀 健市
51	高木 義章	58	高木 義章	65	伊藤 繁雄	72	堀 健市
52	高木 義章	59	高木 義章	66	伊藤 繁雄	73	堀 健市
53	高木 義章	60	高木 義章	67	伊藤 繁雄	74	堀 健市
54	高木 義章	61	高木 義章	68	伊藤 繁雄	75	堀 健市
55	高木 義章	62	高木 義章	69	伊藤 繁雄	76	堀 健市
56	高木 義章	63	高木 義章	70	伊藤 繁雄	77	堀 健市
57	高木 義章	64	高木 義章	71	伊藤 繁雄	78	堀 健市
58	高木 義章	65	高木 義章	72	伊藤 繁雄	79	堀 健市
59	高木 義章	66	高木 義章	73	伊藤 繁雄	80	堀 健市
60	高木 義章	67	高木 義章	74	伊藤 繁雄	81	堀 健市
61	高木 義章	68	高木 義章	75	伊藤 繁雄	82	堀 健市
62	高木 義章	69	高木 義章	76	伊藤 繁雄	83	堀 健市
63	高木 義章	70	高木 義章	77	伊藤 繁雄	84	堀 健市
64	高木 義章	71	高木 義章	78	伊藤 繁雄	85	堀 健市
65	高木 義章	72	高木 義章	79	伊藤 繁雄	86	堀 健市
66	高木 義章	73	高木 義章	80	伊藤 繁雄	87	堀 健市
67	高木 義章	74	高木 義章	81	伊藤 繁雄	88	堀 健市
68	高木 義章	75	高木 義章	82	伊藤 繁雄	89	堀 健市
69	高木 義章	76	高木 義章	83	伊藤 繁雄	90	堀 健市
70	高木 義章	77	高木 義章	84	伊藤 繁雄	91	堀 健市
71	高木 義章	78	高木 義章	85	伊藤 繁雄	92	堀 健市
72	高木 義章	79	高木 義章	86	伊藤 繁雄	93	堀 健市
73	高木 義章	80	高木 義章	87	伊藤 繁雄	94	堀 健市
74	高木 義章	81	高木 義章	88	伊藤 繁雄	95	堀 健市
75	高木 義章	82	高木 義章	89	伊藤 繁雄	96	堀 健市
76	高木 義章	83	高木 義章	90	伊藤 繁雄	97	堀 健市
77	高木 義章	84	高木 義章	91	伊藤 繁雄	98	堀 健市
78	高木 義章	85	高木 義章	92	伊藤 繁雄	99	堀 健市
79	高木 義章	86	高木 義章	93	伊藤 繁雄	100	堀 健市
80	高木 義章	87	高木 義章	94	伊藤 繁雄	101	堀 健市
81	高木 義章	88	高木 義章	95	伊藤 繁雄	102	堀 健市
82	高木 義章	89	高木 義章	96	伊藤 繁雄	103	堀 健市
83	高木 義章	90	高木 義章	97	伊藤 繁雄	104	堀 健市
84	高木 義章	91	高木 義章	98	伊藤 繁雄	105	堀 健市
85	高木 義章	92	高木 義章	99	伊藤 繁雄	106	堀 健市
86	高木 義章	93	高木 義章	100	伊藤 繁雄	107	堀 健市
87	高木 義章	94	高木 義章	101	伊藤 繁雄	108	堀 健市
88	高木 義章	95	高木 義章	102	伊藤 繁雄	109	堀 健市
89	高木 義章	96	高木 義章	103	伊藤 繁雄	110	堀 健市
90	高木 義章	97	高木 義章	104	伊藤 繁雄	111	堀 健市
91	高木 義章	98	高木 義章	105	伊藤 繁雄	112	堀 健市
92	高木 義章	99	高木 義章	106	伊藤 繁雄	113	堀 健市
93	高木 義章	100	高木 義章	107	伊藤 繁雄	114	堀 健市
94	高木 義章	101	高木 義章	108	伊藤 繁雄	115	堀 健市
95	高木 義章	102	高木 義章	109	伊藤 繁雄	116	堀 健市
96	高木 義章	103	高木 義章	110	伊藤 繁雄	117	堀 健市
97	高木 義章	104	高木 義章	111	伊藤 繁雄	118	堀 健市
98	高木 義章	105	高木 義章	112	伊藤 繁雄	119	堀 健市
99	高木 義章	106	高木 義章	113	伊藤 繁雄	120	堀 健市
100	高木 義章	107	高木 義章	114	伊藤 繁雄	121	堀 健市
101	高木 義章	108	高木 義章	115	伊藤 繁雄	122	堀 健市
102	高木 義章	109	高木 義章	116	伊藤 繁雄	123	堀 健市
103	高木 義章	110	高木 義章	117	伊藤 繁雄	124	堀 健市
104	高木 義章	111	高木 義章	118	伊藤 繁雄	125	堀 健市
105	高木 義章	112	高木 義章	119	伊藤 繁雄	126	堀 健市
106	高木 義章	113	高木 義章	120	伊藤 繁雄	127	堀 健市
107	高木 義章	114	高木 義章	121	伊藤 繁雄	128	堀 健市
108	高木 義章	115	高木 義章	122	伊藤 繁雄	129	堀 健市
109	高木 義章	116	高木 義章	123	伊藤 繁雄	130	堀 健市
110	高木 義章	117	高木 義章	124	伊藤 繁雄	131	堀 健市
111	高木 義章	118	高木 義章	125	伊藤 繁雄	132	堀 健市
112	高木 義章	119	高木 義章	126	伊藤 繁雄	133	堀 健市
113	高木 義章	120	高木 義章	127	伊藤 繁雄	134	堀 健市
114	高木 義章	121	高木 義章	128	伊藤 繁雄	135	堀 健市
115	高木 義章	122	高木 義章	129	伊藤 繁雄	136	堀 健市
116	高木 義章	123	高木 義章	130	伊藤 繁雄	137	堀 健市
117	高木 義章	124	高木 義章	131	伊藤 繁雄	138	堀 健市
118	高木 義章	125	高木 義章	132	伊藤 繁雄	139	堀 健市
119	高木 義章	126	高木 義章	133	伊藤 繁雄	140	堀 健市
120	高木 義章	127	高木 義章	134	伊藤 繁雄	141	堀 健市
121	高木 義章	128	高木 義章	135	伊藤 繁雄	142	堀 健市
122	高木 義章	129	高木 義章	136	伊藤 繁雄	143	堀 健市
123	高木 義章	130	高木 義章	137	伊藤 繁雄	144	堀 健市
124	高木 義章	131	高木 義章	138	伊藤 繁雄	145	堀 健市
125	高木 義章	132	高木 義章	139	伊藤 繁雄	146	堀 健市
126	高木 義章	133	高木 義章	140	伊藤 繁雄	147	堀 健市
127	高木 義章	134	高木 義章	141	伊藤 繁雄	148	堀 健市
128	高木 義章	135	高木 義章	142	伊藤 繁雄	149	堀 健市
129	高木 義章	136	高木 義章	143	伊藤 繁雄	150	堀 健市
130	高木 義章	137	高木 義章	144	伊藤 繁雄	151	堀 健市
131	高木 義章	138	高木 義章	145	伊藤 繁雄	152	堀 健市
132	高木 義章	139	高木 義章	146	伊藤 繁雄	153	堀 健市
133	高木 義章	140	高木 義章	147	伊藤 繁雄	154	堀 健市
134	高木 義章	141	高木 義章	148	伊藤 繁雄	155	堀 健市
135	高木 義章	142	高木 義章	149	伊藤 繁雄	156	堀 健市
136	高木 義章	143	高木 義章	150	伊藤 繁雄	157	堀 健市
137	高木 義章	144	高木 義章	151	伊藤 繁雄	158	堀 健市</

付 表

入戸源一	穂高千秋	征矢善一郎	馬場三郎	倉田信章	沢田勘市	清水重成	○昭和三年七月より	倉田恒雄	倉田信章	馬場三郎	征矢善一郎	沢田勘市	入戸源一	清水重成	清水一清	植田源太郎	日下孝次郎	高木貞友	原弘	立石威	有賀慶美	唐沢登義	原泰太郎	永井記太郎	征矢善一郎	松沢盛茂	倉田恒雄	○昭和三年七月より	入戸源一
有賀明	高木正哲	高木清幸	水島岩男	三沢清	福沢正人	有賀誠一	倉田一雄	小林清	征矢守三郎	征矢善一郎	征矢武雄	矢沢利章	日下孝次郎	原元次	○昭和三年七月より	藤沢久朋	木下真夫	清水頼治	原泰太郎	尾崎静直	有賀慶美	丸山健男	高木清幸	日下孝次郎	有賀義文	清水国雄	倉田恒雄	○昭和三年七月より	伊沢文雄
久保村義草	○昭和四年七月より	堀沢正人	矢沢利章	木下真夫	伊沢文雄	加藤利司	出羽沢好一	白鳥義務	唐沢参一	高木正哲	高木清幸	松沢友喜	藤沢利彬	三沢清	有賀在代志	有賀文雄	北條健	沢田今朝治	征矢善一郎	堀沢清純	○昭和四年七月より	有賀大翁	木下真夫	清水貞雄	原弘	伊沢文雄	○昭和四年七月より	伊沢文雄	
山崎正一	清水亨	田中喜一	原喜一	吉沢和徳	征矢千尋	征矢勝太郎	木下厚	丸山秀人	○昭和四年七月より	小杉房雄	白鳥義務	唐沢武	北原達	小松清彦	有賀在代志	堀沢清純	榎田吉男	有賀文雄	清水信男	山崎繁雄	伊藤繁雄	原孝光	高木清幸	三沢清	松沢友喜	征矢文雄	丸山秀人	○昭和四年七月より	丸山秀人
有賀弘幸	清水亨	有賀貞雄	矢沢長夫	木下厚	久保村義草	清水重	丸山幹男	有賀保衛	山崎光貞	吉沢和徳	征矢王男	小林克行	耳塚勝太郎	征矢幸平	○昭和五年七月より	清水幸平	征矢幸人	加藤勝一	有賀保衛	丸山新男	田中昭雄	原一雄	有賀明	久保村義草	北原重雄	北原重雄	有賀保衛	丸山幹男	有賀保衛
唐沢元広	○昭和五年七月より	征矢勝太郎	伊藤和美	有賀正	加藤米雄	清水松雄	○昭和五年七月より	征矢勝太郎	伊藤和美	加藤功男	清水武男	唐沢政美	征矢幸義	有賀貞雄	久保村義草	丸山幹男	有賀文雄	清水武雄	征矢善一郎	馬場三郎	北原重雄	有賀久	高木時雄	清水一清	堀沢清純	丸山幹男	久保村義草	○昭和五年七月より	丸山幹男

付 表

年度	区名	久保	坂ノ井	大泉	北原	南原	田原	種子原	沢田	民	南原	大芝	北原	中込
大正三	堀	貞雄	征矢 弘久	田中 静雄	倉田 徳三郎	有賀 徳次郎	日戸 伝雄	太田 文次郎	有賀 実直					
四	堀	貞雄	征矢 嘉十郎	酒井 寿美次郎	有賀 重徳	山崎 大八郎	松沢 邦寿	有賀 寛實	有賀 福太郎					
五	木下余之助	征矢 友三郎	原 幸三郎	倉田 善吉	清水 寛	日戸 伝雄	高木 松次郎	加藤 利金治						
六	赤羽 忠三	藤高 徳二	田中 静雄	伊藤 展吉	山崎 清直	日戸 伝雄	伊藤 祐也	池上 亀次郎						
七	堀	貞雄	征矢 儀一	清水 卯兵衛	入戸 登一	有賀 正一	日戸 伝雄	原 治久	有賀 三留					
八	堀	政一	藤高 徳二	唐沢 市太郎	山崎 安次郎	清水 甲子太郎	松沢 邦寿	高木 正直	有賀 実直					
九	堀	政八	藤高 駒次郎	唐沢 正一郎	倉田 男太郎	清水 國武	小林 彦修	高木 鶴吉	有賀 晴重					
一〇	木下左門治	藤高 駒次郎	原 幸三郎	有賀 重徳	清水 秀文	松沢 邦寿	高木 孝行	加藤 利金治						
一一	堀	貞雄	征矢 嘉十郎	酒井 寿美次郎	伊藤 三三郎	有賀 剛吉	加藤 元嘉	丸山 平七	唐沢 孝三					
一二	倉田 準	征矢 友三郎	唐沢 善一	倉田 正	有賀 實吉	小林 彦知	太田 勝重	有賀 実直						
一三	堀	政一	藤高 駒次郎	原 信三	倉田 金藏	山崎 清直	松沢 多	高木 藤一	池上 亀次郎					
一四	堀	政三	征矢 修三	田中 静雄	原 直人	有賀 剛吉	日戸 松重	原 金次郎	唐沢 政勝					
一五	木下左門治	征矢 修三	清水 忠雄	入戸 登一	有賀 剛吉	松沢 多	高木 正良	有賀 晴重						
昭和二	堀	重信	藤高 徳二	原 幸三郎	倉田 善吉	有賀 太樹	松沢 三千雄	原 治久	加藤 利金治					
三	三堀八百吉	加藤 利三郎	原 又重	有賀 榮助	清水 善	小林 政久	原 美次	有賀 三留						
四	堀	貞雄	征矢 修三	田中 静雄	伊藤 雅雄	有賀 常甫	松沢 多	有賀 忠一	有賀 晴重					
五	倉田 寛幹	藤高 五一	唐沢 善一	有賀 勝治	山崎 清直	松沢 三千雄	高木 孝行	唐沢 孝三						
六	堀	重治	征矢 友三郎	清水 利太郎	有賀 三郎	山崎 光雄	小林 政久	加藤 三治	池上 伊藤重					
七	赤羽 親助	藤高 徳二	唐沢 善一	清水 英一	清水 初	加藤 寛一	原 美次	有賀 晴重						
八	堀	取幸三郎	加藤 北太郎	原 孝三	倉田 友幸	山崎 光雄	木ノ島 健	太田 寛三	唐沢 政勝					

(大正三年区制施行以後)

九 田 新 造
 久 保 村 義 尊
 小 林 正 幸
 池 上 義 実
 征 矢 広 行
 安 積 多 喜 雄
 小 林 一 見

九	堀	佐一	狂矢	堀二	原	又重	有賀	義次	有賀	太極	松沢太郎	太田	徳重	有賀	実直	
一〇	堀	直茂	狂矢	堀二	田中	静雄	有賀	松太郎	山崎	清直	松沢太郎	高木	嘉一	池上	相太郎	
一一	堀	一雄	狂矢	政通	原	孝彦	倉田	一雄	有賀	泉次郎	加藤	高木	賢司	有賀	三留	
一二	矢沢	勝	狂矢	政通	唐沢	梅一	倉田	一雄	山崎	光雄	小林	源	重次	池上	竹三郎	
一三	堀	具三	狂矢	真三	田中	地剛	倉田	博三	清水	對	小林	源	実	有賀	寛一	
一四	堀	親助	狂矢	清一	原	信喜	吉藤	幸三	山崎	光雄	小林	源	治久	加藤	馬朝	
一五	堀	重治	狂矢	平治郎	田中	静雄	有賀	勝二	有賀	太極	松沢太郎	原	栄求	有賀	彌吉	
一六	堀	貞雄	狂矢	直雄	原	王秋	入口	源一	清水	對	松沢太郎	伊東	祐也	池上	伊勢重	
一七	赤羽	忠三	狂矢	真三	清水	謙	有賀	一衛	有賀	英一	松沢太郎	高木	助松	有賀	芳藏	
一八	堀	昇三	狂矢	直雄	唐沢	賢雄	有賀	一衛	山崎	清直	松沢太郎	高木	嘉一	有賀	実直	
一九	堀	信一	狂矢	悦雄	唐沢	義男	有賀	一衛	山崎	光雄	木ノ島	有賀	敬三	有賀	芳藏	
二〇	堀	重治	狂矢	勝男	原	信喜	有賀	一衛	有賀	貞雄	加藤	一雄	太田	篤彦	有賀	十三
二一	堀	安雄	加藤	義雄	原	勝太郎	有賀	一衛	清水	宗雄	松沢太郎	高木	二郎	唐沢	馬朝	
二二	木下	治一	狂矢	善一郎	原	然吉	清水	英一	清水	清人	松沢太郎	高木	實司	加藤	司馬朝	
二三	倉田	良雄	狂矢	正成	清水	豊一	山崎	清治	山崎	弘	松沢太郎	太田	庄南	池上	竹三郎	
二四	堀	義一	狂矢	美一	唐沢	正一	北原	善代治	柴田	宗太郎	伊藤	友一	原	弘	有賀	源吉
二五	堀	武男	狂矢	勝男	清水	義男	倉田	善治	清水	國雄	藤沢	正雄	有賀	敬三	有賀	明
二六	倉田	健一	狂矢	昇	清水	忠弘	倉田	順一	有賀	榮治	加藤	貞夫	高木	義章	唐沢	男
二七	堀	安雄	狂矢	吉郎	唐沢	義男	有賀	一衛	清水	清人	小林	時彦	高木	徳治	唐沢	康秀
二八	倉田	重成	狂矢	清人	唐沢	文雄	伊藤	繁雄	有賀	文治	植田	清彦	小島	義	有賀	明
二九	矢沢	利章	狂矢	千秋	出羽	定雄	有賀	大雄	山崎	清直	加藤	五郎	太田	正夫	唐沢	男
三〇	倉田	信章	狂矢	喜夫	唐沢	義夫	山崎	正義	清水	文治	松沢太郎	一雄	坂本	茂武	唐沢	康秀
三一	堀	夢春	狂矢	門治	原	勝次郎	清水	三三	清水	國彦	加藤	与一郎	原	市雄	有賀	十三
三二	堀	健市	狂矢	清成	清水	重成	倉田	恒雄	山崎	光重	小林	正	高木	善胤	加藤	東二郎
三三	堀	重雄	狂矢	市雄	池上	一雄	倉田	一雄	清水	一清	加藤	一雄	丸山	源武	有賀	寛一
三四	堀	安雄	狂矢	義男	原	義雄	沢田	今朝治	山崎	武夫	日ノ本	次郎	西村	寛一	伊久	岡今次
三五	堀	三郎	加藤	重治	清水	博之助	倉田	信雄	山崎	一雄	木ノ島	義一	高木	藤五	池上	友喜
三六	矢沢	利章	狂矢	守三郎	原	収一雄	伊藤	男一	山崎	金一	加藤	義一	高木	一雄	加藤	東二郎
三七	堀	佐一	狂矢	堀二	原	又重	有賀	義次	有賀	太極	松沢太郎	太田	徳重	有賀	実直	

[illegible]

（四）清田 長

表 付

征矢孝治	有賀 実	入戸 勝人（昭和38・9・40・8）	馬場 甲子郎（昭和48・4・49・3）
高木賢司	加藤 五郎	有賀 文次（昭和40・9・45・3）	津上 春栄（昭和49・4・52・3）
原 義徳	有賀 敏三	清水 貞雄（昭和45・4・47・3）	伊藤 尚 衛（昭和52・4・59・3）
穂高 昇	原 千秋（昭和35・9・38・8）	征矢 清人（昭和47・4・48・3）	安 槻 王 一（昭和59・4・1）

（五）産業組合・農業協同組合長

1 松沢 群 寿（大正10・2・11・1）	4 倉田 友 幸（昭和19・2・20・7）	7 松 沢 憲太郎（昭和22・5・23・4）	10 清水 國 人（昭和26・4・29・4）
2 高木 義 敬（大正11・1・6・1）	5 赤羽 菊 七（昭和20・8・21・3）	8 清水 國 人（昭和23・4・24・4）	11 征矢 善 一郎（昭和29・4・47・4）
3 征矢 唯次郎（昭和6・1・19・2）	6 廣沢 賢 雄（昭和21・3・22・4）	9 加藤 三 治（昭和24・4・25・4）	〔以後伊藤島協に合併〕

（六）労働工 会 長

1 有賀 藤 雄（昭和28・4・29・3）	3 長田 繁 雄（昭和35・10・45・4）	5 原 武 人（昭和49・5・1）
2 池上 房 男（昭和29・4・35・10）	4 堀 雄 幸 利（昭和45・4・49・5）	

（七）農会議員・郡会議員

○農会議員	2 清水 平 一郎（明治30・4・32・10）	6 加藤 敏 亮（明治40・10・44・10）	10 原 参 三（大正8・10・12・4）
高木 候 三（明治13・12・15・11）	3 高木 誠（明治32・10・34・12）	7 出羽 沢 岩次郎（明治44・10・大正3・1）	
○郡会議員	4 清水 寛（明治34・12・36・10）	8 髙 岡 二（大正2・4・4・10）	
1 倉田 三 郎（明治24・4・30・4）	5 原 幸 監（明治36・10・40・10）	9 堀 貞 雄（大正4・10・8・10）	

二 南箕輪村誌歴史編年表

弥生時代	縄文時代（新石器時代）					旧石器時代				時代区分	
	前期	後期	中期	前期	早期草創期	V	IV	III	BC		
	約 三〇〇〇	約 五〇〇	約 一〇〇〇	約 二〇〇〇	約 四〇〇〇	約 六〇〇〇	約 八〇〇〇	約 一〇〇〇〇	約 一五〇〇〇	年 代	
<div> <div> <p>・このころ新石器人の生活が始まる（宮城道雄）</p> <p>・当地域の縄文人の集落遺跡</p> </div> <div> <p>・縄文人の生活感となる（村内四〇遺跡）</p> <p>・（北高根A・南高根・南原C・向垣外遺跡）</p> <p>・縄文人の生活が始まる（新根・南高根・北高根A・大芝東遺跡）</p> </div> <div> <p>・このころ南箕輪に人類の生活が始まる（神子榮道雄）</p> </div> </div>											村 内 及 び 近 周 の で き 事
<div> <div> <p>・弥生式土器・青銅器文化・高床住居・鉄器が使用され機織りが始まる</p> <p>・大陸文化の伝播</p> <p>・稲作機耕文化が始まる</p> <p>・集落規模の拡大</p> <p>・埋葬が一般化する</p> <p>・石斧の多用</p> <p>・呪術的生活が盛まる</p> <p>・集落が低地へ移る傾向強まる</p> </div> <div> <p>・尖頭土器より平底土器へ移行</p> <p>・住居に穴が造られる</p> <p>・石斧の使用</p> <p>・集落規模の拡大</p> <p>・埋葬が一般化する</p> <p>・石斧の多用</p> <p>・呪術的生活が盛まる</p> <p>・集落が低地へ移る傾向強まる</p> </div> <div> <p>・尖頭土器と新石器土器</p> <p>・土器の製作が始まる</p> <p>・細石器文化</p> <p>・尖頭器文化</p> <p>・ナイフ・石斧文化</p> <p>・御宿火山大噴発</p> <p>・標榜の出現</p> <p>・第三間次焼火山活動の発見となる（御宿・乗鞍・八ヶ岳等）</p> <p>・宮城道雄中峰C遺跡（一四一三七万年前）</p> </div> </div>											関 係 事 項

歴史時代	古 史 時 代			新 生 時 代			区分時代
	後 期	中 期	前 期	後 期	中 期	前 期	
AD 六四五大化 六五二 六七〇	六〇〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇 二〇〇	AD 一〇〇	BC 一〇〇	年 代
<p>・古墳時代人の生活広まる（大泉・瓢箪・丸山・久保下遺跡等）</p> <p>・古墳時代に銅器製造が始まる</p> <p>・カマドの普及（天・新巻跡）</p> <p>・天竺の地に古墳時代人の生活栄える</p> <p>・このころ松島王墓（前方後円墳）造られる（美輪町）</p> <p>・このころ久保丸山古墳築成か</p>							内 及 び 近 岡 の で き 事
<p>・方形周溝墓の構造始まる</p> <p>・倭国王・後漢光武帝より印綬を受く（AD 五七〇）</p> <p>・国郡に造良をたて県邑に稲置をおく（和）</p> <p>・磐前県邑置</p> <p>・磐前台岡女王卑弥呼の遺使（二二九）</p> <p>・土前郡が普及し鉄製農具が使われ制作が進展する</p> <p>・このころ大和朝廷成立</p> <p>・近畿地方に前方後円墳出現</p> <p>・百濟と結び新羅と戦う（三六九）</p> <p>・任那日本府の成立（三七〇ころ）</p> <p>・倭王讃東晋に遣使（四〇四）</p> <p>・このころ御劔の「くに」成立か</p> <p>・倭王武烈に上表文を送り安東大將軍に任ぜられる（四七八）</p> <p>・須賀郡が普及信濃にも飛鳥の風広まる</p> <p>・仏教伝来（五三八）（一説五五二）</p> <p>・信濃の人若麻績東人諸光寺如来を伊那より木内郡に移すと伝う</p> <p>・四天王寺建立・聖徳太子摂政となる（五九二）</p> <p>・法隆寺創建（六〇七）</p> <p>・造唐使派遣始まる</p> <p>・大化改新（六四五）公地公民の制となる（六四六）</p> <p>・班田収授法施行（六五二）</p> <p>・初めて戸籍を作る（庚午年曆）（六七〇）</p>							関 係 事 項

[illegible]

区時 分代	年 代		村 内 及 び 近 郊 の で き 事	関 係 事 項
	西暦	年号		
平	八〇七	大同二	・北大出神明神社創建と伝う	・最澄が明使として天台宗を伝う(八〇五)
	八〇九	大同四	・坂上田村麿が新羅山社を建てたと伝う(石神)	・空海が明使として密宗を伝う(八〇六)
	八二四	天長一	・このころ各地に集落が形成する(天王原・天輪・向坂外・宮ノ上・神子榮・南高根・大芝原・大芝原・九尊洞通所)	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	八二六	天長二	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	八六六	貞観八	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	八八八	仁和四	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	八九四	寛平六	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	九〇七	延喜七	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	九二七	延長五	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	九三二	承平二	・信濃國因作で穀と布との交易を許さる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
安	九三九	天慶二	・殿村八幡宮創建と伝えられる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	九四四	天慶七	・蘇我郡の中に佐藤・美和(其輪郷?)あり(和名類聚抄)	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	九八八	永祿一	・このころ三日月に市が設けられ交易が行なわれる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	九八九	永祿二	・九月二日暴風信濃國因作倒壊守屋死	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	一〇〇九	天仁二	・このころ浅間山大噴火しばしば起る	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	一〇一五	天久三	・このころ平持の嫡孫藤原一条天皇秘蔵の鹿を飼ひ馴したと伝えらる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	一〇二八	長元一	・大祝為朝・子為仲を奥州平定に派遣させる	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	一〇六八	治平四	・このころ浅間山大噴火	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	一〇八三	天保三	・このころ藤原氏成立か?	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
	一一〇四	長治一	・このころ藤原氏の一族小内上の子に榮える	・桓武天皇の御馬初めて武蔵に遷遷する(八二三)
代	一一一五	保元一	・藤原清親・藤原武士ら源義朝に属して戦う	・保元の乱(一一一五)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)
	一一五九	平治一	・藤原武士源義朝に従い戦う一族散る	・平治の乱(一一五九)

代	時	安	平	代
一六七仁安二				・泉福三社神現このころ勧請か
一八〇治承四				・義幹の軍中に伊藤の武士多数参加
一八四寿永三				・義幹清水坂者義隆を質として鎌倉に出し藤沢清親をこれに付す
一八五文治一				・加賀源光（小笠原氏系）信濃守に任ぜらる
一八六				・細朝弓始め藤沢清親射手を勤む
一八九				・信濃諸庄の中に「院下領新東庄」あり
一九一建久二				・藤沢清親の軍に藤沢清親従う
一九二				・藤沢清親弓始めの村手を勤む、以後藤沢氏から射手が輩出する
一九七				・弓始めに藤沢清親射手を勤む
一九七				・頼朝善光寺参詣に信濃武士藤沢清親ら多数従う
一九七				・このころ羽広仲仙寺創建と伝う
二〇三建仁三				・幕府弓始めに藤沢清親射手を勤む
二一九承久一				・藤沢氏ら信濃武士幕府に属して承久の乱に出陣
二二二				・諏訪上社朝平井出・官所の田地在来日録を記す
二二四元仁一				
二二七安貞一				
二二九寛嘉一				・幕府弓始めに藤沢光晴射手を勤む
二三三貞永一				
二四〇仁治元				・幕府弓始めに藤沢光晴射手を勤む
二五一建長三				・幕府小井三古郷の地頭職を小井三氏に安堵する。小井三氏田境につき争論し幕府の裁許を受ける
二五三				・藤沢義経所領日録に「源東庄」あり
二五六慶元一				・幕府弓始めに藤沢時親（左近将監）射手を勤む
二五八正嘉二				・幕府弓始めに知久作貞・藤沢時親射手を勤む
				・藤沢時親二〇人の射手の選に入る
				・平清盛太政大臣となる（一一六七）
				・源朝（快勝）浄土宗を開く
				・以仁王討伐、頼朝朝伊豆で、源義仲木曾で平兵（一一八〇）
				・一ノ谷の合戦平氏敗走（一一八四）
				・平氏滅亡、頼朝諸国に守護地設置（一一八五）
				・頼朝関東諸国の諸庄に官程米許分に備税を加える（一一八六）
				・小笠原長清頼朝守となり松尾城に居城す（一一八六）
				・頼朝奥州平定（奥州藤原氏滅亡）（一一八九）
				・東大寺再建（一一九〇）
				・頼朝自任頼朝して臨濟宗を広める（一一九二）
				・頼朝、征夷大將軍となり、鎌倉に幕府を開く（一一九二）
				・信濃守護は金部員（一一九三）
				・源東朝時殺され北条氏執権として実権を握る（一二一九）
				・承久の乱、六波羅探題設置（一二二二）
				・頼朝「真宗」を開く（一二三四）
				・道元将朝「曹洞宗」を開く、鎌倉街道開かる（一二三七）
				・北条重時信濃守護となる（一二二九）
				・関東御成敗式目（貞永式目）制定（一二三三）
				・日蓮「法華宗」を開く（一二三三）

区時代分		年 代	村 内 及 び 近 郷 の で き 事	関 係 事 項
百 冊	年 号			
時 代	鎌 倉 時 代	一 二六〇 正元 二 一 二七四 文永 一 一 二八 一 弘安 四 一 二〇〇 元安 二 一 三〇三 嘉元 四 一 三一四 正和 三 一 三二一 元享 一 一 三二九 元徳 一 一 三三三 元弘 三	・ 藤沢左衛門五郎光綱村手を勤む ・ 幕府伊那春近領を地頭請所とし、請科反別銭(一〇〇文)と定める ・ 中沢郷の中沢氏一族が幕府の仲買を受ける ・ 松林寺開基と伝えられる ・ 中沢郷の中沢氏出雲從本荘の地頭職を争い訴訟に勝つ ・ 正親智監頼朝(大基勇健) 長岡に生まる ・ 幕府御防上仕の造宮路役を諸郷に課す ・ 大坂勇雄心寺に入る	・ 藤沢四郎政頼大坂の城につく ・ 伊那の諸族横川城にこもって守護小笠原貞宗の軍と戦い敗れる
時 代	建 武 時 代	一 三三六 建武 三 一 三三八 延元 三 一 三四〇 興國 一 一 三五六 正平 一 一 三六八 応安 一 一 三八〇 天授 六 一 三八二 弘和 三 一 三九二 元中 九 一 四〇〇 応永 七	・ 北条時行ら伊那郡大徳王寺城に降参、小笠原貞宗の軍と戦う ・ 諏訪川忠が「諏訪大明神勧進」を著わす ・ 堀耳城主藤沢氏等御村山社大祭を行なう(伝) ・ 赤良親王信濃を去る ・ 正親智監頼朝没す(五三歳) ・ 伊那の建武大祭(更迭)へ合戦に参加	・ 筑輪義雄一の宮に神社建立と伝う ・ このころ伊那の諸族諏訪社の神事を勤仕する ・ 小笠原時長伊那郡手具郷・同八乙女・金原等を諏訪社神領と定める
時 代	室 町 時 代	一 四四五 文安 二 一 四五 一 室町 二		・ 文永の役(蒙古襲来)(一二七四) ・ 弘安の役(蒙古襲来)(一二八二) ・ 永仁の御政令(御家人の負傷免陸)(一二九七) ・ 後醍醐天皇院政を廢止・親政(一二三三) ・ 元弘の役(一二三三)(北条時行討伐) ・ 鎌倉幕府に降(一二三三) ・ 北条時行信濃へ逃れ諏訪氏らと結ぶ(一二三四) ・ 建武新政行なわる(一二三四) ・ 北条時行を信濃に兵を挙げ鎌倉を陥れられる(一二三三) ・ 足利尊氏率兵(一二三三) ・ 後醍醐天皇吉野に移り「南朝」ができる(一二三三) ・ 足利尊氏征夷大将軍となり、室町に幕府を開く(一二三三) ・ 赤良親王伊那に入る(一二三三)

室	町
一四五四 本郷	三 諏訪御府文書に大井半、箕輪島殿とある
一四五五 原主	一 小内無量寺阿弥陀如来像修理さる
一四五六 三	三 花会、箕輪藩次連江守道政とある（諏訪御府文書）
一四六三 寛正	四 花会、大井半、大井半、大井半とある（「」）
一四六七 忠仁	一 忠仁中、箕輪領主藤沢信石とある
一四七〇 文明	二 このころ箕輪領主藤沢信石上社伊那郡回馬神社行事を行なう
一四七三	五 諏訪上社伊那郡回馬神社行事（久保）を行なう
一四七七	九 花会、諏訪上社伊那郡回馬神社行事とある
一四八二	一四 高瀬藩の諸族、諏訪の諸族と争う
一四八五	一七 諏訪上社伊那郡回馬神社行事
一四九二 明応	一 長岡長杉寺創建三日町御村山三社伊那郡回馬神社行事とある
一五〇一	一 久保西念寺創立とある
一五〇四 大永	四 諏訪上社伊那郡回馬神社行事（仁王像が作られる）
一五〇八 享祿	一 諏訪上社伊那郡回馬神社行事（「正物七身かす切七身」とある）
一五三〇	三 箕輪氏上郷へ御村山社を移すとある
一五三二 天文	一 松島町寺宇建立とある
一五三三	二 天文の初め大泉寺に大泉上院・御子堂・清水氏・田嶋に日戸氏・北條・倉田城に倉田氏・南郷に有賀氏・久保・木下・松島に松島氏・木下・城に木下・大泉城に藤沢氏・中条に藤沢氏・中条に藤沢氏・中条に藤沢氏とある
一五三六	三 伊那郡大清水
一五三八	五 大泉寺・松島氏あり
一五四二	七 小笠原長時、松尾の小笠原信定ら甲斐に出兵、この戦いにおいて倉田得盛戦死す
一五四二	一 武田信玄伊那に攻め入る
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり
一五四二	一 諏訪台戦に箕輪平治あり

・浅間山噴火（一四五一）

・太田道灌江戸城を築く（一四五七）

・忠仁の乱起る（一四六七―七七）

・信濃守護南信小笠原政秀、北信上杉房定に分かれる（一四七七）

・山内一徳おこる（一四八五）

・加賀一向一揆おこる（一四八八―一五八〇）

・木竹氏高直を領す（一五三六）

・武田信玄長瀬を経て、諏訪頼重を討つ、頼重・甲府で自刃し、諏訪氏亡ぶ（一五四二）

・移す時に鉄鉤似来（一五四三）

時	代	時	町	時	代	時	代	時分		年	代	内 及 び 近 郷 の で き 事	関 係 事 項
								西暦	年号				
一五四四	一三	一五四四	一三	一五四四	一三	一五四四	一三	一五四四	一三	一五四四	一三	・御射山社別当寺藤室寺武田の兵火で焼失と伝う ・武田信玄社交結から高遠築輪方陣に攻め入る(一六六) ・藤沢頼朝郎權次郎を臂に出し小笠原長時のもとに赴る ・藤沢頼朝武田信玄に従い駿河に出陣して帰ると伝う ・信玄高遠城の鎮立てを行なう ・大泉介松島氏あり。松島清満武田に記詞文を出す松島対馬守貞実高遠に誘殺さる ・村上義清・小笠原長時謀略に計入り塩尻峠に破れる、このとき筑輪次郎英軍す	・武田氏小笠原頼内へ塩の輸送を禁止(一五四五) ・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五四七) ・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五四七)
一五四八	一七	一五四八	一七	一五四八	一七	一五四八	一七	一五四八	一七	一五四八	一七	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八)	・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五七二) ・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五七二) ・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五七二) ・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五七二) ・武田氏 上杉氏信濃國で戦う(一五七二)
一五四九	一八	一五四九	一八	一五四九	一八	一五四九	一八	一五四九	一八	一五四九	一八	・信玄筑輪城の鎮立てを行なう ・藤沢頼朝中府に行く ・武田信玄頼朝と城に立ち寄り白鳥四郎に土地を与う ・晴信三日町御射山三社に社領を寄進 ・信玄頼朝八幡宮に七貫二〇〇文の土地奉納 ・武田晴信全く伊那地方を手中に収め、以後一三年間支配し諸役を課す ・信玄、松島、伊那郡、黒河内氏等伊那八人衆を頼朝に処刑す ・大軍に神助あり、筑輪南宮社に通道の権児七五衆諸の神事を始む ・諏訪上社伊那郡より諸神事行なわる(塩野井とあり) ・高杉本國寺の合戦に小笠原信定に従い木下惣盛戦死す ・南殿の清水土左死去と伝う ・伊那の軍役武田勢として三方原に出陣 ・諏訪神社造宮儀に據の郷・大泉郷・殿村・沢尻等あり ・伊那諸郷諏訪社造宮のため諸役を勤む(大泉之郷・沢尻之郷などあり) ・木下近界寺建立と伝う ・織田信忠高遠城を攻め落とす(一五八二・三) 諏訪に入る ・伊那の地毛利河内秀頼の所領となる(一五八二・三・六) ・信長の急死により保科正直高遠城に入り藤沢頼朝親田中城に戻る	・フランシスコ・ザビエル鹿児島に來たりキリスト教を伝う(一五四九) ・信濃國守護小笠原氏没落(一五五三) ・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五五二	二	一五五二	二	一五五二	二	一五五二	二	一五五二	二	一五五二	二	・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五五八	一	一五五八	一	一五五八	一	一五五八	一	一五五八	一	一五五八	一	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五五九	八	一五五九	八	一五五九	八	一五五九	八	一五五九	八	一五五九	八	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五六〇	二	一五六〇	二	一五六〇	二	一五六〇	二	一五六〇	二	一五六〇	二	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五六一	三	一五六一	三	一五六一	三	一五六一	三	一五六一	三	一五六一	三	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五六二	四	一五六二	四	一五六二	四	一五六二	四	一五六二	四	一五六二	四	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)
一五六三	五	一五六三	五	一五六三	五	一五六三	五	一五六三	五	一五六三	五	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)	・上杉・武田両軍川中島で戦う(一五六一) ・信玄諏訪下社の祭礼を再興(一五六五) ・武田氏三方が源に徳川勢を破る(一五七二) ・武田信玄下伊那駒場で病死(一五七三・四) ・上杉謙信没す(一五七八) ・織田勢信濃甲斐侵入(一五八二・三・四) ・本能寺の變、信長急死(一五八二・三・六)

江 戸 時 代	区時 分代	年 代		村 内 の で き こ と	関 係 事 項
		西暦	年号		
一六〇一	慶長六	一六〇一	慶長六	・ 寛輪一万石・飯田城主小笠原秀政の所領となり、田中城に陣屋をおき、南其輪地城各村その支配を受ける。 ・ 朝日千助社寺へ寄進（殿村八幡宮ほか） ・ 春日決闘守春日街道を開き始める。	・ 小笠原秀政飯田城主となる（五万石）一六〇二） ・ 家康、京野二島城を管掌す（一六〇二） ・ 家康征夷大将軍となり江戸幕府を開く（一六〇三）
一六〇三	八	一六〇三	八	・ 千村半右衛門伊能代官となり、その支配を受ける。	
一六〇八	一三	一六〇八	一三	・ 殿村の陣地行なわる、春日街道開通・大泉宿設置か	
一六〇七	一四	一六〇七	一四	・ 大泉衆二二名尾州津島神社に参詣す	

安 土 桃 山	区時 分代	年 代		村 内 の で き こ と	関 係 事 項
		西暦	年号		
一五八三	天正一一	一五八三	天正一一	・ 小笠原信親・加久頼元・保科正直ら田中城を攻む ・ 寛輪殿時・向山主人・白鳥四郎ら奮戦するも七月一八日田中城落城農民頼親 ・ 関左衛門殿死	・ 秀吉山城の国の機軸を行なう（七）
一五八五	一三	一五八五	一三	・ 木曾義昌家康から寛輪の諸職を安堵され三日町御射山三社・福与御社に社 ・ 領寄進（八月）殿村八幡宮に五貫文寄進 ・ 小笠原貞康家康に叛し高野城の保科正直を攻め大敗す、寛輪太左衛門先導 ・ （二月）	・ 秀吉大坂城に入る（一五八三） ・ 小笠原貞平の戦い（一五八四） ・ 秀吉關白となる（一五八五） ・ 秀吉太政大臣となり、豊臣姓を賜る（一五八六）
一五八六	一四	一五八六	一四	・ 大地震、御村山大明神社崩壊（石渚） ・ （天文年中）上伊勢十騎保科氏に従う ・ 塩ノ井藩御事あり	
一五八七	一五	一五八七	一五	・ 母起の戦いに寛輪平蔵、小笠原貞康に頼し戦死と伝う	・ 豊臣秀吉北条氏を亡ぼし家康を関東へ移す（一五九〇） ・ 秀吉、朝鮮征伐を命ず（一五九一）
一五八九	一七	一五八九	一七	・ 寛輪の地約一か年間真田信幸の所領となる ・ 毛利秀頼伊勢松地の退却を促す	・ 京極修理太夫高知飯田城主となる（一五九三） ・ 秀吉朝鮮再征を決す（一五九六）
一五九二	天正二〇	一五九二	天正二〇	・ 眞氏村で村となる（承応三年まで六二年間） ・ 清水正寿土着と伝う	・ 関東一円・甲信日年来の大洪水（六・一九一三） ・ 関ヶ原の戦い（一六〇〇）
一五九三	文禄二	一五九三	文禄二	・ 京極修理太夫高知飯田城主となる（一五九三） ・ 秀吉朝鮮再征を決す（一五九六）	
一五九六	慶長一	一五九六	慶長一	・ 洪水、浅間山爆発、秋凶作	
一六〇〇	五	一六〇〇	五	・ 伊那の地徳川家康の蔵入地となり朝日受水代官となる ・ 保科正直高遠に復帰二万五千石を領す	

代	時	区時代		村内のできごと	関 係 事 項
		西暦	年 代		
一六五三 承応 二	一六四七 正保 四	一六二二 慶長 二七	・天竜川洪水田中城跡を水下に葬す	・大坂冬の陣(一六一四)	・大坂冬の陣(一六一四)
一六五四 〃 三	一六四八 慶安 一	一六一四 〃 一九	・小笠原秀政殿村八幡宮の修造を命ず(一二・二四)	・大坂夏の陣、豊臣氏滅亡(一六一五)	・大坂夏の陣、豊臣氏滅亡(一六一五)
一六五六 明暦 二	一六四九 〃 二	一六一五 〃 二〇	・殿村八幡宮再建	・幕府改修安元殿田入封(一六一五)	・幕府改修安元殿田入封(一六一五)
一六六〇 寛文 一	一六四九 〃 二	元和 一	・寛福一万石木下陣屋支配(其輪郡代加集率之勘)	・徳川家光征夷大将軍となる(一六三三)	・徳川家光征夷大将軍となる(一六三三)
		一六三三 〃 九	・天竜川大洪水夏大旱魃、草木枯れ河魚干死す		
		一六二四 寛永 元	・伊勢地方大蛇患所々の家出潰(一〇・四)	・大坂城普請(一六二六)・開始(一六二九)	・大坂城普請(一六二六)・開始(一六二九)
		一六二六 〃 三	・真由平採草地につき其輪領高瀬川と争論始まる	・参勤交代開始(一六三三)	・参勤交代開始(一六三三)
		一六三七 〃 四	・全国的連綿凶作(壬午の飢饉という)	・島原の乱(一六三七)〇	・島原の乱(一六三七)〇
		一六四二 〃 一	・伊勢街道全線付け替え、市場整備を行なう	・幕府宿願の人馬増進近郷村々を助郷村に指定する(〃)	・幕府宿願の人馬増進近郷村々を助郷村に指定する(〃)
			・大泉宮を廃止、北殿大泉宮となる	・幕府田畑水代売買の禁止令を出す(一六四三)	・幕府田畑水代売買の禁止令を出す(一六四三)
			・殿村南北殿村に分かれる		
			・北殿村・南殿村・田畑村・御子柴村一斉検地行なわる		
			・殿村八幡宮朱印状あり(以後八通の朱印状あり)		
			・北殿に宗門直帳(本村最古のもの)作らる		
			・久保神明宮創建と伝う		
			・大泉村一斉検地行なわる		
			・このころ沢尻復興、久保宮村となる		
			・殿村八幡宮神祇再建陳礼に「伊勢郡藤原正兵衛」がある		
			・上伊勢地方大洪水		

区時代	年 代		村 内 の で き こ と	関 係 事 項
	西暦	年号		
時	一七五五	正徳五	・上野北郡一七か村共輪二六か村本會助給免除額提出 ・伊能郡未會助の水害（五柳末の洪水）前殿本湖四〇割増し切り、田圃村の井堀水門大破（六月） ・宮崎郡と高遠郡にて北沢・南沢・中野原等の入会地利用規定を定む ・北殿村・田圃村・南殿村大田圃村となる ・天竜川洪水、田圃村井堀が壊滅（六月） ・北殿・田圃・大泉の新田検地行なわれる ・天竜川大泉川沿川欠け多し（夏の川欠けという） ・旱損額多く大凶作となる ・村々大井川普請の国役金を負担す	<ul style="list-style-type: none"> ・徳川吉宗征夷大将軍となる（一七二六） ・享保の改革始まる（一七一六） ・野口在色藩州取略に没す、七七歳（一七一六） ・幕府新田検地免日制定（一七二〇） ・享保の大飢饉始まる ・大嵐のため木下陣屋倒壊屋敷焼失（一七三六） ・大井川千曲川等の大河川の普請（一七四〇） ・開墾風木下において「伊能郡知基」を著わす（一七四〇） ・農民の活動・惣訴禁止（一七四一） ・信濃・越後大飢饉（一七四八） ・幕府備荒貯蓄を命ず（一七五三）
	一七三六	元文一	・五一八月大雨被害多し、田圃村越後水災（八月） ・神子・田圃・田圃村と上牧・野原四村の天竜川通り大喧嘩論起る ・中野原・三本木原等へ大普請より畑・林を仕出し争論となり江戸表へ出訴 ・伊能郡地方騒ぎ多し ・中野原三本木原等争論裁判、寺合新田生まる ・久保（彦）村から堀ノ井村分村する ・堀ノ井村尺地社賣給社会館 ・各村一斉に新田検地行なわれる ・天竜川洪水、北殿村天竜川本堀切り込む ・寒念仏供養の道徳建つ（堀ノ井） ・御村山入会山利用取替わし証文・北沢山止野定書できる ・この年洪水にて北殿村田方二〇〇石没失 ・神子・田圃・田圃と上牧・野原四村大喧嘩論江戸奉行所へ出訴（宝暦一一年終訖） ・太田知行所上知され、久保・北殿と南殿の一部郡村領になり飯島陣屋支配となる ・入会山野の山手・野千（年貢）の納入始まる	
	一七三三	一七三八		
	一七二五	一七四〇		
	一七二二	一七四二		
	一七二〇	一七四〇		
	一七一七	一七四〇		
	一七一六	一七四〇		
	一七一五	一七四〇		
	一七一四	一七四〇		
代	一七五八	八		
	一七五七	七		
	一七五二	二		
	一七五〇	四		
	一七四八	一		
	一七四五	二		
	一七四三	三		
	一七四二	二		
	一七四一	一		
	一七四〇	五		

戸		江	
一七六四	明和	一七九七	寛政
一七六五	〃	一八〇三	享和
一七六六	〃	一八〇五	文化
一七六七	〃	一八〇七	〃
一七七八	〃	一八〇八	〃
一七七九	〃	一八〇九	〃
一七八〇	〃	一八一〇	〃
一七八一	〃	一八一四	〃
一七八二	天明	一八一八	文政
一七八三	〃	一八一九	〃
一七八四	〃	一八二〇	〃
一七八五	〃		
一七八六	〃		
一七八七	〃		
一七八八	〃		
一七八九	〃		
一七九〇	〃		
一七九一	〃		
一七九二	〃		
一七九三	〃		
一七九四	〃		
一七九五	〃		
一七九六	〃		
一七九七	〃		
一七九八	〃		
一七九九	〃		
一七八〇	〃		
一七八一	〃		
一七八二	〃		
一七八三	〃		
一七八四	〃		
一七八五	〃		
一七八六	〃		
一七八七	〃		
一七八八	〃		
一七八九	〃		
一七九〇	〃		
一七九一	〃		
一七九二	〃		
一七九三	〃		
一七九四	〃		
一七九五	〃		
一七九六	〃		
一七九七	〃		
一七九八	〃		
一七九九	〃		
一七八〇	〃		
一七八一	〃		
一七八二	〃		
一七八三	〃		
一七八四	〃		
一七八五	〃		
一七八六	〃		
一七八七	〃		
一七八八	〃		
一七八九	〃		
一七九〇	〃		
一七九一	〃		
一七九二	〃		
一七九三	〃		
一七九四	〃		
一七九五	〃		
一七九六	〃		
一七九七	〃		
一七九八	〃		
一七九九	〃		
一七八〇	〃		
一七八一	〃		
一七八二	〃		
一七八三	〃		
一七八四	〃		
一七八五	〃		
一七八六	〃		
一七八七	〃		
一七八八	〃		
一七八九	〃		
一七九〇	〃		
一七九一	〃		
一七九二	〃		
一七九三	〃		
一七九四	〃		
一七九五	〃		
一七九六	〃		
一七九七	〃		
一七九八	〃		
一七九九	〃		
一七八〇	〃		
一七八一	〃		
一七八二	〃		
一七八三	〃		
一七八四	〃		
一七八五	〃		
一七八六	〃		
一七八七	〃		
一七八八	〃		
一七八九	〃		
一七九〇	〃		
一七九一	〃		
一七九二	〃		
一七九三	〃		
一七九四	〃		
一七九五	〃		
一七九六	〃		
一七九七	〃		
一七九八	〃		
一七九九	〃		
一七八〇	〃		
一七八一	〃		
一七八二	〃		
一七八三	〃		
一七八四	〃		
一七八五	〃		
一七八六	〃		
一七八七	〃		
一七八八	〃		

年 表

区時代分		年 代	村 内 及 び 近 隣 の で き 事	関 係 事 項
百 年 号	年 号			
一八三三	文政 六	・ 妙子・榮村・保市、天竜川通船を企て松本藩預り度へ願書を出す ・ 大泉所山入会山定めをつくる ・ 御射山社創建つ ・ 大泉神社本殿を再編 ・ 北殿村と福島村大坂争論起る ・ 仲子・榮村・保市、天竜川通船を始める ・ 殿村八幡宮北殿参道入口に道標建つ ・ 西念寺再興 ・ 四・七・八月三度洪水秋作物饑乏大凶作 ・ 平沢水論内済規定できる	・ 伊能忠敬「大日本沿海輿地図」完成（一八二三） ・ 外国船無二念行払い令（一八二五）	
一八三〇	天保 一	・ 大泉所入会路入れ道（たる）の件出入り江戸奉行所出訴 ・ 大泉所たる一件示談内済 ・ 新四国藩邸完成 ・ 北殿村及び三日町村天竜舟起工 ・ 六・七月天竜川洪水田畑村普請所大破 ・ 天然痘流行 ・ 伊東伝兵衛西天竜井に着手 ・ 七月天竜川・大泉川大洪水 ・ 南殿里人六人一言寿碑建つ ・ 英輪の各村助郷で苦しむ ・ 伊藤道（大洗兵衛）の築堤建つ ・ 久保・北殿と南殿の一部三度太田氏私領となる ・ 征矢寄兵衛歌碑建つ（塩ノ井） ・ 水戸浪士八〇〇人村内を通る（但十一月二三日） ・ 凶作・天然痘流行	・ 伊勢おかげ参り流行（一八三〇） ・ 諸国組織続き農民一登が全国的に起る（一八三二） ・ 天保の大飢饉（一八三二―一三七） ・ 畜社の獄（一八三六） ・ 天保の改革（老中水野忠純）（一八四一） ・ 徳光寺大地震（一八四七） ・ ベリー通賀に、プチャートン長崎に決航（一八五三） ・ 日米通商条約締結（一八五八） ・ 和宮降嫁中山道下向（一八六二） ・ 板下門外の変（一八六二） ・ 蛤御門の変・第一次長州征伐（一八六四）	
一八三六	天保 七			
一八四四	一五			
一八四九	二			
一八五〇	三			
一八五六	三			
一八五八	五			
一八五九	六			
一八六一	一			
一八六二	二			
一八六四	一			
一八六六	二			

江	代	時	治	明
一八六七 慶応三	一八七〇 一	一八七二 五	一八七三 六	一八七四 七
一八六八 明治一	一八六九 二	一八七〇 三	一八七二 五	一八七五 八
一四	二	三	四	五
<ul style="list-style-type: none"> ・大泉におり降り人心御々、抜け参りあり ・英輪義勇隊島羽伏見の戦いに参加(七五八) ・太田綱経代尾州取締所に太田綱経親類の出、主謀者殺害さる 	<ul style="list-style-type: none"> ・神樂賀礼多く出る ・南英輪船域の村々伊勢県に属す(四五六) ・北殿に伝馬所をおく ・大泉大新橋井戸成る。以後村内に横井戸ふえる 	<ul style="list-style-type: none"> ・北原入会地第一次分割行なわる ・延矢真白(彦右衛門)・船舞座つ(堀ノ井) ・伊勢県と高遠県が気摩県となり、本村は気摩県に属す(一一一) ・北殿松林寺を義学校として久保・北殿・大泉・南殿各村による第二八小校(義学校)開校(九) ・地租改正事業始まる(田畑一筆地引張作成) ・神子榮に教知学校創立(二〇) ・北殿大泉宿廃止 ・南英輪船域「第十七大区九小区」となる(久保は八小区) ・各村義学校を村ごとに設立。南殿に大成学校(六)久保に久保学校・北殿に大成学校・田畑に義学校、神子榮に教知学校・沢尻に久保義民文学校設立 	<ul style="list-style-type: none"> ・陸運会社・中牛馬会合併 ・南英輪船修船所開所 ・有賀又七郎船渠築き工場を始む(工女二〇人) ・久保村・大泉村・北殿村・南殿村・田畑村・神子榮村六か村を合併して南英輪船誕生(二・一八) ・入会地整理改正始まる(入会地厚田書差し出す) ・大泉学校在明治学校より独立 ・内國通運会社設立 	
<ul style="list-style-type: none"> ・大庭幸雄・王政復古宣言(二八六七) ・島羽伏見の戦(二八六八) ・南英義勇隊動起る(二八六八) ・伊勢県設置県庁を旧飯島陣屋に置く(二八六八) ・飯島幸雄・藩知事を置く(二八六九) ・諸道の開所廃止(二八六九) ・平民に苗字使用を許す(二八七〇) ・各宿駅開所年寄を罷し伝馬所をおく(二八七〇) ・伊勢県のうち東北信は中野県となる(二八七〇) ・田畑勝手作りの許可(二八七二) ・土地水代売買の禁を解く(二八七二・二) ・正屋名主制を廃し戸長制とする(二八七二・四) ・全国に郵便制度をしく(二八七二・七) ・学区を指定学区制を定める(二八七二・八) ・助郷制度廃止「相対人助郷法」の制定(二八七二・三) ・太田綱経を重用この日を一月一日とする(二八七二・二・三) ・徴兵令を定める(二八七三・一) ・地租改正条例公布(二八七三) ・伊勢街道二等道路となる(二八七三) ・全国の戸籍表完成・人口三三二万八二五八(二八七四) ・気摩県に開港社設立され開業(二八七五・三) 				

区時 分代	年 代		村 内 及 び 近 邊 の で き 事	関 係 事 項
	西 暦	号 年		
時	一八七六	明治九	・北贈清防組（本村最初）誕生（一） ・三河街道・権兵衛街道が県道に編入される ・筑摩県が廢され長野県に属す（八・二二） ・村内田・畑・宅地の地租改正終る ・生糸上五〇貫匁減へ輸出（旧村誌） ・田村誌完成	・国道・県道・県道の開成（一八七七） ・西南の役（一八七七） ・学区制改正（一八七七） ・郡区町村編成法府県会規則を定める（一八七八） ・学制を施し教育令を定める（一八七九） ・伊那郡が上伊那と下伊那に分かれる（一八八〇） ・郡制がしかれ郡長が生まれる（一八八〇） ・区町村会法を定める（一八八〇・三） ・大日本農会設立（一八八二） ・七道開き事業始まる（一八八二） ・郡役所が伊那村に置かる（常岡寺後校舎）（一八八三） ・県会で分県運動始まる ・徴兵令改正（明治三十二年）（一八八三） ・地租改正案令制定（一八八四）
	一八七七	一〇	・有賀又七郎機械製糸工場設立 ・国民学校は廃校、西伊那郡校へ委託（四） ・久保北村は木下学校へ、神子奈学校は山岡学校へ合併（四） ・北原・大泉・久保南側・南殿合併して南英輪学校設立（七） ・入会地区有地割直決定、山林原野の地租改正終る（九） ・田畑・神子奈の学校が合併して美和学校を興く（二） ・大区小区制廃止「上伊那郡南英輪村」となる（二） ・塩ノ井青年会発足、このころより地租青年会逐次発足 ・戸長公選となり、戸長役場となる ・村誌会発足	
	一八八〇	一五	・奈良井川引水願を出す ・大泉山保護契約書成立 ・征夷代五郎機械製糸工場を始む ・上伊那二〇番南英輪学校・二一番美和学校の二学区となる（四） ・北原入会地第二次分割を行なう（四） ・洪水、村内各地防決壊 ・大芝入会地分割 ・このころから農業学校増設広がる	
	一八八二	一六	・大芝入会地分割 ・このころから農業学校増設広がる	
	一八八四	一七	・征夷代五郎・大泉川大洪水 ・征夷代五郎・大泉川大洪水 ・征夷代五郎・大泉川大洪水	

年	事
一八八五明治一八	・長富通となり、路線には戸長が出た
一八八六	・天童川大洪水水田被害一九町、大因作(六・三〇)
一八八六	・小学校令により尋常小学校四年高等小学校四年となり南箕輪尋常小学校設置、田畑に分敷場(四年まで)を置く
一八八八	・郡役所新築落成
一八八八	・上野現連合運動会中野原で行なわれる(運動会の初め)
一八八九	・機安矢部先生、藤田北殿に建つ
一八八九	・戸長、戸長を雇い、村長を置く(四)
一八八九	・南箕輪の戸口……五五二戸二七二八人
一八八九	・伊奈誠一郎(高木甲子次郎)没す(五・一五)
一八八九	・南箕輪伊奈警察所管轄となる(五)
一八八九	・岡村八幡宮焼失(一〇)、恩徳寺完成
一八八九	・築地争論始まる
一八八九	・征矢(政五郎)先生の碑、堀ノ井に建つ
一八九一	・遷居大田、南箕輪地方にも被害多し(一〇)
一八九二	・残地争論、裁判決下り南箕輪地籍確定(一)
一八九三	・田畑支校、南箕輪尋常小学校一校になる
一八九三	・加藤敬英、天童川通船を始む(二年にして止む)
一八九三	・殿村八幡宮入り、横井を出る
一八九四	・久保、神田神社、神田宮に合祀
一八九四	・大芝に横井始まる
一八九四	・小学校校舎焼失(一一・一〇)
一八九四	・加藤忠雄(海軍少将)生る(一一・一五)
一八九四	・南箕輪公園完成(およそ二万坪)
一八九五	・追分先生、築地争論に建つ
一八九五	・学校林(一〇町歩)設置、横井を始む(四)
一八九五	・太政官廃止、内閣制度実施(二・一八五)
一八九五	・小学校令、中学校令公布(二・一八五)
一八九五	・郡内にコレラ大流行(一・一)
一八九五	・伊奈街道が二等県道三州街道となる(二)
一八九五	・天然痘大流行(二・一八七)
一八九五	・市町村制公布(二・一八八)翌年四月施行
一八九五	・大日本帝国憲法制定(二・一八八)
一八九五	・第一回帝國議會(二・一八九)
一八九五	・教育に関する勅諭发布(二・一八九・一〇)
一八九五	・長野県郡制施行(二・一八九)
一八九五	・清國に宣戦を布告(日清戦争)(二・一八九・八)
一八九五	・消防規則公布(二・一八九)
一八九五	・日清戦争講和条約調印(二・一八九・四)

時 代	区 分 代		村 内 及 び 近 郷 の で き 事	関 係 事 項
	西 暦	年 号		
一八九六明治二九			・南宮輪消防組織される(各陣地消防隊を統合)(四)	・郡立上伊那簡易農学校開校(一八九五・五)
一八九七〇三〇			・県下に津波流行 村内患者三二名内五名死亡(二)	・町村清溪法施行(一八九五・五)
			・濃霧害被害多し	・遼東半島露付(一八九五・一)
			・天竜川三峯川大洪水	・河川法公布(一八九六・四)
			・この年から入会山野の整理始まる	・貨幣法公布(一八九七・三)
一八九八〇三二			・尋常補習科設置(四)	・伝馬制予防法公布(一八九七・四)
			・天竜川洪水、発生不作	・森林法公布(一八九七・四)
一八九九〇三二			・県設林苗圃前官原に設置	・県立農事試験場設立(一八九七)
一九〇〇〇三三			・小学校校舎建築工事着手(工費一万三四四四)(一〇)	・県下大霜害(一八九八)
			・このころ村農会成立	・限根内閣(最初の政党内閣)成立(一)
一九〇一〇三四			・南宮輪尋常高等小学校(修業年限四年の高等科併置)となる(四)	・中学校令実業学校令・高等女学校令公布(一)
			・桐草良亮(木下尚江)筆塚久保に建つ	・産業組合法・重要物産組合法土曜日用法公布(一九〇〇)
一九〇二〇三五			・小学校校舎建築落成式(一一・一)	・治安警察法公布(一九〇〇・三)
			・南宮輪小学校に南宮補習学校付設	・小学校令改正 国定教科書制度確立(一九〇三)
一九〇三〇三六			・役場庁舎建築(分教場改修)	・船舶積荷防法公布(一九〇四・二)
			・中野原の分割を完了、入会権解消	・ロシアに宣戦布告(一) 日露戦争
一九〇四〇三七			・長田製糸開業(百益)	・郵便貯金法公布(一九〇五)
			・大芝原中野原三本木原等大規模植林を企画三八年にかけて植林	・日露講和条約調印(一九〇五・八)
一九〇五〇三八			・南宮輪遊楽団在所設置する(五)	
			・清水市町会組織確立(大長)	
			・有証責任大長購買組合設立(本村内産業組合の先駆)	

大 正 時 代		期		治	
一九一九	八	・西天竜特産品組合結成(一二)	一九〇七	四〇	・多くの神社の合併が行なわれる ・犀林(上井と中井)水輪始まる ・南宮輪小学校尋常科六年高等科二年となる(四) ・小学校中学校舎増築 費用一三〇〇円
一九一八	七	・植林地保護規定制定(二〇)	一九〇八	四一	・南宮輪小学校尋常科六年高等科二年となる(四)
一九一七	六	・米人スミス山下で公開博覧 ・犀林水輪大審判で大泉博覧となる	一九〇九	四二	・小学校中学校舎増築 費用一三〇〇円
一九一六	五	・大泉山山分割行なわれる(公簿上は昭和三年分割) ・倉田(三郎)・森田徳平北隣に建つ	一九一一	四四	・学校林増設(大芝原一〇〇町歩) ・大芝原三三町歩植林以後連年植林 ・天竜川大洪水(六・八) ・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九一五	四	・小学校校舎拡張、工費二六五円 ・高麗に横井記念碑建つ	一九一二	四五	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九一四	三	・上伊那郡政首領本村に設置 ・小学校校舎拡張、工費二六五円 ・高麗に横井記念碑建つ	一九一三	四六	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九一三	二	・このころ足路回転製穀機が伝わり始める ・区別施行(八区) 区長は村会で選挙 ・大芝原・北原・三本木原村有統一化決定調印(三三) ・上伊那郡政首領本村に設置 ・小学校校舎拡張、工費二六五円 ・高麗に横井記念碑建つ	一九一〇	四八	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九一二	一	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇九	四九	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九一〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇八	五〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇九	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇七	五二	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇八	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇六	五三	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇七	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇五	五四	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇六	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇四	五五	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇五	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇三	五六	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇四	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇二	五七	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇三	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇一	五八	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇二	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	五九	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇一	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六一	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六二	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六三	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六四	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六五	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六六	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六七	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六八	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	六九	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七一	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七二	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七三	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七四	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七五	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七六	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七七	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七八	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	七九	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八一	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八二	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八三	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八四	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八五	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八六	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八七	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八八	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	八九	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九一	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九二	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九三	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九四	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九五	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九六	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九七	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九八	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	九九	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)
一九〇〇	〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)	一九〇〇	一〇〇	・伊那通気鉄道 木下―新開間開通 ・南宮輪青年会創始(一二)

区時代 分代	年 代	内 容	内 容
代	一九二〇大正九	・このころ馬鈴代かき車普及 ・大島山分譲後実質的に村有統一化なる	・伊那街道国道交野田線と改定(一九一九) ・中学校令改正・県立伊那中学校創立認可(〃) ・全国普通短期鉄道組合組織(一九二〇・二) ・戦後の不況始まる赤穂暴落(一九二〇) ・第一回国勢調査 ・米穀法(需給調査)公布(一九二二) ・郡制廃止法公布(〃・三)大正十二年より施行
時	一九二二〃	・南箕輪産業組合設立(一九二〇) ・堀川堤、久保にわさび栽培を始める ・このころより各所に短女会生する(一九〇一―一三年) ・高木製紙業(神子堤)(五〇〇名)	・農会法公布(一九二二・四) ・伊那高等女学校創立認可となる(一九二二) ・郡制廃止(一九二三・四) ・全国購買組合連合会設立(〃) ・関東大震災(〃・九・一) ・メーテル法使用始まる(一九二四・七) ・小作調停法公布(〃)
正	一九二四〃	・このころからゴム底足袋普及、桑園に対する金肥使用急増 ・久保村久保寺岡谷村北岡へ移譲 ・有貯蓄信用南箕輪信用購買組合となる ・神子堤開水完成	・治安維持法公布(一九二五・四) ・中学・師範学校に軍事教練開始(〃・四) ・ラジオ放送開始(〃・七) ・第二回国勢調査人口八三五四六九二九人 内地五九七三万六八二二人 ・青年訓練法公布(一九二六・六) ・自作農創設維持補助規則公布(〃・六)
大	一九二五〃	・南箕輪女子青年会発足(一五)	
代	一九二六昭和	・南箕輪青年訓練所開所(七) ・高木製紙が高木製紙平製紙所に移転的解散 ・トラホーム高平町村に指定される ・県下一四六番番、南箕輪桑園二〇〇町番被害 ・西大前南箕輪地区開田開始	・金融恐慌始まり(三月)三週間のモラトリアム実施(一九二七・四) ・山東出兵(一九二七)

時	代	区時 分代	年 代	村 内 及 び 近 郷 の で き 事	関 係 事 項
一九四二	一八	昭和十七	一九四二	・飯田宮林署苗圃大芝に移転開設 ・村診療所開設（八） ・南殿に豊松一本松神遷つ ・清州開拓移民始まる以後数年移民が行なわれ木村よりも多数移民す ・国民精神運動員実行委員会設置 ・結核防止 ・国防婦人会南其輪分会発会（三） ・第一次調査開拓青少年義勇隊選出（三） ・木村一貫の句碑八保に建つ（三） ・南其輪消防団を警防団に改組（四） ・このころ稲の高付け植えが始まる ・上善大輪谷改置のため三本木原一〇町歩寄贈（二五年返還） ・南其輪村総務委員会組織される ・紀元二六〇〇年記念事業（楳林一八町歩） ・部長がなくなり「上伊那連合事務所」となる	・二・二六事件起る（一九三六・二） ・米穀自治管理法・農業従事者保護法改正公布（・・・五） ・文化勲章贈与（一九三七） ・日中戦争始まる（る講義で日中戦争衝突）（・・・七） ・日独伊防共協定調印（・・・一一） ・国家総動員法公布（一九三八・二） ・農地調整法公布（・・・四） ・警防団創設（一九三九） ・宗教施設統制法公布（・・・四） ・ノモンハン事件起る（・・・五） ・国民徴用令公布（・・・七） ・日米通商条約改定の通告を受ける（・・・七） ・義務教育国庫負担法公布（一九四〇・三） ・日独伊三国同盟調印（・・・九） ・大政翼賛会発会式（・・・一〇） ・国民服制（一九四〇） ・国民学校令公布（一九四一・三） ・日ソ中立条約締結（・・・四） ・太平洋戦争に突入（・・・一） ・食糧の配給制（一）衣料切替制（二）実施（一九四二） ・食料管理法公布（一九四二・一） ・結核予防BCG接種一統化（一九四二） ・中学校令改正（四年制とする）（一九四三・一） ・女子学奨励員決定（・・・七）
一九四一	一六	昭和十六	一九四一	・小学校が国民学校と改称 ・伊那バス伊那野間運行開始 ・農林青年団（二六・四五歳）が結成される ・渡河開拓「富貴原郷」に木村よりも一戸入額 ・金馬山の強制供出行なわれる ・上伊那中央伝染病隔離舎へ加入 ・上伊那地方事務所となる	
一九四〇	一五	昭和十五年	一九四〇		

昭	和
一九四九	一九四四
二四	一九
<ul style="list-style-type: none"> ・南筑輪産業組合解散(二二) ・南筑輪産林組合設立 ・長田密達ら帝國紙産業社を興し大島原山からマンガン採掘を始める ・南筑輪産業組合設立(二二) ・金風供出で火の見やぐら木製となり、桑の皮は松根酒等採取行なわれる ・福岡市一七〇戸、五一〇人(学童一五八名) ・県立長野農林専門学校本校中野原に設立される ・このため村有地約二五町歩提供 ・農林隊が食糧増産農産物肥料確保のため入村北原等開墾 ・陸軍衛生材料廠が薬料学校校舎にて作業を始める ・第一回村協賛会開かる(九・一九) 	<ul style="list-style-type: none"> ・農地改革始まる ・大芝原へ緊急開拓入植 ・農地委員会発足(一一) ・村立南筑輪小学校、村立南筑輪中学校発足 ・南原開拓入植、南原区発足 ・大芝区発足 ・南筑輪農業会解散 ・南筑輪清防団(自治体清防団)発令制定(七) ・南筑輪小中学校PTA発足(六・二六) ・筑前五か村組合立中筑輪高等学校認可(三・三二) ・南筑輪農業協同組合設立(三・) ・中学校校舎落成(八) ・戦後の婦人会発足 ・国民健康保険事業実行となる ・田嶋鋼鉄社神明社会記田嶋神社となる ・二ノ宮神社創建(南原) ・産婆共同組合始まる
一九四八	一九四三
二二	一八
<ul style="list-style-type: none"> ・伊勢電鉄国鉄移管後出願となる(一九四三) ・防空法による疎開命令発令(一九四四・一) ・砂防の家庭配給停止(・・・) ・西天電「鋼水鉄物」の碑ができる(建立は二五年)(一九四四) ・国民勤労動員令公布(一九四五・三) ・米軍広島と長崎に原爆投下(・・・) ・太平洋戦争終結(・・・) ・古賀軍による各種民主化政策が行なわれる(一九四五) ・天皇の人間宣言(・・・) ・農地改革始まる(一九四六・二) ・赤松緊急措置令(一九四六) ・教育基本法、学校教育法公布(六三制)(一九四七・三) ・第一回参議院議員選挙(・・・) ・日本国憲法施行(・・・) ・農協協同組合法公布(・・・) ・改正民法公布(・・・) ・児童福祉法公布(一九四八・一) ・新筑高等学院発足(・・・) ・教育委員会法公布(・・・) ・国民の祝日制定(・・・) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドッジ公使による財政改革(均等予算)(一九四九・四)

区時 分代	年 代		内 容
	西暦	年 号	
時	一九五〇	昭和二五	・有翼光機（青島院通）竣工（五・三一） ・村田ダランド全村民の奉仕で完成 ・長野農林専門学校信州大学農学部となる（六） ・農地改革終る。解放農地四九〇ha ・吹上鍋バス運行開始 ・保溫析表市代普及 ・大芝部路に電灯ともる ・梅田信隆墓所により洪水、北蔵地区被害甚大 ・公民館設置条例制定
代	一九五一	二六	・田畑開墾水道・大泉灌漑水道完成 ・南箕輪公民館開館定施行、以後各区公民館開設 ・このころより北沢山に連年（四〇年ころ迄）植林 ・伊郷土地改良区設立着工（一二） ・本村北蔵に幼稚園（私設）初めて開かる ・大芝神社創建 ・養蚕四転換の普及始まる ・教育委員会発足 ・村診療所休止 ・蔵蔵山一〇万本植栽問題起こる ・冷害、大凶作となり救済土木事業を行なう ・神子集に南部保育所開設（一〇・二四） ・このころ生活改善のための台所・風呂・便所の改築、新様式の結婚式等が広まる ・伝染病院町営中央病院に併設 ・小中学校完全給食始まる（四） ・救済土木事業北沢山林道工事七〇〇m完成
時	一九五三	二八	・日米行政協定調印（一九五二・一二） ・日米平和条約調印（〃・九） ・教科書無償供与始まる（一九五二） ・NHKテレビ本放送開始（一九五三・一） ・南北朝鮮休戦協定調印（一九五三） ・華能群島日本領土（一九五三・一二） ・日米相互防衛援助協定（MSA）調印（一九五四・三） ・自衛隊発足（一九五四・七）
代	一九五四	二九	・第一為替レート（二九三六〇円）設定（〃・） ・労働組合法公布（一九四九・六） ・公職選挙法公布（一九五〇・四） ・魚、衣料の統制を撤廃（〃・） ・朝鮮動乱勃発（〃・六） ・警察予備隊令公布（〃・〇） ・生活保護法制定（一九五〇） ・社会福祉事業法公布（一九五一・二） ・児童福祉法制定（一九五二） ・日米平和条約、日米安全保障条約調印（〃・九）

昭和		和	
一九五五	昭和三十	一九五五	昭和三十
一九五六	三十一	一九五六	三十一
一九五七	三十二	一九五七	三十二
一九五八	三十三	一九五八	三十三
一九五九	三十四	一九五九	三十四
一九六〇	三十五	一九六〇	三十五
一九六一	三十六	一九六一	三十六
一九六二	三十七	一九六二	三十七
一九六三	三十八	一九六三	三十八
一九六四	三十九	一九六四	三十九
一九六五	四十	一九六五	四十
一九六六	四十一	一九六六	四十一
一九六七	四十二	一九六七	四十二
一九六八	四十三	一九六八	四十三
一九六九	四十四	一九六九	四十四
一九七〇	四十五	一九七〇	四十五
一九七一	四十六	一九七一	四十六
一九七二	四十七	一九七二	四十七
一九七三	四十八	一九七三	四十八
一九七四	四十九	一九七四	四十九
一九七五	五十	一九七五	五十
一九七六	五十一	一九七六	五十一
一九七七	五十二	一九七七	五十二
一九七八	五十三	一九七八	五十三
一九七九	五十四	一九七九	五十四
一九八〇	五十五	一九八〇	五十五
一九八一	五十六	一九八一	五十六
一九八二	五十七	一九八二	五十七
一九八三	五十八	一九八三	五十八
一九八四	五十九	一九八四	五十九
一九八五	六十	一九八五	六十
一九八六	六十一	一九八六	六十一
一九八七	六十二	一九八七	六十二
一九八八	六十三	一九八八	六十三
一九八九	六十四	一九八九	六十四
一九九〇	六十五	一九九〇	六十五
一九九一	六十六	一九九一	六十六
一九九二	六十七	一九九二	六十七
一九九三	六十八	一九九三	六十八
一九九四	六十九	一九九四	六十九
一九九五	七十	一九九五	七十
一九九六	七十一	一九九六	七十一
一九九七	七十二	一九九七	七十二
一九九八	七十三	一九九八	七十三
一九九九	七十四	一九九九	七十四
二〇〇〇	七十五	二〇〇〇	七十五
二〇〇一	七十六	二〇〇一	七十六
二〇〇二	七十七	二〇〇二	七十七
二〇〇三	七十八	二〇〇三	七十八
二〇〇四	七十九	二〇〇四	七十九
二〇〇五	八十	二〇〇五	八十
二〇〇六	八十一	二〇〇六	八十一
二〇〇七	八十二	二〇〇七	八十二
二〇〇八	八十三	二〇〇八	八十三
二〇〇九	八十四	二〇〇九	八十四
二〇一〇	八十五	二〇一〇	八十五
二〇一一	八十六	二〇一一	八十六
二〇一二	八十七	二〇一二	八十七
二〇一三	八十八	二〇一三	八十八
二〇一四	八十九	二〇一四	八十九
二〇一五	九十	二〇一五	九十
二〇一六	九十一	二〇一六	九十一
二〇一七	九十二	二〇一七	九十二
二〇一八	九十三	二〇一八	九十三
二〇一九	九十四	二〇一九	九十四
二〇二〇	九十五	二〇二〇	九十五
二〇二一	九十六	二〇二一	九十六
二〇二二	九十七	二〇二二	九十七
二〇二三	九十八	二〇二三	九十八
二〇二四	九十九	二〇二四	九十九
二〇二五	百	二〇二五	百

区時 分代	年 代	村 内 の で き こ と	関 係 事 項
一九六二昭和三七	一九六二	・小学校プール完成（竣工式九・二三） ・南興輪美老院を南興輪老人ホームと改称（八・二） ・第一次農業構造改善事業始まる（三八・四一） ・村道の舗装始まる ・このころから堤の屋外飼育始まる ・村一般会計一億円を突破 ・伊達中央し尿組合結成 ・村公民館建設（図書室を設ける） ・南興輪土木事業認可される ・大泉川の各橋が水久橋となる（第一次農橋） ・工場誘致条例制定（八） ・西天電燈開閉始 ・蔵鹿山のうち矢ノ南入り分割協定調印（四・二八） ・南興輪土木事業第一期工事完成給水開始 ・南興輪島村指定金融機関となる ・南興輪老人クラブ連合会成立 ・調動神社（北原）創建 ・南興輪土木事業第二期工事着手 ・米の出荷数四万袋突破	・新庄支庁建設促進法公布（一九六二・五） ・錦糸堀堀底三六・三センチに引上げ（一九六二） ・老人福祉法公布（一九六三・七）
一九六三	一九六三	・南興輪土木事業認可される ・大泉川の各橋が水久橋となる（第一次農橋） ・工場誘致条例制定（八） ・西天電燈開閉始 ・蔵鹿山のうち矢ノ南入り分割協定調印（四・二八） ・南興輪土木事業第一期工事完成給水開始 ・南興輪島村指定金融機関となる ・南興輪老人クラブ連合会成立 ・調動神社（北原）創建 ・南興輪土木事業第二期工事着手 ・米の出荷数四万袋突破	・新庄大地区（一九六四・六） ・母子福祉法公布（〃・七） ・東海道路新幹線開通（〃・一〇） ・東京オリンピック開会（〃・一〇） ・ILO八十七年条約承認（一九六五・五） ・日韓基本条約調印（一九六五・六） ・松代群島地帯始まる（一九六五）
一九六四	一九六四	・蔵鹿山のうち矢ノ南入り分割協定調印（四・二八） ・南興輪土木事業第一期工事完成給水開始 ・南興輪島村指定金融機関となる ・南興輪老人クラブ連合会成立 ・調動神社（北原）創建 ・南興輪土木事業第二期工事着手 ・米の出荷数四万袋突破	・四〇・一〇・一の国勢調査結果発表人口九八二七万人 ・水銀系農薬の使用禁止（一九六六・四） ・平均寿命男六七・七三歳女七二・九五歳となる ・公害対策基本法公布（一九六七・八） ・テレビ受信契約者数二〇〇〇万突破（〃・一二） ・小笠原返還協定調印（一九六八・四） ・都市計画法公布（〃・六〇） ・このころ各地に大学紛争起る（一九六九）
一九六五	一九六五	・蔵鹿山のうち矢ノ南入り分割協定調印（四・二八） ・南興輪土木事業第一期工事完成給水開始 ・南興輪島村指定金融機関となる ・南興輪老人クラブ連合会成立 ・調動神社（北原）創建 ・南興輪土木事業第二期工事着手 ・米の出荷数四万袋突破	・ILO八十七年条約承認（一九六五・五） ・日韓基本条約調印（一九六五・六） ・松代群島地帯始まる（一九六五）
一九六六	一九六六	・蔵鹿山のうち矢ノ南入り分割協定調印（四・二八） ・南興輪土木事業第一期工事完成給水開始 ・南興輪島村指定金融機関となる ・南興輪老人クラブ連合会成立 ・調動神社（北原）創建 ・南興輪土木事業第二期工事着手 ・米の出荷数四万袋突破	・四〇・一〇・一の国勢調査結果発表人口九八二七万人 ・水銀系農薬の使用禁止（一九六六・四） ・平均寿命男六七・七三歳女七二・九五歳となる ・公害対策基本法公布（一九六七・八） ・テレビ受信契約者数二〇〇〇万突破（〃・一二） ・小笠原返還協定調印（一九六八・四） ・都市計画法公布（〃・六〇） ・このころ各地に大学紛争起る（一九六九）
一九六七	一九六七	・天伯連路整備 ・西野開墾の要請始まる ・南興輪生産森林組合設立 ・大芝開墾調査特別委員会発足 ・村報第一号発行	・四〇・一〇・一の国勢調査結果発表人口九八二七万人 ・水銀系農薬の使用禁止（一九六六・四） ・平均寿命男六七・七三歳女七二・九五歳となる ・公害対策基本法公布（一九六七・八） ・テレビ受信契約者数二〇〇〇万突破（〃・一二） ・小笠原返還協定調印（一九六八・四） ・都市計画法公布（〃・六〇） ・このころ各地に大学紛争起る（一九六九）
一九六八	一九六八	・天伯連路整備 ・西野開墾の要請始まる ・南興輪生産森林組合設立 ・大芝開墾調査特別委員会発足 ・村報第一号発行	・四〇・一〇・一の国勢調査結果発表人口九八二七万人 ・水銀系農薬の使用禁止（一九六六・四） ・平均寿命男六七・七三歳女七二・九五歳となる ・公害対策基本法公布（一九六七・八） ・テレビ受信契約者数二〇〇〇万突破（〃・一二） ・小笠原返還協定調印（一九六八・四） ・都市計画法公布（〃・六〇） ・このころ各地に大学紛争起る（一九六九）
一九六九	一九六九	・天伯連路整備 ・西野開墾の要請始まる ・南興輪生産森林組合設立 ・大芝開墾調査特別委員会発足 ・村報第一号発行	・四〇・一〇・一の国勢調査結果発表人口九八二七万人 ・水銀系農薬の使用禁止（一九六六・四） ・平均寿命男六七・七三歳女七二・九五歳となる ・公害対策基本法公布（一九六七・八） ・テレビ受信契約者数二〇〇〇万突破（〃・一二） ・小笠原返還協定調印（一九六八・四） ・都市計画法公布（〃・六〇） ・このころ各地に大学紛争起る（一九六九）

昭	和
一九七四	一九七〇
四九	四三
<ul style="list-style-type: none"> ・特別土地保有税（村税）創設 ・西部開発促進基金（大規模開発）開通（九） ・母子家庭医療費給付開始（一一・一二） ・村章決まる（一一・二七） ・大芝公園に村民プール完成 ・農振法地域計画認可（四七年策定） 	<ul style="list-style-type: none"> ・倉田寛幹歌碑北側に建つ ・屋敷町建つ（公民館前） ・大芝川砂防ダム建設竣工 ・中学校管理棟完成 ・稲作作付減反始まる ・大芝開発審議委員会設置 ・中学校特別教室棟完成 ・堀成特産農業振興事業として野菜集出荷場建設 ・大芝木箱共同青果センター建設 ・郷土館建設 ・村ソフト連盟結成 ・南箕輪園発公社設立（八） ・大芝園のうち四二・九haゴルフ場として貸与 ・このころから田植機・稲刈機が普及し始める ・西部地域農業開発事業始まる ・中央道建設用地選定調査（北高根大芝東等） ・村営大芝スポーツ公園野球場オープン（四） ・アマリカシロヒトリ大芝北原開原等に発生（八） ・大芝郷の家系完成（八） ・大芝川砂防ダム完成貯水量二二万㎡（一〇・二九） ・ワイ化りんご栽培始まる（畑作組合改善パイロット地区） ・福祉医療費給付金条例制定（老人医療費給付） ・広域消防緊急伊勢消防組合に加入
一九七三	一九七二
四八	四二
<ul style="list-style-type: none"> ・四の要動相関係実施（一九七三・二〇） 	<ul style="list-style-type: none"> ・自主流通米制度決まる（・・・五） ・アボロ初めて月に滞航（・・・七） ・大阪で万国博覧会開幕（一九七〇・三） ・中央自動車道工事始まる（一九七〇） ・沖繩返還協定調印（一九七二・六） ・農村地域工業導入法公布（・・・） ・冬季オリンピック札幌で開催（一九七二・二） ・浅間山荘事件起こる（・・・一〇） ・沖繩の無核施設返還、沖縄県となる（・・・五）

時 代	区 分 代	年 代	村 内 の で き こ と	関 係 事 項
一九七五	昭和五〇	西暦	<ul style="list-style-type: none"> ・青少年健全育成推進の村宣言 ・中込区誕生（八・一） ・村創施行一〇〇周年記念式挙行（一一・一三） ・南箕輪土産開発公社設立 ・老人集会施設「赤松荘」利用始む（四・一） ・南箕輪の戸口急増世帯数二〇一七世帯人口八〇〇〇人（六・二三） ・村民体育館完成 ・南原保育所完成 ・広域営農団地大型広域兼田舎場完成 ・林道緒々修繕完成（一一） ・村文化財第一号（新四国霊場）指定 ・村創編纂委員会発足（八） ・第二次構造改善事業始まる ・行政事務近代化のため広域行政の一つとして電算機導入 ・西部開港送水管工事着工（二二） ・水田利用再編第一期対策始まる ・都市計画決定（一・一九） ・大芝園整備委員会発足（六・一九） ・全国経通所県社アーチニリー大会大芝で開催 ・やまびこ国体、大芝野球場ソフトボールの会場となる（二〇） ・雑排水の土壌浄化方式の推進始まる ・伝染病隔離病舎建設（中央病院敷地内） ・吹上藩（吹上北原藩）県道に編入さる ・村営水道第五水源落成式（一・一九） ・消防団機構改革（分団統合）（四） ・大芝公園アニスコート落成（五） 	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄海洋博覧会開第（一九七五・七）
一九七六	五一	西暦	<ul style="list-style-type: none"> ・ロッキード事件起こり政界混乱（一九七六） ・初の実用衛星「うめ」打上げに成功（一） ・中央自動車道駒ヶ根―伊北インター開通（一） 	
一九七七	五二	西暦		
一九七八	五三	西暦		
一九七九	五四	西暦		

和	和
一九八三 五八	一九八〇昭和五五
<ul style="list-style-type: none"> ・健康増進推進委員会制度発足(七・二五) ・野菜輸送合理化事業として予冷庫建設される ・村営水道第二拡張工事大芝高野配水池完成(一一) ・西部保省庁新築移転(一一・一〇) ・南興輪船官駐在所二人勤務となる(一二) ・各区に廃車庫建立される ・地籍調査事業始まる(北部より一〇か年計画) ・大芝高原に研修センター完成 ・村道一三〇号線完成 ・日赤幸仕団本格的活動開始(一一〇) ・木田利用再編第二期対策に入る ・岩場庁舎完成落成式(九・一九) ・大芝公園アスレチック完成(九) ・村内五河川水質検査を行なう ・農林科用増進事業始まる(四) ・小学校教養課、体育館完成(三) ・保健センター完成(一二)・新駐在所落成移転(一二) ・村道三五一号線道路改良事業竣工(七) ・林道群ヶ岳線国道に編入(国道三六一号線の代替)(七) ・大芝洞完成 ・水道集中管理システム導入 ・村内への工場排出の気運高まる ・人権モデル地区推進協議会発足(六・三〇) ・健康づくり推進協議会発足(七・四) ・村内河川水質検査(三回)を行なう ・小学校水泳新プール建設 ・地域農業集団育成事業始まる ・中学校増築校舎完成(一一・二五) 	

題 和 時 代		区時 分代	
一九八五 六〇		西暦	年 代
		年号	
	一九八四昭和五九		
	<ul style="list-style-type: none"> ・各地に甲子塔建つ ・地区計画作成される ・水田利用再編第三期対策に入る ・上伊那郡市植樹祭大芝高原で開催（五・八） ・赤坂平和宣言を行なう ・国道三六一号線（権兵衛通）全面舗装完成（九・二七） ・りんご集出荷場建設 ・村誌上巻刊行 ・村基本構想第二期スタート ・村誌下巻刊行 		村 内 の で き ご と
	<p>科学力増進まる（四）</p>		関 係 事 項

主なる資料提供者 (順序不同・敬称略)

久保 久保区 大東 志田道 河内屋 柳屋 西垣外 西念寺

諏訪市 中州福島区
木曾郡 木曾福島町史編纂室

塩ノ井 大東 大南 岡渡屋 岡渡屋 白馬堂 大坂屋 佐和 西

光寺

北殿 北殿区 千桐屋 伊藤屋 内城 亀屋 車屋 長田 とき

わ屋 くすり屋 殿村八幡宮 松林寺 つな屋 間屋 葛

屋

南殿 大東館 井田園 大根屋 中東 依屋 酒屋 常盤屋 殿

村八幡宮

田畑 門屋 玉理軒 中屋 鎌屋 井桁屋 東屋 大東 東北

垣外 田畑南部動力組合 秋葉講 田畑神社 伊那キリス

ト教会

神子柴区 神子柴区 大和手 東朝軒 高丘 沢屋 滑川 勢喜屋

高松屋 田丸屋 丸仁志 森御堂 中屋

大泉区 大泉区 中宿 中西 大東 白木屋 増屋 古屋 丸屋

大泉神社 勝光寺 伊勢講 庚申講

沢尻区 沢尻区 永小路 古西 中屋 恩徳寺 輪子

村内 役場 郵便局 小学校 中学校 保育園 農協 信大農学

部 商工会議所 郷土館 技術専門校 村内各会社 老人

ホーム

伊那市 上伊那図書館・上伊那郷土館 新山郷土館 伊那小 大萱

区 吹上区 官島家 福沢家 市史編纂室

箕輪町 郷土博物館 笠原家 市川家 日岐家 町史編纂室

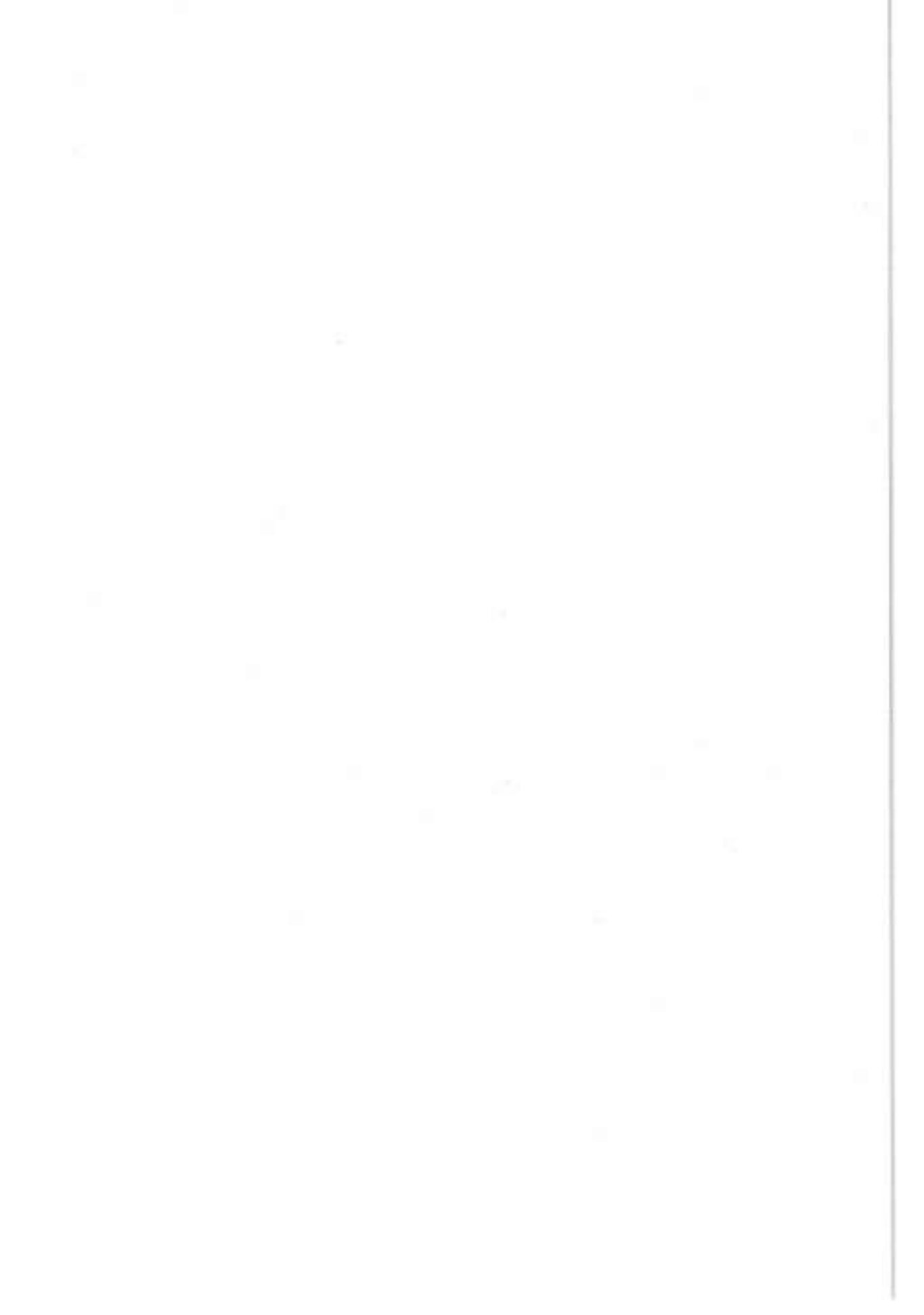
南箕輪村誌刊行委員（昭和六〇年度）

三澤	丸山	福澤	山崎	丸山	原山	丸山	加藤	有賀	北條	武田	有賀	征矢	清水	清水	飯澤	守屋	柳島	鳥山	原山	原山	山崎	木下	上田	征矢	
準	敏	昭	清	英	芳	寬	佐	三	三	三	士	守	三	三	博	孝	純	清	多	武	正	程	喜	和	
夫	夫	吾	美	雄	人	敏	志	郎	郎	郎	郎	三	男	助	良	門	雄	美	門	人		治	計	義	
村	助	入	議	副	總	副	委	委	委	委	教	"	"	"	文	小	中	上	信	伊	商	農	久	中	塩
長	役	役	長	議	務	議	員	員	員	員	育	文	文	文	化	學	學	伊	州	那	工	協	保	込	ノ
				長	教	長	長	長	長	長	委	財	財	財	財	校	校	那	大	技	會	支	區	込	井
					文						員	專	專	專	門	長	長	農	學	術	所	長	長		
					教						員	委	委	委	員	長	長	業	部	專	長	長	長		
					委						員	員	員	員	長	長	高	學	學	門	長	長	長		
					員						長	長	長	長	長	長	等	部	部	校	長	長	長		
					長						長	長	長	長	長	長	學	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	校	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		
											長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長		

北條	有賀	北原	小島	有賀	茂木	伊藤	原	永井	松澤	唐澤	植田	有賀	清水	赤羽	松崎	征矢	蜂谷	中村	山口	田中	小澤	北澤	横道	唐澤	秋山	唐澤	原	日原
正	重	正	也	一	宇一	和	英	守	孝	孝	守	義	博之助	俤	勝	幸	誠	介	男	男	男	健	秋	弘	武	治	正	平
深	澤	正	雄	一	一郎	実	雄	一	子	男	男	文																
北殿	南殿	田畑	神子柴	沢尻	南原	大芝	大泉	北原	婦人会長	青年	民生委員会総務	老人クラブ会長	久保分館長	中込	堀ノ井	北殿	南殿	田畑	神子柴	沢尻	南原	大芝	大泉	北原	専門委員	北原	専門委員	北原

下巻執筆者

- 日 戸 武 彦 (第一章・第三章第二節の一・五・第三章第二節二・三・第四章第二節・第五章・第六章第三節・第四章の三・第五章の二・三・五・第七章第一節・第三節の三・七・第五節)
- 征 矢 鑑 (第二章第一節)
- 杉 澤 崇 (第二章第三節)
- 唐 澤 正 國 (第二章第三節・五節・第三章第一節・第二節の一・四・一・四・第一章第一節・第六章第一節の二・第七章第二節・第六節の二・第六章第六節の二・第七章第二節・第六節の二)
- 倉 田 高明 (第二章第三節の一・二)
- 武 田 三 郎 (第三章第三節の三・四)
- 原 平 夫 (第二章第四節・第六章第一節の一・第五節の一・六・第九節の一・三・第七章第三節の八・第四節・第五節の二)
- 征 矢 善 一郎 (第六章第四節の四)
- 原 正 壽 (第六章第五節の四・第七章第二節四ノ四・第三節の一・地字表図)
- 加 藤 千 代 人 (第六章第六節の一・第八節の一・第七章第五節の一)
- 松 澤 英 太 郎 (第六章第七節)
- 中 澤 和 夫 (第六章第八節の二・第七章第五節の二)
- 春 日 正 (第六章第八節の三・四)
- 坂 澤 孝 良 (第六章第九節の四)
- 早 川 貞 英 //
- 立 石 威 (第七章第三節の二)
- 清 水 信 男 (第七章第三節の二)
- 清 水 一 清 (第七章第三節の六)



あとがき

昭和五一年八月、村誌編纂委員会が発足してから、早くも九年余りがたった。

その間に、昭和五四年二月、村内めぐりの便にとの要望にこたえて、『南箕輪の史跡』(二〇四頁)を刊行した。昨年の一二月になって、ようやく『南箕輪村誌・上巻』(自然編・道跡編・信仰生活編・民俗編)を刊行することができた。そしていま、昭和六〇年一〇月『南箕輪村誌・下巻』(歴史編)を刊行するのはこびとなり、ここに上下二巻の村誌の編纂を完了することとなった。思えば遠い道程であったが、まことに喜ばしいことである。

本書の編纂には、先蹤の業績に負うところが多い。

江戸時代の『伊那温知集』(元文五年)や『葛原拾遺』(文化五年)中の「伊那志略」や「ひとつはなし」、その他の歴史書に、まず手がかりを与えられた。

明治になって、その一二年に上申した「南箕輪村誌」(長野県町村誌)は、太政官布告の各項目にこたえたもので、前後六か年ほどを費やして作成されたものである。われわれはその多くをこの出来のよい労作に負っている。また、昭和三八年の原正秋著『南箕輪村における入会山分割史』にも教えられるところが多かった。

大正から昭和にかけては、『上伊那郡史』(大正一〇年)『先史及び原史時代の上伊那』(大正一五年)をはじめ、『上伊那誌』の各篇(昭和三七年以降)等上伊那教育会の先学の業績に負うところが実に多かった。その他郡内外で刊行された各市町村誌(史)や『長野県史・近世史料編第四巻』も参考にさせていただいた。

しかしながら、何といっても村内資料が重要であった。村内の各家に大切に保存されていた古文書類を、お忙しい家業の中で披見・撮影にご協力いただいたばかりでなく、進んでお貸しいただくことができた。この貴重なしかも沢山の資料を、われわれは微力をつくして忠実に活用することにつとめた。

本書の完成に当たって、それら先学に対し、また所蔵者に対して、改めて敬意を表し感謝申し上げる次第である。

村誌編纂の目的は、いうまでもなく村に対する歴史的理解を深め、村の今後の発展の指針とするものであるから、中央や信州の歴史と深くかわりながらも本村独自の本村の地についていたものでなければならぬ。この事業

は見かけ以上に重要で困難な大事業である。それは家業その他一切を放棄して、専念従事できうる知識人が三、四人いて、数年の日時を要するのを普通とするといわれている。

このことは、委任者がそろっていても、なおかつ数年を要する大事業であるというのであるが、本村の場合はこの条件が全くそろわなかった。すでに郡内の有力な歴史専門家は、他の地方史（誌）の編集に関係してしまつた後であったので、委員はすべて村内に限らざるを得なくなり、しかもそれが他に本職をもつ忙しい者ばかりとなった。そのため、村内資料の調査をはじめながら、村内めぐりをしたり、おたがい古文書の読み方を習うというところから出発した。

それにもかかわらず、よりよい村誌を作ろうという願望は強くもっていた。出発にあたって、向山雅重先生は南箕輪村の特色として、「水を求めて」（用水の開発）、「水との闘い」（水害防除）、「農業生産」の三つの軸を示された。このおかげで、村誌の性質から各方面の問題を網羅的にとりあげる面もできたが、主要テーマを三つの軸にすることは何とが貫くことができたかと思う。

こうした悪条件を克服した後になってみると、ともかくも村内の者ばかりで、指導者のいない暗中を模索しながら、微力をよせあつて、上下二巻の『南箕輪村誌』を刊行することのできたこの喜びは、また感慨無量のものがある。

『歴史はつねに悔悵である』（後藤輝一郎）という。歴史の営みは確かに、太平洋戦争等で経験したように、人間の営みをふくむかぎり、つねに過ちがあり悔悵といえれば悔悵といえるであろう。それはそれとして、歴史書もまた悔悵ではなからうか。とくにわれわれの場合、できうる限りの力を寄せあつて、南箕輪村の全体像を、地域の課題をふまえた上でまとめ、その実像に迫ろうとした。つまりよりよい村誌を作ろうと日夜努力してきたが、果たしてどの程度達成できたか。三人書れば文珠の智慧ともいうが、かえりみて悔悵の情を禁じえない。至らぬ点が多々あり、杜撰の懺悔や恐れはつきない。村史とせず村誌としたゆえんもそこにある。

さいわいにして、村内の資料所蔵者各位から採訪させていただいた沢山の資料が残し、また所蔵者別の『資料目録』（全六冊約一万五〇〇〇頁）がある。これらの資料は、永遠の価値を内在するものである。この不滅の資料を、次代の人々が活かして、本村誌の欠を補正していただきたい。それにつけても、古文書の幾箇所かに大火によって焼失したという嘆きがあり、また重要文書が紛失したり、虫鼠の害にあっているものが多い実情であるが、この貴重な資料の保存について、村をあげて格別の力を注いでほしいと願うこと切なるものがある。

まず五年の目標で出発したこの事業が、予定の二倍近くの期間となり、分量も二倍にふくれてしまったことは、よりよい村誌をと願った結果とはいえず、編集者として深くおわび申しあげなければならぬ。われわれの力不足のためこのように遅延したことは何ら弁解の余地もないが、私たちは私たちに全心をあげて努力を続けてきたこの期間の、時のたつことの早さも、またしみじみと思われるのである。何よりもさいわいであったことは、他の町村誌では中途にして他界する委員のある場合が多いのであるが、本村誌の委員には一人も欠けるものがなかったことである。まことに天恵といわざるをえない。

さて、これをもって村誌の刊行が終わるのであるが、長い間執筆に苦勞され、一日一夜として原稿のことが頭から離れず、時に本職もなげうって執筆をされた委員各位に対して、心から感謝申しあげたい。

また、終始一貫してわれわれの編集の仕事に温かいご理解ご協力を注いでくださった村当局・事務局の関係者ならびに村民各位に対して、これまた心から感謝申しあげたい。

株式会社「ぎょうせい」には、印刷製本界最高のスタッフと最先端をゆく技術とをもって、終始ゆきとどいたご配慮をいただいたことに対して感謝申しあげたい。

終りに、村創一〇〇周年記念事業である『南箕輪村誌』が、村発展のために大いに多方面に活用されんことを祈念してやまない。

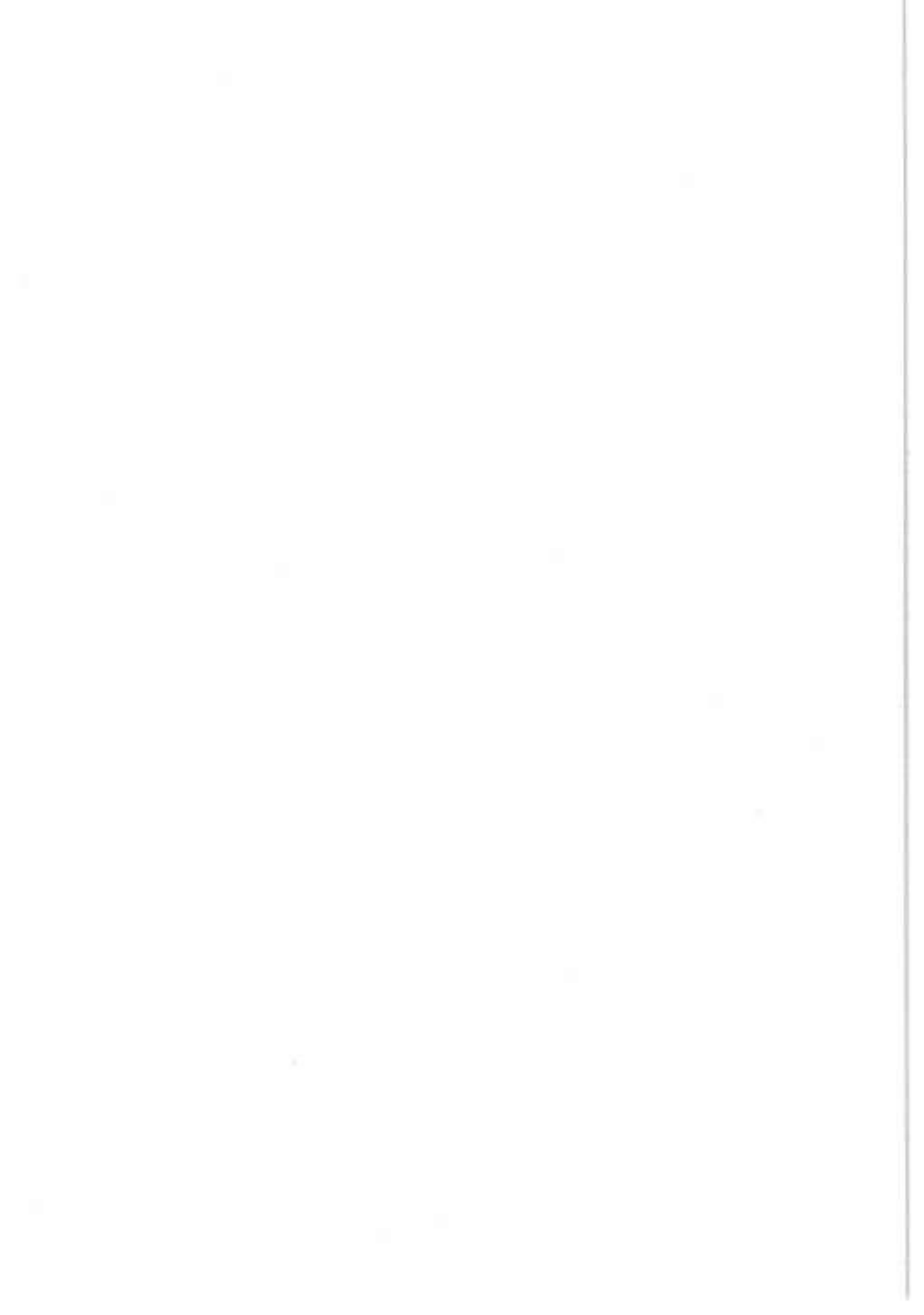
昭和六十年十月三十日

南箕輪村誌編集委員会代表

唐澤 正國

原 平夫

日戸 武彦



南箕輪村誌 下巻

(非売品)

昭和六十年十月三十一日

編纂 南箕輪村誌編纂委員会

長野県上伊那郡南箕輪村四八〇七番地

南箕輪村公民館内

発行 南箕輪村誌刊行委員会

電話 〇二六五(七二)二一〇四

印刷 株式会社 きょうせい

東京都新宿区西五軒町五二
電話 〇三〇二六〇二一四一

